神宮司廳藏版

古事類苑

官位部四

古事類苑刊行會

古事類苑

官位部第四冊目錄

官位部六十一

德川氏職員十

官位部六十三

德川氏職員十二

官位部六十五

德川氏職員十四

官位部六十七

德川氏職員十六

官位部六十八

德川氏職員十七

官位部七十

德川氏職員十九

德川氏職員二十

官位部七十二

徳川氏職員二十一

京都役人

官位部七十三

徳川氏職員二十二

大阪役人

官位部七十四

官位部七十五

徳川氏職員二十四

艦役　軍艦添役取締　海軍所役人　沿革 海軍所頭取 海軍所支配組頭 海軍所支配世話取扱 海軍所支配世話役 海軍所取調役組頭 海軍所取調役 軍艦所取調組頭 軍艦取調役 軍艦取調下役 軍艦教授方出役 翻譯方 繪圖認方 太鼓方 機械製作方 海軍所番 掃除者 湯呑所同心

外國奉行　職掌 待遇 俸祿 任免

外國奉行並屬僚　京都守護職　京都見廻役　屬僚　山陵奉行　國益主法方

官位部七十八

德川氏職員二十七

大名　交替寄合 [併入]

名稱　大名概數　家門　譜代　外樣　國持 准國主 城主 城主格 無城

制度　課役　參勤交代 軍役 禁裏警衛 幕府警衛 大阪駿府加番 城邑在番 關所支配 險要地警衛 內海警衛 蝦夷地警固 火消役 辻番役 從土木役 被預罪人 將軍名代 日光祭禮奉行 從將軍行列 公家衆參向馳走役 掌朝鮮來聘事 掌琉球來聘事

官位

待遇　著席次第 屋敷 供連 賜松平稱號 許御所號 許屋形號 賜將軍偏諱 許用葵章

拜謁　賜內書 賜上使 訪病弔死 殿上元服

進獻賜與　朝廷獻上 幕府獻上 上ケ米 拜領 合力米 拜借金

領地　賜封 分封 增封 打出 込高 被預公領地 轉封

古事類苑

官位部六十一

德川氏職員十

留守居 天守番 富士見寶藏番附

留守居ニハ、大留守居、幷ニ本城以下ノ留守居、留守番アリ、大留守居ハ一人アリ、一ニ留守居年寄トモ云ヘリ、譜代大名ヲ以テ之ニ任ズ、此職ハ大坂ノ役及ビ寛永ノ上洛等ニ、臨時ニ江戸城ノ留守ヲ命ゼシニ淵源シ、後ニ常置ノ職トナリシモノヽ如シ、元祿十四年廢ス、

留守居モ亦留守年寄ト云ヒシ如シ、其人員四人乃至六人ニテ時ニ增減アリ、寛永中置ク所ニシテ、始ハ大名旗本相雜リテ之ニ任ゼシガ、元祿中ヨリ萬石以下ノモノヽミ之ニ任ズルコトヽ爲レリ、

凡ソ大留守居、留守居ノ職ハ、大奥向ノ取締、非常立退ノ處置、廣敷向一切ノ事ヲ掌リ、又奥向女中ノ諸門出入ノ切手、及ビ諸國ノ關所女切手等ヲモ掌ル、且舊クハ小普請組ヲ管轄セシガ、小普請支配ヲ置クニ及ビテ、二百石以下ノ者ノミヲ管轄スル事ト爲レリ、此他舊クハ萬石以上ノ門番ヲモ留守居ヨリ命ゼシ事アリ、而シテ凡ソ府內見附ノ門ハ、皆留守居ノ預ル所タリ、

留守居番ハ、寛永七年置ク所ニシテ、五人若シクハ六人ナリ、其職掌略〻留守居ニ似タレドモ、主トシテ城內ノ守衞ニ任ジ、奥向ノ事ヲ掌ルナリ、

大留守居

此篇ニハ又本丸、西丸、二丸三丸ノ門番ヲモ併セ出セリ、

〔東職記聞　一〕大留守居一人　官位從四位下侍從　當代闕職

〔柳營秘鑑　一〕諸御役人之次第并官位

一大御留守居　當時此役無之、登城之節ハ、羽目之間相詰、御城ニ部屋番有之、承合令登城之、勿論老中御側衆ゟ申來、登城之節も有之、外向御成之時分ハ、還御迄御城相詰ル、尤被任侍從、〇又見有司勤仕錄

〔吏徴附錄　廢職〕大御留守居任侍從　慶長十四年己酉月日、始置一人、酒井備後守忠利　元祿十四年辛巳正月十一日、稻葉丹後守正通爲老中、同年二月朔日廢當職、

〔諸役人代々記　二〕大御留守居

秀忠公御代、慶長年中、　松平因幡守康久
　酒井備後守忠利

右同斷御代　酒井阿波守忠行

家光公御代、寛永十一年戌七月十六日より、同十五寅年正月十四日病死、　松平紀伊守家信

家光公御代、寛文五年巳六月十八日、延寶二寅年五月八日御免、　松平美作守定房

綱吉公御代元祿十一寅年二月十五日より、同十七日より總下座御前詰松平肥後守、松平讚岐守列被仰付、同十三辰年二月十五日御免、　酒井雅樂頭忠擧

元祿十三辰年三月十九日より、同十四巳年正月十一日御老中江、　稻葉丹後守正通

以後當御役相止

〔大猷院殿御實紀　三〕寛永元年、此年〇中略　酒井小鍋忠吉ハ、父備後守忠利衰老せしにより、その大留

守居役を見習はしめらる、

〔厳有院殿御實紀 三十〕寛文五年六月十八日、松平美作守定房門地といひ、年齢といひ、かた〴〵御倚頼の思召によて、大留守居役仰付らる、

〔厳有院殿御實紀 四十八〕延寶二年五月八日、大留守居松平美作守定房、老衰により請まゝに職ゆるさる、

〔常憲院殿御實紀 三十七〕元祿十一年二月十五日、酒井河内守忠擧ハ大留守居を仰付らる、これ創置の職なり、

〇按ズルニ、此ニ創置トアルハ、延寶以後、此職久シク廢セシガ、此ニ至リテマタ置キシガ爲メナリ、

〔常憲院殿御實紀 四十一〕元祿十三年二月十五日、大留守居酒井雅樂頭忠擧、溜詰になる、 三月十日、稻葉丹後守正往、大留守居役命せらる、

〔常憲院殿御實紀 四十三〕元祿十四年正月十一日、大留守居稻葉丹後守正往、宿老にのぼり、〇下略

〔駿府政事錄 五〕慶長十九年十月八日、〇中略江戸御留守、御舍弟越後少將殿忠輝、會津蒲生下野守忠鄕、大御所御姪奥平大膳亮、同御姪最上駿河守家親、鳥井左京亮、酒井河内守、同備後守忠利、内藤若狹守以下御留守居被相定之由、大炊助蒙御急歸參江戸、

〇按ズルニ、是ハ大坂ノ役ノ時ニシテ、上總介忠輝、以下ニ命ジテ、大留守居酒井忠利ト共ニ、江戸城ヲ守ラシメタルナリ、忠利ハ寛永四年卒シテ後此職中絶ス、

〔寛永御日記 下〕寛永十一年七月十一日、將軍家光公御上洛、〇中略

一同月江戸御城西の丸出火、臺殿多門櫓渡矢倉塀橋等過半燒失す、今度將軍家御上洛之時、執權酒井雅樂頭忠世をして西の御丸を守らせらる、忠世則西の丸御殿に移り御留守を警固す、其

威勢肩を並るものなし、しかるに不慮に厨の邊より燼出て、殿閣に火うつり、城中たるを以て、大名内に入り火を消す事あたはず、忠世が一族たるゆへ西尾丹後守忠照等馳入防ぐといへ共叶はず、御殿殘らず燒失す、江戸中騷動斜ならず、雅樂頭忠世ハ將軍家の御憤怒を恐れて逼塞す、早速出城し東叡山寛永寺に入寺し、則宿績をもつて注進す、于ν時將軍家は執事土井大炊頭利勝酒井讃岐守忠勝等を召て曰、西の丸燒失の事は何ぞ忠世が罪にあらず、予たとへ江戸にあり共天災は遁れがたし、但城を出て寛永寺に入院仕るの志、更に其意趣計がたし、設令火災の故を以罪科を行ば、其期に至て自殺せんのみ、なんぞ預る所の守城を身の過を謝する故に開き退事、武道の吟味薄きに似たりとて、甚御逆鱗あつて早く此趣を可ν申遣よし上意あり、兩人畏て委細を記し忠世が方へ送る、忠世身の非を知て大に恐畏す、關東御下著の後も久敷逼塞して東叡山にあり、しかるを南光坊是を悼み御訴訟あり、依ν之赦免せらる、執權職は召上られ御金奉行となる、

〔藩翰譜四中渡邊〕丹後守吉綱は、〇中略萬治二年、留守居職を蒙り、（御留守居衆と世にいひしなり）

〔藩翰譜四上榊原〕式部大輔忠次ハ、〇中略寛文三年、從四位の侍從になされ、同四月、將軍家日光御社參の御留守の事を仰蒙る、

留守居職員

〔延寶三年江戸鑑〕御留守居年寄衆

〔官中秘策九〕諸御役人之事

一御留守居年寄衆　六人

五千石高　與力十騎　同心五十人

右之職中より關所女切手出之

〔有司勤仕録〕御留守居年寄

五千石高の御役たりといへども、萬石以上城主格にて、次男迄も御目見被仰付、且下屋敷拜領ス、
〇中略此御役ハ、勤方之年功ヲ積て後被仰付、御旗本之極官也、

〔東職記聞一〕留守居四人　從五位下

諸家系譜曰、寛永元年、牧野内匠頭信成、松平大隅守重勝寛永三年任主膳正、代々記作日下部大隅守、等兩人補之、職稱云四判職之始也、又閲寛永中舊記、以當職杉浦内藏允正友稱證人奉行也、集成曰、慶長十四年、留守居頭上田兵庫元信卒也、天文十七年當贈亞相公戰與今川氏三州額田郡明大寺、元信被傷而不堪騎步、是以神祖命被命掌此職也、雖万石以下重代之家流以諸職合格之古老被補之也、

〔諸役人代々記二〕御留守居

五千石高、御老中支配、與力十騎、同心五十人、同女關所手形ヲ出ス、寛永十酉年、始而四人、元祿五申年、堀田河内守壹人被仰付、五人ニ成、正德元卯年、米津周防守潰、又四人ニ成ル、享保二酉年、中川伊勢守新規被仰付、又五人ニ成ル、

慶長六丑年百人組より　内藤修理亮清成
同十三申年　内藤若狹守清次
執政兼　酒井備後守忠利
元大御番頭より後御留守江　牧野内匠頭信成
慶安四卯年七月廿二日、大御番頭より、万治元戌年三月十八日御免、
稻垣若狹守重太
万治元戌年三月廿一日、御書院番頭より、寛文十二子年十一月十三日卒、
北條右近大夫氏平
寛文十二子年十二月三日、大御番頭より、天和二戌年四月七日御免、

戸田但馬守重種

〔東武實錄三十一〕寛永七年、是年松平大隅守重則、大御番頭ヲ改メラレ、御留守居役トナリ、御奏者番ヲ兼役ス、與力ノ士十騎、輕卒五十人ヲ預ケラル、

○按ズルニ、諸御役代々記ニ、此ヲ以テ當職ノ始トシタリ、

〔吏徵別錄上萬石以上〕御留守居　寛永十年癸酉二月十一日、始置四員、日下部大隅守、酒井紀伊守、牧野内匠頭、松平大隅守、　同十九年壬午十月六日、増三員、合七員　同年十一月朔日、増一員、合八員○中略寶永三年丙戌十月十九日、四組、　正德元年辛卯九月十二日、一組減、合四組、　享保二年丁酉二月廿一日、五組、　同五年庚子五月十九日、四組、○中略　元文三年戊午十二月十五日、五組、　寶曆三年癸酉六月十二日、四組、○中略　安永元年壬辰月日、四組、　天明二年壬寅三月廿二日、五人、　同年十一月十一日、四人、　享和二年壬戌七月廿六日、一組減、

〔常憲院殿御實紀五十四〕寶永三年十月十九日、留守居大久保玄蕃頭忠兼死せしにより、留守居一隊を減じ、與力同心ハ四組に配分せらる、

〔文露叢二十九〕寶永八年○正德元年九月九日、御留守居米津周防守跡役被減、支配幷同心割組ニ仕、四組ニ成候樣ニ、御留守居ヘ被仰渡、

〔有德院殿御實紀四〕享保二年二月廿一日、この日、大目付中川淡路守成慶留守居となる、留守居の職ハ、これよりさき四人を以て定員とせられしが、このときより一人を増加して五人とせらる、

〔有德院殿御實紀四十八〕元文三年十二月十五日、この日、大目付駒木根肥後守政方、旗奉行本多筑後守忠英、共に留守居となる、これ筑後守忠英ハ別に增置るゝ所なり、

〔惇信院殿御實紀十七〕寶曆三年六月十二日、この日留守居一隊を減じて、其隊伍を四隊に分ち屬せしむ、

〔御留守居勤方手扣留〕〔二〕新同役被仰付候節心得

一何之誰御留守居被仰付候ニ付、引渡候之段御目付衆被申聞、於御錠口被申聞候ハヾ請取、古役附添中之間定席ニ著座、御老中方御廻御引懸、於中之間古役詰合之者不殘附添、當人結構被仰付難有段御禮被申上候得共、古役之者ニも同役被仰付難有段御禮申上ル、右御禮相濟、若年寄衆江御吹聽、御同朋頭を以御達申、御用掛衆江も吹聽、口奥肝煎を以申達、夫ゟ扣所江同道いたし、諸事申談、尤召人次第同役をも可被仰付哉之節は、傳達番之同役登城致し居諸事申談、右樣無之節ハ、當番之同役諸事申談、傳達番之方江、用人壹人、供頭壹人、勝手役壹人被差出候之樣當番ゟ申達ス、

〔柳營秘鑑〕〔三〕御留守居支配

一御座敷番之頭　一御切手之頭　一奥火之番
一御天守番之頭　一富士見御寶藏番之頭　一御幕奉行
一玉藥奉行　一御弓矢鑓奉行　一御具足奉行
一小普請衆享保四年六月、貳百俵以下小普請衆不殘支配被仰付、　一御掃除頭
一鑓藏御番之頭組頭は久能衆也　一奥方御進物取次番之頭　一同御進物奉行
一添番衆　一伊賀組頭　一御下男組頭
一御城女中惣御門内外共　一御城外御住居女中方　一諸國關所通手形但鐵炮通切手形ハ御老中之證文也、入鐵炮、出鐵炮之譯有之由、

〔明良帶錄前篇〕御留守居五千石高老支　芙蓉　與力十騎同心五十人宛

古來御留守居年寄と稱す、寛永年中、日下部正親始役天和之頃松平乘次、是より大坂御城番に昇る、大名交りて勤む、元祿之度より萬石以下と成る、大留守居は元祿十四年に止む、此場者、大奥向

御取締、非常御立退之心得、御廣敷向之事、御法度之條々、御用人御廣敷番之頭心得有りて、御留守居より指揮、火事地震之節者、年寄女中衆、御留守居、御廣敷番之頭差圖、御留守居番其節者御廣敷迄相越す、大奥に女中病人等有之節、御留守居差圖にて、醫師呼寄、御廣敷番之頭同道にて、部屋へ罷越外女中ハ相拂ふ、月番之節は御臺樣より鮮鯛二尾拜領、御産御用掛り御內祝之節、內獻上物有り、大奥向一切之事は皆關り聞く、古は小普請も御留守居組なりしが、享保之度より新規に小普請組支配被仰付、御引渡被成、御關所女手形を司る、萬石以下ハ主人直印、萬石以上ハ家老之印、月番十五日迄、所々御用番勤之仁之支配連書を差出す、萬石以下計與力同心御譜代なり、

〔有司勤仕錄〕御留守居年寄

一大奥御廣鋪、御女中方、總而御守殿向之事、一切司之、依之奥向之諸番所にては總下座也、○中略御城御櫓御多門等を預り、外曲輪之見付矢倉等迄、御用之武具出入にも、御留守居年寄江斷事也、

一一人づゝ泊番有之、部屋ハ鹽見坂之下御廣鋪七ッ口之前御多門之際也、晝ハ大奥江出、御用を達し、或ハ芙蓉之間江被詰、夜ハ右之部屋ニ泊る也、家來も皆此所に詰る、御多門之内ニ勝手有之、此處ニ而辨當抔温る事也、但部屋十二三疊鋪程之所三間程有、外に月番役人之詰る座敷有之、奥より毎日蒸籠被下置之、○中略

一諸國之關所女通り手形を司る、月番之節、右願を請取、則手形相認、判を押、願人之方江渡す、則願人外之非番月之面々江廻りて判を取事也、

一貳百石より以下末々迄、小普請之面々を支配す、昔ハ貳百俵以上も悉く支配す、近來小普請支配之役出來て如斯也、然共其首尾惡敷一代小普請之類ハ、貳百石以上ニても、御留守居支配に成事有、○中略

一三百石より九千九百石迄の寄合支配之所に、御門番寄合勤之分ハ、御留守居より奉書を以申

付之、駿府加番等も右同斷、

一古來は萬石以上之御門番等も、御留守居より奉書差出候由、今は御老中之奉書にて勤之、都而見付之門ハ、御留守居之預り也、依之御門破損有之時ハ、御門番當番より何方損之由相屆、御留守居御普請奉行ゑ通達有之由、

〔東職記聞一〕留守居四人　従五位下

掌將軍家之御臺所、姫君、諸女房、後廷一切事、諸關通行之證文、金城諸郭出入之切手等之職也、人別領與力十人同心五十人也、古者命諸郭警衛於諸侯大夫之奉書當職一向出之、自正德中命内郭警衛於諸侯之奉書執政出之、命外郭警衛於萬石以下之奉書當職尙奉之、又古者統領小普請衆、享保中置小普請支配十人而被令掌二百石以上之小普請衆也、二百石以下當職掌之、寶暦中增小普請支配而二百石以下亦一切屬之也、

〔吏徵別錄上〕萬石以上　御留守居　寶暦三年癸酉六月十二日、御留守居組小普請之分不殘、幷組頭共、向後小普請組支配に屬す、

〔常憲院殿御實紀四〕天和元年十二月十三日、歲暮掃煤、留守居大久保佐渡守忠高内外ともに役す、今まで酒井雅樂頭忠清父子にて役せし所なり、

〔敎令類纂初集十九〕元祿八乙亥年七月十二日

覺

一大奥ニ而、御留守居衆脇差、向後御廣座敷ニ差置、添番を三人脇差番ニ付置、奥ゑ罷通可申候、御用有之、御座敷之内を御袋様迄參り候節ハ、脇差をさし罷越、御座敷之入口ニ脇差を置、さし添參り候添番三人をすぐに脇差番に置之可申候、附參り候添番ハ、脇差さし申間敷事、

〔文昭院殿御實紀四〕寶永六年十月十八日、留守居松平主計頭近鎭、三枝攝津守守相、久貝因幡守正

方、大久保淡路守敎寵、米津周防守由賢、松前伊豆守嘉廣、大島肥前守義也、こたび本城にわたましすませ給はゞ、大奥廣敷の方を支配すべし、攝津守守相、因幡守正方ハ、若君の事をも奉るべし、小普請組支配、三九二丸の事をばゆるさるべし、主計頭近鎭、淡路守敎寵、三九二丸の事をも奉るべし、主計頭近鎭、周防守由賢、伊豆守嘉廣、肥前守義也、淡路守敎寵、五人ニて小普請組を支配すべし、關所の劵ハ七人ニて連署すべし、守相正方さゝはる事あらば、堀山城守正勝も若君の事奉るべしと仰付らる、

〔享保集成絲綸錄十八〕正德二辰年七月

覺

大奥井御部屋方女中より、表方御役人江親類縁者御役替之儀、又ハ町人職人、御用達候儀を、女中より直ニ頼候事も有之樣に相聞え候、向後一切頼申間敷候、若表御役人江申屆候はで不叶用事有之時は、御留守居江申達、御役人江は、御留守居より申通候樣にいたし可申候、女中より直ニ頼み遣し候事は勿論、御留守居を差置、外之向より頼申遣し候儀も、一切可爲無用候、若此以後相背候もの有之候はゞ、急度可有御吟味由被仰出候、

右之趣、三九二丸女中も同樣に、堅相守可申候、以上、

七月

〔有德院殿御實紀四十一〕享保二十年四月廿九日、御入輿の事にあづかるべき輩を定めらる、留守居ハ諏訪若狹守賴秋、〇下略

〔有德院殿御實紀附錄四〕農商等諸國に行かよふ時、留守居の人々の邸宅にまゐりて、關契を請受るためしなりしかば、おのづからとゞこほりがちにて、其なげき大方ならざるよし、かねて聞召し玉ひ、二丸に移りすませ玉ふほど、速に令を下されて、今より後商人は町奉行の廳にうたへ、農

民は司隷の代官所にこひ申すべし、其時奉行代官等すみやかに留守居に申て、關契をあたふべしと定られしかば、これより關契とゞこほらず、往來の農商大に便を得しとぞ、

〔浚明院殿御實紀四十六〕天明二年三月二十三日、留守居石川阿波守總恒〇中略に後閤の修理を命せらる、

〔昭德院實紀九〕萬延元年十一月朔日

御留守居　池田甲斐守

跡部伊賀守〇中略

和宮御方御緣組、幷御下向御用被仰付之、

位階座次

〔柳營秘鑑一〕一五位被仰付面々、所謂万石以上城主之嫡子、〇中略　御留守居年寄

〔享保集成絲綸錄一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之、所謂、〇中略

一芙蓉間〇中略　御留守居衆

〔憲敎類典三ノ二十六殿中〕萬治二己亥年

一御臺所ニ而、御料理給候衆、

上之間〇中略　御留守居衆

俸祿

〔嚴有院殿御實紀十八〕萬治二年八月廿一日、書院番頭渡邊丹後守吉綱、留守居命せられ、移宅の料金千兩幷に本城搆造の餘材を給ふ、

〔憲敎類典二ノ五御役〕寛文六丙午年七月廿一日

一御黒書院江出御被為成、御役人被為召、御役料被下候覺、〇中略

一五百俵　御留守居

留守居與力同心

〔憲廟實錄四〕天和二年四月廿一日、諸番頭、諸物頭、諸役人の役料を加祿となして給る、留守居、大番頭に千俵。

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月二十八日、この日諸有司役料をさだめらる、留守居大番頭五千石以下千俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

御留守居衆

五千石ゟ內は、五千石之高ニ可被成下候、

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

御留守居

一金貳千五百兩宛

高五千石以上之者江ハ半減

但御切米高三千俵以上之者江は不被下

同千五百俵以上之者江ハ半減

〔京兆府尹記二〕評曰、御旗本の內、其極官は御留守居也、尤五千石高也、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一御留守居五人(與力十騎、同心五十人づゝ、)

〔柳營秘鑑三〕御城內外御門番所勤仕之覺

一上梅林　御留守居與力同心〇中略

一二丸喰違　御留守居與力同心

一鹽見坂　御留守居與力同心〇中略

一北刎橋　御留守居與力同心

〔幕朝故事談〕御留守居の廿五騎の與力は、御普代也、廿五騎は百人組の事也、他の與力悴は、此與力へ養子にはならぬなり、

〔吏徵別錄御目見以下下〕御留守居與力　寛永七年庚午四月廿八日、松平大隅守、牧野内匠頭、大番頭御免、御留守居役被仰付、右大番頭之時之與力同心、并酒井備後守御留守居仕候時之同心も、與力も召連參可申旨被仰付、江城年錄　安永三年丙戌十一月廿三日、與力、御徒已下坊主共、熨斗目白帷子可致著用候、同六年己丑二月廿九日、與力御徒其外前々ゟ熨斗目著仕來候分ハ、自今可致著用候、但坊主奥表共組頭ハ著用、平之坊主ハ可爲無用候、勿論同心手代等之類、輕者ハ、一切可爲無用候、享保九年甲辰七月十三日、貳百俵高、寶暦九年己卯九月、始部屋住江賜十人扶持、○中略

御留守居同心、寶暦九年己卯九月日、部屋住初被召出、十五俵一人扶持、

〔有司勤仕錄〕御留守居年寄

一與力同心ハ、梅林坂之御番所を相勤、但上梅林、下梅林坂ハ、御先手之御番所也、

〔大猷院殿御實紀四十四〕寛永十七年七月十六日、留守居所屬の與力同心裏門兩所の番をつとむる外に、火番をも命せられたるにより、こたび與力五人、同心二十人を增加せしむ、

〔憲敎類典二ノ九御番〕元祿四辛未年四月廿六日

覺

御留守居與力○中略

右地方知行取來候ものども、少給にては、百姓困窮いたし候、沙汰有之ニ付而、今度遂吟味候處、先規より譯有之、地方拜領之筋目も有之候、依之前々之通、領地被下置候間、彌百姓困窮不仕、領知作法能樣に可申付之よし、右頭中へ可被相達候、以上、

四月廿六日

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保九辰年七月

貳百俵高　　　　御留守居與力〇中略

右之通御增高被下候間、向々江可被相談候、以上、

〔憲敎類典 二ノ五 御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下、役儀勤之內、場所定高井役扶持〇中略

貳〇百〇石〇高〇　　　御留守居與力

〔憲敎類典 二ノ十四 御抱席〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代井御抱場所書付

前々御譜代と相定、取扱來候場所、左之通御座候、

御留守居四組 與力 同心

留守居組頭

〔屋敷願吟味帳 十九ノ百十九〕

牛込元天龍寺前 組屋敷之內　　御先手 谷主計組與力

三百八拾四坪八合五夕　　古谷又四郎

右又四郎儀、當七月廿一日、御留守居與力江被仰付候ニ付、唯今迄住居罷在候地面、此度上り候間申上候、尤右者大縄組屋敷地面之儀ニ御座候間、直ニ御差戻被下度、此段御普請奉行江被仰渡被下候樣仕度奉存候、依之申上候、以上、

八月廿三日 〇享和二年　　谷主計

〔吏徵附錄 廢職〕御留守居組頭八人　二百俵高　御役料二百俵　一組二人 合八人　燒火間　享保十九年甲寅六月朔日、始置八人、二百俵高御役料二百俵 御裏門番之頭上席　寶曆三年癸酉六月十二日、廢

〔有司勤仕錄〕御留守居年寄

一近來又組頭と云役出來て、小普請之面々下支配觸流し等を司る、布衣にては無之、

〔有德院殿御實紀 三十九〕享保十九年六月朔日、此日留守居組頭八人を命せらる、西城廣敷番頭、月光院殿、瑞春院御かたの同職より、各一人、新番より二人、元方納戸、西城の納戸より、各一人、是あらたにおかるゝ職なり、よて職祿二百俵、官料三百俵とさだめられ、座。班。ハ。鷹。匠。頭。の。末たるべしとなり、

〔仕官格義辨〕寄合小普請組之事

二百石已下之小普請衆ハ、先規より、今以御留守居衆之支配ニ而候、享保十九寅年六月朔日、御留守居一組に組頭兩人づゝ被仰付、右之組頭、組中之取扱被致、其已下ニ世話役とて、伊賀格之者一組五人充出來、逢對之定日一ヶ月三日充立、組頭之宅に而、逢被申候由、○下略

〔享保集成絲綸錄 三十一〕享保十九寅年六月

御留守居組頭

伊賀格世話役之者　二十人

右高之多少ニ無構、三百俵充御役料被下之、貳百石より以下之者ハ、勤候內貳。百。石。之。高。ニ被成下候事、

〔享保集成絲綸錄 一〕延享元子年六月

當時殿中席書○中略

燒火間○中略　御留守居組頭

〔享保集成絲綸錄 三十一〕享保十九寅年六月

留守居組世話役

右今度新規小普請并伊賀之者、御留守居同心より申付之、御留守居一組江五人充割入、勤候內取

留守居番職員

來御扶持方共ニ五拾俵高ニ被成下候間、可被得其意候、

〔寶曆集成絲綸錄二十四〕延享三寅年七月

御留守居組世話役　二十五人

右向後役扶持三人扶持宛被下候間、被得其意、御留守居可被談候、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數 幷組支配

一御本丸御留守居番六人

〔吏徵上布衣以上〕御留守居番五人　老中支配　中之間　千石高　一組與力六騎　同心廿人　寛永十九年壬午二月五日始置

〔東職記聞二〕留守居番五人　布衣

職掌不詳聞也、領人別與力七人、同心三十人也、代々記曰、寛永七年始置此職、以松平大隅守被補之也、同十九年以宮崎備前守、筒井內藏（內藏是訓奈以存字、以爲筒井氏之例也、必不可訓久良也、）松平庄左衛門、永井五右衛門、久松彥左衛門五人被補之、領人別與力八人、同心三十人也、元寛日記載筒井永井久松三氏補職之事、而不載宮崎松平二氏補職之事、又寛永七年不記松平大隅守補職之事也、諸家系譜曰、寛永七年、牧野內匠頭信成、松平大隅守重勝（重勝ハ重利之訛）兩人補留主居也、慶延略記曰、寛永十九年二月、宮崎備前守、筒井內藏補留主居番也、筒井氏代大隅守、宮崎氏代內匠頭也、同年三月、松平勝左衛門（勝、代々記作庄、）永井五右衛門等兩人補之也、而不記久松氏之事、然元寛日記代々記記之、則慶延略記脫之者必矣、案往古有留守居、無當職、至宮崎筒井二氏代牧野松平二氏、暫闕留主居職乎、如何者、代々記留主居職部亦以酒井紀伊守忠吉、（一作和泉守）杉浦內藏允正友、伊丹播磨守康勝等三人爲代牧野松平二氏、而不記遷補之年月也、依是酒井杉浦伊丹三氏勘定奉行而帶留主居職、而以掌其大事、又置當職令掌小事乎、又案、代々記曰、寛永中、酒井備後守忠利、酒井雅樂頭忠世、松平紀伊守家信等、相代而奉大留主

居職、則留主居强可不須事、則勘定奉行帯之、而拾其遺、留主居番者副大留主居、補其闕乎、慶延略記曰、承應元年九月、稻垣若狹守重太補留主居、代伊丹氏、明曆二年正月、本多美作守忠相代杉浦氏、萬治二年八月、渡邊丹後守吉綱代酒井氏也、又載當職遷補之次第曰、慶安元年三月、小野左馬助(代々記作二源右衛門)代永井氏、承應三年五月、日下部作十郎代松平氏、明曆二年七月、三宅總右衛門代宮崎氏、同年八月、天野六右衛門代筒井氏、万治元年五月、久貝總左衛門代久松氏、則當職始于宮崎筒井二氏、留主居職至慶安定乎、當職之濫觴與留主居職相混不判、故記臆斷以待來者之改正、

〔大猷院殿御實紀 四〕寛永二年正月七日、留主居番大河内善左衛門正澄死ければ、其子大番善六郎政憲家をつぐ、

○按ズルニ、當職ハ吏徴別錄ニ寛永十九年壬午二月五日、始置奥方御留守番五員、宮崎備前守、筒井内藏、久松彦左衛門、長井五左衛門、松平庄右衛門トアレド、其以前ヨリ設ケラレシ職ナリ、

〔諸役人代々記 二〕御留守居番　老中支配千石高、中ノ間、與力六騎、同心廿五人、

(家光公)寛永十九午年三月十二日大御番組頭より、承應三午年御免、　松平庄左衛門

(家綱公)承應三午年五月廿八日より、万治二亥年六月八日病死、　日下部作十郎

万治二亥年六月廿五日小十人頭より、延寶五巳年九月十三日願御免、　岩瀬市兵衛

(綱吉公)延寶五巳年九月廿六日御納戸より、貞享三寅年九月十四日御免、　鵜殿十郎左衛門

貞享三寅年九月廿八日御使番より、元祿元辰年七月廿三日病死、　村上三右衛門

〔御留守居勤方手扣留 追加〕安政六未年二月廿四日

一御留守居番江、石川左内被仰付、御用人部屋にて、表使江引合、拙者御留守居番江石川左内被仰付候旨申述候處、左内結構被仰付難有旨申候處、表使お目出度と申引、

職掌

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年八月五日、御留守居番役名ヲ廢ス、
頭與力同心、右同斷、〇頭ハ勤仕並寄合、與力ハ銃隊、同心ハ小筒組ヘ割入、

〔明良帶錄續編〕御留守居番千石高中、老支、
此場は寛永九年に始る、隊卒を率ゐて宿衞し、非常の節は御廣敷迄相越御用承之、此場も御留守居につゞきて大奥向に拘るなり、御附向よりも昇り、二丸御留守居よりも出る、

〔有司勤仕錄〕御留守居番
一御廣敷七つ口之前、御多門之際に、御留守居年寄衆部屋と並て部屋有之、晝は大奥御玄關の內に詰所有之、是に詰、又は部屋江來る、泊番は則部屋也、家來ども次の間に詰る、諸事御留守居年寄と同じ、部屋少々狹き也、御留守居年寄は勿論、御留守居番江も每日大奥より蒸籠出る也、〇中略
一御女中樣御出之時は、御輿之側に御供也、奧向之御用司之表ニ而は、中ノ間ニ相詰る、御本丸五人二丸附六人有り、

〔職掌錄〕御留守居番　御女中樣、御使等、總じて奧向の御用を達す、

〔大猷院殿御實紀七十二〕慶安元年十二月二十日、留守居番筒井內藏忠重、紅葉山の事を司るべしと命せられ、〇下略

〔嚴有院殿御實紀十四〕明暦三年十月廿三日、留守居番の輩、この後は後閤へまかり諸事指揮すべしと命せらる、

〔有德院殿御實紀十五〕享保七年七月二十六日、留守居番永井三郎右衞門治定、廣敷の御事かねうけたまはるべきむね命せらる、

〔昭德院實紀九〕萬延元年十一月朔日

御留守居番　小出助四郎〇中略

待遇

和宮御方御縁組、并御下向御用被仰付之、

〔柳營秘鑑 一〕布衣被仰付面々〇中略

御本丸御留守居番

〔享保集成絲綸錄 一〕萬治二亥年九月

新御殿付而諸士著座之席、以壁書被仰出之所謂、〇中略

一躑躅之間上北之間〇中略　御留守居番衆

〔享保集成絲綸錄 一〕延享元子年六月

當時殿中席書〇中略

中之間〇中略　御留守居番

〔憲教類典 三ノ二十六 殿中〕萬治二己亥年

一御臺所ニ而御料理給候衆

上之間〇中略　御留守居番衆

俸祿

〔大猷院殿御實紀 四十九〕寛永十九年二月五日、大番組頭松平庄左衛門昌吉、留守居番となりて、五百石給ひ、千六百三十石餘になされ、〇下略

〔嚴有院殿御實紀 三十三〕寛文六年七月廿一日、黑木書院に諸有司をめして、各役料を下したまふ旨仰出され、彌儉約を守るべき旨面命あり、役料は〇中略　留守居番〇中略　五百俵、〇下略

〔憲廟實錄 四〕天和二年四月二十一日、諸番頭諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、〇中略　留守居番衆五百俵、

〔常憲院殿御實紀 二十五〕元祿五年五月二十八日、この日諸有司役料をさだめらる、〇中略　留守居番

留守居番與力同心

略○中千石以下は三百俵、略○下

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

千石より内は、千石之高ニ可被成下候、

御留守居番

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一御本丸御留守居番六人與力十騎、同心廿人、

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

御留守居番千石之高千石ゟ内は與力四騎同心廿人宛

〔有司勤仕錄〕御留守居番

一蓮見坂御番所を與力同心勤番す、略○中

一右御留守居年寄幷御留守居番之組與力同心は、外之組と違ひ、別而御普代ニ而、老人幼少病氣なれば小普請組江入、他組に無之事也、

〔吏徵御目見以下〕御留守居番與力三十人　一組六人　百五十俵高　部屋住十人扶持　役上下

御譜代場　年月日始置略○中

御留守居番同心貳百人　一組四拾人　貳拾俵貳人扶持　部屋住十五俵一人扶持　御譜代場

年月日始置

〔吏徵別錄御目見以下〕御留守居番與力　寛永十九年壬午二月日始置　享保九年甲辰七月十三日百五十俵高略○中

御留守居番同心　寛永十九年壬午二月日始置

〔憲教類典二ノ九御番〕元祿四辛未年四月廿六日

覺

裏門切手番頭職員

御留守居番與力〇中略

右地方知行取來候ものども、少給にては百姓困窮いたし候沙汰有之ニ付而、今度遂吟味候處、先規より譯有之、地方拜領之筋目も有之候、依之前々之通領地被下置候間、彌百姓困窮不仕、領知作法能樣ニ可申付之よし、右頭中へ可被相達候、以上、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保九辰年七月

御留守居番與力〇中略

百五拾俵高 但取來候御扶持方共ニ

右之通御增高被下候間、向々江可被相談候、以上、

〔寶曆集成絲綸錄 十六〕延享三寅年十一月

一御留守居番同心組頭先規之例を以、肩衣著用相勤候樣奉願候處、自今以後著用相勤候樣申渡之、

右書付、御留守居番江雅樂頭渡之、

〔憲教類典 四ノ十二 御抱席〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付

前々御譜代と相定、取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

御留守居番五組與力同心

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年八月五日、御留守居番役名ヲ廢ス、

頭與力同心、右同斷、〇頭は勤仕並寄合、與力は銃隊、同心は小筒組へ割入、

〔官中秘策 十一〕一御裏御門御切手番頭　五人。。

〔吏徵 上 御目見以上〕御裏門切手番頭六人。。　御留守居支配　焼火間　四百俵高　一組同心二十人

〔大猷院殿御實紀 三十五〕寛永十四年九月十八日、書院番加藤勘右衛門正信、小普請奉行梶川四郎

次郎忠助、西山太郎兵衞昌綱、嘉奉行小林權大夫正吉、久松彥左衞門定佳、大番戶田平右衞門淸久、其組頭中山五平次勝信は裏切手門の番命せられ、各同心十人づゝ屬せらる、

職掌

〔明良帶錄續篇〕御切手番之頭 留守居支 四百俵高　同心十九人宛

布衣以上にて三番之一ツにして、卒吏を率ひて、御切手御門を支配し、非常を守衞す、御留守居支配ニて、御〆り第一の場所也、御規定有て、申の刻以後は出入有るべからず、勿論手形○略なくしては、女中上下共一切通行相成ず、手形は年寄女中衆よりの手形相濟めば、たとひ申の刻以後たりとも通し、暮六つ過に於ては、一切通し不ㇾ可ㇾ申、夜中自然御用も有ㇾ之ば、年寄女中衆の內より、御廣敷番之頭、當番江手形を以て相斷、切手御門、其外御門々々通達之儀、御留守居方より差圖有ㇾ之相通す、御門出入之長持櫃葛籠等は、十貫目迄は蓋取るに不ㇾ及、其以上ハ蓋を明け改る事、此場の掟なり、昔惠霜一件之節、姬君樣御用物と僞り、制を欺き、幾島新五郞と云河原ものを正保三年大年寄江島一件也、長持に入れて舁き込しより發覺して、此場猶六ヶ敷成りたる也、女中は腕ニ判を据て、上ニ貝をふたにして、夫を括て出て、時刻過ば此腕之判を判鑑に引合せ改むる事、此場の掟とす、

俸祿

〔憲教類典 二ノ五 御役〕寬文六丙午年七月廿一日

一御黑書院江出御被ㇾ爲ㇾ成、御役人被ㇾ爲ㇾ召、御役料被ㇾ下候覺、○中略

一二百俵　御切手番頭

〔憲廟實錄 四〕天和二年四月二十二日、諸役人の役料を加祿として給る、○中略切手裏門番頭二百俵、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保八卯年六月

四百石ゟ內は、四百石之高ニ可ㇾ被ㇾ成下ㇾ候、

御裏門切手番頭

裏門切手番同心

〔吏徵 下 御目見以下〕御裏門切手番同心百二十人　一組廿人　二十俵二人扶持　部屋住十五俵一

西丸留守居職員

人半扶持　御譜代場　寛永十四年丁丑九月十八日始置

〔吏徴別錄御目見以下〕御裏門切手番同心　寛永十四年丁丑九月十八日、始置。七十人、毎組十人、合七組、寛文五年乙巳二月三日、御切手番は同心不足ニ付而、連々奉願候通、増人五人充可相抱旨被仰渡之日記、　寶曆三年癸酉五月三日、二十俵二人扶持より內之者、向後勤候內右之高に御足高被下旨、

〔憲教類典二ノ十四御抱席〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代幷御抱場所書付

前々御譜代と相定、取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

御本丸御裏門番六組同心

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一西丸御留守居四人〇又見吏徵ニ

〔仕官格義辨〕西丸御留守居之事

問云、或人之咄ニ、自分之先祖之內、西丸御留守居勤候、先祖書ニ有之候得共、當時西丸御留守居と申ハ、諸大夫役ニ而候、然に先祖之勤候は、官位も無之見へ候、合點不參候と被申候、是等は如何之譯にて可有之候哉、

答云、當時之西丸御留守居之儀ハ、元祿七戌年正月十一日、戶田備前守、庄田小左衛門、下總守と改、梶四郎兵衛、和泉守と改む右三人新規ニ被仰付、諸大夫役ニ被仰付候、其節迄之西丸御留守居をば、西丸御裏門番之頭と名替り申候、右問給ふ處之西丸御留守居は、當時西丸御裏御門番之頭之事ニ而候、當時西丸御留守居之事者、元祿七年より新規ニ三人被仰付候、同十丑年十一月十五日、上田彌右衛門周防守と改被仰付、其已後四人充ニ而被勤候處、寶永二酉年三月廿五日、當御役相止ミ、與津能登守、

中根壹岐守、佐野豐前守、藤懸信濃守、御役御免ニ而候、其後同六丑年十月十五日、高木善左衛門(伊勢守改)大岡五郎右衛門(備前守改)中山主馬(隠岐守改)松平新五左衛門(内膳正改)右四人被仰付候、正德六申年六月廿五日、高木伊勢守、百人組之頭被仰付、四ヶ年之間、跡役不被仰付、享保四亥年五月、靑山駿河守被仰付、又四人ニ成、元文三午年正月十一日、大屋越前守(安藝守と改む)被仰付、當御役五人充ニ而被勤候、

〔台德院殿御實紀 二十五〕慶長十九年三月廿三日、西城留守居川井出羽守昌俊卒す、壽八十三、其子五兵衛昌等家をつぐ、

〔常憲院殿御實紀 二十九〕元祿七年正月十一日、この日桐間番頭戸川備前守安廣、先手頭梶四郎兵衛重正に三百石づゝ、使番庄田小左衛門安利に四百俵加秩給ひ、共に西城留守居にせらる、これ創置の職なり、

○按ズルニ、當職ハ慶長中設ケシ職ニシテ、後久シク廢官トナリシガ、元祿ニ至リテ再ビ置キシナリ、

〔泰平年表 常憲公〕元祿七年正月、始て西丸御留守居を置る、(是より先は、西丸裏御門番の頭を西丸御留守居と唱しが、此時西丸裏御門番の頭といふ、)

〔憲廟實錄 三十〕寶永二年三月廿三日、西丸御留守居奥津能登守宗賢、同佐野豐前守直行も、加祿千石、役を免じて寄合となる、廿五日、西丸御留守居上田周防守重則、中根壹岐守正冬、同藤懸信濃守永次免ず、是より此役を停む、

〔文露叢 二十一〕寶永六年十月十五日、西丸御留守居四人被仰付、(火消より)高木善左衛門、(御目付より)大岡五郎右衛門、(御小性組頭より)中山主馬、(寄合より)松平新五左衛門、

〔諸役人代々記 二〕西丸御留守居

(家齊公)寛政十午年三月二日大目付より　桑原伊豫守

同十一未年十二月廿九日、御納戸頭取より、　大久保土佐守
享和元酉年三月、御持頭より、後病死、　宅間豐後守（初與右衛門）
同三亥年六月八日、御持頭より、文化九申年十二月廿六日願御免、　野一色兵庫頭
同年十二月五日、西丸御持頭より、後願御免、　堀田土佐守

〔明良帶錄後篇〕西丸御留守居（二千石高若支中）
此場四ッ時の御太鼓ニて出殿、直ニ引、吹上御成、其外山里奥入り、西丸御入り、幷御本丸御入ニハ、御小人御目付御成觸申來る、西丸御入幷御本丸御入には部屋前御通行ニ付、部屋前ニ於て平伏御目見

〔東職記聞二〕監國君職
留守居六人　從五位下
掌西營諸殿事之職也、慶延略記曰、慶安三年九月、大猷院殿以留主居番宮崎備前守、久松彥左衛門等兩人被属監國君、領人別六人、（○六人上、恐脫寄力二字、）同心三十人也、同四年十二月、始置留主居、以三宅彌次兵衛、三宅總左衛門、天野六右衛門、板橋與五左衛門等四人被補之也、相傳云、此時之留主居者後世之御裏門番之頭也、代々記曰、元祿七年始置此職、以戶川備前守、庄田下總守、梶和泉守等三人被補之也、案爾來掌西營諸殿事歟、寶永九年以來、當爲文廟監國君在西營而罷之、同六年即祚之後再置之、以大岡備前守、高木伊勢守、中山隱岐守、松平內膳正等四人被補之、爾來連綿至于今也、

〔常憲院殿御實紀四十五〕元祿十五年二月十五日、この日百人組持弓筒先手、西城留守居同裏門富士見寶藏番の頭、各交替しで局を曠すべからずと仰出さる、

〔有德院殿御實紀四十七〕元文三年六月朔日、西城留守居裏門番の頭おなじく大納言殿（○家重）に附られ、少老の隸下とせらる、

位階待遇

〔柳營秘鑑〕一五位被仰付面々、所謂万石以上城主之嫡子、〇中略
　西丸御留守居

〔文昭院殿御實紀〕四寶永六年十月十五日、この日火消役高木善左衛門守與、目付大岡五郎右衛門清相、小姓組番頭中山主馬信庸、寄合松平新五左衛門直由、ともに西城の留守居となり、信庸直由ハ各役料四百俵下さる、

〔享保集成絲綸錄〕一延享元子年六月
　當時殿中席書〇中略
中之間〇中略　西丸御留守居

〔憲教類典〕三ノ二十六殿中年號月日無之
　御料理之席書〇中略
御臺所一之間〇中略　西丸御留守居

〔明良帯錄〕後篇西丸御留守居若支二千石高　中
此場ハ御褒美場とて、芙蓉の邊に、老衰まで骨折たる仁か、遠國を老衰まで勤たるかの仁、爰ニ昇る、大抵先途なし、布衣之仁なれば此場にて襟を白くする也、近比石川左近將監、坂部能登守等が、小普請組支配へ出たるハ、別に謂れあり、長岡之吹擧にて出たる由、常格と云がたし、

俸祿

〔享保集成絲綸錄〕三十享保八卯年六月　西丸御留守居
貳千石ゟ内は、貳千石之高ニ可被成下候、

〔天明集成絲綸錄〕三十八明和四亥年十二月
　御勘定奉行江　西丸御留守居　古郡孫大夫

年久敷相勤候ニ付、取來新田十分一、本高ニ結被下、

右之通申渡候間、可被得其意候、

〔德川禁令考十八稍規〕慶應三丁卯年九月廿六日

足高役料等ヲ廢シ役金給與ノ定○中略

別紙
御役金被下高之覺

金七百兩宛　西丸御留守居、學問所御用、林式部少輔、坂井右近將監、

西丸添番

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高并役扶持、○中略

七拾俵高扶持持　　西丸添番

元西丸御留守居支配ニ而候處、當時ハ百俵高扶持持ニ而、御留守居支配、

西丸留守居與力同心

〔柳營秘鑑三〕御城內外御門番所勤仕之覺

一西丸御臺所前　西丸御留守居與力同心○中略　一二丸中口御門　二丸御留守居與力同心

〔常憲院殿御實紀二十九〕元祿七年二月七日、西城留守居に同心廿人づゝを屬せしめらる、

〔憲教類典二ノ九御番〕元祿四辛未年四月廿六日

覺○中略　　西丸御留守居同心○中略

右地方知行取來候ものども、少給にてハ、百姓困窮いたし候沙汰有之ニ付而、今度遂吟味候處、先規より譯有之地方拜領之筋目も有之候、依之前々之通、領地被下置候間、彌百姓困窮不仕、領知作法能樣に可申付之よし、右頭中へ可被相達候、以上、

四月廿六日

西丸留守居番

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿御方〇家綱に附屬せらる、輩あり、〇中略留守居番宮崎備前守時重、久松彥左衛門定德〇中略ハ、もとのまゝにて御方につけられ、〇下略

西丸裏門番頭職員

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一西丸裏御門番頭四人

〔享保集成絲綸錄一〕延享元子年六月

當時殿中席書〇中略

若年寄支配　　西丸御裏門番之頭

〔東職記聞二〕監國君職

裏門番之頭四人　布衣

領二人別與力四人同心二十人一也、代々記曰、慶安四年十一月始置二此職一、以二天野六右衛門、板橋與五左衛門、三宅總右衛門、三宅彌次兵衛等四人一被レ補レ之也、慶延略記稱二之西丸御留守居一也、相傳云、始稱二西丸留守居、領二與力同心一衛二裏門一也、後置二留主居職一改二號裏門番之頭一也、元祿十年以來改賜二布衣一也、

〔吏徵上布衣以上〕西丸御裏御門番頭四人　若年寄支配　躑躅間　七百石高　一組與力四騎、同心廿人、

〔大猷院殿御實紀十八〕寬永八年八月六日、西城裏門番頭夏目長右衛門信次死して子大番甚五左衛門安信家をつぐ、

〔半日閑話二〕一西丸御裏門番之頭御役名、慶安四年始而被二仰付一候節は、西丸御裏門番之頭、明暦二年貳度目被二仰付一候節幷元祿五年榊原八左衛門、天野勘左衛門被二仰付一候節は、西丸御留守居、元祿七年正月、別に當時之西丸御留守居出來候已後、御裏門番之頭と改申候、

但天和二年、能勢半左衛門被二仰付一候節、西丸御留守居番、貞享元年牧七左衛門、同三年川田吉兵

衞、本多金右衞門、同四年永井彥兵衞、元祿元年大澤傳左衞門被仰付候時は、御裏門番之頭と有之候得共、其頃之嘉定玄猪の次第書には、やはり西丸御留守居と相見え候間、右之間、役名相改候事とは不相聞、一役にて兩名有之歟と被存候、

〔諸役人代々記 二〕西丸御裏門番頭

家綱公

慶安四卯年六月廿六日より、明曆二申年八月一日、御留守居番江、　天野六右衞門

明曆二申年八月一日、二丸御留守居より、延寶元丑年四月六日、御留守居番江、　大久保平左衞門

延寶元丑年四月十六日、御書院番より、貞享三寅年六月十五日御免、　大久保右衞門八郎

綱吉公

貞享三寅年七月十三日、寄合より、元祿五申年御免、　本多金右衞門

元祿五申年十月九日、御腰物奉行より、同十四巳年八月廿八日、故有御役被召上、　榊原八左衞門

同十四巳年八月廿八日、御納戸頭より、正德二辰年六月十二日、御先筒頭江、　御手洗五郎兵衞

家宣公

正德二辰年六月廿五日、西丸御切手番頭より、享保五子年三月二日願、御免、　伴野惣右衞門

〔嚴有院殿御實紀 二〕慶安四年十一月廿六日、二丸留守居天野六右衞門康世、小納戶板橋與五右衞門政郡、二丸御膳番三宅彌次兵衞正勝、鷹預三宅惣右衞門康政、ともに西城裏門番頭仰付らる、これ新設なり、これまで二丸番せし徒士四人、足輕廿人を屬せらる、

○按ズルニ、此職寬永中ニ始テ置キ、後廢セラレシガ、此ニ至リテ再ビ置カレシナリ、

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年八月五日、西丸御裏御門番頭ノ役名ヲ廢ス、
頭與力同心、右同斷、○頭ハ勤仕並寄合、與力ハ銃隊、同心ハ小筒組ヘ割入、

職掌

〔明良帶錄 續篇〕西丸御裏御門番之頭 七百石高 若支配 與力同心不同

隊卒を率ひて、御裏御門を守衞す、御老若方西丸御見廻りの節、御通行の時、時宜、其外御役人、御側衆、大目付衆、御目付衆通行之節、時宜合、西丸江御成之節、平伏、大納言樣御本丸へ御入の節、同斷、平伏、紅葉山御參詣の節、〆切となる也、○中略大奥女中衆通行之節、御定判迄ハ相改の事、奥の衆通行には、御小人差添有之、此御門平日潛り計、

〔嚴有院殿御實紀 四十四〕寛文十二年閏六月十七日、西城ハこれより、先一月に三度づゝ洒掃せしが、この後ハ五度づゝ洒掃つかふまつるべしと、西城の留守居○中略に命ぜらる、

〔教令類纂 初集三十九〕寛永七庚寅年四月十五日○中略

西丸御裏門番之頭

御番詰切候儀、御免被成候間、前々之通、可被勤候、泊番之儀ハ、七半時より可有出勤候、○又見文昭院殿御實紀

座次

〔享保集成絲綸錄 一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之、所謂、○中略

一躑躅之間、北ゟ二之間、○中略　御裏門番頭

〔憲教類典 三ノ二十六 殿中〕萬治二己亥年

一御臺所ニ而、御料理給候衆、○中略

二之間○中略　御裏門番頭

俸給

〔憲教類典 二ノ五 御役〕寛文六丙午年七月廿一日

一御黑書院江出御被爲成、御役人被爲召、御役料被下候覺、○中略

西丸裏門番頭
與力同心

一四百俵　　西丸御留守居

〔憲廟實錄 四〕天和二年四月二十二日、諸役人の役料を加祿として給る、西丸裏門番頭四百俵、

〔常憲院殿御實紀 二十五〕元祿五年五月二十八日、この日諸有司役料をさだめらる、〇中略西城裏門番の頭〇中略五百石以下ハ二百俵、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保八卯年六月

七百石ゟ内は、七百石之高に可被成下候、　西丸御裏御門番頭

〔憲教類典 二ノ五 御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料〇中略

西丸御裏門番頭 七百石ゟ内は七百石之高 與力四騎同心廿人宛

〔吏徵 下 御目見以下〕西丸御裏門番與力十六人　一組四人　百五十俵高　部屋住十人扶持　役上下、貳半場、〇中略

西丸御裏門番同心八十人　一組廿人　三十俵二人扶持高　部屋住廿俵　二人扶持　二半場

年月日始置

〔吏徵別錄 下 御目見以下〕西丸御裏門與力　慶安四年辛卯十一月廿六日、始置十六員、每組四員、合四組、　享保九年甲辰七月十三日、百五十俵高、〇中略

西丸御裏門番同心　慶安四年辛卯十一月廿六日、始置八十員、每組二十員、合四組、稱西丸御留守居下番、元祿七年甲戌二月七日、役名を改む、

〔大猷院殿御實紀 二十二〕寛永十年二月二十七日、酒井和泉守忠吉、裏門番頭になり、馬上同心六人、歩行同心四十人屬せらる、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、積兼候小給之者共ニ、御増高被下候間、自今支配之内ゟ、格別之儀も無之候はば御足米願申出間敷候、

右之趣、向々江可被達候、〇中略

西丸御裏門番與力〇中略

百五拾俵高　但取來候御扶持方共

右之通、御増高被下候間、向々江可被相談候、以上、

〔憲教類典二ノ十四御抱席〕寶暦五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付〇中略

前々より、御譜代とも難相定場所と申、取扱來候趣、左之通御座候、〇中略

西丸御裏門番與力同心

〔嘉永明治年間録十五〕慶應二年八月五日、西丸御裏御門番頭ノ役名ヲ廢ス、

頭與力同心、右同斷、〇頭ハ勤仕並寄合、與力ハ銃隊、同心ハ小筒組ヘ割入、

西丸切手門番頭

〔官中秘策二十五〕西丸御切手門番頭六人

〔有徳院殿御實紀四十七〕元文三年六月朔日、西城留守居裏門番の頭おなじく大納言殿に附られ少老の隷下とせらる、切手門番の頭もおなじく付られ、留守居の支配に定らる、

〔享保集成絲綸録三十〕享保八卯年六月

四百石ゟ内は、四百石之高ニ可被成下候、

西丸切手御門番頭

〔常憲院殿御實紀五十一〕寶永二年二月廿六日、けふ西城桐間番六人、同じ方の切手門番頭命せらる、

西丸切手門番同心

〔吏徴御目見以下〕西丸切手御門番同心百廿人　一組廿人　貳拾俵二人扶持　部屋住拾五俵一人半扶持　御譜代場

〔吏徵別錄御目見以下下〕西丸切手御門番同心　寶永二年乙酉二月廿六日始置　元文元年丙辰六月、一組二十五人充之處、以來一組二十人充ニ被成、始而部屋住被召出十五俵一人半扶持被下、

〔憲教類典御抱席二ノ十四〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代幷御抱場所書付○中略

前々ゟ御譜代ニ而無之と相定、取扱來候場所、左之通御座候、○中略

西丸切手御門番同心

〔憲教類典御抱席二ノ十四〕寶曆七丑年上ゲ候書付○中略

西丸切手御門番同心

右只今迄、由緖吟味取扱之內、御譜代ニ而無之場所江認メ入、取扱來候處、向後右場所御譜代之場所江認入、取扱可申旨、被仰渡奉畏候、

十二月　　稻生下野守

牧野織部

二丸留守居職員

右堀田相模守殿江上ル

十一年甲戌月日始置

〔吏徵布衣以上上〕二丸御留守居六人不同　若年寄支配　燒火間　七百石高　同心廿四人　寬永

〔憲教類典御役二ノ五〕年號月日無之

二丸御留守居　同心三十九人　御小人廿七人

〔吏徵別錄上二丸御留守居〕寬永十一年甲戌月日、始置三員、大木才兵衞、水野善兵衞、西山八兵衞、寬文六年丙午七月廿一日、御役料三百俵、天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、元祿十年丁丑十二月十八日、布衣、享保八年癸卯六月十八日、七百石高、

〔東職記聞二〕二丸留守居八人　布衣

職掌不詳聞也、傾同心三十人、小人二十七人也、慶延略記曰、正保四年十二月始置此職、以天野六右衞門、村越清次郎、小林長五郎等三人被補之、慶安三年十一月増四人、酒井作兵衞、大岡忠四郎、伊藤安兵衞、長谷川長五郎等補之、人別領同心二十人也、代々記曰、當職之始無定員數也、元祿十年以來叙布衣也、

職掌

〔明良帯錄續篇〕二丸御留守居七百俵高焼、若支

此場は諸向より勤向功少し、布衣以上の年來骨折たる仁など昇る、二丸喰違御門を、隊卒を率ゐて守衞をなす、近來御勘定吟味役より羽田藤右衞門御褒美として爰に至り、〇中略大御所樣二丸御住居の節は、御締向、其外心得多けれども、常はさもあらず、二丸火の番は支配なり、

〔柳營秘鑑三〕二丸御留守居支配

一二丸張番　一同火之番　一坊主衆　一同御門添番

〔享保集成絲綸錄一〕寛文二寅年二月

先頃所被仰出之老中井御旗本方支配之差別〇中略

一二丸御留守居衆〇中略

右者久世大和守土屋但馬守支配

〔教令類纂初集三十九〕寶永七庚寅年四月十五日

二丸御留守居

加番御免被成候間、前々之通可被勤候、

待遇

〔常憲院殿御實紀三十六〕元祿十年十二月十八日、布衣の侍に加へらるゝもの四十二人、〇中略二丸留守居、池田市之丞正長、長田十右衞門守直、矢橋傳左衞門重信、菅沼長兵衞定治、松平助之丞政峻、

俸祿

飯河傳右衞門直大、松平次郞右衞門政房、○下略

〔享保集成絲綸錄 一〕延享元子年六月

當時殿中席書 ○中略

燒火之間　二丸御留守居

〔憲教類典 三ノ二十六 殿中〕萬治二己亥年

一御臺所ニ而御料理給候衆 ○中略

二之間 ○中略　二丸御留守居

〔憲教類典 二ノ五 御役〕寛文六丙午年七月廿一日

一御黑書院江出御被爲成、御役人被爲召、御役料被下候覺、○中略

一三百俵。。　二丸御留守居

〔常憲院殿御實紀 二十五〕元祿五年五月二十八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略 二丸留守居 ○中略 五百石以下は二百俵。。。○下略

〔享保集成絲綸錄 三十一〕享保八卯年六月

七百石ゟ內は、七百石之高に可被成下候、　元方 拂方 二丸御留守居

〔吹塵錄 三十一 德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金五百兩宛　二丸御留守居 別手組出役、頭取取締役共、

神保常八郞

寺西直次郞

山田勝三郞 ○中略

二丸同心

高千石以上之者江ハ半減
　御切米高三百俵以上之者江ハ半減
但

〔憲敎類典御役二ノ五〕年號月日無之
二丸御留守居　七百石之高　七百石方内ハ　同心三十九人　御小人、貳十七人
〔諸御役代々記十三〕二丸御留守居
一慶安元子十一月十六日より、同心二十人御預け、
〔吏徵別錄御目見以下下〕二丸同心　寶曆三年癸酉正月、定二十五員、内組頭五員
〔吏徵御目見以下下〕二丸同心二十五人　貳拾俵貳人扶持高　組頭五人　部屋住十五俵一人半扶持　御譜代場
〔大概順〕御目見以下大概順
貳拾俵貳人扶持　御譜代席　羽織袴　二丸同心
〔憲敎類典御番二ノ九〕元祿四辛未年四月廿六日
覺　二丸御留守居同心○中略
右地方知行取來候ものども、少給ニ而ハ、百姓困窮いたし候沙汰有之ニ付而、今度遂吟味候處、先規より譯有之、地方拜領之筋目も有之候、依之前々之通、領地被下置候間、彌百姓困窮不仕、領知作法能樣に可申付之よし、右頭中へ可被相達候、以上、
四月廿六日
〔柳營沙汰書三〕慶應三年正月十七日
丹波守殿　御目付江

二丸同心同御小人被廢止候ニ付、二丸仲仕切御門、向後御中間ニテ兩人ヅヽ勤番候樣可被致候事、

二丸番

〔常憲院殿御實紀七〕天和三年二月十一日、二丸番森勘兵衞常行、松井庄兵衞某、新に廩米百五十俵給ふ、

二丸添番

〔營中御日記十一〕寛永十一年正月二十日、御徒岩堀權左衞門、二丸添番被仰付候、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共ニ、御增高被下候間、自今支配之内ゟ、格別之儀も無之候はば御足米願申出間敷候、

右之趣、向々江可被達候、○中略

百俵高　御本丸二丸御女中樣方添番　○中略

右之通、御增高被下候間、向々江可被相談候、以上、

二丸張番

〔憲廟實錄九〕貞享三年六月十八日、二丸張番四人を定らる、俸米百五十俵新設也、

〔常憲院殿御實紀十三〕貞享三年六月十八日、二丸張番四人と定めらる、

〔憲廟實錄十一〕貞享五年○元祿元年七月十九日、二丸張番を定めて、二丸御留守居に隷す、

〔有德院殿御實紀二〕享保元年七月十九日、けふより同所○二丸張番をも廢せられ、小普請にいれらる、

二丸門番

〔吏徵附錄廢職〕二丸御門番　寛文十年庚戌六月七日、始置八人、岩本與三兵衞、向山安左衞門、小島茂兵衞、渡邊仁右衞門、築山伊右衞門、和田甚右衞門、大島覺右衞門、高橋七郎、

二丸門添番

〔吏徵附錄廢職〕二丸御門添番　二丸御留守居支配

〔大猷院殿御實紀七十二〕慶安元年十二月廿日、小納戸宮崎備前守時重、○中略紅葉山の事を司るべ

しと命せられ、二丸門添番、成田左大夫勝定、山本市左衛門勝長、坂本茂左衛門正尤、杉浦文右衛門某、かはる〳〵同所に勤番を命せられ、○下略

〔享保集成絲綸錄三十〕享保九辰年七月

二丸御門添番

七拾俵高 持扶持之儀

三丸番頭

〔大猷院殿御實紀五十五〕寛永二十年九月二十五日、若君附內藤式部少輔政次、大久保豐前守忠貞、大久保丹波守忠正、本多播磨守信吉、三丸番頭に仰付らる、

三丸番組頭

〔大猷院殿御實紀七十二〕慶安元年九月廿五日、德松君抱傅役向坂淸左衛門政定、柘植平兵衛正弘、前田孫一郎定恭ハ、三丸番組頭仰付られ、○下略

三丸張番

〔常憲院殿御實紀二十九〕元祿七年二月七日、けふ三丸にならせられ、新に張番役九人を命せらる、

附天守番

天守番ハ、江戸城ノ天守ヲ守衛スル職ニシテ、頭四人アリテ之ヲ支配ス、江戸城ノ天守ハ、明暦三年燒失セシト雖モ、其守衛ノ職ハ後マデ之ヲ存セシナリ、

天守番頭

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數 幷組支配

一御天守番之頭　四人○又見二官中秘策、吏徵一、

〔柳營秘鑑三〕御留守居支配　御天守番之頭

〔營中御日記十四〕寛永十四年六月二十三日、御天守番之頭、內藤甚右衛門、去十九日死去之由、

〔吏徵別錄下〕布衣以下御目見以上 御天守番頭　寛永十六年己卯三月七日、中根喜四郎江戸御殿守御○殿守、大猷院殿御實紀作二天守一、番頭とあり、○中略　寛文十一年辛亥正月廿七日、御役料百俵、　天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、　享保八年癸卯六月十八日、四百俵高、

〔享保集成絲綸錄一〕延享元子年六月

當時殿中席書〇中略

燒火之間〇中略　御天守番之頭

〔憲教類典三ノ二十六〕年號月日無之

御料理之席書　御臺所三之間〇中略　御天守番之頭

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十二日、諸役人の役料を加祿として給る、〇中略　天守番頭〇中略　百俵也、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

諸役人、役柄に不應、小身之面々、〇中略　御役勤候內、御足高被仰付御役料增減有之、別紙之通相極候、

此旨可申渡旨被仰出候、〇中略

四百石ゟ內は、四百石高に可被成下候、　御天守番之頭

〔吏徵下御目見以下〕御天守番四十人　頭支配　百俵持扶持高　正月六日御目見　躑躅間、上下役、

〔大概順〕御目見以下大概順

百俵持扶持　御譜代席　上下格　御天守番

〔明良帶錄外篇〕御天守番百俵高

家筋のもの、又は勤年數久敷、御褒美にて此場へ來る、老衰場也、亦は其上の場所勤、風聞宜敷者昇る、小普請よりも高の者は御入人となる、隔年靑指獻上にて御目見、俗二半以上席といふ、下番も上番に準じ知るべし、

〔營中御日記三〕寬永三年五月七日、御天守番宮重作兵衞、數年之勤ニ付、息二番子久左衞門被召出小十人組被仰付之、

〔吏徵別錄下御目見以下〕御天守番　寬永十六年己卯閏十一月七日、武州蘆田七九衆之內三十餘人、御殿守番被仰付之、按に、此年八月十一日御城炎上、御殿守は殘れりし也、　同十八年辛巳十一月

天守下番

十五日、蘆田武州乘十八人、駿州にて本知并御切米如前被下候、享保九年甲辰七月十三日、百俵高、寬政三年辛亥二月二日、向後正月六日御目見可被仰付旨、被仰出之、

〔泰平年表嚴有公〕明暦三年正月十九日、御本丸二丸三丸御天守炎上、慶寬要錄に、十八日午刻北風烈敷、本郷丸山本妙寺より出火、翌十九日朝辰刻消、同日午中刻、小石川新鷹匠町ゟ出火、同夜戌刻麹町七丁目より出火、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共ニ、御增高被下候間、自今支配之內ゟ、格別之儀も無之候はゞ、御足米願申出間敷候、

右之趣、向々江可被達候、〇中略

百俵高持扶持之儘　御天守番

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高并役扶持、〇中略

百俵高五人扶持　御天守番

〔柳營沙汰書三〕慶應三年正月十七日

丹波守殿　御目付江

御天守番勤番之御番所、向後御庭番兼勤被仰付、御天守番下番エ勤番候御天守臺脇ノ御門ハ、向後御休息御庭ノ者エ兼勤被仰付候間、御目付エ申談、靜寬院宮樣、天璋院樣、御用人御休息御庭ノ者支配ヘ引渡候樣可被致候事、

右之通相達候間、可被得其意候事、

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料〇中略

御天守番頭（四百石ゟ内は四百石之高）（平番十人下番六人宛）

〔吏徴 下 御目見以下〕御天主下番二十一人　持高　御譜代場

〔憲教類典 二ノ十四 御抱席〕寶暦五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付

前々御譜代と相定取扱来候場所、左之通御座候、〇中略

御天守下番

富士見寶藏番頭

〔附〕富士見寶藏番

富士見寶藏番ハ、江戸城富士見寶藏ノ番人ニシテ、番頭八人アリテ之ヲ支配ス、

〔柳營秘鑑 三〕御留守居支配

一 富士見御寶藏番之頭

〔柳營秘鑑 四〕諸役人員數并組支配

一 富士見御寶藏番之頭　八人

〔吏徴 上 御目見以上〕富士見御寶藏番頭四人　御留守居支配　焼火間　四百俵高

〔吏徴別錄 下 布衣以下御目見以上〕富士見御寶藏番之頭　寛永十六年己卯三月七日、有田九郎兵衛江戸御土藏番頭とあり、寛文十一年辛亥正月廿七日、御役料百俵、天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、元祿三年庚午三月廿五日、御寶藏番頭二人役、同十五年壬午三月十五日、兩番頭打込勤時に、富士見番頭四人、御寶藏番頭二人、合六人、

〔台德院殿御實紀 二十五〕慶長十九年二月六日、此日土藏番坂部四郎左衛門重宗死して、其子九郎右衛門宗次家をつぐ、

〔常憲院殿御實紀 四十五〕元祿十五年二月十五日、この日百人組持弓筒先手、西城留守居、同裏門、富

士見寶藏番の頭、各交替して局を曠すべからずと仰出さる、

〔憲廟實錄 四〕天和二年四月二十二日、諸役人の役料を加祿として給る、○中略寶藏番頭、富士見番頭百俵也、

〔常憲院殿御實紀 二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略富士見番の頭は百俵、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保八卯年六月

諸役人役柄に不ㇾ應小身之面々、○中略御役勤候內、御足高被二仰付一御役料增減有ㇾ之、別紙之通相極候、此旨可二申渡一旨被二仰出一候、○中略

四百石ゟ內は、四百石高ニ可ㇾ被二成下一候、　富士見御寶藏番之頭

〔享保集成絲綸錄 一〕萬治二亥年九月

新御殿付而諸士着座之席、以二壁書一被二仰出之一所謂、○中略

一躑躅之間北ゟ二之間○中略　御寶藏番頭

〔享保集成絲綸錄 一〕延享元子年六月

當時殿中席書○中略

燒火之間○中略　富士見御寶藏番之頭

〔憲教類典 三ノ二十六 殿中〕年號月日無ㇾ之

御料理之席書○中略

御臺所三之間○中略　富士見御寶藏番之頭

〔常憲院殿御實紀 四十五〕元祿十五年三月十五日、富士見寶藏、兩番を合せて、兩番所をともぐ\つとむべしと仰出さる、

富士見寶藏番

〔柳營沙汰書 三〕慶應三年正月十七日

丹波守殿　　　御目付江

今度富士見御寶藏番之組頭共御廢止相成候ニ付、紅葉山御寶藏入口　門之儀ハ、向後御書物同心ニテ勤番候樣可ㇾ被ㇾ致候、尤御留守居目付へ可ㇾ被ㇾ談候事、右之通林大學頭、林式部少輔、坂井右近將監へ相達候間、可ㇾ被ㇾ得二其意一候事、

〔吏徵別錄 御目見以下下〕富士見御寶藏　天正十年壬午、於二三州一被二召出一高木九助支配ニ成、慶長六年辛丑、同人武州忍御城番被二仰付一候付、忍江相越、寛永中江戸江罷出、御寶藏番被二仰付一二十人、

〔明良帶錄 外篇〕富士見御寶藏番 百俵高

非常の心得第一也、御天守番と同樣たるべし、下番は御目見なし、

〔大猷院殿御實紀 七十五〕慶安二年八月二十九日、步行組頭富士見番等より廣敷番命せらるゝ者七人、こは、年久しく精勤する故、御心安く思召れ、要樞の番所を命せらるゝ旨傳へらる、

〔吏徵 御目見以下下〕富士見御寶藏番六十人　頭支配　百俵持扶持高　一組世話役一人、三人扶持、　正月六日御目見　元祿十五年壬午三月十五日打込勤　躑躅間、上下役、

〔吏徵別錄 御目見以下下〕富士見御寶藏番　寛永十六年己卯三月七日、始置二御土藏番一、　元祿十五年壬午三月十五日、兩番打込勤、組合六　享保九年甲辰七月十三日、百俵高、　寛政三年辛亥二月二日、向後正月六日御目見可ㇾ被二仰付一旨被二仰出一之、　同五年癸丑正月十八日、每組置二世話役一人一、各役扶持三人扶持、

（富士見番は、天正十八年庚寅十月、關東御入國之節、三州ゟ御供仕江戸に罷下、御殿之內、櫃之間御虎之間二ヶ所御番、深尾播部兼頭に而相勤、慶長十九年甲寅十月廿三日、台德院樣（德川秀忠）大坂表御出馬之砌、堀口富士見御櫓下に御番所出來、勤番被二仰付一、其後追々同列ゟ頭被二仰付一、御寶藏番は、寛永十七年庚辰十月、紅葉山下に御寶藏出來、[illegible]田武州忍三ヶ所之者被二召寄一、御寶藏番被二仰付一、御心易被二思召一候付、頭は不ㇾ被二仰付一、後年奉ㇾ願、同列ゟ頭被二仰付一、右番所書留之趣也、）

頭書、或說富士見番ハ、元三州百騎衆ト唱、御入國之節御供關東江下、又云、慶長七年壬寅十二月、武州忍城定番十八人被命、寬永十年癸酉、松平伊豆守忍城拜領、同十七年庚辰十月、忍之城番江戶江被召、紅葉山下御寶藏番被仰付、〈廢政私記〉

〔享保集成絲綸錄三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共ニ、御增高被下候間、自今支配之內ゟ、格別之儀も無之候はば、御足米願申出間敷候、

右之趣向々江可被達候、〇中略

百俵高　御富士見寶藏番

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高并役扶持、〇中略

百俵高五人扶持　御富士見寶藏番

富士見寶藏下番

〔吏徵御目見以下〕御富士見寶藏下番二十人　貳拾俵貳人扶持高　組頭二人役料十俵　御譜代場　寬永中始置

〔憲教類典二ノ十四御抱席〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付

前々御譜代と相定、取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

御富士見寶藏下番

古事類苑

官位部六十二

德川氏職員十一

詰衆 奥詰 奥勤 併入 談伴 伽衆

將軍ノ近侧ニ候ズルモノニ、詰衆、奥詰、談伴、伽衆等アリ、詰衆ハ德川氏ノ初世ヨリ譜代ノ大名ヲ選ビテ之ニ補シ、慶應ノ末年迄絕エタルコトナシ、奥詰ハ亦譜代外樣ノ大名ヲ以テ之ニ補シ、隔日交番ニ上直シテ、山水間ニ伺候セシム、元祿ノ初年始テ之ヲ置キ、寶永六年之ヲ廢セリ、談伴ハ廣ク老練ノ徒ヲ選ビテ之ニ補シ、將軍ノ談話ニ侍セシム、元和二年始テ置ク所ナリ、伽衆ハ將軍或ハ世子ニ侍スルモノニテ、少年ヲ之ニ補シ、十六歲以上ノ者ニハ役料三百俵ヲ給ス、

〔官中秘策二十五〕諸大名役之分

一御詰衆　凡三十二人

〔憲教類典三殿中ノ二十六〕年號月日無之

平日御役所席、泊御番御夜詰之內席、　雁之間〇中略　詰衆

〔常憲院殿御實紀三十一〕元祿八年三月七日、けふ令せられしは、詰衆、奏者番、寺社奉行、詰衆並之輩、今より後、朝會の日、病あるか、又喪制にてまうのぼらざるは、直月の老臣へ其旨告べし、

〔東照宮御實紀七〕慶長八年、此年黃門秀秋に仕し矢橋嘉兵衞忠重、〇中略采邑五百石、近江國矢橋村舊宅の地をも給ひ、詰衆に加はる、

詰衆並

〔藩翰譜六土屋〕將軍家〔○德川家光〕御代知召して○初め、譜代の大名撰ばれて詰衆を定めらる、民部少輔利直、〔○土屋〕其撰に入られたり、

〔藩翰譜七上堀〕式部少輔直景、〔○中略〕寬永八年九月、町奉行職に補せられ、同き十五年、御詰衆になされ、寬永八年十月十日致仕し、入道して宗三と號す、

〔慶應三年武鑑〕御詰衆　雁之間

十万石、阿部長吉郎、　八万石、土井大炊頭、　七万七千八百五十石、戸田土佐守、　五万石、水野和泉守、　四万石、土井能登守、　五万三十七石、太田總次郎、〔○以下十八人姓名略〕

〔官中秘策二十五〕諸大名役之分

一詰衆並　凡五十人

〔寶永三年武鑑〕御詰並　菊之間御緣頰

二万石、保科兵部少輔、　內藤若狹守　一万二千石、井上筑後守、　二万石、板倉賴母、　一万二千石、酒井隼人、　壹万石、戸田淡路守、　壹万石、永井能登守、　壹万石、堀式部、　壹万石、松平下野守、〔○以下二十七人姓名略〕

〔慶應三年武鑑〕御詰並　菊之間御緣頰

二万二百五十石ヨ、安部攝津守、　二万石、酒井下野守、　二万石、板倉攝津守、　一万三千五百二十石ヨ、渡邊丹後守、　一万二千石、酒井銈次郎、　一万石、戸田淡路守、〔○以下十九人姓名略〕

○

奥詰

〔吏徵附錄廢職〕奥詰衆〔萬石以上〕

元祿二年己巳三月朔日、〔或作二四年辛未五月十八日一〕始置、〔七人〕寶永六年己丑正月廿一日、廢二當職一、

〔泰平年表常憲公〕元祿四年五月十八日、奥詰衆を置る、〔松平伊豆守、黑田甲斐守、田村右京大夫、水野出羽守也、後止らる、或云、二年三月朔日〕

初て被置之、

〔常憲院殿御實紀附錄中〕當代〇德川綱吉には〇中略奥詰といひしは、山水間に伺公して、めさるゝ時は御前に參りて眷顧を蒙りしなり、

〔甘露叢四十一〕元祿二年三月二日、新規奥御詰被仰付、松平越中守、水野美作守、奥平美作守、松浦肥前守、相馬彈正忠、五日、奥御詰、松平越中守、水野美作守ト、奥平美作守、松浦肥前守、相馬彈正忠ト、隔日可相詰由被仰付、

〔常憲院殿御實紀十九〕元祿二年三月四日、奥詰の輩、隔日上直すべしと命ぜらる、

〔寶永三年武鑑〕奥御詰

七萬石、松平飛驒守、　七萬四千石、鍋島紀伊守、　一萬石、柳生備前守、

〔文昭院殿御實紀一〕寶永六年正月二十一日、松平飛驒守利直、鍋島紀伊守元武、柳生備前守俊方、奥詰をゆるされ、原班に復す、

談伴

〔台德院殿御實紀附錄三〕當代〇德川秀忠御談伴といひしは、そのはじめ織田豐臣兩家に仕へて、其後駿府に勤仕せし輩、かの府下安西に宅地を賜ふ、よてその頃、此人々を安西衆と稱しけるとぞ、此輩はみな累年武功の者どもなれば、其外にもとより江戸に在府せし徒の中にて、耆宿の徒を撰みて其擧にあてられ、直日を定め、日々かはるがはる御前に伺公せしめらる、その人々は丹羽五郎左衛門長重、立花左近將監宗茂、細川玄蕃頭興元、三好因幡守一任、猪子内匠助一時、堀田若狹守一繼、佐久間備前守安政、同大膳亮勝之、堀丹後守直寄、戸川肥後守逵安、九鬼長門守守隆、脇坂淡路守安元、毛利伊勢守高政、市橋下總守守長、谷出羽守衛友、青木民部少輔一重、蒔田權佐廣定、平野遠江守長泰、能勢伊豫守賴次、宮城丹波守豐盛等なり、日野大納言輝資入道惟心、山名中務大輔豐國入道禪高、朽木信濃守光綱入道牧齋、佐久間駿河守正勝入道不干、前場吉右衛門勝秀入道半入、今

伽衆

大路延壽院玄朔等は、殊さら老耋なれば優待せられ、直日を定めず心まかせにまうのぼり、御談話に侍せしめられ、渡邊山城守茂、松下石見守重綱、近藤石見守秀用、眞田隱岐守信昌、横田甚右衛門尹松、初鹿野傳右衛門信久、久世三右衛門廣宣、坂部三十郎廣勝、儒役林永喜信澄、醫員佃玄臺某、田村安栖長有は、毎夜出仕して御談伴たるべしと命せらる、この後大猷院殿〇徳川家光御代となりても、その員缺る時は、また外の耆宿の徒めしくはへて、絶えず御前に伺公せしめ、談話ども聞しめされぬ、そも〳〵高貴の方々は、とにかく朝夕近臣とのみ狎接せられて、嚴師友の益を得玉ふ事おはしまさず、自ら人情世態にもうとく、放慢に成行ものなれば、かゝる徒めし出て、己がしゝ古今文武の事ども、はゞかる所なくかたらしめて聞しめせば、古今の治亂盛衰、世間の休戚利害までも、あまねくしろしめし、おのづから智識をもひろめ玉ひ、政務にも裨益ある事おほかたならずとおぼしめされ、かゝる事ども設置玉ひしならん、この御談伴のはじまりは、元和二年十二月の事なり、

〔大猷院殿御實紀二十一〕寛永九年九月廿二日、安藤右京進重長、御夜談の伴にくはへらる、

〔大猷院殿御實紀三十六〕寛永十四年十月廿七日、増上寺以傳を、御談伴にくはへらる、

〔大概順〕御役大概順

御役料三百俵 但十六歳以下不被下

御伽

〔明良帶錄餘篇〕御伽衆　是は弱冠にて前髮勤奥向衆之總領多し、

〔大猷院殿御實紀十二〕寛永五年九月十二日、先に大久保相摸守忠隣が事に坐して、御勘氣蒙りし山口備前守重政は、宗愚と號し、蟄居してありしが、その子半兵衛弘隆、二子半左衛門重恒と共に御ゆるしありて、修理亮と改め、もとのごとく御伽に加へらる、

〔大猷院殿御實紀五十五〕寛永二十年、このとし歩行頭能勢市十郎頼永が子、龜太郎頼寛は、若君〇徳

川綱家の御伽衆となり、○下略

〔浚明院殿御實紀八〕寶暦十三年十二月廿二日、小普請組支配小笠原越中守長恒が子長橘胤昌、使番室賀源七郎正之が子源太郎正頼、寄合岡部主殿長説が子岩三郎長貴、若君(家基○徳川)の伽衆となる、

〔嘉永明治年間録七〕安政五年六月廿五日、將軍家定、紀伊宰相ヲ以テ養子ト爲ス、

此日、於御座間温恭公紀伊宰相殿御對顔御養君仰出され、○中略大久保清三郎御伽へ○中略被仰付候、

〔吏徽附録内職〕御小性組番頭格奥勤二人　若年寄支配　三千石高　年月日始置

〔安政六年武鑑〕御小性組御番頭格御奥勤　三千石高

五百石、戸川播磨守安清、　三千石、村松備中守武備、　三百俵、薬師寺筑前守元眞、

〔元治元年武鑑〕御小性組御番頭格　御奥勤　三千石高

二百俵、高井兵庫頭實孝、　五百石、小笠原攝津守、

〔吏徽附録内職〕新番頭格奥勤二人　若年寄支配　貳千石高　享保十四年己酉三月朔日始置

〔吏徽附録世職〕小南市郎兵衛大御番格奥詰

若年寄支配　高現米八十石　寶暦三年癸酉三月十九日以來代々役　勤金十兩　伜鉞次郎、小十人格奥詰、百俵十人扶持、

〔安政五年武鑑〕大御番格奥勤

小南鉞次郎

〔吏徽附録内職〕西丸御小性組番頭格奥勤一人　若年寄支配三千石高

小性頭取

職員　職掌

小性ハ、中奥小性ニ對シテ之ヲ奥小性トモ云フ、數十人アリ、常ニ將軍ニ昵近シテ、其雜務ニ從ヒ、將軍ガ大奥出入ノ際ハ、必ズ其送迎ヲ爲ス、若年寄ノ支配ニ屬シ、從五位下ニ敍シ、五百石高ノ職ニシテ、千石以下ニハ役料三百俵ヲ給ス、慶應三年役金給與ノ時ハ、六百兩充ヲ給シ、千石以上ノ者ニハ、其半額ヲ給セリ、頭取數人アリ、其資格待遇凡テ小性衆ニ同ジ、抑ゝ此職ハ、德川幕府創立ノ當時ヨリアリシガ、文久慶應ノ頃ニ至リ、頻リニ減員シテ、慶應三年ニハ、僅ニ八人トナルニ至レリ、西丸ニモ亦小性アリ、

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一御小性頭取衆　六人

〔德川禁令考二十奥長官〕元治元子年五月廿四日

　奥向御改革ニ付御書付

一以來奥向定員六拾人と相極候事

　但右之內、御小性頭取三人、平拾五人、

右是迄兩頰之處、向後三頰ニ被仰付、一頰頭取壹人、平五人ツヽ之事、右ニ而御用向手廻り兼候節ハ、御小納戸より人物之無極打交、御用可被仰付候、

〔明良帶錄餘篇〕御小姓頭取

御用御取次之嫡子か、御側衆之嫡子か、又は奥向吹擧之仁か、其働取廻し相應之仁爰に昇る、御小性衆之差引取締、諸御用向、君邊御道具類の改め也、其外御用多也、

俸祿

〔青標紙三編〕一御小性頭取は、大君に咫尺し奉りても別に威權なし、その祿も御小性と同樣ニ而、

只頭取と云ふ名目あるまでなり、

補任

〔元治元年武鑑〕御小性頭取衆

千石以下御役料三百俵、五百石以下五百石高、

〔吏徵上布衣以上〕御小性二十八人不同○中略　頭取三人　御役金百兩

〔台德院殿御實紀五十八〕元和八年十二月朔日、小性田中主殿頭吉官、小性頭になり、○下略

〔營中御日記二〕寛永二年三月六日、阿部豐後守○忠秋去三日御小性御近習頭被仰付候旨、於御前御直被仰含、○又見二東武實錄一

〔明和元年武鑑〕御小性頭取衆

五百石餘、天野阿波守、　千石、三宅采女正、　四百石、菅沼上總介、　二千石、大岡主水正、　五千五百石、橫田筑後守、

〔慶應三年武鑑〕御小性頭取衆

二百俵、新村主計頭、　百俵、成田下總守、　百俵、荒井筑後守、　千八百石、山高石見守、　百俵、吉松式部少輔、

小性衆名稱

〔貞享三年武鑑〕御扈從衆

〔倭訓栞中編古八〕こしやう　もと小兒を小姓といひしによりて、侍童の稱となれり、

〔武家職號〕小姓

元來扈從と書也、○中略又扈從は隨侍の義也といへり、主君の後に陪從するを云、志かれども今小童をさして兒小姓と云、又是よりして大小姓中小姓の唱有、按ずるに、姓とは廣く人をさしていふ意も有べし、小は謙退の辭なるにや、當時武鑑に、御扈從衆、中奥小性衆、御小性組、文字の書替尤の事也、一說に小十人も扈從人の義にて、御供に從ふ義也といへり、

職員職掌

〔武家名目抄 職名部附錄九〕按、小姓組とは扈從組にて、主將之左右に扈從する人をいへり、或は馬廻組ともいへり、馬の左右に近仕すればなり、諸家のならはしにて、小姓組とも馬廻組ともいへど、その職はことならず、

〔營中御日記 二〕寛永二年四月四日、今度日光御成ニ付、奥。御。小。性。、表御小性衆へ金子被ㇾ下、

○按ズルニ、奥小性ハ卽チ小性ニテ、中奥小性ヲ表小性ト云フニ對シテ云ヘルナリ、

〔吏徵 上布衣以上〕御小性二十八人 不同

〔紳書 下〕一嚴有院殿〇德川家綱の御代の頃迄は、〇中略御小性も只十二人にて、六人づゝ宿直す、

〔明良帶錄 餘篇〕御小姓

君邊第一の勤仕にて、人品を撰ぶ事第一也、御伽衆より昇るもあり、又御小納戸より昇る仁も有り、大奥御入之節御錠口御供、此節女﨟衆御出迎故、入り交る事あり、其外御手元御道具等を相渡す、還御之節御出迎に出居る、大奥にて御酒宴にて時刻延び、或るは御中﨟方御用にて還御御手間取らせらるゝ時は、御年寄女中還御を伺ふといへ共、其儘御延刻にて、夜明けて還御之節、御錠口にて御小性衆へ何時成る哉と上意の時、只今九ッ打申候と申上る事此場の掟なり、御錠口は九ッ締りゆゑの儀也、吹上御庭御船遊びの節楫取之役を勤む、且又枕席御用之仁は、他の出合親類たり共、猥りに會合をゆるさず、古は御夜具の拜領ありしが、當時は金子にて濟なり、安永の柳生播磨守、天明の內藤河內守等也、此場より表へ出るには、段々の級等二段あり、表役の取締有ため其役へ出て、奥御用にて不時に召して御尋ねの事有り、當時はなし、享保の佐野右兵衞尉、近比の石谷周防守は、御臺樣の上意に、周防守は能き男振りなりと仰有るに依て表へ出たり、加樣の次第意味有り、奥向の事は、少々謂れあれば爰に述べ難し、

〔拾遺柳營秘鑑 三〕一卯〇享保八年九月朔日、御小姓衆御番代、向後七ッ時代りに罷成候、

〔大猷院殿御實紀十九〕寛永九年正月十二日、尾紀兩卿に、小性本多美作守忠相、小性組與頭太田釆女正資家、御使して鶴をつかはさる、

〔東職記聞一〕扈從衆　從五位下

扈從衆、小納戸衆、所謂中涓之任也、撰麾下中可然人而被召仕也、又扈從衆中可然器用之人、被登用而補側衆義略有之也、

〔常憲院殿御實紀附錄中〕當代〇德川綱吉には、萬石以上の者を御側近くめしつかはれ、小性とせられしものあまたあり、又小性つとめながら祿秩加へられ、萬石にのぼりしもあり、

〔吏徴別錄上布衣以上〕御小性　元文三年戊午九月、火消役次席、緣組申渡之時より定る

〔吏徴上布衣以上〕御小性二十八人不同　若年寄支配　諸大夫　五百石高　御役料三百俵千石以下

部屋住三百俵、御役料同斷、　大番頭以上部屋住五百俵、役料無之、

〔常憲院殿御實紀十九〕元祿二年二月二十三日、小性、小納戸、次番、千石以下の輩には、官料三百俵づつ給ふべき旨仰下さる、

〔憲教類典二ノ五御役〕享保八癸卯年六月十八日

御小性

五百石ゟ內は、五百石之高に可被成下候、

御役料只今迄之通、千石ゟ內は三百俵、

但部屋住之者は、只今迄之通、御役料御切米可被下候、次男に而も同斷、

〔有德院殿御實紀附錄三〕享保八年六月十八日、諸職の有司、俸米の定額を定らる、これを足高といふ、この日近習の人々も、五百石にたらざるものは、給米をまして、五百石の數にみてらるべしとなり、是より先、同職の內はるかに微祿なるものもうち交りければ、祿少き者は費用たら

ざるにくるしむこと多かりしに、かくおもはずなる御惠によりなべてかしこみ奉る事大かたならず、今に於てこの御德をぞあふぎける、後にきけば、此事申出せしは、小納戸大島近江守以興が父古心入道(初稱大島伴六守正)なりといへり、これまで父にかゝりて家にあるものを近習となさる、時は、別に三百俵の祿賜ひ、官料も亦三百俵を賜ふことなれば、すべて事たるといへども、家つぎし者の祿少きは官料のみのたすけなれば、勤仕にたえぬ人おほし、願くは五百石より下つかたのものを近習となされんには、別に給米をたまはらむことをと、うち〳〵聞え上けるとぞ、

〔吹塵錄(三十一/德川氏)〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高御役知、御役料御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

御小性

一金六百兩

高千貳百石以上之者江は半減

但御切米高千俵以上之者江は不被下、

同三百俵以上之者江は半減、

〔明良帶錄(餘篇)〕御小姓

(頭書)官位被仰付候節、千石以下之者へは百兩宛爲官金被下之、但部屋之者へは、父之高何程大高ニても、百兩之官金は被下之、千石以上は自分官金なり、　御小性千石以上は、金三拾兩勤金、　千石以上以下共、一ヶ年皆勤、御手自時服二被下之、右は一日引込ニ而も不被下事、但忌中産穢は御構無之、同半年皆勤、但以前は時服十二之處、當時は金拾兩ト時服二、右は七月盆前被下之、但引込御番

任免

三十迄は被_レ下_レ之、御番數三十一ニ成候得バ不_レ被_レ下候事、

〔東照宮御實紀七〕慶長八年、此年○中略長田喜兵衛吉正養子十大夫重政、飯塚兵部少輔綱重二子半次郎忠重、時に十二歲○中略右大將殿御方○德川秀忠に召出され、重政は納戸番、忠重は小性となる、

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年六月十六日、將軍家○德川家茂供奉ノ小性小納戸免役、
御小性內藤豐後守、關口筑前守、石川備後守、藤井若狹守、○中略右御役御免、勤仕並寄合被_二仰付_一之、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十一月六日、御小性二十九人ヲ減ズ、
御小性二十九人免職、勤仕並寄合命せられ、跡八人殘るのみ、

〔慶應三年武鑑〕御小性衆
百俵、千田要、　百俵、田村佐十郎、　百俵、中島泰之助、　百俵、中村錠次郎、　百俵、村山久五郎、　百俵、荻澤箴之助、　百俵十人扶持、山本四郎、　百俵、小路三之助、

雜載

〔紳書下〕一昔は御小性御小納戸などいひし人々、多分は嫡子をば召仕はれず、二男より末の子共を召仕はれしといふ、是は譜代の面々の嫡子、若事をあやまちて御勘當もあらば、其家の斷絶せむ事をきらはせ給ひし故なりと申す、忠孝の至也といふべし、

〔爲政錄例書〕一御小性方同役、番中は勿論、登城退出共、途中ニ於て馬上にて目禮之事、

〔東職記聞二〕監國君職
扈從衆、至_二二三十人_一、　從五位下

西丸小性

〔吏徵上布衣以上〕西丸御小性廿五人不同　若年寄支配　諸大夫　五百石高　御役料三百俵、千石以下部屋住三百俵、御役料同斷、　大番頭以上部屋住五百俵、御役料無之、　頭取三人　御役金百兩

〔文恭院殿御實紀二十八〕寬政十二年正月二十八日、西城小性頭取助杉浦長門守勝倖、頭取となる、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月九日、大納言殿御方○德川家光世子家綱の小姓石川市正總氏、松平

名稱 職員

伊勢守直綱、松平采女信興、松平主水正朝、堀田久太郎正俊、戸田山三郎氏春、岡部左京豊明、松平三之助信重、松平求馬助英信、松平織部直政、三浦長五郎共次、永井大學直敬、青山喜右衞門幸道は、外殿にてつかうまつるべしと命せられ、菅沼主税定賞、牧野兵部直成、大久保木工助忠朝は、供御の事つかふまつるべしと命せられ、蜂須賀萬之助隆重、山内伊右衞門一安、毛利刑部元知は、朝會の時のみまうのぼるべし、土井兵庫頭利長、土井能登守利房、増山友之助資祇、阿部吉兵衞正春、堀田虎之助正英、水野主殿良全、秋田熊之丞季久、土井虎之助利直、本多式部利朗、野々山彌二兵衞秀元、野々山左近某、榊原右京清次、榊原左太郎宗好、市橋吉兵衞長宗、大久保十藏某、松平宇右衞門康勝、石川助十郎乘政、松平牛之助乘員は、奥小姓の直廬に伺候してつかふまつるべしと仰付らる、

〔塵塚談下〕享保十九年甲寅三月十三日

主計頭總領藪千太郎　御小性組　主殿頭總領田沼龍助　小十人組　内膳正總領岩本式部

右西丸御小性被召出、御切米三百俵被下、御役料並之通被下之、

中奥小性

中奥小性ハ、奥小性ニ對シテ又表小性トモ云フ、數十人アリ、專ラ中奥ニ伺候シテ、儀式アル時ハ配膳役送ニ從ヒ、其他諸般ノ雜務ヲ掌ル、若年寄ノ支配ニ屬シ、從五位下ニ敍セラル、蓋シ此職ハ、高祿ヲ食メル者ノ家督トナル後ニ、奥勤ヲ企望シテ出仕スル所ニシテ、本祿ノ外ニ別ニ役料ナシ、但部屋住ノ者ヘハ之ヲ給セシコトアリ、此職元和二年ニ始マリ、慶應二年ニ廢ス、

〔吏徴上 布衣以上〕中奥御小性廿五人 不同

〔營中御日記 二〕寛永二年四月四日、今度日光御成ニ付、奥御小性、表御小性衆ヘ、金子被下、

○按ズルニ、大奥ノ小性ヲ奥小性トモ云ヘルニ對シテ、中奥小性ヲ表小性トモ云フナリ、

〔東職記聞 二〕中奥扈從、無定員數、以諸侯庶流家萬石以下重代番頭之家流者置之、掌年始諸禮節、貴族之配膳御酌役送等之職也、凡於表之御座、當職頗爲昵近也、

〔明良帶錄 前集〕中奥御小姓

朝鮮人來朝、御法會、御新葬之節、人數不足なれば大勢被仰付、勤向は、正月御規式御給仕、御簾之役、公家衆等參向之節、勾當内侍差上物、奥御小性持出る、高家披露、中奥御小性引之、平日は、一組八九人之詰番なり、御成御供等有り、

〔營中御日記 九〕寛永九年六月廿七日、土屋金彌、瀧川大學、御膳番被仰付候、

○按ズルニ、此二人ハ、此月四日中奥小性トナル、下文補任條收ムル所參看スベシ、

〔嚴有院殿御實紀 四十二〕寛文十年七月二十二日、中奥小性小出彌三郎守里、渡邊半七郎綱高、船越百助景通、朝岡權三郎直國、松平半十郎勝郷、柳生又右衛門宗在、いまよりのち、三番に分て中奥に宿直すべしと命ぜらる、

〔教令類纂 二集六十五〕享保七壬寅年十月七日

中奥御小姓、御鷹野之節は、向後兩人宛可罷出候、雲雀、鶉、御鷹野之節は、勝手次第不殘可罷出候、

右之趣申渡候間、可被得其意候、

〔溫恭院實紀 二〕嘉永六年九月二十三日

向後御前御給仕　中奥御小姓　新見豐前守

右被仰付之

〔溫恭院實紀八〕安政元年十二月十九日

一中奥御小性 同御番江

何れも勤向之儀は御用少、其上若年之者も多く候間、向後學問所御座敷講釋に出席聽聞致し、且學問修業之儀厚心掛、何御役被仰付候共、一廉御用立候樣可被心得候、委細之儀は、林大學頭、林圖書助、幷鵜殿民部少輔、松本十郎兵衞江可被談候、

〔昭德院實紀二十三〕文久二年九月二十二日

御目付江

遠御成之節、中奥御小姓、同御番御供之儀、向後御差止之積相達候間、可被得其意候、

敍位

〔東職記聞二〕中奥扈從　從五位下

資格

〔吏徴上布衣以上〕中奥御小性　若年寄支配　山吹間　諸大夫　持高　部屋住無足

〔明良帶錄前篇〕中奥御小性持高 若支山吹

是は高持之奥望之仁、家督後之仁之出る場にて、若輩之人多し、御役と唱へず、御奉公といふ、駿府御城代の嫡、御側衆、伏見奉行、大番頭等之嫡之部屋住勤之仁もあり、諸大夫の場なれど、三人は無官なり、

〔台德院殿御實紀四十四〕元和二年十二月、この月、〇中略松平和泉守家乘が二子內匠助知乘、中奥小姓命せられ、廩米五百俵賜ふ、

俸祿

〔天明集成絲綸錄三十八〕明和五子年九月

御勘定奉行江

中奥御小姓　戸田但馬守

六千貳拾貳石餘

右知行所惡敷候ニ付、願之通、御奉公相勤候內、御藏前御引替被下候間、可被得其意候、

沿革任免

〔東職記聞 二〕中奧扈從
大給家系譜曰、元和二年十二月、台德院殿〈○德川秀忠〉召我宗封岩村侯之弟松平新八知乘於御前、而被補中奧詰、且給俸米五百苞、同六年、叙從五位下、任但馬守也、〈初內匠頭〉當職之號、先是無所見、則始于此歟、
〔營中御日記 九〕寬永九年六月四日、大久保總三郎、土屋金彌、瀧川大學、渡邊大學、神尾內匠、右中奧にて可召仕旨、於御黑書院而申剋信濃守、伊賀守、伊豆守、大藏少輔、豐後守、加賀守列座申渡之、　七月七日、榊原右京、朝岡權三郎、中奧可被召仕旨被仰出、
〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年八月四日、中奧御小性、同御番士ヲ廢ス、
中奧御小性は勤仕並寄合に、中奧御番は勤仕並小普請、

中奧番

中奧番ハ數十人アリ、中奧ニ伺候シテ、中奧小性ノ指揮ヲ受ケ、其雜務ニ從事ス、若年寄ノ支配ニシテ三百俵高ノ職ナリ、慶應二年ニ之ヲ廢セリ、

職員職掌

〔吏徵 上御目見以上〕中奧御番十七人〈不同〉
〔東職記聞 二〕中奧番衆、無定員數、
職掌准于右〈○中奧扈從〉也
〔明良帶錄 後篇〕中奧御番〈是より布衣以下三百俵高〉
正月は御用多し、總て中奧御小性より通達事、又御番よりも、相互に通達す、
〔中奧御番勤方〕申合之覺
一御條目并追々被仰出候御書付之趣、一統堅相守可申事、

一仲ヶ間勤方之儀、不レ依二何事一心付候儀、新古之差別なく、相互ニ無二遠慮一可二申談一候事、○中略

一取締之儀は、寛政十午年十一月五日、山本平六郎、水野右近、土方主膳、松浦大膳、土屋長三郎へ、於二山吹之間一堀田攝津守殿御逢有レ之、以來仲ヶ間取締之儀共心付、都て口易き物故、右體無レ之樣、五人申談、無二遠慮一可二申上一旨、尤一類ニ、取締之者一人ツヽ有レ之候樣可レ致段、急渡被二仰渡一候、

一取締五人之內、此上減候とも、其儘にて可二差置一候哉、又は右代之者、御沙汰も可レ有レ之哉、永々一類ニ一人宛、取締之者有レ之候樣にとの御趣意にも御座候はヾ、右之含を以、諸事申談候樣仕度旨、取締之者より御同人へ御內意伺候處、同年同月廿三日、御同人於二同席一松浦大膳へ御逢有レ之、取締之者、永々一人ツヽ、有レ之候方可レ然旨、御同役御評議御一決之段、御內意被二仰聞一候、

一仲ヶ間五類ニ相定候儀ハ、天明四辰年十二月七日、加納遠江守殿江伺濟ニ付、以來仲ヶ間就レ多少、私類增減申間敷候事、○中略

詰番取計方

一詰番之者、御支配方登城、半時早可二罷出一候、

一詰番二人勤迄ハ不レ及二介立一、一人勤ニ相成候はヾ、詰番介順を以介立可レ申事、

但總而表出御之節は、詰番三人有レ之候樣、前日詰番にて可レ致二廻狀一事、○中略

一詰番より殿中御沙汰可レ致二廻狀一候、諸書付は致二緘添一、其外不レ依二何事一仲ヶ間申達儀可レ致二廻狀一候事、○中略

一平日詰番、仲ヶ間賴合、差替、返番、相互之儀不レ苦、尤三方替限之事、○中略

御給仕方取計

一總而御給事之儀は、取締之もの、肝煎、番頭、又は中奧御小性へ掛合可レ申候、○中略

御成一件

一紅葉山御宮江御行列ニ而、公方樣、右大將樣、被レ爲レ成候節、詰番六人有レ之候樣、前日廻狀可レ致事、○中略

一御定式御成之節御供之者、詰番之外四人、星順を以罷出候樣、前日詰番より廻狀可レ致事、○中略

年番月番幷寄合一件

一年番代り、十二月朔日之事、

一當年番、五月迄ニ御役出等致候はゞ、次年番相心得、十一月迄相勤、引渡可レ申事、

但六月ニ至り、御役出等有レ之候はゞ、翌年十一月迄相勤可レ申事、○中略

一年番を以致二進退一候、諸願相伺之儀は、其以前一應仲ケ間可レ及二相談一事、○中略

一三月八月十一月廿一日、右定式寄合は、年番宅にて可レ有レ之候、尤不時寄合は、何れの宅ニても可レ有レ之候、兩樣寄合とも、取締より可レ致二案內一事、

但寄合三度ニ及候はゞ、次年番宅にて寄合可レ致候事、○中略

一寄合之節申合之儀、和熟專一之事ニ候得共、相談之內、席順亂候儀、又は雜談等無レ之樣致、一ケ條每ニ評議相務候樣可レ談事、

一寄合七半時限、可レ致二退散一事、○中略

一寄合之節申合之儀、以來寄合亭主番之もの、御城部屋勤方、諸帳面下ケ置、其筋ニ寄り申合之趣認入、又は張紙下ケ札等致、翌日詰番へ差出、詰番より右申合之趣、廻狀添可レ致候事、

但張紙下ケ札等、年番代之節、致二清書一引渡可レ申事、○中略

一月番は勤順ニ不レ拘、月番順ニ相心得候事、

但年番中は、月番不二相勤一候事、

〔吏徵別錄布衣以下御目見以上下〕中奥御番　寬文十年庚戌七月廿二日、小出彌三郎、渡部半七郎、船

越百介、淺岡權三郎、松平半十郎、柳生又右衞門、右六人三番に、向後中奥御番可ㇾ相勤旨被ㇾ仰ㇾ渡之、

〔文昭院殿御實紀二〕寶永六年四月廿六日、中奥番二人づゝ、本城山吹の間に宿直すべしと仰付らる、

〔溫恭院實紀八〕安政元年十二月十九日、中奥御番江、　何れも勤向之儀は御用少、其上若年之者も多く候間、向後學問所御座敷講釋に出席聽聞致し、且學問修業之儀厚心掛、何御役被ㇾ仰付候共、一廉御用立候樣、可ㇾ被ㇾ心得候、委細之儀は、林大學頭、林圖書助、幷鵜殿民部少輔、松本十郎兵衞江可ㇾ被ㇾ談候、

〔昭德院實紀二十三〕文久二年九月二十二日

御目付江

遠御成之節、中奥御小姓、同御番御供之儀、向後御差止之積相達候間、可ㇾ被ㇾ得ㇾ其意ㇾ候、

資格
俸祿

〔吏徵上御目見以上〕中奥御番　若年寄支配　山吹間　三百俵高

〔明良帶錄後篇〕中奥御番

布衣以下の場なり、〇中略昇進口よし、高の仁なり、勤向よき場なり、

〔元治元年武鑑〕中奥御番衆

三百五十俵、糸原啓之助、　百五十俵、有壁銀次郎、　三百俵、澀江彌之助、　三百俵、堀錠之助、　千五百六十石、森宗兵衞、　五千石、水野主膳、　千五百石、小菅内匠、　千百石、石谷帶刀、　千三百石、加藤右近、　千百石、西尾主稅助、　七百石、鈴木伊兵衞、　三百俵、新井孝太郎、　三百俵、內藤傳左衞門、　二百俵、荒井甚之丞、　千石、小出宗之助、　九百二十石、筒井治左衞門、　九百石、向井喜八郎、　七百石、靑山內膳、　二百俵、大澤主馬、　三百俵、伊東萬世橘、　六千五百石、曾我民部、

沿革
任免

〔大猷院殿御實紀十二〕寬永五年、此年〇中略吏番駒井右京親直子孫三郎親昌、中奥番になり、〇下略

〔東徴別錄 布衣以下御目見以上 下〕中奥御番　寛永十年癸酉十二月廿日、始置十員、同十三年丙子十月廿八日、大久保甚四郎、阿部五郎三郎、大久保市十郎、石川甚十郎、同權七郎、持井左京、六人中奥御番被仰付、〇中略　享保十一年丙午四月十八日、增五員、合十三人

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年八月四日、中奥御小性、同番士ヲ廢ス、〇中略

中奥御番ハ、勤仕並小普請、

奥向番衆

奥向ニ伺候シテ、各ゝ其受持ノ場所ニ勤番スルモノニ、燒火間番、桐之間番、土圭間番、廊下番、近習番、次番、手水番等アリ、

燒火間番ハ百餘人アリ、番頭及ビ組頭之ヲ統轄シテ、毎日交番ニ燒火間ニ伺候ス、番頭ハ若年寄ノ支配ニ屬シ、役料ナシ、此職將軍家康ノ時、始テ之ヲ置キ、寶永六年ニ、一旦之ヲ廢セシガ、天保十三年ニ復タ之ヲ置キ、同十四年、再ビ之ヲ廢セリ、西丸ニモ亦燒火間番アリ、寶永元年始テ之ヲ置ク、

桐之間番ハ數十人アリ、四隊ニ分チテ桐之間ニ交番勤務セシム、若年寄ノ支配ニ屬シ、番料百俵ヲ給ス、但番頭及ビ組頭ハ、各ゝ役料五百俵宛ヲ給セラル、此職天和元年ニ始テ置キ、正德三年ニ之ヲ廢セリ、西丸ニモ亦桐之間番アリ、寶永元年始テ之ヲ置ク、

土圭間番モ亦數十人アリ、數組ニ分チテ土圭間ニ宿直勤番セシム、若年寄ノ支配ニ屬シ、番料百俵ヲ給ス、寛永年中、始テ之ヲ置キ、正保三年、一旦之ヲ廢セシガ、寶永六年ニ復タ之ヲ置キ、享保元年ニ再ビ之ヲ廢セリ、西丸ニモ亦土圭間番アリ、

廊下番ハ、能役者中ヨリ拔擢シテ之ニ補シ、苗字ヲ改メ勤番セシムルモノト云フ、若年寄ノ支配ニシテ、番料百俵ヲ給ス、番頭、組頭アリ、番頭ハ役料五百俵ヲ給ス、此職ハ貞享ノ初年ニ之ヲ置キ、寶永六年ニ之ヲ廢セリ、

其他近習番アリ、繪師、儒者、猿樂狂言師等ヨリ拔擢シテ之ニ補シ、若年寄ノ支配ニ屬ス、元祿五年ニ始テ之ヲ置キ、寶永六年ニ之ヲ廢セリ、又次番ト云フアリ、若年寄ノ支配ニシテ、役料三百俵ヲ給ス、貞享二年ニ始テ之ヲ置キ、寶永六年ニ之ヲ廢セリ、

補載

〔紳書下〕常憲院殿〇德川綱吉御代、久しきに隨て、御小姓衆、御小納戸、坊主、六尺、各何十宛といふ事になりて、其外に、御次番、御廊下番、桐間番、御湯殿番などいふもの出來し程に、凡は奥方に召仕はれし人々、醫師をかけて何百人といふ程の事に及びき、文昭院殿〇德川家宣御代をしろし召されて、御小姓衆御小納戸の外は、皆々とゞめらる、但し土圭の間番衆とかいひて、前代〇綱吉の時、猿樂の役者共の武士になされて、御番衆といひしもの共、彼是五六十人、昔の鏈かけの間に伺候し、猿樂の事を勤たりき、櫻田ゟ御供の衆を桐の間番衆と名付て、表方の土圭の間の外の間の西の方に番所を置る、名は前代の桐の間番衆なれども、其番所も人も皆々改れり、當代〇德川家繼の御始に、桐の間番衆もむかしの如くになりて、土圭の間番人も減じて、三十人計になされたり、

燒火間番頭

〔泰平年表二編三〕天保十三年四月十七日、燒火間番頭へ御達書、　席順之儀ハ、姫君樣方御用人之次と相心得、若年寄支配ニ爲成候事、　毎日老中登城中、一人ツヽ可罷在事、　御番方之者共、組割不申付候間、人數多少ニ不拘、六日目之割合、老中登城、燒火間張紙下ニ相詰候樣被爲申渡候、　御參詣幷遠御成、御供無之事、　其方共、泊番は無之候間、下部屋等不相渡候事、　其方共心得方、御番方勤方等之義は、御目付へ承合、諸事可被取計候、　燒火間にて拜領等之者共、御納戸之方へ相詰候樣可被申聞候、　非常老中登城有之節は罷出、相詰候樣可被致候、　右之通得其意、猶取締等心

付候義は、可被申聞候、

〔吏徵附錄廢職〕燒火間番頭　若年寄支配、寶永二年乙酉閏四月六日、始置四人、西丸同六年己丑十月廿九日廢、　天保十三年壬寅三月二十日、再置八人、姬君樣方御用人次席、　同年五月二十四日、五百俵高、　同年四月十五日、二丸御留守居次席、　同十四年癸卯十二月廿八日廢、

〔東照宮御實紀八〕慶長九年正月十日、柴田七九郞康長、燒火間番頭を命せらる、

〔東武實錄七下〕元和七年、是年富永孫六郞重師、主膳正重昌が男新燒火ノ間ノ御番ヲ勤ム、

〔文露叢二十一〕寶永六年十月廿九日、燒火間番頭四人、寄合被仰付、

組頭

〔吏徵附錄廢職〕燒火間番組頭　持高〇中略　寶永六年己丑十月廿九日廢　天保十三年壬寅四月十五日、再置四人、中奧御番上席、　同十四年癸卯十二月廿八日廢

〔憲廟實錄二十九〕元祿十七年〇寶永元年十二月十二日、書院番、小性組頭、各燒火間組頭と成、

〔文露叢二十一〕寶永六年十月廿九日、燒火間番組頭七人、小普請入、

番衆

〔吏徵附錄廢職〕燒火間御番　持高〇中略　寶永六年己丑十月廿九日廢百四人　天保十三年壬寅三月廿日、再置口人、大御番上席、　同十四年癸卯十二月廿八日廢

〔東照宮御實紀十一〕慶長十年正月十一日、天野孫左衞門久次が子孫左衞門重房召出され、右大將殿〇德川秀忠につけられて、燒火間番を命せらる、

〔營中御日記二〕寬永二年四月五日、燒火之間御番、〇中略金子廿兩宛被下之、是今度日光御參詣、御供徒付而也、右之旨、主計頭傳之、

〔文露叢二十一〕寶永六年十月廿九日、燒火間番衆百三人、大番入、〇又見文昭院殿御實紀

西丸燒火間番

〔泰平年表常憲公〕寶永元年十二月十三日、西丸桐間番、西丸燒火之間番を置る、桐間番六十九人、燒火間番百十六人、番頭五人、組頭八人にて、兩番衆を支配す、同六年十月廿九日、是を廢せらる、或西丸燒火間番を以て、二年四月六日とするは非なり、

〔憲廟實錄 二十九〕元祿十七年〇寶永元年十二月十二日、櫻田の表小性、書院番、小性組、合百四十三人、西丸燒火間番衆となる、

〔常憲院殿御實紀 五十一〕寶永二年閏四月六日、西城桐間組頭菅沼圖書正直、同じ廣敷番の頭神田彌右衞門正秀、甲府定番小林七郎右衞門正秀、窪田勘右衞門正良、共に西城燒火間番頭となる、各役料三百俵給ふ、〇又見二文露叢一

桐之間番頭

〔吏徵附錄 廢職〕桐之間番頭六人　貞享四年丁卯二月廿六日、始置二二人、後四人、又六人、〇中略　正德三年癸巳五月十八日廢　若年寄支配

〔泰平年表 常憲公〕天和元年七月、初て桐間番を置る、始番頭組頭なし、筆頭之者指揮す、貞享二年二月廿六日、始て番頭を置る、正德三年五月十八日此番を廢せらる、

〔甘露叢 三十四〕貞享四年二月二十六日、奧山藤十郎、米倉六郎右衞門、爲二桐間番頭一、

〔寶永三年武鑑〕桐之間御番頭　三千石以下御役料五百俵ヅヽ、

千七百石、前田大隅守、　八百石、遠山隼人正、　千石、瀧川讚岐守、　六百石、三上肥後守、

〔有章院殿御實紀 四〕正德三年五月十八日、桐間番を停廢せられ、〇中略番頭沼間日向守廣隆、大津駿河守勝寧、岡部和泉守長與、石川攝津守盛行、建部志摩守廣明、同格中條丹波守直景、藤本筑後守稠賀、〇中略寄合となる、

〔吏徵附錄 廢職〕桐之間番頭　元祿八年乙亥三月四日、御役料五百俵、　寶永七年庚寅六月十二日、西丸御留守居次第、〇中略　若年寄支配

〔甘露叢 四十六〕元祿三年十二月十九日、諸大夫被二仰付一、桐間番頭、六郎右衞門事米倉丹後守、右衞門事諏訪對馬守、

組頭

〔吏徵附錄 廢職〕桐之間番組頭八人　若年寄支配　元祿五年壬申十一月廿八日、始置二二人、後八人、

寶永七年庚寅六月十二日、御小性組與頭次席、　正德三年癸巳五月十八日廢

〔寶永三年武鑑〕桐之間番組頭　御役料五百俵ヅヽ、

七百石、早川平四郎、　千六百石、筒井內藏、

〔文露叢 十七〕寶永六年二月二十二日、桐間番頭組頭、同組、御廊下番頭組頭、同組、御次番、御近習番、桐間醫師二百十人ノ內、前々ノ席、中奧、寄合、兩番、新番、大番へ番入、又ハ小普請入被仰付、

〔有章院殿御實紀 四〕正德三年五月十八日、桐間番を停廢せられ、(中略)組頭末高牛左衛門政峯、瀨名傳右衛門貞隅、千葉兵部季佐、村上源左衛門正廉、松平一學乘有、松平又十郎親春、長田三右衛門元隣、金森六左衛門可鄕、番士村上主殿某、小尾宮內信武、小尾友之進直房は寄合となる、

〔吏徵附錄 廢職〕桐之間番　若年寄支配　天和元年辛酉七月廿二日、始置二人、　元祿十年丁丑十月十三日五人、百俵五人扶持宛被成下、　同年十二月十八日十一人御加增、合百五十俵宛被成下、御番料百俵宛、取來御扶持方上ル、　正德三年癸巳五月十八日廢(四組之御番衆兩御番江割入)

〔常憲院殿御實紀 四〕天和元年七月十日、桐間番となるもの三人、　二十二日、西城小姓組より桐間番にうつるもの二人、

〔吏徵附錄 廢職〕桐之間番　辛酉(天和元年)七月十日、野邊權大夫、小島武左衛門、若藤杢右衛門、右三人、向後桐之間に可相詰旨被仰付之、(日記)　廿二日、平野次郎右衛門、平岡仁右衛門、右兩人、桐之間へ相詰可申旨被仰渡之、(同上)

〔有章院殿御實紀 四〕正德三年五月十八日、桐間番を停廢せられ、四隊の番士六十六人、小姓組書院番の中に入られ、(中略)桐間番の伺公せし所へは、新番宿直すべしと仰付らる、

〔甘露叢 二十一〕天和三年四月五日、去頃桐之間へ被召出面々御切米三百俵宛賜之、

〔常憲院殿御實紀 二十八〕元祿六年十一月十日、桐間番九人、役料百俵づゝ給ひ、(下略)

西丸桐之間番

〔甘露叢 六十四〕元祿十年十月四日、桐ノ間番被二仰付一、〇中略竹内孫一、服部善左衛門、内田源助、里見八郎右衛門、榊原藤右衛門、中澤三左衛門、前田六左衛門、〇中略西山三左衛門、小林市郎兵衛、〇中略森村源右衛門、〇中略小平彥四郎、〇中略岡本總大夫、右は三十俵ヅヽ、御加增ニテ、都合百俵ニ五人扶持宛被レ下、桐ノ間番所ハ、桐ノ間ト廊下番トノ間ニ有レ之、

〔吏徵附錄 廢職〕西丸桐之間番頭五人　若年寄支配、　寶永元年甲申十二月十二日、始置二五人一、松平主馬、鈴木四郎左衛門、岡野庄九郎、大津新右衛門、沼間賴母、同六年己丑二月廿一日廢

〔憲廟實錄 二十九〕元祿十七年〇寶永元年十二月十二日、櫻田邸の御用人松平主馬、鈴木四郎左衛門、岡部庄九郎、大津新右衛門、沼間賴母、西丸桐間番頭となり、燒火間番衆をも支配す、

〔泰平年表 常憲公〕寶永元年十二月十三日、西丸桐間番、西丸燒火之間番を置る、桐間番六十九人、燒火間番百十六人、番頭五人、組頭八人にて、兩番兼支配す、同六年十月廿九日、是を廢せらる、

〔吏徵附錄 廢職〕西丸桐之間番組頭八人　若年寄支配　寶永元年甲申十二月十二日、始置二八人一、同六年己丑二月廿一日廢

〔憲廟實錄 二十九〕元祿十七年〇寶永元年十二月十二日、櫻田邸の奏者番、書院番頭、小性組番頭合八人、西丸桐間組頭となる、

〔文露叢 十七〕寶永六年二月二十二日、桐間番頭組頭、〇中略同組御次番、御近習番、桐間醫師二百十人ノ内、前々ノ席、中奧寄合、兩番、新番、大番ヘ番入、又ハ小普請入被二仰付一、

〔吏徵附錄 廢職〕西丸桐之間番六十九人　若年寄支配　寶永元年甲申十二月十二日、始置二六十九人一、同六年己丑二月廿一日廢

〔憲廟實錄 二十九〕永祿十七年〇寶永元年十二月十二日、櫻田の諸物頭中、寄合、勘定頭、普請奉行、目付、使番、城番、書院番組頭、小性組與頭、步士頭、小十人番頭、合六十九人、西丸桐間番となる、

土圭間番

〔吏徴附録 廢職〕土圭間番　若年寄支配　寛永年中始置　正保三年丙戌十二月朔日廢 一統新御番 四十四人
寶永六年己丑二月廿一日、再置廿五人、　同七年庚寅正月十八日百五十俵高、御番料百俵、四十四人
享保九年丙申五月十七日廢

〔泰平年表 文昭公〕寶永六年二月廿一日、此日土圭之間番廿五人を置る、享保元年五月十七日、是を廢せらる、按るに、土圭の間番、寛永の頃有、正保二年(正保二年、恐正保三年誤)十二月朔日、新番にかえて勤仕、今年再び是を置る、

〔大猷院殿御實紀 十七〕寛永八年四月十日、曲淵清藏吉次、土圭間番に加へらる、

〔大猷院殿御實紀 二十二〕寛永十年正月十八日、土圭間番腰物持五隊に分ちて宿直すべしと命せらる、

〔有章院殿御實紀 四〕正徳三年五月十八日、土圭間番は、組頭とも五十人ゆるされて、小普請にいる、その餘三十五人は、今までの如く勤番すべしとなり、

〔文昭院殿御實紀 五〕寶永七年正月十八日、土圭間番士四十四人に、各足米五十俵下され、番料も各百俵下さる、

西丸土圭間番

〔常憲院殿御實紀 五十三〕寶永三年六月二十五日、此日松平陸奥守吉村家人藤田吉左衛門、松平長門守利興家人山本庄助、松平淡路守綱矩家人木谷五郎兵衛、仙石越前守政明家人中島五郎兵衛、此等は皆猿樂の徒弟なるをもて召出され、西城土圭間番を命せらる、

〔文昭院殿御實紀 一〕寶永六年二月廿二日、この日西城土圭間番に入るもの廿四人、

廊下番頭

〔吏徴附録 廢職〕御廊下番頭四人　若年寄支配　貞享四年丁卯三月廿三日、始置貳人、歩士頭松田六郎右衛門、小十人番頭板橋與五右衛門後四人、元祿八年乙亥三月四日、御役料五百俵、　寶永六年己丑二月廿一日廢

〔憲廟實錄 十〕貞享四年三月廿三日、歩士頭松田六郎左衛門、小十人番頭板橋與五左衛門、廊下番頭となる、新役也、○又見甘露叢

〔寶永三年武鑑〕御廊下御番頭

千三百石、高尾阿波守、 千二百石、杉原播磨守、 千七十石、土屋薩摩守、 中條周防守

〔文昭院殿御實紀 一〕寶永六年二月二十二日、廊下番頭杉原播磨守正勝、高尾阿波守信仍、榊原安藝守忠知は寄合となる、○又見二文露叢一

組頭

〔吏徵附錄 廢職〕御廊下番組頭 若年寄支配、 元祿五年壬申八月十日、始置二人、 寶永六年己丑二月廿一日廢

〔常憲院殿御實紀 二十六〕元祿五年八月十日、次番秋間新右衞門武照、桐間番中條加兵衞直景、廊下番組頭命せらる、これ創置の職なり、

〔寶永三年武鑑〕廊下番組頭

四百俵、秋間新右衞門、 六百俵、木原七郎兵衞、

〔文露叢 十七〕寶永六年二月二十二日、桐間番頭組頭、同組、御廊下番頭組頭、同組、○中略 前々ノ席、中奥、寄合、両番、新番、大番、ヘ番入、又は小普請入被仰付、

番衆

〔吏徵附錄 廢職〕御廊下番 頭書 貞享元年甲子正月十二日、御廊下番江二丸番ゟ小林半助被仰付、 九月十七日、二丸番古田久兵衞、吉田清大夫、奥御廊下番、昨日被仰付之、

〔泰平年表 常憲公〕貞享四年三月廿三日、御廊下番頭を置る、御番衆も此時なるか、未詳にせず、御廊下番は、皆能役者より堪能のものを召出され、苗字を改め御番を勤しなり、

〔常憲院殿御實紀 九〕貞享元年正月十一日、二丸番より廊下番にうつるもの一人、

〔常憲院殿御實紀 十〕貞享元年九月十七日、二丸番より廊下番命せらる、もの二人、

〔文昭院殿御實紀 一〕寶永六年二月二十二日、廊下番二十四人、小普請に入、○又見二文露叢一

〔常憲院殿御實紀 十〕貞享元年九月二十三日、廊下番七人、みな俸米加へられ、二百俵づゝになし給

ふ、

〔吏徴附錄殿職〕御廊下番　元祿十年丁丑十二月十八日、百五拾俵取之者十人、並之通御番料百俵宛被ㇾ下、

〔吏徴附錄殿職〕御近習番　若年寄支配、　元祿五年壬申八月十二日、始置ニ二人一、　寶永六年己丑二月廿一日廢

〔泰平年表常憲公〕元祿五年八月十二日、御近習番貳人被ニ仰付一、此頃桐の間番、二丸張番等の御番衆も有し也、寶永六年に至て、並てみな止らる、

〔紳書下〕常憲院殿〇德川綱吉御代の近習衆といふ者は、譜代の侍はすくなく、大かたは樂猿の者、又夫等が弟子、狂言師、裝束著せなどいふもの、其外繪書儒者と名づけて、林大學頭が門弟の書物讀覺えし者、彼是廿人近くも候ひしにや、是は學文御好みとて、日々伺候の面々人々に書物をよみ習ひて講談をするを、其講談を聞て、よしあしの甲乙を定めて傍にゐるして、日々の上下を御覽ずる樣に、廊下のなげしに懸しなどいふ也、扨其外はあけてもくれても、能仕廻囃子などいひて、うちはやして而已すごし、其隙々には御湯殿へ入らせられて、湯をひかれし御次にて彼學者共、問對とかいふ事をするを聞し召されしとも申す也、大猷院殿〇德川家光の御時には、猿樂の者共は日々番休して評定所に詰居て、事ある時は召されしと申、猿樂舞臺といふ物も御座の間の庭にありし、是は文昭院殿〇德川家宣御代にもありき、今は取捨られし也、

〔台德院殿御實紀二十四〕慶長十八年、此年〇中略檜村孫七郎、五味金右衛門豊直近習番となり、〇下略

〔常憲院殿御實紀二十六〕元祿五年八月十二日、はじめて近習番を置れ、大番荒川八郎兵衛重賴子百助親幸、小普請三宅千之助陳壽これを命ぜらる、

〔甘露叢六十四〕元祿十年十月四日、新規ニ御近習番被ニ召出一、土佐守舍弟荒川兵左衛門、兵三郎三男木原賴母、

次番

〔寶永三年武鑑〕御近習御番衆　御役料三百俵ヅヽ

水谷權兵衞　木下平之丞　庄野藤左衞門　小宮山孫十郎〇以下二十四人姓名略

〔文露叢十七〕寶永六年二月二十二日、桐間番頭組頭、同組、御廊下番頭組頭、同組、御次番、御近習番、〇中略前々ノ席、中奥、寄合、兩番、新番、大番へ番入、又は小普請入被仰付、

〔文昭院殿御實紀一〕寶永六年二月二十二日、前代〇徳川綱吉近習の人々、外班にうつさる、〇中略近習番吉田小右衞門盛封、次番十八人、近習番十九人、行水方二人、廊下番廿四人、小普請に入、近習番中村新兵衞房喬、伊庭市十郎清長、和田傳藏長重、安見文平元道、木下平三郎寅亮、荻生小次郎觀、近藤助右衞門玄壽は儒員となる、又九人は大番に入る、

〔吏徵附錄殘職〕御次番　若年寄支配　貞享二年乙丑五月十九日始置元祿二年己巳二月廿三日、千石以下、御合力米三百俵、　寶永六年己丑二月廿一日廢一統小普請入

〔常憲院殿御實紀十一〕貞享二年五月十九日、猿樂觀世久米之助稠賀、御家人に加へられ、藤本源右衞門と改稱し、御次番命せらる、

〔寶永三年武鑑〕御次御番衆　御役料三百俵ヅヽ

大竹善三郎　上田孫三郎　小川長八郎　田邊嘉右衞門〇以下十四人姓名略

〔文露叢十七〕寶永六年二月二十二日、桐間番頭組頭、同組、御廊下番頭組頭、同組、御次番、〇中略前々ノ席、〇中略小普請入被仰付、〇又見文昭院殿御實紀

〔常憲院殿御實紀十九〕元祿二年二月二十三日、小姓、小納戸、次番、千石以下の輩には、官料三百俵づつ給ふべき旨仰下さる、

〔甘露叢六十二〕元祿十年七月一日、喜多十大夫義、御次番被仰付、御切米三百俵、并御役料三百俵被下、中條市右衞門ト改、

手水番

〔東照宮御實紀九〕慶長九年、此年〇中略菅沼左近定芳御手水番となり、〇下略

〔大猷院殿御實紀十二〕寛永五年、此年〇中略土屋金彌之直、近習手水番になり、廩米五百俵給ひ、〇下略

小納戸頭取

職員

小納戸ノ職掌ハ頗繁多ナリ、就中將軍ノ食膳ハ必ズ先ヅ之ヲ嘗ム、其他結髪ノ如キ、總ジテ將軍日常ノ細務ニ從事ス、若年寄ノ支配ニ屬シ、五百石高ノ職ニシテ、千石以下ニハ役料三百俵ヲ給ス、頭取數人アリ、從五位下ニ敍シ、千五百石高ニシテ、別ニ役料ナシ、此職寛永ノ初年ニ既ニ之アリ、爾後其數漸ク增シテ百餘人ニ及ビシガ、元治元年ニ至リテ、頭取三人、小納戸四十二人ト定メシカドモ、其後猶ホ增加セシモノニヤ、慶應二年、小納戸百四十人ヲ解職シテ、勤仕並寄合ト爲シヽコトアリ、西丸ニモ亦小納戸アリ、

〔吏徵上布衣以上〕御小納戸　頭取四人

〔大猷院殿御實紀四十二〕寛永十六年、此年〇中略中奥番伊藤安兵衞正次は、小納戸奉行〇中略命せられ、〇下略

〔德川禁令考二十一奥長官〕元治元子年五月廿四日

奥向御改革ニ付御書付

一以來奥向定員六拾人と相極候事

但右之內、〇中略御小納戸四拾貳人、頭取三人、〇下略

職掌

〔明良帶錄餘篇〕御小納戸頭取

御小納戸衆の差引、諸屆諸願等相談、奥向の取締等を心得、御細工方、御納戸方の請取物を調て、君

資格
俸祿

邊の御用向は何にても取扱、御小納戸衆親類出合姓名書等受取、其外分限短尺の取集め、御成御供にて御場所の差引有り、

〔幕朝故事談〕御藥懸りは、頭取衆〇小納戸相勤るなり、

〔昭德院實紀二十三〕文久二年閏八月二十五日

御小納戸頭取　依田駿河守　佐野伊豫守〇中略

御上洛御用被仰付之

〔吏徵布衣以上〕御小納戸　若年寄支配〇中略　頭取四人、諸大夫千五百石高、御役料無之、　頭取格一人、諸大夫、千石高、御役料無之、

〔青標紙三編〕御小納戸頭取は、大に威權ありて、勤方千五百石被下、就中御場掛りは、別段權を握れる事也、

〔明良帶錄餘篇〕御小納戸頭取

是より御三殿之御附に昇る、土屋遠江守、佐野豐前守等他、寬延の田沼主殿頭は、此場より御加增にて、昇進して御老中に昇れり、

〔有德院殿御實紀二十九〕享保十四年三月朔日、小納戸菅沼主膳正定虎、山本攝津守正堅、山本八郎右衞門茂明、西城小納戸大屋越前守昌任、近習の輩を指揮するにより、各當職の間、千五百石の祿秩にさだめらる、

〔吏徵別錄布衣以上〕御小納戸　享保十四年己酉三月朔日、御小納戸菅沼主膳正、山本攝津守、山本八郎右衞門、西丸御小納戸土屋越前守、奧向頭取相勤候付、御足高被下、千五百石宛之高に被成下候、是頭取の始なるべし、

〔有德院殿御實紀四十二〕享保二十年九月二十日、小納戸土岐大學頭朝澄、平井宮內正基、小納戸の

任免

事を頭取らしめ、勤仕の間、千五百石を賜ふ、

〔吏徴別錄上布衣以上〕御小納戸　享保二十年乙卯九月廿日、向後頭取、老中申渡に成、此已前御足高有之は老中申渡、不ㇾ及ㇾ御足高ㇾ者は御側衆雖ㇾ申渡、此度不ㇾ及者も老中申渡に定、

〔明和元年武鑑〕御小納戸頭取衆　千五百石高

七百石、松下隱岐守、　五百石、曾我丹後守、　二百俵、伊藤志摩守、　五百俵五十人扶持、白須甲斐守、

〔慶應二年武鑑〕御小納戸頭取衆　千五百石高

五百石、荒尾大和守、　五百石、永田備後守、　二百俵、溝口能登守、　二百六十八石七斗、服部加賀守、　千石、須田淡路守、

○按ズルニ、是ヨリ先キ文久三年六月ニ、小納戸衆十三人ヲ解職シ、慶應二年十一月ニモ亦百四十人ヲ解職セシコトアレバ、從テ小納戸頭取ヲモ解職セシナルベシ、下文小納戸衆任免ノ條併セ看ルベシ、

小納戸衆職員職掌

〔紳書下〕一嚴有院殿〇德川家綱の御代の頃迄は、〇中略御小納戸廿人にて、十人づゝ宿直す、

〔官中秘策十〕諸御役人之事　御小納戸衆　布衣　凡百人

〔吏徴上布衣以上〕御小納戸百十人不同

〔德川禁令考二十一奥長官〕元治元子年五月廿四日

奥向御改革ニ付御書付

一以來奥向定員六拾人と相極候事

但右之內、〇中略御小納戸四拾貳人、頭取三人、奥之番六人、御膳番三人、御膳奉行兼、

右是迄兩頰之處、向後三頰ニ被ㇾ仰付ㇾ候、一頰頭取壹人、奥之番貳人、御膳番壹人、肝煎壹人、平九人、

但頭取病氣差合之節者、非番頰より介、夫ニ而も御差支之節者、奥之番、又者御膳番より介可ㇾ申

事、

〔青標紙 三編〕御小納戸中にて、御場掛、御膳番、奥之番ありて、是を三掛りと云、頭取に次て事を執る事なり、御櫛上げは、多人數の內にても兩三人ならではなし、至て少きと云、

〔明良帶錄 餘篇〕御小納戸

頭書此場ニ御前詰と申役二人有之、又三人之事も有之、是は御小納戸に而此席ニ不居、御小性之席に入て勤之、此內に御膳番六人、奥之番六人、肝煎八人の役名あり、

〔幕朝故事談〕御膳番は、御小納戸也、御小納戸頭取の次なり、御賄より御膳を仕立たる時、御膳奉行立合なり、其時御膳番御毒味をする也、扨其次へ御膳立と云がありて、そこにてとりそろへて上へあげる也、御給仕は御小性也、御小納戸の御膳番は、御次の間にひかへて居る計なり、若上の御病氣の節は御膳番が盛也、是はあとにて御膳召上りたる何程と云を、はかりにかけて見るゆゑなり、御膳時分の事も、御目覺も、皆モウと觸れるなり、

〔甲子夜話 三〕蜷川將監ト云ヒシハ、先朝ノ御小納戸ナリ、今御取次衆相摸守ノ父ナリ、奥ノ番ニナリタルヲ辭セントテ、奥ノ番ハ、大奥女中ニ接談スルコトモアルユヘ、老實ノ者ニ限リテ命セラルヽコトナリト云、御取次衆ヘ自身申出ケルハ、拙者元來好色ノ癖アリ、イカヤウ愼候テモ、癖ト云モノハ風ト動ク事アルモノユヘ、モシ女中ニイカヤウノコト出來候テハ、一分ノ罪而已ナラズ、家ヲモ失候コトニモ成候半、アハレ奥ノ番免シ玉ヘト乞ヒツヽ、遂ニ平勤ニ返リシトナリ、ソノ實ハ仲ケ間ニ意味合アリテ、長クハ穩ニ勤難シト見切リテノ事ナリシトナリ、眞ニ面白キ托シ方ナリ、

〔明良帶錄 餘篇〕御小納戸

御三卿方御登城之案內心得方有り、掛りは御髮月代、御膳番、御庭方、御馬方、御鷹方、大筒方、其外人人の性質、習ひ得たる處の藝術によりて掛り被仰付、吹上御庭に諸役等備りてあり、學文、詩文章、

資格俸祿

書畫、遊藝、天文、武術等まである也、出火の節、見屆として出馬有り、大筒方は、隔年に鎌倉表へ筒拂樣に被ㇾ仰付ㇾ處、當時御儉約に付五ヶ年目と成るなり、

〔大猷院殿御實紀二十三〕寛永十年七月晦日、小納戸野々山新兵衛兼綱、内藤勝兵衛直信、評定會議の席に出て簿牒を預るべしと仰付らる、

〔大猷院殿御實紀七十二〕慶安元年十二月二十日、小納戸宮崎備前守時重、留守居番筒井内藏忠重、紅葉山の事を司るべしと命ぜられ、〇下略

〔東職記聞 一〕小納戸衆　布衣

扈從衆、小納戸衆、所謂中涓之任也、撰ㇾ麾下中可ㇾ然人ㇾ而被ㇾ召仕ㇾ也、

〔明良帶錄 餘篇〕御小納戸

布衣にて、君邊の勤め第一の昵近の衆也、名越には、奧向計麻上下、幷奧御能之節等、此場諸大夫の雇もあり、大紋を著す、

〔吏徴 上 布衣以上〕御小納戸百十八人不同　若年寄支配　五百石高　御役料三百俵千石以下　部屋住三百俵、御役料同斷、　大御番頭以上部屋住五百俵、御役料無ㇾ之、

〔常憲院殿御實紀十九〕元祿二年二月二十三日、小姓小納戸、次番、千石以下の輩には、官料三百俵づつ給ふべき旨仰下さる、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕享保九甲辰年七月十三日

御小納戸

五百石ゟ内は、五百石之高に可ㇾ被ㇾ成下ㇾ候、

御役料只今迄之通、千石ゟ内は三百俵、

但部屋住之者は、只今迄之通、御役料御切米可ㇾ被ㇾ下候、次男に而も同斷、

任免

〔明良帶錄餘篇〕御小納戸

一頭書五百石以上、千石以下は、御役料三百俵宛被下之、千石以上は〇中略勤金三拾兩宛被下之、　一部屋住之者は高三百俵、外御役料三百俵宛被下之、

〔東武實錄十一〕寛永元年、是年將軍家〇德川家光ノ命ヲ奉テ、牧野助右衛門御小納戸ニ奉仕ス、

〔吏徵別錄上布衣以上〕御小納戸　寛永九年壬申六月廿七日、安西甚兵衛、山水平九郎、御小納戸被仰付、

〔天保十一年武鑑〕御小納戸衆

二千五百石、松平縫殿頭、　二千四百石、成瀨藤藏、　二千石、安藤與十郎、　二千石、石川六左衛門、

二千石、大久保甲五郎、　千六百四十石、伊奈左衛門、　千六百石、大久保甚四郎、　三百俵、柴田豐太郎、　千四百八十石、寛助兵衛、　千三百五十石、伏屋新助、〇以下九人姓名略

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年六月十六日、將軍家〇德川家定供奉ノ小性小納戸免役、

御小納戸永井內記、門奈寛之助、貴志鐵之助、多賀外記、大河內善十郎、井上助大夫、大久保新五右衛門、松平忠左衛門、川尻帶刀、瀧川三九郎、舟橋半右衛門、高林彌兵衛、小林松之丞、

右御役御免、勤仕並寄合被仰付之、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十一月六日、御小納戸百四十人免職、

勤仕並寄合を命せらる、

雜載

〔明良帶錄餘篇〕御小納戸

奧吟味は、御側御用御取次掛り有り、若年寄衆にも掛り有り、奧御用人選擧の義は、小普請、兩番、大番、新番、諸向幷部屋住の者、芙蓉の間、中の間向の總領等、人物相應なるものは御選び出し有り、部屋住吟味は、兼て奧望之仁願置、姓名短册等差出し有り、其外御入人は、諸向より書上る也、其書上

西丸小納戸

の姓名の仁を、掛り若年寄衆、御側御用御取次衆、御逢有之段、掛り御目付衆より被申越、誰々儀來る幾日、奥御吟味ニ付御逢有之間、若父母の忌中ニ候はゞ、三十日立候ハヾ、月代致相勤可申旨、其外名改等、病氣差合故障等無之候哉之段申來候、則及答て支配下へ申達す、差懸り病氣のものは御城へ申達す、則當日御逢相勤、又二三ヶ月も過て又御逢有之、如此くなる事二三度にて、其上植溜にて御逢有之、この節人數大に減す、其上吹上にて御透見有之、御襖の引手をぬき、僅四五間之所にて御透見有り、誰々の忰は、能々父に其儘なりと上意など有り、多く奥向吹事の仁御撰みに入ると見えたり、右相濟て御小納戸被仰付、三日の内麻上下、坂下、平川矢來、通行の義、斷申達す、内通りは御小人差添、此場所新規被仰付たる仁、銘々得手たる處の藝術、何にても致して御覽に入るなり、書畫を初として御覽あり、

〔官中秘策二十五〕西丸御小納戸頭取衆三人

〔有德院殿御實紀二十九〕享保十四年三月朔日、小納戸菅沼主膳正定虎、〇中略西城小納戸大屋越前守昌任、近習の輩を指揮するにより、各當職の間、千五百石の祿秩にさだめらる、

〔文恭院殿御實紀二十三〕寛政九年閏七月廿一日、小納戸久田縫殿助長考、西城の頭取に准せられ、勤務の內、廩米千俵になし下さる、

〔東職記聞二〕監國君職

小納戸衆同前、〇至二三十人　布衣　中涓之任也

〔吏徵布衣以上〕西丸御小納戸八十二人不同　同上〇御小納戸　慶安三年庚寅八月晦日始置

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月晦日、小納戸山岡十兵衛景次、廣戸半兵衛行隆、萬年佐左衛門貞賴、宮崎七郎右衛門政泰、成瀨總右衛門重治、梶川庄左衛門重昌、鵜殿十郎左衛門長興、遠山半左衛門景則、〇中略大納言殿〇德川家綱世子へ附屬せらる、

職員

〔有德院殿御實紀二十九〕享保十四年三月朔日、西城の小納戸中島備前守在友、藪主計頭忠通、大納言殿〇德川吉宗世子家重御側の事ども、心いれてつかふまつるをもて、各五百石加秩ありて、座班は新番頭につぐべしと命ぜらる、

納戸頭

納戸頭ハ、將軍ノ衣服調度ヲ管シ、又大名諸役人等以下ニ賜フ所ノ金銀衣服ノ事ヲモ掌ル、當初此職ハ、元方納戸頭ト、拂方納戸頭ト相別レタリ、元方ハ買人ヨリ物品ヲ購求シ、拂方ハ、其代金ヲ支出スルヲ云フ、寛政四年ニ元方拂方ヲ別ツコトヲ止メ、相混ジテ納戸頭ト稱セシム、若年寄ノ支配ニ屬シ、初ハ役料ヲ給セシガ、後之ヲ改メ七百石高ノ職トス、慶應三年、役金給與ノ時ハ六百兩ヲ給シ、千石以上ノ者ヘハ、其半額ヲ給セリ、屬僚ニ組頭數人、組衆數十人アリ、組頭ハ四百俵高トシ、組衆ハ二百俵高トス、別ニ同心數十人アリ、其中ノ組頭、帳付役、取締同心等ニハ、役料若シクハ手當金ヲ給ス、西丸、二丸ニモ亦納戸頭、組頭等アリ、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一元拂御納戸頭四人

〔東職紀聞二〕納戸頭四人元方二人拂方二人布衣

〔寶永三年武鑑〕御納戸元方頭　飯田總左衛門、新見彥四郎、　御納戸拂方頭　河野勘右衛門、上田新四郎、

〔吏徵上布衣以上〕御納戸頭二人

〔吏徵別錄上布衣以上〕御納戸頭　慶安元年戊子九月朔日、加々爪半之丞保忠、榊原小右衛門某、兩人

職掌

元方、間宮忠左衛門重信、石丸權左衛門某、兩人拂方被仰付、此時より元拂わかる、○中略寛政四年壬子閏二月十四日、元拂方一圓可相勤旨被仰出之、是より二人役となる、

〔諸御役代々記十三〕拂方御納戸頭

寛政四子年閏二月十三日、元方拂方打込相成、元方拂方無差別、御納戸頭と申名目相成、

〔職掌錄〕御納戸頭

御小納戸、御廣敷御用よりはじめて、獻上、金銀、呉服、御裝束被下、金銀之節、時服、卷物、筆墨紙已下、諸渡物等、一切當局の進退とす、

〔東職紀聞二〕納戸頭四人

統領人別納戸組之昵近衆而掌一切呉服筆紙等事之職也、且領人別同心十五人也、假令將軍家御用、不論其物、買之則元方奉之、買人納之則拂方奉之也、

〔明良帶錄後篇〕御納戸頭 若 七百石高 燒火 同心六十人宛

是は君邊第一の御衣服御裝束迄を司る、奥向の掛合、御用多の場也、元方拂方とあるは、出納の分ちなり、暮に御褒美に被下時服と、大名衆御暇の節被下時服と、諸大夫布衣へ被下と、布衣以下射手の面々、御醫師へ被下のと階級あり、御醫師紅裏なり、八丈縞紬は、諸御用御上掛りの御老若方へ被下、辨柄更紗は、丸物圖的、草鹿、笠掛、三々九等の射手へ被下、元方御納戸よりは、御本丸御召物、筆墨紙、御扇子、反物、卷物、御伽羅、御香具、御馬具、毛氈、幷奥にて被下もの御召物類、拂方は、大名幷御役人へ被下之時服、大判、小判、銀子、御太刀、諸向御役羽織等役也、大奥向より御用有之節は、組頭御廣敷まで罷出、御用向伺、町人は後藤縫殿助、幸阿彌因幡、此二人御用次第、奥扣所まで相越、

〔大猷院殿御實紀四十七〕寛永十八年九月廿日、元方納戸頭鈴木三郎九郎重成、天草の地を代官せしめらる、

〔嚴有院殿御實紀三十六〕寛文八年二月十九日、納戸頭には、こたび諸大名儉約の令面命せらるれば、納戸局にも、萬事浮費を減省すべき旨老臣してつたへらる、

〔享保集成絲綸錄十八〕正德二辰年七月

御納戸頭へ相添渡之

覺

常々御用之品御入用等、心之及候程入念、同役申談、吟味之上、御費無之樣に相定可被申付候、御納戸へ請取物、且又御納戸ゟ所々江相渡物之儀、右之心得ニ而吟味之上、斷之書付可被差出候、向後不吟味に在之候はゞ、何も越度たるべく候間、可被得其意候、以上、

〔憲教類典二ノ十三御納戸〕享保八癸卯年正月十五日

大久保佐渡守殿御渡貳通

元方御納戸頭江

當年より御金請取候儀、一ヶ月分之御用色品、銘々代付記之、書付差出候而御金可被請取候、尤品品減候樣吟味可有之候、

一役所にて拂物等有之節は、代金早速御金藏江可有上納候、右拂物之儀、吟味を詰、相應之直段相拂候樣可被致候、

一其年々御勘定向、翌年仕上候樣可被相心得旨、右之趣御勘定所江委細承合被申べく候、以上、

卯正月

〔天保集成絲綸錄七十五〕寛政四子年三月

御勘定奉行江

拂方御納戸ニ而取扱候、御用之品々、本途直段之儀は勿論、其外當時直段之分共、此度御改正被仰

賞格俸祿

出候ニ付、是迄之本途直段ニ不拘、諸職共銘々實意を以入札爲致、本途取極、當時直段之分共、夫々吟味可被致候、尤調方之儀は、村垣左大夫、御勘定川崎市三郎、支配勘定田中太左衛門儀、日々御納戸江差越、主役同樣、右御用取調候樣申渡候間、得其意、御勘定奉行村垣左大夫可被談候、

右之通、拂方御納戸頭幷村垣左大夫江申渡候間、得其意、市三郎、太左衛門へも可被申渡候、

寛政四子年四月

御勘定奉行江

御納戸向御改正之儀、先達而拂方之儀は、村垣左大夫幷御勘定方立合申渡候處、此度元拂一圓ニ相成候付而は、是迄元方ニ而取扱候品之儀、兼而糺も有之儀ニハ候得共、雙方取扱方、入合不申儀も可有之ニ付、不同之儀無之樣、元方ニ而取扱候方江も、左大夫幷御勘定方立合、取調候樣申渡候間、得其意可被談候、

右之通、宇田川平七、蜂屋權大夫、村垣左大夫江申渡候間、得其意、川崎市三郎、田中太左衛門江可被申渡候、

〔昭德院實紀九〕萬延元年十一月朔日

御納戸頭　深尾善十郎〇中略

和宮御方御緣組、幷御下向御用被仰付之、

〔東職記聞二〕納戸頭四人〇註略　布衣

〔吏徵上布衣以上〕御納戸頭二人　若年寄支配　燒火間　七百石高

〔憲教類典五ノ二御役〕寛文六丙午年七月廿一日

一御黑書院江出御、被爲成、御役人被爲召、御役料被下候覺、〇中略

一四百俵　　御納戸頭

補任

〔憲廟實錄 四〕天和二年四月二十一日、諸番、諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、〇中略御納戸頭、御膳物奉行の頭、舟手の頭、四百俵、

〔常憲院殿御實紀 二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、〇中略納戸頭〇中略五百石以下は貳百俵、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕享保八癸卯年六月十八日

元方拂方御納戸頭

七百石ゟ内は、七百石高に可被成下候、

〔吹塵錄 三十一 徳川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江向後御足高御役知御役料御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

一金六百兩宛　御納戸頭

高千石以上之者江は半減

但御切米高七百俵以上之者江は不被下

同三百五拾俵以上之者江は半減

〔東武實錄 二〕元和二年、是年〇中略天野長信、後豐前守ニ任ズ御納戸頭ニナル、

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕御納戸頭　寛永十二年十二月廿八日、横山藤左衛門、間宮忠左衛門、御納戸頭被仰付、元此兩人組頭也、

〔東職記聞 二〕納戸頭四人

代々記曰、往古無元方拂方差別、天野小三郎、弓削田源七郎等在職之時、天野氏奉元方、弓削田氏奉拂方也、慶延略記曰、寛永十九年二月、筒井內藏遷留守居、同年十月、横山半左衛門進其後職、是元

組頭
職員
職掌

資格
傳錄

方也代々記曰、寛永十二年、間宮權左衞門補之、是拂方也、爾來年月亦委記、先是無所考也、

〔明和元年武鑑〕元方御納戸頭　布衣　七百石高

百八十俵餘、比留與十郎、　二百三十八石、河野又四郎、

拂方御納戸頭　布衣　七百石高

二百俵、柴田藤三郎、　二百五十俵、依田十郎兵衞、

〔慶應三年武鑑〕元方拂方御納戸頭　布衣

七百石、日下數馬、　百俵、新見蠖藏、　百三十俵、松井助左衞門、

〔職掌錄〕御納戸頭　組頭四員〇又見吏徵

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御納戸組頭　享保三年戊戌十月朔日、元方四人、拂方四人、合八人役、〇中略　寛政四年壬子閏二月十三日、四人役、

〔東職記聞二〕納戸組頭八人

每組置二人、從納戸頭奉行一切事之職也、

〔明良帶錄續編〕御納戸組頭四百俵高　頭支　燒

御召御服、御裝束、御手道具、筆墨紙等、一切を調る主役として、并被下時服金銀等、其外は拂方にて主役とす、大奧向御用の節、御廣敷迄罷出承之、町人は後藤縫殿助、幸阿彌因幡、御用の節は奧御臺所まで參る、此場は大奧向の掛合有り、御用多骨折場なり、

〔常憲院殿御實紀四十二〕元祿十三年十一月廿九日、御膳奉行原田甚五兵衞種清、表右筆組頭渡邊七郎兵衞勝元、納戸組頭武島七九郎茂利、ともに和田倉の邸の奉行命せらる、

〔吏徵上御目見以上〕御納戸組頭四人　頭支配　燒火間　四百俵高　御取締懸一人、二十人扶持、

〔仕官格義辨〕諸御番組頭衆之事

任免

御納戸組頭衆も、先規ゟ御納戸御番衆より、元拂四人ツヽ被仰付候よし承候、

〔憲教類典御役二ノ五〕寛文六丙午年七月廿一日

一御黒書院江出御被爲成、御役人被爲召、御役料被下候覺、〇中略

一百俵　　御納戸組頭

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、〇中略納戸、勘定の組頭、賄頭、富士見番の頭は百俵、

〔有德院殿御實紀四十〕享保十九年九月二十五日、此日兩城〇本丸西丸の元拂納戸組頭、在職の祿四百俵と定られ、官量をばとゞめらる、

〔吏徴別錄下布衣以下御目見以上〕御納戸組頭　寛政五年癸丑二月六日、御取締懸一人江二十人扶持被下、

〔吏徴別錄下布衣以下御目見以上〕御納戸組頭　寛永十二年乙亥九月十二日、松永太郎右衞門、松波五郎兵衞、

〔吏徴別錄上布衣以上〕御納戸頭　寛永十三年丙子二月十一日、大津助十郎、河内長介、御納戸組頭被仰付、

〔明和元年武鑑〕元方御納戸組頭　四百石高

二百石、齋藤文藏、　五百廿三石、神谷伊藏、　三百俵、坂井内藏助、　二百六十五石、阿部茂右衞門、

拂方御納戸組頭　四百石高

二百石、松原八大夫、　二百俵、赤井喜四郎、　二百五十俵、竹尾傳九郎、　二百廿二石、大屋四郎左衞門、

〔慶應三年武鑑〕同〇元方拂方納戸組頭　燒火間　四百俵高

組織　職員　職掌

資格　俸祿

任免

百五十石、富田忠右衞門、　四十五俵、中村泰次郎、　二百九十七石八斗、越智主馬、　現米八十石、總里義之助、　四百石、永井勘兵衞、

〔職掌錄〕御納戸頭　御番衆二十四員〔○又見二吏徵一〕

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御納戸　享保三年戊戌十月朔日、元方十六人、拂方十六人、合三十二人ニ極、　寬政四年壬子閏二月十三日二十人、

〔明良帶錄續篇〕御納戸方〔二百俵高燒　頭支〕

御衣服萬端、諸品渡物、役羽織被下之時服金銀は拂方にて司り、御手元一切の品々は元方にて司る、年始八朔御太刀は、葵上りの方は、此場に納、御納戸同心ありて、夫々の請持有り、大奥向の御用、夫々請持有り、此場算筆功者のもの諸向より御入人有り、御番方よりも出て段々昇進す、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月、此月御腰物奉行、並ニ御腰物方役名ヲ廢ス、

御腰物取調は、御納戸役の者兼勤、

〔吏徵上御目見以上〕御納戸廿四人　頭支配　燒火間　貳百俵高　御取締懸一人、十人扶持、　同助四人、五人扶持、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御納戸　寬文八年戊申十二月廿五日、御納戸衆五人、都合貳百俵ツヽ被レ成下、〇中略　寬政五年癸丑二月六日、御取締懸三人、各十人扶持、

〔東武實錄六〕元和五年、此年杉浦忠左衞門親俊ニ采地ヲ加賜セラレ、舊領統テ五百石ヲ領ス、〔天正十八年ヨリ、御納戸ノ役ヲ勤ム、〕

〔明和元年武鑑〕元方御納戸衆　二百俵高

五百石、飯高孫左衞門、　四百俵、日根藤助、　四百俵、山本主水、　三百九十七石餘、越智伊與三郎、　三百石、渡邊勝之丞、　二百五十俵、神尾平兵衞、〇以下十人姓名略

同心

拂方御納戸衆　二百俵高

六百五十石、榊原權三郎、　三百石、織田市十郎、　三百石、大平左門　三百石、河野次助、　三百俵、入戸野十五郎、　二百五十俵、佐橋傳之助、　二百五十俵、久松新三郎、〇以下十人姓名略

〔慶應三年武鑑〕同〇元拂方御納戸衆　燒火　二百石高

千百十石、小笠原太郎右衞門、　三輪善一郎、　百五十俵、秋山清三郎、　二百俵、飯高錄太郎、　四百五十俵、近藤辰之丞、〇以下三十二人姓名略

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一元拂御納戸頭四人同心十五人

〔吏徵御目見以下〕御納戸同心四十人　持高、　組頭役料、二十俵一人扶持　帳付役、十五俵一人扶持　諸色差引役、五俵、　部屋書役、三俵、　取締同心、御手當金三兩、　町屋敷拜領　御抱場　年月日始置

〔吏徵別錄御目見以下〕御納戸同心　寬文二年壬寅十月六日、元拂方同心廿人屋敷無之ニ付、市谷長圓寺脇明地被下之、是今の牛込御納戸町也、　同五年乙巳十二月廿六日、御納戸元拂方同心六十人、十俵充御加增、都合三十俵充被成下、　享保三年戊戌十月朔日、定元方三十員、拂方三十員、寬政四年壬子閏二月十三日、定四十員、

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下、役儀勤之内、場所定高幷役扶持、〇中略

御本丸西丸　元拂御納戸頭支配　同心

並高三拾俵二人扶持

但並高以下之者も、先年は並之通御足高被下置候得共、近來並高以下者にも御足高被下置、

持高に而相勤申候、當時貮拾五俵二人扶持ゟ、拾五俵壹人半扶持之者、入交り相勤申候、忰部屋住ゟ明跡江御抱入被成候得ば、御切米並之通被下置候、

〔東職記聞 二〕監國君職

納○戸○頭二人　布衣　統領納戸組之昵近衆、領同心十人也、職掌同本城之同列也、

〔吏徴 布衣以上 上〕西丸御納戸頭二人　若年寄支配　燒火間　七百石高　同心廿人　慶安三年庚寅九月三日始置

〔大猷院殿御實紀 七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿御方○德川家綱世子に附屬せらるゝ輩あり、○中略石卷權右衛門庚貞は、納戸頭になり、鷹師淸水權之助吉春は、鷹師頭になりて付させらる、

〔東職記聞 二〕監國君職

納戸組○頭○四人　職掌同本城之同列也

〔吏徴 御目見以上 上〕西丸御納戸組頭四人　頭支配　燒火間　四百俵高　御取締懸一人、二十俵扶持、　慶安三年庚寅九月三日始置

〔大猷院殿御實紀 七十八〕慶安三年九月四日、納戸組頭四人、○中略御方○德川家綱世子に付らる、

〔仕官格義辨〕諸御番組頭衆之事

大御所様○德川吉宗御代、西丸江始而御納戸被仰付候節、享保十巳年正月廿八日、伏見猪右衛門多門孫右衛門、兩人組頭被仰付候、其已後毛呂源五右衛門被仰付、三人に相成候處、元文三午年七月十日、都筑善兵衛新規に被仰付、自是御本丸之通、組頭四人ツヽに而被勤之、

〔浚明院殿御實紀 二十〕明和六年十一月廿三日、大番一人、小普請二人、西城の納戸に入る、又おなじ組頭、新に一員を增さる、

〔吏徴 御目見以上 上〕西丸御○納○戸○十六人　頭支配　燒火間　貮百俵高　御取締懸壹人、十人扶持、

二丸納戸頭

同助四人、五人扶持、　慶安元年戊子正月始置

〔東照宮御實紀七〕慶長八年、此年〇中略長田喜兵衛吉正養子十大夫重政、飯塚兵部少輔綱重二子半次郎忠重〇中略右大將殿御方〇德川秀忠に召出され、重政は納戸番、忠重は小姓となる、

〔大猷院殿御實紀六十〕正保二年五月廿一日、納戸番〇中略を大納言殿御方〇德川家綱世子家光に附らるべきむね仰出さる、

〔大猷院殿御實紀六十一〕正保二年六月廿八日、大納言殿〇德川家綱世子家光納戸番五人、腰物奉行四人仰付らる、

〔嚴有院殿御實紀一〕慶安四年六月十五日、西城の腰物納戸番は、本城の番士に加はり勤べしと命ぜらる、

〔吏徵御目見以下〕西丸御納戸同心。二十人　慶安三年庚寅九月三日始置

〔有德院殿御實紀二十〕享保十年正月廿八日、元方納戸組頭大田加兵衛正員、拂方納戸組頭堀田宇右衛門氏張、二丸納戸頭命ぜられ、組頭二人、番士九人、本城より四人、小普請より五人命ぜらる、これ新置の職なり、

腰物奉行

腰物奉行ハ、初メ腰物頭ト云ヒシガ、元祿十四年腰物奉行ト改ム、二人ヲ定員トシ、將軍ノ佩刀以下進獻ノ太刀、下賜ノ刀脇差等、凡テ刀劒一切ノ事ハ此職ノ掌ル所ナリ、若年寄ノ支配ニ屬シ、初ハ役料ヲ給セシガ、享保八年以後之ヲ廢シテ、七百石高ノ職ト爲セリ、屬僚ニ組頭及ビ腰物方アリ、腰物方ハ、初メ腰物奉行ト云ヒシガ、元祿十四年腰物方ト改ム、組頭ニハ役

料百俵ヲ給セシコトアリ、腰物方ハ二百俵高ニシテ、別ニ役料ナシ、其他腰物持及ビ同心アリ、此職ハ承應二年ニ始テ之ヲ置ク、組頭ハ享保三年ニ之ヲ廢シ、又腰物奉行及ビ腰物方ハ、慶應二年ニ之ヲ廢シテ、其職掌ハ納戸方ノ兼務トナレリ、西丸ニモ亦腰物方アリ、

名稱

〔吏徵別錄上〕(布衣以上)御腰物奉行(舊稱御腰物頭)

〔貞享五年武鑑〕御腰物御番頭

〔甘露叢七十五〕元祿十四年四月朔日、大目付庄田下總守ヲ以被仰渡、

覺

一御腰物頭を御腰物奉行と可申事

一御腰物奉行を御腰物方と可申事(○又見教令類纂初集三十九)

職員

〔吏徵上〕(布衣以上)御腰物奉行二人

〔東職記聞二〕腰物奉行二人　布衣

職掌

統領呢近衆而掌一切刀劍事之職也、領人別同心二十人也、

〔職掌錄〕御腰物奉行

御指御腰物をはじめ、御進獻御太刀、獻上被下御刀御脇差、御劍、御拵、御手入、總じて御腰物にあづかり候事、一切司之、

〔明良帶錄續篇〕御腰物奉行

此場は御用多骨折場にて、卒吏を率ゐて、御腰物御差分は、別て奧向之掛合にして御用甚多く、御番方よりも出て、御納戸組頭よりも昇り、寄合よりも出づ、

〔享保集成絲綸錄十八〕正德二辰年七月

御腰物奉行へ相添渡之

覺

常々御用之品御入用等、心之及候程入念、同役申談、吟味之上、御費無之樣に相定可被申付候、御腰物方へ請取物、且又御腰物方より諸色申付候御用之品々、右之心得にて吟味之上、斷之書付可被差出候、向後不吟味に有之候はゞ、何も越度たるべく候間、可被得其意候、以上、

資格
俸祿

〔吏徵上布衣以上〕御腰物奉行　若年寄支配　焼火間　七百石高

〔憲教類典二ノ五御役〕寛文六丙午年七月廿一日

一御黑書院江出御被爲成、御役人被爲召、御役料被下候覺、

一四百俵　御腰物奉行

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、○中略御腰物奉行の頭、舟手の頭、四百俵、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略腰物奉行頭、五百石以下は二百俵、

〔憲教類典二ノ五御役〕享保八癸卯年六月十八日

七百石より內は、七百石之高に可被成下候、　御腰物奉行

〔昭德院實紀九〕萬延元年十二月十五日

御留守居番次席千石高ニ被成下、　御腰物奉行　小倉式部

右被仰付之、

沿革
任免

〔嚴有院殿御實紀六〕承應二年十月二十三日、大番押田三次郎豐勝、腰物奉行頭命せらる、これ創置なり、

〔東職記聞二〕腰物奉行二人　布衣

代々記曰、承應二年十月、始置此職、以押田三次郎被補之也、天和二年十月增一人、以榊原八右衛門被補之、爾來二人也、

〔元治元年武鑑〕御腰物奉行

三百石、大平三五郎、　百俵、小俣稻太郎、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月、此月御腰物奉行幷ニ御腰物方役名ヲ廢ス、

御腰物取調は、御納戶役の者兼勤、

組頭

〔東職記聞二〕腰物方組頭二人

每組置二人、從腰物奉行、奉行一切事之職也、

〔吏徵附錄廢職〕御腰物奉行組頭　御役料百俵　席御納戶組頭之上　享保丙申三月廿五日、始置、二人、同三年戊戌十月朔日廢、

〔仕官格義辨〕諸御番組頭衆之事

御腰物方には、先規より組頭は無之候、正德六申年三月廿五日、元方御納戶より武島兵右衛門、拂方御納戶より花井彥太郎兩人、初而御腰物組頭被仰付候處、享保之初に組頭相止、先規之通、組頭無之候、

〔有德院殿御實紀七〕享保三年十月朔日、腰物組頭を廢せられ、腰物方をも省かれ、おなじ番士の數十五人に定められ、○下略

腰物方

〔吏徵御目見以上上〕御腰物方十六人

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御腰物方　享保三年戊戌十月朔日、向後十五人ニ定、

〔明良帶錄續篇〕御腰物方　二百俵高　頭支配

御納戶頭と同樣にて、奧向の掛合事有り、別て御差向は心得あり、御用多之場にて、諸吟味調事を

履物持

司りて達するを主役とす、御履物方あり、御差方は別也、隊卒もあり、御履物方にて調て奉行に達するを聽く役なり、御納戸組頭よりも出て、御番方よりも出て、寄合よりも昇るなり、

〔明良帶錄續編〕御履物方二百俵高　頭支

。。御差方は、奥向の掛合骨折場なり、拜領の御刀等迄を司る、當時は代金にて出る故、御納戸方掛合あり、右の事を取調るを主役とす、夫より組頭へ達す、骨折多きゆゑ昇進口はやし、御納戸に準じて知るべし、

〔吏徵御目見以上〕御履物方十六人　頭支配　燒火間　貳百俵高

〔台德院殿御實紀十一〕慶長十四年、此年、〇中略野々山新兵衞象綱、履物奉行となり、〇下略

〔有德院殿御實紀七〕享保三年十月朔日、履物方をも省かれ、おなじ番士の數十五人に定められ、〇下略

〔元治元年武鑑〕御履物方　燒火　二百石高　▲印ハ御差方

千石、武島韻之助、　四百五十石、▲小尾鎌三郎、　百俵拾人フチ、成瀨德兵衞、　四百俵、柳澤猻左衞門、　七百石川勝新太郎、　四百石、池田彈正、　二百五十俵、設樂拾之助、　百五十俵、小出勘右衞門、　五百石本多晉之丞、　七百五十石、靑沼貫之助、　四百石、▲鈴木與左衞門、　四百石、岡部濱之丞、　三百石、大草三郎、　二百五十俵、建部傳次郎、　三百五十石、加藤寬作、　五百四十三石、藤川鐵太郎、　四百石、▲日下數馬、　三百石、▲鈴木淸之助、　二百五十俵、石野成次郎、　五百俵、▲高林釜之助、　二百俵、淺岡千太郎、　二百五十俵、國領鍬太郎、

〔大猷院殿御實紀二十二〕寬永十年正月十八日、土圭間番、履物持、五隊にわかちて宿直すべしと命せらる、

〔大猷院殿御實紀五十九〕正保元年十二月二十五日、御履物持松平所左衞門次倫、藥込役水野勘兵

衞信利に加恩百俵づゝ給ふ、

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

御腰物奉行　同心六人

〔吏徵下御目見以下〕御腰物同心十人

〔大概順〕御目見以下大概順

持高持扶持、　御抱入　羽織袴　御腰物方同心

西丸腰物方

〔吏徵上御目見以上〕西丸御腰物方八人　頭支配　焼火間　貳百俵高

〔大猷院殿御實紀六十〕正保二年五月廿一日、この日腰物奉行、○中略大納言殿御方○徳川家光世子家綱に附らるべきむね仰出さる、

〔大猷院殿御實紀六十一〕正保二年六月廿八日、大納言殿、○徳川家光世子家綱納戸番五人、腰物奉行四人仰付らる、

〔嚴有院殿御實紀一〕慶安四年六月十五日、西城の腰物納戸番は、本城の番士に加はり勤べしと命せらる、

古事類苑

官位部六十三

德川氏職員十二

大奥役人 姫君用人 併入

大奥ハ將軍ノ妻妾ノ居ル所ニシテ、世子、前將軍ノ妻妾ノ居ル所モ亦大奥ト稱ス、而シテ廣敷ハ本丸、西ノ丸共ニ大奥ノ傍ニ在リテ、其役人ノ長ヲ廣敷用人ト云フ、此職ハ若年寄ノ支配ニシテ、常ニ留守居ノ指揮ヲ受ケ、廣敷ノ職員ヲ統べ、大奥ノ事務ヲ辨ズルモノナリ、此他用人ニハ、姫君用人、女中用人、三丸用人等ノ諸役アリ、

〔柳營秘鑑 四〕諸役人員數并組支配

一御廣敷御用人 役料三百俵宛 三人

〔大概順〕桔梗間　御廣敷御用人

〔東職記聞 二〕廣敷御用人三人　布衣　掌二後廷廣敷事一之職也

〔諸役人代々記 二〕御廣敷御用人　五百俵高　外御役料三百俵

吉宗公
享保元申年十一月二日新規、同七寅年五月十一日御役被レ召放一逼塞、　平塚市郎右衞門

同年同月同日新規、同十一午年三月十七日病死、　小出半大夫

同年同月同日新規、同九辰年閏四月十九日願御免、　野村作左衞門

同七寅年七月廿六日御留守居番より、同十八丑年十二月三日御免、　永井三郎右衞門

同九辰年五月三日御膳奉行より、同年七月十四日病死、　原田小兵衞

〔諸御役代々記十四〕御廣敷御用人〇西丸

寶暦十辰年、家治公將軍宣下已後、御臺樣御用人ト唱、

〔寛政四年武鑑〕御臺樣御用人　布衣　御役料三百俵　五百石高

父備前守　八百石　寛政二戌十一月ヨリ　中島伊豫守〇以下二人略

〔明良帶錄後編〕御臺樣御用人若五百石高、御役料三百俵、

此場は御廣鋪向御取締等、非常の節心得方、諸事御留守居差圖なり、是は萬端物にこまかに心を附ねばならぬ場也、昔天英院樣文昭公御臺所、寛保元年二月二十八日薨、御附に、諏訪三郎四郎といふもの有りけるに、ある時、天英院樣御機嫌の餘りに、扨々其方は、物每に細かに心の附もの哉、我に萬年も仕へよとて、御盃を下され、難有頂戴して、則苗字を改め、萬年三郎四郎と云、其後遠江守に任ず、此場布衣なれ共、御願に依て、一人諸大夫被仰付、當時三位〇天英院の御任に付、殘らず諸大夫なり、近來永田備後守、此場より御勘定奉行に昇る、是は大奧にて希有の働有て、御臺樣御感悅御願にて、此場へ昇るなり、

〔享保集成絲綸錄一〕延享元子年六月

若年寄支配〇中略　御廣敷御用人

〔東武實錄九〕元和九年正月廿五日、大奧方ノ御法度仰出サル、趣、

定

一御だいどころ御法度之儀、竹尾四郎兵衞、寛助兵衞、松田六郎左衞門、三人一日一夜相詰、諸事善惡之儀、可申付、若背御下知、不屆之もの有之は、無用捨可有言上候、令遠慮於不申上は、右三人可爲曲事事、〇中略

元和九年正月　日

〔敎令類纂初集十九〕慶安三庚寅年九月十八日

覺

一奥方御用之儀は、宮崎備前守、久松彥左衞門承レ之、豐後守、和泉守へ相伺之、可二申付一事、

一從二奥方一御用之御細工方、小細工方之儀、備前守、彥左衞門承レ之豐後守、和泉守へ、以二相談一可二申付一、直段等念入、遂二吟味一、其上御本丸御勘定所へ伺レ之、帳面判形、備前守、彥左衞門可レ仕レ之、但御急之御用ハ格別、其外ハ前廉直段極之可二申付一事、○中略

右之條々、總樣之御勘定、年々御本丸御勘定所ニ而無レ滯可二相極一之、但年々御入用之儀、御定大積之外へ不レ出之樣、常々念入可二申付一者也、

慶安三年九月十八日

〔武家嚴制錄四十〕家綱公御本丸へ御移徙之時御條目○中略

一同御奥方御條目

定

一御奥方御法度之儀、宇都野九郎右衞門、中根仁右衞門、柳澤孫左衞門、山高三左衞門、長田理兵衞、鈴木圣之助、横山藤左衞門、大久保金兵衞、伊東新五左衞門、本多十藏、此十人之内二人にて、一日一夜宛相勤之、萬事善惡之儀、申付べし、若背二御下知一、不屆之族於レ有レ之者、無二用捨一可二申上一之、令二遠慮一於レ不二申上一者、十人之面々、曲事たるべし、諸事本多美濃守、伊澤隼人正、北條右近大夫、渡邊丹後守、可レ有二相談一事、附四人之衆、不レ在レ合、差當儀有レ之者、五人之御留守番へ、可二相談一事、○中略

右可レ被二相守一此旨者也、仍執達如レ件、

萬治二年九月五日○又見二敎令類纂初集十九一

〔常憲院殿御實紀三十〕元祿七年十一月九日、御臺所附桑原善兵衞昌盛、大番組頭小笠原源六郞持

廣敷用達

奥、御臺所用人となり、〇中略二百俵づゝ加へ給ひ、〇下略

〔紋令類纂初集十九〕元祿八乙亥年七月十二日

覺〇中略

一御用人、〇中略御廣鋪番所ニ脇差置之、奥へ可レ罷通事、〇中略

亥七月十二日

〔浚明院殿御實紀四〕寶暦十一年十二月十八日、從五位下に敍する者十八人、〇中略御臺所用人新家奥五左衛門孝之は市正となる、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

御廣鋪御用人

五百石ゟ內は、五百石高に可レ被レ成候、

御役料今迄之通三百俵

〔青標紙三編〕一御小性組、御書院之兩御番は、場所高は三百俵なれども、貳千八百石迄の人々入交りて勤むる事なり、又其中には本高三拾俵貳人扶持の人もあり、三千石近きれき〳〵の中へ、これらの小身交りて、莫大の御足高にて勤むると云ふは如何なる譯といふに、この人々は、大體其父御廣敷つとめより段々御取立に成り、姫君樣方の御用人並にのぼり、公主方の御願にてめし出され、御番人被二仰付一たる人々なり、然れども其父御用人被二仰付一時は、布衣以上百俵高に御加增被二成下一事ゆへ、本高引直しにもなれども、西岡藤次郎、石川三大夫如きは、並に而終りしゆへ、御加增無レ之、然るに兩人ともに悴は兩御番へ被二召出一しゆへ如レ斯なり、

〔幕朝故事談〕御廣敷御用人、火事の時分の儀如何御座候間、一度御目見〇德川綱吉夫人申上度、御留守居を以願候處、憲廟〇綱吉尤の由上意にて、御目見被二仰付一、

〔吏徵上御目見以上〕御廣敷御用達四人　御用人支配　貳百俵高

廣敷侍

廣敷膳所臺所組頭

〔吏徴別錄（下布衣以下御目見以上）〕御廣敷御用達　享保三年戊戌十二月廿五日始置ㇾ三員、田中理左衛門、堀彌七郎、小林彦惣、（皆添番）同八年癸卯月日貳百俵高、元文五年庚申二月三日、御廣敷御用人支配、

〔明良帶錄（新益篇）〕御廣敷小役　御○用○達○

御目見以上にて、續篇に出す如し、諸御用向多して、不ㇾ定、規定なくして、臨時之御用多し、御召御用奥向御小道具等の損じ調、且御膳具一切、女中用向の取調なり、

〔寛政四年武鑑〕御臺樣御用人（○中略）

同御用達　二百石高　（かうじへい　かれりい）齋藤五大夫　（南わり　下水）竹島小左衛門（○以下二人略）

〔明良帶錄（新益篇）〕御侍

御廣敷內にて、自分部屋に詰居て、御用之節、御用人呼寄、御用申付る、

〔吏徴（下御目見以下）〕御侍十二人（同見習二人）　御用人支配　七十俵持扶持高　見習七人扶持　燒火間、上下役、

〔大概順〕御目見以下大概順

（御廣敷御用人）七拾俵持扶持　悴見習金拾兩被ㇾ下候　上下役　御譜代席　御侍

〔寛政四年武鑑〕御臺樣御用人（○中略）

同御侍衆　七十俵高　（小石川　こんにやくかうしさか）新井嘉藤太　（四谷おし　原横町）松本龜三郎（○以下六人略）

〔寛政四年武鑑〕御臺樣御用人（○中略）

同御膳所御臺所頭御役料百俵二百石高　（百五十俵　本所石原）石尾喜左衛門　（小日向　五軒町）太田平右衛門

同組頭　七十俵高　（白山　御殿）齋藤忠七郎　（小石川　鷹匠町）山本善八郎

〔大概順〕御目見以下大概順

廣敷用部屋書役

廣敷用部屋吟味役幷賄吟味役

七十俵持扶持　御役料拾兩　御譜代席　上下格　御廣敷御膳所御臺所組頭

〔明良帶錄外篇〕御廣敷御用部屋書役三十俵高二人扶持用支

右書役は伊賀格にて、奧向第一の御用多し、是より御侍、又は添番並へ昇る、諸向取調事、骨折場といふべし、

〔吏徵下御目見以下〕御廣敷御用部屋書役四人　御用人支配　三拾俵貳人扶持高　燒火間役上下

二半場　町屋敷拜領沽券金六十五兩

〔寬政四年武鑑〕御臺樣御用人〇中略

同御廣敷御用部屋書役　下谷先手組やしき　増田藤次郎〇以下四人略

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高、幷役扶持、〇中略　御本丸西丸御女中樣方　御廣敷御用部屋書役

三拾俵貳人扶持

〔憲教類典三ノ三十五下衣服〕享保二十乙卯年六月廿四日

本多中務大輔殿　西尾隱岐守殿　御渡〇中略　御本丸西丸

御廣敷御用部屋書役

右向後、熨斗目白帷子著用可仕候、

右之通向々頭支配江可被相達候、西丸方は西丸御目付江可有通達候、〇中略

卯六月

〔明良帶錄新篇〕御用部屋吟味役　奧向之勤御用多し

〔吏徵下御目見以下〕御廣敷御用部屋吟味役三人　貳拾俵三人扶持高　町屋敷拜領沽券金六拾五兩　御

抱場　元文二年丁巳七月二十六日始置

〔寛政四年武鑑〕御臺様御用人〇中略

同御賄吟味役　小室又三郎

兩番格庭番

〔吏徴附録内職〕兩番格御庭番六人　御廣敷御用人支配　貳百俵高

〔明良帯録世職篇〕吹上御庭番は百俵高御役扶持七人扶持、小十人格は百俵持扶持、部屋住廿人扶持、若支、是は代々家の相傳にて、風聞糺を職とす、有徳公〇吉宗紀州より召連られし、村垣左大夫には御庭へ入りて、度々御直之御用被仰付たり、紀州にては御使番なる由、當時村垣左大夫は、御庭番より添奉行に至り、〇中略其子左大夫兩番格にて御庭番也、此場以上以下接る場也、

小十人格庭番

〔吏徴附録内職〕小十人格御庭番五人　御廣敷御用人支配　百俵持扶持高　部屋住廿人扶持

山里庭番

〔吏徴附録内職〕山里御庭番三人

御廣敷御用人支配　百俵持扶持高　部屋住廿人扶持

〔大概順〕御目見以下大概順

百俵五人扶持　御譜代席　上下格　添番格山里　御庭番

廣敷番頭

〔東職記聞二〕廣鋪番之頭七人領二副番士十五人、伊賀者十八人一也、

〔柳營秘鑑三〕御留守居支配　御廣敷番之頭

〔柳營秘鑑四〕諸御役人員數幷組支配

一御廣敷番之頭八人

〔大猷院殿御實紀二十一〕寛永九年九月、此月、腰物持役三島清左衛門政吉、廣敷番頭になり、〇下略

〇按ズルニ、當職ハ吏徴別録ニ、正保三年丙申二月十二日置二一員一、本多五郎左衛門トアレド、寛永中已ニ置カレシナリ、

〔明良帶錄續篇〕御廣鋪番之頭 持高御役料二百俵御普請掛十人扶持 留支

御留守居支配にて、御廣敷向一切、萬端入念、六人にて兩人づゝ、一日一夜づゝ相勤、萬事可申付、若違背の輩有之ば、用捨なく、可申上旨遠慮せしむるに於は、御用人幷番の頭越度たるべき旨、諸事御留守居指揮ある事にて、組下伊賀、御下男、總て入口〆戸番を心得、役人の外、奥の御臺所へ參るべからず、總じて番の頭、當番所より、奥へ一切相ならず、若男子九歳以下ならば、〆戸の內へ入りても苦しからず、奥方へ御用の義、年寄女中衆書付を以、表使へ渡し、番の頭當番にて、受取の御用をたすべし、年寄女合せざれば、一人にても書付出すべし、且亦御定の醫師の外、御廣敷迄參る事ならざる故、外醫師呼寄度候へば、御留守居へ申談、年寄女中衆より、番の頭、當番へ書付を以て相斷、其上にて番の頭醫師召連、部屋へ參るべし、其節相部屋の女中を拂ふ事なり、是は女中衆、病氣大切にて、表出ならぬ故なり、奥向普請の節掛り有之、大工人足通す義、御留守居の內へ斷、差圖の上可通之、火の元の義は、火の番二人、一夜づゝ相勤め灯燈ぼんぼり停止也、非常の節は、年寄女中衆、御留守居、御廣敷番の頭、同道奥方へ參り、諸事差圖す、非番たりといへ共、梅林坂下迄相詰、添番も同様、罷出る事、此場三番頭の內、御用多の場にして、支配下多く、外に女中向、其外御誕生の御用掛り、取調勤方規式なし、

〔敎令類纂初集三十九〕寶永七庚寅年五月十五日

御廣敷番之頭勤方之覺

一御廣敷番頭、新規に三人增被仰付候間、都合九人にて、一日三人づゝ、晝夜可相勤事、

內藤新五右衛門　蜂屋源八郎　本多權左衛門

右三人ハ只今迄被仰付候御道具御普請御掃除御用一向ニ相勤可申候、其外之儀ハ殘り六人ニ而可相勤事、

一御臺樣御供、御先番幷ニ外江御使等之儀ハ九人ニ而申合可相勤事、

五月

〔享保集成絲綸錄 一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著坐之席以壁書被仰出之所謂、○中略

一躑躅之間、北より二之間、○中略　御廣敷番頭

〔享保集成絲綸錄 一〕延享元子年六月

當時殿中席書○中略

燒火之間○中略　御廣敷番之頭

〔教令類纂 初集十九〕元祿八乙亥年七月十二日

覺

一御用人御廣敷番頭○中略　御廣敷番所ニ脇差置之、奥へ可罷通事、○中略

亥七月十二日

〔憲教類典 二ノ五 御役〕寬文六丙午年七月廿一日

一御黑書院江出御被爲成、御役人被爲召、御役料被下候覺、○中略

一貳百俵　御廣敷番頭

〔憲廟實錄 四〕天和二年四月二十二日、諸役人の役料を加祿として給る、○中略　廣敷番頭、○中略　二百俵

〔甘露叢 五十五〕元祿八年七月十日、御廣布番頭へ役料百俵宛賜之、大草治左衛門、大久保喜大夫、平賀三五郎、山田太左衛門、三橋八郎左衛門、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保八卯年六月

高之多少ニ無構、御役料貳百俵可被下候、　御廣敷番頭

廣敷添番

〔寛政四年武鑑〕御臺樣御用人略〇中

同御廣敷番之頭御役料二百俵宛　二百石高　二百俵四谷鹽町二丁メ　原田半兵衞　一番町堀ばた　人見彌右衞門七人略〇以下

〔柳營沙汰書三〕慶應三年三月十六日

靜寛院宮樣(德川家茂室)天璋院樣(德川家定室)御廣敷中樣　御代官　福田所左衞門

御廣敷番之頭勤候内百俵御足高被下之

右被仰付旨於柳之間二ノ間、老中列座縫殿頭申渡之、

〔青標紙三編〕この普請方よりして、多く御廣敷番の頭へのぼり、御普請懸りを持つは、建築造營の事に功者なるをもつてなり、又この御廣敷番之頭の御役替に、富士天と云ふ事ありて、御目付の禁仙殿と同じき通定あり、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一御廣敷番之頭八人添番十五人

〔吏徵御目見以下〕御廣敷添番六十六人組同心並打込　番之頭支配　百俵持扶持高　御普請懸三人五人扶持　燒火間、上下役、

〔明良帶錄外篇〕御廣鋪添番百俵高留守支

御留守居支配にて、多く伊賀の者より昇る、初添番並より昇る、小普請より御入人有り、又在の勤御褒美にて、昇るもあり、都て世祿にて、父子勤す、幼年にても持之、家督は燒火之間にて下さる、

〔敎令類纂初集十九〕元祿八乙亥年七月十二日

覺

一御用人略〇中次ニ添番略〇中御廣鋪番所に脇差置之、奥へ可罷通事、略〇中

廣敷添番並

亥七月十二日

〔大猷院殿御實紀六十一〕正保二年閏五月廿九日、この日徒組頭四人を廣敷添番とし、〇中略其所屬として徒士十六人出番せしむ、

〔甘露叢十一〕延寶九年九月四日、御廣敷添番被仰付、御徒頭ヨリ奥和田喜左衛門、佐藤郷右衛門、加藤四兵衛、御徒目付ヨリ阿部彌次兵衛、星野加右衛門、神村傳右衛門、湊彌五右衛門、押目付ヨリ辻宇左衛門、

〔寛政四年武鑑〕御臺様御用人〇中略

同御廣敷添番衆　百俵高　かうかいばし　野澤半之丞　青山ぜんかうじ前　淺田治郎兵衛〇以下五人姓名略

〔柳營沙汰書三〕慶應三年二月廿八日

静寛院宮様、天璋院様、御臺様、御廣敷添番、　御徒目付　増田勝五郎

右被仰付旨、於御右筆部屋椽頬替席、列座同前、同人申渡之、若年寄中侍座、

〔諸役起請文前書〕御廣敷添番

一今度御臺様御廣敷添番被仰付候上は、彌重公儀御爲第一奉存、聊以御後闇儀仕間敷候、御一門方を始、諸大名諸傍輩と、奉對御爲惡心を以申合、一味仕間敷事、

一奥方御際害がましき儀及承候共、親子兄弟知音之好身たりといふ共、毛頭他言仕間敷事、〇中略

一奥方御法度之義、晝夜無油斷見出聞出候樣可入精候、萬一不屆之族於有之者、不寄誰人、親子兄弟知音之好身、又は中惡敷輩たりといふ共、有體に御老中、御留守居衆迄可申上事、〇中略

右之條々、雖爲一事於致違犯者、梵天帝釋四大天王、總日本六十餘州大小神祇、殊伊豆箱根兩所權現、三島大明神、八幡大菩薩、天滿大自在天神部類眷屬神罰冥罰各可罷蒙者也、仍起請如件、

〔吏徴御目見以下〕御廣敷添番並　番之頭支配　五拾俵持扶持　焼火間、上下役、

〔明良帶錄新參廣〕添番並

伊賀より添番へ昇る、此所並となる、勤向添番の通たるべし、且上下勤、燒火之間御緣頰ニて被仰渡、是より本席といふ、

廣敷進上番

〔吏徵御目見以下〕御廣敷進上番三人　三拾俵三人扶持高　役上下御抱場

〔享保通鑑二〕享保三年七月三日、被仰出左之通、

覺○中略

一進上奉行○中略

右之輩、向後熨斗目、幷七夕八朔、白帷子、一切堅著用仕間敷旨、向々江急度可被相達候、已上、

戌七月

廣敷小人

〔吏徵御目見以下〕御廣敷御小人五十人　十五俵持扶持高　御普請懸貳人扶持　二半場

〔吏徵別錄御目見以下〕御廣敷御小人　享保三年戊戌七月三日、熨斗目、白帷子著用仕間敷候、

廣敷小仕事之者

〔吏徵御目見以下〕小仕事之者三人　十五俵一人半扶持高　勤料一日米壹升銀壹匁　世話役加扶持半扶持　二半場

〔大概順〕御目見以下大概順

拾俵壹人半扶持　世話役ハ拾五俵貳人扶持　　御廣敷小仕事之者

大御臺用人幷諸役人

〔殿居囊〕武家諸役班列

五百俵高　御役料三百俵　若、桔梗、月次五節句共御座間御三ノ間　大御臺樣○前將軍德川家齊妻御用人○中略

布衣以下御目見以上班列

持高　御役料二百表 御普請懸り十人扶持　留、燒、月次御白書院御勝手五節句大廣間御勝手　大御臺樣御廣敷番之頭○中略

二百俵高　御役料百表 但西丸御臺所頭ヶ兼帶　若、土圭、月次五節句共羽目間　大御臺樣御臺所頭○中略

二百俵高　西、廣用、月次紅葉間五節句大廣間　大御臺樣御用達○中略

御目見以下班列

百俵高　持扶持　西廣用、譜代、上下役、　大御臺様御廣敷添番〇中略
御普請懸りは御役扶持五人扶持

七拾俵高　持扶持　御役金二十兩　頭、譜代、上下役、　大御臺様御臺所組頭〇中略

七拾俵高　持扶持　西廣用、二半場、上下役、　大御臺様御侍〇中略

四拾俵高　持扶持　御役金十兩　頭、譜代、上下役、　大御臺様御臺所人〇中略

三拾俵高二人扶持　西廣用、二半場、役上下、　大御臺様御用部屋書役〇中略

三拾俵高二人扶持　西廣用、譜代、羽織袴役、　大御臺様伊賀者〇中略

二拾俵高三人扶持　西廣用、抱入、羽織袴役、　大御臺様御用部屋吟味役〇中略

二拾俵高三人扶持　西廣番、抱入、役上下、　大御臺様御下男頭〇中略

二拾俵高持扶持　御役金五兩　頭、二半場、羽織袴役、大御臺様御膳所小間遣組頭〇中略

拾五俵高三人扶持　頭、二半場、羽織袴役、　大御臺様御下男組頭〇中略

拾五俵高持扶持　西廣番、二半場、羽織袴役、　大御臺様御小人〇中略

拾五俵高持扶持　御役金三兩　頭、二半場、羽織袴役、　大御臺様小間遣〇中略

二拾俵高二人扶持　西廣用、二半場、羽織袴役、大御臺様仕丁組頭〇中略

拾五俵高二人扶持　西廣用、二半場、白衣役、　大御臺様仕丁〇中略

拾俵高持扶持　頭、二半場、白衣役、　大御臺様御下男〇中略

拾五俵高持扶持　二半場、白衣役、　大御臺様御膳所六尺

〔諸役人代々記　二〕一位様御用人　家宣公　御臺所　近衛殿姫君

綱吉公寶永元申年十二月五日、櫻田御殿より御供、享保二酉年正月十四日病死、　堀丹後守

同年同月同日、櫻田御殿より御供、享保四亥年八月五日願御免、　早川壹岐守

同年同月同日、櫻田御殿より御供、享保四亥年八月五日願御免、　本間豊前守

吉宗公 享保二酉年三月廿四日、御切手番之頭より百俵御加増、五百石成、同八卯年五月病死、　石野伊豫守

西丸廣敷用人

〔東職記聞 二〕監國君職

廣敷御用人三人　布衣　掌西營後廷廣敷事之職也、

〔明良帯錄 續篇〕御簾中樣御用人 五百石高 若支　御役料三百俵

御本丸御廣敷御用人に准じて知るべし

〔吏徵 上 布衣以上〕御簾中樣御用人三人・若年寄支配　桔梗間　五百石高　御役料三百俵

〔吹塵錄 三十一 德川氏〕慶應三卯年九月　　御簾中樣御用人

御役金被下高之覺

一金六百兩宛

高千貳百石以上之者江ハ半減

但御切米高七百俵以上之者江ハ不被下

同三百俵以上之者江ハ半減

西丸廣敷用部屋書役

〔吏徵 下 御目見以下〕西丸御廣敷御用部屋書役三人　御用人支配　三拾俵貳人扶持高　燒火間

役上下、二半場、　町屋敷拜領 沽券金六拾五兩

西丸廣敷用部屋吟味役

〔吏徵 下 御目見以下〕西丸御廣敷御用部屋吟味役三人　貳拾俵三人扶持高　町屋敷拜領 沽券金六拾五兩

御抱場　元文二年丁巳七月二十六日始置

西丸廣敷番頭

〔明良帯錄 新篇〕御廣敷番之頭

筆墨紙燭預り、勤方御用多し、　御簾中樣、御供二人、日々七ツ時ハ口々〆切り行く、　御普請懸

り、一人ヅヽ、日々御用多し、御産懸り、切手の裏印、月番ニて出す、御道具等預り、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月二十三日、大納言殿〈○家綱〉へ、御家人あまた附屬せらる、〈○中略〉

廣敷番頭八人、

〔常憲院殿御實紀五十〕寶永元年十二月十一日、櫻田邸の留守居四人ハ、西城廣敷番頭となり、其隸下四十九人ハ添番とせらる、

西丸廣敷添番

〔吏徵〈御目見以下〉下〕西丸御廣敷添番三十六人　番之頭支配　百俵持扶持高　御普請懸三人五人扶持　燒火間、上下役、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月二十三日、大納言殿〈○家綱〉へ御家人あまた附屬せらる、〈○中略〉廣敷添番十六人なり、

西丸廣敷小人

〔吏徵〈御目見以下〉下〕西丸御廣敷御小人三十五人　十五俵持扶持高　御普請懸貳人扶持　二半場

西丸小仕事之者

〔吏徵〈御目見以下〉下〕西丸小仕事之者二人　拾五俵壹人半扶持高　勤料一日〈米壹升銀壹匁〉　世話役加扶持半扶持　二半場

女中用人

〔東職記聞二〕女中方御用人　布衣　〈如月光院殿(德川家宣妾家繼母勝田氏)蓮淨院(家宣妾櫛笥氏)殿、今稱女中方也、〉

姬君在則置之、不在則闕之也、女中方御用人亦如此也、

〔甘露叢四十六〕元祿三年十二月十二日、桂昌院殿〈○德川綱吉母本庄氏〉御家老二百俵宛御役料被下、上野半左衛門、眞野左左衛門、森彥右衛門、

〔憲敎類典二ノ五御役〕享保八癸卯年六月十八日

月光院樣　御用人

七百石ゟ内は七百石之高に可被成下候

御役料貳百俵可被下候〈○中略〉

六月

女中用達

〔憲教類典御役二ノ五〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高并御役料定、〇中略

御女中樣方
御用達　御同朋頭

一貳百石高取來候御扶持方共

女中添番

〔憲教類典御役二ノ五〕元文三庚午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高、并役扶持、〇中略

御本丸西丸御女中樣　添番

百俵高扶持持

女中侍

〔憲教類典御役二ノ五〕元文三庚午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高并役扶持、

御女中樣方御侍

七拾俵高扶持持

〔憲教類典御抱席二ノ十四〕寶曆五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付〇中略

前々ゟ御譜代とも雖相定場所と申、取扱來候趣、左之通、〇中略

向々御女中樣御侍并書役

三丸用人

〔常憲院殿御實紀三十四〕元祿九年八月二十三日、廣敷番頭竹本次左衛門長直、堀八郎左衛門秀雪、百石づゝ加秩給ひ、三丸用人を命せらる、

〔甘露叢七十七〕元祿十五年二月四日、三御丸御用人木下伊豆守、役料二百俵賜フ、

〇

姫君用人

〔吏徵上布衣以上〕姫君樣御用人八人　若年寄支配　桔梗間　三百俵高　御役料三百俵　小石川二人　神田橋　日比谷　本鄉　霞關　辰口　一橋各一人　文化十一年甲戌五月十五日始置

〇姫君トハ、將軍ノ女ニシテ、大名ニ出嫁セルモノヲ云フ、而シテ日比谷、本鄉等ト稱セルハ、其

姫君用人

邸ノ所在地ナリ、

〔東職記聞 二〕姫君方御用人　布衣如二竹姫君、(綱吉女)利根姫君、(吉宗女)今稱二姫君方一也、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕享保八癸卯年六月十八日

竹姫君様　御用人

四百石ゟ内は四百石之高に可レ被二成下一候

御役料百俵可レ被レ下候〇中略

六月

〔吹塵録 三十一 徳川氏〕慶應三卯年九月

御役金被レ下高之覺〇中略

姫君様方　御用人

一金五百兩宛

高千石以上之者江ハ半減

但御切米高六百俵以上之者江ハ不レ被レ下

同三百俵以上之者江ハ半減

〔憲教類典 二ノ五 御役〕寶暦四甲戌年十一月十五日

宮内少輔殿

御目付江

姫君様御用人

右御役順御廣敷御用人之次ニ候間可レ被レ得二其意一候、

〔大猷院殿御實紀 六十二〕正保二年十月朔日、千代姫君〇家光女御方用人、大橋五左衛門親善、子次郎兵衛親友、〇中略初見し奉る、

〔大概順〕布衣以下大概順

姫君様御用達

二百俵高

〔寛政四年武鑑〕種姫君様〇川家治女、紀伊德川治寶妻、中略、

御用達　二百俵高　本所みどり丁　逸見半右衛門　青山御そうじ丁　栗林平五郎

姫君侍

〔吏徴御目見以下〕姫君様御侍四十四人　御用人支配　七拾俵持扶持高　見習五人扶持　小石川八人外各六人

〔大概順〕御目見以下大概順

七拾俵持扶持　二半場　上下格　姫君様方御侍

〔寛政四年武鑑〕種姫君様〇中略

御侍衆　七拾俵高　下谷御そうし丁　植野八三郎　市ケ谷かがやしき　梅村東十郎〇以下六人略

〔寛政四年武鑑〕種姫君様　御用人　布衣　御役料五百俵　五百石高

父長兵衛　三百俵　天明六午七月ヨリ　比留與十郎　父兵藏　三百石　寛政二戌三月ヨリ　有馬彦太郎

〔大猷院殿御實紀四十一〕寛永十六年九月十九日、千代姫君に付らるゝ侍五人、五拾俵づゝくはへて、各百二拾俵〇中略たまひ、〇下略

〔有德院殿御實紀四十二〕享保二十年九月十五日、養仙院竹姫〇綱吉女の御方には、添番の職を置れざるにより、御方附侍を添番の格に命せられ、俸米百俵を賜はる、

姫君添番格侍

〔諸役起請文前書〕種姫君様御附添番格御侍

一今度種姫君様御附添番格御侍被仰付候上者、彌重公儀御為第一ニ奉存、御後闇儀聊以仕間敷候、御一門方を始、諸大名諸傍輩と、奉對御為以惡心申合、一味仕間敷事、

一奧方御隱密がましき義及見及承候共、親子兄弟知音之好たりといふ共、毛頭他言仕間敷事、

一於御守殿奧方御法度之義、晝夜無油斷見出聞出候樣可入精候、萬一不屆之族於有之者、不寄誰

人親子兄弟知音之好身、又は中悪敷輩たりといふ共、有體ニ若年寄衆并御附御用人衆迄可申上事、

一女中方と不行義之好色於有之者、縦御附御用達相役たりといふ共、無用捨若年寄衆并御目付御用人衆迄可申上事、

一以御威光奢たる義不仕、又は非分申掛間敷事、

一従前々被仰出候御法度之趣堅相守、自今以後被仰出候御條目、壁書等用事相守可申候、并御番之儀無油断相勤可申候、勿論自分不行義好色、其外御法度之趣違背仕間敷事、

右之條々、雖為一事於致違犯者、○闕文略

女中職

名稱員數

將軍家ノ大奥ノ女中甚ダ多ク、其職名古今多少ノ沿革アリ、其階級モ亦尠カラズ、中ニハ搢紳家ノ女モ雜レリ、而シテ年寄格ヲ以テ其首トシ、半下ヲ以テ末班ト爲ス、年寄以下ノ諸職皆武家ノ女ヨリ選ブト雖モ、其下級ノ御末ノ如キハ、町人ノ女モ亦武家長女ノ名ヲ以テスレバ出テ仕フルヲ得、

〔青標紙 三編〕御本丸女中

大年寄 當時無之　御老女席　御年寄　御客會釋　御中臈頭　御中臈

御側御次　御相之間頭　御使番頭　御小性　御右筆頭　御相之間

御使番　御右筆　御仲居頭　御三之間　御仲居　御末頭

御火之番　御末　御末　御末は町人の娘に而も、取親に而御奉公濟、

大女臈　堂上方ノ娘ニ限リ被二召出一

小女臈

御對面所

御廣座敷

御內證　御引次　御內入　御三之間頭　御乳人　御傅頭

御伽上席　御次格衆　御札紙書　御傅　御切手　御札紙

坊主　御さし　御乳持

〔明良帯錄世職篇〕大奥女儀の昇進この女儀の昇進、ある秘本によりて補ひたり、

大年寄　御大老ナリ、表御老中ヨリ一段昇ル、當時ナシ、勝島瀨殿伊賀之輔殿ナド御末ヨリ歷昇、

御年寄　表御老中ト同格也、政治ニアヅカル奥向ノ下知ヲ司ル、

御老女席　表若年寄ト同シ、又奥向役義ノ取扱ヲ支配ス、是ヨリ御年寄爰ニ引アリ、

御客會釋

御中臈

御中臈頭　小上臈御中臈兩役ヨリ昇ル、奥向第一ノ役ナリ、

御相之間頭

御側御次　奥ノ御小納戶昇進ヨシ

御相之間　表御小性ト同シ

御使番之頭　大奥大目付ナルベシ、甚役義多シ、

御小性

御右筆頭　諸書仰ヲ用ル、是ヨリ昇進ヨロシ、

御使番

御三之間

御中居頭

御右筆　一切御用ノ書物ヲ認ム

御中居

御火之番　火ノ番ヲ司ル、時々中々部屋々々ニ長局ヲ廻ル、以下第一ノ役ナリ、昇進ヨシ、

御末頭

御末　諸向町人之娘モ取親ニテスム

大上臈　大年寄ニ同シ、少シ意味アリ、先ハ雲上ニカギル、御本丸ニテハ正親町殿西丸ニテハ萬里小路殿、

御中臈頭　表ノ番頭ニ同シ、奥第一ノ役ナリ、

小上臈

御對面所　奥御取締御子様方ノ事一切司ル、御用多シ、

御廣座敷　御間内計リヲ司

御中臈　無席

御内證

御引次

御内入

御三之間頭　表三奉行同様一切扱捌ヲ司リ、役向ニカヽハル役ナリ、

御乳人　初御乳上リ式ヲ云

御傳頭　御傳ヲ支配ス、骨折場ナリ、

御伽上席　一切骨折場ナリ、奥向ノ調ヲスル、

御次格衆　表ノ御伽ニ同シ、若キ女中ナリ、

御札紙書　御札紙ヲ認メ、御右筆ノ支配、

御切手　御切手札御断向ヲシタヽム

御さま　西丸ニテハ違フト云、一段ヨシ

御傳衆　以上ノ人ナリ、骨折場也、

御札紙　札紙計リヲ認ルニカヽル

坊主　無席

御乳持　諸向

〔御老女衆記〕御本家　老女衆

子五月廿九日、病氣に付、願之通、御暇相成り候、萬里小路殿　飛鳥井殿　花園殿　瀬川殿　瀧山殿　大崎殿

表使

小山　村瀬　岡野　藤江　濱田　島田

和宮樣〇徳川家茂夫人御附　老女衆

錦小路殿　仲村殿

表使

山田　八十岡

天璋院樣〇德川家定夫人島津氏、近衞家養女、　老女衆

梅溪殿　津は禰殿　藤崎殿　瀧井殿

表使

福田　川岡　藤瀨

女中席順

上﨟年寄　御年寄　御客應答　同格　御中﨟　御錠口　表使　御右筆頭　御右筆　御錠口介　御次　御切手書　呉服之間頭　御廣座敷頭　御三之間頭　呉服之間　御伽坊主

御目見以下

御廣座敷　御三之間　御末頭　使番頭　火之番頭　火之番　使番　御半下

〔御老女衆記〕大奧女中分限

御本家

上﨟御年寄三人　御年寄三人　御客應答四人　同格五人　御中﨟七人　御錠口五人　表使拾人　內二丸詰□人三人格御右筆頭壹人　御次頭壹人　御右筆六人　御錠口介貳人　御次拾三人　切手書貳人　呉服間頭壹人　呉服之間頭壹人〇呉服之間頭壹人恐衍　御三之間頭壹人　御伽坊主四人　呉服之間拾人　御廣座鋪拾壹人　御三之間拾三人　御末頭五人　同格使番頭貳人　御仲居拾人　火之番貳拾壹人　同格使番貳人　使番拾三人　御半下四拾四人

總人數百九拾九人

元小上臈壹人　元御客應答壹人　松榮院様附元上臈年寄壹人

右三人加貳百貳人

和宮様附

上臈年寄壹人　小上臈五人　御年寄三人　中年寄貳人　御中臈拾四人　御小性三人　表使貳人　御右筆三人　御次拾壹人　呉服之間頭壹人　呉服之間四人　御三之間七人　御仲居三人　使番貳人　御半下拾三人　宰相典侍　女藏人　三仲間貳人

總人數八拾壹人〇八拾壹人七十八人誤

天璋院様附

上臈年寄壹人　小上臈壹人　御年寄參人　中年寄四人　御中臈頭貳人　御中臈八人　御小性四人　表使四人　御右筆參人　御次拾人　呉服之間七人　御三之間八人　御末頭貳人　御仲居四人　御茶之間五人　使番貳人　御半下拾九人

總人數八拾八人〇八拾八人八拾七人誤

本壽院様〇徳川家慶妾附

小上臈壹人　御年寄參人　中年寄參人　御中臈七人　表使參人　御右筆參人　御次五人　呉服之間貳人　御三之間六人　御末頭壹人　御仲居參人　使番參人　御半下拾參人

總人數五拾參人

實成院殿附

表使拾壹人　御三之間格次壹人　年寄壹人　中年寄貳人　三之間參人　側五人　次壹人　呉服之間壹人　右筆壹人　仲居貳人　半下六人

總人數貳拾四人

合計總人數四百參拾六人
外ニ參人〇下略

〔玉露叢十四〕慶安四年四月
一去ル廿四日ニ御暇下サル、女中一千餘人也、此内百四人ハ或ハ尼ニナリ、或ハ髮ヲ切ニ付テ、ソレ〳〵ニ御扶持方ヲ下サル、御ハシタ女房二千七百餘人御暇下サル、

〔新政談〕御奥女中三分一に減少之事
奢侈の根元は婦女より起るなり、其故は、婦女と申ものは、陰柔にして人に悅ばるゝ事を性とするものにて、其上了簡淺きものなれば、天下の爲の、上の爲のと申ことは、露計も思はず、唯我よき衣を著て、人の氣に入られたしの、よき櫛笄さして、人に美しと譽られたしのと申のみにて、人のよき衣を著し美き櫛笄さしたるを見れば、一圖に美敷思ひ、譯もなく求る故、男も愛にひかされて、終には其望を叶る樣に成行は、あれを羨み、是を見效ひ、段々增長し、果もなき立派におよぶ故、一統の風となりて實用を廢し、勤向を闕ても、婦女の身支度をする樣に成るあほうものも出來るに及ぶなり、此奢侈の根元たる婦女を多く奥向に集め置るゝ樣にては、本より天下の御爲め、上の御爲、露ばかりも存せぬ心にて、事をなせば御儉約の御取締中々行屆べき儀には決て無之、且婦女と申ものは、表向役人の如く、天下の政事を預るものにてはなき故、用向ありても、皆內證の用向なり、內證の用向と申者は、如何程闕たりとも、天下の興廢利鈍には預ることはなきものなれば、如何程御減被成候迚、天下の事に於て差支ゆる事は決てなし、唯其用事迚、左右御給仕御衣服裁縫御守殿等の御贈答等の外は、格別のことあるべき謂なし、左右御給仕御裁縫迚も、御一人か御二人位の御上に付ての儀、其樣に多人數ならずとも、御間に合ぬと申ことはなきことなり、御守殿御贈答の類は、諸事御省略の上は、御守殿も女中も三分一に御減、箇樣のむだことなる

禮義は不殘御省き無之ては、御取締成兼候こと故、極御省略あらば、是又左樣に多人數掛るべき謂なし、さすれば四分一五分一に被減たりとも決て御用差支ゆることとなきことなり、其上人少なれば、役所數も局數も減じ、又被下る丶御流れ御衣服も、其外被下もの迄も減じ候得ば、御裁縫も人少にて相濟樣に相成、細事に至りては、蠟燭油湯薪炭の類迄も減少いたし候樣に相成候間、是に過たる御儉約はあらず、されば先づ是迄の三分二を御減じ被遊候ても、御先祖樣方の御時の頃に比し候に、まだ百倍にも及ぶべし、故老の咄に承候得ば、神君樣駿府に被爲入候節、折々關東へ御鷹野に被爲入候節、七人衆と號して、古き御召仕の女中あり、夫を不殘御供に被召連、御左右の御用向は其人給仕被爲仕候とのよし、其七人衆皆乘掛馬にて、御供の外の女中一人もなかりし由、高貴の女中御供をせらる丶、下女一人も召連られざるは、御質素なること是を以て推量るべし、されば定て奧向女中拾五人か二拾人には過ざることとなるべし、又承候に、伊達政宗、每年晒木綿獻上ありければ、本多佐渡內意ありて、上樣にも國持衆の獻上とあれば、よきものと思召候て、女中方御仕著に御用被遊候て、晒木綿に女中方殊の外迷惑がり候間、以來外品とは御引替可然と被申候由、古漢の文帝の盛德を譽て、幸する所の愼夫人衣地を曳かずと申傳たれ共、我神祖の御盛德に比すれば、猶及びがたかるべし、御先祖樣はか丶る御盛德にて、三百年太平の基業を開き給ることとなれば、御手本とし御效ひ可被遊ことは勿論のことなれ共、時世も違候へば、國初の通には參るまじき故、三分一と申ことなり、都て事は其邊より始まり不申候では、人々心服不仕候間、是より先づ第一に手を御下し不被成候ては、外に行屆不申候、平日に心を附候諸侯の家中儉約を致さる丶にも、奧向女中より第一に減少致されたること承候得ば、其事必行屆なり、奧向は其儘差置、家中より被遊候と承候得ば、必行屆かざるなり、近年上杉鷹山公、御賢君の聞へありて、上よりさばく御賞美あらせられ候程の御人なりしが、其初御取締の御初は、奧女中九

補任

人に被減れしより始められたり、十五萬石の御身上にて、九人にせられしは、勇斷と申すべし、

〔御留守居勤方手扣留 三〕天璋院樣御用人新規被仰付候節、老女衆江引合勤方、

一天璋院樣御用人被仰付候節、古役附添御表扣所江罷越吹聽申聞、且老女衆江引合之儀宜相賴候段申聞候間、承知之旨答置、御表より泊所江引懸御廣敷江罷出、御用人部屋江相通り、新規御用人老女衆江爲引合罷出候間、其段奧江申込、程合宜候はゞ申聞候樣、番之頭江申渡、無程奧宜旨番之頭申聞候間、御廣座敷江相通、御上之間御敷居內江入著座、新規御用人ニは御敷居外ニ著座、其節何之誰儀、天璋院樣御用人被仰付候段、老女衆江申述候得ば、新規御用人結構被仰付難有段御禮申上、老女衆歡之口上有之、御用人引候後、附添御留守居には、老女衆江御機嫌相伺候而、御用人部屋江引、

〔御留守居勤方手扣留 追加〕安政六未年八月廿七日

老女被仰付節手續繪圖面

一御廣敷江御廻、御廣座敷上之間江御通、繪圖面之場所御著座、兼而御障子之方江、萬里小路、瀧山出居、御會釋有之、御次之間ゟ御敷居際迄罷出、夫ゟ御敷居內江入被進候節被仰渡、御書付御渡、少々下り、直ニ御禮申上、萬里小路次江著座、一同御禮申上、畢而御機嫌御伺有之、御退散之節、御次之間迄、一同御送被申候事、

女中規定

〔諸役起請文前書 追加〕大奧女中誓詞

一御奉公之儀、實義を專一ニ仕、少しも御後闇き義致間敷候、萬御法度之義堅く相守可申事、

一御爲ニ奉對、惡心を以て申合致間敷事、

一奧方之義、何事によらず、外樣へもらし申間敷事、

一女中方之表向願ヶ間敷義、一切取持致まじき事、

付、御威光をかり、私の驕り致間敷事、

一諸傍輩中のかげ言を申、或は人の中をさき候様なる義仕間鋪事、

一好色がましき義ハ不及申、宿下之時分も物見遊山に參る間敷事、

一面々心の及び候程ハ、行跡を嗜み可申事、

付、部屋々々火の元入念可申付事、

以上　コレハ享保六年之達書に見えたり

〔大成令　三十〕寛文三卯年十月

女中衣類之直段被仰付之、此趣禁中方其外御女中方江も以書付被相達之、

覺〇中略

一御本丸女中之小袖、一おもてにつき、三百目より高直にいたすまじく候、それより下之衣類は、品により彌下直に可仕事、

〔大成令　三十〕御女中樣方附江

女中衣類次第に結搆に成候、左樣ニは有之間敷儀ニ候間かろき品を用候樣にとの思召に付、御本丸女中は、向後其心得ニ而有之候、左候得ば、御本丸に准じ、御城江女中御使被差上候節、其心得可有之事ニ候、此段爲御心得申達候、

四月〇享保六年

〔德川禁令考　二十一後房女部〕寛文十戌年二月廿二日

女中法度　條々

一奥方上下幷に公儀のためを第一に存じ、うしろぐらき儀仕べからず、總じてほうばい中申合、あしき儀に一味いたし、かたん仕べからざる事、

一そば近奉公いたす輩別して申合あしく仕べからざる事、

一奥方法度之おもむき何事によらずいさゝかも相そむくべからざる事、

一梅岡野、矢島、川崎、此四人申渡儀相そむくべからず、其外たれ人によらず、法度之旨申きかするにおいてハ、違背いたすべからざる事、

一萬奥方の作法、他人は申におよばず、親類緣者よしみの者たりといふとも、一切他言仕べからず、以來さきしよりあらわるゝにおゐてハ、急度くせ事に申付べき事、

一けんやくの事、かねて申出す通り、かたく相まもり、衣類幷に音信取かはしの儀、なる程かろくいたすべき事、

一女やど〳〵へ出る事、梅岡野、矢島、川さき、此四人にうかゞひさしづしだひ、日數を定めまかり出べし、みだりに逗之におゐてハ、くせ事たるべき事、

一へや〳〵火之用心、晝夜ともにゆだんなく申付べき事、

右條々かたく相まもるべし、もし違背のやからあらバ、科のをもきかろきにしたがひ、急度申付べきもの也、

寛文十年二月廿二日御黑印

條々

一萬おもてむきの御用、大猷院樣御條目、幷に此たびせいしの前書にも有之通相まもられ、一切かまひ申さるべからず、もちろん御前へ申上らるの儀も、かたく無用たるべき事、

一御臺樣御爲よきやうに、萬相心得らるべし、しかれども當座御意に入、後にさゝわりになるべき事者申上らるべからず、もしさやうの人あらば、老中江申さるべき事、

一諸大名、同内儀かた、公家門跡御はたもとのめん〳〵、出家町人、總じてたれ人によらず、御前に

おゐてとりなしたて、そしようがましき儀相たのまれ申上ざるように御そばちかき面々つねづねかたく申渡さるべき事、

一世上のとりさた承、諸人よしあしのうはさ、みだりに御前江申上らるべからず、風せつにハ、ひいきひいきありて、誠はまれにて、大かたいつはりたるべし、此旨あと／＼の御條目にもくわしくこれある間、御そば近き衆へよく／＼申ふくめらるべき事、

一奥方にて御目見いたす女中、かねて御定の外、かたく無用たるべし、もし御目見いたさずしてかなはざる人あらば、そのしだひ、老中まで内談之上、御耳に立らるべし、たとひ御書たての内たりといふとも、御一門がた御目見の時ハ、前かど老中へうかゞひ申さるべき事、

一御前ちかき面々、つね／＼心をつけ、あるひは酒にゑひみだれ、あるひは氣むらなきものあらバ、たれ人によらず、右四人まで、有ていに申様によく相ふくめらるべき事、

一奥方役人の事、萬よし惡をせんぎいたされ、前かた老中へ内談ありて、御耳に立られ、仰付らるるやうにいたさるべき事、

右條々かたく相守らるべし、もし違背のともがらあらバ、御せんさくの上、急度くせ事に仰付らるべき者也、

寛文十年二月廿二日　但馬守判　大和守判　美濃守判　豊後守判　雅樂頭判

於梅殿　岡野殿　矢島殿　川崎殿

〔徳川禁令考二十一後聚女部〕元祿十二卯年十月廿三日

儉約振舞等之事

一女中衆常々儉約を用、奢りヶ間敷儀無之様ニいたさるべき事、

一總而祝儀取替等、成丈ヶ輕くいたされ、たとひ御加増など被下候節も、祝儀返禮分限相應ニ隨

分輕くいたさるべき事、

附、寺社方江之寄進物、又ハ法事等かろくいたさるべき事、

一衣類めなれ候分ハ、不ㇾ苦候、度々結構に改めらるゝ事無用にいたさるべく候、拜領物ハ格別之事、

一總而振舞等かろくいたさるべく候、月番あけ之振舞無用にいたさるべく候、御普請抔之節振舞無用にいたさるべく候、尤音信等いたさるまじき事、

附、せいしにも被ㇾ仰付候通、御奉行人肝いられ候節、親類縁者たりと云とも、善惡之吟味最屓ケ間敷儀無ㇾ之樣、彌相守らるべき事、

〔敎令類纂二集四十一ノ附〕享保六辛丑年四月

定

一女中文通之儀、祖父、祖母、父母、兄弟、姉妹、おぢおば、甥姪、子孫迄にかぎるべく候、然共此外文通これなくかなわざる子細これあり候ハヾ、そのだん女中年寄迄斷をたて申べき事、

附、宿さがりの節、親類出合之儀同樣たるべし、右何も年寄衆にて吟味之上帳面にしるしおき申さるべき事、

一宿さがり被ㇾ致候女中は、親子をはじめ長局へ呼よせ申まじき事、

但ちかき親類之內、厄介無ㇾ之部屋子ニいたしたきものは、其品年寄衆へねがひ候上、御留守居へ相達し、さし圖を受可ㇾ申事、

一宿さがり無ㇾ之衆は、祖母母娘姉妹おば姪、男子は、九歲までの子兄弟甥孫、此分はよび寄せ申べく候、とめ候而かなわざる子細これあり候ハヽ、年寄衆へことわりを立、御留守居へ相達し候うへ、二宿にかぎるべき事、

一長局へつかひの女、宿つかまつらせ申間敷候、とめおかずしてかなわざる子細有之候ハヽ、年寄衆へことわりをたて、御留守居へ相達し差圖をうけ申べき事、

一衣服諸道具音物振舞事ニ至る迄、隨分おごりがましき儀これなく、總而分限過たる品にせまじき事、

一部屋々々にて振廻事いたし、寄合候とも、夜をふかし申まじく候、火の元のために候間、急度相心得らるべき事、

一御紋付之御道具類、一切私用にかし申間敷事、

一長局へ出入候ごせハ、二人きわめ置可申事、

一自分用として御下男一切つかひ申まじく候、急成事ある節は、年寄衆より御廣敷番頭へことわりのうへつかひ申すべき事、

一めしつかひの女のうち、もし見居さるやうすのものは、早々おきかへ申べく候、御城内大切の儀に候間、少之内も抱置申間敷事、

右ヶ條堅守置、誓詞前書之趣相違これなきやうに心がけらるべき事、其ためひだりに志るしおき候事、

以上

享保六年丑四月

一御奉行之儀、實義を第一ニ仕り、少も御うしろぐらき儀いたすまじく候、よろづ御法度之おもむき堅く相守り申べき事、

一御爲ニ對したてまつり、惡心を以申合いたすまじき事、

一奥方之儀、何事によらず、外様へもらし申まじき事、

一女中方之外、表向願ひがましき儀、一切とり持致まじき事、
　附、御威光をかり、私のおごりいたすまじき事、
一諸傍輩中のかげ事を申、あるひは人の中をかき候やうなる儀つかまつるまじき事、
一好色がましき儀は不ㇾ及ㇾ申に、宿下りの時分も物見遊所へまいるまじき事、
一めん〳〵心のおよび候ほどは、行跡をたしなみ可ㇾ申事、
　附、部屋々々火之元念入申つくべき事、
〔諸家奥女中袖鏡上〕御召抱人支配女より心得申渡しの事
一御家法通り、相心得申様の事、
一唯今まで他の御殿相勤居候振合につとめ申間敷、尤も他御殿に競べ申間敷候事、
一言葉づかひの事、附り忌みこと葉の事、
一御役割の外、一切手出し申間敷候事、
一諸見せ物、娼家、俳優の事申間じく候事、
一行儀見ならひ申やう申わたしの事
一同勤一和致し候やう申渡しの事
一衣服身拵へ等、百五十日の内に、御定めに改め申候やう堅く申渡しの事、
一総女中とも御番相勤め候うちは、一切局えは立より申間敷、又著替候とも、部屋へ來り候事、當番の心得方には是なく候事、
一御番相勤め候うちは、少しも御用欠申さぬやう、一統つね〳〵心得申べく候事、
一手水場著替所は、元より建置れ候儀にて、部屋へ立越申筋は、平御奉公人においては、猶さら有まじく候、尤も著替の時刻には、末女より部屋々々へ申通じ、著替所へ持來り候やう致すべく、

又女ども著替持參著替所へ來り居人々、主人の著かへいたさせ引取申べきやう、それ〴〵申渡し置るべく候事、

〔諸家奧女中袖鏡下〕御禁制品々の事

一紫色　吉凶の紋　善惡の摸樣

總女中極禁の事

一御三の間以上、はなやかなる小紋、端出なる染もやう、縞がら等用ゆべからざる事、

一總女中、禁ずべき品は、羽織、袷裡、同色の品、俗に引返しといふ胴著を、態と上に用ゆる事、襠袢に、緋縮緬のたぐひ、又長襠袢、蹴出しの類ひ、別品の半襟かける事、襦衣長きしな、同緋縮緬のたぐひ用ゆる事どもなり、

一丸帶は、御揃御次以下禁ず、

一腹合せ、帶赤地、總女中とも、二十才以上禁ずる事、

右之通りに付、格並、見習居の人々列位に應じ、夫々心得申すべき事、

〔江島處刑〕三女中御刑罰事略

一正德甲午年正月、(寶正德四年、有章院樣(德川家繼)宣下之二年、)常憲院樣(○德川綱吉)文昭院樣(○德川家宣)御廟へ御代參として被遣候人數、　江島大年寄　櫻山年寄　宮地年寄　吉川表使　いよ御中居　れん次頭　よせ次頭　木曾路御使番　藤枝　よの三ノ間　きす三ノ間　千茶ノ間　以上拾貳人、芝へは江島、上野へは宮地を頭として、二わけにわかりて行、江島は御廟の御代參をいたし、それより直に木挽町山村長大夫芝居見物に參り、兼而御代參女中之事相勤られ候て以後は、方丈におゐて、饗應有之、先例に而候處、同日は方丈へもまいらず、退れ候故に、役僧共、例格相違に付、不審申合候處、左かる處、山村座に、奧女中大勢見物の沙汰相聞え、其よし芝山内江も通じ候人有

待遇

レ之、

一宮路も上野の御代參相仕廻、すぐに山村座へおちあひ、雙方あわせ十二人一座にて、役者どもを召呼、酒盛時刻うつり、申刻比御城へ罷歸、○中略

一二月二日、右十二人の女中、御廣敷へ迄被レ召出、御留守居列座にて、松前伊豆守申渡有レ之、江島事白井平右衛門江當分御預ケ、女中之分五十七人江申渡、

正月十二日、上野增上寺參詣之節、木挽町見物所江立寄、下々迄不屆之事どもに付、追放被レ仰付レもの也、

右女中分乘物にのせ、雨戸をはづし、敷もの無レ之、平川口より直に下宿、

〔御留守居勤方手扣留二〕老女衆江町屋敷被レ下勤方

一左之通之御書付、當番之者江御老中方御直々御渡し、

誰江

何町誰上地　何坪　誰

右町屋敷願之通被レ下候

一右御書付御渡候ハヾ、御廣敷番之頭、扣所江呼寄、老女衆江申渡有レ之候間、其段奥江申通候樣申達、其後御廣敷江罷越、御用人部屋に扣居、奥宜旨番之頭申聞候間、御廣座敷江罷通候得共、多分月番之老女衆、圖之通出座に付、右前江罷越、誰殿御老中方被二仰渡一、誰江老女衆、町屋敷被レ下旨申達、御渡之御書付相渡候へば、可レ申達旨被二申聞一、退座被レ致候間、此方ニも退座、同所御次之間定席に扣居候得バ、無程最前之所江老女衆被レ出候間、猶右前江罷越候と、誰江町屋敷被レ下候段申達候處、難レ有仕合奉レ存段被二申聞一候間、可レ申上旨申述、夫ゟ御機嫌相伺退座、猶又御次之間定席に著座致し居候得バ、屋敷拜領之老女衆、圖之通被レ出、願之通町屋敷拜領被二仰付一、難レ有段被二申聞一候間、可レ申上レ旨

申達、相應及挨拶退散、

〔敎令類纂初集十九〕正德三癸巳年

大奧局常々修復住居替井疊替之覺〇中略

一置戶棚數之儀、大年寄は四ッ五ッ迄、中年寄ゟ表使ひ迄は三ッ四ッを限り、御右筆御次呉服之間迄は二ッ三ッ、御廣敷御三之間迄は二ッ限り、それより末は一ッづヽ、御半下部屋ハ、大勢寄合ニ候間、部屋一間に二ッ迄ハ可差置候事、〇中略

一仕付け違ひ棚之儀、大年寄輕き仕形之違ひ棚は不苦候、其外之女中部屋ニハ、無用たるべき事、〇中略

一薄緣相渡し候儀は、大年寄拾貳枚ヅヽ、中年寄九枚ヅヽ、御中﨟御小性表使七枚ヅヽ、御次呉服之間御右筆、御持佛比丘尼ごせ五枚宛、御廣座敷御三之間御末火之番御中居、御茶之間御使番御半下、三枚宛、右前々ゟ之定之通りにて、願に候ハヾ一年に壹枚宛ハ相渡し可申候、尤願無之候ハヾ、相渡し申間敷候、但し部屋替又は無據儀有之候ハヾ、其段吟味之上、薄緣敷候はで不叶所は可相渡候、其外ハ右之通たるべき事、

〔寶曆集成綸綠錄十四〕延享元子年九月

御留守居江

女中病氣ニ而御暇相願候ハヾ、御免之刻、御奉公三十年以上勤候もの江は、取來候御切米御合力金之內多キ方は、御扶持方右兩樣一生之內被下候間、被仰其意老女衆江も可被達置候、

九月

〔御留守居勤方手扣留二〕老女衆初め女中江被下物之御目錄、御老中方ゟ御渡之節勤方之例、

一安政五午年七月廿日

御養君樣(○家茂)被仰出候に付、明廿一日公方樣(○家定)宰相樣御臺樣より被下物有之候段老女衆江可達旨御書取紀伊守殿御同朋頭を以御渡に付、番之頭江相達、番之頭ゟ表使を以老女衆江達す、翌廿一日於新部屋前溜右被下之御目錄紀伊守殿御渡、宰相樣ゟ之被下御目錄は、同所におゐて中務大輔殿御渡、何も掛り伯耆守請取、御廣敷江持參、御用人部屋江扣居、番之頭江御目錄老女衆江可相達旨申達す、無程老女衆飛鳥井殿初瀨殿兩人被出候段申聞候に付、直に公方樣、宰相樣、御臺樣ゟ被下之御目錄、一度に持參、御廣座敷江持參、御同所御次之間ゟ入御、上之間御障子之方に著座、一寸時宜致し候と、老女衆飛鳥井殿計被進候に付、此方にも進み出、御養君樣被仰出候爲御祝儀、御目錄之通、公方樣、宰相樣、御臺樣ゟ被下候段申述、右御目錄一度に相渡、少々後江退き候節、拜領物被致難有段御禮被申候に付、可申上旨相答、直に罷立、御用人部屋江引、夫より退出、

〔御留守居勤方手扣留 二〕老女衆老衰に付御奉公御免、且久々相勤候に付、拜領物被仰付候節之勤方、

一安政五午年七月廿九日、加藤伯耆守泊之節、備後守殿御退出ゟ、御廣敷江御廻之旨、金阿彌を以被仰渡候に付、其段番之頭江達ス、但右は老女衆岩岡老衰ニ付、御奉公御免之旨、於御廣敷被仰渡候段、内々申聞、右之心得ニ而、御手續書席圖差出候樣、且來る廿九日、來月二日御廻りニ而、御廣敷向御差支之儀無之哉之旨、先達而申聞候ニ付、其段番之頭江相達、席圖御手續書等取調、且來ル廿九日御廣敷向御差支無之段、番之頭ゟ申出候趣、片山與八郎江相達、右樣之先例取調候處、右被仰渡相濟、御廣座敷御入頰邊ニ而御老中方御退散之節、御書付御渡之趣に付、今日も右之通候哉之旨、北角十郎兵衞江聞合候之處、右之通之旨申聞候間、右之心得ニ罷在、

〔御留守居勤方手扣留 三〕泊御番之節心得

一御本家女中初め天璋院樣、姫君樣方、本壽院樣、其外共御附女中御合力金、御切米金手形、且比丘尼共、御勝手御老中方御壹判ニ付、御扣壹通添進達、尤裏書表御右筆所江申談、

一右同斷、御附女中、比丘尼共御切米、御借米請取、手形は裏書御勘定所ニ而出來之上、同所組頭ゟ差越候間、請取、部屋江持參、爲調印、席江出し置、調印濟其筋江達、

〔德川禁令考後房女部二十一〕天保十四卯年十二月廿四日

女中江御救金被下候趣

大炊頭殿御直播磨守江御渡

戸川播磨守　榊原主計頭　佐々木循輔　立田岩太郎

此度世上一統御救助筋に付、大奥女中之儀は、御恩惠ニもれ候姿故、格別之思召を以、金五千兩被下置候、尤女中抔江容易に御金者不被下候思召ニハ被爲在候得共、此度之儀ハ、一統御救之儀ゆへ、右之通被仰出候間、右思召之所をも達し置候樣ニとの御沙汰ニ候、尤御金出方之儀は、大坂御用金を以可被取計候、

〔雜話〕丑年○嘉永六年老女衆江達

女中衆剃髮之儀、此度は格別の思召を以、六拾歲以下之者も、勤年數に寄、剃髮被仰付候得共、向後は六拾歲以上、年數相勤、且勤向等格別に無之候而ハ、剃髮被仰付間敷候間、兼而右之心得ニ而罷在候、御守殿女中衆剃髮之儀者、是迄御方々樣御菩提之爲相願候へ共、御菩提之儀は諸寺院ニ而御法要等相營、萬端之勤行等致し、右ニ而相濟候事に付、以來は御菩提之爲相願候名目は御取用は無之、勤功年數等を以剃髮被仰付候間、法衣著用精進致候ニも不及候段被仰出候事、

但御守殿御住居向も、右ニ准じ可被心得候、

大年寄
上臈年寄
大上臈年寄
小上臈

一剃髮之女中衆心得方之儀は、別紙之通相成候ニ付、是迄剃髮致居候者共、精進幷衣著用心得方をも、老女衆に伺候ハヾ、銘々存寄次第之旨可ㇾ被ㇾ申聞ㇾ候、此度剃髮被ㇾ仰付ㇾ候女中衆も、右同樣ニ存寄之事ニ候上ニ而ハ、御構無ㇾ之候間、此段老女衆心得之ため相達置候事、

別紙

是迄剃髮之女中衆、文恭院樣、愼德院樣、其外御方々樣相勤候面々どもハ、御方々樣御忌日參詣之儀は、素よりに候得共、御附々無ㇾ之御方々樣江も、順合等有ㇾ之、參詣致し、且老年に及び候者抔は、自然難儀ニも可ㇾ有ㇾ之、以來御方々樣御忌日は勿論、其外は當人の存寄次第ニ參詣致し候ハヽ勝手次第之事ニ候、此段爲ㇾ心得ㇾ申達候、

丑九月

〔札差業要集 中〕三季御切米御扶持方渡り御藏方御定法荒增左に〇中略

一御女中御切米は、二季渡り、玉なし、皆米渡り、

〔明良帶錄 世職篇〕大年寄〇〇〇

御大老ナリ、表御老中ヨリ一段昇ル、當時ナシ、勝嚴瀨殿、伊賀之輔殿ナド御末ヨリ歷昇、

〔御老女衆記〕大奧女中分限

御本家

一御切米五拾石　一御合力金六拾兩　一拾人扶持　一薪貳拾束　一炭拾五束　一湯之木五月ゟ八月迄二十束、九月ゟ四月迄十五束、宛　一油有明一 半夜二　一五菜銀貳百目壹分　右上臈御年寄〇〇〇〇 〇中略

和宮樣附

一御切米五拾石　一御合力金五拾兩　一八人扶持　一薪拾五束　一炭拾俵　一湯之木五月ゟ八月迄拾七束、九月ゟ四月迄拾三束ツヽ、　一油有明一 半夜一　一五菜銀貳百目　右上臈年寄〇〇〇

〔御方々樣御附女中名前〕大奥御附上﨟御年寄萬里小路、○中略和宮樣御附上﨟御年寄錦小路、小上﨟ふぢ、のぶ、やす、るゐ、○中略天璋院樣御附上﨟御年寄梅溪、小上﨟ちゑ、○中略本壽院樣御附小上﨟類瀨、

〔寶曆集成絲綸錄十四〕延享三寅年二月　三室

大納言樣○家治上﨟御年寄被仰付候、向後贈物有之候間、其通可被遂候、

〔明良帶錄世職篇〕大上﨟

大年寄ニ同ジ、少シ意味アリ、先ハ雲上ニカギル、御本丸ニテハ、正親町殿、西丸ニテハ、萬里小路殿、

〔御老女來記〕大奥女中分限

和宮樣附

一由緒 寄合三枝釵貢 市ヶ谷加賀屋敷 錦小路

一御切米四拾石　一御合力金四拾兩　一五人扶持　一薪拾五束　一炭拾俵　一湯之木五月ゟ八月迄拾七束ヅヽ、九月ゟ四月迄拾三束ヅヽ、　一油有明一 半夜一　一五菜銀貳百目　右小上﨟

〔明良帶錄世職篇〕御年寄

表御老中ト同格也、政事ニアヅカル、奥向ノ下知ヲ司ル、

〔御老女來記〕大奥女中分限

御本家○中略

一由緒 伏見奉行 林肥後守 濱町かきがら町 萬里小路　一由緒 寄合三枝釵貢 市谷かゞやしき 飛鳥井

一由緒 本多主膳正 八町堀 花園

一御宛行都而前○上﨟御年寄同斷　右御年寄

〔御方々樣御附女中名前〕大奧御附御年寄、瀧山、大崎、○中略和宮樣御附御年寄、仲村、少進、玉島、○中略天璋院樣御年寄、つぼね、藤崎、瀧井、○中略本壽院樣御附御年寄、岩尾、瀧浦、八重野、

〔寶曆集成絲綸錄十四〕延享二丑年九月

高瀨次　清崎

右御年寄被仰付候、並之通贈物有之候、此段可被達候、

中年寄

〔御老女衆記〕大奧女中分限

和宮樣附○中略

一兄奧醫師小堀祐益　中橋桐河岸　仲村○中略

一御切米貳拾石　一御合力金四拾兩　一四人扶持　一薪拾束　一炭六俵　一湯之木、五月ゟ八月迄十束ヅ九月ゟ四月迄九束、　一油有明一半夜一　一五菜銀百貳拾四匁貳分　右中年寄

〔御方々樣御附女中名前〕和宮樣御附中年寄、須磨浦、小野田、○中略天璋院樣御附中年寄、歌川、富野、○中略本壽院樣御附中年寄、園江、歌島、浪岡、○中略實成院殿附中年寄、江澤、

客應答

〔御老女衆記〕御本家○中略

一弟小普請美濃部勘之助　番町裏四　瀬川

一甥御小性頭取諏訪安房守　赤坂氷川下　大崎

一弟御小納戸大岡孫右衛門　四ツ谷西念寺横町　瀧山

一御切米貳拾五石　一御合力金四拾兩　一五人扶持　一薪拾束　一炭六俵　一湯之木五月ゟ八月迄拾束、九月ゟ四月迄九束、　一油有明一半夜一　一五菜銀百貳拾四匁貳分　右御客應答

〔御方々樣御附女中名前〕大奧御附御客應答、歌山、三保島、御客應答格瀧島、藤尾、

中﨟

〔明良帶錄世職篇〕大奧女儀の昇進

御中﨟頭表ノ番頭ニ同ジ、奧第一ノ役ナリ、───御中﨟無席

〔御老女衆記〕大奥分限帳

御本家○中略

一又甥御小納戸大久保新五左衛門　石野　一兄御小性組土屋庄左衛門　表二番町　浪江

一弟御小性組坪内杢之助　本所石原　成瀬　一甥大御番都筑鐵太郎　四ツ谷大番町　若村

一兄小普請山本嘉兵衛　下谷和泉橋通り　瀧島

一御切米貳拾貳石　一御合力金四拾兩　一四人扶持　一薪拾束　一炭六俵　一湯之木五月ゟ八月迄十束、九月ゟ四月迄九束、　一油有明一一半夜一一　一五菜銀百貳拾四匁貳分　右中臈

〔御方々様御附女中名前〕大奥御附御中臈よさ、にわ、すゞ、みき、○中略和宮様御附御中臈やと、きそ、よも、いく、ちと、みさ、多せ、さく、やさ、いわ、うた、つく、○中略天璋院様御附御中臈頭、袖村、島澤、花岡、御中臈りき、まり、加代、つゆ、さ賀、ふ久、ふで、こと、

小性

〔御老女衆記〕大奥女中分限

和宮様附○中略

一祖父西丸御裏御門番之頭遠山清左衛門　小日向新小川町　すま

一甥御小納戸青木八太郎　土手四番町　やと

一弟御勘定吟味方改役並出役八木岡三郎　赤坂築地仲之町　きそ○中略

一御切米拾貳石　一御合力金參拾兩　一三人扶持　一薪拾束　一炭六俵　一湯之木五月ゟ八月迄拾束、九月ゟ四月迄九束ツヽ、○中略　右御小性

〔御方々様御附女中名前〕和宮様御附御小性れつ、かな、ゆ賀、○中略天璋院様附御小性そで、

御錠口

〔御老女衆記〕大奥女中分限

御本家　御錠口五人、○中略御錠口介貳人、○中略

表使

御本家略○中

一甥御小納戸土屋忠兵衛　小川町今川小路　くわ

一父紀伊殿家來土橋平輔　赤坂屋敷内青山不二見通り　よさ

一弟小普請小池鈴三郎　四ッ谷仲町　にわ　一兄外國奉行竹本隼人正　小川町雉子橋通り　すず

一父御持頭内藤若狹守　御茶の水　みき　一兄御小納戸齋藤久右衛門　牛込富士見馬場　いと

一父寄合内藤安房守　六番町　たき

一御切米貳拾石　一御合力金參拾兩　一五人扶持　一薪拾束　一炭六俵　一湯之木五月ゟ八月迄拾束、九月ゟ四月迄九束、　一油有明一半夜一　一五桒銀百貳拾四匁貳分　右錠口略○中

一御切米八石　一御合力金參拾兩　一三人扶持　一薪八束　一炭四俵　一湯之木六束

一油有明一　一五桒銀百目　右御錠口介

○按ズルニ、御錠口ノくわ、よさ、にわ、すず等ハ、中﨟ノ下ニモ見ユ、或ハ之ヲ兼ヌルモノ歟、姑ク揭ゲテ疑ヲ存ス、

〔御老女衆記〕大奥女中分限

御本家略○中

一由緒小普請坪内伊賀守　表六番町　筒井　一弟表組右筆萬年邦三郎　本所南割下水　嵯峨野

一甥清水附上野隼之助　番町御厩谷　藤尾略○中

一御切米拾貳石　一御合力金參拾兩　一三人扶持　一薪拾束　一炭六俵　一湯之木七束

一油有明一半夜一　一五桒銀百貳拾四匁貳分　右表使

藤野代　牧尾

〔寶曆集成綵綸錄十四〕延享元子年十月

右表使被仰付候、向後贈物有之候間、其段可被達候、

　　　　　　　　　　　　　　源野代　清田

〔寶暦集成絲綸錄十四〕寶暦二申年三月

　　　　　　　　　　　　　　御本丸表使助　戸川

右本役ニ成候間、可被得其意候、

御次

〔御老女衆記〕大奥女中分限

　御本家　○中略

一甥　小普請世話取扱石渡忠七郎　牛込築土下　小山　　一弟　小普請松平友太郎　小石川馬場　村瀬

一甥　小普請荒川雄蔵　下谷二丁目　岡野

一兄　御鷹匠組頭山川仁右衛門　雑司ヶ谷御鷹部屋　藤江　○中略

一御切米拾石　一御合力金參拾兩　一三人扶持　一薪八束　一炭四俵　一湯之木六束

一油一有明　一五菜銀百目　右御次頭　○中略

一御切米八石　一御合力金廿五兩　一三人扶持　一薪八束　一油一有明　一五菜銀百目

　右御次

右筆

〔明良帯錄世職篇〕御右筆頭　諸書仰ヲ用ル、是ヨリ昇進ヨロシ、

御右筆　一切御用ノ書物ヲ認ム

〔御老女衆記〕大奥女中分限

　和宮様附　○中略

一甥　御書院番筒井鐡之丞　牛込逢坂　山田　　一甥　小普請御澤伊三郎　青山若松町　八十岡

一御切米八石　一御合力金廿五兩　一三人扶持　一薪八束　一炭五俵　一湯之木六束

一油有明一　一五菜銀百貳拾壹匁貳分　右御右筆

〔御方々樣御附女中名前〕大奥御附御右筆頭志賀野、御右筆伊ね、ちも、とや、むめ、いさ、切手書利勢、とり、○中略和宮樣御右筆ちや、ぬい、○中略天璋院樣御右筆磯野、加久、まち、さや、○中略天壽院樣御右筆ゑま、せの、ゆみ、○中略實成院殿附右筆かさ、

切手書

〔明良帶錄世職篇〕御切手　御切手札、御斷向ヲシタヽム、

〔御老女条記〕大奥女中分限

御本家　切手書二人○中略

御本家

一兄御番醫師岡仁菴　麻布永坂上つち　一甥小普請飯高六之助　四ッ谷新家敷まし

一弟御小性組小波田辰次郎　小日向武島町知そ○中略

一御切米八石　一御合力金参拾両　一二人扶持　一薪八束　一炭五月ゟ八月迄三俵、九月ゟ四月迄五俵、　一湯之木六束　一油一有明　一五菜銀百目　右切手書

札紙書

〔明良帶錄世職篇〕御札紙書　御札紙ヲ認メ、御右筆ノ支配、

呉服之間

〔御老女条記〕大奥女中分限

御本家○中略

一甥小普請大谷木玄仲　下谷御徒町りせ　一兄御小納戸大久保新五左衛門　麹町天神前とり

一御切米八石　一御合力金参拾両　一三人扶持　一薪八束　一炭三俵　一湯之木六束

一油一有明　一五菜銀百目　右呉服之間頭○中略

和宮樣附○中略

一甥御殿小普請利部笠原三藏　四ッ谷大番町この　一兄大御番山瀬虎太郎　千駄木團子坂とる

一兄小普請島山猪入郎　麻布市兵衛町やわ略○中
一御切米八石　一御合力金參拾兩　一三人扶持　一薪八束　一炭三俵　一湯之木六束
一油一有明　一五菜銀百目　右吳服之間頭
一甥小普請三橋九十郎　小石川箪笥町小澤
一御切米八石　一御合力金貳拾兩　一三人扶持　一薪八束　一炭三俵　一湯之木六束
一油一有明　一五菜銀百目　右吳。服。之。間。

三之間

〔明良帶錄世職篇〕御。三。之。間。頭。　表三奉行同樣、一切扱捌ヲ司リ、役向ニカヽハル役ナリ、

〔御老女衆記〕大奥女中分限

御本家略○中

一兄小普請內藤道右衛門　大塚きむ　　一父御使番坪內源五郎　麻布龍土ふゆ
一父御小性組春日牛五郎　小日向新小川町かゑ略○中
一御切米五石　一御合力金拾五兩　一貳人扶持　一薪七束　一炭參俵　一湯之木五束
一油一有明　一五菜銀七拾目　右御。三。之。間。

御伽坊主

〔明良帶錄世職篇〕御。伽。上。席。　一切骨折場ナリ、奥向ノ調ヲスル、

〔御老女衆記〕大奥女中分限

御本家　御。伽。坊。主。四人略○中

御本家略○中

一弟大御番坂川武五郎　赤坂築地仲之町横町長久　　一甥大御番小笠原安太郎　牛込築土明神渡口林佐略○中
一御切米八石　一御合力金廿兩　一三人扶持　一薪八束　一炭參俵　一湯之木六束　一油
一有明　一五菜銀百目

廣座敷

〔明良帶錄 世職篇〕御廣座敷　御間內計リヲ司ル

〔御老女衆記〕大奧女中分限

御本家　御廣座敷拾壹人○中略

御本家○中略

一兄 御小性組小倉十兵衛　本所林町二丁目くの　一弟 小普請長谷川德五郎　本所南割下水ふき

一兄 小十人矢部勝太郎　牛込逢坂るや○中略

一御切米五石　一御合力金拾五兩　一二人扶持　一薪七束　一炭三俵　一湯之木五束

一油 一有明　一五菜銀七拾目

仲居

〔明良帶錄 世職篇〕御。仲。居。頭。——御。仲。居。

〔御老女衆記〕大奧女中分限

御本家○中略

一御切米五石　一御合力金拾五兩　一貳人扶持　一薪六束　一炭貳俵　一湯之木五束

一油 一半夜　一五菜銀五拾目　右御仲居○中略

和宮樣附○中略

一兄 小十人矢部又左衛門　牛込逢坂部屋とゑ　一祖父 御馬預鵜見七左衛門　虎ノ御門外そま

一父 御書院番筒井牛右衛門　麻布六本木つけ○中略

一御切米五石　一御合力金七兩　一貳人扶持　一薪六束　一炭貳俵　一湯之木五束　一油

一半夜　一五菜銀五拾目　右御仲居

御末

〔御老女衆記〕大奧女中分限

天璋院樣附○中略

火之番

一父（大御番石川主計）　麻布白銀御殿跡奴坂りん　一父（新御番小笠原半十郎）　兩國濱町とな
一兄（御小性組千葉伊三郎）　青山五十人町てよ〇中略
一御切米五石　一御合力金拾五兩　一貳人扶持　一薪七束　一炭參俵　一湯之木五束
一油（有明一）　一五菜銀七拾目　右御。末。頭。
〔明良帶錄世職篇〕御。末。　諸向町人ノ娘モ、取親ニテスム、
〔明良帶錄新釜篇〕火之番　諸部屋役所火之番を致、御定燒火之間明り爐定有り、時半に廻り五半時御引け廻り鎭す、四ッ引、有明は朝消す、
〔御老女衆記〕大奧女中分限
　御本家〇中略
一弟（小普請方手代廣瀨彥七）　麻布相模橋田島町唐歌　一兄（伊勢屋茂兵衞）　赤坂新町國梅
一兄（丸屋淸兵衞）　神田旅籠町もみぢ〇中略
一御切米五石　一御合力金七兩　一貳人扶持　一薪六束　一炭貳俵　一湯之木五束　一油
（半夜一）　一五菜銀五拾目　右火之番

使番

〔明良帶錄附錄〕御。使。番。之。頭。　役義甚むつかしく大目付と同樣也、御中老江昇る、
〔御老女衆記〕大奧女中分限
　御本家〇中略
一父（伊勢屋又八）　淺草常磐寺門前澤路　一伯父（瓦屋淸藏）　藥研堀唐衣
一兄（林大學頭家來中島織）　八代洲河岸關屋〇中略
一御切米四石　一御合力金五兩　一壹人扶持　一薪三束　一湯之木貳束　一油（半夜半分）　一五
菜銀拾五目　右使。番。

牛下

〔御老女衆記〕大奥女中分限

御本家 ○中略

一甥 御留守居同心組 塚次郎左衛門　小石川白山御殿跡 とまや

一弟 久貝河内守家来 宮田官蔵　市ヶ谷加賀屋敷 梅がえ　一兄 小普請山木恒次郎　牛込中御徒町 妻木 ○中略

一御切米四石　一御合力金貳両　一壹人扶持　一薪參束　一湯之木貳束　一油 半夜半分　一御菜銀拾貳匁　右御半下

比丘尼隠居

〔御老女衆記〕大奥女中分限

御方々様附比丘尼隠居女中共御宛行

一御切米　一御合力金　一御扶持　一薪　一炭　一湯之木　一油　一五菜銀

温恭院様附

一ヶ年代積リ 五拾石 七十一両一分十匁七分一リン　五拾両　拾人扶持 十八両拾一匁五分二リン　貳拾束 三両三分十二匁六分　拾五俵 五両二分

八匁五分八リン　貳拾束 拾五束 十二両三分十一匁　油 有明一 半夜一 一両三分十二匁八分　貳百目　一分 三十両九分

拝領町屋敷中橋廣小路貳百五拾八坪　元上臈年寄 法好院

木挽町四丁目新屋敷貳百四十坪　元御年寄 桃光院

右百八十四両九匁壹分一厘ヅヽ

雜載

〔明良洪範 二十五〕棑子局強子局壽林尼

棑子局、強子局、壽林尼トテ、二位ノ局ニ續キテ老女ノ名高キ人也、猷廟ノ薨ジ玉ヒテ、御忌明ノ時、總女中ニ御暇給ハリケリ、三老女皆々ヘ喩サレシハ、各ハ宮仕ヘセラレテ、總テ結構ナル物ヲ見給ヘバ、心モ自ラ高上ニナリテ、小身ナル人ニ縁付ラレテハ、御城風ヲバ出サレマジ、郷ニ入テ郷ニ従ヘトノ古言忘レ給フベカラズ、貴キガ賤キニ嫁シ、賤キガ玉ノ輿ニ乗ルトモ、是又古今例多

シ、皆縁次第ノ者ナレバ、貴賤貧富ノ定リ無事ヲ悔玉フナ、今皆々ヘ御形見目錄ノ通拜領セラレ、今年ノ御切米ニ取添下サル也、必猥リナル事ニ遣ヒ玉フナ、其身ノ有付ノ爲ニ下サルナレバ、是ヲ以テ夫々縁付カレヨ、

〔鳩巢手翰堅〕先日〇正德四年御城中女中衆、御前代〇家宣ゟ大分有之候所、容色よき女中をゑらび候而、不殘申上候樣にとの事ニ候故、定而御意にあたり可申歟とて容色有之候女中之父母等、殊の外悅び候而、前々祝抔致し候由、慥成事ニ而候、五拾人餘名を記し候而申上候時に、御いとま被下候、容色見にくき女は、人之妻にも望申間敷候得バ、御暇被下候ハヾ、難義に及可申候間、容儀惡敷分ハ、其儘可被召使由ニ而、かやう之義、終に不承事と奉存候、古代たま〱有之候得ば、盛德之事と而申傳候、此度松姬君樣付之女中江も、金子千兩被下候、其內當地ニ宿無之女中三人有之候、其儀御聞及び被遊、御城ニ而可被召使由ニ而被召出候、御慈悲とて何れも申傳候、此事新井氏江も申候而、御仁惠と申候得バ、何角異論有之候樣子之言に候哉、君子は人之有過之中ニ而、無過を求る由有之候、況や無過の中ニ有過を求る事、心の公ならぬと申物に候歟の事、此外數條可觀、小說之內ニ記す、

古事類苑

官位部六十四

德川氏職員十三

儒者

儒者ハ數人アリ、毎月殿中ニ於テ月並講釋ヲ勤メ、或ハ學問所ノ學生ニ敎授シ、或ハ朝鮮人來聘ノ時、其文書ヲ取扱フ、若年寄ノ支配ニ屬シ、二百俵高ニシテ、役扶持十五人扶持ヲ給ス、中ニ就キ林氏ハ、道春ヨリ世職ニシテ、其孫信篤ニ至リ、蓄髮シテ始テ從五位下ニ敍シ、大學頭ト稱ス、小性組番頭格ニシテ、食祿三千五百餘石アリ、他ノ儒者トハ、大ニ其資格ヲ異ニス、又奥儒者ト云フアリ、常ニ君側ニ近侍進講スルモノニテ、成島氏ノ世職ナリ、若年寄ノ支配ニ屬シ、二百俵高ニシテ、役料二百俵ヲ給ス、西丸ニモ亦儒者衆ヲ置キシコトアリ、

〔明良帶錄世職篇〕御儒者

月並講釋、毎月十日有之、殿中詰合之面々聽聞、二月十日講釋始ハ服紗小袖麻上下、〇中略朝鮮人來朝の節、書翰の取扱、其外重き御祝儀、御能開口の文相談有り、

〔法修之事〕抑東照宮〇德川家康御治世始、武家法度定被置候、台德院殿樣〇德川秀忠益し給ふ、御両代條目文言は、金地院傳〇崇傳長老草しけるとなん、大猷院殿〇德川家光彌潤色し給ふ、掃部頭〇井伊直孝大炊頭、〇土井利勝讃岐守、〇酒井忠勝評定し、伊豆守、〇松平信綱豐後守、〇阿部忠秋末座に在、道春、永喜、舊文を改正す、〇中略各評議の上、於御前決定せらる、淸書認て後、諸大名を大廣間に召集て、上意の旨有て、道春高聲に讀誦しけるとなん、

〔大猷院殿御實紀 三十九〕寛永十五年十月廿九日、こたび品川牛込の兩地、藥苑をひらかる、○中略この兩園ひらかせ給ふにより、儒役林道春信勝、勘文を撰進すといふ、

〔營中御日記 十六〕寛永十八年二月七日、林道春被爲召、諸家系圖相尋記可差上之旨、太田備中守共可勤之由、老中被仰渡之、

〔林氏家系〕信勝 菊松丸 又三郎 道春 民部卿法印○中略

寛永二十一年甲申、撰本朝編年錄、至十月獻先數卷、追日獻殘卷、○中略

─春勝 後春恕 吉松 後又三郎 後春齋 治部卿 弘文院法印○中略

寛文四年秋七月二十八日、父道春往年撰本朝編年錄、不卒業而歿、由是當撰續編年錄也、春齋奉之、亦永井伊賀守尙庸爲總裁矣、同冬十月本朝編年錄改名本朝通鑑、又有命造國史館於忍岡別墅、同十一月七日、有旨、在府之諸大名及諸士所持之和書、標其目錄、遣之國史館、○中略同○寛永七年冬十二月二十七日、由勵通鑑編集、賜金三枚、時服三領、羽織、同姓春常信篤、及門人皆有賜物矣、同十年庚戌六月七日、於御前讀本朝通鑑之序、辱蒙御懇之上意、同十二日、獻通鑑十二箱、同十九日、通鑑編集賞其勤勞、加賜二百石、亦春常、春東、○林勝澄、春勝弟子守勝子及門人皆有賜物、至冬十月十八日、獻通鑑殘編三箱、總卷三百十卷也、同二十三日、所附史館月俸九十五口、爲公務及集諸生賜之於春齋、

〔常憲院殿御實紀 五十一〕寶永二年閏四月二十三日、儒臣林大學頭信篤、西城にのぼり初て侍講す、これより毎月一回常例となる、

〔有德院殿御實紀 二〕享保元年八月十二日、儒役林大學頭信篤、林七三郎信充、林百助信智、表右筆組頭小池與左衞門永貞、封地の御朱印、御判物の事にあづかるべしと仰下さる、されど信篤は衰老のことなれば、信充信智よろしく扶けなすべしとなり、

待遇
俸祿

〔昌平志二事實〕享保三年戊戌九月三日、命儒員林信如、人見行充、一作知後、木下寅亮、字汝弼、號菊譚、荻生觀等、迭講廳堂、

遜按、是年已命信如信充等迭講廳堂、又命寅亮觀等仰高門講師、故事仰高門講師、皆林氏門人、而二人不出於其門、俄改廳堂講師、而與信如、信充等迭講焉、儒員講經廳堂、昉於此、

〔續泰平年表〕天保十三年十月十八日若年寄大岡主膳正忠固、御儒者林大學頭奥儒者成島圖書頭司直、林式部、成島桓之助、系譜調御用被仰付、是は寛政之度、堀田攝津守正敦朝臣奉りし重修譜之書繼也、

〔嘉永明治年間錄三〕安政元年二月十日、林大學頭等、亞人ト武州横濱村ニ應接ス、

〔泰平年表五編三〕文久二年閏八月五日、林大學頭、林圖書頭、　右御政事御改革ニ付、右御用可相勤旨被仰付候、

〔吏徵附錄世職〕林大學頭　若年寄支配　御小性組番頭次席　高三千五百廿三石

〔東職記聞二〕林氏　從五位下

被命將軍家侍讀、則遇之被以屬從組番頭格也、

〔羅山文集附錄年譜二〕寛永六年十二月臘晦、台命降、先生永喜、共敍法印位、

〔常憲院殿御實紀二十二〕元祿三年十二月二十九日、儒臣林弘文院信篤は、明春より兩奥糵頭の上に着座すべき旨命せらる、

〔常憲院殿御實紀二十三〕元祿四年正月十三日、儒臣林弘文院信篤、束髮命せられ、從五位下に叙し大學頭と改稱す、

〔憲教類典四ノ八聖堂〕寶暦三癸酉年七月廿九日

佐渡守殿御渡

御目付江

林大學頭

聖堂之勤御免、向後御小性組番頭之次江可二罷出一候、○中略

右之通ニ候間、可レ被レ得二其意一候、

〔天明集成絲綸錄二十四〕天明六午年五月

御目付江

林大學頭

一年始者、只今迄之通、表に而御禮申上候事、

一五節句、月次、其外御禮等者、奧に而申上候事、

一月次講釋之儀者、只今迄之通ニ候事、

右之通、可レ被レ得二其意一候、

〔羅山文集附錄一年譜〕慶長十六年、先生二十九歲、○中略有レ命賜二洛邊之八瀨、二瀨、田中、山本、祇園、梅畑之村邑一采地、

〔大猷院殿御實紀五十九〕正保元年十二月廿五日、儒役林道春信勝が子春齋春勝へ二百俵月俸十口新に給はる、

〔常憲院殿御實紀十二〕貞享二年十二月廿五日、儒役林春常信篤、二百石加秩ありて千三百石になさる、

〔半日閑話初編三〕林大學頭へ被二仰渡一

林大學頭

聖堂御主法之義、申立候趣入二御聽一、重々尤之次第に被二思召一候、其趣を以、猶追々取計候儀可二申上一候、

依レ之內願之通、聖堂料千石、并百三十人扶持、是迄其方家祿之內へ籠候分は差上、聖堂之御入用に

任免

可相用候、其方儀は、是迄之通り、三千石之高に被成下候、依之千五百俵は、御藏米に而被下候、○中略

寛政九年巳十二月朔日

〔吏徴 御目見以上〕儒者五人　若年寄支配　貳百俵高　御手當扶持十五人扶持

〔吹塵録 徳川氏三十一〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高御役知御役料御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

一金七百兩　林大學頭

但高ニ不抱被下

〔吹塵録 徳川氏三十一〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高御役知御役料御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通、御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

二丸御留守居格　儒者

一金五百兩宛　奥村季五郎　永井三藏

但

高千石以上之者江ハ半減

御切米高三百俵以上之者江ハ半減

〔家忠日記増補 六〕慶長十三年、此年公○徳川家康羅山子林道春ヲ京都ヨリ召出、於駿府賜宅地、儒官ト成、慶長十年、公永井直勝ニ被仰付、初テ道春ヲ召テ公ニ奉謁、同十一年、道春伏見城ニ被召出、明年ニ至リ駿府ニ可来ト命有、同十二年三月、道春駿府ヘ参、同四月、江戸ヘ参シ、秀忠ヘ奉謁、○節略

〔羅山文集 附録年譜 一〕慶長十三年戊申、先生二十六歳、赴駿府日夜侍御前讀論語三略等、賜宅地幷土

木料及年俸、且掌御書庫管鑰、縱觀官本、〇中略

〔羅山文集附錄年譜二〕寛永元年、先生四十二歳、〇中略四月十一日、執事酒井忠世、土井利勝、奉旨使先生奉仕大猷院殿幕下、〇德川家光十三日拜謁幕下、自此日日奉侍焉、或講論語、或讀貞觀政要、或談倭漢故事、或接執政之咨詢、或赴棠陰之廳、永喜奉仕台德院殿、〇德川秀忠之事亦與先生相同、

〔常憲院殿御實紀二十三〕元祿四年正月十八日、儒員大河内春龍良賁和田春堅長重束髪せしめらる、良賁は新助、長重は傳藏と改稱せり、

〔寶永三年武鑑〕御儒者衆

二千九百石、林大學頭信篤、　七百五十石、人見又兵衛、　二百俵、人見七郎右衛門、　土田孫三郎

中村新兵衛　松浦藤五郎　四百五十俵、和田傳藏、　四百五十俵、庄野藤左衛門、　四百五十俵、安見文平、　三百五十俵、木下平之丞、　百五十俵、近藤半介、　百五十俵、桂山十五郎、　百五十俵、得力十之丞、　百五十俵、津田右内、　百五十俵、秋山半藏、　荻生玄覽

〔昌平志二〕寛政二年庚戌五月、連辟柴野邦彦字彦輔、號栗山、岡田恕字子強、號寒泉、並佐學政、明年三月、加給學糧、〇中略　三年九月、尾藤孝肇字志尹、號二洲、爲廟學敎官、〇中略　九年十月、古賀樸爲廟學敎官、

〔一話一言八〕岡田寒泉名恕、字忠卿、

寛政元年己酉九月十日

小普請組金田近江守支配
岡田龍藏大伯父
岡田清助

新規被召出、御切米貳百俵被下、儒者被仰付、

右之通被仰付候旨、於御右筆部屋御緣頰、御老中御列座、牧野備前守殿被仰渡之、若年寄衆侍座、

九月十日

其後白石先生藩翰譜校合、並續編被仰付となん、

尾藤二洲名孝肇、字志尹、

寛政三年辛亥九月　新規被召出、御切米貳百俵被下、儒者被仰付、　尾藤良助

〔慶應三年武鑑〕御儒役

二千五百石、御小姓組御番頭次席、林大學頭輝、　五百石、林式部少輔晃、　八百石、坂井右近將監、

御儒者衆　二百俵高　御手當十五人扶持

百五十俵、御牧又一郎、　二百俵、若山壯吉、　二百俵、佐野令助、　百俵、中村敬輔、　百俵、望月萬一郎、　二百俵、鹽谷甲藏、　二百十俵五人フチ、永井三藏、　現米六十石、奥村季五郎、　二百俵、芳野立藏、

見習

〔溫恭院實紀六〕安政元年四月十八日

一儒者見習　學問所勤番組頭勤方　木村金平

右被仰付旨、紀伊守申渡之、

奥儒者

〔吏徵附錄內職〕奥儒者一人　若年寄支配　布衣　貳百俵高　役料貳百俵

〔前編鳩巢先生文集叙〕有德廟吉宗〇德川纘統之後、特擢先生授殿中侍講、此職之設、蓋自先生始、

〇按ズルニ、殿中侍講トアルハ則チ奥儒者ノコトナラン、而シテ享保武鑑ニハ、之ヲ御儒者衆ノ中ニ列シテ別タズ、

〔寛延四年武鑑〕奥詰御儒者御役料二百俵二百俵御弓町中村深藏

〔文政十一年武鑑〕奥御儒者　布衣　二百俵高　御役料二百俵

三百俵成島邦之丞

〔續泰平年表〕天保十二年八月二十日、奥儒者成島邦之助司直昇進、數年出精相勤、其上累年御侍讀相勤候ニ付、格別之思召を以、百

俵御加增被ニ成下ニ、御廣敷御用人格被ニ仰付ニ候、勤役中五百俵高に御足高、御役料三百俵被ニ下置ニ、諸大夫被ニ仰付ニ、圖書頭と相改、右於ニ奥被ニ仰渡ニ之、右は年來御侍讀申上候上、所ㇾ雖書、老の羅り言〇書脱一冊、入ニ獻覽ニ御賞譽之由也、但大學頭之外、儒者へ諸大夫被ニ仰付ニ候例、文昭公〇家宣徳川御代、新井筑後守以來無ㇾ之、殊に今般例年任官位階の時日に先立、不順に傳奏を經、被ニ仰付ニ候事は、誠に出格之事也、

〔續泰平年表〕天保十四年六月廿六日、奥儒者成島圖書頭江御達奥儒者心得方之義は、先達而御側衆迄、申聞置候義有ㇾ之候得共、一體奥儒者は、奥限之勤に而、表方へ可ㇾ携筋無ㇾ之候處、其方義、大學頭講物により、表方之者江も直談等致し、當時は懸意之向も有ㇾ之、私用之義も申談、又は土圭之間に相加り、中之間通りに出入致候に而、奥役同樣之振廻、奥儒者之規格取失候段、不都合之事に候、依ㇾ之以來手附出役等之義に付、間合之品も有ㇾ之候はゞ、大學頭江相賴、聞濟可ㇾ申候、萬一御用筋、井手附等之義に付、表方江不ㇾ致ニ直談ニ候而は、難ㇾ辨義も候はゞ、其趣相認、相伺、差圖次第可ㇾ致、節は左之通、老中若年寄江達候時は、土圭之間、又は新部屋江可ニ罷出ニ候、　三番頭、林大學頭、其外表方江は、於ニ中廊下ニ可ㇾ致ニ對談ニ候、　大目付、御目付、其外御役人江は、新番所前に而達可ㇾ申候、但新番所前へ罷出候節は、土圭之間罷通候義不ㇾ苦候、他向江談事等は無用、中廊下江出候節は、御臺所廊下ゟ可ニ相廻ニ候、　萬石以上江は、御座敷內に而も面會致間敷候、家來使者等引請候哉、井表方御番方等、文學筋に候共、都而宅に而對面無用に候、尤手附出役之外出入無ㇾ之樣可ㇾ致候、但陪臣浪人も門弟等に候共、文學修行之外、對面無用に候、御三卿方ゟ被ㇾ召候はゞ可ㇾ參候、御三家方江は被ㇾ召候共御斷申、參間敷候、右之通急度相改可ㇾ申候、此外之義は、奥詰之振合に相心得、向後不都合之義ども無ㇾ之樣可ㇾ致候、

西丸儒者

〔慶應三年武鑑〕奥御儒者　布衣　二百俵高　御役料二百俵

百五十俵、保田鈼太郎、

〔常憲院殿御實紀五十四〕寶永三年七月四日、西城家宣徳川儒員新井勘解由君美、土肥源四郎元成、服部清助、保考はじめて宅地を給ふ、

〔有德院殿御實紀二十一〕享保十年十二月十一日、儒臣室新助直清、大納言殿家重徳川につけられ、西城の奥儒となる、

學問所役人

學問所ハ、寛永中ニ、林道春將軍徳川家光ノ命ヲ奉ジテ、忍岡ニ經史ノ講習所ヲ設ケ、後、將軍綱吉ノ時ニ、之ヲ神田ニ移シ、世々林氏ノ私學タリシガ、將軍家齊ノ時ニ至リ、改メテ官學ト

奉行

爲シ、規模ヲ擴張セリ、然レドモ其教務ノ事ハ、猶ホ林氏ヲシテ之ヲ統轄セシメ、其他ノ庶務ニ就キテ、奉行、世話役、勤番、下番等ノ職ヲ置ケリ、學問所奉行ハ、文久二年ニ始テ之ヲ置キ、寺社奉行ノ次席トス、世話役ハ、寄合ノ出役ニシテ、希ニ中奥小性ノ兼職スルコトアリ、勤番ハ、林大學頭ノ支配ニ屬シ、五十俵三人扶持ヲ給ス、其數二十餘人アリ、組頭ヲ置キテ之ヲ監督ス、組頭ハ百五十俵高ノ職ニテ、外ニ七人扶持ヲ給ス、下番ハ、其數三十人アリ、二十俵二人扶持ヲ給ス、其小頭ハ役扶持一人半扶持ヲ給ス、

〔昭德院實紀二十四〕文久二年十一月十四日、學問所奉行新置、

雁之間席　本多伯耆守
柳之間席長門守弟　秋月致太郎

學問所奉行被仰付之、致太郎儀は、勤候内貳千俵被下、席之儀は寺社奉行次席、

右於芙蓉間被仰付之、

〔德川禁令考二十四學問所〕天保十四卯年八月七日

聖堂之儀學問所と相唱候事

越前守殿御渡

昌平坂學問所之儀、古來は聖堂と相唱候得共、右は大成殿の別稱ニ付、寛政以後學問所と計相唱候筈之處、其節別段達之趣も無之候間、爾後其段不相辨向も有之候、向後は都而學問所と相唱候樣、向々江可被相達之事、

〔大猷院殿御實紀附錄六〕寛永七年、林道春信勝に忍岡にて別墅の地をたまひ、學寮いとなむべしとて費用金二百兩下され、おなじ九年、尾張大納言義直卿、信勝を資けて聖廟を營建せしめ、聖像及顏曾思孟の像を安置し、かの卿親ら先聖殿の三大字を書して揭げしめ、且祭器若干を寄附せ

られ、信勝もまた文庫を建て、群書をあつめ、畫工に命じて諸賢の像をかゝしめ、その數にあつ、かくてぞ廟貌頗る儼備して、一大書院の體になりぬ、○中略十一年二月、駿河大納言家○忠長の舊第を毀撤せられしにより、大厦一宇を下され、孔堂の傍に建て講習の所となさしめらる、此後元祿に至り聖廟を神田臺にうつされ、私塾を變せられ、近く寛政の時より官學となされ、學政興起せしも、そのはじめは、この時の故制によられしなり、

〔昌平志二事實〕寛政九年十二月、改革黌制、

謹按廟學所由、始於林氏忍岡私塾、○中略至是變更黌制、乃放生徒、罷職員、郎癸丑(寛政五年)所置、專令大夫士及子弟講肄焉、改稱學問所、明年戊午(寛政十年)令入學講肄、庚申(寛政十二年)四月、申諭前令、始開黌舍、○中略其制大約、學官郎主記下有教官、員二以掌教授、又有廟學主事、員二以掌雜務、其下有廟學使令及廟卒、以掌祭器、書籍、文簿、會計、及看舍守門之事、改革黌舍、放生徒、罷廟幹、而置廟學諸職、並防於此、

〔和學所御用留七〕一同日○元治元年二月四日御達

塙敬太郎樣　伊丹椛之丞

和學所江、近日之內、學問所奉行爲見廻被相越候節、出役中一同致出勤候樣致度、就而ハ日限相分り候ハヽ、廻狀ヲ以可及案内と存候、○下略

〔元治元年武鑑〕學問所御奉行　芙蓉　寺社御奉行次席

三萬五千石、文久三亥十一月ヨリ、土岐山城守頼之　御若年寄格、二千俵、文久二戌十一月ヨリ、秋月右京亮種樹　四萬石、文久二戌十一月ヨリ、本多伯耆守正訥

世話役

〔明良帶錄〕聖堂世話役

寄合より出役にて、聖堂學問之寄合之世話事差引を致し、月々出席、姓名帳を御支配方え差出す、學材ある仁、此役となる、一つの階級也、堀田攝津守殿御承にて出來たり、近來筑紫主水、是より祭

酒○林大學頭之馬役となる、

〔萬延元年武鑑〕學問所世話心得頭取

三千石、御寄合ヨリ出役、松平甲次郎　四千石、御寄合ヨリ出役、中坊陽之助　三千石、御寄合ヨリ出役、龜井勇之助

〔文久二年武鑑〕學問所世話心得頭取　中奥御小性ヨリ兼

大岡主水　三千石、龜井勇之助、四千七百石、仙石彌三郎、四千石、中坊陽之助、

〔元治元年武鑑〕學問所世話心得頭取　布衣　七百石高

七十俵五人フチ、矢口洗一郎、三百石、栗本瀬兵衛、二百十俵五人フチ、永井三藏、○以下五人姓名略

勤番組頭

〔吏徵上御目見以上〕學問所勤番組頭貳人　林大學頭支配　百五十俵高○中略　燒火間

〔文恭院殿御實紀二十八〕寛政十二年三月三十日、右衛門督方小十人格奥詰黒澤正助、天守番鈴木岩次郎、學問所組頭命せらる、これ新置の職なり、座班は勘定の次たるべし、

〔文政十一年武鑑〕學問所勤番組頭　百五十俵高

勝田彌十郎　猪飼鶴三郎

〔慶應三年武鑑〕學問所勤番組頭　燒火之間　百五十俵高　外ニ七人扶持

石丸三二郎　星野格太郎　木平讓輔

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕學問所勤番組頭○中略　文化三年丙寅三月、御手當扶持七人扶持、

勤番

〔吏徵別錄下御目見以下〕學問所勤番　寛政十年戊午二月十七日、始置七員、五十俵三人扶持、同年六月九日、增三員、合十員、

〔明良帶錄〕聖堂上番　五十俵三人扶持、勤金三兩、肝煎二人扶持、

小普請より御入人有り、無役方抔ゟも至る、此場文學心得有るもの至る、以上引下げの仁多し、

諸向より願て至る也、

○按ズルニ、聖堂上番ハ、其祿制全ク學問所勤番ト同ジケレバ、學問所勤番ノ事ナルベシ、

〔吏徵御目見以下〕學問所勤番廿人　林大學頭支配　五十俵三人扶持高　勤金三兩　肝煎三人、役扶持貳人扶持、燒火間、上下役、

〔文政十一年武鑑〕同〔○學問所〕勤番　五十俵三人扶持　溝口三郎兵衛　榊原藤四郎　秋山十兵衛　中村安八郎〔○以下二十二人姓名略〕

〔慶應三年武鑑〕同〔○學問所〕勤番　五十俵三人扶持　近藤熊太郎　池谷福五郎　木村晉右衛門　梅林伊三郎〔○以下二十二人姓名略〕

下番

〔吏徵御目見以下〕學問所下番三十人　貳拾俵貳人扶持高　勤金貳兩　小頭、役扶持一人半扶持、御抱場　寬政十年戊午二月十七日始置

〔和學所御用留七〕慶應二寅年御用

一正月廿八日、學問所下番高麗兼作罷越、山下幸内上書、林式部少輔殿より御咄ニ付、借用申度由、篠木金太郎印紙持參ニ付則渡ス、

書物奉行

職員

書物奉行ハ數人アリ、圖書ヲ出納保管スル事ヲ掌ル、若年寄ノ支配ニ屬シ、二百俵高ノ職ニシテ、役扶持七人扶持ナリ、同心二十一人之ニ屬ス、

〔東職記聞二〕書物奉行六人〔領ニ同心十六人也〕

〔官中秘策十〕諸御役人之事

職掌

一御書物奉行　五人　御役扶持壹人扶持、同心拾五人、

〔吏徴 御目見以上〕御書物奉行四人

〔明良帶錄〕御書物奉行 若支 二百俵高御役扶持七人扶持　燒　同心十六人

天學、經學、曆學家、文章家などより出役兼帶もありて、以前成島忠八郎は、成島竹庵とて、御坊主より經昇、長崎半七郎は、御切手御門番の頭に昇る、

〔泰平年表 文昭公〕正德二年六月、此月櫻田御文庫の御書籍も、從二今年一御書物奉行曝涼すべき旨を令せらる、櫻田御文庫は、享保二年廢す、又是より林大學頭封緘の御書物箱も、以來御書物奉行封印すべき旨、久世大和守達す、

〔和學所御用留〕一十二月〇文久四年廿三日、御書物奉行世話役坂田周之助、左之貳冊持參、順次郎〇塙忠韶弟應對、請取書敬太郎〇塙忠韶印紙遣ス、

待遇俸祿

〔吏徴 御目見以上〕御書物奉行四人　若年寄支配　燒火間　貳百俵高　御役扶持七人扶持

〔憲教類典 二ノ五 御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候内、御足高并御役料定、

貳百石高 御役扶持七人扶持　御書物奉行

〔有德院殿御實紀 十三〕享保六年九月六日、書物奉行に月俸をの〳〵七口をたまはり、恒例とせらる、典籍の出納しば〳〵なるをもてなり、

任免

〔大猷院殿御實紀 二十三〕寛永十年十二月廿日、此日小納戸關兵三郎正成、納戸役星合伊左衛門具枚、大番三雲内記成賢、西尾加右衛門正保を書物奉行とせらる、これ創置なり、

〔泰平年表 大猷公〕寛永十年十二月廿日、始て御書物奉行四人被二仰付一、御日記に、十二月廿日、關兵三郎、星合猪左衛門、三雲内記、西尾加右衛門、右四輩、御書物奉行被二仰付一とあり、御文庫の事は、當代年錄に、慶長六年六月、江戸御城富士見御亭に金澤の文庫を移され、御文庫を建立なりと見えたり、西尾家傳に、寛永十

同心

六年八月御城炎上の時、御書物奉行西尾加右衛門正信、富士見の御文庫を守護すと記せり、今紅葉山の御文庫は、火後移れしや未詳、

〔有德院殿御實紀 十七〕享保八年十一月廿二日、奥右筆下田幸大夫師古書物奉行となる、

〔先哲叢談 八〕青木敦書、字厚甫、小字文藏、號昆陽、武藏人、仕大府、昆陽初處士也、其清才好學、○中略延享甲子、擧紅葉山火番、尋改評定所儒者、終遷爲書物奉行、

〔精里文稾 三集 四〕御書物奉行增島君墓誌銘

君諱信道、字子篤、稱藤之助、澄水其別號也、○中略寛政七年乙卯、拜御書物奉行、職事修擧、前後四賞賜金幣、○下略

〔泰平年表 大御所〕文化十四年十二月廿七日、御書物奉行近藤重藏、御本日記注釋類獻上に付、銀拾枚拜領之、

〔元治元年武鑑〕御書物奉行

七十石、中神順次、　百俵五人フチ、鹽野谷善次、　百五十俵二人フチ、渥美豐次郎、　七十石、武島安右衛門、　百俵三人フチ、中井太左衛門、　四十俵、榊原藤一郎、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料○中略

御書物奉行　　同心拾六人

〔吏徵 下 御目見以下〕御書物同心廿一人　持高　假抱入、十俵一人扶持、　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

三拾俵二人ふちゟ拾五俵一人半ふち迄　羽織袴役　御抱入場所　御書物同心

總載

和學講談所役人

和學講談所ハ、寛政年中、撿挍塙保己一ノ創立スル所ニシテ、國書ヲ講習シ、及ビ之ヲ編纂スル所ニテ、林大學頭ノ支配ニ屬ス、職員ニ、頭取、出役頭取、手傳出役等アリ、

〔天保集成〕〔絲綸錄八十〕寛政七卯年九月

寺社奉行江

塙撿挍和學講談所之儀は、以來林大學頭致支配、和學御用筋も有之節は、大學頭指揮に而相弁候樣相達候間、其段塙江可被申渡候、尤身分之儀は、是迄之通候條、被得其意、大學頭可被談候、

〔明良帶錄〕塙撿挍

寛政の度に、和學に習熟する故を以て、和學講談所と號し、六番町に於て第宅を拜領被仰付、和書著述編集せり、

〔和學所御用留〕一同月〇文久四年九月廿一日、出役御手當之儀、伊丹殿より申來、卽日同氏江差出ス、〇中略

御目見以上三人

和學所出役

內

頭取壹人　御手當銀拾枚　頭取見習壹人、外壹人、御手當銀五枚、筆墨料一日銀壹分壹厘宛、

御目見已下七人內壹人、歸番願差出置候、

內

頭取助貳人　御賄料一日銀壹匁壹分宛、筆墨料一日ニ付銀壹分壹厘宛、外壹ヶ年金壹兩貳

口宛、

頭取助見習貳人、外三人、　御賄料一日銀壹匁壹分宛、筆墨料一日ニ付銀壹分壹厘宛、

御目見以上手傳出役八人内壹人、歸番差出置候、　御目見以下壹人　御手當無之、尤外貳人不足、

御目見以上手傳出役並貳人　御目見以下壹人、御手當無之、尤外壹人不足、

御目見以上世話心得七人　御目見以下七人　御手當無之、尤外壹人不足、

外

鈴林類纂御用中手傳壹人　御手當無之

右之通御座候、以上、

九月　　小貫彌太郎
　　　　塙敬太郎

〔和學所御用留〕和學所規則書

定

一御用正月十五日より相始、十二月十五日納の事、　但正月十五日、服紗麻上下着用之事、

一一六之日、毎月休之事、　但御用多之節ハ、宅調臨時加出可申事、

一平日朝四時相始、七時退散之事、　但御用多之節ハ、一同早出居殘可致事、

一出役手傳并手傳申合、日々一人宛、早出居殘可致事、

一早出之者、其日之諸役心得候事、

一居殘之者、火之元心附、書附書籍、其外取散し候品片付候事、

一出役名順之儀は、銘々持格を不論、被仰渡候新舊を以相立可申候、尤御目見以上以下は差別可有之事、　但調所外は、格別之事、

一御用向之儀は、不依何事頭取差圖可被請候事、

一日々課程を立、其日取調候分相改、帳へ記し置可申事、

一調物博取之爲、宅下げいたし候節は、定課相立置、調物丁數急度改之上、其者之出勤、過不足を補候事、

一一ヶ月二度宛割合、宅調いたし候事、

一頭取は、一ヶ月四度宛、宅調いたし候事、　但日々一人宛は、割合出勤候樣可致事、

一出役被仰付、凡三十日相立不申内ハ、宅調不相成候事、

一出勤剋限、不快等にて見合、九ッ時過ニ相成、又は出勤後、不快等にて八ッ退散之節は、兩日を以一日ニ積り、可取調候事、

一毎月出席數は、月番之者取調、頭取へ可差出事、　但月番は、出役幷手傳之内申合、兩人宛心得候事、

一二季御手當取調之儀は、本出役之內、兩人ヅヽ順番立置、勘定仕上げ、學問所へ持參、其後御手當出候節も、右順番之者請取ニ罷越、其上頭取立合ニて配分相渡候事、

一毎月二ノ日總出之事

一五節句、休日ニ相成候事、

一盆中三日休之事

一暑中ハ退散之事

一御用書物藏出納之儀、紛亂不致樣、懸り之者兩三人定置可申事、

一病氣差合等之節、調所へ委細其譯相認、手紙可差出事、　但病氣當分之儀は、助合致し置可申、休日を除き、十日程も立候はゞ、煩引に相成候事、

頭取

一忌中産穢等、調所限半限にて、月代剃出勤之事、
一忌中産穢半減之定
五十日ハ三十五日　三十日ハ十五日　二十日ハ十日　十日ハ五日　七日ハ四日　五日ハ
三日　三日ハ二日　但一日之遠慮ハ減ずる事無之
一病氣引込、六ヶ月ニて月限に相成候事、
一和學所近火、幷遠火ニても、風筋不宜節ハ早々相詰、御用物片付可申事、
一不依何事非常之節ハ、和學所へ相詰可申事、
一類焼休、三十日之事、
一相懸り之者、年始暑寒往來、互ニ不致候事、
一出役相互ニ、音物等之儀、堅無用之事、
一調所ニて雜話、或ハ辨當休息ニ時を移し、又ハ申合同道外行等、一切不相成候事、
一出役被仰付候面々、和學執心之上、手跡宜敷、身持篤實之趣を以被申立候事故、言行相愼候ハ勿
論之儀、御用之透見合、勤學懈怠被致間敷事、
〔和學所御用留〕文久元酉年六月四日

御書院番溝口讃岐守組
和學所出役頭取
伊丹桃之丞

二九御留守居格、布衣被仰付、和學所頭取可相勤候、
右之通申渡候間、可被得其意候、
〔和學所御用留〕和學所規則書、此度改而相達候ニ付而ハ、頭取之儀ハ、以來學問所頭取之振合ニ準
じ、出役同樣調物ニ取掛り候ニハ不及、編集出來候はゞ一覧を遂げ、調進之節校正いたし、其他平
常ハ見廻り之心得を以て度々出勤、和學所取締向ハ勿論、取調物其外諸事心付け、出役共進致し

候樣、御心得可ㇾ有ㇾ之事、

亥（文久三年）七月　　林大學頭　林式部少輔

伊丹桄之丞殿

〔和學所御用留〕非常之節和學所へ相詰候人數書

二丸御留守居格和學所頭取
伊丹桄之丞　供連六人　乘馬壹疋

高千石

〔吹塵錄　三十一　德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高御役知御役料御役扶持等不ㇾ被ㇾ下、是迄之場所高に不ㇾ拘、今度御改正、別紙之通御役金被ㇾ下候旨被ㇾ仰ㇾ出之、

御役金被ㇾ下高之覺

一金五百兩宛

二丸御留守居格和學所頭取
伊丹桄之丞

藤島祿之助

〔和學所御用留〕八月（文久三年）三日、八洲（林氏第宅）より書付、夫々へ可ㇾ達旨被ㇾ申候間、翌四日、於ㇾ和學所ㇾ小貫彌太郎立合、夫々へ相達ス、

。。。。、
頭取見習、校合之方專務ニて、編集之方手傳候樣可ㇾ致、尤頭取可ㇾ被ㇾ談候、

能勢岩次郎

頭。。。。。。
頭取心得方見習、清書之方專務ニて、編集校合等も手傳候樣可ㇾ致、尤頭取可ㇾ被ㇾ談候、

諏訪純次郎

頭取心得方見習、編集之方專務ニて、清書校合等も手傳候樣可ㇾ致、尤頭取可ㇾ被ㇾ談候、

頭取心得方見習
能勢岩次郎　諏訪純次郎

〔和學所御用留〕

出役頭取

此度和學所會頭之義申上置、相違候義も有之、御旗本御家人等、有志之者出席修業いたし候ニ付てハ、諸事取締助可被心得候、

〔和學所御用留〕非常之節和學所へ相詰候人數書

高二百五拾俵　和學所出役頭取一人　供連三人

〔和學所御用留〕十一月〇文久三年十二日、和學所へ罷出、吉田信之助を始、出役一統へ引合せ、且又出役頭取初メ六人之者へ、夫々懸り役之儀申達候、

出役頭取　小貫彌太郎

此度和學所會頭之義申上置、相違候義も有之、御旗本御家人等有志之者、出席修業いたし候ニ付ては、諸事取締方可被心得候、

〔和學所御用留〕四月〇元治元年四日

出役頭取　小貫彌太郎

和學所出役頭取、數年出精相勤候ニ付、拜領物被仰付候旨、於田安假御殿躑躅之間替席、若年寄衆侍座、井上河內守殿被仰渡、金貳枚拜領之事、

〔和學所御用留〕文政年中　出役頭取介、中山平四郎、關口雄助、

〔和學所御用留〕非常之節和學所へ相詰候人數書

現米八十石宛　和學所頭取介二人　供連二人

〔和學所御用留〕

出役頭取見習　藤島祿之助

此度和學所會頭之義申上置、相違候義も有之、御旗本御家人等、有志之者出席修業いたし候ニ付てハ、諸事取締助可被心得候、

手傳出役

〔和學所御用留七〕三月〇元治元年廿二日伊丹枕之丞殿ゟ被相達候

高井隼人、服部釵負、國領正太郎、落合鑛太郎、高橋八十郎、榊原民部、伊丹喜八郎、松前修理、

右和學所手傳出役被仰渡候之間、此段御達申候、以上、

〔和學所御用留〕一同〇元治元年二月四日、手傳出役並三人、於枕之丞御宅被仰渡、

屋代銈太郎　塙順次郎　吉田純一

和學所手傳出役並、申渡候、

會頭

〔和學所御用留〕

吉田信之助〇敏成

和學所ニ於て、和學稽古會頭相心得、稽古人引立方、重立取扱候樣可致、尤和學所頭取可被談候、

右八洲ニて、十一月〇文久三年十日、被申渡候趣ニて罷越候處、夕七ッ時過ニ付、明十一日ハ和學所休日故、明後十二日晝前後之內、罷出候樣申達し候、

〔和學所御用留〕亥年〇文久三年十一月十四日、自分宅ニ申渡、

木村莊之助〇正辭

和學所へ罷出、會頭助其外取調物等可取扱候、

右因幡守殿へ申上置候事

小中村將曹〇清矩　黑川主水〇春村　橫山保三〇由清　敷田大次郎〇年治

右各同文言、但名順此通取極候事、

會頭助之者、名札肩書、和學所會頭助と認候樣、五人之者へ、敬太郎より口達爲致候事、

和書改方及下調役

〔明良帶錄〕和書改方

同所〇和學講談所へ六人相詰、內二人は小普請ゟ出る役、四人は諸向ゟ出る、壹人は本堂大和守家來宅間儀兵衞といふもの、御役扶持被下、二季拜領物有之、

〔明良帶錄〕同〇和書御收方調下役
御目付支配無役幷聖堂下番、祭酒家來三人、町人出有之、手附居候町人七八人有之、追々縣官に乞て免許を受て廻國し、國々新回讀書籍著作之由、

醫師

醫師ニハ、奧藥頭、奧醫師、番醫師、寄合醫師、小普請醫師、養生所醫師等アリ、
奧藥頭ハ、諸醫師ノ上席ニ位シ、半井、今大路二氏ノ世職ナリ、若年寄ノ支配ニシテ、從五位下ニ敍シ、半井ハ千五百石高、今大路ハ千二百石高ナリ、
奧醫師ハ御近習醫師トモ云ヒ、數人アリ、每日登城シテ、將軍及ビ奧向ノ人々ヲ診察ス、若年寄ノ支配ニ屬シ、二百俵高ニシテ、番料二百俵ヲ給ス、西丸ニモ亦奧醫師アリ、
番醫師ハ、表御番醫師トモ稱シ、殿中表方ニ病人アル時之ヲ診ス、若年寄ノ支配ニ屬シ、祿高二百俵以下ノ者ニハ、番料百俵ヲ給ス、
寄合醫師ハ、各〻其業ニ熟達セルモノヲ撰ビテ之ニ補シ、平日ハ登城セズシテ、不時ノ用ニ備フ、若年寄ノ支配ニ屬シ、持高ノミニシテ役料ナシ、
小普請醫師ハ、武士町人ノ病ヲ治療シテ、其技ヲ錬修スルナリ、小普請組ノ支配ニ屬シ、三十人扶持ヲ給ス、
養生所醫師ハ、小石川養生所ニ常勤スル醫師ニテ、其肝煎ハ小川氏ノ世職ナリ、肝煎ノ外ニ本道二人、外科二人、眼科一人アリ、多クハ寄合小普請等ノ醫師ヨリ出役シ、其役料モ各〻等差アリ、其他奧詰醫師、目見醫師等アリ、

典藥頭職員職掌

〔吏徵附錄世職〕半井出雲守〇典藥頭中略　今大路右近

〔有司勤仕錄〕御醫師

一半井驢庵、今大路道三、此兩人は、〇中略醫師之觸頭なり、改云、御藥園ゟ出る和藥拜領之時如ㇾ斯と、同渡りの藥種拜領等有ㇾ之時は、不ㇾ殘兩人之內、藥種は長崎奉行ゟ渡すと也、年番之方江引請、醫師江悉く割渡す事也、〇中略

一右兩家ゟ、年番に正月屠蘇を禁裏江調進之事司ㇾ之也、昔は半井家之由、是は往昔和氣清麻呂之末葉にして、數代醫流にて、武家にては室町將軍之時より醫師之由也、此由緖を以て司ㇾ之と云云、其後延壽院、道三、名醫たるゆへ、同職を同じくする也、

一禁裏へ正月屠蘇調進之事、其年番之家老爲₂名代₁上京す、則假諸大夫に被ㇾ任參內す、紫宸殿御規式有ㇾ之而、屠蘇調₂進之₁すと云々、

〔敎令類纂初集二十〕元和九癸亥年正月

定

一驢庵、延壽院、道三、此三人はおくの御臺所迄伺候あるべし、

〔有德院殿御實紀三〕享保元年十月廿四日、典藥半井驢庵成明、今大路道三親顯の二人は、舊き名家といひ、門徒もあまたなれば、小普請の中にて、醫學治療もさりぬべきもの、沈淪してまられざるを選擧すべしと命せらる、

待遇陞敍

〔有司勤仕錄〕御醫師

一半井驢庵、今大路道三、此兩人は寄合醫師、典藥頭に任ず、從五位下也、尤法印に被ㇾ任也、〇中略

一右兩人、部屋住之內は俗體にして、被ㇾ敍₂從五位下₁、驢庵家は內匠頭に被ㇾ任、〇中略夫ゟ江戶江下りて後剃髮し、此時は任₂法印₁事也、禁裏ゟ御用之節は、嫡子相勤候由、尤御規式事には、剃髮にて不

成由、然れども御悩御療治にては、夫に不ㇾ限事也、

〔東武實錄 三十一〕寛永七年、是年半井驢庵瑞桂 將軍家〇徳川家光 御執奏ニ依テ、勅許有テ素絹ヲ着ス、

〔醫格大槪〕家督

兩典藥頭、於二御黒書院一被二仰付一、獻上銀御馬代、

〔東武實錄 四十〕寛永九年十月、是月驢庵ニ采地千石ヲ玉フ、

〔吏徵附錄 世職〕半井出雲守 典藥頭　若年寄支配　高千五百石　今大路右近　若年寄支配

高千貳百石

任免

〔駿府政事錄 三〕慶長十七年六月十日、醫師驢庵、爲二江戸御番一來、今日出二御前一赴二江戸一云々、

〔吏徵附錄 世職〕今大路右近　曲直瀨道三正紹、元和元年八月廿八日、賜二五百石一、二代兵部大輔親淸、賜二今大路氏一、〇中略 三代民部大輔親昌、寛永六年三月江戸永住、

〔寛文七年武鑑〕御典藥衆

千貳百石 前典藥頭道三　千五百石 同半井驢菴　五百石 施藥院

〔慶應二年武鑑〕兩典藥頭　柳間　乘輿白無垢著

千五百石、從五位下、半井刑部大輔廣明、　千二百石、從五位下、今大路民部大輔、

奥醫師職員職掌

〔官中秘策 十〕諸御役人之事

一奥御醫師　御番料貳百俵　凡八九人

〇按ズルニ、延寶、貞享、元祿等ノ武鑑ニハ、奥醫師ト云ハズシテ、何レモ御近習醫師トシ、寶永二年以後ノ武鑑ニハ、悉ク奥醫師トシタリ、又延寶ノ頃ニハ、御側醫師トモ云ヒシニヤ、甘露叢ノ延寶八年十一月廿五日ノ條ニ、高麗春澤爲二御側醫師一トアリテ、高麗春澤ハ、延寶ノ武鑑ニ、御近習醫師トアレバナリ、

〔有司勤仕錄〕御醫師

奥醫師は、毎日登城御機嫌伺レ之、晝之内相詰る、其内に御用次第、大奥或は二九、三九、或は外之御女中樣方、御守殿江も罷出る也、其外御用之節は不レ限二晝夜一事也、

〔明良帶錄〕奥醫師

醫業に達したる人を奥醫に撰擧す、○中略正月は家法の御藥を差上る、當時は醫學館にて醫道を修し、藥性は本草家澁江長伯にて糺す、日々伺公して御脉を診す、

〔文久紀事 六〕文久二年閏八月十七日、兵部少輔殿御渡、

御目付

覺

總御醫師共、家業心掛候儀は勿論候得共、生得之才不才も有レ之、生質に寄、何程出精仕候而も、勝れ候ものは容易に出來難レ致、依レ之前々より世上手廣療治致し、些業勝れ候者は、町醫師又は陪臣等より、其時々被二召出一候、○中略此已後被二召出一候者は、一代切に御宛行被レ下、其者一代、御奉公筋も格別に候はゞ、其品に寄、悴江御扶持方被レ下、若被二召出一候而、間も無レ之病死之節は、直に御宛行上り候間、右之趣相心得、向後醫師推擧候節は、左之通可レ被二心得一候、

一町醫師、又は陪臣等に而も、療治宜仕候醫師有レ之節は、御目見之儀相願、御目見被二仰付一候已後、御扶持方被レ下、奥御用被二仰付一候事、

但若年寄支配之事

一右之通被二仰付一候上に而、御番をも被二仰付一候時、奥醫師並之通、御切米貳百俵、一生之內被レ下置候、尤御番料も可レ被レ下候事、

一品に寄、被二召出一候者之樣子次第、御扶持方被レ下、小普請入も可レ被二仰付一候事、○中略

右之通奥醫師(江)相達候間、可被得其意候事、

待遇俸祿

〔吏徴附錄(内職)〕奥醫師　若年寄支配　貳百俵高　御番料貳百俵　外科雜科同百俵　法印法眼

見習貳百俵(御番料無之)

〔慶寛諸條令(下)〕萬治二己亥年八月六日

下乘之橋より内へ召連候人數覺

一奥之醫師(并)當番之醫師、侍二人、草履取一人、挾箱持一人、但雨天之時ハ、笠持一人可相通之、

〔憲教類典(二ノ五御役)〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候内、御足高(并)御役料定、

御番料

貳百俵(千石迄、但外科ハ御番料百俵、)　奥醫師

〔德川禁令考(十八稍規)〕慶應三丁卯年九月廿六日

足高役料等ヲ廢シ役金給與ノ定

(別紙)御役金被下高之覺

金四百兩、(法印法眼)奥醫師、(但高八百石以上之者江ハ半減、御切米高四百俵以上之者江ハ不被下、同貳百俵以上之者江ハ半減、)

任免

〔延寶三年江戸鑑〕御近習醫師

吉田意庵　塙宗悦　河野良以　那須玄竹

〔寶永三年武鑑〕御奥醫師

千二百石、久志本左京亮、　千九百石、曲直瀬養安院法印、　千三百石、竹田法印治部卿、　千五百石、依田陽德院法印、(○以下十六人姓名略)

御奥外科

三百俵、御役料百俵、吉田自庵法眼、　二百俵御役料百俵、杉本忠恩法眼、　二百俵、御役料百俵、淺井

休澤法眼、　三百俵、御役料百俵、瀨尾昌宅、　百俵、御役料百俵、吉益春庵、

御奥鍼醫師

佐田玉川法眼　三百俵、佐田玉淵、

御奥目醫師

百五十俵、馬島安清、

御奥齒醫師

百俵廿人扶持、役料百俵、本康頑庵、　二百俵十人扶持、松本善甫、

〔慶應三年武鑑〕奥御醫師　二百俵高　御番料二百俵

戸塚香春院法印　多紀養春院法印　伊東瑤川院法印〇以下十六人姓名略

奥御外科　二百俵高　御番料百俵

廿人フチ、小堀祐貞法眼、　二百俵、栗崎昌有、　二百俵、村山伯元、

御鍼科　二百俵高　御番料百俵

四十人フチ、吉田秀貞、　三十人フチ、平塚撿挍、　百俵、杉枝仙貞、

御口科　二百俵高　御番料百俵

佐藤道安法眼

御眼科　二百俵高　御番料百俵

百俵五人フチ、渡邊雄伯、　二十人フチ、土生玄育、

〔貞享三年武鑑〕御奥醫師並

二百俵、小川孝永、　同武田杏仙法印　武田杏庵　二百俵、樫井淨有、　三百石、久志本式部卿、　百

五拾俵、後藤意伯、　三百石、久志本主水、　二百俵、人見正竹、　二百俵、土岐格庵、　五百石、片山宗賢、

西丸奥醫師

三百俵、岡本壽仙法印、　二百石、塙宗栁、

〔官中秘策 二十五〕西丸奥御醫師七人

〔吏徴附錄 內職〕西丸奥醫師十人　同上〇若年寄支配、貳百俵高、御番料貳百俵、外科雜科同百俵、法印法眼、

奥詰醫師

〔吏徴附錄 內職〕奥詰醫師　若年寄支配　持高　部屋住廿人扶持

〔文化四年武鑑〕奥詰御醫師 圜御製藥所掛り、圜痘瘡家業、一番町御藥園掛り、

千九百石、圜曲直瀨養安院法印、　二百俵、杉本仲溫、　二百俵、圜池田瑞仙、　三百俵、千田玄知、　二百俵、野呂元忠、

〔慶應三年武鑑〕奥詰御醫師

二百俵、太田元僖、　千九百石、曲直瀨養安院、　二百俵、服部了伯、　二十人フチ、髙松凌雲、〇以下十五人姓名略

番醫師職員職掌

〔吏徴 御目見以上〕御番醫師廿八人

〔明良帶錄〕御番醫師

是は家々の醫術を以て宿衞をなす、殿中不時病人、非常の怪我人等ある時藥を與ふ、大奥向病人ある時、御定の外、醫師呼寄の節、御留守居より申越、御廣敷迄罷越、御廣敷番の頭案內す、部屋江罷越容體を診す、何れも法眼なり、

〔文昭院殿御實紀 一〕寶永六年三月九日、けふ令せられしは、〇中略 番醫は兩城打交てつかふまつるべしとなり、

〔寛政九年武鑑〕御番醫師格　奥詰

三十人フチ 朝鮮種人參製法御用ニ付、手傳頭取二人、手傳廿人、寶曆十三ヨリ、 田村元敬

待遇俸祿

〔吏徴 御目見以上〕御番醫師 〇中略 若年寄支配　桔梗間　持高　貳百俵以下御番料百俵　部屋

任免

住廿人扶持

〔醫格大概〕御役勤役料并支配頭御用懸

表御番御醫師、御番料二百俵より以下成ル者へハ、御足高百俵、外科同斷、從部屋住新規被召出候者ハ二十人扶持被下、御番中本道取締二人、外科取締二人、

〔憲教類典御役二ノ五〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高并御役料定、〇中略

御番料百俵　二百石高迄

御番醫師

〔嚴有院殿御實紀二〕慶安四年九月十五日、醫員の番命せらるゝもの二十三人、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御番醫師〇中略　慶安四年辛卯九月十五日、始置二十七員、本道十員、外科七員、

〔明和八年武鑑〕表御番醫師　西御丸ヲ兼御勤　二百俵以下者、御番料百俵宛、

八百石、山田立長、　五百石、數原清庵、　五百石、餘語古庵、　廿人ふち、中川專庵、　五百石、木村鎌庵、五百石、塙宗悅、〇以下十八人姓名略

表御番外科　二百俵以下、御番料百俵宛、

百俵、坂元養安、　二百廿俵、天野良順、　二百俵、杉本忠惠、　二百俵、栗崎道有、　廿五人フチ、古田休甫、〇以下七人姓名略

〔慶應三年武鑑〕表御番醫師　西御丸兼御勤　二百俵以下、御番料百俵、

二十人フチ、吉田元卓、　五百石、森專益、　五百石、奈須玄竹、〇以下二十六人姓名略

表御番外科　二百俵以下、御番料百俵宛、

廿五人フチ、古田瑞安、　百俵、曾谷仙庵、　三十人フチ、村山元重、〇以下十一人姓名略

寄合醫師

〔吏徴附錄内職〕寄合醫師　若年寄支配　持高

〔有司勤仕錄〕御醫師

寄合醫師は、御禮日計出仕、奥醫師は毎日登城、

〔明良帶錄〕寄合醫師

何れも家業の術を以て奉仕す、正月は家法の藥を差上る、家督後幼年のもの、此場にて修行して、醫道を博く學て、藥性を辨別したる人を撰ばる、

〔醫格大概〕家督

代々寄合御醫師、於山吹間被仰付、獻上一束一包、

〔大猷院殿御實紀二十三〕寛永十年十二月廿八日、町醫田澤清雲道賀召出され、寄合醫に加へられ、月俸十口たまふ、

〔寛政四年武鑑〕寄合御醫師

千石、竹田法印、　七百石、吉田意安法印、　二千石、久志本左京、　千石、岡本玄冶法眼、　二百俵、峯岸春庵、〇以下三十七人姓名略

〔慶應三年武鑑〕寄合御醫師

三十人フチ、柴田元美、　三十人フチ、小野蕙畝、　二百俵、宮崎立克、　二十人フチ、田村元雄、〇以下三十二人姓名略

小普請醫師

〔明良帶錄〕小普請醫師

是も醫術修行の道場にて、小普請組の支配也、屋敷幷町方の病人に藥を與ふれば、療治帳とて、病人の姓名、主人の名、町方は町名を認、藥名を書し、支配へ出す、是を御支配方へ進達と成る、此場修行の内、減祿被仰付、醫術上達にて選擧の節、取高に被成下、寛政御改正度之令條也、

〔有司勤仕錄〕御醫師

一小普請醫師之內、施藥所を司る、

〔明和八年武鑑〕小普請御醫師　勤仕並

三十人ふち 朝鮮種人參製法御用ニ付、手傳頭取二人、手傳廿人、寶曆十三ヨリ、 田村元雄、 父元雄、製法手傳、 田村元長

〔寬政四年武鑑〕小普請御醫師　勤仕並　奧詰

三十人ふち 朝鮮種人參製法御用ニ付、手傳頭取二人、手傳廿人、寶曆十三ヨリ、 田村元長

〔市尹秘錄一〕御醫師 ○養生所 人數定之事

本道貳人　外科貳人　眼醫壹人　肝煎本道小川又右衞門

右之通定人數ニ候事 ○下略

〔享保通鑑七〕享保七年十二月廿六日、今度被仰出候趣、

一小石川傳通院前に罷在候小川笙船と申者、爲極貧之病人、施藥院可被仰付哉之旨、目論見書付存寄申上候付、段々御吟味之上、今度於小石川御藥園、病人養生所被仰付候間、町々極貧之病人、藥も給兼候體之者、或は獨身ニ而看病人も無之、又は妻子有之候得共不殘相煩、養生不罷成者之類、右養生所江罷越、致逗留療治受可申候、尤療治之內ハ御扶持被下、其上夏冬衣類夜具等迄、諸事不自由無之樣被仰付候間、其身步行候者ハ格別、步行難成病人ハ、家主或ハ親類店請人、又ハ相店之もの成共相願、御役所江可訴出候、吟味之上、名主判鑑を以、四ツ前後より七時迄之內、養生所江直可差越候、其段、役人江茂申付置候事、

〔東徵附錄世職〕小川良意 養生所肝煎　町奉行支配　貳拾人扶持　藥種代金五十兩　享保七年壬寅十二月日以來代々役　養生所內住宅

〔德川禁令考二十三養生所〕安政二卯年

養生所醫師身分之儀ニ付申上置候書付

町奉行

養生所出役醫師之儀、天保十四卯年、鳥居甲斐守勤役中取調、越前守殿江申上、本道外科、其外共都合五人、勤中帶刀差免、十五人扶持ツヽ被下置、町醫師より出役被仰付候ニ付、自然身分之儀、私共支配受候は勿論之儀ニ御座候間、是迄都而組養生所見廻り與力進退爲致居候得共、其頃別段勤中ハ、町奉行支配と心得可申趣、先役共より伺濟被仰渡等も無之候間、彼是不都合之儀も御座候ニ付、以來右出役中ハ、全私共支配之者と相心得申候、依之一應此段申上候、以上、

卯四月

井戸對馬守

池田播磨守

〔德川禁令考二十三養生所〕慶應元丑年九月十八日

養生所之儀、町奉行支配御免之事

水野和泉守殿御渡

町奉行江

小石川養生所之儀、此度御改革ニ付、其方共支配之儀は御免被成候間、得其意、引繼等諸事、多紀養春院、多紀安洲、吉田貞順、高島祐庵、中村周伯、可被談候、

〔市尹秘錄一〕支配向起立摘書之事

小石川養生所肝煎

高貳拾人扶持

小川又右衞門

藥種料、壹ヶ年金五拾兩宛、

拜領屋敷、下谷長者町貳丁目、　當分小石川戸崎町借地住宅〇下略

〔浚明院殿御實紀十八〕明和五年八月廿日、市井醫小川丹治某、〇養生所肝煎精勤すればとて、生涯月俸二十口賜はる、

〔寛政九年武鑑〕養生所肝煎

廿人フチ　小川又右衞門

〔慶應二年武鑑〕小石川養生所肝煎

二十人フチ　小川鑛之助

〔教令類纂二集七十一〕享保七壬寅年十二月四日、大久保佐渡守殿於御宅被仰渡、

安藤主膳支配　岡丈庵

伊丹覺左衞門支配　林良適

今度小石川御藥園ニ、病氣之者養生所出來候ニ付而、兩人申合、壹の內壹人宛、隔日ニ彼地へ罷越、町奉行役人幷小川笙船悴丹治と申者遂相談、療治可致候、尤病人の様子次第、日々にも相越にて可有之儀ニ候、夜中急病之もの有之候節は、木下道圓、且又藤堂佐渡守扶持人醫師堀長慶、右之內も罷越、藥用致し候筈ニ候、

〔明良帯錄〕小石川養生所

此場は、醫道修業のため、此所に至り、病人に藥を與ふ、是は小普請醫師の歷試なり、

〔市尹秘錄一〕御醫師(養生所)人數定之事

本道貳人　外科貳人　眼醫壹人　肝煎本道小川又右衞門〇中略

但本道御役料百俵宛、外科眼科六拾俵宛、見習は御役料無之、隔年之御褒美計被下候、

一以前は本道四人に而、壹人ニ付金五拾兩ヅヽ、外科四人、眼科壹人ニ而、右いづれも壹人ニ付金貳拾兩ヅヽ被下候處、享保十八丑年ゟ人數高幷御役料之儀も、本文之通相改候事、

御褒美被下金等之事

本道貳人　銀拾枚宛

目見醫師

但見習は銀五枚宛

外科貳人眼科壹人　　　銀七枚宛

右之通、隔年ニ奉行兩名ニ而申上被下候、〇中略

一御褒美之儀、元文元辰年迄、年々被下候處、右以後ゟ隔年ニ相成候事、

〔元文四年武鑑〕小石川養生所御醫師　御役料百俵　小普請ヨリ御勤

三百俵、木下道圓、　廿人フチ、中村玄種、　二百俵、杉本元眞、　廿人フチ、增山養甫、

〔天明七年武鑑〕小石川養生所御醫師、　御役料百俵　外科眼科六十俵宛

五人フチ、竹内與庵、　百俵十人フチ、伊達本覺、　廿人フチ、增山元壽、　喜多村安隆　岡了節　西玄哲

〔天保十一年武鑑〕小石川養生所御醫師　御役料百俵　寄合小普請ヨリ御勤

七十人フチ、見習、井上三庵、　二百俵、井上玄丹、　見習、高木濟庵、　二百俵、見習、成田活元、〇以下四人姓名略

〔柬徵附錄内職〕御目見醫師　若年寄支配　寛文六年丙午十二月廿七日、町醫師初而御目見、

〔玉露叢十八〕寛文六年十一月廿八日、〇上文柬徵附錄作ニ十二月二十七日御目見被仰付醫師ノ面々、

吉田長庵、岡井玄眞、久保玄貞、木村道伯、渡邊玄古、井關玄說、淺尾長澤、本郷玄朝、狄野春庵、杉本忠意、坂元養庵、佐藤度南、福山道安、笠原養泉、　已上十五人内、本道九人、

〔正德六年武鑑〕御目見醫

二百俵、松本玄昌、　豊島玄賀　近藤雲仙　二百石、林元伯、〇以下十七人姓名略

〔慶應二年武鑑〕御目見醫師　▲印ハ御用出役、五人扶持、銀廿枚宛、●印ハ御廣敷廻り、⧗印天文方出役、■印醫學館出役、

■澀江道純　尾臺良作　森養竹　大森岱順　堤愛卿〇以下十四人姓名略

薬園役人 養生所役人 併入

薬園ハ、江戸ニテハ、品川、牛込、麻生、小石川、駒込等ニ在リテ、奉行、預等ヲ置キテ之ヲ管轄セリ、而シテ養生所ハ小石川薬園ノ西隣ニ在リテ、一ニ施薬院トモ云フ、

薬園役人初見

〔大猷院殿御實紀 二〕寛永元年六月八日、薬苑監田澤清雲道賀法橋に叙す、

品川牛込薬園役人

〔大猷院殿御實紀 三十九〕寛永十五年十月廿九日、こたび品川牛込の兩地薬苑をひらかる、よて醫員池田道陸重次は品川、山下芳壽軒宗琢は牛込の園監として、各廩米二百俵くだされ、同心二人、園丁十人づゝ附屬せらる、道陸重次園内に薬師堂いとなみ、榮草寺と號す、

麻生薬園役人

〔嚴有院殿御實紀 三十三〕寛文六年九月二十二日、麻生薬園監役宅修理料、銀八貫目給ふ、

〔常憲院殿御實紀 八〕天和三年七月十九日、醫員木下道圓守直篤實につかふまつればとて、麻布薬園監を命せらる、

小石川薬園奉行

〔東職記聞 二〕薬園奉行　一人(園在小石川與駒場也、享保中、有德院殿命醫官、使開園植薬艸而以和薬學治病也、先是醫官往々雖用和薬、不如今之盛也、且憐鰥寡孤獨、及家貧不堪服薬者而園中置養生所、被令醫官療養也、爾來醫官之勵業者亦益多也、)

〔明良帶錄 續篇〕小石川御薬園奉行(若支)　百五十俵高　燒火　同心十人

御醫師掛り、又は薬草心得、綿羊飼立、并病人介抱等也、

〔寛政四年武鑑〕御薬園奉行　燒火　同心十人

二百俵 白山御てん　岡田左門　百俵二人フチ 白山御てん　芥川小野寺　十人フチ 見習　芥川長春

〔天保十一年武鑑〕御薬園奉行　燒火　同心十人

父孫次郎 見習　岡田善十郎　百俵二人フチ 白山御てん　芥川小野寺

〔寶暦集成絲綸錄 一〕寶暦十辰年三月

若年寄支配(○中略)

一小石川御藥園奉行

〔吏徵附錄〕(世職)芥川長春(小石川御藥園預)　若年寄支配　高百俵貳人扶持　正德元年辛卯九月廿三日以來代々役

〔吏徵附錄〕(世職)岡田孫次郎(小石川御藥園預)　若年寄支配　燒火間　高貳百俵貳人扶持　同心四人　御藥園內住宅　享保六年辛丑十二月廿七日以來代々役

〔憲教類典〕(二ノ五御役)享保十六(辛)亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高(并)御役料定、(○中略)

小石川御藥園奉行

一百五拾俵高

〔憲教類典〕(二ノ五御役)(取來候御扶持方共)元文三(戊)午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高(并)役扶持、(○中略)

(御藥園預り)芥川小野寺

三拾俵二人扶持

〔享保集成絲綸錄〕(一)延享元子年六月

當時風中席書(○中略)　燒火之間(○中略)　小石川御藥園奉行

〔文昭院殿御實紀〕(十一)正德元年九月廿三日、芥川小野寺元風、白山の藥園花園の事つかさどるべしと命せらる、

〔有德院殿御實紀〕(十三)享保六年十二月廿七日、これまで芥川小野寺元風にあづけられし小石川の藥園に、こたび小普請岡田理左衞門安忠が新墾せし地をあはせて、四萬九千六百餘坪の地、元風安忠二人にわかちて主管すべしと命せらる、屬吏も此二人の隸下に分屬して、いよ／＼藥種を培栽すべしとなり、

同心

〔有德院殿御實紀四十三〕元文元年三月廿二日、小石川藥園預芥川小野寺元風に、七十俵の加秩賜はり、同朋の末班につくべしと命せらる、

〔吏徵御目見以下〕小石川御藥園同心四人　貳拾俵貳人扶持高　見習三人扶持　町屋敷拜領沽券金三十兩　御抱場

〔吏徵別錄御目見以下〕小石川御藥園同心　享保六年辛丑三月四日、岡田利左衛門芥川小野寺江同心十人充附屬す、各二十俵二人扶持、

荒子

〔吏徵御目見以下〕小石川御藥園荒子廿二人　拾五俵壹人半扶持高　御抱場

〔甲陽軍鑑十九品第五十三〕信長後詰と聞、謙信早々夜中に打立、明日卯の刻の合戰と定めらるゝ、一の鐘に諸軍えたゝめ、二のかねに武具をきよ、三の鐘にうつたつべきと、謙信出らるゝ、もよほしを聞、信長勢悉敗軍して、跡先もなく夜にげに仕り、川を引こすとて、歩あらしこ流死するといへども、信長衆は越前まで引こむなり、

〔蜂須賀家文書武家名目抄職名部附錄二十三所引〕高麗入に付御在陣中、侍中間小者あらしこ人夫已下にいたるまで、掛落仕者有之者、其身之事は不及申、一類幷相拘置於在所可被加御成敗、但雖爲身類告しらするにおゐては、其者一人可被御赦免候、使として罷歸候とも、其主人たしかなる墨付於無之者、可爲罪科事、

駒場藥園預

〔吏徵附錄世職〕植村左平太駒場御藥園預　若年寄支配　高百俵三人扶持　御手當金三十兩　御役料百俵　御藥園內住宅　享保十四年己酉九月日以來代々役　享保五年庚子、始有採藥之命、　寶曆二年壬申三月六日、吹上添奉行格、若年寄支配、是迄御留守居支配、　明和五子年六月廿六日、人參製造所御用も相兼、格別出精相勤候付、以來御役料百俵被下、小石川御藥園奉行次席、

〔浚明院殿御實紀六〕寶曆十二年八月六日、日光山のほとりに、藥園監植村左源次政辰を遣され、

駒場藥園附
養生所役人

採藥せしめらる、

〔寶曆集成綸錄一〕寶曆十辰年三月

當時殿中席書〇中略　燒火之間〇中略　植村左源次

〔吏徵下御目見以下〕駒場御藥園附四人　給金七兩　御抱場

○

〔江戸名所圖會十三〕療病院　同所〇小石川藥園の西に並ぶ、養生所と號けらる、則古の療病院に比せられ、鰥寡孤獨貧窮無賴の病人を救はせ給はむがため、享保年間官府より是を建させられ寄宿を許し、藥餌を賜ふ、御仁惠實に百世に冠たりといふべし、

〔江都管轄秘鑑九〕町奉行所衆ゟ施藥院の義に付いろ〳〵伺書の寫し

施藥院下役拾人の義、當分諸事役馴之内、私共組同心の内拾人、下役に可被仰付候哉、左候はゞ遠方の儀にも御座候間、施藥院におゐて晝夜御賄被下候樣に仕度奉存候、

一右同心差遣し候はゞ、與力どもの内兩人ほど、晝計差遣し置候て可然、是又御賄被下候樣に仕度奉存候、

右之通被仰付候はゞ、岡田利右衛門世話仕候にも及申間敷哉に奉存候、以上、

六月　中山出雲守　大岡越前守

右書上、享保七寅年六月廿日、有馬兵庫頭殿江上げるよし、

覺〇中略

一施藥院へ町奉行與力貳人附置、毎日壹人にて相詰、施藥院一式の差圖仕、病人出入相改、惣賄御入用等、病人へ用ひ候人參の吟味迄世話仕候積り、

一町奉行同心拾人

內貳人年寄同心、是は賄所摠元〆諸色受拂吟味役、

內八人平同心、是は藥之所幷病人見廻り役、

右晝夜隔日勤候積り

一下男八人、此下男御抱に仕、賄所働き、門番人、其外病人看病、火事の節、足弱の病人に付添へ罷在候樣可ㇾ然奉ㇾ存候、

一女三人、是は女病人看病、又は洗濯物等の爲召抱へ申候、但當分は兩人抱、病人數も多く相成候はゞ、三人にも可ㇾ仕候、

下ゲ札

食焚 當分共 壹人　汁焚野菜拵共 壹人　水汲 同 壹人

小遣 貳人　病人扱同藥煎 貳人　門番 壹人

下男門番人共、都合八人、

〔市尹秘錄 一〕養生所附役人之事

一見廻り與力　雙方ニ而 兩人

一年寄同心　雙方ニ而 三人

但兩人壹人と隔年ニ增減相勤候事

一小普請より出役同心

但起立之節者、町奉行同心計拾人ニ而相勤候處、享保八卯年、養生所附小普請同心拾貳人、以來町奉行同心ニ相交可ㇾ相勤旨被ㇾ仰渡、其後御役出病氣引等ニ而、三人明跡御入人申上候處、以來三人分、勤金九人江可ㇾ被ㇾ下旨被ㇾ仰渡、同十巳年より九人ニ相減、寛政五丑年より猶又六人ニ相成候事、

〔市尹秘錄〕一 養生所壁書之事

享保七寅年壁書寫

一養生所江毎日與力兩人之內、壹人宛隔日ニ相詰、年寄同心、小普請同心三人宛可二相勤一候、此外肝煎毎日罷出立合可二相勤一事、○中略

一病人儀、其支配之名主判鑑差添、病人來候はゞ與力并肝煎等立合、判鑑引合、一通り承屆、長屋江入可レ申事、○中略

一病人之宿々、若病人方江給物送り候はゞ、役所ニ詰合候同心、早速與力江申達可レ請二差圖一候、其外金銀衣類鼻紙等ニ而茂、○中略與力江可二申達一候、與力不二罷在一時は、年寄同心江申聞、肝煎逐二相談一給物之分は病人江爲レ給可レ申候、○中略

一年寄同心ハ、賄方諸入用之請拂隨分入レ念、請負之町人方致二吟味一、諸事麁末ニ無之樣ニ可レ仕候、○中略

一所々口々之錠、年寄同心預り置、夜中用事之節は、其譯承屆明させ、用事仕廻候はゞ、同心立合錠をろし可レ申事、○中略

寅十二月

〔市尹秘錄〕一 御褒美被レ下金等之事

被レ下金年々

一銀拾枚宛　見廻り與力兩人

一金三兩宛　年寄同心三人○中略

小普請同心壹ヶ年勤金

一金四兩宛　六人

御褒美年々
一金百疋宛
仝快帳調取扱候者江筆墨料壹ヶ年
一金貳百疋宛
類燒之節壹人江
一金四兩宛

兩人〇中略
拜借被仰付候

古事類苑

官位部六十五

徳川氏職員十四

膳奉行

膳奉行ハ、將軍ノ食膳ヲ掌ル、三人又ハ四人五人ヲ置キシコトモアリテ、人員ハ一定セズ、若年寄ノ支配ニ屬シ、二百俵高ノ職ニシテ、役料二百俵ヲ給ス、屬僚ニ賄方見廻役、及ビ同心番人等アリ、抑〻此職ハ、慶長十九年大坂ノ役ニ、伊達政宗ノ言ニ從ヒテ、始テ之ヲ置キシガ、元治元年ニ至リ之ヲ廢シテ、小納戸ヲシテ此職ヲ兼帶セシメタリ、西丸二丸ニモ亦膳奉行アリ、

〔柳營秘鑑〕四諸役人員數并組支配

一御膳奉行　四人

〔東職紀聞〕二御膳奉行三人掌二御膳一切事一之職也

〔明良帶錄〕御膳奉行持高御役料三百俵二百俵以下ハ二百俵高ニ被二成下一

君膳朝夕の事に關る、奧向よりの掛合、通達向、御賄頭、御膳所頭等、掛合多く、惣じて召上る物、并御菓子、御好の品、御賄頭へ談る事、

〔東照宮御實紀附錄〕十四伊達政宗、茶臼山の御陣へ參り御物語の序に、かゝる騷擾の折は、人心計りがたければ、朝夕の供御など、よく〳〵御心付られればよからんと申上しに、尤の事と聞しめし、是より供御聞しめすに、御にとりの役立置れ、後々までも三河以來譜代の者もて、その役にあてらるゝ事となりぬ、

按に、おにとり役とは、今の世の御膳奉行の事なり、寛永寛文の頃まではかく唱へしなり、今も食物の試するを、おにをするといふは古言なり、

〔青標紙三編〕一御膳奉行は、本國三河の者にあらざれば不被仰付事なれども、文政年中より、外にても被仰付るゝなり、

〔常憲院殿御實紀四十二〕元祿十三年十一月廿九日、御膳奉行原田甚五兵衛種清、○中略和田倉の邸の奉行命せらる、

〔有德院殿御實紀七〕享保三年十月朔日、御膳奉行二人をまされ、賄方表臺所舂屋をも巡視すべしと命せらる、

〔吏徵上御目見以上〕御膳奉行三人　若年寄支配　土圭間　貳百俵高　御役料貳百俵

〔温恭院實紀十三〕安政四年閏五月七日　御膳奉行　中野又兵衛

待遇

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略御膳奉行三百俵以下は百俵、○下略

數年出精相勤候ニ付、姫君樣御用人格布衣被仰付之、

〔憲教類典二ノ五御役〕享保八癸卯年六月十八日　御膳奉行

高之多少ニ不拘、御役料貳百俵可被成下候、

俸祿

〔元治元年武鑑〕御膳奉行　御役料二百俵

布衣二百俵、中村又左衛門、　三百五十俵五人フチ、館野忠四郎、　三百俵、長谷川又三郎、

任免

〔諸御役代々記十八〕御膳奉行　御役料二百俵

寛永十八巳八月十二日　內藤仁左衛門

屬僚

寛永十八巳八月十二日　大久保喜六郎

慶安元子三月晦日、小十人頭江、　横田甚五郎

寛永十一戌　大木才兵衛景胤〇以下百二十三人姓名略

〔安政六年武鑑〕御膳奉行

鳥居八右衛門　中野又兵衛　館野忠四郎　早川善左衛門　長谷川民之助

〔文久二年武鑑〕御膳奉行

中野又左衛門　館野忠四郎　長谷川又三郎

〔徳川禁令考二十一典長官〕元治元子年五月廿四日

御膳奉行廢止之事

姫君様御用人格御膳奉行　館野忠四郎

中野又兵衛

長谷川又三郎

時服三ツ、

御膳奉行、以來御小納戸ニ而兼帶被仰付候ニ付、御役御免、勤仕並寄合被仰付、只今迄出精相勤候ニ付被下之、

中村又左衛門

同斷ニ付、御役御免、勤仕並小普請入被仰付、御足高其儘被下之、

〔憲教類典三ノ三十五下衣服〕享保二十乙卯年六月廿四日

本多中務大輔殿

西尾隱岐守殿　御渡

御本丸　西丸
御膳奉行支配
御賄方見廻役

右御規式に掛り候節計、熨斗目白帷子着用仕、其外は熨斗目白帷子、一切着用仕間敷候、

○按ズルニ、此職名、元文、寛保、明和、天明、寛政、文化、文政、天保、嘉永、安政、萬延、文久等ノ武鑑ニ見エズ、

〔憲教類典〈二ノ五御役〉〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

御膳奉行〈○中略〉　同心十五人　番人九人

〔吏徴附録〈職原〉〕御膳奉行支配　おにとり二十人、同心五人、

〔吏徴〈上御目見以上〉〕西丸御膳奉行三人　同上〈○若年寄支配、土圭間、貳百俵高、御役料貳百俵、〉

〔營中御日記〈二十二〉〕正保五年三月廿七日、今日御役被仰付候輩、　大納言樣〈○徳川家綱世子〉御膳奉行へ

松平宇右衞門　鵜殿十郎左衞門　久留善兵衞　丸毛三郎右衞門　梶川庄左衞門

右被仰付旨、老中列座有被傳之、

〔大猷院殿御實紀〈七十八〉〕慶安三年八月晦日、御膳奉行杉浦彌一郎親則、大久保三十郎忠壽、大納言殿〈○徳川家綱世子〉へ附屬せらる、

〔吏徴別録〈下布衣以下御目見以上〉〕御膳奉行　慶安三年庚寅八月晦日、始置西丸附二員、

〔東武實録〈十一〉〕寛永元年、是年水野善兵衞勝次、二ノ丸御膳奉行ニナル、

西丸膳奉行

二丸膳奉行

賄頭

職員職掌

賄頭ハ、膳所及ビ奥表臺所ヘ、魚肉菜蔬、其他一切ノ食料品ヲ供給スルコトヲ掌ル、二人又ハ三人四人ヲ置キシコトモアリテ定員ナシ、若年寄ノ支配ニ屬シ、二百俵高ノ職ニシテ、役料二百俵トス、屬僚ニ組頭、調役、吟味役、賄方等アリ、賄方ヨリ出ス品物ヲ、吟味役ニ於テ先ヅ點檢シ、次ニ調役ニ於テ調査シ、更ニ組頭ニ於テ精査シテ、然ル後賄方ヨリ各臺所ヘ分配送致スルナリ、其他勘定役、改役、舂屋勤、菓子及ビ酒役、賄六尺、賄新組等ノ屬僚アリ、又西丸ニモ賄頭アリ、

〔柳營秘鑑 四〕諸役人員數并組支配

一御賄頭　四人

〔東職記聞 二〕賄頭二人

掌魚肉野菜、及獻上之酒肉等、一切之出納事之職也、

〔明良帶錄 續篇〕御賄頭 二百俵高 御役料二百俵 若支

此寮は、諸御勝手向を主役とす、御膳規諸召上り物、畑品取扱を改る役にて、御膳椀家具、御湯道具、御活花、御草履御下駄の類迄も司る、近比館九八郎上御用所にて定伺の處、攝津守殿御承知にて、御賄所、御臺所御廣敷廻り等を減じを付て渡す、此場より、吉川吉十郎は御納戸頭へ昇り、吉田伊左衛門は御臺所頭へ昇り、田中市左衛門は御臺所頭を兼帶す、

〔武家嚴制錄 四十〕家綱公御本丸御移徙之時御條目

一御賄方御條目

定

一御賭方萬事御入用彌入念、費無之樣に無油斷可申付事、
一從此已前被仰出候御條目、并誓詞之趣、猶以相守之、組中迄かたく可申付事、
一總御賭之輩御番之儀、六尺等にいたるまで、切々改之、嚴密に相勤候樣に可申付事、
　附煩人は、其趣誓言狀可取之事、
一御賭人六尺等之部屋、何も折々見廻、不作法之儀無之樣に可申付事、
一御奧方、并御つきやの御用所同前に可申付事、
　附火之用心、所々見廻之、無油斷可申付之、御舂屋之儀、別而入念かたく可申付事、
右條々、堅可相守此旨者也、
　萬治二年九月五日
〔甘露叢五十八〕元祿九年二月廿日、上野御法事御用被仰付、(中略)御賭方小川杢左衞門、
〔享保集成絲綸錄十八〕正德二辰年七月
　御賭頭へ相添渡之
　覺
常々御入用等之儀、并御賭方江請取者、且又御賭方ゟ所々江相渡物之儀、再篇遂吟味、御費無之樣に可被相心得候、吟味之儀、段々ゆるみ候樣相聞候間、心之及候程入念可被申候、尤支配并組之者にも、勤方不精に而、不相應之者も在之候はゞ、伺之上引替可被申候、向後不吟味に而在之候はゞ、何も越度たるべく候間、可被得其意候、以上、
〔有德院殿御實紀十二〕享保六年三月十一日、賭頭一場庄右衞門政勝、老衰して職とかむ事聞えあげしかど、なを壯健なれば、今しばし職事つかふまつるべし、されど老年ゆへ、上直をばゆるさるるとなり、是異數なり、

〔有德院殿御實紀二十四〕享保十二年六月廿三日、この日賄頭四人、これまでは西城を見まはりしが、今より一人は西城にも直し、事々整理せしむべき旨命せらる、

〔德川禁令考十七 賄頭〕支配

御賄組頭四人　同御春屋勤組頭四人　同調役五人　同吟味役十一人

外西丸定助勤二人、御賄方百二十二人、六尺頭十二人、六尺五百人、新組頭六人、新組三百六人、

〔憲教類典二ノ五 御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別幷御役料

御賄頭　御賄方百廿二人、六尺六百八十三人、總辨當持貳百五十九人

待遇俸祿

〔吏徵上 御目見以上〕御賄頭三人　若年寄支配　土圭間　貳百俵高　御役料貳百俵

〔昭德院實紀十七〕文久元年九月七日

出精相勤候ニ付布衣　御賄頭 倉地久太郎

右被仰付旨、於御右筆部屋椽頰、老中列座、信濃守申渡之、若年寄中侍座、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略 賄頭、富士見番の頭は百俵、○下略

〔憲教類典二ノ五 御役〕享保八癸卯年六月十八日

高之多少ニ不拘、御役料貳百俵可被成下候、　御賄頭

〔吏徵別錄下 布衣以下御目見以上〕御賄頭○中略　延享二年乙丑十二月廿三日、小普請方より青山忠兵衛被仰付候節より、貳百俵以下之者は、貳百俵高に御足高可被下旨極、

〔慶應三年武鑑〕御賄頭　二百俵高　御役料二百俵

任免

〔台德院殿御實紀二十四〕慶長十八年、是年納戸番倉橋勝兵衛政長賄頭となり、○下略

〔東職記聞 二〕賄頭二人

集成曰、天正中、神祖在駿府之時、使白山大先達法印常慶掌駿河一州之租稅及庖厨事也、是當職之所權輿云也、

〔寛永三年武鑑〕御賄方頭

八百石、小川杢左衞門、　三百石、伊藤新兵衞、　三百石、大木伊兵衞、　三百石、牛田甚左衞門、

〔慶應二年武鑑〕御賄頭

百五十俵、奈佐淸次郎、　布衣百俵、山下新十郎、　七十俵五人扶持、力石勝之助、　□□□吉本勇五郎、

組頭

〔吏徵 御目見以下〕御賄組頭七人

〔明良帯錄 外篇〕御賄組頭

御賄組頭は、御賄より出す所粗品一切、青物、乾物、魚類、干魚、御好之品を改む、

〔教令類纂 初集 二十〕萬治二己亥年九月五日

定

一御賄組頭壹人宛、一日一夜可相勤、○中略

一御賄方組頭、御臺所、御賄所、切々見廻り六尺等不作法無之、其役を無油斷様、堅可申付事、

右之條々、可相守此旨、若違背之族於有之は隨科之輕重、急度曲事に可被處者也、

萬治二年九月五日

〔吏徵 御目見以下〕御賄組頭七人　頭支配　七十俵五人扶持高　役切米三十俵　役上下、貳半場、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共に、御増高被下候間、自今支配之内ゟ、格別之儀も無之候は

ば御足米願申出間敷候、

右之趣、向々江可ㇾ被ㇾ達候、○中略

七拾俵高五人扶持　　御賄組頭

〔柬徽別錄御目見以下〕御賄組頭○中略　同○享保二十年乙卯十二月廿日、役切米三十俵充被ㇾ下、十人

〔勘契備忘記〕中享保二十一辰年○元文元年

御賄方御役御切米被ㇾ下方書付

一御賄組頭被ニ仰付ㇾ候節は、賄方之内ゟ被ニ仰付ㇾ候はゞ、組頭御役御切米、以來被ㇾ下候積、

一組頭に成候者、諸繰上に而申付候はゞ、其場所之御切米、有來之通被ㇾ下候積、

右之通、其場所々々、御切米無ニ相違ㇾ、元御證文を以被ㇾ下候積奉ㇾ存候、

〔天保十一年武鑑〕御賄組頭　百俵高外ニ五人扶持

黒野九平次　鈴木平次郎　間下助次郎　小田市郎兵衛

〔慶應三年武鑑〕同○御賄組頭　七十俵高五人扶持　御役切米三十俵

廣木喜八郎　近藤甚藏　藤野金助

〔明和八年武鑑〕同○御賄御春屋勤

平塚織右衛門

〔寛政四年武鑑〕同○御賄御春屋勤

堤兵左衛門　浦野重平　宅間長藏

〔文化四年武鑑〕御春屋勤組頭

神谷千左衛門　片山善右衛門　小田市郎兵衛

〔慶應二年武鑑〕御春屋勤組頭

調役

井上平八郎　山本喜六郎　渡邊小右衞門　秋元孝太郎

〔吏徴御目見以下〕御賄調役五人

〔吏徴別錄御目見以下〕御賄調役　寶暦元年辛未十一月四日、始置三員、○中略　同六年丙子七月廿四日加三員、合六員、寛政五年癸丑七月二日、減一員、同年十一月廿四日、減一員、同六年甲寅五月十二日、定三員、同七年乙卯四月廿三日、始置見習一員、合四員　同年八月八日、復三員、同九年丁巳三月廿五日、增二員、合五員　文化三年丙寅八月廿九日、再置見習一員、合六員、成瀬伊三郎、此後見習無斷絶至于今、

〔明良帶錄外篇〕御賄調役七十俵五人フチ、役切米三十俵、御金十兩、頭支、

調役は、御賄方より出す處の品々を取調吟味する也、

〔吏徴御目見以下〕御賄調役五人

頭支配　七十俵持扶持高　役切米三十俵　勤金十兩　御四季施代金四兩貳分　見習一人、勤金御四季施代金同斷、燒火間、上下役、寶暦元年辛未十一月四日始置

〔吏徴別錄御目見以下〕御賄調役　寶暦元年辛未十一月四日、始置三員、馬場仙藏、百坂辨藏、高橋五左衞門、七十俵高、役切米三十俵、勤金五兩、御膳御酒役、兼相勤候付、御四季施代金四兩貳分、

〔慶應三年武鑑〕御賄調役　七十俵高持扶持　御役切米三十俵　御役金拾兩

平塚平兵衞　鈴木三左衞門　曾雌重右衞門　本多要助　林彌左衞門

吟味役

〔吏徴御目見以下〕御賄吟味役十人

〔吏徴別錄御目見以下〕御賄吟味役　寶暦元年辛未十一月四日、始置五員、○中略　明和二年乙酉三月廿八日、置助一員、合六員、安永四年乙未六月廿七日、增助一員、合七員、同五年丙申九月七日、增助一員、合八員、同年十二月廿六日減助一員、天明元年辛丑三月廿四日、減助二員、寛政五

勘定役

年癸丑七月廿一日、增二一員、合六員、同六年甲寅五月十二日、定二八員、加二員、

〔明良帶錄外篇〕御賄吟味役五十俵二人扶持、役切米二十俵、御金十兩、頭支、

調役は、御賄方より出す處の品々を取調吟味する也、吟味役は、是を吟味して、善惡を改るなり、

〔吏徵御目見以下〕御賄吟味役十人　頭支配　五十俵貳人扶持高　役切米貳拾俵　勤金拾兩

御四季施代金四兩貳分　助二人、勤金御四季施代金同斷、○中略　役上下、二半場、

〔吏徵別錄御目見以下〕御賄吟味役　寶曆元年辛未十一月四日、始置二五員、山田忠次郎、山田半四郎、森山忠三郎、原六右衞門、大井權六、五十俵二人扶持高、役切米二十俵、勤金五兩、御膳御酒役相勤候付、御四季施代金四兩二分、

〔慶應三年武鑑〕御賄吟味役　五十俵高持扶持　御役切米二十俵　御役金拾兩ヅヽ、

敷山小太郎　染谷半十郎　金子信助　會田源左衞門　平岡庄藏　多湖祺十郎　高橋儀十郎

秋元理太郎　岩崎良右衞門　西村佐野右衞門　松平記右衞門　長表次郎

〔吏徵御目見以下〕御賄勘定役四人　頭支配　四十俵貳人扶持高　役切米貳拾俵　役上下、貳半場、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共に、御增高被下候間、自今支配之內ゟ、格別之儀も無之候はば、御足米願申出間敷候、

右之趣、向々江可被達候、○中略

四拾俵高　持扶持之儘　御賄方勘定役

〔吏徵別錄御目見以下〕御賄勘定役　享保九年甲辰七月十三日、四十俵高、同二十年乙卯十二月廿日、役切米貳拾俵、五人

改役

〔吏徴御目見以下〕御賄改役三人　貳拾俵貳人扶持高　役切米十五俵　役上下、二半場、

菓子及酒役

〔吏徴御目見以下〕御賄御菓子御膳役三人　貳拾俵貳人扶持高　役切米十俵　役上下、貳半場、

〔明良帶錄外篇〕御酒役頭支、二十俵二人扶持、役切米十俵、世話役ハ十五俵、

御賄方平勤の內、別段勤役各別也、都て此場、甚御用多にて、何れも出役といふ事なく、御入人有り、御賄方より昇る、別段御役料被下、後吟味役に昇る、小普請金集手傳より至る者あり、御役場迚、御賄中の見計ひ場にて六箇敷處、下役六尺より昇る、

〔吏徴御目見以下〕御賄御酒役世話役四人　貳拾俵貳人扶持高　役切米十五俵　御四季施代金四兩貳分　役上下、二半場、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保九辰年七月

御賄方
御膳御酒役

此度御吟味之上、續兼候小給之者共に、御增高被下候間、自今支配之內ゟ、格別之儀も無之候はゞ、御足米願申出間敷候、

右之趣、向々江可被達候、〇中略

四拾俵高　持扶持之儀

賄方

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別幷御役料

御賄方百廿二人

〔吏徴別錄御目見以下〕御賄方　延寶九年辛酉、八十五人、舊ハ御賄同心と稱す、〇中略　同〇享保二十年十二月廿日、御本丸九十四人、西丸二十二人、合百十六人〇中略　同〇寛政九年丁巳、御本丸百二十人、西丸二十七人、合百四十七人　天保七年丙申、兩丸百五十三人、內假抱六人、外二人扶持取見習七人、

〔慶應三年武鑑〕御賄方百廿八人

〔明良帶錄外篇〕御賄方二十俵二人扶持、役切米十俵、世話役十二俵、頭支
御賄諸奉行役多し、六尺向より繰上となる、諸向より御入人有り、此場第一の御用多なり、御賄は、御膳所向、御廣敷向、奥御次、奥御膳所共、都て召上り物、御魚干魚幷青物御菓子、御料理向、御香の物類、御豆腐乾物等取集て、諸場所へ渡す、請取方御膳所は組頭幷改方役印受之、其品々調役吟味役掛々あり、

〔教令類纂初集二十〕萬治二己亥年九月五日

定

一御賄組頭壹人宛、一日一夜可相勤、御酒奉行御肴奉行は二人宛、進物奉行本方拂方共ニ二人宛、是亦一日一夜宛可勤之、御舂屋奉行、晝は三人、夜は二人にて可相勤仕事、
附木具奉行、諸道具奉行、買物奉行、薪奉行、鹽噌奉行、壹人宛泊番いたし候面々役儀念入、火之要心堅可申付之、御舂屋奉行は、品々御用繁候間、別而火之要心可申付之、自然其役々之內、煩差合有之時は助番仕、無懈怠可相詰、組頭之內、煩差合之時は隔番に罷出、泊番は相互ひに、早朝ゟ酉刻まで可罷在事、○中略

一御賄頭支配、於御臺所食被下儀、六尺等に至るまで、其日之當番之內、泊番之者計り可給之、其外一切停止之、總て御用無き者、右之座席へ不可參、自然御用有之て參るにおゐては、隙明次第、早速可退散、若し猥之輩有之ば、御徒目付御小人目付見合次第、御賄頭へ相斷之、其ものにも一應相斷之、於無承引者、御目付衆迄急度可申達之事、○中略

右之條々、可相守此旨、若違背之輩於有之は、隨科之輕重、急度曲事に可被處者也、

萬治二年九月五日

○按ズルニ、酒肴鹽噌等ノ奉行ハ、何レモ賄方ノ分課ナルコト、下ニ引ケル吏徵別錄ヲ見テ知

賄六尺

ルベシ、

〔吏徵御目見以下〕御賄方百廿人　貳拾俵貳人扶持高　役切米拾俵　見習七人、貳人扶持、打込兩丸
肴役所詰貳人、役金八兩、　書物役所詰貳人、役金同斷、　役上下、二半場、

〔吏徵別錄御目見以下〕御賄方中略　享保二十年十二月二十日、御肴役九人、十五俵充、御舂屋御藏役三人、御味噌方世話役三人、御薪方世話役四人、御桶方世話役三人江十二俵充、御酒役十七人進上役六人、御木具役六人、買物方役三人、御道具方三人、鹽噌方役六人、御舂屋御膳方三人、御米撰場役五人、御味噌共御膳方四人、各十俵充、御食方三人、御舂屋平六人、御味噌方平三人、御薪方平四人、御桶方平三人、七俵充、役切米被下之、

〔勘契備忘記中〕享保二十一辰年元文元年

御賄方御役御切米被下方書付

一御賄方之者之忰共、跡式被下、御奉公に罷出候節、當分は被下間敷哉、左候はゞ、其節拙者共ゟ、御勘定所へ印狀斷狀に而、右取高相除高、追而被下候節も、拙者共儀、印狀斷狀を以、元御證文之通請取候樣可仕哉と奉存候、

〔憲教類典衣服三ノ三十五下〕享保二十乙卯年六月廿四日

本多中務大輔殿
西尾隱岐守殿御渡

御本丸
西丸
御賄方

右之分、前々も相達候通、御規式に相掛り候節計、熨斗目白帷子着用仕、其外は熨斗目白帷子着用仕間敷候、

〔嘉永三年武鑑〕六尺頭西御丸兼勤十二人

〔諸由緒〕永祿二未年五月廿三日

御賄六尺由緒之覺

家康公三州伊田大樹寺ゟ岡崎之御城江御入部之節、大樹寺ゟ御供之同宿百人、六尺三拾六人、御近習之面々には、岩淵主稅、安藤次右衛門、成瀨小吉、平岩七之助、大久保平助、同次右衛門、松平五左衛門、松平主殿、酒井左衛門尉、小栗又市、稻生市左衛門、酒井雅樂助、本多平八郎、兼松又四郎、大原畑野右衛門、植村傳四郎、河部吉十郎、石川四郎右衛門、以上拾八人、都合百五拾餘人御供に被召連御入部有之候、其後追々所々ゟ殘徒馳集り候に付、御供仕候同宿百人は、大樹寺江歸寺被仰付候、六尺三拾六人は、御供方之百姓故、御家人江被召抱、度々御陣之御供仕、巳後御入國之節、右三拾六人之餘類、追々被召抱、慶長年中、松平淨慶支配に罷成、御臺所御賄六尺相勤候に付、御賄六尺と申傳候、其後御小納戸六尺、表六尺、御臺所六尺江追々相分り申候、

〔吏徴御目見以下〕御賄六尺頭四人　持高　役切米七俵　役上下、二半場、

〔吏徴別錄御目見以下〕御賄六尺略〇中　享保二十年乙卯十二月廿日、六尺頭十二人江役切米七俵宛、略〇中被下、略〇中　同寛政〇三年辛亥十一月廿九日、六尺頭十二人、右大勢組取扱候付、格別之譯を以て、別段爲御手當、三俵充被下之、

〔憲教類典御役二ノ五〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別井御役料

御賄頭略〇中　六尺六百八十三人

〔嘉永三年武鑑〕六尺五百人內頭十二人

〔吏徴御目見以下〕御賄六尺三百八十八人　持高　下役、役切米五俵、役金四兩、　書役、役金四兩、

御酒部屋書役、役切米五俵、　勘定部屋書役同斷　御豆腐役同斷　肴役所出役三人、役金五兩、

青物役所出役三人同斷　御薪方下役八人、役切米五俵、　寸打、役金三兩、　見習廿人、一人扶持、

兩丸御厩三十人（六尺新組打込）　二牢場

〔寶曆集成緜綸錄二十五〕寶曆二申年三月

御勘定奉行江

三月　九月

金貳兩宛　　御賄吟味方下役拾貳人

書役三人

三月　九月

金壹兩貳分宛　　寸打六尺六人○中略

右之通、爲勤金向後被下候間、被得其意、御賄頭斷次第可被相渡候、

○按ズルニ、本文及ビ下文ニ、吟味方下役又書役トアルハ、前文吏徵ニイハユル下役又書役ノ謂ナラン、

〔吏徵別錄下御目見以下〕御賄六尺○中略　享保二十年乙卯十二月廿日、○中略吟味方下役十人、御豆腐役七人、書役七人、勘定部屋下役四人御薪方下役三人江、同五俵充被下、○中略　天明六年丙午、五百十五人、御切米七千四百十三俵、役切米貳百三十九俵、扶持方七百八十四人扶持、○中略　同○寛政十年戊午八月廿五日、五百一人、御切米七千貳百三十九俵、役切米貳百三十九俵、扶持方七百六十三人扶持、享和二年壬戌十二月、四百九十五人、御切米七千百九十九俵、扶持方七百五十八人扶持、

〔憲敎類典二ノ十四御抱席〕寶曆七己丑年上ヶ候書付

御賄方

御賄六尺

右只今迄、由緒吟味取扱之内、御賄六尺と計名目に御座候處、向後御賄并六尺と認め入置、御賄方

賄新組

御賄六尺共に、同樣之ヶ條に而取扱候樣可ㇾ仕旨被二仰渡一奉ㇾ畏候、

〔嘉永三年武鑑〕新組頭同斷○西丸兼勤六人

〔吏徵御目見以下〕御賄新組頭四人　持高　役切米五俵　役上下、二半場、

〔吏徵別錄御目見以下〕御賄新組　享保二十年乙卯十二月廿日、新組頭六人、役切米五俵充被ㇾ下、

〔嘉永三年武鑑〕新組三百六人內六人頭

〔吏徵御目見以下〕御賄新組貳百廿壹人番稱二御辨當持一　持高　通番役金貳兩　二半場

〔憲敎類典二ノ五御役〕年號月日無ㇾ之

一遠國御役人組附人別幷御役料

御賄頭○中略　　　　　　總辨當持貳百五十九人

〔寶曆集成綵綸錄二十五〕寶曆二申年三月

御勘定奉行○江中略

三月　九月

金一兩宛　　　　　　　通番新組九人

右之通、爲二勤金一向後被ㇾ下候間、被ㇾ得二其意一、御賄頭斷次第可ㇾ被二相渡一候、

〔吏徵別錄御目見以下〕御賄新組○中略　天明六年丙午、三百五人、御切米三千貳百六十七俵、扶持方四百二十六人扶持、給金六十二兩、　寬政十年戊午八月二十五日、貳百九十七人、御切米三千二百十一俵、扶持方四百十六人半扶持、給金六十二兩、　享和二年壬戌十二月、二百八十四人、御切米三千百九十一俵、扶持方四百十三人半扶持、給金六十二兩、　天保七年丙申、三百九人、內御給金取三十一人、外見習七人、

西丸賄頭

〔吏徵御目見以上〕西丸御賄頭二人　同上○若年寄支配、土圭間、貳百俵高、御役料二百俵、

屬僚

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月廿三日、大納言殿〇徳川家光世子家綱へ御家人あまた附屬せらる、〇中略賄頭厨所頭各一人、

〔嚴有院殿御實紀四十四〕寛文十二年閏六月十七日、西城は、これより先、一月に三度づゝ、酒掃せしが、この後は、五度づゝ、酒掃つかふまつるべしと、西城の留守居、目付、賄臺所、同朋、數寄屋、黑鍬の頭に命せらる、

〔吏徴御目見以下〕西丸御賄組頭。。三人　同上〇頭支配、七十俵五人扶持高、役切米三十俵、役上下、二半揚、〇中略

西丸御賄方。。三十三人　同上〇貳拾俵貳人扶持高、役切米拾俵、〇中略

西丸御賄六尺頭。。三人　同上〇持高、役切米七俵、役上下、二半揚、〇中略

西丸御賄六尺。百十三人〇中略

西丸御賄新組頭。。三人　同上〇持高、役切米五俵、役上下、二半揚、〇中略

西丸御賄新組。七十六人　同上〇持高、通番役金二兩、二半揚、

臺所役人

臺所役人ハ、總ジテ飲食物ヲ調理スルコトヲ掌ル、凡ソ臺所ニ膳所臺所、奥膳所臺所、表臺所ノ三アリ、

膳所臺所頭ハ、初メ臺所頭ト云ヒシガ、享保二十年改メテ膳所臺所頭ト稱シ、將軍食膳ノ調理ヲ掌ル、若年寄ノ支配ニ屬シ、二百俵高ノ職ニシテ、役料百俵ナリ、屬僚ニ組頭、臺所人、小間遣、六尺等アリ、西丸ニモ亦膳所臺所アリ、

奥膳所臺所ハ、舊クハ奥臺所ト云ヒ、專ラ奥向食膳ノ事ヲ掌ル、初メハ組頭及ビ臺所衆ノミ

膳所臺所頭
職員
職掌

ヲ置キシガ、後ニ臺所頭ヲ置キ、若年寄ノ支配ニ屬シ、二百俵高ニシテ役料百俵ナリ、組頭、臺所衆ノ外ニ小間遣、六尺等ノ屬僚アリ、

表臺所頭ハ、二人若シクハ三人アリ、專ラ大名諸役人等ニ賜フ膳部ヲ掌ル、若年寄ノ支配ニ屬シ、二百俵高ノ職ニシテ、役料百俵ヲ給ス、屬僚ニ組頭、臺所人、小間遣、六尺等アリ、西丸ニモ亦表臺所アリ、

又目付ト云フアリ、膳所及ビ奥表臺所ノ目付ナリ、元祿二年ヨリ置キシガ、享保元年ニ之ヲ廢セリ、又別ニ臺所番アリ、亦三臺所ノ番人ニシテ、其數二十人アリ、類ヲ以テ此篇ニ收ム、

〔官中秘策〕十 諸御役人之事

御膳所御臺所頭 ○中略 三人

〔東職記聞〕二 御膳所臺所頭三人

〔吏徴別錄〕下 布衣以下御目見以上 御膳所御臺所頭　享保二十年乙卯三月廿二日、始置二三員一、西村平吉、池水清右衞門、田外平兵衞、是迄は御臺所頭奥計唱、此時より御膳所御臺所頭と稱す、

〔明良帶錄〕御臺所頭 二百俵高 御役料百俵 若支

御膳所、表、○表上恐脫二奥字一三ケ所有リ、各御膳規仕立御作法有、表といふは時計之間、獻上之間、表上二三、幷三四之間也、末は立喰迄規定あり、萬御賄方ゟ肴○肴下一本有二青字一物乾物、一切取て仕立るなり、御臺所無役有り、二半場にて、御目付へも附ず、御臺所三役といふ、是より御膳奉行へ昇る、又御細工頭御普請下奉行へ昇る、

〔武家嚴制錄〕四十 家綱公御本丸御移徙之時御條目

定

一御臺所頭衆御條目

一御臺所頭、月番に致、御料理方之儀は不ㇾ及ㇾ申、御臺所方火之用心、幷掃除巳下迄、萬事無ㇾ油斷ㇾ可ㇾ申付ㇾ事、

一每日早朝、御臺所頭壹人宛罷出、三度目之御膳、被ㇾ召上ㇾ之巳後迄相詰、奧之御臺所は勿論、御表御臺所之間まで見廻、諸事かたく可ㇾ申付ㇾ事、

一御臺所方萬事御入用、費無ㇾ之樣入ㇾ念可ㇾ申付ㇾ事、

一此巳前より被ㇾ仰出ㇾ御條目、幷誓詞之趣彌以相ㇾ守之、組中迄堅可ㇾ申付ㇾ事、

一總而御臺所人小間仕に至迄、御番之儀切々改ㇾ之、嚴密に相ㇾ勤之ㇾ候樣に申付べし、煩人在ㇾ之節は、誓詞狀可ㇾ取ㇾ之事、

附御臺所人小間使もの部屋、いづれもおり／＼見廻、猥之儀無ㇾ之樣に可ㇾ申付ㇾ事、

右條々、堅可ㇾ相ㇾ守此旨ㇾ者也、

萬治二年九月五日

〔嚴有院殿御實紀二十〕萬治三年十一月十六日、臺所頭天野五郎大夫正國、御前にて鯛庖丁つかふまつる、鈴木喜左衞門重成、鴈庖丁をつかふまつる、喜左衞門重成は、久々にて庖丁つとめしとて、時服かづけらる、

〔享保集成絲綸錄十八〕正德二辰年七月

御臺所頭へ相添渡ㇾ之

覺

諸事御用に付、向々江斷、御臺所へ請取物之品、其度々委細同役寄合相談候而、御費無ㇾ之樣に心之及候程入ㇾ念、吟味之上斷ㇾ之、書付可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、段々勤方ゆるみ不ㇾ宜候間、其旨急度可ㇾ被ㇾ相ㇾ心得ㇾ候、尤向々ゟ、御用之品諸色請取候以後も、御道具等、麁末に無ㇾ之樣、支配之者へも常々堅申付、諸事入ㇾ念

待遇 俸祿

可レ申候、支配并組之者、勤方不精に而不レ宜者も候はゞ、吟味候而可レ被二申聞一候、向後不吟味に有レ之候はゞ、何も可レ爲二越度一候間、可レ被レ得二其意一候、以上、

〔吏徵御目見以上〕御膳所御臺所頭三人　若年寄支配　土圭間　貳百俵高　御役料百俵

〔大猷院殿御實紀六十五〕正保三年十二月四日、臺所頭鈴木喜左衛門重成、廩米にかへて采邑四百石給はり、○下略

御臺所頭

〔憲教類典二ノ五御役〕享保九甲辰年七月十三日

只今迄之通、貳百俵四人扶持ゟ內は、

御役料百俵

〔憲教類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高并御役料定、

御膳所御臺所頭

貳百石高　御役料百俵、持扶持之儀、

○按ズルニ、御膳所御臺所頭ノ稱ハ、享保二十年ヨリ稱セルコト既ニ吏徵ヲ引ケリ、今本書ニ此稱ヲ用井タルハ、後ノ稱呼ヲ以テ前ニ及ボセシナラン、

〔慶應三年武鑑〕御膳所御臺所頭　二百俵高　御役料百俵

組頭

〔吏徵御目見以下〕御膳所組頭六人

〔明良帶錄〕御臺所組頭　百俵四人扶持　頭支

奥表御膳所三場所あり、表は諸席被レ下之御臺所仕立方の組頭なり、三場所の御臺所人縣上は、至て高低にては出難し、小普請世話役、御賄方よりも昇る、多くは御取立もの也、小間遣のものも多し、六尺よりハ御取立之者多く、是より御臺所頭へ昇る、以下第一の昇進とす、昔は御臺所番々昇進極り居しが、今は御臺所人、又は小普請世話役々も昇る、以上引下げ之仁もあり、當時此場所甚六

臺所人

箇敷、四箇所の内、紅葉山火之番、二丸火之番に准じて知べし、

〔武家嚴制錄四十〕家綱公御本丸御移徙之時御條目

一御臺所御役人衆御條目

一御臺所方御番之儀、四番にいたし、組頭共に一日一夜づゝ、懈怠なく相勤べし、〇中略組頭は、隔番之時は不ㇾ及ㇾ泊番、早朝ゟ罷出、晩之御料理過まで可ㇾ相詰事、〇中略

附組頭、末之間まで見ㇾ廻之、小間仕六尺等無作法無ㇾ之、其役儀急度相勤候樣にかたく可ㇾ申付、勿論火之用心掃除已下、不ㇾ可ㇾ油斷事、〇中略

附料理方諸道具、組頭入ㇾ念、紛失無ㇾ之樣にいたし、當番切に相改、順々に可ㇾ相渡事、〇中略

萬治二年九月五日

〔吏徵御目見以下〕御膳所組頭六人　頭支配　百俵四人扶持高　役金廿兩　土圭間、上下役、

〔憲敎類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高并役扶持、

百俵高四人扶持　御膳所組頭

〔慶應三年武鑑〕同〇膳所臺所　組頭　百俵四人扶持　御役金二十兩

今津太三郎　篠原十左衞門

〔吏徵御目見以下〕御膳所御臺所人五十五人不同

〔明良帶錄新舊〕御膳所御臺所人

御膳向召上り物、御肴御燒物、御菓子、一切御料理、切物、つけ物、御組付改方、懸り〴〵あり、出役は獻立等之調をする、是ゟ系の通り上る、

〔武家嚴制錄四十〕家綱公御本丸御移徙之時御條目

一御臺所御役人衆御條目

一御臺所方御番之儀、四番にいたし、組頭共に一日一夜ヅヽ、懈怠なく相勤べし、煩差合有之ば、組頭は不及申、四組之內より助番仕るべし、但組頭共に六人有之ば不及助番、六人ゟ不足之時は助番可致之、組頭は、隔番之時は不及泊番、早朝ゟ罷出、晚之料理過まで可相詰事、

一御臺所方當番之刻、料理入念、自身切盛可仕之、總じて料理かた之儀、常々心懸可相嗜事、

一三之間料理之時、御臺所方當番ゟ貳人宛相詰、自身盛方可致之、小間仕に任せ、大樣成爲體仕るべからず、諸事可念入事、

附組頭末之間にて、見廻之小遣仕六尺等無作法無之、其課役急度相勤候樣にかたく可申付、勿論火之用心掃除已下不可油斷事、

一掃除之義、御料理上之間より二三之間まで、小間仕可仕之、末之間ゟまないたまわり、總板の間之分は、六尺可勤之、響疊敷候所たりと云ふとも、御賄方支配之所々、六尺掃除可爲勿論事、

附料理方諸道具、組頭入念、紛失無之樣にいたし、當番切に相改、順々に可相渡事、

一末之間にて、無差圖之費、食不可給之、御賄方六尺たりといふ共、泊番之外、一切食不可被下、總而御用なきもの、右之座敷へ參るべからず、自然御用在之て參るにおいては、隙明次第、早速退散すべし、〇（中略）

附御臺所御賄方部屋之內に、かこひ仕切等仕べからず、召仕之者、御臺所へあげ申間敷事、

右條々可相守此旨、若違背之族於有之は、隨科之輕重可被處曲事者也、

萬治二年九月五日

〔大概順〕御目見以下大概順

五拾俵高持ふち　御役金同両〇十　御譜代席　上下役　御膳所御臺所人

〔吏徵 御目見以下〕御膳所御臺所人○中略　頭支配　五十俵持扶持高　役金拾兩　燒火間、上下役、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共に、御增高被下候間、自今支配之内ゟ、格別之儀も無之候はば、御足米願申出間敷候、

右之趣、向々江可被達候、○中略

御膳所御臺所人

五拾俵高 持扶持之儀

〔憲教類典 三ノ三十五下 衣服〕享保二十乙卯年六月廿四日

本多中務大輔殿 西尾隱岐守殿 御渡

御本丸西丸御膳所表平御臺所人○中略

右之分前々も相違候通、御規式に掛り候節計、熨斗目白帷子着用仕、其外は熨斗目白帷子着用仕間敷候、

〔明良帶錄〕御臺所小間遣頭 三十俵高、御役扶持五人扶持、頭支、

御臺所小間遣の筋の者にて、組頭より昇る、他場所より緣上なし、

〔吏徵 御目見以下〕御膳所小間遣頭貳人　頭支配　三拾俵貳人扶持高　役扶持三人扶持　燒火間、上下役、　町屋敷拜領 沽券金六十五兩

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共に、御增高被下候間、自今支配之内ゟ、格別之儀も無之候はば、御足米願申出間敷候、

右之趣、向々江可被達候、○中略

小間遣頭

役扶持三人扶持

膳所六尺

〔文政十一年武鑑〕御膳所御小間使頭　三十俵高　御役料五人扶持

石川貞市　吉田重五郎

〔慶應三年武鑑〕御膳所御小間遣頭　三十俵高二人扶持　御役扶持三人扶持

岡田忠左衞門　島田善次郎　栗原榮之助　小林兼太郎　小野榮之丞

〔吏徵御目見以下〕御膳所小間遣組頭四人　貳拾俵持扶持高　役金六兩　町屋敷拜領沽券金四十五兩

二半場

〔吏徵別錄御目見以下〕御膳所小間遣組頭　享保二十年己卯六月廿四日、熨斗目白帷子一切着用仕間敷候、

〔吏徵御目見以下〕御膳所小間遣八十人

〔明良帶錄新叅篇〕御膳所小間遣

御膳所、奧御膳所共、意味あり、

〔武家嚴制錄四十一〕家綱公御本丸御移徙之時御條目

御臺所御役人衆御條目

一掃除之儀、御料理上之間より二三之間まで、小間仕可仕之、〇中略

萬治二年九月五日

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

御膳所六尺四十三人

〔明良帶錄新叅篇〕御膳所六尺

御膳所之事御規式多し

〔武家嚴制錄 四十〕家綱公御本丸御移徙之時御條目

御臺所御役人衆御條目

一掃除之儀、御料理上之間より二三之間まで、小間仕可ㇾ仕ㇾ之、末之間ゟ、まないたまわり、總板の間之分は六尺可ㇾ勤ㇾ之、暨疊敷之所たりと云ふとも、御賄方支配之所々、六尺掃除可ㇾ爲ㇾ勿論事、〇中略

萬治二年九月五日

〔大概順〕御目見以下大概順

拾五俵高持ふち　二半場　白衣役　御膳所六尺

〔吏徵 御目見以下〕御膳所六尺四十人　十五俵一人半扶持高　町屋敷拜領 沽券金廿五兩　二半場

椀方六尺

〔明良帶錄 新益暫〕椀方六尺

膳椀洗方、是より小間遣江行、

〔吏徵 御目見以下〕椀方六尺五十八人　持高　頭三人、役切米七俵、役上下　町屋敷拜領、沽券金、六十五兩頭、貳十五兩平、　二半場

〔吏徵別錄 御目見以下〕椀方六尺　元文五年庚申五月十三日、椀方六尺頭三人江役切米七俵充被下、

西丸膳所役人

〔官中秘策 二十五〕西丸御膳所御。臺所。頭。二人

〔吏徵 御目見以上〕西丸御膳所御臺所頭貳人　同上〇若年寄支配、土圭間、貳百俵高、御役料百俵、　享保廿年乙卯閏三月廿四日始置

〔吏徵 御目見以下〕西丸御膳所組。頭。四人　同上〇頭支配、百俵四人扶持高、役金廿兩、土圭間、上下役、

〔常憲院殿御實紀 五十二〕寶永二年十月二十六日、西の御膳所組頭湯上彌次右衛門、八十一まで精勤すとて、つとめをゆるされ、褒銀十枚賜ふ、

〔吏徵御下目見以下〕西丸御膳所御臺所人廿九人　同上〇頭支配、五十俵持扶持高、役金十兩、燒火間、上下役、

〔吏徵御下目見以下〕西丸御膳所小間遣頭貳人　同上〇頭支配、三拾俵貳人扶持高、役扶持三人扶持、燒火間、上下役、町屋敷拜領、十坪五分兩金六

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月廿七日、小間遣頭一人、厨所の者六人、大納言殿〇德川家光世子家綱へ附屬せらる、

〔吏徵別錄御下目見以下〕御膳所小間遣頭　慶安三年庚寅八月廿七日、始置、西丸附一員、

〔吏徵御下目見以下〕西丸御膳所小間遣組頭三人　同上〇貳拾俵持扶持高、役金六兩、町屋敷拜領、十坪五分兩金四二半場、〇中略

西丸御膳所小間遣五十二人組頭共　同上〇十五俵一人半扶持高、役金三兩、町屋敷拜領、廿坪五分兩金二半場、

〔吏徵御下目見以下〕西丸御膳所六尺廿八人　同上〇十五俵一人半扶持高、町屋敷拜領、廿坪五分兩金二半場、

奥膳所臺所頭

〔吏徵御目見以上〕奥御膳所御臺所頭三人　同上〇若年寄支配、土圭間、貳百俵高、御役料百俵、　寛政三年辛亥五月廿一日始置

〇按ズルニ、上文吏徵ニ、寛政三年五月廿一日始置ト云フコト、疑ナキニ非ズ、而シテ本書ニハ下文ノ如ク、尙ホ奥膳所組頭、及ビ臺所人等ノ職名アリ、然レドモ當時及ビ其後ノ武鑑ニ、遂ニ此職名ノ見エタルコトナク、且今收ムル所ノ武鑑ニモ、奥臺所組頭若シクハ臺所衆ノミアリテ、他ノ膳所臺所ノ如ク、別ニ頭ト稱スルモノ見エズ、加フルニ奥臺所ノ稱ハ、既ニ正德六年ノ武鑑ヨリ見エタリ、然レドモ是又明和以後ノ武鑑ニ、此職名見エズ、然レバ此間或ハ廢職トナリテ、而シテ其事ノ記錄ニ洩レタルニヤアラン、姑ク記シテ疑ヲ存ス、

組頭

〔吏徵御下目見以下〕奥御膳所組頭三人　頭支配　七拾俵持扶持高　役金廿兩　土圭間、上下役、

〔吏徵別錄御下目見以下〕御膳所組頭　享保九年甲辰七月十三日、奥御膳所組頭、七十俵高、

〔正德六年武鑑〕奥御臺所組頭

四十俵二人ふち、濱中傳兵衛、　四十俵二人ふち、池谷平六、　二百俵、湯上彌兵衛、

臺所人

〔寬保二年武鑑〕奧御臺所組頭

芝田新八　岩田次郞左衞門　岡田市左衞門

〔寶曆八年武鑑〕大奧御膳所組頭

關十左衞門、今村口右衞門　小林新藏

〔東徵下御目見以下〕奧御膳所御臺所人九人　同上（○頭支配、燒火同、上下役、役金十兩、）　四十俵持扶持高

〔正德六年武鑑〕同（○奧）御臺所衆

四十俵二人ふち、石黑長十郞、　同斷、三村傳藏、　同斷、深井忠介、　同斷、三村兵右衞門、　四十俵二人ふち、矢田堀彌三郞、　同斷、福村平藏、　同斷、今堀傳五郞、　同斷、喜田川彥四郞、

〔寬保二年武鑑〕同（○奧）御臺所衆

四十俵二人フチ、石黑長十郞、　同斷、三村小左衞門、　六十俵、鈴木權右衞門、　同斷、三村兵右衞門、

四十俵二人フチ、矢田堀彌三郞、　同斷、福村平藏、　同斷、今堀傳五郞、　同斷、喜多川彥四郞、

小間遣

〔東徵下御目見以下〕奧御膳所小間遣組頭三人　同上（○貳拾俵持扶持高、町屋數拜領、十㕝五分兩金四二半場）　役金三兩（○中略）

奧御膳所小間遣十八人　同上（○十五俵一人半扶持高、役金三兩、町屋數拜領、廿㕝五分兩金二半場、）

六尺

〔東徵下御目見以下〕奧御膳所六尺　同上（○十五俵一人半扶持高、町屋數拜領、廿㕝五分兩金二半場、）

表臺所頭

〔東職記聞二〕表臺所頭三人

〔東徵上御目見以上〕表御臺所頭三人（內貳人御賄頭より兼帶）　若年寄支配　土圭間　貳百俵高　御役料百俵

〔憲教類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高幷御役料定、

表御臺所頭

貳百石高（御扶持方共御役料百俵）

〔東徵別錄下布衣以下御目見以上〕表御臺所頭　享保二十年乙卯三月廿二日、始置三員、上野三大夫、

組頭

野澤伴次郎、上遠野磯右衛門、貳百俵高、御役料百俵、但三大夫は御賄頭ゟ兼帶、同年閏三月廿四日、始置二員、米津昌八郎、蘆澤宇右衛門、貳百俵高、御役料百俵、但昌八郎は、西丸御膳所御臺所頭より兼帶、

〔元文四年武鑑〕表御臺所頭　高二百俵　御役料百俵
百俵四人フチ、鈴木傳右衛門、　百俵、野澤伴次郎、　百俵、上遠野磯右衛門、

〔慶應三年武鑑〕表御臺所頭　二百俵高　御役料百俵
柴田又兵衛　山本新十郎

〔官中秘策十〕諸御役人之事
表御臺所組頭　百俵四人扶持　四人
○按ズルニ、延寶元祿寶永等ノ武鑑ニ、此職ヲ御表方組頭トアリ、

〔吏徵下御目見以下〕表御臺所組頭四人　頭支配　百俵四人扶持高　燒火間、上下役

〔明良帶錄外篇〕表御臺所組頭
表奥御膳所三場所之御臺所人繰上にて改役ゟ成、但高低にては出がたし、小普請世話役御賄方よりも昇る、多くは御取立者也、御小間使筋之者多し、六尺は御取立者多し、是ゟ御臺所頭へ昇る、以下第一之昇進場火之番、大昔は御臺所番ゟ昇進之路極り居しが、今は御臺所人、又は小普請世話役、其外御入人いづれも不定、先は以上引下ゲ勤など有、當時此場所甚六ヶ敷、四ヶ所之内、紅葉山火之番、二之丸火之番に准じ勤甚六ヶ敷、別段之譯合ありて、御入人多し、

〔憲敎類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日
御目見以下役儀勤之内、場所定高幷役扶持、
百俵高四人扶持　表御臺所組頭

臺所人

〔明和八年武鑑〕同〇表臺所組頭　百俵四人扶持高
四十俵二人フチ、細井八郎左衛門、　卅俵二人フチ、柴田又兵衛、　本多吉兵衛　鈴木傳右衛門
〔元治元年武鑑〕同〇表臺所組頭　百俵四人扶持高
小山熊三郎　池田直之丞　海野甚助　小山市十郎　高木昌之助　福地幸三郎
〔吏徴御目見以下〕表御臺所人六十八人不同
〔明良帯錄〕御臺所人五十俵持扶持・頭支、
御膳所奥表御臺所人、小間遣より組頭格、亦ハ御臺所人格にて、二拾俵二人扶持夫より、四拾俵高、表御臺所人へ昇る、奥御臺所人へも昇る、西丸御裏御門同心よりも出て、切手御門同心よりも昇る、表御臺所人は、獻上之間、上下三四之間に至る迄掛り有り、御料理庖丁心得て、其仕立向を改む、
〔吏徴御目見以下〕表御臺所人略〇中　頭支配　四十俵持扶持高　部屋住六人　四十俵、燒火間、上下役、
〔大概順〕御目見以下大概順
御譜代席　上下役　表御臺所人
〔享保集成絲綸錄三十〕享保九辰年七月
此度御吟味之上、續兼候小給之者共に、御增高被下候間、自今支配之內ゟ、格別之儀も無之候はば、御足米願申出間敷候、
右之趣向々江可被達候、略〇中
四拾俵高持扶持之儀衣服　表御臺所人
〔憲教類典三ノ三十五下〕享保二十乙卯年六月廿四日
本多中務大輔殿 西尾隱岐守殿 御渡

御本丸西丸御膳所表、平御臺所人、〇中略
右之分、前々も相違候通、御規式に相掛り候節計、熨斗目白帷子着用仕、其外は熨斗目白帷子着用仕間敷候、
〔吏徵別錄下御目見以下〕表御臺所人〇中略　元文五年庚申十月十二日、始置、部屋住、本勤四十俵被下、

小間遣

〔官中秘策十〕諸御役人之事
表御臺所小間遣頭〇中略　三人
〔吏徵下御目見以下〕表御臺所小間遣頭二人　頭支配　三拾俵貳人扶持高　役扶持三人扶持　燒火間、上下役、　町屋敷拜領十五兩沽券金六　享保廿年乙卯三月廿一日始置
〔吏徵別錄下御目見以下〕表御臺所小間遣頭　享保二十年己卯六月二十四日、熨斗目白帷子一切着用仕間敷候、
〔明和八年武鑑〕同〇表臺所御小間使頭　御役扶持五人扶持　三十俵高
渡部只八　岡十右衞門　小山與市
〔慶應三年武鑑〕表御臺所御小間遣頭　三十俵高二人扶持　御役扶持三人扶持
喜多村作左衞門　山本寶左衞門　堀越平三郎
〔吏徵下御目見以下〕表御臺所小間遣組頭四人但小間遣人數之內　貳拾俵持扶持高　町屋敷拜領四十五兩沽券金
闕　二半場
〔大概順〕御目見以下大概順
二半場　羽織袴役　表御臺所小間遣組頭
〔吏徵下御目見以下〕表〇此下恐脫二御臺所三字小間遣百三十五人　十五俵一人半扶持高　町屋敷拜領廿五兩沽券金
二半場

椀方六尺

西丸表臺所役人

目付

〔大概順〕御目見以下大概順

拾五俵高一人役ふち　　二半場　羽織袴役　表小間遣

〔大概順〕御目見以下大概順

上下役　二半場　　表御臺所椀方六尺

〔吏徴御目見以上〕西丸表御臺所頭貳人(内壹人、西丸御賄頭より兼帶、)　同上(○若年寄支配、土圭間、貳百俵高、御役料百俵、)　慶安三年庚寅八月廿三日始置

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月廿三日、大納言殿(○徳川家綱世子)へ御家人あまた附屬せらる、

賄頭、厨所頭、各一人、(○下略)

〔吏徴御目見以下〕西丸表御臺所組頭三人　同上(○頭支配、百俵四人扶持高、焼火間、上下役、)

〔吏徴御目見以下〕西丸表御臺所人　同上(○頭支配、四十俵持扶持高、焼火間、上下役、)　部屋住四人、四十俵、

〔吏徴御目見以下〕西丸表御臺所小間遣頭貳人　同上(○頭支配、三十俵貳人扶持高、役扶持三人扶持、焼火間、上下役、町屋敷拜領、五拾坪、○金六両、中略)

西丸表御臺所小間遣組頭　同上(○貳拾俵持扶持高、町屋敷拜領、拾坪、金四十五両、二半場、)

〔常憲院殿御實紀二十〕元祿二年八月十九日、新に奥表庖所に目付を置る、ともに徒目付より命せらる、

〔寛永三年武鑑〕同所(○臺)御目付衆

百俵五人フチ、深津善右衛門、　百俵、島太郎左衛門、　百俵、外村總右衛門、　粟津八左衛門　田澤吉左衛門

〔享保集成絲綸錄十八〕正徳二辰年七月

御臺所目付へ相添渡之

覺

近き比は、總而段々吟味等も有、增而勤方麁末に相聞候、向後心之及候程入念精出可申候、外江遠慮を兼、諸事不吟味成勤方に候はゞ可爲越度候間、其旨可相心得已上、

〔正德六年武鑑〕御膳所御目付

保田藤兵衞　境野庄右衞門　湊五右衞門

〔有德院殿御實紀一〕享保元年五月十六日、御膳御臺所目付、小納戸口上番等の職、みな停廢して、其輩舊職にかへさる、

〔憲敎類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

御本丸御臺所番十九人

〔明良帶錄〕御臺所番二十俵二人扶持、頭支、

此場御臺所御賄の間にして、諸事大切の場也、御目付支配にて、是より表火之番へ昇る、又は上下役、都て諸向より御入人有り、小普請より多く來る、御掃除の場より至るもあり、俗にくらやみ番といふ、御賄御臺所善惡を辨へ知る役なり、

〔慶應元年武鑑〕御臺所番　二十俵高　二十人

同朋頭　公人朝夕人〔併入〕

同朋頭ハ、二人若シクハ三人アリ、將軍ノ出行ニ扈從シ、或ハ老中、若年寄ヨリ諸役人ニ下ス所ノ書類ヲ傳達シ、又奥表坊主衆ヲ統督ス、若年寄ノ支配ニ屬シ、二百俵高ノ職ニシテ、別ニ役料ナケレドモ、正月、四月、五月、九月、十二月ニ、四季施ト稱シテ、衣類及ビ其代金ヲ給ス、又同

朋衆數人アリ、若年寄ノ支配ニシテ、百俵高十人扶持ヲ給シ、又四季施ノ給與アリ、此職德川幕府創立ノ時ヨリ置キシガ、慶應二年ニ之ヲ廢セリ、西丸ニモ亦同朋衆アリ、公人朝夕人ハ、將軍ノ出行ニ便器ヲ持シテ扈從スル職ニシテ、慶長以後土田氏ノ世職ナリ、其同朋頭ノ支配ナルヲ以テ此篇ニ收ム、

職員職掌

〔官中秘策十一〕諸御役人之事

一御同朋頭〇中略　三人

〔明良帶錄世職篇〕御同朋頭

御成之節御先へ相立、法體を先へ連らるゝ事は、東山殿〇足利義政之頭より始る、是を昵近にせらるゝ事は、古は茶會と號して、毒を勸る事ある故、法體なれば席之詰に座して、其樣子を察する主意とぞ、當時殿中にて御老若方の御手先と成、御役筋之御書付は御同朋頭江御渡しあり、是も他場所江轉役したる人少し、同寮を歷昇し代々之勤也、

〔東職記聞二〕童坊頭二人被管奧表坊主之職也

〔德川禁令考十七同朋頭〕支配

表奧御坊主組頭十人　坊主衆總員四百三十四人

俸祿

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御同朋頭　延寶八年庚申七月九日、坊主支配之儀可仕旨被仰出、

〔吏徵上御目見以上〕御同朋頭三人　若年寄支配　貳百俵　御四季施、正月小袖一、上下代金壹兩貳朱、四月袷一、上下代金同斷、五月帷子三、單物一、上下代金同斷、九月小袖貳、上下代金同斷、十二月裝束一通、小袖貳、上下貳具、長上下同代金同斷、

任免

〔延寶三年江戶鑑〕表同朋頭

五百石、佐野福阿彌、　三百俵、永倉彌阿彌、　二百俵、石川細阿彌、　百五十俵、同金阿彌、　百俵、半田

丹阿彌、

〔正德六年武鑑〕御同朋頭

三百石、永倉珍阿彌、　三百石、原田須阿彌、　二百俵、奥山三阿彌、　三百俵、山本傳阿彌、

〔慶應二年武鑑〕御同朋頭　二百石高

百五十俵、池田貞阿彌、　二百俵、半田丹阿彌、　村田京阿彌

〔德川禁令考十七同朋頭〕慶應二丙寅年十二月晦日

同朋廢止幷坊主減員ニ付勘定奉行へ達

覺　　　　　　　　　　御勘定奉行江

今般御同朋御廢止相成、且坊主之人數相減候に付、是迄老中評定所へ出座之節、右之ものども取扱候儀者、以來評定所番ニ而相心得、取扱候樣可被申渡事、

十二月

〔官中秘策十一〕諸御役人之事

一御同朋衆〇中略　六人

〔明良帶錄世職篇〕御同朋衆

世職故、御同朋頭之子供、此場江見習勤する也、いづれも殿中之事に馴ざれば、御用向行屆かぬもの也、阿蘭陀人、羽目の間におゐて御料理被下之節給仕を勤、

〔東照宮御實紀五〕慶長八年三月廿五日、將軍宣下、御拜賀として御參內あり、其行列、一番は雜色十二人、〇中略　二番御物、これは御進獻の品なり〇中略　次に御物奉行、同朋谷全阿彌正次騎馬、〇下略

〔駿府政事錄一〕慶長十六年九月十四日、明日爲姫君御覽、於營中三ノ丸可有御能、御座敷之下知、御

同朋福阿彌奉レ之、去歲之秋、琉球王來府之時、其席之體不レ叶二御意一、而有二御氣色一、今日初テ御赦免、御料理之間營作之功畢、今曉有二御料理始一云々、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御同朋頭〇中略　正德元年辛卯三月廿六日、御能之節御前置、向後御同朋頭之子共、幷平御同朋も差交可二相勤一旨、

〔吏徵上御目見以上〕御同朋七人　若年寄支配　百俵十人扶持高　御四季施、正月小袖一、上下代金壹兩貳朱、四月袷一、上下代金同斷、五月帷子貳、上下代金同斷、九月小袖一、上下代金同斷、十二月裝束一通、（但平ニ而者、裝束無之家も有之、）小袖貳、上下貳具（長半）上下代金同斷、

〔憲敎類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高幷御役料定、

御同朋

百俵高拾人扶持

〔明和八年武鑑〕御同朋衆　百五十俵高

大島永阿彌　荻原林阿彌　池田新阿彌　牟田丹阿彌　山本長阿彌

〔慶應三年武鑑〕御同朋衆　百五十俵高

三百俵、永倉珍阿彌、　百八十俵、荻原泉阿彌、　二百俵、佐々木弘阿彌、　（父丹阿彌見習）牟田立阿彌　百五十俵、河野圓阿彌、　四十石、山本復阿彌、（父合阿彌石川友阿彌）

西丸同朋

〔吏徵上御目見以上〕西丸御同朋頭貳人　同上（〇若年寄支配、貳百俵高、御四季施正月小袖一、上下代金壹兩貳朱、四月袷一、上下代金同斷、五月帷子三、單物一、上下代金同斷、九月小袖貳、上下代金同斷、十二月裝束一通、小袖貳、上下貳具（長半）同代金同斷、）

〔吏徵上御目見以上〕西丸御同朋（御本丸より兼帶）　同上（〇若年寄支配、百俵十人扶持高、御四季施正月小袖一、上下代金壹兩貳朱、四月袷一、上下代金同斷、五月帷子貳、上下代金同斷、九月小袖一、上下代金同斷、十二月裝束一通、（但平ニ而者、裝束無之家も有之、）小袖貳、上下貳具、（長半）上下代金同斷、）

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月廿三日、大納言殿（〇德川家光世子家綱）へ御家人あまた附屬せらる、

同朋一人、○中略○下略

〔吏徵別錄 下 布衣以下御目見以上〕御同朋　慶安三年庚寅八月廿三日、始召ニ西丸附一員、

〔大猷院殿御實紀 七十八〕慶安三年九月七日、同朋永倉珍阿彌重安、西城に附らる、

○

〔明良帶錄〕公人朝夕人 十人扶持 朋支

此場も世職、壹人にて子孫に傳ふ、君邊に侍して御裝束の節、御轅の跡に御筒を持也、便竹といふ、君御用道具の第一なり、俗に裝束筒と云、昇路なし、

〔瀨田問答〕一公人朝夕人ハ、何ヲ勤仕候事ニ候哉、

答、公人朝夕人ハ、御目付 ○御目付恐同朋頭誤 支配ニテ、當時無役同意ノ事ニ承及候、此勤向ハ、御上洛ノ節ナド御供被仰付、御參內ノ節、御束帶ニテ御小用難被遊、其小用筒 銅ナリ ノ筒 ヲ持役目ナリ、已前ハ日光御社參ノ節モ御供ニテ、御宮御參詣御束帶ノ節、彼御筒ヲ持候樣承傳候得ドモ、是モ去ル申年御社參ノ節ハ、參リ不申候ヤウ及承候、此外勤役筋、何モ無之者ノヨシ及承候、

〔東照宮御實紀 五〕慶長八年三月廿五日、將軍宣下御拜賀として御參內あり、其行列、一番は雜色十二人、○中略 二番御物、これは御進獻の品なり下部これをもつ、公人朝夕十人、左右にわかれ警を唱ふ、

〔大概順〕御目見以下大概順

拾人扶持　御同朋頭支配　公人朝夕人　土田孫左衞門

〔吏徵附錄 世職〕土田孫左衞門　御同朋頭支配　高十人扶持　慶長八年癸卯月日以來代々役

〔公人朝夕人土田氏由緒書〕　御同朋頭支配、御扶持方十人扶持、　公人朝夕人

右勤方は、御上洛之節、御尿筒を懷中仕候役ニ御座候由、月次登城御目見、尤町人同席、脇差壹本、定而常憲院樣 ○德川綱吉 御代之時分、脇差計ニ相成候儀と相見申候、何茂碇と相分り不申候、

由緒書

公人朝夕之御役儀者、承久元年關東北條家之時代、賴經公京都より御下向之由、先祖之者御供仕罷下、鎌倉住居仕、夫より將軍家之御役人に相成、諸事被召仕、承久之比より年數唯今迄五百四十二年に罷成候、承久元年より天明五年迄五百六十七年成、永正十年將軍惠林院義稙公江東御發向被成候節、私先祖御供仕、將軍御膳被召上候節ハ、御殘飯を被下置、其時御器物之上に御箸を被置候而、汝家之紋に可致旨被仰、夫より私家之紋に仕候、御代々如斯被召出、信長公御代迄者、西美濃國土田村に而百八十六貫領知被成下罷在候、信長公何方江も御成之節者御供仕候、天正四年安土之御城御普請之節、奉行被仰付、其後百石御加増被下、所者山城國之內西岡と申所に而被成下候、又信長公濃州御居城より信州へ御發向之節も、濃州土田村先祖方御一宿被遊、信長公御他界にて領知相離引籠罷在候處、秀吉公被任關白御參內之節、先祖之者被召出供奉相勤申候、

一先祖　土田孫三郎

權現樣慶長八年御參內之節、先年之御規式御吟味之上、御同朋善阿彌殿江被仰付、被召出御目見仕、御紋之時服并諸大夫之裝束拜領仕、御笏束櫃ニ相添、諸大夫之裝束ニ而、御小便筒懷中仕、供奉相勤申候、御裝束櫃は長橋局江相渡候由、供奉仕候節は、昇殿御免被遊候、○中略

一曾祖父　土田孫左衞門

嚴有院樣○德川家綱御代、御上洛之御儀無御座候ニ付、明曆二申年御當地江罷下、御同朋珍阿彌殿福阿彌殿を以、例之儀共申上、御目見奉願候處被仰付、寬文十戌年十一月廿一日、御白書院御疊緣にて御扇子獻上、朽木伊豫守殿假名御披露に而御目見、月日不知御扶持方拾人扶持拜領仕節、於燒火間御老中御列座、阿部豐後守殿被仰渡候、其後年始八朔御目見罷出、天保四子年正月廿六日病死仕候、

但年始御目見之節計、三本入扇子献上、八朔献上物不仕候、

巳五月〇寶暦十一年　土田孫左衛門

〔御用留四〕一三月〇文政四年廿九日、御目付大草主膳殿より、

公人朝夕人と申役儀、いつ頃より起り候哉、當時土田孫左衛門右役儀相勤候者に而、右孫左衛門先祖、權現樣慶長年中御參内之節、諸大夫之裝束に而御裝束櫃に差添、御小用筒懷中致供奉候由、上古承久年中、關東北條家之時代、賴經京都より下向之時、先祖之者相下り鎌倉に住居、將軍家之役人に相成、諸事に被召仕候趣に候得共、御參内之節、御小用筒懷中致供奉候儀、役儀と被存候、右發起之譯等、相知候はゞ致承知度存候、以上、

三月廿九日　大草主膳

塙撿校

右之考、塙撿校在京中に付、出役評議にて、四月九日之〇之上恐脫右字趣、林大學頭殿へ差出候處、同十日大學頭殿より御目付前へ達に成、

覺

一朝夕と申役名は、賴朝將軍武家草創より相見え申候、尤鎌倉將軍代々之間は、朝夕雜色と稱し候て、京都將軍以來、公人朝夕と申名目相見え申候、常には朝夕と計も唱候趣に御座候、抑朝夕雜色と唱候儀者、雜色之身分に兩樣御座候而、朝夕雜色と國雜色とに分り申候、朝夕と稱し候方は、朝夕將軍家之營中に祗候仕候而、雜事奔走之役を勤申候、故に朝夕雜色と稱候儀に御座候、東鑑治承四年十二月廿八日の條に、朝夕祗候雜色と申文有之候、これ朝夕雜色の始に御座候、又は晝夜雜色とも唱へ申候、これも晝夜奉公之意にて、朝夕と稱候に異なる儀無御座候、古代は是に限らず、役名等ゑがと定りたる事無之、一役を兩樣にも唱候事間々御座候、朝夕雜色と申名目、東鑑建長二年十二月廿一日條、同五年正月二日條、弘長三年八月九日條、太平記僧徒六

波羅召捕條等に見え、壹衣雜色と申は、東鑑元久元年三月廿九日條に見え申候、國雜色と申候は、村里に在宅仕候て、臨時之公用有之候節被召仕候而、常に祗候いたし候者に而無之故に、國雜色と唱申候由に相見え申候、是も上洛之節などは召連られ候者に御座候、國雜色と申名目は、東鑑弘長三年八月九日條に見え申候、この雜色と申者之身分之儀者、侍分之者より一際さがり候者に御座候、凡鎌倉將軍家之時代に、奉公衆之內、第一を侍と申候、當時にて申候得ば、布衣衆より大御番衆以上に相當仕候、次に格勤侍と申候而、これも侍格の者に御座候、當時にて申候得ば、小十人衆御徒衆などに相當仕候、次に中間と申候て、これは苗字無之者に而、侍と雜色との間の者に御座候、夫故に中間と稱し、侍に而もなく、雜色にもつき不申候、當時の御中間と申候も此職分にて、御徒衆と御小人との間也、次に小舍人、次に雜色と申者に御座候、此兩職は、大かた同格之者に而、苗字無之者に御座候、其內朝夕雜色は、小舍人の上に立候て、國雜色は、小舍人の下に立候趣に相見え申候、雜色も雜色頭になり候へば、苗字を名乘申候由に見え申候、又は雜色長とも唱申候、小舍人は、小舍人童とも申候、故に童名を付候而、何丸何若など稱申候、當時の御小人に相當仕候、この故に足利時代迄の御小人は、皆童名をつき申候也、以上侍以下の格式は東鑑を本據とし、太平記、及び足利家の舊記等を參考して相認申候、足利將軍の時代に成候而も、大概右之準據に相見え申候得共、時世移候事故、奉公衆之身分、鎌倉時代ゟはすこしこまかに相成申候、第一に番衆也、勤方は、當時の御番衆に相當仕候得ども、身柄は布衣衆より大御番衆迄にまたり申候、次に走衆、勤方は、當時の小十人に相當仕候得共、身柄は小十人御徒に當り申候、尤分際は、小十人よりは增りたる者に御座候、これ迄は全く侍なり、次に格勤、今の御徒の身分に相當仕候、鎌倉家の格勤侍の事なれば、足利家にては大方格勤と計稱申候、是も侍に准る者にて苗字有之者也、格勤之事は、花營三代記、成氏年中行事等に見え申候、此衆を中居殿原とも稱候由、年中行事に有之候、次に中間也、是は苗字を稱せざるものにて、侍にては無之者に御座候、中間といへる名目は、鎌倉家にならひ申候也、次に小舍人小者、小人ともいふ、いまの御小人なり、雜色公人也、これ等は何れも同格の者にて、苗字無之事勿論に御座候、豐記抄、伊勢貞親傳書等に雜色と申は、中間よりは下、厩者よりは上なる由相見え、永祿四年三好亭御成記には、御小者御厩者などより下に公人を列し申候によれば、公人と申は、至而末席の者に御座候、元鎌倉家にては、小舍人雜色の兩職にて有之候を、足利家に成候而は、小舍人の內より小者を置れ、雜色の內より公人といへるは分れ候て、勤向も四分に相成、小舍人雜色

よりは小者公人の方、人數多く相成候趣に相見え申候、〈以上足利家奉公衆身分の事は、長祿中申次記、成氏年中行事以下、足利家の舊記、伊勢家の舊記等に而相記申候、〉されば公人と申は、もと雜色より出候事故、雜色の勤べき朝夕の役は、公人の方の勤向となり申候、爰を以公人朝夕と申役名も出來仕候、卽鎌倉家之朝夕雜色に相當申候子細は、身分は輕きものながら、公方家の人なりと申意にて唱候趣に相見え申候、〈當時俗間にて、六尺新組の類を專ら御家人と申候も御同意と奉存候、〉扨此公人朝夕と申名目は、足利家の年中恒例記にのせ申候、常には大かた朝夕とばかり唱候由に御座候、〈朽木氏文書、政所賦銘引付、成氏年中行事、足利義晴元服記、佐竹宗三聞書等に、御朝夕とも、朝夕とも記し有之候、〉一朝夕の所役は、諸役人へふれらるゝ、散狀の使、〈散狀は今の廻狀の類なり、當時御使方の所役のごとし、〉諸國へつかはさるゝ使をも勤む、〈以上の諸役は、東鑑にみゆ、足利家の時代にいたりては、平の公人の役なる趣、蜷川親元記以下の舊記に見え申候、〉又罪人糺問などの時は、罪人をも取扱ひ申候、〈太平記にみゆ、今の同心などの勤向なるべし、〉將軍家參內の時は行列につらなる、〈東鑑、年中恒例記等に見え申候、〉其外松明の役、〈義晴元服記にあり〉御所的こしらゆる役、矢申の役を勤候由に御座候、〈佐竹宗三聞書にあり〉扨御小用筒持候事は、古書に見當り不レ申候得ども、年中恒例記に、將軍家參內の事を記候所に、御立石トテ、伏見殿ノ邊ニ石在レ之、其キワニテ御下輿也、御輿ノ御アト邊ニ御朝夕マイル也と相見え申候、輕きものゝ、身分にて、輿の傍に供奉仕候ことは、畢竟臨時之要用在レ之候故と聞え候得ば、定て此頃も小用筒など持候半と奉レ存候、殊に小用筒持候事は、草履を持よりも下り候樣に被レ存候、〈將軍家の草履を持候事は中間之役なる由、足利家之御供故實に見え申候、〉夫故に侍分の身柄にて勤むまじき役なれば、鎌倉家の比も、朝夕雜色の職分にて、足利家にもその例にならひ朝夕に持せ、御當家にも古實を尋させられ、右職分相勤候儀と奉レ存候、慶長八年東照宮樣御參內之節、同十年台德院樣〈○德川秀忠〉御參內之節、共に御物之次に、公人朝夕供奉仕候事は、增補家忠日記に相見え、元和九年大猷院樣〈○德川家光〉御參內之時も、右同樣に供奉仕候由、元和年錄に相見え申候、御物と申候は、御裝束類を納め候櫃長持類之物を申候得ば、土田氏家傳に、御裝束櫃に差添申候と在レ之候は、慥

なる儀と奉存候、(寛永年中、二條行幸之節之御行列には、公人朝夕はつらなり不申候にや、寛永行幸記、同繪卷物などにも相見え不申候、)

一諸大夫裝束にて供奉仕候と申儀は、不審に奉存候、これは大かた家紋付たる染直垂を着用仕候事と奉存候、佐竹宗三聞書にも、矢申の朝夕は、白直垂に大帷を下に着し、烏帽子懸を仕候由相見え申候、當時にては直垂と申もの、至て重き樣に相聞え候得共、足利殿時代迄は、中間舍人朝夕等之輕き者迄も着用仕候事にて、重き衣服にては無御座候、(中間の直垂を着し候事は、東鑑、建武式目、布衣記、御供故實などに往々見え申候、舍人の一重直垂着用の事は、布衣記に在之候、)畢竟紋の付たる直垂を着用仕候故に、當時の大紋の直垂になぞらへ候て、諸大夫裝束と覺居候事と相見え申候得共、一向左樣之事にては在之間敷候、只足利家之例にて、輕き者ながら直垂着用仕候儀と奉存候、扨又朝夕人は、鎌倉足利兩將軍家ともに、一人にて無之、數人在之候事に御座候、御當代に相成候而は、右朝夕の職分にて勤來候役儀、すべて御中間御小人抔の勤方に相成候て、御參內の時は、悉く古例に准じ、御行列も立させられ候事故、此役人をも召置れ候得共、外に勤方無之候故、御小用筒持候計之役儀に相成候事と奉存候、

一土田氏家傳之趣は、承久年中、賴經將軍下向之時、京都より罷下候而より、此職名始り候樣に相聞え候得共、賴朝將軍の時より此役儀相見え候得者、承久以前より在之候事、勿論に御座候、喜連川家之先祖、古代關東管領にて鎌倉居住之節、京都將軍にならひ候て諸役を立置候事故、朝夕をも數多召仕候事に御座候、(喜連川家先祖之規式は、成氏年中行事に在之候、)左候得ば、今之土田氏は、それらの子孫之內にて、鎌倉邊に居住仕候を、慶長年中被召出候儀にもやと推察仕候、畢竟御參內に付、御用在之候而之儀と奉存候、舊記に相記候分、大概右之趣に御座候、以上、

巳四月

覺

公人朝夕人之儀に付、大草主膳ゟ書面を以撿按え被相尋候處、留守中に付、舊記に據候而勘考仕、右尋之書面幷答書之案奉入御覽候、思召も無御座候はゞ、撿按留守中之趣相認、右答書主膳宅え差出可申哉、此段奉伺候、以上、

右答書、四月八日中山平四郎、〇名信林家へ持參候而、義一江渡ス、同十日祭酒御登城之節、御持參被成候旨承り、翌九日別に一通認、義一宅え持參、使仁之助、

〔正德六年武鑑〕公人朝夕人

西御丸下 土田孫左衛門

〔元文四年武鑑〕公人朝夕人

三百俵、土田孫左衛門、

〔慶應三年武鑑〕公人朝夕人

十人フチ、土田孫左衛門、

坊主

同朋頭ノ支配ニ、奥坊主、表坊主アリ、奥坊主ハ舊ト小納戸坊主ト云ヘリ、專ヲ茶室ヲ管シ、將軍ニハ勿論、每日登城ノ大名諸役人等ニ、茶ヲ進ムルコトヲ職トス、其數百人內外アリテ、其中別ニ小道具役坊主、用部屋坊主、肝煎坊主、時計役坊主、土圭間坊主等ノ分職アリ、表坊主ハ、其數多キ時ハ二百人以上ニ及ブコトアリ、殿中ニ於テ大名及ビ諸役人ニ給事スルコトヲ職トス、故ニ報酬甚ダ多ク家計豐カナルヲ以テ、自ラ奢侈僭越ニ流レシカバ、屢〻同朋頭ニ令シテ、之ヲ戒飭セシメタリ、西丸ニモ亦奥表坊主衆アリ、又廣間坊主ト云フアリ、廣間ノ掃除

奥坊主組頭

及ビ湯茶ノ事等ヲ掌ル、

〔吏徵下御目見以下〕奥坊主組頭貳人（若年寄支配／舊御小納戸坊主組頭）

〔武家嚴制錄四十〕家綱公御本丸御移徙之時御條目

一奥坊主衆御條目

定

一御勝手茶之湯所、當番之組頭、并御勝手坊主晝夜無解怠相勤、御用可承之事、○中略

附茶之湯之席へ一日に一兩度宛不定時分、御茶道頭可見廻之、組頭は晝夜二三度づゝ、是又不時に見廻、無油斷樣に可申付事、○中略

一御茶部屋江臺子部屋之口ゟ出入之下々に至迄、不作法無之樣に、毎日御茶道頭組頭相通之可申付事、○中略

萬治貳年九月五日

〔吏徵下御目見以下〕奥坊主組頭○中略　五十俵持扶持高　役扶持貳人扶持　役金廿七兩　町屋敷拜領（沽券金三百兩）　土圭間、二半場、

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高并役扶持、

五拾俵高持扶持　奥坊主組頭

御役扶持二人扶持　奥坊主組頭並

〔吏徵附錄下御目見以下〕奥坊主組頭　貞享二年乙丑七月十一日、宗與、宗古、宗覺右三人、御小納戸坊主組頭被仰付、五十俵充被下、只今迄無之付、新規組頭被仰付也、　寶永三年丙戌十一月廿四日、熨斗目白帷子、坊主奥表共、組頭は着用、平之斗目白帷子着用仕間敷候、　同六年己丑二月廿九日、熨斗目白帷子、坊主奥表共、組頭は着用、平之

坊主は可ㇾ爲ㇾ無用ㇾ候、

〔有德院殿御實紀 四十六〕元文二年閏十一月朔日、奥坊主組頭幷岡本善悅廣豐、成島道筑信遍とも に百俵の秩祿たまはり、同朋格に命せらる、道筑信遍は和漢の學に通せしとて、うち〳〵侍講せ しめられ、文筆の事をもうけたまはり、善悅廣豐は丹靑の術に委しく、しば〳〵繪事命せられし によれり、奥坊主北角久琢勝有は、醫藥に精き旨聞しめされ、奥組頭並仰付られ、藥局の事つかう まつり、侍醫の間にいり、ひろく治療をも施すべしとなり、

〔慶應二年武鑑〕御同朋格奥御坊主組頭　七十俵高　二人扶持

　同組頭　五十俵高

橫井桑伴　本間意格　吉野圓賀　秋元宗賀　吉田友珉　小林友意　高橋貞伯　靑山□□

〔憲敎類典 二ノ五 御役〕年號月日無ㇾ之

一遠國御役人組附人別幷御役料

奥坊主八十五人

〔吏徵 御目見以下〕奥坊主八十人 舊御小納戸坊主

〔武家嚴制錄 四十〕家綱公御本丸御移徙之時御條目

一奥坊主衆御條目

　定

一御召之御茶御湯水等、彌可ㇾ入ㇾ念事、

一御圍に御茶之湯ゑかけ申節は勿論、不斷御掃除已下可ㇾ入ㇾ念事、

一奥御勝手坊主壹人ヅヽ、無ㇾ懈怠ㇾ相詰、御茶之湯御用之儀承ㇾ之、組頭中迄可ㇾ申ㇾ屆事、

一御勝手茶之湯所、當番之組頭、幷御勝手坊主、晝夜無ㇾ懈怠ㇾ相勤、御用可ㇾ承ㇾ之事、

一御黑書院御掃除之儀、御禮日之節は不ㇾ及ㇾ申不斷入ㇾ念、番替之節は改ㇾ之、受取渡可ㇾ仕事、
一表二ヶ所之茶之湯之席に、當番之坊主無ㇾ之けたい有ㇾ之而、御茶湯水等、無ㇾ滯可ㇾ出ㇾ之、但臺子之茶之湯は、辰刻よりかけ、未刻已後可ㇾ相ㇾ仕廻ㇾ之、總茶之湯は、御夜詰過可ㇾ仕ㇾ廻ㇾ之、他之御座席江茶之湯水等はこぶべからざる事、
　附茶之湯之席へ、一日に一兩度宛不ㇾ定ㇾ時分、御茶道頭可ㇾ見ㇾ廻ㇾ之、組頭は晝夜に三どヅヽ、是又不時に見廻、無ㇾ油斷ㇾ樣に可ㇾ申付ㇾ事、
一御路次之者之頭、毎日壹人ヅヽ罷出、露地掃除可ㇾ仕ㇾ之、幷御勝手之用事役等、入ㇾ念可ㇾ申付ㇾ事、
一御茶部屋之儀は勿論、御露地之もの有ㇾ之部屋、幷御數寄屋方より支配之所々、火之用心堅可ㇾ申付ㇾ事、
一御茶部や江、臺所部屋之口より出入之下々に至迄、不作法無ㇾ之樣に、毎日御茶道頭組頭相通之可ㇾ申付ㇾ事、
一紀伊殿、水戸殿、尾張殿、左馬頭殿、紀伊宰相殿、水戸中將殿、尾張右兵衞督殿、登城之節、御茶之儀、御目付衆迄申達、以ㇾ御給仕之面々可ㇾ進ㇾ之事、
一五節句、朔日、十五日、廿八日、諸大名出仕之砌、大廣間次之御座席に臺子をかけ、御茶可ㇾ出ㇾ之、勿論外之御座席へ御茶持運申まじき事、〇中略
一御道具幷御茶、其外諸色品々、不ㇾ紛失ㇾ樣に不斷可ㇾ入ㇾ念事、
一子細なくして諸大名へ參るべからず、若無ㇾ據儀有ㇾ之においては、其趣頭中へ申斷、可ㇾ任ㇾ差圖ㇾ事、
一御番勤ㇾ仕之ㇾ刋形改ㇾ之、御數寄屋坊主は勿論、露地之者に至まで、毎日可ㇾ改ㇾ之事、
一當番煩之時は、急度助番可ㇾ仕事、
一御勝手に於て高聲雜談すべからず、御黑書院、御白書院、大廣間へ出御之節は、別而高聲不ㇾ仕樣

に、御露地之者を番に付置、相通候輩も、高聲に無之様に可入念事、

一萬一計策惡事類族有之は、勿論同心不仕、不移時、其趣有體に、伊豆守、幷御茶道頭迄可申上之、領地又は金銀米錢、何にても其約束之一倍可被下之事、

右條々、可相守此旨者也、

萬治貳年九月五日

〔吏徵御目見以下〕奥坊主八十人〇中略　貳拾俵貳人扶持高　役扶持貳人扶持　役金廿三兩　御小道具役外、役金貳兩、　御用部屋坊主十四人、役扶持貳人扶持、役金廿兩、　御土圭役八人、役扶持役金同斷、　土圭間三十八人、役扶持役金同斷、但肝煎口人外、役金貳兩、　土圭間、二半場、〇中略　町屋敷拜領沽券金三百兩

〔憲教類典衣服三ノ三十五下〕寶永三丙戌年十一月廿三日

覺

坊主共

右之輩、向後熨斗目、幷七夕八朔白帷子着用仕間敷候、

〔吏徵別錄御目見以下〕奥坊主　正德元年辛卯十二月廿三日、奥坊主百三十四人、役扶持貳人扶持充、

〔明和八年武鑑〕奥御坊主衆

四條柳悳　長尾專益　坂本道運　山田玄悅〇此下六十二人姓名略

奥御小道具役御坊主

山口銀益　林長二　生居澤意齋　松本遠久

御用部屋御坊主

森良甫　佐藤昌宅　關隆琢　川口長意〇此下十三人姓名略

肝煎御坊主

中村圓覺　森良傳　吉川友珉

御土圭役御坊主

大久保半碩　津川盛久　津川友巴　中根道順　山田正元　和田圓察　田中友傳　竹岡立彌

御土圭間御坊主

本間意哲　伊佐良琢　大竹三說　江間古春〇此下十九人姓名略

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月晦日、御坊主壯年ノ者ヲ減ズ、

御坊主壯年の者は、撒兵組へ御入人となり、追々蓄髮す、

〔慶應三年武鑑〕奥御小道具役御坊主

横井榮伴　吉田友甫　內田祐生

同御坊主衆

市田榮林　山本宗筑　吉野圓佐　伊澤立佐〇此下十一人姓名略

御用部屋御坊主

芥川俊清　小林了碩　前田了圓　玉井宗林〇此下十五人姓名略

肝煎御坊主衆

野田良久　大竹三悅　岡澤柳知　吉田長春

御時計役御坊主衆

竹岡立勝　幸田順惠　鹽澤了清　竹內貞喜

御土圭間御坊主衆

宇佐美淸悅　瀨能貞久　伊藤久榮　瀧英守　奥村宗長　横井榮壽　靑山順德　靑木宗覺
池上松春

西丸奥坊主

〔吏徵御目見以下〕西丸奥坊主組頭貳人　同上〇五十俵持扶持高、役扶持貳人扶持、役金廿七兩、町屋敷拜領、三拾坪余、土圭間、二半場、〇中略

西丸奥坊主　同上〇貳拾俵貳人扶持高、役扶持貳人扶持、役金廿三兩、町屋敷拜領、三拾坪余　御用部屋十人

表坊主組頭

〔吏徵御目見以下〕表坊主組頭六人　頭支配　四十俵貳人扶持高　御四季施代金四兩　町屋敷拜領貳百兩沽券金　躑躅間、貳半場、

〔憲敎類典御役二ノ五〕元文三戊午年三月廿日
御目見以下役儀勤之內、場所定高幷役扶持、
四拾俵高持扶持　表坊主組頭

〔明和八年武鑑〕表御坊主組頭
木村養哲　小坂長春　吉田長佐　平井友古　關長三　服部良圓　佐藤宗信　竹尾專嘉
〔慶應三年武鑑〕表御坊主組頭　四十俵高
杉山道筑　中島九朴　田中正庵　杉山幸三
〔憲敎類典御役二ノ五〕年號月日無之
一遠國御役人組附人別幷御役料
表坊主貳百拾四人

表坊主

〔憲敎類典坊主二ノ十五〕寬政庚戌年〇二年十二月
表坊主共、勤向幷一體之風不宜、殊就中一己之心底不宜、分限不相應之甚敷者も有之段相聞、夫夭御咎可被仰付處、先此度私へ被仰付幷相懸り之者被仰付、申談候而、以來風儀相止候樣之仕方可申上旨蒙仰、難有仕合奉存候、

一一體坊主共之儀、至而小給之ものに而、無智之者多御座候處、前々ゟ萬石以上之御方始、其外諸御役人衆、於御殿御用向被申付候間、過分之給物等有之、有福に相暮候故、全體之分限を忘却仕、結構成ものと心得違候故之儀ゟ事起り候儀と奉存候、右ニ付願候は、右申上候心得違之甚敷者共、心附相糺可申上義御座候得共、畢竟是まで一同之勤向は勿論、心得之法令をも不相定差置候故、其身分之惡敷義を不相弁、風義不宜樣に相成候は、於私共行屆不申儀、奉恐入候儀に奉存候、依之此度勤方之心得、并萬石以上以下御頼之御用相達候仕り方、衣服家作等、召仕下人人數等之儀に至迄、作法を相定、申渡爲相守、若以來少しに而も法令に相背候儀有之候はゞ、早速夫々以輕重申上、小普請入、又は場所替、或は掛役取放候之內、申上候樣仕度奉存候、是迄之儀は、其身には諸事宜と相心得可罷在候間、右之作法を申渡候上、相背候者を申上度奉存候、

右作法之趣、別紙之通申渡仕候、

一右申上候通、申渡置候作法を相背候ものは、場所不相應に付、小普請入、又は場所替等申上候節は早速願通被仰付被下置候樣に仕度奉存候、以上、

平井專阿彌〇同朋頭

別紙

申渡候覺

一各儀、御奉公大切に相勤、奉重公儀候儀は、誓詞條々、今更不及申渡、面々可相守事に候、

一表坊主之儀は、小給之者に而、格式は有之候得共、長袖之儀故、持前之格式に不拘、殿中上下之用向相達候と心得可申處、上に而は以御影、過分之給物有之候故、豊に相暮候、尤諸組同心中と違、御番繁く候故、相應之細工物等も難相成、御影を請候儀、御奉公之取續にも相成候間、尤之儀に候得共、過分之給物有之故、家作共、分限不相應に仕、召仕等多相成、其上妻子等迄も、心取り自ら高く相成、結構成もの、樣に相心得、歷々江慮外がましき御應對仕候樣相成候、是等之趣、以來

堅く可相愼儀に候、

一家作等之儀、分限を弁へて、相成丈手狹に可仕候、諸家江立入多きものは、過分之給物有之、不貪之金銀ゆゑ、不苦之心得、宜木品色を相用候は、誠榮耀之沙汰に相成、玄關體之場所相構候は、分限を不辨儀、以來急度相止可申候、其外家作之致方、別に以書面可相達候、坊主之家作は、麁末に補理候社、相應之儀に候、

一屋根瓦葺之場所は格別、其餘はならべ瓦かヶ瓦可然候、さん瓦葺可爲遠慮候、

一父子其外親類同居之者、三夫婦、四夫婦、一所に住居之者は、手廣之住居無據義に候、乍去前條之通、宜木品を以普請仕候儀は、心得違に候、以來相改可申候、

一家作、是迄過分之手廣、結構と申程に仕、玄關等を構候もの有之段相聞候間、早々可相改候、

但結構手廣に仕候程之餘勢に而は、早速改候事も相成がち之儀に候、

一衣服之儀、相調候品、絹紬郡內等之品を相用、妻子等之衣服も、右に準じ可相心得候、

裝束之節は　十德　麻上下之節は　無紋單羽織　裏付上下之節は　綿入羽織　紋附之羽織は、禮服に而無之候、

右之通相心得、外々給候紋附羽織之義、小給之者、取續之一助に候間、平日着用不苦候得ども、先達而相達候通、當番之面々、以來無用、其餘は不苦候得ども、大勢着用無之樣、日々可申合候、

足袋之儀は、以來白き足袋無用、色足袋可被相用候、

外々給り候品多く共、紋がら等有之品は、相愼斟酌可仕、紫之紐等は可有遠慮候、

一腰物之義は、相應に可相嗜候義に候間、可成丈見苦敷無之樣可被致候、乍去金拵抔と申樣成、結構に相見候義は可爲無用候、

一以來萬石以上以下之御方江立入候御賴之ヶ所、誰々は何程有之段を帳面に爲相記、右相札相

扱候掛り之者六人被仰渡候間、御頼の明き有之節、右掛り之者に割合を爲仕、御頼之ヶ所少きもの、平常勤向出精之者を相撰び、先様江從來立入仕候者を以爲相頼可申候、是迄之様、面々ゟ兼而留守居中江音物等をいたし、せり落候様成義、堅く無用、先様ゟ明跡被仰付候共御斷可仕候、御頼を請候義相知候へば、法令を破候間、早速組頭江可被申聞候、

一掛り役相勤候者、於御殿御役人衆之御頼、以來御斷可申候、平番之者計、御頼受御用可相達候、

但如此無之候而は、平番御奉公之取續に不相成候、

一萬石以上之御方、御役被蒙仰候砌、此御役に而は、御頼何人充之定メなど丶、強而増相願候由、以來は御用弁候程、先様より可被仰付候間、強而其餘之人數相願候儀有之間敷義に候、

但是迄は從來御頼之者、右之願を強而不仕候得共、外仲ヶ間共、身構計仕候など申候故、無據相願候義可有之、以來は組頭ゟ差圖之義故、難相成段總中江可被達候、

一萬石以上以下共、御頼請候はゞ、隨分厚く深切に御用等達し可申候、近來御頼に不相成前は、彼是強而願、御頼に相成候へば、御用等被仰付候節、以前ゟ等閑に仕候様成不實之者も有之哉に存候間、右體之者有之候はゞ、此度掛り之者ゟ先様江其段申達、御頼爲除申候事、右之趣に相達候茂有之候へ共、未糺不相濟候、追々可相達候、

十二月

〔德川禁令考十七 同朋頭〕天保十一庚子年二月廿三日

同朋頭へ達書

表坊主取締方之儀、先年相達候趣も有之候處、兎角風儀宜からず、諸家江手廣に立入、贈物多分に請、驕慢致、小身之面々江毎度失禮之儀有之、或は御役筋へ罷出、恣意に立入候抔申觸、がさつ不法之事共有之、且又身分をも不顧、諸道具幷男女等、身分不相應に召仕、奢侈超過致し、其上諸家始而

御目見、家督其外祝儀事等之節、子供は勿論、親族共をも頼申込、剰料理向席畫杯之事は、前々之振合も有之處、銘々勝手儘之致取計、諸家及迷惑、不相當之取持、其外諸家へ立入等之儀共有之由に而、先年申渡候趣令忘却、右之次第不屆之儀に付、急度吟味を遂、嚴重可申付候得共、先此度者、格別之宥免を以不及其儀候、先年申渡候趣相心得、此以後聊に而も身分を不辨始末相聞候はゝ、無用捨咎可申付候間、此段一同に可申渡儀候、且又其方共、是迄不心附能在候段、不念之至りに候、取締方之儀、能々可申合候、

〔吏徴下 御目見以下〕表坊主百七十四人　貳拾俵貳人扶持高　部屋住貳拾俵　町屋敷拜領（沽券金貳百兩）

燒火間、二半場、　御太鼓役七人

〔吏徴別錄下 御目見以下〕表坊主　延享三年丙寅四月八日、二十俵二人扶持高、

〔明和八年武鑑〕表御坊主衆

神田湯島邊

長谷川露三　廣野貞佐　高岡清仙　石川友悦（○此下二十四人姓名略）

本郷丸山邊

長谷川友琢　黑木閑榮　大須玄喜　山本宗朴　岸本玄琢　山本宗節　鈴木立益

下谷金杉邊

加藤利三　松下閑悅　澤幸佐　松下閑德（○此下二十二人姓名略）

濱町淺草邊

前田玄立　土田友巴　土田門嘉　小出善賀（○此下十四人姓名略）

京橋築地八町堀邊

大高宗陸　伊藤久有　大崎林益　柿澤宗仁（○此下六人姓名略）

本所深川邊

河島圓節　櫛田養筑　前田久登　上田宗三　福田久佐〇此下十四人姓名略

小石川牛込小日向邊

長尾專齋　乙女永順　高橋愼悦　村塚淸信　淸水文碩　木村齋悦　小坂長意　關口□筑

渡邊永甫　渡邊甫三

市谷四谷靑山邊

河野玄永　櫛田長悅　白石圓哲　村塚宗豫　佐藤久伴　岡村玄益　田中秀益　田中伴益

山本宗入

糀町赤坂邊

高木善宗　石井永立　石井永庵　辻道圓　佐藤元知〇此下九人姓名略

芝麻布邊

横山宗叔　湯川一雲　三谷久甫　星野久務　黑木淸閑〇此下十人姓名略

同三組肝煎御坊主

佐藤春朴　關圓宅　靑野傳佐　山本道泉　黑木意悅　成島貞雪　福田久伯　河瀨淸佐　黑尾良齋

同太鼓方御坊主

伊澤宗琢　三浦宗春　三浦意春　岡部□□　栗原久味

〔甲子夜話　四〕星野久務ト云シ坊主衆アリ、質樸ニシテ常ニオカシキコト言フ男ナリキ、ソノ家ハ御入國前ヨリノ者ナリト聞ユ、予〇松浦淸或時久務ニ、久シキ家ナリ、迚賞シケレバ、久務手ヲフリテ、是ハ御沙汰ナシト云フ、何カニト言ヘバ、御推量モ下サレ候ヘ、今雁間ノ御大名ハ、皆其始

メハ小身ノ御人達ナリ、然ヲ今ハ城主、又ハ何萬石ナド御昇進ニテ、歷々ノ御勤ナリ、僕ガ家ハ、神祖ノ御始ヨリ奉仕候ヘドモ、今ニ坊主ニテ居候、古キ次第知レ候ハ、外聞宜シカラズト云タリ、予モ一笑シテ止ヌ、

西丸表坊主

〔慶應三年武鑑〕表御坊主衆

氏家宗古　澤幸佐　幸田利貞　伊藤久有　關圓宅〇此下五十人姓名略

同御太鼓方御坊主衆

福田久億　矢代善益　横田宗林　大島榮松　古屋榮達　星野求覺　瀨能淸賀　寺町三知

〔吏徵御目見以下〕西丸表坊主組頭六人　同上〇頭支配、四十俵二人扶持高、御四季施代金四兩、町屋敷拜領、二拾百坪兩金躑躅間、二中場、〇中略

西丸表坊主八十四人　同上〇二拾俵二人扶持高、町屋敷拜領、二拾百坪兩金焼火間、二中場、　御太鼓役五人

廣間坊主

〔武家嚴制錄四十〕家綱公御本丸御移徙之時御條目

一廣間坊主衆御條目

定

一御廣間坊主請取之御座敷御掃除等入念可仕、幷御使已下、疎略いたすべからず、總じて御直參向江致無禮間敷事、

附所々はり番、兩人宛無懈怠可爲詰事、

一大名衆出仕之節、取持大勢罷出間敷事、

附御玄關へ、進物取次之外、一切罷出べからざる事、

一御能之時、組頭之外、大廣間へ大勢罷出べからざる事、

附中門之御繕御白洲へ、大勢出まじき事、

一御右筆部や江御右筆衆差圖なくして、一切參るべからざる事、

一茶之湯所、火之用心油斷仕るべからず、湯水等斷絕無之樣に奇麗可仕事、

附他之御座敷へ、湯水運申間敷事、

一坊主部やれたとひ御直參たりといふとも入るべからず、若斷有之者各別之事、

一於御臺所御料理被給衆ら先達而、無作法に食物被下べからざる事、

附給仕不足に無之樣に可相勤事、

右可相守此旨者也、

萬治貳年九月五日

太鼓坊主

〔明良帶錄世職篇〕御太鼓坊主衆

御太鼓坊主は古來勤古しといへども勤功なし、御人少之節は、表御坊主ら助に出る也、

數寄屋頭

職員職掌

數寄屋頭ハ茶室ニ關スル一切ノ事ヲ掌ル、若年寄ノ支配ニ屬シ、百五十俵高ニシテ、四季施代金ノ給與アリ、屬僚ニ組頭、數寄屋坊主、露次作役、露次之者等アリ、西丸ニモ亦數寄屋頭アリ、

〔吏徵御目見以上上〕御數寄屋頭三人

〔文昭院殿御實紀十五〕正德二年八月三十日、數寄屋頭一人、○中略宿直すべしと命せらる、

〔吏徵別錄布衣以下御目見以上下〕御數寄屋頭○中略　享保二年丁酉十一月十四日、泊御免、　同十年乙巳六月二日、三人役、

〔德川禁令考數寄屋頭十七〕支配

俸祿

御數寄屋坊主組頭十八人　同御坊主百八人　御庭作坊主二人

〔吏徵御目見以上〕御數寄屋頭　若年寄支配　百五十俵高　御四季施、五月帷子一、單物一、九月小袖一、十二月小袖一、宇治御暇金貳拾兩、

〔憲教類典御役二ノ五〕享保十六辛亥年三月

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御數寄屋頭〇中略　寛文二年壬寅三月十二日、若年寄支配、

御目見以上御役勤候內、御足高幷御役料定、

百五拾俵高取來御扶持方共　　御數寄屋頭

〔明和八年武鑑〕御數寄屋御坊主頭　百五十俵高

鈴木壽碩　村田惠齋　柿澤宗長　鈴木林碩

〔萬延元年武鑑〕御數寄屋頭　百五十俵高

高田三節　野村休成　倉田道淸

組頭

〔官中秘策二十五〕御數寄屋坊主組頭六人

〔文昭院殿御實紀十五〕正德二年八月三十日、數寄屋頭一人、同じ組頭、二人づゝ、宿直すべしと命せらる、

〔吏徵御目見以下〕御數寄屋坊主組頭六人　頭支配　四十俵持扶持高　御四季施代金四兩　町屋敷拜領沽券金貳百兩　躑躅間、貳半場、

〔憲教類典御役二ノ五〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高幷役扶持、

四拾俵持扶持　　御數寄屋坊主組頭

〔明和八年武鑑〕同〇數寄屋御坊主組頭　四十俵高

鈴木宗林　横山宗泉　松井林徳　増池了順　高田三節　高畑道伴　柿澤宗勝

〔慶應二年武鑑〕御數寄屋御坊主組頭　四拾俵高

鈴木林碩　近藤友佐　鈴木春碩　佐野道嘉　高田三永　谷村可順　山本道井　渡邊久傳

坊主

〔吏徴 御目見以下〕御數寄屋坊主　貳拾俵貳人扶持高 古來三十俵三人扶持高　山里御道具役、御召仕立役、同掛役ハ、御四季施代金四兩、部屋住貳拾俵　町屋敷拜領 沽券金貳百兩　燒火間、貳牢場、

〔營中御日記 二〕寛永二年四月十一日、日光へ御供之輩、〇中略 表御數寄屋坊主　御藥方坊主　土圭間坊主

右之輩 江、或小判、或銀子被下之、

〔大猷院殿御實紀 四十四〕寛永十七年六月六日、數寄屋坊主六人も、火番命せらる、

〔天明七年武鑑〕同〇數寄屋御坊主衆大概

益池了意　堀內了佐　村田惠三　鈴木林碩〇此下四十一人姓名略

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年十二月晦日、御坊主壯年ノ者ヲ減ズ、

御坊主壯年の者は、撒兵組へ御入人となり、追々蓄髮す、

〔慶應三年武鑑〕同〇數寄屋御坊主衆

利倉善佐　八田宗琢　鈴木宗榮　久野玄齋　岡田露甘　野村榮嘉

〇按ズルニ、元治元年、慶應二年等ノ武鑑ニハ、並ニ數寄屋坊主百一人アリ、

露次作役

〔吏徴附錄 世職〕山本道句 御露次作役　御數寄屋頭支配　高貳百俵　年月日以來代々役　悴道味五人扶持

〔明和八年武鑑〕御庭作

山本道句　鎌田庭雲

○按ズルニ、庭作ハ卽チ露次作ナルベシ、

〔嘉永三年武鑑〕御庭作

山本道句　山本道味

〔文久二年武鑑〕御露地作役

山本道井　內田友信　市田淸賀

〔慶應二年武鑑〕御露地作役

內田友信　市田淸賀

露次之者

〔憲敎類典御役二ノ五〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別幷御役料

御表御露次廿貳人、○中略御露次者八十四人、

〔武家嚴制錄四十〕家綱公御本丸御移徙之時御條目

一奧坊主衆御條目

定

一御路地之者之頭、每日壹人ヅヽ罷出、路地掃除可仕之、幷御勝手之用事役等入念可申付事、○中略

萬治二年九月五日

〔吏徵御目見以下〕御露次之者百七人　十俵一人扶持高　二半場

〔大概順〕御目見以下大概順

二半場　白衣役　御路次之者

西丸數寄屋頭

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月廿三日、大納言殿○德川家綱世子へ御家人あまた附屬せらる、○中略數寄屋頭一人、九月三日、大納言殿御方に附屬せらるゝ輩あり、○中略數寄屋坊主組頭二人、

坊主一人、〇略下

〔吏徴別録下 布衣以下御目見以上〕御數寄屋頭　慶安三年庚寅八月廿三日、始置二西丸附一員、

古事類苑

官位部六十六

德川氏職員十五

鷹匠頭 網奉行 殺生奉行 併入

鷹匠頭ハ、鷹師頭トモ云フ、若年寄ノ支配ナリ、放鷹ノ事ニ堪能ナル人ヲ以テ之ニ補ス、殊ニ戸田内山二氏ハ其世職ニシテ、戸田氏ハ千五百石高、内山氏ハ二百石高、足高八百石ナリ、其役扶持ハ、共ニ二十人扶持トス、此職慶長年間ヨリアリシガ、慶應二年ニ遂ニ之ヲ廢セリ、屬僚ニ組頭、目付、鷹匠衆等アリ、組頭ハ二百五十俵高ノ職ニテ、千駄木ト雜司ケ谷トニ分レテ、各、其鷹部屋ヲ管ス、目付ハ、享保三年ニ始テ之ヲ置キ、百俵高ノ職ニテ、役扶持七人扶持ヲ給セシガ、元文三年ニ此職ヲ廢セリ、鷹匠衆ハ數十人アリテ、各千駄木雜司ケ谷ノ鷹部屋ニ分屬住居ス、百俵高ノ職ナリ、

又鷹匠頭ノ配下ニ、犬牽頭、犬牽、餌指等アリ、犬牽頭ハ、初メ若年寄ノ支配ナリシガ、後鷹匠頭ノ支配ニ屬シ、更ニ又鐵砲方所屬ナル佐々木氏ノ配下ニ隷スル事トナレリ、餌指ハ、二十人若シクハ三十人アリ、二十俵三人扶持ノ職ナリ、其他手鷹匠、鶴頭アリ、

網奉行ハ、寬永ノ頃ヨリ見エシニ、天和二年以後ノ武鑑ニ見エザレバ、此亦既ニ廢職トナリシナルベシ、又殺生奉行ハ、慶安ノ頃ヨリ見エタレドモ、正德六年ノ武鑑ニ見エザレバ、當時既ニ廢セシナルベシ

〔柳營秘鑑 四〕諸役人員數 并 組支配

待遇俸祿

一御鷹匠頭二人

〔東職記聞 二〕鷹飼頭二人　布衣 鷹飼、東鑑、鷹飼是謂ニ多加之也、字ハ今世作ニ鷹匠ー、又作ニ鷹師ー、今從ニ東鑑ー也、

戸田氏代々之職、而掌ニ蒼鷹之事ー也、領ニ鷹飼及同心餌指犬牽等ー也、其一人者、臨時被レ補之也、

〔明良帯録 世職篇〕御鷹匠支配 若支 千俵高 御役扶持二十人扶持 山吹

御使番格にして、奥出の人もあり、御役扶持被レ下、御用多に勤む、戸田五助は御鷹仕込掛り、内山七兵衛は、鶴雁鳴多鳥の取方を仕込なり、吹上詰、在勤方とあり、奥向より掛合事、其外餌付羽立方功者に心得、仕込第一なりと也、時分ねぐらの事は、小普請方談合、

〔吏徴附録 世職〕戸田久助 御鷹匠頭　若年寄支配　高千五百石　御役扶持廿人扶持　山吹間

布衣 ○中略　忰五助、御鷹匠頭、千俵、御役扶持廿人扶持、布衣、○中略

内山七兵衛 御鷹匠頭　若年寄支配　高貳百石 御足高八百石　御役扶持廿人扶持　山吹間　布衣

〔吏徴別録 上布衣以上〕御鷹匠頭 ○中略　享保元年丙申八月廿一日、再ニ置二員ー、席小普請方之次、御具足之上、間宮左衛門、戸田五助、

〔惇信院殿御實紀 三〕延享三年六月十一日、鷹匠頭戸田五助勝便、年勞をもて使番の班に准せらる、

〔大猷院殿御實紀 六十五〕正保三年十二月四日、鷹師頭戸田久助貞吉、三百石加へて原祿二千石になされ、小野久内吉次、百石加へて四百石になされ、加藤丑之助吉久、家祿二百五拾俵を加へて采邑三百石給ふ、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候内、御足高并御役料定、○中略

御鷹匠頭

御役扶持貳拾人扶持

〔慶應元年武鑑〕御鷹匠頭 布衣 千石高 山吹之間 御役扶持廿人扶持

沿革 任免

〔吏徴別錄 上 布衣以上〕御鷹匠頭　慶長十二年丁未月日、始置一員、間宮左衛門、○中略　天和三年癸亥三月廿一日廢　享保元年丙申八月廿一日、再置二員、○中略　間宮左衛門、戸田五助、

〔吏徴附錄 世職〕戸田久助 ○御鷹匠頭 中略　享保九年丙申八月廿一日以來、代々役、

〔有德院殿御實紀 三十二〕享保十五年十二月廿九日、鷹匠頭森川金右衛門氏長、病もて職を辭し寄合となる、これより鷹匠の一隊を減せらる、

〔浚明院殿御實紀 七〕寶曆十三年四月九日、鷹匠頭戸田五助勝愛、年老しかば御狩の供奉をゆるされ、鷹匠を支配すること故の如し、其の子久次郎勝英同職とせられ、官俸二十口を賜ふ、

〔吏徴附錄 世職〕内山七兵衛 ○御鷹匠頭 中略　明和七年庚寅六月八日以來、代々役、

〔甲子夜話 三〕御鷹匠頭ノ内山七兵衛ハ、質朴ノ人ナリ、此人ニ感ジ入タルコトアルハ、常々鳥肉ハ嫌ト稱シテ、人前ニ於テ喫スルコトナシ、人モ亦實事ト思ヘリ、其實ハ嫌ニテハナシ、組ノ者野先ヘ出ル毎ニ、必御鷹ノ得タル鳧雁ヲ持贈ルコトナリ、夫ヲ防ントテ、天性好マヌコトニワザト仕成タルニテ有ケル、

〔慶應二年武鑑〕御鷹匠支配。。　山吹　千石高　布衣　御役扶持廿人扶持

三百俵、戸田五助、

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年十二月、此月御鷹匠御鳥見役名ヲ廢ス、

見習

〔吏徴別錄 上 布衣以上〕御鷹匠頭 ○中略　享保元年九月十六日、始置見習一員、

〔吏徴附錄 世職〕戸田久助 ○御鷹匠頭 中略　孫久次郎、兩番格、御鷹匠頭見習、三百俵、

内山七兵衛 ○御鷹匠頭 中略　悴伊三郎、兩番格、御鷹匠頭見習、三百俵、

西丸鷹匠頭

〔大猷院殿御實紀 六十五〕正保三年十二月四日、鷹師頭加藤助右衛門則吉、大納言殿 ○徳川家綱 世子 家光 に付らる、所屬も同じ、

組頭

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿御方〇德川家光世子家綱に附屬せらる、輩あり、〇中略鷹師頭間宮孫太郎俊信、所屬同心廿人、〇中略御方につけらる、

〔吏徵上御目見以上〕御鷹匠組頭四人〇中略　一組貳人

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御鷹匠組頭　享保元年丙申十一月十九日、始置、一員、兩組兼帶也、元文三年戊午十一月十五日、四員となる、

〔明良帶錄世職篇〕御鷹匠組頭二百五十俵高頭支

御鷹仕込、其外村々見廻等を心得、御鷹匠衆の世話、幷に御鷹の事に委敷、萬端の事を司り、御成先の事迄心得有べし、

〔吏徵上御目見以上〕御鷹匠組頭四人　頭支配　燒火間　貳百五十俵高〇中略　千駄木雜司谷住居

〔憲教類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高幷御役料定、〇中略

貳百五拾石高　　御鷹匠組頭

〔有德院殿御實紀四十八〕元文三年十一月十五日、鷹匠目付木村彌三郎恒忠、高橋喜兵衛某、佐々斎大夫政晴、水上八左衛門昌忠、鷹匠組頭とせらる、これ新置の職なり、

〔元治元年武鑑〕御鷹匠組頭　二百五十俵高

百俵、千だ木御役宅、　可兒孫十郎　百五十俵、せんだ木御役宅、　乙幡勘之丞　八十俵五人フチ、せんだ木御役宅　　三橋藤大夫〇中略　百俵、ぞうしがや、　山川淸大夫　六十俵二人フチ、ぞうしがや、　青木作兵衛

目付

〔吏徵附錄雜職〕御鷹匠目付　享保三年戊戌六月朔日始置、同七年壬寅十月廿四日、役扶持七人扶持、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高井御役料定、○中略

百俵高 持扶持之儀、御役扶持七人扶持、 御鷹匠目付

〔有德院殿御實紀 六〕享保三年六月晦日、鷹匠佐々與左衛門實政、木村彌三郎恒忠、中田新五右衛門正則、竹本權右衛門正岑をもて、新に鷹匠目付とせらる、

〔有德院殿御實紀 四十八〕元文三年十一月十五日、鷹匠目付はこれより廢す、

〔吏徵 上 御目見以上〕御鷹匠四十四人 ○中略 一組十六人、見習六人、○中略 千駄木、雜司谷、御鷹部屋住居、

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕御鷹匠頭 ○中略 享保二年丁酉正月廿二日、本鄕御弓町御鷹匠部屋類燒、右跡雜司谷千駄木兩所江引ル、

〔有德院殿御實紀 四〕享保二年三月三日、新に鷹坊を設けられしによて、鷹師頭戶田五助勝房、小栗長右衛門正等に、費用金屋材料を下さる、

〔明良帶錄 世職 篇〕御鷹匠衆 百俵高見習は五十俵、尤見習被二仰付一候翌年暮より御救金十兩、五年目より御切米五十俵被レ下之、頭支 ねぐら切調方鷹匠師、ねぐら尾羽調役在勤方、同見習など有り、何れも鷹の心を知りて、常に鷹と遊び、自然と馴れ知る樣に仕込事也、とやの時は、餌を分量して圍を仕置、其圍の所に餌を入る穴を明け、又別にちいさく穴を明けて、是は常に塞ぎ置也、とやの日數立たる時分を考へ、此穴より覗き見ると也、殘らず濟めば、其餌を手の掌に載せて、鷹部屋の暗き內に入りて、手の掌の餌をはます、是にて馴たる時分、又外之圍の穴にて餌をはます、餌を穴の際に持行て穴を叩き、餌を見せてはます、又是にて馴れさせ、夫より外へ出して條を付て放し、餌子を叩き呼ぶ、是にて馴す、人に馴染、或夜据等をして仕込、拳に馴さするなり、以前は鶴取の御鷹は、千駄木雜司ヶ谷、輪持にて出

たる處、當時は奥の仕込によりて、鶴相應の鷹出來れば御用被仰付ゆゑに、雜司ヶ谷千駄木共、非番となる、○中略内山は雜司谷を支配し、同心、御犬牽、六尺、戸田は千駄木を支配す、

〔吏徵御目見以上上〕御鷹匠四十四人　頭支配　燒火間　百俵高　見習五十俵

〔慶應元年武鑑〕御鷹匠衆燒火之間　百俵高三人扶持同心五十人犬牽六人

〔有德院殿御實紀七〕享保三年十二月十八日、鷹匠をすべて小十人組に準せらる、

〔吏徵別錄布衣以下御目見以上下〕御鷹匠　享保元年丙申九月十六日、始置十四員、同二年丁酉六月廿三日、始置見習、

〔安政六年武鑑〕御鷹匠衆

百五十俵、八木庄兵衛、　五十俵五人フチ、柿沼金八、　百俵、土田重兵衛、　百俵二人フチ、岩間翁助、　百俵三人扶持、原田善藏、　百五十俵、近藤金左衛門、　百俵三人フチ、水上藤右衛門、　八十俵五人フチ、三橋藤大夫、　二百俵、中島勇之丞、○中略　見習鈴木金之丞　見習乙幡宇兵衛○下略

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月、此月御鷹匠御鳥見役ヲ廢ス、

手鷹匠

〔台德院殿御實紀四〕慶長十一年十一月晦日、此日大番天野佐五右衛門正長、鷹を調練する事を得たりしかば、手鷹師に仰付らる、

〔大猷院殿御實紀四十二〕寛永十六年、此年○中略忍の代官稻田喜藏正信は手鷹役となる、

〔吏徵別錄布衣以上上〕御鷹匠頭○中略　享保元年九月十六日、始置見習一員、并御手鷹匠十四人を置、

鶴頭

〔大猷院殿御實紀七十一〕慶安元年六月四日、鷹師長田平四郎白久、木村久藏宗綱、根本久平成重、新に鶴をあづけられ、同心五人餌差三人を屬せられ、○下略

〔延寶八年江戸鑑〕御鶴頭衆

四百石同心十人　小野吉兵衛殿　三百石同心十五人　加藤杢之助殿　二百俵同心五人　久松太左衛門殿　二百俵同心五人　木

西丸鷹頭

與力上役同心番人

村久左衛門殿　四百石同心五人　小栗庄左衛門殿

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿御方〇徳川家綱世子に附屬せらるゝ輩あり、〇中略鷹頭大草安右衛門正元、小栗庄右衛門正重、所屬同心五人、餌指二人づゝ、〇中略御方につけらる、

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

御鷹匠頭　同心與力五人〇上役貳人〇同心百人〇此内見習共　御鷹部屋番人八人〇

〔享保通鑑二〕享保三年七月三日、被仰出左之通、

覺

一御鷹方上役、餌差組頭、并肝煎〇中略

右之輩、向後熨斗目、并七夕八朔白帷子、一切堅著用仕間敷旨、向々江急度可被相達候、以上、

戌七月

〔吏徵御目見以下下〕御鷹匠同心百人　一組五十人　三十俵貳人扶持高　組頭一組三人、役扶持三人扶持、見習二十八人、三人扶持、　御譜代場

〔寶曆集成綠綸錄二十五〕寶曆七丑年八月

戸田五助支配同心　石井太郎八

數年精出相勤、御鷹宜取扱候ニ付、當年より年々御金拾兩宛被下候段申渡候間、可被得其意候、

〔天明集成綠綸錄四十一〕安永九子年八月

御勘定奉行江

戸田久次郎組同心　風間兼八

數年出精相勤、御鷹宜取扱候ニ付、當年より年々御金拾兩宛被下之、

右之通被下候段申渡候間、可被得其意候、

犬牽頭
犬牽

〔吏徵別錄 下御目見以下〕御鷹匠同心　享保元年丙申九月□日始置

〔吏徵附錄 廢職〕御犬牽頭　御役扶持七人扶持

〔憲敎類典 二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高并役扶持、〇中略

五拾俵高扶持持　　　　御犬牽之頭

〔大猷院殿御實紀 七十一〕慶安元年六月四日、鷹師〇中略水野平六郎信俊に犬を預られ、同心二人を屬せられ、〇下略

〔寶曆集成絲綸錄 二十四〕寛延四未年九月

御勘定奉行江

雜司谷御犬部屋御用無之ニ付、取拂候樣ニ小普請奉行佐々木勘三郎江申渡候間、地所之儀致了簡可被申聞候、右御犬部屋圍之內ニ、自分家作ニ而罷在候御犬牽共引拂候ニ付、壹人ニ付金四兩宛被下候段申渡候間、佐々木勘三郎申談可被渡候、

佐々木勘三郎支配
猪御犬牽組頭　直井喜七
猪御犬牽　木村伴四郎
倉知重藏
黑川總右衛門〇以下十三人姓名略
猪御犬牽見習　直井喜四郎
同　品川甚藏

右之分、小普請ニ入、御足高取來分は上り、當年分之御足高は被下之、

餌指

右兩人見習御免無足に成、當年分之御切米御扶持方は被下之、
右之通申渡候間、得其意、可被談候、
〔憲教類典〕二ノ五御役 年號月日無之
一遠國御役人組附人別并御役料、○中略
御鷹匠頭○中略　只今ハ御犬牽頭有之、若年寄之本御支配、諸事御目付衆取次、御犬牽廿三人、
〔有德院殿御實紀〕三十 享保十四年七月廿五日、先手頭兼鐵砲方井上左大夫貞高が所屬、佐々木勘三郎孟成、犬飼共を支配すべし、○中略 犬飼等これまでは鷹匠頭に隷せしなり、
〔吏徴〕御目見以下 御鷹御犬牽六人　三拾俵持扶持高　見習三人扶持　抱場
〔大概順〕御目見以下大概順
三十俵持扶持 見習初年無之、翌年御數金三兩、四年目より三人扶持、 御抱入場所　白衣勤　御鷹御犬牽
〔柳營秘鑑〕四 諸役人員數并組支配
一御鷹匠頭○中略　餌指七人
〔吏徴附錄〕廩米 御鷹餌指　御鷹匠頭支配　貳拾俵三人扶持高
〔享保通鑑〕二 享保三年七月三日、被仰出、左之通、
覺
一御鷹方上役、餌差組頭、并肝煎、○中略
右之輩、向後熨斗目、并七夕八朔白帷子、一切堅著用仕間敷旨、向々江急度可被相達候、已上、
戌七月
〔有德院殿御實紀〕五 享保二年九月二日、この日小普請の士十六人、新に鷹餌指の事命せられ、米十五石、別に月俸五口をたまはる、

〔教令類纂二集三十七〕享保七壬寅年十一月
此度餌差相止、御鷹之餌、鳥屋請負八人ニ被仰付、餌鳥屋雇之餌差、關八州之內、餌鳥取申候筈ニ付、右之者共方より雇之餌差鳥取可申候間、左樣可被心得候、

〔吏徵附錄職原〕御鷹餌指○中略　享保九年甲辰三月六日、始置廿人、　同年四月五日、増十人、合三十人、　寬政七年乙卯二月、御鷹餌指相止、

○

網奉行

〔大猷院殿御實紀三十九〕寬永十五年十二月二日、葛西に御狩ありて、○中略今朝ならせたまふ時、大手門の內にて、鷹師の子十人、網奉行の子二人、拜し奉る、

〔大猷院殿御實紀七十九〕慶安三年十二月廿六日、水邸前の溝水にて、斑毛の鴨とりし、殺生方安藤十左衞門定朝、鳥見田澤杢右衞門正次、網奉行小出勘右衞門宗勝、時服一づゝかづけらる、

〔常憲院殿御實紀六〕天和二年十二月五日、網奉行は五人とも小普請に入らる、

殺生奉行

〔大猷院殿御實紀七十九〕慶安三年十二月廿五日、この日千壽邊御狩あり、斑毛の鴨とり奉りし殺生奉行筒井久平正成、安藤忠五郎定武に時服下さる、

〔延寶八年江戶鑑〕御殺生奉行
貳百五拾石、筒井久兵衞殿、　參百石、安藤忠五郎殿、

〔寶永三年武鑑〕殺生奉行
するがだい、志村與兵衞、　筒井久兵衞　安藤忠次郎

鳥見組頭

職員　職掌　待遇　傳錄

鳥見ハ數十人アリ、上目黑村、東大森村、志村、鮨有村、東小松川村、上中里村、高圓寺村ノ七ケ所ニ住宅ス、若年寄ノ支配ナリ、八十俵高ノ職ニテ、別ニ野扶持五人扶持、傳馬金十八兩ヲ給ス、又目見以上百俵高ノモノ二人アリ、組頭二人ヲ置キテ之ヲ總轄セシム、組頭ハ二百俵高ニシテ、役扶持五人扶持ヲ給シ、傳馬金書狀取遣金等ヲ給ス、此職寬永二十年始テ十員ヲ置キ、元祿九年一旦之ヲ廢セシガ、享保元年ニ復タ之ヲ置キ、慶應二年ニ至リ、鷹匠ト共ニ此職ヲモ廢セリ、西丸ニモ亦鳥見ヲ置キシコトアリ、

〔吏徵〔上御目見以上〕〕御鳥見組頭二人

〔明良帶錄〔世職篇〕〕御鳥見組頭〔二百俵高、御役扶持五人扶持、御傳馬金十八兩、書狀取遣金七兩、若支〕

御鳥山事、御場の事に能々馴れ、御鳥見衆を指揮す、御鳥見より昇進す、其事に功者の仁愛に昇る、

〔吏徵〔上御目見以上〕〕御鳥見組頭二人　若年寄支配　燒火間　貳百俵高　御役扶持五人扶持　傳馬金十八兩

〔明良帶錄〔續篇〕〕御鳥見頭〔二百俵高、御役金二十五兩、五人扶持、燒若支〕

御鳥見より昇れば、御鳥の事功者なれば、御用に立筋多し、〔○中略〕御役金御役扶持をも被下、尤一代御目見、

〔有德院殿御實紀〔七〕〕享保三年十二月十八日、鳥見組頭、小普請方改役の輩は、大工頭に准じて、歲首に御流盃をたまふべしとなり、

〔吏徵別錄〔下布衣以下御目見以上〕〕御鳥見組頭〔○中略〕　享保四年己亥十二月十八日、御勘定次席、

〔憲敎類典〔二ノ五御役〕〕享保十六年〔辛〕亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高〔井〕御役料定、〔○中略〕

貳百石高〔持扶持之儀、御役扶持五人扶持、〕　御鳥見與頭

任免

〔嚴有院殿御實紀六〕承應二年十月二十八日、鳥見太平角助俊宗、幸田孫助友治、鳥見頭になる、

〔甘露叢六十一〕元祿九年十月七日、鳥見組頭、御用無レ之ニ付小普請ニ入、幡野一郎兵衞、松下安兵衞、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御鳥見組頭　享保元年丙申十二月七日、始置二一員一、

○按ズルニ、元祿九年ニ鳥見役ヲ廢セシガ、此ニ至リテ再ビ置キシナリ、鳥見沿革任免ノ條參看スベシ、

〔元治元年武鑑〕御鳥見組頭

本所南わり下水　田口小右衞門　かめ有村　田名瀬助右衞門

〔慶應元年武鑑〕御鳥見組頭

かめ有村御役宅　田名瀬助右衞門　七十俵五人ブチ本所御竹藏後　田口小右衞門

鳥見職員職掌

〔吏徵下御目見以下〕御鳥見廿二人、見習九人、同並三人、○中略　在宅七人、小松川村、目黑村、大森村、龜有村、志村、中里村、高圓寺村、

〔明良帶錄〕御鳥見頭支八十俵高、野扶持五人扶持、傳馬金拾入兩、

野鷹移出役より、御鳥見手附と成り、夫より爰に昇る、出役等も有り、何れも在の勤方、御鳥見功者の仁をすぐり選擧す、御鳥見より在宅御場所有り、御鳥見支配も有り、

〔有德院殿御實紀三〕享保元年九月二十七日、こたび古制に復し、鳥見の職命せらる、よて鳥見の者等、つねに近郊を巡り、農民に諸事指揮すべしと命せらる、

〔吏徵別錄下御目見以下〕御鳥見○中略　享保三年戊戌六月日、上目黑村、東大森村、志村、龜有村、東小松川村、上中里村、高圓寺村、右七ヶ所在宅被二仰付一、

〔寛永小說〕御鳥見、方々見廻り候處、大名衆下屋敷かこひまばらにて、内見えすき候所有レ之、其内にて雁を捕へ候を見屆、此段柄木民部方へ申達候、民部、不レ入儀を申出候と存候得共、申聞候上は難二

待遇 俸祿

差置、達＝上聞＝候處に、上意に、右は屋敷の內にて候や、左候はゞ被ㇾ下候屋敷の事候間、何分の儀有ㇾ之候とも、屋敷の內はかまい無ㇾ之候、か樣の儀は、承候ても不ㇾ達＝上聞＝候樣に被＝仰出＝上下上意の趣承ㇾ之、難ㇾ有儀に奉ㇾ存候、

〔吏徵 御目見以下〕御鳥見二十二人、見習九人、同並三人、　若年寄支配　八拾俵持扶持高　野扶持五人扶持　傳馬金十八兩　御目見以上百俵高貳人、〇中略　正月六日御目見　見習、十人扶持、傳馬金同斷、　見習並、三人扶持、御手當金拾兩、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共ニ御増高被ㇾ下候間、自今支配之內ゟ、格別之儀も無ㇾ之候はゞ、御足米願申出間敷候、〇中略

八拾俵高　御鳥見

持扶持之儘、野扶持五人扶持取來通、但見習之者は只今迄之通、

〔吏徵別錄 御目見以下〕御鳥見〇中略　寬政四年壬子五月□日、在宅數年出精相勤候者、以來御目見以上被＝仰付＝、持高百俵已下之者、勤候內百俵高ニ御足高可ㇾ被＝成下＝候、尤以來在宅五ヶ年期ニ被ㇾ仰付之、

沿革 任免

〔吏徵別錄 御目見以下〕御鳥見　寬永二十年癸未九月六日、始置＝十員＝、　元祿九年丙子十月六日廢、一說、天和三年癸亥三月廿一日、或云、貞享三年丙寅十月五日、

〔營中御日記 十七〕寬永二十年九月六日、御徒飯田又左衞門、粟津喜兵衞、尾崎太郎兵衞、大岩庄兵衞、大河仁兵衞、山田五郎左衞門、向戶彥左衞門、若林半左衞門、鈴木治兵衞、樋口長左衞門、右御鳥見被＝仰付＝候旨、松平伊豆守傳＝之、

〔甘露叢 六十一〕元祿九年十月七日、御鳥見役 林勘右衞門、若林平三郎、幸田孫介、岡田甚右衞門、海野三右

衞門、右御役御免、山本藤右衞門、佐原十左衞門、支配ニ被二仰付一、只今迄ノ御鳥見場御用、御代官へ渡申筈、

〔教令類纂初集十三〕元祿九丙子年十月七日

覺

御鳥見、向後相止候得共、只今迄之御留場、前々之通、鳥類殺生不レ仕勿論、他所之者ニも爲レ致二殺生一間敷候、病鳥等有レ之節者、其所ニおゐて隨分入レ念養育可レ仕候、度々其支配江不レ及二申達一候、若人之さわりニて痛レ之、或は疵付候體之鳥類有レ之候はゞ、其譯委細書付、其所之御代官幷地頭江可レ申二出之一、隱し置、脇よりあらはるゝにおゐては、可レ爲二曲事一候、以上、

〔吏徵別錄下御目見以下〕御鳥見〇中略　享保元年丙申九月十九日、再置二八員一、

〔大成令三十九〕享保元申年九月

御鳥見之者、先年之通所々相廻り、百姓共江如二先規一諸事可二申付一候間、其段可レ被二相觸一候、以上、

九月

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月、此月御鷹匠、御鳥見役名ヲ廢ス、

〔德川禁令考十七鳥見組頭〕慶應二丙寅年十二月晦日

鳥見役廢止ニ付達書〇按文略

御勘定奉行江

今度御鳥見之儀、御役被二廢止一候に付、在々御拳場、幷七ヶ所御役等、追而相達候迄は、御代官ニ而引受取扱、御取締向等、厚心附候樣可レ被二申渡一候事、

十二月

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿御方〇德川家光世子家綱に附屬せらるゝ輩あり、〇中

略鳥見四人、○中略御方につけらる、

廐方役人

廐方ニハ、召馬預、馬預、馬方、馬乘、馬醫等ノ諸役人アリ、召馬預ハ、初メ御馬別當トモ云ヒ、將軍乘用ノ馬ヲ掌ル職ナリ、若年寄ノ支配トス、三百俵高ニシテ、役料二百俵ヲ給ス、馬預ハ幕府需用ノ馬幷ニ諸大名以下ヘ下賜ノ馬、野馬ノ飼立、及ビ馬具ノ修繕等ニ關スル事ヲモ掌ル、若年寄ノ支配ニ屬シ、二百俵高ニシテ、役扶持十五人扶持ヲ給ス、西丸ニモ亦馬預アリ、

馬方ハ、馬術ニ長ゼルノミナラズ、馬ノ良否ヲ識別シ、其飼養ニ巧ナルモノヲ以テ之ニ補ス、渡邊氏ハ其世職ニシテ、若年寄ノ支配ニ屬シ、百俵五人扶持ヲ給セラル、西丸ニモ亦此職アリ、馬乘ハ、專ラ馬術ニ長ゼルモノヲ以テ之ニ補シ、五十俵三人扶持ヲ給ス、其他馬代奉行アリ、又爪髮役、口之者、馬飼、野馬方、牧士、馬醫等アリ、

召馬預

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一御召御馬預　貳百俵高　八人

〔寶永三年武鑑〕御馬別當馬貴三人ヅヽ、

三百俵　西丸下　諏訪部文九郎

○按ズルニ、延寶、貞享、元祿等ノ武鑑ニモ亦御馬別當トアリ、

〔明良帶錄世職篇〕御召御馬預御役料二百俵若支

諏訪部大助は、代々馬術習熟にて御召方を預る、奧向の掛合等御用多也、當時は村松四郎兵衞は、

馬預

御相手被仰付、御用多く勤め、奥向之乘は、雉子橋外馬場にて稽古あり、奥向之乘へは、御預けの馬等も有り、飼立て善惡をよく辨へ知たる仁へ御預、何れも馬術に明るき仁なり、

〔吏徴附錄 世職〕諏訪部新三郞 御召馬預　若年寄支配　燒火間　高三百俵　御役料二百俵　西丸下御厩内住宅

〔元治元年武鑑〕御召御馬預　燒火　御役料二百俵

三百俵、諏訪部眞次郞、　二百俵、村松靜之助、

〔明良帶錄 世職篇〕御馬預 二百俵高、御役扶持十五人扶持、若支

御馬の事、幷被下の御馬、野駒の飼立、仙臺駒率入方、一切馬の事は、代々職業故、明るくなくてはならぬ也、馬具其外一切のこと、損繕直等の事に關る、

〔泰平年表 二編四〕天保十四年二月廿三日、堀田攝津守殿より西丸御馬預御馬方へ之御書付、御厩御預御召馬之義は、格別心付候趣ニ候得共、御次馬等ニ至り候而は、麁末之取扱之由、其上御馬數見合候而は、一體御馬飼人數も餘程相減置候哉にも相聞候、畢竟其方共、諸事支配向へ打任せ置、一向ニ御厩内見廻等、等閑ニ致置候故と相見候、且又被下御馬は、多分ニ乘料ニ不相成趣相聞、且獻上御馬之義ニ付而は、其方共之内、幷御馬乘共之內、諸家之馬役共より懇意を結び、專如何敷所行ニ及、其上諸向より馬貸借は勿論、買取候義にも携候哉に相聞、乍然其方共、御馬乘共之內、勤向等出精之者も有之、又身持不宜哉之身分不相應奢侈之者も有之哉之義風聞ニ及び、不埒之事ニ候、右之次第、追々相聞候上は難被捨置、逸々御穿鑿之上、嚴重之御沙汰に可被及候處、先此度は寛大之思召を以、不被及其義候段、其段篤と相辨へ、右等之風聞、速ニ相改可申候、若此以後不取締之義、聊も於有之は、無用捨可及吟味候間、兼而相心得可申候、右之趣、支配向夫々へも不洩樣、急度可申渡候、支配之者共、達之趣等閑ニ相心得、未熟之輩も有之候はゞ、早々可申聞候、見遁之義有之

候はゞ、其方共迄も嚴重之御咎可被仰付候、諸事御改革之趣意相貫、取締方緩かせに無之樣、嚴格可被取計候、此段急度可相守候、

〔泰平年表 二編五〕弘化二年三月朔日、御馬預御馬方へ御口達、

御厩向取締之儀ニ付而ハ、去ル寅年、嚴重申渡置候趣も有之候處、今以舊弊相殘、兎角取締方等閑ニ有之、支配向末々之者ニ至候而ハ、心得違之族多く有之候趣、其方共見遁置候哉ニ相聞え、不束之義ニ付、向後諸事先達而申渡し置候趣、無違失相守、舊弊之不宜仕癖、嚴重ニ相改、御取締行屆候樣、精々厚可申合候、若此上如何之儀相聞候はゞ、御糺明之上、嚴重之可被及御沙汰候條、其旨兼而一統相心得、支配向末々迄不洩樣、急度可申渡候、

〔台德院殿御實紀 十一〕慶長十四年、此年桑島孫六郎吉宗、三百石たまひ、馬預となり、駒井とあらたむ、

〔大猷院殿御實紀 五十九〕正保元年十二月二十五日、馬預加藤權左衞門重勝に、百五十俵〇中略新に給はる、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕享保十六年辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高井御役料定、〇中略

貳百石高 御役扶持十五人扶持　御馬預

〔吏徵附錄 世職〕曲木又六郎 御馬預　若年寄支配　姬君樣御用人格　高二百俵十五人扶持　御役扶持十人扶持　布衣　燒火間　神田橋御厩內住宅〇中略

鶴見七左衞門 御馬預　若年寄支配　燒火間　高二百俵　御役扶持十人扶持　久保町御厩內住宅

〔元治元年武鑑〕御馬預　燒火　御役扶持十五人扶持　二百俵高

二百俵十五人扶持、曲木仙之助、　二百俵十人扶持、鶴見七左衛門、　百俵十五人扶持、大武藤助、百俵五人扶持、渡邊半十郎、

馬預並　馬預見習

〔吏徴附錄世職〕大武藤助御馬預並　若年寄支配　燒火間　高貳百俵　御役扶持十人扶持　西丸下御厩内住宅

〔文恭院殿御實紀十五〕寛政五年十一月廿一日、馬預諏訪部八十郎道順が子同じ見習金三郎定胎、つね〴〵精出して勤るにより、新に祿百五十俵を賜ふ、

西丸馬預

〔大猷院殿御實紀六十五〕正保三年十二月四日、厩別當諏訪部源次郎定矩長子彥兵衛定直もめし出され、大納言殿〇德川家光世子家綱に附させらる、

〔吏徴附錄世職〕村松萬藏改四郎兵衛西丸御馬預　若年寄支配　燒火間　高貳百俵　御役扶持十五人扶持清水御門外御厩内住宅　御書物奉行次席

馬方

〔東職紀聞二〕御馬方掌二御馬事一之職也

〔明良帶錄世職篇〕御馬方若支二百俵高、御役扶持十五人扶持、

以上引下げの勤場にて、總て馬術に堪へたる仁出る也、心得有る人は御入人となる、但勤向昇進有り、

〔台德院殿御實紀五十三〕元和六年、此年〇中略木村九郎左衛門吉次五男孫八郎元繼、騎法に通達しければ、馬方になる、

〔大猷院殿御實紀五十二〕寛永十九年閏九月廿八日、奥の馬買にまかる馬方二人暇給ふ、

〔有德院殿御實紀四十二〕享保二十年十月廿日、馬方齋藤三右衛門盛安、安房の國峯岡牧の事、心いれ沙汰し、年々蕃育せるをもて、厩預諏訪部文右衛門定軌が隷下をはなれ、小納戸土岐大學頭朝澄に屬し、牧馬の事あつかふべし、其他は佐々木勘三郎孟成に同じかるべしと命せらる、

〔吏徵附錄世職〕渡邊半十郎御馬方　若年寄支配　燒火間　百俵五人扶持　神田橋御厩內住宅

〔元治元年武鑑〕御馬方

七人扶持見習、都筑鉞之助、　百俵五人扶持、都筑藤右衞門、　十三人扶持見習、都筑藤一郎、　十五人扶持見習、渡邊鏻之丞、　見習、鶴見忠兵衞、　見習、鶴見卯三郎、

西丸馬方

〔吏徵附錄世職〕都筑藤右衞門西丸御馬方　若年寄支配　燒火間　百俵五人扶持　西丸下御厩內住宅　忰藤一郎、西丸御馬方見習、十人扶持、

馬乘

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別幷御役料〇中略

御馬方〇中略　御馬乘十四人

〔吏徵御目見以下〕御馬乘廿七人　五十俵三人扶持高　役上下、御抱場、

〔明良帶錄世職篇〕御馬乘五十俵高三人扶持

御馬方に准じ知るべし、馬術に心得あるもの出る、

〔享保通鑑二〕享保三年七月三日、被仰出左之通、

覺

一御馬乘〇中略

右之輩、向後熨斗目、幷七夕八朔白帷子、一切堅著用仕間敷旨、向々江急度可被相達候、已上、

戌七月

〔寶曆集成綸綸錄二十四〕寬延四未年九月

御勘定奉行江

諏訪部文九郎支配御馬乘

永瀨作右衞門　永瀨重藏　田島孝之進〇中略

爪髮役

右之者共、小普請ニ入、只今迄御足高取來候分は、當年分之御足高被下之、○中略

右之通申渡候間、得其意可被談候、

〔元治元年武鑑〕御馬乘　五十俵三人扶持　西御丸下御廄

織田爲藏、根村藤太郎、根村瀧三郎、長谷川鐵藏、小川太兵衛、若林忠藏、岡部順助、田島彌十郎、所多四郎、所林藏、見習所鉛太郎、見習小川金之助、見習織田直吉、見習長谷川健次郎、見習所八百八、

御馬乘　五十俵三人扶持　雉子橋御廄

川口彌五郎、大友庄左衛門、竹田源五郎、市川七郎兵衛、曲木平藏、岩波小左衛門、見習大友金吾、見習竹田金次郎、見習川口彌三郎、

御馬乘　五十俵三人扶持　新シ橋外御廄

森田長藏、井手兵作、増岡鐵之助、見習森田與作、見習井手新之丞、

御馬乘　五十俵三人扶持　神田橋外御廄

中島源藏、中川源右衛門、所多一郎、見習中島鍬次郎、

〔憲教類典〕二ノ五 御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料○中略

御馬方○中略　御馬爪髮師三人

〔吏徵別錄〕下 御目見以下〕御馬方爪髮役　寛保三年癸亥五月廿一日始置

〔大概順〕御目見以下大概順

二十俵二人扶持　御抱入場所　役上下　御馬爪髮役

〔寶曆集成綸錄〕二十四〕寛延四未年九月

御勘定奉行江

口之者

爪髮役　大友喜左衛門○中略

右之者共、小普請ニ入、只今迄御足高取來候分ハ、當年分之御足高被レ下レ之、○中略

右之通申渡候間、得二其意一可レ被レ談候、

〔官中秘策 十〕諸御役人之事

一御馬口組頭　三拾俵貳人扶持　五人

〔吏徵 下 御目見以下〕御口之者組頭　貳拾五俵二人扶持高、内役切米十俵、役扶持一人扶持、　御譜代場

〔憲教類典 二ノ五 御役〕年號月日無レ之

一遠國御役人組附人別并御役料○中略

御馬方○中略　御口之者六人

〔吏徵別錄 下 御目見以下〕御口之者　享保十年乙巳七月朔日、御口之者十八人、只今迄御中間頭支配之處、向後諏訪部文右衛門○御召馬預支配、

〔吏徵 下 御目見以下〕御口之者　十五俵一人半扶持高　役切米五俵　役扶持半扶持　御譜代場

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共ニ御增高被レ下候間、自今支配之内ゟ、格別之俵も無レ之候はは、御足米願申出間敷候、

右之趣向々江可レ被レ達候、○中略

貳拾俵高一人半扶持　御召御馬口附之者

〔寶曆集成絲綸錄 二十四〕寬延四未年九月

御勘定奉行江

御口之者　飯田吉左衛門　福田宇兵衛○以下二十一人姓名略

右之者共小普請ニ入、只今迄御足高取來候分ハ、當年分之御足高被ㇾ下之、〇中略

右之通申渡候間、得二其意一可ㇾ被ㇾ談候、

〔慶應元年武鑑〕御口組頭　三十俵二人扶持

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

馬飼

一遠國御役人組附人別并御役料〇中略

御馬方〇中略　御馬飼八十一人、御馬藥手代十二人、

〔大概順〕御目見以下大概順

十俵武人扶持小頭十三俵二人扶持より十二俵二人扶持マデ、御抱入場所　白衣勤　御馬飼

〔寶曆集成絲綸錄二十四〕寬延四未年九月

御勘定奉行江

御馬飼
武拾八人

右之者共御暇被ㇾ下、御金三兩宛被ㇾ下之、

右之通申渡候間、得二其意一可ㇾ被ㇾ談候、

野馬奉行

〔明良帶錄世職篇〕野馬奉行三十俵高

是は元其所の名主也、武藝武術功者にて、代官より奉行下役となり、御馬方と成り、御譜代となる、今は奉行となりて、高千石餘持たる鄕士なり、綿貫村に住するゆゑ、是を以て苗字として、綿貫鍋三郎といふ、

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月七日

御目見以下、役儀勤之內、場所定高并役扶持、〇中略

三拾俵

小金御厩
綿貫夏右衞門

〔吏徴附録 世職〕綿貫夏右衛門 總州小金野馬奉行 尾島主殿頭支配　高三拾俵　御救金拾兩躑躅間、上下役、　年月日以來代々役　小金在住　天保十一年庚子十月、御鳥見格勤候内五十俵高、

野馬方

〔吏徴 御目見以下〕野馬方二人

尾島主殿頭支配　五十俵三人扶持　役上下、御抱場、寛政五年癸丑十一月九日始置

野馬方改役一人　尾島主殿頭支配　四十俵三人扶持高　役上下、御抱場、寛政五年癸丑十一月九日始置 ○中略

野馬方書役四人　貳拾俵三人扶持高　御抱場　寛政五年癸丑十一月九日始置

牧士

〔大概順〕御目見以下大概順

御給金八兩四人扶持、格は四兩二人扶持、御役金三兩、　御抱入　白衣勤　房州 牧士觸頭

同四兩二人扶持　御抱入　白衣勤　牧士

馬醫

〔官中秘策 十〕諸御役人之事

一御馬醫　貳百俵高　四人

〔明良帶録 世職篇〕馬醫 若支 二百俵高見習十五人扶持

桑島吉郎右衛門は、代々の職業故、其病の起る處を察して、針灸湯液を與ふ、

〔吏徴附録 世職〕桑島新五右衛門 馬醫　若年寄支配　高貳百俵 ○中略　伜新助、馬醫見習、十五人扶持、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候内、御足高 井 御役料定、○中略

百俵高　馬醫

〔吏徵附錄 世職〕下輿市郎 馬醫心懸　諏訪部新三郎 馬預〇召支配　高五拾俵貳人扶持　武州府中在住　御厩間、上下役、　正德四年甲子正月十八日廢、四谷御厩病馬、輿市郎方江差越、

〔元治元年武鑑〕御馬醫　燒火間　二百俵高

廿人フチ、落合十三郎、　見習、桑島乙之助、　二百俵、桑島新助、

幕府苑地別館役人　傳奏屋敷番　用屋敷役人 併入

幕府ノ苑地別館ハ頗ル多シ、今ハ江戸ニ在ル所ノ吹上、濱、小石川、品川等ノ數所ノ役人ヲ擧ルノミ、

吹上花畑奉行添奉行

〔官中秘策 十〕諸御役人之事

一吹上御花畑奉行 貳百石高、御役料七人扶持、 貳人

一同添奉行 百石高、御役料五人扶持、 貳人

〔明良帶錄 續篇〕吹上奉行 二百俵高 若支　御役料七人扶持　燒

吹上御庭の事一切に關る、御庭向、御花壇築山、泉水植込、苅込、手入の指揮、御茶屋向一切也、添奉行より昇る、是は若年寄御支配也、此場は大切の勤なり、

〔文昭院殿御實紀 九〕正德元年二月十二日、吹上花畑奉行、この後少老の所屬とせられ、おなじ添役改めて添奉行とし、これもおなじく屬せしめらる、

〔有德院殿御實紀 十六〕享保八年四月六日、けふ吹上奉行村松彥四郎友政、とし頃まめやかに職つかふまつるをもて、官量五十俵をたまひ、今より後、壹人して此職奉はるにより、隔日に出て、屬吏等指揮の事怠らず、御遊の時も更にいづるに及ばずと仰下さる、また添奉行二人を新に命せら

るべきによりて、其人をえらびて聞え上べしとなり

〔憲教類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

　御目見以上御役勤候內、御足高井御役料定、○中略

貳百石高御扶持七人扶持　吹上奉行

〔吏徵附錄世職〕河合次郎右衛門吹上奉行　若年寄支配　姬君樣御用人格　高三百石　御役扶持七人扶持　御役金十兩布衣　雉子橋御用屋敷住居

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無ㇾ之

御料理之席書○中略　御臺所三之間○中略　御花畑奉行

〔文恭院殿御實紀三十〕享和元年四月二十三日、濱園の奉行豐島佐兵衛武經、吹上奉行となり、常に精勤を褒せられ、座班賄頭の次、奥の勤は其儘奉はるべしとなり、同添奉行木村又助喜之同じ奉行となり、○下略

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高御役知御役料御役扶持等不ㇾ被ㇾ下、是迄之場所高に不ㇾ拘今度御改正、別紙之通御役金被ㇾ下候旨被ㇾ仰ㇾ出之、

　　御役金被ㇾ下高之覺○中略

一金三百兩　吹上奉行

　高六百石以上之者江は半減

　但御切米高五百俵以上之者江ハ不ㇾ被ㇾ下

　同貳百五拾俵以上之者江ハ半減○中略

右之通御役金月割を以被ㇾ下候、渡方之儀は、三月六月九月十二月、右四度に相渡に而可ㇾ有ㇾ之候、請

取方等之義は、御勘定奉行可ㇾ被ㇾ談候事、

〔明良帶錄續篇〕添奉行若支百石高、御役料五人扶持、燒

御役扶持被ㇾ下、吹上向御庭之事を司る、

〔大概順〕御目見以上大概順

若百俵高御役扶持五人扶持、御役金拾五兩、　吹上添奉行

〔吏徵附錄世職〕金子章助吹上添奉行　若年寄支配　燒火間　百俵高　御役扶持五人扶持　御役金拾五兩

庭之者支配

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕吹上添奉行　享保十八年癸丑三月廿八日、御鳥見組頭次席、是迄は鳥見上席、　元文元年丙辰十月十九日、百俵高、

〔享保集成絲綸錄一〕延享元子年六月

當時殿中席書中略　燒火之間中略　吹上添奉行

〔有德院殿御實紀十六〕享保八年五月三日、けふ新に吹上の添奉行を置る、

〔憲敎類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

　御目見以上御役勤候內、御足高幷御役料定、中略

　百俵高持扶持之儀、御役扶持拾五人扶持、元文五申三月廿三日、伺之上極ル、　吹上添奉行

〔有德院殿御實紀三十九〕享保十九年二月六日、吹上添奉行に官俸三口を給はる、

〔明良帶錄續篇〕御庭之者支配百俵高、御役扶持七人扶持、燒若支

若年寄支配にて、吹上御庭之者を支配す、

筆頭役
筆頭役並

〔吏徵下御目見以下〕吹上筆頭役二人　奉行支配　五拾俵持扶持高　役金十三兩　燒火間、上下役、

町屋敷拜領沽券金五十兩　正德三年癸巳五月二日始置

〔明良帶錄外篇〕吹上奉行支配 筆頭役 役人目付 持高役フチ三人扶持

右兩役は元御庭方作り、都て植木作り、山作り等の作り物心得のもの此場へ出る、御鷹方、綾殿等出役筋、御鷹方などへ昇る、御用多く骨折の場なり、

〔大概順〕御目見以下大概順

三拾俵二人扶持　役金之格三兩　二半場　役上下　白衣勤　吹上奉行支配　筆頭役

持高　役金同斷　同　同○並

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料○中略

吹上御花畑奉行○中略　御花畑筆頭貳人、同役人目付八人、御座敷方十五人、御花壇方四人、書役貳人、下役十三人、入口番人廿八人、御掃除之者六十八人、御鷹御普請方四十一人、植溜預り貳人、御藥園方貳人、

〔享保通鑑二〕享保三年七月三日、被仰出左之通、

覺

一吹上御花畑役所筆頭○中略

右之輩、向後熨斗目、并七夕八朔白帷子、一切堅著用仕間敷旨、向々江急度可被相達候、已上、

戌七月

〔吏徴別錄御目見以下〕吹上筆頭役　正德三年癸巳五月二日、始置一員、五十俵高、

〔吏徴御目見以下〕吹上筆頭役並一人　奉行支配　持高　役金拾三兩　燒火間、上下役、

〔吏徴別錄御目見以下〕吹上筆頭役○中略　天明三年癸卯五月□日、始置筆頭役並一員、金澤九十郎、元役人目付

目付

〔憲教類典御役二ノ五〕年號月日無之
一遠國御役人組附人別并御役料略〇中
吹上御花畑奉行略〇中　同役人目付八人
〔吏徵御目見以下〕吹上役人目付八人　持高　役扶持三人扶持　貳人役金拾三兩、六人役銀拾貳枚、役上下　御抱場
〔大概順〕御目見以下大概順
持高扶持　役扶持三人扶持格三兩ゟ銀二枚迄、御四代之内被召抱候　御抱入場所、羽織袴、白衣勤、吹上奉行支配役人目付

書役

〔憲教類典御役二ノ五〕年號月日無之
一遠國御役人組附人別并御役料略〇中
吹上御花畑奉行略〇中　書役貳人
〔吏徵御目見以下〕吹上書役四人　持高　役金拾壹兩　御抱場
〔大概順〕御目見以下大概順
持高扶持　役金格一兩　御抱入場所、羽織袴、白衣勤、　吹上書役

書役下役

〔大概順〕御目見以下大概順
持高扶持　御抱入場所、羽織袴、白衣勤、　吹上書役下役
〔憲教類典御役二ノ五〕年號月日無之
一遠國御役人組附人別并御役料略〇中
吹上御花畑奉行略〇中　書役貳人、下役十三人、
〔吏徵御目見以下〕吹上下役三十四人　持高　見習三人扶持　御抱場

座敷方

〔憲教類典 御役二ノ五〕年號月日無レ之

一遠國御役人組附人別并御役料 中略○

吹上御花畑奉行 中略○　御座敷方十五人

〔吏徵 御目見以下〕吹上御座敷方二十人　持高　世話役口人、役扶持三人扶持、役金拾一兩、　見習

三人扶持　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

持高扶持 世話役ハ役扶持三人扶持役金一兩　御抱入場所、羽織袴、白衣勤、　吹上御座敷方

鳥方

〔吏徵 御目見以下〕吹上御鳥方六人　持高　世話役口人、役扶持三人扶持、　御救金五兩　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

持高扶持　役扶持三人扶持、御救金五兩、　御抱入場所、羽織袴、白衣勤、　吹上御鳥方

〔享保通鑑 二〕享保三年七月三日、被二仰出一左之通、

覺 中略○

一吹上御鳥方組頭

一同世話役

一同御鳥方上役

右之輩、向後熨斗目幷七夕八朔白帷子、一切堅著用仕間敷旨、向々江急度可レ被二相達一候、巳上、

戌七月

庭入口番

〔憲教類典 御役二ノ五〕年號月日無レ之

一遠國御役人組附人別并御役料 中略○

吹上御花畑奉行 中略○　入口番人二十八人

藥園方

〔吏徵御目見以下〕吹上御庭入口番人三十七人　持高　組頭口人、役扶持三人扶持、　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

持高（吹上奉行支配）役扶持三人扶持　御抱入、羽織格、　御庭入口番人

〔憲教類典御役二ノ五〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料（中略）

吹上御花畑奉行（中略）　御藥園方貳人

〔吏徵御目見以下〕吹上御藥園方一人　持高　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

持高（吹上奉行支配）役扶持三人扶持　御抱入、白衣、　吹上　御藥園方

花壇方

〔憲教類典御役二ノ五〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料（中略）

吹上御花畑奉行（中略）　御花壇方四人

〔吏徵御目見以下〕吹上御花段方七人　持高　役扶持三人扶持　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

持高扶持　役扶持三人扶持　御譜代席、羽織袴、白衣勤、　吹山奉行支配　御花段方

苗木方

〔吏徵御目見以下〕吹上苗木方三人　持高　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

持高扶持　御抱入場所、羽織袴、白衣勤、　吹上苗木方

織殿之者

〔吏徵御目見以下〕吹上織殿之者十人　持高　役扶持三人扶持　役金拾五兩一人、三兩一人、　見習二人扶持　御抱場

大工役之者

〔大概順〕御目見以下大概順

持高扶持　　御抱入場所、羽織袴、白衣勤、吹上織殿之方

〔吏徴下御目見以下〕吹上大工役之者六人　持高　道具代金五兩　見習三人扶持　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

吹上奉行支配持高　道具代金壹ヶ年五兩、壹人ハ役扶持三人扶持、　御抱入、羽織格、大工役之者

普請方

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料○中略

吹上御花畑奉行○中略　御鷹御普請方四十一人

〔吏徴下御目見以下〕吹上御普請方之者三十七人　持高　役金拾貳兩　組頭役扶持三人扶持、役銀拾三枚、町屋敷拜領沽券金二十五兩　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

吹上奉行支配持高　役金拾貳兩　　御抱入、羽織格、　吹上御普請方同心

掃除之者

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料○中略

吹上御花畑奉行○中略　御掃除之者六十八人

〔吏徴下御目見以下〕吹上御掃除之者四十七人　持高　役金拾壹兩　組頭□人、役扶持三人扶持、役銀拾壹枚、見習二人扶持　町屋敷拜領沽券金二十五兩　御抱場

山里庭之者

〔吏徴下御目見以下〕山里御庭之者　持高　役扶持一人扶持　肝煎役扶持一人半扶持　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

持高持扶持　　御抱入、白衣、山里御庭方

濱殿奉行

〔明良帶錄外篇〕濱御殿奉行 諸下役御目付支配

御目付支配と若年寄支配と相交る、組居付勤の者他より役替にて來れば拜領屋敷なし、不勤仁にても、無勤にても、願ゆき御長屋拜領有り、濱向手入庭作り刈込山作等心得有るべし、

〔明良帶錄續篇〕濱御殿奉行 焼火間 二百俵高、御手當銀七枚、若年寄支配

吹上同樣にて、濱御庭向、其外之事を世話す、諸下役は御目付支配也、近比豐島左兵衛濱御庭向等手入骨折相勤に付御褒美有り、

〔吏徴附錄世職〕木村又助 濱御殿奉行　若年寄支配　高二百石　御役料　焼火間　御殿地住居

布衣　倅勤助兩番格　濱御殿奉行見習、百俵五人扶持、　天保十三年壬辰三月十一日

〔憲教類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高井御役料定、○中略

一百五拾俵高 取來俵御扶持方共　濱御殿奉行

〔有德院殿御實紀四十一〕享保二十年四月十五日、濱の御庭を西城少老のあづかりとせられしにより、濱奉行をも西城少老の隷下に屬すべしと命せらる、

添奉行

〔吏徴附錄廢職〕濱御殿添奉行一人　若年寄支配　百俵五人扶持高　寬政八年丙辰四月十一日、百俵五人扶持高、同十年戊午三月朔日、吹上添奉行次席、

吟味役

〔大概順〕御目見以下大概順

御目付 百俵持扶持　御譜代席、上下役、 御徒目附格　濱吟味役

〔寬政四年武鑑〕濱御殿奉行○中略

同吟味役 二十俵五人扶持　近藤八十郎 二十俵五人扶持　直井甚十郎

世話役

〔吏徴御目見以下〕濱御庭世話役三人　持高　御手當金貳兩　御抱場

濱殿番

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之
一遠國御役人組、附人別并御役料、〇中略
西丸若年寄支配
濱御殿奉行　御殿番人十五人
〔吏徵御目見以下〕濱御殿番二十六人内筆頭役三人〇中略　持高　御手當金壹兩壹分　御抱場

掃除之者

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之
一遠國御役人組、附人別并御役料、〇中略
西丸若年寄支配
濱御殿奉行　御掃除之者十人
〔吏徵御目見以下〕濱御庭御掃除之者十九人内物書役一人　持高　加扶持一人扶持　勤金三兩　御抱場　假抱入給金三兩二人扶持
〔大概順〕御目見以下大概順
持高扶持　外加扶持一人扶持　御手當金三分　御抱入場所、白衣勤、　濱御掃除之者

書役

〔吏徵御目見以下〕濱御殿物書役　持高　加扶持一人扶持　勤金三分　假抱入給金三兩二人扶持　御抱場

小石川殿番

〔常憲院殿御實紀二十三〕元祿四年二月三日、駒井半右衛門親澄は小石川御殿番となり、〇下略
〔寶永五年武鑑〕小石川御殿番御役料百俵ヅヽ
五百石、戸田權九郎、　松崎善兵衛　三百俵、柴田助右衛門、　五百石、美濃部權之助、　三百俵、中島助六郎、　四百石、武島七九郎、　榊原次郎右衛門
〔吏徵附錄廢職〕小石川御殿奉行　若年寄支配　正德四年甲午九月十三日廢此時御用屋敷止

添番

〔常憲院殿御實紀三十六〕元祿十年九月三日、小石川離第の坊主組頭人見久伴某、石島清恩某、共に束髮命せられ、同所添番を仰付らる、

神田殿番
〔常憲院殿御實紀二十三〕元祿四年二月三日、佐藤三左衛門信勝は神田御殿番となり、〇下略

品川殿奉行
〔甘露叢六十〕元祿九年八月二十九日、神田御殿番被仰付、小普請方ヨリ元竹村九郎右衛門、
〔吏徵附錄慶賢〕品川御殿奉行　若年寄支配　元祿十五年壬午八月十四日廢
〔憲廟實錄二十七〕元祿十五年八月十四日、品川御殿奉行を罷む、御殿燒亡の後、再建に不及故なり、

麻布殿番
〔寶永二年武鑑〕麻布御殿番
二百俵、酒井彥大夫、　大塚庄左衛門　愛知二郎兵衛

櫻田殿預
〔常憲院殿御實紀五十一〕寶永二年閏四月廿一日、西城桐間番山岡喜兵衛景廣、加藤傳左衛門景信、櫻田邸の奉行とせられ、〇下略
〔正德四年武鑑〕櫻田御殿預り同心廿二人
三百俵、中島七右衛門、　三百俵、加藤傳左衛門、　三百俵、武島七九郎、

休息庭之者支配
〔吏徵上御目見以上〕御休息御庭之者支配二人　若年寄支配　燒火間　百俵高　御役扶持五人扶持、〇中略　櫻田新橋御用屋敷住居、
〔享保集成絲綸錄一〕享保元子年六月
若年寄支配〇中略　御休息御庭之者支配
〔有德院殿御實紀二〕享保元年八月廿三日、紀藩の賤吏藪田助八數直めし出されて、奧庭の役となる、これあらたに置かれし職なり、此時は徒目付の座次と定められしが、この助八器局あるものにて、つかふまつることども、多く御むねにかなひ、後に俸米あまた加へられ、見參ゆるされ、廣敷用達の座次となる、今の休息御庭の者の支配といふ職は、こゝに濫觴せり、
〔享保集成絲綸錄一〕延享元子年六月
當時殿中席書〇中略　燒火之間〇中略　藪田助右衛門

組頭

〔有德院殿御實紀 三十三〕享保十六年二月二十一日、鷹匠見習藪田助五郎健武父助八郎長矩が原職を襲て御庭のあづかりとなる、此時より庭役は林奉行の座並たるべしと定めらる、

〔吏徵 下 御目見以下〕御休息御庭之者組頭　持高　役扶持三人扶持　御抱場

〔憲教類典 二ノ五 御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之内、場所定高并役扶持、〇中略

藪田助右衛門支配
御休息御庭之者與頭

貳拾俵高壹人半扶持 新規役扶持三人扶持

休息庭之者

〔吏徵 下 御目見以下〕御休息御庭之者　持高　役金一兩

〔吏徵別錄 下 御目見以下〕御休息御庭之者　享保元年丙辰八月始置〇中略　文化十一年甲戌七月、向後黑鍬御掃除抱入筋之者ハ、御譜代申付、入人ニ可申渡候、尤十ケ年已下ニ而、勤差免候節ハ、如元御抱之取扱ニ可仕旨、

〔大概順〕御目見以下大概順

拾二俵壹人半扶持　組頭ハ三人扶持、世話役ハ壹人扶持、　御抱入、白衣、御休息御庭方

〇

傳奏屋敷番

〔柳營秘鑑 四〕諸役人員數并組支配

一傳奏屋敷預三人 同心六人宛

〔吏徵附錄 下 職〕傳奏屋敷番　御目付支配 小間遣頭次席 定員二人

〔諸役起請文前書〕櫻田御用屋鋪御門番人

一今度櫻田御用屋敷御門番、御抱入被仰付相勤候ニ付、彌奉重公儀、御爲第一奉存、聊以御後闇儀無之、御番隨分念入可相勤候、諸傍輩者不及申、不依誰人奉對御爲、以惡心申合、一味仕間敷候事、

〇中略

用屋敷役人

一於御番所晝夜無油斷、萬端念入作法能相勤可申候、御用ニ付、組頭申渡候儀無違背相番之者と中惡敷不仕、諸事申合無懈怠急度相勤可申候事、

附、あやしきもの、御門出入候者早速御目付中迄可申上候事、

一夜廻り之節、御長屋住宅之面々、火之元あやしき義及見候者相斷、其以後御目付中迄可申上候事、

一御番所に而、出入之面々ニがさつがましき儀仕間敷事、

右之條々、雖爲一事於致違犯者、○下文略

〔憲教類典 二ノ五 御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之内、場所定高并役扶持、○中略

三拾俵二人扶持　傳奏屋敷番

〔享保集成絲綸錄 一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之、所謂、○中略

一御臺所通廊下、右ゟ末座敷居ヲ隔テ、○中略　傳奏屋敷番

〔憲教類典 二ノ五 御役〕年號月日無之

傳奏屋敷番　同。心。十人

〔吏徵附錄 廢職〕傳奏屋敷番○中略　同心十人 拾五俵持扶持　三拾俵二人扶持高

〔吏徵附錄 廢職〕和。田。倉。小。川。町。御。用。屋。敷。奉。行。　若年寄支配　正德四年甲午九月十三日廢 同上

〔文露叢 四十三〕正德四年九月十三日、小川町和田倉御用屋敷相止ニ付、御免小普請入渡邊七郎兵衞、渥美太郎八、御書院番へ皆川宇右衞門、松崎甚之丞、

〔吏徵附錄 廢職〕牛。込。逢。坂。屋。敷。預。　若年寄支配 御目付 預支配

〔寶永二年武鑑〕逢坂御用屋敷番　安藤太郎右衛門　山田八左衛門

〔常憲院殿御實紀五十一〕寶永二年閏四月廿一日、櫻田邸番鳥居金左衛門包重、金子八大夫正房、馬。場。先。邸。奉。行。を仰付らる

〔吏徵御目見以下〕櫻。田。御。用。屋。敷。御掃除之者　御目付支配　十俵一人扶持高　御抱場

〔吏徵御目見以下〕櫻田御用屋敷御門番人　御目付支配　十五俵二人扶持高　御抱場

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

櫻田御用屋敷　同心十八人、御掃除之者三人、

田。安。御。用。屋。敷。　番人拾貳人、御掃除之者三人、定番四人、〇中略

西。丸。下。御。用。屋。敷。〔濱御殿之内江引ル〕　門番人六人

高。倉。屋。敷。門番六人、大久保信濃守拜以後相止、

中間　小人　黑鍬之者　掃除之者　駕籠之者　六尺　挑燈奉行　下男　仕丁　小間遣　小遣之者　伊賀之者　併入

中間ハ其人員五百四十餘人乃至五百六十餘人アリ、之ヲ上中下ノ三組ニ分チテ、組毎ニ組頭三人若シクハ四人ヲ置ケリ、中間ノ外ニ、旗指之者、持鑓之者、馬髮卷役、扶持賄、供組頭、中間目付、中間押等二百六十餘人アリ、西丸、二丸ニモ亦中間アリ、

小人ハ其人員四百五十人乃至五百餘人アリテ、之ヲ三組ニ分チ、組毎ニ組頭二人アリ、小人ノ外ニ、小馬驗役之者、長刀役之者、小道具役之者、扶持賄、使組頭、草履取、小人目付等二百餘人アリ、

本篇ニハ黑鍬之者、掃除之者、駕籠之者、六尺、挑燈奉行下男、仕丁、小間遣、小遣之者、伊賀之者等

ヲモ類ヲ以テ併載セリ、

名稱

〔玉露叢十五〕寛文二年十一月七日、被仰出趣、〇中略右之所々御門ノ口々ニテ、乘馬乘掛馬ノ外、小者、仲間、百姓、馬方等、馬ニ乘通リ候ハヾ、御番之輩相斷、下馬致サセ、其上此御門ノ內ニテ馬ニ不可乘ノ旨可申含者也、

〔貞丈雜記役名四〕一中間(チウゲン)と云ハ、侍の下、小者の上也、侍と小者の間なる故、中間と云也、公方樣にハ御中間とてハなかりし由、條々聞書に見えたり、大名其外にハ中間ありし也、盛衰記十三ノ卷ニ、黑丸ト云御中間トアリ、是ハ高倉ノ宮ノ中間チ云、

中間頭

〔吏徵御目見以下下〕御中間頭三人　若年寄支配　八十俵持扶持高　燒火間、上下役、

〔大概順〕御目見以下大概順

八十俵持扶持　御譜代席、上下格、　御中間頭

〔憲教類典三ノ二十六〕年號月日無之

御料理之席書〇中略　御臺所四之間〇中略　御中間頭

〔享保集成絲綸錄一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之、所謂、〇中略

一御臺所通廊下、右ゟ末座敷居を隔て、　御中間頭

〔憲教類典三ノ二十六〕年號月日無之

平日、御役所席、泊御番、御夜詰之內席、

御納戸廊下敷居外　御中間頭

〔台德院殿御實紀五十六〕元和八年六月十八日、中間頭畔柳助九郞、武重七十一歲にて死す、其子五郞大夫英家つぎ、父の原職をつとめしめらる、

西丸中間頭

〔諸役起請文前書〕御中間頭

一御中間頭被仰付候上者、御爲第一奉存、御後闇義聊以仕間敷候、萬事重公儀御奉公油斷仕間敷事、〇中略

右之條々、雖爲一事於致違犯者、〇罰文略

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿御方に附屬せらる、輩あり、〇中略中間頭一人皆御方につけらる、

中間目付

〔柳營秘鑑四〕諸御番所幷末々迄御切米並高之大概

一御中間目付（御中間も同斷）拾五俵壹人扶持

〔吏徵御目見以下〕御中間目付五十人　十五俵一人扶持高　御譜代場

〔大概順〕御目見以下大概順

十五俵一人半扶持　御譜代席、羽織袴、　御中間目付

中間

〔憲敎類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組、附人別幷御役料、〇中略

御中間頭　御中間五百六十六人

〔吏徵御目見以下〕御中間五百五十人　十五俵一人扶持　御旗指之者役米十五俵　御持鑓之者役米五俵半扶持　御馬髮卷役役米五俵　御譜代場

〔吏徵別錄御目見以下〕御中間　三組合五百四十五人、一組二百四十六人、（內組頭四人稱大組）一組百六十八人、（內組頭三人稱中組）一組百三十一人、（內組頭三人稱小組）　御旗指之者五十五人、御持鑓之者十八人、御馬髮卷役□人、扶持賄十人、御供組頭五人、御中間目付五十三人、西丸御中間目付六人、御中間押十三人、御使之者十九人、御長屋門番十八人、御臺所前新土戶番八人、大奧埓仕切土戶番六人、大奧御長屋門番九

人、大奥裏〆戸番九人、御太鼓櫓下土戸番六人、西丸御長屋門番御本丸打込也西丸御納戸口番六人、奥表仕切戸番六人、二丸御長屋門番六人、二丸御臺所脇御門番六人、西丸下御用屋敷門番六人、御厩定番三人、寶暦十年庚辰三月始て忰共之内より二十七人抱入になる、是新規抱と稱するもの、初なり、

〔明良帶錄新益篇〕御廣敷御門番

御中間より勤む三番にて持、遠御成の節御中間より出役、平日は伊賀之者と御中間と持番の頭立合、七時過口戸〆、上に御定番張付之、

〔大概順〕御目見以下大概順

十五俵一人扶持　役切米不同　御普代席、羽織袴、　御中間

〔寶暦集成絲綸錄十六〕延享二丑年二月

八講御執行中

御中間一人宛

右鐘打候役入候間、白丁著相勤候樣可被申渡候、名前書付可被差出候、尤八講掛り之面々江可被談候、

〔享保集成絲綸錄三十〕元祿十二卯年十一月

一今度御吟味之上、御譜代小給之輩、御救之御金被下之旨、頭々支配々々江相模守傳達之、

覺○中略

先日之殘　御中間

金三兩宛

〔憲敎類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書○中略　御臺所四之間橫手○中略　御中間

〔憲教類典〕二ノ十四御抱席 寶暦五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付

前々御譜代と相定取扱來候場所、左之通御座候、○中略

御中間

〔天保集成絲綸錄〕百六 天明八申年三月

番組人宿共

近來、諸家徒士、足輕、中間、陸尺等、江戸抱之者、別而我さつニ有之趣相聞、殊ニ知行者抔召連候面々有之候得共、申合口論等いたし候而、供先差支候樣ニいたし成、甚以不埒之至ニ候、江戸抱之者共、屋敷役人申付を不相用、不法之儀いたし候者有之ば、輕キ分は夫々仕置申付、重キ儀ニ候而も、不法之趣意書面ニ認、月番之番所江其主人ゟ差出候筈ニ候、○中略

申三月十六日

〔大概順〕明和二酉年七月五日、松平攝津守殿、御目付曲淵勝治郎松平庄九郎へ御直御渡、

御目付江

御中間、御小人、黑鍬之者、右場所へ代々相勤來候者、病氣難相勤者は、支配無役申付候處、向後其外場所小普請ゟ、御入人筋之者ニ而も、病氣ニ而難相勤者ハ、御目付支配可申付候、且又御中間、御小人、黑鍬、御掃除之者ゟ、他場所へ傳候而も、其場所一役ニ而、病氣難相勤者ハ、御目付支配無役可申付候、

御目付支配無役之者取扱之儀、御中間、御小人、黑鍬、御掃除之者、其頭ニ取扱候樣可被致候、

右之通可被心得候、

七月　御中間、御小人、黑鍬之者、御掃除之者、

小人

○〔吹塵錄三十徳川氏〕天和三年二月廿三日

覺

小もの、中間、布もめん之外、絹布類不可着之、頭巾、帯、ゑり、袖へり等ニも用申間敷候、其外印籠、きんちやく、其身不相應之物、身に付申間敷候、もし違背之族ハ、見合次第可召捕之旨被仰出候間、面々下々急度可被申付事、

亥二月廿三日

〔伊勢貞助雜記〕御小者を人躰により、御小人とも申哉、御小人共可申、平人も其心得有べし、同御下部を御下男と申も同前、公家方にては、下男を仕丁と可申、同笠持をば、白丁と可申候、其品とも在之事也、

〔貞丈雜記役名四〕一小者(コモノ)と云ハ中間の下なり、公方樣御成時、御小者ハ六人つれられし由、御成次第古實ニ見たり、御草履を持、又御沓をも進上申ス也、走衆故實、貞助返答、條々聞書等にも、公方御小者ハ、六人召連タル由ミヘたり、

〔武家名目抄稱呼十下〕小者又稱小人

御小人頭

〔官中秘策十〕

一御小人頭　八拾俵高　三人

〔享保集成絲綸錄三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、續兼候小給之者共ニ、御増高被下候間、自今支配之内ゟ、格別之儀も無之候はゞ、御足米願申出間敷候、

右之趣、向々江可被達候、○中略

八拾俵高持扶持之儀

〔享保集成絲綸錄〕〔一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之所、謂、○中略

一御臺所通廊下、右ゟ末座敷居ヲ隔テ、○中略　御小人頭

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

平日御役所席、泊御番、御夜詰之內席、○中略

御納戶廊下敷居外、○中略　御小人頭

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書○中略　御臺所四之間○中略　御小人頭

〔駿府政事錄〕〔入〕慶長二十年十二月九日、御小人頭稻垣權左衛門誅戮、御鷹行當御鷹損故也、

○按ズルニ、是ハ小人頭ノ職名ノ始テ見エタルヲ以テ、此ニ揭載セリ、

〔明良帶錄新金集〕御小人

諸女中出入之節、輿添奧御役人出入之供有り、口番御使等是を勤む、

〔吏徵別錄御目見以下〕御小人　三組合五百八人、一組百七十四人、一組百七十一人、一組百六十三人、每組頭二人組　小馬驗役之者五人、龜井坊一人、御長刀役之者七人、御小道具役二十八人、扶持賄十人、御使組頭六人、御草履取十人、御小人目付四十七人、西丸御使組頭三人、西丸御小人目付六人、御口傘持一人、御小人押十三人、御玄關番二十二人、西丸御玄關番十四人、中之口番二十六人、西丸中之口番十一人、　寶曆十年庚辰三月、初て忰共之內より十二人抱入になり、是新規抱の初なり、

〔天明集成絲綸錄〕〔二十三〕寶曆十辰年三月

御目付江

黑鍬之者○中略　御小人役出、或ハ小普請入等いたし候者之明跡小普請ゟ御入人可申付旨、延享四

卯年相達候得共、當時小普請之内、相應之者無レ之、右之場所追々明キ、多人數不足いたし候趣ニ候間、右明キ跡之内江、此度左之通抱入可レ被レ致候、〇中略

御小人　拾貳人

右之通、當時相勤候忰共之通、遂二吟味一可レ被二抱入一候、此以後も明キ有レ之節者、其節々可レ被二相伺一候、

〔吏徴〕下御目見以下 御小人四百五十八人　十五俵一人扶持高　御小馬驗役之者役米三十五俵　繼井坊二十五俵役米十五俵　御長刀役之者役米十五俵　御小道具役米五俵半扶持　御譜代場年月日始置

〔憲教類典〕二ノ十四御抱席 延享四丁卯年三月廿三日

一御中間御小人等之類、御譜代場へ御抱入ニ相成候ハヾ病氣ニ而勤難レ成時、只今迄一代ハ小普請入來候得共、御譜代場ニ而も、御抱入ハ御暇指遣候、其跡ハ御入ニ成候事、〇中略

三月

〔憲教類典〕二ノ十四御抱席 寶暦五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付

前々御譜代と相定取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

御小人

〔憲教類典〕三ノ二十六殿中 年號月日無レ之

御料理之席書〇中略　御臺所四之間横手〇中略　御小人

〔享保通鑑〕二 享保三年七月三日、被二仰出一左之通、

覺

一御小人〇中略

右之趣向後、熨斗目井七夕、八朔、白帷子、一切堅著用仕間敷旨、向々江急度可被相達候、已上、

戌七月

〔大猷院殿御實紀（七十八）〕慶安三年九月三日、大納言殿御方に附屬せらる、輩あり、（中略）小人頭二人、皆御方に付らる、

〔吏徴別錄（下御目見以下）〕二丸御小人　享保二十年乙卯七月十三日、定二十員、　寶曆三年癸酉正月日、定十五員、

〔吏徴（下御目見以下）〕二丸御小人十五人　十五俵持扶持高　御譜代場

〔大概順〕御目見以下大概順

拾五俵壹人扶持　譜代、羽織袴役、　二丸御小人

〔官中秘策（十）〕諸御役人之事

一黒鍬頭　百俵高　三人

〔見聞雜錄（武家名目抄職名附錄二十三所引）〕武田上杉之弓矢は、古今無類と□□する事、軍果て、猶揭焉（イチジルキ）は、雙方より郡村奉行、矢、あらし子を支配する小人頭、道造のクロ鍬之頭、組を引連、夜中篝を燒て、互に行を立合て尸骸を吟味し、其中にて不死果類有れば、急度一番に引取、戸板丁楯に乘て人を附てかき送り、其外の死骸もそれ〲に越後内は越後領の百姓役にて馬に付被運取、武田領は別して信濃の領內故、人馬一早く出て引分引取事、古今無類と、戰場之法、末代迄も中々又有間敷と、國郡に賞美す、

〔賤嶽合戰記（武家名目抄職名附錄二十三所引）〕比日四月廿一日（天正十一年）辰の下剋の事なるに、一天曇りなく照にてつたる空なるに、手負ども疵を日に照付られてくるしめり、秀吉公御覽あり、いたはしく思召、其苦をすくひ玉はんと御思案半なるに、むかふの山を御覽□□□の面々笠ひきかつき、男

女老少雲霞の如く見物す、黑鍬の者どもに被仰付、向の山へのぼり、見物の面々に、汝等かつきゐたる笠一かいづゝくれ候へ、褒美を可被下と被仰付、みのかさを乞取、道々の手負共かりおおひきせさせ玉ふ、

〔御觸帳九〕四月〇天保十三年

一庄屋宿、黑鍬宿等之儀ハ、玉屋町宿屋を初、町々庄屋宿懸所、前參詣人之宿、黑鍬米舂之者宿、船宿等、都て先年より願濟之譯を以、他國者、又は御領分者之宿いたし候もの共之事にて、此分軒數は、是迄之通之筈に候、

庄屋宿黑鍬宿株〇中略

〔明良帶錄外篇〕黑鍬頭百俵高扶持御臺所前廊下目支

組頭黑鍬向より繰上げなし、五役の内より繰上となる、都て高のものはなし、御目付支配五役は、二半場躑躅之間役上下へ昇る御定高有り、此場は黑鍬の支配なり、

〔諸役起請文前書〕黑鍬頭

一今度黑鍬頭被仰付候、彌重公儀、聊以御後闇義不仕、萬事精入相勤可申候事、〇中略

一御掃除等之義、隨分入念可申付候、組中之義、少も無依怙贔屓、正路ニ沙汰可仕候、組中爲致誓詞、諸事嚴密ニ相勤候樣可申付候、

附、以御威光、私ニ奢不仕、非分申掛間敷事、

一組中出入有之節ハ、相役人遂相談、無依怙贔屓、正路ニ可申付候、奉對御爲、相役人と中惡敷不仕、相談之節、存寄之通申出、私之申分不立、宜方ニ落著可仕事、

右之條々、雖爲一事於致違犯者、梵天帝釋四大天王、總日本六十餘州大小神祇、殊伊豆箱根兩所權現、三島大明神、八幡大菩薩、天滿大自在天神、部類眷屬、神罰冥罰、各可罷蒙者也、仍起請如件、

〔吏徵 御目見以下〕黑鍬之者頭三人　若年寄支配　百俵持扶持　燒火間、上下役、　寬永十八年辛巳十二月廿九日始置

〔延寶八年江戶鑑〕御黑鍬之頭

百俵、同心百人　山音七兵衞殿　百五十俵、同心五十人、　大崎加兵衞殿　百五十俵、同心五十人、　牛窪權右衞門殿

〔享保集成絲綸錄 一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之所謂、○中略

一御臺所通廊下○中略　黑鍬之頭

〔憲教類典 三ノ二十六〕年號月日無之

平日御役所席、泊御番御夜詰之內席、○中略

御納戶廊下敷居內○中略　黑鍬頭

〔玉露叢 十六〕寬文三年四月十四日ニ江府ヲ出御有テ、同十六日ニ日光ヘ御著、○中略。

黑鍬頭　土岐三郞兵衞 同心五十人、御矢箱御簞笥持、

〔嚴有院殿御實紀 四十四〕寬文十二年閏六月十七日、西城はこれより先、一月に三度づゝ、酒掃せしが、この後は五度づゝ、酒掃つかふまつるべしと、西城の留守居目付、○中略黑鍬の頭に命せらる、

〔享保集成絲綸錄 三十〕元祿十二卯年十一月

一今度御吟味之上、御譜代小給之輩、御救之御金被下之旨、頭々支配々々江相模守 ○老中土屋政直 傳達之、

覺○中略

金三兩宛　先日之殘 黑鍬之組頭

〔憲教類典 二ノ五 御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高井役扶持〇中略

黑鍬之者頭

百俵高持扶持

〔吏徵御目見以下〕黑鍬之者五百十人舊黑鍬同心　十二俵一人扶持高　御譜代場　年月日始置

〔吏徵別錄御目見以下〕黑鍬之者　三組合四百七十人、一組百五十七人、兩組各百五十六人、毎組之頭六人組組頭世話役ニ給、惣數之內ニ而三十六俵三人扶持、　天和元年辛酉、黑鍬同心二百人、　享保十六年辛亥五月、四百三十人、　寶曆十年庚辰三月、初而忰共之內より十五人抱入、是を新規抱といふ、

〔拾遺柳營秘鑑三〕一西丸大手へ、黑鍬之者、出火之節出候筈、享保八卯九月十八日より相極候、

〔明良帶錄新全篇〕黑鍬之者　懸り〳〵にて奥廻り

〔幕朝故事談〕御作事奉行は、御曲輪外御要害の場所、御出陣之節は、城之水を灌ぎ堀を埋る類皆職掌之事也、其人足は黑鍬是也、黑鍬は名字もなきもの也、御賄新組も是也、本は脇指計りのはづなるべし、然れ共今は刀を差也、昔、黑鍬、大目付衆へ僻宜のいたし方不宜候とて、若黨を遣、誰組の由相尋候處、苗字をなのり候故、御暇になりけり、今黑鍬の御奉公は總ての荷物(かつぎ)なり、御狀にても箱に入候得ば、御小人は不持事なり、包狀(つゝみ)なれば、御小人持之、箱なれば黑鍬持之、水野和泉守樣、石垣の草なども、黑鍬が取事なりとて、黑鍬に被仰付候處、三人落て死す、依て始の如く日傭の者となる、御普請奉行は、御休息其外奥向の御普請を可掌なるが、今は外曲輪普請等も、掌る如くになりたるなり、黑鍬荷物の時は刀を不指也、

〔天明集成絲綸錄二十二〕寶曆十辰年三月

御目付江

黑鍬之者、御掃除之者、御中間、御小人、御譜代之ものは、病氣等に而難相勤節、幷家督被下、幼年に候得ば、小普請入申付候得共、向後は右場所に、其家筋之者は病氣に而、御奉公難相勤節、幷家督被下、

幼年之ものは御目付支配無役にいたし置、御奉公願候節は、元勤之向々江入候樣可被致候、尤右場所出之ものに無之分は、御奉公難相勤候歟、又は家督被下幼年に而御譜代の者に候はゝ、唯今まで之通小普請入可申付候、

右之通可被得其意候、

三月

〔天明集成絲綸錄二十三〕寶曆十辰年三月

御目付江

黑鍬之者、御掃除之者、御中間、御小人、役出或は小普請入等いたし候者之明跡、小普請ゟ御入人可申付旨、延享四卯年相達候得共、當時小普請之內、相應之者無之、右之場合、追々明き多人數不足いたし候趣に候間、右明き跡の內江、此度左之通抱入可被致候、

黑鍬之者拾五人　御掃除之者八人　御中間貳拾七人　御小人拾貳人

右之通當時相勤候忰共之通、遂吟味、可被抱入候、此以後も明き有之節は、其節々可被相伺候、

〔天明集成絲綸錄二十四〕安永九子年五月

御目付江〇中略

一御徒目付御小人目付黑鍬之者も、日々晝夜共御城番相極置、前書之通出火之節者、早速燒火之間廊下近邊江詰置せ、其方共罷越候場所江附添、罷越候筈ニ候事、〇中略

右之通、可被得其意候、尤西丸御目付江も可被談候、

五月

〔大概順〕御目見以下大概順

十二俵一人扶持　　御普代席、白衣勤、　黑鍬之者

〔天保集成絲綸錄七十八〕文政十一子年八月

大目付江

先達而黑鍬之者共、御腰物方御用之御長持、御用達方江持參候於途中、御側松平中務少輔供方と口論いたし候始末、遂吟味候處、黑鍬之者及不法候ニ付、夫々御仕置申付候、御用物之事に候間、大切に可致は勿論に而、持步行候者共も片寄、雙方除ケ合候得ば、過失も出來申間敷、諸大名其外御旗本之面々通行之節は、猶更心得も可有之處、却而御道具之權威を以、諸大名御旗本之差構無之、道中を持步行、或は途中障に不相成者をもがさつ及不法候儀も有之趣、粗相聞、如何之事に候、御用物大切に心得候は、別而相愼、聊がさつ不法有之間敷候、若心得違之者於有之は、持人宰領は勿論頭支配迄も可爲不念候間、急度可申附候、此段御道具類幷御用之品持運び候向々江可被達候、

右之通御目付江相達候間、相達可然向も候ハヾ寄々可被達候、

八月

〔柳營秘鑑四〕諸御番所幷末々迄御切米並高之大概

一黑鍬之者　十貳俵三人扶持、或ハ十五俵、又ハ五人扶持計も有之、

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書○中略　御臺所四之間橫手○中略　黑鍬

〔享保集成絲綸錄三十〕元祿十二卯年十一月

一今度御吟味之上、御譜代小給之輩、御救之御金被下之旨、頭々支配々々江相摸守傳達之、

覺○中略　先日之儀　黑鍬之者

金貳兩宛

〔憲教類典二ノ十四御抱席〕寶曆五乙亥年九月廿四日

掃除之者

御譜代并御抱場所書付

前々御譜代と相定取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

黑鍬之者

〔幕朝故事談〕御徒衆、黑鍬の類は、人請に立申間敷と云證文を頭々へ取られて居也、

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一御。掃。除。頭。　百俵高　三人

〔明良帶錄外篇〕御掃除頭百俵高　目支　御臺所前廊下

御掃除ゟ繰上はなし、御目付支配、無役世話役、聖堂上番評定所番等ゟ昇る、且は支配下ゟ昇る事多し、以上引下勤之者有之、先は御小人目付ゟ年來之勤ニ而御褒美御役替多し、是より御譜代場へ昇る、能場なり、御掃除之者支配するにて、諸向掛合多し、是より添番へ昇る、進上番よりの持役也、上下兩番より昇る事先例なり、

〔吏徵御目見以下〕御掃除之頭三人　若年寄支配　百俵持扶持高　燒火間、上下役、

〔諸役起請文前書〕御掃除頭

一御掃除之者頭被仰付、彌御後闇義聊以仕間敷候、萬事重公儀、惡心なく正路に御奉公相勤、油斷仕間敷事、〇中略

右之條々、雖為一事於致違犯者、〇罰文略

〔延寶八年江戶鑑〕御掃除頭

七十俵上野丁　豐田半兵衞殿　同同所　塚越小右衞門殿　百俵下や　板倉彌作殿

〔憲教類典二ノ五御役〕享保九甲辰年七月十三日

百俵高持扶持之儀　御掃除之者頭

〔享保集成絲綸錄 一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以₂壁書₁被₂仰出₁之所謂、〇中略

一御臺所通廊下〇中略　御掃除者之頭

〔憲教類典 三ノ二十六殿中〕年號月日無ㇾ之

平日御役所廊泊御番御夜詰之內席〇中略

御納戶廊下敷居內〇中略　御掃除頭

〔憲教類典 三ノ二十六殿中〕年號月日無ㇾ之

御料理之席書〇中略　御臺所三之間緣頰〇中略、　御掃除頭

〔大概順〕御目見以下大概順

三十俵二人扶持　外金三分　御抱入場所、羽織袴、紅葉山御掃除組頭

〔明良帶錄 新金篇〕御掃除之者　掛り々々ニて奧廻りあり、

〔憲教類典 二ノ五御役〕年號月日無ㇾ之

一遠國御役人組、附人別并御役料、〇中略

御掃除之者頭　御掃除之者百五十七人

〔吏徵 下御目見以下〕御掃除之者百七十人　十俵一人半扶持高　御譜代場　町屋敷拜領沽劵金五十兩

年月日始置

小普請方御掃除之者三十六人　持高　組頭貳人役扶持壹人扶持　出役一人半扶持　御抱場

年月日始置

紅葉山附御掃除之者七十人宮二十人置五十人　十三俵一人半扶持高　勤金貳分至₂壹兩₁　御抱場　正德四年甲午五月十二日始置

〔吏徴別錄御目見以下〕御掃除之者　三組合二百二人、兩組六十七人一組六十八人毎組之頭三人、組頭役給惣人數之內ニ而三十俵四人半扶持、寛文四年甲辰十二月十八日、是迄七十人之處、新規五十人抱入、合百二十人、同五年乙巳二月三日、御掃除之者、小給付、累年奉願候通半扶持充增被下之、日記、享保十六年辛亥五月、百八十三人、寶曆十年庚辰、初而悴共之內より八人抱入、是を新規抱といふ、

〔吏徴別錄御目見以下〕紅葉山附御掃除之者　正德四年甲午五月十二日、始置、十員、十三俵一人半扶持高、

〔大概順〕御目見以下大概順

御普代席、白衣勤、御掃除之者
十俵一人半扶持

小普請方御掃除之者
持高扶持

紅葉山御掃除之者
十三俵一人半扶持　御宮附ハ別金一分

吹上御掃除之者
持高扶持　組頭ハ御役金幷役金格銀一枚

濱御掃除之者〇中略
同高扶持　外加扶持一人扶持、御手當金幷扶持三分、

鹽硝藏御掃除之者
御給金二兩二分　一人扶持

〔天明集成絲綸錄二十三〕寶曆十辰年三月

御目付江

黒鍬之者、御掃除之者、〇中略役出、或ハ小普請入等いたし候者之明跡、小普請ゟ御入人可申付旨、延享四卯年相達候得共、當時小普請之內、相應之者無之、右之場所追々明キ、多人數不足いたし候趣ニ候間、右明キ跡之內江此度左之通、抱入可被致候、〇中略

御掃除者　八人〇中略

駕籠之者

右之通、當時相勤候忰共之通、遂₂吟味₁可ㇾ被₂抱入₁候、此以後も明キ有ㇾ之候節ハ、其節々可ㇾ被₂相伺₁候、

〔憲教類典御抱席二ノ十四〕寶暦五乙亥年九月廿四日

御譜代井御抱場所書付

前々御譜代ニ相定、取扱來候場所、左之通御座候、〇中略

御掃除之者

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無ㇾ之

御料理之席書〇中略　御臺所四之間横手〇中略　御掃除

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一御駕籠頭　六拾俵高　三人

〔明良帶錄外篇〕御駕籠頭目六十俵高支　御臺所前廊下下之方

御駕籠組頭、御駕籠之者ゟ繰上度々有り、御小人目付之昇路也、五役の頭の內、第一の業役也、御廣敷向仕丁などゟ繰上、仕丁世話役吹上向ゟも至る、小普請よりの御入人は餘りなき場なり、

〔諸役起請文前書〕御駕籠頭

一御駕籠頭被₂仰付₁候上者、重₂公儀₁、御爲第一ニ奉ㇾ存、御後闇儀聊以仕間敷候、萬事御奉公油斷仕間敷事、

一組之者共、御輦御駕籠常ニ入ㇾ精稽古仕候樣、無₂油斷₁可₂申付₁候、萬一其上ニも不₂出掛₁者御座候ハヾ、御目付衆迄可₂申上₁候事、〇中略

一組中親子兄弟知音之好、又者中あしき者たりといふ共、無₂贔屓偏頗₁有體ニ物每可₂申付₁事、

附以₂御威光₁奢たる義不ㇾ仕、惣而非儀申掛ケ間敷事、

右之條々、雖ㇾ爲₂一事₁於ㇾ致₂違犯₁者、〇罰文略

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保九辰年七月

六拾俵高 持扶持之儘　御駕籠之者頭〇中略

右之通、御增高被下候間、向々江可被相談候、以上、

〔享保集成絲綸錄 一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之、所謂、〇中略

一御臺所通廊下、右々末座敷居を隔て、〇中略　御駕籠頭

〔憲敎類典 三ノ二十六〕年號月日無之

御料理之席書〇中略　御臺所四之間〇中略　御駕籠頭

〔憲敎類典 二ノ五 御役〕年號月日無之

御駕籠頭　御駕籠者七十六人

〔吏徵 下 御目見以下〕御駕籠之者　貳拾俵二人扶持高　御譜代場

〔吏徵別錄 下 御目見以下〕御駕籠之者　三組合五十一人 每組之頭、世話役各一人、

〔大概順〕御目見以下大概順

二十俵二人扶持　御譜代席、白衣勤、　御駕籠之者

〔諸役起請文前書〕御駕籠之者

一御駕籠方相勤候上者、彌奉重公儀、御後闇儀聊以仕間敷候、御奉公無油斷相勤可申候事、

一御駕籠廻り御沙汰、他人ハ不及申、親子兄弟緣者たりといふ共、一圓洩し申間敷事、

一御轅かき御駕籠廻し之義、常々無油斷可致稽古事、〇中略

右之條々、於相背者、〇罰文略

〔營中御日記 十三〕寬永十三年四月十日、今度日光江御供之〇中略　御駕籠之者三十四人江銀子被下、

六尺

〔拾遺柳營秘鑑三〕一御駕籠之者、足袋相止候事、丑〇享保七年二月廿三日、五郎右衛門殿半左衛門殿被仰渡候、

〔吏徵 御目見以下〕紅葉山御高盛六尺廿人　十五俵一人半扶持高　役金壹兩貳分　部屋住十俵一人半扶持　二半場　年月日始置

御賄六尺頭四人　持高　役切米七俵　役上下二半場　年月日始置

西丸御賄六尺頭三人　同上

御賄六尺三百八十八人　持高　下役役切米五俵、役金四兩、書役役金四兩　御酒部屋書役役切米五俵　勘定部屋書役同斷　御豆腐役同斷　肴役所出役三人役金五兩　青物役所出役三人同斷　御薪方下役八人役切米五俵　寸打役金參兩　見習廿人一人扶持　西丸御雇三十人六尺新組打込　二半場　年月日始置

西丸御賄六尺百十三人　同上

奥六尺五十人　十五俵一人半扶持高　役金貳兩　組頭二人　貳拾俵二人扶持役金參兩　世話役　人同斷　町屋敷拜領沽券金百五十兩　二半場　年月日始置

西丸奥六尺　同上

表六尺四十九人　持高　町屋敷拜領沽券金七十兩　二半場　年月日始置

西丸表六尺四十四人　同上

御用部屋六尺八人　十五俵一人半扶持高　町屋敷拜領沽券金廿五兩　二半場　年月日始置

西丸御用部屋六人　同上

御膳所六尺四十人　十五俵一人半扶持高　町屋敷拜領沽券金廿五兩　二半場　年月日始置

西丸御膳所六尺廿八人　同上

奥御膳所六尺　同上

御廣中樣御膳所六尺九人　同上

御風呂屋六尺十二人　十五俵持扶持高　町屋敷拜領(沽券金廿五両)　二半場　年月日始置

西丸御風呂屋六尺八人　同上

椀方六尺五十八人　持高　頭三人、役切米七俵、役上下、　町屋敷拜領沽券金(六十五両頭、貳十五両平、)　二半場　年月日始置

西丸椀方六尺

〔吏徵別錄(御目見以下)下〕御賄六尺　永祿二年己未五月廿二日、神祖三州大樹寺より岡崎御入城之節、御近習十八人、同宿百人、六尺三十六人、都合百五十餘人御供仕候、其後同宿百人御歸寺被仰付、六尺三十六人ハ御供方之百姓故、御家人(江)被召抱、所々御陣御供仕候、關東御入國之節、右三十六人之餘類、追々被召抱、慶長年中、松下淨慶支配罷成、小臺處御賄相勤候付、御賄六尺と申傳候、其後御小納戸六尺表六尺より追々打わかれ候、享保二十年乙卯十二月廿日、六尺頭十二人(江)役切米七俵充、吟味方下役十人、御豆腐役七人、書役七人、勘定部屋下役四人、御薪方下役三人(江)同五俵充被下、延寶九年辛酉三百五十人、寬保三年癸亥、六尺新組見習(江)二十七人扶持被下、天明六年丙午五百十五人、御切米七千四百十三俵、役切米貳百三十九俵、扶持方七百八十四人扶持、寬政元年己酉、六尺新組加扶持六十一人扶持被下、同三年辛亥十一月廿九日、六尺頭十二人、右大勢組取扱候付、格別之譯を以て、別段爲御手當三俵充被下之、同九年丁巳六月十八日、兩丸御雇六尺新組三十人(江)一人扶持充被下、同十年戊午八月廿五日、五百一人、御切米七千二百三十九俵、役切米二百三十九俵、扶持方七百六十三人扶持、享和二年壬戌十二月、四百九十五人、御切米七千百九十九俵、扶持方七百五十八人扶持、天保七年丙申五百一人、外見習二十人、

〔大概順〕御目見以下大概順

持高扶持　役切米七俵　二半場、役上下、　御賄方六尺頭

同斷　同斷　二半場、役上下、　表御臺所椀方六尺頭〇中略

十五俵一人半扶持　御役料一兩二分　二半場、白衣勤、　紅葉山御高盛六尺

同高扶持　御手當金二兩組頭ハ二十俵二人扶持御手當金三兩　二半場、白衣勤、　奥六尺

十五俵一人半扶持　二半場、白衣勤、　御膳所六尺

同高扶持　二半場、白衣勤、　御風呂屋六尺

同高扶持　二半場、白衣勤、　御廣敷御膳所六尺

同高扶持　二半場、白衣勤、　同御用部屋六尺

持高扶持寸打六尺ハ役金三兩　二半場、白衣勤、　御賄六尺

同高扶持　二半場、白衣勤、　表六尺

同高扶持　二半場、白衣勤、　表御臺所椀方六尺

〔寒川入道筆記〕京の六尺共、二八月の出かはりによりあひて、此さきに、そちは何方にゐたぞと問ふ、をれは、二條のをなら屋にゐたといふ、さて〳〵くさひ事を云、ならやならやとはいはひで、おならやのおの字ハ、何事ぞといへバ、おの字はつけたが、それほどはらがたつならば、をれがゐ所をとうてこそハといふた、

〔大概順〕御賄方　同六尺

右者、唯今迄、由緒吟味取扱之内、御賄六尺と計名目ニ而御座候處、向後御賄并六尺と認入置、御賄六尺共ニ同樣之ケ條ニ而取扱候樣可レ仕旨被レ仰渡レ奉レ畏候、〇中略

右之趣、寶曆六子年十一月廿五日、堀田相模守殿被レ仰渡候、

挑燈奉行

右取扱書付、寶曆五亥年、同六子年之頃伺濟、

〔天明集成綵綸錄四十二〕天明元丑年五月

御勘定奉行江

紅葉山御高盛六尺追々御用多、其上御請之場所旁小給ニ而取續兼候由ニ付、向後爲役金壹兩貳分宛年々被下候間、可被得其意候、

五月

〔憲敎類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組、附人別并御役料、〇中略

御疊奉行　　六尺四人

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一御挑灯奉行　八十俵高　貳人

〔諸役起請文前書〕御挑灯奉行

一今度御挑灯奉行被仰付候、彌御爲第一ニ奉存、御後闇義聊以仕間敷事、〇中略

右之條々、雖爲一事於致違犯者、〇罰文略

〔大猷院殿御實紀五十二〕寛永十九年十一月十一日、後閣勤番人少きにより、〇中略挑灯奉行、〇中略中より十人增加せらる、

〔寛文七年武鑑〕御挑燈奉行

神谷與左衛門　早木九郎右衛門　鈴木藤右衛門　氏家助左衛門　輕川加右衛門　渡部彥兵衛

〔享保集成綵綸錄三十〕享保九辰年七月

下男

御挑灯奉行〇中略

八拾俵高持扶持之儘

右之通御増高被下候間、向々江可被相談候、以上、

〔吏徵御目見以下〕御挑灯奉行三人　御目付支配　八十俵持扶持高　燒火間、上下役、

〔憲教類典殿中三ノ二十六〕年號月日無之

御料理之席書〇中略　御臺所四之間〇中略　御挑灯奉行

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年八月廿七日、王子村邊御鷹狩あり、〇中略挑。燈。奉。行。三人〇中略大。納。言。殿。〇徳川家綱へ附屬せらる、

〔明良帶錄新叅篇〕御。下。男。十五俵二人扶持

御奥方、又ハ女中方出入之御用部屋之勤也、番の頭部屋壹人、下御用部屋壹人、御釜屋貳人、人足共御障子方壹人、明部屋壹人、御醫師部屋壹人、御小人部屋、御侍部屋壹人ヅヽ、ごさい八百屋廄掛所一人、

〔吏徵御目見以下〕御下男六十五人　十俵一人半扶持高　町屋敷拜領沽券金四十兩　二半場

〔吏徵別錄御目見以下〕御下男　元文五年庚申五月十日、增二十五員一

〔大概順〕御目見以下大概順

二十俵三人扶持　二半場、役上下、　御。廣。敷。御。下。男。頭。

〔大概順〕御目見以下大概順

十五俵二人扶持　二半場、白衣勤、　御廣敷御下男

〔明良帶錄外篇〕御。下。男。頭。十五俵三人扶持

御下男組頭より操上、御入人なし、御下男を指揮す、女中部屋、幷諸部屋々々に御下男壹人ヅヽ有リ、

〔延寶八年江戸鑑〕御下男

貳百俵　淺井彥兵衞殿　　百俵　犬塚九郎右衞門殿

〔吏徵〕(御目見以下)御下男頭四人(内一人伊賀者より被帶)　御留守居支配　貳拾俵三人扶持高　町屋敷拜領(沽券金五十五兩)　役上下、二半場、

〔吏徵別錄〕(御目見以下)御下男頭　享保三年戊戌七月三日、熨斗目白帷子著用仕間敷候、

〔吏徵〕(御目見以下)御下男六十五人　十俵一人扶持高　町屋敷拜領(沽券金四十兩)　二半場　年月日始置

〔吏徵〕(御目見以下)西。丸。御。下。男。頭。二人　御留守居支配　貳拾俵三人扶持高　町屋敷拜領(沽券金五十五兩)　役上下、二半場、

〔吏徵〕(御目見以下)西。丸。御。下。男。四十一人　十俵一人半扶持高　町屋敷拜領(沽券金四十兩)　二半場

〔吏徵〕(御目見以下)御。下。男。組。頭。四人　十五俵二人扶持高　町屋敷拜領(沽券金五十五兩)　二半場

〔明良帶錄新叅篇〕御下男頭――御下男組頭――御下男

〔大概順〕御目見以下大概順

十五俵三人扶持　　二半場、羽織袴、御下男組頭

〔吏徵〕(御目見以下)西。丸。御。下。男。組。頭。三人　十五俵二人扶持高　町屋敷拜領(沽券金五十五兩)　二半場

〔明良帶錄新叅篇〕仕。丁。(十五俵二人扶持、組頭ハ二十俵二人扶持、)

御。臺。様。、御。簾。中。様。、御輿舁御小道具等持之、○中略 御日傘は仕丁世話役持之、

〔吏徵〕(御目見以下)仕丁二十三人(内組頭三人)　十五俵貳人扶持高　組。頭。二十俵貳人扶持　二半場

年月日始置　御簾中様仕丁　同上

〔吏徵別錄〕(御目見以下)仕丁

小間遣

〔大概順〕御目見以下大概順

拾五俵二人扶持 組頭貳拾俵貳人扶持　御廣敷仕丁

〔吏徵〕御目見以下御膳所小間遣八十人　十五俵一人半扶持高　役金三兩　町屋敷拜領 沽券金廿五兩

二半場　年月日始置

西丸御膳所小間遣五十二人 組頭共　同上

奥御膳所小間遣十八人 組　同上

御簾中樣御膳所小間遣十八人 組頭共　同上

御風呂屋小間遣六人　十五俵一人半扶持高　役金貳兩　町屋敷拜領 沽券金廿五兩　二半場　年月日始置

西丸御風呂屋小間遣五人　同上

表小間遣百三十五人 組頭共　十五俵一人半扶持高　町屋敷拜領 沽券金廿五兩　二半場　享保十五年庚戌十月廿六日始置

西丸表小間遣　同上

〔正德六年武鑑〕御小間遣頭

奥藤八右衛門　諸星友右衛門　五十俵　森川仲右衛門

〔大概順〕御目見以下大概順

二十俵持扶持　役金六兩　二半場、羽織袴、　御膳所小間遣組頭

同高扶持　役金三兩　御廣敷同

二十俵持扶持　二半場、羽織袴、　表小間遣組頭

〔大概順〕御目見以下大概順

小遣之者

伊賀之者

十五俵一人半扶持　役金三兩　　二半場、羽織袴、御膳所小間遣
同高扶持　役金二兩　　二半場、羽織袴、御風呂屋小間遣
同高扶持　役金三兩　　二半場、羽織袴、御廣敷小間遣
同高扶持　御入人之者ハ持扶持　　二半場、羽織袴、表小間遣

〔吏徵御目見以下〕御廣敷小遣之者十六人　給金三兩一人扶持　御抱場
西丸御廣敷小遣之者十五人　同上

〔大概順〕御目見以下大概順
　御勘定所小遣之者
二十俵二人扶持　　御廣敷小遣之者
持高扶持

〔吏徵御目見以下〕小普請方伊賀者組頭三人　小普請方支配　持高　役扶持四人扶持　役上下
御抱場　正德五年己未五月二日始置

〔天保集成絲綸錄八十六〕寬政二戌年正月
　御勘定奉行江
　銀百六枚　金三十三兩
右小普請方伊賀者組頭以下江被下候間、小普請奉行斷次第可被相渡候、

〔大概順〕御目見以下大概順
持高役扶持四人扶持　　御抱入場所、役上下、小普請方伊賀組頭

〔憲敎類典二ノ五御役〕年號月日無之
一遠國御役人組、附人別幷御役料、○中略
小普請方拾五人扶持宛　伊賀者十三人

〔吏徵 御目見以下〕小普請方　伊賀者十人見習四人　持高　御抱場　元祿二年己巳十二月七日始置

〔大概順〕御目見以下大概順

持高持扶持　御抱入場所、羽織袴、小普請方伊賀者

〔享保集成絲綸錄 三十一〕享保十九寅年六月

伊賀格世話役之者　二十人

右今度、新規小普請幷伊賀之者、御留守居同心より申付之、御留守居一組江、五人宛割入勤候內、取來御扶持方、共ニ五拾俵高に被成下候間、可被得其意候、

〔大概順〕御目見以下大概順

持高　御譜代席、役上下、明屋敷伊賀者組頭

〔吏徵別錄 御目見以下〕明屋敷番伊賀者　御廣敷伊賀者ニ同ジ　由緒書ニ云、又所々明御殿御屋敷等御預被仰付候付、明屋敷番ニ相唱申候、

〔大概順〕御目見以下大概順

持高持扶持　御譜代席、役上下、明屋敷伊賀者

〔明良帶錄 新益篇〕伊賀者

三側に分れて各廣敷番頭持也、七ッ口、御錠口、御〆り、所々寺院等、女中出先勤番御普請懸り書役共野扶持被下、番詰切り、

〔柳營秘鑑 四〕諸役人員數幷組支配

御廣敷番之頭八人　添番十五人　伊賀十六人

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保九辰年七月

三十俵高貳人扶持　　御廣敷伊賀之者〇中略

右之通、御增高被下候間、向々江可被相談候、以上、

〔吏徵御目見以下〕御廣敷伊賀者九十六人　三拾俵貳人扶持高　御普請懸三人、三人扶持、　町屋敷拜領沽券金六十五附　御譜代場

〔吏徵別錄御目見以下〕御廣敷伊賀者　天正十年壬午六月十四日、伊賀者貳百人被召出、服部半藏同仲に被屬、同十九年辛卯十一月十八日、於四谷原二百人千貫の地を賜ふ、寬永十六年己卯、武州給地撿地打出高共千六百二十六石餘、元和四年戊午九月、御廣敷御番內藤修理亮支配、享保三年戊戌七月三日、熨斗目白帷子着用仕間敷候、同九年甲辰七月十三日、三十俵二人扶持高、

御廣敷御用部屋吟味役　元文二年丁巳七月廿六日始置、貳拾俵三人扶持高、

〔大概順〕御目見以下大概順

三十俵二人扶持　御譜代席、役上下、　御廣敷伊賀者

〔吏徵御目見以下〕西丸御廣敷伊賀者六十三人　三拾俵貳人扶持高　御普請懸三人、三人扶持、町屋敷拜領沽券金六十五附　御譜代場

〔大概順〕御目見以下大概順

二十俵三人扶持　御抱入場所、羽織袴、　御廣敷御用部屋伊賀格吟味役

〔柳營沙汰書三〕慶應三年三月十六日　御廣敷伊賀格吟味役　山崎重太郎

靜寬院宮樣天璋院樣御附御侍

右被仰付旨、於燒火之間、若年寄中出座、信濃守申渡之、

〔明良帶錄新舍篇〕山里伊賀

山里口ハ、非常之御場所ニて、諸出入無之、御庭方、黑鍬、奧向衆御鷹計通之、山里御番所有り、勤向心

得方大切の場也、

〔吏徵御目見以下〕山里伊賀者九人　三拾俵二人扶持高　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

三十俵二人扶持　御譜代席、羽織袴、　山里伊賀者

〔憲教類典御抱席二ノ十四〕寶暦五乙亥年九月廿四日

御譜代并御抱場所書付

前々御譜代と相定、取扱來候場所、左之通御座候、○中略

○○○○○○○

御女中樣附伊賀者

〔伊賀者由緒并御陣御供書付〕高三千石○三千石、寬政重修諸家譜作五千石、服部半藏

慶長十年巳十二月、御改易に被仰付候、其刻江戸表、辻切數多有之由之札を立、黃金を被懸候得共、相知不申候、然處伊奈熊藏家來を、服部半藏於路次白晝に切伏申候、人違之由陳じ申候處、伊賀衆に宮田權右衞門と申者、半藏老母之金子預り、隱居申候科により切腹被仰付候、半藏父は伊賀國之侍、駿州今川義元に仕へ、武功甚相顯し、其後權現樣に奉仕、御先手相勤、數多之高名仕、鬼半藏と申候、父子二代伊賀衆預り罷在候、松平隱岐守聟と成り、組之輩へ萬端當り惡敷、心に背者などへ御扶持方を押へ、情無之候、御預り之伊賀と申者、半藏先祖と肩をならべし伊賀衆之子孫に而御座候、信長公生害之砌、權現樣、伊賀國被遊御通、御用心之折柄、御案內仕、御馳走申上候に付、伊賀之者と被遊御感、宮田權右衞門、米津半助、其外百人御家江被召出、山之手に屋敷被下置、服部半藏御預有之候、半藏儀、由緒存知候者、情を懸支配可仕候處、右之辨も無之、伊賀衆一同に捧目安、近所之寺へ取籠、訴訟相叶不申候ハヾ、斬死可仕由候而、弓鐵炮致用意、事六ヶ敷體達上聞、半藏仕方惡敷故、伊賀衆預り役被召上、然れども、頭に對して不屆に思召、頭取拾人、半藏訴訟によつて、御成敗に

被仰付候、殘而御先手大久保甚右衛門、久永源兵衛、服部仲、加藤勘右衛門組、弓鐵炮歩行同心へ被仰付候、其内切腹、落行仕候者御座候、妻子人質に被取、立歸り切腹仕候者も御座候、行方不知者、江戸江無程立歸り、隱罷在候處、半藏走掛り、袈裟懸に打伏候處、伊賀衆に而者無御座候、伊奈熊藏家來に而御座候、組之出入無程上に、又候如是、此誤り陳ずる事不能、終に服部家斷絕、

古事類苑

官位部六十七

德川氏職員十六

番頭總載

名稱

番頭ニ、大番頭、書院番頭、小性組番頭、新番頭、及ビ小十人頭アリ、書院番頭、小性組番頭ヲ兩番頭ト云ヒ、（初ハ大番頭、書院番頭ヲ兩番頭ト云ヘリ、）又兩番頭ニ大番頭ヲ加ヘテ、之ヲ三番頭ト云フ、何レモ組頭組衆ヲ率ヰテ、城郭ヲ警衞ス、而シテ其職務ノ輕重ニ由リテ、各〻其資格ヲ異ニシ、或ハ番頭ノ重クシテ、組頭、組衆ノ輕キアリ、或ハ組頭、組衆ノ重クシテ、番頭ノ輕キアリ、例ヘバ大番組ハ老中ノ支配ニシテ、諸番頭ノ上席ニ在レドモ、其組頭組衆ハ新番ノ組頭組衆ノ下ニ列シ、兩番頭以下ハ何レモ若年寄ノ支配ニシテ、小性組番頭ハ、書院番頭ノ下ニ列スレドモ、其組衆ハ、却テ書院番衆ノ上ニ立ツガ如シ、又此資格ノ等差ニ由リテ、組衆ノ任用ニモ、自ラ次第アリ、例ヘバ兩番ノ組衆ニハ、布衣以上ノモノヽ子弟ニアラザレバ任用セザレドモ、大番ノ組衆ハ必シモ然ラザルガ如シ、

〔東職紀聞 二〕扈從組與頭

右大番、書院扈從之三番頭者、侍衞第一之職、而武略之重任也、重代中撰其器而被補之也、非其家流以下、不以容易之儀任之、昇進之次第、先補扈從組番頭、轉書院番頭、至大番頭也、又以扈從組番頭與書院番頭稱兩番頭、稱其組亦云兩番組也、布衣以上之諸職、多擇兩番中而被補之也、

〔有司勤仕錄〕御書院番頭

法令

一古は大番御書院を以て兩番と號す由、今は御書院御小性組を兩番と云、

〔敎令類纂初集四十〕寛永元甲子年八月十一日

條々

一於殿中不寄何事、一切口論仕間敷候、申懸候者、御改易に可被仰付事、

一傍輩中、萬惡敷儀に男道を立、申合一味仕間敷候、若於相背には、可爲御成敗事、〇中略

一奧之御小姓と中好知音ぶりを致すべからず、於相背には、可爲曲事事、

一用事なくして、他之番所へ寄合、咄申間敷候、相背く族あらば、過料可被仰付事、

一番頭組頭申渡儀、萬事少しも違背仕間敷候、於相背には、曲事に可被仰付事、

右七ヶ條之旨、可相守もの也、

寛永元年子八月十一日

〔御當家令條二十四〕覺

一跡々より被仰出候御條目之通、彌他番と請取渡之刻、相手替嚴密ニ可被仕候、尤月番之儀、是又可爲同前事、

一兼日申渡候通、朝番之刻、請取御番衆五六人も被罷出候迄は、常之所ニ着座被仕、人少ニ無之樣可被致事、

一於御番所並能猥ニ無之、作法能樣ニ其相番中に互に可被申合事、

一朝番衆之內、一二之鬮取兩人之衆、明不寢之衆と替、御番所可被相守事、

一他番衆と、他之御座敷ニ而出合被申間敷候、若急用之義は番頭組頭江斷、用事可被相叶事、

一湯呑所江一度ニ大勢不被參、二三人宛も可被參候、勿論於彼所長座有之間敷事、

一高雜談、幷御夜詰過候刻、聲高ニ無之樣可被致事、

一辨當つかひ被申候刻限、九ッ半打始、七ッニ仕舞可被申候、尤火之元入念可被申事、
一御供番之剋、殿中并御供之先ニ而も、無作法無之樣ニ可被致事、

萬治二年亥八月六日

〔御當家令條二十五〕寛文六年七月十三日

覺

一入番衆、本番五ッ勤候而、御供番ニ出し可申候、并前髮有之衆は落候而、追付御供番ニ出し可申事、
一御嘉定御玄猪之時分は、御普請ニ掛居申候共可罷出事、○中略
一具足改、御書院番御小性組隔年仕、六月中改可申事、
一入番衆、本番見習二ッ組、六月十五日以後見習無之事、
一知行所江御暇之義、如御定春秋兩度ニ遣可申事、
一御供番相觸候以後は、縱令相延候共、一人にても登城仕候はヾ、不殘勤ニ可仕事、
一跡々之通、要脚廣蓋御給仕、稽古爲致可申事、
一長煩小普請に出し申儀、十二ヶ月皆煩、末々御番難勤體ニ候はヾ小普請たるべし、又皆煩ニ而も、十三ヶ月目ゟ氣色克、自今以後、御番可相勤體ニ候ハヾ出し可申事、
一時々御番ニ罷出、切々相煩候者、三年之御番相改、三分一ゟ上之煩ニ候ハヾ、四年目ニ小普請ニ出し可申事、
一病者ニ候間、小普請ニ入申度由申候ハヾ、煩候樣子具ニ承之、其上誓詞を以、小普請ニ入可申事、
一小普請ニ出候以後、致養生本復候間、元組江入、御番仕度之由願申候者、老中江申達、御番ニ入可申事、

一病後本番計相勤、御供番斷之衆、五ヶ月過候はゞ、致誓詞候樣可申渡事、

〔大成令三十四〕元祿十四巳年八月十五日

覺

一御番所おひて、作法好勤、他之御番所江罷越まじく候、自然不叶用事有之、他之席江罷越候時、在合候番頭組頭之內江相斷可罷越事、

一泊御番ニ罷出候刻限斷之事、無據儀ハ格別、總而猥ニ無之樣可仕事、

一御城部屋江、同役幷其向々組頭之外參間敷事、

一總而殿中ニ相詰候席々、猥ニ無之樣可仕事、

一刀、脇差、小サ刀、長く無之樣拵等目立不申樣可致候、其外衣服等ニ至迄、是又目ニ立不申樣ニ可仕事、

以上

〔政談四〕御番衆、其座バカリヲ守テ、御敷居ノ外ニハ何事有テモ不構コト、不聞コトノ第一也、東照公甲州ヘ御打入ノ時、亂心者刀ヲ拔テ人多クアヤメタルヲ、御番衆組留タルコト有、又台德院樣御代カ、井上主計頭ヲ突殺シタル者ヲ、小十人番所ノ後ノ御廊下ニテ、小十人ノ組留タルコトアリ、御敷居ノ外ニハ何事有テモ構ハヌト云テ打捨ニシテ置コト、昔ハ無之コト也、今ハ御敷居ノ外ニハ何事有テモ不構、コト有時ハ御目付ノ捌ニナルコト、不詮議ト云ベシ、御番衆ハ警衛ノ役ナレバ、間ヲ幾間モ請取、御庭迄モ時々ニ見廻守護スベキコト也、御禮抔ノ節ハ、御ロウ下ニ詰居テ警固仕ベキコト也、是日本ノ古モ異國ニテモ、大禮ノ時ハ、兎角警衛ノ役人其位班ニ列座スルコト、古ヨリノ法ニテ子細有事也、孔子夾谷ノ會ノ時、司馬ヲ設タルト云コトハ此事也、如何樣ニモ、御番衆三河ヨリ江戸詰ニ成タル砌リ、無骨者ドモ成故、其行儀ヲ鎮ント

テ被仰出シコトノ定法ト成タル成ベシ、當時ハ行儀ニ計拘リテ、御番衆ヲバ御敷居ノ内ニ畏マラセ置テ、ツクヽヽボウシノヤウニ列ベ置コト、何ノ所用ニテ、如斯サスルコトゾヤ、一比水野隼人正ガ毛利主水ニ切カケシ時、毛利ガ次ハ南部大膳ニテ、其比ハ幼少ナリシ故、家來三人屬テ出シ也、隼人、萬一南部ニ切掛タラバ、南部ガ家來其座ニテ拔合スベシ、其時ハ御目付ノ手ニ餘ルベシ、箇樣ノコトアルマジト云レヌコトナレバ、料簡可有コト也、所詮ノ所、御番衆ハ警衞ノ役也ト云根本ヲ忘テ、行儀ヲサヘ能スレバヨシト覺ル故、武士武用ヲ忘レテ公家ノ樣ニナルハ、上ノセシムル所也、警衞ノ役ナルコトヲ知ラバ、上ノ御催促ナクトモ、身ノ垣ナレバ劒術取手ノ樣ナルコトハ、人々嗜ムベキコト也、

〔鳩巢小說下〕一又或時御城御番所宿番ニ出候者、酒ニ醉候テ、刀ヲ拔御堀ノ胸ヨセヲ切申候、其段上聽ニ達シ、早速切腹仰付ラレ候、其時被仰出候ハ、酒ニ醉候テハ、人ヤラ胸ヨセヤラワケモ不存、定テ人ト存テ切申ニテ可有之ヤ、爰ヲ御咎メ被遊候ニハ無之候、御城ノ宿番ニ出候者ノ、夫程ニタワイナク醉候テ、何ノ用ニ立申ベク候、此不覺ヲ其分ニナサレ候テハ、御番モ何ノ詮モ無之由被仰候、定御慈悲ノ上樣ニ候間、不便ニモ可被思召候ヘドモ、ケ樣ノ處御免ナサレ候テハ、士タル者肝要ノ覺悟ヌケ申候ユヘ、急度仰付ラレタルモノト相見ヘ申候、

〔吹塵錄德川氏三十一〕文久三亥年二月廿六日、松平豐前守殿御渡、

先達而被仰出候通、御軍制御改正に付、御番方之向、步騎二隊に御組立、劒槍二術を以、御馬前御守衞被仰付候に付而は、五百石以上之分は騎隊、五百石以下之分ハ步隊ニ御定相成候、尤五百石以上、千石以下之者に而も、知行所瘠地、御藏米取之者も、從來困窮等無據次第に而、事實馬飼置候義、差支候向も有之候はゞ、當分之內、步隊へ御組入可相成候間得其意、平常藝術調練等、充分修行致し候樣、世話可被致候、委細之義は、陸軍奉行、御軍制掛り御目付可被談候、

二月

右之通、大御番頭、御書院番頭、御小性組番頭、新番頭江相達候事、

〔敎令類纂初集四十〕寛永二十癸未年二月十八日

一御小姓組、御書院番、大御番、右之面々、此以前御金被下之、或は御加增、或は御借金等被仰付候處、進退不成之旨達上聞、最前雖爲御重恩、右之仕合不屆ニ被思召之間、向後無其品進退不成に於ては、御せんさくの上、可被行曲事之旨、堀田加賀守、松平伊豆守、阿部豐後守、阿部對馬守、朽木民部少輔列座有之而、右之頭中へ傳上意之趣、其後彼組中之面々、列侯之席へ三輩出座有之候而、右之通り相傳伊豆守畢、

〔鳩巣小說中〕一大猷院樣德川家光御時、御旗本中、勝手不相成候ニ付、御小性御書院兩番ノ御番頭中申合候テ、拜借ノ義願申上候、伊豆守殿、老中松平信綱兩番頭不殘御城へ被召、列座ノ所へ出ラレ、殊ノ外不機嫌ニテ被申渡候ハ、ケ樣ノ義、組中願申候トテ、各取次申サルコト、イカヾノ心得ニ候ヤ、權現樣德川家康台德院樣德川秀忠御遺言ニテ、一統金子大分被下置、御當代ニ至テ、一統ニ御加增被仰付、段々結構ニ被仰付候、然ル處間モ無之、又ケ樣ノ願申上ヲルベキコトニテ候ヤ、夫ヲ組中願候ヘバトテ、各取次申サルコト、不吟味千萬ナルコトトテ、例ノ大聲ニテ被申候故、末座ヨリバタ〳〵ト立申サレ候、上座ノ衆モトモニ尻込候時分、中程ニ居申サレ候一人、其マヽ伊豆守殿ソバヘ立ヨリ申サレ、何レモ待候ヘト高聲ニ被申候故、立候衆モ又立歸リ申候、其時右ノ一人、伊豆守殿ヘ申サレ候ハ、只今被仰渡候趣、御尤至極ニ奉存候、サレドモ其段私モ組中ヘ不申渡ニテハ是ナク候、御口眞似ノ樣ニ候ヘドモ、御當代結構ニ仰付ラレ、其上近比御加增被下置、間モ無之處ヲ、ケ樣不勝手ニ相成候コト、不覺悟ト申、自由ナル願、中々被申上マジキ由、色々申聞候ヘドモ、兎角不勝手ニテ御奉公相勤ガタキ旨各申ニ付、無是非取次申候、私ドモ不

席次

吟味ニ致シ申上候ニテハ無之候、此上ハ御スソヲダキ不申、私ドモ直ニ奉願候間、左ヤウ御心得可被成旨申サレ候ヘバ、伊豆守殿暫クシテ、尤ニ存候、同役僉義可致ト被申候、右ノ・人姓名不承候、此一人ニテ總分モリカヘシ申コト、見事成義ニテ候、此一人ノ姓名ヲ申候ヘバ、殘ノ衆ノ不出來相知候故、ワザト沙汰無之ヤト存候、

〔柳營秘鑑 一〕御番頭之次第

一大御番頭　二御書院番頭　三御小性組番頭　四新御番頭　五小十人頭

同組頭之次第

一御小性組御書院番組頭　二新御番組頭　三大御番組頭　四小十人組頭〇中略

同組之次第

一御小性組御花畑共云　二御書院番　三新御番　四大御番　五小十人

〔青標紙 三編〕大番頭は、兩番頭〇書院番頭、小性組番頭、と違ひて、餘ほど威勢あり、然れども組下は兩御番より次座なり、兩番頭も、頭は御書院を先とすれども、組子は御小性組を先に立つる事也、何れもそれぞれに御主意のある事なるべし、

〔有司勤仕錄〕大御番頭

一十貳組也、〇中略此役、頭は重くして、組は輕し、夫故組人の會釋重し、必竟遠境之警固を勤る故也、

一此役被仰付時ハ、組を被下となり、兩番頭〇書院番頭、小性組番頭、ハ、御預被成候と云由、采幣を給ふと云云、依之其職重し、與力同心之取計、一向被官と同前なり、

〔大猷院殿御實紀附錄 五〕常に仰られしは、兩番の士は、わが左右の手の如しとて、御身ちかく扈從し奉り、御みづからの指麾をうけしゆゑ、その番頭の任かろし、大番の士は御先驅に列り、專ら

任用

頭の指麾受しかば、大番頭の職おもし、大番頭命せらるゝ時は、先驅命せらるゝにより、再拜床机ゆるし給はるよし仰有しとなり、

〔幕朝故事談〕大御番頭被仰付候得ば、組の衆、御組下に罷成、難有仕合奉存候段被申上候得ば、番頭いかにもと返答す、兩番頭へは、御組下に罷成、難有段申上候得は、御相番になりましたと返答す、斯古來の故實なり、

〔敎令類纂初集四十〕寬永二十癸未年十二月

大御番、御書院番、御小姓組之面々、跡職事、唯今まではハ當歲子に至ルまで、番頭被爲任言上之趣、雖被仰付之、自今以後は、面々番頭、連々其身之善惡遂僉議、可致言上、自然不覺悟之族、相果るニおゐては不可言上、たとひ雖申上之、御穿鑿之上、不屆之族、幷に御奉公不相勤輩においては、跡職被仰付間敷之旨、大番頭、御書院番頭、御小姓組之頭へ伊豆守、豐後守、對馬守、民部少輔列座有之、竹之間ニおゐて傳仰之趣、

〔敎令類纂初集四十〕萬治元戊戌年六月廿五日

御番入之事

一大御番頭之子供、御小姓組に入、

一御書院番衆之子共、御小姓組に入、

一跡目之分ハ、親御小姓組ハ御小姓組に入、

一御書院番にても御小姓組にても無之者之子共は、鬮取りにて兩番之內へ入、

一遠國之御役人の子共、御小姓組に入、

一目付使番之小ども壹人、御小姓組に入、

一大御番組頭之子ども壹人、御小姓組に入、

一親兄弟、大御番に有之もの、子共、御小姓組に入、
但御小姓組御書院番に入、筋目之子供之儀也、

〔幕朝故事談〕千石以上の御旗本にても、代々布衣にならざれば、其子兩番〇書院番、小性組番、には番入ならぬ事なり、故に大御番に入なり、

〔憲法部類一〕一同年〇享保六年十一月廿八日、〇中略左之書付被相渡候、

覺

一大御番ゟ布衣以上之御役被仰付候面々之忰、家督被仰付候時は小普請入、夫ゟ御番入之節は、兩御番〇書院番小性組番ニ被仰付候者之子孫、唯今迄代々兩御番江被仰付候得共、自今者、三代目ゟ大御番江可被仰付事、

一大御番ゟ布衣以上之御役被仰付候者之忰、當時大御番相勤有之候はゞ、兩御番之内江、自今御番替可被仰付候事、

一同組頭之忰、唯今迄ハ兩御番之内江御番入被仰付候得共、自今者大御番江可被仰付候事、

右大御番之儀者、大切之御番ニ候處、只今迄之通リニ而者、大御番ゟ段々御役被仰付候面々之家筋、并大御番江戻候事無之故、大御番ニ可被仰付候者、次第ニ減少候、如斯候而は輕き家筋之者をも御番入被仰付候樣ニ成行候ニ付、件之通被仰出候、以上、

十一月十八日

〔靈巖夜話下〕台德院樣〇德川秀忠御代の儀は不及申、大猷院樣〇德川家光御代ニ成候而も、御旗本衆、御番入を被願候節、御書院、御花畑〇小性組番の組入抔を被願上候而は、少武道ニ相障申氣味合有之ニ付、御上ゟ兩御番の內江可被仰付は思召次第、先此方からは、御先手役の儀に候を以、大御番入を願不申候而は不被成如く有之候と也、

〔新釜柳營秘鑑〕八御番入之事

唯今迄は、寄合之内ゟ兩御番〇書院番、小性組番、に入候者無レ之候、自今も家督寄合之面々、兩御番ゟ出候家筋之輩は、先兩御番江御番入被二仰付一、其上ニ而勤候樣子次第、布衣以上之御役等も可レ被二仰付一候、兩御番之內を勤不レ申候而者、布衣以上之御役人ニは向後被二仰付一間敷候間、兼々其旨を可レ存由被二仰出一候、以上、

寅〇享保七年　三月十五日、水野和泉守殿御渡被レ成候御書付、中山出雲守江寫遣ス、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御小性組〇中略　享保九年甲辰五月五日、家督寄合之面々、自今兩御番〇書院番、小性組番、より出候筋之輩ハ、兩番ト先一被二仰付一旨、同年十月九日、御小性組江御番入百十七人、內寄合廿一人、御書院番江御番入六十九人、內寄合十八人被二仰付一、是三千石寄合御番入之始也、

〔憲教類典二ノ九御番〕享保十巳年十月廿五日

大御番頭山口伊豆守殿江御渡

大御番組頭之悴、御番入之儀、自今は大御番江可レ被二仰付一之旨、五年以前被二仰出一候、此義は、一度兩御番〇書院番、小性組番、江入候得ば、代々兩御番ニ成來候ゆへ右之通ニ候、然れども一度兩御番江入候ものも、三代目よりは小普請に入、夫より大御番江御番入被二仰付一候事に候得ば、右之差別不レ致候ニ付、此已後は、前々之通兩御番江御番入可レ被二仰付一候間、其旨可レ被二相心得一候、以上、

巳十月

〔德川禁令考二十七番士〕寬政元酉年七月

御番入之儀ニ付御書付

大目付江

布衣以上御役人幷御番方總領之內、行跡宜、諸藝出精候もの、御役方ニ而六七人程、御番方ニ而一組より壹人宛成共、可被召出旨、享保九年被仰出、〇略、註布衣以下御役人悴迄、段々被召出、其後享保之頃者、四五ヶ年目ニ追々御撰有之候處、寬延之度より、諸役人諸番方共、一同ニ御撰有之候而、其後再應之御番入迄者、十ヶ年餘りも程過候仕來之樣ニ相成候ニ付、其間者、行跡諸藝等宜聞ヘ有之候者共も、御番入御沙汰ニも不及候間、一同之勵も薄く有之、且又年數勤ニ相成候父共も、重而之御撰迄は、程隔候ニ付、總ニは年數之本意達し兼候も有之候、依之近年之內ニは、改而被仰出、以來者父之年數、又者其身之藝術吟味之上、追々程不遠樣可被召出旨之御沙汰ニ候間、一統行跡相愼、藝術等出精候樣爲致可申候、〇下略

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年十二月廿七日、諸士在職ノ年數ニ依テ、其嫡子昇進スルノ舊例ヲ廢ス、〇中略

御同人〇和泉守渡　諸役人御番方の悴共御番入の儀、是まで父勤め年數、又は當人藝術等を以て、年限を定め被召出候ヘ共、方今諸事御改革、文武等格別御引立の折柄に付、向後は、年限を以て部屋住御番入被仰付候儀被廢止、以來は父勤年數幷年限に拘はらず、拔群の功勞有之もの、悴は、不時に可被召出、且又文武所長の藝業熟達のものは、是迄父の勤年數年限等に拘はらず、業前若年寄見分の上、不時に被召出可有之候、〇又見ニ續川禁令考

〔明良帯錄〕御小姓組、御書院番、三百俵高頭支

是を兩御番といふ、昔は御小姓組を御花畑番といふよし、二十人減にて、御入人申上る、小普請組支配ヘ下りて選擧有之、入番被仰付候節、入番誰の誰組ヘ入候段、組割の書付、御支配方ヘ差上る、是迄異變通達、元小普請組支配も月番持なり、諸書物は元支配より送り、當人よりも三日の內諸書物差出す、頭宅にて御條目相渡也、分限張立て、大目付ヘ出す、古番の內に判形押、兩山御成の節

の大押なり、扨毎暮極りたる御用人書上といふハ、御使番、御徒頭、小十人頭也、何れも短冊へ自筆に認進達有之、部屋に於て御帳讀合有之、扨御支配方御列座御用有之、其人品申上是にて極る、昔天和の頃、川窪越前守組松平小大夫を書上けるに、御列座の節に、御尋に、松平小大夫、酒上之不宜風聞有之と仰に付、越前守曰、只今は禁酒、一段宜敷人品ニ相成、末々御用ニ可立人才に相見へ候と申上て濟けり、川窪退出有之て小大夫を招き、今日御支配方御列座有之、ケ樣々々御尋有る故、ケ樣々々答へたりと被申ければ、小大夫甚心魂に徹し、歸宅の上、酒器を砕き棄て、禁酒の後、能人物ニ成たり、頭の見出しにて、御役出せし也、末其場を轉役せざる内、御役御免、閉門逼塞等有之時は、元頭御目見遠慮、○下略

〔鳩巣小說上〕一大猷院樣御代、安藤伊賀守ドノ、御書院番頭相勤候時分、總番ヨリ御役人書出申義有之、伊賀守モ存ヨリノ人ヲ書出候處、御老中方ヨリ被申候ハ、此人ハ最前御勘氣ヲ蒙リ候者ニ候間、差除可然由ニ候、其時伊賀守、尤最前御勘氣蒙候ヘドモ只今ハ御赦免、其上最前ノ行跡相改申候、私支配ノ内ニテ、此モノ器量ノ仁ニテ、此外ニ無之旨申サレ候ヘバ、達テ除キ可申ト被申候、其時伊賀守、左候ハヾ御取次ハ賴申マジク候、直ニ伺可申由ニテ、右書付ヲ懷中シ、サテ申候ハ、各サマニハ近ゴロ聞エヌ事ヲ仰ラレ候ト存候、總テ人ト申モノハ、始終全ク宜キト申者稀ナルコト、各サマニモ、只今コソケ樣ニ結構ナル御役義ヲモ御勤メナサレ候ヘ、御若年ノ時分ノ事ドモ、被思召出候ハヾ、總身ニ汗ヲ御カキナサレ候ホドノ事、幾ラモ可有之存候、近比聞エヌコトニテ候ト申サレ、則直ニ申上候處、其人ニ右役義仰付ラレ、シカモ殊ノ外宜ク勤候テ、段々立身ノ由、御目付長崎半左衞門ドノ、當世ノ奔競ヲ嘆息シテ、昔ノ人ハ如此ノヨシ咄申サレ候、

〔窻の須佐美三〕松平安房守信孝、御書院番頭となられし時、此組にて何やらん大過有て、番頭荒川土佐守役義召上られし跡役なり、安房守被申は、役義は勿論過分の事に候へども、此組今度大過

休暇

ありしゆへに、已來當組より役拔等仰付られまじき御沙汰に候はゞ、何分にも勤役の御請仕がたく、此旨趣被仰聞下され候へと執政へ乞ければ、なか〱左樣の障りは有まじきとありし時、左候はゞ辱御請申上べく候とて、その職に任せられたりけり、去るほどに間もなく此組より役拔ありし故、その頃一等にこれを稱しけるとぞ、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御小性組○中略 寛文八年戊申二月十五日、打續火災に付、三御番一組之内三分一、壹ヶ年休被仰出、三月朔日より休、元祿三年春止、廿三年之間也、○中略 元祿三年庚午二月十九日、三番頭、新番頭、小十人頭被為召、來月朔日ゟ、三分一休無之、御番可相勤旨、土屋相模守申渡之、

〔柳營秘鑑一〕御番頭之次第

右兩番○書院番、小性組番、之面々、三分一宛可為休息旨、寛文八年二月被仰出、新番小十人も、同十二年二月、右之通雖被仰付、近來無其儀、

〔憲敎類典二ノ九御番〕寛文八戊申年二月廿日

御番衆江申渡覺

一御番衆一組三分一、三月朔日より一年為休可申事、

一休之内は、番頭組頭江付屆無用之事、若自然之用所之時ハ、可為格別事、

一御番休被申内は、大火事出來候とも、番頭宅へ人を付置被下事可為無用事、○中略

一休之内、湯治御暇之儀被申候ハゞ、日數常之ごとく、但斷之樣子により、五廻も六廻も、又ハ再篇も、遣可申事、

申二月廿日

〔憲敎類典二ノ九御番〕寛文九己酉年三月三日

雜載

御番衆三分一休之儀、親子一度被休候事無用ニ可仕旨、御老中被仰付定書、

一當酉之年、親子一度ニ休候ゆへは、親夜廻、進物御番ニ候はゞ親休、子御番相勤候樣ニ可仕事、

一子無足ニ而、戌之年休候衆之親ハ、夜廻ニ而も、當酉年休せ可申事、親子ともに、夜廻り進物番ニ而も無之衆ハ、親子勝手次第、休被申候樣に可休事、

一休之人數、其年之勤番之人數より、不同有之候而不苦候事、

〔憲教類典二ノ九御番〕元祿三庚午年二月十九日

覺

一御番衆三分一之休、向後相止、此以前之通、常勤可仕之旨、上意之趣、於殿中老中列座、大御番頭、御書院番頭、御小性組番頭、新御番頭、小十人番頭江演達之、

〔青標紙三編〕一出役之場所、兩御番ニ而は屋敷改、大御番ゟは御藏奉行を尤榮譽の場とす、

〔內安錄〕一兩番頭〇書院番、小性組番、は、格別の御役なるに、駒場御成の前日、大久保紀伊守より酒一樽をもたせ、明日御脇鷹被仰付候樣賴と申越、此返事未差出前に、高井但馬守より酒一樽を持せ、明日の御脇鷹被仰付樣に賴と申越たり、此人々後に大番頭となり、二人とも同時に引たり、番頭には不似合の事と覺ゆ、

〔塵塚談上〕兩御番衆、召仕若黨の事、我等二十歲比迄は、並高の人にても二人宛抱置、一人は外出に召連、一人は宅に差置、客の取扱をせしなり、近比は若黨一人も不召抱、外出には中間壹人召連て步行き、若黨入用の節は、雇侍をして勤候衆も間々有之樣に見ゆる也、これらは古へに復したきもの也、

〔獻可錄上〕京大坂駿河在番之義に付相考申上候覺

一御前代より、〇中略京大坂駿河在番之面々、先規ゟ每歲交替被仰付、在番之內は他國に相詰候故、

一倍之御加增御座候、是等も大分之御費と奉存候、向後は在番之者共相極、何れも彼地江引越候て、御番相勤候樣に仕度物に奉存候、幸小普請組之者共大分罷在候、是等を番人に被仰付候はゞ可然奉存候、其內病氣又は老人に而、御番難勤者共有之候はゞ、其子を代番爲仕候樣被仰付候はゞ何れも安堵仕、忝儀にも可奉存候、

一右三ヶ所在番之者共、引越申時分、一統引越料可被下候得共、年々一倍之御加增に合候而は纔の儀に御座候、勿論只今迄之通番頭組頭なども被定、其人柄勤方善惡共に常に吟味仕、江戸へ言上仕候樣に被仰付、人柄宜しき者をば、江戸へ被召返候而役替等被仰付、又番人の內、不屈の者御改易等〇中略被仰付候樣に被遊候はゞ、諸番人も江戸同事ニ意得候て、御奉公相勤可申候、

〇中略以上、

六月五日　室新助

大番頭

大番ハ、天正年中、德川氏ガ參河國岡崎城ニ在リシ時始テ之ヲ置ク、其初ハ僅ニ三組ニ過ギザリシガ、後漸ク增シテ、寬永年中ニハ十二組トナリ、每年二組ヅヽ順次交替シテ、二條大阪ノ兩城ニ在番シ、(慶長元和ノ頃ニハ、伏見城ニモ一組ヅヽ、在番セシガ、元和五年ニ伏見城ヲ廢スルト共ニ、其在番ヲ止メ、又寬永ノ頃ニハ、駿府城ニモ一組ヅヽ、在番セシガ、同十六年ヨリ、書院番ヲ以テ之ニ代フルコトヽセリ、)其他ハ都テ江戸ニ在リテ、城中ノ西丸二丸等ニ勤番シ、或ハ市中ヲ巡廻シテ、非常ヲ警戒ス、番頭ハ、一組ニ一人ヲ置キ、從五位下ニ敍ス、寬文五年以後、役料ヲ定メシコトモアレド、天和二年ニ之ヲ廢シ、享保八年以後ハ、職祿五千石高トシテ、別ニ役料ヲ給セズ、而シテ在番中ハ、特ニ合力米トシテ、其職祿ノ一倍ヲ給シ、若シ一萬石以上ノ人

名稱

職員
職掌

ヲ之ニ補スル時ハ、合力米ハ一萬石ヲ給スルコト、ナセリ、組頭ハ、一組ニ四人ヲ置ク、六百石高ノ職ニシテ、役料ヲ給セズ、在番中合力米支給ノ法ハ、番頭ニ同ジ、組衆ハ、一組ニ五十人ヲ置ク、二百石高ノ職ニシテ、役料ナシ、在番中合力米支給ノ法ハ、組頭ニ同ジ、又與力同心アリ、與力ハ一組ニ十人ヲ置キ、八十石高トス、同心ハ、一組ニ二十人ヲ置キ、三十俵二人扶持トス、在番中ハ、共ニ合力米ヲ給ス、

〔有司勤仕錄〕大御番頭

一大番と云事、往昔禁裏江從二諸國一勤、大番役と號す、二條は禁裏警固成故也、誠に閫外之重職也、時に臨て令を不レ待事有ゆへ、其職重き事、兩番頭〈〇書院番頭、小性組番頭、〉と各別也、

〔柳營秘鑑〕〈四〉諸役人員數〈并〉組支配

一大御番頭　十貳人〈〇又見二官中秘策、職掌錄、吏徵一、〉

〔東職記聞〕〈二〉大番頭十二人

統二領將軍家重代之昵近衆、人別五十人、與力十人、同心二十人一也、每年以レ順而在二衞二條大坂兩城一〈每城二組充〉也、古者駿府亦有二在衞之事一也、平日結二番金城二丸一也、

〔有司勤仕錄〕大御番頭

一大番頭壹人ヅヽ、二丸に泊番あり、又壹人ヅヽ、御本丸に詰番有レ之、老中退出候節、謁して退出す、

〔大御番頭格式之留〕大御番頭常之勤方之覺

一大御番頭、常之勤方之儀者、御條目、〈并〉御役被二仰付一候節者、誓詞前書、二條大坂ニ而者、御黑印御下知狀之趣を以、相勤來申候、

一二月十日より十月十五日迄、六組ニ而、本番詰番、大火之節、御先番等相勤申候、

一二月十六日より翌年二月九日迄、八組にて右之通相勤申候、

〔明良帶錄〕大番頭

此場は京大坂在番を主役とす、江戶にては、銅御門二〇城中ノ丸之泊を勤む、古は在番歸御目見之節御尋有ㇾ之、巨細に申上しか共、今は心障之義無御座と計申上る、

〔有司勤仕錄〕大御番頭

一十貳組也、番頭十貳人、內貳人、組とも二條在番勤る貳人、組とも大坂在番勤る、〇中略

一二條大坂にては御本丸を預り、總而御座敷向等之鍵等を預る、御城代と云とも、大番頭に達せざれハ、御座敷見分不ㇾ成となり、大坂にて、與力同心は御本丸入口之御番所を勤、加番は山里を勤、依ㇾ之大名成ども、二丸請取也、勿論先官の人御本丸也、

但組ハ隔番に御本丸に泊り番を勤、與力同心は、各之請取之入口之御番所勤る也、

一在番中、加番衆を同道して、京大坂町中、井近邊之寺社等を見分有ㇾ之、二本道具を持せ、加番ゟ先に乘るなり、〇中略

一禁裏御馬御進獻之御使勤ㇾ之

〔大御番頭格式之留〕大御番頭常之勤方之覺

一大坂御本丸之儀、在番兩番頭へ被ㇾ遊ㇾ御預、古來今以、御本丸御門番頭之與力同心爲ㇾ相勤ㇾ候、御殿向不ㇾ殘番頭預り、御掃除等申付候、

一御本丸之內、御番所兩所有ㇾ之、兩組御番衆、無ㇾ斷絕ㇾ相勤候、兩番頭も、每日隔番ニ泊番、不ㇾ寐番相勤申候、

一御本丸出入之儀者、御城代御定番ニ而も、番頭へ斷有ㇾ之、其上ニ而被ㇾ罷越ㇾ候、家來等出入之儀者、相互ニ人々より御用之譯證文記ㇾ之、判鑑ヲ以其時番頭へ被ㇾ差出、相印と引合爲ㇾ致、出入候事ニ御座候、

一大坂二ノ御曲輪、追手御門之儀、御城代家來相勤、玉造御門、京橋御門ハ、兩御定番之與力相勤申候故、右之御門爲致出入候時分者、其支配々々へ申達、爲致出入候、〔○中略〕

一兩組より一人づゝ、御破損奉行兩人、常々申渡置、御本丸御殿不絶見廻り、御破損有之時ハ、其段兩番頭へ申聞に付、委細承屆、其上御城代御定番とも申談、被懸見分、彌御修復可仕樣子ニ候得者、御修復申付候、大分之御破損之時者、江戸へ相伺、御破損申付候、〔○中略〕

一先規より兩組御藏目付一人づゝ、兩人申渡置、御城內外御藏米出入之時分ハ、右之目付に、御藏奉行立合相改候、

一御櫓ニ詰置候御鹽噌之儀、兩組より御鹽噌奉行兩人申渡置、毎年彼地御鹽噌場ニ於て、御鹽噌爲煮詰替、古味噌者、御拂仕候、〔○中略〕

一二條ハ御本丸二ノ丸共、不殘兩番頭へ御預被遊、古來今以、右兩御門兩番頭之與力同心相勤申候、〔○中略〕御本丸二丸之內、御番所兩所有之、一組ヅヽニ而、御番所無斷絶、一人づゝ隔番ニ不寐番相勤候、

一兩組より一人づゝ、御破損奉行兩人、常々申渡置、御城中不絶見廻、御破損有之時ハ、致見分申聞候樣ニ被申渡、兩破損奉行、〔并〕中井主水、同源八郎、立合見分之上、兩番頭へ申聞候ニ付、委細承屆、其上ニ而所司代へ申達、御修復申付候、

一同所西之御門へ、明(アケ)六時より兩番頭之家來差出置、御城中へ之出入爲相改候、右御門ハ、兩番頭之支配ニ而、暮六ツ時打候得バ、鍵ハ兩番頭方ニ請取置申候、〔○中略〕

一御城內御目付小屋貳ケ所、兩番頭致支配候事、

一京都火消被仰付、毎年九月より翌年三月迄、相詰有之、御城近所出火之節者、〔○中略〕番頭より差圖次第、爲火消、火消の人數改之、役人判鑑引合、御城內へ入候樣、西御門へ差出候家來へ兼而申付

置、尤右之段所司代へ申達置候事、

〔柳營秘鑑〕一大坂御目付は、御使番より壹人、兩御番之內より壹人被仰付、彼地に罷在之內、京都（江）代ル〳〵罷越、是をかけ勤といふ、世上にて上方目付と唱ふ、每年三月六日前、彼地交代、

〔東職記聞〕〔二〕大番頭

在衞記曰、自慶長十二年至元和元年在衞、限之以三年也、（或記曰、以三年八月十二日爲交替之限日也、）自元和二年（或云三年）至同四年在衞、限之以一年也、同五年（或云四年）以來至在衞大坂、尙一年也、爾來在衞之年限定一年也、

〔柳營秘鑑〕〔二〕一大御番頭、同組中、（幷）與力同心共ニ四組宛、每年二條大坂在番被仰付、交代之繰樣、發足歸府之次第、左ニ記之、

大坂（申寅）	二條（巳亥）	（藤堂肥後守　酒井紀伊守）
大坂（巳亥）	二條（申寅）	（酒井日向守　朽木和泉守）
大坂（酉卯）	二條（子午）	（板倉下野守　戶田右近將監）
大坂（子午）	二條（酉卯）	（杉浦出雲守　井上遠江守）
大坂（戌辰）	二條（丑未）	（山名因幡守　秋元隼人正）
大坂（丑未）	二條（戌辰）	（堀田出羽守　久貝因幡守）

一二條在番先番頭江戶發足　四月二日

一同組中發足　四月三日　四日　五日　六日

一跡番頭發足　四月七日　各道中十泊

近年平番之內、身上高之者壹人、宇治御茶壺御用相勤、御數寄屋頭壹人、同坊主貳人、同心貳人

一所に罷越、是ハ五月迄居殘り、江戶發足、

一二條先番頭彼地交代　四月十四日

一同組中交代　四月十五日　十六日　十七日　十八日

一跡番頭交代　四月十九日

右初交代之前日、御番頭入城申談相濟、翌朝未明、組中共交代す、

一大坂在番先番頭江戸發足　七月廿三日但大之月ハ廿四日出足、尤組中も准之、

一同組中發足　七月廿四日　廿五日　廿六日　廿八日○廿八日、職掌録作二廿七日一、

一跡番頭發足　七月廿八日　各道中十一泊

一大坂先番頭彼地交代　八月七日

但平番之内ゟ、身上高之者壹人、宇治御茶壺送り御用相勤る、勿論是ハ交代之時節より先達而彼地發足、

一同組中交替　八月八日　九日　十日　十一日

一跡番頭交代　八月十一日○十一日、職掌録作二十二日一、

右交代之樣子、二條御番代り同然、

〔爲政錄例書五〕大番頭、二條并大坂代り合之節御城入之御到着より三日目に御城入、江戸歸府之御頭ハ、跡之御頭と入替り、直ニ御城より出立なり、

〔大番職制〕二條大坂休入并出立日限之事

二條在番登休　二月十日より　二條登宿割　三月小廿五日廿六日 大廿六日廿七日

兩組御破損奉行　三月小廿五日 大廿六日　外御藏奉行　三月小廿七日四月朔日 大廿八日四月朔日

先御番頭　三月小廿八日 大廿九日　先組兩頬　小三月廿九日四月朔日 大三月三十日四月朔日

跡組兩頬　四月二日 三日　跡御番頭　四月四日四月十五日京着、同十七日交代、

跡殘役二條出立　其年々大小ニ寄、時日不同、　先殘役江戸出立　右同斷

同下リ宿割　三月小十九日大廿日　廿日廿一日　先組兩頬　四月十三日　十四日

跡組兩頬　四月十五日　十六日

先御番頭　四月十二日立、同廿三日江戸着、○中略

一跡御番頭　四月十七日立、同廿八日江戸着、

一二條下休明ケ　六月十一日、十二日御番出勤

一取手返登　六月廿一日、廿二日出立、

一御茶壺差副二條登リ、道中十二日、

但年之土用ニ寄、土用日ゟ四十一日前ニ當ル日、江戸出立、

一御茶壺大坂下リ差副、道中十三日、

但土用入日ゟ十五日前ニ當ル日、大坂出立、土用入ル日三日前ニ當ル日、江戸着日割之事、

一初御合力金爲ニ請取ニ大坂江出立

但五月十三日京出立、同十七日歸京、同十八日御金渡、尤春御借米御張紙直段ニ而渡ル、

一後御合力金請取

但十月朔日京出立、同六日歸京、同七日御合力渡、尤夏御借米直段ニ而渡ル、

一御金請取休日數　前五日　後五日

大坂在番之事

一大坂在番登リ休、六月十一日より、

一同登宿割　七月小十九日大廿日　廿日廿一日

一兩組御破損奉行　七月小十九日大廿日

一外御金御藏奉行假役　七月小廿一日大廿二日

一先御番頭　七月小廿二日大廿三日

一先組兩頬　七月小廿三日大廿四日　廿四日廿五日

一跡組兩頬　七月小廿五日大廿六日　廿六日廿七日

一跡御番頭　七月小廿七日大廿八日

一跡殘役大坂出立　　一先殘役江戸出立

一下り宿割　七月小十六日 大十七日　十七日 十八日

外御金御藏両組とも、八月八日大坂表代合出立、

但先組先類江附旅行、尤一統交代延引ニ罷成候而も、代り假役、定式ニ着有之候得ば、定日ニ出まへ之事、

一先御番頭　八月七日交代出立　一先組両類　八月八日　九日

一跡組両類　八月十日　十一日

御破損奉行は、其組之跡類江附出立、

一大坂下り休明　十月十六日十七日、御番出勤、

一取手返登り　十月十六日十七日、江戸出立、○下略

〔嚴有院殿御實紀四十二〕寛文十一年三月廿四日、大坂戌役の番士、毎歳八月初旬、交代の期なるに、旅中洪水にあひ艱困するを以て請まゝに、今より後七月をもて交代すべしと命せられ、○下略

〔東職記聞二〕大番頭

慶延略記曰、寛永二年、二條城土木功成也、即置城代、以渡邊山城守茂被補之、且撰當衛中之壯士三十人、被命在衛也、茂乃統領之、世云之三十人番也、城主記曰、寛永元年、茂補城代也、在衛記曰、寛永三年、置三十人番也、今從慶延略記也、在衛記曰、同十年以來、被副二條在衛組頭兩人、同十二年以來、以當衛二組被令在衛也、

〔大猷院殿御實紀四〕寛永二年四月二日、大番頭渡邊山城守茂、二條城の定番を命せらる、○註略　大番三十人を支配す、これを三十人番といふ、番士は一年づゝにて交代せしむ、同心三十人をあづかる、

〔仕官格義辨〕在番之事

寛永二丑年ゟ大御番三十人充、二條在番相勤、同十二亥年ゟ百人充勤候由承候、初保科彈正忠組安部攝津守組也、

〔大猷院殿御實紀二十七〕寛永十二年五月二十三日、大番頭保科彈正忠正貞、安部攝津守信盛、二條在番の暇下さる、これは二條城代渡邊山城守茂、二條より歸るにより、この輩これにかへられ、各所屬の番士五十人づゝ、ひきつれてまかる、是二條城在番交替の濫觴とす、

〔德川禁令考三十二京都〕文久二戌年閏八月九日〇九日、嘉永明治年間錄、文久紀事、並作二十九日、

在番被差止御定番被仰付候御書付

大目付

御目付　江

周防守殿御渡

今度御改革、二條在番被差止、二條御定番被仰付〇中略候間、可被得其意候事、

〔仕官格義辨〕在番之事

大坂在番は元和五未年ゟ、大御番百人組勤候由承候、初年松平石見守組、松平豐後守組、

〔東武實錄六〕元和五年、是年松平豐前守勝政、松平石見守康安、二人共大番頭組ノ士ヲ引テ、此年ヨリ大坂城ニ在番ス、是年ヨリ後、大番頭二人宛、每年此城ニ在番ス、

〔柬徵別錄上布衣以上〕大御番頭〇中略　同〇元和五年己未八月日、大坂在番二組、一年代、

〔泰平年表台德公〕元和元年六月十日、大坂城を松平下總守忠明に賜る、大坂城の事は、落城の後忠明に賜り、同年に至りて忠明を大和郡山へ移され、是より公城となる、同八年四月、始て内藤紀伊守を大坂城代と被成、是年伏見城番止之、松平豐前守、松平石見守、組の士を卒して大坂御番を勤む、是大番大坂在番の初也、

〔仕官格義辨〕在番之事

問曰、二條大坂駿府御城在番之儀は、いつ頃ゟ始り候事ニ候哉、答云、昔は大御番ゟ伏見御城之御番勤候由、慶長十二年未年ゟ元和二辰年迄、出入三年代に勤候故、伏見之三年番共申候由、同三巳年ゟ一年代に被仰付候、其以後伏見之御城、二條被引、

〔家忠日記増補 七〕慶長十二年、此年渡邊山城守、水野市正、両人共大番頭公命ヲ承テ伏見ノ城ヲ警衛ス、是ヲ伏見ノ城三年番ト云、是ヨリ大番頭一人ヅヽ、代々是ヲ勤ム、元和三年ヨリ、高木主水正、阿部左馬助、二人是ヲ勤ム、同四年ニハ、水野備後守、牧野内匠頭是ヲ勤ム、元和五年松平豊前守、松平出雲守二人大坂ノ城番ヲ勤ム、是大坂城番之始メナリ、

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕大御番頭 ○中略 慶長十二年丁未三月十九日、以六組輪番護衛伏見城、頭一年詰、諸組備抜三十人、三年詰、此爲伏見三年番、

〔東武實錄 三〕元和三年、是年伏見城三年ノ在番止テ、一年代リニ成、今年大番頭高木主水正正次、阿部左馬助忠吉是ヲ勤ム、慶長十二年ヨリ去年ニ至テ、番頭一人宛是ヲ勤ム、○又見台徳院殿御實紀

〔台徳院殿御實紀 五十一〕元和五年八月、此月今度伏見城を廢し、伏見在番輩、直に大坂へまかり勤番すべしと命せられ、松平石見守輝澄、松平豊前守勝政、大坂におもむく、

〔仕官格義辨〕在番之事

駿河之儀は、寛永九申年ゟ、大御番松平豊前守組在番被仰付候處、或説ニ申傳候ハ、三ヶ年代り被仰付候故、組中四十二人江戸江下り、交代之儀御願申上候御科ニ付、改易被仰付候由、番頭豊前守御役被召放閉門被仰付候由、右改易被仰付候衆、慶安四卯年被召返、本地被下之、改二代目之者ハ半知充被下候之由、右豊前守代として、松平伊賀守組中在番被仰付、駿府一年代一組充被遣候處、同十六卯年ゟ、御書院番一組充駿府在番被仰付候、

〔東職記聞 二〕大番頭

在衛記曰、○中略 自今年寛永十二年駿府亦以當衛一組被令在衛也、慶延略記曰、寛永十年始被使當衛

在衞駿府也、松平豐前守勝茂奉之也、依是則在衞記、寬永十二年、以北條出羽守爲駿府在衞之始者、恐非也矣、同十六年、於駿府以書院番組被代之也、

〔泰平年表 大猷公〕寬永十年、是年の秋より、駿府に在番始る、大番なり、東照宮薨御の後、御番城と成、大納言忠長卿御拜領より守衞止、去年彼卿事有て、御領所没收の後、又在番始る、同十六年秋より、御書院番一組ヅヽ、大番に加はり、在番せし處、寬政二年八月に至り止られ、同年甲府勤番より遷り住して勤番す、

〔大猷院殿御實紀 二十一〕寬永九年十月廿三日、松平大膳亮忠重、秋田河內守俊季、新庄越前守直好は、駿州の在番仰付られ、○中略大番頭松平豐前守勝政、組士ともに勤番せしめらる、

〔大猷院殿御實紀 四十〕寬永十六年正月廿日、大番士駿府城在番を免され、今より後は書院番もて在番せしめらるれば、每年十月をもて派期とすべしと仰出さる、

〔東職記聞 二〕大番頭十二人 從五位下

萬石以下重代之家流、自兩番頭轉補之也、又於萬石以上、帝鑑間菊間詰、柳間無城家、或交替寄合補之義亦有之也、萬石以上之家、至大坂定番、伏見奉行、奏者番、寺社奉行、若年寄也、萬石以下之家、至側衆、駿府城代、伏見奉行、寺社奉行、留主居也、抑當職者、將軍家御旗本之爲先鋒、故古今被撰其器也、

〔有司勤仕錄〕大御番頭

一從五位下之役也、昔は万石以上、四五万石迄も被仰付候由、今は御役高五千石高に而、又一万石以上も有、假令万石以下にても万石以上之格也、當役被仰付、下屋敷拜領、并次男迄御目見被仰付事也、

〔靈巖夜話 下〕一權現樣○德川家康御時代ニ、御先手と申候時は、大御番衆の儀を指て申候に付、今時の如く、御鐵炮頭衆抔を御先手とは不申樣に有之候と也、世俗に、大御番五万石と申觸候にも子細有之候事の由也、其衆は、古來御當家の大御番組と申候は、頭の知行高に、五十人の組中の知行高を合せ、并組々の與力同心共の御あてがひ迄を、壹組五万石ゟ內の知行高に而は、僅に

御先手役を勤め可申儀、不罷成樣の吟味に而有之候と也、去るに依て、大番頭衆と申は、一万石以上、組衆の中にも、二千石三千石程づゝ知行取被申候衆、如何程も有之候と也、

〔大御番頭格式之留〕大御番頭格式承傳候覺

一大御番頭者、五万石以上城主之格之由、古來之番頭共より傳來候得共、上より被仰出之御書付寫無御座候得者、此段碇とは難申上候、併御奏者番之格式ニ而可有之と奉存候、子細ハ、大御番頭總領之儀者、古來より諸大夫被仰付候、三万石以下之衆之總領、諸大夫被仰付候處、大御番頭悴、右之段ニ御座候、水野備後守儀ハ、大御番頭御奏者番、兼而相勤候由及承候事、

一乘輿之義者、如何程小身之者ニても、大御番頭被仰付候得バ、御免被遊候、五万石以上ハ、城主之格式と申儀、諸家共承傳有之と相見、前々ハ常出會之剋、三四万石之衆ニても無之候得者、大御番頭上座罷在候由御座候處、只今此方より身を隱し候而、右之衆よりも下座ニも罷在候、每度從此方卑下仕過候而、御役之格を損候事故御座候、乘輿之義も、中頃此方より差扣、相止候義有之候處、水野周防守大御番頭被仰付候節、此段歎敷奉存、古來之儀申立候處、被聞召届、今以右之通御座候、

一古來ハ大御番頭被仰付候節、再拜牀几御免被遊、組を被下候との上意御座候由及承候、

一在番等之儀、大坂へハ、加番五万石七万石之衆も被參候得共、番頭より諸事下附被申候事、古來より今以相違無御座候、

一大御番頭下屋敷無之者ハ、定り候而下屋敷被下置候、近年中絕仕候處、從去年如前々被下置、難有次第奉存候、以上、

右之趣、常憲院樣〇德川綱吉御代御尋有之、件之旨其節之大御番頭より申上候由、

元文四己未年十月日

〔吏徵上布衣以上〕大御番頭〇中略　老中支配　菊之間　諸大夫　五千石高　二條大坂在番御合力米、分限應一倍、高壹萬石以上　二條在番御暇、金五枚、時服三、羽織、　大坂在番御暇、金五枚、時服五、羽織、

〔有司勤仕錄〕大御番頭

一在番之節は、其持高程、京大坂之御藏米を請取、組之面々與力同心も如此なり、

〔吏徵別錄上布衣以上〕大御番頭〇中略　寛文五年乙巳三月十八日、御役料二千俵、〇十二人中略　同〇天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、〇中略　享保八年癸卯六月十八日、五千石高、

〔慶寛諸條令下〕御役料之覺

二千俵　大番頭

寛文五年巳七月　日

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、留守居大番頭に千俵、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、留守居、大番頭、五千石以下千俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

五千石ゟ內は、五千石之高ニ可被成下候、　大御番頭

〔吏徵別錄上布衣以上〕大御番頭〇中略　寶曆八年戊寅十一月十五日、向後在番御合力米、萬石以上壹萬石、其餘不被下旨被定、

〔京都御役所向大概覺書二〕二條大御番御目付衆御合力米之事

假令

一知行高壹万石ニ而者

現米四千石

內　貳千八百八拾石　五分四米　七百貳拾石　五分一米

三百貳拾石　五分四大豆　八拾石　五分一大豆

右者御番頭幷御番衆同斷、但與力者三ッ半物成積ニ而、右之通請取之、同心ハ壹人ニ付三石宛、但元祿五申九月、二條御番衆御合力米、銀渡リニ罷成候、初半年分代金ハ、前年多御張紙直段、後半年分ハ、其年夏御張紙直段、右之內五分一米、幷同大豆之分ハ、二條御藏ニ而、米大豆ニ而請取、五分四米大豆ハ、大坂御金藏ニ而、二條御藏衆壹枚手形を以、代金請取之、端金之分ハ、大坂ニ而不相渡候ニ付、二條御藏ニ而、米を以請取之、

部屋役屋敷

〔諸例集中〕一大御番頭部屋出來候事

元祿十四辛巳年九月朔日、進物番本番部屋、大御番頭部屋被仰付候間、其通申渡候樣に、稻垣對馬守殿、御書院方詰番酒井壹岐守江被仰渡候付、御小性組方詰番大久保豊前守申合、進物御番衆江申渡候、

〔京都御役所向大概覺書一〕京都諸役人御屋敷幷組屋敷間數之事

二條御城內

一東御番頭幷與力同心小屋共一構　東西平均三十八間　南北平均四十四間半

二條御城內

一西御番頭小屋構　東西平均五拾三間　南北平均拾九間

同

一西御番頭之與力同心小屋構三ヶ所

内
壹ヶ所七間半八間半　壹ヶ所八間拾六間　壹ヶ所五間貳拾壹間

〔吏徴別錄上布衣以上〕大御番頭　大坂東番頭小屋、總地坪二千百八十坪、建家八百七十二坪二合五勺、内二百三十七坪本家、〇中略四百十四坪七合五勺家中小屋、同西番頭小屋、總地坪千百三十坪、建家七百二十一坪二合五勺、内二百二十六坪七合本家、〇中略三百四十坪五合家中小屋、

〔仕官格義辨〕三番頭并小十人頭之事

問云、三番頭は、古き御役と及承候、いつ頃より始り候哉、答云、三番頭之儀は、何れも古き御役之内、別而大番頭ハ古き事之樣に承候、三州岡崎に於て、菅沼藤十郞、後越後守と改松平善四郞、後石見守と改渡邊久三郞、後大隅守と改右三組被仰付候由、天正十五寅年被仰付候組は、松平忠左衞門、後大隅守と改水野藤十郞、後對馬守と改水野淸六、後市正と改む其後慶長十二未年、松平出雲守、松平石見守、水野備後守、右三組於駿府御城被仰付、元和二辰年、松平丹後守組被仰付、此時大御番十組ニ定候處、寬永三〇三恐五誤辰年、渡邊山城守、組共駿河大納言殿江被爲附、一組減じ候ニ付、右山城守組之代りとして、小笠原壹岐守、組共新規被仰付候由、其以後寬永九申年四月八日、皆川山城守、内藤石見守、新規二組被仰付、大御番都合十二組に相定り候由、同十一戌年、松平丹後守組筋、松平豐前守番頭之節、組中四十二人御科有之、改易被仰付、頭豐前守ハ御役被召放、閉門被仰付、右代りとして高木主水正、組共に新規被仰付候、其節ゟ今以大御番ハ十二組ニ御座候由、

〔吏徴別錄上布衣以上〕大御番頭　天正十五年丁亥、十三年戊戌日十四年戊日、月日、始置三組、菅沼藤十郞定吉、松平善四郞康吉、渡邊久三郞重綱、三州岩崎安祥岡崎之御譜代衆を附せらる、　同十六年戊子月日、增置三組、此稱後三組、松平忠左衞門重勝、水野藤四郞重仲、水野淸六郞近勝、三遠之御譜代、武田今川衆を附せらる、〇中略　同年〇慶長十二年閏四月廿九日、於駿州置三組、同所在住後東下、松平出雲守勝隆、

松平石見守康定、水野備後守分長、　元和二年丙辰六月廿八日、增二置一組一、合十組、松平九郎右衛門忠利、○中略　同年〇寬永二年月日、一組、駿河大納言殿附屬、渡邊山城守重綱、　同三年丙寅、增二置二組一、合十一組、小笠原壹岐守、　同九年壬申四月八日、增二置一組一、合十二組、内藤石見守、于レ時市正、○中略　同十一年甲戌五月七日、駿府在番四十二人改易、一組減、此年又置二一組一、合十二組、

〔三番頭歷代〕大御番頭始記

始三組

菅沼越後守定吉 前藤十郎　松平石見守康吉 前善四郎　渡邊山城守重綱 前久三郎

右三組者、於二三州岡崎一、天正十五亥年或十四戌年とも被二仰付一、是御當家諸組之始也、安祥、山中、岡崎、并三州遠州之御譜代衆組下ニ付、文祿元辰年朝鮮陣之時、肥前名古屋迄供奉、

後三組

松平大隅守重勝 前忠左衛門　水野對馬守重仲 前藤四郎　水野市正近勝 前清六

右三組者、天正十六子年或は十五亥年とも被二仰付一、三州遠州之衆、武田衆、今川衆、組下ニ付と云々、

右六組之内、關東御入國以後、越後守、山城守、市正、秀忠公江被二爲附一候、

駿府三組

松平出雲守勝隆　松平石見守康定　水野備後守分長

右三組者、慶長十二未年被二仰付一、三州遠州之御譜代衆之子供或弟、武田今川北條衆組下ニ付、此三組者、家康公御隱居附ニ而、駿府ニ在住、家康公薨御以後、關東江下ル、

〔東職記聞二〕大番頭十二人

元寬日記曰、私說曰、昔者永祿元龜中、神祖主二參州一之時、纔三組、天正中、就レ封之時、增二三組一、後漸增レ之爲二十二組一也、又曰、元和二年六月、台德院殿增二一組一、以二松平九郎左衛門忠利一被レ補レ之、神祖之代、當衛

九組、今增之、總十組也、代々記曰、寛永九年四月、大猷院殿增一組、以內藤石見守信廣被補之、同年九月又增一組、以皆川山城守廣照被補之、總十二組也、寛永十一年三月、松平豐前守勝茂解職、初勝茂當駿府在衞之時、有其部下樹黨訴非義者、大猷院殿怒被改易彼黨四十二人、而罷其組、同年又增一組、以高木主水正正成被補之、爾來十二組無增減也、集成曰、天正十八年二月、小田原役、當衞之從事者六組、松平忠左衞門重勝、松平善四郎康安、松平助十郎勝信、(恐正勝誤)松平十三郎勝玄、荒川次郎九郎、水野清六郎光忠等六人、統領人別五十人也、當此時松平勝玄罷病、神祖卽使組頭鳥井久兵衞權掌白旄之任、荒川氏亦罷病、使組頭菅沼藤十郎權掌白旄也、柳營婦女傳曰、天正十五年三月、神祖於駿府始被命六組、而記姓名如集成也、代々記曰、秀吉遣諸將征朝鮮、親至肥前州名古屋聽軍政、神祖亦與之屯名古屋、當此時當衞之從事者三人、菅沼藤十郎、(後越後守)松平善四郎、(集成曰、慶長六年十一月、叙從五位下、任石見守、)渡邊久三郎(後山城守)等也、是稱始三組也、以松平忠左衞門、(後大隅守)水野清六郎、(後東市正)水野藤四郎(集成曰、慶長六年十一月、重仲叙從五位下、任對馬守、)等之組、稱後三組也、天正就封之後、以菅沼水野(清六郎光忠)渡邊三氏被屬監國君(台德院殿)也、後又於駿府被增置三組、松平出雲守、松平石見守、水野備後守等補之、是稱駿河三組也、神祖薨之後、合爲九組、元和二年、增一組、以松平忠利被補之、總十組也、案代々記之說、頗近謬乎、如何者、稱始三組者、三州以來之舊隊、而爲後三組者、天正十年以後可駿府而增置者也、而爲其駿河三組者、神祖讓職之後、當在駿府可屬之者也乎、始後駿之九組、名存而實違、或實存名違歟、予(○小林无逸)暫考之古史、元寛日記、既云中幾三組、天正入封以後、漸爲增置、又集成載當職六人之姓名也、婦女傳亦云、天正十五年、始命六組也、以理推之、中爲三組、則天正十五年、增三組而可爲六組也、是代々記所謂可始與駿河之六組也、而爲其駿河三組者、慶長十二年以後、屬神祖者、而謬名實者必矣、爲其後三組者、天正就封之後、增置而可屬監國君者也、夫雖似難代々記、其說齟齬集成、婦女傳、記以待識者也、

組頭

〔慶應二年武鑑〕大御番頭

一番組、中指物黒地紋白、　大岡越前守愛致　二番組、同赤地紋黒、　齋藤攝津守
三番組、同紺地紋朱、　菅沼左近將監定長　四番組、同紺地金紋、　神保遠江守相徳
五番組、同濃淺黄金紋、　戸田長門守忠行　六番組、同赤地紋白、　丹羽長門守氏中
七番組、同淺黄地朱紋、　大久保出雲守教義　八番組、同紫地白紋、　土岐肥前守頼禮
九番組、同白地朱紋、　　十番組、同白地黒紋、　米倉丹後守昌言

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月、大御番五組ヲ減ズ、
頭は御役御免、勤仕並寄合に、與頭は勤仕並小普請に、組の中壯年の者は、奥詰遊擊隊其外銃隊役々へ御入人、但し大御番、元十二組の處、先年二組減じ、跡五組殘る、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配
一大御番組頭　四拾八人

〔東職記聞二〕大番頭十二人、○中略組頭四十八人、
毎組置四人、職掌從番頭奉行組衆事也、

〔明良帯錄〕大御番組頭
一隊四人にて、一隊の世話をなし、二條大坂に赴て、組向諸願諸屆等を承り頭へ達す、

〔職掌錄〕大御番頭
二條にては、兩頭の內御本丸と二丸と請取あり、筆頭の方御本丸也、組頭は隔番に御本丸ばかりに泊番を勤め、與力同心は、各入口の番所を勤むる也、

〔有司勤仕錄〕大御番頭
一御城內○二條、大坂、御普請等は、組頭ゟ壹人ヅヽ小奉行を出し、組之衆ゟ家來を出させ小普請所之

掃除等をなさしむ、

〔御當家令條二十四〕定

一此以前ゟ、於道中不作法之由被爲聞召候間、自今以後、左樣之儀於有之は、急度可被仰付旨上意候、彌道中之儀、入念可被申渡事、

一於道中萬事不作法之儀、并押賣押買不仕候樣に、下々江堅可被申付候事、〇中略

一泊々にて宿賃相濟非分無之由、宿主より手形を取可申事、〇中略

一四月二日罷立候番頭ゟ、壹人も先ニ登り被申間敷候、同八日罷立候番頭ゟ、壹人も跡ニ登り被申間敷候、自然用所有之衆は、前廉其斷可被申事、

一役人衆、二條御役請取被申事、先番之番頭、四月十三日大宮通江參着、十四日十五日兩日、組中大宮通可被致參着、役人衆は、十四日之組江附登、十五日御城中之役人衆ゟ御役請取被申、十七日御城中江入代り被申、御番衆一所ニ御城內江入可被申候、下組之役人衆は十七日ニ下り可被申事、

一跡登り之御番衆、十六日十七日兩日、大宮通被致參着、御番頭は十八日大宮通參着、御城中江入候事、右定之日限に入替之役人衆は、十六日之先番に附登被申、十七日御城中江人を遣、十九日御城內江入、先江御役請取被申候役人衆ゟ、御役義之請取可被致相談、跡下り組之役人は、十九日下り可被申事、

一江戶ゟ京都迄、日數十一日之積ニ而、大隅守組四月十四日、豐前守組十六日十七日、如斯至京、大宮通可在參着候、大隅守義は十三日、豐前守十八日に、京都可致參着候、但風雨有之而、往行於不成は各別候事、

附二條御城江入替之儀、四月十六日之朝、大隅守、同十八日之朝、大隅守組、十九日廿日兩日之

朝、豐前守組、同廿一日之朝、豐前守入替申筈候、何も御番請取之刻限、明六ツ定之事、

右ケ條之通、二條御番道中之作法、御番衆中江急度可被申渡候、以上、

明暦二年四月四日朔日　大御番頭名判

組頭中

〔大番職制〕起請文前書

一今度大御番組頭被仰付候、彌重公儀、御爲第一奉存、聊以御後闇儀仕間敷候、勿論御爲惡鋪儀、申合仕間敷候、万事精入、御奉公油斷仕間敷事、

一從跡々被仰出候御法度之趣、堅相守、猶以於殿中茂、不作法之義無之樣相嗜可申候、幷其以後被仰出候御條目壁書等、是又違背仕間敷候事、

附相役中は不及申、御一門方を始、諸大名諸傍輩ニ對、御爲惡心を以申合、一味仕間敷候事、

一相番中、萬事御法度以下、無依怙贔屓可申合候事、

一相番中、善惡之儀、親子兄弟知音之好、又は中惡敷輩たりといふとも、無贔屓偏頗、有體言上可仕候事、

一相番中ゟ役人出候僉議、番頭相談之時、雖爲他番、數奇之通無遠慮、依怙贔屓不仕、似合敷仁書出可申候事、

附御奉公ニ候間、常々及心程、他番之面々ヲ茂樣子存候樣心を附可申候事、

一二條大坂御番之節、右之通相守可申候事、

〔仕官格義辨〕諸御番組頭之事

大御番之組頭衆は、先規は四人共、其組ゟ被仰付候得共、享保四年、大坂在番之節之儀ニ付、番頭松平志摩守御役被召放、組頭長田傳十郎、岡部八郎左衛門、南條小十郎、神谷源三郎、御役被召放、四人

ども半地に被仰付候、右之跡岡野備中守組替被仰付、組頭茂向山七之助、五味藤四郎、兩人備中守與頭〻組替被仰付、水野壹岐守組〻村上三左衞門、土井豐前守組〻永井勘兵衞、右兩人他組〻被仰付候、如此已後壹組〻兩人、他組より二人充被仰付候、○中略又問云、我等承候は、大御番組頭〻御徒頭被仰付候儀も、新御番組頭〻御先手被仰付候儀も、先規〻無之由申仁有之候、右之趣被及聞候哉、答て曰、○中略大御番與頭より御徒頭被仰付事も、希成義に候、寛永五辰年十一月五日、大御番與頭より、兼松彌五右衞門御徒頭被仰付候と承傳候、近年にては延享二巳年九月朔日、大御番與頭〻小林甚五左衞門、御徒頭被仰付候、

〔有德院殿御實紀十六〕享保八年三月八日、大番の組頭四人ともに、その隊下の番士より選ばれしが、これよりは隊下より二人、他隊より二人命せらるべしとなり、

〔吏徴上御目見以上〕大御番組頭○中略頭支配　躑躅間　六百石高　在番御合力米、分限應一倍、千石以上千石、　在番御暇銀拾枚、時服貳、

〔明良帶錄〕大御番組頭六百石高○中略小高にて骨折場なり、尤御役高よりも多き人も多し、

〔慶寛諸條令下〕寛文六年午七月二十一日、御黑書院へ出御被爲成、御役人被爲召、御役料被下候覺、

大御番組頭

一二百俵

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十二日、諸役人の役料を加祿となして給る、○中略大番之與頭、○中略二百俵、

〔有德院殿御實紀十三〕享保六年閏七月十六日、大番組頭の實祿、四百俵より下なるには、此後四百俵の官料を賜ひ、戍役にまかりし間は、更に四百俵を加給せらるべしと仰下さる、

〔享保集成綵綸錄三十〕享保八卯年六月

大御番組頭

六百石ゟ内は、六百石之高に可ㇾ被ㇾ成下ㇾ候、

〔天保集成絲綸錄七十七〕文化九申年三月

御勘定奉行江

二條大坂在番ニ罷越候大御番御合力米、○中略組頭之儀も、千石迄は一倍、千石以上は千石を限り可ㇾ被ㇾ下旨、大御番頭江相達候間、可ㇾ被ㇾ得ㇾ其意ㇾ候、

〔東照宮御實紀九〕慶長九年、此年○中略大番朝倉藤十郎宣正、三雲新左衛門成長は、その組頭となり、宣正采邑二百石加へられ、四百石になり、成長は千石加へて千五百石となり、○下略

〔東武實錄六〕元和五年、是年小野麻右衛門、佐橋甚兵衛、大御番ノ組頭トナル、

〔武野燭談十九〕酒井雅樂頭忠清評并水野周防守事

一年水野周防守忠增は、大御番承りし頃、いつの時に歟、組の何某遲參し、西の丸御門〆らるゝ所へ參り還り、いまだ扉は立て貫木を指ざりしに、走り入んとせられたるを、御目付某、人は輕し、法は重しとて、嚴敷咎めて押返し、閉門に申行ひける、其御目付、あやにくも又周防守が番之節遲參して、暮六ツの大鼓打仕廻うて後に、西之丸寢番に登城しける、周防守、與力同心に下知しける故、通らんとしても闖入ず、周防守へ通達しければ、中々闖入ず、役義を照して通らんとせば、後程いよいよ重かるべしと、是非なく歸參して仲間へ達しければ、御役義危相成とて御叱、御役儀被ㇾ召放、閉門しける、されば御目付中、周防守に目を付ける、忠增も又こまれ者にぞ、大御番頭は、五萬石城主同格と定めらるゝを以て、總御目付中へ差添て居けり、されば或御禮日に、御目付御目見江對限案内しける其言葉論、殿中にして過言とや有けむ、捨置難く御役被ㇾ召放、閉門被ㇾ仰付ける、寛文十一年の事なり、此跡役土屋兵部少輔之直給はりけるに、延寶六年に、又其組人、水野周防守再び預りけるは、雅樂頭○酒井忠清が一言なりといへり、されば土屋跡誰にやと、雅樂頭へ老臣より相談

組衆

に及びしに、誰々と申迄なし、周防守再任可然、大番之格式を能辨へて仕ふ者を、爭可捨置や、昔御目付中口論は、全く周防守が非分と雖申、大番頭は大名同格、五万石城主格程の御あしらい被成上は、大御目付中ゟ、御禮始る抔との通達可有を、總御目付中も、時に取ては案内有事故、限を知せたるに、聞付ざるとて再應の口論も、一ッ御役筋違亂を能見ば、聞ぬ由ありたるべし、其節之御咎めは、閉門宥せられぬ、既に閉門せられ、年久敷罷成上は、又こそ被仰付め、上意を伺ふべしとて言上に及び、再三組の支配、壹萬石ゟ難有とて、元祿五年に至て大御番頭に成ける、其後綱吉公之御側列ニ被召出ける、其人となり思ひやるべし、

〔吏徴上御目見以上〕大御番六百人○中略　一組五十人

〔仕官格義辨〕御番衆之事

大御番は、虎之間に御番被勤候由、寛永年中ハ、二條大坂駿府江戸在番勤候故、右三ヶ所之御城江戸在番組登り候而、休など有之節は、漸四組程に而江戸御番は勤候由、寛永十六年ゟ駿府在番之儀は御書院番之勤に成、二條大坂計之在番に而、江戸御番は、八組或は六組に而勤候處、同二十未年八月、新御番新組ニ四組被仰付、御番所江戸奥近勤、其節ゟ御小性組は紅葉之間江戸勤、御書院番は虎之間江戸勤、大御番は江戸御番御免に而、二條大坂之御番計勤候處、江戸御番無之候而は、おのづから御番衆之行儀江戸悪敷成候ニ付、又々江戸御番江戸被仰付候樣、番頭衆願被申候得ば、御本丸に而御番所無之候間、西丸明キ御殿御番被仰付、夫ゟ明キ御殿を大御番之御番所ニ被成候由、扨御能之節は、大御番と御徒御前置ニ出候事、むかし虎之間御番ゟ大御番衆御玄關之御番ゟ御徒御前置に出候、右之引續に而御前置相勤候と承傳候、

〔吏徴別錄上布衣以上〕大御番頭○中略　同〇寛永十二年乙亥三月廿一日、大坂二條駿河在番、替々可勤之、江戸御番御赦免、○中略　同二十年癸未、虎之間勤番御免後、西丸明御殿之節勤之、　慶安元年戊

子三月十三日、二組西丸附、同四年辛卯月日、西丸遠侍虎間二ヶ所勤番、〇中略寛永三年丙戌十一月廿六日、二丸勤番、同六年己丑十一月日、西丸勤番、〇中略同〇享保十年乙巳六月朔日、二丸勤番、

〔大猷院殿御實紀二十七〕寛永十二年三月廿一日、大番衆は、二條大坂駿府に交代して戍役すべしと命せられ、江戸の勤をゆるされ、〇下略

〔三番頭歷代〕西丸二丸御番所之覺

寛政二戌年四月二日、西丸御番所ニ成ル、西丸御書院御徒番所、大御番持ニ成ル、同月十二日ゟ、西丸ニ勤番、

同八辰年十二月十日、二丸御殿可相勤旨被仰付、同十六日、壹番組ニ而御番所請取、八番組、同廿日初而御番、二丸江出ル、

〔明良帶錄〕大御番

二丸、大御所樣御住居の節、宿衞心得有リ、

〔職掌錄〕大御番頭

御番衆は二丸御玄關、與力同心は同銅御門に勤番す、

〔有司勤仕錄〕大御番頭

一江戸にて廻り番と云事有り、其内は御番を不勤、〇下略

〔寶曆集成綸錄十六〕延享二丑年十月

一大御所樣〇德川吉宗上野增上寺御參詣之節は、向後大御番一組、御先番相勤候樣可被致候、

但只今迄、兩御番御先番相勤候通可被致候、尤兩御番之御先番は相止候、

右之通、大御番頭江相達候間、爲心得申達候、〇下略

〔大猷院殿御實紀五十一〕寬永十九年六月八日、城米井廩米の員數、明詳に査檢すべき旨仰出され、小姓組八人、書院番七人、大番十五人、査檢の奉行仰付られ、勘定頭曾根源左衞門吉次、及び伊奈半十郎忠治にはかりあふべしと命せらる、

〔嚴有院殿御實紀十九〕萬治三年六月十八日、大番依田小隼人貞淸、內藤源左衞門正淸關宿より江戶までの水路浚利の奉行命せらる、

〔明良帶錄〕大御番

在番を主役とす、隔年二條春登大坂秋登え交隊す、代人取人とて每年登るあり、殘り役一人は、江戶にて留守番衆の宅心得、其外世話扱ひ致し、異變其外あらば取計、書狀の取次等致す也、御茶壺附一人あり、

〔有司勤仕錄〕大御番頭

一在番之組之內、病氣差合有之不足なる時は、他組ゟ代りを取り、是を取人と云、右殘りたる人は、又他之頭之組江在番中割組と云に成るなり、

一又組之內に殘役と云あり、是又江戶殿中向、其外之日々の違變を三度飛脚に云遣す也、飛脚之頭分の方ゟ出す也、○中略

一近年平番之內、身上高之者一人、宇治御茶壺御用を相勤、御數寄屋頭壹人、同坊主貳人、同心貳人、一所ニ罷越、是は五月迄居殘り、江戶發足也、同壹人、宇治御茶壺送り御用相勤之、勿論是は交代之時節ゟ先達而彼地江發足、

〔有德院殿御實紀十六〕享保八年二月十二日、これよりさき、茶壺を宇治に往來するは、徒頭の護送することなりしをやめられ、二條城の戍役に赴く大番隊より、番士貳人附添まいり、歸路は、大坂城よりかへる番士うけたまはることにあらためらる、

〔大番職制〕休日數之覺

一取人休　五十日　一代人休　三十日　一代々人休　十五日　一二度目代人休
十日　一差人休　五十日　一差人之代り差人休　三十日　差人之代三度目ゟ休
二十日

右何れも被仰渡候、翌日ゟ前書之通り之事、○中略

一御金宰領休　二十日　一同宰領休　十日○中略

一大坂御金請取休　前後五日ヅヽ　一類燒休　三十日○中略

一牢類燒休　十五日　一床上水附休　十五日○中略

一地震家潰休　三十日　一屋敷御用ニ付被召上代地被下候節休三十日、

〔憲教類典二ノ十六二條在番〕寛永十七庚辰年三月七日

條々

一萬事法度之旨堅相守之、番頭組頭申渡義、聊以不可違背事、

一喧嘩口論制禁之訖、若有之剋は、其前ニ在合輩可計之事にも成間敷儀を見ながら、不可令致懸事事、

附、令荷擔族、其咎可重於本人事、

一自然如何樣之儀雖有之、不可出城中事、

右可相守此旨者也

寛永十七年三月七日　御黒印

條々

一御番衆之外、人つき合停止之事、

一御番所に武具并得道具可置事

一御番衆之內、振舞一切禁止之、雖然於番頭之所振舞之節、二汁三菜、此外は肴吸物以下も可爲無用、酒三盃、大盃停止之事、

右可相守此旨者也、仍執達如件、

寛永十七年三月七日　對馬守判　豐後守判　伊豆守判〇以上三人皆老中

〇按ズルニ、同時大坂在番ニモ亦此諭告アリ、

〔教令類纂初集四十〕寛永十九壬午年六月十日　右衞門大夫〇老中松平正綱　支配方江觸

上意之趣

一大御番者、大坂二條に而も、一倍物成被下候に付、身體可成と被思召候、身體不罷成候樣子細も候はゞ、可申上候由、上意被爲成候事、

一家居結構、妻子之衣類風情、萬事に付而、分限に過奢候故、身上も不罷成候と被思召候事、

一大御番は大組に候得ば、御旗本之先手江被仰付候、此儀を專一ニ存じ、自然何事も有之時、御用にも可罷立と心懸け、むざと私之奢り不仕候樣ニ致、分別候儀肝要ニ被思召候事、

一人々身體之儀は、身により候間、人何角不申候とも、おろかに有之間敷候事、乍去身上一事と存、金銀嗜べとの儀に而は無之候、何事も有之時は、御用ニも可罷立と心掛、身持をも可仕覺悟、肝要ニ被思召候事、

一ヶ樣被仰出上は、右之心懸もなく、身體持くづし申もの有之ば、番頭言上可仕候、急度御改易可被仰付候、左樣之もの有之を不申上候はゞ、番頭組頭ニ御懸可被成候由上意に候事、

〔享保集成絲綸錄三十〕寛永二十未年二月

一御小性組、御書院番、大御番、右之面々、此以前御金被下之、或は御加增、或御借金等被仰付之處、進

退不成之旨達上聞、最前雖爲御重恩、右之仕合不屆ニ被思召之間、向後無其品進退於不成は、御穿鑿之上、可被行曲事之旨、堀田加賀守、松平伊豆守、阿部豐後守、阿部對馬守、朽木民部少輔列座有之而、右之頭中江傳上意之趣、其後彼組中之面々列侯之席江三輩出座有而、右之通相傳伊豆守擧、

〔寶曆集成絲綸錄十六〕寛延二巳年八月

大御番頭
詰番之外四五人罷出

御番方之面々、并辨當之儀、前々被仰出も有之候處、近來別而手重ニ相成、出會等之節も、諸事過分之物入等も有之、在番先ニおゐても右之通ニ候由、粗相聞へ候、分限不相應之物入等有之候而は、御奉公障候品も可有之哉、左候而は如何ニ候、以來右體之儀無之樣、急度可被申聞候、

〔螢の燒藻の記上〕三十五の歲、家督をゆづり請て、あくる年の春、大御番へ御番入して、杉浦出雲守組にて、去秋七月、大坂の御城の宿直に登りぬ、扨一とせが程、御城のうちにありて、隊中のならはしを見るに、一組五十人を與頭四人に割て預れり、十一人、十二人一と類のうちに、年久敷勤むるものを伴頭とて、其十餘人をすべて萬のことを扱ふに、彼伴頭に向ひて頭をあぐる者さらになし、敬ひ恐ること神佛にも越たり、毎日彼に行て安否をとひ、九ッ時まで、皆打こぞりて彼小屋に詰る、夜は茶講とて、順を立て小屋に集りて、四ッ打頃までは、互に雜談して退散する、

此兩條、はじめは樣なき俗習の樣に心得たりしが、至極尤なることにて、昔より定め置けることは、いづれ故有ることなりけり、

朝夕彼伴頭にへつらふこと、權門の出入にも增れり、藝は下手なれども上手とおもねり、非は理と稱してへつらひ敬ふ、是古よりの俗習なり、翁○森山孝盛は左もなく、實によきことはよきと稱し、心に落ざることは、手をおさめ口を閉て居たりしに、御城中東西の番頭二隊、勤士百人、互に往來

して日を送るうちに、西を見ても、さのみ恐べき人もなく、貴べき德ある人もみえず、東を見ても、皆人もなく、賢者もみへず、年頃恐れ思ひしには違ひて、こは心安きことかな、浮世の勤といふものは、かばかりのことにこそあれと思ひて、心にはほくそゑみて過ぬ、

〔翁草六十六〕別所彌四郎井上富次郎事

大御番別所彌四郎ハ、元文三午年、二條在番トシテ罷登、同夏御城中ヨリ出奔ス、〇中略江府ニテ糺明ノ上、彌四郎出奔ノ始末、侍ニ不似合仕形、不屆之由ニテ死罪仰付ラレケル、其後三十餘年ヲ經テ、明和九辰年十月、同冬安永ト改元二條在番高木主水正組井上富次郎御鐵炮御用衆井上左大夫分家井上傳次郎養子、高貳百俵、事、五分四金ヲ受取候以後、右金ヲ携、同十月、右彌四郎同樣ノ仕方ニテ拔出ル、〇中略東都ニ於御穿議ノ上、富次郎儀、寛宥ノ御沙汰ヲ以、死罪一等ヲ被除、遠嶋被仰付、〇中略此別所井上ガ事ハ評論ニ不及、總ジテ御番衆ノ風俗、古トハ懸隔シテ、年ヲ越テ惡クナル、一々露顯セバ、出奔ノ科ニ勝レル事多カルベシ、五十餘年以前迄ハ、餘風猶遺リテ、御要害ノ主意ヲ不忘、永在番ニ格別猥ナル事モ少カリシニ、次第ニ奢長ジ惰弱增テ、一年ノ在番ノ內ニ、御宛行ハ疾ク遣ヒ切、當地交代ノ節ノ路用調兼ル族多ク、城入ノ町人共ニ借金シテ、稍ク歸府スト雖、每々返金滯ニ仍、其後ハ冬季五分四金相渡ル以後ハ、町人共ヨリ一切金ヲ借サズ、是故ニ歸府ノ期ニ至、路用手閊難儀ニ及ブ輩少カラズ、夫サヘアルニ、近年ハ御城入ノ町人共、一統ニ大ニ手懲シテ、何モ申合セ、用金調達斷申ニ仍テ、御番衆ノ迷惑大方ナラズ、是町人共ノ惡キニアラズ、銘々返金滯ニ仍ノ儀ナレバ、皆自ラノ爲セル處也、

〔吏徵上御目見以上〕大御番六百人〇中略　頭支配　貳百俵高　在番御合力米分限應一倍五百石以上、五百石、
御暇銀十枚

〔大猷院殿御實紀五十九〕正保元年十二月廿五日、この日〇中略大番二十四人に貳百俵ツヽ、〇中略給

はる、

〔嚴有院殿御實紀 四十二〕寛文十一年三月廿四日、京戍役の番士は、大津に於て給はりし廩米を、この後は二條の米廩にてたまはるべしと番頭に命ぜらる、

〔營中御日記 九〕寛永九年九月十八日、大坂二條在番之大御番衆御合力米之儀、以御朱印所載之知行高之積被下之、

〔吏徴別錄 上 布衣以上〕大御番頭〇中略 元祿元年戊辰、二條大坂在番之面々御合力米、江戸御張紙直段に而可被下旨被仰出之、〇中略 寳永元年甲申十一月、二條大坂在番之輩江御合力米、金に而被下、

〔天保集成絲綸錄 七十七〕文化九申年三月

御勘定奉行江

二條大坂在番ニ罷越候、大御番御合力米、唯今迄は、都而高一倍被下來候得共、向後五百石迄は、分限高一倍之御合力、五百石以上は、高之差別なく、總而五百石之御合力被下之、〇中略 大御番頭江相達候間、可被得其意候、

〔螢の燒藻の記 上〕翁〇森山孝盛 も何心なく、日頃心にうかびぬるあらましを書付て見るに、中々成事ながら、賢愚厚薄共に、かゝることいとひ給はぬよしなれば、中川忠英〇勘三郎、後飛驒守、が彼朝臣〇松平定信 の許に便あるにつけて、ともかくもえ給へとて預置たり、其大要は、近來御書院大御番は、在番先にて御合力の引合により、高の者は多く被省て、容易に御番入も成がたく、殊更取人代人も、近來は番頭家來に賄賂を送らざれば不叶、何百石は何十兩などゝ云如く、賄賂の高下定りて取人を極たり、是に付ては在番先御合力の割合を可被極哉の事、〇中略 愚案の趣く所、日頃含み思ひたることを認出したり、

〔螢の燒藻の記下〕大御番三十年あまり勤て、賄賂內金のことにて、小普請に入れられたる人もあり、御番三十年も勤ぬれば、いかなることありても、立身こそせざらめ、大抵のことにて小普請入するほどのことはなき物を、殊更御改正の後に至りて、一統廉直潔白を示さるゝ最中、賄賂のことを扱ひて世にも知れ、其理りの通れがたく成て退勤したるは、いかなる發明なるにや、但し天命の然らしむる所か、はた智の餘れる所なるか、

〔仕官格義辨〕三番頭并小十人頭之事

問云、○中略或說に、寬永之頃ハ、大御番之屋鋪番町にて被下之、表裏に十二組致住居、裏三番町は無之故、四ッ谷大番町に而被下候旨申傳候、此說如何候哉、成程番町之儀は、昔大番之屋敷に被下候故、所之名をも番町と申候、

〔吏徵別錄上布衣以上〕大御番頭○中略 文祿元年壬辰、江城西北の地、大御番組衆宅地を給ふ、六組ニ分ちて、一番より六番迄の名目あり、今の番町是也、

〔明良帶錄〕大番頭

古ハ武士皆土着なれば、隊吏自分之住居より十里二十里隔て、江戸へ宿直に出れば、番町にて湯沐所を被下、番町裏表十二小路有は、十二組之小屋割なり、小身之衆に、關八州之內を知行に下さるゝは通勤之便利、此謂れなり、

〔京都御役所向大概覺書一〕京都諸役人御屋敷并組屋敷間數之事

二條御城內

一東組御番衆小屋總構　東西平均三拾八間餘、南北平均九拾五間半、

一西組御番衆小屋構　東西平均十六間半、南北平均九十九間半、

一同南横手之小屋構　東西平均六十六間、南北平均二十五間半、

與力同心

〔吏徵別錄上 布衣以上〕大御番頭〇中略 大坂東御番衆小屋、總地坪二千五百七十坪、建家千六百六十九坪五合九夕二撮、同西御番衆小屋、未詳、

〔憲教類典二ノ五 御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

大御番頭〇中略 與力十騎、同心二十人ヅヽ、

〔吏徵下 御目見以下〕大御番與力百廿人　一組十人

大御番同心貳百四十人　一組貳拾人

〔大御番頭格式之留〕一慶長十二より元和二年迄、十年之間、駿河府中御城、權現樣〇德川家康被遊御居城、內、大御番七組にて御番相勤申候、

一右七組與力同心無之、銘々家來指出、御門御番相勤、御成之節、御直參之者とまがひ申候ニ付、御老中以差圖、家來之者ニハ、羽織袴ニ而、御目通平伏仕候、羽織袴ニ而罷在候者ハ、何者ニ候哉と被遊御尋候ニ付、大御番頭、與力同心持不申候故、家來差出、御門固申付候、御直參之者とまがひ申候ニ付而、見分之ため、年寄共差圖を以、家來之者ハ、羽織袴にて罷在候由達上聞候處、與力同心持不申候者、召抱させ、家來同前召仕可申旨被仰付、同心者御扶持方ニ而召抱、家來同前召仕申候、

一大御番一組與力十騎ヅヽ、七組ニ而七十騎、同心御扶持方ニて廿人ヅヽ、召抱申候、

〔柳營秘鑑三〕御城內外御門番所勤仕之覺

一二九銅御門　大御番與力同心

〔有司勤仕錄〕大御番頭

一二條大坂にては、〇中略 與力同心は、各之請取之入口之御番所勤る也、

〔東徵御目見以下〕大御番與力〇中略　現米八十石高　御預與力貳百俵二條大坂在番、御合力米四ッ物成、　二條大坂在番御合力米貳百俵、三ッ半物成假抱入十人扶持在番御合力米貳百俵　給知取廿五人二番組六人、六番組十人、九番組九人、　役上下、御抱場、

〔東徵別錄御目見以下〕大御番與力　寛永二年乙丑二月、大番頭井足輕大將衆ニ、馬乘同心十騎充被仰付、御知行、上總之內ニ而貳百石充被下候、是迄は步行同心計預申候、松平出雲、植村帶刀、松平大隅、牧野內匠、安部攝津守、松平豐前守、植村出羽、已上七組計與力、何も一所ニ知行被下、此外殘大番二組、本多備前守、去々年相果、其跡未頭不被仰付、明跡ニ而頭無之、阿部左馬允義、去年相果、未其跡頭不被仰付候、此二組、今度與力不被仰付、後日ニ追而頭被仰付候時分、御訴訟申上候付而、與力被仰付候得共、御知行ハ不被下、御藏米ニ而貳百俵充被下候、　同七年庚午八月四日、大隅守、內匠頭跡、大番頭被仰付、保科彈正、堀市正也、組與力同心ハ、大隅守內匠頭ニ付、御留守居組ニ成候間、彈正市正ニハ、新規與力同心被仰付、　同九年壬申十月七日、水野備後守與力十騎被仰付、大御番頭は皆以寛永二年ニ與力被仰付、知行ニ而被下候、此組其頃番頭相果、久敷明申候ニ付而、其時與力不被仰付候て、于今同心計ニ而御番仕候處ニ、皆並に今日與力被仰付候、

〔營中御日記九〕寛永九年十二月九日、申刻大御番頭衆與力、〇中略　當年新規抱置候者に半物成被下旨、年寄衆於御臺所被仰渡之、

〔憲教類典二ノ九御番〕元祿四辛未年四月廿六日

大御番與力〇中略

覺

右地方知行取來候ものども、少給ニ而ハ百姓困窮いたし候沙汰有之ニ付而、今度遂吟味候處、先規より譯有之、地方拜領之筋目も有之候、依之前々之通、領地被下置候間、彌百姓困窮不仕、領知作

法能樣ニ可申付之よし、右頭中へ可被相達候、以上、

四月廿六日

〔吏徵別錄御目見以下〕大御番與力〇中略　享保九年甲辰七月十三日、現米八十石、

〔吏徵御目見以下〕大御番同心〇中略　三拾俵貳人扶持高　假抱入拾俵壹人扶持　二條大坂在番年、御合力米現米三石貳人扶持、　御抱場

〔嚴有院殿御實紀三十〕寬文五年六月廿一日、大番書院の同心成役のとき、これより先月俸五割增加ありしが、其後は一倍加へらる、

古事類苑

官位部六十八

徳川氏職員十七

書院番頭

書院番ハ、當初殿中白書院ノ紅葉ノ間ニ勤番セシヲ以テ此名アリシガ、寛永二十年以後ハ、虎ノ間ニ勤番スルコトヽナリ、又玄關前中雀門、及ビ上埋門等ノ諸門ヲ警衛シ、其他小性組番ト共ニ、諸儀式ノ席ニ周旋シ、將軍ノ出行ニ扈從シ、市中ノ巡廻ニ從事ス、又寛永十六年以後ハ、大番ニ代リテ、毎年一組ヅヽ、駿府城ニ在番セシガ、寛政二年ニ至リテ之ヲ廢セリ、此職ハ慶長年中ニ始マリ、寛永九年ニ八組ヲ置キ、同十年ニ十組トナシ、爾來增減常ナラザリシガ、慶應二年ニ至リテ、遂ニ此職ヲ廢セリ、番頭ハ、一組ニ一人ヲ置キ、從五位下ニ敍ス、寛文五年以後ハ、役料ヲ給スルコトモアリシガ、天和ノ頃之ヲ廢シ、享保八年以後ハ、四千石高ノ職トシテ、別ニ役料ヲ給セズ、而シテ在番中ハ、特ニ其祿高ノ半額ヲ給ス、組頭ハ、一組ニ一人ヲ置キ、若年寄ノ支配ニ屬シ、千石高ニシテ、役料ヲ給セズ、組衆ハ、一組ニ五十人ヲ置キ、三百俵高ニシテ、役料ナシ、又與力同心アリ、與力ハ、一組ニ十人ヲ置キ、八十石高トス、同心ハ、一組ニ二十人ヲ置キ、三十俵二人扶持ヲ給ス、西丸ニモ亦書院番アリ、慶安三年ニ始テ之ヲ置ク、番頭以下、與力同心ニ至ルマデ、其定員、資格、待遇等、凡テ本丸ニ同ジ、

名稱

〔仕官格義辨〕御番衆之事

御書院番は、御白書院之前、紅葉之間に御番被相勤候ニ付、御書院番と申候由承候、

職員
職掌

〔吏徴別錄上 布衣以上〕御書院番頭○中略 同○寛永二十年癸未、御番所虎間と成、舊紅葉間、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一御書院番頭　御本丸八人

〔吏徴布衣以上上〕御書院番頭六人

〔東職記聞二〕書院番頭八人

統二領將軍家重代昵近衆一、人別五十人、與力十人、同心三十人一也、御旗本之爲二警衞一故、被レ撰二其器一也、當職亦以レ順、每年在二衞駿府城一也、充二一組一、

〔有司勤仕錄〕御書院番頭

一江戶にて勤番は、御玄關前中雀御門番所を壹ヶ所、與力同心勤レ之、但上埋御門は、御書院番頭之預り同心勤レ之、○中略 頭は御玄關前御櫓に泊番也、一人宛御殿に詰る、

〔明良帶錄前篇〕御書院番頭

大抵勤向、御小性組番頭と同じ、是を兩番頭と云、遠國御使先は、御小性組方と輪勤なり、御前給仕、騎馬勢子懸り、兩山御成之節、本堂御番方丈御番、紅葉山は槐木邊、御目見、吹上御成には、御書院方新御門、御小性組方植木御門組計御先勤、與力同心、御玄關前御門を勤む、大番頭に昇る時、與力同心召れ候段御届、古は駿府の在番有しが、天明頃ゟ止、

在番

〔有司勤仕錄〕御書院番頭

一此御役は、八頭之內、壹人は駿府在番也、今は定番なり大御番頭に准じて知べし、

〔柳營秘鑑一〕一御書院番頭、同組中與力同心共に、駿河在番被二仰付一、尤二組ヅヽ、每年九月交代也、

〔諸例集上〕一御書院方、駿府在番歸休ミハ五十日也、然處寛延元辰年、高力若狹守歸府之節、十月閏月有レ之故、霜月廿五日迄休ニ成可レ申趣ニ候得共、又々申談有レ之、五十日之日數ニ相極候、右之例と

申は、享保三年十月、閏月有之時、在番歸岡部左衛門佐、霜月廿五日迄休申候、是は前年登之節、急に被仰付前休無之出立故、霜月廿五日迄休申候、閏月ニかゝり候譯ニ而は無之候、右平岡四郎兵衛物語、

〔仕官格義辨〕在番之事

同(○寛永)十六卯年ゟ、御書院番一組充、駿府在番被仰付候、初靑山因幡守組、其已後一年代り、在番被仰付候、然處寶永三戌年二月廿三日、御書院番四組、西丸(江)被爲進、駿府在番ハ、御譜代大名一人被遣也、寶永三戌年、松平山城守、同四亥年、松平采女正、同五子年、小笠原信濃守被勤候、同六丑年ゟ又御書院番ゟ一組充前々之通在番被仰付候、其年松浦出雲守組在番被登候、

〔東職記聞 二〕書院番組頭八人

當職在衛之事、慶延略記曰、寛永十年、始被令大番組在衛駿府、大番頭松平豐前守勝茂奉之也、同十年、始置加番兩人、堀美作守、本多下總守等、奉台命而守衛之也、(寛明同說)同十六年、罷大番組在衛、而以當衛被代之、靑山因幡守奉之也、萬治元年三月、增加番一人、總三人也、代々記曰、寶永三年十一月、罷書院番組之在衛、以諸侯一人被令在衛也、同六年、又以當衛被令在衛、爾來復舊也矣、

〔柬徵別錄(上布衣以上)〕御書院番頭(○中略)同(○寛永)十六年己卯正月廿日、駿府在番始、靑山因幡守組、每年十月交代と成、(○中略)寶永三年丙戌十一月廿五日、(○中略)駿河在番止、(御譜代大名一年代勤番被命、)同六年乙丑二月晦日、駿府在番再始、杉浦出雲守組、(○中略)同年(○寛政二年)七月廿日、駿府在番止、

〔憲敎類典(二ノ十八駿府在番)〕寛政二(庚)戌年六月三日

御書院番頭(江)

駿府在番、年々交代被遣候儀は、當分之內被差止、此度御城代支配之勤番衆引越相勤候樣可被仰付旨之御沙汰ニ候、尤各在番順年之儀は、是迄之通立置、御用之節は、相越候心得ニ而可罷在旨被

待遇俸祿

御出候、又當時在番之面々は、右勤番被仰付、彼地着次第歸參之積、尤例交代之時節より、品ニ寄聊相後候儀茂難計候、兼而其旨可存段、藤堂肥後守江も相達候旨、可被得其意候、〇又見天保集成絲綸錄

六月

〔東職記聞二〕書院番頭八人　従五位下

〔有司勤仕錄〕御書院番頭

一是駿府を勤る閫外之役なり、大番頭に續き、重き職分也、然れども御馬廻を固むる役故、若年寄は、旗本之頭なれば此支配を請る、大番頭に比すれば其口下し、駿府は近國と云、二條大坂之如き要地に非ず、依之閫外之權、良薄き也、〇中略

一是又駿府在番有故、采幣御免と云々、

〔吏徴上布衣以上〕御書院番頭〇中略　若年寄支配　菊之間　諸大夫　四千石高　尾州紀州御使、御暇金十枚、　水戸御使、御暇金三枚、時服二、羽織、　大坂御城代引渡、御暇金十枚、

〔吏徴別錄上布衣以上〕御書院番頭〇中略　寛文五年乙巳三月十八日、御役料千俵、十人　天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、〇中略　享保八年癸卯六月十八日、四千石高、

〔憲寛諸條令下〕御役料之覺

千俵　　御書院番頭

寛文五年巳七月日

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、〇中略　御書院番頭、〇中略　千俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

四千石之内は、四千石之高に可被成下候、　御書院番頭

〔吏徵別錄(上衣以上)〕御書院番頭(○中略) 同年(○寬永十六年)五月十六日、今度駿府へ御番被遣御書院番頭、知行高半物成、自今以後、可被下旨被仰出之、

〔大猷院殿御實紀(四十)〕寬永十六年五月十六日、駿府戍役の書院番頭、この後は祿額の半物成給はるべしと仰出さる、

〔柳營秘鑑(一)〕一御書院番頭、同組中與力同心共に、駿河在番被仰付、(○中略)御暇之節拜領物、御番頭金三枚、時服三ツ、御羽織、

〔仕官格義辨(井)〕三番頭小十人頭之事

問云、三番頭は、古キ御役と及承候、いつ頃より始り候哉、答云、(○中略)御書院番頭之儀は、慶長元和之頃、大坂御陣之節は水野隼人正、內藤若狹守、青山伯耆守、松平越中守などの樣に承候、其以後寬永九申年四月八日、諸御番之番頭、急度相極候由、一番本多美濃守、組頭水野石見守、二番太田備中守、組頭川久保與左衞門、三番大久保右京亮、組頭水野藤右衞門、四番酒井壹岐守、組頭長谷川久三郎、五番大久保主膳正、組頭榊原飛驒守、六番田中主殿頭、組頭山口半兵衞、七番松平伊賀守、組頭柴田七九郎、八番永井日向守、組頭伊澤吉兵衞、右八組被仰付、同十酉年八月六日、又二組被仰付、朽木民部少輔、組頭大久保源太左衞門、稻垣若狹守、組頭高木九助、都合御書院番十組に相定候由、其後慶安三寅年九月三日、右十組之內二組、西丸江被爲附、御小性組番頭ゟ、北條右近大夫、組頭松平織部、大久保右京亮、組頭柴田新兵衞、右二組御書院番頭組頭被仰付、御書院番二組增、都合十二組ニ相成候處、慶安四卯年五月朔日、番頭水野下總守病氣ニ付、跡御役不被仰付、組中諸組江割組ニ成、組頭岡野權左衞門、御先手御鐵炮頭屋代越中守跡役被仰付、承應二巳年九月十八日、番頭牧野佐渡守御側衆被仰付、組中諸組江割込ニ成、組頭池田修理ハ、同役朽木與五郎跡役被仰付、御書院番十組ニ成候處、享保十巳年六月朔日、二丸御小性組番頭酒井豐前守(後出雲守と改)組頭鳥井織部、牧野伊豫

守(後播磨守と改)組頭桑山猪兵衛、御書院番頭組頭に被仰付、組中(茂)御書院番被仰付、御本丸八組、西丸四組、都合十二組に相定り候、

〔東職記聞〕三書院番頭八人

慶延略記曰、慶長十年十二月、始置當衞四組、以水野隼人正忠清、青山伯耆守忠俊、内藤若狹守清次、(一作政直)松平越中守忠綱等四人被補番頭也、家忠日記曰、慶長五年四月、阿部伊與守正勝卒、長子備中守正次嗣家、而被補書院番頭也、又曰、同七年三月、水野忠清依台命屬監國君、(台徳院殿○徳川家康世子秀忠)郎叙從五位下、任隼人正、而補書院番頭帶奏者番也、依是則慶長十年之事、可定其部數也、慶延略記曰、元和二年十二月、置組頭四人、安部彌一郎信盛、大久保玄蕃忠成、内藤東市正信廣等補之、原本脱其一人、故今闕之也、代々記曰、大坂役後、當衞五組、永井右近大夫、西尾丹後守、高力攝津守、酒井下總守、阿部備中守等奉之也、元寬日記曰、元和九年九月、台徳院殿讓職於大猷院殿、(○徳川家光)而移西營之時、置當衞六組、以井上主計頭正規、永井信濃守尙政、水野監物忠元、青山大藏大輔幸成、板倉内膳正重正、森川出羽守重俊等被補番頭也、而井上氏組頭戸田淡路守、永井氏組頭諏訪隼人、(後土佐守)水野氏組頭太田釆女、(後備中守)青山氏組頭本多美作守、板倉氏組頭天方備中守、森川氏組頭朝比奈彌太郎等六人補之也、代々記曰、大猷院殿之當衞亦六組、阿部備中守、内藤右京亮、酒井讃岐守、酒井山城守、内藤伊賀守、稻葉丹後守等六人補之、而讃岐守統領二組也、案慶延略記曰、慶長十五年正月、内藤伊賀守忠重、補監國君(○家光)執政也、元寬日記曰、元和九年八月、阿部備中守正次補執政也、依是則内藤阿部二氏、執政而兼之歟、記以待來者政耳、慶延略記曰、寬永九年正月、台徳院殿薨、四月定當衞於八組、以松平伊賀守忠晴、本多美作守忠相、太田釆女正資宗、大久保右京亮敎隆、永井日向守直清、酒井壹岐守忠元、大久保主膳正幸信、田中主殿頭定晋等被補番頭也、而松平氏組頭柴田筑後守康久、本多氏組頭水野石見守忠貞、太田氏組頭川久保越前守信貞、大久

保氏組頭水野甲斐守義忠、永井氏組頭伊澤隼人正正信、酒井氏組頭長谷川淡路守、主膳正組頭榊原飛驒守職直、田中氏組頭山口備前守重恒等八人補之也、代々記曰、寛永十年八月増二組、以朽木民部少輔稙綱、稻垣若狹守重太兩人被補番頭也、而朽木氏組頭大久保源五左衛門忠勝、稻垣氏組頭高木九助等兩人補之也、元寛日記、以朽木氏補職爲寛永十年正月、以稻垣氏補職爲同年八月也、慶延略記、亦以二氏之補職爲寛永十年八月、則元寛日記誤之歟、慶延略記曰、慶安三年九月、屬當衞四組於監國君(家綱公)、以水野下總守忠重、伊澤隼人正正信、北條右近大夫氏利、大久保右京亮敎勝等四人被補番頭也、但北條大久保二氏、自扈從組番頭遷之、組亦從之也、代々記曰、慶安四年四月、大猷院殿薨、嚴有院殿(〇家綱)卽祚、而合屬衞四組獻廟之八衞、而爲十二組、同年五月、水野忠重卒、乃割其組而充十一衞之不足也、承應二年九月、牧野佐渡守親成遷側衆、又割其組充十衞之不足也、總十組也、寶永三年、常憲院殿(〇徳川綱吉)迎甲州侯而爲監國君(家宣公)、同年十一月、分當衞中阿部遠江守正房、板倉筑後守重行、大久保豐前守忠庸、松平式部少輔(後改播磨守又大隅守)等四人而屬之、組亦從之、總六組、於是罷駿府在衞也、同六年正月、常憲院殿薨、文昭院殿(〇家宣)卽祚、同年三月、合屬衞四組憲廟之六組、總十組、於是駿府在衞亦復舊也、享保十年六月、有德院殿(〇徳川吉宗)屬當衞四組監國君(〇當將軍家家重)、以曾我周防守、安藤伊勢守、酒井豐前守、牧野播磨守等四人被補番頭也、但酒井牧野二氏、自扈從組番頭遷之、組亦從之也、延享二年九月、當將軍家受有廟之讓移本城之時、以其屬衞屬今之監國君(家治公)也、今八組無增減也、

〔吏徵別錄上(布衣以上)〕御書院番頭　慶長十一年丙午十一月二日、始置當職、御奏者番より兼帶、或御花畑御番、(〇小性組)小十人頭、三役兼帶、　寛永九年壬申四月八日、定爲八組、一番本多美濃守、二番太田備中守、三番大久保右京亮、四番酒井壹岐守、五番大久保主膳正、六番田中主殿頭、七番松平伊賀守、八番永井日向守、　同十年癸酉八月六日、增置二組、合十組、朽木民部少輔稙綱、稻垣若狹守重太、(〇中

略　慶安三年庚寅九月三日、廢二二組一、合八組、始置二西丸御附四組一、　同四年辛卯五月朔日、西丸附、御本丸勤被二仰付一、一組減、合十一組、〇永野下總守　承應二年癸巳九月十八日、一組減、〇牧野佐渡守中略　寶永三年丙戌十一月廿五日、四組西丸附と成、御本丸六組、〇中略　同年〇寶永六年　三月九日、西丸附四組、御本丸勤、〇中略　同〇享保九年甲辰十一月十五日、二組二丸附と成、　同十年乙巳六月朔日、二丸附止、西丸附四組、此節より寛政二戌年迄西丸附居付、御本丸八組、兩丸合十二組、〇中略　寛政二年庚戌四月二日、西丸四組之内二組、御本丸勤、廢二二組一、合十組、〇中略　同八年丙辰十二月十日、西丸四組、御本丸六組、此後無二沿革一、

〔慶應二年武鑑〕御書院御番頭

壹番組、同〇指物　淺黃、　土屋豐前守　二番組、同白黑筋、　本多日向守助眞
三番組、同黑色、　織田上野介信格　四番組、同白色、　水野伊勢守忠全
五番組、同白黑交、　逸見若狹守　六番組、同白赤交、　嶋津伊豫守
七番組、同黃色、　太田筑前守資順　八番組、同白地赤亂星、　八木但馬守補職

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月廿一日、兩御番〇書院、小性組、役名ヲ廢ス、
當月朔日廿一日、兩度にて御番御廢止、頭與頭は勤仕並寄合に、組壯年の者は奥詰銃隊仰付られ、其外は勤仕並小普請、

組頭

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配
一御書院組頭　御本丸八人
〔吏徵上布衣以上〕御書院番組頭六人
〔東職記聞二〕書院番組頭八人　布衣
每レ組置二一人一、掌下從二番頭一奉中行組衆之事上職也、

〔諸例集中〕一與頭は一組五十人之內と心得可申御沙汰之事

享保元申七月朔日、廻狀留之內、

一大久保豐前守、板倉修理、兩組中御引渡相濟候、享保元七月朔日、御禮過、御書院番頭御小性組番頭四人宛、同與頭四人宛、相揃可申旨、大久保長門守殿被仰渡、御書院番頭井上讚岐守、本多淡路守、阿部遠江守、伊澤播磨守、〇中略御書院與頭、京極主計、松平五郎左衞門、杉浦彌市郞、榊原釆女、〇中略御右筆部屋於御緣頰若年寄衆御列座、長門守殿被仰渡候は、御引渡之節、組頭帝鑑之間御敷居之內江只今迄入申候、自今以後は、御敷居之外ニ可罷在候、總而組頭仕方、同役之樣ニ相心得、御備御作法共ニ違、御爲ニ茂不宜候、組頭は一組五十人之內之事ニ候間、向後相改、番頭差圖を請可相勤候、御用之儀は、番頭組頭無腹藏可申談候、此旨御老中方ニ茂被仰候旨御座候、

〔明良帶錄〕兩御番〇書院、小性組、組頭

組中の差引、諸請願進達を取次、通帳を以て番頭へ達す御觸幷申渡事、先例の如く申渡す、番頭より組中への廻狀には兩觸もあり、非常の節、番頭組頭組中、馬場先御門の寄場へ出る、御供番の寄場は、坂下御門外也、組中判元見屆の節書付、其跡目願書御上候扣共二通、番頭扣二通、親類添願書、醫師姓名書、懷胎の婦人無之書付也、親類持參請取之也、明き組の節、月番の頭へ掛合、新規番頭被仰付三日帝鑑の間御引渡の節登城有之、

〔御書院番組頭當用記〕當番

一御城へ八時罷出、御櫓へ寄詰番頭ニ逢、廻狀寫受取、御番頭へ參、相番中ニ逢、御帳受取、部屋へ參、廻狀出申候、

一平日ハ廻狀貳通觸、明日同役總出仕、又ハ御成等有之候へバ三通觸也、在番同役之名ハ末へ認、

西丸同役者、其跡ニ認め候、名順ハ御番順ニ認候、〇中略

一御留守番立候日ハ、御留主番致二廻狀一候、詰番頭より廻狀御留守番へ渡被レ致二退出一候、番頭組頭、七時頃泊出候、〇中略

一月番之者、當番之節ハ、當日晝時より翌朝四ツ時迄、上十五日跡月番、下十五日ハ先月番之上、一晝夜月番心得可レ申事、〇中略

一御番乘介之儀、拾人迄ハ介取不レ申候、九人より介取申候事、助ハ御先番之組より出る、御先番入候而者、西丸詰之組より出る、尤助一人入候共、兩人可レ遣事、

但御先規如レ是候處、近年ハ詰番組より助取候事、〇中略

當番日出火之事

一泊へ出候先ニ、出火事有レ之候はゞ早速罷出候、大火又ハ御城近邊に候はゞ、上下之上ニ火事羽織着、樣子に寄、御玄關ニて羽織取可二罷出一候、家來火事裝束ニて召連、尤袴爲レ着可レ申候事、〇中略

一當番ニて無レ之日、火事之節、先寄場へ出、夫より御城へ出、同役之內、居宅危き仁も候はゞ、代り可レ申候、自分宅危き火事ニハ、不二罷出一防候事、〇中略

俄斷之事

一本番日、御規式相成候得バ、出御之節、本御番之者、於二御番所一御目見仕、還御之節、御留守番於二同所一致二御目見一依レ之本御番ハ退出、七ツ時過泊り罷出候、御留守居番致二廻狀一候事、〇中略

一詰番頭退出以後、翌日御成急に被二仰出一候歟、又ハ御目付乘、御用之品被二申聞一候はゞ、當番之番頭へ、早々申遣べく候事、

一何事に不レ依、暮時より夜中急觸之義有レ之候はゞ、御城向寄之同役へ可レ被レ遣候、〇中略

御留守番之事

一御禮日、或ハ御成ニて、御留守番立候日、御成之節ハ、御供揃刻限半時早ニ罷出候、尤御櫓へハ不及立寄候、御鷹之節ハ、本御番、例刻登城次第、代合致退出候事、
但御禮日ハ、自分御留守番相勤候段、詰番頭へ申遣候事、○中略
一月番之者、明ケ番之節、本御番借斷候はゞ、御留守番借介勤候事、○中略

御成之事

一御規式御成御供人數、拾貳人より不足ニ候へバ、其日之詰番組より介立候、一人入候とも、兩人遣候事、○中略
一還御被遊候て、御番衆ハ御玄關前より爲退出致、自分ハ御殿へ罷出、同役ニ逢致退出候、初て御供之勤被仰付候仁ハ、番頭へ屆ニ遣候事、○中略

御鷹野

一御成被仰出、詰番より申來次第、御供致廻狀候、人數十五人より不足ニ御座候はゞ、詰番組より介立可申候、人少ニ候はゞ、兼て詰番組同役へ可談置候事、○中略
一自分供之者、侍二人、草履取一人、鑓持一人、口附二人、沓籠持一人、手代一人、組挾箱ハ部屋へ殘置候事、

〔東徵 上布衣以上〕御書院番組頭○中略　若年寄支配　菊之間南御襖際　千石高

〔有司勤仕錄〕御書院番頭
一組頭は壹人ヅヽ、大番と違ひ、組頭重く、千石高之御役に而、布衣着之、若年寄支配之、組支配之事、相談に而決す、

〔仕官格義辨〕諸御番組頭之事
問云、諸御番組頭之內、分而兩御番○書院小性組組頭衆と申は、番頭衆ニも、大違茂無之格之樣に而、組中

に而は、兩頭共尊敬被申候、昔ゟ只今之如く、結構に有之候哉、答云、成程兩御番組頭と申ハ、昔ゟ結構成格ニ而候由、○中略昔ハ組頭ゟ直に番頭被仰付候、元祿年中迄も、御書院組頭ゟ、永井、宮内、美濃守後備後守と改御小性組番頭被仰付候、御側衆、大御番頭之子息達之寄合ゟ組頭ニ被仰付候儀數多有之候、爰を以相考候得バ、結構成御役儀ニ被存候、

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕御書院番組頭○中略　寛文五年乙巳三月十八日、御役料五百俵、十人　天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、享保八年癸卯六月十八日、千石高、

〔廢寬諸條令 下〕御役料之覺

五百俵　御書院番組頭

寬文五年巳七月

〔憲廟實錄 四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、○中略御書院番の組頭、○中略五百俵、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保八卯年六月

千石ゟ内は、千石之高に可被成下候、　御書院番組頭

〔有司勤仕錄〕御書院番頭

一駿府在番は、毎年九月交代也、右御暇之節、拜領もの、次第、○中略

銀貳拾枚　組頭

〔東武實錄 二〕元和二年、是冬安部彌一郎信盛、御書院番ノ組頭、及御步行兩役ヲ兼勤ム、

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕御書院番組頭　寛永九年壬申四月八日、置八員、一番水野左門、後石見守二番川窪與左衞門、後越前守三番水野藤右衞門、後甲斐守四番長谷川久三郎、後淡路守五番榊原左衞門、後飛驒守六番山口半兵衞、後備前守七番柴田七九郎、後筑後守八番伊澤吉兵衞、後隼人正

〔吏徵上御目見以上〕御書院番三百人〇中略　一組五十人

御番衆、毎組五十人、但與頭、此人數の內也、

〔職掌錄〕御書院番頭

〔有司勤仕錄〕御書院番頭

一江戶にて、〇中略組之面々は、御殿之內虎之間に勤仕す、

〔營中御日記十七〕寬永二十年八月七日、今度御番所改、

虎之間江　御書院番元紅葉間也

〔有司勤仕錄〕大御番頭

一江戶にて廻り番と云事有り、其內は御番を不勤、〇中略兩御番〇書院、小性組、ゟも出る、

〔明良帶錄〕御小性組、御書院番、

是を兩御番といふ、〇中略非常の節は、棕櫚箒にて御座敷向火の粉を防く也、御供弓、每暮雁的の中り附にて申渡、御書院方輪勤なり、正月御射場始は御番引、稽古式の事、小笠原縫殿助へ相談、弓太郞は栢植清左衞門也、中庭御場所に於て祿頂戴有之、布衣之御番衆は、正月は別段の御禮有り、寄合ゟ高の仁至る事あり、廻り御番衆は番外なり、

〔大成令五十一〕寬文四辰年十二月十五日

覺

一御書院番　御供番　　大手大腰掛〇中略

右御城近所火事、幷大なる火事之節、此書付之所々江罷出可有之、其外非番之面々、宿所ニ在之候而、頭々江召仕之者を附置、可任差圖、〇下略

〔憲教類典二ノ九御番〕慶安四辛卯年六月十五日

一御書院番之儀、御本丸西之丸十壹組ニ而、兩所之番、順廻リニ勤仕可レ申よし上意之趣、昨日御老
中被二仰渡一候、左樣御心得可レ有レ之候、以上、

〔大猷院殿御實紀二十〕寛永九年七月二十六日、諸國巡察の暇賜ふ、上方は書院番林丹波勝正、○中略書院番長崎半左衛門元通、○中略關東は書院番酒井因幡守忠知、佐藤勘右衛門繼成、○下略

〔大猷院殿御實紀二十〕寛永九年八月十四日、書院番石尾七兵衛治昌は、吉田城、○中略書院番佐藤勘右衛門繼成は刈屋城、各引渡命せられ、いとま賜ふ、

〔大猷院殿御實紀三十六〕寛永十四年十一月廿六日、書院番能勢小十郎頼隆、山崎權八郎正信、○中略府内を巡夜し、火賊を考察すべしと命せらる、こは近日各邸に火矢を投入、または火を放つ賊あるよし、街説あるをもてなり、

〔大猷院殿御實紀五十一〕寛永十九年六月八日、城米并廩米の員數、明詳に査檢すべき旨仰出され、小姓組八人、書院番七人、大番十五人、査檢の奉行仰付られ、勘定頭曾根源左衛門吉次、及び伊奈半十郎忠治にはかりあふべしと命せらる、

〔大猷院殿御實紀六十六〕正保四年六月六日、書院番加藤平内光定、○中略地震によて、各所崩頽の地、修築奉行命せらる、

〔嚴有院殿御實紀二十三〕寛文二年四月十七日、書院番阿倍四郎五郎政重、增上寺修理奉行を仰付らる、

〔嚴有院殿御實紀二十四〕寛文二年十二月十六日、書院番松平久右衛門直信、駿河清水府庫修理奉行命せらる、

〔嚴有院殿御實紀三十六〕寛文八年正月十九日、書院番奥津内記忠直、中野傳右衛門弘吉に、去年令せられし、府内閑地新造屋舍、查檢すべしと仰付らる、

〔柳營年表秘錄 當御代 下〕寛政十一己未三廿六

御書院番水谷伊勢守組

高林彌藏〇中略

右系譜調御用被仰付

〔大猷院殿御實紀 四十〕寛永十六年正月廿日、大番士駿府城在番を免され、今より後は、書院番もて在番せしめらるれば、毎年十月をもて派期とすべしと仰出さる、

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕御書院番頭〇中略 寛永三年丙戌十一月廿五日〇中略 駿河在番止、

〔文露叢 十七〕寛永六年二月晦日、御書院番頭中へ、駿府在番、當秋ヨリ前々ノ通可被遣旨被仰渡、

〔文昭院殿御實紀 十三〕正徳二年二月廿七日、書院番頭に仰下さるゝは、駿城戍役の番士五十人に定りたるを、近年は交代の期に及び、病もてまからざる輩多く、去年はわけて戍士缺乏せるよしきこゆ、此後三十五六人より不足あらしむべからずとなり、

〔吏徵 上 御目見以上〕御書院番〇中略 頭支配 三百俵高

〔落穗集追加 八〕新御番衆初りの事

一問曰、右新御番衆の御あてがひの儀被仰出候節、兩御番衆〇書院、小性組、とは五十俵少く被下候に付ては、馬を持つ義を御免との御事に有之由、然ば其節の義は、三百俵被下候兩番衆と申は、何れも馬を持づめに被致たる樣子に相聞へ候、其節之義は、當時に合ては、米の直段も殊外下直に有之たる義にも候所に、如何致して左樣に厩の明不申候樣には致され候や、一圓合點參らぬ事也、答曰、其段は前方も申通り、時代がらと申物にて、差て不審なる事にては無之也、子細を申に、以前御旗本に於て、三百俵抔取被申たる小身の樣子を承るに、衣服等之義も、番着物と名付て、絹紬抔を以て調へ、二ッか三ッも所持被致、常々の義は布子綿服を被着、勿

論屋舖廻り家居等の義も構ひ無之、何ぞ肴の一種も求め候へば夫を汁に申付、近所あたりの心安き相番衆へは人を遣し、食をば飯次に入れ、膳椀を添へて、面々の宿元より持寄りに致て給合被申る、と也、其會合を名付て汁講と申て、今時の振舞も同じ事にて事濟候と也、左樣に物事に質朴に致、無用無益の物入りの義に於ては、隨分と足をいとひ、人馬にさへ事をかゝずはと有之如くの意地合を專らと有之は、是皆權現樣御代、三河以來の御家風の相殘りたると申すものを、人々亂世の餘風と計相心得候は、大きなる了簡違と存候、子細は、亂世の最中にも、上杉管領憲政、今川氏眞抔の如くなる家杯も有之事也、畢竟治世に限らず、其家々の武道の盛衰次第と相見る事なり、

〔青標紙三編〕一御小性組御書院之兩御番は、場所高ハ三百俵なれども、貳千八百石までの人々、入交りて勤むる事也、又其中にハ、本高三拾俵貳人扶持の人もあり、三千石近き、れき〳〵の中へ、これらの小身交りて、莫大の御足シ高にて勤むると云ふハ如何なる譯と云ふに、この人々は、大體其父御廣敷づとめより段々御取立ニ成り、姬君樣方の御用人並にのぼり、公主方の御願にてめし出され、御番入被仰付たる人々なり、然れども其父御用人被仰付時ハ、布衣以上百俵高ニ御加增被成下るゆへ、本高引直しにもなれども、西岡藤次郞、石川三大夫如きは、並に而終りしゆへ御加增無し、然るに兩人ともに、悴は兩御番へ被召出しゆへ如斯なり、

〔柳營秘鑑四〕諸御番所幷末々迄御切米並高之大概

一御書院御小性兩番衆　三百俵

〔大猷院殿御實紀五十九〕正保元年十二月二十五日、この日小姓組八人、書院番十三人、新に廩米三百俵〇中略づゝ給ふ、

〔東武別錄下布衣以下御目見以上〕御書院番　寬文元年辛丑五月廿一日、當秋御書院番大御番在番

登之內、三年勤無足之者、御書院番三百俵、大御番貳百俵、御切米可被下旨被仰出、

〔有司勤仕錄〕御書院番頭

一駿府在番は、每年九月交代也、右御暇之節、拜領もの、次第、○中略

銀拾枚づゝ　總組

與力同心

〔憲敎類典御役二ノ五〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

御書院番頭○中略　與力拾騎、同心廿人宛、

〔柳營秘鑑三〕御城內外御門番所勤仕之覺

一中雀御門　御書院番與力同心○中略

一西丸御玄關前　御書院番并與力同心○中略

一上埋御門　御書院番頭ノ預同心○下略

〔吏徵御目見以下〕御書院番與力六十人　一組十人　現米八十石高　御預與力、給知貳百貳拾六石六斗餘、至貳百八十八石貳斗餘、　假抱入、十人扶持、　役上下、御抱場、○中略

御書院番同心百廿人　一組二十人　三拾俵二人扶持高　假抱入、拾俵壹人扶持、　御抱場

〔大猷院殿御實紀二十九〕寬永十二年、此年三枝土佐守守惠はじめ、書院番頭に與力十騎、同心廿人づゝあづけ賜はり、與力同心の給地、二千六百石下さる、

〔嚴有院殿御實紀三十〕寬文五年六月廿一日、大番書院の同心戍役のとき、これより先、月俸五割增加ありしが、其後は一倍加へらる、

西丸書院番

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一御書院御番頭　西丸四人

〔東職記聞 二〕監國君職

書院番頭四人　從五位下　統領昵近衆人別五十人領與力十人同心二十人也、

〔有司勤仕錄〕御書院番頭

一西丸附は、西丸御玄關前御門番所を與力同心勤之、組之面々は、西丸御書院に相勤る、御本丸ゟ、詰所も又組數も少き故、五十人之內、四分一勤之、番頭之泊番、御本丸に同じ、

〔吏徵（上布衣以上）〕西丸御書院番頭四人（○中略）慶安三年庚寅九月三日始置

〔大猷院殿御實紀 七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿（○德川家綱世子）御方に附屬せらるゝ、寵あり、（○中略）書院番頭は水野下總守忠重、伊澤隼人正正信なり、又小性組番頭北條右近大夫氏利、大久保右京亮敎勝は、書院番頭命せられ、御方に附らる、

〔東職記聞 二〕監國君職

書院番頭

慶延略記曰、慶安三年九月、大猷院殿（○德川家光）以書院番頭水野下總守忠重、伊澤隼人正正信、北條右近大夫氏利、大久保右京亮敎勝等四組被屬監國君（○家光世子家綱）也、代々記曰、寶永三年十一月、常憲院殿（○德川綱吉）以阿部遠江守正房、板倉筑後守重行、大久保豐前守忠庸、松平式部少輔（後改播磨守、又大隅守、）等四組被屬監國君（○綱吉世子家宣）也、享保九年十一月、有德院殿（○德川吉宗）以曾我周防守、安藤伊勢守、酒井豐前守、牧野播磨守等四組被屬監國君（○吉宗世子家重）也、但曾我安藤二氏、自當職直遷之、酒井牧野二氏、自扈從組番頭遷之、組亦從爲當衛也、延享二年、當將軍家（○德川家重）受讓之時、傳屬今之監國君（○家重世子家治）也、

〔吏徵別錄（上布衣以上）〕御書院番頭（○中略）慶安三年庚寅九月三日（○中略）始置西丸御附四組、同四年辛卯五月朔日、西丸附、御本丸勤被仰付、（○中略）寶永三年丙戌十一月廿五日、四組西丸附と成、（○中略）同年（○寶永六年）三月九日、西丸附四組、御本丸勤、（○中略）同（○享保）九年甲辰十一月十五日、（○中略）西丸附四

組、此節より寛政二戊年迄、西丸附居付、○中略　延享二年乙丑九月朔日、西丸附四組、大納言様○徳川家治御附、寶暦十年庚辰四月朔日、西丸附四組、大御所様○徳川家重御附、同十一年辛巳八月三日、西丸附四組、明御殿勤番、同十二年壬午十二月十五日、西丸附四組、若君様○徳川家治世子家基、安永八年二月卒、御附、安永八年己亥四月十六日、御附四組、西丸明御殿勤番、天明元年辛丑閏五月十八日、西丸四組、若君様○家治世子家齊御附、同六年丙午閏十月廿日、御附四組、西丸明御殿勤番、寛政二年庚戌四月二日、西丸四組之内二組、御本丸勤、○中略　同八年丙辰十二月十日、西丸四組、御本丸六組、此後無沿革、

〔柳營秘鑑〕四諸役人員數井組支配

一御書院組頭　西丸四人

〔東職記聞〕二監國君職

書院番頭

組頭四人　布衣　職掌同本城同列也

〔吏徴〕上布衣以上西丸御書院番組頭四人　同上○若年寄支配、菊之間南御椽頰、千石高、慶安三年庚寅九月三日始置

〔大猷院殿御實紀〕七十八慶安三年九月三日、書院番組頭岡野權左衛門英明、松平織部直政、小姓組與頭柴田新兵衛康明、書院番、酒井藏人忠次は、同じ方○徳川家光世子家綱書院番組頭になり、○下略

〔吏徴〕上御目見以上西丸御書院番貳百人　同上○頭支配、三百俵高、一組五十人、慶安三年庚寅九月三日始置

〔台德院殿御實紀〕四十三元和二年九月十五日、書院花畑番士を撰んで、若君○徳川秀忠世子家光へ附られしは、○中略　六十人を四組として、十番切の間曾我五郎時宗が、十番切を畫きし間なり、に勤仕す、世に十番切の番士といふ、

〔常憲院殿御實紀〕五十一寶永二年正月九日、けふ火災の時、番士西城にまかる寄場の定制を令せ

らる、○中略書院番一隊は、番頭組頭そひて、其廣敷の邊に備ふべき定なりしかど、今より後は、裏門外に備へ指揮を待べし、○下略

〔有德院殿御實紀二十一〕享保十年十二月二十八日西城の書院番、今までは本城のごとく勤仕せしが、此後は廿五人づゝ、宿直すべしと仰出さる、

〔有德院殿御實紀二十三〕享保十一年十二月晦日、けふ西城にて、書院番士の當直する人數を減せられ、二十人當直すべき旨番頭に命せらる、これ西城の番士は、其員少ければ、ことさらの御ゆるしありて、かくさだめられしとぞきこえし、

〔吏徵御目見以下〕西丸御書院與力。。四十人　同上〇一組十人、現米八十石高、御預與力、給地貳百貳拾六石六斗餘、至貳百八十八石貳斗餘、假抱入十人扶持、役上下、御抱場、〇中略

西丸御書院番同心。。八十人　同上〇一組二十人、三拾俵貳人扶持高、假抱入拾俵壹人扶持、御抱場、　寛永十二年己亥三月廿一日始置

小性組番頭　晝夜廻　屋敷改兼

小性組番ハ、初メ殿中黒書院ノ西湖ノ間ニ勤番シ、其庭前ニ花畑アリシヲ以テ、御花畑御番衆ト云ヒシガ、後紅葉ノ間ニ勤番スルコトヽナリテ、小性組番ト改稱シ、諸儀式ノ周旋、將軍出行ノ扈從、市中ノ巡廻等ニ從事スルコト、書院番ニ同ジ、但シ諸門ノ警衞、遠地ノ在番等ナシ、此職ハ慶長年中ニ置ク所ニシテ、元和九年ニハ三組ト爲シ、寛永九年ニハ六組ト爲シ、後世終ニ八組ト爲シヽガ、慶應二年ニ至リ、書院番ト共ニ之ヲ廢セリ、番頭、組頭、組衆ノ定員、資格、待遇等、書院番ニ同ジ、西丸ニモ亦小性組番アリ、慶安三年始テ之ヲ置キ、番頭以下職員ノ

名稱

職員職掌

待遇等、凡テ本丸ニ同ジ、

〔吏徵別錄上布衣以上〕御。小。性。組。番。頭。○中略同。○寛永二十年癸未、御番所紅葉間に成、舊御。花。畑。

〔紳書下〕一是も同じ御代○德川家光に、今の黒書院の西湖の間といふ所を二間にして、下の間には番衆詰て、上の間をば番頭の座とせられし、其御庭は御花畑なりしかば、其御番人をば御。花。畑。御。番。衆。といふ、丁酉○明曆三年の火災後に、御住居替りて、御番人を今の紅葉の間へ出されて、御。小。姓。組。番。衆。と改め稱したり、斯て御番所遠く成しかば、初て新番を置れて、新番所は出來し也、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一御小性組番頭　八人

〔職掌錄〕御小性組番頭

當職六人

〔東職記聞二〕扈從組番頭六人扈從此訓ニ古之與不ニ統ニ領將軍家重代昵近衆人別五十人一也、爲ニ御旗本之警衞一故、被ㇾ撰ニ其器一也、古者號ニ當衞一稱ニ御花畠組一也、

〔有司勤仕錄〕御小性組番頭

一昔は御花畑御番と云、御老中支配之由、今之頭は組頭之如し、奥向に御番所有ㇾ之、組之面々、是に勤番す、御書院番に比すれば、御身近きかた也、又在番も無ㇾ之故、與力同心も無ㇾ之、○中略

一右頭、泊り番、又詰番有ㇾ之、○中略

一御書院番頭、御小性組番頭は、御規式事に付御給仕、或正月表向之御酌等司ㇾ之、中奥御小性も同前也、

一右二番頭ともに、組之面々、弓馬之藝術、内見分、大見分等有ㇾ之、騎射大的上覽、幷御成之節、御供弓被ニ仰付一、

資格俸祿

〔明良帶錄〕御小性組番頭
勤向、御前御給仕、騎馬勢子掛り、遠國御使、大坂御城代引渡し、雁雲雀の上使等、出火之節騎馬詰、東山御成、本堂方丈御番、御書院方と輪番なり、吹上御成者組計、紅葉山御成は槐木邊御目見、御番衎は、本御番、御供番、御先番、詰番、西丸詰等なり、御供番は在宅、右逢日と定て、組之仁に逢て、藝術其外面々先祖之事等を問尋ね、言語容貌を察し、人才を彙々試む、新同役被仰付ては、卽御引渡之事、御藏證文の事、誓詞之事、伺ふ時、御支配より承知せられ候と御下げ札にて、御同朋頭を以て御下げ、三日目、組中帝鑑之間にて御引渡、御藏證文は引付直しの證文、誓詞は十一日前、御目付より有無聞合せ有之、是組有之分は、何場にても同斷なり、

〔東職記聞 二〕扈從組番頭六人〇注略 從五位下

〔明良帶錄〕御小性組番頭
寄合より昇は、布衣諸大夫之再勤の仁にして、人材秀穎、一方の將となり、士卒を圓石にすべき人材の、しかも德行有て、公邊に明らけき人を擧ぐ、是昇進之基にて、重き御役人に轉ずれば如此、古は一万石位之大名の勤場にて、直に是より若年寄に昇る、〇中略 寬永十一年、御番組定り十組と成る、松平伊豆守信綱、阿部豐後守正武等勤む、夫より降りて一万石以下之職となり、菊之間席に定て、天明之度には、番頭に不似合の事あり、三枝土佐守、大久保玄蕃頭、能勢筑前守等也、近比御勘定奉行より久世丹後守昇る、又町奉行、二十年の勤功滿て爰に昇る、奥向并遠國山田日光浦賀之奉行職よりも昇る、

〔甲子夜話 十六〕憲廟〇德川綱吉ノ御代、鶴姬君ノ御用人曲淵市兵衞ヲ御小姓組ノ番頭ニ仰付ラレシトキ、其組ノ面々、曲淵ハ甲州出ナリ、且御取立テ者ナレバ、支配ハ受マジ迚、承服セザリシカバ、止コトヲ得ラレズ市兵衞ヲ寄合ニ被成、外相應ノ者ヲ番頭ニ被仰付候由、德廟〇德川吉宗ノ御

沿革任免

時、紀州ヨリ召連ラレシ澀谷隱岐守ヲ番頭ニ仰付ラレシトキ、是ハ紀藩ニテ家老筋ノモノナレバ仰付ラルヽト、分テ仰下サレシカバ、何レモ畏リ申タリトナン、此頃迄ノ士氣ノ盛ナルコト、想ヒ遣ルベシ、

〔吏徵上布衣以上〕御小性組番頭〇中略　若年寄支配　菊之間　諸大夫　四千石高　尾州紀州水戶御使、大坂御城代引渡御暇同上、〇金十枚

〔吏徵別錄上布衣以上〕御小性組番頭〇中略　寛文五年乙巳三月十八日、御役料千俵、十人　天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、　享保八年癸卯六月十八日、四千石高、

〔慶寬諸條令下〕御役料之覺

千俵　　御小性組番頭

寛文五年巳七月日

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、〇中略小性組番頭千俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

四千石ゟ內は、四千石之高に可被成下候、　　御小性組番頭

〔仕官格義辨〕三番頭并小十人頭之事

問云、三番頭は、古キ御役と及承候、いつ頭より始り候哉、答云、〇中略御小性組番頭之儀はいにしへ御書院番頭ゟ兼帶被致候も有之由、其以後元和五亥年十二月十四日、松平伊豆守、阿部豐後守、堀田加賀守、右三人江二組充御預ケ被遊候由、三人之衆、後は若年寄兼帶に而被勤候由、寛永五辰年十月五日、三浦志摩守、若年寄兼帶に而當御役被仰付、堀田加賀守御預り之二組之內、一組御預被遊候由、同九申年四月八日、諸御番一同に番組相極候、一番松平伊豆守、組頭池田帶刀、二番阿部豐

後守、組頭朽木民部少輔、三番三浦志摩守、組頭稻垣藤十郎、四番堀田加賀守、組頭三枝宗四郎、五番內藤出羽守、組頭內藤左近、六番阿部對馬守、組頭服部玄蕃、右之番頭衆江此時ゟ一組充御預ケ、御小性組都合六組ニ相定り候、同十酉年七月廿六日、二組被仰付、番頭中根大隅守、組頭戶田淡路守、番頭柴田筑前守、組頭中山勘解由、是より八組ニ成候、同十八巳年六月二十日、番頭岡部丹波守、組頭水野下總守、番頭石川播磨守、與頭松平左近、二組被仰付、御小性組十組ニ相定、其以後慶安三寅年九月三日、右十組之內二組、御書院番被仰付、新規に四組被仰付、番頭松平伯耆守、組頭大久保市十郎、番頭本多土佐守、組頭眞田內藏助、番頭內藤出雲守、組頭大久保宮內、番頭渡邊丹後守、組頭本田將監、此四組に而、御小性組都合十二組ニ相成候、慶安四卯年四月廿日、番頭內藤信濃守病死ニ付、組中割込ニ成、組頭內藤牛左衞門は、同役秋元隼人跡江被仰付候、承應二巳年九月十八日、番頭內藤出雲守御側衆被仰付、組中ハ割込に成、組頭大久保宮內は、同役川口久助跡江被仰付、此時に又十組ニ成、享保十巳年六月朔日、御小性組ゟ二組、御書院番被仰付、八組ニ成候處、元文二巳年閏十一月十八日、番頭中根大隅守、組頭大橋五左衞門、後兵左衞門と改む番頭松平備後守、組頭神保四郎右衞門、右二組新規ニ被仰付、御本丸六組、西丸四組、御小性組十組ニ相定り候、延享二巳年九月朔日、大御所樣御附西丸御小性組新規に被仰付候、御本丸同役六番組ゟ組替に而、佐野右兵衞尉、組頭同人組ゟ松平新五郎、新御番ゟ仙石治兵衞、後丹波守と改組頭は、御本丸同組二番組ゟ組替に而菅谷八郎兵衞被仰付、御小性組御本丸六組、西丸六組、合十二組ニ相成候、

〔藩翰譜五阿部〕對馬守重次、○中略幼きより左大臣家に仕へ奉り、大猷院殿の御事○德川家光寛永七年八月、御扈從組の番頭になされ、同き十五年、宿老の職に補せられ、老中の後も御扈從組の番頭を兼れたり、按ずるに、此頃の老中も少老も、番頭を歷ずといふ人なし、深き御旨ありしと云ふ、○下略

〔東職記聞二〕扈從組番頭六人

抑當衛之始不詳、其所由來尙矣、萬姓家譜曰、天正七年五月、擧松崎權七郞小姓組也、(御番入ノ事ナリ)集成曰、天正十八年二月、小田原役、被令永井右近大夫直勝、本多佐渡守正信、加々爪甚十郞政澄、牧野甚十郞長勝等、指揮小姓衆八十餘騎也、疑當衛之濫觴、如此之類乎、又曰、慶長十四年十二月、神祖(○德川家康)獵多坪馬場云々、花畠番頭(○小性組番頭)牧野内匠頭信成云々、射猪也、同十九年十二月、神征秀賴之時、書院番頭松平忠左衞門勝隆、帶花畠番頭也、元和元年四月、秀賴再叛之時、花畠番頭水野監物忠元、井上主計頭正就、成瀨豐後守正武等三人、供奉台德院殿(○德川秀忠)也、代々記曰、大坂役當衛供奉台德院殿四組、姓名如集成、而加板倉周防守重宗、且云帶步行扈從人(扈從ハ是古ヘノ字ヲ用ヒ地ニ)之頭也、案集成脫板倉氏也乎、如何者、元寬日記曰、元和元年、賞大坂役之勳功、當衛番頭井上主計頭、板倉周防守、成瀨豐後守等之組某々、給加恩幾百石也、依是則集成脫板倉氏者必矣、又不載水野氏者、疑水野氏部下無蒙加恩者、則闕之歟、一本代々記曰、大坂役以前、置當衛四組、大久保右京亮、日下部河內守、板倉周防守、成瀨豐後守等補番頭也、然大久保日下部二氏、在職之事、古史所不載、記以待來者之攷而已、元寬日記曰、元和九年十二月、大猷院殿(○德川家光)以松平伊豆守信綱、阿部豐後守忠秋、堀田加賀守正盛等三人被補當衛番頭也、代々記亦同說、而曰統領人別二組也、寬永五年十月、三浦志摩守正次補之、同八年閏五月、堀田加賀守正盛遷若年寄、番頭如故也、同八年六月、(寬明作五月)增當衛二組、以石川播磨守總長、岡部丹波守與賢兩人被補番頭也、當衛故八組、今增之爲十組也、然代々記、以石川岡部二氏補職爲寬永十八年事也、慶延略記亦云然、寬明日記、以石川岡部二氏補職爲寬永八年五月事、則代々記、慶延記、恐失之乎、同九年十二月、松平信綱、阿部忠秋、遷若年寄、番頭如故、統領人別二組也、但分忠秋之二組中其一組、被令阿部對馬守重次統領之也、同十年六月、三浦正次遷若年寄、番頭如故也、(寬明同說)同年七月、增二組、以柴田筑後守康長、中根大隅守正成等被補番頭、總八組也、今年增衛之事、代々記亦同說也、寬永十八年、增置定十組者、既辨右、故不

委記焉、代々記曰、慶安元年三月、大久保右京亮敎勝（敎一作致）代石川總長、同三年九月、屬書院番四組監國君（○德川家光世子家綱）之時、以大久保右京亮致勝補其書院番頭、組亦從之、於是石川氏之統、入書院番而絕矣、寬永十九年、北條右近大夫代阿部對馬守、慶安三年三月、北條氏之組、亦屬監國君入書院番、而其統絕矣、又內藤出羽守之組、三傳而至內田信濃守、慶安四年四月、大猷院殿薨、內田氏殉之、乃割其組充總衞也、其前年、屬當衞四組監國君、以松平左馬允氏信（改伯耆守）渡邊半之丞吉綱（改丹後守）本多土佐守忠隆、內藤出雲守忠廣等四人、被補番頭也、但松平渡邊二氏、自書院番頭遷之也、承應二年九月、內藤忠廣遷側衆、乃割其組充總衞不足也、案自元和至寬永始當衞六組、而番頭四人、如何者、如正盛信綱統領人別二組、如忠秋二組、分其一組而被令重次統領之、則番頭四人也、又雖不記內藤出羽守補職之年月、大抵類重次者歟、寬永十年、增二組、則八組、同十八年、又增二組、則十組也、慶安三年、置監國君（家綱公）之屬衞四組之時、當衞之入書院番者二組、則所其有者八組也、同四年、大猷院殿薨、內田氏殉之、乃罷其組、則七組也、嚴有院殿（○家綱）即阼之後、以其屬衞四組合之、則可十一組也、承應二年九月、牧野佐渡守親成遷側衆之後、割其組充總衞、則十組也、然代々記不委記嚴廟之以四組合之、（○中略）享保中、有德院殿（○德川吉宗）屬當衞四組監國君（○當將軍家重）、延享二年九月、當將軍家受有廟之讓移本城之時、以其屬衞屬今之監國君（家治公）也、今六組無增減也、

〔吏徵別錄（上布衣以上）上〕御小性組番頭　慶長十一年丙午十一月二日、始置當職、若年寄、又ハ御側御用人より兼帶、或は御徒頭、小十人頭兼帶、　元和九年癸亥六月十五日、置三組、松平伊豆守、阿部豐後守、堀田加賀守、　寬永九年壬申四月八日、六組被定、一番松平伊豆守、二番阿部豐後守、三番三浦志摩守、四番堀田加賀守、五番內藤出羽守、六番阿部對馬守、　同十年癸酉七月廿六日、增置二組、合八組、中根大隅守正成、柴田筑後守康長、　同十八年辛巳六月廿日、增置二組、合十組、岡部丹後守與堅石川播磨守總長、（○中略）　慶安三年庚寅九月三日、二組廢、合八組、始置西丸御附四組、松平伯耆守氏

組頭

信、本多土佐守忠隆、內藤出雲守忠吉、渡邊丹後守吉綱、　同四年辛卯五月朔日、一組減、合十一組、內藤信濃守正信、　承應二年癸巳九月十八日、一組減、合十組、內藤出雲守正由、（○中略）　同（○享保）九年甲辰十一月十五日、二組減、合八組、二丸附二組新規、　同十年乙巳六月朔日、廢二丸附、　元文二年丁巳閏十一月十八日、二組減、合六組、置西丸附四組、　寛保二年壬戌九月朔日、新規二組、（各三十五人）大御所樣（○德川吉宗）御附、（佐野右衛門尉茂承、仙石丹波守久近、）　寶曆元年辛未七月十二日、大御所樣御附二組潰番頭組頭、寄合御番衆小普請入、（○此年吉宗薨）　同十年庚辰四月朔日、西丸四組、大御所樣（○德川家重）御附、　同十一年辛巳八月三日、御附四組、御本丸勤、合十組、　同十二年戊午十二月十五日、四組若君樣（○德川家治世子家齊）御附、御本丸六組、　安永八年己亥四月十六日、西丸四組、御本丸勤、合十組、　天明元年辛丑五月廿四日、四組西丸附、御本丸六組、　同六年丙午閏十月廿日、西丸附四組、御本丸勤、　寛政八年丙辰十二月十日、四組西丸附、

〔慶應二年武鑑〕御小性組御番頭

一番切割、同（○指物）上淺黃下紅、　井上志摩守正武

二番切割、同赤段々、　朽木大和守

三番切割、同（上下）黑中白、　岡部日向守長保

四番切割、同（白黑彩段々筋）　松平石見守

五番切割、同白地、　酒井安房守

六番組切割、鐡紫地、　巨勢大隅守

七番組切割、同黑地、　松平豐後守

八番、組切割、同白黑地、　井上越中守

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月廿一日、兩御番役名ヲ廢ス、

當月朔日廿一日、兩度にて御番御廢止、頭與頭は勤仕並寄合に、組壯年の者は奧詰銃隊仰付られ、其外は勤仕並小普請、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數（井）組支配

一御小性組與頭　八人

〔東職記聞 二〕扈從組與頭六人　布衣
毎レ組置二壹人一、掌下從二番頭一奉中行組衆之事上職也、

〔諸例集 中〕一與頭は、一組五十人之内と心得可レ申御沙汰之事、

享保元申七月朔日廻狀留之内

一大久保豐前守、板倉修理兩組中御引渡相濟候、享保元七月朔日、御禮過、〇中略御小性組番頭四人宛、同與頭四人宛、相揃可レ申旨、大久保長門守殿被二仰渡一、〇中略御小性組番頭朽木土佐守、皆川志摩守、秋元隼人正、鈴木能登守、〇中略御小性組與頭金田周防守、池田修理、松平孫左衛門、井上源藏、江御右筆部屋於二御緣頰一、若年寄衆御列座、長門守殿被二仰渡一候は、御引渡之節、組頭帝鑑之間御敷居之内江只今迄入申候、自今以後は、御敷居之外ニ可レ罷在候、總而組頭仕方、同役之様ニ相心得、御備御作法共ニ違、御爲ニ茂不レ宜候、組頭は一組五十人之内之事ニ候間、向後相改、番頭差圖を請可二相勤一候、御用之儀は、番頭組頭無二腹藏一可二申談一候、此旨御老中方に茂、被二仰候旨御座候、

〔明良帶錄〕兩御番〇書院、小性組、組頭
組中の差引、諸請願進達を取次、通帳を以て番頭へ達す、御觸幷申渡事、先例の如く申渡す、番頭より組中への廻狀には兩觸もあり、非常の節、番頭組頭組中、馬場先御門の寄場へ出る、御供番の寄場は、坂下御門外也、組中判元見屆の節書付、其跡目願書、御上候扣共二通、番頭扣二通、親類添願書、醫師姓名書、懷胎の婦人無レ之書付也、親類持參、請二取之一也、明き組の節、月番の頭へ掛合、新規番頭被二仰付一、三日帝鑑の間御引渡の節、登城有レ之、

〔大猷院殿御實紀 十九〕寬永九年正月十二日、尾紀兩卿に、小姓本多美作守忠相、小姓組與頭太田釆女正資家、御使して鶴をつかはさる、

〔大猷院殿御實紀三十一〕寬永十三年六月廿六日、小姓組與頭3田五郎兵衞直次は、寬永通寶新鑄の事にて、上方につかはさるゝによりて、いとま下さる、

〔有司勤仕錄〕御小性組番頭

一組頭壹人有之、御書院と同格にて、布衣役、若年寄之支配、

但御書院組頭之次也

〔吏徵上布衣以上〕御小性組與頭六人　若年寄支配　菊間南御襖際　千石高

〔仕官格義辨〕諸御番組頭之事

問云、諸御番組頭之內、分而兩御番〇書院、小性組、組頭衆と申は、番頭衆にも、大違無之格之樣に而、組中に而は、兩頭共尊敬被申候、昔ゟ只今之如ク結構に有之候哉、答云、成程兩御番組頭と申は、昔ゟ結構成格に而候由、〇中略御小性組與頭には內藤市正後石見守と改、柘植志摩守、後出羽守と改、松平內膳正、松平左近、後縫殿頭と改、鳥井讚岐守、三浦左十郎抔ニ而、昔ハ組頭ゟ直に番頭被仰付候、〇中略御側衆大御番頭之子息達之、寄合ゟ組頭に被仰付候も數多有之候、爰を以相考候得バ、結構成御役儀と被存候、

〔吏徵別錄上布衣以上〕御小性組與頭〇中略　寬文五年乙巳三月十八日、御役料五百俵、十人　天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、　享保八年癸卯六月十八日、千石高、

〔慶寬諸條令下〕御役料之覺

小性組組頭

五百俵

寬文五年巳七月

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、〇中略小性組の與頭、〇中略五百俵、

〔享保集成糠粭錄三十〕享保八卯年六月

千石ゟ內は、千石之高に可ㇾ被ㇾ成下ㇾ候、

〔三番頭歷代〕御小性組番頭　始記　　御小性組之組頭

秀吉公御代、大坂御陣以前、慶長年中始而被ㇾ仰付、始者御花畑御番と號す、〇中略

與頭永井信濃守尙政〇中略　　與頭植村出羽守家政〇中略

與頭松平大隅守利重〇中略　　與頭大久保主膳正幸信〇中略

與頭松平縫殿頭直次〇中略　　與頭松平志摩守重成

〔吏徵別錄上布衣以上〕御小性組與頭　寬永九年壬申四月八日置二六員一、一番池田帶刀、二番朽木民部少輔、三番稻垣藤七郎、四番三枝宗四郎、五番岡部左近、六番服部玄蕃、

組衆

〔職掌錄〕御小性組番頭

御番衆每組五十人

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一御小性組番頭〇中略　組衆五十騎

〔吏徵上御目見以上〕御小性組三百人〇中略　一組五十人

〔仕官格義辨〕御番衆之事

問云、諸御番衆、御番所其外之勤茂、只今迄之通ニ而候哉、答云、御小性組之儀は、御花畑之御番と申候而、奧近キ御番所に勤、御城御成之節之御供も被ㇾ致候由、〇中略同〇寬永二十未年八月、新御番新組に四組被ㇾ仰付、御番所茂奧近ク勤、其節ゟ御小性組は紅葉之間江勤、〇中略享保元申年八月八日ゟ二丸江片類充御番被ㇾ仰付、番頭は泊計り、詰番は組頭ゟ二丸江被ㇾ勤候由、同九辰年十二月十五日、二丸江御入分有ㇾ之、御小性組も二組、二丸江被ㇾ爲ㇾ附候ニ付、御本丸御小性組ゟ二丸御番ハ相止候、

〔營中御日記十七〕寬永二十年八月七日、今度御番所改、

紅葉間可勤番旨　御小性組元御花畑間也

〔明良帶錄〕御小姓組、御書院番、

是を兩御番といふ、昔は御小姓組を御花畑番といふよし、〇中略非常の節は、椋間等にて御座敷向火の粉を防し也、御供弓は、毎暮雁的の中り附にて申渡、御書院方輪勤なり、正月御射場始は御番引、稽古式の事、小笠原縫殿助へ相談、弓太郎は柘植清左衛門也、中庭御場所に於て、祿頂戴有之、布衣之御番衆は、正月は別段の御禮有り、寄合ゟ高の仁至る事あり、廻り御番衆は番外なり、

〔有司勤仕錄〕大御番頭

一江戸にて廻り番と云事有り、其内は御番を不勤、〇中略兩御番〇書院、少性組、ゟも出る、

〔大成令五十一〕寛文四辰年十二月十五日

覺

一御小性組　御供番　櫻田口大腰掛〇中略

右御城近所火事、并大なる火事之節、此書付之所々江罷出可有之、其外非番之面々、宿所に在之候而、頭々江召仕之者を附置、可任差圖、〇下略

〔諸例集下〕一御小性組方月次寄合之儀相定候事

享保六丑年十月廿八日、於御城部屋申合候、月番仁木周防守、

一月並寄合、古來之通、向後月番之者於宅、毎月廿日ニ寄合可申候、差合候はゞ廿四日に可致候、當時は十九日ニ寄合、差合候得バ廿二日ニ致候事、但月番ゟ寄合日限、一兩日前致廻狀候、當日病氣ニ而寄合ニ不能越候はゞ、月番之仁、詰番之仁江、手紙ニ而斷可申達候事、右申合後定如左、

享保十五戌年正月廿日、於御城部屋同役申合候、月番松平阿波守、

一向後毎月寄合御城部屋に而一ヶ月一度ヅヽ寄合可ㇾ申と申合候、此後申合如ㇾ左、

享保十八丑年三月廿八日、於二御城部屋一同役寄合之節申合、月番靑木縫殿頭、

一月番之節、只今迄部屋ニて寄合候得共、向後宅ニ而寄合可ㇾ申と申合候、

〔諸例集下〕一組々入組候義有ㇾ之時は於二御城部屋一寄合可ㇾ致二申合一之事

享保十七子年三月廿四日、月番於二水野丹波守宅一寄合申合候、

一組々御番衆之義ニ付、入組候事ハ不ㇾ及ㇾ申、并家來又は知行所出入有ㇾ之候はゞ、番頭了簡ニ而落着不ㇾ申候はゞ、月番江申遣、於二御城部屋一同役寄合、相談之上御支配方江可二申上一候、番頭病氣ニ而出席不ㇾ能ㇾ成候はゞ、月番江申遣、其番頭宅江寄合可ㇾ致二相談一候、右之外、輕キ義は同役江申談候ニ不ㇾ及候事、

〔大猷院殿御實紀二十〕寛永九年七月廿六日、諸國巡察の輩暇賜ふ、上方は〇中略小姓組肥田主水忠親、〇中略關東は、〇中略小姓組武藤理兵衛安信、

〔大猷院殿御實紀三十六〕寛永十四年十一月廿六日、小姓組津田平左衛門正重、牧野織部成常、水野藤右衛門元吉、府内を巡夜し、火賊を考察すべしと命せらる、こは近日各邸に火矢を投入、または火を放つ賊あるよし街説あるをもてなり、

〔大猷院殿御實紀五十一〕寛永十九年六月八日、城米并廩米の員數、明詳に査檢すべき旨仰出され、小姓組八人、書院番七人、大番十五人、査檢の奉行仰付られ、勘定頭曾根源左衛門吉次、及び伊奈半十郎忠治にはかりあふべしと命せらる、

〔大猷院殿御實紀六十二〕正保二年十月朔日、小姓組永田勝右衛門直俊は、大坂目付にさゝれ暇給ふ、

〔大猷院殿御實紀六十六〕正保四年六月六日、小姓組長谷川三左衛門守勝、地震によて、各所崩頽の

地、修築奉行命せらる、

〔厳有院殿御實紀二十三〕寛文二年四月十七日、小姓組井上太左衞門正貞、書院番阿倍四郎五郎政重、増上寺修理奉行を仰付らる、

〔厳有院殿御實紀三十六〕寛文八年正月十九日、小姓組藤堂主馬良直、岡部莊左衞門久綱、〇中略去年令せられし、府内閑地新造屋舍査檢すべしと仰付らる、

〔温恭院實紀十一〕安政三年八月二十三日

御小姓組　酒井對馬守組

蝦夷地在住　高橋三平

右被仰付之、

〔温恭院實紀十四〕安政四年七月二十三日

御小性組　秋山安房守組

金貳枚　久保紀之助

右長崎表江、海軍傳習爲御用罷越ニ付被下旨、備中守申渡之、

〔有司勤仕錄〕御小性組番頭

一組之格は、御書院と同等之內、少し重きかた也、或は親御書院番、子は御小性組に成る、父御小性組にて、子御書院番と成、其外昇進之次第大概同じ、

〔吏徵上御目見以上〕御小性組〇中略　頭支配　三百俵高〇中略　慶長十一年丙午十一月日始置

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御小性組〇中略　寛文元年辛丑五月廿一日、三百俵高、

〔柳營秘鑑四〕諸御番所井末々迄御切米並高之大概

一御書院御小性兩番衆　三百俵

西丸小性組番

〔大猷院殿御實紀五十九〕正保元年十二月廿五日、この日小姓組八人、書院番十三人、新に廩米三百俵〇中略づゝ給ふ、

〔職掌錄〕御小性組番頭

西丸四人

〔諸例集中〕一西丸御小性組番頭詰番、御先番ゟ相勤候筈ニ申合、相極候趣如左、

寛延四辛未年五月

向後御先番之者、詰御番相勤候申合ニ付、勤方一件、

一上野増上寺御成之節、御先番當り之者、御先江罷越可申候、詰御番ハ只今迄之通、本御番之者、詰御番持切ニ相勤可申候、

但三人勤之節も、御先番は其當り之通相勤、是又本御番之者、詰御番持切相勤可申候、御番割之詰御番心得介ハ、只今迄之通、御本丸方江可申遣候、

一遠御成之節は、此度申合之通、御先番之者詰御番相勤、本御番之者、八ッ半時罷出代り合可申候、

但三人勤之節は、本御番之者、詰御番持切相勤可申候、

一御留守御供番は、只今迄之通、明ヶ之者、組共ニ相心得可申候、

一貳人勤之節ハ、唯今迄之通、相心得可申候、

一御三家方江上使被仰付、前日被仰付候はゞ、御先番之者可罷越候、詰御番ハ、御番割之通、明ヶ之者相勤可申候、尤前日詰番之者、其譯廻狀書加可申候、

但三人勤之節、御小性組方ゟ兩人罷越候はゞ、本御番之者、詰御番持切相勤、御供番御先番之者可罷越候、御供番跡介ハ御本丸方江、月番之者方ゟ可申遣候、是又前日詰御番之者廻狀書加、月番之者方江も、其譯以別紙可申遣候、

一大御所樣御附同役、當番之助入候節ハ、盛〇盛恐誤字ニ無構御先番之者介可申候、其節は明ケ之者、御番割之通、詰御番相勤可申候、
但三人勤之節ハ、本御番詰御番持切相勤、御先番跡介ハ、御本丸方江可申遣候、
一大御所樣御成之節、乘付之介茂御先番ゟ相心得可申候、其節も詰御番ハ、明ケ之者相勤可申候、
但三人勤之節ハ、本御番詰御番持切相勤、御先番之跡介ハ、御本丸方江可申遣、還御後ゟ、當前之通相勤可申候、尤其段御本丸方江可申遣置候、
右之通、申合相極候ニ付、五月廿日、西丸方御用番戸田淡路守殿江月番松平下野守、御登城前罷越、急度致進達候、書付左之如し、
私共詰御番勤方之儀、先年小出信濃守殿江相伺候處、御人少之義ニ□□詰御番申合、何レニも御殿明キ不申候樣ニ申合、可相勤被仰渡候、依之御先番ゟ詰御番相勤申候處、其以後只今迄、從本御番詰御番持切相勤申候、此度先年之通、從御先番詰御番相勤申候付、入御聽置申候、以上、
五月廿日

〔吏徵上布衣以上〕西丸御小性組番頭四人　同上〇若年寄支配、菊之間、諸大夫、四千石高、　慶安三年庚寅九月三日始置

〔東職記聞二〕監國君職

西丸御小性組番頭

扈從組番頭四人　從五位下

統領昵近衆人別五十人也、慶延略記曰、慶安三年九月、大猷院殿〇徳川家光以扈從組番頭松平左馬允氏信、渡邊半之丞吉綱、本多土佐守忠隆、内藤出雲守忠廣等四組被屬監國君〇家綱家光世子也、代々記曰、享保中、有德院殿〇徳川吉宗以當衞四組被屬監國君、〇吉宗世子家重延享受讓之時、傳屬今之監國君〇家重世子家治也、

〇按ズルニ、西丸小性組沿革ノ事ハ、本丸小性組番頭ノ沿革任免ノ條ヲ併セ看ルベシ、

〔東職記聞 二〕監國君職

屬從組番頭四人

組頭四人　布衣　職掌同²本城同列¹也

〔吏徵上 布衣以上〕西丸御小性組與頭四人　同上 ○若年寄支配、菊間南御襖際、千石高、　慶安三年庚寅九月三日始置

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿 ○德川家綱 世子 家光 御方に附屬せらるゝ輩あり、○中略 中奥番大久保市十郎忠高、御小姓組眞田內藏助信勝、書院番大久保宮內少輔正朝、本多將監景次は、その小姓組與頭になり、○下略

〔吏徵上 御目見以上〕西丸御小性組貳百人　同上 ○頭支配、三百俵高、一組五十人、　慶安三年庚寅九月三日始置

〔常憲院殿御實紀五十一〕寶永二年正月九日、けふ火災の時、番士西城にまかる寄場の定制を合せらる、小姓組二隊、番頭與頭そひて一隊は山里門內、一隊は西城の裏門內へまかるべしと前に定められしかども、今より後、一隊は裏門外に備へ、一隊は先々のごとく山里門內に備ふべし、

〔附〕晝夜廻 本所晝夜廻〔併入〕

大番書院番、小性組番ヨリ出役シテ、各〻江戸市中ヲ巡廻シ、非常ヲ警戒ス、並ニ稱シテ晝夜廻ト云フ、此事寬永六年ニ始マル、當時ハ夜中ニ限リシガ、後ニハ、晝夜共ニ、時ヲ定メテ巡廻スルコトヽナリ、又其人數モ、初メハ大番ヨリ十五人、書院番ヨリ八人、小性組番ヨリ、七人ヲ出スニ過ギザリシガ、元祿十年ニ至リ、書院小性組ノ兩番ヨリ、各〻百人ヲ出シ、大番ヨリ八十人ヲ出スコトヽナリ、寶永六年以後ハ、兩番ヨリ各〻七十四人ヲ出シ、大番ヨリ四十八人ヲ出スコトヽナレリ、又巡廻ニ遠近ノ別アリテ、兩番ハ江戸城ニ近キ內郭ノ地ヲ廻リ、大番ハ、遠キ外郭ノ地ヲ廻レリ、

又別ニ本所深川ノ地ヲ巡廻セシムルアリ、之ヲ本所晝夜廻ト云フ、兩番ノ出役ニシテ、寬文

七年ニ始マル、

〔吏徴附録 幕職〕晝夜廻番　兩御番○書院、小性組、七十四人、大御番四十八人出役、

〔有司勤仕録〕大御番頭

一江戸にて廻り番と云事有り、其内は御番を不勤、御城下廻り辻番にて、火之元等之事申付る也、馬の後に棒を持する也、兩御番ゟも出る、但兩御番は御曲輪之内、大御番は外曲輪相廻ル也、

〔仕官格義辨〕御番衆廻りの事

問云、兩御番大御番之内に而、廻り衆と申ハ、昔ゟ有之事に候哉、答云、御番衆廻り之儀、昔ゟ有之事ニ候、殊に昔は御城江被為召候而被仰付候由、人數之儀、只今之廻り之衆と違候樣に承候、寛文之頃迄ハ、夜廻りと申候而、宵過曉頃、夜中計兩度ニ廻り、右之翌日組頭之宅江罷越、昨夜廻り相勤候事申達、判形其度毎ニ致候由、人數も一組ゟ二人程ツヽ出候由、其後晝夜廻り候樣被仰付、廻り之人數も、一組兩人充に増、兩御番方に而、打込、晝八人、夜八人、一時半充廻り、大御番方に而は、晝夜二時充之積、晝六人、夜六人晝夜相勤候、兩御番方ニ而は、本庄廻りと申而別に出、御書院方在番組増廻りと申茂候得ば、一組ニ七八人廻り之衆有之候組茂御座候、元祿十丑年十一月六日、御小性組百人、御書院番百人、大御番八人、右之通廻り増候と被仰付候處、又々追々先規之人數之如ク相減じ、只今ハ兩御番一組六七人、或ハ八人、大御番一組六人充、但御小性組ハ、西丸江半組充分り候分ハ、御本丸六番組、西丸一番組三番組、四番組、右之組ハ廻り之人數も二組分り候故、一組ニ三四人程ツヽ、有之候、大御番茂在番休に而、江戸勤六組之内ハ、一組八人充に而二組分、休組之助廻り勤候、

〔三番頭歴代〕晝夜廻り心得覺

寛永六己巳年十月七日、晝夜廻り、初而被仰付候由、

御書院番八人　御花畑番性〇小組七人　大御番拾五人　都合三拾人

〔甘露叢六十四〕元祿十年十一月八日、大番頭、御書院番頭、御小姓組番頭被爲召、組中夜廻り、增番出シ可申旨被仰出、

〔教令類纂初集四十一〕元祿十丁丑年十一月五日

一御番衆廻番之人數、增被仰付之、

御小姓組　　廻番人數二十六人、增百人ニ成、

御書院番　　廻番人數二十六人、增百人ニ成、

大御番　　廻番人數三十二人、增八拾人ニ成、

〔教令類纂初集四十一〕寶永六己丑年三月

一御番衆、晝夜廻之儀被仰出之、

大御番頭ヘ、御番衆晝夜廻之儀、前方之通、四拾八人ニ可被致候、

御書院番頭ヘ、御番衆晝夜廻之儀、前方之通七十四人ニ可被致候、

御小性組頭ヘ、同文言、

右之通、老中若年寄中申渡之、

丑三月八日

〔三番頭歷代〕晝夜廻り心得覺

寬文二年寅十二月二日、晝夜廻リ被仰付、兩御番大御番共一組六人宛被仰付候由、廻リ壹組六人宛、二月ゟ十月迄、助廻リ貳人ツヽ、

廻リ日五日目に廻リ申候、貳組申合、晝夜ト分ケ、遠回りは一六ノ日、壹組ニ而一日相廻り、四十一日目に再偏廻り申候、

近廻り小石川御門內、御留守居町、番町、永田馬場限り、遠廻り小石川大塚、雜司ヶ谷、四ッ谷、中野法泉寺邊迄、二ッ分ヶニ相成廻ル、定廻リ者、風烈又者御成、加廻リ仕候、

一遠廻りは、總組に而一ヶ月に六度、壹組に而一日宛持切り、最寄分ヶ、六人不ㇾ殘相廻り申候、

一御成之節并風烈之節者、非番に而も持場所相廻り申候、

晝夜廻り場所

一飯田町壹、田安もちの木坂ノ上、市ヶ谷御門之內、四ッ谷御門之內、赤坂御門之內、永田町麴町、牛込御門之內、土手限り、

遠廻り之場所

一雜司ヶ谷、大塚、小石川、牛込、河田ヶ久保、市ヶ谷御門之外、喰違、鮫ヶ橋、權田原、千駄ヶ谷、青山、四ッ谷大木戶、內藤宿、中野、大久保、高田馬場限り、

〔憲教類典二ノ十一晝夜廻〕慶安二己丑年五月十日

兩御番より夜廻り被二仰付一候

御書院番　三十人　御花畠番　三十人

御城下各屋敷長屋ニ大火相見候はゞ、其主人ニ可ㇾ付ㇾ屆也、辻番油斷、大寐など仕ニ依ては、相斷可ㇾ申候、〇又見二營中御日記一

〔慶寬諸條令上〕寬文二年寅八月、御書院方、御小性組致二相談一、夜廻組合致、其上夜廻衆へ申渡候書附之覺、

一夜廻り衆之組合相究候上、內證にて差替候はゞ、其頭々差圖、出合廻は替可ㇾ申事、

一夜廻り衆組合之內、煩差合候て、人不足ニ候はゞ、中間ニて助に取、廻り合可ㇾ申事、

一夜廻衆代人出候はゞ、出候人之跡へ、入廻被ㇾ申候樣ニ可ㇾ申渡事、

一夜廻り衆之組合、差引相究、以後組合之様子、面々頭々へ夜廻り衆呼候て、組合之書附相渡可ㇾ申事、

一御書院番方ハ、毎年駿府へ四人宛被ㇾ參、夜廻不足ニ成申候間、御書院方より四人、增人出し可ㇾ申候事、

〔慶寛諸條令上〕覺

一晝夜江戶廻り番之面々被ㇾ爲ㇾ召、廻之刻、不審成もの於ㇾ有ㇾ之ハ召捕可ㇾ申旨、但風はげしき時分、非番之面々も廻り、火之用心堅可ㇾ申付旨被ㇾ仰ㇾ出候、

寬文二年十二月二日

〔慶寛諸條令下〕夜廻り衆永煩代人之事

一五十日煩、近日本復難ㇾ成體に候はゞ、番頭迄可ㇾ被ㇾ申聞、斷次第代人出し、本夜廻之仁、本復候而被ㇾ相勤ㇾ候迄、廻り被ㇾ申候様可ㇾ仕事、

一夜廻り衆御暇、十月より三月迄は遣し申間敷事、

但無ㇾ據用之儀有ㇾ之由被ㇾ申候はゞ、其様子承、代人を立、遣し可ㇾ申事、

寬文四年辰十一月十三日

〔教令類纂初集四十一〕元祿十丁丑年十一月五日

大御番晝夜近廻之場所限

一東飯田町之壹、口田安もちの木坂の上限り、

一西市ヶ谷御門之内、四ッ谷御門之內限り、

一南赤坂御門之內、永田町、紀伊宰相殿屋敷前後、

一北牛込御門之內、土手通限り、

本所夜廻

同遠廻場所限

一東小石川御門之外、傳通院前後、

一西高田、中野限、

一千駄ヶ谷、青山宿限、

一雜司ヶ谷、巣鴨御藥園限、只今まで被₂廻候場所ハ、前々の通可₂被₁相心得₁候、其外ハ此書付之通、彌相考向後可₂被₁廻候、以上、

御小姓組御書院番廻場所

一櫻田廻

只今迄、八丁堀、靈岸島、增上寺表裏通、土器町、西之窪、芝札辻迄、向後も只今迄之通、

一青山方廻

只今迄、細川越中守屋敷邊、三田、二本榎、長坂、麻布、白銀だい、澀谷、向後も只今迄之通、

一神田方廻

只今迄、上野邊、谷中追分、淺草觀音、千駄木白山邊迄、向後大塚護國寺邊迄、

只今迄被₂廻候場所ハ、前々之通可₂被₁相心得₁候、

○

〔慶寬諸條令〕下本所夜廻り、初而十二人、一年代りに被₂仰付₁ニ付而、御書院番より六人、御小性組より六人、

一本所夜廻り、一組四人之內、晝一人にて、晝廻之場所、一篇廻り可₂被₁申事、

一夜三人ニて、宵夜半曉割をいたし、一篇宛夜廻之場所へ、二篇之都合ニ廻り可₂被₁申事、

一煩廿日過、永引可₂申體候は、代人出し可₂申事、

一忌二日より上は、代人出可申事、
一晝夜廻り煩之時は、夜廻り三人之內、助可申事、
一夜廻り三人之內、一人煩之時ハ、助無用之事、二人煩之時ハ、一人ハ二cc廻り可申事、三人煩之時ハ、代人出し可申事、

寬文七未年六月十六日

〔慶寬諸條令下〕覺

一六月二十六日より、晝夜廻り可被相勤事、
一風吹く時、非番廻被申候儀、差圖無之內、無用之事、
一夜廻り、一組之內にて被致月番、諸事肝煎可申事、
一御小性組方ハ、來年申之霜月十五日迄ニ廻、代人ハ同十六日より廻可被申事、
一御書院番方ハ、來年申ノ霜月廿五日迄ニ廻リ、代人ハ同廿六日より廻リ可被申事、
一總而江戶夜廻之通可被致候、何にても御聞有度義ハ、其組之番頭組頭衆へ御尋可有之事、

未〇寬文七年六月十六日

〔慶寬諸條令下〕夜廻道筋

覺

一兩國橋近邊、御材木藏、東新川、北南橫川より西侍屋敷所々、
一同所北之御步行衆屋敷近所、幷新川南西へ三十三間道近邊、
一長慶寺前、町與力同心屋敷東西、
一橫川東、諸與力同心住居有之所々、
一本庄新川、橫川、東西南北、所々辻番有之所、幷御材木藏川筋通、

職員

一新川大名下屋敷邊

一元番所御船藏近邊

〔慶寬諸條令下〕窺申相極覺

一本庄夜廻り、唯今迄ハ、人數之內、夜廻三人、晝夜一人、三番にいたし廻申候、晝夜廻り、一度廻り候得バ、其以後ハ辻番など油斷に相見え申候間、晝廻り增申度候、左樣ニ候ハ、御書院番、御小性組一組より一人宛出し、人數二十人ハ、四番にいたし、夜廻三人、晝廻り二人相勤申樣ニ仕度候、神田櫻田廻り之通、風吹の時ハ、非番之者も罷出、廻り申候樣に可ㇾ仕候、

寬文八年申十一月廿八日

〔慶寬諸條令下〕覺

一本庄廻り、今度八人增、二十人ニ成候、一組ハ五人定、四番にいたし、晝廻り二人、夜廻り三人にて可ㇾ被ㇾ相勤ㇾ事、

一今度出來申候新組一組之衆ハ、中ケ間之衆被ㇾ申合ㇾいたし候、以後三番之次ニ入、可ㇾ被ㇾ相勤ㇾ候、但面々組頭へ、何日より相勤候段、可ㇾ被ㇾ申達ㇾ候事、

寬文八年申極月二日

附屋敷改

屋敷改ハ、兩番小性番書院番ノ出役ニシテ、新地奉行トモ云ヒ、近世ハ稱シテ屋敷改幷新地改ト云フ、江戶府內諸屋敷ニ關スル一切ノ事務ヲ掌ルモノナリ、

〔諸御役代々記十八〕屋敷改新地奉行とも云

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一屋敷改　四人役料廿人扶持ヅヽ

〔天保十一年武鑑〕屋敷御改并新地御改　御書院番御小性組衆出役　御役扶持不同

三百俵　大岡釵負　四百石　中島彦右衛門　五百石　松井十左衛門

〔東職記聞二〕屋敷改四人

兩番組之兼職、而掌東都府内宅地改事也、慶延略記曰、寛永二年四月、被命屋敷改於阿部四郎五郎、也、先是無所見、則始于此歟、

〔仕官格義辨〕道奉行屋敷改之事

問云、道奉行屋敷改は、昔ゟ兩御番之假役に而候哉、答云、屋敷改は、先規ゟ兩御番之假役に而享保之初迄は、南北本庄深川と相分り勤候處、同六丑年十二月十二日、屋敷改御減じ、南北本庄深川共最寄に而可相勤旨、小菅猪右衛門、酒井新三郎、神保源五左衛門、小笠原三右衛門江被仰渡候、前方は屋敷改御免に而替り候而勤候得共、近年は定勤に相成候、

〔吏徴附録権職〕屋敷改三人　兩御番出役　御役扶持分限によつて不同　定式登城日、十月廿日廿九日、　寛文八年戊申正月十九日始置（兩番ヨリ出役）　寶永七年庚寅正月廿六日、廢屋敷改五人、　正德三年癸巳四月十二日、再置屋敷改（兩御番ヨリ出役六人）　内江戸廻南北四人、本所深川二人、　享保六年辛丑ニノ十二、向後南北本所深川打込勤四人、　元祿九年丙子七月晦日、始置本所深川屋敷改二人、　天明七年丁未十一月、始設月番、　寛政三年辛亥十二月六日、定員三人、

〔厳有院殿御實紀三十六〕寛文八年正月十九日、小姓組藤堂主馬良直、岡部莊左衛門久綱、書院番奥津内記忠直、中野傳右衛門弘吉に去年令せられし府内閑地新造屋舍査檢すべしと仰付らる、

〔文昭院殿御實紀五〕寶永七年正月廿六日、新地奉行の職を停廢せられ、在職のともがら、その〳〵本番にかへさる、

〔享保集成絲綸錄二十九〕寶永七寅年正月

申渡覺

一只今迄新地之所有ㇾ之、普請仕候節は、新地奉行衆江相斷候筈有ㇾ之候得共、向後新地奉行相止無ㇾ之候間、此旨可ㇾ被ㇾ相心得ㇾ候、

〔有章院殿御實紀三〕正德三年四月十二日、再び書院小姓組の番士六人に屋敷改の事を仰付らる、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月廿日、屋敷改幷ニ新地改役名ヲ廢ス、

右取扱の儀、御普請方下奉行兼勤を命せられたり、

〔明良帶錄後篇〕屋敷改

是も兩番より出役なれ共、殊之外御用多也、屋敷、町屋敷、町並屋敷、抱屋敷、新地築出し、皆懸り也、屋敷相對替、新規拜領は達を受く、普請板圍等屆を聞く、諸向屋敷帳改め、頭支配有ㇾ之分は頭々より書付差遣す、

〔憲敎類典三ノ三十三屋敷〕正德三癸巳年五月廿九日

今度屋敷改被ニ仰付ㇾ候、江戶廻は、石河三右衞門、山岡傳五郎、堀八郎右衞門、井上隼人、本所深川は、飯田四郎左衞門、諏訪六郞、可ㇾ相改ㇾ候、武家寺社町屋等、右面々之內江相達、得ㇾ差圖ㇾ候而、前々之ごとく書付等可ㇾ被ㇾ差出ㇾ候、或は新規之屋敷寺社町屋等においては、前々法度不ㇾ知案內ㇾ候事可ㇾ有ㇾ之候間、猶以右之面々差圖を請候て、萬事違格無ㇾ之樣に、急度其旨を相守べく候、以上、

五月廿九日〇又見ニ有章院殿御實紀一

〔諸御役代々記十八〕屋敷改

享保六辛丑二月十二日、向後南方北方本所深川共、四人ニ而打込可ㇾ相勤ㇾ旨被ニ仰渡ㇾ、酒井新三郞、小菅猪右衞門、小笠原三右衞門、神保源五左衞門四人ニ成ル、〇又見ニ吏徵

〔德川禁令考二十六屋敷改〕慶應三卯年二月

俸祿

屋敷改ニ而取扱候御用向御作事奉行ニ而取扱候ニ付御書付

覺

三奉行江

是迄屋敷改ニ而取扱候御用向、向後御作事奉行ニ而取扱候ニ付、只今迄屋敷改江申立候願伺、其外都而御普請方役所江申立候樣可被致候、

右之趣向々江相達候間、可得其意候事、

二月

〔靑標紙三編〕一出役之場所、兩御番に而は屋敷改、大御番らは御藏奉行を尤条書の場とす、又角力相撲は屋敷改の支配なり、是は廻向院に而角觝興行之時など、其地所に引合有之故なるべし、

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御定高不及分〇中略

知行高分限ニ應御扶持方　　屋敷改

新番頭

新番ハ、寛永二十年ニ始テ之ヲ置ク、當時ハ之ヲ御近習番ト云ヒ、又其番所ノ土圭ノ間ナリシヲ以テ土圭間組トモ稱セリ、正德三年ニ至リ、桐ノ間番ヲ廢シテ、之ヲ新番ノ番所トシ、安政三年ニ至リ、更ニ之ヲ桔梗ノ間ニ移シテ勤番セシム、其他將軍ノ出行ニハ、必ズ前驅スルヲ職トシ、初ハ四組ナリシガ、後漸ク增シテ八組トナリ、慶應二年ニ、遂ニ之ヲ廢セリ、番頭ハ一組ニ一人ヅヽヲ置キ、各、其組衆ヲ統轄セシム、三番頭ニ比スレバ、其資格甚ダ卑クシテ、寛

名稱

職員 職掌

文五年以後ハ、役料ヲ給セシガ、天和二年之ヲ廢シ、享保八年以後ハ、二千石高ト定メテ、別ニ役料ヲ給セズ、組頭モ亦一組ニ一人ヲ置ク、六百石高ニシテ、役料ヲ給セズ、組衆ハ、一組ニ二十人ヲ置ク、二百五十俵高ニシテ、役料ナシ、西丸ニモ亦新番アリ、享保九年ニ始テ之ヲ置ク、番頭以下職員ノ資格待遇等、凡テ本丸ニ同ジ、

〔泰平年表 大猷公〕寬永廿年八月七日、初而新御番四組を置る、〇始御近習番と唱

〔宙職記聞 二〕新番頭

う、寬日記曰、寬永二十年八月、始置當衛四組、〇中略而組中結番於土圭間、故號土圭間組也、

〔紳書 下〕丁酉〇明暦三年の火災後に、御住居替りて、御番人〇花畑番衆を今の紅葉の間へ出されて、小姓組番衆と改め稱したり、斯て御番所遠く成しかば、初て新番を置れて新番所は出來し也、

〔柳營秘鑑 四〕諸役人員數并組支配

一新御番頭　御本丸五人

〔官中秘策 九〕諸御役人之事

一新御番頭　六人

〔東職記聞 二〕新番頭六人

統領將軍家重代之昵近衆人、別二十人也

〔有司勤仕錄〕新番頭

一御勝手時計之間近所に新番所有、組之面々は是に詰るなり、御城內吹上抔江御成之節、御供に急に出る、出御抔之節は、殊之外間ヶ敷、急に駈て出る事あり、

一頭は泊番詰番御先番等有之、中之間に詰る也、

一御成之節、御輿之先に立なり、

一弓馬之見分、騎射之次第、三番頭之所と同じ、

〔明良帯錄〕新番頭

兩番頭〈○書院、小性組、〉之勤式を倣ふ、本番、詰番、御先番、御供番、西丸出とてあり、兩山御成には御先へ罷越、紅葉山の節は御靈屋へ御番、御靈前え御番前之日御番書差出す、吹上御成には、組頭御番衆六人召連候て、御場所へ相越御先番勤む、春秋は濱に於て、大的日割見分有之、

〔營中御日記十七〕寬永二十年八月七日、今度御番所改、

土圭間〈江〉　新御番

〔有章院殿御實紀四〕正德三年五月十八日、桐間番を停廢せられ、〈○中略〉桐間番の伺公せし所へは、新番宿直すべしと仰付らる、

〔溫恭院實紀十〕安政三年七月四日

大目付〈江〉

新番所、御模樣替に而桔梗之間〈江〉御引移し相成、是迄之新番所は、新部屋一纏に致し候、右ニ付、新番所前溜之儀は、向後新部屋溜と相唱候、得其意、相達可然向々〈江〉可被達候、

〔大成令五十一〕寬文四辰年十二月十五日

覺

一新御番　御先番　御花畑之下〈○中略〉

右御城近所火事、幷大なる火事之節、此書付之所々〈江〉罷出可有之、其外非番之面々、宿所に在之候而、頭々〈江〉召仕之者を附置、可任差圖、〈○下略〉

〔常憲院殿御實紀五十一〕寶永二年正月九日、けふ火災の時、番士西城にまかる寄場の定制を令せらる、〈○中略〉新番二隊、番頭組頭そひ、新番所に備ふべき定なりしかど、此後は躑躅間へまかりてあ

資格
俸祿

るべし、

〔大猷院殿御實紀七十一〕慶安元年六月十八日、この日仰下されしは、今より後、〇中略新番頭六人の内、かはる〴〵二人は奥にありてつとめ、四人は表にてつとめ、此輩は、すべて營中の諸士、勤番の勤怠を巡察し、法令壁書をよく守るか否を査檢し、御直に聞えあぐべしと命せらる、

〔嚴有院殿御實紀四十六〕延寶元年五月二十五日、新番頭奥勤、万年佐左衞門貞賴もて、板倉內膳正重矩の病をとはせ給ふ、

〔明良帶錄〕新番頭

此場布衣なれば、芙蓉之邊再勤之諸大夫被仰付、高持之人も有り、諸大夫は、一番組へは不被仰付、寬永二十年、遠山重左衞門、中根次郎左衞門、被仰付し後中絕、組中は大御番へ出る、享保之度、再被仰付、中之間詰なり、近比百人番之所より、爰に出る、

〔有司勤仕錄〕新番頭

一番頭之格、三番頭とは遙に下也、

〔吏徵上布衣以上〕新番頭六人　若年寄支配　中之間　貳千石高〇中略大坂御定番引渡御暇金三枚、時服貳、羽織、

〔吏徵別錄上布衣以上〕新番頭〇中略　寬文五年乙巳三月十八日、御役料七百俵六人　天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、享保八年癸卯六月十八日、貳千石高、

〔慶寬諸條令下〕御役料之覺

七百俵　新御番頭

寬文五年巳七月

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給はる、〇中略新番

沿革
任免

頭、○中略 七百俵、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略 新番頭、先手頭、千五百石以下は三百俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

新御番頭

貳千石ゟ内は、貳千石之高に可被成下候、

〔仕官格義辨〕新御番頭之事并新御番始り之事

新御番頭衆之儀は、寛永之末ゟ之儀と承候、就夫此間落穗集と申書本を見候に、新御番始り之儀、委敷書申候處、合點之まいり不申候事共有之候、落穗集に載る處は、寛永之初之頃、大奥御年寄女中を始、其外重キ御役を被勤候女中之弟甥抔之内、一人充被召出被下候樣願に付、是等之衆を被召出、新御番に被仰付候由、番頭は布衣之御小性衆、組頭には平之御小性衆を以被仰付と有之候、先布衣之御小性衆と申儀終に不承候事に候、昔は布衣之御小性と申儀有之事に候哉、落穗集之新御番之始り之儀不明事に候樣被存候、答云、布衣之御小納戸ゟ御小性被仰付候ハ、御小納戸之節之布衣に而被勤候儀ハ格別、改而御小性衆を布衣に被仰付候と申儀は不承候、新御番始り之儀は、寛永二十未年八月七日、御小納戸ゟ遠山十右衛門、小十人頭ゟ中根次郎左衛門、御小納戸ゟ玉虫八左衛門、御先手ゟ安西甚兵衛、右四人番頭被仰付候由、布衣之御小性衆被仰付候と申儀、曾而不承候、組中ハ大御番ゟ被仰付候由、右之節、女中弟甥なども被仰付候儀茂可有之候得共、皆女中弟甥之樣に落穗集ニ書キ候事いぶかしく存候、其後慶長元子年六月十三日、御小性組與頭ゟ駒井右京、御徒頭ゟ曾我太郎左衛門、二組被仰付候、新御番六組ニ相定候由、其後享保九辰年十一月十五日、御書院番組頭ゟ水野源右衛門、御小納戸澀谷縫殿右衛門、後隱岐守と改右二組新規ニ被仰付、八組ニ相成候處、同十三申年三月廿五日、御徒頭ゟ土屋平三郎西丸、江、又一組新規ニ被仰付、九組

ニ相成候、其已後元文二年巳閏十一月廿三日、西丸新御番所、御小性組御番所ニ成、西丸新御番一組ハ御本丸方ニ成、二組ハ大納言樣江被爲附、一組ハ御本丸之六組江割組ニ成、新御番都合八組相定り候、御番衆之儀茂、寛永慶安之頃ハ、大御番ゟ專御番替に而有之候由、尤先規ゟ正德年中迄茂、女中方弟甥抔養子に仕、新御番被仰付候儀は有之候事に候、女中衆も其格式により、兩御番江被仰付候茂有之候、落穗集之新御番之儀、其外に茂不審成儀茂有之候、

〔落穗集追加八〕新御番衆初りの事

一問曰、御旗本に於て新御番衆と申候は、何れの御代、いつの比より初りたる義に候や、答曰、我等承及候は、大猷院樣〇德川家光御代、寛永の初め比之義にて有之や、御老中方へ被仰出るゝは、大奥方年寄女中初め、其外重き役をも勤候女中の弟甥抔有之者の中にて、一人宛呼出しくれ候樣にと有之、願抔をば不申出候やと御尋被遊るゝに付、上意の通り、其儀をば奧年寄共を以て相願申儀に御座候、乍女中も、晝夜骨を折、御奉公をも申上候者共の願なる義にも有之候得ば、被召出被遣、御尤至極の旨、御老中方御申上之所に、番入之義は如何存候哉との上意に付、土井大炊頭殿被承、大番抔へも可被仰付やと被申上ければ、女中共の義は、大井川桑名の渡り抔を殊外難所の樣に心得、道中を致す義を迷惑がり候との義なれば、大番の組入をば除き遣候樣にとの上意に付、御老中方何れも兎角の御請も無之處に、重て兩番〇書院、小性組、の中へ入れ候ては如何と有る上意に付、大炊頭殿被申上候は、兩番の義は、何れも三河以來、數度の御軍忠をも仕る者共の子孫、扨は御譜代大名共の次男三男抔を御奉公に差出申度旨相願候へば、兩御番の中被召出るゝ義なれば、御書院御花畑〇小性組の兩組と申は重き義に候へば、如何可有やと有て、同役中の方を見合らるれば、殘る御老中方にも、大炊頭被申上るる通りに私共儀も存ると各御申上ると也、其以後被仰出候は、兩番入、何も無用と有るに於

ては、新番と名付、別に呼出せと有レ之上意にて、夫より新御番衆と申義は初る由、其節御老中方、御あてがひの義、并番頭組頭等之儀、いかゞ可レ被二仰付一やと御伺候へば、御あてがひの義は、兩御番と大御番との中にて、二百五十俵被レ下、其代りには馬を持候義は御免被レ遊、御番頭には布衣の御小性衆、組頭には平の御小性衆を以て可レ被二仰付一との上意有レ之候と也、去るによつて、其砌は平の新御番へも、御夜食迄被レ下候、御番所も御座に近き所にて、御成先に於ても御側近く被二相勤一、御心安き御樣子に有レ之を以て、兩御番衆の振合には増りて相見ると也、

〔東職記聞 二〕新番頭六人

元寛日記曰、寛永二十年八月、始置二當衛四組一、以二遠山十右衛門景重、玉虫八左衛門宗茂、中根二郎左衛門正頼、安西甚兵衛宗雪等四人一被レ補二番頭一、○中略同年同月、置二組頭一、新庄與五左衛門、神尾勘兵衛、小長谷伊兵衛、間宮七郎兵衛等四人補レ之、寛明同說慶安元年六月、增二二人一、以二駒井右京親昌、曾我太郎左衛門包助等兩人一被レ補レ之、松平助之進康正、八木兵助豐次、補二其組頭一也、代々記享保九年十一月、有德院殿○德川吉宗爲二當衛四組監國君一、○吉宗世子家重曾我平次郎、平岩七之助、杉浦彌一郎、太田庄十郎等四人、自二本城一遷而屬レ之也、有廟亦以二宮崎七郎右衛門、土屋賴母、水野源右衛門、澀谷縫殿右衛門等四人一補レ之、充二其闕一也、爾來無二增減一也、

〔泰平年表 大猷公〕寛永廿年八月七日、初而新御番四組を置る、始御近習番と唱、番頭與頭御番衆二十五人、詰所桔梗之間、慶安元年六月十三日、新規二組出來、是より六組と成、正德三年五月十八日、詰所桐之間ニ相成、享保九年十一月十五日、六組之内三組、若君樣御附被レ命、同日御本丸江新規二組被レ命、是より元文二年十一月迄五組勤、同閏十一月廿三日、西丸新御番壹番組番頭與頭組中共、再び御本丸勤被二仰付一、是より天明六年九月迄六組勤、同閏十月廿日、西丸新御番二組、御本丸勤被二仰付一、是より寛政二年八月迄八組勤と成、同九月廿九日、番頭松田相模守、壹番組江組替、組頭深澤八左衛門、一番組江過人、御番衆總組江割入、是より寛政三年四月迄七組勤、同四月七日、七番組番頭堀數馬、一番組江組替、組頭飯高主税、二番組江過人、御番衆總組江割入、是より六組勤と相成候事、

〔安政五年武鑑〕新御番頭

組頭

一番組、吹貫淺黄、　松平信濃守忠質　　二番組、同赤白交、　大久保甚右衞門忠行
三番組、同黄色、　山口勘兵衞直養　　四番組、同白赤交、　松浦彈正啓
五番組、同黒色、　青木新五兵衞義處　　六番組、同紅、　松平上野介乘利
七番組、吹貫、　大久保市郎兵衞信弘　　八番組、同黒地、　三好山城守長濟
○按ズルニ、寛政以後嘉永マデノ武鑑ハ、何レモ六組ニシテ、安政以後慶應マデノ武鑑ハ何レモ八組ナリ、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月廿一日、新番役ヲ廢ス、
頭、與頭は勤仕並寄合に、組壯年の者は遊擊隊、其外銃隊役々へ御入人となる、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配
一新御番組頭　御本丸五人

〔官中秘策九〕諸御役人之事
一新御番頭六人、○中略同組頭六人、

〔東職紀聞二〕新番組頭十二人
每組置二二人一、從二番頭一奉行組衆之事一之職也、

〔明良帶錄前篇〕新御番組頭
此場は、組中之差引、諸願屆等取次、頭江出す、兩山御成之節は、御先江罷越、御靈前脇に勤番す、內御成ニハ、御番衆六人召れ御場所江罷越、御先勤心得也、還御相濟、御目付衆差圖ニて引取、濱見分之節相越、組中急養子、判元頭同道にて相越す、日々廻狀は頭より寫し被二相越一候間、右寫之跡江詰番何之誰殿廻狀被二致一候と計認て同役江廻す、西丸御人少之節は助に罷越す、尤晝計、

〔有司勤仕錄〕新番頭

一組頭壹人ヅヽ有之、六百石高、大御番組頭之上也、

〔仕官格義辨〕諸御番組頭之事

新御番組頭衆茂、前は他之組ゟ茂出候事に候得共、是も享保十二年之頃ゟ、其組ゟ出候に限り候、略○中又問云、我等承候は、大御番組頭ゟ御徒頭被仰付候儀も、新御番組頭ゟ、御先手被仰付候儀も、先規ゟ無之由申仁有之候、右之趣被及聞候哉、答て曰、新御番與頭より御先手被仰付候義は、不及聞候、

〔吏徴御目見以上上〕新御番組頭六人　頭支配　桔梗間　六百石高

〔吏徴別錄布衣以下御目見以上下〕新御番組頭略○中　寛文六年丙午七月廿一日、御役料三百俵、天和二年壬戌四月廿二日、御役料止、享保八年癸卯六月十八日、六百石高、

〔慶寛諸條令下〕寛文六年午七月二十一日、御黒書院へ出御被為成、御役人被為召、御役料被下候覺、

新御番組頭

一三百俵

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸役人の役料を加祿として給る、略○中新番之與頭三百俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

新御番組頭

六百石ゟ内は、六百石之高に可被成下候、

〔吏徴別錄布衣以下御目見以上下〕新御番組頭　寛永二十年癸未八月七日、始置三員、神尾勘兵衛、小長谷長兵衛、新庄與惣右衛門、

〔營中御日記十七〕寛永二十年八月七日、神尾勘兵衛其外之輩、右新御番組頭ニ被仰付之、

組衆

〔吏徴御目見以上上〕新御番百廿人略○中　一組廿人

〔明良帯録續書〕新御番

春秋日割に的見分を勤む、御成御供を勤む、古番也、番之内御帳衆とて、組中之内々の取扱をする

也、奥御吟味等ニも出る也、

〔寳暦集成絲綸録十六〕寛延二巳年八月

新番頭　貳人〇中略

御番方之面々辨當之儀、前々被仰出も有之候處、近來別而手重に相成、出會等之節、諸事過分之物入等有之候由、粗相聞候、分限不相應之物入等有之候而は、御奉公障り候品も可有之哉、左候而は如何ニ候、以來右體之儀無之樣、急度可被申聞候、

〔嚴有院殿御實紀八〕承應三年八月六日、新番毎隊の差物、吹貫の色目を定めらる、一番赤、二番淺黃、三番田町交、四番黃、五番白、六番黒なり、

〔有司勤仕録〕新番頭

一組之格も御書院番之次、大御番之上也、

〔明良帶録續編〕新御番

小普請より出るを無筋衆と云、小身之仁也、出場所至而六ヶ敷、元御番より組替にて爰に至る、

〔吏徴御目見以上〕新御番〇中略　頭支配　貳百五十俵高

〔柳營年表秘錄嚴有院上〕万治二己亥十二月、新御番、貳百五十俵高之積被仰出、

〔落穗集追加八〕新御番衆初りの事

新御番衆の御あてがひの儀被仰出候節、兩御番衆〇書院小性組とは、五十俵少く被下候に付ては、馬を持つ義を御免との御事に有之由、

〔吏徴別錄下布衣以下御目見以上〕新御番　寛永二十年癸未八月八日、始置四組〇中略三十四人　寛文七年丁未二月十八日、六組增、三十人、

〔營中御日記十七〕寛永二十年八月七日、大御番小十人組衆々、都合八十人、四組ニ御番替被仰付、御

番所土圭之間也、〇中略

三浦八兵衛　小林平三郎　杉浦武兵衛　小長谷伊兵衛〇中略　此外大勢略之

右大御番小十人組ゟ土圭間御番、新規新御番被仰付旨、老中列座傳之、

西丸新番

〔大猷院殿御實紀七十一〕慶安元年六月十四日、この日新番となるもの四十三人、これまで新番四隊なりしを、今度増加して六隊になる、

〔嚴有院殿御實紀三十四〕寛文七年二月十八日、新番に加へらるゝ者あり、納戸より二人、腰物奉行より一人、大番より十七人、小十人組より十一人、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一新御番頭　西丸貳人

〔東職記聞二〕監國君職

新番頭二人　布衣

統領呢近衆人別五十人也

〔吏徴上布衣以上〕西丸新番頭二人　同上〇若年寄支配、中之間、貳千石高、大坂御定番引渡御暇金三枚、時服貳、羽織、

〔東職記聞二〕監國君職

新番頭二人

代々記曰、享保九年十一月、有德院殿〇德川吉宗以新番頭曾我平次郎、平岩七之助、杉浦彌一郎等三組被屬監國君〇吉宗世子家重也、延享受讓之時、傳屬今之監國君〇家重世子家治也、今二組也、

〔有德院殿御實紀十九〕享保九年十一月十五日、新番頭平岩七之助親賢、曾我平次郎長祐、杉浦彌一郎貞宣〇中略若君附〇德川吉宗世子家重命せらる、

〔東職記聞二〕監國君職

新番組頭二人

職掌同本城之同列也

〔吏徴上〕御目見以上〕西丸新御番組頭二人　同上〇頭支配、桔梗間、六百石高、　享保九年甲辰十一月十五日始置

〔吏徴上〕御目見以上〕西丸新御番四十人　同上〇頭支配、貳百五十俵高、一組二十人、　享保九年甲辰十一月十五日始置

小十人組頭

名稱

小十人組ハ、殿中檜ノ間ニ勤番シ、將軍ノ出行ニ前驅ス、元和九年、始テ四組ヲ置キ、其後漸ク增シテ十餘組トナリ、文久三年ニハ二十組アリシガ、慶應二年ニ十五組ヲ減ジテ、僅ニ五組トナレリ、小十人頭ハ、一組ニ一人ヲ置キ、寛文以後ハ役料ヲ給セシガ、天和ノ頃之ヲ廢シ、享保八年以後ハ、千石高ノ職トシテ、別ニ役料ヲ給セズ、組頭ハ、初ハ一組一人ナリシガ、承應元年ヨリ、一組ニ二人ヲ置キ、小十人頭ノ支配ニ屬シ、三百石高ニシテ、役料ヲ給セズ、組衆ハ、一組ニ二十人ヲ置キ、百俵十人扶持ニシテ、役料ナシ、西丸ノ小十人ハ、慶安三年ニ始テ之ヲ置ク、其職員ノ資格待遇等、凡テ本丸ニ同ジ、但シ組衆ハ、一組ニ組頭ヲ合セテ二十五人ヲ定員トス、

〔延寶三年江戸鑑〕御小從人御番頭

〔寶永五年武鑑〕小從人御番頭

〇按ズルニ、本書ノ目錄ニハ、小十人御番頭ト書ケリ、

職員

〔官中秘策九〕諸御役人之事〇中略

職掌

一小十人頭　七人

〔職掌錄〕小十人頭

當職七員

〔東職記聞　二〕扈從人頭

領二人別扈從人衆二十人一也、抑當衙之號、自二往古一雖レ有レ之、歷代無レ所レ考也、〇中略相傳云、當衙掌レ警二衞將軍家御床机之前後一故、雖二小祿一以二累代人一被レ置レ之也、一書曰、神祖主二三州一之時、天野宮內左衞門、窺二其不意一而襲レ之遠州天方、親兵纔六七人、奮戰稍免レ難也、爾來撰二累代諸士二三男之壯勇者一而被レ令レ警二衞御床机前後一也、號云二扈從人一也、

〔有司勤仕錄〕小十人頭

一本番、御供詰番、御供加番等有り、組之面々は、小十人番所に相詰勤番す、御成之節、御轡之先に供奉す、

一組之面々、各御貸具足、海老胴也、則頭之預り也、〇中略

一御本丸七組、一組頭ともに貳十人、檜之間に勤番、二時代りに休足す、

〔明良帶錄〕小十人頭

是も御徒頭同樣にて、御成の節、御供の心得方、組中差引の事、御供弓へ出る仁に鳥射留有無、其節の案內取計方申含む、與頭にも申含あれ共、爲レ念申含、春秋濱に於て大的之見分、諸組の例に任せ日割の見分有り、組は古來欠走り働を元とすれば、御借具足、小手袖なく朱胴にてあれば、此もの武勇の仁の勤場也、朱胴荒布胴は謂有り、前立物輪なり、是は小十人の相印なり、

〔落穗集追加　四〕小十人衆の事

一問曰、當時御旗本衆に於て、小十人衆と申人々の義は、皆以由緒正き旁と申、知行の上に御扶

持等をも被下置るゝを以て、着料の具足一兩づゝは、何もたしなみ所持被致るゝ所に、若も御動座と有之節に至りては、公儀より相渡り候御借し具足より外には、自分所持の具足抔を着用被致るゝと有之義は不相成の由也、是には何ぞ子細抔も有之事にや、答曰、ヶ樣の事は公邊の事なれば、我等抔の委細を可知樣はなけれ共、其元尋たまうに付て、手前の存寄を一通りを申にて候、先小十人衆と有之は、何れも騎馬役と申にても無之、公邊御動座抔の有之節は、御馬廻り歩行立の御供申上らるゝ筈の御役がらの衆中にて候、然ばいか程も身を輕く、欠け廻りの罷成ごとくの出立に無之てはならざる事の由也、然るに自分たしなみの具足抔を着用被致るゝに於ては、達者わざは成り兼可申かにて候、小十人衆の御借し具足と申は、世俗に海老がら具足と申習し、至て手輕くをどし立たる物にて候へば、たとへ其身不達者ものにても、又は老人病者と有之ても、歩行の邪魔にもならざるを肝要と致たる事の由なり、且又小十人衆への御借し具足、一同に一色にをどし毛と有之は御大切至極なり、御馬廻の御事にも御座候に付、御用心向きに掛りたる御事の由也、

〔大猷院殿御實紀三十九〕寛永十五年十一月十七日、三番頭幷三組頭、小十人頭をめして、各隊の番士、采邑幷宅地の境界、あるハ家士等以下の訴論あらバ、頭、組頭會集し、査檢して裁斷すべし、もし違背する者あらバ曲事たるべし、其上にも裁斷なし得がたき事ある時ハ、老臣へうたへ指揮を受べしとなり、

〔常憲院殿御實紀十一〕貞享元年十一月廿四日、目付戸田又兵衞直武、小十人頭小田切喜兵衞直利、今より後、寺社奉行、大目付、町奉行、勘定頭と共にはかりあひ、長崎の事奉はるべしと命せらる、

〔常憲院殿御實紀五十一〕寶永二年正月九日、けふ火災の時、番士西城にまかる寄場の定制を令せらる、〇中略小十人組三隊、これも頭組頭そひ、一隊は廣敷前、一隊は裏門内に備べき定なりしが、こ

待遇俸祿

の後、一隊は榆間、一隊は裏門外、一隊はもとのごとく山里門内に備べし、

〔官中秘策九〕諸御役人之事〇中略

一小十人頭七人　布衣、千石高、

〔吏徵上布衣以上〕小十人頭七人　若年寄支配　躑躅間　千石高

〔吏徵別錄上布衣以上〕小十人頭〇中略　寛文五年乙巳三月十八日、御役料五百俵、十人　天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、享保八年癸卯六月十八日、千石高、

〔慶寛諸條令下〕御役料之覺

五百俵　小十人組番頭

寛文五年巳七月

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、〇中略小十人番頭、〇中略五百俵、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、〇中略小十人頭千石以下は三百俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

千石ゟ內は、千石之高に可被成下候、　小十人頭

沿革任免

〔仕官格義辨〕三番頭幷小十人頭之事

又間云、三番頭之儀は、委敷承候、小十人頭も、いつ頃ゟ始り候哉、迚も之事に承度候、答云、小十人頭之儀は、昔は御小性組番頭ゟ兼帶被致候由、元和九亥年、始而四人被仰付候、中根傳七郞、稻垣藤七郞、鵜殿新三郞、三枝惣四郞、其後寛永九申年八月十八日、田中市郞右衛門、落合源右衛門、長坂血鑓、石谷十藏、右四組被仰付、都合八組相定候處、慶安三寅年九月三日、新規に五組被仰付、荒川長右衛

門、川田吉兵衛、宅間伊織、岩瀬市兵衛、天野三郎兵衛、小十人組、都合十三組ニ成候處、慶安五辰年正月、天野三郎兵衛、新御番頭被仰付、組ハ諸組江割込ニ成、同年六月四日、細井左次右衛門、清水奉行被仰付、組ハ割込ニ成、明暦三酉年十月廿三日、三宅半七郎、荒井奉行被仰付、是茂組中割込ニ成、三組減じ候故、是ゟ十組に相定候處、享保十一午年正月廿八日、蜂屋半之丞、新規ニ一組被仰付、御本丸七組、西丸四組、都合小十人十一組ニ相定候、組中人數、先規より御本丸之方は、一組二十人充、西丸之方は、享保年中、ゟ一組二十五人充相極候由、但組頭は人數の外之由に御座候、

〔東職記聞二〕扈從人頭十人

代々記曰、大坂役、被令花畑番頭帯歩行扈從人之頭也、元寛日記曰、元和九年六月、以中根傳七郎、鵜殿新三郎、稻垣藤九郎、三枝總四郎等四人被補之也、寛永九年八月、以田中一郎右衛門、落合源右衛門、石谷十藏、（寛明、寛永九年七月御歩行頭トナリ、）山下彌藏等四人被補之、然同記已云、今年七月石谷氏補歩行頭、代々記亦今年七月石谷氏補歩行頭云、則傳寫夫誤乎、代々記、以長坂血鎗（血鎗、是謂茅利、）信次與山下落合田中三氏為同時補職、而稱云後四組也、又曰、寛永十六年十月、細井佐次右衛門代長坂氏、至正保中、罷細井氏組而充總衛也、寛永十六年八月、三宅半七郎代山下氏、正保中、又罷其組而充總衛也、慶安三年九月、大猷院殿（○徳川家光）以當衛五組被屬監國君（家綱公）以天野三郎兵衛、川田善兵衛、（慶延略記作吉兵衛）荒川長右衛門、宅間伊織、岩瀬一兵衛等五人被補之、同五年正月、天野氏（慶安五年正月天野氏事、寛明慶延略等日記、作承應二年三月二十八日、）遷新番頭、即罷其組充總衛、享保九年、有徳院殿（○徳川吉宗）以當衛四組被屬監國君、（當將軍家徳川家重）○當將軍家受讓之後、傳屬今之監國君（家治公）也、（○中略）案當衛往古十三組、而罷者三組也、今十組中其三組屬監國君也、

〔泰平年表台徳公〕元和九年十一月日、始て小十人組の番頭を置る、（年譜、元和二年御小性組ノ組頭へ一人ヅヽ、被仰付、小十人來迄、當番切に支配仕る、同九年五月、今度兩上樣御上洛に付、御供の衆少く御座候間、大勢被召出、小十人の御奉公被仰付、若君樣へ五十餘人被召出、當御城に於ては、御小性組御書院の組頭

組頭

来、則當日御番なり、小十人来なも支配申候、然れ共御供の路次計大勢にも觸もいかゞ、大義にも可存由にて、餞に小十人来の内にて、路次中計の觸流しに可仕旨被仰付、四人四組といたし支配仕候、同年十一月、御本丸にて小十人組番頭四人、三枝宗四郎、稲垣藤七郎、中根傳七、鵜殿新三郎被仰付と云、是によろ時は、御番来は古へより有、未だ其始をつまびらかにせず、

〔元治元年武鑑〕御小十人頭

一番組、折掛四半赤地白紋、　内藤壹岐守　二番組、同紺地金紋、　中野播磨守
三番組、同白地朱紋、　杉原平左衛門　四番組、同黒地朱紋、　明樂八郎右衛門
五番組、同赤白日町交黒紋、　本目長門守　六番組、同黒地白紋、　櫻井藤四郎
七番組、同淺黄地朱紋、　稲葉清次郎　八番組、同白赤交紋黒、　雨宮權左衛門
九番組、同淺黄交金紋、　竹内日向守　十番組、同紺地白紋、　稲生庄五郎
十一番組、同紺地白紋、　成瀬彌五郎　關口飛驒守　佐久間鐇五郎
多賀外記　大久保新五左衛門　小笠原友之丞
永持亨次郎

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月、小十人十五組ヲ減ズ、
頭は勤仕並寄合に、組は遊擊隊、幷に奥詰銃隊等へ御入人、但し小十人、元十一組の處、文久三亥年より二十組と成り、今度十五組減じ、跡五組殘る、

〔慶應三年武鑑〕若　御小十人頭　布衣千石高　躑躅之間○姓名缺　小十人衆　百俵十人扶持　檜之間　二十人宛　○姓名缺
若　御小十人頭過人　布衣　躑躅之間　千石高

六百五十石、いゝだ町中坂上、小泉兵庫、　四百廿石、牛込若松町、横山半左衛門、　三百俵、小石川白山大通り、澤井禎之助、　四百五十石、するがだい、鈴木猪三郎、　四百五十石、牛込赤ぎ下、塚原寬十郎、

〔官中秘策九〕諸御役人之事○中略

一小十人頭七人、〇中略同組頭十四人、

〔吏徵上御目見以上〕小十人組頭十四人〇中略　一組二人

〔仕官格義辨〕諸御番組頭之事

小十人之組頭、昔は一人充に而有之候處、頭中之願に而、承應元年より二人充に被仰付候、一人は其組より出、一人は他組より出申候、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕小十人組頭〇中略　承應元年壬辰十一月二日、一組二人宛と成、是迄一組一人也、〇中略　同〇享保十一年丙午三月十八日、向後他組より一人被仰付候筈に極、

〔東職記聞三〕扈從人組頭二十人

毎組置二人、從扈從人頭奉行組衆等之職也、

〔明良帶錄續篇〕小十人組頭

組中之差引、幷大的稽古之世話等、雁的見分にて、中附分を以御供弓をすぐり出す、御供弓に出る仁江面談し申含る筋あり、御供揃以前御場所へ弓道具持參御供に相立、鳥射よと奥之衆差圖にて相始め、射留之有無案內、三日目に召れて、御右筆部屋於緣頰時服被下之、其外組中判元急養子、親類病死、忌懸り等之聞合等迄、

〔吏徵上御目見以上〕小十人組頭〇中略　頭支配　三百俵高

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕小十人組頭〇中略　寬永九年壬申八月廿五日、組頭一統、御加增百俵充被下、〇中略　寬文六年丙午七月廿一日、御役料百俵、　天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、享保八年癸卯六月十八日、三百俵高、

〔營中御日記九〕寬永九年八月廿五日、申刻小十人組頭御前江被召出、百俵宛被下、小十人衆、一倍御加增ニて貳百俵宛被下旨被仰付候、

組衆

〔慶寛諸條令下〕寛文六年午七月二十一日、御黒書院へ出御、被ㇾ爲ㇾ成、御役人被ㇾ爲ㇾ召、御役料被ㇾ下候覺、

一百俵　小十人組頭

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十二日、諸役人の役料を加祿として給る、〇中略小十人與頭、〇中略百俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

三百石ゟ內は、三百石之高ニ可ㇾ被ㇾ成下候、　小十人之組頭

〔吏徵別錄上布衣以上〕小十人組頭　元和九年癸亥六月朔日、始置四員、

〔有德院殿御實紀二十二〕享保十一年正月廿八日、こたびあらたに小十人一隊をまさるゝにより、中奧番蜂屋半之丞可寛其頭となる、よて番士より組頭となる者一人、〇下略

〔吏徵上御目見以上〕小十人組百四十人〇中略　一組廿人

〔有司勤仕錄〕小十人頭

組之面々は、小十人番所ニ相詰勤番す、御成之節、御輿之先に供奉す、

〔明良帶錄續篇〕小十人

御先御供を致す、駈走りを第一とす、走り之者と稱す、平日足樣等遠足を心掛てよし、御貸具足も、朱胴に小手袖なし、丸き前立もの也、戰場にて駈走り之働を第一とする故也、武勇之ものを選み出す事古實也、當時御先御供をいたし、駈走りを第一とす、

〔大成令五十一〕寛文四辰年十二月十五日

覺

一小十人組〇中略御供番二組　大手〇中略

右御城近所火事、幷大なる火事之節、此書付之所々江罷出可ㇾ有ㇾ之、其外非番之面々、宿所ニ在ㇾ之候而、頭々江召仕之者を附置、可ㇾ任ㇾ差圖、〇下略

〔靈巖夜話 下〕一、權現樣〇德川家康駿府に被ㇾ遊二御座一候節、不ㇾ明御門番之儀は、小從人衆被二相勤一候と也、或時村越茂助、清見寺へ御使に行き、日暮に及び歸宅之節、御門外江來り、我等は村越茂助に而、御使に參り只今歸り候、御門通し給り度と被ㇾ申候へば、最早刻限過候ニ付、此御門よりは通し申事不ㇾ能ㇾ成候と有ㇾ之處に、安藤彥兵衞御門内を通り掛られ、村越茂助ニ紛れ無ㇾ之候、御門を明け通し候樣ニ御申付被ㇾ有候へと被ㇾ申ければ、小從人衆承り候て被ㇾ申候ハ、各中の儀ハ、重き御役を被二相勤一、口をもきかれ候人達共覺不ㇾ申事を被ㇾ申候、此御門の儀ハ、暮六つ切と申事を被ㇾ存ながら、明させて通るべしと外から云人も、明て通せと内にて云人も、同樣成分別の人達也、とかく此御門を通し申儀は、得こそ不ㇾ能ㇾ成候とて、明させ不ㇾ被ㇾ申候となり、其後御門番處被ㇾ居候兩人之小從人衆の儀、知行二百石づゝに被ㇾ成、紀伊殿江御附人ニ被ㇾ遣候由、

〔明良帶錄 續篇〕小十人

小普請より出るに、高低にても小十人筋とて、代々小十人之家もあり、左なくても出る有、

〔有德院殿御實紀 二十二〕享保十一年正月廿八日、こたびあらたに小十人一隊をまさるゝにより、〇中略小普請より番士となるもの二十五人、

〔東徼 上 御目見以上〕小十人組〇中略　頭支配　百俵十人扶持高

〔泰平年表 大猷公〕寬永九年九月八日、小十人番士に、御加増有て二百俵高になさる、是迄百俵ヅヽ賜し分、一倍の御加増にて被ㇾ下、御扶持方は上りし也、同十九年二月十六日にも四十八人御加恩有、按ろに、同十一年に、小十人無足部屋住へ御切米百俵ヅヽ被ㇾ下と見ゆれば、二百俵高と成しは、此時勤來りし者計にて、場所高にてはなし、

〔大猷院殿御實紀 二十〕寬永九年八月廿五日、小十人組番士、今まで百俵づゝ賜はりしが、加增して皆二百俵づゝになされ、〇下略

〔營中御日記 十一〕寬永十一年六月十二日、小十人組江切米無足之輩、金子二十兩宛、御扶持十人扶

持づ丶被下旨、雅樂頭大炊頭傳之、是今度御上京之供ニ依テ也、

〔温恭院實紀六〕安政元年四月六日

小十人贊善右衛門組　矢田堀景藏

一時服五、羽織、

右學問爲教授、甲府表江罷越、教授方行屆骨折候ニ付、被下之、

西丸小十人

〔東職記聞二〕監國君職

扈從人頭四人扈從、是古字、訓字ニ布衣

統領人別扈從人二十人也

〔有司勤仕錄〕小十人頭

一西丸一組に、組頭とも貳十五人、四組也、一組を二つに分て、十三人と十貳人とに分て、八番に勤る、〇中略　頭は八ッ過ゟ泊番勤之、

〔吏徴上布衣以上〕西丸小十人頭四人　同上〇若年寄支配、躑躅間、千石高、

〔吏徴別錄上布衣以上〕小十人頭〇中略　慶安三年庚寅九月三日、始置西丸附五組、

〔東職記聞二〕監國君職

扈從人頭四人

慶延略記曰、慶安三年九月、大猷院殿以荒川長右衛門、河田善兵衛、宅間伊織、岩瀨市兵衛、天野三郎兵衛等五人補當職、被賜監國君〇家綱世子也、享保九年十一月、有德院殿〇德川吉宗以當衛四組矢ニ姓名故略之被賜監國君〇吉宗世子家重也、爾來連綿至今之監國君〇家重世子家治也、

〔營中御日記二十二〕慶安元年三月廿七日、今日御役被仰付候輩、

大納言樣〇德川家光世子家綱小十人頭江　岩瀨市兵衛　宅間伊織〇中略

右被仰付旨、老中列座有被傳之、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月四日、大納言殿〇徳川家光世子家綱の、〇中略小十人組頭川田吉兵衛貞則、荒川勝十郎重照、天野三郎兵衛康隆、小十人組番頭命せらる、

〔吏徵上御目見以上〕西丸小十人組頭八人　同上〇頭支配、三百俵高、一組二人、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月四日、〇中略同じ〇小十人組頭五人、〇中略皆御方〇徳川家光世子家綱に付らる、

〔吏徵上御目見以上〕西丸小十人組百人　同上〇頭支配、百俵十人扶持高、一組廿人、

〔台徳院殿御實紀四十七〕元和三年十二月、是月西城留守居番川井五兵衛昌等、若君〇徳川家光に附られ、小十人組番士となる、

〔大猷院殿御實紀六十〕正保二年五月廿一日、小十人組番士歩行組二十人を、大納言殿〇徳川家光世子家綱御かたに附らるべき旨仰出さる、

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月八日、この日西城に、〇中略小十人組番士廿人、先手弓鐵砲同心廿四人附らる、

名稱　職員職掌

古事類苑

官位部六十九

徳川氏職員十八

徒頭

徒頭ハ歩行頭トモ書シ、組毎ニ一人アリ、將軍ノ出行ニハ各〻其組衆ヲ率ヰテ、先拂、辻固等ヲ爲ス、徒組衆ハ徒歩疾走ノ職ナルヲ以テ、走リ衆ト云ヒ、又步卒衆トモ云ヘリ、平日ハ、江戸城本丸ノ獅子間以下諸所ニ勤番シ、夏季ニハ、隅田川ニテ水泳ヲ練習ス、若年寄ノ支配ニ屬シ、初ハ役料ヲ給セシガ、後之ヲ廢シテ、千石高ト定ム、一組ニ組頭二人、組衆三十人ヅヽアリ、組頭ハ百五十俵高ニシテ、二十年以上勤績シ、又ハ七十歳以上ニテ退役スルモノニハ、終身七十俵五人扶持ヲ給ス、組衆ハ、七十俵五人扶持ナリ、西丸ニモ亦徒組アリ、徒頭以下ノ待遇、凡テ本丸ニ同ジ、

徒組ハ慶長年中、始テ之ヲ置ク、當時ハ、組數モ十組ヲ出デザリシガ、後屢〻增減アリテ、延享ノ頃ニハ、本丸十五組、西丸八組、合セテ二十三組アリ、其後西丸附四組ヲ減ジテ、十九組トナリシガ、慶應二年ニ至リ、遂ニ之ヲ廢セリ、

〔泰平年表東照公〕慶長八年正月、初て走り衆の頭を置る、(中略)元和の頃は步卒衆と云、寛永の始より、御徒、御步行、打交りて出せり、

〔延寶三年江戸鑑〕御步行頭

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一御徒士頭　御本丸十五人〇又見ニ有司勤仕錄、職掌錄、吏徵一、

〔東職記聞二〕歩行頭十九人　布衣

領二人別步行者二十人一也、平日以レ順結二番金城獅子間一也、

〔有司勤仕錄〕御徒頭

一泊番、御先番、加番、御供番、并詰番有レ之、

一御徒は、御玄關獅子之間に相勤、其外加番所有レ之、○中略

一御成之節、先拂、辻固、其外御鷹野、御猪狩等に御成先之勤、かけ走り、或は御奉公役等勤レ之、

一夏中淺草川にて、水練之稽古見分等在レ之、

〔明良帶錄後集〕御徒頭

御成先御道固、御膳所末、御膳所前、隅田川在鄉番、御鷹尋、御守殿番、御名代、本御番、御供番、御先番、加番等也、御鷹尋と云は、屋敷謀反人有時は、御鷹それて此屋敷に入たるとて蹈込て糺す、是は有德院樣○德川吉宗ゟ出來たる名目なり、御守殿番は、非常御立退之節、御守殿に乘付て御立退之固を勤む、御名代番と云は、兩山御成御延引之節、御老中方御名代之節、御先江罷越、御靈屋前に罷在る御番之節ハ、御玄關之脇部屋に有て、御座敷江詰、加番には中之口の部屋に居る、御張紙下に、御徒方加番所有、聖堂釋奠之節、御目付、御徒頭詰合、兩山御法事、万石以下、先例に任せ御香奠納之節、御目付御徒頭相詰、御持御道具等、繕拵直之事、懸にて組頭ゟ御細工所へ懸合、此段御支配方江達し置、御徒組は御抱なれども、夏中水稽古見分にて、御成之節、水鳥并水游ぎ上覽之節、御褒美被レ下ものは、頭の見立により、相應之御場所江願置を頭之働と云、

〔營中御日記三〕寛永三年九月十九日、御徒頭一組宛、增上寺へ相詰勤番、

〔有德院殿御實紀附錄三〕山城國宇治の里の茶をめさるゝ事は、寛永九年よりはじまりて、そのかみは茶道頭一人、坊主二人、その事を奉り、徒頭一人、組の走衆を引具して道路を警衞す、

〔吏徴別錄上 布衣以上〕御徒頭○中略　同年〇享保八年　二月十二日、宇治御茶壺差添止、

〔大猷院殿御實紀七十一〕慶安元年六月十八日、徒頭小出越中守尹貞、岡田淡路守重治は、一人づゝ隔日に分れて奥表に伺候し、○中略すべて營中の諸士勤番の勤怠を巡察し、法令壁書よく守るか否を査檢し、御直に聞えあぐべしと命せらる、

〔嚴有院殿御實紀十五〕萬治元年二月廿六日、山里の番所は、歩行一隊づゝ、警衛すべしとなり、

〔昭德院實紀九〕万延元年十一月朔日

御徒頭　諏訪庄右衛門　大久保權右衛門　仙石播磨守　岡三四郎　小野整三郎　高尾總十郎○中略

和宮御方御緣組、并御下向御用被仰付之、

待遇　俸祿

〔吏徴布衣以上上〕御徒頭○中略　若年寄支配　躑躅間　千石高

〔慶寛諸條令下〕御役料之覺

五百俵　御歩行頭

寛文五年巳七月

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、○中略歩士頭○中略　五百俵、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略徒、小十人頭、千石以下は三百俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

千石々內は、千石之高に可被成下候、　御徒頭

沿革　任免

〔仕官格義辨〕御徒頭之事并組中之事

問云、御徒頭衆も小十人頭衆之通、昔ゟ組數段々增候哉承度候、答云、御徒頭衆之儀ハ、慶長年中、三井左衛門佐、松平志摩守、松平監物、内藤市正、松平縫殿頭、植村志摩守、阿部彌十郎、松平内膳、朝比奈彌太郎、右之外御小性組番頭ゟ御徒頭兼帶致され候由、元和六申年正月十一日川村善次郎、内藤甚十郎、水野勘八郎、右三人被仰付候由、其頃ハ御徒方一組之人數高多有之候と相見へ候而、其巳後一組を二組は被仰付候、松平監物組二組ニ成、佐野右京亮、高林河内守江御預、三井左衛門組、二組ニ成、小栗又一、榊原左衛門江御預、水野勘八郎組三組ニ成、根來小才次組、又二組ニ成、兼松彌五左衛門、久保平左衛門江御預、安藤傳十郎組筋、中山助六郎跡役之節、又二組ニ成、小堀越中守、齋藤攝津守江御預、正保元申年九月三日、能勢市十郎、新規一組被仰付候、右之内松平志摩守組と内藤甚十郎組ハ、跡役不被仰付潰組ニ成、正保四亥年九月廿六日、松平内膳組筋、服邊八郎右衛門代り之節、八郎右衛門跡役不被仰付、又此組茂潰、御徒方十七組ニ而勤候處、慶安三寅年九月三日、神尾市左衛門、戸田四郎三郎、水野權兵衛、酒井兵部、榊原大膳、右六組被仰付、都合二十三組ニ成候處、承應年中、三井左衛門佐組筋、大久保荒之助、松平監物組筋、松平新平、川村善次部組筋、平岩金左衛門、右三組潰、此已後二十組ニ成候處、天和年中、本多平右衛門組筋、宮城頼母、戸田四郎三郎組筋、嶋田十兵衛、神尾市左衛門組筋、岡野平兵衛、右三組又潰組に成、十七組に而被勤候處、寶永三戌年十一月廿六日、桑山源七郎、松平五左衛門、兩人に新規二組被仰付、十九組ニ相成候、元文二巳年十二月十五日、朝倉小左衛門、新規一組被仰付、御徒方、御本丸西丸、二十組ニ罷成候、延享二丑年九月朔日、大御所樣〇德川吉宗御徒新規三組被仰付、御本丸御徒頭十五組ゟ組替にて多門多宮、同九番組ゟ池田修理、御小納戸ゟ萩原主水正、右三人被仰付、御本丸十五組、西丸八組に而、都合廿三組ニ成候、

〔東職記聞二〕歩行頭十九人、

家忠日記曰、慶長四年、阿部左馬介忠〇忠下文所引本書作正吉補歩卒長、同六年十一月、内藤外記正重補之、

代土井大炊頭利勝、青山善四郎重長亦補之、襲父善兵衞重成之職也、代々記曰、大坂役、當職之供奉神祖〇德川家康者五組、松平豐前守、松平志摩守、松平右馬允、阿部佐馬允、三井左衞門等五人也、又供奉台德院殿〇德川秀忠者四組、植村志摩守、內藤主稅、安部彌十郎、松平內膳等四人也、組以外之步行者、花畑番頭兼領之也、慶元軍記曰、元和元年、大坂役、台德院殿發伏見云々、步行頭阿部左馬介正吉、內藤主稅助廣、領組列前驅也、元寬日記曰、元和六年正月、台德院殿分步行頭河村善次、高林河內守、代々記、作高林氏ヲ內藤甚十郎、水野勘八郎、中山助六郎、根來小才治等五組、被屬監國君家光公也、慶延略記曰、慶安三年九月、大猷院殿〇德川家光分步行頭水野權兵衞、戶田三郎四郎、本多半之丞、代々記作半右衞門榊原大膳、酒井兵部、神尾內膳代々記作市左衞門等六組、被屬監國君代々記、以此六組新組云也、也、代々記曰、正保元年九月、增一組、以能勢市十郎被補之也、又曰、慶安元年十月、割河村氏組爲二組、平岩金右衞門補之也、後罷平岩氏組充總組、後又割水野勘八組爲三組、又割根來小才治組爲二組、承應元年十月、大久保荒之助、松平新平、渡邊八右衞門等三人遷物頭、卽罷其三組充總組也、天和元年十二月、岡野平兵衞遷先手、卽罷其組而充總組也、延寶九年四月、宮城主殿遷目付、卽罷其組、同年五月、嶋田十兵衞遷目付、又罷其組充總組也、寬永三年十一月、增二組、以桑山源七郎、松平五郎左衞門等兩人被補之、同年同月、常憲院殿〇德川綱吉以當職四組被屬監國君家宣公、同六年、文昭院殿〇德川家宣卽阼之後、其四組返金城復舊也、享保九年十一月、有德院殿〇德川吉宗以當職五組被屬監國君、〇當將軍家重延享二年、當將軍家受讓之後、其五組傳屬今之監國君家治公也、案當職故廿七組、而罷者八組也、今十九組中四組屬監國君也、

〔家忠日記追加十三〕慶長四年、此年阿部左馬助正吉ヲ步行頭トナサレ、采地五千石ヲ賜ル、

〔泰平年表東照公〕慶長八年正月、初て走り衆の頭を置る、年譜に、松平右馬助、原主水、松平志摩守、三井左門、右走り衆の頭被仰付、三十人づゝ預り、伏見にては松丸御番、駿府にては御裏御門番相勤、內府樣鈞命に仍てなり、當御徒の始なり、

組頭

〔慶長年中卜齋記 上〕慶長五年六月十八日、家康公、伏見へ從江戸御上被成候時、○中略 御走衆と申候は、當時の歩行の者の如にてはなし、富永主膳、岡部小右衞門、松野茂左衞門、柴田四郎兵衞、小倉嘉平、兵衞後に總 岩本仁左衞門、山下亦助、鍋木與兵衞、河野金大夫、河野孫左衞門、か樣の衆三十人計あり、○中略 關ヶ原以後、御合戰以後、歩行衆被召置、頭を付させられ候、頭九人、松平豊前守、松平志摩守、松平右馬助、柴田左近、阿部左馬助、原左近右衞門、中山左助、松平淡路守、松平若狹守、一組に三十人宛 ○下略

〔嘉永明治年間録 十五〕慶應二年十二月廿八日、御徒頭役名ヲ廢ス、

頭は勤仕並寄合、組は銃隊被仰付、

〔東職記聞 二〕歩行組頭三十八人

毎組置二人、從歩行頭奉行組中事之職也、

〔有司勤仕録〕御徒頭

一御本丸拾五組、西丸四組有、右組頭兩人ヅヽ有之、

〔吏徴 御目見以下 下〕御徒組頭三十人　頭支配　百五十俵　躑躅間　上下役、御抱場、　一組貳人 組頭

役二十年以上、年數未滿七十歳以上、　退役之節、其身一代、七十俵五人扶持被下、無役、　年數未滿七十歳以下、三ヶ年之間無役、其後御暇、　寛永五年戊辰月日始置

〔有司勤仕録〕御徒頭

一組頭は百五十俵也、其外小屋頭は、並と同じ、

〔明良帶録〕御徒組頭

此場御抱場といふも、神君○徳川家康 嚴廟○徳川家綱 御代迄の內ならば、御譜代と取扱ひ、憲廟○徳川綱吉 御代より、享保六丑年以前御抱入は、御譜代にはなけれ共、父取來之御切米、悴へ跡式被下候、其以後

は、其身一代小普請入、跡式無之、水練の功者、又地理に明るく、組下善惡を能糺し、年來勤向よき仁緣上になる、他場所より來らず、

〔仕官格義辨〕御徒頭之事并組中之事

又問云、御徒頭之儀は、組頭迚も御譜代には無之由承候處、御徒組頭之跡目、小普請之內ニ有之候は、如何之譯に而有之候哉、答云、御徒は、皆御抱にて候、組頭之儀は、先規は御加增にて御譜代に被仰付候、享保六丑年已後、御譜代に成候事相止候、依之享保六年已前ゟ勤候組頭は跡目被仰付、其已後は組頭跡目不被仰付候、右之前に被仰付候組頭之跡之分、小普請之內に有之候哉と被存候、總而御徒方は、たとへ成人之男子有之候とも、跡目と申候てハ不被仰付候由、別に被召出候者、頭之存寄次第相濟候事之樣に承候、

〔吏徵別錄御目見以下下〕御徒組頭　寬永五年戊辰月日、始置十員、　正保二年乙酉十二月廿八日、御步行組頭之者共二十人餘計、御切米百五十俵充被成下、　寶永三年丙戌十一月廿四日、熨斗目白帷子可著候、　寶曆十年庚辰三月日、向後御徒組頭、病氣等之節ハ、其身一代小普請入、忰ハ御徒頭支配仕置次第、抱入可仕旨、　寬政元年己酉十二月日、組頭役二十年已上、其以下にても七十歲以上にて退役之節ハ、其身一代七十俵二人扶持被下、御徒頭支配無役、忰ハ跡組頭被仰付候者之明跡江抱入可仕候、其已前忰被召出候者ハ、不及其義候、右年數并七十歲已下ニて退役之者ハ、三ヶ年無役ニて差置、再勤難成候ハヾ、其節忰ハ其身之跡江可抱入旨被仰出之

〔天明集成絲綸錄三十八〕寶曆十辰年五月　　御本丸西丸御徒頭江

御徒組頭被仰付候節、只今迄は百五拾俵之高ニ被成下候得共、向後は勤候內、百五拾俵之高に御足高被下候間、可被得其意候、

〔昭德院實紀二十三〕文久二年閏八月二十五日〈○文久紀事作二廿七日一〉

御徒頭江

御徒組頭、并御徒一同、御譜代被二仰付一、新規御切米五拾俵、御扶持方三人扶持ツヽ被レ下、勤候內、只今迄之通御足高被レ下候間、可レ被二申渡一候、尤場所高、組頭は百五十俵、御徒ハ七拾俵五人扶持、何れも席以上之場所と可レ被二心得一候、右ニ付而は、轉役、且は小普請入、隱居病死等之明跡は、講武所奉行、御軍艦奉行組之者、或は小普請組等之內ゟ、御入人可レ被二仰付一候間、明跡有レ之節は、其都度可レ被二申聞一候、

一御徒組頭、平御徒方悴、部屋住勤之儀、唯今之通之人數丈は不レ苦候、尤假抱は、以來見習ニ而可二相唱一候、見習之者御充行は、七人扶持ツヽ被レ下ニ而可レ有レ之候、〈○中略〉

右之通被二仰出一候間、可レ被レ得二其意一候、

〔憲敎類典〈二ノ五御役〉〕年號月日無レ之

一遠國御役人組附人別并御役料

御徒頭〈○中略〉

平組廿八人

〔柳營秘鑑〈四〉〕諸役人員數并組支配

一御徒士頭　〈組衆廿八人、內小屋頭七人、平三人、小屋頭壹人ニ而七組に組合也、〉

〔吏徵〈御目見以下〉〕御徒四百五十人〈但組頭共〉　一組三十人

〔明良帶錄〕御徒

御抱場にて、御入人等なし、新規御抱、水練、地理等功者成るもの、御成の節は御道を固め、頭の差圖に任す、人數少ければ組內より助を取る、御膳所、御鷹場、御守殿番、非常の節、頭差圖にて勤なり、夏中水練、頭見分、大川筋御成の節、水練馬川渡等上覽にて、時服頂戴のものもあり、頭の勤にて、後日

相應の御場所明跡へ御役出を願ふなり、

〔吏徵別錄御目見以下〕御徒〇中略　寬文五年乙巳五月廿五日、御能之節御前置、唯今迄ハ、御中入之節、替といへども、向後一番每に可居替旨被仰出之、

〔大成令五十一〕寬文四辰年十二月十五日

覺

一步行之衆　御供番二組　大手〇中略

右御城近所火事、幷大なる火事之節、此書付之所々江罷出可有之、其外非番之面々、宿所に在之候而、頭々江召仕之者を附置可任差圖、步行之衆幷御鐵砲之與力同心者、頭々兼而申付候下知にしたがひ候樣に、急度可被申渡者也、

以上

十二月十四日

〔享保集成絲綸錄十八〕享保三戌年六月

覺

一御徒之者、御道固之節平伏之儀、御駕籠を見懸申候と直に平伏仕候、自今以後は、御駕籠の通計にて平伏仕、少御通過被遊候ば頭を上げ可申候、御目遠き辻々幷屋敷、又は町屋之內江入在之候者は、手を突候迄ニ而、平伏致間敷事、

〔吏徵別錄御目見以下〕御徒〇中略　正保四年丁亥六月九日、隅田川筋御成、御番衆御徒方水泳、初而上覽、

〔瀨田問答〕一御徒方、水泳稽古イタシ候事、何頃ヨリ初リ候哉、大猷院樣〇德川家光御代、下乘橋ニテ水泳上覽被遊候ヨシナド申傳候、享保年中、有德院樣〇德川吉宗中川御番所ニ於テ、初テ上覽被遊

候節、私祖父太田源八ナド罷出候、其後ハ連綿トシテ書留等モ御座候へ共、初ノ儀不相知候、

答、正保四丁亥年六月廿五日、大猷院樣角田川へ被爲成、御船ニテ御遊、御供ノ面々へ水練被仰付、此砌堀田加賀守殿ヲ以、御徒頭衆へ被仰渡候ハ、御徒ノ輩、水練達者稀ナリト被思召候、是常ニ水稽古不致候故ナリ、自今已後、毎年夏中ハ、川端ニ小屋ヲ懸、非番ノ者ハ、毎日泳ヲ稽古可致旨被仰渡候、是ヨリ夏御徒方水稽古初ル、右ノ趣前撰集ニ有之候、

〔有德院殿御實紀九〕享保四年七月廿六日、中川のほとりに御放鷹あり、〇中略けふ御舟を中川にとどめ給ひて、徒士五十七人の水泳を閲せらる、游泳はて、徒頭土屋平三郎正慶を御船に召れ、組子の水練御褒詞を蒙る、

〔大概順〕御目見以下大概順

七十俵五人扶持　御抱入場所　羽織袴役　御徒

〔吏徴御目見以下下〕御徒〇中略　七十俵五人扶持高　假抱入七人扶持文化九年壬申三月廿一日始　慶長八年癸卯正月日始置

〔泰平年表東照公〕慶長八年正月、初て走り衆の頭を置る、〔中略〕御徒、元五十俵二口なりしが、寛永九年八月廿五日、二十俵三口宛御加增、七十俵五口となる、

〔營中御日記九〕寛永九年八月廿五日、申刻御歩行頭被爲召、御歩行衆廿俵三人扶持宛御加增にて、七十俵五人扶持宛被下旨被仰付之、〇又見大猷院殿御實紀

〔寶曆集成綸錄二十四〕延享三寅年八月

御勘定奉行江

御徒明跡江抱入有之節、唯今迄者、前之者御切米御扶持方請取候に無構、其月又は一二ヶ月之内抱入成、御切米御扶持方請取候付、重渡りに成候間、向後は御切米御扶持方請取方之儀、前之者、赤

御借米請取候はゞ、抱入之者、夏御借米ゟ請取可申候、尤前之者、春御借米不請取候はゞ、抱入之者、春御借米より請取可申候、夏冬御借米請取方も右に准じ可申候、御扶持方は、前之者請取候月之翌月ゟ請取可申候、乍然間有之抱入に成候はゞ、抱入候月より之御扶持方請取可申候、右之通、御徒頭江申渡候間、可被得其意候、

八月

〔吏徴別録上布衣以上〕御徒頭略○中　万治三年庚子十二月廿八日、御徒廿組、合六百人如例三年に一度宛、羽織可被下旨被仰出之、

〔昭德院實紀二十三〕文久二年閏八月二十五日作二十七日○文久紀事

御徒頭江

一組屋敷之儀は、只今迄之通相心得、御徒ゟ轉役か、又は小普請入等被仰付候ハヾ、右跡御入人相成候者之屋敷、入替之積可被心得候、尤拜領屋敷無之者、御入人相成候節は、御徒ゟ轉役等致し候者、新規屋敷被下候に而可有之候、

右之通被仰出候間、可被得其意候、

〔幕朝故事談〕御徒衆黒鍬の類は、人請に立申間敷と云證文を頭々へ取られて居也、

〔政談三〕御徒與力ヲ頭ノ心儘ニ入ル事故、悉ク金ノ沙汰ニ成テ、町人百姓、又ハ小普請手代ノ類、金ニテ與力ニ成テ居テ、又金ヲ出シテ、我子ヲ御番衆ノ養子ニスル中繼ニスル類、當時ハ甚多シ、是等ハ戰場ヲ勤ル者成バ、ケ樣ニハ有間敷コト也、御徒ハ元來御譜代ナリ、御徒ヨリハ立身モシタル輩多シ、久世三四郎抔ハ御徒ヨリ出タリ、御先々前御代ノ時、身上ナラヌトテ、申合セ御願申出タルヨリ、御譜代ニテハ無ニ成、請狀ニテ組ニ入コト有マシキコト也、公儀ニテハ人ヲ召仕ワルヽニ、請狀トイウコトハ如何成コトゾヤ、日本國中ハ皆御國也、何事モ被仰付次第

西丸徒頭

ノコト也、餘リニ御役人ノ不學成ヨリ如此コト起レリ、與力ハ、昔公儀ヲ願フ者ヲ、頭ノ心ニテ與力ニ入オキ、見合取持テ召仕レタル類多シ、中頭ヨリ浪人ノ腰掛所ト云テ、高知取タル浪人ノ、本知ニテ濟迄ノ内、與力ニ入テ居タルコト故、歷々ノ侍多シ、今ハ金ニテ成故、ラチモナキコト也、昔ハ御旗本ノ二男三男召出サルヽコトナレドモ、近年ハ此コト絶ヘタリ、故ニ二男三男ハ、只養子ノ口ノ有ヲネラヒ居テ、其内ニトシ寄バ埒モ無者ニナル類、此徒ヲ御徒與力、御勘定御ユウ筆ナドニ入テ使込テ見、夫ヨリ器量有人ヲバ立身ヲモサスル抔ニ仕タキコトナリ、

〔柳營秘鑑〕四 諸役人員數并組支配

一御徒士頭　西丸四人

〔職掌錄〕御徒頭

西丸五員

〔吏徵〕上 布衣以上 西丸御徒頭五人　同上〇若年寄支配、躑躅間、千石高、

〔東職記聞〕二 監國君職

步行頭五人　布衣

領人別步行者二十人也

〔大猷院殿御實紀〕五十八 正保元年九月五日、步行頭能勢市十郎頼永若君〇徳川家光世子家綱に附らる、

〔吏徵別錄〕上 布衣以上 御徒頭〇中略 慶安三年庚寅九月三日、始置西丸御徒六組、〇中略 寶永三年丙戌十一月廿五日、御徒四組、西丸ヘ被爲附、内二組新規、　元文二年丁巳十二月十五日、御徒一組新規、都合西丸御附五組、

〔東職記聞〕二 監國君職

步行頭五人　布衣

領二人別步行者二十人一也、元寛日記曰、元和六年正月、台德院殿秀忠○徳川以二根來小才治、高林河內守、川村善次、中山助六郎、水野勘八郎等五人一補二當職一而被レ屬二監國君一也、慶延略記曰、慶安三年九月、大猷院殿家光○徳川以二水野權兵衞、戶田三郎四郎、本多半之丞、榊原大膳、酒井兵部、神尾內記等五人一補二當職一被レ屬二監國君一也、代々記曰、寬永三年十一月、常憲院殿綱吉○徳川以二服部久右衞門、井戶新兵衞、夏目藤右衞門、渡邊外記等四組一被レ屬二監國君一也、享保九年十一月、有德院殿吉宗○徳川以二土屋平三郎、高山主水、牧野新平等三組一被レ屬二監國君一、同十年六月、又以二朽木五郞左衞門一被レ屬レ之也、爾來連綿而至二今之監國君一世子家治○徳川家重也、今五組也、

〔吏徵〕御目見以下下　西丸御徒組頭十人　同上○頭支配、百五十俵、躑躅間、上下役、御抱場、一組貳人、組頭役二十年以上、年數未滿七十歳以上退役之節、其身一代七十俵五人扶持被レ下、無役、年數未滿七十歳以下、三ヶ年之間無役、其後御暇、　慶安三年庚寅九月三日始置

〔吏徵〕御目見以下下　西丸御徒百四十人　同上○七十俵五人扶持、高、假抱入七人扶持、　一組廿八人　慶安三年庚寅九月三日始置

〔大猷院殿御實紀六十〕正保二年五月廿一日、○中略步行組二十人を、大納言殿世子家光○徳川秀忠御かたに附らるべき旨仰出さる、

〔常憲院殿御實紀五十一〕寶永二年正月九日、けふ火災の時、番士西城にまかる寄場の定制を令せらる、○中略徒士三隊、是も頭組頭そひ、一隊は奥御殿の前、一隊は裏門內に備べき定なれど、今より二隊は裏門外、一隊は山里門內にそなへ、指揮をまつべしとなり、

使番

使番ハ、古ハ使役トモ稱シ、戰陣ニ臨ミテハ、軍中使命ノ職ニ從事シ、平素ハ、將軍ノ代替リ每

ニ、諸國ヲ巡廻シテ、大名ノ治績動靜ヲ視察シ、或ハ幼稚ナル大名ヲ後見監督シ、或ハ城請取渡ノ時ニ臨監スル等、凡テ幕府ノ上使ヲ勤メ、又二條大阪駿府甲府等ノ要地ニ、目付トシテ出張シ、遠國諸役人ノ能否ヲ考察シ、其他江戸市中ニ火災アル時ハ、火勢ヲ視察シテ之ヲ報告シ、及ビ目付ト共ニ、大名課役ノ消防夫ヲ指揮シ、又ハ定火消ノ火事場ニ於ル勤惰ヲ考察上申ス、向ホ使番ノ職掌ハ、政治部使者篇上使條、巡檢使條等ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、若年寄ノ支配ニ屬シ、初ハ役料ヲ給セシガ、後之ヲ廢シテ千石高ト定メ、慶應三年ニ至リテ、役金五百兩ヅヽヲ給シ、千石以上ノ者ニハ、其半額ヲ給スルコトヽ定ム、

抑、此職ハ、德川幕府創立以前ニ、軍中ニ使番ヲ置キシニ始マリ、幕府創立ノ當時ハ、人員モ一定セザリシガ、元和三年ニ、始テ定役二十八人ヲ補シ、其後漸ク增加シテ、文政、天保、嘉永、安政、萬延ノ頃ハ五十人ヲ降ラズ、文久元治ノ頃ハ、六十人若シクハ八十人ニ及ビ、慶應ニ至リテハ百十餘人ノ多キニ及ビシガ、其二年十二月ニ使番五十六人ヲ免職セシカバ、其數再ビ減少スルニ至レリ、

名稱

〔東職記聞二〕使番

古者、號當職云使役也、慶延略記曰、延寶三年正月以來、改號使番也、

〔柬徵別錄上 布衣以上〕御使番〇中略　延寶三年乙卯正月廿六日、御使役を御使番と改む、

〔落穗集追加四〕御使役の事

一問曰、以前の義は、御旗本に於て御使番、御使役衆として二段に在之義を申傳るは、いよ〳〵其通りに被聞及候や、答曰、其儀を我等承及たるは、台德院樣〇德川秀忠御代、大坂冬御陣の節より初りたる事にて候由、子細は其比迄の御使番衆と申は、御譜代の御旗本衆の中にて、數度の御陣先に於て、走り廻りたる御奉公抔をも被致たる面々を御撰らびの上を以被仰付、小

職員
職掌

栗又市殿抔の義は、御物頭衆にて有れ共、武功の人故、御使番役をも相兼勤候樣にと被仰付ける由也、左樣に有之を以、已前は老人の衆中計りの樣に有之、其上仲ケ間撰みを被致るゝに付、同役少なに有之候ても、人數を御增し被成度も被遊がたく有之と也、依之其方共仲ケ間、人少なに有之、當時寒氣之節を、老人抔は別て大儀と思召さるゝに付、諸番中より御ゑらみを以て仲ケ間入被仰付候、然れ共御使番と有る義にては無之、御使役と被仰渡、但伍字之指物之義は御免被遊、母衣指物に被仰付るゝと也、何も左樣心得、諸事心付る樣に可申談旨被仰渡候となり、大猷院樣〈○德川家光〉御代始の比迄も、右之古き御使番衆相殘り被居るゝなれども、左樣の衆中も段々と死うせ、引込抔被致るゝを以、向後の義は何れも御使番と號し、伍の字の指物の義は、一同に御免被遊るゝ旨被仰渡候となり、然ば御使番御使役と二段に有之たると申は、さのみ久敷間の義にては有之間敷と存候也、

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一御使番衆　布衣千石高　四拾八人

〔職掌錄〕御使番

當職四十五員、依時不同、〈○又見更徵〉

〔東職記聞二〕使番、無定員、至二三十人、

臨戰陣、則行諸陣、監諸將之勇怯、戰功之甲乙、軍令之守背之職也、軍命之以繫于當職、神祖殊擇英武勇功之士而被補之也、於今世、則京大坂駿甲二州、新將軍受讓之時、諸州之巡檢使、總而遠國之檢使等、一切當職之所掌也、

〔政談三〕使番ト云役、無用ノ役ナリ、是ハ軍中ノ使番ヲ其マヽニサシ置タル故、治世ニ無用ナリ、軍中ノ使番ハ、武邊功者ナル人ヲ撰ビテ御使ニ遣サレ、勝負ノ境ヲモ見サスルコト也、治世ニ

ハ左樣ノコトナケレバ、兼テ撰ミ置ズ共然ルベシ、禁裏ノ御使ハ高家也、三家ノ御使ハ御番頭ナリ、城受取巡見ナドニ使番參レドモ、是ハ臨時ニ撰テ可ㇾ然、異朝ニテモ臨時ノ役ナリ、火事ナドノ御使ハ御側ノ輩可ㇾ然、

〔有司勤仕錄〕御使番

一御役司る所は、御城詰番泊番等一人ヅヽ、火事場目付等、所々江上使、樣々あり、〇中略

一御三家御在國之節、幸不幸に付、上使勤ㇾ之、〇中略

一御規式御社參、御佛詣には、隨身之裝束にて供奉相勤ㇾ之、唐門ゟ內は御使番則御目付座す、昔は御目付ゟは上座之由、今は御目付之次なり、〇中略

一御鷹之鳥被ㇾ下候時、上使勤ㇾ之、大名に寄、參勤御暇之時も上使に被ㇾ遣之事有ㇾ之、〇中略上野增上寺江御規式御成之節、隨身役勤ㇾ之、尤布衣役也、

〔武家寶要〕上使御定之家

上使御使番參暇共　松平淡路　松平隱岐　松平越中

上使御使番參府計　松平肥後　井伊播部　松平讃岐　松平下總　酒井雅樂　奧平大膳

上使御使番御暇計　松平大和　松平中務　松平左兵衞

〔明良帶錄〕御使番

此場は、武功第一の場數覺の者の勤場にて、五の字の四半幟に母衣を掛て、敵陣に使して君命を辱しめざる主役也、夫ゆへ當時も遠國の御使、御目付代、御代替り國巡見等、雁雲雀上使、御規式御成の節隨身の役、火事場出役、非常の節、何にても出合なり、御番衎五十程有ㇾ之、火口番、御成番、御老中附など有り、此場御役替、正月十一日、御吉例によりて被ㇾ仰ㇾ付之、

〔青標紙三編〕一御使番も御先手と同じく、泰平の世には、人間ニ而さへあれば其任にたゆる事

也、俗に布衣の御番衆と云ふ、御役當に火口番、御城番、御城出御守殿附、御住居附、御老中附、定火消附、人數差引などあれども、桁くり用人と云ふものありて、割出して御用を便する事也、此桁くりに工拙あり、諏訪縫殿助内の五郎兵衞、又松浦金三郎内の三十郎など、名高き桁繰の名人ニ而、御使番一同總賴みなり、此桁くり用人と、かまぼこざむらひは、當番詰番の時は、主人に就て御城中へ出る事なり、

〔御使番勤方〕火口番一火元左勤方出場外迄出

中之註進場

一所々御門々　一御守殿御住居　一濱御構　一上野　一山王御宮　一增上寺　一傳通院　一赤坂氷川　一御鹽硝藏　一所々御用屋敷　一御三家　一御三卿　一御鷹部屋　一傳奏屋敷　一評定所　一所々御厩　一聖堂　一定小屋　一御春屋　一御船藏　一淺草御藏　一本所御藏　一不時御普請小屋　一割下水之北御竹藏　一猿江御藏　一淺草頒暦調御用屋鋪

一九段

右之場所、風筋惡敷、出火之節、別段註進申上候、右之通故、乘附註進之外、注進幾度も定り不レ申候、

一兩國橋　一牢屋敷

右貳ケ所は、火移註進可レ致候事、

〔火口番定火消附註進并書上〕火口番出場帳

一芝　札之辻、松平肥後守、松平政千代下屋敷、　一青山　松平左京大夫屋敷

一麻布　櫻田町阿部播磨守下屋敷　一權田原　紀伊殿御屋敷、甲府殿元御屋敷、

一四ツ谷　裏大番町、大木戶、　一大久保　安藤織部屋敷

一市ケ谷　尾張殿松平出雲守元屋敷　一牛込　榎町、早稻田、

一小日向 目白下新町、目白不動、音羽町、護國寺、
一巣鴨　大原町
一谷中　三崎
一淺草　觀音堂又者今戸
一深川　八幡
一小石川　御殿後通
一本郷　駒込追分島田井之助屋敷
一下谷　金杉
一八町堀　靈岸島木挽町尾張殿藏屋敷
一本所　龜井戸天神橋北、本所水戸殿藏屋敷、源兵衛堀、

〔德川禁令考 二十九 火事場役人〕安永九子年五月十九日

御使番兩人宛御城番之事

遠江守殿御渡　御目付江

一向後御城番と申御役當り、日々晝夜兩人宛相定置、御城近邊井御曲輪内出火之節、早速罷出、燒火之間廊下相詰、差圖次第可被相勤候、御徒目付、御小人目付、黑鍬之ものも、日々晝夜共に、御城番相極置、前書之通り出火之節は、早速燒火之間廊下之近邊江爲詰、其方共罷越候場所江、附添罷越候筈に候事、

但出火之様子により、其方共所々江出拂候而も、外同役共申合、本文廊下江相詰居候様に可被心得候、

右之通可被得其意候、尤御目付江可被談候、

五月

右之通御使番江申渡候間、得其意可被談候、

〔御使番勤方〕御城番勤方

一御用被仰付候節、御老中方井御支配方、直ニ被仰付候事も有之、又は御目付衆ゟ被達候事も有之、御用之品ニ寄、御臺所廊下ニ相詰罷在候御徒目付、場所江召連候事も有之候、ヶ様之節は、御

城番勤方、其趣御目付衆江申達、召連申候、右體御用之節は、中ノ口御門ゟ出入致候而不苦候、勿論刀脇差挑灯も側に置申候、

一右體御用向勤方之儀は、相定候儀も無之候間、其節之樣子次第、御勤可被成候、〇中略

御城番通例

一何方に而も出火有之候はゞ、早速罷出、火事場江乘附、地名承り糺、火之樣子見屆、直に登城致し、見屆候趣、御目付衆江申達、部屋江罷越、重者詰番、夜者泊番之衆江、右之趣申達候、其上ニ而も火鎭不申候共、御場所柄、氣遣無之火事之節は、申談之上致退出候、若又御場所柄近火之節は御城ニ相詰可罷在候、

〔御使番勤方〕御老中附勤方

一上野增上寺方角、出火候得ば、御出番御老中御宅江罷越、通候而用人に逢、縱ば下谷邊か、芝邊か、出火ニ付參上仕候、上野か增上寺近邊江相見候之間、御出馬茂可有之哉と參上仕候段申入候事、〇中略

一右之節、御老中方上野か、増上寺か、御出馬可被成旨被仰聞候はゞ、御先乘可仕哉、用人江承合可申候、御達被成候はゞ、御先乘可申哉、御跡乘可申哉と伺可申候、御先乘候之樣被仰聞候はゞ、御門外江罷出、馬上に而相扣罷在候、御老中方御出被成候はゞ、六七間程御先に乘可申候、供之者も不殘御先き召連申候、於途中早乘等無禮成者も候はゞ、年寄衆之旨可申聞候、〇中略

一御靈屋等御見分被成候はゞ、御跡ニ付可參候、〇中略

一御城江御殘被成候御老中方江御出馬之御老中方ゟ、此方を御使被差遣候儀御座候はゞ、御口上得と承り、御用番御老中方江被仰遣、御退出に候はゞ、御側衆江可申上哉、御宅江罷越可申哉と伺可申候、御城江罷出候はゞ、御目付衆を以、上野か增上寺ゟか、誰殿御口上被仰付候ニ付致

登城候、被仰上候樣申達候事、

〔大猷院殿御實紀三十六〕寬永十四年十一月廿六日、使番堀三右衛門直景、眞田長兵衛幸政、石川彌左衛門貴成、多賀左近常長、〇中略府内を巡夜し、火賊を考察すべしと命せらる、こは近日各邸に火矢を投入、または火を放つ賊あるよし街説あるをもてなり、

〔大猷院殿御實紀六十六〕正保四年六月六日、使番津田平左衛門正重、蒔田數馬助長廣、〇中略地震によて、各所崩頽の地、修築奉行命せらる、

〔文昭院殿御實紀二〕寶永六年四月十三日、使番大久保市郎右衛門忠義、仙洞御所造營の奉行命せられて、いとま下さる、

〔慶寬諸條令上〕萬部經御佛事ニ付參詣之事

一御使番一人宛參詣、四五度より多くは無用之事、

慶安五年辰四月七日

〔憲教類典四ノ八武藝〕享保三戊戌年五月廿四日

百人組　御持　火消　御先手　御鐵砲方

右組與力同心稽古場に而、弓鐵砲御目付壹人、御使番壹人、可懸見分候、御目付差合候節は、御使番兩人可有見分候、頭々江も其段申渡候間、可被相談候、

五月廿四日

〔東職記聞二〕使番

大國之主、幼少之時、遣當職令監其封内之政也矣、

〔有司勤仕錄〕御使番

一國持大名、幼少にて家督之節、後見被仰付、其初に在所江行、半年程相詰、國々仕置等を檢知す、總

而十五歲迄、萬端差圖之、

〔有司勤仕錄〕御使番

出火之節は、場所に而如御目付勤之、

〔德川禁令考定火消役二十九〕元祿十九未年二月

出火之節之儀、其外品々被仰出、

覺

一火事場江罷出候御目付御使番、風下風脇を第一に見廻、諸事被申付候樣に可被致候、注進之儀に拘り不申、火事場に而ハ差圖見計專要に候間、常々其段可被申合事、

〔德川禁令考火事場役人二十九〕享保五年子七月廿六日

火事場江罷越候御目付御使番之定

一出火之節、火事場江罷越候御目付、御使番、兩方合九人極可申候、

火口　　御目付兩人　　御使番三人

防場　　御目付兩人　　御使番兩人

都合九人

一火消役火口之者も、防場江罷越、一手に成候節は火口殘、

火口殘　　御目付壹人　　御使番兩人

防場　　御目付三人　　御使番三人

都合九人

右之通相心得可申候、總而御目付、御使番共に、都合九人外ハ、何人に而も出火之節、御城江可罷出候事、

○按ズルニ、火事場目付ハ、目付及ビ使番ノ出役ナルヲ以テ、其職務ニ關スル令達ハ、分載スベカラザルモノ多シ、故ニ目付篇ニ併載シテ、此篇ニハ省略セリ、

二條大阪目付

〔有司勤仕錄〕御使番

一御役司る所は、○中略二條大坂御目付には、兩番之內一人差添て、兩所にて二百日相詰、三月江戶發足、夫ゟ大坂御城へ行、兩所を日を定めず往來す、此處發足之剋、二條諸司代、又大坂發足之時は、御城代ゟ料理を出す、

一右兩所逗留之內、所々見分有之、京にては洛中洛外、其外宇治伏見、宇治川之猪飛歩渡之場、勢田、八幡山供奉之瀬の渡り、又大坂にては、住吉、天王寺、南都、長谷、其外所々也、右歩渡之場所見分之次第、御使番は船に乘り川中に出る、外に一艘置之、百姓貳人ヅヽ裸に成て川を渡さる也、

〔政談三〕京師百日目付ト云ハ、何ノ目付ナルヤラン、寺々ノ緣起寶物ヲ見テ歩行ヲ役トス、堺モナキコト也、是ハ京都ト云所ハ、堂上方ノ在所ニテ、長袖計ノ所ナル故、一々メクジラ立テ惡事ヲ見出ス樣ニスル時ハ、却テ治ノ害ト成トテ、往昔智惠アル老中ノ斯サセタルガ、今ハ例ト成タルナルベシ、去ドモ何事モ形計リニ成テ、其身モ何ノ御用ニテ上リタルト云事ヲ知ラズバ、如何ナルコトヤラン、

〔京都御役所向大概覺書二〕二條大御番頭井大坂御目付交代之事

一大坂御目付兩人宛、每年三月九月共兩度、六日於大坂交代、但江戶ゟ四日ニ京著、翌五日大坂江被罷下、六日之朝交代、尤兩人共上京之節者、京都近邊巡見、三十日程宛逗留、日限不定、大坂ニ茂三十日程宛被相詰、其外不時御用有之節者、四五日宛、大坂ゟ上京之儀も有之、

一所司代闕井御在府之內者、壹人宛京都ニ被相詰候、

〔官中秘策一〕大坂城之事井諸御役人之事

一大坂御目付は、御使番ゟ壹人、兩御番之內ゟ壹人被₂仰付₁、彼地ニ罷在候內、京都代ル〳〵罷越、是をかけ勤といふ、世上ニ而、上方目付と云、每年三月六日以前彼地交代、兩人宛半年年交、○又見ニ御[illegible]

〔憲教類典二ノ十七大阪在番〕寬延二己巳年八月

御使番江渡候書付

大坂爲₂御目付代₁被₂遣候面々、近年は別而取計手重ニ相成、御番衆ゟ音物等幷寄合之節、料理差出致₂饗應₁、於₂彼地₁茂諸事右に準じ、手重成取計有₂之、年々過分之物入等相增候段、粗相聞候、如何に候、以來申合、堅可₂爲₁無用₁候、

一總而遠國江被₂遣候節茂、前條之趣可₂被₁相守₁候、幷注進狀之紙之儀、前々被₂仰出₁茂有₂之候處、近年紙之品宜敷相成候、向後如₂前々₁被₂心得₁候樣可₂被₁申合₁候、

〔京都御役所向大概覺書二〕二條大御番御目付衆御合力米之事

一二條大坂半年代り之御目付、知行高下ニ不₂依、御合力米百石宛、大坂御藏ニ而相渡、但御扶持方分限ニ應ジ、京大坂兩所ニ而相渡ル、

〔京都御役所向大概覺書一〕京都諸役人御役屋鋪幷組屋敷間數之事

大宮通御池上ル町

一御目付屋鋪貳ヶ所

東側表南北拾六間壹尺貳寸、裏南北拾五間貳尺六寸、東西、北ニ而貳拾間貳尺、南ニ而拾九間三尺八寸、

西側表南北貳拾貳間貳尺、裏南北貳拾壹間四尺八寸、東西拾六間壹尺貳寸、

右兩屋敷番人、所司代ゟ相勤候、

〔仕官格義辨〕大坂御目付代り之事

問云、大坂御目付代りと申者、昔ゟ御使番一人兩御番衆一人充被₂遣、駿府江は御使番一人充被₂遣

候事ニ而候哉、答云、大坂御目付代之儀、昔は御目付衆ゟ一人、兩御番衆ゟ一人充被遣候處、寛文三卯年ゟ、御使番一人、兩御番衆ゟ一人被遣、一年ニ三度充之交代故、百日目付共申候由、同六午年ゟ半年代リニ成、春秋兩度之交代に而候、其巳後元祿十二卯年ゟ、御使番衆一人充被遣、兩御番ゟ被參候儀は相止候、寶永五子年、同六丑年二ヶ年は、御目付衆一人、御使番衆ゟ一人被遣候、同七寅年ゟ、御使番兩人充被遣候、正德二辰年より、御使番衆ゟ一人、兩御番衆ゟ一人充被遣候、延享三寅年十二月十八日、御目付水野清六、御使番遠藤宮內、來春御目付代被仰付候、其後は又御使番一人、兩御番一人充被遣候、

〔柳營年表秘錄上嚴有院〕寛文三癸卯、大坂御目付、往古御目付一人、兩御番一人、當年より御使番一人、兩御番一人、一ヶ年三度交代、故ニ百日目付ト云、

〔吏徵附錄權職〕大坂御目付二人〇中略　寛永元年甲子月日、始置二人、

〔嚴有院殿御實紀二十八〕寛文四年閏五月十五日、使番荒木十左衞門元政、神尾若狹守元鎭、大坂目付にさゝれ暇たまふ、こは先例百日にて交代すといへども、今より後半年交代たるべしと仰出され、かしこにて百石官料給ふべしと定らる、

〔柳營年表秘錄下當御代〕寛政五癸丑五廿四、大坂御目付代、已來一ヶ年交代、當秋ゟ一年在勤、

〔蜑の燒藻の記下〕思ひ出るに任せて、爰に記し侍るは、御目付勤たる比のことなりけり、萬事費を被省によりて、諸向の役々も、當時不用なるは被廢被除も有けり、其中に大坂百日目付を一年詰に被仰付可然よしを申上る者あり、

一年兩度の御暇の時、拜領物出ればなり、一年詰切に至りては、拜領物一度被省なり、昔は春秋兩度づゝ交代したり、

氏敎朝臣の承はりにて扱はれけるに、中川忠英勘三郎、于時御目付、博識なりければ、古も一年一度上使

を被ㇾ遣たる例候まゝ、苦しかるまじき由答申たりければ、伺のまゝに被ㇾ渡たり、翁〈〇森山孝盛〉は此事定りたる後に聞て、夫は愚案いさゝか思ふ所あることなりといへば、中川の答へられて事定りたるよし皆云によりて、忠英に向ひて、抑大坂百日目付の趣意は、昔しよりケ様々々の思召有てこそ、一年に二度づゝ上使を立らるゝことには成たり、然るを一年詰切に被ニ仰渡ㇾては、大御番の在勤同様になりて、いかゞ候べき、執事の足下に尋ありて被ㇾ定たるよしなれば申なりといへば、中川も、初て足下の申さるゝをもて考ふれば、如何様にもさもあるべき理りにこそあれと云て止ぬ、かくてはや事定りて詮なき様に思ひ侍れど、心ゆかざりければ、頓て補佐〈〇松平定信〉の前へ出て、大坂の百日目付を一年詰に被ニ仰付ㇾたる由承り候ひぬ、彼百日目付は、一年に四度づゝ道中往來仕候をもて、海道の御取締にも成候ことと存候へば、如何に候と申せば、輔佐の聞れて、さればとよ、此度浦々〈寛政五年春、浦々巡行あり、〉伊豆相模のあたり巡見の所々にて聞すれども、所の者共何ごとも云ず、聞出したることもなし、されば百日目付とても、旅中替りたることも有まじと思ふなりと有より、さればにて候、某が悪事あることを某に御尋あらんに、いかに正直に申べき、浦々にていか様に御尋ありとて、所の者ども、いかであからさまには申傳ふべき、然ども御目付と號し、上の御目代とて、上下通行仕候に至り候ては、いかなる隱密の手だて、計をもて、いかなることを聞出さんもはかりがたしと思ふ心ありて、所のもの共ふかく愼み可ㇾ申候、〈〇中略〉と申たれば、定信朝臣初て悟りて、頻にうなづきて、彼一事は氏教朝臣の取扱ひにて、中川に相談ありて事定りたりと云ながら、かへす〳〵うなづきて被ㇾ感たりけれども、公命出てかへらねば、空敷其まゝにて、今に一年づゝ御使番の京大坂に詰切ことには成ぬ、

〔京兆府尹記 二〕大坂町奉行職掌

評曰、天明七未年、御使番々大坂御目附に松平次郎兵衞罷登る所、京都町奉行丸毛和泉守、大坂町

駿府甲府目付

待遇俸祿

奉行佐野備後守也ける所、泉州備州とも、御役不相應の事有し由にて、何角次郎兵衛ゟ言上有し由、程なくめさせられ、兩人共御役御免、〇下略

〔吏徵附錄 權職〕駿府御目付一人　御使番一人、一ヶ年詰、　御合力　御暇金貳枚、時服貳、　寶永四年月日始置　享保十年乙巳八月四日以來、甲府へも可被遣旨命せらる、　例年十月十一日甲府着、廿六日、同所出立駿府へ歸、

〔有司勤仕錄〕御使番

一駿府御城江百日目付、八月末發足也、右逗留之內、甲州へ行、暫く逗留し、又駿府へ歸るなり、

〔柳營秘鑑 一〕一同所〇駿府御目付は、御使番より被仰付、每年壹人宛、十月より極月迄彼地ニ罷在、夫ゟ直ニ甲州御番城之御目付相勤而歸り候時、尤代り無之、

〔東職記聞 二〕使番〇中略布衣

〔大猷院殿御實紀 二十一〕寬永九年十一月廿七日、使番一色左兵衞範勝、叙爵して式部少輔と改む、

〔藩翰譜 七上 堀〕式部少輔直景、父に繼て御使番となされ、時に三右衛門と申す、右大臣家〔德川家綱〕の御時には、万石を領せし御使番ありき、

〔東武實錄 四十〕寬永九年九月二日、御使番ノ輩、殘ラズ御前ニ召出サレ、年老タル者ハ五ノ字ノ指物、年若キ者ハ母衣ヲ掛ベキ旨命ゼラル、

〔東照宮御實紀附錄 二十三〕御使番の用ゆる五の字のさし物は、小田原陣のとき、服部半藏正成、黑地の四半に、五の字を白くそめ出せしが御目にとまり、以來御使番の指物に用ひらるべければ獻るべしとて、これより使番奉はる者の內にても、殊に老功の徒に用ひしめられしなり、

〔殿居囊 後集〕五奉行御番方指物略圖

御使番、赤幌 白地四半 兩樣之內、任意用之、白地四半、五文字黑、五文字下ニ面々印有、

〔天保集成絲綸錄七十六〕寬政十二申年二月

書取

出火之節、御使番白き塗笠相用候處、近來外々に而も相用、紛敷差支之事も有レ之由ニ付、以來火事場役人之外、白笠相用候儀、無用ニ可レ致候、此段向々江寄々可レ被二達置一候、

二月

〔殿居囊後集〕御使番衆

白塗笠裏金　但白陣笠、外に而無用、

〔吏徵上布衣以上〕御使番〇中略　若年寄支配　菊之間南御襖際　千石高

〔慶寬諸條令下〕御役料之覺

五百俵　御使役

寬文五年巳七月

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、〇中略　使番衆〇中略　五百俵、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、〇中略　使番、兩番組頭、徒、小十人頭、千石以下は三百俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

千石ゟ內は、千石之高ニ可レ被レ成レ下候、　御使番

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不レ被レ下、是迄之場所高に不レ拘、今度御改正、別紙之通御役金被レ下候旨、被二仰出一之、

沿革
任免

御役金被下高之覺　　　　御使番

一金五百兩

高千石以上之者江は半減、御目付助之者江は金六百兩、

但同斷高千石以上之者江は金三百兩

御切米高千俵以上之者江は不被下、同七百俵以上之者江は半減、

〔武德安民記二十一〕關原大戰賊徒敗北之事並金吾黃門裏切事付凶徒諸將戰死之事

忠吉朝臣〇松平直政〇井伊幷御使番米津清右衞門淸勝、小栗又市忠政以下、纔ニ廿餘騎先登シテ敵陣ヲ鑒ハ、石田治部少輔三成、島津兵庫頭義弘入道惟新、同又八郎忠恒、同中務大輔豐久等ハ玉藤川ヲ涉、小關野南ミ嶷ニ向備立、彼村中ヨリ旗ヲ進、輕卒ヲ出、火炮發ス、備前中納言秀家、小西攝津守行長ハ、石原峠ヲ引下、谷ノ小川ヲ涉、關原ノ北ニ出、西北ノ山ヲ後ニ當テ、是モ嶷ニ向屯シケルガ、早輕卒ヲ出、長柄ヲ進、

〔東照宮御實紀九〕慶長九年、此年使番米津勘兵衞由政、江戶町奉行となり、采邑五千石を給ひ、島田兵四郎利正、使番となり、〇下略

〔藩翰譜六加々爪〕民部少輔忠澄、〇中略大坂の軍の時、御使番を承り、自ら戰て首取て獻る、

〔台德院殿御實紀四十五〕元和三年正月十一日、水野河內守守信、榊原伊豆守某、駒井右京進親直、跡部民部良保、天野佐左衞門雄得、赤井兵庫頭忠泰、長谷川四郎兵衞重次、新に使番を命せられ、佐久間伊豫守實勝、石川六左衞門重勝、齋藤左源太利政、本鄉勝右衞門勝吉、大河內善兵衞正勝、川口長三郎近次、下曾根三十郎信由、高木忠右衞門爲信は、若君御かたの使番仰付らる、

〔東徵別錄上布衣以上〕御使番　元和三年丁巳正月十一日、始置定役二十八員、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月廿九日、御使番五十六人免職、勤仕並寄合ヲ命ゼラル、

○按ズルニ、是ヨリ先キ文政十一年武鑑ニハ、使番五十人アリ、天保十一年及ビ嘉永三年武鑑ニハ、各、五十七人アリ、安政六年武鑑ニハ、五十四人、萬延元年武鑑ニハ五十七人、文久二年武鑑ニハ六十人、元治元年武鑑ニハ八十六人、慶應二年武鑑ニハ百十二人アリ、而シテ慶應三年武鑑ニ載スル所ハ六十人ナリ、

百人組之頭

名稱

百人組ハ、何レモ鐵砲組ニシテ、甲賀組、根來組、伊賀組、二十五騎組ノ四組アリ、同心百人ヅヽ之ニ屬スルヲ以テ百人組ト云フ、而シテ甲賀、根來、伊賀ノ三組ハ、各、與力二十騎ナレドモ、獨リ二十五騎組ハ二十五騎アルヲ以テ、此稱アリ、四組各、組頭一人ヲ置キ、若年寄ノ支配ニ屬シ、與力同心ヲ率ヰテ、輪次ニ江戶城大手三ノ門ヲ守衞ス、初ハ役料ヲ給セシガ、後之ヲ廢シテ、三千石高ト定ム、與力ハ八十石高、同心ニハ、三十俵二人扶持ヲ給ス、(根來組ハ、三十俵三人扶持、)抑、百人組ハ、何レモ德川氏ノ初年ニ創置スル所ニシテ、甲賀組ハ、近江國甲賀郡ノ士民ノ、德川氏ニ緣故アルモノヲ一隊ト爲シ、根來組ハ、紀伊國根來寺ノ衆徒ノ來附セルモノヲ一隊ト爲シ、伊賀組ハ、伊賀國ノ住人ノ、德川氏ニ由緒アルモノヲ一隊ト爲セルナリ、而シテ二十五騎組ハ、後ニ新設セル一隊ニシテ、之ヲ新組トモ云ヘリ、以上ノ四組ハ、創置以來嘗テ絕ユルコト無リシガ、文久二年ニ至リテ、遂ニ之ヲ廢セリ、

〔元寬日記 四〕寬永十二年三月廿一日、丹波式部少輔氏勝、根來組百人鐵砲頭被仰付、成瀨伊豆守之成跡役也、

〔大猷院殿御實紀 二十九〕寬永十二年十一月十日、先手頭久世三四郎廣當は、大手番命せらる、此こ

職員
職掌

ろ大手番といふは、百人組の頭の事なり、

〔厳有院殿御實紀一〕慶安四年六月十八日、先手頭屋代越中守忠正は、根來足輕頭となり、〇下略

〔寶永三年武鑑〕御鐵砲頭百人組

〔嘉永三年武鑑〕御鐵砲百人組之頭

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一百人組之頭布衣三千石　四人〇又見二職掌錄、吏徵一、

〔東職記聞二〕百人組鐵砲頭四人

領二人別鐵砲組與力二十人或二十五人同心百人一也、四組中有伊賀甲賀根來之差別一也、於將軍家諸物頭中一頗重職也、平日以順衞二本城三門一也、古之大手門也

〔柳營秘鑑三〕御城內外御門番所勤仕之覺

一大手三之御門　百人組頭并與力同心

〔有司勤仕錄〕百人組之頭

一四組に而、大手三之御門御番所を相勤、〇中略

一是は諸組と違ひ、與力貳拾人、或は廿五人、同心百人ヅヽ預るなり、依之百人組と號す、〇中略

一詰番菊之間緣頰也、御番所に泊り番相勤之、

〔明良帶錄〕百人組之頭

是場は大手三之御門の直衞にて、〇中略式日には、外張番所に自身詰、阿蘭陀人登城之節、大番所休息所となる、

〔職掌錄〕百人組之頭

兩山御參詣之節、上野は文殊樓、増上寺は山門前を警衞す、

資格 俸祿

〔常憲院殿御實紀 六〕天和二年九月廿一日、けふより百人組の頭、宿直を命ぜらる、

〔敎令類纂 初集三十九〕寶永七庚寅年四月十五日

百人組之頭○中略

御番詰切候儀、御免被成候間、前々之通可被勤候、泊番之儀は、七半時々可有出勤候、

〔東職記聞 二〕百人組鐵砲頭四人　布衣

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕百人組之頭　寬永十二年乙亥、百人組之頭、往古大名、此年間より旗本、慶政私記

〔明良帶錄〕百人組之頭

是場は大手三之御門の直衞にて、尤武役の重き所なり、武勇の人之勤場也、根來百人を御預け有るも武勇故なり、○中略火消より此場へ昇れば、殿中の事に不案内なり、志かも物入多き場にて、手薄にては勤難く、近比小堀下總守、此場より新番頭に至る、

〔吏徵 上 布衣以上〕百人組之頭○中略　若年寄支配　菊之間南敷居外　三千石高

〔慶寬諸條令 下〕御役料之覺

七百俵　百人組

寬文五年巳七月

〔憲廟實錄 四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、○中略百人組の頭、○中略七百俵、

〔常憲院殿御實紀 二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略百人組の頭三千石以下は五百俵、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保八卯年六月

三千石々內は、三千石之高に可被成下候、　百人組之頭

沿革任免

〔武徳編年集成二十五〕天正十年十二月廿一日、神君〇徳川家康甲信ヘ令ヲ下シ玉ヒ、古府ヨリ御凱旋有、〇中略成瀬吉右衛門、日下部兵右衛門ヲ檢斷職トシ、後年根來徒同心五十人ヲ成瀬ニ附與有テ、先方ノ士小濱民部左衛門景隆、間宮造酒丞信高、是ニ副フ、

〔柳營年表秘錄東照宮上〕慶長六辛丑、今年百人組二組、新規

青山組　青山播磨守忠成、初藤右衛門常陸介一万千石被加、與力廿五騎、同心百人被預、

大久保組　内藤修理亮清成、初彌三郎二万千石賜、與力廿五騎、同心百人被預、

〔吏徴別錄上布衣以上〕百人組之頭〇中略青山組、慶長六年辛丑始置、青山常陸介、一萬千石寛永九年壬申六月廿一日、本多三彌、御座間ヘ被召、馬上同心二十五騎、并讃岐守に御預之鐵砲同心百人被爲預畢、日記　大久保組、慶長六年辛丑始置、内藤修理亮清成、二萬千石寛永十年癸酉二月十二日、日根野織部正に、元青山大藏少輔に御預之同心百人、并與力二十騎、新規に被仰付、〇中略青山大藏にも與力なし、伯耆守代に與力雖有之、伯耆御改易之時分、淺井半兵衛之外ハ皆牢人仕、番所にハ半兵衛にナ藏手前之侍相加、御番仕候、今度大藏跡役織部に被仰付、半兵衛老年仕、與力御免に而被召出候間、織部へ與力被仰付候也、江城年錄　根來組、天正十三年乙酉八月廿二日、於遠州濱松被召出、各三十俵三人扶持被下、成瀬小吉後隼人正正成支配に而、武州岩附鉢形御番被仰付、其後三石宛御加增に而、三十八俵餘に成、寛永三年丙寅月日、殘之根來被召出候、同十年癸酉二月十二日、日根野織部正に、元青山大藏少輔に御預之同心、并與力二十騎、新規に被仰付、成瀬伊豆守、是又與力二十騎被仰付、今迄ハ根來百人組被仰付、根來御同心計に而與力なし、伊豆守手前之者、與力之役所ニ罷在候、同十四年丁丑、與力兩人に、各現米八十石被下、　甲賀組、慶長二年丁酉、於伏見被召出、與力ヘ御合力米十石拜領、其後十人扶持被下、地侍同心一人に、三人扶持充拜領、關原已後於江州甲賀郡、知行貳百石拜領、望月伴之助地侍十人に貳百石、合四百石拜領、十人之地侍ハ、伴之助組に被仰付、寛永九年壬申、初而

江戸へ罷下、山岡主計頭景以組ニ成、内櫻田御門番相勤、同十年癸酉、蓮池御門番、同十四年丁丑、江州水口御殿番、正保元年甲申五月、江戸へ下リ、坂部三十郎廣利組ニ成、大手三之御門番相勤、承應二年癸巳、增ニ與力十騎、〈合二十騎〉

〔諸御役代々記　六上〕百人組之頭

根來組〈與力貳十騎、同心百人、〇中略〉

慶長五巳、御老中より、　成瀬小吉正成〈改ニ準人正〉

寛永十酉八月十二日、御小性組番頭より兼帯、　同伊賀守元成

寛永十二亥三月廿一日、御書院番頭より兼帯、　丹羽式部少輔氏知〈〇此間四十一人略〉

嘉永元申十月廿八日、中奥御小性より、　白須甲斐守

同貳拾騎組〈與力二十騎、同心百人、〇中略〉

慶長六丑、御老中より兼帯、　青山常陸介忠成〈後播磨守〉

慶長八卯、御老中より兼帯、　青山伯耆守忠俊

青山大藏少輔幸成

寛永十酉二月十二日、諸来より、　日根野織部正吉明〈〇此間三十八人略〉

弘化四未年十二月廿八日、火消役より、　牧野兵庫忠直

同貳拾五騎組〈與力貳拾五騎、同心百人、〇中略〉

慶長六丑、御老中より兼帯、　内藤修理亮清成

慶長十三申、御老中より兼帯、　内藤若狹守清次

寛永九申六月廿二日、御老中より兼帯、　酒井讃岐守忠勝

寛永九申六月廿六日、同十二亥十一月十六日御書院番頭江、　本多三彌正貫〈〇此間四十三人略〉

弘化五申年三月八日、中奥御小性より、　戸田隼人正光武

同甲賀組與力貳拾五騎、同心百人、〇中略

慶長五子　山岡主計頭景次

寛永廿一申年五月廿三日、御先手鐵砲頭より、〇中略　坂部三十郎廣利〇此間三十二人略

弘化四丁未年七月廿四日、中奥御小性より、　溝口讃岐守直清

〔嘉永三年武鑑〕御鐵砲百人組之頭

溝口讃岐守　弘化四未七　甲賀組　組屋敷青山甲賀町大久保十騎町

白須甲斐守　嘉永元申十　根來組　組屋敷市谷加賀やしき牛込原町

牧野兵庫　弘化四未十二　伊賀組　組屋敷青山百人町

戸田隼人正　弘化五申三　二十五騎組　組屋敷よつや

〇按ズルニ、上ニ引ケル吏徴別錄以下ノ三書ヲ併セ考フルニ、嘉永武鑑ニ謂ヘル伊賀組ハ、卽チ諸御役代々記ノ貳拾騎組ニシテ、吏徴別錄ノ青山組ニ當リ、武鑑ニ謂ヘル二十五騎組ハ、諸御役代々記ノ貳拾五騎組ニシテ、吏徴ノ大久保組ニ當レリ、又諸御役代々記ニハ、日根野織部正ヲ貳拾騎組伊賀組ニ、本多三彌ヲ貳拾五騎組ニ列シタレドモ、吏徴別錄ニハ、日根野ヲ大久保組二十五騎組、本多ヲ青山組伊賀組ニ列セリ、未ダ其何レカ是ナルヲ知ラズ、

〔東職記聞二〕百人組鐵砲頭四人

四組中有伊賀甲賀根來之差別也〇中略

甲賀組

一集成曰、天正十年六月、〇中略甲賀郡〇近江之良家等、聞神祖〇徳川家康爲賊見窘、而率其子弟、來援免厄也云々、慶長五年關西叛、初神祖使鳥居彥右衛門元忠等守伏見城也、甲賀郡之良家及布衣奴隷

亦來守城也、〇中略後年神祖召之、給其長者采地、一門二百石、布衣之徒二十石也、萬姓家譜曰、慶長五年、賊三成陷伏見城也、初山岡備前守景友入道道阿彌、從神祖赴野州小山之時、謂其弟甫菴石山世尊寺之住持曰、予至關東之後、有叛神祖者、如良從勿論耳、至妻子入伏見城而可守之也、賊果起也、於是甫菴入守伏見城也、八月朔日、甫菴及良從四人、足輕七十三人戰死也、後年神祖招死事者子孫而給食祿、而置與力十人足輕百人、被令道阿彌領之也、今之甲賀組始于玆云也、山岡氏系譜曰、山岡主計頭景以、萬姓家譜作次美作守景隆之長子也、慶長五年十月、始謁神祖、則給采邑一萬石、伺候駿府、補百人組鐵砲頭、同九年十二月、叔父道阿彌卒、其養子新太郎景本、景以之季子也、年纔八歲嗣家、依其幼、而景以奉台命、而領與力同心及其家祿也、是以所己給之采地返上之云也、慶延略記曰、正保元年、坂部三十郎廣利補當職、代山岡主計頭云也、

伊賀組

一集成曰、天正十年織田氏變也、神祖自泉南經間道、自和州至伊州之時、伊州之住人、及凡民等、迎而奉送之勢州白子也、同年招之尾州鳴海而給食祿、而士列既近、以下爲同心也、同十一年八月、服部半藏正成、以伊賀組二百人守甲州谷村城、而至季冬也、慶長中、正成尙領之也、

根來組

一集成曰、初信長陷紀州根來寺也、衆徒亡命而匿勢州也、天正十三年八月、神祖招之、其徒響應來于濱松、所謂愛染院根來大膳、同小道者以下、福永院同宿、和泉坊、歸一坊、無玉坊、鳴神左衞門、赤堀等二百餘人、謁神祖于濱松城燒火間、成瀨吉左衞門正一執達之也、乃令正一問其俗姓、且給人別堪忍料、而被與食膳也、退出之後、成瀨正一招之家、而以酒肴饗之、於是其棟梁二兩人列直參、以下被使成瀨正一與伊奈圖書令成領之也、

新組

與力同心

一案元和季寛永始割百人組之以外者置之歟、慶延略記曰、寛永十年八月、日根野織部正吉勝補當職、書曰新組也、依是則始元寛之際乎、代々記曰、慶長五年中、成瀨小吉正成領根來組、同八年中、靑山伯耆守忠俊代之、寛永十年八月、成瀨伊豆守正成代之之時、始置與力二十人也、元寛日記曰、寛永十年八月、成瀨伊豆守元成補之、而云代成瀨隼人正正成也、案正成先是爲尾州侯之陪臣、則其說難信也、又慶延略記曰、慶長十年、靑山忠俊補書院番頭、元和二年五月、遷監國君(○德川秀忠世子家光)之執政、則忠俊執政而帶之歟、元寛日記曰、寛永九年六月、酒井讚岐守忠勝補之、代內藤若狹守淸次、依慶延略記、淸次亦元和二年補監國君執政、則忠俊之事、代々(○々下、疑脫記字、)說似得之也、代々記曰、慶長六年中、靑山常陸介忠成領二十騎組、內藤修理亮淸成領二十五騎組、山岡主計頭景次領甲賀組也、又一本云、內藤淸成靑山忠成兩人、執政而帶之也、來者夫詳焉、

〔昭德院實紀二十五〕文久二年十二月十九日

御持之頭江

今度御改革、百人組之頭、組共被廢止候ニ付、是迄百人組之御番所大手三之御門幷外張枡形御門下、向後は其方共組一組に而、御番相勤候樣可被致候、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一百人組頭　(與力廿騎、同心百人ヅツ、內壹組ハ廿五騎也、)

〔職掌錄〕百人組之頭

四組之內、甲賀組、根來組、伊賀組、與力各二十騎、靑山組は與力二十五騎、(○下略)

〔有司勤仕錄〕百人組之頭

一四組に而、大手三之御門御番所を相勤、與力八九人、同心ども四五人ヅヽにて勤る、下乘橋之外、箱番所と云有、是に與力貳人、同心四五人、又升形之内に同心番所あり、是に同心二三人相詰る、

但五節句總出仕之節は、加番有之而餘計出る、則下乘橋之下に、與力同心立番を勤之、

〔吏徵 下 御目見以下〕百人組與力〇中略　現米八十石高　假抱入十人扶持　役上下 根來組、甲賀組、御譜代場、伊賀組、青山組、御抱場、

〔憲教類典 二ノ九 御番〕元祿四辛未年四月廿六日

覺

百人組與力〇中略

右地方地行取來候ものとも、少給に而ハ百姓困窮いたし候沙汰有之ニ付而、今度遂吟味候處、先規より譯有之、地方拜領之筋目も有之候、依之前々之通、領地被下置候間、彌百姓困窮不仕、領地作法能様ニ可申付之よし、右頭中へ可被相達候、以上、

四月廿六日

〔天明集成絲綸錄 三十九〕明和八卯年二月

御勘定奉行江

百人組　岡田將監組與力

貳拾三人〇中略

右知行所取扱不案內に而難儀ニ付、願之通壹人前現米八拾石宛、御藏米ニ引替被下之旨得其意、向々可被談候、

〔吏徵 下 御目見以下〕百人組同心〇中略　三拾俵貳人扶持高 但根來組は三十俵三人扶持　假抱入拾俵壹人扶持

根來組組頭四人、四十五俵一斗八升七合五勺、平同心之內、二十八人三十四俵、　根來組甲賀組、御譜代場、伊賀組青山組、御抱場、

〔有司勤仕錄〕百人組之頭

根來組は同心總髮也、此組計は、同心ゟ與力に取立らる丶、其一代は總髮にて勤之、同心之格、他組とはよき也、

〔瀨田問答〕一根來組與力同心ノ來由イカヾ、

答、根來組ノ儀、確ト相糺置不ㇾ申候、相知レ次第、追テ可ㇾ申進候、

先達根來由緒御尋ノ處、不分明故不ㇾ申進候處、荒增承糺候處、左之通御座候、

根來組同心衆家筋ハ、紀州根來山法恩寺ノ衆徒ニテ、三河御陣ノ節軍功ヲ顯ハシ、神君御當地ヘ御歸陣ノ砌御供致シ、夫ヨリ中ノ御門勤番被ㇾ仰付、出家ニテハ如何敷候故、總髮ニ被ㇾ成候由、右同心衆右法恩寺開山上人ノ懸物所持致居候由、根來同心山本又三郎方ヨリ、此趣申來候ナリ、

持之頭

持之頭ハ、持弓頭ト持筒頭トヲ併セ稱スル職名ニシテ、弓組ト筒組トニ分チテ數組アリ、一組每ニ、組頭一人ヲ置キ、與力、同心ヲ率ヰテ、江戶城本丸ノ中門、西丸ノ中仕切門、二丸ノ銅門等ニ勤番セシメ、又元祿以前ハ、火附盜賊改ニモ出役セシメタリ、若年寄ノ支配ニ屬シ、初ハ役料ヲ給セシガ、後之ヲ廢シテ、千五百石高ト定ム、與力、同心ノ數ハ一定セザレドモ、大抵一組ニ、與力十騎、同心五十五人迄ヲ限度トス、與力ハ八十石高ニシテ、同心ニハ三十俵三人扶持ヲ給ス、西丸ニモ亦持弓頭、持筒頭各〻一人アリ、與力、同心之ニ屬ス、

此職ハ、元和九年ニ、始テ弓一組、筒三組ヲ置キ、爾後時ニ由リテ多少ノ增減アリ、安政ノ頃ハ、弓三組筒五組ナリシガ、文久二年ニ、持弓組ヲ廢シテ、持筒組ニ合シ、慶應二年ニ至リテ、遂ニ

持筒組ヲモ廢セリ、

〔吏徵 上 布衣以上〕御持之頭五人〇中略 弓二組 筒三組

〔官中秘策 十〕諸御役人之事

一御持弓頭 布衣千五百石高 與力十騎同心五十五人 二人　一御持筒頭 布衣千五百石高 三人

〔東職記聞 二〕持弓鐵砲物頭五人

領二人別持弓持筒組與力同心一、與力同心員數、依レ組與力十人、或六人、同心五十人、或三四十人也、故不レ委記二員數一也、如二先手組一亦倣二于此一也、五組中、二組弓、三組鐵砲也、〇中略 平日以テ順衞二本城之中門一也、

〔有司勤仕錄〕御持弓筒之頭

一鍮赤門を與力同心勤レ之、臺所部屋口に、同心貳人ヅヽ相二勤之一、頭も泊番有レ之、

一上野御成之節は、當組ゟ御成先御佛殿前を固レ之、增上寺御成之節茂右同斷也、

〔明良帶錄〕御持筒弓之頭

此場は武勇譽の人にて、御床机の左右に居て、帷幕の內座を離れず、御旌のとよみをまこる、當時は御城內中の御門、中仕切御門等を勤む、式日には自分詰、非常の備、肝要也、今は外場所よりは勤功少なければ、中の位とおぼゆる人多し、

〔柳營秘鑑 三〕御城內外御門番所勤仕之覺

一西丸中仕切　御持頭與力同心

〔嚴有院殿御實紀 十五〕萬治元年二月廿六日、持弓頭阿部四郎五郎政繼、兼松又四郎正尾、持筒頭近藤勘右衞門用清、三丸にて金改鑄の奉行仰付られ、平川口勤番せしめられ、其他の四隊にて、山里勤番すべしと仰付らる、

〔文昭院殿御實紀 一〕寶永六年三月九日、けふ令せられしは、先手組は、さき〴〵のごとく本城の中

門を守り、持組は西城新門の番をとゞめ、中仕切の門より兼べし、持組は二丸銅門を衞るべし、

〔諸御役代々記 六上〕御持弓頭

一寛政二戌四月二日、向後二丸銅御門可相勤旨、御本丸中之御門、西丸中仕切御門、不及相勤旨被仰渡、同八辰十二月十日、二丸銅御門不及相勤、如元中之御門相勤可申旨、

〔昭徳院實紀 二十五〕文久二年十二月十九日

御持之頭江

今度御改革、百人組之頭、組共被廢止候ニ付、是迄百人組之御番所、大手三之御門、并外張枡形御門下、向後は其方共組一組ニ而、御番相勤候樣可被致候、尤二丸銅御門番所之儀は、半組ニて相勤候樣可被致候、御番所請取方等之儀は、堀田伊勢守、諏訪主殿、森川肥後守、本多日向守江可被談候、

〔敎令類纂 初集三十九〕寶永七庚寅年四月十五日

御持之頭 〇中略

御番詰切候義、御免被成候間、前々之通可被勤候、泊番之儀は、七半時々可有出勤候、

〔嚴有院殿御實紀 十四〕明暦三年十月十九日、持弓、持筒、先手弓鐵砲頭を召て、今より後、火災の時は寄場へはまからず、四隊づゝ火災の地にまかり、往來の人を査検し、いぶかしき者は往來せしむべからず、されど賤民艱困せざらんやう、はからふべしと仰出さる、

〔大成令 五十一〕寛文四辰年十二月十五日

覺

一御持弓御持筒之内　壹組　北引橋之前

右御城近所火事、并大なる火事之節、此書付之所々江罷出可有之、其外非番之面々宿所に在之候而、頭々江召仕之者を附置可任差圖、〇下略

〔常憲院殿御實紀三〕天和元年六月五日、久世出雲守重之、二丸火番ゆるされ、此後は持弓筒の頭に、火の番を命せらる、

〔吏徴別錄上布衣以上〕御持之頭〇中略　寶永二年乙酉六月六日、平岩若狹守、盜賊改加役被ㇾ命、御持方加役のはじめ也、元祿元年戊辰三月十日、中根主税、火方改加役被ㇾ命、

〇按ズルニ、火附盜賊改ノ事ハ、別ニ其篇アリ、參看スベシ、

〔營中御日記六〕寛永六年六月四日、同所丸〇西石垣長十八間、松平宮內少輔可ㇾ修築之旨被ㇾ仰出、持筒之者百人、其外數百人之人數に而、急一昨二日午剋迄成就云々、

〔大猷院殿御實紀十九〕寛永九年正月廿七日、亥剋大御所〇德川秀忠の靈柩を、西城より增上寺のかりの御ましにうつしまいらせ、〇中略持弓頭內藤外記正重、持筒頭高木筑後守正次、與力同心を引つれて警衞す、

〔吏徴上布衣以上〕御持之頭〇中略　若年寄支配　菊之間南敷居外〇中略　千五百石高

〔慶寛諸條令下〕御役料之覺

五百俵　　御持弓御持筒

寛文五年巳七月

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、〇中略御持弓頭、御持筒之頭、〇中略五百俵、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、〇中略持弓筒頭二千石以下は三百俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

千五百石ゟ內は、千五百石之高に可ㇾ被ㇾ成下ㇾ候、　御持弓御持筒之頭

沿革
任免

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕御持之頭　元和九年癸亥六月朔日、始置二四員一、弓一、筒三、寬永九年壬申六月十五日、增二三員一、合七組、弓三、筒四、內藤外記、安藤傳十郎、松平新五左衞門、高木筑後守、中根傳七郎、根來小才次、齋藤伊豆守、此時馬上同心各十騎を附す、

〔東職記聞 二〕持弓鐵砲物頭五人

代々記曰、天正十二年、服部仲保正、橫田甚右衞門尹松等領二鐵砲組一也、家忠日記曰、慶長十二年、靑山善四郎重長、自二步行頭一遷二補持筒物頭一也、集成曰、元和元年、大坂役、持筒頭靑山重長、持弓頭內藤右衞門後改二外記一正重、供二奉台德院殿一、○德川秀忠也、代々記曰、寬永九年、內藤外記正重、安藤傳十郎定智、松平新五左衞門直次等領二弓組一也、當職故七組、享保十年、有德院殿○德川吉宗分二二組一、屬二之儲君一、當將軍家○德川家重備來五組也、

〔大猷院殿御實紀 一〕元和九年、是年齋藤與三右衞門三存は持筒頭となり、足輕五十人をあづかり、○下略

〔營中御日記 一〕寬永元年十月十一日、安藤傳十郎、御持弓組五十五人同心御二預之一、

〔營中御日記 九〕寬永九年六月廿五日、御役被二仰付一候輩、

御持弓筒之頭 江

內藤外記　安藤傳十郎　松平新五左衞門　高木筑後守　中根傳七郎　根來出雲守　坪內玄蕃　齋藤伊豆　渡邊彌之助

右九人、馬上同心十騎宛被二仰付之一、

〔寬永三年武鑑〕御持弓頭

千三百石、永見周防守、　千五百石、柘植五大夫、　千三百石、平岩若狹守、

御持筒頭

二千石、桑山志摩守、　五千石、大森三次郎、　五千石、松平半左衛門、　四千四百石、杉浦兵九郎、

〔安政六年武鑑〕御持弓頭　千五百石高

二千五百石、市橋傳七郎、　五百石、水野岩之丞、　五百石、柴田肥前守、

御持筒頭　千五百石高

五百石、松前三郎兵衛、　三百十五石、跡部熊太郎、　千百八十六石六斗、伊奈熊藏、　百五十俵、豊田藤之進、　九百俵、下曾根金三郎、

〔文久紀事六〕文久二年閏八月廿七日、周防守殿御渡、

御持弓頭　水野岩之丞　市橋傳七郎　内藤若狭守〇中略

右已來鐵砲組に被仰付候間、可被得其意候事、

〇按ズルニ、元治以後ノ武鑑ニ、持筒頭アリテ、持弓頭ナシ、蓋シ此時持弓頭三人ヲ悉ク鐵砲組頭ニ命ジタレバ、此ヨリ以後ハ、持弓頭ハ廢セラレテ、持筒頭ノミ殘リシナルベシ、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年八月五日、御持筒頭役名ヲ廢ス、

頭は勤仕並寄合、與力は銃隊、同心は小筒組へ割入、

與力同心

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

御持弓頭〇中略　與力十騎、同心五十五人ヅヽ、

御持筒頭〇中略　右同斷

〔吏徴御目見以下〕御持與力五十人　一組十人　現米八十石高　假抱入十人扶持　役上下、御抱場、　元和九年癸亥六月朔日始置

御持同心貳百七十五人　一組五十五人　三十俵三人扶持高　假抱入拾俵壹人扶持　御抱場

元和九年癸亥六月朔日始置

〔柳營年表秘錄 下當御代〕寛政十一己未三二十六

御持同心　小田又藏

右系譜調御用被仰付

西丸持之頭

〔柳營秘鑑 四〕諸役人員數并組支配

一御持筒頭　西丸壹人　　一御持弓頭　西丸壹人

〔職掌錄〕御持弓筒頭

西丸二員 弓筒各一

〔吏徴 上布衣以上〕西丸御持之頭二人　同上〇若年寄支配、菊之間南敷居外、千五百石高、　慶安三年庚寅九月三日始置

〔東職記聞 二〕監國君職

持弓鐵砲物頭二人　布衣

領人別持弓鐵砲組之與力十人同心五十人也、慶延略記曰、慶安三年九月、大猷院殿〇德川家光以朝比奈左近、粂松又四郎等二組被屬監國君〇家光世子家綱也、朝比奈氏領鐵砲組、粂松氏領弓組也、享保十年、有廟〇德川吉宗以神尾佐兵衞松平猪之助二組被屬監國君〇吉宗世子家重神尾氏領鐵砲組、松平氏領弓組、也、爾來連綿、而至今之監國君〇德川家重世子家治也、

〔大猷院殿御實紀 七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿〇德川家光世子家綱御方に附屬せらるゝ輩あり、〇中略持筒頭朝比奈左近良明、粂松又四郎正尾、〇中略そのまゝに付られ、〇下略

〔吏徴 下御目見以下〕西丸御持與力二十人　同上〇一組十人、現米八十石高、假抱入十人ヅヽ持、役上下、御抱場、

西丸御持同心百十人　同上〇一組五十五人、三拾俵三人扶持、高、假抱ヽ拾俵壹人扶持、御抱場、

古事類苑

官位部七十

徳川氏職員十九

先手頭

名稱

先手頭ハ、先手弓頭、先手鐵砲頭ノ二組ヲ併セ稱スル職名ニシテ、之ヲ分チ稱スル時ハ、御先弓頭、御先筒頭トモ云ヒ、又總御弓頭、總御鐵砲頭トモ云ヘリ、組毎ニ頭一人ヲ置キ、與力同心ヲ率ヰテ、江戸城下蓮池門、平川口下梅林、紅葉山下門、坂下門等ニ、交替勤番セシム、又一組ヲ以テ、火附盜賊改ニ充テ、冬季ニハ、特ニ他ノ組ヲシテ之ヲ補助セシム、其他將軍ノ出行ニ隨從シテ、其地ヲ警固シ、臨時ニ市中ヲ巡回シテ、非常ヲ警戒セシムル事アリ、組頭ハ、若年寄ノ支配ニ屬シ、初ハ役料ヲ給セシガ、後之ヲ廢シテ、千五百石高ト定ム、與力同心ノ數ハ、各組一樣ナラザレドモ、大抵一組ニ、與力十騎、同心五十人迄ヲ限度トス、與力ハ、八十石以上二百石以下ニシテ、同心ニハ、三十俵二人扶持ヲ給ス、西丸ニモ亦弓二組、鐵砲四組アリテ、吹上門ニ勤番シ、組頭以下ノ待遇、本丸ニ同ジ、

此職ハ、寛永九年ニ弓十組、鐵砲十五組ト定メ、後漸ク增シテ、西丸附ヲ合セ、都テ三十四組アリシガ、慶應二年ニ至リ、遂ニ之ヲ廢セリ、

〔藩翰譜五久世〕大和守藤原廣之は、三左衛門廣宣が三男也、〇中略初め三四郎と申せし時、生年十六歲、坂部三十郎廣勝十五歲、二人共に打連て軍し、能き敵討て、共に高名せしよりこのかた、武名の譽れ當世に顯はれ、三四三十と呼れしは彼等二人が事なり、〇中略其後二人共に所領の地加へられ

職員
職掌

二千石づゝ給て、各五千石なり、二人又同く馬武者十騎、歩兵十八人を附らる、總御鐵砲頭といふ、廣宣が嫡男三四郎某、父が闕に補せられて御先手の事を承る、則ち總御鐵砲頭なり

〔延寶三年江戸鑑〕總御鐵砲頭

〔貞享三年武鑑〕總御弓頭

〔寶永二年武鑑〕御先手御弓頭　御先手御鐵砲頭

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一御先手弓頭御本丸八人　一御先筒頭御本丸廿人

〔職掌錄〕御先手

當職廿八員弓八、砲廿、

〔東職記聞二〕先手弓鐵砲物頭二十八人

領人別與力同心也、平日以順守衛金城中之諸門也、二十九組中、九組弓、二十組鐵砲也、

〔有司勤仕錄〕御先手

一御弓九組、御鐵砲二十組有り、與力同心之數不同なり、○中略

一内一組は、盜賊改之加役故、勤番無之、

〔南留別志三〕弓鐵砲の頭を物頭といふを、學問だてする人の者頭とかくは僻事なり、物前、物わかれ、物ぎは、物ばやきなど、皆武といふ事を物といふなり、物部より出てたる詞なり、

〔南留別志の辨〕物頭はもの丶ぐの頭なり、もの丶具とは、こゝにては武器なれど、これのみいふ詞にあらず、さしあて丶云ふ言葉に、ものたべ、ものへまかる、もの事、物見といふたぐひ、盡しがたし、物部より出たるとは、迷ひたるなり、

〔有司勤仕錄〕御先手

一御番所は、蓮池、平川、下梅林、紅葉山下、坂下御門、此五ヶ所を替り〳〵相勤る、尤頭泊番有之、

一蓮池當番之節は、四ッ時分に御番所出、夫々御目付部屋江行、殿中向之御沙汰を聞合、違變之儀在之時は、殘り四ヶ所江觸る、夫々段々明日之當番江傳達之、明日又蓮池之御番如斯なり、○中略

一昔は山里御番所も勤之、今は山里は伊賀之組勤之、

一上野御成之節、仁王門、凌雲院前、於覺成院前等覺院前、屏風坂、御本坊、表御門、裏御門、此七ヶ所、當組々固之、

一増上寺御成之節に、方丈庫裏門、切通、山之內、垂跡門、此四ヶ所固之、

〔明良帯録〕御先手頭

此場は武勇譽れある人の勤場也、隊卒を率ひ、非常を守る、兩山御規式御成の節固め、御城內御門、蓮池、寺澤、坂下、獅々口、紅葉山下等、火附盗賊加役等を勤るも武勇ゆへ也、大名衆よりかぎを賴れ、諸願諸進達を取次も、武勇にして御支配方の前にても口をきゝ、見事に埒明安し、かぎとは殿中の事を嗅出し告るゆへ也、古は御先手何十人の頭といふて、誰々は武勇の譽れ有て、何十人の頭と成りしと譽めたり、山田十大夫は三十人の頭たり、中山勘ヶ由は四十人の頭たり、其人の器量による、不時捕物にゆくも武勇故なり、

〔柳營秘鑑三〕御城內外御門番所勤仕之覺

一中御門　御先手頭并與力同心○中略

一平川口御門　御先手頭并與力同心

一下梅林　御先手頭并與力同心○中略

一坂下御門　御先手頭并與力同心

一紅葉山下御門　御先手頭并與力同心○中略

一山里　御先手頭并與力同心〇中略

一蓮池御門　御先手頭并與力同心〇中略

一三丸喰違　御先手持同心〇中略

一下埋御門　御先手持同心

一新御門　御先手

〔嚴有院殿御實紀十四〕明暦三年十月十九日、持弓持筒、先手、弓鐵砲頭を召て、今より後、火災の時は、寄場へはまからず、四隊づゝ、火災の地にまかり、往來の人を查檢し、いぶかしき者は往來せしむべからず、されど賤民艱困せざらんやうはからふべしと仰出さる、

〔嚴有院殿御實紀二十三〕寛文二年二月七日、先手頭、火災の地に赴く事をゆるされて、平川勤番を命せらる、

〔敎令類纂初集三十九〕寶永六己丑年三月九日

御先手頭へ

以前之通、御本丸中之御門相勤可被申候、西丸御門、御持勤番相止候間、中仕切御門より出入に而相勤可被申候、

右は三月九日、頭々江老中若年寄申渡之〇又見文昭院殿御實紀

〔敎令類纂初集三十九〕寶永七庚寅年四月十五日

御先手〇中略

御番詰切候儀、御免被成候間、前々之通可被勤候、泊番之儀は、七半時ゟ可有出勤候、

〔德川禁令考二十八巡街使〕天明七未年五月

捕者町奉行江引渡方御書付

町奉行江

御先手　長谷川平藏　松平庄右衛門〇以下八人姓名略

町方騒々敷趣相聞候ニ付、組之者召連、今日より相廻、あばれ候ものども召捕、町奉行江可被相渡候、尤手にあまり候ハヾ、切捨に致シ候而も不苦候間、其趣可被心得候、

右之通申渡候間、其方共にも、其趣可被相心得候、

五月廿三日

寛政六亥年十月

火之廻り之儀御書付

大目付江

御先手并御番衆廻り之節、屋敷々々町方共に、火之廻り、等閑成ケ所も有之歟、又は辻番所自身番等、怠り之様子も相見候場所は、組合は頭取、町方は町役人江申断、其段相居候様、廻り方之面々江申渡置候間、為心得相達候、彌無油断火之元念を入可被申候、

右之趣可被相觸候

十月

年月闕

捕者引渡方之儀ニ付被仰渡

御成之節、御先手見廻、捕者引渡方之儀ニ付御書付之事、

一遠御成之節、見廻被仰渡、相廻り候砌、見廻場之内に而、怪敷もの召捕候得ば、町奉行江可渡心得に候得共、可相成候ハヾ、以來火附盜賊改江相渡シ申度旨、御先手より申上候處、町奉行火附盜賊改之内、時宜次第、弁利之方江可相渡旨被仰渡候事、

〔大猷院殿御實紀四〕寛永二年四月八日、先手頭阿部四郎五郎正之、府内宅地查檢命せらる、

〔慶寛諸條令上〕萬部經御佛事ニ付參詣之事

一御弓鐵砲頭、二人宛參詣いたし可被罷歸、但万部中、四五度より多ハ無用之事、

慶安五年辰四月七日

〔昭德院實紀九〕萬延元年十一月朔日

御先手　黑澤正助○中略

和宮御方御緣組幷御下向御用、被仰付之、

〔窻の須佐美追加下〕寛永の後の頃なるべし、增上寺にて法會ありし時、小栗又市郎○先手頭の組の立ならびたる陣列、少し出張りければ、伊豆守信綱朝臣通るとて、少し跡へ退くべしと命ぜられける、與力の士言けるは、此事を聞入なば、小栗殿の心に叶まじとて、其儘して居つゝ、かの事すみてひそかに小栗氏に申ければ、いしくも他の下知に從はざりつる、若し從ならば、ゆるすまじきにと云て、宿所へ文をつかはし、其身は朝臣の許に往て、見參に入たきよし申されけるに、いまだ歸宅なかりしかば、さらば待奉るべきとて、亭へ通りて居られけり、かくて朝臣歸られければ、其よしを申に、朝臣うち笑、さ有なんとて、直にあひて、よくこそ來られたれ、先には組の面々へ指南して候へ、ふと思ひ寄て卒爾なる事にこそ候つれ、あやまり候ぞ、心に掛られなと有ければ、さの仰にて候得ば、事濟候、某が預りたる組の事を、御方なればとて、御いろひ有べき事に候はず、夫故其由を承はるべきとて參たるに候、御會釋の上は、申樣もなく候と有しかば、今朝よりかの勤にさびしく有べし、常飯參せんとて、さまゝゝもてなし、數獻の上、是は上より給たる木なり、分贈んとて、沈を一ふし贈られけり、かゝるうちに小栗の陪從輿を持來り、死體を受取に參候と云入けり、朝臣の聰明故にこそ、事なくて止ける、其世の武士の剛强、大やう此たぐひなりしとぞ、

待遇
傳議

此又市郎坂下御門當番たりし日、品川邊へ御成有て、只今還御なると御先拂來て云ども御門を不レ開して、御門前にうづくまり居たるに、御輿いたりて、又市々々と御詞有し時、御門を開しとかや、總じて其頃は大概此格にて有しにや、春日局の何事にか、夜る登城せんとて平川口へ行かゝり、春日なるぞ通し候へと有ければ、天照大神にても夜は通す事ならざるとて開ざりしかば、是非なく歸り、翌日登城して、涙を流し語られけるに、さも有べしと上意にて、御感のけしきなりければ、其沙汰もなかりけり、されば宇都宮より急に還御有し折も、夜の事なればたやすく通し不レ奉しを、却て御感有しとかや、昔は武備を大切に守りし國風、おのづから如レ此なりしとぞ、

〔東職記聞 二〕先手弓鐵砲物頭二十八人　布衣

〔吏徵 上 布衣以上〕御先手廿八人　若年寄支配　躑躅間　千五百石高

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕御先手 〇中略 寶永七年庚寅六月十二日、向後御目付之上に可二能出一旨達レ之、

〔青標紙 三編〕一御先手は、諸大名之名代をつとめ、取持引まはしをするゆへ、何右衞門、何兵衞の名よりも、諸大夫何の守と叙爵し居れば、格別大名之賴みも多くして都合よき事なり、ゆへに戸塚豐後守如きは、小普請支配ゟ御先手に成たれば、無二此上一左遷なれども、豐後守の名あるゆへに、大名之總賴に成り、大に勝手之爲には都合よかりしと云、乍レ去片箱もがれて、若年寄支配に下り、千五百俵の御足高あがりたり、

片箱もがるゝと云ふ事は、下馬こしかけ供まちの通言なれども、世去り時うつりては、知るものなかるべし、

〔慶寬諸條令 下〕御役料之覺

五百俵　御先弓、御先鐵砲、

寬文五年巳五月

沿革
任免

〔憲廟實錄 四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、○中略弓頭鐵砲頭、○中略五百俵、

〔常憲院殿御實紀 二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略先手頭千五百石以下は三百俵、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保八卯年六月

千五百石ゟ內は、千五百石之高に可被成下候、

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕御先手 總御弓御鐵砲頭　寛永九年壬申六月廿五日、弓十組、砲十五組、合二十五組に定む、後九組を增し、當時兩丸勤合て三十四組也、

〔東職記聞 二〕先手弓鐵砲物頭二十八人

集成曰、天正十八年二月、小田原役、弓鐵砲物頭、從事者十二人、所謂大久保次左衞門忠佐、渡邊忠右衞門守綱、日下部兵右衞門定好、高木九助廣正、成瀨吉左衞門正一、服部半藏正成、森川金右衞門氏俊、島田次兵衞重次、水野太郎作淸久、神谷彌五郎宗弘、渡邊彌之助光、加藤喜助正次等也、又曰、元和元年、大坂役、弓鐵砲物頭、供奉台德院殿○德川秀忠者十一人、近藤登之助秀用、久永源兵衞重賴、本多太郎左衞門、山角又兵衞正勝、加藤喜助正次、森川金右衞門氏信、細井金兵衞勝吉、駒木根右近利政、兼松源兵衞正成、倉橋內匠久次等也、代々記曰、元和三年、割倉橋內匠組而爲二組、以太田善大夫本多太郎左衞門等兩人被補之、弓組、故九組、爾來十組也、寛永十七年十月、割三枝勘解由組而爲二組、以田中一郎右衞門大久保甚右衞門等兩人被補之、正保元年十二月、割渡邊彌之助組而爲二組、以高田庄左衞門北條新藏等兩人被補之、同四年九月、割齋藤佐渡守組而爲二組、以前田五左衞門本多大膳等兩人被補之、慶安元年十月、割榊原飛驒守組而爲二組、以杉浦忠左衞門服部平吉等兩人被補之也、鐵砲、故二十組、爾來二十四組、弓鐵砲、總三十四組也、

與力同心

〔昭德院實紀二十五〕文久二年十二月十八日

御先手江

火附盜賊改方之儀、今度御役名ニ被仰付、土方八十郎跡役は不被仰付候間、右跡一組、減切ニ可被心得候、且又八十郎只今迄之組與力同心、幷八十郎組江是迄外組ゟ組助、增組助相勤居候者共も、其儘火附盜賊改組ニ被仰付候間、其段申渡、名前可被申聞候、〇下略

〇按ズルニ、土方八十郎ハ先手頭ニシテ、其組衆ヲ率ヰテ火附盜賊改ニ出役タリシナリ、火附盜賊改ノ篇、待遇俸祿ノ條ヲ參看スベシ、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年八月五日、御先手役名ヲ廢ス、

頭與力同心、右同斷、〇頭は勤仕並寄合、與力は銃隊、同心は小筒組へ割入、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一御先手弓頭　與力六騎ゟ十騎迄、同心三十人ゟ四十人も有、　一御先筒頭　與力同心、御先弓同斷、內三組十騎五十人、

〔憲敎類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別幷御役料

御弓頭〇中略　與力五六騎ゟ十騎迄、同心三十人ゟ五十人迄、　御鐵砲頭〇中略　右同斷

〔營中御日記一〕寬永元年十月十一日、山田十大夫御先手頭被仰付、與力十人同心三十人御預之、

〔大猷院殿御實紀二十二〕寬永十年正月七日、諸番士、幷步行士、先手の與力同心等、宿直の順番を命せらる、

〔嚴有院殿御實紀二十五〕寬文三年正月廿一日、弓鐵砲の同心、人數不足により、增加して各隊三十人づゝたらしめらる、

〔有德院殿御實紀八〕享保四年五月十六日、先手頭へ仰下さるゝは、前の町奉行坪內能登守定鑑に

屬せし與力同心、中山出雲守時春、大岡越前守忠相が隷下につけられし餘りを先手の各隊に入らる、よて官長心のまゝにわかち入べし、しばし吏員增とも、後闕る時はもとの定額に復すべしとなり、

〔吏徴御目見以下下〕御先手與力　一組不同　給知貳百石至現米八十石高　給知取二組不殘外八人一組四人、一組壹人、一組三人、　假抱入十人扶持　役上下、御抱場、

御先手同心九百三十人　一組三十人至五十人　三拾俵貳人扶持高　假抱入拾俵一人扶持

御抱場

〔憲敎類典御番二ノ九〕元祿四辛未年四月廿六日

覺

御先手與力同心〇中略

右地方知行取來候ものども、少給に而は百姓困窮いたし候沙汰有之ニ付而、今度遂吟味候處、先規より譯有之、地方拜領之筋目も有之候、依之前々之通、領地被下置候間、彌百姓困窮不仕、領知作法能樣ニ可申付之よし、右頭中へ可被相達候、以上、

四月廿六日

〔天明集成絲綸錄三十九〕明和八卯年二月

御先手　奥田山城守組與力拾人

御勘定奉行江

右知行所取扱不案內に而難儀ニ付、願之通、壹人前現米八拾石宛、御藏米に引替被下之旨得其意、向々可被談候、

〔大猷院殿御實紀二十〕寬永九年八月十八日、先手頭杉浦內藏允正友、內田平左衞門正世が隊下の

同心に、宅地を下さる、

〔吏徵上布衣以上〕西丸御先手六人○中略 弓二組、砲四組、

〔有司勤仕録〕御先手

西丸附六組是は吹上御番所壹ヶ所勤之 西丸當番、西丸吹上御門、

〔吏徵別録上布衣以上〕御先手○中略

〔吏徵上布衣以上〕西丸御先手 同上○若年寄支配、躑躅間、千五百石高、中略、 慶安三年庚寅九月三日始置

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月三日、大納言殿○德川家綱世子御方に附屬せらる、輩あり、○中略先手頭阿部四郎五郎正繼、島田五郎兵衛直次、河野權右衛門通重、玉虫八左衛門宗茂、高木忠右衛門爲信は、そのまゝに付られ、○下略

〔東職記聞二〕監國君職

先手弓鐵砲物頭六人 布衣

領人別弓鐵砲組之與力同心也、慶延略記曰、慶安三年九月、大猷院殿○德川家光以先手玉虫八左衛門、高木忠右衛門、河野權右衛門、島田五郎兵衛、阿部四郎五郎等五組被屬監國君○家綱世子也、玉虫高木河野三氏領鐵砲組、島田阿部二氏領弓組也、享保十年、有德院殿○德川吉宗以伏屋備前守、小笠原七右衛門、金田總八郎、赤井信濃守、井上左門等六組被屬監國君○吉宗世子家重伏屋小笠原二氏領弓組、金田赤井井上口口四氏領鐵砲組也、爾來連綿、至今之監國君○家重世子家治也、

〔吏徵下御目見以下〕西丸御先手與力 同上○一組不同、給知貳百石至現米八十石高、給知取二組不殘、外入人、一組一人、一組四人、一組三人、假抱入十人扶持、役上下、御抱揚、

西丸御先手同心百八十人 同上○三拾俵貳人扶持高、假抱入拾俵一人扶持、御抱揚、 一組三十人 慶安三年庚寅九月三日始置

慶安三年庚寅九月三日始置

〔大猷院殿御實紀七十八〕慶安三年九月八日、この日西城に、○中略先手弓鐵砲同心廿四人附らる、

火附盜賊改

火附盜賊改ハ、江戸市中ヲ巡廻シテ、火災ヲ豫防シ、盜賊ヲ逮捕シ、博徒ヲ考察スル職ナリ、寛文六年ニ、始テ此職ヲ置キ、元祿以前ハ、持之頭ト先手頭トヨリ、各〻一組ヅヽ出役シテ此事ニ從ヒシガ、元祿十二年ニ之ヲ廢シ、同十五年ニ至リ、再ビ此職ヲ置キテ、先手頭ノミノ出役ト爲シ、先手頭一人ヅヽ、其組ノ與力同心ヲ率ヰテ、專ヲ此職ヲ行フ、之ヲ本役ト云フ、又十月ヨリ翌年三月ニ至ル迄、六ケ月ノ間、特ニ他ノ先手頭一組ヲシテ、本役ノ職ヲ補助セシム、之ヲ加役ト云フ、本役加役、共ニ役扶持ヲ給セリ、然ルニ文久二年以後ハ、先手頭ノ出役ヲ廢シテ、獨立ノ職名ト爲シ、先手頭ト等シク、若年寄ノ支配ニ屬シ、共ニ千五百石高ナレドモ、席順ハ、先手頭ノ上ニ列セリ、後又老中ノ支配ト爲シ、役扶持ヲモ增シテ、益〻其資格ヲ貴クセシガ、慶應二年ニ至リ、遂ニ此職ヲ廢セリ、

名稱

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一盜賊火方役　貳人　御先手ゟ兼役

〔天保十一年武鑑〕盜賊并火附御改　御先手ヨリ御勤

〔嘉永三年武鑑〕盜賊并火方御改　御先手ヨリ御勤

〔元治元年武鑑〕火附盜賊御改

大久保筑後守　文久三亥九月ヨリ

職員職掌

〔東徵附錄權職〕火附盜賊改一人　御先手兼役

○按ズルニ、火附盜賊改ハ、先手頭ノ出役ナリシガ、文久二年十二月ヨリ、獨立ノ職名トナレリ、待遇俸祿ノ條ヲ參看スヘシ、

〔東職記聞 二〕盜賊改二人

先手物頭兼職、而專掌盜賊追捕事也、一人稱本役、限以三年也、一人稱假役、自十月至三月終之也、

〔青標紙 三編〕一御先手之内より壹人出役して、火附盜賊改をつとむる事なり、これを俗に加役と云、然れどもこれは唱違ニ而、兩人ある時は、其壹人をさして加役と云ふ事也、松浦忠右衛門、矢部彦五郎などの時、この唱ある事ニ而、松浦は本職にて、矢部は加役なり、此職にて其任に當り、功績ありしは、中山勘ヶ由、長谷川平藏、矢部の三人なり、

〔德川禁令考 二十八 捕盜使〕元文四未年七月廿一日

吟味之仕形御仕置附之儀ニ付御書付

松平伊豆守殿御渡　別所孫右衛門 ○火附盜賊改

火附盜賊改方ニ而、吟味之仕形、御仕置附共ニ、町奉行所ニ而、取扱候通可心得候、拷問之事ハ、別而念入、町奉行所に而、取扱候之通に可仕候、右之趣、町奉行中江承合、無相違樣可仕候、併差當奉行所之通に難成品も候はゞ、老中江可相窺候、

右之通相心得、向後跡役被仰付候者江も申傳、當分加役被仰付候者江も可申傳候、

〔德川禁令考 二十八 捕盜使〕明和八卯年八月

加役方規格相極置可申旨御書付

右近將監殿御渡　火附盜賊改江

加役相勤候者、唯今迄聢と致シ候申送等も無之、先々取計候儀及承、又は加役相勤候者、時々存寄をも差加取計候由、依之總而取計之趣、區々に相聞へ候、以來ハ致來候儀に而も、如何と存付

候儀ハ相改、不相知儀ハ、役所取計をも承合、難決儀も候ハヽ相伺、とくと取締候規格、相極置可被申候、

一四人共之内、急病などに而養生等爲致候節、或は無據譯に而品に寄候節、近所之非人小屋江預來候由、向後牢溜之外、小屋預に致シ候儀、可爲無用候、

一四人共差口可致旨申候得バ、組之者差添、捕方に差出、差口致シ候得バ、輕罪之者ハ無構差免、重罪之者ハ御仕置相伺來候由、都而目明と申儀ハ無之筈に候得共、目明岡引とハ意味違候と存、右之通取計來候由、同類白狀致シ候節、召捕候儀ハ可有之事に候得共、都而囚人共、奉公ニ差口可致旨申候節、捕方に差出、差口奉公致シ候得バ差免候段、畢竟名目ハ違候得共、目明同前之趣に紛敷候間、向後同類白狀致シ候節召捕候儀ハ、是又可爲無用候、

右之通相心得、後々被仰付候加役江も、玄かと申送、以來取計區々に不相成候樣、可被相心得候、

〔德川禁令考二十八捕盜使〕安永二巳年十二月二日

江戸中持場相極候ニ付奉伺候書付

伺之通被仰渡、御普請小屋場之儀ハ、最寄之方、兩人ニ而申合、持切ニ可仕旨被仰渡奉畏候、

赤井越前守　庄田小左衛門〇二人並火附盜賊改

江戸中廻り場所、兩御加役、半分宛相極相廻り可申旨、右京大夫殿被仰渡ニ付、右持場、丸之内ハ相除、場所相極、左之通奉窺候、

日本橋より北　赤井越前守持場

神田　濱町　矢ノ倉　淺草　下谷　本郷　谷中　駒込　巣鴨　大塚　雜司ヶ谷　大久保

右最寄

日本橋より南　庄田小左衛門持場

通町筋　八丁堀　鐵砲洲　築地　芝　三田　目黒　麻布　赤坂　青山　澀谷　麴町　深川　本所　番町

右最寄

一只今迄之通、江戶中廻り候心得に而、持場相分候分、別而心得相廻候樣可仕候、尤怪敷者見請候歟、又ハ心當之者有之候節ハ、私共井組之者、相互ニ持場違候所に而も召捕可申候、持場違に而見請、或ハ心當之者有之候節たり共、召捕可申候樣相極〇相極上、恐脫二不字、候而ハ、差支可申奉存候、

一右之通持場相分候儀に御座候得共、御普請御小屋廻り之儀ハ、只今迄之通、兩御加役より申合、相廻候樣可仕哉、又ハ御普請御小屋最寄之兩人ニ而申合、持切ニ仕、相廻り可申候哉、左候得バ、同筋ハ晝夜度々相廻り申候、

當時御普請小屋場見廻り場所

神田橋外　一橋外　昌平橋外　上野　櫻田御用屋敷　書替所　御厩二ヶ所　溜池より火消屋敷

右之通奉伺候

巳十一月　　庄田小左衛門　赤井越前守

同年安永二巳年十一月二日、松平右京大夫殿、右伺書に添、被仰渡候御書付、

書面伺之通相心得、御普請小屋場之儀ハ、最寄之方兩人申合、持切致シ相廻候方たるべく候、

〔德川禁令考二十八捕盜使〕寛政元酉年正月廿三日

火附盜賊改として廻り候節之儀に付御書付

越中守殿御渡　　火附盜賊改江

火附盜賊改として、組之者廻り之節、於途中博奕致シ候者有之候ハヾ、直に召捕候而、町奉行江

引渡可ㇾ申候、

一自身相廻候節、町之木戸矢來等、夜中不〆り之場所見請候ハヽ、番人江心付可ㇾ被ㇾ申候、其上にも不〆り成趣に候ハヽ、町奉行江其旨可ㇾ被ㇾ相達ㇾ候、尤組之者計、廻り之節ハ無用ニ可ㇾ被ㇾ致候、

〔內安錄〕一火附盜賊改といふ役は、假令ば町奉行、勘定奉行は大芝居、加役は乞食芝居と人口にいひ傳へたれど、夫よりも猶いかゞと思ふ事は、忍び廻りの自身召捕を、組にて御馬先と唱へ、立派な名目にてあれど、何日には忍廻りをすると組へ達せば、組のもの、二三日も前より五里六里先にて召捕しものを、その日の頭の休息する自身番屋へ朝よりくゝシ置、組の吟味するもあり、又組にて口口其ものを御馬先捕と唱へ、自身捕の取扱にする也、魚獵御成の前日、取溜鶴雉鶉、御成の鳥と同じ取扱に、卑賤なりとも人間を比するは本意なき樣也、勝手入用の爲に、在方捕候ものをかせぎ、組のものは御褒美の爲に火附をあらそふは、猶更本意なし、ゑかいふは、當時の小量をのみいふことにて、吉原、芝居、角力、年の市、花火のあげ初など、すべて繁華の所所へ忍び步行とは、今の世には迚も出來ぬ業にて、むかし人の大量甚感せり、

大つごもりには、必ず夜中步行て、深川或は高輪にて初日を拜し宿へ戾、御禮には二日登營する古例也、按に加役は無罪の非人を屋敷內へ呼置、晝夜罪人を扱役なれば、觸穢の憚、元日には登營せぬことなるべし、

〔窓の須佐美二〕平岩若狹守、元祿の頃、京にて御所附なりしが、のちに江戶へ來り、御先手にて盜賊改の役になりつ、所司代の參勤ありし時來謁し、四方山の物がたり有て、京都と違ひ數萬の人なれば、罪人も多かるべし、然らば死罪も多からんと問れしかば、仰の如く罪人多く候、但死刑は存外少く候と答られしかば、それは大に善事なり、足下の死刑を定めらるゝ法は如何、曰く、元より御大法の通りを以て、三奉行へも相談して決定いたし候、但死刑に極りたる前日、ま

た呼出し、汝が罪死刑をゆるしがたし、然れどもこの上にも申開くべき筋あらば、隨分かんがへ、そのよしをいへと云聞せ、百に一ツも申披きこれ有て、ゆるすことあり、とかく極りたるは、ふたゝびその趣を云聞せ、此上は是非なし、汝覺悟せよと申聞せ、仰の趣得心仕り、今更誤り入、死刑に處せられて理り至極、存寄無ㇾ之旨を申たる上にて罪に處せられ候と語られける、

〔窻の須佐美二〕延享年中、藤掛伊織、盜賊改役加役にて、少もあやしきものは、捕へて糺明し刑せられしかば、惡黨大概薄くなりぬる程なり、もとより法令嚴重にして、火事頭巾のごとくなるものを、貴賤男女どもにかぎらず、かぶりてあふれありきしなど制してやみしが、諸事に刻薄にて、罪人多きとて、下賤のものはにくみあへり、その事上に達しけるか、兼役不時に免されけり、その前夜、當時世にいへるきほひ組など云もの數百人來り、屋敷をとり卷、大にのゝしり、塀をこぼち軒をやぶりさん〴〵に打あらしぬ、藤掛氏不勢なれば、同列に乞て人數多く來り防ぎけるほどに、やう〳〵に退ぬとぞ、

〔螢の焼藻の記下〕寛政七年五月、加役(○火附盜賊改)つとめ居たりし長谷川平藏、重病にかゝりて危かりければ、翁(○森山孝盛)を召て捜捕の役を被ㇾ命ぬ、彼長谷川小ざかしき生質にて、八年の間、加役勤るうち、樣々の計をめぐらしけり、たとへば加役組は、御先手諸組より増人をとることゆへに、其増人に來りたるもの共に、長谷川が紋付たる高提燈を渡し置たり、若最寄々々に出火ある時は、其高提燈をともして、速に火事場に押立置せたり、されば愚なるものゝ目には、はや長谷川の出馬せられたると驚き思するためなり、(○中略)八年が間、樣々の奇計をめぐらしたるにより、世上にては口々に長谷川がことを批判したりけり、元來御制禁の目あかし岡引といふものを専らつかひたるゆへに、差掛りたる大盜強盜なんどは、忽ッ召捕て手柄を顯したれども、世上は却て穩かならず、大火も年々不ㇾ絶けり、されば本を正しくして末をとゝのふることなく、

萬づに付て彼生質を行ひたり、冬ごとに半年、加役を被仰付に、勤方の荒増を敎傳ふることなければ、太田運八(後志摩守)が加役被仰付たる時、大に難義したることは、たれも〳〵よく知たることなり、然るに翁思ひよらず搜捕の職を命せられければ、つく〴〵と考ふるに、世上の不正を改め、刑罰を行ひ、人の生死を決斷する役目なれば、人を捕ふよりは、先己いかにも正しからざれば他を制することかなふべからずと思ひて、先惡黨を捕ふることは第二にして、我組子の者どもの、不正のふるまひなからんことをのみ、日夜嚴しく禁めて、いさゝかも宜しからざる趣あれば、忽其人を省て、他組より別人を入替る樣にはからひたり、拐岡引目明しをかたく禁じて、色々所存のあらましを執政達に申述たりき、さらば召捕ものは少なかるべきに、日々に罪につくもの多くして、彼奇計をめぐらしたる長谷川が手並に少しも替ることなかりけり、○中略其頃坂部能登守が町奉行に成たる砌にて、涯分手並を顯すべき志にて、色々手だてをめぐらしけれ共、何れも町奉行の手にはかけず、加役方より申上たり、殊更長谷川の時のごとく、大火もなかりけり、ある時柴野彥助物語に、備前守高久朝臣に逢て、足下の加役勤むることを申出たれば、長谷川は覇道をもて加役を勤たり、森山は王道をもて勤むべきものなりと高久朝臣の申されたりとて、栗山先生の語りて笑れ侍りき、されば長谷川より送りたる加役勤方の扣留帳と云は一冊もなくて、御仕置伺帳の扣の昔より傳りたるをのみ引渡したり、さればこそ太田もこまりたるらめ、誰にもあれ御役勤る者の、さし當りて公務の滯りある樣になしおくは、忠に於て當らず、義に於て有べきこと共思はれず、去間毎日そこらめぐりありきながら、初め召れて加役被仰付たるよりのこと共、委敷書留て懷帳となし、半年勤の方は、元來書留なければ、太田が扣置る帳をもて一部となし、半年勤の者被仰付時は、速に貸遣すことに定ぬ、又加役代々記なかりければ、是をも求め寫して、序を加へて目錄を添て、

待遇俸祿

役所道具の類、是迄聊も付渡りと云物なし、よりて手鎖、積石、罪人に抱する石なり机、硯、屏風類まで、あらたにこしらへて、永く此役勤る人の滞りなからん様に定置ぬ、後來代々傳へ侍るべき様になし置たり、今も加役勤る人は、彼品をもて公務を辨ずる成べし、然るに翌年の五月、某は何の故なく加役御免ありて、鹽入大三郎に被仰付たり、組の者共、精勤したるかひもなくて、か丶る仕合なれば、口をしがりてさはげども甲斐ぞなき、何とも面皮にか丶る様に覺えたれども、捜捕勤中、露ばかりのあやまちも覺えず、御目付つとめ居たりし森川主膳が、翁が立廻りをみて、百年ばかり加役勤たる様なりとて笑ひたりしほどなりけり、召仕ふものなんど、餘りのことに、あなたこなた內々聞合てみれども、聊障ることもなし、彼鹽入が內便につけて加役乞たるによれるなりけり、岩本石見守正倫于時御小納戸頭取、後御先手、は、翁と無二の交にて、殊に近藤吉左衛門奥御右筆組頭なりにちなみありければ、森山はいかなることにて加役御免有たるやらん、心許なきことよとて問たりしに、近藤も、さればにてこそ候へ、御不審尤なる事なり、去ながら何も森山にさ丶はりのなし、只彼大男に加役させて見給はんの爲計なりとて笑ひたりとて、石州の心入に語り申侍りけり、

〔吏徵附錄職〕火附盜賊改略○中　老中支配　御役扶持六十人扶持

〔有章院殿御實紀十五〕正德六年四月五日、先手頭逸見源兵衛義武、加役命せられたるをもて、金子五十兩下され、費用に充らる、

〔吏徵附錄權職〕火附盜賊改略○中　同○享保四年己亥二月十三日、御役扶持四十人扶持、幷與力同心江二百人扶持を賜ふ、

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下、役儀勤之內、場所定高幷役扶持、

御定高不ㇾ及分　　火消盜賊改

四拾人扶持

〔安政六年武鑑〕若年寄支配 盜賊并火附御改

御役扶持四十人フチ　外ニ廿人フチ

〔昭德院實紀二十五〕文久二年十二月十八日

土方八十郎〇火附盜賊改

大久保雄之助〇火附盜賊改加役

火附盜賊改之儀、今度御役名に被ㇾ仰付候ニ付、場所高千五百石、御役扶持六拾人扶持ツヽ、被ㇾ下、布衣場所、若年寄支配、席之儀は、御先手之上たるべく候、

〔元治元年武鑑〕老中支配 火附盜賊御改　千五百石　御役扶持百人扶持

〔慶應三年武鑑〕老中支配 火附盜賊御改　御役扶持百人扶持　千五百石高

〇按ズルニ、先手頭ハ若年寄ノ支配ナレバ、其出役タル火附盜賊改ノ、若年寄ノ支配タルベキハ勿論ニテ、文久以前ノ武鑑、皆然ラザルハナシ、而シテ文久二年ニ、專務ノ職名トナリシ時モ、猶ホ若年寄ノ支配タリシコトハ、昭德院實紀ノ文ニテ明ナリ、然ルニ元治元年以後ノ武鑑ニハ、之ヲ老中ノ支配トシ、役扶持モ百人扶持ト爲セリ、サレバ文久ノ改正以後、更ニ其所屬ヲ改メ、役扶持ヲモ增加セシモノニテ、上ニ引ケル吏徵附錄ニ、老中支配トセルモ、此改正ニ由リテ記シヽモノナルベシ、

役宅

〔續泰平年表〕天保十四年、此年清水御門外、內藤傳十郎屋敷跡江火附盜賊改御役宅出來、

〔德川禁令考二十八捕盜使〕假牢白洲訴所等取建之覺〇火附盜賊改森山孝盛書留

一假牢誥小屋ト云

沿革
任免

九尺に三間四方程無之候而ハ、用弁致兼候、此内非人詰番居候所ハ、別ニ仕切、尤板はめ丈夫に申付候、

一白洲
貳間に三間程も無之候而ハ、相成不申候、上之間四疊敷、三尺之板椽うすべり敷、下ハ壹間程筵敷、其上に而拷問等致候、外ハ砂利、

一長屋下腰懸
貳間に三尺之さしかけ

一内腰懸
壹間に貳間、屋根葺、薄縁敷、
是ハ出訴之者、或ハ引合之者、證文等認候所也、但門前出茶屋相願候者必有之候、右之願次第、右當人より御普請方江爲願、大腰懸に而も拵候得ベ、此方内腰懸ハ入不申候、尤此方よりも御普請奉行江懸合遣候而宜敷候、

一訴所
是ハ別に拵に不及、内玄關、又ハ居宅之模様により、有合之所を用候、

〔柳營年表秘錄上 嚴有院殿〕寛文六丙午、此年間御持御先手之内一人、盗賊改加役始る、　御先手　水野小左衛門

〔東職記聞二〕盗賊改二人
案盗賊改之事、始於嚴有院殿〇德川家綱之代歟、慶延略記曰、寛文三年八月、水野小左衛門守政、代大久保荒之助、領弓組也、同五年十一月、在盗賊常州下館而掠國民、將軍家命水野守政而被令追捕之、同十年十月、筧新兵衛正明代水野氏、尙帶盗賊改之事也、先是無所見、則始於嚴廟之代歟、

〔柳營年表秘錄 常憲院 中〕天和三癸亥正廿三、御持御先手之内ゟ、火方改加役始る、　御先手　中山勘解由

〔常憲院殿御實紀 四十〕元祿十二年十一月廿五日、持筒頭土屋市之丞正敬、盗賊考察をゆるされ、先手頭小倉半左衞門正仲、火賊考察をゆるさる、これより兩加職停廢せらる、

〔德川禁令考 二十八 捕盗使〕元祿十二卯年十二月

盗賊改火附改江訴出候類、向後ハ其支配々々江可申出事、

只今迄、盗賊改火附改方江訴出候類之儀、向後寺社領ハ、支配より寺社奉行江、町方ハ町奉行江、御領ハ御代官より御勘定奉行江可申達候、私領ハ地頭より支配方江可申出候、盗賊、ばくち打、火附等之儀、彌入念候樣に可被申渡候、以上、

〔常憲院殿御實紀 四十五〕元祿十五年四月九日、先手頭德山五兵衞重俊、盗賊考察を命せらる、この職廢する事四年にて、けふ復置せられしなり、

〔有章院殿御實紀 十一〕正德五年三月四日、先手頭堀田源右衞門通右、博徒考察を命せらる、

〔吏徵附錄 補職〕火付盗賊改〇中略　正德五年乙未三月四日、火方盗賊改打込勤、堀田源右衞門　享保三年戊戌十二月十二日、火附盗賊改博奕改、向後打込可相勤候、

〔昭德院實紀 二十五〕文久二年十二月十八日

土方八十郎 〇火附盗賊改

大久保雄之助 〇火附盗賊改加役

火附盗賊改之儀、今度御役名に被仰付候に付、〇下略、全文載在待遇條、俸祿條、

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年八月四日、火附盗賊改役名ヲ廢ス、

戸田與左衞門勤仕並寄合、組の者小筒組へ御割入れ、

〔吏徵附錄 權職〕火附盜賊改○中略 與力同心總御扶持貳百五十人扶持、 與力十騎、同心五十人、

〔元治元年武鑑〕火附盜賊御改 與力廿六騎、同心百廿人、○又見二慶應三年武鑑一

〔德川禁令考 二十八 捕盜使〕加役方役所井組支配江申渡等之事

定

一此度御加役被二仰付一候間、組中諸向見廻候節、以二御威光一相勤候儀、急度相愼可レ被二申候、若及二承候儀有レ之候ハヾ、相糺事に候間、此旨同心共江も御申渡、第一之事に候、○中略

一召連候同心同道之砌、跡江下り高咄等致候者有レ之候ハヾ、仲ヶ間井組頭江申聞、急度可レ被二申付一候、○中略

一武士屋敷、諸組屋敷、又ハ院內社內、圍有レ之內に惡黨者有レ之由被レ及レ聞候ハヾ、此方江被二申聞一差圖を被レ得候上、召捕候樣可レ被レ致候、理不盡に同心共差遣召捕候事、無用可レ被レ致候、○中略

一火事場口、別而無二油斷一見廻、火ゑめり候迄屹と被二待合一、其近所貳三丁程之內、同心貳三人被二召連一、怪敷者可レ被二心懸一候、其節火事場勤方、前々之通たるべき事、○中略

一堺町、葺屋町、木挽町、總而見物場所見廻候節、格別之儀有レ之候共、壹兩人も內江入、其外ハ待合、內ニ入候者罷出候迄待合、早速罷出候樣、急度同心共江可レ被二申渡一候事、○中略

一町方ニ而ゆすり者有レ之、若其場より召捕與候樣相賴候共、容易に罷越間敷候、町方に而不埒を申掛、致二難儀一候儀に候ハヾ、町奉行江可二申出一候、盜ヶ間敷筋相聞江候樣子、得と承糺候上に而召捕候儀ハ、其節之差略可レ有レ之事、

一武家に而盜賊捕候節、相對に而追放、門前に而捕候儀有レ之由前々及レ承候、左樣成儀ハ曾而有レ之間敷事に候、盜賊取候儀、申越候儀も有レ之候ハヾ、召捕候上、表立取扱有レ之事に候間、其趣可レ被二相心得一事、○中略

一御役筋之儀、親子兄弟たり共、他言有之間敷事、

一内緣を以、何事によらず相賴來候共、曾而請取申間敷候、此旨同心共江御申渡可有之事、

一仲ヶ間并同心共、常々不和之儀有之候共、御役之儀ニ付而ハ、無底意申合候儀、專一之事に候、

一武家方町內諸向江對シ、御役之威光を以、常々其意趣遺恨晴シ候儀、堅ク有之間敷事に候、

一祭禮神事、寺方其外賑ひ候場所、爲私徘徊有之間敷事、尤同心共にも急度申渡可被置候事、

一御役中、由緒懇意之方より、音信等堅ク申請間敷候、若後日承及候ハヾ、程過候共急度吟味を遂候間、兼而其段被相心得、尤同心共江も御申渡可被置候事、

一上野御山內に而、繩懸候事仕間敷候、若怪敷者ハ手を引、御山內を出候而繩懸可申候、

但三枚橋より內、仁王門はづれ、山下之邊に而繩懸可申候、池之端內外共、御山內之心得に而取計可被申候、

一增上寺山內、右之趣准じ可申候、

一水戸殿御屋敷前、水道橋より小石川御門外辻番所迄之內、繩懸候儀仕間敷候、尤腰繩も同樣之事に候、

一尾張殿紀伊殿御屋敷前通、是又前條に准じ可申候、

右之趣、急度可被申合候、御役中不相知候共、後日に至り及承候而も、其節承糺候間、此旨兼而左樣御心得、同心共江も御申渡可被置候事、

丑〇寬政五年　六月　　松田彥兵衞〇火附盜賊改

與力中

〔德川禁令考二十八捕盜使〕組手配　拾騎四拾人〇火附盜賊改森山孝盛書留

一役所詰與力　三人

二日詰切、一日休、三番泊り、

一雑物懸り同心　両人 但小屋頭之内、實體成者申付ル、

右隔日に詰切泊り、一切之雑物過料取調、雑物拂方、過料之在方遣方、帳面に記させ申候、

一書役同心　九人

右六人ヅヽ、詰切、三人ヅヽ一日休、三番泊り、

但事馴候得バ、書役進達方貳人、平貳人ヅヽ泊り、六人ヅヽ詰切ハ入不レ申候、

一頭附同心　三人

右貳人ヅヽ、二日詰切、一日休、二夜泊り、

但出火之節ハ、書役差紙使之内より増人両人、都合四人召連候、

一溜勘定掛り同心　壹人 但小頭之内、筆算相心得候者、

右定宅折々罷出、用事申聞候、御金請取、被レ下銭、其外中之口江罷越候儀等一切相勤、尤溜勘定之儀、善七松右衛門より書付爲二差出一、清書迄仕立上ル、

一差紙使同心　九人

右六人ヅヽ、二日詰切、一日休、書役同斷、乍レ然事馴候得バ四人程ヅヽ、泊り、六人泊りに及不レ申候、

總而書役四人、差紙使四人、頭附貳人、都合拾人泊り程に相成、間に合申候、右拾人江五人扶持遣シ、半扶持より同心共より持參、焼出シ申候、尤鹽噌薪香之物迄遣シ申候、最初ハ物入候得共、後ハ在方過料雑物代に而、大抵間に合申候、

一召捕方廻り方與力　七人 手附同心七人

右都合七手、桁を定相廻り候、

一廻り同心　六人

是ハ權門方御側衆御役人、其外所々より賴之宅江、毎日東西南北を分、相廻り候家々之門江手札差置せ候、右手札、先方より被戻候筈之事に而、廻り之懈怠出精相知申候、是又二日勤、一日休、

都合同心三拾七人、殘三人浮人ニ而、病氣差合等之間を補候、尤在方抔にも遣シ候節ハ、同心手附壹人に而ハ無心許候間、與力壹人江、手附同心兩人も遣候、

右之通

〔昭德院實紀二十五〕文久二年十二月十八日

土方八十郎〇火附盗賊改

大久保雄之助〇火附盗賊改加役

一八十郎、唯今迄之組與力同心、井八十郎組江、是まで御先手外組ゟ、組助、增組助、相勤居候者共も、是又其方共組被仰付候間、御用向差支無之樣申合、人數割合候樣可被致候、御宛行之儀共、只今迄之通被下、與力江十人扶持、同心江三人扶持ツヽ、役扶持被下候、尤御先手可被談候、

〔螢の燒藻の記下〕翁〇森山孝盛が本役〇火附盗賊改被仰付たる時、長谷川が跡を可勤由被仰渡たれば、本役には紛もなし、去間增人を願ひて、與力十騎同心五十人を賜るべしと申出けるに、氏敎朝臣の了簡にて、長谷川も初め十騎三十人にて勤たり、未だ足不足の所も明らかには知れまじきに、增人を願ふは見越と云ものなり、長谷川が例もあれば、十騎は申に任すべしと有により、翁も心ゆかず思ひながら、ともかくも高慮に任せらるべきことにこそ候へ、本役を相勤候に、わづか三十人ばかりの同心をもて、江戸中の火附盗賊を改め可申樣有べきことゝも不存候、乍然某が物好にて勤候ことにもなく候儘、御用心の行屆候はでも不苦候はゞ、如何に

も三十人にても不苦候、いづれにも上の思召次第にて候條、不足して不苦候はゞ、何が扨某が強て大勢口預るべきことにも候はずと云放ちたれば、後には正敦朝臣の餘り少くてはいかがなりとて、同心十人増人を賜りぬ、扨其冬十月に、鹽入に半年の加役を被仰付たりしに、鹽入强勢にても、中々思ふ樣にはかゆかず、召捕ものも少くて、思ひの外なりければ、高久朝臣に內內歎きける由跡にて聞ぬ、高久朝臣は、何心なく伊豆守信明朝臣(平松)に申出られければ、信明朝臣然るべき由にて、鹽入に增人八人給りぬ、すべて世の中は內外御儉約とて、御要害の所さへ模樣をかへられ、下し賜る物も被減こと一般の中なるに、今迄聞も及ぬ半年勤に、增人賜ることになりぬるは何ごとぞや、(すべて加役同心一人に三人扶ちづゝ賜るなり)加役は本役のくさびにて、冬になれば火早くもなれば、本役一人にては屆ぬ所も有べければとて、加役被仰付ことなれば、召捕ものはよし少くとも、何の害あるべきことにもあらず、かゝる利害の明らかに分りたることをさへ、最屓偏頗によりて申賜る樣に成ぬ、

定火消役

定火消役ハ、組每ニ一人ヲ置キ、各〻與力六騎同心三十人アリ、江戶市中、火災ノ消防ヲ掌ル、若年寄ノ支配ニ屬シ、役料三百人扶持ヲ給セシガ、慶應三年ニ役扶持ヲ廢シテ、役金二千兩ヅツヲ給スルコトヽセリ、各〻一定ノ役屋敷アリテ、在職中ハ必ズ此ニ住居シ、與力同心モ此ニ常勤ス、與力ハ八十石高ニシテ、別ニ馬飼料ヲ給シ、同心ニハ、三十俵二人扶持ヲ給ス、與力同心共ニ、職務ノ爲メニ負傷シ、又ハ死去シタルモノニハ、特別ノ恩典アリ、

此職ハ、萬治元年ニ始テ四組ヲ置ク、(一說ニハ慶安三年始テ置クト云フ)其後漸ク增シテ、元祿八年ニハ十五

名稱　職員　職掌

組ト爲シヽガ、寶永元年ニ至リ、五組ヲ減ジテ十組弓三組、砲七組、ト爲シ、安政二年ニ、復タ二組ヲ減ジ、慶應二年ニ、更ニ四組ヲ減ゼシカバ、殘ル所僅ニ四組トナレリ、蓋シ是ヨリ先キ定火消ハ、大名課役ノ火消、及ビ町火消等ト、火事場ニ於テ互ニ消口ヲ爭フ弊アリシカバ、屢〻令シテ之ヲ禁ゼシ事アリ、且ツ明和ノ頃ハ、消防ニ際シテ一定ノ人數ヲ出サズ、之ガ指揮ヲモ爲サズシテ、風紀大ニ紊レシカバ、寛政四年以後ハ、町方名主等ノ情願ニ由リテ、自今町方ノ消防ニハ、風烈大火ノ時ニアラザレバ、定火消ヲ出場セシメザルコトヽシ、文政二年以後ハ、定火消ノ消防ハ、郭內ノ出火ニ限リ、郭外町方ノ出火ニハ、一切干與セシメザルコトヽシ、文久二年以後ハ、淺草本所ノ倉庫、猿江材木藏等ノ消防モ、町火消ノ手ニ移スコトヽ爲セリ、斯ノ如ク消防ノ區域漸ク狹少トナリシカバ、隨テ其組數モ自ラ減少スルニ至リシモノナラン、

〔延寶二年江戶鑑〕火消御番

〔寶永二年武鑑〕定火消御番

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數井組支配

一定火消　十人

〔吏徵上布衣以上〕火消役十人○中略　弓三組、炮七組、

〔東職紀聞二〕火消役十人

當東都繁榮、而諸侯邸、大夫家、及民屋連綿溢府內、於是有過失火之家、則餘妖及十里者數也、將軍家殊患之、萬治元年九月、慶延記說略　始置此職、○中略　領人別與力六人同心三十人也、○中略　走四方失火所而掌消之也、

〔明良帶錄〕定火消

消防をおもとすれば、何れの場所へも掛るなり、櫓近所手合八町の內なり、方角により詰場あり、

火事計に非ず、都て非常の事あらば、太鼓之相圖にて出合なり、

〔殘集柳營秘鑑 五〕諸事定火消之定

一寶永元年より定火消十組被仰付、一組與力六騎ヅヽ、同心三拾人宛、内二人ヅヽ、時替りニ而火之見番勤之、與力之分ハ騎馬一通り勤之、

一遠方出火ニ而も、外曲輪切ニ相詰ル、外曲輪ゟ内之分者、早速火を消申候、且又自分御役屋敷等、近所出火之節ハ防申候、

一出火之節、上野增上寺江風並惡敷節ハ、御使番差圖有之節者、相詰候事も有之、

一火事太鼓は、定火消十組計用之事也、

一内曲輪近邊之出火之節者、太鼓鐘打交也、遠方出火ニ而少相見へ候節は、知らせ一通り打之、火餘程相見へ候節は御しらせ打之也、

〔德川禁令考 二十九 定火消役〕享保六丑年八月十九日

火消方之覺

一向後早太鼓、中早太鼓、兩品相止、鉦太鼓打交、并出太鼓、知せ太鼓、三色に仕、尤御郭内之役屋敷四ヶ所には、二ッ拍子之太鼓共ニ、四色ニ相究可申候、

右打交打申場所

一數寄屋橋、鍛冶橋より筋違橋、昌平橋見通シ、駿河臺より小石川御門、牛込御門、市ヶ谷御門、番町筋、四ッ谷御門、赤坂御門、山王邊、虎之御門之内、幸橋、山下御門之内、大名小路、凡而御堀之内切、

一外郭外より三四町之所、二ッ拍子、太鼓ハ、駿河臺、田安、麹町、八重洲河岸、四所にて打可申事、

〔定火消附書上〕定火消集場

麻布
愛宕下　虎ノ御門
　鐵炮洲　鍛冶橋御門
　八町堀　數寄屋橋御門
芝

江戸橋　常盤橋御門
　南本所　常盤橋御門
　深川　呉服橋御門
濱町

北本所
淺草　筋違橋御門
　本鄕　小石川御門
　小石川　水道橋之内
上野
下谷

巣鴨
牛込　牛込御門
　元天龍寺前
　小石川御門
　川田ヶ窪　市ヶ谷御門
大塚

四ッ谷　四ッ谷御門
　赤坂　赤坂御門
　喰違之内
　青山
鮫ヶ橋

〔德川禁令考二十九 消防令條〕元祿十一寅年九月廿二日

上野增上寺御宮御佛殿之火消、新規ニ被仰付之、〇中略翌廿三日に、

上野向寄之定火消

井上賴母　本多彌兵衛

三浦監物も入、三人に成、一人完非番有之、

上野近所火事之節は早速かけつけ、火はげしき方を防可被申候、尤其外之火消も追々罷越、精を出防可被申候、

翌廿三日に　増上寺向寄之定火消

戸田十郎右衛門　内藤甚五郎

坪内鵜兵衛も入、三人に成、一人宛非番有之、増上寺近所火事之節は早速かけつけ、火はげしき方を防可被申候、尤其外之火消も追々罷越、精を出し防可被申候、

〔徳川禁令考二十九定火消役〕正徳二辰年二月廿六日

火事場心得方申渡

覚〇中略

一火事場ニ而、仲間者勿論、増火消〇大名課役之面々、火消候に付而、消口を違り、場所を爭ひ候事、不可然、跡より被參候面々、防可申場所無之候はゞ、風脇之方江人數を立、火廣く成候歟、又は飛火有之候はゞ、其所江馳向ひ可被防候、尤火事に付、のき候ものゝ道をふさぎ不申候様に可被心得候事、

一大火之時、防候場所多有之候共、火はびこり候而は其功なき事に候間、一ケ所に而も、火はびこるべき所を專に防候様に可被相心得候事、

一風下に立向ひ防候儀は難成事候間、いづれも申合候而、風脇江人數を立ならべ、火はゞ廣く不成候様消可被申候事、

一火事場において、組之者共は不及申、召仕下々迄、みだり成儀無之様に、常々堅く可被申付候事、

以上

二月

享保元申年二月十八日

年寄衆江越前守遣之、定火消江相渡、

覺〇中略

一古來より増火消被仰付候面々は、消口に札立置候事も有之候、近來に至ては、定火消之面々にも、消口に札立置候も有之由相聞へ候、たとひ消口數多有之候而も、大火に及び候而は其詮も無之事に候、自今以後は、定火消之面々は、消口之多少に構なく、火之はびこり可申所を一ヶ所ニ而も消留候樣に被相心得、いづれ之道にも、大火に及ばざる樣に被仕可然候、消口之札等被立候事は可爲無用候事、

一火之つき候家、又は火之つくべき家等を引崩候而、消留らるべき場所も可有之候間、左樣之場所は見切られ候而、家等引崩候而も可致候、但何も與力ども差圖も無之内に、末々之者共、猥に家を引崩候事は、常々急度制禁有之可然候事、

右之趣、可被得其意候、

享保三戌年十月十八日

火消役江申渡候書付寫

町中出火之節、向後は火元近所之町より人數差出シ消候筈に候、町人數消しかゝり候所江、定火消相越候共、町人數其儘差置、消させ可申候、尤あらそひ候儀無之樣に、組之者家來江堅可申付事、

一火消之人數少きも有之由相聞候、左樣には有之間敷事に候、程も可有之事に候、不足に無之樣に相應可相連候、

明和元甲申年十月十五日　大目付江

〔敎令類纂二集五十五〕

定火消人數之儀、近來人數不足ニ相見へ、其上役場中間の儀は、與力同心共不致差圖、火口へ懸り候もの少く、手明候もの多、於火事場不埒之儀仕候もの有之樣相聞候、畢竟手配惡敷、火口へ懸り候者少く候故、右體之儀も有之候、以來ハ御定人數の內、手配定之通り、たとへハ火口へ懸り候もの何人、水の手へ懸り候もの何人と申樣振分相懸、與力同心も、火口幷に水の手へ定之通相分り、人數差引いたし、手に附爲相働候ハヽ、消防の手配も宜敷取ゟ可申候、勿論場所ニおゐて不埒之儀有之候ハヽ相糺させ、急度申付候樣可被致候、以來不埒之儀有之候ハヽ、町方幷に盜賊改同心共、召捕候筈ニ候、且又定火消防之場所へ、時宜ニ寄、町火消懸ヶ候節、是又爭論等無之、互ニ打込消防いたし候樣可被致候、畢竟何れにも、早速消留候儀專要之事ニ候、

右之通火消役へ申渡候間、防大名役場中間の儀も、右之趣ニ准じ、急度申付候樣、防大名之面々へ可被相達候、

十月

〔德川禁令考定火消役二十九〕寬政四子年閏二月六日

町方大火之節は定火消人數相掛り其餘は相掛り不申事

京極備前守殿御渡

御目付江

當時町方出火之節、定火消人數相掛り候得共、何分出精消防不致ニ付、町火消而已相掛り候樣致度旨、町々名主共相歎候趣に候、以來風烈大火之節は、定火消人數相掛り可申候、其餘之分は定火消方掛り不申候間、出精消防致候樣可被申渡候、

右之通町奉行江相達候間、可被得其意候、以來風烈大火之節は、於場所御目付御使番火事場見廻り之內江談之、町方火口番之組相掛消防可被致候、其餘之火事には罷出に不及候、

右之通火消役江相達候間、可被得其意候、

閏二月

附記 文政二卯年十一月十日、町奉行所ニ於テ町火消へ申渡、

御曲輪外町方出火之節、町火消共不レ集以前に候ハヾ、定火消も消防致候筈に候處、以來は御曲輪外、幷兩山近邊共、定火消消防不レ致候間、以來町火消共、無二油斷一消防可レ致候、

〔文久紀事六〕文久二年七月十八日

定火消役江

淺草本所御藏、猿江御材木藏消防、何も二而相心得候樣相達候處、場所之町火消、一手に消防申付候間、其方共々消防相心得に及ず候事、

〔嚴有院殿御實紀十六〕萬治元年九月八日、火消役のともがらに仰下さるゝは、こたび鳥銃あづけらるべければ、弓砲の隊伍にならひ演銃せしむべし、近藤彥九郎用將、町野助左衛門幸宣、內藤甚之丞正吉、秋山十右衛門正房は、二人づゝ隔日に火の番すべし、隊下は官邸のうちにすましむべし、幷に妻子もさし置べし、消防の具は、おほやけより下し賜はるべし、その具持出る人夫は、三百口の月俸もてめしかゝゆべし、隸下の與力同心、たしかなるものならば妻子なしとも抱べし、但この十月を限として抱べし、おほやけより、榑木賜はるべければ、それをもて屋舍つくるべしとなり、

〔甘露叢三十三〕貞享三年十月十九日、向後定火消一人宛、二丸泊番可二相勤一由、〇又見二常憲院殿御實紀一

〔吏徵別錄上布衣以上〕火消役〇中略　元祿九年丙子八月十三日、火消一組宛、四季共二丸泊番可レ勤旨被二仰渡一、享保二年丁酉、火消泊番御免、

〔有德院殿御實紀四〕享保二年三月廿一日、火消役、故事のごとく、四月朔日より八月にいたるまで、三日をへだて休息すべしと命せらる、

〔甲子夜話四十四〕林子○林述齋ノ噺セシヲ聞シハ、先年彦根侯ノ邸邊火災ニテ、邸中ニモ稍及シトキ、火消役、組人數ヲ率ヒテ邸中ニ入消防セシ折カラ、侯ヨリ牡丹餅ヲ白木折敷ニ載テ、頭役ヨリ與力同心等マデ同ク賦リタリ、火消役衆、ソノ組ト同樣ニシタルヲ不滿ノ色アリシヲ見テ、邸ノ家士ヨリ侯ニカクト申セシカバ、去ラバ自ラ出テ逢ベシトテ、先ヅ火消役衆ノ前ニ床机ヲ居サセ、自ラ出テ床机ニ腰ヲ掛ケナガラ、火事ニ付御出、御太儀ニ候、火事場ノコトユエ、軍禮ヲ以テ取計訖ヌ、若御氣ニ入申サズ候半バ、御勝手次第ト云捨テ退カレケル、火消役衆モアキレテ挨拶ニモ及バザリシトナリ、是ハ彦根ノ家風、古昔軍禮ヲ失ハザルノミナラズ、元來御當家大老ノ家筋ナレバ、御旗本衆ヲバ配下ニシテ下知スルト云心得ヨリノ扱ナリトゾ聞ヘシ、

〔東職記聞二〕火消役十人　布衣

〔明良帶錄〕定火消

寄合より昇る、初心之人の隊卒を指揮するの初階なる故、家督後若輩之仁多し、○中略此場へ火事場見廻りより昇る、當時は聖堂世話役肝煎よりも昇るなり、

〔吏徵別錄上布衣以上〕火消役○中略　元祿元年戊辰六月十六日、向後御持之頭へ可差出候、

〔吏徵上布衣以上〕火消役○中略　若年寄支配　菊之間南敷居外　持高　御役扶持三百人扶持

〔嚴有院殿御實紀十八〕萬治二年八月廿一日、寄合水野半左衛門守政、永井十左衛門直孟、火消役となり、どもに合力米三百人扶持、造宅費銀百貫目づゝ給はり、○下略

〔憲教類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

御役扶持

三百人扶持　火消役

〔吹塵錄三十一徳川氏〕慶應三卯年九月

役屋敷

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高御役知、御役料、御役扶持等不ㇾ被ㇾ下、是迄之場所高ニ不ㇾ拘、今度御改正、別紙之通御役金被ㇾ下候旨被ㇾ仰ㇾ出之、

御役金被ㇾ下高之覺

一金貳千兩　火消役

但高に不ㇾ拘被ㇾ下

〔殘集柳營秘鑑五〕定火消御役屋敷之覺

一四ッ谷御門之內御屋敷　一駿河臺御屋鋪　一赤坂御門之外御屋敷

一飯田町御屋敷　一小川町御屋敷　一八代洲河岸御屋鋪

一麴町御門外御屋敷　一市谷左內坂御屋鋪　一御茶之水御屋敷

一溜池之臺御屋敷

右之屋敷ハ、定火消御役屋敷也、尤破損等有之節ハ公儀御普請也、御役等御免之節ハ、自分之上屋敷江引移也、

〔吏徵上布衣以上〕火消役略〇中　御役宅　八代洲河岸　左內坂　半藏御門外　四谷御門內　駿河臺　溜池　御茶の水　飯田町　小川町　赤坂御門外　火之見櫓高三丈

〔甘露叢五十四〕元祿八年二月十九日、新規ニ火消役被ㇾ仰付、御役屋布、牛込神樂坂ノ上、松平甲斐守、同赤阪御門外、坪內總兵衛、同溜池ノ上、內藤甚五郎、同濱町、關伊織、同幸橋ノ外廣小路戶田十郎右衛門、

〔文昭院殿御實紀五〕寶永七年二月十一日、火消役戶田十郎右衛門重利、幸橋の官宅を木挽町にうつさる、

〔吏徵別錄上布衣以上〕火消役略〇中　同〇享保十年乙巳二月十九日、定火消藤懸民部、傳通院前御役屋敷、去月十四日、青山ゟ出火類燒ニ付、今度小川町にて引替被ㇾ下、

沿革
任免

〔嚴有院殿御實紀十六〕萬治元年九月八日、寄合近藤彥九郎用將、內藤甚之丞正吉、秋山十右衛門正房、町野助左衛門幸宣、府內火消役命せられ、新に與力六騎、同心三十人づゝあづけられ、この他人夫召抱へんためとて、月俸三百口づゝ、營宅の料銀百貫目づゝ給はる、

〔泰平年表大猷公〕慶安三年六月廿六日、始て火消役二人被仰付、(明曆四年九月四日、又四人被仰付、萬治元年九月、火消の役人へ屋敷被下、)

〔吏徵別錄上布衣以上〕火消役　萬治元年(○明曆四年)戊戌九月八日、始置四組、近藤彥九郎用恒、內藤甚五兵衛正吉、町野助左衛門幸眞、秋山十右衛門正房、各與力六騎、同心三十人を附す、御役扶持三百人扶持、御役屋敷、飯田町、桃町、左內坂、本鄉御茶水、　同二年己亥八月廿一日、增二員、(合六組)水野半左衛門守政、永井十左衛門、鼠穴、駿河臺、　同三年庚子十一月十八日、增二組、(合八組)山口平兵衛重直、內藤彌三郎重賴、八代洲河岸、代官町、(後四谷御門內)　寬文二年壬寅二月八日、增二組、(合十組)堀田五郎左衛門、蒔田權佐定行、傳通院前、駿河臺さいかち坂上、　元祿八年乙亥二月十八日、增五組、松平豐前守勝職、坪內總兵衛定重、戶田十郎左衛門重利、內藤甚五郎、關伊織、合十五組、神樂坂上、赤坂御門外、溜池上、幸橋御門外、濱町、(後木挽町、又後六番町、)　寶永元年甲申十月十三日、廢五組、殘合十組、(弓三、砲七、)小出主計、本多修理、本多彌兵衛、關半兵衛、能勢治左衛門、小日向臺さいかち坂、四谷御門內、神樂坂上、濱町、(○又見仕官格義辨、東觀記聞、)

〔嘉永明治年間錄四〕安政二年八月二十三日、六番町、幷小川町火消役、二組ヲ減ズ、

六番町火消屋敷岡田將監勤役中、小川町火消屋敷ハ能勢熊之助勤役中なり、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年八月四日、火消役四組ヲ減ズ、

火消役元十組の處、先年小川町六番町の二組減じ、猶此度御茶の水、市ヶ谷左內坂、飯田町、赤坂御門外、都合四組減じ、頭は勤仕並寄合、組は御持小筒組へ割入と成り、跡四ヶ所殘る、

與力同心

〔柳營秘鑑〕四諸役人員數并組支配

一定火消　十人(中略)與力六騎、同心卅人、

〔吏徵〕御目見以下火消與力六十人　一組六人　現米八十石高　假抱入十人扶持、御手當金廿兩、馬飼料、一日大豆三升、　役上下、御抱場、

〔享保集成絲綸錄〕十八正德六申年正月

火消組與力同心、火を消し候迚、火事場におひて致怪我、御奉公難成者、又は右之節、死候者之事、自今以後は、其跡御たて可被下候間、頭之面々、遂吟味可申上旨被仰出之候、以上、

正月

〔吏徵別錄〕御目見以下火消役組與力　万治元年戊戌九月八日、始置二十四員、現米八十石高、

〔殿有院殿御實紀〕十八萬治二年八月廿一日、寄合水野半左衛門守政、永井十左衛門直孟、火消役となり、○中略兩隊新に與力六騎同心卅人屬せられ、與力には八十石十人扶持、同心に三十俵二人扶持づゝ下さる、

〔火消役組留書〕享和三亥年四月十四日

一與力見習、炮術出精候者撰之節、本勤之者度々相勤旨、組にて者見習之者差出度段、內伺齋宮殿被致進達候處、同月十五日御成にて、出雲守殿、監物殿へ御逢、本勤之者居置、其外に見習之者差出旨に伺書認直、齋宮殿へ被差上、書面引替に成、同年五月廿一日、席ニ付、自分出雲守殿へ罷越候節、伺之通被仰渡、自分一名にて、承付致上る、同廿二日、齋宮殿組與力重之丞忰安田源六差出度被相願、卽願之通、御附札にて被仰渡、

〔吏徵〕御目見以下火消同心三百人　一組三十人　三十俵貳人扶持高　假抱入拾俵壹人扶持、御手當金貳兩、　御抱場

〔天明集成絲綸錄三十九〕明和八卯年五月

御勘定奉行江

火消役　大島兵庫組同心
山縣藤大夫

右測量御用下役相勤候樣申渡候、右御用相勤候內、御扶持方三人扶持被下候間、可被得其意候、

〔吏徵別錄御目見以下〕火消同心　万治元年戊戌九月八日、始置百八十員、每組三十員、合六組、

〔火消役組留書〕享和二戌年十二月十一日

一中川飛驒守より、見習同心定人數有之候哉、且當時何人有之哉、尋ニ付、定人數無之、當時兩人有之段、書取致相達、幷去酉年五月七日、備中守殿へ內伺差上置候儀も談置候、

〔火消役組留書〕享和三亥年閏正月廿二日

一同心見習之者役服、御入用にて被下候樣仕度、尤十組ニ而、見習之者廿人ニ限可仕段、御內意伺、

一昨酉年五月七日、京極備中守殿へ、監物殿被致進達候處、難相成旨、今廿二日被仰、後伺書御下ゲ相成旨、

鐵砲方

鐵砲方ハ、御鐵砲御用衆トモ云ヒ、二人ヲ定員トス、專ラ砲術及ビ銃砲ノ事ヲ掌リ、若年寄ノ支配ニシテ、役料二百俵、若シクハ三百俵ヲ給ス、屬僚ニ與力、同心アリ、與力ハ、鐵砲方一人ニ、四人若シクハ五人ヅヽアリ、現米六十石高トス、同心ハ、二十人ヅヽアリ、三十俵三人扶持ヲ給ス、別ニ磨同心ト云フアリ、初ハ御召鐵砲同心トモ稱シテ、專ラ將軍使用ノ鐵砲ヲ磨キ、人數モ僅少ナリシガ、後ニハ總テノ鐵砲ヲ磨クコトヽナリシニヤ、人數モ十餘人アリテ、二十

俵二人扶持ヲ給セラル、

此職ハ、元和年間ニ始テ之ヲ置キ、寛文六年以後ハ、井上田付兩氏ノ世襲トナリシガ、慶應二年ニ、遂ニ之ヲ廢セリ、

名稱

〔正德六年武鑑〕御鐵砲御用衆

〔文政三年武鑑〕御鐵砲方

職員

〔柳營秘鑑〕四諸役人員數幷組支配

一御鐵砲御用人貳人

職掌

〔東職記聞〕二鐵砲御用衆

田付井上二氏、代々之職也、領二人別與力五人、同心二十人一也、掌二大筒以下一切鐵砲御用一也、

〔明良帶錄〕御鐵砲方

世職にして、井上左大夫、田付四郎兵衛兩人にて掌る、與力五騎、同心二十人づゝ、鍛冶師六人支配也、田付家は御持御鐵砲磨組を支配す、井上家を外記流といふ、先祖井上外記と云、ゆへに流名となす、田付家を田付流といふ、鐵砲の製作違へり、家々業を修め、御鹿狩の節など出す、井上は近頃加役など兼しも、此場の武名ある故也、

〔有德院殿御實紀〕四享保二年正月廿四日、鐵砲方田付四郎兵衛直久、井上左大夫正房、近日火災しげゝれば、田安、市谷、牛込、小石川門外の街路を巡行し、火賊を追捕すべしと命じたまふ、

〔有德院殿御實紀〕六享保三年三月十日、鐵砲方田付四郎兵衛直久に、城邊巡行なすことをゆるさる、これは火災しづまりしによりてなり、

〔溫恭院實紀〕六安政元年四月七日

御鐵砲方　井上左大夫

金三枚時服貳

待遇 俸祿

同　二枚　同　田付四郎兵衛
同　二ヅ　　　田付主計

右大筒車臺製造等之御用相勤候ニ付被ㇾ下ㇾ之

〔吏徴附錄世職〕井上左大夫御鐵砲方　若年寄支配　高九百石　御役料貳百俵　布衣　大筒役支配向取扱候付、七人扶持、〇中略

田付主計御鐵砲方、弘化四年丁未十二月十九日、御手當扶持二十人扶持、　若年寄支配　御役料三百俵　布衣〇中略　天保十三年壬寅十一月日、田付鐵次郎後見被ㇾ仰付、田付鐵次郎、高八百石、

〔慶寬諸條令下〕寬文六年午七月二十一日、御黑書院へ出御被ㇾ爲ㇾ成、御役人被ㇾ爲ㇾ召、御役料被ㇾ下候覺、

一三百俵　田付四郎兵衛

沿革 任免

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、〇中略井上左大夫、田付四郎兵衛三百俵なり、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、〇中略鐵砲方千石以下二百俵、

〔大猷院殿御實紀一〕元和九年、是年稻富宮內重次は、鐵砲の事を奉はり、同心十人預らる、

〔吏徴附錄世職〕田付主計御鐵砲方　慶安元年戊子十一月六日、田付四郎兵衛、御鐵砲御用役被ㇾ命、井上外記、稻富喜大夫、兩組御預、〇中略十二月〇寬文六年二日、命ㇾ御鐵砲御用役、是後世襲、

與力 同心

〔吏徴附錄世職〕井上左大夫御鐵砲方　寬文六年丙午九月八日、御小性組植村志摩守組井上半十郎、隷ㇾ與力五騎同心廿人、賜ㇾ御役料三百俵、十二月二日、命ㇾ御鐵砲御用役、是後世襲、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月、井上田付御鐵砲方役名ヲ廢ス、

〔憲教類典五ノ二御役〕年號月日無ㇾ之

鐵砲磨同心

一遠國御役人組附人別并御役料

御鐵砲方〇中略　與力四騎同心廿人宛

〔吏徵 御目見以下〕御鐵砲方與力十人　一組五人　現米六十石高　假抱入十人扶持　役上下、御抱場、寛永十五年庚戌十一月十四日始置〇中略

御鐵砲方同心四十人　一組廿人　三十俵三人扶持高　寛永十年癸酉月日始置

〔大概順〕御目見以下大概順

三拾俵三人扶持　二半場、羽織袴、御鐵砲方同心

〔嚴有院殿御實紀三十三〕寛文六年九月八日、鐵砲方田付四郎兵衞圓方に、新に與力二騎加へ五騎とし、同心も廿人たらしめ、井上半十郎正景に、新に與力五騎、同心廿人置しめ、役料三百俵下さる、

十二月廿二日、鐵砲方與力同心に、麻布本所にて宅地を宛行、

〔吏徵別錄 御目見以下〕御鐵砲方組與力　寛文六年丙午九月八日、始置、十員、毎組五騎、合二組、〇中略

御鐵砲方同心　寛文六年丙午九月八日、始置、兩組同心合二十員、

〔慶應元年武鑑〕御鐵砲方　與力十騎　同心五十人

〔慶應二年武鑑〕御鐵砲方　與力五騎　同心二十人

〔吏徵別錄 御目見以下〕御鐵砲磨同心　舊くは御。召。鐵。砲。同。心。といふ

〔憲教類典 二ノ五 御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役人

御鐵砲方〇中略　御鐵砲磨二人

〔大概順〕御目見以下大概順

三拾俵二人扶持　二半場、羽織袴、組頭ハ役上下　御鐵砲方磨同心

職員
職掌

〔吏徵下御目見以下〕磨同心十二人 田付主計支配 貳拾俵貳人扶持高　御抱場　慶安元年戊子三月十四日始置

〔大猷院殿御實紀六十九〕慶安元年三月十四日、鐵砲頭柘植三之丞宗次は、稲富喜大夫直賢が舊屬三十人の外、銃を磨くもの十二人をそへて所屬とせらる、

〔吏徵別錄下御目見以下〕御鐵砲磨同心○中略　享保二十年乙卯六月廿四日、向後同心組頭、熨斗目白帷子着用仕間敷候、

大筒役

大筒役ハ、一人ヲ定員トシ、大砲及ビ火矢、狼烟等ノ火術ヲ掌ル、留守居ノ支配ニ屬シ、二百俵高ニシテ、役料七人扶持ヲ給ス、屬僚ニ組頭一人、下役十餘人アリ、組頭ハ五十俵高、下役ハ三十俵高トス、

此職ハ、元文三年ニ始テ之ヲ置キ、火術ニ精シキ人ヲ以テ之ニ補セシガ、嘉永ノ頃ヨリ、鐵砲方井上氏ノ兼職トナリ、安政三年ニ至リ、其屬僚ヲ遷シテ、講武所附ト爲シ、慶應二年ニ至リ、職名ヲ改メテ、歩兵組ノ頭ト云ヘリ、

〔吏徵附錄座職〕大筒役一人

〔明良帶錄〕大筒役組頭

按るに、砲術を鐵砲といふ、火術を大筒石火矢と云、

〔明良帶錄〕大筒御鐵砲役

大筒方とて、石火矢、棒火矢、狼煙等、揚物火術の家にして、其業に習熟し、隔年の見分、鎌倉表にてあ

りしが、當時御省略中ゆへ、五ヶ年になる、組頭一人、屬役等も有り、

待遇　俸祿

〔吏徵附錄 廢職〕大筒役 ○中略　御留守居支配　高二百俵　御役扶持七人扶持　倅見習廿人扶持

〔嘉永三年武鑑〕大筒御役　燒火之間　二百俵高　御役料七人扶持

沿革　任免

〔吏徵附錄 廢職〕大筒役 ○中略　元文三年戊午十月十八日始置 佐々木勘三郎

〔有德院殿御實紀 四十八〕元文三年十月十八日、犬牽頭佐々木勘三郎孟成、大筒役に仰付らる、これは新設の職なり、こたび留守居の隷下とせられ、座班は馬方馬醫の次、犬牽の事も舊によりつかさどるべしとなり、

〔嘉永三年武鑑〕大筒御役

井上左大夫 御鐵砲方ヲ兼

○按ズルニ、安政六年、萬延元年、文久二年、元治元年、慶應元年等ノ武鑑ニモ、鐵砲方井上左大夫ノ兼職セシコト見ユ、

〔續泰平年表〕安政三年十月二十三日、但馬守殿御渡、井上左大夫 ○鐵砲方兼大筒役 江、其方支配、大筒方之者共義、當節先々其方には御用も少く、組與力同心も有之事故、大筒下役組頭は講武所附、大筒下役同御用出役、同火藥御用定手傳、同下役共、講武所附大筒下役に被仰付、久貝因幡守、池田甲斐守組頭支配、可被申渡候、尤因幡守、甲斐守へ、可被談候、

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年九月廿日、大砲組ノ頭ヲ改テ歩兵組ノ頭ト唱フ、

組頭

〔吏徵下 御目見以下〕大筒下役組頭壹人

〔明良帶錄〕大筒下役組頭

火術修行出精之者、鐵砲大筒之義、家筋代々の世職なり、人材少くとも代々世職、御入人なし、他之昇進同樣たるべし、御先手組之鐵砲同心より與役へ昇る也、

〔吏徵下 御目見以下〕大筒下役組頭 ○中略　井上左大夫 ○鐵砲方兼大筒役 支配　五十俵持扶持高　燒火間

下役

上下役、御抱場、
〔大概順〕御目見以下大概順
五拾俵高持ふち　　御抱入場所、上下役、大筒下役組頭
〔吏徵別錄御目見以下〕大筒下役組頭　寶曆六年丙子十二月八日、始置、一員、生田只右衛門、元御臺匠同心
五十俵高、進物取次上番、
〔嘉永三年武鑑〕大筒御役
同組頭　牛込御たんす町、安田富三郎、
〔元治元年武鑑〕大筒下役組頭
牛込御たんす町　安田主馬
〔吏徵御目見以下〕大筒下役十二人
〔嘉永三年武鑑〕大筒御役　火業定手傳二人、下役十二人、
〔吏徵御目見以下〕大筒下役○中略　井上左大夫支配　三拾俵持扶持高　御抱場
〔大概順〕御目見以下大概順
御抱入場所、羽織袴役、　大筒下役
〔吏徵別錄御目見以下〕大筒下役　享保十一年丙午月日、始置、十二人、

古事類苑

官位部七十一

德川氏職員二十

旗奉行

旗奉行ハ、二人若シクハ三人ヲ定員トシ、幕府ノ軍旗ヲ掌ル、老中ノ支配ニ屬シ、初ハ役料ヲ給セシガ、後之ヲ廢シテ、二千石高ト定ム、屬僚ニ與力一人、同心十五人ヅヽアリ、與力ハ八十石高ニシテ、同心ニハ、三十俵二人扶持ヲ給ス、西丸ニモ亦旗奉行一人アリ、與力同心之ニ屬シ、其待遇本丸ニ同ジ、

此職ハ、元和三年ニ、永井氏ヲ以テ之ニ補シ、寛永九年ニ、大久保横田二氏ヲ以テ之ニ補シテヨリ、其後絶ユルコトナカリシガ、慶應二年ニ至リ、遂ニ之ヲ廢セリ、

〔柳營秘鑑〕四 諸役人員數幷組支配

一御旗奉行　御本丸貳人〇又見二官中秘策、職掌錄、吏徵一

〇按ズルニ、安政以後慶應マデノ武鑑ニハ、何レモ三人ト爲セリ、

〔東職紀聞〕二 旗奉行二人

領二人別旗組與力一人同心十五人一也

〔有司勤仕錄〕御旗奉行

一此御役、武役たる故、常々勤番は無之、五節句、月並等、出仕有之、菊之間緣頰詰也、

〔明良帶錄〕御旗奉行

待遇俸祿

一此場は老衰にして、先途大抵なし、式日登城計、御幟の節勤番、隊卒は蓮池御門にあり、

〔有司勤仕錄〕御旗奉行

布衣役也、持來りは、從五位下も勤番す、

○按ズルニ、職掌錄及ビ吏徵等ニハ諸大夫トアレドモ、武鑑ニハ古今ヲ通ジテ布衣トアリ、蓋シ諸大夫ニシテ布衣ナルモノナラン、

〔吏徵上布衣以上〕御旗奉行二人　老中支配　菊之間南敷居外○中略　貳千石高

〔吏徵別錄上布衣以上〕御旗奉行○中略　寛文六年丙午七月廿一日、御役料七百俵、天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、元祿五年壬申五月十一日、御役料三百俵、○中略　享保八年癸卯六月十八日、貳千石高、

〔慶寛諸條令下〕寛文六年午七月二十一日、御黑書院へ出御被為成、御役人被為召、御役料被下候覺、

一千俵　御旗奉行

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭、諸役人の役料を加祿となして給る、○中略　御旗奉行○中略　七百俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

貳千石ゟ內は、貳千石之高に可被成下候、　御旗奉行

〔機務覽要二〕御旗奉行御鑓奉行三千石以下挾箱之事

一三千石以下御旗奉行御鑓奉行、挾箱二ッ持來リ候者、被仰付候節は、先格ニ而、先役之節通、挾箱二ッ持候之旨、大目付申達爲持候旨、享和三亥年三月廿五日、石野筑前守、昨日西丸御鑓奉行被仰付候ニ付、自分申聞候處、先例當時井戸美濃守、○寛政三年爲御鑓奉行　御旗奉行長田阿波守、○寛政八年爲旗奉行　爲持居候得共、大目付承置候例難相分候ニ付、右之段、同廿六日、御用番土井大炊頭殿江申上候

處、御開置被成候旨、專阿彌ヲ以被仰聞候、尤心得帳ニ留置、

任免

〔台德院殿御實紀四十七〕元和三年十二月、さきに小田原御陣のとき立退し永井善左衞門安盛、〇中略采邑二千石たまはり、旗奉行命せられ、與力十騎同心五十人屬せられ、〇下略

〔東職記聞二〕旗奉行二人

四戰記聞曰、元龜三年十月、神祖與武田信玄戰遠州味方原之時、旗奉行河澄源五郎通成戰死也、萬姓家譜曰、味方原役、旗奉行安藤木工助戰死也、代々記曰、天正中、尾州長久手之役、渡邊半十郞、寬助右衞門奉當職也、集成曰、天正十八年、小田原役、村越與惣左衞門、權田織部奉當職、又曰、慶長五年、關原役、〇中略神祖乃召八王子之同心而被令持幡長柄也云々、

〔營中御日記九〕寬永九年六月廿五日、大久保彥左衞門、〇中略御座之間へ被召出、彥左衞門儀、御旗奉行被仰付之、橫田甚右衞門、相奉行被仰付、七月朔日、大久保彥左衞門、橫田甚右衞門、馬上一騎、足輕十五人宛被仰付之、

〔吏徵別錄上布衣以上〕御旗奉行　寬永九年壬申六月廿五日、始置二員、七月朔日幷各與力一騎、足輕十五人、大久保彥左衞門忠孝、橫田甚右衞門尹松、

〔慶應二年武鑑〕御旗奉行

六百石、山名因幡守、　三千石、勝田左京、　六千石、森川肥後守、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月、御旗奉行役名ヲ廢ス、

與力同心

〔吏徵下御目見以下〕御旗奉行組與力二人　一組壹人〇中略　寬永九年壬申六月廿五日始置〇中略

御旗同心三十人　一組十五人〇中略　寬永九年壬申六月廿五日始置

〔有司勤仕錄〕御旗奉行

一御旗同心有之、御預り之御旗を勤番す、

〔吏徵御目見以下〕御旗奉行組與力〇中略 現米八十石高　役上下、御抱場、
御旗同心〇中略　三拾俵貳人扶持高　御抱場

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配
一御旗奉行　西丸壹人〇又見官中秘策、職掌錄、吏徵、

〔東職記聞二〕監國君職
旗奉行一人　布衣
領旗組之與力一人同心十人也、享保九年以來、連綿而至今之監國君〇世子德川家重家治也、

〔吏徵別錄布衣以上〕御旗奉行〇中略　慶安三年庚寅九月三日、始置西丸附一員、同四年辛卯五月朔日、廢西丸附、〇中略　寶永三年丙戌十一月廿五日、置西丸附一員、同六年己丑十一月二日、廢西丸附、〇中略　天明元年辛丑五月廿六日、置西丸附一員、同六年丙午十一月廿七日、廢西丸附、　寛政八年丙辰十二月十日、置西丸附一員、此後無沿革、

〔吏徵布衣以上〕西丸御旗奉行一人　同上〇老中支配、菊之間南居外、諸大夫、貳千石高、
〔吏徵御目見以下〕西丸御旗奉行組與力一人　同上〇一組壹人、現米八十石高、役上下、御抱場、
西丸御旗同心十五人　同上〇一組十五人、三拾俵二人扶持高、御抱場、

鑰奉行　八王子千人頭附

鑰奉行ハ、三人若シクハ四人アリ、又五人ノ時モアリテ定員ナシ、長柄同心及ビ八王子在住ノ千人同心ヲ統轄ス、老中ノ支配ニ屬シ、初ハ役料ヲ給セシガ、後之ヲ廢シテ、二千石高ト定ム、屬僚ニ同心十人ヅヽアリ、三拾俵二人扶持ヲ給ス、西丸ニモ亦鑰奉行一人、同心十人アリ、

其待遇本丸ニ同ジ、

此職ハ、寛永九年ニ、松田氏以下四人ヲ之ニ補シテヨリ、爾來絶ユルコト無カリシガ、慶應二年ニ至リ、遂ニ之ヲ廢セリ、

〔柳營秘鑑〕四諸役人員數并組支配

一御鍵奉行　御本丸三人

〔官中秘策〕十諸御役人之事

一御鎗奉行　布衣二千石高　四人〇又見職掌條、吏徵、

〇按ズルニ、天明、寛政、安政、文久、元治等ノ武鑑ニハ五人トアリ、

〔東職記聞〕二鎗奉行四人

領人別長柄鎗組與力一人同心十五人也、八王子之千人同心、亦當職之所領也、

〇按ズルニ、鎗奉行ニハ與力ナシ、本書本丸及ビ西丸鎗奉行ノ下ニ與力一人トアルハ誤ナラン、

〔有司勤仕錄〕御鎗奉行

一右御旗奉行と同敷、常々勤番無之、出仕之日に出る、詰所菊之間椽頰なり、〇中略

一八王子千人同心を支配す

〔明良帯錄〕御鎗奉行

此場は老衰場にして、先途大抵なし、兩前とも勤功なし、式日登城計、隊率は御玄關前御門にあり、古へ戰場の時は、兩役共武功の場なり、

〔有司勤仕錄〕御鎗奉行

布衣役、持來りハ、從五位下にても勤之、

任免

〔吏徵布衣以上〕御鑰奉行○中略　老中支配　菊之間南敷居外　貳千石高

〔吏徵別錄布衣以上〕御鑰奉行○中略　寬文六年丙午七月廿一日、御役料五百俵、　天和二年壬戌四月廿一日、御役料止、　享保八年癸卯六月十八日、貳千石高、

〔慶寬諸條令下〕寬文六年午七月二十一日、御黑書院へ出御被爲成、御役人被爲召、御役料被下候覺、

一五百俵　御鑰奉行

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給はる、○中略　鑰奉行、○中略　五百俵、

〔常憲院殿御實紀二十五〕元祿五年五月廿八日、この日諸有司役料をさだめらる、○中略　槍の奉行、持弓筒頭、二千石以下は三百俵、

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

貳千石ゟ內は、貳千石之高に可被成下候、　御鑰奉行

〔吏徵別錄布衣以上〕御鑰奉行　寬永九年壬申六月廿五日、始置四員、富永主膳、今村九郎兵衛重長、松田六郎左衛門、筧助兵衛、

〔大猷院殿御實紀二十〕寬永九年六月二十五日、松田六郎左衛門定勝、今村九郎兵衛吉正、普請奉行富永主膳正重參、目付中山勘解由照守、○中略　大番組頭筧助兵衛爲春、共に鑰奉行になり、○下略

〔東職記三〕鑰奉行四人

集成曰、天正十八年、小田原役、鑰奉行丹羽六大夫、彥坂小刑部、小宮山又七郎、保坂金右衛門、內藤源助等五人、供奉神祖也、○中略　慶長十九年、大坂役、○中略　安藤次右衛門、小宮山又七、保坂金右衛門、小坂新助、米津梅千之助、梅千、是訓保也、伊藤右馬允、戶田七內、筧助左衛門、多門縫殿助、室賀源七郎、小林庄之助等十一人、領千本鑰而供奉台德院殿也、

同心

〔慶應二年武鑑〕御鎗奉行

二千石、駒木根大内記、　九百石、須田久左衛門、　二千七百石、仙石播磨守、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月、御槍奉行役名ヲ廢ス、

〔憲教類典御役二ノ五〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

御鑓奉行〇中略　　同心十人宛

〔有司勤仕錄〕御鎗奉行

一同心十人有之、御預之數具足之番之爲、頭之宅江壹人ツヽ勤番す、

〔吏徵御目見以下〕御鑓奉行組同心四十人　一組十人　三拾俵貳人扶持高　御抱場　寛永九年壬申六月廿五日始置

〔營中御日記九〕寛永九年七月朔日、松田六郎左衛門、〇鑓奉行、中略、足輕同心十人被仰付之、

西丸鑓奉行

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數并組支配

一御鑓奉行　西丸壹人〇又見官中秘筴、職掌錄、吏徵、

〔東職記聞二〕監國君職

鎗奉行一人　布衣

領長柄鎗組之與力一人同心十人也

〔吏徵布衣以上〕西丸御鑓奉行一人　同上〇老中支配、菊之間南敷居外、貳千石高、

〔吏徵別錄布衣以上〕御鑓奉行〇中略、　慶安三年庚寅九月三日、始置西丸御鑓奉行一員、富永主膳參尹、〇大猷院殿御實紀作重尹、同心十人を附す、

〔東職記聞二〕監國君職

鎗奉行

慶延略記曰、慶安三年九月、大猷院殿〇徳川家光以鎗奉行松田六郎右衛門、富永忠右衛門等兩人被屬監國君〇徳川家綱世子也、享保九年以來、連綿而至今之監國君〇徳川家重世子家治也、

起原

八王子千人頭

八王子千人頭ハ、原來武田北條二氏ノ遺臣ノ、徳川氏ニ歸降セルモノナリト云ヒ、又ハ武田氏ノ遺臣ヲシテ、北條氏ノ殘黨ニ備フル爲メニ、武藏國八王子ニ在衛セシメシモノナリトモ云フ、十人ヲ定員トシ、同心百人ヅヽヲ率井、互ニ交替シテ、日光江戸兩所ノ火ノ番ヲ勤メシガ、寶永五年以後ハ、江戸ノ火ノ番ヲ免ゼラル、鑓奉行ノ支配ニ屬シ、二百俵高ニシテ、別ニ役料ヲ給セズ、

〔吏徴別錄下布衣以下御目見以上〕千人頭　天正十年壬午月日、甲州より被召出、御目見、本領に御朱印頂戴、御長柄支配被仰付、　同十八年庚寅月日、八王子江相越在住、

〔武徳編年集成二十六〕天正十一年四月廿八日、甞ニ信玄ノ小人頭荻原甚之丞昌友、窪田助之丞正勝、中村勘六安忠、石坂勘兵衛森通、吉村又右衛門貞時、原半左衛門正元、山本彌右衛門忠房、河野傳之丞通重ヲ濱松ニ召テ、井伊直政ヲ以テ、甲州ト隣國ノ境目筋仕置ノ沙汰シ、境目ノ砦ニハ、此内一人宛、横目トシテ加ハリ、他國ノ事迄モ聞屆ケ、密ニ言上スベシ、去年甲州先方ノ士、早速御家人ニ列セラルヽ所ニ、悉ク忠ヲ勵ス故、參遠御譜代ノ健士ニ續キ、御哀憐ヲ施サルベキ旨ヲ諭サレ、信玄ノ時ノ如ク、境目ノ手置スベキ由御朱印ヲ賜フ、此時マデ小人二百四十人、其頭右ノ八人也、

〔東職記聞二〕鎗奉行

安民記曰、關原役、神祖召八王子奴僕、而被令持旗長柄、其首領荻原甚之丞、窪田助之丞、中村勘八、石坂甚兵衛、志村又右衛門、原半左衛門、山本孫左衛門、河野傳之允等八人、步行而警衛之也、〇中略

是今之千人同心之權輿也、又落穗集曰、神祖就封而召故武田氏與北條陸奥守氏輝、(武州瀧山城主)兩家徒卒之家居者、而爲御旗本長柄鎗同心、是云千人同心也、

〔落穗集追加四〕八王寺千本槍の衆の事

一問曰、今程八王寺千本鎗の頭衆組共に被差置し義は、何頃よりの義と被聞及候や、答曰、我等承り及たるは、三河以來の御長柄衆と申面々の義は、關東御入國の節、皆々御小人衆の仲ケ間へ御加へ被成、御陣御上洛抔と有御座節は、御長柄の掛りの御中間衆の義は、武州の內八王寺に於て、新に召抱へ候樣にと被仰出と也、其節の義は、日光火の御番抔と申義も無之、いつとても隙にて罷在に付、野畑を切り開き、作わざを專に致すを以、公儀より被下置御あてがひは輕けれ共、勝手に付、我も〱と御奉公願を仕りし中に、八王子瀧山寺の先城主北條陸奥守氏輝方に、末々の奉公仕たる者、又は其節甲州よりもあまた罷越、御小人に在付、其頭頭にも、大方は信玄衆を以て被仰付にも、思召有之ての御事に候と也、其節の義は、御長柄の數も五百本にて有之所、關ケ原御陣の頃より、御鎗も多く被仰付、台德院樣(〇德川秀忠)木曾路通りを關ケ原表へ御出馬の節の御供をも相勤る由、權現樣(〇德川家康)御代の義は申不及、大猷院樣(〇德川家光)御代、其以後にても、千本鎗の義は、御老中方の御支配に有之由、去るによつて、御動座の節、御長柄の立配り所々の用ひの譯共に、諸家の長柄鎗の用ひとは替りたる御樣子などども有之由には候へ共、公邊の儀に候へば、我等式のしかと可知やうも無之事也、

〔台德院殿御實紀五十六〕元和八年六月十八日、千人同心頭窪田助之丞吉正、(系譜正勝)八十二歲にて死す、こはもと甲斐の武田が家にて目付をつとめ、鎗の者を支配しけるが、歸降の後も、猶その者等を屬せられ、小田原の北條ほろびて後、その一族陸奥守氏輝が殘黨、八王子の地にあるべければ、不虞に備へられんが爲、かしこにうつりすましめられしなり、

職員
職掌

〔柳營秘鑑 四〕遠國御役人之員數 并役高組支配大概

一八王子千人頭十人 同心百人ツヽ、支二配之一、平生御役無レ之、但近來頭貮人、同心百人ツヽ、日光山ニ五十日代リ相詰、彼地之火消勤レ之、

〔天保十一年武鑑〕千人頭　各同心百人組頭十人宛預リ

〔慶應二年武鑑〕千人頭　組頭同心不同

千人頭十人、貮百俵高、武州八王子在住、各同心百人を支配す、頭一人、同心五十人を具して、日光火之番、半年代に勤む、

〔職掌錄〕御鎗奉行

〔有司勤仕錄〕御鎗奉行

千人頭壹人ヅヽ、在府に而、諸事組下之用向達す、

〔柳營年表秘錄 上 嚴有院〕承應元壬辰六月、八王子千人同心一組、日光山火消被二仰出一、

〔嚴有院殿御實紀 四十四〕寛文十二年正月九日、千人頭二人、同心百人づゝ、日光山にありて防火の事つとめしが、今より後は、頭一人、同心五十人づゝ、在山すべしと定らる、

〔甘露叢 二十三〕天和三年六月十二日、日光御普請中、御山火ノ番千人組、只今迄一組宛相詰候處、加番被二仰付一、二組宛相詰可レ申旨、御鎗奉行へ被二仰付一、

〔吏徵別錄 下 布衣以下御目見以上〕千人頭 ○中略　寛政三年辛亥四月、日光火之番半年代、頭一人、同心五十人、に定む、

〔慶應二年武鑑〕千人頭　日光火消御番頭一人 組頭五人、同心四十五人、毎年五月十一月交代、

〔大猷院殿御實紀 五十八〕正保元年九月三日、このほど霖雨により、紅葉山の御宮破損しければ、修理奉行を高木筑後守正次、內藤外記正重、船越三郎四郎永景命せられ、千人同心百人召て其事にあづからしむ、

〔常憲院殿御實紀五十〕寶永元年十月七日、けふ鎗奉行して八王子千人頭に令せらるゝは、三隊三百人、其頭三員、かはる〴〵府へまかり、今より後火番つとむべし、居所井に勤のさまは追て令せらるべし、日光山勤番は、是迄のごとく心得べしとなり、

〔常憲院殿御實紀五十一〕寶永二年二月十五日、令せらるゝは、千人組の同心、今より後常に巡察し、火を疎略にするさまを見及ばゞ斷るべし、かつ火災の時は、千人組頭、同心召具し、防火の具は、其地にあるにまかせ用ゆべければ借すべし、其地にては、目付使番指揮により火を消べしとなり、

〔文露叢十三〕寶永五年三月十八日、千人頭二組宛、江戸火ノ番勤候處、困究ニ付御免、

〔常憲院殿御實紀五十七〕寶永五年三月十八日、鎗奉行土屋市之丞正敬を召て、所屬千人組二隊づつ、これまで江戸日光兩所の火番つとめしが、艱困するよし聞ゆるにより、府の火番は免さるゝ旨つたへらる、

〔吏徴上 御目見以上〕千人頭十人　御鎗奉行支配〇中略　貳百俵高〇中略　自分抱使役、手當米貳拾四俵貳人扶持、

〔常憲院殿御實紀五十一〕寶永二年正月廿八日、此日千人組の内、府に詰る二百人は、もと鎗奉行所屬といへども、市井見廻るによて、目付杉田五左衞門勝行、山崎四郎左衞門正周の指揮を受べきむねつたへらる、

〔天保集成絲綸錄八十六〕寛政四子年五月

御勘定奉行江

八王子千人同心組頭持添抱相止候ニ付、以來日光火之番在勤中、半組半組頭五人江別段加扶持貳人扶持づゝ被下候間、銘々人足壹人づゝ召連罷越、火消道具持運、其外組用等、是迄之通、無差支樣可致之旨申渡候間、可被得其意候、

〔吏徵別錄下 布衣以下御目見以上〕千人頭○中略　延享二年乙丑九月廿二日、浪人石坂彥三郎被召出、貳百俵被下、千人頭被仰付、　安永二年癸巳三月八日、千人頭頼母伯父、萩原豐次郎被召出、貳百俵被下、千人頭被仰付、

鐵砲玉藥奉行

職員
職掌

鐵砲玉藥奉行ハ、鐵砲玉藥ニ關スル事ヲ掌ルモノニシテ、留守居ノ支配ナリ、

〔東職紀聞 二〕鐵炮玉藥奉行二人 領同心四十二人也、掌玉藥以下諸道具事之職也、

〔延寶六年江戸鑑〕御鐵炮 御留守居　玉藥奉行

〔柳營秘鑑 三〕御留守居支配　玉藥奉行

〔明良帶錄 續篇〕御鐵炮玉藥奉行 持高留支　御役料二十人扶持　燒　同心三十四人

御役料被下、卒吏有り、元〆組頭二人、惣て非常第一の備也、鉛鹽硝丁數分合火藥の事を司る、

〔玉藥奉行勤方〕御預所之御藏御多門間數覺

一竹橋御多門　三間ニ九拾三間○中略　一竹橋南御藏　三間ニ貳拾間

一同　北御藏　三間ニ三拾間

內　佐々木傳左衞門持

一御番所前竹矢來 三間ニ五間入口貳ヶ所　一西土手下竹矢來 三間ニ廿七間半入口五ヶ所

一竹橋渡御櫓

續袖多門

一紅葉山御寶藏　三間ニ拾三間　一田安渡御櫓　四間ニ拾九間

一櫻田渡御櫓　四間ニ拾五間　一蓮池御多門　三間ニ廿七間
　横而三間ニ七間
一雉子橋渡御櫓　一半藏渡御櫓　五間ニ拾間半
一牛込渡御櫓　四間ニ廿壹間　一四ッ谷御門櫓　四間ニ拾七間
　千駄ヶ谷御藏分
一南御藏　貳間半ニ拾五間　一北御藏　三間ニ貳拾間
一新御藏四梁共　三間四方
　和泉御藏
一壹之御藏　三間ニ七間半　一貳之御藏　三間ニ五間
一三之御藏　三間ニ五間　一四之御藏　三間ニ七間半
一五之御藏　貳間ニ五間

〔台德院殿御實紀六十〕元和九年六月朔日、鐵炮玉藥奉行夏目長右衞門信次二子次郎左衞門信忠、大納言殿（家光〇德川）に初見し、小姓組となり、廩米二百俵賜ふ、

〔東武實錄十三〕寛永三年五月廿七日、今度御上洛ニ依テ、江戸ヨリ京都ニ至テ供奉之面々宿割、

　玉藥奉行衆
五百石、井上外記、　五百石、田付四郎兵衞、

〔吏徵別錄下 布衣以下御目見以上〕御鐵炮玉藥奉行　寛永九年壬申十一月五日始置、御鐵炮藥込之役人二員、　享保九年甲辰七月十三日、御役扶持三十人扶持、定二員、

〔有德院殿御實紀十九〕享保九年七月十三日、玉藥弓矢幕奉行の職、これまで定員なきにより、今より後は一職各二人に定らる、

待遇

〔享保集成絲綸錄〕一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之、所謂、〇中略

一躑躅之間北より二之間〇中略　玉藥奉行

〔享保集成絲綸錄〕一〕延享元子年六月

當時殿中席書〇中略　燒火之間〇中略　御鐵炮玉藥奉行

〔昭德院實紀〕二十一〕文久二年三月十一日

御目付江

御鐵砲玉藥奉行〇中略

右向後、講武所奉行支配ニ被仰付候間、可被得其意候、

〔德川禁令考〕十七　鐵砲玉藥奉行〕文久三癸亥年七月廿六日

班席之儀ニ付達

鐵炮玉藥奉行江

向後席之儀ハ、洋書調所之次、布衣場所、七百俵高ニ被成下之、

七月

俸祿

〔吏徵〕御目見以上〕御鐵炮玉藥奉行二人　御留守居支配　燒火間　持高　御役扶持二十人扶持

〔大概順〕御目見以上大概順

持高　御役扶持貳十人扶持　燒火　留　御鐵炮玉藥奉行

〔安政五年武鑑〕御鐵炮玉藥奉行　燒火　御役料廿人扶持宛　同心三十四人

六百石牛込白かれ町　澤勘七郎　二百五十石表四ばん町　中川市助

〔慶應三年武鑑〕御鐵炮玉藥奉行　布衣　七百石高　組同心百二十人

〔吹塵錄三十一徳川氏〕慶應三卯年九月
布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、
御役金被下高之覺〇中略
一金五百兩　　御鐵炮玉藥奉行
但高千石以上之者江ハ半減　御切米高六百俵以上之者江ハ不被下　同三百俵以上之者江ハ半減〇中略
右之通御役金月割を以被下候、渡方之義は、三月六月九月十二月、右四度ニ相渡ニ而可有之候、請取方等之義は、御勘定奉行可被談候事、

元〆

〔安政五年武鑑〕御鐵炮玉藥元〆組頭
千だがや高木鎮平　牛込御かち町介、小﨑小大夫、　四谷左門町高須半平

同心

〔吏徵御目見以下〕御鐵炮玉藥奉行同心三十六人　持高　組頭兩人、役上下、役料地一人、十九石四斗七升六合六勺六才、一人ハ十七石五斗六升六合六勺六才、　御譜代場
〔憲教類典二ノ九御番〕元祿四辛未年四月廿六日
覺〇中略
御鐵炮玉藥同心〇中略
右地方知行取來候ものども、少給に而は、百姓困窮いたし候沙汰有之に付而、今度遂吟味候處、先規より譯有之、地方拜領之筋目も有之候、依之前々之通、領知被下置候間、彌百姓困窮不仕、領知作法能様に可申付之よし、右頭中へ可被相達候、以上、
四月廿六日

藥込來

〔享保通鑑 二〕享保三年七月三日、被仰出左之通、

覺 ○中略

一御鐵炮玉藥奉行組之者 ○中略

右之輩向後熨斗目、幷七夕八朔白帷子、一切堅著用仕間敷旨、向々江急度可被相達候、以上、

戌七月

〔憲教類典 三ノ三十五下〕享保二十乙卯年六月廿四日

本多中務大輔殿 西尾隱岐守殿 御渡 ○中略

御鐵炮玉藥奉行組同心 ○中略

右之分、向後熨斗目白帷子一切著用仕間敷候、○中略

右之通、向々頭支配江可被相達候、西丸方は、西丸御目付江可有通達候、○中略

卯六月

〔大概順〕御目見以下大概順

三十俵二人扶持 組頭、役上下、　御譜代席、羽織袴、　御鐵炮玉藥同心

〔德川禁令考 具足奉行 十七〕文久三癸亥年七月廿八日

武制改革ニ付諸扶持米渡方達 ○按文略

御勘定奉行江

覺 ○中略

一御弓矢鎗奉行組同心之儀者、一同御鐵炮玉藥奉行組同心增人ニ被仰付勤候內、何れも取來通御宛行被下候事、

〔營中御日記 三〕寛永三年閏四月廿六日、今度御上京、道中御近所、幷御先御跡、騎馬にて御供之面々、

○中略御藥込衆、

〔營中御日記 九〕寛永九年十一月五日、本目權兵衛、貴志彌兵衛、御鐵炮藥込之役人被仰付之、

〔延寶三年江戸鑑〕御鐵炮藥込衆　同心十人宛

石川助左衛門殿 二百五十石するがだい　小笠原彥六殿 二百五十石一ばん町　宮崎彌五兵衛殿 二百五十石五ばん町　二百五十

下山甚右衛門殿 石こびなた　近藤登之介殿 五千石本郷三町め　蜂屋源五兵衛殿 二百五十石小石川

〔常憲院殿御實紀 五〕天和二年六月三日、鐵炮藥込の職を停廢あり、

鐵砲箪笥奉行

職員
職掌

鐵砲箪笥奉行ハ、始メ大箪笥奉行、小箪笥奉行ト稱シ、後ニ弓矢箪笥奉行、鐵砲先手箪笥奉行ト改ム、鐵砲箪笥奉行ハ即チ鐵砲ノ出納ヲ掌ルモノニシテ、留守居ノ支配ナリ、

〔東職記聞 二〕鐵炮箪笥奉行二人領同心三十八人也、江州鐵炮工國友氏毎年造鐵炮二百口而奉之當職、則當職納之署、而從諸同心火器之缺損而授之也、集成曰、慶長十九年十二月、大番士加藤源四郎正勝補此職、而領同心二十五人也、

〔明良帶錄 續編〕御鐵炮御箪笥奉行 持高留守支　御役料十人扶持　焼　同心十五人宛

御役料被下、卒吏あり、同組頭差添非常の御備なり、

沿革
任免

〔台德院殿御實紀 十七〕慶長十六年、此年、朝夷市平義次、奥山茂左衛門重次、共に大箪笥奉行となり、同心二十五人づゝ預けられ、義次は采邑三百石、重次は二百五十石給ふ、

〔寶永五年武鑑〕大御箪笥奉行　御役料百俵

加藤求馬 七百五十石表二ばん町　田澤久左衛門 四百石小石川　平井與三右衛門 二百五十石三川殿ヤシキ　依田彥左衛門

窪寺四郎左衛門　跡部茂左衛門 千石表六ばん町　竹島七郎兵衛

小御簞笥奉行　御役料百俵づゝ

六百石表二ばん町 加藤八郎右衛門　加藤求馬　三百俵小びなた 青木新五右衛門　三百石一谷本村十人ふち 永井半左衛門　二百四十石裏二ばん町 間宮惣右衛門　落合五右衛門

〔元祿十一年武鑑〕大御簞笥奉行

七百石、小笠原彥三郎、　宮重八郎左衛門　二百五十石、依田彥左衛門、

小御簞笥奉行

四百五十石、小林權大夫、　三百俵十人扶持、玉虫太兵衛、　三百俵、青木新五右衛門、

○按ズルニ、大小簞笥奉行ハ正德以後ノ武鑑ニ見エズ、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御鐵炮御簞笥奉行　萬治三年庚子十二月廿五日、始置六員、享保九年甲辰七月十三日、御役扶持十人扶持、定員二員、　寬政三年辛亥六月三日、組同心內抱之者兩人相止、右上リ御扶持方四人扶持者、同心組頭四人江一人扶持充被下、上リ御切米四十俵ハ兩組爲物書料被下之、

〔延寶三年江戶鑑〕御鐵炮先手簞笥奉行　同心廿人宛

三千石うら四ばん町 土屋次良左衛門殿　三百俵こびなた 小野忠左衛門殿　三百石下や 小林權大夫殿　四百石 小林平介殿

御弓矢簞笥奉行　同心十人ヅヽ

五百俵するがだい 水野九右衛門殿　四百三十石一ばん丁 秋山源太左衛門殿　六百石一かいだい近所 櫻井清右衛門殿　三百四十五石あか坂御門之內 川合善兵衛殿

〔正德六年武鑑〕御鐵炮簞笥奉行御役料百俵宛

野間金右衛門　三百俵六ばん町 加藤八郎右衛門　二百二十石するがだい 石野權八郎　三百俵元さんわう 石川傳四郎

俸祿待遇　同心

三百廿石青山新やしき　加藤求馬

〔安政五年武鑑〕御簞笥奉行〇本書目錄作二御鐵炮簞笥奉行一　燒火　御役料十人扶持　同心廿人宛、内組頭二人宛、

四百石表六ばん町　杉原新右衛門　二百俵本所みかさ町　三宅鑑作　組頭　あざぶいも洗坂　戸田又六郎　小石川御たんす町　岡島佐一郎　あざぶ谷町　關原文藏

〔享保集成絲綸錄 一〕延享元子年六月

當時殿中席書〇中略　燒火之間〇中略　御鐵炮御簞笥奉行

〔大概順〕御目見以上大概順

持高　御役扶持十人扶持　燒火　留　御鐵炮御簞笥奉行

〔吏徵 御目見以上〕御鐵炮御簞笥奉行二人　御留守居支配　燒火間　持高　御役扶持十人扶持

一組同心十四人　萬治三年庚子三月始置　兩組物書料四十俵

〔吏徵 御目見以下〕御鐵炮御簞笥奉行組同心廿八人　一組十四人、組頭二人、役扶持一人扶持、貳拾俵二人扶持高　御抱場

〔吏徵別錄 御目見以下〕御鐵炮御簞笥奉行組同心　享保二十年乙卯六月廿四日、熨斗目白帷子、一切著用仕間敷候、天明七年丁未四月廿二日、於二役所一御寶器取扱候節計熨斗目白帷子着用不レ苦旨達レ之、寛政三年辛亥六月三日、始賜二組頭役扶持一人扶持一、

〔大概順〕御目見以下大概順

貳拾俵貳人扶持　御抱入場所、羽織袴、　御鐵炮御簞笥同心

職員職掌

弓矢鎗奉行

弓矢鎗奉行ハ、幕府ノ弓矢幷ニ鎗ノ事ヲ掌ル職ナリ、留守居支配ニ属ス、

〔正德六年武鑑〕御弓矢鎗奉行　御役料百俵宛

四百石三ばん町笠原平八　二百八十九石りうけいばし大草次郎右衛門　四百五十石小川町平井與總右衛門　二百五十石牛込あふ坂上朝比奈孫三郎

〔安政五年武鑑〕御弓矢鎗奉行　焼火　御役料十人扶持　同心十九人宛

百五十俵本所石はら片町近山藤四郞　百五十俵もちの木大原左近　組頭　うし込御たんす町秋元岩藏　牛込御たんす町

山田清兵衞　うし込御たんす町保々右兵衞　牛込御たんす町佐藤善太郞

〔吏徴 上御目見以上〕御弓矢鎗奉行二人　御留守居支配　焼火間　持高　御役扶持十人扶持

〔明良帯録 續篇〕御弓矢鎗奉行

御留守居支配にて御役料被下、組頭隊卒あり、非常の御備也、

〔大概順〕御目見以上大概順

持高　御役扶持七人扶持　焼火　御留　御弓矢鎗奉行

〔東武實録 十三〕寛永三年五月廿七日、今度御上洛ニ依テ、江戸ヨリ京都ニ至テ、供奉之面々宿割、

御鎗奉行衆

五百石、小幡勘兵衞、　小川庄九郞　部屋住、和田五助、　五百石、本多百助、

〔吏徴別録 下布衣以下御目見以上〕御弓矢鎗奉行　寛永十九年壬午十二月二日、始置二三員一、或云、寛永十四年丁丑九月十八日、始置二一員一、　享保九年甲辰七月十三日、兩人、役御扶持十人扶持、

〔享保集成絲綸録 一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之、所謂、〇中略

一躑躅之間北より二之間〇中略　御弓矢鎗奉行

〔有德院殿御實紀十九〕享保九年七月十三日、弓矢鎗奉行の職、これまで定員なきにより、今より後は、一職各二人に定らる、

〔昭德院殿御實紀二十一〕文久二年三月十一日

御目付江

御弓矢鎗奉行〇中略

右向後、講武所奉行支配ニ被仰付候間、可被得其意候、

〔德川禁令考十七具足奉行〕文久三癸亥年七月廿八日

武制改革ニ付諸扶持米渡方達〇按文略

御勘定奉行江

覺

今度御改革、御弓矢鎗奉行勤向、御具足奉行江打込ニ被仰付、〇中略

一御弓矢鎗奉行組同心之儀者、一同御鐵炮玉藥奉行組同心增人ニ被仰付、勤候內、何れも取來通御宛行被下候事、

〔享保集成絲綸錄一〕延享元子年六月

當時殿中席書〇中略　燒火之間〇中略　御弓矢鎗奉行

〔大猷院殿御實紀三十五〕寬永十四年九月十八日、花畑番神田孫兵衛正重は、弓矢鎗奉行となり、〇下略

〔大猷院殿御實紀五十二〕寬永十九年十二月二日、大番本間太左衛門說直、井戸忠兵衛重弘、納戸番

同心

加藤市左衞門正久、弓矢奉行となり、〇下略

〔吏徵御目見以下〕御弓矢鎗奉行組同心二十八人　一組十九人、組頭二人、貳拾俵二人扶持高假抱入十五俵一人半扶持　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

貳拾俵貳人扶持　御抱入場所、羽織袴、御弓矢鎗同心

〔德川禁令考十七具足奉行〕文久三癸亥年七月廿八日

武制改革ニ付諸扶持米渡方達〇按文略　御勘定奉行江

覺〇中略

一御弓矢鎗奉行組同心之儀者、一同御鐵炮玉藥奉行組同心增人に被仰付、勤候內、何れも取來通御宛行被下候事、

職員職掌

具足奉行

具足奉行ハ、甲冑ヲ掌ル職ナリ、留守居支配ニ屬ス、文久二年幕奉行ノ事ヲ兼ネ、同三年弓矢鎗奉行ノ職ヲモ兼務セシメテ、改テ武具奉行ト稱ス、

〔東職記聞二〕具足奉行二人也、人別組同心四十人、掌甲冑事之職也、

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一御具足奉行四人　役料七人扶持同心五十人ツヽ

〔安政五年武鑑〕御具足奉行　燒火　御役料十人扶持　同心三十人、內五人組頭、

二百俵小石川いが坂　赤井孫四郎　二百石市谷柳町　佐久間靱負　組頭山上の下　關喜十郎　牛込御たんす町　須田格右衛門　牛込御たんす町　平井政藏　青山六道　高谷元助

〔明良帶錄 續篇〕御具足奉行　持高 留支　御役扶持十人扶持　燒　同心三十人 內組頭五人

御留守居支配にて、組頭卒吏まであるなり、御具足を司る、○中略威直し糸等も被仰付、其外虫干に改之、六具小道具等迄也、○中略近比福島傳兵衛北條流の兵家にして古實に明るきを以て、此場を被仰付たり、

〔吏徵 上 御目見以上〕御具足奉行二人　御留守居支配　燒火間　持高　御役扶持十人扶持　一組同心十八人

〔吏徵別錄 下 布衣以下御目見以上〕御具足奉行　寛永十八年辛巳三月八日、置一人杉浦十兵衛、享保九年甲辰七月十三日、兩人役、御役扶持十人扶持、

〔營中御日記 十六〕寛永十八年三月八日、杉浦十兵衛御具足奉行被仰付旨、松平伊豆守、阿部豐後守、出座傳之、

〔享保集成絲綸錄 一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之所謂、○中略

一御躑躅之間北より二之間　○中略　御具足奉行

〔享保集成絲綸錄 一〕延享元子年六月

當時殿中席書　○中略　燒火之間　○中略　御具足奉行

〔昭德院實紀 二十一〕文久二年三月十一日

御目付　○江中略　御具足奉行　○中略

同心

右向後講武所奉行支配ニ被仰付候間、可被得其意候、

〔昭德院實紀 二十三〕文久二年九月四日

御目付江

御幕奉行之儀、以來御具足奉行江兼帶被仰付候間、其段可被申渡之、且又組之者共も、御幕取扱方、兼帶相勤候樣可申渡候、

右之通、講武所奉行江相達候間、可被得其意候、

〔德川禁令考 十七 具足奉行〕文久三癸亥年七月廿八日

武制改革ニ付諸扶持米渡方達〇按文略

御勘定奉行江

覺

今度御改革、御弓矢鎗奉行勤向、御具足奉行江打込ニ被仰付、御改名御武具奉行と唱替被仰出、御具足奉行組同心之儀も打込勤、御武具奉行組同心と唱替被仰出候間、可被得其意候、依之御武具奉行御役扶持、以來拾五人扶持宛ニ增被下候間、其段可被申渡候、尤席之儀者、唯今迄之通候事、〇中略

右之趣相達候、可被得其意候事、

七月

右河内守殿御渡

〔吏徵 御目見以下〕御具足奉行組同心三十八人　一組十九人、組頭二人、役上下、　二十俵二人扶持

高　假抱入、十五俵一人半扶持、　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

貳拾俵貳人扶持　御抱入場所、羽織袴、　御具足同心

幕奉行

幕奉行ハ、軍陣ニ用ヰル幕ノ事ヲ掌ル職ナリ、若年寄支配ニ屬ス、文久二年具足奉行ニ併セラル、

〔柳營秘鑑〕四 諸役人員數幷組支配

一御幕奉行三人 役料十人扶持ヅヽ

〔延寶江戸鑑〕御幕奉行

四百五十石 南二ばん町 小林平十郎殿　四百五十石 するがだい 鈴木九大夫殿　二百八十六俵 あかさか 難波田善右衛門殿　二百石 あたごの下 伊吹傳右衛門殿

〔明良帶錄〕續篇 御幕奉行 持高 若支　御役料十人扶持　同心八人 中間十二人

卒吏八人、背十二人あり、御幕は備の六具の一にして、尤大切の品なり、○中略 此場以下寄場元〆よりも歷昇す、

〔東武實錄〕十三 寛永三年五月廿七日、今度御上洛ニ依テ、江戸ヨリ京都ニ至テ、供奉之面々宿割、○中略

御幕奉行衆

二百石、加藤久大夫、同心廿人 岸長左衛門、

〔吏徵別錄〕下 布衣以下御目見以上 御幕奉行　寛永十四年丁丑九月十八日、始置一員、或云、同二十年癸未十二月十日、始置三員、享保九年甲辰七月十三日、二人役、御役扶持十人扶持、

同心

〔大猷院殿御實紀三十五〕寛永十四年九月十八日、大番青木壼兵衛之能幕奉行となる、

〔享保集成絲綸錄一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席以壁書被仰出之、所謂、〇中略

一躑躅之間北より二之間〇中略　御幕奉行

〔有德院殿御實紀十九〕享保九年七月十三日、弓矢幕奉行の職、これまで定員なきにより、今より後は一職各二人に定めらる、

〔享保集成絲綸錄一〕延享元子年六月

當時殿中席書〇中略　燒火之間〇中略　御幕奉行

〔文久紀事六〕文久二年九月四日、出雲守殿〇若年寄堀之敏御渡、　御目付江

覺

御幕奉行之儀、已來御具足奉行江兼帶に被仰付候間、其段可申渡候、且又組之者共も、御幕取扱方兼帶相勤候樣可被申渡候、

右之通、講武所奉行江相達候間、可被得其意候事、

〔吏徴下〕御目見以下　御幕奉行組同心三十六人　一組十八人　貳拾俵貳人扶持高　御抱場

〔大概順〕御目見以下大概順

貳拾俵貳人扶持　御抱入場所、羽織袴、　御幕同心

貝大鼓役

貝及ビ大鼓役ハ、共ニ目付ノ支配ニシテ陣螺ヲ吹キ、陣大鼓ヲ撃ツヲ以テ職トス、

〔官中秘策十〕諸御役人之事

一御貝役　百俵高　四人

〔延寶江戸鑑〕御貝役人衆

二百石、山本九郎右衛門殿、　二百石神田天神下 園部五郎左衛門殿　二百石、伊藤九右衛門殿、　二百石、青田又兵衛殿、

〔吏徵御目見以下〕御貝役三人　御目付支配　百俵持扶持高　見習、七十俵持扶持、　部屋住見習、五人扶持、　燒火間、上下役、寛永十八年辛巳六月廿五日始置

〔明良帶錄世職篇〕御貝役百俵持扶持目支　御臺所前廊下

軍學之家筋師範之仁也、且は御貝役筋の人、代々の世職たり、他場所より至らず、序破急三段の吹方有、押前合圖物場の吹様有り、軍學等出精の仁は、吟味にて出役する也、

〔嚴有院殿御實紀三十五〕寛文七年八月九日、貝役園部五郎左衛門、大鼓役近藤太郎兵衛に、下谷淺草溝渠の奉行命せらる、

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高并役扶持、〇中略

百俵高扶持持外御役扶持拾人扶持有來之通　御法螺之役人

〔大猷院殿御實紀六十五〕正保三年十二月十三日、五十俵づゝ加へらる、貝大鼓役八人、

〔享保集成絲綸錄一〕萬治二亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之所謂、〇中略

一御臺所通廊下〇中略　御貝大鼓役人

〔營中御日記二〕寛永二年四月十一日、日光江御供之輩、御徒目付、御貝役、御大鼓役、同朋江銀十枚ツ

大鼓役

ッ被下、

○按ズルニ、吏徴ニ、貝大鼓ノ兩職ハ、寛永十八年辛巳六月廿五日始置トアレド、此書ニ據レバ、其以前ヨリアリシナリ、

〔官中秘策十一〕諸御役人之事

一御大鼓役　百俵高　貳人

〔延寶江戸鑑〕御大鼓役人衆

二百石下や　吉田十兵衛殿　百五十俵、永瀧豐兵衛殿、　二百五十俵、廣原八兵衛殿、　百五十俵、近藤太郎兵衛殿、

〔吏徴御目見以下下〕御大鼓役三人　御目付支配　百俵持扶持高　見習七十俵持扶持、　部屋住見習、五人扶持、　燒火間、上下役、　寛永十八年辛巳六月廿五日始置

〔明良帶錄世職篇〕押御太鼓役百俵持扶持目支　御臺所前廊下

軍學師範の家筋、御役替他よりなし、昇進もなし、支配も其向より昇る、序破急三段、押前物間の打樣心得古法有り、

〔憲敎類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

御目見以下役儀勤之內、場所定高幷役扶持、○中略

押大鼓之役人

百俵高扶持持　外御役扶持拾人扶持有來之通

船手頭

船手頭ハ、五人若シクハ六人ヲ定員トシ、幕府ノ用船ヲ保管シ、又毎年二人ヅヽ、交替シテ、四

名稱

定員
職掌

國九州邊ノ浦々ヲ巡視セシメシ事アリ、若年寄ノ支配ニ屬シ、初ハ役料ヲ給セシガ、後之ヲ廢シテ、七百石高ト定ム、屬僚ニ水主同心アリ、頭一人ニツキ、少ナキモ四十人以上、多キハ八十餘人ニ及ビ、二十俵二人扶持ヲ給ス、

此職ハ、寬永九年ニ、始テ向井氏以下四人ヲ補シ、其後時ニ由リテ、人員ニ增減アリシカドモ、獨リ向井氏ハ、代々此職ヲ世襲シテ、祿高モ二千四百石ヲ領シ、常ニ船手頭ノ首位ニ在リ、文久二年ニ此職ヲ廢シテ、其船舶及ビ水主同心ヲ軍艦奉行ノ支配ニ遷シ、時モ、他ノ船手頭三人ハ免職セシガ、向井氏ノミハ、猶ホ軍艦奉行ノ指揮ヲ受ケテ、船手ノ事ニ與カレリ、

〔延寶三年江戶鑑〕御船大將衆

〔貞享三年武鑑〕御船奉行

〔文政三年武鑑〕御船手頭

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一御船手六人

〔吏徵上布衣以上〕御船手五人

〔明良帶錄〕御船手頭

武勇の人の勤場にして、水主同心を率ひて、海水働の差引をする、天地丸、麒麟丸、安宅丸等之船具を用ゆるは、古へ此場は大切の場なれども、今は左にあらず、

〔大猷院殿御實紀四十四〕寬永十七年六月廿二日、船手頭の輩二人づゝ、每年九州四國の浦々巡視すべしと命ぜられ、まづ辰年は、船手頭小濱久太郎嘉隆、間宮虎之助長澄、巳年は石川八左衞門政次、向井右衞門直正、午年は小濱彌十郎安隆、小笠原安藝守信盛と配當して、かはる〳〵まいるべしとなり、

待遇俸祿

〔吏徵(布衣以上)上〕御船手五人　若年寄支配　七百石高　躑躅間

〔吏徵附錄(世職)〕向井將監(御船手)　若年寄支配　高貳千四百石　躑躅間　布衣　御役宅靈岸島

○中略　悴源次郞見習貳百俵

〔慶寛諸條令下〕寛文六年午七月二十一日、御黑書院へ出御被爲成、御役人被爲召、御役料被下候覺、

御船手

一四百俵

〔憲廟實錄四〕天和二年四月二十一日、諸番諸物頭諸役人の役料を加祿となして給る、○中略舟手の頭、四百俵、

〔享保集成祿綸錄三十〕享保八卯年六月

御船手

七百石ゟ内は、七百石之高に可被成下候、

沿革任免

〔吏徵別錄(布衣以上)上〕御船手　寛永九年壬申六月廿五日、始置四員、向井右衛門、小濱久太郞、間宮虎之助、小笠原安藝守、○中略　寛永三年丙戌六月十三日、廢一組、小笠原彥大夫病免に因て也、(合五組)

〔營中御日記九〕寛永九年六月廿五日

向井將監　同右衛門　小笠原安藝守　間宮虎之助

右御前江被召出、御船之儀可申付旨被仰出之、

〔吏徵附錄(世職)〕向井將監(御船手)○中略　寛文二年壬寅六月十一日、向井兵部事、御座之間被爲召之、安宅丸、天地丸、龍王丸、右三艘御預被成、其上千石御加增被下之、同心都合百人被成之旨、御直ニ被仰付、

〔常憲院殿御實紀三十八〕元祿十一年十二月十九日、船手役一員減せらる、よて岡田左太郞善純、小普請に入らる、

〔憲廟實錄三十一〕寛永三年六月十三日、船手頭小笠原彥大夫病免、仍て一組を減併す、○又見常憲院殿御實紀

〔嘉永三年武鑑〕御船手頭

向井將監　二千四百石、本所石はら、文政四巳七月より、御番所靈岸島、御役屋敷同所、
瀧川十次郎　三百俵、赤坂清水谷、天保十四卯四月ヨリ、御番所永代橋、御役屋敷新堀川口、
藤澤彌兵衛　百五十俵、赤坂清水谷、天保十四卯四月、御役屋敷永代橋向かき店、
櫻井藤四郎　百石、するがだい、弘化二巳七月、御番所濱大手內、御役屋敷同所、
大塚孫左衛門　百俵、牛込若松町、弘化三午閏五月、御役屋敷深川萬年橋、
向井源次郎　見習、二百俵、本所石はら、弘化二巳七月、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年七月四日、御船手役名ヲ廢ス、
御船手頭三人、勤仕並仰付らる、

〔文久紀事六〕文久二年七月四日
向井將監 ○中略
一是迄御船手御預之御船、并水主同心、御召船上乘役、同見習共一同、御軍艦奉行支配被仰付候間、得其意、右之者共へも可被申渡候、且又其方儀、御用之儀は、萬事御軍艦奉行得差圖候樣可被致候事、

御船手　別所主税　庄田主水　松平左門
今度御改革、御船手之御役名被廢止候ニ付、御役御免、勤仕並被仰付候、

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之
一遠國御役人組附人別 并 御役人
御船手 ○中略　向井將監方八十四人　同心四十人ゟ五十人迄

〔嘉永三年武鑑〕御船手頭　同心三十人

水主同心

〔吏徵下御目見以下〕水主同心三十人　貳拾俵貳人扶持高　御抱場、但天正至寛永、於相州走水被召

抱候分、御譜代之取扱、深川安宅御船藏前、濱御殿地内御役宅住居、天正中始置

〔大猷院殿御實紀十五〕寬永七年六月廿六日、忠勝(向井將監)〇船手頭に、水主同心を加へて、百三十人とし、〇下略

〔大猷院殿御實紀二十〕寬永九年八月十四日、此日船手頭向井右衞門直宗、小濱久太郎嘉隆、間宮虎之助長澄、小笠原安藝信盛に、毎隊の水主三十人をつけらる、

〔大猷院殿御實紀二十四〕寬永十一年正月十日、御膳奉行石川六左衞門重勝、船手役命せられ、同心四十人屬せらる、

〔嚴有院殿御實紀四〕承應元年十一月三日、舟手頭向井兵部正方に十人、土屋忠兵衞知貞、間宮造酒丞長澄、小笠原安藝守信盛に各五人、水主を增加せしめらる、

〔安政五年武鑑〕御船手頭　水主同心不同

向井將監　水主八十四人　別所主稅　水主四十九人　久保勘次郎　水主四十九人

庄田主水　水主四十五人　江原桂助　水主四十五人

召船役

職員職掌

召船役ハ、召船上乘役トモ云ヒ、二人ヲ定員トシ、將軍乘船ノ事ヲ掌ル、若年寄ノ支配ニ屬シ、役料百五十俵ヲ給セシガ、文久二年ニ、船手頭ト共ニ廢シテ、軍艦奉行ノ職ニ合併セリ、

〔吏徵(御目見以下)下〕御召御船上乘役貳人

〔元治元年武鑑〕御召御船役

早川鐵五郎　喜多川猪三郎

〔明良帶錄續編〕御召御船役

平日の御召船を司る、船底虫入等を改、天幕純張、幔御障子、御奧の世話、天地丸の事も司る、尤大切の役にて、水上御遊行の節、心得方あり、

〔吏徴別錄御目見以下下〕御召御船上乘役〇中略　寛政五年癸丑十月三日、同人〇召船役松井吉之助　御材木石奉行兼帶、

〔昭德院實紀二十三〕文久二年七月四日

大目付
御目付江

今度御改革、御船手之御役名は以來被廢止、御船手御預之御船、井御召船上乘役、同見習水主同心共、御軍艦奉行支配ニ被仰付候間、可被得其意候事、

〔吏徴御目見以下下〕御召御船上乘役〇中略　若年寄支配　百俵持扶持高　燒火間　上下役

〔大概順〕御目見以下大概順

百俵持フチ　御譜代席、上下役、　御召御船上乘役

〔吏徴別錄御目見以下下〕御召御船上乘役　寶曆三年癸酉七月晦日、向後向井將監〇船手頭受差圖、可相勤旨、　寛政四年壬子三月廿一日、松井吉之助、御作事下奉行格被仰付、役扶持七人扶持被下、〇中略

文化二年乙丑五月廿一日、武左衛門子染屋熊八郎、見習被仰付、十人扶持被下、

〔天保十一年武鑑〕御召御船役　納戸前廊下　御役料百五十俵

百石　本所松くら町、岩間勘次郎、　七十俵五人フチ　上野山下、染屋武左衛門、

古事類苑

官位部七十二

德川氏職員二十一

京都役人

京都役人ニハ、所司代、禁裏附、仙洞附、及ビ二條城ノ諸役人、町奉行等アリ、所司代ハ京都ヲ守護シ、西國諸大名ヲ監督スル重職ニシテ、皇室ヲ始トシテ、公卿及ビ門跡等ニ關スル幕府ノ政務ヲ行ヒ、其他京都諸役人ノ事務ヲ總攬シ、五畿內、丹波、播磨、近江ノ八ケ國ニ在ル、幕府領內ノ訴訟ヲ聽斷ス、大名ヲ以テ之ニ補シ、四位ニ敍セラル、役料ハ其初ハ一定ノ制ナカリシガ、後ニハ一萬俵ヲ給スルコトヽナリ、慶應ノ初年ニハ三萬石ヲ給セリ、其他ノ待遇ハ、總テ老中ニ次グ、慶長五年ニ奧平美作守信昌、始テ此職ニ補シ、後板倉伊賀守勝重、其子周防守重宗相繼テ、大ニ政績アリシト云フ、屬僚ニ與力同心アリ、

禁裏附ハ二人ヲ定員トシ、所司代ノ指揮ヲ受ケテ每日參內シ、公卿ノ行跡ヲ監督シ、女中ノ出入ニ就キテ其取締ヲ爲ス等、凡テ禁中ノ警衞ニ從事シ、又其出納會計ノ事ヲ掌ル、從五位下ニ敍シ、千石高ノ職ニシテ、三千石以上ハ役料八百俵ヲ給シ、三千石以下ニハ千五百俵ヲ給ス、後ニハ持高ニ拘ハラズシテ、金二千兩ヲ給スルコトヽナレリ、屬僚ニ與力同心アリ、禁裏御賄頭及ビ庖所頭アリ、御所勘使買物使アリ、安永ノ頃、賄頭以下ノ私曲ヲ嚴罰シテ、新ニ江戶ヨリ之ヲ補シ、又勘定奉行ノ支配下ニ、京都御入用取調役ト云フヲ置キテ、禁裏附ノ指揮ヲ受ケテ、其出納ヲ監査セシムルコトヽ爲セリ、仙洞附ハ、上皇ノ在サヾル時ハ之ヲ闕ク

ヲ以テ、常置ノ職ニアラズ、隨ヒテ一人ニ命ズル事アリ、二人ヲ補スル事アリテ一定セズ、其職掌資格等ハ、大抵禁裏附ニ同ジ、又特ニ女院附ヲ設ケシ事アリ、後水尾天皇ノ后、東福門院德川和子ノ在世中此職ヲ置キテ、與力同心ヲ附屬セシメタリ、

二條城ノ役人ニハ、城代、門番頭、定番、御殿番、鐵砲奉行、藏奉行等アリ、城代ハ寬永二年ニ始テ之ヲ置キ、元祿中之ヲ廢ス、門番頭ハ、又城番トモ云ヒ、與力同心ヲ率ヰテ、城門ヲ警衞ス、初ハ一人ナリシガ、城代ヲ廢セシ頃ヨリ二人ヲ置キ、合力米百二十石宛ヲ給ス、定番ハ文久二年ニ置ク所ニシテ、是マデ大番頭ヨリ交代シテ城中ニ在番セシヲ廢シ、改メテ此職ヲ置キシナリ、二人ヲ定員トシ、役料三千俵宛ヲ給シ、與力同心ヲ附屬セシム、御殿番ハ三輪氏ノ世職ニシテ、坊主十餘人ヲ從ヘテ殿中ヲ守衞ス、四百石高ニシテ役料百俵ナリ、鐵砲奉行ハ、二人若シクハ一人ニシテ、合力米六十石宛ヲ給シ、同心十人之ニ屬ス、藏奉行モ、二人若シクハ三四人ノ時アリテ一定セズ、合力米四十石宛ヲ給シ、手代、藏番、小揚等之ニ屬ス、以上ノ役人中ニテ、門番頭以下ハ、所司代ノ支配ニ屬シ、藏奉行ハ、其初ハ京都町奉行ノ支配ナリシガ、後ニ勘定奉行ノ支配トナレリ、

町奉行ハ、二人ヲ定員トシ、市中一般ノ政務ヲ行フノミナラズ、五畿內、丹波、播磨、近江ノ八ケ國ニ在ル、幕府領地ノ租稅ヲ徵集シ、且ツ此等ノ國々ノ寺社領ノ訴訟ヲ聽斷ス、後ニ攝津、河內、和泉、播磨四ケ國ノ租稅ハ、大坂町奉行ニテ徵集スルコトヽナレリ、其他臨時ニ、伏見奉行、大津奉行ノ職ヲ兼子シコトアリ、奈良奉行ノ職ヲ分掌セシコトアリ、從五位下ニ敍シ、千五百石高ニシテ、役料六百石ヲ給シ、後ニハ役金二千五百兩ヲ給シタリ、屬僚ニ與力同心アリ、又京都町役人ニ、雜色、見座、中座、町代等アリ、雜色ハ上下ニ分レ、京都ニテ行ハルヽ、公武ノ諸儀式ニ周旋シ、又ハ見座、中座ヲ指揮シテ、牢獄ノ番人、囚人ノ監督等ヲ勤ム、町代ハ、町々ノ年寄ヲ率ヰテ、專ラ町方ノ取締ニ從事シ、事

務ノ繁劇ナルハ、下町代ヲ置タモアリ、

〔柳營秘鑑〕四遠國御役人之員數幷役高組支配大概

一京都所司代壹人與力五十騎同心百人

〔有司勤仕錄〕京都所司代

一此名目を所司代と唱ふる事は誤り歟、所司職と可唱ふ事か、其故は室町將軍家之時、江州佐佐木此職成しが、其身は江州に有て、家老多賀豐後守高忠を爲名代京都江遣し、此職を司り始めし故に其頭所司代と云へり、當時は其身直に此職を勤るうへは、所司職と唱へ宜からんものか、

〔東職記聞〕一京都所司代一人

抑當職始足利氏之代也、中古治亂記曰、應永六年、足利義持以斯波細川畠山三氏補管領職、又置侍所司、以山名一色赤松京極四氏補之、世稱之三管領四職也云々、文明三年、赤松氏所司代浦上東市正則宗辭職、京極氏使以多賀豐後守高忠代之也、或曰、應永以來、管領司職家世々掌之、及義政之代、山名一色二氏尙在京師掌職事、京極赤松二氏、就國遙授職事、而各自使長臣代己而率之、蓋所司代之號、始于茲也、

〔東職記聞〕一京都所司代一人

任京都守護禁中、掌堂上及京中一切事之職也、領與力五十人、同心百人也、

〔明良帶錄前篇〕京都所司代

禁中之事を守護し、公家之怠慢を戒しむ、四國中國九州之要領なれば、尤重任也、土地之事にも預る也、非常の備第一なり、大德寺妙心寺の住職之事を奏す、是は天子の御祈願所にして、公家方の支配にあらず、勅任之宣旨を取次て達する也、

〔有司勤仕錄〕京都所司代

一禁裏御所方、公家門跡等之御用、總而京都一式之事、幷五畿內、丹波、播磨、近江、八ヶ國公事沙汰を引請之事也、〇中略

一妻子ども不殘引越て常役也、五六年に一度づゝ、爲御目見參府有之、〇中略

一二條御城、所司代屋敷ゟ出入之御門は、所司代ゟ諸番所を置、常にはメ切、大番頭衆も、所司代江用事有之時は其段を斷、御門明させ往來す、

一年に二度程、百日目付と同道して、御城內見分有之、此節御殿番ゟ、御殿向悉く掃除し、待請て見分す、

〔鳩巢小說上〕一板倉周防守ドノ、〇重宗京都所司代ノ時分、公家衆江戶へ參向、周防守殿ニモ同ジク下向ニ候、然ル處、公家衆登城ノ日限相極リ候、如何ノ首尾ニテヤ、防州へ先達テ不被仰遣候、依之登城ノ日ニ至リ、周防守殿登城イタサレ、御次へ參ラレ候、其時分中根壹岐守殿、御側御用人相勤ラレ候ニ付、壹岐々々ト呼申サレ、坊主罷出、只今御前へ御出候ト申シ候ヘバ、不苦候間、周防ガ呼ト申テ呼テ參リ候ヘト申サレ候、其聲御前へ聞ヘテ、壹岐ドノニハ、表へ出御ノ御裝束ヲ召セ居申サレ候ヲ、上意ニハ、周防守ガ呼候ホドニ、先ヅ參リ候ヘトノ御事ニテ、出ラレ候ヘバ、周防守ドノ申サレ候ハ、只今承リ候ヘバ、公家衆御目見仰付ラル由ニ候、只今マデ公家衆御目見ノ義ナド、私へ不被仰聞シテ御極被遊候義ハ、終ニ無御座候、何ニゾ私御意ニ不應義有之ト相見申候、左候ヘバ、私此役義相ツトメ可罷在義ニテ無之候間、今日ヨリ役義御斷申上候、若又左樣ニテモ無之候ハヾ、今日ノ公家衆ノ御目見、御差止被遊可然由申サレ候、壹岐守ドノ聞被申、尤左樣ニテハ可有之候ヘドモ、公家衆追付登城ノ筈ニテ、御前ニモハヤ御裝束被遊候、左候ヘバ、只今ニ成リ御差止遊バサル義、成申マジキヨシ申候、左候ハヾ私役義ハ御斷申上候由、周防守殿被申候ニ付、壹岐

守ドノ、左樣ノ御取次ハ、私ハ成申マジキ旨被申候、周防守ドノ重テ申サレ候ハ、御自分ハ取次ガ役義ニテ候、私ハ只今役義御斷申上候上ハ、御自分被申上候トモ、不被申上候トモ、其段ハ勝手次第ニ候、私ハ御自分マデ御斷申シ候ヘバ、事濟申由被申候ニ付、不及是非、壹岐守殿被達上聞候處、御誤リ被遊候トテ、公家衆御目見ノ義、御氣色御滯トノ義ニテ御差延可被遊トノ上意ニテ、其日ノ御規式ハ相止申候、右ノ赴御老中方御聞候テ、偖々周防守殿ハ冥加ニ御叶ヒ候、上樣ノ御誤被遊候ナド、ノ上意、終ニ承リモ不及事ノ旨被申候ヘバ、周防守殿、私聊左ヤウニ不存候、私ヘ對セラレ候テ御誤被遊候ニテハ無之候、是ハ權現樣ヘ對シ奉ラレ候テ御誤被遊事ト奉存候、權現樣御條目ニ、西國三十三ケ國、幷公家衆ノ義ハ、京都所司代ノ支配タルベシト申義ニ御座候、是ヲ不圖御忘被遊候處、私申上候ニテ被思召出候故、御誤リ被遊タルモノニテ候、左ヤウナレバ御尤ト奉存候、私ヘ對シ申義ハ何モ無之ヨシ被申候ヘバ、御老中方、赤面ノ由ニ候、是モ長崎半左衞門ドノ物語ニテ候、

〔槐記〕享保十七年九月十二日、參候、〇山科道安入江樣御成、後光明院ニハ各別ノ御器ナリシコト、每度仰ラレ〇近衞家熙シコトナルガ、ソノ頃板倉周防守〇重宗ガ、所司役ヲツトメシトキナリ、後水尾院ニ痘ノ御惱マシ〱テ、日々ノ御容躰ヲ叡聞ニ達セシニ、倘御心元ナクヤ思召サレケン、板倉周防守ヲ召テ、近日行啓アルベキノ由ヲ仰下サル、周防守申シ上ゲシハ、朝覲行幸ノコトハ其儀大形ノコトナラズ、先關東ニモ申シ遣シ、其儀モタヾサレズシテ、ニワカニ調マジキ由ヲ申シ上ゲシニ、サラバ其コトハ止ラルベシ、禁中ノ辰巳ノ隅ノツイジヨリ、院御所ノ戌亥隅マデ、樋ニテ高廊下ヲ急々ニ申シ付ベシ、禁裡ノ內ヲ行幸ナルハ常ノコト也、廊ヨリ廊ヘウツラル丶コトニ、誰カ行啓ト申スモノ丶、アルベキヤ、早々ニ仕立ベシトテ、終ニ行啓ナリケルトナリ、

〔嚴有院殿御實紀十〕明曆元年九月十五日、京職牧野佐渡守親成に、京都より出す奉書の連署すべ

位階待遇　俸祿賜與

しと仰付らる、

〔東職記聞一〕京都所司代一人　官位從四位下侍從

談海曰、寬文十年七月、永井尙庸入洛、重矩倉○板與之朝天子、奏東歸之狀、天子勅辞臣、賜天盃、爾來當職、以賜天盃爲流例也、其職爲重寄之際殊被撰其器也、帝鑑間雁間重代豪傑、歷大坂城代若年寄、奏者番而補此職也、

〔有司勤仕錄〕京都所司代

被任侍從、往昔ハ從五位也、○中略出府之ロ御城內總下座也、

〔柳營秘鑑一〕諸御役人之次第井官位

一京都所司代○中略御黑書院之御勝手羽目之間ニ罷出、月次之御禮ハ、於御黑書院溜詰衆之次ニ出禮之、表向御規式有之時ハ、老中之次ニ出座被致也、

〔御張紙留上〕所司代御名認候節ハ、殿文字相用不申、文字ニ認候節ハ、殿文字相用候樣、今日右近將監殿、日向守江被仰渡候、

右者御勝手ゟ土井大炊頭殿拜借金之儀ニ付書上之節、本文之通被仰渡、文字相除、認直し上ル、

明和六丑年十月四日

〔吏徵首卷萬石以上〕所司代一人○中略御役知壹萬石

〔台德院殿御實紀五十三〕元和六年、この年○中略京所司代板倉伊賀守勝重、致仕の請をゆるされ、その子周防守重宗、近侍にて書院番頭兼つかふまつりしを、父に襲て京の所司代たらしめられ、これまで所司代に附屬せられし、與力三十騎同心百人を廢し、其年俸を重宗に賜はり、○下略

〔藩翰譜四下田原戶田〕伊賀守忠昌、○中略延寶四年四月三日、京都所司代の職に補せられ、所領加賜り、一萬石越前守に成る、

〔翁草二十五〕京都所司代之事

延寶四年七月ゟ、戸田越前守、此時分ゟ、所司代御役料一萬俵宛被下之、〇又見二類例略要集一

〔吏徵別錄上萬石以上〕所司代　天和元年辛酉十一月十五日、稻葉丹後守正通拜職、依爲部屋住、賜御役料壹萬石、

松平紀伊守信庸

〔諸御役代々記十五〕京都所司代

元祿十五四月十九日出頭ゟ、寶永三戌八月廿五日、御役料壹萬石被下、

〔有章院殿御實紀九〕正德四年九月六日、少老水野監物忠之、京所司代となり、官料壹萬苞下され、從四位下の侍從に叙任し、和泉守と改む、

〔甲子夜話三十五〕享保中ノ土岐美濃守〇頼稔ハ、サマ〳〵ノ事蹟世ニ傳ルコト多キ人ナリ、三萬石ニテ、大坂御城代ヨリ京所司代ヲ連勤シテ、後ニ閣老ニ陞リテ云ニハ、三萬石ノ高ニテ、御城代所司代勤ルハ、用度足ラズ、甚艱困ナルモノナリ、臣ハ勉强シテ勤タレドモ、此後モシ同高ノ者ニコノ役仰付ラレナバ、御役高下サルベシト建白セシトナリ、是ヨリシテ三萬石ノ人ハ、京坂トモ壹萬石ノ御役高出ル事ニ定リシト云、

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

京都諸司代　中興御役料一萬俵、又相止、

〔泰平年表大御所〕文化十二年六月廿七日、大久保加賀守〇忠眞所司代松平右京大夫〇輝延大坂城代を召れ、向後所司代御城代共、高無差別、勤役中壹萬石宛御役知を賜の旨被仰出、

〔元治元年武鑑〕京都御所司代　溜間　御役知壹萬石

〔慶應元年武鑑〕京都御所司代　溜之間　御役知三萬石

十一万石　松平越中守定敬 元治元子、四月

〔東徵[昔卷萬石以上]〕所司代一人〇中略　雲雀三十、雁二、以宿次奉書拜領、〇中略　御暇御刀代金貳拾枚、御馬一疋、〇中略　引越拜借金壹萬兩、

〔憲教類典[三ノ中]二十六〕年號月日無之

御暇拜領物之席〇中略

京都　諸司代

一金廿枚　時服五、羽織、

〔寬の須佐美[追加下]〕篠山侍從〇松平信庸京の司たりしころ、夏ごとに關東より、時服十づゝ給りけり、ある時如例來しかば、ひらき見給へば七有けり、その時、今夜中、一つしたてよとて、翌日の朝、御用對面の間へ、其服を著し出つゝ、昨日關東より下し給りし衣服に候と、諸有司へ色代有けり、その明けの日、大坂城代內藤君より使者來て、昨日關東より給し時服、例より數多く候、是は御方へと取違たるにこそ、卽贈り遣候事なり、頓て答へられしは、さやうの事もや候半、某が心づかず、其儘調じて著して候、然上は取替がたく候、其儘御拜領して然べしとて、返しつかはされける、跡にて初よりかく有べしと思し故、急調して服せしなり、これは江戶にて指札の違ひたるなり、此給物を違たるとて取かはしぬれば、必江戶に聞えて沙汰に及べし、さある時は、是にかゝりたる諸役人、多くとがめらるゝなれば、不安事なりと有しとぞ、

役屋數

〔京都御役所向大概覺書一〕京都諸役人御役屋鋪并組屋敷間數之事

一役屋數上屋鋪 東西百貳拾貳間半、南北八拾壹間程、但艮乾欠有　水野和泉守

一堀川屋鋪 東西五拾貳間半、南北七拾四間程、但艮乾欠有　右同人

一下屋鋪 東西貳百拾間程南北百六拾五間餘　右同人

一組屋鋪 東西百貳拾貳間五尺貳寸南北百九拾五間但艮之方ニ而、東西四拾八間、南北四拾間半欠有、　右同人

任免

〔翁草二十五〕御當家に成慶長の始ゟ、奥平美作守〈○信昌〉所司代被相勤、慶長五年九月廿三日、西六條にて安國寺惠瓊を被捉、其次板倉伊賀守〈○勝重〉慶長五ゟ、

私曰、古町の帳面に如此有と雖、是は誤歟、慶長五に奥平を被仰付、同六ゟ板倉所司代たる事分明也、〈鑑(鑑上恐脱武字)所司代前銘(銘恐錄誤)ニ同八年ヨリトアルハ非カ、〉

同廿年〈○元和元年〉大坂御陣以後迄、元和六年ゟ同周防守〈○重宗〉所司代被仰付、〈○中略〉周防守跡役牧野佐渡守〈○親成〉承應三年上京、九ヶ條の御觸書此時出る、此在役迄は、京都町中の事、所司代に於て一式取計有之處、寛文五年、京都町奉行始て被仰付、其後町方之儀は所司代を離れ、町奉行之支配に成る、〈○中略〉佐渡守跡役、大坂御城代ゟ板倉内膳正〈○重矩〉寛文八年上京、

〔藩翰譜〈六奥平〉〕慶長五年九月、關ヶ原の軍終て後、信昌〈美作守貞能ノ子ナリ〉京都の守護職と成、〈當家所司代を置れし始なり、〉

〔家忠日記增補〈十八〉〕慶長六年九月、此秋〈○中略〉板倉四郎右衞門勝重〈後伊賀守と號す〉加藤喜左衞門をして、京職を掌らしめ給ふ、

〔藩翰譜〈五板倉〉〕慶長六年の春、京都に所司代を置き玉ふべきにて、勝重幷に加藤喜左衞門を撰びて上せらる、加藤は、六條にして本願寺の寺地を賜ふ時に、私の事ありとて罪蒙る、其後は勝重一人職に在り、同き八年二月、大御所〈○德川家康〉將軍宣旨を御拜賀の時、從五位下に叙し、伊賀守に任ず、此頃は關が原合戰の後、天下草創の初めにて、士も民も威にのみ服して、いまだ德に懷かず、まして豐臣家、京近き程にましく〳〵て、都鄙のうち、さすが昔を忍ぶ者の猶少からず、人の心も定まらず、上は一人より三公九卿諸衞百司の事を執し、下は神職寺務、農工商賈の事に至るまで、悉く皆此職にすべ司る、云ふ計りなき要劇の職なれど、事一つとして淹滯なく、物一つとして廢缺なく、天下皆其能を稱せずといふ者なし、

此人の事、世に傳る事極て多し、悉く擧ぐるに暇あらず、當時の智ある人に勝重の事を尋ねし

に、此人の訴を斷わるに、訟へにまけしもの、おのが罪なる事を悔みて、職を恨まずと答へしといふ、此一言にて、此人の才と德とを知るべし、

大坂の兵、再びまで起りしにも、勝重かくて在りければ、王城のうち動きなく、叡慮も殊に安かりけり、元和五年、從四位下侍從になさる、齡既に傾きしかば、職を頻に辭し申けるに因て、同き六年、御許しを蒙て、子息周防守重宗、父が闕に補せられ、勝重年積りて八十三歲、寛永元年四月廿九日に卒しけり、

勝重頻りに職を辭しけるに、將軍家、今暫くかくて候へ、いまだ汝に代りて此職をさむべき人なしと仰られて御許あらず、なほ請ふ事止まざれば、されば汝に代るべき人を選みて薦めよ、いまだ其人を得ずと仰せ下さる、勝重、都に候ひて、多くの御家人の事、如何で知るべき、此程の人の中に、などか其人のなかるべき、よく人々に御尋ねあるべきにて候、さりながら、なほも勝重に進申せと侍らんには、子にて候ふ周防守重宗は、嗇夫の首きるべき者には候はず、若し彼を以て父が闕に補せらるべく候やと申ければ、將軍家大に悅せ玉ひ、重宗を召して京職に補せられ、勝重御免を蒙る、重宗辭し申けれども、子を知るは父に若かずといふ事あり、汝が父の薦めにてあれば、辭する所あらじと仰せ下されしかば、力及ばず、重宗なく〳〵父に向ひ、重宗如何で此職に堪へ候べき、なさけなうも御推擧に預り候者かなと怨みかこつ、勝重打笑うておことは世話を知り玉はぬよな、爆火(ハネビ)を子に拂ふといふ事は、此父が事にて候ぞと答へしといふ、

周防守重宗は、勝重が嫡男なり、〇中略元和六年、三十五歲にて、父が薦めに依て京職に補せられ、一說に、元和五年十月と云、職に在りし事凡そ三十餘年、人の敬ふ事神明の如く、愛する事また父母に似たり、父も子も同じ名臣にて、君の寵恩尤も厚く、位從四位の上に昇り、官左近衛權少將に進む、承應三年

十月廿九日に御免を蒙て、明暦二年八月四日、下總國關宿の城を賜ひ、（五萬石、按ずるに、重宗職とけしこと、承應三年たるのよし、諸役人系圖、并に諸役人帳に載する所なり、明暦元年の日記を按ずるに、八月廿六日、牧野佐渡守に、寄騎五十人同心百人を預けらる、十月十二日御暇を給ひ、十一月十六日、板倉周防守が家に移ると云々、然れば板倉牧野が交替は、明暦元年の冬と見えたり、）同き年十二月朔日、七十一歲にて關宿の城に卒す、

此人の職にありし時の名譽、天下の稱する所、また擧て數ふべからず、其要を取て一條をこゝに註す、重宗職に任じて後、毎日に決斷所に出づるに、西面の廊下にして、遙に拜する事ありて決斷所に至る、此所には茶磨一つをすゑ置き、明障子を引たてゝ、その內に坐し、手づから茶ひきながら訴を聞分つ、人みな此事どもを不審しあへり、されども問ふ事も得ならず、はるか年經て後問ふ人ありしに、答へて曰く、まづ決斷所に出る時に、西面の廊下にて拜する事は、愛宕の神を拜するなり、（○中略）また訴へを判つ事の明かならぬは、我心の事にふれて動くが故なりと思ひなしぬ、よき人は、自ら動さゞらんやうこそあらめど、重宗それ迄の事は叶ひ難く、たゞ我心の動くと靜なるとを試るには、茶をひきて知る、（○中略）また明障子を隔てゝ、訴へを聞く事は、凡そ人の面貌を打見るに、憎さげなると憐がましきとあり、かたましきあり、其品多くして、いくらといふ數を知らず、（○中略）見る所に就て、心おほはるゝ事多し、またさなきだに訟への庭に出でんには恐ろしかるべきに、まして生殺を掌る人を見ては、まばゆくいぶせくて、おのづから云ふべき事も得いはで、罪にも科にもあふ人あらんと思へば、所詮互に面を見も見られもせぬには若じと思ひて、かくは塵を隔つるにて候と答へしとなり、そも〳〵日々に神明に祈りて、私なからん事を盟ひ、まづ我心を內外より養うて、正しくなして、其後に訴へを聞き致をなす、是をかしながら、君に事ふるに力を盡せしが致たす所なれば、古への循良の吏といふとも、如何で此人に過ぐべき、

〔常山紀談二十〕板倉周防守重宗、京の所司代たりしが、江戶に下りける時、松平信綱、（○老中）對面し、

公方にも政事に御心を盡され候、京都の事も委細に聞し召度候、是より後は、同職にさし越れ候書狀、京都の事、詳に記され候へといひしに、周防守、百二十里の行程隔りたる事、何程に聰明におはしますとも、及びごしなる事は得知し召れじ、其故に周防守を京に指置れ候事なれば、申上るに及ばずと答へたるを、さては周防守は致身ものなりと感せさせ給ひけり、

〔藩翰譜五板倉〕主水重矩、〇中略寛文八年二月の朔日、假に京職の事を行ふべきよしを奉る、政務の事猛を以て寛を救ふ、法皇〇後水尾殊に其能を稱しさせ給ひ、叡感の事多し、

〔常山紀談二十〕重矩〇板倉は、伊賀守勝重の孫にて、島原に於て討死有りし內膳正の子、周防守重宗の從子なり、瞎(カタメ)にて長卑く、以の外見ぐるしき人なりしかども、有德賢才のきこえありて、〇中略執政の職を仰蒙られけり、同八年、〇寛文京都所司代牧野佐渡守正親のかはり仰出さるゝ、內、えばし內膳正〇重矩をもつて京都の事を司らしめ給ふ、上京の後參內の事あり、此禮儀、御簾を半〻卷上らるゝ例なれども、內膳正、恐懼すべき事なれど、天顏に咫尺し奉るの名有て其實なし、御簾を高く卷上られ候へと奏聞有しに、尤なりとの勅にて、御すだれを高く捲上らるゝ事、內膳正一人なりしとぞ、

〔翁草五十七〕一牧野河內守、〇英成京都所司代の節、洛の町にて兎や角批判の事有けるに、退役の時、河ちどり立は嬉しく思へども、など雁金の歸らぬぞうき、其跡土岐丹後守、〇頼稔仰付られしかば、紋ききやう又かるかやで有まいか牧やかしはを見るにつけても、柏は牧野の紋、桔梗は土岐の紋也、

〔諸御役代々記十五〕京都所司代

奥平美作守信昌 始九八郎
慶長五子九月廿日、御當家所司代始而被仰付、

加藤喜左衛門正次
慶長六卯二月十八日、有故後改易、

板倉伊賀守勝重始四郎左衞門
慶長六卯二月十八日、町奉行より、元和六未年依願御免、○中略

板倉周防守重宗
元和六申十一月廿八日、御小性組番頭ゟ、(中略)後願ニ付御免、○中略

牧野佐渡守親成
承應三午十一月廿八日、壹萬石御加增、御側衆ゟ、與力同心始め御預り、寛文八申五月十八日病死、

板倉內膳正重矩
寛文八申五月十八日、御老中より、同十戌二月十四日加判之列江歸役、

永井伊賀守尚庸
寛文十戌二月十四日、壹萬石御加增、御若年寄ゟ、延寶四辰四月十二日(中略)御役御免、

戶田伊賀守忠昌改越前守
延寶四辰四月三日、壹萬石御加增、寺社奉行ゟ、天和元酉十一月十五日、御老中江

稻葉丹後守正通
天和元酉十一月十五日、三萬石御加增、寺社奉行ゟ、同十二月朔日侍從、貞享二丑九月三日(中略)御免、

土屋相模守政直
貞享二丑九月三日、大坂御城代より、同四卯十月十三日、御老中江

內藤大和守重頼
貞享四卯十月十三日、大坂御城代より、元祿三午十一月廿七日、於京都卒、

松平因幡守信興
元祿三午十二月廿六日、壹萬石御加增、大坂御城代ゟ、同四未閏八月十三日、於京都病死、

小笠原佐渡守長重
元祿四未閏八月廿六日、寺社奉行より、同十丑四月十九日、一萬石御加增、御老中江

松平紀伊守信庸
元祿十丑四月十九日、出頭ゟ、(中略)正德四午九月十六日、御老中江

水野監物忠之改和泉守
正德四午九月六日、若年寄ゟ、享保二酉九月廿七日、御老中江

松平伊賀守忠周
享保二酉九月廿七日、詰衆ゟ、同九辰十二月十五日、御老中江

牧野因幡守英成改佐渡守、又改河內守
享保九辰十二月十五日、寺社奉行ゟ、同十九寅六月六日、病氣依願御免、

土岐丹後守頼稔
享保十九寅六月六日、大坂御城代ゟ、寛保二戌六月朔日、御老中江

牧野越中守貞通改備後守
寛保二戌六月朔日、寺社奉行ゟ、寛延二巳九月十八日、於京都卒、

松平豐後守資門〇門一本作訓
寛延二巳十月十五日、御奏者番より、(中略)寶曆二申三月廿六日、於京都病死、

酒井讃岐守忠用
寶曆二申四月七日、大坂御城代より、(中略)同六子四月十日、江戶ニ而御免、伺之上差扣、

松平左京大夫輝高
寶曆六子五月七日、大坂御城代ゟ、(中略)同八寅十月十八日、御老中江

井上河内守正賢　寶暦八寅十一月廿八日、大坂御城代ゟ、(中略)同十辰十二月三日、御老中江、

阿部伊豫守正右　寶暦十辰十二月三日、寺社奉行より、(中略)同十四申五月朔日、若君樣御老中江、

阿部飛驒守正允　明和元申六月廿一日、大坂御城代より、(中略)同六丑八月十八日、西丸附御老中江、

土井大炊頭利里　明和六丑八月十八日、寺社奉行より、(中略)安永六酉八月十四日、於京都卒、

久世出雲守廣明　安永六酉九月十五日、大坂御城代より、(中略)天明元丑閏五月十一日、西丸御老中江、

牧野越中守貞長　天明元丑閏五月十一日、大坂御城代より、(中略)同四辰五月十一日、御老中江、

戶田因幡守忠寬　天明四辰五月十一日、大坂御城代ゟ、(中略)同七未十二月十六日、不埒之義有之、御役御免差扣、

松平和泉守乘定　天明七未十二月十六日、御奏者番ゟ、(中略)寬政元酉四月十一日、御老中江、

太田備中守資愛　寬政元酉四月十一日、若年寄ゟ、(中略)同四子八月七日、病氣依願御免、○中略

堀田相模守正信後改大藏大輔　寬政四子八月廿七日、(中略)大坂御城代より、(中略)同十午十一月六日、病氣依願御免、

牧野備前守忠精　寬政十午十二月八日、大坂御城代より、(中略)享和元酉七月十一日、御老中江、

土井大炊頭利和　享和元酉七月十一日、御奏者寺社奉行より、(中略)同二戌十月十九日、御老中江、

青山下野守忠裕○裕一本作祐　享和二戌十月十九日、大坂御城代より、(中略)同四子正月廿三日、御老中江、

稻葉丹後守正謀　享和四子正月廿三日、大坂御城代より、(中略)文化三寅八月四日、於京都卒、

阿部播磨守正由　文化三寅十月十二日、大坂御城代より、(中略)同五辰十一月廿二日、於京都卒、

酒井靫負佐忠近改讃岐守　文化五辰十二月十日、御奏者寺社奉行兼帶より、(中略)同十二亥四月十五日、御老中江、

大久保加賀守忠眞　文化十二亥四月十六日、大坂御城代ゟ、(中略)文政元寅八月二日、御老中江、

松平和泉守乘寬　文政元寅八月二日、御奏者番寺社奉行兼帶ゟ、(中略)同五午九月三日、御老中江、

內藤紀伊守信敦　文政五午九月三日、若年寄ゟ、(中略)同八酉四月八日、於京都卒、

松平周防守康任　文政八酉五月十五日、大坂御城代ゟ、(中略)同九戌十一月廿三日、御老中江、

與力 同心

文政九戌十一月廿三日、大坂御城代より、(中略)同十一子十一月廿二日、西丸御老中江、
文政十一子十一月廿二日、大坂御城代ゟ、(中略)天保二卯五月廿五日、西丸御老中江、　松平伯耆守宗發
天保二卯五月廿五日、大坂御城代より、(中略)同五午四月十一日、西丸御老中江、　太田備後守資始
天保五午四月十一日、大坂御城代ゟ、(中略)同八酉□月□日、西丸御老中江、　松平伊豆守信順
天保八酉五月十六日、大坂御城代ゟ、(中略)同九戌四月十一日、(中略)西丸御老中江、　土井大炊頭利位
天保九戌四月十一日、大坂御城代より、(中略)同十一子正月十三日、西丸御老中江、　間部下總守詮勝
天保十一子正月十三日、御奏者番寺社奉行兼帶ゟ、(中略)同十四卯十一月五日、御老中江、　牧野備前守忠雅
天保十四卯十一月五日、御奏者番寺社奉行兼帶より、　酒井若狹守忠義

水野左近將監忠邦〔後ニ越前守〕

〔嘉永明治年間錄 一〕今年(○嘉永五年)　有司鑑抄

京都所司代　嘉永四亥十二月台命　播州龍野、高五萬千石餘、脇坂淡路守安宅、

〔嘉永明治年間錄 十六〕慶應三年十二月、京都守護職、所司代、幷ニ諸役ヲ廢ス、

京都守護職、所司代、幷に諸役人、御役御免、御所内、關東の者一人も立入申間敷事、

〔吏徴附錄 郡職〕所司代組、與力五十人、同心百人、　明暦元年乙未八月廿六日、始置、與力五十騎、同心百人、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之都

京所司代與力
現米八十石

同　同心
同十石三人扶持

〔嚴有院殿御實紀 十〕明暦元年八月廿六日、京所司代牧野佐渡守親成に、與力五十騎、同心百人を附屬せらる、

○按ズルニ、京都所司代ニハ、初メ與力三十騎、同心百人ヲ附シ、元和六年ニ之ヲ廢セシガ、此ニ

禁裏附職員職掌

至リ再ビ之ヲ置キシナリ、上ノ俸祿賜與ノ條ニ引ケル、台德院殿御實紀ヲ參看スベシ、

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數并役高組支配大槪

一禁裏附　貳人 役料千五百石、與力十騎、同心四十人ヅヽ

〔東職記聞一〕禁裏附二人

仕京都掌奉禁中一切御用之職也、人別領與力五人同心二十人也、

〔柳營秘鑑二〕遠國御役人常詰并交代之場所

一禁裏附　右同斷 ○妻子引越之常役、五六年一度出府御目見、暫時在江戸、

〔明良帶錄後篇〕禁裏附

隊卒を率ゐて禁裏を守護す、非常の節心得有、且禁裏御取締向、御入用筋の事を關り聞て、公家の怠慢にも關る、公家の卑俗の遊行を禁す、

〔半日閑話一〕禁裏附勤方

每日參內也、內々之番所の近所に用部屋有、此所に用帳有、御機嫌之樣子、其外禁裡諸用の分承屆、帳面に付、禁裏相替義有之時は、諸司代へ申上る、禁裏用多時は、終日此所に勤む、唐門、日の門、御所、此三ヶ所御門に、與力同心番を勤む、一ヶ所の門に、與力二人同心四人づゝ、晝夜勤、若禁中より上﨟衆、里へ下り候時は、禁裏附の衆より切手出る、無左候而は、御門番之與力頭へ申送る、禁門の義、役人の外、公家衆たりとも、禁裏附之衆に被斷では出入不相成、御神事之時は、其役人を目錄に仕、與力へ渡し置候而、頭衆之印判也、禁裏神事又は正月節會之時は、所司代より加番を勤む、所司代左近櫻の元に勤む、土地に圓坐に居す、禁裏附の衆其次に居す、京洛火事之節は、不依遠近禁裏附與力共御門へ相詰、頭は常々用所に相詰、御機嫌伺、御築地之內、總御門番、禁裏附より下知之事、御築地內にて、喧嘩口論、并徒者有之時は、生捕、奉行へ相渡候事、御上使之節は、所司代同道、尤禁裏附

待遇 俸祿

之來、案内參内也、大名來官位昇進、御禮使者之砌は、禁裏へ申來る、内証にて不ㇾ濟義は、江戶へ申遣す、禁裏、院中、門跡、宮方、總而一切之事皆如ㇾ此、禁裏附承る也、

〔大猷院殿御實紀 五十五〕寛永二十年九月朔日、けふ禁裏附高木善七郎守久、天野豐前守長信に、御黑印の條約を下さる、其文にいふ、禁中の事は、長橋局幷に兩傳奏へ伺ひて、先々の作法を守り、萬事京職板倉周防守重宗指揮に任すべし、何事によらず、守久長信商議し、若思慮に及びがたき事あらば、京職に伺ひて決すべし、つかふまつる所各別といへども、おもふ旨あらば女院附大岡美濃守忠吉、野々山新兵衛兼綱、新院附榊原一郎右衛門元義、中根五兵衛正次と相互にはかりあふべし、官位其外表たゞしきことは傳奏の職なれば、兩人密奏なすべからず、禁中常に出入する表裏の三門は、隊下の同心をして守らしめ、警火おこたるべからず、諸雜費内外とも、長橋の局もて仰出さるゝ事は、先規のごとく疎略あるべからず、若新儀の事、兩人はかりがたきは、京職に告て指揮に任すべし、萬事の費、五畿内奉行五味金右衛門豐直より、先々の如く兩人の券もて其時に臨み受とるべし、會計は、兩傳奏幷に京職に告て、其年限に極むべし、奥方幷に庖所等費用は、其吏より兩人に達し、兩人撿査のうへ、其年限に會計を極め、其簿書を京職のもとへ呈すべし、堂上及び女房等、幷に地下諸役人に至るまで、先規の作法をそむくものあるか、又は新奇のことは、京職に告て江府へ聞え上べしとなり、

〔東職記聞 一〕禁裏附二人　從五位下

相傳云、當職之相當、布衣也、自ㇾ禁中賞ㇾ賜爵、此詔下則達ㇾ將軍家之内聽、而可ㇾ任ㇾ叡慮ㇾ之奉書到來之後受ㇾ爵也、

〔吏徵 上 布衣以上〕禁裏附二人　老中支配　芙蓉間　諸大夫　京都在住　千石高　御役料千五百俵、（三千石以上八百俵）御暇金五枚、時服三、羽織、　引越拜借金三百兩

役屋數

〔明良帶錄後篇〕禁裏附千石高御役料千五百俵、千石以下の者被二仰付一候得者、千石高被二成下一、御役料千五百俵被レ下、三千石以上は、御役料八百俵、

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月十五日　禁裏附〇中略

千石ゟ以下之者ハ、向後千石高御足高被レ下之、御役料ハ、只今迄之通被レ下之候、以上、〇中略

元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人幷御足高御役料定

御役料千五百俵　禁裏附

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不レ被レ下、是迄之場所高ニ不レ拘、

今度御改正、別紙之通御役金被レ下候旨被レ仰二出之一、

御役金被レ下高之覺〇中略

一金貳千兩　禁裏附

但高ニ不レ拘被レ下

〔京都御役所向大概覺書一〕京都諸役人御役屋鋪幷組屋敷間數之事

一元百萬遍屋鋪役屋數　禁裏附　久留伊勢守

東西三拾八間五尺　南北貳拾壹間五尺
東西三拾五間四尺　南北七間五尺

一同所組屋鋪　右同人

此坪貳千百三拾四坪

一相國寺門前石橋町役屋數　同斷　小宮山丹後守

東西北ニ而四拾壹間六尺　南ニて四拾貳間五尺　南北東ニ而貳拾貳間一尺　西ニ而貳拾四間六尺

任免

一同所組屋鋪
　北ノ方東西八拾七間南北四拾四間　南ノ方東西拾九間貳尺南北貳拾六間　但入込有　右同人

一元百萬遍屋鋪之內組屋鋪
　南北四拾六間東西拾三間　南北拾五間東西拾三間　但入込有　右同人

〔嚴有院殿御實紀五十〕延寶三年五月二日、在京の役人、官宅修理の料をたまふ、禁裏附石谷長門守武清、牧野攝津守成喬、〇中略七貫目、

〔營中御日記十七〕寛永二十年八月晦日、御座之間御役替、〇中略當今御所附へ、御加增七百石被下、天野豐前守、千石御加增高木善七郎、

〔東職記聞一〕禁裏附二人

元寛日記寛明日記同說曰、寛永二十年八月、以天野豐前守長信、高木伊勢守守久兩人、被補之也、當職之號、先是無所見、則始于玆乎、

〔諸御役代々記十五〕禁裏附

寛永廿未八月晦日、女院御所附ゟ、承應三午十一月病死、　天野豐前守長信

承應三午十一月廿八日、(中略)御目付ゟ、寛文十一亥十二月十八日、御作事奉行江、　青木新五兵衛義綱(改遠江守)

寛文十一亥二月、(中略)御使番ゟ、同十三丑二月十三日、(中略)京都町奉行江、　前田半右衛門直勝(改安藝守)

寛文十三丑三月廿九日、(中略)御目付ゟ、延寶七未十二月廿六日、御役御免、　石谷五右衛門武清(改長門守)

延寶八申二月六日、(中略)御書院番組頭より、天和二戌五月病死、　石川彥五郎成久(改信濃守)

天和二戌六月廿七日、(中略)御使番ゟ、元祿十一寅五月廿七日、病氣依願御免、　久留島左兵衛通定(改出雲守)

元祿十一寅五月廿八日、(中略)御目付より、正德三巳二月廿九日、京都町奉行江、　山口孫次郎直重(改安房守)

正德三巳二月廿九日、(中略)御目付より、享保八卯三月十九日、病氣依願御免、　小宮山庄九郎昌方(改丹波守)

松平與左衛門忠一改石見守　享保八卯四月六日、御使番より、元文四未七月朔日、御持弓頭江、

曾根五郎兵衛澄次改因幡守　元文四未七月朔日、御徒頭より、寛保二戌六月十一日、御役被召放、〇中略

田中一郎右衛門勝方改昇年改出羽守　寛保二戌六月十五日、御小性組(中略)與頭ゟ、寛延四未十月廿八日、小普請組支配江、

長田山城守元鋪改越中守　寛延四未十月廿八日、御先手鐵炮頭ゟ、明和四亥正月十五日、御普請奉行江、

天野助次郎正景改近江守　明和四亥正月廿八日、御持筒頭より、安永六酉六月十五日、御旗奉行江、

渡邊喜右衛門直改筑後守　安永六酉六月廿一日、御使番より、天明五巳三月廿九日、病氣依願御免、

建部甚右衛門廣般改大和守　天明五巳四月十一日、御先手鐵炮頭より、寛政元酉七月廿八日、御持弓頭江、

有田與九郎貞勝改播磨守　寛政元酉七月廿八日、御廣敷御用人ゟ、同六寅九月十二日、清水家老江、

神保四郎右衛門長孝改紀伊守　寛政六寅十月三日、御目付より、同十午十一月十六日、病氣依願御免、

曲淵和泉守景露甲斐守伴　寛政十午十二月廿三日、新番頭ゟ、(中略)同十一未十二月廿七日、京都町奉行江、〇中略

加藤玄蕃則陳改相模守　寛政十二申正月十一日、御先手弓頭より、享和元酉四月十八日、於京都病死、

池田雅次郎政貞改筑前守　享和元酉五月朔日、御先手鐵炮頭ゟ、文化六巳八月二日、新番頭江、

土屋長三郎正備改筑後守　文化六巳八月十二日、佐渡奉行より、同十五寅四月廿四日、日光奉行江、

渡邊喜右衛門幸改筑後守　文政元寅五月十九日、西丸新番頭より、同五午十二月朔日、西丸御留守居江、

松平左金吾定節改伊勢守　文政五午十二月朔日、西丸御目付より、同十亥八月九日、京都町奉行江、〇中略

後藤佐渡守行明　文政十亥八月十七日、兵部卿殿家老ゟ、同十一子六月廿四日、御持筒頭江、

野一色外記茂傳改信濃守　文政十一子七月八日、西丸御目付より、天保四巳七月八日、新番頭江、

中根平十郎正摸改壹岐守　天保四巳七月八日、西丸御目付より、同八酉十二月廿七日、西丸御持筒頭江、

田村隼人顯彰改伊勢守　天保九戌正月廿八日、西丸御目付より、同十三寅九月(中略)京都町奉行江、

渡邊小膳尙改筑後守　天保十三寅十一月八日、西丸御目付より、

任免	姓名
弘化三午年七月廿八日、御先手頭より、	内藤安房守
同	
寛永廿未八月晦日、御目付より、明暦四戊三月病氣依願御免、	高木善七郎久延改二伊勢守一
明暦四戊五月六日、(中略)御目付方、寛文二寅七月十八日、病死、	小田切喜兵衛順直改二土佐守一
寛文二寅八月十九日、(中略)御目付より、延寶二寅六月廿九日、病氣依願御免、	服部久右衛門且常改二備後守一
延寶二寅七月九日、(中略)御使番方、同九酉六月十九日、御役被二召放一、	牧野監物成時改二攝津守一
延寶九酉七月廿六日、(中略)御先手鐵炮頭方、貞享四卯十月十三日、御鑓奉行江、	佐野吉之丞正行改二修理大夫一
貞享四卯十一月十五日、御目付より、(中略)元祿九子三月廿六日、病氣依願御免、	須田市兵衛盛輔改二大隅守一
元祿九子三月廿八日、(中略)御目付方、同十四巳八月十八日、大坂町奉行江、	松野八郎兵衛助茂改二河内守一
元祿十四巳八月廿八日、(中略)御目付方、寶永七寅十月九日、病氣依願御免、	曾根五郎兵衛長賢改二能登守一
寶永七寅十月十九日、(中略)御目付より、享保十巳九月廿五日、病氣依願御免、	久留十左衛門正清改二伊勢守一
享保十巳十月十八日、御使番より、同十一午正月(中略)十七日、病死、	川勝刑部廣豐
享保十一午二月三日、寄合より、同十四酉十月廿二日(中略)小普請入、	村上市正正直
享保十四酉十一月十八日、西丸御書院番(中略)組頭方、元文六酉正月十一日、御持弓頭江、	桑山猪兵衛元武改二丹後守一
元文六酉正月十一日、御徒頭より、延享三寅三月十二日、病氣依願於二京都一御免、	三枝傳藏守隆改二伊勢守一
延享三寅四月朔日、御小性組(中略)與頭より、寶暦六子三月廿二日、小普請奉行江、	山木五郎左衛門正信改二筑前守一
寶暦六子四月朔日、御小性組(中略)與頭より、明和六丑六月十七日、御持弓頭江、	田付又四郎景林改二筑後守一
明和六丑六月十七日、西丸御目付より、同八卯八月十八日、於二京都一病死、	松平舍人康衆改二肥前守一、又改二信濃守一
明和八卯九月廿八日、小普請組支配方、(中略)安永四未六月廿一日、病氣依願御免、	高力式部長昌改二土佐守一
安永四未七月朔日、駿府町奉行方、同五申七月□日、病氣依願御免、	永井釆女直該改二甲斐守一

與力同心

安永五申七月廿日、御腰物奉行より、(中略)寛政三亥五月廿三日、御先手鐵炮頭江、	水原善次郎保明改二攝津守一
寛政三亥五月十一日、御目付より、同九巳九月十九日、御持筒頭江、	市谷市右衛門清茂改二肥前守一
寛政九巳九月十九日、西丸御目付より、享和二戌八月八日、日光奉行江	丸毛勘左衛門利隆改二長門守一
享和二戌八月廿八日、御目付より、文化八未閏二月十二日、日光奉行江	小島孫右衛門正苗改二安藝守一
文化八未閏二月廿四日、西丸御先手鐵炮頭より、同十四丑正月廿日、以二奉書一仙洞附江	渡邊久藏胤改二河内守一
文化十四丑二月二日、御留守居番より、文政三辰八月十三日、京都町奉行江○中略	曾我七兵衛助弼改二豐後守一
文政三辰九月十日、御目付より、同八酉五月九日、病氣依レ願御免、	森川金右衛門氏昌改二美濃守一
文政八酉六月朔日、御廣敷御用人より、(中略)天保二卯四月十一日、奈良奉行江○中略	梶野土佐守良材
天保二卯四月廿八日、御持筒頭より、同三辰六月十七日、病死、	本目帶刀正珍改二讃岐守一
天保三辰七月十七日、西丸御目付より、同四巳十二月廿七日、御先手弓頭江	竹川善兵衛明直改二飛驒守一
天保四巳十二月廿七日、御使番より、同十三寅八月廿日、西丸新番頭江	小笠原兵庫信賢改二安藝守一
天保十三寅八月廿四日、御簾中様御用人ゟ、	明樂大隅守茂正
嘉永二酉二月八日、御先手鐵炮頭より、	內藤遠江守正介

〔吏徴附錄 郡職〕禁裏附組與力廿人、同心八十人、一組與力十人、同心四十人、寛永廿年癸未八月晦日始置、一組與力五騎、同心廿人、

〔嚴有院殿御實紀 五十六〕延寶六年三月晦日、禁裏附附屬の與力五騎足輕十人をまして、與力十騎足輕四十人たらしめらる、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

現米六十石　京禁裏附與力

同七石三人扶持　同　同心

禁裏賄頭
庖所頭

〔光臺一覽二〕抑又禁中に常住仕へ奉る士は、先御賄頭は諸大夫なり、是は三百石位之衆、御旗本之内、御寄合衆などの內より差登さるゝ事也、爰に味有事之候、關東より被差登候刻は、人を撰被仰付候得共、萬一御所之首尾あしく候得ば、元來傍輩之好なれば、御附之武家に挨拶病氣分として、御所の御暇を申うくる事也、奥向兼て期したる事なれば、何事なく御暇被下處、關東へも屆には病氣に付、禁裏御臺所御暇願申上候處、早速御暇被下置候段申遣處、關東より御返答に、病氣に付御暇申受候處、首尾能被仰出候由重疊之事に候、江戸表江立歸候には及不申候、於其地寛々養生可仕段被仰下、御事定格なり、是や世俗にいふ天竺浪人とかや申べきか、大切なる御奉公なり、首尾能相勤、禁中隨逐仕れば、子孫に至り家督相續して、何の別條もなく相勤る事なり、後日の浪人を關東より御差構無之事味の一也、夫故に關東より罷登り、御堂上方の勝手も覺へ候上、有職等心掛、何にても地下被官の株をうけつぎ置候へば、すはといふときの爲となる事なれども、是も身構する樣に相聞へ、面立ては關東の思召を憚り、手を廻して、ぬら付申事ぞかし、此相役は御取次之內より一人、御賄頭兩人なり、毎日御臺所へ相詰る事なり、

〔吏徵上 御目見以上〕禁裏御賄頭一人　禁裏附支配　京都在住　百俵三人扶持高、御役料百俵、御暇金壹枚、時服貳、　引越料金五十兩

〔憲敎類典二ノ五 御役〕文久三戊午年三月廿日

一遠國御役人并御足高御役料定

百俵高五人扶持　　禁裏御賄頭

〔吏徵別錄下 御目見以下〕禁裏御賄頭〇中略　寛政七年乙卯七月十九日、百俵三人扶持高、御役料百俵、

〔大猷院殿御實紀五十五〕寛永廿年九月三日、禁裏新院に、庖所頭、賄頭、各一人つけらる、　十五日、今度內并に新院に附られたる庖所の輩、賄の者等が、これまで下されし歲俸月俸は、其子に下さる

る旨傳へらる、

〔貞享三年新撰公家要覽〕御。賄。方。頭。　帶刀 佐原織部正

〔吏徵別錄 下 御目見以下〕禁裏御賄頭　安永三年甲午八月九日、始置二一員一、坂野喜右衞門 元支配勘定

〔秘令類纂 二集 二〕安永三甲午年八月、大炊頭殿御渡、

京都町奉行 山村信濃守 良旺
禁裏御附 天野近江守 景正

御所役人取次以下私欲之筋、此度吟味之上、夫々御仕置被二仰付一候、一躰御所向役人ども、風儀不レ宜、私曲之儀をも、前々より仕來と心得違、不法之儀共有レ之趣ニ付、以來御取締方之儀、兩人申談、是迄之仕來に而も、不レ宜儀者相改、御所役人共、不正之勤方、正當に相成候樣取計宜敷、都而御入用向之儀者、向々より所司代へ申立候分、不レ依二何事一、兩人へ相達に而可レ有レ之候間致二吟味一、存寄之趣可レ被二申達一候、依レ之此度從二江戸一、禁裏御賄頭壹人、幷勘定、買物使兼役之者貳人被二仰付一、被二差遣一候、輕き役所へは信濃守同心三人出役之積、猶御入用筋爲二吟味一、御勘定奉行支配、京都取調役人被二仰付一被二差遣一候間、諸事兩人之手ニ付致二差圖一、御取計宜敷被二申談一可レ被二取計一候、

〔翁草 百五十一〕禁裏御賄の儀は、御所々々大抵御分量有て、御代官小堀數馬方にて、月々の御勘定を仕上げ、帳面を作り町奉行へ差出、町奉行に於レ之を算當して、相違なければ其帳面を所司代へ差出し、所司代ゟ關東へ言上有る也、然に月々臨時の御物入多く、禁裏御物成銀にては、始終御不足なる故に、餘銀を以御取替被レ置、其秋の御收納は直に其冬ゟ春迄の御賄料となれ共、無レ程御遣ひ切と成故、又餘銀にて御取替に成る、畢竟御取替と申は名目計にて、御不足之分は足シ被レ進、實は渡り切なれ共、名目を御取替と唱ふる事也、浩る温和なる御風俗に誇りて、御賄掛りの役人不廉直多く、先年も餘り過分の御物入の節、公儀ゟ少し其御沙汰有レ之けるに、結局

膳番

板元

其翌月、尙御入用增ける儘、熱に御綺(イロヒ)有ては、盆御入用累るに仍、其後は一向其御さたにも及れず、是上々に實に御不足ならんは如何せん、全く左には非ず、役人の私曲重疊して、何方ゟも察當なきに乘じて、おもふ儘に擧動、譬ば諸の御買上物に、二重證文を賣人に書せ、若干高直の證文を以御勘定に立る、其身の榮耀歡樂は云べからず、下司の者迄も、十手の指す香超過して關東に聞え、安永三年、京町奉行山村信濃守始て上京之節、台命を奉つて罷登られ、所司代土井大炊頭へ奉書を以御下知有之、御賄頭を始、御賄懸りの者共悉く召捕れ、夫々揚り屋入、一々糺明せらるゝ處に、一言の申披無之、重立候者共、牢內に於て死刑に處せられ、或は流刑に謫せられ、下司の輕きに至迄、追放國中拂等に成り、而して關東ゟ御勘定役人餘多登り、更に御賄方を勤む、御賄頭には江戶御勘定御目付之者を被任、其餘は支配勘定以下の輕き役人を、差登せられ、夫夫欠役を勤め、此御吟味掛山村信濃守、幷禁裏御付天野近江守立會、之を頭取て支配し、總て京都御入用事の取極りを相兼、是迄一々江戶へ相伺出し、小事は向後京都に於、評定を遂執計べしとて、與力同心にも此懸り役人出來、一件吟味相濟ぬ、

〔安政三年雲上明覽上〕御賄頭　鈴木權十郎　松野三平二

御。賄。方。　重民部〇以下五人略

〔慶應元年都仁志喜一〕御賄頭　高津義一郎〇中略

御賄方　御勘使格　重民部〇以下五人略

〔光臺一覽二〕御料理人御膳番十人餘あり

〔安政三年雲上明覽上〕御膳番　佐々木刑部大丞〇以下四人略

〔慶應元年都仁志喜一〕御膳番　岡田右兵衞尉〇以下四人略

〔光臺一覽二〕御煮方板元十人計、其他彼等頭〇賄之下役少々有之、御勘使以下之士、賀茂、下鴨、松尾等

勘使買物使

之氏人、又洛中町居住之御奉公人なり、

〔天保三年雲上明鑑上〕御板元吟味役　早川内膳

〔天保三年雲上明鑑上〕御板元　桑原勘左衛門〇以下十三人略

〔安政三年雲上明覽上〕御板元吟味役　遠藤内記〇以下二人略

御板元　小谷隼太〇以下三人略　同遠藤主計〇以下六人略　同遠藤俊三郎〇以下四人略

〔文久二年雲上明覽上〕御板元吟味役　遠藤木工〇以下二人略

御板元　遠藤貢〇以下三人略　同表掛　早川正親〇以下六人略　同見習　福田郁太郎〇以下四人略

〔光臺一覽二〕御勘使、買物使、小間使、皆各平士なり、

〔吏徴別錄御目見以下下〕御所勘使、買物使兼、　安永三年甲午八月九日、始置二二員一、山中郡七、高橋八十八、五十俵三人扶持高、役金二十兩、禁裏附支配、進物取次上番格、　同五年丙申十月十三日、增二一員一、保田定二郎、

〔明良帶錄外篇〕勘使買物使五十俵三人扶持御役金二十兩

古例は兩人づゝ、同役より來り、上京して勤る役也、交代なし、昔は御數寄屋より坊主六人持なり、當時は退役と成る、

〔吏徴御目見以下下〕御所勘使、買物使兼一人、　禁裏附支配　五十俵三人扶持高　役金貳拾兩　御暇銀拾枚　引越料金三十兩　燒火間、上下役、〇中略　京都在住

〔天保三年雲上明鑑上〕御勘使御買物使

大森善次郎　神谷幸藏　小野兵部丞　佐々木大盥物

〔安政三年雲上明覽上〕御勘使兼御買物

中村雅太郎〇以下三人略

使番

〔光臺一覽〕二鳥飼衆、今は御使番と云、三十四五人も有之、諸大夫御使この衆也、

〔嘉永五年雲上明覽〕上御使番番頭

飯室左衞門大尉　北大路內匠　服部主膳

〔安政三年雲上明覽〕上御使番頭　河內左兵衞尉　中川宮內　宗岡式部丞

〔慶應元年都仁志喜〕一御使番頭　伊藤左衞門　山西連　水谷左衞門尉

禁裏入用取調役

〔明良帶錄外篇〕禁裏御入用取調役

御三代の頃迄は、北面の侍也、今は進物取次上番より被仰付るゝ也、諸事禁裏附奉行の差圖意に任すべし、諸役人之席、知らざる所也、在住の勤にて、隔年に上京す、取調向御用多し、

〔吏徵御目見以下〕京都御入用取調役一人　御勘定奉行支配　八拾俵三人扶持高　役金廿五兩

御暇金拾五兩　引越料三拾五兩　躑躅間、上下役、〇中略京都在住、

〔吏徵別錄御目見以下〕京都御入用取調役　安永三年甲午八月九日、始置二員、若林源內、佐久間甚八、支配勘定格、御勘定奉行支配、

仙洞附職掌

〔明良帶錄後篇〕仙洞附

隊卒を下知して守衞する事、禁裏附に同じ、

〔柳營秘鑑〕二遠國御役人常詰幷交代之場所

法皇附　右同斷〇妻子引越之常役、五六年一度出府御目見、暫時在江戸、

〔德川禁令考〕一禁裏附役人令條寬永二十癸未年九月朔日令條

條々

一禁中方之儀、長橋局、兩傳奏江伺之上、先規之御作法を相守べし、勿論萬事周防守〇所司代板倉重宗可得差圖事、

一諸事兩人令相談、分別に及がたき儀者、板倉周防守任差圖可申付之、事により新院之傳奏へも可申談事、

附御所格別たりといへども、存寄儀有之においては、天野豐前守、高木善七郎、〇二人並禁裏附 大岡美濃守、野々山新兵衞、〇二人並東福門院附 この四人互に可申談事、

一官位昇進之輩并出家社家、其外諸職人受領等之御禮として參上之時者、兩人出合返し申べき事、

一醫陰之輩參上之儀、女院御所之如くたるべき事、

附諸職人御用之時は、兩人部屋まで可召寄事、

一御祈禱人之儀、周防守差圖之外者、無用たるべき事、

附被下物同前之事

一御門番并局かたよりおもてへいづる口、同御臺所口、此三ヶ所御番者、兩人同心之者に可申付事、

一火之用心かたく可申付事、

一總而女中御門出入之儀、兩人以手形可出之、暇之儀、一年に三度ヅヽたるうへは、此外無據子細有て、不能出して不叶事においては、兩人せんさくの上可出之事、

一御座間と、おもてかたと、間〆めの口、晝夜ともに〆やうをおろしおき申べし、晝は御用之時計り明ヶ可申事、

一局かた〆めの番所之內〻、おとこ下々迄、一切入申まじき事、

一おく御庭掃除之儀、女に可申付之、但男不參して不叶時は、伊賀衆召連參るべき事、

一御樽返し之儀は、禁中御作法のごとくたるべき事、

一萬御賄方、并被下物之儀、大乳人と兩人相談いたし可申付之、自然分別におよびがたき所は、周防守可致相談事、

一諸事入用之儀、五味金右衛門〇京都代官兼京都町奉行手前ゟ、玄なく〳〵其時々に、兩人以手形可請取之事、

附右入用勘定之儀、周防守江申斷、毎年歲切に可相極事、

一萬入用、おもておく共に其役人之手前を兩人相改、是又年切に勘定きわめさせ、周防守に帳面見せ可申事、

一堂上方并女中方、地下諸役人に至る迄、先規之作法を相背者勿論、その外何にても新規にめづらしき事有之ば、周防守に申届之、江戸江可言上事、

右條々、可相守此旨者也、

寬永廿年九月朔日　　家光　黒印

榊原三郎右衛門〇營中御日記作市郎右衛門、大猷院殿御實紀作一郎左衛門、どのへ

中根五兵衛　どのへ

〇按ズルニ、榊原中根ノ二氏ハ、共ニ明正院附ナリ、

〔鳩巣小說上〕一板倉周防守殿重宗京都所司代ノ時、高木伊勢守殿〇久延仙洞樣〇後水尾附ニテ在京、其時分周防守ドノ江戸へ參ラレ候ハデ不叶義有之候へドモ、一向其沙汰無之ニ付、伊勢守ドノ、如何ノ義ニテ關東へ御越無之ヤノ旨申サレ候ヘバ、防州ドノ、左ヤウ存候ヘドモ、此間ハ仙洞樣ノ御氣隨出申ニ付、手前アリ合不申候テハ無心元故、延引イタスノ旨申サレ候ヘバ、伊勢守ドノ申サレ候ハ、其義ニ候ハヾ、御氣遣ナク御越シ候へ、跡ノ義ハ私シ請取申由被申候ヘバ、周防守ドノ、夫ナレバ安堵イタシ候、追付罷越ベキトテ、翌日發足、江戸へ下向ニ候、如案仙洞樣仰出サレ候ハ、近

待遇 俸祿

近五畿內ノ靈佛靈社へ御順禮ナサルベキ旨ニ付、伊勢守御請ニ、一應江戶へ相伺不申候テハ難ナリ申間ジク候、ソノ間御待ナサルベキ旨申上候處、重テ其義ニ不及候、仙洞樣御順禮遊バサレ候ニ、何ノ申分可有之哉、ケ樣仰出サレ候上ハ、御出被遊候ハデハ不被爲叶トノ旨急度仰出サレ、逆鱗ノ處、重テ伊勢守、左候ハヾ御勝手次第可被遊候、私義ハ關東ノ御恩ヲ蒙リ候者ニ御座候ヘバ、被仰渡ヲ相守不申候テハ不能成候、此上ハ御幸ノ道ヲ遮リ可申候、押テ御通リ被遊候ハヾ、恐入候ヘドモ鳳輦ニ向ヒ奉リ一矢仕ルベク候、左候ハヾ、忽チ天命ニ盡キ、眼モツブレ可申候、其段ハ關東ヘノ奉公ト奉存候、私義モ與力同心差添ラレ候ヘバ、容易ニハ御通リ被遊ガタク可有之哉ノ旨申上ラレ候ヘバ、其後仙洞樣御幸ハ相止ミ申候、

〔東職記聞 一〕仙洞附、本院附、新院附、　從五位下
職掌授爵之次第、同禁中附、三上皇不在則闕之也、

〔嚴有院殿御實紀 二十五〕寬文三年二月朔日、新院附の輩は、雁間詰の席に伺公すべしと仰付らる、

〔憲敎類典 二ノ五 御役〕元文三戊午年三月廿日
一遠國御役人幷御足高御役料定
御役料千俵　　院附

〔天明集成絲綸錄 三十九〕明和七寅年十月
御勘定奉行江
仙洞附
淺野隼人
中西主水
右兩人、持高三千石ニ付、御役料五百俵ヅヽ被下候間、可被得其意候、

〔憲敎類典 三ノ二十六 殿中〕年號月日無之
御暇拜領物之席○中略

役屋數

一金五枚時服三、羽織、　仙洞附

〔京都御役所向大概覺書 一〕京都諸役人御役屋鋪并組屋敷間數之事

一役屋敷寺町通荒神町下ル町　法皇御所附　山田伊豆守
東西三拾八間、南北貳十壹間四寸、

一寺町裏通荒神町下ル町組屋鋪　右同人
東西三拾八間、南北拾三間三尺貳寸、東西壹間半、南北九間三尺貳寸、

一役屋敷寺町通荒神町下ル町　法皇御所附　長崎伊豫守
東西三拾八間、南北貳拾壹間四寸、

一寺町裏通荒神町下ル町組屋鋪　右同人
東西三拾八間　南北西ニ而三拾間四尺三寸五分、東ニ而三拾壹間壹尺壹寸、

任免

〔嚴有院殿御實紀 五十〕延寶三年五月二日、在京の役人、官宅修理の料たまふ、○中略本院附岡部土佐守許之、○御役代々記作二久綱一は、七貫目、小笠原丹波守信吉は六貫目、

〔營中御日記 十七〕寛永二十年八月晦日、御座之間御役替、○中略

新院○明正御所附へ、御加增五百石被下、中根五兵衞、榊原市郎右衞門、

〔諸御役代々記 十六〕明正院本院附

中根但馬守　寛永廿未八月晦日、御書院番より、

中川勘三郎忠幸改二飛驒守一　承應三午十一月廿九日、御小納戸ゟ、寛文十戌十二月十九日病死、

岡部庄左衞門久綱改二土佐守一　寛文十一亥二月五日、御小納戸ゟ、貞享四卯八月七日、依二病氣一願御免、

市岡左大夫正房改二但馬守一　貞享四卯八月十一日、(中略)小十人頭ゟ、元祿九子十一月十三日(中略)御免、

同

與力同心

榊原市郎右衞門元茂改ニ淡路守一　寛永廿未八月晦日、大御番組頭ゟ、承應三午□□病氣依レ願御免、

深津彌一郎正貞改ニ越中守一　承應三午十一月廿八日、(中略)御膳奉行ゟ、萬治三子三月八日病死、

松平豐前守房利　萬治三子四月十三日、二丸御留守居より、寛文十三丑七月晦日御免、

神尾下總守守政改ニ伊與守一　寛文十三丑九月十三日、(中略)御小性組ゟ、(中略)元祿五申六月廿五日、御役被ニ召放一、○中略

小栗十郎右衞門信重改ニ備中守一　元祿五申六月廿七日、(中略)御目付ゟ、同八亥七月十八日病死、

雨宮權左衞門正長改ニ近江守一　元祿八亥八月廿八日、(中略)小十人頭ゟ、同九子十一月十三日、(中略)御役御免寄合、

元祿九子十一月十三日、本院崩御ニ付、此役相止ム、

○按ズルニ、此他後西院、靈元、中御門、櫻町、後櫻町、光格等ノ仙洞附アリ、而シテ一人ヲ補スルコトアリ、二人ニ命ズルコトアリ、一定セズ、今皆闕略ニ從フ、

〔大猷院殿御實紀五十四〕寛永二十年八月晦日、書院番中根五兵衞正次、大番組頭榊原一郎右衞門元義、新院附命せられ、與力二騎、同心十五人附屬せられ、○下略

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無レ之

一遠國御役人組附人別并御役料

法皇附○中略　與力四騎、同心四十人ヅヽ、

〔嚴有院殿御實紀二十五〕寛文三年正月十八日、新院附與力に、現米六十石づゝ、同心へ七石貳人扶持宛行はるべしと令せらる、

〔翁草百五十一〕元文二年四月、中御門院崩御ニ付、御附の武家赤井相摸守、山岡播磨守は、御役御免にて關東へ歸府、右組與力同心は、御舊例之通り其儘御宛行下され、明アキ御殿御番相勤、上御所御附衆の支配を請、御奉公仕、其身死後は番代不レ被ニ仰付一、妻子離散の先格也、(二組、與力四キ、同心廿人宛也、)然に右與力之内、伊丹彌五左衞門と云者、長病にて難儀に及び、其上にて相果けるを、同組與力の筆頭淺田宇

右衞門笑止に思ひ、猶に彌五左衞門が死を隱して御宛行を頂戴す、依之支配三枝伊勢守の用人兩人を語らひて、表向を繕ひける處に、事發覺して、表向の御吟味に成、町奉行所に置て糺明を遂られ、與力淺田宇右衞門、高橋十左衞門、今一人名失念三枝伊勢守用人兩人、名失念各揚屋へ被遣、○中略牢内に於て死罪、高橋十左衞門幷今一人の與力は追放に相成り、一件落着す、

仙洞賄頭　庖所頭

〔大猷院殿御實紀五十五〕寬永廿年九月三日、禁裏新院に、庖所頭賄頭各一人つけらる、十五日、今度內幷に新院に附られたる庖所の賄の者等が、これまで下されし歲俸月俸は、其子に下さるる旨傳へらる、

女院附

〔吏徵附錄殿職〕女院附貳人 元和六年庚申月日、始置二二人一、弓削田攝津守昌言、(台德院殿御實紀作二昌吉一)大岡美濃守忠世、寬永二十年癸未八月晦日、始置二二人一、各與力五騎、同心十三人、 延寶六年戊午月日、廢二當職一、

頭書 一說、寬永十七年庚辰、天野豐前守、大岡美濃守、

〔東職記聞二〕闕職

女院附東福門院(後水尾后德川和子)御在世之時有二此職一、女院崩御之後罷之也、

〔台德院殿御實紀五十三〕元和六年、此年○中略女御○後水尾后、德川和子、附弓氣多源七郎昌吉、從五位下に敍し、內の昇殿をゆるされ、攝津守とあらたむ、

〔大猷院殿御實紀五十四〕寬永二十年八月晦日、○中略目付野々山新兵衞兼綱は、大岡美濃守忠吉とおなじく女院○東福門院附命せられ、共に與力五騎、同心三十人づゝ附屬せられ、○下略

〔嚴有院殿御實紀五十〕延寶三年五月二日、在京の役人、官宅修理の料たまふ、○中略女院○東福門院附久保和泉守勝周、梁田隱岐守直次、○中略八七貫目、

二條城代

〔吏徵附錄殿職〕二條御城代一人

〔東職記聞二〕闕職

二條城代寛永二年、渡邊山城守始補之、元祿十二年、山岡七右衛門辭職、爾來廢之也、

〔東武實錄十二〕寛永二年、是年渡邊山城守茂、京師二條ノ城代トナル、是ヨリ先キ駿河ノ城定番ヲ勤(中略)老衰ノ後、同十二年此役ヲ改免セラレ、江戸ニ歸參、同十五年江戸ニ於テ卒ス、八十八歲、山城守江戸ニ歸參ノ後、寛永十七年ヨリ保科彈正忠正貞、阿部攝津守信盛ヲ、大番二組、其餘ノ士統テ百人、二條ノ城ニ在番ス、山城守定番相勤ノ間ハ、在番ノ士三十人也、

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一二條御城代此御役常憲院樣(德川綱吉)之御代ゟ相止、與力十騎、同心三十人、

二條城門番頭

〔吏徵上御目見以上〕二條御城御門番頭二人中略　寛永二年乙丑月日始置

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一二條御城番二人役料與力十騎、同心三十人ツヽ、

〔東職紀聞一〕二條定番二人

人別領與力十人、同心三十人也、不論家祿、給職料百二十石也、

○按ズルニ、門番頭ハ、又城番若シクハ定番トモ云ヒシナリ、

〔吏徵上御目見以上〕二條御城御門番頭二人　所司代支配　京都在住　持高　御合力米現米百二十石　御暇金武枚、時服貳、羽織、　引越拜借金七十兩

〔憲教類典五ノ二御役〕元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人并御足高御役料定

御合力米現米百廿石　　二條御城御門番之頭

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御暇拜領物之席中略

一金貳枚時服貳、羽織、　二條御門番之頭

〔柳營秘鑑 二〕遠國御役人常詰并交代之場所

一二條御。城。番。　右同斷〇妻子引越之常役、五六年一度出府御目見、暫時在江戶、

〔京都御役所向大概覺書 一〕京都諸役人御役屋鋪并組屋敷間數之事

一役屋鋪東西八拾間南北貳拾五間　御門番　曲淵十左衛門

此坪貳千坪、內六百坪居屋鋪、千四百坪、同心貳拾人分、壹人ニ七拾坪宛、

一役屋鋪東西八拾間南北七拾間　御門番　小宮山傳右衛門

此坪五千六百坪、內、千坪、居屋敷、千四百坪、同心貳十人分、壹人ニ七拾坪宛、三千貳百坪、與力貳拾人分、平均壹人ニ百六拾坪之積、但曲淵十左衛門與力拾人之屋敷共、

〔東武實錄 十二〕寬永二年、是年春日左衛門、柘植三之丞、與力ノ士ヲ附屬セラレ、二條ノ城御裏門ヲ警衛ス、是ヨリ先キ、二人トモニ伏見ノ城ヲ守ルト云ヘドモ、伏見破城ニ依テ、今二條ノ城ニ移リ守ル、

〔吏徵別錄 下布衣以下御目見以上〕二條御城御門番之頭〇中略　寬永二年乙丑、始置、二條御。城。番。一員、元伏見御城御門番、

〔大猷院殿御實紀 四十二〕寬永十六年七月十二日、大番組頭覓新太郞正成、二條城番になり、與力二十五騎預けらる、

〔常憲院殿御實紀 三十九〕元祿十二年四月七日、大番美濃部彥左衛門茂濟、柘植三之丞宗英、二條門。番。頭。命せられ、これより二員になさる、

〔吏徵別錄 下布衣以下御目見以上〕二條御城御門番之頭　元祿十二年己卯四月七日、始置二員、各與力十騎、同心二十人を附す、御合力米百二十石、

〔寶永三年武鑑〕二條御。城。番。

五百石、柘植三之丞、　七百石、美濃部彥左衛門、

與力同心

〔泰平年表五編三〕文久二年閏八月十九日、〇十九日、嘉永明治年間録作二廿九日、徳川禁令考作二九日、松平豐後守、大番頭松平丹後守、二條御定番被仰付之、〇中略　同日、二條御定番松平豐後守松平丹後守へ、今度御改革、二條在番御差留、其方ども二條御定番被仰付、御役料三千俵ツヽ被下、一組與力三十騎、同心百人ツヽ附屬候、諸事松平肥後守〇京都守護職并所司代遂相談、御警衛向、其外萬端念入可相勤旨被仰出候、且又席之儀は、大坂御定番之上と可相心得、猶同役一人可被仰付候事、〇中略　丹後守元御預り之與力同心、其儘二條御定番與力同心申渡候、勤候内、與力は御宛行現米八十石、同心は現米十石三人扶持づヽ被下候、是迄御足高、御足扶持有之者は、勤候内、右之高に御足高御足扶持被下候事に候條、被得其意、大御番頭可被談候、尤不足之分は、追々御入人可被仰付候、且又右與力同心忰共之内、相應之者有之候得ば、御抱入可被仰付候間、相糺可被申聞候、　其方共、御役屋敷之儀は、二條御城外にて、御入用を以御取立可被成候間、通勤之積り相心得、其方共并與力同心勤方等、所司代申談、可被相伺之事、　與力同心之儀は、彼地において追て屋敷地可被下候間、家作共自分にて爲致候積り可被心得候、尤御手當は可被下候、且又與力同心之内、當地屋敷に有之分は、上り候家作料は可被下候間、取調可被申聞候事、　右之趣可被相心得候事

〔憲教類典二ノ五御役〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

二條御城御門番之頭〇中略　與力十騎同心二十人ツヽ

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

現米六十一石三斗五升　京二條御城御門番與力

〔吏徵附錄部職〕二條御城御門番之頭、組與力廿人、同心四十人、與力、現米六十一石三斗五升、同心二十五人、現米十石、三人扶持、十四人現米十三石六斗、一人現米七石三人扶持、一組與力十人、同心二十人、元祿十一年戊寅四月七日、始置與力同心、

二條殿番

坊主

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數幷役高組支配大概

一二條御殿番貳人（役料與力十騎、同心三十人ヅヽ）

〔明良帶錄續編〕二條御殿番

二條御城は、御旅館城にして、御上洛の節の御休息處なり、是より御轅に召、御車寄あり、〇中略此場非常の備第一也、

〔吏徵附錄世職〕三輪市十郎（二條御殿預）　所司代支配　高四百石　御役料百俵　在京〇中略　坊主十七人　年月日以來代々役

〔官中秘策二十五〕諸役人增高等之分類

一四百石高（外ニ百俵）　二條御殿番一人

〔大概順〕布衣以下御目見以上班列

持高、御役料百俵、（月次御白書院御勝手、五節句大廣間御勝手、）　二條御殿番之頭

〔憲敎類典三ノ二十六〕年號月日無之

御暇拜領物之席〇中略

一金貳枚（時服三、羽織、）　二條御殿番

〔柳營秘鑑二〕遠國御役人常詰幷交代之場所

同（〇二條城）御殿番　右同斷（〇妻子引越之常役、五六年一度出府御目見、暫時在江戶、）

〔京都御役所向大概覺書一〕京都諸役人御役屋鋪幷組屋敷間數之事

一役屋鋪（東西八拾間南北貳拾壹間）　此坪千六百八拾坪　（御殿番）三輪七之助

內（東西三拾八間南北貳拾壹間）　組屋鋪　此坪七百九拾八坪

〔憲敎類典二ノ五〕（御役）年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

二條御殿番　　坊主十七人

〔吏徵附錄郡職〕二條御城御殿番預、坊主十七人、　十六人、現米十石二人扶持、　一人、現米七石二人扶持、

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一二條御鐵砲奉行貳人同心五人ヅヽ役料七拾俵、　二條御鐵砲奉行一人　所司代支配　京都在住　持高　御合力米現米六拾石

〔吏徵上御目見以上〕二條御鐵砲奉行一人　所司代支配　京都在住　持高　御合力米現米六拾石

御暇金壹枚、時服貳、　引越拝借金六十兩

〔憲秘類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人并御足高御役料定

御合力米現米六拾石　　二條御鐵炮奉行

〔京都御役所向大概覺書一〕京都諸役人御役屋鋪并組屋敷間數之事

一役屋鋪東西貳拾間南北三拾間半　　御鐵炮奉行　富田平右衞門

一役屋鋪東西貳拾間南北三拾間　　同　梶　助右衞門

一組屋鋪南北貳拾貳間餘東西三拾貳間餘　　右　同　人

但組屋鋪江之往來道、南北拾間程之處、年貢地壹ヶ年ニ米壹斗宛、組中ゟ正德四午年迄、土屋町勘兵衞と申者方江爲年貢相渡、其已後者、水口飛驒方江相渡候由、

〔大猷院殿御實紀十四〕寬永六年、此年、〇中略　都筑善兵衞正重、二條鐵炮奉行になり、〇下略

〔吏徵上御目見以上〕二條御鐵砲奉行〇中略　寬永六年己巳月日始置

〔安政六年武鑑〕二條御鐵炮奉行　御合力現米六十石ヅヽ、手代十人、

三百俵　佐々木金右衛門

〔元治元年武鑑〕二條御武具奉行　御合力米現米六十石ヅヽ、同心十人、

齋藤新五郎

○按ズルニ、元治武鑑ニ、武具奉行アリテ鐵砲奉行ナシ、慶應武鑑モ亦然リ、其合力米及ビ附屬同心ノ人數等相同ジキヲ以テ考フレバ、鐵砲奉行ヲ、後ニ武具奉行ト云ヒシモノナルベシ、

同心

〔憲教類典〕御役二ノ五〕年號月日無之

一遠國御役人組附人別并御役料

二條御鐵炮奉行○中略　同心五人ヅヽ

〔吏徴附錄〕都職〕二條御鐵炮奉行組同心十人　八人、現米十石三人扶持、貳人、現米七石三人扶持、

二條藏奉行

〔明良帶錄〕續編〕二條御藏奉行諸支持高、御合力米四十石、手代八人

御合力米被下、手代八人にて、定日ありて、地役の衆、御扶持米渡方を司る、淺草御藏奉行と同じ、

〔吏徴〕御目見以上〕二條御藏奉行貳人　御勘定奉行支配　京都在住　持高　御合力現米四十石

御暇金壹枚、時服貳、　引越料金三拾兩　手代八人

〔憲教類典〕御役二ノ五〕元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人并御足高御役料定

御合力米現米四拾石　二條御藏奉行

〔京都御役所向大概覺書〕一〕京都諸役人御役屋鋪并組屋敷間數之事

一役屋鋪東西三拾間南北拾間中　御藏奉行　多賀壹八郎

一役屋鋪東西三拾間南北拾壹間　同　伏谷久大夫

一役屋鋪東西拾間南北三拾間　同　能勢平右衛門

屬條

一役屋鋪（東西拾間、南北三拾間）　同　奈佐淸大夫

一手代屋鋪（東西拾貳間五尺餘、南北三拾間貳尺餘）　右同人

〔吏徵別錄　下布衣以下御目見以上〕二條御藏奉行　寛永二年乙丑、始置二三員一、木村宗左衛門、高橋七兵衛、福島八左衛門、（○中略）　享保六年辛丑閏七月六日、假役始、（大御番ゟ）　元祿十一年戊寅、大津御藏渡方止、同所御藏奉行ゟ一人過人に成、長坂新右衛門、　寛政二年庚戌九月廿日、御勘定奉行支配、（京都町奉行支配）

〔大猷院殿御實紀　四〕寛永二年四月二日、伏見定番、（○中略）伏見城より二條にうつり、（○中略）藏奉行二人もうつる、

〔常憲院殿御實紀　三十九〕元祿十二年四月廿二日、けふ命せらるゝは、（○中略）二條の廩數を益るれば、大津藏奉行三人ともに停廢せられ、其三人の中にて、長坂新右衛門基隆は、二條の藏奉行に加へられ、しばらく四人にてつとむべし、

〔東職記聞　一〕二條藏衆二人

人別領二手代八人一也、不レ論二家祿一給二職料四十石一也、

〔吏徵附錄　郡職〕二條御藏手代七人　御給金十兩三人扶持　外見習二人、五兩一人扶持、

同御藏番三人　現米三石五斗一人扶持

同御藏小揚頭三人　御給金五兩二人扶持

同御藏小揚之者三十五人　御給金三兩一人半扶持

〔京都御役所向大概覺書　二〕同所（○二條）御藏手代御藏番小揚之事

一（米四拾貳石餘、御扶持方壹人ニ三人扶持宛、御給金八拾兩、大坂ニ而請取、壹人ニ拾兩宛、）　御藏手代八人

右者御藏奉行手形、兩奉行裏判、

京都町奉行職員職掌

一米拾五石八斗餘　　御藏番三人
　内（拾石五斗、壹人ニ付三石五斗宛、御切米、五石三斗餘、壹人ニ付壹人扶持宛、御扶持方、）
　右御藏番手形ニ、御藏奉行奥判、
一（米百三石餘、御扶持方、御給金百貳拾兩、大坂ニ而請取、）　御藏小揚三拾八人
　内
　　小揚頭三人　壹人ニ付（貳人扶持宛、御給金五兩宛、）
　　平小揚三拾五人　壹人ニ付（壹人半扶持宛、御給金三兩宛、）
　右者御藏奉行手形、御給金者兩奉行裏判、
　小揚之儀、先年は、頭四人、平六拾人在之、賃銀は百姓ゟ出之候得共、元祿三午正月新規召抱、頭三人、平三拾五人に人數極り候、頭は金五兩に貳人扶持宛、平は金三兩壹人半扶持宛被下候、給金は、大坂御城金ニ而相渡り候、頭三人は、大坂御藏小揚頭並に、刀さし候樣にいたし度旨、御藏衆願ニ付、御藏御用相勤候節、又者御藏衆用事被申付時者刀可帶候、常には無用之由申付、
　右之外御法事下行、其外不時之渡り方有之、

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數井役高組支配大概
一京都町奉行二人（役高千五百石、與力廿騎、同心五十人、）

〔吏徵別錄上（布衣以上）〕京都町奉行　慶長五年庚子月日、始置一員、加藤喜左衛門、　同八年癸卯二月十八日、所司代より兼帶、　寛永十一年甲戌八月五日、再置一員、五味備前守、（京都御代官兼帶）　寛文五年乙巳八月六日、二員、○中略　元祿九年丙子二月二日、三員、伏見兼帶、　同十一年戊寅十一月十五日、伏見兼帶止、　同十五年壬午十月廿五日、二人、向後京都住宅、○中略　文化六年己巳七月廿二日、伏見兼帶、

〔常憲院殿御實紀四十六〕元祿十五年十月廿五日、京町奉行瀧川山城守具章、奉職無狀とて小普

請にいれらる、京町奉行これより一人を減じ二人となり、三四年に參り、四五月在府すべしと仰付られ、山城守具章所屬の與力同心は、安藤駿河守定行、水谷信濃守勝阜、二隊に屬せしめらる、

〔柳營秘鑑二〕遠國御役人常詰并交代之場所

京都町奉行　妻子引越之常役、五六年一度出府御目見、暫時在江戶、

〔明良帶錄後篇〕京都町奉行

此場は山城、大和、近江、丹波之公事訟幷松坂領之事迄きく、此場取扱六ヶ敷所也、

〔東職記聞一〕京都町奉行二人

住京都、職掌同諸方町奉行、人別領與力二十人、同心五十人也、且自往古掌五畿內、丹波、播磨、近江八州御領所之租稅、且聽寺社人民之訴論也、享保二年(〇二年恐七年誤)以來、攝河泉播四州御領所之租稅者、大坂町奉行掌之也、

〔科定類聚一〕京都御役所御支配改正之事

一山城、大和、河內、和泉、攝津、播磨、丹波、近江、

右八ヶ國は、京都御役所より御支配有之候處、享保七寅年より、河內、和泉、攝津、播磨之四ヶ國は、大坂町奉行之御支配に被附、

同當時御支配之事

一山城國　當國紀伊郡伏見は、寺社并町中とも、伏見奉行之御支配に候事、

但町中之外といふとも、伏見領は、尤伏見奉行之御支配也、

元祿九子年、伏見奉行青山信濃守幸重、御役御免之以後、彼地奉行を被止、京都奉行より伏見奉行兼勤被仰付、則一ヶ月代りに彼地に勤役被致候處、同十一年、再伏見奉行被置候ニ付相止、

但京都より伏見奉行兼帶に相成候ニ付、京都町奉行は三人役に相成、則御增人瀧川丹後守上京被致候也、元祿十一寅年、再爲伏見奉行、建部内匠頭政當に被仰付、依之瀧川氏歸府、其後京都より兼勤相止、

一丹波國　當國は一圓に京都御役所之御支配也、

一近江國　當國滋賀郡大津九十六町、其外大津領は御代官石原氏支配之、

但右之内にても、寺社之分は、京都西御役所之御支配に相成候、

享保七寅年より、大津寺社は不及申、町中とも、京都町奉行より支配兼帶に相成、與力同心共、彼地へ勤番被致候處、明和九辰年より、當時之振に相成候事、

但彼地附屬之同心二十人は、于今京都御役所より御支配に候事、

一大和國　當國添上郡奈良之町中諸公事は、奈良奉行承之、右之外一國中之家數一件幷金銀之出入、其外火附盗賊變死等は、奈良奉行被承之候事、其餘之義は、京都町奉行之御懸に相成候也、

〔京兆府尹記〕〔一〕京都町奉行職掌○中略

兩人にて相勤る、西御役所東御役所と二ヶ所に分る、月番を以て政務を取行ふ、

一禁裏御所々々の警衛、所司代の御下知を以て勤め、所司代參府の時は、是に替りて相勤る儀、御役の第一也、

一抑所司代の御役儀は、禁裏守護、および西國三十三ヶ國の鎭護、則探題の重任也、此下に從ふ御役なれば、西國一諸之儀に携り、萬端米穀の豐凶等之儀迄も心をおよぼす儀、御役の第二也、

一所司代御參府之節は、御朱印を預り奉り、且御敕書も護持奉り、洛中事あらば、諸大名を招集て禁裏を守護す、是御役なり、所詮にて、御治世におゐては、禁裏御所方御賄ひ等の儀、平日町奉行の司ざる所にて、御物入の增減迄、委敷扱ふ、是第三也、

一五畿内の寺社御朱印を指揮す、尤寺社奉行彙帶し、諸宮門跡たり共、皆町奉行の下知を聞、是當任とする所にて、御役第四也、

一山城大和近江丹波の四ヶ國は、京都町奉行の支配にて、公家諸大名領、寺社領たりとも、大となく小となく、皆當任の取さばく所にて、第五の御役なり、

一攝家宮方、淸花の御方堂上方とも、都而御行跡、其外何によらず、所司代の御目にとゞめらるゝ事なれば、町奉行も平日其品を聞合せ、所司代江申す、尤諸願ひ萬事は傳奏を以て所司代江申す、所司代より町奉行江調べ仰付らる、町奉行其品を糺し、尋て其善惡を所司代江告る故、攝家たりとも、町奉行をかろしむる事あたはず、おのづから威勢は、遠國諸奉行の上に立て、高位高官の人も恐れをなすの御役なれば、常に其身を愼み、政務の正路を專らとする肝要にして、則西國三十三ヶ國の手本と成義、御役の所詮にて、上方御代官も支配する事、御役の第七〇七疑六誤也、

〔科定類聚 一〕京都寺社懸之事

一西御役所寺社彙帶

東御役所へ、諸寺社之公事は、不相懸候事、其餘普請開帳爲拜、萬日執行、或は興行事等は、東西御役所に相懸候事、

〔德川禁令考 三十二 京都〕正德四午年十一月十六日

毎月式日を定候儀ニ付御書付

覺

今度評定所之例に准せられ、京都においても、毎月式日を定め、京都伏見之奉行中、在京之御目付中、和泉守〇水野忠之、京都所司代、宅に會合し、畿内近江丹波播磨八ヶ國之公事訴訟等、衆中會議之上にて裁

許之由被仰出候、自今以後は、郡國等境論之公事、公家門跡方に相掛り候事、又は町奉行中相談ニ而事決しがたき事等は、式日に召出裁許あるべく候、此外之事に至りては、只今迄之例之ごとく町奉行所に而、裁斷を遂らるべく候、以上、

大和守　豊後守　河内守　相模守

山口安房守殿〇直重　諏訪肥前守殿〇頼篤、以上二人、並京都町奉行、

〔科定類聚　一〕京都奉行所を五役所と唱候事

一於京都御役所は、公事方、御勘定方、新家目付、闕所方、證文方、以上之五役を本役とす、故に五役所と唱候也、

〔翁草　百九十五〕宇治御茶師上林井角倉等之事

角倉與一は、先祖嵯峨住居の大商人にて、〇中略二男平次にも御扶持被下候得共、役義は不被仰付、仍代々御奉公願差出候處、元祿寶永の頃、加茂河堤普請支配仰付られ、

是迄右堤一件、町奉行ゟ執計、欠所方與力、川方兼相勤候處、今度角倉へ相渡候ニ付、是迄之手法の仕分ヶ有て、右川近邊の芝居幷茶屋旅籠や等の事、或は河原納涼等之義は、角倉方にて難取計義故、奉行所に相殘し、欠所方兼役の川方名目は相止、向後右之類は、新家方目付加役ノ掛りに成り、枝川砂川堤普請計は、闕所方掛りに成、其餘の事は角倉へ引渡、

其以後代々役之、但御目見以下の格也、

〔京都御役所向大概覺書　一〕内藤大和守松平因幡守死去闕之內之事〇内藤松平二氏、並京都町奉行、

一所司死去之趣、早速以町飛脚御老中江注進之、

但此注進之儀、無遠慮宿次にて申上可然儀に候、以來ヶ様之儀者、其心得を以御用指滯不申候樣に可仕旨、御老中ゟ申來、

資格
俸祿

一所司御役屋敷之儀、彼組與力同心番相勤之、井御城外曲輪木戸口者、同心勤番申付候事、

一京都町中、自身番申觸、兩組與力同心、風廻り指出候事、〇中略

一所司死去之段、早速大坂南都伏見井所々御關所江申遣之、但大坂御目付衆勿論、宿次を以飛脚差遣候事、

一所司與力同心、當分支配之事、

一所司ゟ出候女手形之分、當分可指出哉之事、〇但書略

一所司裏判に而渡り候、金銀米等裏印之事、〇但書略

一所司屋敷に罷在候、元家來引拂之事、

此五ヶ條者、御老中江伺之上諸事差計候、此外伺之趣有之、

一宿次證文、井舟川渡之證文認遣候事、

一所司所持之印判、早速相封いたし、彼家老共江渡置候事、〇中略

一禁裏御修法之卷數、御附衆ゟ被申聞次第、宿次を以差上候事、

一禁裏江被進候、初鶴初鴈初鮭等、到來次第御附衆江申談、組之與力指添差上之候、〇中略

一所司ゟ兼々注進之趣考合、以書付申上候事、

但御所方之儀者、御附衆ゟ被申上、御城内之儀者、大番頭衆ゟ被申上候得共、品により此方ゟも申上候、

〔京兆府尹記〕一京都町奉行職掌

千石以下貳百俵位の方も、器量あれば蒙台命を、〇中略從五位下則朝散大夫にて、芙蓉の間詰仰付らる、〇中略此任を蒙るは、十人御目付、井奈良奉行、堺奉行、駿府町奉行等也、轉役する時は大抵御勘定奉行也、此役へ三千石高格別あしきにもあらずといふは、御作事奉行、御普請奉行等也、兩御役とも二千石高亦

どつともせぬは、御持筒頭、御持弓頭等也、至て首尾宜敷は江戸町奉行也、三千石高

評曰、天明三卯年、初入丸毛和泉守〇闕政といふ奉行あり、御普請奉行ゟ當御役江被仰付たり、貳千石高ゟ千五百石と成、御役下りなれども、是は深き意味ある事にて、全く御人撰びより被仰付し所に、心疾の病ひ出て、御役向はかゞ〳〵しからず、天明七未年十一月御役御免被仰付ける、跡御役人は、十人御目付ゟ池田筑後守始修理と云、知行九百石、被仰付たり、京都町奉行ゟ江戸町奉行被仰付しは、百年以來土屋筑前守と此筑後守兩人計り也、

〇按ズルニ、本書十八卷ニ、田沼主殿頭は、和泉守が器量を見立、〇中略被仰渡やうは、近年京都風儀宜しからず、御取締行屆かず候故、厚思召を以て、此度の御役儀、其方へ被仰付候間、難有可相勤、格式の儀は、御普請奉行の並仰付らるゝの段仰渡さるトアリ、

〔吏徴〕上布衣以上 京都町奉行二人　老中支配　芙蓉間　諸大夫　京都在住　千五百石高　御役料現米六百石　御暇金五枚、時服三、羽織、　引越拜借金三百兩

〔憲教類典〕二ノ五御役 元文三戊午年三月十五日

　　京都町奉行〇中略

千五百石ゟ以下之者は、向後千五百石之高御足高被下之、御役料は只今迄之通り被下之、〇中略

元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人并御足高御役料定

御役料現米六百石　　京都町奉行

〔京兆府尹記〕一京都町奉行職掌

御役中者千五百石高、御役料現米六百石、

評曰、其人五百石の人ならば、千五百石高に仰付らるゝ時は、三ッ半成にて被下之、千石の御足

役屋敷

高なれば、現米三百五拾石也、長崎奉行御役料千五百俵は、現米五百貳拾五石に成、京都町奉行〻五百石高多し、此石七拾五石、合て現米七百石、京都町奉行〻は、現米百石物成多し、

〔吹塵錄三十一 徳川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

一金貳千五百兩宛　　京都町奉行

但高に不拘被下

〔安永八年武鑑〕同〇京都町御奉行

京東番所神泉苑御池角　京西番所千本通

〔吏徴別錄上 布衣以上〕京都町奉行〇中略　御役所入用銀三拾五貫目宛

〔京都御役所向大概覺書二〕京奉行屋鋪并組屋敷間數之事

東御役屋鋪

總地坪數五千三百貳拾七坪六分貳厘五毛

内、四千四百貳拾六坪壹分貳厘五毛、御役屋敷構之内地坪、四百壹坪、門外公事人居所明地共、

五百坪五分、與力屋敷貳ヶ所地坪、

總家坪九百六坪六分貳厘　建家坪、土藏、井構之外公事人居所、雪隱坪共、

右者寶永六丑年、中井主水改指圖を以、地坪家坪如此、

一寬永十一戌年御上洛之節、五味備前守拜領、自分家作、寬永十七辰年失火ニ付、又自分家作、正保四亥年與力同心被仰付候、其後備前守死去、小出越中守江右御役屋敷相渡候時分、備前守家作

之事ニ候故、爲引料銀五拾貫目、備前守子藤九郎江被下之、備前守自作之家ハ、其儘御役屋敷罷成候、○中略

宮崎若狹守在役之時分、銀貳拾五貫目被下修復之由、天和二戌年前田安藝守時分、銀貳拾五貫目被下修復有之、元祿十丑年水野備前守時分、銀四拾六貫五百目被下修復有之、寶永五子年禁裏炎上之後、御造營殘木材木三百貳拾壹本、榑木九千貳拾四挺、金三百七拾四兩餘、寶永七寅年被下之修復有之候、正德四午年秋風破ニ付、翌未年正月金五百三拾八兩、大坂御藏金被下修復有之、

同組屋鋪

總地坪數六千八百九拾七坪　與力同心屋敷

一天和二戌年、與力拾七人江銀壹貫五百目宛、同心五拾人江銀三百目宛被下之修復、

但與力三人者、追而之作事ニ而、新敷故除之、

西○○○御役屋鋪○○○

總地坪數三千八百八拾六坪六分九厘五毛

內、三千七百貳坪六分九厘五毛、御役屋敷構之內地坪、百八拾四坪、門外公事人居所明地共、

總家坪八百九拾六坪四分貳厘　建家坪、土藏、稻荷社、構之外、公事人居所、雪隱、辻番所共、

右者正德四午年、中井主水改指圖を以、地坪家坪如此、

一寛文五巳年、雨宮權左衛門御役被仰付上京、但御役屋敷無之ニ付、酒井讃岐守屋敷ニ住居、翌午年屋敷拜領、爲普請料銀三拾貫目被下候由、

延寶五巳年、能勢日向守時分、銀貳拾五貫目被下修復、元祿十丑年瀧川山城守時分、銀五拾貫百六拾目被下修復、寶永五子年禁裏炎上之後、御造營殘木材木百八拾九本、榑木九千八百四拾六

挺、金四百拾三兩餘、寶永七寅年被下之修復有之候、正德四午年秋風破ニ付、翌未年正月、金五百七兩、大坂御藏金被下修復有之、

同組屋鋪

總地坪數六千八百五拾六坪餘　但二屋敷

與力拾人ハ　百八拾貳坪宛　同拾人ハ　不同　貳百四拾坪以下百七拾八坪以上

同心五拾人　不同　七拾四坪以下四拾三坪以上

一延寶五巳年能勢日向守時分、與力五人江銀三貫目宛被下修復、

天和二戌年井上志摩守時分、與力拾五人江銀壹貫五百目宛、同心五拾人江銀三百目宛被下修復、

一兩奉行交代屋敷、三條通西新在家町坪數千坪餘、右者平岡四郎左衛門御役屋敷ニ候處、御代官代リニ而、明キ有之ニ付、元祿十二卯年交代屋敷ニ相願、新造普請共被仰付候、御入用銀三拾七貫三百五拾貳匁九分四厘、此銀大坂御金三拾七貫目、御老中御證文ニ而請取、三百五拾壹匁九分四厘ハ、闕所銀相加、諸色相調候、

元祿十五午年十月、瀧川山城守御役御免、安藤駿河守、水谷信濃守、住宅ニ而兩人相勤候樣ニ被仰付候故、兩御役屋敷普請料相願候處、交代屋敷を兩役屋敷江引取候樣にと江戸ゟ申來ル、翌未ノ三月壞候而、右同年十一月廿二日、御代官大草太郎左衛門御役屋敷に相渡り候、

任免

〔營中御日記十一〕寬永十一年八月、京都御代官五味備前守〇豐直、諸大夫被仰付、京都町奉行被仰付、

〔嚴有院殿御實紀三十七〕寬文八年七月十三日、伏見奉行宮崎若狹守重成、雨宮對馬守正種、この後京都にて訴訟撿斷すべしと仰付らる、これ京町奉行の濫觴なり

〔諸御役代々記十五〕京都町奉行

寛永八未八月十五日、萬治三子八月九日病死、
五味金右衛門豊直(改備前守)

萬治三子十一月廿二日、御小性組番頭より、寛文五巳六月廿五日、於京都病死、
小出越中守尹貞

寛文五巳八月六日、元方御納戸頭より、(中略)同十一亥十月十六日病死、
雨宮權左衛門正種(改對馬守○以下三十人略)

同

寛文五巳八月六日、御小納戸より、(中略)同十三丑正月廿二日、町奉行(江戸)江、
宮崎若狹守重成

寛文十三丑二月十三日、(中略)禁裏附より、元祿五申三月廿三日、大目付江、
前田安藝守直勝

元祿五申四月十四日、(中略)御目付より、(中略)同十丑四月十四日、町奉行(江戸)江、
松前八兵衛嘉廣(改伊豆守○以下二十八人略)

同

元祿九子正月廿五日、(中略)御目付方、同十五午十月廿五日、御役被召放、
瀧川丹後守具章(改山城守)

〔東職記聞一〕京都町奉行二人

代々記曰、寛永十年五味備前守補之、(時稱之京都郡代、)諸家系譜曰、寛永十一年、五味金右衛門豊直依台命聽五畿内之訴訟云々、正保二年十二月、叙從五位下任備前守也、當職之號、先是無所見、則始于玆乎、代々記曰、萬治三年小出越中守尹貞補之、尙一人稱郡代也、慶延略記曰、寛文五年六月小出尹貞卒、同年七月、以雨宮對馬守正種、宮崎若狹守重成兩人被補之、領與力二十五人同心三十人也、元祿九年正月增一人、以瀧川山城守被補之、總三人、同十五年十月、瀧川氏解職、爾後復二人也、案慶長中、與平信昌權司于京都之時、使爲副職加藤大久保松田小池四氏於信昌、則雖往古非無當職之義乎、○中略又案宮崎雨宮二氏以來、改稱町奉行乎、

〔翁草二十五〕寛文五年京都町奉行始て被仰付、其後町方之儀は所司代を離れ、町奉行之支配に成る、自是先寛永十一戊年、所司代板倉周防守(○重宗)時分、郡代所を五味備前守(○豊直)に被仰付、萬治二亥年より、右代り小出越中守(○尹貞)相勤、其比は伏見奉行も郡代兼帶にて、小堀遠江守(○政一)水

與力同心

野石見守〇忠貞、二人並伏見奉行、兩代之間は、五味備前守小出越中守と立會、伏見にて月に三日、京にて月に三日、地方の公事裁許有之處、越中守死去以後、寛文五年跡役兩人仰付られ、郡代の名を被止、町奉行と稱し、宮崎七郎右衞門は若狹守、雨宮權左衞門は對馬守に受領して上京す、是京都町奉行の始也、是迄郡代の内は、與力五騎、同心十五人之處、此時々與力拾騎、同心三拾人宛に成、自夫追々御抱增有之、當時與力廿騎、同心五拾人宛也、右兩人の跡役能勢日向守、〇賴宗前田安藝守〇直勝の時分、同十三丑年々、御役料現米六百石宛被下之、今以同前也、伏見奉行郡代兼帶の儀は、水野石見守切にて相止、京町奉行は其儀兼帶す、

私曰、京都町奉行の事、古町の記錄、且ッ武鑑の前錄等にも五味備前守を始とするは非也、備前守并小出越中守は非町奉行、本文に記す所正と知べし、

〔吏徵附錄郡事〕京都町奉行組與力四十人、同心百人、　一組與力二十騎、同心五十人、

〔京都御役所向大概覺書二〕公事番所定書

一月番之節者、毎日公事番所戸を明置、與力貳人にて致食〇食恐交誤替、夜者壹人、晝夜番所明不申候樣に相詰可申事、

一同心貳人、番所に晝夜相詰可申事、〇中略

一公事日には、町方に懸候與力貳人、同目付壹人、同心之組頭壹人、同心目付壹人、公事方之帳付四人、

右之役人、目安受取渡之剋、念入可仕事、

一非番之方之與力同心、公事方に懸候ものは立會申候事、

一同心三人宛相詰泊番仕、只今迄之通、壹人は不寢番可仕事、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

雜色

現米八十石　京町奉行與力

現米十石三人扶持　同　同心

○按ズルニ、與力同心ノ組屋敷ハ、町奉行役屋敷ノ條ニ在リ、

〔嚴有院殿御實紀三十七〕寛文八年八月十日、京町奉行雨宮對馬守正種、宮崎若狹守重成、與力五騎、同心十人ヅヽ所屬たらしめらる、

〔玉露叢十九〕寛文八年八月十一日、京都町奉行兩人、與力五騎、同心十五人宛也、然ル處ニ、以上與力十騎、同心三十人ヅヽニ增シテ仰付ラル、

〔嚴有院殿御實紀四十一〕寛文十年五月朔日、京町奉行に、屬吏を增加して、與力二十騎、同心五十人づつたらしめらる、

〔御當家令條二十一〕覺

一京都町奉行三人之內、向後兩人ヅヽ、御役所可ㇾ罷在候事、

一伏見附之與力同心、京都町奉行組ニ被ㇾ仰付候事、

一只今迄京都與力、小給ニ付、大坂並被ㇾ仰付候事、

一與力廿五騎ヅヽ、二組、同心七拾人ヅヽ、二組、在京之兩人支配可ㇾ仕事、

附伏見附之內ニ而、與力四騎、同心十人、伏見ヘ可ㇾ相殘事、〇中略

元祿九年子二月

○按ズルニ、此時京都町奉行ヲシテ、伏見奉行ノ職ヲ兼子シメシニ由リ、伏見ノ與力同心ハ、京都町奉行ニ隷屬スルコトヽナリシナリ、伏見役人ノ篇伏見奉行ノ條ヲモ參看スベシ、

〔京都御役所向大概覺書二〕上雜色勤方之事

一御卽位、行幸、御入內、御能、其外御用之節、罷出相勤る、

一御上洛御迎御送、井御參內之節供奉仕、他所江御成之時分供奉仕候、
一聖護院宮、三寶院宮、入峯之時分致供奉候、
一宮方諸門跡方、御入寺灌頂、其外御法事之時分、警固ニ罷出候、
一五攝家方祝言之節、警固ニ罷出候、
一所司代、初而上京之剋、山科御廟野迄、御迎罷出、夫々御役屋敷爲案內先手仕候、且又江戶江下向、井上京之剋も罷出候、
一兩奉行上京之剋、粟田口迄罷出候、參府之節も罷出、
一諸寺社、遷宮法事入院等、警固罷出候、
一朝鮮人來聘之時分送り迎、井在京逗留之內、旅館警固に罷出候、
一祇園會、七日十四日神事之節、罷出相務、
一洛外江總而御觸狀出候節、寺社方井在々江相觸申候、
一洛外四方內、不依何事、公儀江訴候儀致取次候、
一公事日、頭雜色貳人、下雜色四人、相詰申候、○但書略
一洛外町續町々井方內之寺社方、在々自庵小社等、每年八月宗門改いたし取次差出候、
一方內々江戶江罷下候女、御關所之切手願候節取次致候、
一洛中洛外、撿使見分等に罷出候、
一捕者井町廻風廻等に罷出候、
一出火之節不殘罷出、火本之前後にて、徒もの、又は物取制道いたし候、
一御仕置者、町中引渡之剋、又は斬罪人等有之節、撿使に罷出候、○中略
一赦行牢屋に而被仰付候剋、牢屋江不殘相詰申候、

一四座之能大夫、勸進能いたし候時分警固に罷出候、勸進能辻札、總而公儀江相願、赦免有之勸進能井舞、其外寺々什物寶物開帳辻札之儀、方内ゟ打せ申候、

一洛外屋作願之繪圖手形、方内ゟ取次申候、

一勸進能勸進相撲有之節、方内ゟ罷出候、

一諸寺院萬日廻向、井開帳有之節者、見廻り候樣に、小出淡路守申付候、已來折々罷出候、

一五月晦日、六月十八日、祇園神輿洗兩度方内ゟ罷出候、

一六月、四條河原井札御手洗納涼之内、方内ゟ罷出候、

一七月、祇園八坂踊之節、方内ゟ罷出候、

一四條河原、芝居物眞似狂言いたし候役者名付帳面、方内ゟ差出申候、

〔京都御役所向大概覺書〕二公事番所定書

一下雜色壹人、○中略晝夜相詰可申事、

上雜色勤方之事

一囚人遠所江差遣候時分、下雜色罷出候、其節從公儀御傳馬路銀等被下之、

一御役屋鋪番所牢屋番に、下雜色壹人宛、晝夜相詰申候、

下雜色勤方井諸入用之事

一下雜色壹人、中座三人宛、役屋敷月番之方江相詰申候、

一下雜色壹人井見座貳人、中座六人宛、籠屋に相詰候、

一役屋鋪井籠屋江相詰候ニ付、下雜色扶持方、一日に白米壹升、大ノ月壹ヶ月に三斗、同薪代拾匁宛、其外年中籠舍人出入帳、入用之小手長繩、井番所に而遣候、紙、墨、筆、油、圓座、燒炭、苧、蠟燭代、闕所銀を以相渡候、平均壹ヶ年に銀九百目程、尤年にゟ不同、

見座

〔京都御役所向大概覺書 二〕見座之事

一見座之儀、以前は洛中見座之家貳拾貳軒ゟ籠屋番相勤候處、先年右貳拾貳軒ゟ給銀出し、見座兩人召抱、籠屋番相勤申候、貳拾貳軒は町家に而賣買いたし、家主相替り候而も、見座之儀は家付に而相勤申候、

見座家は牢屋番相勤候家貳拾貳軒、牢屋番不二相勤一、祇園會相務候家五軒、

一銀貳百拾六匁　油小路通御池下ル町借宅　見座山本小兵衛給銀

但見座役家拾三軒、壹軒ゟ壹日壹匁貳分、壹ヶ年に銀拾四匁四分宛番代に請取申候、此銀百八拾七匁貳分、殘ル貳拾八匁八分は、雜色頭方ゟ、七年以前、寶永六丑年九月ゟ相辨遣し申候由、

一銀貳百拾六匁　新レ町通三條上ル町借宅　見座河合又兵衛給銀

但見座役家九軒、壹軒ゟ右同斷、壹ヶ年に銀拾四匁四分宛、番代として請取申候、此銀百貳拾九匁六分、殘テ八拾六匁四分は、雜色頭方ゟ右同年ゟ相辨遣し申候由、

右見座貳人は、牢屋敷江晝夜壹人宛相詰、牢舍人出入之節、牢入口之戸たてあけ仕、囚人衣類等吟味いたし、朝夕飯牢內江入候時分、指引支配仕候、總躰牢屋敷當番下雜色指圖を請、牢屋鋪之儀、一色御用相勤申候、且又方內筋御用之使等にも、非番見座遣候儀も有之候、每年六月七日十四日祇園神事に、洛中見座役家之者召連罷出候、

中座

〔京都御役所向大概覺書 二〕中座之事

一中座之儀、洛中町々之年行事、交替罷出、鐵棒引、囚人繩取いたし候處、中古以來、年行事共ゟ給銀出し、年行事役中座九人に而相勤候、壹人に付、給銀壹日壹匁宛、

一中座九人、內三人ハ役屋敷ニ雜色部屋、晝夜相詰申候、六人ハ牢屋敷ニ晝夜相勤申候、

町代

右中座之儀、出火之節、御馬先江鐵棒引に罷出候先番并與力目付召連罷出候、但中ゟ見分又者檢使、風廻り町廻り、或は辻固め等、其外御用に罷出候節召連候、囚人役屋敷ゟ牢屋迄之往來、鐵棒引繩取相勤候、手錠掛り候もの有之節は、於番所手錠之嵜はづし、牢舍人出入之節、囚人召捕見座共、囚人之衣類相改候節手傳仕、朝夕之飯牢內江入候時分、牢賄方ゟ牢內迄持運仕候、當番之下雜色江申付候御用之儀、諸方江申遣候小使相勤、且又寺社方開帳、萬日并勸進能相撲辻札爲打申候、右中座九人は、洛中町々用人共、中座壹人に付、壹日壹匁宛取之候、近年御用多、小使者不足に付、右中座九人之外に三人、正德四午九月ゟ召抱、牢屋敷に指置、中座九人之者同前に相勤させ、此給銀は雜色頭四人方ゟ相辨出し申候、

〔京都御役所向大概覺書 二〕公事番所定書

一中座貳人、晝夜相詰可申事、

〔京都御役所向大概覺書 二〕町代勤方之事

一諸觸有之時分、町方并寺社方共申渡ス、

一例年江戶江年頭爲御禮上町代四人罷下、正月三日御目見江、同九日御暇被下、御銀壹人に三枚宛致拜領候、御代替、其外御祝儀有之罷下候節は、御時服致拜領候、道中船川渡之御證文、每年所司代ゟ被下之、

一御上洛之節、爲御迎山科御廟野迄罷出御目見仕候、

一所司代初而上京之節、爲迎洛中町々年寄共召連、右場所迄罷出、町代は御廟壹町程東之方迄罷出候、

一御上洛并上使每年二條御番代之節、宿割に罷出候、

一禁裏御作事之節、町夫手傳人足并每年賀茂川筋京廻り、土居藪入用之町夫之儀、夫頭役之もの

貳人極置、町々ゟ町夫出させ申候、

一從禁裏町方江御免除札被下候刻、并堂上方武家之家來町宿之儀申付候節申渡ス、

一公事日、上町代は緣側江相詰、下町代は白砂江相詰、公事人之出入致させ候、尤呼出しもの有之節申渡ス、

一町中ゟ何事に不寄訴出候節、召連罷出候、

一町中江預ヶ者、并闕所申付候節相改、手形取之差出申候、

一町中并寺社方ゟ、御關所女手形願候節致吟味、願書に致加判候、

一酒株讓り替之節致吟味、帳面に致加判候、

一火事之節、町代不殘罷出、町吏之もの致支配、燒跡相改、繪圖等認指出申候、

一盜物尋申付候節、質屋共手前致吟味、失物改申候、

一撿使町廻り有之節罷出候、○中略

一町々年寄代り之節致吟味、町代方江町中ゟ手形取之、帳面に判形爲致、目錄認差出申候、○中略

一町中并無本寺之寺社方宗門改、累年帳面取揃、人數勘定目錄仕立差出申候、

一寺社方并年貢地之町家普請願之節、取次之申候、

一町中江拜借米有之節、大坂又は大津江罷下り、御米請取、町々江配分いたし相渡、返上之節銀子取集め、町代持參致上納候、○中略

一辻固警固、其外諸事見分等有之節罷出る、○中略

一公事に付、雙方立會勘定之節、品により申付立會吟味致させ候、

一兩役所月番切町代部屋江晝之內下町代壹人、小番之者三人相詰候、○中略

一町中家賣買之節、支配之町代、并古參之者四人之內壹人宛差加り、御定御條目之通致吟味、賣券

狀に致加判、銀高壹貫目に付金壹歩宛之積り、改料町代方江取之申候、

〔京都御役所向大概覺書二〕公事番所定書

一町代、壹之內壹人宛相詰、其外は前々之通、町に用所無之者は每朝可參候、

〔支配井達國町人御禮格式坤〕上京〇京都

一正月三日、總中獻上のし目三十端、年寄壹人、准紋棱嶋二端、

一御暇於蘇鐵間寺社奉行申渡、年。寄。者白銀五枚、總代兩人者同三枚ツヽ被下之、

正德三年正月三日

一御代替ニ付獻上、年頭之通、

一右ニ付被下物、於蘇鐵間年寄江時服二、總代兩人江同斷被下之、

〇按ズルニ、書名ニ支配トアルハ、寺社奉行ノ支配ヲ云フ、又按ズルニ、本書ニ年寄トアルハ、卽チ町代ノコトニテ、上ニ引ケル京都御役所向大概覺書ニ見エタル町々ノ年寄トハ自ラ異ナリ、

〔官中秘策三十二〕京都町代、年始之爲御禮江戶へ罷下候事、

右町代年。寄。町。代。四人下。ノ。者。拾貳人、

上京ゟ出銀六貫四百五拾八匁六分

下京ゟ出銀七貫三百七拾六匁六分

壹軒ニ付七分五厘宛

〔京都御役所向大概覺書二〕町代之面々支配之町方角井取分之事

一百四拾六町　聚樂ノ內、御城ゟ上、一條通迄、堀川通ゟ西、西ノ京境迄、寺町眞如堂跡井內野、黑門通下立賣下ル町

銀壹貫七百八拾目　山內淸兵衞

銀四百八拾目　猪熊通出水下ル町　下町代伊三郎

一百六拾三町 二條ゟ上中立賣通迄、新町通ゟ東寺町通迄、井塔之段清藏口迄入組、　新町通中立賣下ル町　梅村四郎兵衛

銀貳貫百目　上長者町新町東江入町　下町代小兵衛

銀四百五拾目　中長者町西洞院東へ入町　同九兵衛 〇以下町代十一人略

銀三百目

一東寺内五拾九町 内 古寺内三拾町、佐右衛門支配、新寺内貳拾九町、勘右衛門支配、

地子米之内貳拾五石七斗　因幡堂筋不明門通六條魚店下ル町　木村勘右衛門

地子米之内貳拾五石七斗　同所七條上ル町　福岡佐右衛門

地子米之内七石六斗　下役　橋本傳兵衛

地子米之内七石六斗　下役　寺村市左衛門 〇中略

一西寺内六拾壹町 東ハ新町通、西ハ野はづれ、上ハ六條魚店南側迄、下ハ下魚店北側迄、 内四拾四町地子、屋敷町、四拾七町役屋敷町、

拾三石貳升九合四勺　東中筋七條上ル町　矢野儀左衛門

拾三石貳升九合四勺　若宮通花屋町下ル町　髙井七兵衛

四石八斗　下役　柘植治兵衛

右四拾七町ゟ、町代役料壹ヶ年分、右之通請取候由、

一兩寺内町代、江戸年頭之儀者、先規ゟ相勤不申候由、

一町代役儀之外に、御門跡ゟ別役被申付候時節者、帯刀仕候由、

一町代役之儀、筋目を以代々被申付候由、

〇按ズルニ、本書ニ列記スル所ノ町代ハ十三人ニシテ、之ニ東西兩寺内ノ町代四人ヲ加フレバ、總十七人ナリ、下町代ハ、之ヲ置クモアリ、置カザルモアリ、又之ヲ置クニモ、二人ナルアリ、一

人ナルアリ、何レモ所管ノ廣狹ニ由リテ一樣ナラズ、而シテ其所管ノ區域ハ、廣キハ二百二町ヲ支配シテ、役銀二貫三百四十目ニ及ビ、狹キハ四十二町ヲ支配シテ、役銀五百六十目ナリ、

古事類苑

官位部七十三

德川氏職員二十二

大阪役人

大阪役人ニハ、城代、城番、船手、鐵砲奉行、弓奉行、具足奉行、破損奉行、金奉行、藏奉行、及ビ町奉行等アリ、城代ハ大阪城ヲ守護シテ變ニ備ヘ、又大阪諸役人ノ政務ヲ總統シ、西國諸大名ノ動靜ヲモ監察ス、大名ヲ以テ之ニ補シ、四位ニ敍シ、役料一萬俵ヲ給ス、元和五年ニ、内藤紀伊守始テ之ニ補シ、其後暫ク之ヲ置カズシテ、城番ヲ以テ兼職セシム、之ヲ權城代ト云ヘリ、寛文二年ニ、青山因幡守ヲ城代ニ補シテヨリ、城番ノ兼職ハ自ラ止ムニ至レリ、

定番ハ城番トモ書シ、二人ヲ定員トス、城代ニ亞ゲル重職ニシテ、城ノ諸門ヲ警衞シ、鐵砲、弓、具足、破損、金等ノ諸奉行ヲ支配シテ、其事務ヲ總轄ス、從五位下ノ大名ヲ以テ之ニ補シ、役料三千俵ヲ給ス、屬僚ニ與力同心アリ、鐵砲奉行、弓奉行、具足奉行、破損奉行、金奉行等ハ、其職務ノ繁閑ニ由リテ、二人ナルアリ、三人ナルアリ、四人ナルアリ、何レモ持高ニテ勤メ、合力米八十石宛ヲ給シ、同心若シクハ手代ヲ附屬セシム、藏奉行ハ、初ハ大阪町奉行ニ屬セシガ、後ニ勘定奉行ノ支配ト爲リ、二百俵高ニシテ、合力米八十石ヲ給シ、手代、同心、藏番、小揚等ノ屬僚アリ、又高槻藏奉行ト云フアリ、後世廢職ト爲リシモノナレドモ、類ヲ以テ假リニ此篇ニ收ム、

船手ハ、古クハ船奉行トモ云ヒ、一人ヲ定員トシ、公私ノ諸船舶ヲ管轄シ、其貨物ヲ檢査ス、又

大阪城代職員職掌

小豆島飽两島ノ代官ヲ兼職セシメシ事アリ、持高ニテ勤メ、別ニ役料ナシ、但持高五千石以下ノ者ニハ、百人扶持ヲ給ス、屬僚ニ與力水主アリ、

町奉行ハ、市中一般ノ政務ヲ行フノミナラズ、攝津、河内、和泉、播磨ノ四ケ國ニ在ル幕府領內ノ租税ヲ徵集シ、又堺奉行ヲ兼職セシ事モアリ、二人ヲ定員トスレドモ、堺奉行兼職ノ時ハ三人ヲ補シタリ、從五位下ニ敍シ、千五百石高ニシテ、役料六百石ヲ給ス、後ニハ持高ニ拘ハラズ、役金二千五百兩ヲ給セリ、屬僚ニ與力同心アリ、又市中ヲ南組北組天滿組ノ三區ニ分チ、各年寄一人宛ヲ置キテ、市中ノ取締ニ從事セシム、

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數幷役高組支配大概

一大坂御城代壹人

〔東職記聞一〕大坂城代一人

住大坂城中守護之、掌彼地一切之事職也、

〔柳營秘鑑一〕諸御役人之次第幷官位

一大坂御城代略○中於彼地引受之御用品々有之、妻子引越之常役、其身ハ御城內住居、妻子等ハ下屋敷ニ差置也、五六年ニ一度、爲御目見令參府、

〔明良帶錄前篇〕大坂御城代四品溜間次

大坂は九州中國之咽喉にて要地なり、尤重任なれば、非常の心得備第一也、

〔甲子夜話四十七〕仄ニ聞ク、昔ハ大坂御城代御暇ノトキハ、彼地ニ於テ西國筋若シ非常ノ事アラバ、勝手次第取計ルベシトノ上意ナリシトゾ、今モコノ如クニヤ、又彼地ニ御印押タル白紙ヲ賜ハリテ持行トゾ、コレハ事火急ニ出ルトキ、言上歷ズシテ、諸方ニ御令文ヲ出ス爲ノ用意ナリトゾ、是モ今ニコノ如キカ、御城代ニ新古緣者モ有レドモ可問コトニモ非ズ、答フベキ筋

ニモ無シ、

〔攝營便覽一〕二之丸部

一大手御門　御城代持にて、札改番所三ヶ所有之、見附大番所貳ヶ所、いづれも御城代家臣足輕等出番す、○中略

一北中仕切御門　御城代之御持、御門中に見附番所有之、

一南御太鼓仕切御門　御城代之御持、御門內に見附番所有之、

〔柳營秘鑑一〕諸御役人之次第并官位

一大坂御城代、各被叙四位、

〔東職記聞一〕大坂城代一人　從四位下

其職爲重寄之際、帝鑑間雁間重代之豪傑、堪其器之人、歷若年寄奏者番而補此職也、

〔明良帶錄前篇〕大坂御城代

是より所司代へも昇り、西丸御老中江も昇る、

〔官中秘策一〕大坂城之事并諸役人之事

一御城代壹人、○中略五六年ニ一度、爲御目見參府、其節ハ御黑書院御勝手羽目之間ニ罷出、御城內諸番所下座無之、尤京都所司代格式也、

〔御張紙留上〕一大坂御城代御名へ、評定所にては殿を附不申、御勘定所にては、是迄殿を附來候處、向後は一座之通、殿を附申間敷候旨、但馬守殿へ、柴田藤三郎を以相伺候處、右之趣、左近將監殿へも御相談有之、是迄之通、殿文字附候樣、同人を以被仰聞候、

寶曆十一巳年

一羽州山形城詰米之儀に付書上に、大坂御城代に殿文字認上候處、攝津守被仰聞候は、書上物に

殿文字附候は、如何之旨被仰聞候ニ付、日向守申上候には、前々御勝手方にては殿文字認來候、評定所書上は、御城代に殿文字無之旨申上候得ば、左候はゞ向後御城代へは、殿文字附申間敷旨被仰聞候、

明和三戌年五月廿四日

〔機務寛要二〕寛政十二申年十月朔日

一青山下野守、若年寄ゟ大坂御城代被仰付候ニ付、若年寄ゟ御城代被仰付候例、享保十九寅年九月廿八日之例之外無之、其節ハ若年寄ヨリ被仰付候哉、於芙蓉間有合被仰渡有之旨、御奏者番衆部屋ニ留有之旨、水野壹岐守申聞候間、奥御右筆組頭近藤吉左衛門江承合候處、其節御城代被仰付候ニ付有合被仰渡ニは無之、若年寄ゟ太田攝津守大坂御城代被仰付、右跡若年寄江西尾隱岐守被仰付候ニ付、右隱岐守殿之儀、有合被仰渡有之候旨申聞候、

〔甲子夜話五〕酒井雅樂頭ハ、國家棟梁ノ世臣ナリシガ、忠清ト云ニ至リ、貞享ノ初ニ罪ヲ得テ、家格降レル事ニナリシガ、享保中、忠口(一字忘)ト云ヲ大坂城代ニ命ゼラレケル、ソノトキノ御掟ニ、稽古ノ為仰付ラルヽトノ御事ナリシトゾ、是ハ世々四品ニテ、城代ナド勤メタルコト無キホドノ家ナレバ、カクハ仰ラレシナリ、今ニ此御掟ハ酒井家ノ密ニ規模トスルコトナリ、扨御役仰付ラルル時ハ、オモダヽシク並々ノ如キ次第ニテ命ゼラレシガ、ヤガテ別ニ御前ヘ召レケル、其時ハ棧留ノ御袴ヲ召シ、小刀ヲ持玉ヒ、箸ニテ猿ヲ削ラセラレナガラ御目通ナリ、大坂ノ事ナド樣々御噺アリ、良久クシテ忠口退キケルヲ、又召返サレ、家老ハ誰ヲ召連行ゾトノ御尋ナリ、兼テソレ迄ニハ思ヒハカラザリシガ、家柄ニモアリ、ソノトキ筆頭ニモアレバトテ、高須隼人ヲ召連候ト申上ケレバ、ソレニテヨシトノ仰ナリ、格別閥閱ノ人ナレバ迚、カク御懇遇アリシナリ、忠口ガ身ニ取リテ、イカバカリカ難有コトナルベシ、

俸祿賜與

〔吏徵 首卷 萬石以上〕大坂御城代一人 ○中略 御役知一萬石　雲雀三十、雁二、以宿次奉書拜領、　御暇、御刀代金貳拾枚、御馬一疋、時服二十、　引越拜借金壹萬兩

〔營中御日記 三〕寬永三年五月五日、今度備中守、○阿部正次 大坂御番常番被仰付之間、御加增三万石、都合八萬五千石被下之、以五萬石之軍役、大坂城可守衛旨、外月俸七百五十人扶持被下旨、於御次之間酒井雅樂頭 ○忠世 土井大炊頭 ○利勝 列座、雅樂頭傳上意之趣、

〔泰平年表 大御所〕文化十二年六月廿七日、向後所司代、御城代共高無差別、勤役中、壹萬石宛、御役知を賜の旨被仰出、

役屋敷

〔攝營秘錄 一〕西之御門　御城代之御屋敷也、御玄關唐屋根作り也、

〔古今塵分鶴 上〕大坂御城代　大手口

任免

〔藩翰譜 四中 內藤〕元和五年、大坂の城修せられて後、信政 ○內藤 に仰て此所を守らせ、畿內山陽山陰南海西海、數十州の鎭となされたり、○是大坂御城代の始

〔東武實錄 六〕元和五年、是年 ○中略 松平下總守忠明、攝州大坂城、采地十萬石ヲ改メ、和州郡山城、食邑十二萬石ヲ賜フ、是ニ依テ內藤紀伊守信正大坂ノ城代トナル、

〔營中御日記 三〕寬永三年五月五日、阿部備中守、○正次 於御前大坂御城番被仰付之、是內藤紀伊守代り也、

〔藩翰譜 五 阿部〕備中守阿部正次は、○中略 寬永三年、大坂の城守るべきよしの仰を奉る、○世に大坂御城代と云、一說に、寬永五年七月の事也と、不審、正保四年十一月二日、正次病急なりと聞召し驚かせ給ひ、子息對馬守重次、御暇を給て大坂に趣く、正次年七十九歲にて、同き月十四日にぞ卒しける、

對馬守重次、十一月二日御暇賜て、夜を日につぎて馳のぼる程に、同八日大坂に著て、父の病を見るに、既にかうよと見えしかば、今夜重次、此所の奉行城番の人々に向ひ、父のいたはり

晨夕を待つべからず、こゝに身まかり候はんは、御座所を穢し參らするの恐れ少なからず、速に私の別業に移し、終焉の事を謀んと存ずるは如何にと問ひしかば、かねてより面々も此事を存候ひき、御計ひ尤然るべしと皆一同に答ふ、重次父が枕に寄添て、泣く〳〵此由を申ければ、正次、全く汝が諫むる所を禦ぐにあらず、たゞし聞く所の如きは、正次が所存に聊か違ふ所あれば、重て人々と謀りて、義の當らん所に從はんと思ふなり、正次、初め此所に罷り上りし時、將軍家御前近く召され、そも〳〵大坂の城は、五畿の內にありて、近くは王城を鎭護し、遠くは南海西海山陽山陰の要路に當りて、數十州の鎭たり、汝は當家累代の舊臣にして、慶長元和の戰功、他に異なるを以て、わが代官として此城の事を司らしむる所なりと仰せ下されしかば、正次不肖の身を以て、かゝる重職に在らん事、如何で其任に堪ふべき、さりながら世既に泰平に屬し、當時何の憚りか候べき、若しくは又如何なる竊盜偸盜など起て、城垣を窺ひ候はんに、正次が身命のあらん限り城をば守て、人手には渡すまじく候まゝ、たゞこれを以て、奉公の節と仕るべきにて候と答へ奉りて、罷りのぼり候ひき、されば正次が一息も息の續きてあらん程は、此城を誰にか渡し候べき、又正次こゝにて死したらんには、君のましまさん所を穢し申の憚りあるに似たれども、凡そ城を高くし池を深くするといふ事は、事危きに臨みて、戰士死を以つて守るべきが爲なれば、左ゝむらを積みて壘を增し、血をたゝみて水を深くする事、古より其例少なからず、若し死を以て忌むべくんば、城きづく事なからんには若く可らず、これらの事を以て思ふに、人々の議せらるゝ所、正次が素懷に同じからざるに似たり、然れども正次若かりし時だに、我が智の人に及ばざる事を自ら知りにき、況んやいま老耄の期既に至り、老病只今身に逼りて、身心更に明らかならず、正次が所存、ひとり義に當らんとも覺えず、すべからく人々の議せらるゝ所、正次が思ふ所を

注進し、はや馬を以て申參らせ、御裁斷を仰がるべうもや候といひしかば、重次も人々も、宜ふ所ことわり至極せり、さらば飛脚を以て此由を申さるべしと議定す、同十日戌の時ばかりに飛脚到來し、將軍家事のよしを聞召し、御感殊に斜ならず、正次が所存、御旨に違ふ事なし、尤も神妙の至りに思召し、只其儘に候べしと仰下され、同じき十二日飛脚馳せかへり、正次仰を傳へ聞て感淚に堪へず、わづか一日を經て卒す、

〔藩翰譜 五稻垣〕攝津守重種、〇中略同き〇元和八年、大坂の城番と成て彼處を守り、正保四年阿部備中守正次卒して後、權に此城鎭守の事を仰せ下さる、(權の御城代といふ)

〔藩翰譜 三水野〕出羽守忠職、家を繼ぐ、承應元年五月十六日、忠職、內藤帶刀忠興、松平丹波守光重と、輪番交替して大坂の城を守るべしと仰さる、(これを假りの御城代といふ)忠職の守る事、まづ此年より同三年に至り、再び萬治元年より二年に至り、三度寬文元年より二年に至り、寬文八年六月廿六日、五十六歲にて卒す、

〔東職記聞 一〕大坂城代一人

元寬日記曰、元和元年五月大坂城陷、六月、以大坂城封松平下總守忠明、同五年二月、移忠明於和州郡山、以大坂為衞城、始置此職、以內藤紀伊守信正(一作政、又作照)被補之、慶延略記曰、寬永三年四月、執政阿部備中守正次代內藤信正也、正保四年十一月阿部正次卒、自慶安元年九月至同二年十一月、被使玉造口定番稻垣攝津守重種守衞其大手門也、同年同月、內藤豐前守信照代稻垣重種在衞于大手門、承應元年六月、水野出羽守忠胤代內藤信照、同三年八月、內藤帶刀忠貞(一作興)代水野忠胤、明曆二年五月、(一作三月)松平丹波守重國(一作重貞)代內藤忠貞、萬治元年七月、水野忠胤又代松平重國、同二年八月、內藤忠貞又代水野忠胤、同三年四月、松平重國又代內藤忠貞、寬文元年八月、水野忠胤又代松平重國、同二年三月再置之、以青山因幡守宗俊被補之、而罷大手在衞爾來連綿至于

大阪定番職員職掌

今也、在衞始慶安元年、終寛文二年、前後十有五年也、自慶安二年至萬治元年、四侯之在衞、限被以三年、自萬治元年至寛文二年、限以一年也、

〔藩翰譜 青山五〕因幡守宗俊、〇中略寛文二年九月十五日、大坂の城守るべき由仰下され、所領數多加へ賜ふ、御城代と成て五萬石を領す、

〔柳營秘鑑 四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一大坂御城番。。貳人 萬石以上、與力并同心百人ヅヽ、

〔吏徵別錄 上〕萬石以上大坂御定番。。。　元和七年辛酉三月廿日、始置二人、　寛永七年庚午廢　慶安元年戊午六月廿六日、再置二人、

〔有司勤仕錄〕大坂御城番

一此御役は、〇中略御城代に差續て、彼地之事司之、妻子引越之常役也、〇中略五六年に一度、江府江出、暫在府なり、〇又見柳營秘鑑

〔明良帶錄 前篇〕大坂御城番 諸大夫兩人勤 雁間縁側 御役料三千俵 與力三十騎、同心百人宛、

此場は、御城代に續ての重任也、御城の御破損、其外等迄を關る、肝要之場にて、非常之備第一也、

〔東職記聞 一〕大坂定番二人

仕大坂城中、掌守衞京橋玉造兩門之職也、人別領與力三十人同心百人也、

〔官中秘策 一〕大坂城之事并諸役人之事

一御定番、京橋口、玉造口兩所、

〔攝營便覽 一〕二之九部

一京橋口御門　御定番持、札改番所三ヶ所、見附大番所壹ヶ所有之、與力同心出番す、同所續に御定番屋敷有之、〇中略

一玉造口御門　右京橋口御門と同斷、東續き御定番之居屋敷有之、〇中略
一東中仕切御門　玉造御定番之御持、御門內に見附番所有之、同心出番す、〇中略
一二之丸御櫓　大手北之方二重之御櫓三ヶ所、南の方に壹ヶ所、南の方御太鼓櫓續に七番有之、
京橋續北之方三重之御櫓壹ヶ所、御定番之御持、

〔憲教類典〕二ノ十七大阪在番　大坂御定番衆御條目

定

一自然之時、二之丸之外江一切出間敷事、
一壘付なくして、大坂在番之外、二丸より內江一切入間敷事、
一下々に至まで、憍成者を擇可抱置事、
右堅可相守此旨者也

寛永三年七月廿七日

阿部備中守どの　高木主水正どの　稻垣攝津守どの

御下知條々

定

一大坂御城中、萬事付而、以計策惡事相賴族有之者、可申出之、領地又は金銀にても、其約束之一倍
御褒美可被下之旨、下々に至まで急度可申付事、〇中略
一御城米之儀、入念手置可申付之、相定員數貳拾萬俵之分、不足無之樣、常々可改置事、
一御鐵炮之儀、御加番之面々江割渡之、火口ふけざるやうに打せ、臺金具以下可相改之、御弓も同
前に割渡射させ、手置仕べし、此外之諸道具を常々相改、損じ候分は可拵置事、
一御鐵炮之藥、念入手置可申付之、經年序損候藥之分は、可合置之、萬一只今迄有之藥、減少之時は、

不依何時無油斷可合置事、

一町々切々遂せんさくを、不審なる者不在之樣に可申付事、〇中略

一於西國筋何篇之儀出來たりといふとも、合互に不苦事は言上之、可申付之、若差當儀有之節は、不及得上意、幸爲近所之間、板倉周防守(〇重宗、京都所司代、)永井信濃守遂相談、存寄之通、右兩人へ以連判可申達之旨被仰出候事、

一西國筋船御用之時、差當儀におゐては、是亦不被仰出以前にも、周防守信濃守相談之上、近國(江)申觸之、遲々無之樣可致沙汰、相延不苦時は、可任上意事、

一御鐵炮玉藥具足已下何方(江)も急之御用に差遣可然におゐては、不得御意候とも、周防守信濃守相談を以可遣之、遲々にても不苦時は、其趣令言上、可任上意事、

一不寄何事、急御撿使被遣之可然儀有之時は、是又周防守信濃守相談之上可申付事、

右可被相守此旨者也、仍執達如件、

承應三年八月廿五日　豐後守(〇阿部忠秋)　伊豆守(〇松平信綱)　雅樂頭(〇酒井忠清、以上三人並老中、)

內藤帶刀殿(〇信廣)　保科彈正忠殿(〇正貞、以上二人並城番、)

資格俸錄

〔有司勤仕錄〕大坂御城番

一此御役ハ壹萬石以上、從五位下之御役也、〇中略出府之節ハ芙蓉間に相詰、

〔東職記聞〕大坂定番二人　從五位下

當職亦格准城主也、又補之則列雁間之末席、然亦百司則列芙蓉間、

〔明良帶錄(前篇)〕大坂御城番

雁菊之間より一二萬石にて勤む、帝鑑よりも出る、此場多く其席より詰掛ニ昇り御奏者番へ昇る也、此場地役也、

任免

〔吏徴 首卷 萬石以上〕大坂御定番二人　諸大夫　大坂在住　雁ノ間　御役料三千俵　御暇金拾枚、時服五、　引越拜借金三千兩

〔寶曆集成綿綸錄 二十四〕延享二丑年閏十二月

大坂御定番
植村土佐守　森川兵部少輔

向後御役料三千俵宛被下候間、可被得其意候、

閏十二月

〔台德院殿御實紀 五十三〕元和六年、是年〇中略保科肥後守正光、大坂城番となり、〇下略

〔東武實錄 十〕元和九年、此年御入洛、江戸ニ還御ノ時、高木主水正正次ヲ召テ、采地千石ヲ加賜セラレ、大坂城京橋口ノ常番トナル、稻垣平右衛門茂綱、後攝津守大坂ノ城玉造口ノ常番トナル、

〔大猷院殿御實紀 七十一〕慶安元年六月二十六日、この日保科彈正忠正貞內藤石見守信廣、大坂定番命せられ、〇中略與力三十騎、足輕百人ツヽ、屬せらる、

〔東職記聞 一〕大坂定番二人

城主記曰、元和八年、始置此職、以稻垣攝津守重種被補玉造口定番、同九年以高木主水正正成被補京橋口定番也、寛明日記同說、慶延略記曰、慶安元年六月、保科彈正忠正貞內藤石見守信廣、代稻垣重種高木正成之時、人別增給一萬石、且被令領與力同心也、

〔藩翰譜 一保科〕彈正忠源正貞は、〇中略慶安元年六月廿日、大坂の城番を承り、所領倍し下さる、元一萬石二萬石と成、上總の飯野と云所を領す、身既に老ぬれば、萬治三年の冬、請に依て番役ゆるされて歸る、

〔藩翰譜 四中石川〕播磨守源總長は、〇中略萬治三年十一月廿二日、大坂の城番となる、

〔藩翰譜 五板倉〕主水重矩、〇中略萬治三年十一月廿一日、大坂の城番となされ、所領加へ賜ふ、一萬石を加へ、都て二萬石なり、〇中略

與力同心

寛文五年正月二日の夜、雷大坂の城に落かゝつて、五重の層樓、悉く燒失せぬ、思ひも寄らぬ事なれば、城中城外、以の外に周章し、火救はんとて內に入らんとするに、城中の女童は外に逃げ出んと互ひに門々を爭ひ、出やらざれば入る事も得ならず、こゝに重矩が守る所、京橋の口は、城門の外を去る事數十歩、忽ちに柵を結ぶ、柵の中また門を開けり、兵門々を守りて、甲乙人の亂入を禁ず、かねて又此邊なる所領の民に下知して、もし城中に火あらん時は、是を持ち來りて其偶を合せて、郎從等が妻子を引つれて行けとて、給の貝の半は民こ與ふ、其貝の內に郎從の名をゑるす、半は郎從に與て、彼民の名を貝のうちにゑるし配分す、此夜かの民共が馳せ來り〳〵、符を合せて郎從等が妻子盡くゐて行きし程に、郎從等身のほだしなければ、一筋に城の守りを堅くし、靜まりかへつて、音もせず、かゝる備へいくらもありて、世の美談となりぬ、

〔吏徵附錄郡一〕大坂御定番與力六十人、同心二百人、　一組與力三十騎、同心百人、　慶安元年戊子六月廿六日始置

大阪船手職員職掌

〔大坂武鑑〕御城內御役御城番御勤

御破損、小出源五右衞門、京橋口御與力　小野一郎、玉造口御與力　御藏目付、淺羽淸大夫、曲淵作兵衞、京橋口御與力　大井伊織、多湖門作、玉造口御與力　御買物、萬年四郎五郎、京橋口御與力　垣屋佐太郎、玉造口御與力　御鹽噌、三宅與一郎、京橋口御與力　加藤源內、玉造口御與力　御石、淺羽隼人、京橋口御與力　坂本孫之丞、玉造口御與力　關所、宮崎庄九郎、京橋口御與力　田口利大夫、玉造口御與力

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

現米八十石　大坂御定番與力

同十石三人扶持　同　同心

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

待遇 俸祿

一大坂御船手壹人

〔寛永三年武鑑〕同〇大坂御船奉行

〔吏徵別錄上布衣以上〕大坂御船手　元和六年庚申、始置二一員一、小濱民部光隆、　寛文五年乙巳正月十四日、兩人、〇中略　天和三年癸亥閏五月廿一日、一人役、　貞享二年乙丑八月十三日、一人役、小濱孫三郎、

〔柳營秘鑑二〕遠國御役人常詰并交代之場所

同〇大坂　御船手　右同斷〇妻子引越之常役、五六年一度爲二御目見一出府、暫時在二江戶一、

〔東職記聞二〕大坂船手頭一人

住二大坂一掌二將軍家之御座船以下諸船、及下二知商賈之廻船等一之職也、領二與力十人水主五十人一也、

〔明良帶錄前篇〕大坂御船手持高五千石以下者御役扶持百人扶持　躑躅　老支　與力六騎　水主五十人

寄合より直に昇るといへ共、古へは武勇之人之勤場なり、水主を指揮して非常の備をなす、古の小濱某〇光隆、大勇の文字を家紋に被下、今幕の紋に付るは此謂なり、小濱長五郎の先祖也、大坂は中國西國之路程にて肝要の地なれば、不虞之備第一也、尤船之改掟等有り、

〔嚴有院殿御實紀三十〕寛文五年二月四日、大坂舟手頭に、小豆嶋飽兩島の代官をつかふまつらしむ、

〔吏徵別錄上布衣以上〕大坂御船手〇中略　寛文五年二月四日、大坂御船手之頭高林又兵衛、大橋與總右衛門、小豆嶋飽兩島之御代官被二仰付一、只今迄は大坂兩町奉行、并小濱民部〇光隆、大坂船手、立合相勤候得共、向後は右兩人可レ致二支配一旨、老中申渡也、

〔東職記聞二〕大坂船手頭一人　布衣

〔嚴有院殿御實紀三十六〕寛文八年正月十九日、この日大坂船手頭高林又兵衛直重、布衣著する事

任免

をゆるさる、

〔吏徴上布衣以上〕大坂御船手一人　老中支配　躑躅間　大坂在住　持高　御役扶持百人扶持五千石以下　御暇金三枚、時服三、羽織、　引越拜借金三百兩

〔寶暦集成綸綸錄 二十四〕延享四卯年十月

御勘定奉行江

大坂御船手、向後五千石以下之者被仰付候節は、御役扶持百人扶持被下候間、其趣可被相心得候、

十月

〔嚴有院殿御實紀 三十〕寬文五年正月十四日、大番組頭高林又兵衛直重、大橋與三右衛門親重、ともに大坂船手頭命ぜられ、四百石づゝ加恩ありて、千石になされ、官料千石給ふ、　二月三十日、大坂船手頭に、官宅構造料銀三十貫目づゝ下さる、

〔東武實錄 七〕元和六年十二月、是月、○中略小濱民部光隆、攝州大坂船手ノ役トナル、時ニ加賜二千石、舊領併テ五千石ヲ領ス、

〔甘露叢 二十三〕天和三年七月十六日、大坂御船手水野甚五左衛門、須田與左衛門、兩人雖相勤、向後與左衛門一人ニテ可相勤ノ旨、次飛脚ヲ以被仰付、

〔東職記聞 二〕大坂船手頭一人

萬姓家譜曰、慶長五年、小濱民部光隆與久九鬼○久恐誤大隅守義嘉○義恐誤隆戰勢州安條浦、光隆力戰大勝之、而捕其水主五十人也、神祖賞其功、而賜所捕之水主五十人也、後年被補當職、即領其水主也、代々記曰、自元和六年至寬文四年、小濱氏父子二世襲職、寬文五年小濱治右衛門卒、一作民部増一人也、慶延略記曰、寬文五年三月、大橋與總右衛門、高林又兵衛等兩人補小濱氏之後職、給人別加恩四百石職料千苞、而被令領與力五人水主五十人也、代々記曰、天和三年五月、水野甚五左衛門

與力水主

遷先手物頭、須田與左衛門一人在職、貞享二年八月、須田氏辭職、小濱民部始孫三郎代之、爾來復一人也、一本代々記曰、往古者无當職、小笠原越中守廣朝、中島與五郎等兩人、在住大坂行當職事也、元和六年、小濱光隆補之、爾來連綿至于今也、

〔吏徴附錄都督職〕大坂御船手、組、與力六人、水主五十人、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

大坂御船手與力
現米三十六石

手水主同心
同七石一人扶持

〔厳有院殿御實紀三十〕寛文五年正月十四日、大番組頭高林又兵衛直重、大橋與三右衛門親重ともに大坂船手頭命せられ、○中略上乘五人、水主五十人預らる、

大阪鐵砲奉行

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一大坂御鐵炮奉行三人役料同心十人ヅヽ

〔吏徴御目見以上〕大坂御鐵砲奉行二人　御定番支配　大坂在住　持高　御合力現米八十石

御暇金壹枚、時服貳、　引越拜借金七十兩○中略　寛永八年辛未正月廿六日始置

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人并御足高御役料定

大坂御鐵炮奉行
御合力米現米八拾石

〔大猷院殿御實紀十七〕寛永八年正月廿六日、書院番水野傳藏近之、和田五助維重、大坂鐵炮玉藥奉行命せられ、いとまたまふ、

〔吏徴別錄下布衣以下御目見以上〕大坂御鐵砲奉行　寛文五年乙巳二月五日、大坂御鐵砲奉行小泉久彌跡役、御小性組より稻富喜三郎被仰付之、貳百俵御加增被下、都合五百俵に被成下、如有來御

役料八十石被下之、右喜三郎事、去々年卯七月十日、御勘氣御免被召出、同年十二月、御切米三百俵被下、且辰八月御小性組江御番入被仰付、本多土佐守組ニ而相勤候處、鐵砲上手ニ付、今度右之通被仰付之、

〔泰平年表 二編二〕天保十二年九月十二日、大坂御鐵炮方坂本鉉之助、格別之譯を以、御役扶持七人扶持被下、非常御手當之儀、此上共無油斷可心掛旨被仰渡、

〔東職記聞 一〕大坂鐵炮奉行二人

人別領十人○同心也、或曰、兩人而領五十人、但一人ハ三十人、一人ハ二十人、

〔吏徵附錄 郡職〕大坂御鐵砲奉行組、同心二十人、　一組十人　現米十石、三人扶持高、

大阪弓奉行

〔柳營秘鑑 四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一大坂御弓奉行三人 役料同心十人ヅヽ

〔吏徵 上御目見以上〕大坂御弓奉行二人　御定番支配　大坂在住　持高　御合力現米八十石 ○中略

引越拜借金七十兩 ○中略　寛永十一年甲戌三月廿六日始置

〔憲教類典 二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日　大坂御弓矢奉行

一遠國御役人并御足高御役料定

御合力米現米八拾石

〔憲教類典 三ノ二十六中殿〕年號月日無之

御暇拜領物之席 ○中略

一金一枚 時服二　大坂御弓矢奉行

〔吏徵附錄 郡職〕大坂御弓奉行組、同心二十人、　一組十人　現米十石、三人扶持高、

大阪具足奉行

〔柳營秘鑑 四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一大坂御具足奉行四人役料同心六人ツヽ、

〔慶應元年武鑑〕同○大阪御武具奉行御役料現米八十石同心十人ツヽ、

〔吏徴御目見以上〕大坂御具足奉行二人　御定番支配　大坂在住　持高　御合力現米八十石
御暇金壹枚、時服貳、○中略　寛永十六年己卯三月七日始置

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人幷御足高御役料定

御合力米現米八拾石

大坂御具足奉行

〔大猷院殿御實紀二十六〕寛永十一年閏七月廿五日、大坂へ御動座あり、○中略淀川より御舟にて大坂城にいらせ給ふ、○中略具足奉行太田七右衛門吉秀、日下藤九郎宗勝、根岸長兵衛定仍、小林十兵衛重忠、○中略金一枚、時服二づヽ、○中略賜ふ、

〔常憲院殿御實紀三十八〕元祿十一年十一月十八日、大坂具足奉行佐橋儀兵衛佳重、精勤を褒せられ、百俵加秩あり、材木幷に破損奉行を兼、城中掃除の事をも兼奉らしめらる、

〔吏徴附錄郡職〕大坂御具足奉行組、同心二十人、一組十人　現米十石、三人扶持高、

大阪破損奉行

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數幷役高組支配大概

一大坂御破損奉行四人役料手代五人ツヽ、

〔吏徴別錄下布衣以下御目見以上〕大坂破損奉行　元祿十一年戊寅十一月十八日、始置、三員、此已前ハ、御材木奉行と唱兩人有之、

〔常憲院殿御實紀三十八〕元祿十一年十一月十八日、今迄の材木奉行○大阪二員、破損奉行と職名を改て、儀兵衛佳重○佐橋氏、大阪具足奉行、兼破損奉行、と共につとむべしとつたへらる、

〔吏徴御目見以上〕大坂破損奉行三人　御定番支配　大坂在住　持高　御合力現米八十石○中略

引越拜借金七十兩

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人幷御足高御役料定

御合力米現米八拾石　　大坂御破損奉行

〔憲教類典三ノ二十六御材木奉行兼之御殿中〕年號月日無之

御暇拜領物之席〇中略

一金一枚時服二　　大坂御破損奉行

〔東職記聞一〕大坂破損材木奉行三人

人別領手代十五人藏番六人也、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

現米十石三人扶持　　大坂御破損手代

〔官中秘策一〕大坂城之事幷御役人之事

一御金奉行貳人、御役料現米八拾石、同心拾五人宛、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕大坂御金奉行　寛永二年乙丑月日、深津彌五右衛門正吉、大坂御金奉行となる、或云、同十六年己卯三月七日、始置三員、〇中略　享保七年壬寅十二月七日假役元文五年庚申十一月七日、定本役二員、假役二員、

〇按ズルニ、營中御日記、寛永二年七月二日ノ條ニ、大坂より次飛脚書狀到來、大坂御金奉行加藤平右衛門、去一日於大坂病死之由トアレバ、深津正吉ハ、加藤平右衛門ノ後ヲ繼ギタルモノナルベシ、

〔勘契備忘記下〕享保巳年〇十年

大阪藏奉行

大坂御金奉行壹人宛當地罷出候事

大坂御金奉行壹人宛、向後二三年ニ壹度ヅヽ、當地江罷越相勤候內ハ、當地御金奉行壹人ヅヽ、大坂江罷越相勤、雙方勤方之儀も存候樣に致可然候間、被得其意、能時分可被相伺候、

〔吏徵御目見以上〕大坂御金奉行二人　御定番支配　大坂在住　貳百俵高　御合力現米八十石
御暇金壹枚、時服貳、　引越拜借金七十兩　一組同心十五人

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日
一遠國御役人幷御足高御役料定
御合力米現米八拾石　　大坂御金奉行

〔大猷院殿御實紀五〕寬永二年、是年、〇中略大番組頭深津彌左衞門正吉、今村傳右衞門正信、大坂金奉行に命ぜられ、大坂は、殊更の要地なれば、汝等兩人ゑらみ用ひ給ふ所なり、よく心用ひつかふまつるべしと面命ありて、兩御所〇秀忠、家光、より金時服を給ひ、また官料三百俵づゝ下さる、

〔大猷院殿御實紀二十六〕寬永十一年閏七月廿五日、大坂へ御動座あり、〇中略淀川より御舟にて大坂城にいらせ給ふ、〇中略當府金奉行新見彥左衞門正勝、深津孫左衞門正但、金一枚、時服四、羽織一づゝ、〇中略賜ふ、

〔大猷院殿御實紀四十一〕寬永十六年七月十九日、同城〇大坂金奉行森川庄兵衞次吉、若林與摠右衞門包盛、横地一郞右衞門忠重、彼地におゐて加恩八十石づゝ給ふ、

〔官中秘策一〕大坂城之事幷諸御役之事
一御藏奉行貳人〇貳人一本作二四人一　御役料現米八拾石、手代拾五人宛、

〔吏徵御目見以上〕大坂御藏奉行二人　御勘定奉行支配　大坂在住　貳百俵高　御合力現米八十石　御暇金壹枚、時服貳、　引越拜借金七十兩

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人并御足高御役料定

御合力米現米八拾石

大坂御藏奉行

〔吏徴別錄下布衣以下御目見以上〕大坂御藏奉行　元和七年辛酉月日始置、萬治二年己亥五月十八日、御合力現米八十石、元祿九年丙子十二月日、御役料貳百俵、享保七年壬寅四月九日、假役、寬保三年癸亥六月三日、御勘定奉行支配、是迄は大坂町奉行支配、此時より增一員、合三員　延享元年甲子二月晦日、定役三員、假役二員に定む、　寶曆十二年壬午七月廿四日、貳百俵高、

〔大猷院殿御實紀二十六〕寬永十一年閏七月朔日、大坂藏奉行飯高彌五兵衞貞次四子百助正次、新見彥左衞門正勝三子牢七郎義正、長谷川忠兵衞藤繼子某初見し奉り、○中略　廿五日、藏奉行飯高彌五兵衞貞次、萬年彌三郎正賴、遠山忠兵衞景重、竹內源右衞門吉勝、○中略　金一枚、時服二枚づゝ、○中略　賜ふ、

〔常憲院殿御實紀三十八〕元祿十一年十二月廿一日、大坂鹽噌場を、戍役の大番士奉行せしが、今より後藏奉行會議し、計會は直年をさだめ勤て、其場も本町藏地へ引移し、藏奉行所治すべしとつたへらる、

〔東職記四一〕大坂藏奉行三人

人別領手代十五人也、或曰三人而領同心十八人、

〔吏徴附錄郡職〕大坂御藏手代三十人○中略　大坂御米藏番人八人　享保十八年癸丑十月六日、現米七石、貳人扶持高、

大坂御米藏同心

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

金拾兩、三人扶持、

高槻藏奉行

大阪町奉行職員職掌

〔吏徵附錄郡職〕大坂御藏番二人

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

二十俵二人扶持　大坂御藏番

〔吏徵附錄郡職〕大坂御藏小揚百四人

〔官中秘策一〕大坂城之事并諸御役人之事

一大坂御藏小揚者百貳拾四人

内四人ハ小頭、金五兩貳人扶持ヅヽ、百貳拾人ハ、金三兩壹人半扶持ヅヽ、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

金三兩一人半扶持　大坂小揚之者

〔大猷院殿御實紀十八〕寛永八年、是年、○中略普請奉行本多覺右衛門顯直は、攝津國高槻藏奉行○中略となる、

〔吏徵附錄廢職〕高槻御藏奉行　天和元年辛酉十一月廿二日、始而御勘定より伏屋兵介被仰付、加五十俵、合百五拾俵、

○按ズルニ、高槻藏奉行ハ、天和元年以前、久シク廢職トナリ、此後モマタ或ハ廢シ、或ハ置キシト見エテ、元祿ノ武鑑ニハ之ヲ載セズ、寶永正德ノ武鑑ニハ其名見エタリ、但シ享保ノ武鑑ニ見エザレバ、其比ヨリ全ク廢セシナルベシ、

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一大坂町奉行貳人役料千俵、與力廿騎、同心五十人ヅヽ、

〔吏徵別錄上布衣以上〕大坂町奉行

元和五年癸未二月五日、○中略始置二員、○中略　寛永五年戊辰十月日、一人、同十一年甲戌七月

朔日、二人、○中略　同○元禄九年丙子正月十五日、三人、二月二日堺兼帶、同十五年壬午十一月廿八日、二人、堺兼帶止、

〔柳營秘鑑〕二遠國御役人常詰并交代之場所

同○大阪町奉行　右同斷○妻子引越之常役、五六年一度爲御目見出府、暫時在江戸、

〔明良帶錄後篇〕大坂町奉行千五百石高、御役料現米六百石、老支芙　與力三十騎同心五十人宛

此場も京都町監と同斷にて、土地市中の訟に限らず、地續在方迄の事を聽く、尤大坂は要地なれば、非常の備第一なり、

〔東職記聞〕一大坂町奉行二人　從五位下

住大坂、職掌同諸方町奉行也、人別領與力三十人同心五十人也、享保二年○二年恐七年誤以來、攝河泉播四州御領所之租稅者、當職掌之、寺社者、京都町奉行尙奉之也、○中略元祿九年正月增一人、○中略罷堺奉行、而被使當職帶之也、○中略同十五年、○中略堺亦復舊也、相傳云、西國邊於聊之訴論事者、當職得糺彈之也、

〔京兆府尹記〕二大坂町奉行職掌

兩人にて相勤る、西御番所東御番所と二ケ所に分る、隔月月番を以て政務を取おこなふ、

一諸荷物入津の所なれば、專ら此儀を取扱ひ、若怪敷品、或は武具等の運送なきや否や、諸侯の野心なきやを平日勘考の儀、御役の第一也、

一若いかゞの事あれば、御城代の御下知を蒙り其備へをする事、御役の第二なり、

一諸國の米穀入津の所なれば、其相場高直ならぬ樣、平日心掛、關東へ廻米等取計ふ義、御役の第三也、

一攝州播州河州泉州の四ケ國を支配して、公事裁判を取行ひ、非常は、御城代の御下知を以て政

稱す、是第四也、御役向寺社の奉行は兼ずといへども、十人御目附并堺奉行駿府町奉行等ゟ昇進す、

〔大坂武鑑〕町御奉行

御用日　二日　五日　七日　十二日　十八日　二十一日　二十五日　二十七日〇中略又見二官職策一

〔敎令類纂二集六十五〕享保十二丁未年九月

酒井讃岐守

向後於二大坂一も、京都之通り、町奉行所屋敷前ニ訴狀入候箱、出し置候樣ニ被二仰出一候間、可レ被レ存二其趣一候、

町奉行月番御役宅門前に訴狀箱出し候日　毎月　二日　十二日　廿一日

九月

〔御當家令條二十一〕覺

一大坂町奉行三人之內、兩人宛、向後御役所ニ可レ罷在一事、

一堺は大坂町奉行之支配被二仰付一候間、見廻り諸事入念可二申付一事、

一堺附之與力同心、大坂町奉行組被二仰付一候事、

一與力三拾三騎ヅヽ、同心七拾人宛二組、在勤之兩人支配可レ仕事、

附堺附之內ニ而、與力四騎、同心拾人、堺江可二相殘一事、

以上

元祿九子年二月

〔常憲院殿御實紀四十六〕元祿十五年十一月廿九日、けふ京、坂、奈良、駿府、下田へ驛使もて令せらるるは、大坂町奉行、先規のごとく兩人にて勤むべしと命ぜらるれば、〇中略大田善大夫好敏、松野河

内守助義、今より後大坂に常住し、三四年を經て參府し、四五月在府すべし、與力同心は兩組に分附すべし、○中略もとも、大坂より堺を所管の事は停廢たれば、其心すべしとなり、

〔窻の須佐見追加　上〕寛文五年乙巳、浪花の雷火、天主へ落て、都下の騷動大かたならず、町奉行某、登城せんとて、取あへず立出て、先同役彥坂九兵衞○重治の方へ往て同道せんと有しに、彥坂氏湯漬を食ながら、何とて登城せんとは有ぞと問れしかば、是程の大變、遲參候ては如何なり、早く參るべしと、御答時、彥坂云、我等はさやうに不ㇾ及、御城は御城代、御定番、御加番歷々あり、又近國の諸大名出合るべし、然ば何の氣遣もなし、我等は町の騷動を鎭る事、大切に候故、組の者を早速町中へ遣し、騷動なき樣にとふれさせ、足下にも組下を召され然べし、是に示し合居候て、町中違變もなきを聞屆たる上、登城可ㇾ然、先湯漬を食し、心靜に組下へ被ㇾ申付候へと有ければ、そこにて自身の組下へ使を遣し、所々見分の者を云付て、事の次第を聞屆られしとぞ、彥坂氏の心得、尤なる事とぞ申あひけり、

〔京兆府尹記　二〕大坂町奉行職掌

一千石以下貳百俵位の人もあり、又は三千石位の人も此任に進む、御役中千五百石高、御役料無し、今へあり、現米六百石、從五位下朝散大夫にて、芙蓉の間詰被ㇾ仰付、○中略十人御目付、幷堺奉行、駿府町奉行等より昇進す、或は御使番より昇進もあり、是は稀なる事也、○中略轉役は、京都町奉行進み口と同じ、近頃小田切土佐守、坂部能登守は、大坂町奉行ゟ江戶町奉行被ㇾ仰付ける、土州は至極直成人にて、寛政の始ゟ首尾能、今寛政十一年迄殊勤有ける、

〔吏徵　上　布衣以上〕大坂町奉行二人　老中支配　芙蓉間　諸大夫　大坂在住　千五百石高　御役料現米六百石　御暇金五枚、時服三、羽織、　引越拜借金五百兩

〔台德院殿御實紀　五十一〕元和五年九月十日、この日島田淸左衞門直時、久貝忠左衞門正俊、水野半

任免

左衛門守信、大坂町奉行命せられ、正俊は千五百石加賜せられ、三千石になされ、其餘與力同心給料とて五千石下され、八千石になる、

〔常憲院殿御實紀 二十三〕元祿四年正月廿六日、大坂の町奉行へ役料千五百俵たまはる、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕元文三戊午年三月十五日　大坂町奉行

千五百石ゟ以下之者は、向後千五百石之高御足高被下之、御役料は只今迄之通り被下之

元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人并御足高御役料定

御役料現米六百石　大坂町奉行

〔吹塵錄 德川氏 三十一〕慶應三卯年九月

布衣以上、御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

一金貳千五百兩宛　但高ニ不拘被下　大坂町奉行

〔諸御役代々記 十五〕大坂町奉行

西屋敷

元和五未二月七日、御上洛之節、於京都久貝因幡守同役被仰付、寛永五辰五月御免、○中略　嶋田越前守直時

寛永十一戌七月廿九日（中略）長崎奉行ゟ於京都被仰付、明暦四戌三月廿九日、老衰依願御免、　曾我又左衛門古祐（改丹後守）

明暦四戌三月廿九日、御先手弓頭ゟ、寛文元丑九月十三日（中略）病死、　曾我又左衛門近祐

寛文元丑十一月廿一日（中略）御目付より、延寶五巳九月十三日、病氣依願御免、　彥坂九兵衛重治（改壹岐守）

延寶五巳九月廿六日、(中略)御目付より、同九酉六月十九日、御役被召放、
島田藤十郎重頼 改越中守

延寶九酉七月六日、(中略)御目付方、貞享五辰四月九日、(中略)大目付江、
藤堂主馬良直 改伊豫守

貞享五辰五月三日、(中略)御書院番(中略)組與頭方、元祿三午十二月廿三日、(中略)町奉行(江戸)江、
能勢出雲守頼相

元祿四未正月十一日、(中略)御持弓頭方、同八亥十一月十四日、御役被召放、○中略
加藤平八郎泰貞 改大和守

元祿九子正月十一日、(中略)御目付より、(中略)堺奉行兼、同十四巳八月十四日、病氣御免、
永見甲斐守重直 ○以下二十七人略

東屋敷

元和五未二月七日、御目付より、(中略)島田越前守同役被仰付、(中略)正保五子二月二日病死、
久貝忠左衛門正俊 改因幡守

慶安元子二月十六日、(中略)御目付より、寛文三卯四月十二日、病氣依願御免、
松平孫大夫重綱 改隼人正

寛文三卯八月十五日、(中略)御書院番(中略)組與頭方、延寶七未五月十一日病死、
石丸石見守定次

延寶七未六月十四日、(中略)御使番方(中略)貞享三寅五月十八日、御役被召放、逼塞、
設樂市左衛門貞政 改肥後守

貞享三寅七月十日、(中略)御目付より、(中略)元祿五申三月廿三日、大目付江、
小田切喜兵衛直利 改土佐守

元祿五申四月十四日、(中略)御目付方、(中略)堺奉行兼帶、同十三辰十月廿六日、病氣依願御免、
松平五郎右衛門忠固 改玄蕃頭○以下十九人略

同

元祿九子正月十五日、(中略)御使番方、松平玄蕃頭永見甲斐守三人ニ而勤之、(中略)同十一寅十二月朔日、町奉行(江戸)江、
保田美濃守宗易 改越前守

元祿十二卯四月十四日、(中略)御目付より、同十五午十一月廿八日、(中略)御勘定奉行江、
中山半左衛門時春 改出雲守○以下二十七人略

〔東職記聞 一〕大坂町奉行二人

代々記曰、元和五年二月始置此職、以久貝因幡守、島田越前守兩人被補之也、島田氏在職十四年卒、而无後職者六年也、久貝氏耳奉之、寛永十一年七月、曾我丹波守(寛明同職又左衛門)古祐補之、蓋島田氏之後也、元寛日記亦云、寛永十一年七月、曾我氏補之、而爲代水野河内守、一本代々記亦云爾、○中略

與力同心

久貝氏在職三十年卒、慶安元年正月、松平隼人正重繼補之、元祿九年正月、增一人、以保田美濃守被補之、於是罷堺奉行、而被使當職帶之也、同十一年十二月、保田氏遷江戸町奉行、同十二年四月、中山半左衛門(後出雲守)代之、同十五年十一月、中山氏遷勘定奉行、爾來復二人、堺亦復舊也、

〔吏徴附録 郡職〕大坂町奉行組、與力六十人、同心百人、　一組與力三十騎、同心五十人、

〔大猷院殿御實紀 一〕元和九年、此年(○中略)大坂町奉行久貝忠左衛門正俊に、與力十騎を增預けられ、(○下略)

〔大猷院殿御實紀 二十六〕寛永十一年閏七月朔日、大坂町奉行曾我又左衛門古祐、千石加へられ、三千石になされ、與力二十騎、同心五十人屬せらる、

〔常憲院殿御實紀 三十三〕元祿九年二月二日、令せらるゝは、(○中略)大坂町奉行も、三員のうち二員は在住すべし、堺をその所管たらしむれば、巡察して諸事心いれ命ずべし、堺の與力同心はこれに屬せしめ、與力三十三騎、同心七十人づゝ、二隊在住の所屬たるべし、與力四騎同心十人は、堺にのこし置べしとなり、

〔常憲院殿御實紀 四十六〕元祿十五年十一月二十九日、大坂町奉行、先規のごとく兩人にて勤むべしと命せらるれば、隷下も與力三十騎、同心五十人づゝと定められたり、

〔大坂武鑑〕兩御組與力御役

支配　宗旨　川方　地方　御金　普請　御石　小買物　御藏目付　火事改　町廻り(一年替)

御加役

極印　遠國御廻米(但支配より一年替り御勤)　糸割符　銅方(御金役御四人より御勤)　鐵炮方　盜賊吟味　流人改

牢扶持　證文改

〔舊市制規 上集〕町奉行ニ隷屬セル吏胥ニ與力アリ

諸御用調役　町奉行役所ノ庶務ヲ整理ス　同心支配　同同心ノ進退ヲ取扱フ
目付　與力同心ノ職務取扱向キ、及ビ之レガ動作ヲ監督ス、
遠國役　西國三十三ヶ國ノ民事訴訟ニ係ル事ヲ取扱フ而シテ一國中人民互ノ訴訟ハ、其國主ノ裁判スル所ナレドモ、各其領地內外人民ノ間ニ起ス訴訟ハ、則チ大坂町奉行ノ裁斷スルヲ以テ、特ニ遠國役ヲ置ケリ、
寺社役　神社寺院、及神主僧侶ニ係ル、一切ノ事ヲ取扱ヒ又タ裁斷ス、
川浚役　本役中ニ川奉行ヲ置キ、大坂川々ノ浚疏ヲ總ベ、川浚役ノ者ヲシテ其事務ヲ補ス、且ツ川浚冥加金ノ事ヲ取扱フ、
地方役　大坂三鄕戶籍上ニ係ル事、興行營業上ニ係ル事、諸仲間株ノ事、民刑事上ニ係リ、裁斷ヲ爲サヾルモノヲ取扱フ、
御小買物役　大坂城中ノ表用器具等ヲ購入スルトキ、御買物奉行ニ立會フ、六役ト稱スル一ナリ、
御藏目付　大坂西丸、及難波藏米穀出入ノ際立會フ、六役ト稱スル一ナリ、
火事場改役　大坂三鄕出火ノ際、現場ノ取調ヲ爲ス、
御鹽噌　城內軍用味噌製造ノトキ立會フ、六役ト稱スル一ナリ、
闕所　各役所ニ於テ、官沒公賣ノ裁判ヲ爲シタル時、之レガ付立ヲ主ドル、　以上表役ト稱ス
勘定役　奉行役所出入ノ金錢出納ヲ主ドルモノ、則チ會計ナリ、
兵庫西宮上ゲ地方　兵庫西宮ハ、元藩領ナルヲ幕府直轄トシ、之レガ取扱方ヲ大坂ニ於テ爲ス、但其事務ハ土地ノ代官ニ於テ取扱フ、
極印改　舛車ニ撿印ヲ押捺シ、及ビ斗量衡ヲ取扱フ、

鐵砲役　町人ノ所持スル銃砲彈藥ヲ取締ス、

絲割符　絹絲ヲ長崎ニ於テ交易スル事ニ關係スル一切ノ事ヲ取扱フ、

唐物取締役　外國品賣買上ノ取締ヲナス、

流人役　吟味盜賊役ノ裁斷ヲ經テ、流罪ニスベキモノヲ引繼ギ、及ビ乘船迄ヲ取扱フ、

牢扶持　牢中食用品取締ヲ掌ル

定町廻　是レハ與力ノ内ニテ交代シ、市街ヲ巡察ス、以上加役ト稱ス

〔大坂武鑑〕兩御組同心御役

組頭　筆頭　宗旨　川方　地方　御金　御普請　御藏　御鹽噌　町目付　番役　樣物　遠國　極印　牢守

〔舊市制規上篇〕町奉行ニ隷屬セル胥吏ニ〇中略同心アリ〇中略

組頭　同心ノ頭立チタルモノニ命ジ、之レガ指揮ヲ爲スモノ、

筆頭　同心ノ老者ニシテ、事ヲ取扱ハズ、只ダ名目ノミ、

諸御用調役　寺社役　川浚役　地方役　吟味役　遠國役　御金役　御普請　御石　目安

證文役　御小買物　御藏目付　御鹽噌　與力ニ同ジ

物書役　當番所ニテ取扱フ、一切ノ事ヲ筆記ス、

闕所　與力ニ同ジ

牢屋敷取締　現今ノ看守長ノ如シ

同詰合役　看守ノ如シ

高原溜取締役　高原ハ牢屋敷ノ地名

町目付　町奉行ニ屬スル監察役ナリ

町年寄

唐物取締役　與力ニ同ジ

吟味役　騙局取込口論等ニシテ、強竊盜ヲ除クノ外、一切裁斷論罪ス、

盜賊役　强竊盜ニ係ル、一切ノ裁斷論罪ス、

御金役　大坂城內ニ在ル金藏ヲ支配スル御金役ニ立會フ、六役ト稱スル一ナリ、

御普請　大坂十一橋、則チ公役橋役、屋敷、牢屋、其他公事ノ土功ヲ取扱フ、六役ト稱スル一ナリ、

御石　秀吉大坂築城ノ時、各諸侯ノ運送セシ石、大坂各所ニ散在シ、不便ナルヲ以テ、川村瑞賢、取除キ方ヲ受負、其所在ノ地ヲ堀込ミ、今猶存スルヲ保護スル城內御石奉行ニ立會モノ、六役ト稱スル一ナリ、

目安證文役　民事上ニ係ル訴訟一切ヲ取扱フ

火事役　與力ニ同ジ

盜賊方御役所定詰役　盜賊捕方　役名ノ通

定町廻　與力ニ同ジ　以上表役ト稱ス

兵庫西宮上ゲ地方　極印役　勘定役　鐵砲役　株割符　與力ニ同ジ　以上加役ト稱ス

〔吏徵附錄 郡職〕大坂町奉行組、與力六十人、同心百人、〇中略　與力現米八十石、同心現米十石三人扶持、

〔常憲院殿御實紀 二十三〕元祿四年正月廿六日、大坂の町奉行へ役料千五百俵たまはる、與力等采邑を改て、廪米を給ふべき旨令せらる、

〔古今塵分鶴 下〕北組總年寄　平野町一丁目小西與左衞門〇以下六人略　南組總年寄　大和町安井九兵衞〇以下六人略　天滿組總年寄　二丁目紀伊國や左近右衞門〇以下四人略

〔吏徵別錄 上布衣以上〕大坂町奉行〇中略　大坂三鄕、北組二百五十町、南組二百六十一町、天滿組百

九町、合六百二十町、

〔舊市制規上篇〕大坂三郷ハ、北組南組天滿組ニシテ、元東天滿船場西船場ト云ヒ、德川氏直轄タルニ及ビテ總年寄ヲ置キ、其事務所ヲ總會所ト稱シ、北組二百五十町、始二百四十九町南組二百六十一町、始二百五十二町天滿組百九町、始百四町之レニ分屬ス、始メ豐臣氏ノ大坂ニ市街ヲ興スヤ、山城國伏見、和泉國堺等ノ町人ヲ移住セシメ、其中ニ就キ、重立チタル者ニ命ジテ、三郷町割ヲ爲サシム、慶長八年ノ頃、長崎港貿易品取締ニ因リ、糸割人數ヲ定タリ、本地ニ於テ其選ニ當ル者二十一人アリ、此輩皆ナ三郷ノ市政ニ與リ、呼ンデ元締衆ト云フ、松平下總守領知タリシ時、猶此二十一人ノ内ニテ公事取扱ヲ爲サシム、此時ニ當リ、冬夏兩時ノ爭戰ヲ經、人民諸方ニ離散ス、因テ悉ク之レヲ招集シ、荒地破屋ヲ授ケテ民家ヲ再營セシメ、中略又タ元締等ヲシテ各町ノ年寄ヲ選定セシメ、德川氏直轄タルニ及ビテ、元締ヲ改メ總年寄ト稱セシナリ、爾來其職ハ、概ネ子孫世襲シテ連續セシガ、安永以後ニ於テ十四人ト爲レリ、中略但一戸ノ内ニテ父子共ニ職ヲ奉ズ、故ニ子弟ハ助手ト稱ス、

總年寄職務并給料

民事刑事ニ關セザル事柄ハ、總テ取扱ヒ來タレリ、則チ現時ノ區長ノ如クニシテ、少シク職權ノ狹隘ナルモノナリ、幕府令シテ、總年寄ハ、三郷ノ實況ヲ知ラザルベカラズ、依テ民事上ノ裁斷ハ、必ズ傍聽スベシト、

總年寄ハ、諸費及ビ川浚冥加金、濱地冥加金、川中使用冥加金ノ各町負擔ヲ定ム、是レハ總テ豫算ニ依ル、

町年寄ノ任免ニ預ル事

總年寄ノ所見ニテ、町年寄ノ内ヲ以テ金銀出納ヲ取扱ハシム、爲メニ十名內外ヲ撰出スル

事ヲ得、則チ北組ニ於テ十一町ト稱シ、南組ハ加勢町、天滿組ハ勘定場取締ト稱セリ、但無給トス、

總年寄ハ、時々總會所ニ出勤シ、且每年一回江戸ヘ年頭ニ出府ス、但北組ハ每年、南組天滿組ハ隔年ナリ、〇中略

每組總會所ニ物書小使ヲ傭入ル、是レハ總テ總年寄ノ黜陟スル所ニ依ル、月々凡金四五兩ヲ與フ、

年番消防夫ハ、總年寄ニテ之ヲ進退ス、

諸仲間株ニ於テハ、三鄕總年寄申合、元帳一冊ニ集合シ置キタリト、〇中略

給料ハ別ニ給セズ、各戸ノ五役ヲ免除セラル、

車運上、悉皆收受ス、但壹輛ニ付、半年分金貳朱トス、又タ年始暑寒ハ朔歲末ニ組內幷諸商業ノ者ヨリ祝金ヲ收受ス、

總會所ノ下、每町ニ會所ヲ置キ、總年寄之レヲ監督ス、〇中略

總會所ニ總代ナル者ヲ置キ、總年寄ノ特撰ヲ以テシ、町奉行之レヲ命ズ、

〔支配幷達國町人御禮格式坤〕大坂

一正月三日、總中緋縮緬十五卷、白銀十五枚、年寄兩人、白紗綾二卷ヅヽ、

一御暇於蘇鐵間寺社奉行申渡、年寄兩人白銀五枚ヅヽ、總代兩人同三枚ヅヽ被下之、

正德三年正月三日

一御代替獻上物、年頭之通、

一右ニ付、年寄幷總代江時服二ヅヽ被下之、

○按ズルニ、書名ノ支配ハ、寺社奉行ノ支配ヲ云フ、

駿府城代
職員
職掌

駿府役人

駿府役人ニハ、城代、城番、勤番、武具奉行、破損奉行、及ビ町奉行等アリ、城代ハ、駿府■城ヲ守護スル職ニテ、勤番武具奉行等ヲ支配シ、又當城ニ在番セシ書院番ノ、此地ニ留リテ小普請ト爲レル人々ヲ支配ス、從五位下ニ敍シ、役料二千石ヲ給ス、後ニハ役金二千兩ヲ給スルコトヽナレリ、屬僚ニ與力同心アリ、

定番ハ城番トモ書シ、一人ヲ定員トシ、城ノ諸門ヲ警衞ス、千石高ニシテ、役料七百俵ヲ給シ、與力同心ヲ附屬セシム、勤番ハ三十人アリ、組頭一人ヲ置キテ、之ヲ統轄セシム、組頭ハ五百石高ニシテ、役料三百俵ナリ、武具奉行ハ、一人ヲ置キ、二百石高ニシテ、合力米四十石ヲ給ス、又樂園預ヲ兼務スルモノニハ、役金三十兩ヲ給セシコトモアリ、同心之ニ屬ス、破損奉行ハ、二人ヲ置キ、一人ニ下奉行四人宛ヲ附シ、又同心ヲモ附ス、

町奉行ハ二人ヲ定員トシ、府内一切ノ政務ヲ行フノミナラズ、駿河伊豆ノ兩國ニ在ル幕府領内ノ租稅ヲ徵集スルコトヲ掌ル、後ニ町奉行ノ請ニ由リテ、其所屬ノ公田ハ、悉ク代官ノ所轄ニ屬スルコトヽナレリ、千石高ニシテ、役料五百俵ヲ給シ、後ニハ役金千五百兩ヲ給セリ、與力、同心、水主等ノ屬僚アリ、又町役人ニ、町年寄、名主等アリ、之ヲ町頭ト云フ、

久能總門番ハ、其初メハ久能城代ト云ヒ、又久能奉行トモ云ヘリ、榊原氏ノ世職ニシテ、久能山東照宮ヲ護衞ス、與力同心アリテ、之ニ屬ス、

〔柳營秘鑑 四〕遠國御役人之員數井役高組支配大概

一駿河御城代壹人 與力十騎 同心五十人

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕駿府御城代　元和七年辛酉十月十四日、始置一員、後中絕、〇中略　寬永十年

癸酉二月十六日、再置二一員一、

〔東職記聞 一〕駿府城代一人

仕二駿府一守二護城一、掌二彼地一切事一之職也、領二與力十人同心五十人一也、

〔柳營秘鑑 二〕遠國御役人常詰并交代之場所

一駿府御城代　右同斷〇妻子引越之常役、五六年一度爲二御目見一出府、暫時在二江戸一、

〔明良帶錄 前篇〕駿府御城代 御役知二千石　屬 與力十騎 同心五十人 老支

若非常之節は、御書院番頭申合、御爲取計ふべき旨也、當時御書院番頭在番止て、謫居之小普請となり、御城内河内屋敷に第宅を補ひ住居す、今は御城代之勤、小普請を支配す、土地之事、御城之破損、非常の取計ひ、正四九月久能山拜禮、御忌日には法臺院參拜、御府内巡見、五ヶ年目參府、御城下大名の通行の屆等與力同心大手を固む、

〔赦令類纂 初集四十二〕駿府御城代江之御條目并覺書

條々

一萬事兩人遂二相談一、奉レ爲能樣令二覺悟一、城中番儀、堅可レ勤二仕事一、

一依二事之品一、番頭町奉行相二加之一、可レ令二相談一事、

一城中江、番之者之外一切不レ可レ入レ之、自然不レ叶用事之時は、相談之上可レ入レ之、若不レ寄二何事一以二計策一惡事相願族有レ之ば可レ申レ之、領地又は金銀、何にても其約束之一倍可レ被レ下間、下々に至迄常々此趣可二申聞一事、

右之條々、可レ相二守此旨一もの也、

慶安二年十一月廿五日　御黒印

大久保玄蕃頭どの〇忠成、駿府城代、へ

位階俸祿

井戸新右衞門との〇府城番、直弘、駿へ

〔大猷院殿御實紀二十四〕寬永十一年三月二十五日、駿府城代松平豐前守勝政に、久能山の御宮堂社構造の事命せらる、

〔有司勤仕錄〕駿府御城代

一從五位下之御役にして、〇中略 芙蓉之間被相詰、御留守居年寄衆ゟは上に列す、

〔明良帶錄前篇〕駿府御城代

此場所萬石以下之極職也、雁之間御緣に侍して、同列にて、御役知行二千石東村に有り、〇中略 近頃の御書院番頭より超昇するは、松平信濃守〇忠明 蝦夷地開發之義、御登筋之上計を奉る、隊吏遠山金四郎、石川左近、長坂忠七等を率て、度々彼之地へ押渡りて、功多を以、御書院番頭より超昇す、常格とは仕難し、大番頭より昇るを常とす、

〔吏徵上布衣以上〕駿府御城代一人　老中支配　芙蓉間　諸大夫　持高　御役知二千石〇中略　御暇、時服五、羽織、　引越拜借金千五百兩

〔吏徵別錄上布衣以上〕駿府御城代〇中略　元文元年丙辰五月十日、御役知二千石、

〔幕朝故事談〕駿河御城代は、御役料地方にて二千石、彼地に有なり、

役屋數

〔吹塵錄三十一徳川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

駿府御城代

一金貳千兩　但高に不拘被下、在府中は不被下、

〔駿河國志〕駿府御城地役

任免

御城代　屋敷大手御門之内

〔東武實錄　六〕元和五年十月、是月松平大隅守重勝、○中略駿河國府ノ城ノ城代トナル、

〔元寛日記　四〕寛永十年二月十六日、大久保玄蕃頭、○忠成駿府御城代被仰付、代松平丹後守勝信、

〔東職記聞　一〕駿府城代一人

元寛日記曰、元和五年七月、移遠駿二州主中納言頼宣卿於紀州、以駿府爲衞城、寛永二年正月、以遠駿甲三州封大納言忠長卿也、寛永九年十二月、配忠長卿於上州高崎、於是駿府又爲衞城也、慶延略記曰、寛永十年二月、始置此職、以大久保玄蕃頭忠成被補之、領與力十人同心三十人也、城主記載城代職統曰、松平大隅守重勝、同丹後守重忠、渡邊山城守茂、松平豐前守勝茂、大久保玄蕃頭忠成云々、不記遷補之年月也、代々記曰、寛永九年十二月、配忠長卿於高崎、以大番頭松平豐前守勝茂被令在衞于玆、○中略而勝茂在衞于玆者三年、而歸東都也、當其在衞中、有部下樹黨而訴非義者、將軍家怒被改易彼黨四十二人也、勝茂亦罹事故而被解職也、又載城代職統曰、松平大隅守重勝、同丹後守重忠、渡邊山城守茂、而不記遷補年月、寛永十年二月、松平豐前守勝茂、自大番頭遷之、同年十月、大久保玄蕃頭忠成自駿府定番遷之也、然依代々記寛永十一年勝茂之事故與慶延略記、以勝茂爲駿府在衞之權輿、則大番頭非城代者必矣、又以忠成自定番爲遷之者、亦近誤乎、萬姓家譜曰、元和二年、大久保忠成補書院番組頭、寛永三年、叙從五位下任玄蕃頭、同十年補駿府城代也、依是則自定番爲遷之者、恐非也、夫又城主記、代々記、以重勝父子及茂爲城代者、可傳說之謬也、○中略凡有事而置城衞、必先遣大番頭被令守衞、則雖駿府亦可推知也、且以在衞記推之、自元和五年至寛永二年、重忠、茂之部下、無事則遣之駿府令在衞者必矣、

與力同心

〔吏徵附錄　郡職〕駿府御城代組、與力十騎、同心五十人、　寛永十年癸酉二月廿九日、始置同心五十人、

〔駿河國新風土記　七國府下〕横內町

御城代與力同心屋鋪 稱鷹匠町(○中略) 承應三年午五月十一日、與力同心、傳馬町裏町ニテ宅地ヲ賜ルベキノ奉書下リテ、此所ニテ割渡サルト歷代記ニ見エタリ、

〔大槪順〕御目見以下諸國地役之部

貳百俵 駿府御城代與力

二十俵二人扶持 城代同心

駿府定番職員職掌

〔東職記聞 一〕駿府定番一人 布衣

住駿府城中、而掌守衞四足門之職也、領與力十人同心五十人也、

〔柳營秘鑑 二〕遠國御役人常詰幷交代之場所

同(○駿府) 御城番 右同斷(○妻子引越之常役、五六年一度爲御目見出府、暫時在江戶、)

〔明良帶錄 後篇〕駿府御城番 (千石高 老支) 御役料七百俵 芙 (與力十騎 同心五十人)

此場は、非常の節、御城代御書院番頭申合心得方あり、當時は御書院方在番止て、駿府に居付小普請と成り、甲府と同じく詰居の人なり、御城內河內屋敷といふ所に、小普請衆第宅を補理す、以前は小高の仁昇りたれども、今は四五千石にて勤る、駿府小普請出來て、多事成る故成るべし、御城破損之事御城代に達す、御城代參府留守心得あり、

待遇俸祿

〔吏徵 上 布衣以上〕駿府御定番一人 老中支配 芙蓉間 千石高 駿府在住 御役料七百俵 御暇、金三枚、時服貳、羽織、 引越拜借金四百兩

〔駿府志略〕享保八年卯六月廿日、御奉書到來、御定番御役料七百俵被仰付、

〔敎令類纂 二集六十六〕元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人幷ニ御足高御役料定(○中略)

御役料七百俵 駿府御城番

役屋敷

〔駿河國志〕駿府御城地役

御定番　屋敷四足御門内

任免

〔東武實錄 六〕元和五年十月、是月〇中略渡邊山城守茂、大御番頭組ノ士ヲ引テ駿府ノ城番トナル、

〔營中御日記 二十四〕慶安二年十月十三日、駿府御定番被仰付、御加増千石被下、與力十騎、同心五十人御預、井戸新右衛門、

〔東職記聞 一〕駿府定番一人

慶延略記曰、慶安元年十月、寛明同說、但作十二月、又二年十月トモ云、始置此職、以井戸新右衛門直弘被補之也、爾來無斷絶也、

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕駿府御定番〇中略一說、寛永十年癸酉二月八日、松平豐前守茂〇勝、駿府之御定番被仰付、同心五十人御預被成、同十日、御加増貳千石被下之、本知行五千石、都合七千石、江城年錄

按に、是は今の御城代の事にして、御定番にはあらざる也、

〇按ズルニ、城番任免ノ事ハ、城代任免ノ條ニ引ケル東職記聞ヲ參看スベシ、

與力同心

〔吏徵附錄 郡職〕駿府御定番組、與力十人、同心五十人、

〔駿河國新風土記 七 府下〕上下草深町

御城番組與力同心屋鋪　寛永十一年御番城トナリシ時、大番頭松平豐前守ニ隨テ伏見ノ城ヨリウツル、ハジメハ御先手ノ與力同心ナリ、豐前守、同ジ年府城ニ卒ス、其時ヨリ此地ニ宅地ヲ賜リ住シテ、慶安二丑年十二月、井戸新右衛門始テ御城番ヲ命ゼラレテヨリ、御城番ノ組トナル、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

二百俵　駿府御定番與力

二十俵二人扶持　同　同心

〔吏徴上布衣以上〕駿府勤番組頭一人　駿府御城代支配　駿府在住　五百石高　御役料三百俵

御暇、時服貳、羽織、　引越拝借金□□兩

〔吏徴別錄上布衣以上〕駿府勤番組頭　寛政二年庚戌八月四日、始置二一員一、○中略兩御番組頭格、

〔文恭院殿御實紀九〕寛政二年八月四日、書院番富永喜三郎記雄、駿府勤番組頭となり、官料三百苞下され、布衣の士となさる、これ創置の職なり、

〔吹塵錄三十一徳川氏一〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不レ被レ下、是迄之場所高に不レ拘、今度御改正、別紙之通御役金被レ下候旨被二仰出一之、

御役金被レ下高之覺

一金三百兩　駿府勤番組頭

但高六百石以上之者江ハ半減、御切米五百俵以上之者江ハ不レ被レ下、同貳百俵以上之者江ハ半減、

〔吏徴上御目見以上〕駿府勤番三十人　駿府御城代支配　駿府在住　三百俵高　引越拝借金□□兩　破損奉行假役人、御扶持方十人扶持、

〔吏徴別錄下布衣以下御目見以上〕駿府勤番

寛政二年庚戌七月廿日、始置二二十員一、兩御番格、○中略同三年辛亥六月十七日、増二十員一、合三十人

〔文恭院殿御實紀九〕寛政二年八月四日、この日甲府勤番支配より、同じ勤方○駿府勤番命せらるゝもの二十一人、

〔駿府志略〕文政三庚辰年四月十二日、御奉書到來勤番小栗庄右衛門、辻又右衛門、此度御破損奉行仮役被二仰付一、勤候内御扶持方十人扶持ツヽ被レ下之、且淺間總社御再建掛り相勤、隔日右場所へ相

駿府武具奉行

越候間、勤日數ヘ御手當金十兩ヅヽ被下之旨、同八月十四日被仰越候、

〔吏徵上御目見以上〕駿府御武具奉行一人　駿府御城代支配　駿府在住　持高　御合力現米四十石〇中略　御暇、金壹枚、時服貳、　引越料金三十兩

〔憲敎類典御役二ノ五〕元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人幷御足高御役料定

貳百石高

駿府御具足奉行

〔駿河國新風土記七國府下〕橫內町

武具奉行屋鋪〇中略　此所ノ役宅ハ、寶永六丑年定破損奉行庄田主稅ノ宅ナリシガ、御役御免ニテ江戶ニ移リテヨリ、大原又右衞門拜領ス、

〔駿河國志〕駿府御城地役

御武具奉行組同心三人　組屋敷橫內町

〔駿府志略〕延寶六年、御城代與力大原源五兵衞、御武具奉行被仰付之、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕駿府御武具奉行〇中略　元文五年庚申七月廿六日、御藥園預兼帶、御役金三十兩、

〔吏徵附錄郡職〕駿府武具奉行組、同心三人、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

二十俵二人扶持　駿府具足同心

駿府破損奉行

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕駿府御武具奉行　寶永四年丁亥三月十日、始置駿府破損奉行二員、

〔文露叢十〕寶永四年三月十日、御役替、駿府破損奉行、役料三十人扶持、同心四人ヅヽ賜之、小普請方ヨリ庄

駿府町奉行職員職掌

田主税勝金左衞門、○又見二常憲院殿御實紀一

〔駿府志略〕享和三癸亥年十二月二十四日、御奉書到來、御破損方町奉行定掛り相止、御武具奉行榊原平兵衞、御破損奉行兼帶被二仰付一、御城代與力一人同心三人、御定番組町組、右同斷、右與力都合三人、同心九人、平兵衞へ手付、御破損方相勤候樣被二仰付之一、且淺間總社御再建被二仰付之一、

〔駿府志略〕寶永四年、定御破損方下奉行、一組四人宛被二仰付一、御城代御定番町奉行同心より二人宛出る、以上六人、外二人は頭抱也、

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一駿府町奉行貳人

〔東武徵別錄上〕布衣以上　駿府町奉行　慶長十二年丁未七月三日、始置二二員一、○中略　元和二年丙辰六月廢　寬永九年壬申十月廿八日、再置二二員一、○中略　同○元祿十五年壬午十一月廿八日、天野傳四郎重義、堺奉行へ轉役の後一人役となり、與力六騎同心四十人減す、

〔東職記聞一〕駿府町奉行一人　布衣

住二駿府一、職掌同二諸方町奉行一、領二與力八人、同心六十人、水主五十人一也、

〔柳營秘鑑二〕遠國御役人常詰并交代之場所

同○駿府町奉行　右同斷○妻子引越之常役、五六年一度爲二御目見一出府、暫時在二江戶一、

〔明良帶錄後篇〕駿府町奉行老支　千石高御役料五百俵　芙　與力八騎同心六十人

此地も中國の押にて、大井川を以て關東の切所となし、箱根を以て關東の大手とす、大切の要地なり、土地の公事訟、在方迄の事を關りきく、非常の手當備へ肝要なり、

〔京兆府尹記二〕布衣役　駿河町奉行職掌

壹人役也、駿河御城代有といへども、是を經ずして御老中支配なり、

資格俸祿

一御城代幷勤番衆と事を議して、萬一の節は、上方筋押へたり、其外通行の諸大名、及び諸士の非常密察する事、第一の御役也、
一駿河町中幷駿河一國、伊豆一國を支配し、公事裁判御仕置等取行ふ、御役の第二也、
一駿州久能山之御鎭座まします、東照宮様御宮警衞、是御役の第三也、

〔厳有院殿御實紀二十三〕寛文二年正月十九日、駿府町奉行所隷の公田、こたび奉行の請により、代官に屬せしめらる、

〔吏徴上布衣以上〕駿府町奉行一人　老中支配　芙蓉間　駿府在住　千石高　御役料五百俵　御暇、時服三、羽織、　引越拝借金三百兩

〔京兆府尹記二〕駿河町奉行職掌布衣役
千五百石高也、○中略此任を蒙り候は、御使番、御徒頭、小十人頭、御進物番、西丸御目付衆等よりすゝむ、轉役は、京都町奉行、大坂町奉行、或は遠國奉行など也、大抵如斯なれど、直様御普請奉行、御作事奉行等へも昇進するもあり、

〔厳有院殿御實紀三十四〕寛文七年二月十六日、駿河町奉行に、官料五百俵給はるべしと仰出さる、

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月十五日
駿府町奉行○中略
千石より以下之者は、向後千石之高御足高被下之、御役料は、只今迄之通被下之候、以上、
元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人幷御足高御役料定
御役料五百俵　駿府町奉行

〔吹塵錄三十一徳川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不ㇾ被ㇾ下、是迄之場所高ニ不ㇾ拘、今度御改正、別紙之通御役金被ㇾ下候旨被ㇾ仰出之、

御役金被ㇾ下高之覺

駿府町奉行

一金千五百兩　但高ニ不ㇾ拘被ㇾ下

役屋敷

〔諸役代々記十五〕駿府町奉行　御役屋敷、大手前、○中略同御役屋敷、横内御門外、

〔駿府志略都城〕城西○中略大手門外、左爲市尹衙、○中略城東南有第一衙營、其北爲東市尹衙址、初東西二尹並治、元祿十五年罷東尹、

任免

〔藩翰譜五板倉〕天正十六年、德川殿、駿河の國府に移り任せ玉ふに至て、多くの御家人の中を擇び玉ひて、勝重して此所の町奉行に任せらる

初め勝重を召され、此職の事仰せ下されしが、其任に堪ざるよしを固く辭し申けれども、更に御許しなく、勝重、さらば宿所に罷り歸り、妻にて候ものと謀りてこそ御返事をば申べけれと申す、德川殿笑はせ玉ひて、さもありなん、罷り歸りて相謀れと仰せ下さる、妻は勝重が歸るを迎へて、悅ぶべき事ありと告知らす人あり、如何なる幸や候と云ひけるに、勝重物をも云はずほくそゑみて、衣裳ぬぎ棄て坐になほり、妻に打向ひ、されば今日召されし事、餘の義にあらず、此度御座所を移さるゝに依て、彼の町の奉行たるべきよしを仰せ下さる、如何にも叶ふべからざる旨を辭し申せども御許なし、さらば我家にかへり妻に謀り候はんと申て罷歸りぬ、さて御事は如何にや思ふといふ、妻は大に驚きて、あな淺まし、わたくしごとなどならば、夫婦はかるといふ事もこそあれ、公にてかゝる事やのたまふべき、まして是は仰せ下さるゝ所なり、殊に其職に堪へ堪へじは御心にこそあるべけれ、みづから如何で知り候べきといへば、勝重、いや〳〵我この職に堪へ堪へじは、我心一つのみにあらず、御身の心による事にて侍るぞ、ま

づ心を沈めてよく聞き玉へ、古より今に至り、異國にも本朝にも、奉行頭人など丶云る丶者の、其身を失ひ其家を亡さぬは稀なり、或は內緣に就て、訴を斷る事おほやけならず、或は賄賂に因て、理を判つ事わたくし多し、これらの災は婦人より起る所あり、我れ若し此職奉らん後は、親しき人の云ひよらん事なりとも、訴訟の事執り玉ふまじきか、僅の贈もの參らせて候事ありとも、苞苴のもの受たまふまじきか、これらの事を初として、おことは、勝重の身の上、如何なる不思議の事ありとも、さし出て、もののたまふまじきよし固く誓ひ給はざらんには、勝重此職に任ずる事は如何にも叶ふべからず、さればこそ御身と謀るべしとは申たれといふ、妻つくづくうち聞て、誠にのたまふ所ことわりにこそ侍れ、みづからは如何なる誓ひをも立てなん、とく參りて畏まらせ玉へといふ、勝重大に悅びて、神にかけ佛にかけて、かたき誓ひたてさせて、此上は思ひ置く事なし、さらば參らんとて、衣裳ひきつくろうて出づ、袴の後腰をもぢりて著たり、妻うしろざまに見て、はかまのうしろあしう候というて、立寄てなほさんとす、勝重聞きもあへず、さればこそ我が妻に謀らんと申せしは誤たざりけれ、勝重が身の上の事、如何なる不思議ありとも、さし出て物いはじと誓ひしは今の程ぞかし、早くも忘れ給へりな、この定ならんには、勝重職うけ給る事叶ふべからずとて、また衣裳ぬぎ捨てんとす、妻大に驚き悔て、さまざまの怠狀まゐらす、さらばその言葉いつまでも忘れたまふなといひて御前に參る、德川殿、如何に汝が妻は何とか云ひしと仰せければ、妻にて候ものが、愼みて承れと申侍ると申す、さこそはあらめとて、大に笑はせ玉ひしとなり、

〔諸御役代々記十五〕駿府町奉行

權現樣御時代　彥坂九兵衞直政

慶長十四酉二月廿六日病死　井出甚助正次

元和五未年、伏見奉行より、

山田清大夫重次

門奈助左衛門宗勝

〔東武實錄 四十〕寛永九年十月十二日、佐藤勘右衛門、長崎彌左衛門、駿府ノ町奉行ニ仰付ラレ、是ヨリ先キ、駿府ノ町奉行、忠長卿ノ家人山田清大夫重次、門奈助左衛門宗勝、是ヲ勤ム、

〔常憲院殿御實紀 四十六〕元祿十五年十一月二十九日、けふ京坂奈良駿府下田へ驛使もて令せらるゝは、○中略駿府町奉行は、今より後、一員にてつとめ、所屬は與力六騎同心六十人と定められば、鈴木兵九郞重視、今より後在住し、三四年へて府へまかり、四五月は在府すべし、○下略

〔東職記聞 一〕駿府町奉行一人

諸家系譜曰、板倉四郞左衛門勝重、八右衛門好重第二子也、初爲僧在寺院、天正二年六月、高天神之役、兄喜藏定重戰死也、於是神祖令勝重還俗、而爲好重之嫡子也、始給采地五百石、而被補駿府町奉行也、依之則天正十年以後、當職始于板倉氏者必矣、集成曰、慶長十二年、駿府町奉行竹尾平左衛門卒、政事錄曰、慶長十七年二月云々、下本多上野介與力岡本大八於獄、町奉行彥坂九兵衛光正糺彈之也、代々記曰、神祖在駿府之比、彥坂光正、井出甚助正次、兩人奉之也、然依御年譜、慶長十二年三月、駿州興國寺城主天野三郞兵衛康景之臣、殺原田之鄕民、吏官井出甚助集成作志摩守訟之也、依是非町奉行、原田鄕之代官也、且集成曰、元和二年四月、至神祖薨之比、而彥坂光正奉職、帶近鄕之代官也、依是則以井出氏爲當職者近誤乎、然不知井出氏若進彥坂氏之後否乎、又案、板倉氏從神祖來于東都之後、竹尾氏代之、竹尾氏卒之後、彥坂氏補之乎、來者夫詳焉、集成曰、元和七年、山田清大夫重次、門奈助左衛門宗勝等兩人、自伏見遷補之也、慶延略記曰、寛永九年十月、以佐藤勘右衛門、長崎半左衛門被補之、代山田門奈二氏也、代々記曰、元祿九年二月、罷清水船手、被使當職帶之也、同十五年九月、天野傳四郞遷堺奉行、同十六年正月、鈴木兵九郞卒、同年同月水野小左衛門

補之、爾來一人也、

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一駿府町奉行略○中 與力十騎 同心六十人

〔吏徵附錄部職〕駿府町奉行組、與力八人、同心六十人、

與力同心

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

百五十俵　駿府町奉行與力

二十俵二人扶持　同　同心

〔駿河國志〕駿府御城地役

町奉行同心六拾人　駿府町中、壹町ニ壹貳人ツヽ住居、本通り町裏ニ組屋敷幷領地有之、

〔甲子夜話五十四〕駿番雜記上

駿府ニテ同心居所ハ、以前ハ與力町ノ通、屋敷ヲ構住候所、慶安中、正雪騷動ヨリ後、町同心ハ町每ニ一二人ヅヽ居候樣ニナリ、今猶其通ニ候所、當時ニ至テハ暮シ方困窮ナル由、因テ町ニ居候者ハ、野菜等作ル所モ無ク、彼是困ル由、又在方ニ居候同心ハ、竹細工、或ハ傘ナド造者モ有ル由、同心百人餘ノ中、間ヒニハ御城ノ駒寄ヲ拔ク者モ有ルト云、コレ拔取テ屋根修復ノコマイ抔ニナシ、古キハ薪抔ニスルトナリ、用人井戸小文治所聞

〔嚴有院殿御實紀五十八〕延寶七年三月十八日、駿府町奉行兩隊、與力五騎づゝ、新に置しめらる、

〔大猷院殿御實紀二十一〕寬永九年十月二十八日、駿府町奉行二人に、同心を屬せらる、

水主

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一駿府町奉行略○中 水主五十人

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

町頭

十俵二人扶持　駿府水主

〔甲子夜話五十四〕駿番雜記上

駿府ニテハ、町年寄、乙名、名主ヲ都テ町頭ト稱ス、コレ神祖大坂御歸陣ノトキ、市中重立タル者、御城ヘ御祝儀ニ出候節、神祖御矢倉ヨリ御覽、御側ニ候逢坂九兵衞ニ、向ヨリ大勢參リ候ハ、當地ノ町頭共ニ候哉ト御尋アリ、九兵衞上意ノ通リト申上ル、夫ヨリ當地ニテハ町頭ト稱候ヘト九兵衞ヨリ達候由、此役六十二人アリ、其內月々三人ヅヽ、年行事月番ヲ請持、當地ノ願訴訟、或ハ御觸事等、都テ此役ヨリ取計ルト云、

右町頭共、町奉行所ヘ寄合日、每月四日十一日廿一日ニ出、諸事御用向承候由、町奉行ニ目通リ候トキ、脇指御免ノ由、是モ神祖大坂御陣ノ節、諸町人安部川迄御見送リニ出候處、上下計リ著シ、脇指無キユヘ、町人トテ脇指ナシハ見苦クトノ上意アリ、夫ヨリ公邊ヘ出ルトキハ脇指御免ノ由、城喜所ㇾ聞

久能總門番

〔慶應三年武鑑〕同〇駿河御城番久能總御門番　千八百石、榊原越中守、

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數幷役高組支配大概

一久能奉行役料千俵

〔駿河國志四〕東照大權現御鎭座

御宮奉行　千八百石　榊原甲斐守

〇按ズルニ、當職ハ初メ久能城代ト云ヒ、後久能奉行トモ御宮奉行トモ云ヒシナリ、

〔吏徵附錄世職〕榊原越中守久能御門番　老中支配　高千八百石　御役扶持貳百人扶持　駿府在住　御暇、時服貳、羽織、

〔柳營秘鑑二〕遠國御役人常詰幷交代之場所

與力同心

一駿州久能奉行　毎春參府、十月時分御暇被レ下、置ニ久能ニ百日計罷在、

〔台德院殿御實紀五〕慶長十二年五月二日、久能の城代榊原七郎右衞門清政卒しければ、その子内記照久に家つがせられ、父の原職を命ぜらる、この淸政は、○中略慶長十一年に至り、駿府久能は要害の地なれば、これを守るべしとの命を蒙り、廩米五千俵をたまひ、今年二月よりかしこにうつり、けふ六十二歲にてうせぬるなり、

〔諸御役代々記十六〕久能御宮役人

慶長十二未十一月廿八日、依二鈞命一駿州久能ニ移リ、正保三八月七日病死、　榊原内記照久改二大内記一

承應三午年、與力同心御預ケ、元祿十四巳七月五日、願之通隱居、　榊原越中守照淸

元祿十四巳七月五日、父家督被レ下、與力同心御預ケ、享保四亥正月十四日病死、　榊原織部照信改二越中守一

享保四亥三月廿七日、父家督被レ下、同十八丑四月十六日病死、　榊原織部照長改二越中守一

享保十八丑七月四日、父家督被レ下、(中略)早世ニ付、諸大夫ニ不レ成、　榊原仲照昌

寛保三亥十二月廿七日、家督被レ下、(中略)早世ニ付、諸大夫不レ被二仰付一、　榊原主馬照休

延享二丑九月十八日、家督被レ下、寶曆六子六月廿六日病死、　榊原大貳久寛改二越中守一

寶曆六子九月六日、家督被レ下、寛政四子十二月十九日(中略)隱居被二仰付一、　榊原新三郎長良改二越中守、又伊豆守、又甲斐守一

寛政四子十二月十九日、家督被レ下、(中略)文政十亥十二月十二日(中略)隱居被二仰付一、　榊原音吉照鄕改二因幡守、又越中守一

文政十亥十二月十二日、家督被レ下、(中略)御役扶持被レ下、同月十六日諸大夫、　榊原織部照砥改二大内記一

〔吏徵附錄部職〕久能御門番組與力八人、同心三十人、御宮番一人、手代二人、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

駿府久能總門與力　地方百五十俵

同　同心　地方二十石

〔駿河國志四〕東照大權現御鎭座
百俵　久能近邊領地
組與力八人内二人百廿俵取
廿俵二人扶持　組同心三十人
〔嚴有院殿御實紀七〕承應三年三月十五日、久能門番榊原越中守照淸に、與力六騎、足輕三十人屬せしめらる、

甲府役人

甲府勤番支配職員職掌

甲府役人ニハ、勤番支配、勤番組頭、及ビ勤番アリ、勤番支配ハ、二人ヲ定員トシ、甲府城ヲ守護シテ、城米及ビ弓鐵砲等ノ武具ヲ準備シ、又府中一切ノ政務ヲ行フ、從五位下ニ敍シ、三千石高ニシテ、役料千石ヲ給ス、勤番組頭ハ四人アリ、勤番ノ士ヲ二組ニ分チテ之ヲ指揮シ、勤番支配ノ命ヲ奉ジテ、其職務ヲ行フ、二百俵高ニシテ、役料三百俵ヲ給ス、勤番ハ、享保九年ニ、甲府城ノ警衞トシテ、小普請組ノ士二百人ヲ、此地ニ勤番セシメタルニ始マリ、何レモ二百俵高ナリ、但シ假目付、武具奉行、破損奉行等ノ職ヲ兼ヌルモノハ、別ニ手當ヲ給ス、其他甲府勝手、小普請世話取扱アリ、與力同心アリテ、共ニ勤番支配ニ屬ス、又牢番及ビ小人等ノ職アリ、

〔東職記聞一〕甲府勤番支配二人
住甲府守護城統領勤番士二百人、與力十人、同心五十人、掌彼地一切事之職也、

〔文久紀事六〕文久二年七月九日
時服五　甲府勤番支配　酒井伯耆守
今度御改革被仰出候ニ付、甲府勤番支配、壹人勤被仰出候、依之御役御免、勤仕並被仰付、是迄出精

相勤候ニ付被下之、

〔明良帶錄前篇〕甲府勤番支配三千石高御役知千石、但三千石以下之者仰付られ候へば、御足高にて三千石に成、御足高は甲府御藏にて被下、并老支與力二十騎同心百人

甲府詰居之小普請を支配す、○中略御城內勤番支配の小屋ありて、土地公事訟を聞りさく、

〔法曹後鑑〕甲府勤番支配へ御條目

條々

一甲州御城中、萬事入念可被申付之、以計策惡事相頼族於有之は可申出之、領地又は金銀にても、其約束之一倍御褒美可被下之旨、至下々迄兼て可申聞事、

一兩人與力同心、并召仕之もの共、緣邊之儀相互に可申合、近國御譜代之面々、家中之輩たりといふとも、其者を撰、慥成におゐては、是又可相結事、

一御城米之儀、入念手置可申付之、高五千俵相詰、不足無之樣に可改置事、

一御弓御鐵炮、其外御道具、常々入念手置可仕、破損は相改之、吟味之上修復可申付事、

附御鐵炮之藥、入念手置可申付之、歷年序於惡成は、其節伺之上可任差圖事、

一耶蘇宗門、堅爲御制禁之間、町中彌念を入可相改事、

一町々切々逢穿鑿、不審成もの不在之樣可申付事、

右可被相守此旨者也、依執達如件、

天明八年十二月朔日　伊豆守　丹波守　備後守　越中守

安藤出雲守殿　大久保遠江守殿

〔弘化四年甲官便覽〕御勤番支配與力十騎、同心五十人ツヽ、

御月番一人宛、御城內見廻隔日、○中略毎月御逢對、　五日　九日　十九日　廿五日　廿九日

資格俸祿

御式日　三日　十三日　二十三日

〔東職紀聞 一〕甲府勤番支配二人　従五位下
賜遠國奉行之上座也

〔明良帯錄 前篇〕甲府勤番支配
多くは甲府掛り之小普請支配よりも昇る

〔吏徴 上布衣以上〕甲府勤番支配二人　老中支配　芙蓉間　諸大夫　甲府在住　三千石高　御役知千石　御暇、金三枚、時服三、羽織、引越拝借金三百兩

〔憲敎類典 二ノ五御役〕元文三戊午年三月廿日
一遠國御役人并御足高御役料定
三千石高　御役知千石　　甲府勤番支配

役屋敷

〔吏徴別錄 上布衣以上〕甲府勤番支配〇中略　享保十三年戊申正月十五日、勤番支配屋敷、御役宅ニ成、

〔弘化四年甲官便覽〕御勤番支配
戸川因幡守、山手御役宅、　一色丹後守追手御役宅

任免

〔有德院殿御實紀 十九〕享保九年七月四日、小普請組支配有馬内膳純珍、興津能登守忠閒、甲斐國に赴き、府中の城を戍るべしと命せられ、同じ國にて、官料の地各千石をたまひ、座班は遠國奉行の上に定めらる、よて內膳純珍は従五位下に敍せられ、出羽守とあらため、忠閒にはこれまで足し給はる廩米、其まゝに給はり、かつこれまでの所屬のうち、五百石以下二百石までにて、年齢十七歳より六十歳までのものを、各百人屬せしめられ、純珍忠閒をはじめ所屬にも、各彼地にて宅地下さるべければ、江府の宅地はかへし奉るべし、また純珍忠閒及び所屬各家族をひきつれ、彼地に居をうつすをもて、純珍忠閒には各金三百兩恩貸せられ、所屬には二百石より三百石までは

各金三十兩、四百石より五百石までは各金五十兩を恩貸せらる、によりかへし納ることは勘定奉行にとひはからふべし、また所屬二百人のうちより組頭四人命せらるべきによて、其任にたふべきものを撰て聞えあぐべし、又此二百人の内に、醫員五六人加へらるべしとなり、

〔東職記聞 一〕甲府勤番支配二人

代々記曰、享保九年(一作八)三月、移甲州主松平甲斐守吉里於和州郡山、而使松平豐後守資訓(于時濱松城主)守衛之、同年七月、始置此職、以有馬内膳(後出羽守)奥津帶刀(後能登守)等兩人被補之、移小普請衆二百餘人彼地、被令統領之、

甲府勤番組頭

〔東職記聞 一〕甲府勤番支配、〇中略勤番組頭四人、從支配而奉行組衆事之職也、不論家祿、給職料三百苞也、

〔吏徵 上 御目見以上〕甲府勤番支配組頭四人

頭支配　甲府在住　貳百俵高　御役料三百俵　御暇、銀拾枚、時服貳、　引越拜借金(貳百石至三百石、三十兩、四百石至五百石、五十兩、)

〔憲教類典 二ノ五 御役〕元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人并御足高御役料定

御役料三百俵　甲州勤番支配之組頭

〔有德院殿御實紀 十九〕享保九年八月十一日、小普請深谷左源太盛重、大河内十大夫信政、小川甚左衞門茂昭、間宮十左衞門信興、甲斐國府中城番士の組頭を命せられ、官料三百俵を賜はる、これ新に設らる、職なり、

甲府勤番

〔吏徵 上 御目見以上〕甲府勤番貳百人　頭支配　甲府在住　持高〇中略　破損奉行四人、十人扶持、御藏立合二人、十人扶持、　引越拜借金(二百石至三百石、三十兩、四百石至五百石、五十兩、)　一組百人　享保九年甲辰八月

十三日始置、

頭書、假目付十人、御手當銀拾五枚、　御武具奉行二人、同十枚、　徽典館頭取二人、同五枚、　隔年毎組三人、江戸表參上御目見、

〔弘化四年甲官便覽〕御勤番衆　二百俵高

〔有德院殿御實紀十九〕享保九年八月十三日、小普請の士に、甲斐國府中城の番を命せらる、もの二百人、醫員四人、

〔仕官格義辨〕甲府勤番之事

問曰、當時甲府ニ住居被致候甲府勤番と申衆は、たとへ幼年老人病身に而、御番難勤候而も、矢張甲府勤番と唱へ申候者、如何之譯に而候哉、答曰、甲府勤番之儀者、享保九辰年、○中略七月四日、小普請支配より有馬内膳出羽守と改む、奥津能登守兩人を、甲府勤之頭に被仰付、同年八月十三日、右貳組之小普請組より五百石以下二百石以上八拾餘人、外八組之小普請より○五百石以下二十三字據一本補二百拾餘人、都合貳百人甲府勤番被仰付、同年十一月十一日、組頭壹組に兩人づゝ、深谷左源太、大河内十大夫、間宮十左衛門、小川甚左衛門、右四人被仰付、御役料三百俵づゝ被下候、右勤番衆は、小普請之内より勤番被勤候樣に相聞候、右之内兩御番筋、大御番筋も有之、右之外之家筋之衆も有之候故、急度格式立候御番方と申にも無之、病氣幼少に而も、甲府に住居致、御番勤候樣に成候衆は、御番難勤は引込被居、畢竟小普請之衆甲府に住居に而、右之内より勤番被致候譯と被存候、甲府に而家督に成候衆は、御番勤候得ば、御目見に江戸江出府被致候由及承候、

甲府勝手小普請世話取扱

〔東徽附錄內職〕甲府勝手小普請世話取扱　勤番支配○中略　文政□年始置

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

五十俵高役扶持三人扶持　甲府勝手小普請組世話役

與力同心

〔吏徴附錄 郡職〕甲府勤番支配組與力二十人、同心百人、〇中略引越拜借金三十兩與力、七兩同心、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

現米八十石ゟ百五十俵迄　部屋住十人扶持　甲府勤番支配組與力

三十俵ゟ十五俵迄　二人扶持、諸出役御手當金不同、　同　同心

〔有德院殿御實紀 十九〕享保九年八月十三日、小普請の士に甲斐國府中城の番を命せらる、もの二百人、醫員四人、其下與力二十人同心五十人をも命せらる、

牢番

〔吏徴附錄 郡職〕甲府牢番二人

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

十五俵ゟ十俵迄　二人扶持　甲府牢番

小人

〔吏徴附錄 郡職〕甲府御小人十四人

十俵一人扶持　享保十年乙巳、始置、二十人、當時十四人

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

十五俵ゟ十俵迄　二人扶持　甲府御小人

伏見役人

伏見役人ニハ、初メ城代アリ、後留守居アリ、又別ニ奉行アリ、抑、伏見ハ京都ニ接近シテ、要衝ノ地ナルガ故ニ、慶長十二年始テ城代ヲ置キ、大名ヲ以テ之ニ補シ、伏見城ヲ守護セシメシガ、元和五年ニ之ヲ廢シ、後留守居ヲ置キシ事モアリシガ、其後遂ニ城樓ヲモ毀ツニ至レリ、伏見奉行ハ、一人ヲ定員トシ、伏見市中ノ政務ヲ行ヒ、及ビ宇治、伏見、木津等ノ川筋ノ船舶ヲ

管轄ス、又京都町奉行ト共ニ、近江丹波兩國ノ政令ヲ發シ、又其訴訟ヲモ聽斷ス、多クハ大名ヲ以テ之ニ補ス、萬石以下ノ人ト雖モ、其待遇他ニ異ナルモノアリ、從五位下ノ職ニシテ、役料三千俵ヲ給ス、慶長五年ノ頃ヨリ此職ヲ置キ、元祿九年ニ之ヲ廢シ、京都町奉行ヲシテ兼職セシメシガ、同十一年以後、再ビ之ヲ置クコトヽナレリ、屬僚ニ與力、同心、及ビ牢番アリ、

〔台德院殿御實紀 五〕慶長十二年閏四月二十九日、松平隱岐守定勝に、伏見城代を仰付られ、五萬石になさる、〇中略このころまで、伏見城松丸は譜代衆交替して警衞し、治部少輔丸は水野石見守長勝、名古丸は日下部兵右衞門定好、江雪曲輪は成瀨吉右衞門正一、戸田曲輪は松平豐前守勝政、戸田又兵衞直賴、帶曲輪は小笠原次右衞門定信、其外大須賀五郞兵衞某、柘植三之丞淸廣警衞し、この輩京所司代板倉伊賀守勝重、幷に米津淸右衞門正勝等とはかりあひて諸事を沙汰せしが定勝城代たるに及び、このともがらは皆駿府に赴く、〇中略定勝はこの仰を蒙りてのち、駿府に參り謝し奉りし時、大御所〇德川家康ちかくめし、伏見は天下の要樞たれば、我居城とすべしといへども思召むねあるをもて駿府にうつらせ給ひぬ、そのゆへに、伏見城には譜代舊好の士數輩をこめ置、武具兵粮もあまた儲蓄せらる、もし事あらんとき汝に委任すれば、怠らず守護すべしとさとし給ひしとぞ、このとき御服と鎧、及び朱の采幣、靑貝柄の槍二本、十文字の槍を拜賜し、伏見近鄕にて廩塡をたまふ、

〔泰平年表 東照公〕慶長七年十二月、御馬廻衆一組、後大御番となる初て伏見城の番を勤む、是を伏見三年番と云、年錄に、是より先慶長五年、關原亂後、成瀨一業、板倉伊賀守、日下部兵右衞門、米津淸右衞門、仰に因て伏見城の留守居奉行を勤て後、松平隱岐守定勝城代と成、同十二年三月十九日より、大御番頭渡邊山城守、水野忠成、各一隊の士を率て伏見城を守ると云、

〔東職記聞 一〕伏見奉行

集成曰、慶長六年十月、神祖〇德川家康發伏見還御東都之時、命米津淸右衞門淸勝、稻垣平右衞門重

種、成瀨吉左衞門正一、日下部兵右衞門定好等、被令守衞伏見城也、成瀨正一、以根來組百人衞之、○中略山口家傳曰、慶長八年二月、神祖進爵之時、山口直友〈○台德院殿御實紀作直之〉叙從五位下任駿河守被補伏見城番云々、○中略集成曰、慶長十二年四月始置城代、給城江二州中五萬石遠州掛川城主松平隱岐守定勝、而被補之、○中略家忠日記曰、慶長十二年、始被令大番組在衞于茲、番頭渡邊山城守茂、率組衆在衞也、世云之伏見三年番也、○中略元寬日記曰、元和三年九月、以勢州桑名城給松年定勝、城主記、作自掛川移于茲、○中略依是則自慶長十二年至元和三年、定勝城代伏見者亦必矣、

〔東武實錄三〕元和三年、是年○中略內藤紀伊守信正、城州伏見城ノ城代トナリ、采地ヲ加賜セラル、

〔台德院殿御實紀五十一〕元和五年八月、○中略今月伏見城を廢し、伏見在番輩、直に大坂へまかり勤番すべしと命せられ、松平石見守輝澄、松平豐前守勝政大坂におもむく、○中略伏見の地は、山口駿河守直之奉行たらしめらる、〈按ずるに、重修譜には六年とす、元和九年、伏見城に於て將軍宣下ありて、そののち殿閣を淀に下さるゝよしみゆれば、このときいまだ破却せられしにはあらず、〉

伏見城留守居

〔東武實錄十〕元和九年九月二十五日、公〈○德川家光〉京師ヨリ還御ノ節、保科肥後守正光ヲ以テ伏見城御留主居ニ定メラル、

○按ズルニ、當職ノ名、此後見エズ、

伏見奉行職員職掌

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數井役高組支配大概

一伏見奉行壹人〈近來萬石ツヽ、與力十騎、同心五十人、〉

〔吏徵別錄上布衣以上〕伏見奉行　慶長五年庚子月日、始置一員、○中略寬文五年乙巳八月六日、二員、○中略元祿九年丙子二月二日、廢當職府事屬京都町奉行、同十一年戊寅十一月十五日、再置一員、

〔東職記聞一〕伏見奉行一人

任伏見、掌彼地一切事之職也、領與力十人同心五十人也、

〔柳營秘鑑 二〕遠國御役人常詰并交代之場所

伏見奉行　右同斷〇妻子引越之常役、五六年一度出府御目見、暫時在江戸、

〔京兆府尹記 一〕伏見奉行職掌

一禁裏に事あるか、亦京都大火といふ事あれば、御役所附猩々緋の袋入御鐵炮持せて、早速出京供奉する儀、御役の第一也、

一西國大名往來、并其家士の往來迄、平日心づけ、若野心の族ある時は、先當所におゐて喰留、京都所司代の命を蒙る儀、御役第二也、

一宇治川筋より伏見川筋、木津川筋、大坂川口迄、通船の儀を司り、且亦諸荷物等、もし不審あらば點見する、役儀第三なり、

一御役所附御領村々、御年貢取上、其村々并伏見六地藏町中の政道、公事、裁判、御仕置取行ふ、且又御城山支配する儀、第四の御役なり、〇中略

評曰、京都所司代御參府の時は、伏見奉行、所司代のかわり御役儀勤らるゝの由、世俗いふ所なれ共、左樣の義決而無之、左樣の時は、小身といへども京都町奉行其御替りを勤む、是京都町奉行の規模也、〇中略百年計り以前の事成しが、暫らくは京都町奉行三人に被仰付、伏見表江一ヶ月替りに勤役せし事有けるが、西國の御備へ故、いかゞなりとて以前のごとく大名役にぞ成ける、

〔武家嚴制錄 二十一〕一近江丹波御仕置御下知狀

覺

一近江丹波兩國、不寄御領私領、萬事相觸儀、五味備前守〇豐直、京都町奉行、立合可申觸事、

位階資格

一右兩國より出候女手形之儀、備前守を以、兩判可出之事、

一百姓公事、備前守と立合承之可申付之、若其上難相極儀者、永井日向守可遂相談事、

一上方御作事之時分事吟味之儀、五味備前と遂相談、入念可申付事、

一上方御代官所取付等之儀、備前守立合、僉議之上添帳面、如前々可差上之事、

一伏見町并町付之御代官所仕置之儀は、石見守可申付事、

一萬事難極儀在之ば、板倉周防守〇重宗、京都所司代、遂相談、可申付之、其上於有滯儀は可致言上事、

以上

正保四年六月廿三日

水野石見守殿〇忠貞、伏見奉行、

〔天保六年武鑑〕伏見御奉行　芙蓉　御役料三千俵

一萬三千石、加納遠江守久儀、　御用日　五日　十一日　廿一日　廿六日　七日　十八日

〔東職記聞　一〕伏見奉行一人　從五位下

於萬石以上、帝鑑間、菊間、柳間之中、無城家、於萬石以下、則重代之家流、歷三番頭而補此職也、

〔京兆府尹記　一〕伏見奉行職掌

一萬石以上、以下は六千石位、世々其任を蒙り、たとへ萬石以下たりとも大名役也、位は從五位下、則朝散大夫也、〇中略此任を蒙るは、大抵大御番頭衆、伏見奉行と轉役する、夫々首尾宜しければ、若年寄衆、或は寺社奉行見習ひ等也、但シ萬石以上の人ならではなし是兩役の内江轉職する事は稀の事也、大方は御側衆へ轉役する也、但萬石以下にても

〔有司勤仕錄〕伏見奉行

一從五位下之御役、當時者萬石以上也、萬石以下ニ而勤る時ハ、駿府御城代之下に列す、

〔有章院殿御實紀九〕正徳四年九月十一日、伏見奉行座班は、留守居の上たるべしと仰下さる、
〔吏徴別録上布衣以上〕伏見奉行〇中略　寛延三年庚午七月六日、向後伏見奉行、萬石以上候共、可ㇾ爲ニ駿府御城代次席ㇾ旨被ㇾ定、
〔機務霓要二〕伏見奉行日々席
一伏見奉行、萬石以上ニ而御老中方登城之節ハ中之間、表廻之節ハ芙蓉間寺社奉行之次、月並ハ西湖間縁頰、芙蓉間被ニ仰渡ㇾ等有ㇾ之節ハ、菊之間高家次、〇中略
伏見奉行在府
一伏見奉行、在府之節詰合候得者、朝登城之節、中之間當番御奏者番之次罷在、御廻り之節、芙蓉間大目付之上ニ罷在、

俸祿賜與

〔吏徴上布衣以上〕伏見奉行一人　老中支配〇中略　持高　御役料三千俵　御暇、金五枚、時服三、羽織、引越拜借金貳千兩萬石以下千五百兩
〔嚴有院殿御實紀三十一〕寛文五年八月六日、小納戸宮崎七郎右衛門重成、納戸頭雨宮權左衛門正雅、共に伏見奉行仰付られ、五百石づゝ加恩あり、官料千五百苞づゝ給はり、故小出越中守尹貞が與力同心を二人に分ち屬せしめらる、
〔吏徴別録上布衣以上〕伏見奉行
延享三年丙寅七月十五日、御役料三千俵、

任免

〔東職記聞一〕伏見奉行一人
集成曰、慶長六年十月、神祖〇徳川家康發ニ伏見ㇾ還ニ御東都ㇾ之時、〇中略以ニ長田喜兵衛ㇾ被ㇾ補ニ町奉行ㇾ使ニ小笠原越中守領ニ淀川水主ㇾ也、山口家傳曰、慶長八年二月、神祖進ㇾ爵之時、山口直友叙ニ從五位下ㇾ任ニ駿河守ㇾ被ㇾ補ニ伏見定番ㇾ云々、元和六年、定番而帶ニ町奉行ㇾ同八年九月卒ニ於伏見ㇾ云也、〇中略駿府政事錄曰、慶長二

十年四月、伏見奉行長田喜兵衛、奉羽書言、大坂之變、依是則當職始長田氏者必矣、〇中略代々記曰、自慶長五年至同七年、神祖第四之公子下野守忠吉卿之臣舍人源太左衛門奉町奉行、諸本多作忠吉卿被被管伏見也、自同年至元和元年、柴山小兵衛、長田喜兵衛、兩人在職、余〇小林元逸以正史推之、未見柴山氏在職之事、則其說雖難從、正史誤而脫柴山氏也乎、疑初柴山長田二氏奉當職、慶長十八年及堺奉行細井正成卒、柴山氏進、其後長田氏耳在職乎、〇中略元和元年、門奈助左衛門補之、同二年山田清大夫亦補之、至元和五年二人在職、尙稱町奉行、元和六年或作五年壞伏見城、以定番山口駿河守直友被補當職、改稱奉行、同九年山口直友卒、小堀遠江守正一代之、又改稱郡代、正保四年三月、水野石見守忠貞代小堀正一、爾來領與力同心、至忠貞尙稱郡代、寬文九年四月、水野忠貞辭職、七月仙石因幡守久俊代之、爾來稱奉行、天和元年仙石久俊卒、同年戸田長門守代之之時、格准京大坂町奉行也、貞享三年十一月岡田豐前守代戸田氏、元祿七年三月、青山信濃守幸豐代岡田氏、爾來列芙蓉間、同九年二月、青山幸豐遷駿府城代、卽罷此職、使京都町奉行帶之、至同十一年、每月之初十日、與力總代一人來京都、而議諸訴、而決事也、同十一年十一月再置之、以建部內匠頭政宇始稱政信被補之、爾來連綿至于今也、

〔台德院殿御實紀五〕慶長十二年閏四月二十九日、松平隱岐守定勝に、伏見城代を仰付られ、五萬石になさる、〇中略定勝城代たるに及び、〇中略伏見町奉行長田喜兵衛吉正、芝山小兵衛正親、淀川船奉行は小笠原越中守廣朝なり、

〔東武實錄二〕元和二年、是年、〇中略山田清大夫重次、門奈助左衛門宗勝二人、伏見ノ奉行トナル、

〔藩翰譜六小堀〕遠江守藤原政一は、〇中略元和九年、伏見奉行職に補せられ、職にある事二十餘年、正保四年二月六日、六十九歲にて卒しぬ、

〔甘露叢六十八〕元祿十一年十一月十五日、伏見奉行、建部內匠頭政信被仰付、元祿九年相止處、又今

与力同心牢番

度被仰付、

〔常憲院殿御實紀三十三〕元祿九年二月二日、伏見堺兩奉行を停廢あり、京町奉行に伏見の地を支配すべき旨命せらる、

〔珍思錄後〕天明八申年五月六日

一小堀和泉守伏見奉行勤役中不屆一件

申渡之覺

小堀和泉 四十七

其方儀、伏見奉行勤役中、彼地町人共、出訴之義有之ニ付、右訴訟答被仰付候處、彼是不取〆り成趣ニ付、先達而御役御免被成、追々遂吟味候處、借用金返濟之手段に、支配町方之者江賴母子無盡之義、家來共相催候を承屆、其分にいたし置、且又金子借請之義、組與力同心等に爲取計、幷濱地銀子取立之義ニ付、不束成取計致し、與力同心且家來共、右ニ付禮金受用致候內を、其方勝手入用にも差加候由、右體不埒之義、家來に爲取計、其上町人共無故苗字差免、又は年來立入候者江者、支配之町人方江度々相越、饗應請候儀、奉行之第一有之間敷義、不行跡之至候、殊更伏見奉行御役屋敷總圍之內、北西門番人差置、夜分は出入を改來候處、其方御役間も無之明放にいたし、門番相止候段、取〆にも拘り候義、一己之存寄に取計候義共、不埒之至思召候、依之領地被召上、大久保加賀守江永々御預被仰付者也、

○按ズルニ、此時組與力同心等モ亦追放ニ處セラレシ事見ユレド、今之ヲ略ス、

〔吏徵附錄郡職〕伏見奉行組與力十人同心五十人、　元祿十一年戊寅十一月十五日、始置與力十騎同心四十人、　與力現米八十石、同心現米十石三人扶持、○中略

伏見牢番一人　現米五石三人扶持

古事類苑

官位部七十四

徳川氏職員二十三

遠國奉行

遠國奉行トハ、京都、大坂、伏見、駿府等ノ町奉行、及ビ長崎、浦賀、神奈川、箱館、奈良、山田、兵庫、堺、佐渡、新潟、日光、下田等ノ奉行ヲ總稱スルナリ、何レモ幕府直轄ノ要地ニ在リテ、其政務ヲ行ヲ重職ナルヲ以テ、赴任ノ前日ニハ、必ズ將軍ヨリ謁見ヲ賜ヒ、又其在任中江戸ニ出ヅル時ハ、必ズ評定所ノ立合ニ出座シテ、聽訴ノ法ヲ見習ハシムルヲ例規トシ、又任地ニ在リテハ、費用ヲ節シ、事務ヲ簡ニシ、賄賂ヲ受クル事等ヲ禁ゼリ、

長崎奉行ハ、其地ノ民政ヲ行フノミナラズ、貿易ノ船舶、及ビ其貨物ヲ點檢シ、又諸外國ノ動靜ヲ監察シテ、外寇ニ備フル職ナリ初メハ定員ナクシテ、或ハ一人ヲ補スルコトアリ、或ハ三人若シクハ四人ニ命ズルコトアリシガ、弘化以後ハ、二人ニテ隔年ニ交替スルコトニ定マリ、文久以後ハ、更ニ交替ヲ廢シテ、一人ハ任地ニ在住スルコト、ナレリ、屬僚ニ組頭、調役、定役、及ビ與力、同心等アリ、又町年寄アリテ、市中ノ取締ヲ爲シ、通事アリテ通譯ノ事ニ從フ、通事ノ事ハ、文學部外國語學篇唐通事條ニ載セタリ、

浦賀奉行ハ、享保五年ニ始テ之ヲ置ク、是ヨリ以前ハ、伊豆ノ下田港ニ番所ヲ設ケテ、海上往來ノ船舶、及ビ其貨物ヲ檢査セシガ、風波常ニ荒ク、入津ニ困難ナルヲ以テ、改メテ番所ヲ此地ニ移シ、江戸灣ニ出入スル諸國ノ船舶ハ、必ズ此處ニ寄港シテ、其點檢ヲ受クルコト、ナ

セリ、奉行ハ一人若シクハ二人ヲ補シ、平常ハ屬僚ヲ遣ハシテ其職ヲ行ハシメ、奉行ハ江戸ニ在リテ事ヲ執リシガ、文久二年以後ハ、一人ハ必ズ其地ニ在住スルコトヽナレリ、屬僚ニ組頭及ビ與力同心アリ、專ラ船舶檢査ノ事ヲ掌ル、

神奈川奉行ハ、安政六年ニ創テ之ヲ置キ、外國貿易ノ事ヲ掌リ、及ビ外國人ノ行爲ヲ監督シ、不良ノ徒ヲ處罰セシム、二人若シクハ三人アリテ、初メハ外國奉行ヨリ兼帶スルモアリシガ、後皆專務トナレリ、屬僚ニ、組頭、調役、及ビ同心、定番、下番等アリ、

箱館奉行ハ、其初メ蝦夷奉行ト云ヒ、次ニ箱館奉行ト稱シ、更ニ松前奉行ト改メシガ、後再ビ箱館奉行ト稱セリ、蓋シ蝦夷ノ地ハ、原來松前氏ノ所領ナリシニ、寛政十一年ニ、東蝦夷ノ地ヲ還附セシメ、吏ヲ遣ハシテ土人ヲ撫育シ、漁獵交易等ノ事ヲ獎勵シ、漸ク開拓ノ緒ニ就クニ至リシカバ、享和二年ニ、戸川、羽太ノ二氏ヲ蝦夷奉行ニ補シ、次デ官廳ヲ箱館ニ置キテ、箱館奉行ト稱シ、文化四年ニ、官廳ヲ松前ニ移シテ、松前奉行ト改メ、安政二年ニ、再ビ官廳ヲ箱館ニ置キテ、箱館奉行ト稱シ、慶應四年遂ニ之ヲ廢セリ、奉行ハ其初メ定員ナカリシガ、後ニハ大抵二人ヲ補シ、文久以後ハ、二人共ニ任地ニ在住スルコトヽナレリ、屬僚ニ、吟味役、組頭、調役、定役及ビ與力、同心等アリ、

奈良奉行ハ、南都町奉行トモ云ヒ、其地ノ民政ヲ掌ルノミナラズ、院家、社家等ヲモ監督スル職ナリ、一人ヲ定員トシ、其地ニ在住セシム、屬僚ニ與力、同心及ビ牢番等アリ

山田奉行ハ、伊勢神宮ヲ警衞シ、其造營修繕ノ時ハ、之ガ奉行ヲ命ゼラル、又伊勢志摩兩國ニ在ル幕府ノ領地ヲ支配シ、志摩國鳥羽港出入ノ船舶ヲ點檢ス、一人ヲ定員トシ、其地ニ在住セシム、屬僚ニ水主同心等アリ、

兵庫奉行ハ、專ラ貿易ノ事ヲ掌リ、元治元年十一月ニ創テ之ヲ置キ、慶應元年十一月兵庫ノ

開港ヲ止メシ時、之ヲ廢セシガ、慶應三年六月、再ビ兵庫港ヲ開クト共ニ、此職ヲモ置ケリ、屬僚ニ組頭アリ、

堺奉行ハ、天正ノ頃ニ、十河氏此地ニ在リテ、和泉河内兩國ノ政令ヲ掌リ、世ニ之ヲ堺政所ト云ヒシガ、德川氏ニ至リテモ、其初ハ猶ホ此稱ヲ存シタリ、堺市中及ビ和泉一國ノ政務ヲ行ヒ、且ツ入津ノ船舶貨物ヲ檢査スル職ナリ、元祿ノ頃、暫ク大坂町奉行ノ兼職ナリシガ、其後再ビ專職ヲ置ケリ、一人ヲ定員トシ、其地ニ在住セシム、屬僚ニ與力、同心アリ、

佐渡奉行ハ、佐渡全國ノ政令ヲ掌リ、且ツ金礦採掘ノ事ヲ總轄ス、一人ナリシ時アリ、二人ナリシ時アリ、又專務ノ奉行モアリ、勘定奉行ヨリ兼職スルモアリテ、一定セズ、弘化以後ハ二人ヲ置キ、文久以後ハ、一人ハ必ズ在住スルコト、ナレリ、屬僚ニ、組頭、廣間役、定役、並役、使役、同心、牢番、水主等アリ、又寶曆十年ニ、此地ニ藏奉行ヲ置キシガ、明和七年ニ之ヲ廢セリ、

新潟奉行ハ、天保十四年ニ始テ之ヲ補シ、一人ヲ定員トシ、其地ニ在住セシム、屬僚ニ、組頭、廣間役、定役、並役、足輕、水主等アリ、

日光奉行ハ、初ハ日光守護職、日光宮守、日光宮番ナド云ヒシガ、元祿十三年ニ、新ニ日光奉行ヲ置ケリ、東照宮ヲ守護シ、市中ノ民政ヲ行フ、二人ヲ定員トシテ、初ハ半年毎ニ交替セシガ、寛政六年以後ハ一年交替トナリ、又文久以後ハ、一人ハ必ズ在住スルコト、ナレリ、屬僚ニ、組頭、吟味役、同心、御殿番等アリ、

下田奉行ハ、享保五年ニ、其番所ヲ浦賀ニ移シヽヲ以テ、久シク廢職トナリシガ、天保十三年ニ之ヲ置キ、弘化ノ初年ニ復タ廢セシガ、嘉永六年以後、再ビ之ヲ置ケリ、一人ヲ定員トシ、其地ニ在住セシム、屬僚ニ、調役、改役、與力、同心等アリ、

以上ノ奉行ハ、多クハ從五位下ニ敍セラル、箱館奉行ハ二千石高ニシテ、役料千五百俵トシ、

神奈川奉行ハ二千石高ニシテ、役料千俵トシ、日光奉行ハ二千石高ニシテ、役料五百俵トシ、長崎、山田、奈良、佐渡ノ四奉行ハ、各〻千石高ニシテ、役料千五百俵トシ、浦賀、新潟、下田ノ三奉行ハ、各〻千石高ニシテ、役料千俵トシ、兵庫奉行、堺奉行ハ、各〻千石高ニシテ、役料六百俵トセリ、蓋持高ハ大抵同額ナレドモ、役料ハ、其職務ノ繁閑ニ由リテ、自ラ差アルナリ、故ニ幕府ノ末造ニ當リ、外交ノ事、漸ク多端ニ趣キ、沿岸ノ防禦忽ニスベカラザルニ及ビテハ、沿海要地ノ奉行ノ俸祿ヲ增シ、長崎奉行ハ、二千石高ニシテ、役料二千俵トナシ、浦賀、下田兩奉行ハ、二千石高ニシテ、役料千俵トナシ、何レモ箱館奉行ノ上位ニ列セシメタリ、慶應三年ニ、布衣以上ノ諸役人ノ役料ヲ役金ニ改メシ時ハ、箱館奉行ニハ四千兩、佐渡奉行ニハ三千兩、長崎、新潟兩奉行ニハ二千兩充ヲ給シ、其他ハ大抵千五百兩宛ヲ給シタリ、

此他近江ニ大津奉行、及ビ大津藏奉行アリ、駿河ニ清水奉行アリ、遠江ニ荒井奉行、及ビ本坂奉行アリ、相模ニ走水奉行、及ビ三崎奉行アリ、武藏ニ羽田奉行等アリテ、或ハ街道ノ關所ヲ守衞シ、或ハ港灣船舶ノ事ヲ掌ラシメシガ、何レモ早クヨリ廢職ト爲レリ、但シ荒井關ハ、奉行ヲ廢シテ後、三河國吉田城主ヲシテ之ヲ守ラシメタリ、其他京都、大坂、伏見、駿府等ノ町奉行ハ、別ニ其篇アルヲ以テ、此ニ贅セズ、

總載

〔京兆府尹記　一〕拾壹所奉行職掌之事

諸州に奉行職を置る、事十一ヶ所、其一は伏見奉行、山城國伏見　其二は長崎奉行、肥前國　其三は京都町奉行、其四は大坂町奉行、其五は日光奉行、下野國　其六は山田奉行、伊勢　其七は奈良奉行、大和　其八は堺奉行、和泉　其九は浦賀奉行、相模國　其十は駿河奉行、駿河府中　其十一は佐渡奉行也、一所の奉行に任せらる、事なれば、尤其人柄を撰み給ふ事也、

〔享保集成絲綸錄　十八〕寶永三戌年四月

覺

伏見奉行　長崎奉行　京都町奉行　大坂町奉行　山田奉行　日光奉行　奈良奉行　堺奉行　駿府町奉行

右之面々、向後在江戸之內、評定所立合ニ、二三度程出座候之樣可被相達候、

四月　　三奉行江

〔德川禁令考三十三地方官吏勤方〕寛政三亥年九月

遠國奉行江評定所出座之儀ニ付御書付

伊豆守殿御渡

遠國奉行、評定所江出座之儀、寶永之度、相達候趣も有之處、いつとなく發足前一度、出座而已之樣に相成、見習之詮も無之候、以來寶永之度、相達候通、在江戸之內、二三度程出座致し、右度數之外にも見習度候はゞ、伺候而出座候樣可被相達候、

右之通大目付江相達候間、可被得其意候、尤數度出座之儀に候間、評議物等之差支に相成候はゞ、其節は別間江爲扣候とも、爲致退散候共可被致候、

〔教令類纂二集六十六〕延享二乙丑年八月

御勘定奉行へ

諸向御勘定合之儀、遠國向納り方、年々増減有之候內、先は次第に減候方に候、此儀遠國御役人勤方、前々より仕來り候儀相改候事、又は新規申渡候儀に而も、一存に而取計ひ候故、たとひ先達而宜敷仕方申渡置候而も、交代以後、其者存寄に不應儀は、勝手次第罷成候樣相聞候、右之通候而は、出精仕、諸事相糺候而も其詮無之、勤仕甲乙も不相分候、依之向後仕來候儀、又は新規申渡候儀に

而も、伺之上相極、若し前格に違ひ候而も、急に不申渡候而不相成儀は、吟味の上申渡、其段可被申聞候、

右之通、遠國奉行へ相達候間、可被得其意候、以上、

八月

〔敎令類纂二集六十七〕天明六丙午年二月

惣而遠國勤之面々、支配所之百姓町人ゟ金銀等借用有之間敷儀は、勿論之儀に候得共、萬一家來共、當分之手都合のみに迷候心得違之筋有之候而は如何に候、彌右躰之借用金は不申懸樣に、精精家來等へ申含置べく候、其外御役相勤候面々ゟ、權威を以用金等申付候儀、是又決而有之間敷事に候、猶又忘却無之樣、家來は勿論、組支配有之面々は、組支配迄も得と可申含候、〇中略

二月

〔德川禁令考三十三地方官吏勤方〕慶應三卯年三月八日

遠國役々流弊改正之儀御書付

壹岐守殿御渡

覺

遠國役々、是迄種々流弊有之哉に相聞候處、此度諸向御改正被仰出候に付而は、右之趣意、厚相心得、役所內諸事、無益之手數相省き、都而簡易に可取計は勿論、其外召仕候家來之儀も、是迄より大凡半減之見込を以、可成丈減少いたし、且初而役所江罷越候節幷平常共、組支配之向江定例遣し物等いたし候儀は、以來相止候樣可致候、

〔德川禁令考三十三地方官吏勤方〕寛政二戌年三月四日

遠國御役人參府之節、妻子等召連候事、

越中守殿被仰渡

遠國御役人御機嫌伺等參府之節、妻子等召連候儀相願候向も有之、又は不相願召連、參府之上相屆候向も有之哉に候、以來前以可相願旨、寄々可被達候、

三月

〔内安錄〕一遠國の奉行出立前には、御座間御人拂御用召出しありて、ナゼ歸府後には召出し御用無之歟、出立前よりも歸府後に召出しあらば、土地の樣子も御わかり、其時の模樣も御承知あり、又奉行の存寄も見込も可申上に、

長崎奉行職員職掌

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一長崎奉行貳人役高四千五百石、與力十騎、同心三十一人ツヽ、

〔東職記聞一〕長崎奉行二人

予〇小林元逸閱獨立禪師千字文之自叙、指此職稱鎭主、則今亦然也矣、

〔吏徵別錄上布衣以上〕長崎奉行　慶長五年庚子、始置一員寺澤志摩守廣高、其後連綿、

〔長崎年表附錄〕奉行沿革

寛永十年、奉行二人トナル、　貞享四年、〇四年恐三年誤奉行三人トナル、　元祿十三年、〇十三年恐十二年誤奉行四人トナル、　正德三年、奉行三人トナル、　四年、奉行二人トナル、　天保十四年、奉行一人トナル、　弘化三年、奉行二人トナル、〇又見吏徵別錄、及東職記聞、

〔有司勤仕錄〕長崎奉行〇中略兩人に而、隔年に長崎江交代して勤る也、

〔常憲院殿御實紀十四〕貞享三年八月二十一日、目付大澤左兵衛基哲、五百石加秩ありて、長崎の奉行命せらる、長崎は今迄二員たりしが、この後三人にて、つかふまつり、一人は府にあり、二人は鎭所にて事とるべき旨仰下され、〇下略

〔甘露叢 七十〕元祿十二年七月十三日、長崎奉行、向後四人ニ被仰付、二人宛、隔年ニ交代致シ、遠國ノ儀、異國ノ御用ニ候間、別シテ念ヲ入、申合可相究、代ノ義、兩人一日ニ一人宛、相代リ可申事、

〔東職記聞 一〕長崎奉行二人

交在勤長崎、掌諸外國之輻湊者、及彼地一切事之職也、

〔德川禁令考 三十三 地方官吏勤方〕文久二戌七月六日

遠國奉行在住被仰付候ニ付、當地取扱方之事、

周防守殿御渡

覺○中略

今度御改革被仰出候ニ付、長崎奉行在住被仰出候間、彼地御用筋之儀、於當地其方引受、取扱候樣可被致候事、

水野筑後守○長崎奉行

〔文久紀事 六〕文久二年七月十三日

今度御改革被仰出候ニ付、以來在住被仰付候、諸事格別入念、可被相勤旨、被仰出候、

長崎奉行　大久保豐後守

〔京兆府尹記 一〕長崎奉行職掌

兩人にて一年替り交代にて相詰る、非番の年は江戸に有て、其御用向を取計ひ、評定所御式日には相勤る、○註略

一異國の御備へを專ら相勤る處也、若いかゞの事有時は、長崎勤番、筑前國主五拾四萬石松平筑前守、肥前國主松平肥前守、右等の面々、并向寄の諸大名江差圖におよび、其急を防之條、御役第一也、

一唐船幷紅毛船入津、諸代呂物御買上の義取計ひ、御渡方銅幷いりこ等の義、都て主役として、長崎中幷唐人、紅毛人等の政道取行ひ、且拔荷等の義、吟味御仕置、御役の第二也、

一御勘定奉行江相達し、御老中方へ伺ひ奉りて、唐、紅毛より御買上のもの、商人江御拂方、幷御利益の筋相勤候儀專用にて、凡日本半國の御物成ほどは、唐、紅毛蠻國船より御納有之事に付、奉行たる人、少しの油斷にても、大きに御利德は違ふ事にて、あまり嚴密過れば持渡り少く、寛みあれば御益少し、大切成御役儀也、奉行宜敷かんがゆべし、是御役の第三也、

〔明良帶錄後篇〕長崎奉行（千石高　御役料四千四百二俵一斗　老支　芙）

此場は、異國に備ふる奉行にして、平日不慮の役第一なり、福岡佐賀嶋原唐津よりも守護ありて、遠見番所を張て足輕を置く、〇中略當時は交易を第一として、御益と稱し、唐物を下直に御買上ゆゑ入津少し、〇中略商船見ゆれば、遠見番所より注進に任せ撿使を遣し改る也、此奉行職、淸廉の仁を撰ぶ事、當時の仕方なり、

〔大猷院殿御實紀附錄四〕甲斐庄喜右衞門正述、長崎奉行命ぜられしとき御前にめし、本邦の事は、當家にまれ他家にまれ、とるもとらるゝも、同じ國中の事にて、一分の恥なり、もし外寇の事有て、寸地なりとも邊境を掠られんには、是日本の恥といふものなり、さらば長崎奉行の職は大事なれば、よく心ゆるびなく、おごそかに愼むべしとかへす〴〵仰られしとぞ、

〔敎令類纂初集百一〕元祿十丁丑年八月

覺

一長崎は異國人着船の地、諸國のもの入込之所に候得ば、御仕置彌入念、諸事正路に仕、兼而被仰出御條目之趣、急度相守り候樣可被申付候、異國人の通用通辭も相愼み、少しも無相違勤仕候樣、堅く誓詞致させ、常々心を付可被申候事、

一公事訴訟之儀、在役の奉行直に承レ之、相談の上可レ有二裁許一事、
一江戸へ伺の品々、前々の通り可レ被二相窺一事、
一長崎にて、諸役儀相勤候もの共、奉行中へ相伺ひ、定候員數の外、內證にて利分幷に禮物等受用不レ仕、嚴密に取捌可レ仕候由、堅誓詞仕相勤させ、其上心を付可レ被レ申事、○中略
右の通、急度可レ被二相守一者也、
元祿十年八月日　小　佐渡守　土　相摸守　戸　山城守　阿　豐後守
近藤備中守殿　丹羽遠江守殿　諏訪下總守殿○以上三人、並長崎奉行、

〔敎令類纂初集百二〕正德五巳年正月十一日
奉行所法令條々
一長崎地下人、諸願公事訴訟等、自今以後は町年寄に不二任置一、奉行所におゐて可レ有二裁斷一事、
一長崎表法例、改定むべき事に於ては、大事は在府之同役に申通じ、相伺候而差圖を受られ候事は御目付に申達し可レ有二沙汰一事、
附急病等に就而、御役所之事滯るべき時に至りては、御目付より沙汰有レ之候樣に可レ被二申合一事、
一奉行所に召連候家來之數、其分限に應ずべき事に候といへ共、御役所におゐて事足るべき程を相計、無用之人數多かるべからざる事、
附、家中之者に至る迄、旅之行裝、常之衣類等華麗に及ぶべからざる事、
一近國諸大名、長崎表見廻り之時、御役所におゐて饗應之儀、常之膳部を用ひ、二汁五菜、酒三獻に過ず、吸物肴各一種、菓子二種を以、限とせらるべき事、
附、家中之物共、振廻之式、本條に準じて、宜敷其制限を定らるべき事、

一近國諸大名相贈られ候信物受納之例、只今迄之如くなるべき事、

一奉行所八朔之禮物受納之例、只今迄之如くなるべし、此外地下人幷諸國商人之中、長崎表商賣方に相係り候者共より之進物に至りては、奉行幷家中之者共に至る迄、一切受納有べからざる事、

附、長崎表諸商賣方之事、未だ相濟ざる間に奉行中交替之期に及び、旅行之支度料難儀之事候に於而は、御目付に申達せられ、或は長崎に有之御金之內、或は大坂御藏之御金之內、拜借之事を相伺ひ、差圖に任せられ、其年八朔之禮物受納之時、急度返納あるべき事、○中略

右條々、宜被相守者也、

正德五年正月十一日　山城守　紀伊守　大和守　豐後守　河內守　相摸守

久松備後守殿　大岡備前守殿○二人並長崎奉行

〔正德五年長崎新例〕乾 奉行中可被相心得條々

一今度被仰出候御沙汰之書付共、如目錄差出申候、猶又上使可被申渡事、沙汰可被爲事等有之候間、宜敷遵行あるべき事、

一奉行御役所之人數、不足の事も可有之に就て、船番所使等之數も相增、都合其數八十人とし、其內にて廿人を撰び、奉行所支配の者とせられ、御扶持米を宛行はるべきによりて、其料として御米千四百俵を被下置候間、奉行中相談の上、よろしく其沙汰あるべき事、○中略

一奉行御役所の人數、猶又不足の事も有之候時は、御目付相談之上、西泊戶町兩所番人を相催し、人數に差加へらるべし、鍋島黑田方へも、其旨被仰渡候事、

一只今迄之例、奉行中家中之者ども、御役所門外に出し候事を嚴禁せられ候によつて、町々の事、不知案內の由相聞え候、尤以不可然事に候、自今以後は其禁をゆるくし、町々の案內をも存候

位階俸祿

やうに仕られ、もし家中の者ども、地下人江申合せ、違法の事も出來候においては、其罪科を糺し、申合候者は、同じく其罪に行はるべき事、

一奉行所の法、大小事に限らず、たとひ只今迄の例になり來り候事に候とも、不ㇾ可ㇾ然事においては改正せられ、毎度淸廉に沙汰有べき事、○中略

一今度御沙汰次第の書付にしるされざる事共は、毎事只今迄之例に准せらるべし、若又改議せられ可ㇾ然事も有ㇾ之に於ては、其の事の子細を詳に書しるし候て、存寄の旨を可ㇾ被ㇾ申上事、

右條々、宜ㇾ被ニ相心得一候者也、

正德五年正月十一日　山城守　紀伊守　大和守　豐後守　河內守　相摸守

久世備後守殿　大岡備前守殿〇二人並長崎奉行

〔東藏記聞　一〕長崎奉行二人　從五位下

當職往古布衣也、元祿七年以來敍ニ五位一也、

〔京兆府尹記　一〕長崎奉行職掌

千石以下貳百俵位の方も、其任に當る器量あれば相勤らる、台命を蒙り、御役中は貳千石高、御役料千五百俵被ㇾ下ㇾ之、從五位下、則朝散大夫、芙蓉の間詰被ニ仰付一、（中略）御役料、今ニ而ハ都合四千四百貳俵、○中略此任を蒙るは、京都町奉行、大坂町奉行、或ハ十人御目付衆等より多分仰付らるゝ也、夫より多分御勘定奉行被ニ仰付一、至て首尾宜敷ければ、江戸町奉行、亦は大御目付等也、是轉職の最上也、

〔常憲院殿御實紀　二十二〕元祿三年十二月廿六日、此日諸大夫命せらるゝ者十一人、○中略長崎奉行川口源左衞門宗恒は攝津守と稱す、

〔靑標紙　三編〕一弘化年中、長崎奉行伊澤美作守〇正義御小性組番頭格に成て同所を勤めたり、前後になき事也、

〔吏徵 上布衣以上〕長崎奉行一人　老中支配　芙蓉間　諸大夫　長崎在住　千石高　御役料四千四百貳俵壹斗　御役金三千兩　御扶持方分限應一陪　御暇、金拾枚、時服貳、羽織、　引越拜借金千兩

〔吏徵別錄 上布衣以上〕長崎奉行〇中略　寛永十年癸酉二月十四日二人トナル、曾我又左衞門、今村傳四郎、御役料各千五百俵、

〔大猷院殿御實紀 八十〕慶安四年四月七日、長崎奉行黒川與兵衞正直、前例のごとく、合力米二千苞給はり、赴任の暇下さる、

〔常憲院殿御實紀 十四〕貞享三年八月廿一日、目付大澤左兵衞基哲、五百石加秩ありて、長崎の奉行命せらる、〇中略官料四千苞給ふ、但此内二千俵は、屬吏の給分に充られしといふ、

〔甘露叢 七十〕元祿十二年七月十三日、長崎奉行、向後四人ニ被仰付、〇中略

一只今迄三人ニテ取來候御役料、向後四人ニテ三千俵餘宛ニ積リ被下事、

一長崎ニテ受用物モ、只今ノ分量ノ旨、向後四人ニテ割候テ受納可仕、勿論受納物ハ不同無之、嚴密ニ四人可配分事、

〔有司勤仕錄〕長崎奉行

一奉行中幷家來役人等迄、其格式に隨而、唐物調る員數有之、悉く割渡す事也、

一每年八朔には、長崎町中より奉行江祝儀として銀を獻上す、其者之格に依て次第あり、其總高大分也、是を役人は不及申、家中の者へ、格式に依て是又割渡す也、

〔吏徵別錄 上布衣以上〕長崎奉行〇中略　八朔金千百三十兩　唐船十艘、紅毛船一艘、三ヶ年平均、唐紅毛、地下八朔銀、合三千五百七十兩餘、

〔憲教類典 二ノ五御役〕元文三戊午年三月十五日

長崎奉行〇中略

千石ゟ以下之者ハ、向後千石高、御足高被ㇾ下ㇾ之、御役料ハ只今迄之通リ被ㇾ下ㇾ之候、以上、

元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人并御足高御役料定

御役料四千四百貳俵　長崎奉行

但與力同心、御切米御扶持方共ニ、千石ゟ内御足高被ㇾ下、御役料右之通、

〔寶曆集成絲綸錄二十五〕寶曆四戊年二月

御勘定奉行江

右御足高御役料、只今迄各裏印に而相渡候得共、向後直判手形に而受取候樣申渡候間、得其意、其段書替奉行江可ㇾ被ㇾ申渡候、　高家衆　長崎奉行

〔天明集成絲綸錄四十三〕天明六午年正月

御勘定奉行江　長崎奉行　松浦和泉守

右は是迄元高四百石に而、御足高六百俵有ㇾ之候處、此度松浦壹岐守ゟ藏米に而四百石足加、都合本高八百石に相成候に付、是迄之御足高之內、四百俵は上り候間、可ㇾ被ㇾ得其意候、

〔天明集成絲綸錄四十三〕天明五巳年十二月

長崎奉行江

戶田出雲守、〇氏孟、長崎奉行、長崎におゐて病死に付、松浦和泉守〇長崎奉行罷越候迄之內、彼地に相詰候出雲守家來七拾貳人江、和泉守願之通、當十月五日ゟ彼地引拂候迄、壹人五合之積を以、御扶持

方被レ下候旨、其段可レ被二申渡一候、

十二月

〔吏徵別錄布衣以上上〕長崎奉行〇中略　文政六年癸未月日、受用銀五十貫目、〇中略　天保十四年癸卯九月朔日、〇中略　御役金三千兩、受用銀止、

〔長崎年表附錄〕奉行沿革

天保十三年、奉行役料金三千兩トナル、　弘化三年、奉行役金初在勤六千兩、二在勤以後四千五百兩トナル、　慶應元年、奉行場所高二千石、役料米二千俵、在勤役金三千五百兩トナル、

〇按ズルニ、吏徵別錄ニハ、初在勤八千兩、二在勤より六千兩トアリ、

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不レ被レ下、是迄之場所高ニ不レ拘、今度御改正、別紙之通、御役金被レ下候旨被二仰出一之、

御役金被レ下高之覺

一金四千兩　長崎奉行

但高ニ不レ拘被レ下　在府之者江ハ金千五百兩　高三千石以上在府之者江ハ、金七百五拾兩、

御切米高貳千俵以上、同斷之者江ハ不レ被レ下、　同七百俵以上、同斷之者江ハ、金七百五拾兩、

役屋敷

〔長崎雜記中〕奉行屋敷の事

立山屋敷坪數山の内共いふ　三千二百七十八坪半　西屋敷坪員　千六百六十一坪

〔長崎實錄大成二〕御奉行御屋敷之事

一文祿元壬辰年より寬永九壬申年迄、四拾餘年之間は、御奉行御一人にて、御役屋敷は本博多町に在レ之、寬永十年、曾我氏、今村氏兩人、御奉行被二仰付一候ニ付、右の屋敷を二ッに分て兩屋敷とな

る、去かる處、其年今村氏屋敷より出火にて、隣屋敷其外五六町燒通り、今ノ西屋敷、其頃は江戶大坂糸割符宿老會所成りしに、此屋敷も類燒せり、依之西屋敷の地に御役所二ヶ所被建、本博多町之地を、宿老共替地に被相渡之、
一寬永十五年、與力同心被仰付に付、西濱町川岸端に御奉行下屋敷を被建、與力同心衆被差置候、其後貞享四年、與力同心相止、此處明屋敷と成る、
一寬文三年、火災有之、兩屋鋪共に類燒す、依之今の船番屋鋪は、高木作右衞門屋鋪なりしに、江戶町之內、五ヶ所之屋鋪を加へて東屋鋪を建、高木方には川岸端之屋鋪を渡し、五ヶ所之町人には西濱町築地を相渡、西屋鋪の地內に一ヶ所を建、是より西東兩御屋鋪となる、〇中略右地內に、最初兩御屋鋪有しに、寬文三年、一ヶ所建直され、船番屋鋪の地に東長屋を建、是より東西兩御屋鋪となる、其後延寶六年類燒ニ付修復有、又元祿十一年、屋鋪內より出火ニ付造營有之、
一寬文十一年辛亥年御奉書到來有之
此已前於其許、井上筑後守罷在候屋敷、兩奉行下屋鋪に被下之候間、天草こぼち家、小川藤左衞門所より取寄、長屋作事等可被仰付候、藤左衞門方には、右之通御勘定奉行より相達候、委細河野權右衞門可申越候、可被存其趣候、以上、
十二月廿四日　　板內膳正　土但馬守　久大和守　稻美濃守
牛込忠左衞門殿
外に末次平藏に御書被成下、是迄之東屋敷を此地に移し、天草仮屋敷を取寄、長屋等に用、作事料は、御闕所銀の內より、忠左衞門手形を取、入用の度々相渡し、造畢之上、員數證文可差出旨被仰下之、延寶元癸丑年普請成就し、立山御屋敷と稱す、夫より四十五年餘後、破損甚きに付、享保二年より翌年迄、不殘作り替、屋鋪中地形高低なく引均し、本屋長屋等全く造營被仰付之、

任免

〔敎令類纂初集百二〕正德五未年正月十一日

奉行所法令條々略○中

一奉行御目付御役所等、交替之時に至て、未だ破壞あらざる所には修理に及ぶべからず、若修理を加ふべき所出來るにおゐては、奉行御目付相互に其よしを以て相斷り、撿知せしめられ候上に修理せらるべき事、○下略

〔敎令類纂初集百二〕正德五未年正月十一日

長崎御目付被仰付ニ就而奉行中可被相心得條々○中略

一長崎表奉行御役所貳ヶ所之內、立山之御役所は地面廣候得ば、其地を分ち候而、御目付御役所とし、殘り候地に只今迄之御役所を引移、奉行御目付交替之時に移居候所とし、自今以後は、交替之時、安禪寺に移居候事を相止らるべく候、但奉行御目付之御役所、相はなれずして可然事も候はゞ、立山之地を以て、奉行御目付之御役所とし、西御役所を以て、奉行御目付交替之時移居候所とせらるべきは、其心に任すべき事、○下略

○按ズルニ、長崎目付ノ事ハ、目付篇ニ在リ、

〔長崎年表一〕延享元年九月、西役所ヲ瓦葺ニ改ム、十二月立山役所亦瓦葺トス、

〔東照宮御實紀五〕慶長八年、此春○中略長崎の地は、天主敎の淵藪なればとて、天正十六年豐臣家の頃は鍋島飛驒守某といへる者に所管せしめられ、文祿元年より寺澤志摩守廣高に所治せしめらる、しかりといへども、邪風彌盛にしてやまず、こたび改て小笠原爲信入道一庵を、その地の奉行に仰付られ、法印に叙せらる、これ長崎奉行の權輿とぞ聞えし、よて與力十人付らる、

〔諸御役代々記十六〕長崎奉行

往古　寺澤志摩守廣高支配

御代官　東庵

慶長八卯年二月、同九辰年病死、　小笠原一庵

同九辰年、同十巳年佐渡奉行江、　長谷川波右衛門重吉

慶長十巳年、同十九寅十二月廿二日堺奉行江、　長谷川左兵衛藤廣

慶長十九寅十二月廿三日、父之跡役、　長谷川權三郎

長崎奉行、町奉行兼之、

寛永三寅四月、御目付より、同六巳二月六日、堺奉行江、　水野河内守守信

寛永十酉二月十四日、御目付より、同十一戌七月廿九日、大坂町奉行江、　曾我又左衛門古祐

寛永十一戌八月十八日、御使番より、同十五寅十一月十日、御作事奉行江、　神尾内記元勝

寛永十五寅十一月十日、御目付より、五百石御加增、同十七辰六月廿四日病死、　大河内善兵衛政勝

寛永十七辰七月十二日、御普請奉行より、同十九午十一月病死、　柘植平右衛門正時○此間三十八人略

天保十二丑四月廿八日、御目付より、同十四卯九月朔日、山田奉行江、　柳生伊勢守久包

右伊勢守跡御役不被仰付、美作守壹人勤に相成、御目付壹人ヅヽ、年々交代被仰付、

弘化三丙午年閏五月八日、前々之通貳人勤ニ相成、

弘化三午閏五月八日、御目付より、嘉永元申五月廿六日、西丸御留守居江、　平賀三五郎改ニ信濃守一

嘉永元申五月廿六日、御目付より、同年十月廿七日、病死、　稻葉清次郎改ニ出羽守一

嘉永元申十一月朔日、小普請奉行より、　大屋遠江守明啓

同

豐後府内二万五千石ニ而、寛永六巳年より兼之、後私曲有之、寛永十一戌九月、切腹被仰付、　竹中采女正正重

寛永十酉二月十四日、下田奉行ゟ、同十二亥五月、御免、　今村傳四郎正長

寛永十一戌五月十八日、御書院番大久保主膳正組與頭より、同十八丑十二月十五日、御先手鐵炮頭江、　榊原左衛門職直改二飛驒守一

寛永十九午十一月十日、御目付より、慶安三卯［　］病氣依レ願御免、　馬場三郎左衛門利重

慶安四長正月廿八日、五百石御加增、御番衆より、萬治三子六月五日病死、　甲斐庄喜右衛門正述〇此間三十五人略

天保十三寅四月朔日、浦賀奉行より、弘化二巳十二月四日、西丸御留守居江、　伊澤美作守正義

弘化三午十二月廿六日、御目付より、嘉永二酉八月四日、町奉行江、　井戶大內藏改二對馬守一

嘉永二酉年九月日［　］より　內藤安房守

同

貞享三寅八月廿一日、(中略)御目付より、三人ニ而勤(中略)同四卯五月廿六日、於二長崎一病死、　大澤左兵衛基哲〇此間四人略

寶永三戌正月九日、御目付より、正德四午十一月十八日、御作事奉行江、　駒木根長三郎政方改二肥後守一

正德四午十一月十八日、肥後守御作事奉行被二仰付一候已後、兩人勤相成、

同新規

元祿十二卯六月廿八日、御目付より、四人勤相成、同十六未十一月十五日、町奉行江、　林藤五郎忠朗

元祿十六未十一月十五日、西丸御留守居より、正德三巳三月十二日、病氣依レ願御免、　佐久間安藝守信就

正德三巳三月十二日、安藝守依レ願御免已後、三人勤相成ル、

〔泰平年表 大御所〕寛政二年三月、阿蘭陀人參上、(中略)文祿元年、初て長崎奉行を置、寺澤志摩守廣孝也、是年同所の代官村山安東也、慶長五年御一統の時より同年まで、廣孝奉行たり、同八年、小笠原一庵是に代り、同十一年、長谷川左兵衛藤廣是に代り、元和元年、長谷川權六是に代り、寛永三年、水野河內守守信是に代り、同六年、竹中采女是に代り、同十年曾我又左衛門古祐、今村傳四郞正長兩人被二仰付一、古祐は竹中に代り、今村は江戶に在、是より已來貳人と成、隔年に在勤す、貞享四年、山岡對馬守被二仰付一、此時より諸大夫と成、代官は村山安東に代り、元和二年末次平藏被二仰付一、子孫相繼て勤し處、延寶四年に至り、有レ罪而斷絕、元文四年に至りて、高木作左衛門被二仰付一、

〔東職記聞 一〕長崎奉行二人

集成曰、(中略)慶長八年二月、神祖〇德川家康任二小笠原爲宗入道一庵於三位法印一、而被レ補二長崎奉行一、同

十一年一庵入道卒、以長谷川左兵衞藤廣被補之、同十九年十二月、堺奉行柴山定好免職、同年同月、長谷川藤廣來大坂之陣營、而言夏秋之際下知耶蘇之嚴制於肥前州之狀、神祖賞其功勞、且被命長崎賈人多居堺津、汝自今而後、在堺可帶奉行之狀也、駿府政事錄曰、慶長十九年十二月、長谷川藤廣遷堺奉行也、而政事錄集成不記長谷川氏後以何人補之也、代々記曰、往古寺澤志摩守支配之、自小笠原一庵至長谷川宇右衞門、長谷川左兵衞、長谷川權六稱代官、余〇小林元逸據正史推之、不見宇右衞門權六在職之事也、然萬姓家譜載長崎賈人高木作右衞門宗順譜中、長谷川權六下知宗順文書而稱奉行、且書末月日之上、附支之午字、余數以代々記推之、可元和四年壬午、如何者、代々記以權六爲藤廣之後職、則元和之始、權六在職者必矣、宇右衞門在職之事、不載古記、則不知何是也、又誤以賈人東庵有爲當職者、集成曰、文祿三年十一月云々、長崎賈人總代安東某、改名東庵、依是則非當職者明也矣、元寛日記曰、元和六年七月、仙石大和守補之、代々記曰、寛永三年、水野河內守補之、爾來稱町奉行、又同時載竹中采女正貞重在職之事、而不記遷補之年月、寛明同說、慶延略記曰、寛永八年六月、將軍家命有司曰、自古至今、商賈之趣異邦者、以賜朱印爲定例、自今以後、以執政之奉書、而可被仰竹中采女正也、依之竹中氏以補職、爲元和之季、寛永之始歟、元寛日記曰、寛永十一年九月云々、賜死采女正也、依是諸說、則權六代藤廣、仙石氏代權六、水野氏代仙石氏乎、又別補竹中氏當職、爲兩人乎、慶延略記曰、寛永十年二月、曾我丹波守、今村傳四郎補之、又曰、同十一年五月、榊原飛驒守職直、神尾內記元勝補之、代々記之說、頗髣髴、今記其略以待來者正也、

〔長崎年表附錄〕奉行沿革　慶應元年、長崎奉行並ヲ置ク、

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

履歴

御役金被下高之覺

長崎奉行並

一金貳千兩

但高に不拘被下　在府之者江ハ金千兩、高貳千石以上ニ而、在府之者江ハ金五百兩、御切米高千俵以上同斷之者江ハ不被下　同五百俵以上同斷之者江ハ金五百兩

〔吏徵御目見以上〕長崎奉行支配組頭一人　奉行支配　長崎在住　三百俵高　御役料三百俵　御役金百兩　御暇金壹枚、時服貳、　引越料金百兩　家族引越拜借金貳百兩

〔吏徵別錄布衣以下御目見以上〕長崎奉行支配組頭　天保十四年癸卯十一月十二日、始置一員、小普請方ゟ都筑平藏、三百俵高、御役料三百俵、御役金百兩、格式御勘定組頭之次、長崎在役被仰付、引越料金百兩被下、御暇金壹枚、時服貳、

〔長崎年表附錄〕奉行沿革　安政三年、支配吟味役ヲ置ク、　五年、吟味役ヲ組頭ト改ム、

〔昭德院實紀十〕萬延二年〇文久元年正月廿九日

長崎奉行支配組頭　永持亨次郎

近來御用多、格別出精骨折相勤候ニ付、別段之譯を以て、布衣被仰付、何れも本高百俵ニ被成下候

右於御右筆部屋緣頰、老中列座、對馬守申渡之、

〔文久二年武鑑〕長崎御奉行支配組頭　百五十俵高　御役料三百俵　御役金百廿兩ヅヽ

中臺信太郎　依田克之丞　小川達太郎

○按ズルニ、元治慶應等ノ武鑑ニ記セル祿高役料役金ノ額モ之ニ同ジ、

〔長崎年表附錄〕奉行沿革　安政五年、支配調役、下役等ヲ置ク、　六年、下役ヲ定役ト改ム、

〔懷中便覽〕布衣以下大概廐

百五十俵高　御役扶持十人扶持　御役金九十兩　燒火間　頭　長崎奉行支配調役

御目見以下大概順

百俵持扶持　御役扶持七人扶持　御役金六十兩　御譜代ノ者　上下役　頭　長崎奉行支配

調役並

〔文久二年武鑑〕長崎御奉行支配調役　百五十俵高御役扶持十人扶持、御役金九十兩づゝ

寺崎助一郎　矢口浩一郎　矢村戸四郎　中山誠一郎

同支配調役並、　百俵高、御役金六十兩、御役扶持七人扶持、

保木旗之助　小柴喜左衛門　東條八大夫　東條八太郎　沼間平五郎

〔懐中便要〕御目見以下大概順

三十俵三人扶持　御役扶持三人扶持　御役金三十五兩　御抱入場　御役上下　長崎奉行定役

〔有司勤仕錄〕長崎奉行

一此與力、同心、知行切米之高を積り其頭江被下、依之御役儀之內、召抱る也、或は今迄勤る者、右彼地功者成れば抱事も有、其人々の心得次第たるべし、外之組附とは違、身上に高下あり、必竟被官に濟候役之內、勤る心得也、與力を上役とす、同心を下役と號す、

一唐船入津之時は、上役下役ともに帳面を持參して、唐船へ積、商物之品々悉相改、一々帳面に記之、若此品々之內隱し置、帳面に不載品、跡ニ而露顯之時は、其分は皆取上る事也、○中略ヶ樣に改仕廻て、帳面に引合、封を付、異國人も荷物も皆唐人屋敷江入、夫ゟ外江不出、其屋敷之入口にきびしく番を置、人々出入を禁ず、○中略

一御買上之品は、員數定り有之、當時は昔ゟ減じたる由也、金銀を多渡す事を禁らるゝ由也、織物之類、紙其外銅を渡す也、○中略

一右御買上之品には、御用之外は、大坂堺京都長崎所々江割符被成也、
一右唐船隠し候節之闕所の品々、御拂に成、其金子闕所藏江納、其外闕所する所之金銀、昔は勘定なかりしが、先年石河土佐守〈政郷〇〉奉行之節、此儀を申置て、夫々勘定を立る、

〔嚴有院殿御實紀〈四十六〉〕延寶元年五月七日、長崎與力十騎に金五十兩づゝ、同心三十人に四兩づつ、宛行はるべしと奉行に仰下さる、

〔吏徴別録〈郡職〉〕長崎奉行組、與力十人、同心十五人、 與力御手當金七十兩、雜用金六十兩、同心御手當金貳拾兩、雜用金四十二兩、與力御暇金十兩、同心御暇代支度金四兩、引越料金、〈五十兩與力、三十兩同心、〉同拜借金、〈五十兩與力、三十兩同心、〉與力百俵、〈持扶持〉同心廿俵、 寛永十四年丁丑、始置與力五騎同心廿人、貞享四年丁卯、廢與力同心、 天保十三年壬寅七月日始置、〈七人〉十四年癸卯九月朔日、增與力三員、合十員、

〔長崎年表附録〕奉行沿革
寛政五年、手附出役ヲ置ク、 文政三年、手附出役ヲ廢ス、 弘化三年、與力同心ヲ止メ、更ニ手附出役ヲ置ク、

町年寄

〔長崎年表附録〕町年寄沿革
天正十五年、高木勘右衛門、高島良悅、後藤總太郎、町田宗賀四人、長崎頭人トナル、 文祿元年、頭人ヲ町年寄ト改メ外國通商ヲ許ス、 寛文二年、高木作右衛門、御用物役ニ任ジ、高百俵トナル、 元祿十年、高木彥右衛門、唐蘭商賣元締、兼代物替、及濱藏買入米管理ニ任ズ、 元祿十三年、高木彥右衛門、代物替會所頭人、兼御船御武具預ニ任ジ、高八十俵トシ、帶刀ヲ許ス、 明和元年、後藤總左衛門、町年寄上席、長崎會所調役ニ任ジ、高七十俵トシ、一世間帶刀ヲ許ス、

〔東照宮御實紀〈五〉〕慶長八年四月、この春、〈〇中略〉大村の處士奧山七右衛門、薩摩の處士八山十右衛門をもて町使役とせらる、これ長崎町使の濫觴なりとぞ、

浦賀奉行職員職掌

〔長崎年表附錄〕長崎地役人表

一町年寄七人　高七十俵五人扶持、銀廿九貫目乃至十二貫目、高十五人扶持、銀十五貫目、

〔柳營秘鑑 四〕遠國御役人之員數幷役高組支配大概

一相州浦賀奉行壹人 與力十貳騎 同心五十人

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕浦賀奉行　享保五年庚子十二月廿一日、始置一員、堀隱岐守、〇中略　此時下田御役所、浦賀へ引移さる、隱岐守は此迄の下田奉行也、〇中略　文政二年己卯正月廿五日、兩人役、筑紫佐渡守、〔高門外記 今一人ハ内藤正弘也、〇中略〕　天保十三年壬寅十二月廿四日、一人役、　弘化元年甲辰五月廿四日、再兩人役、

〔東職記聞 一〕浦賀奉行一人

置家士於相州浦賀關、掌改幅湊之諸船職也、領與力二十人同心五十人也、於其身者、以時至彼地聽一切事也、古者於豆州下田行當職之事、故稱下田奉行也、享保五年、移關于茲、爾來稱浦賀奉行也、

〔柳營秘鑑 二〕遠國御役人常詰幷交代之場所

浦賀奉行　右同斷〇妻子引越之常役、五六年一度、爲御目見出府、暫時在江戸、

〔德川禁令考 三十三 地方官吏勤方〕文久二戌七月六日

遠國奉行在住被仰付候ニ付當地取扱方之事

周防守殿御渡

覺

松平出雲守〇浦賀奉行　小栗豊後守〇日光奉行　川勝縫殿助〇佐渡奉行

今度御改革被仰出候ニ付、浦賀奉行、日光奉行、佐渡奉行、在住被仰付候間、彼地御用筋之儀、何れも於當地引受取扱候樣可被致候事、

〔文久紀事六〕文久二年七月十三日

浦賀奉行　坂井右近將監

右同斷〇今度御改革被二仰出一候ニ付、以來在住被レ仰付一候、諸事格別入念可レ被二相勤一旨被二仰出一候

〔明良帯錄後篇〕浦賀奉行千石高御役知千石芙老支　與力十騎同心五十人

此場は伊豆の下田奉行止て、浦賀に船改の察鑑を置り、湊に掛る船、其外積物を改む、浦賀は要地にて、江戸の戶口なり、奥羽の送米を改む、送米とは、奥羽の米を大坂へ廻すをいふ、

〔京兆府尹記二〕布衣役　浦賀奉行職掌

壹人役にて、彼地詰切政務を取行ふ、御老中へ御下知を伺ふなり、

一浦賀は相摸國にて海手也、尤番所の改め受ざれば、江戸江一艘も入船する事あれば、衆而手番の遠目鏡有て、番船を出し是を喰留る事、第一の役たり、

一相摸一國、幷浦賀町中の仕置公事裁判を取扱ふ、是第二の役也、

〔有德院殿御實紀十一〕享保五年十二月廿五日、寺社奉行土井伊豫守利意に、下田の湊は風波あらく、海船入津に難困するよし聞ゆるをもて、こたび浦賀の湊にうつさるゝにより、其事はからふべしと命せらる、又令せらるゝは、下田の湊口は船よする便よからず、風波の難に苦しむよし聞ゆれば、こたび浦賀の湊にうつさる、よて諸國より運漕する米穀はさらなり、炭薪屋材にいたるまで、滯なく輸送し、園庭玩好の木石、その他遊具の屬輸送すべからず、このよし沿海の地の船もてる者に輸告すべし、されば何事も浦賀奉行にとひはかりて、印記もひきかふべしとなり、

〔有德院殿御實紀十二〕享保六年正月廿六日、この日、目付の下吏を浦賀の湊につかはして高札を建しむ、その文にいふ、弓鐵炮、長刀、甲冑、火藥、幷に婦女囚人、あるは刃傷せられしもの、米大豆五百俵より多く積のせたる舟、浦賀奉行に告ずして載べからず、もし違犯せば曲事たるべしとなり、

又諸國往來の船、今より後相模國浦賀湊にて査撿すれば、府湊出入の船はいふまでもなく、沖を乘通るべからず、附り漁舟押送船魚荷積しは査撿に及ばず、其他の荷物のせしは、問屋につくるに及ばず、直に奉行所の査撿うくべし、空船は査撿に及ばず、伊豆國下田より府までのうち東方への通船、これまで査撿に及ばざりしが、此後は浦賀にて改むべし、東廻しの船も、上下とも此後は浦賀湊へ乘入て査撿うくべし、安房、上總、下總、常陸より府又は下田まで通行の船、これまで改めざりしかども、これも同じく改むべし、上總國白里村を限り、府に近き內海を通船は、浦賀にて査撿に及ばず、浦賀にて査撿うけざる諸廻船は、根府川浦賀の間に、しばしもつなぎ置べからず、荷物便船、或は人を上陸せしむる事かたく停禁たるべし、もし風波のとき船つながば、其地の里正、證狀とりて奉行の廳に出すべし、浦賀にて査撿はてし船、風波のとき根府川浦賀の間にかゝらば査撿すべし、劵を里正へ出し、そのよしことわるべし、根府川より浦賀まで、浦々より出入の荷船、上りは荷物つみしは浦賀の査撿うくべし、下りは直に浦賀へ乘入査撿はてば各浦へ乘入べし、もし違犯せば曲事たるべしとなり、

〔新編相模國風土記百十三三浦郡〕西浦賀

番所　湊際ニアリ、總構間口二十間、奥行十五間、享保五年、豆州下田ヨリ此地ニ移サレ、明年奉行ヲ置カル、時ニ堀隱岐守利壽當職タリ、是ヨリ當所ニテ諸國ノ廻船ヲ改メラル、爾來與力二員同心六名、晝夜勤番シ、廻船著岸アル毎ニ、問屋職ノ者(廻船問屋ト號スルモノ數十人アリ、東西浦賀、又豆州下田ニ散在ス、下田ニ住スルモノハ、古彼地ニ番所アリシ頃ヨリ、其事ヲ勤シモノナリ、)ニ指揮シテ、舟中ノ諸品ヲ撿閱セシメ、其數類ヲ記シテ、證狀ヲ番所ニ出スヲ例トス、〇中略

奉行役所　番所ノ西南(小名川間)ニアリ、享保五年、番所ト共ニ下田ヨリ移サル、堀隱岐守利壽、始テ奉行トナリ、文化二年ニ至リ一員ヲ加ヘラレ、相替テ當初ニ在勤シ、海岸防禦ノ事等ヲモ指揮

ス、

〔京兆府尹記二〕布衣役 浦賀奉行職掌

都て堺奉行の如く、從五位下朝散大夫にて、芙蓉の間御役人の身分に在之、〇中略 此任を嵩るは堺奉行に等しく、轉役は御勘定奉行、或は御作事、御普請、御持筒頭、御持弓頭等也、

〔明良帶錄後篇〕浦賀奉行

此場、以前は小高の仁の勤場なれ共、今は四五千石の仁至る、仙石彌兵衛、〇久功 佐藤修理、〇信顯 内藤外記、〇正弘 等至る、

〔青標紙三編〕一浦賀奉行は、元來壹人役に而、諸大夫の場所にあらず、その御役高も、外之遠國奉行同樣千石なり、筑紫佐渡守以來、叙爵之場所貳人勤、交代となる、戶田伊豆守は、日光奉行上座にて、此所をつとめたるゆへに、勤役中、貳千石高に被成下たる也、然るに嘉永六年、異國船渡來の一件以來、貳千石高の場所と成り、下田奉行、箱館奉行も同樣、貳千石高に成たり、外國人のために地位を進めたるものなり、

〔吏徵別錄上 布衣以上〕浦賀奉行　享保五年庚子十二月廿一日、始置二一員一、堀隱岐守、芙蓉間、佐渡奉行次席、御役料五百俵、

〔泰平年表二編六〕弘化四年七月廿八日、浦賀奉行座順之義、向後長崎奉行次席、諸大夫場所に被レ仰付候、取締之義、入念出精相勤可レ申旨被レ爲レ命、

引越拜借金三百兩

〔吏徵上 布衣以上〕浦賀奉行二人　老中支配　芙蓉間　千石高　御役知千石　御暇、時服三、羽織、

〔憲教類典二ノ五 御役〕元文三戊午三月十五日

浦賀奉行

屬僚

千石ゟ以下之者は、向後千石高御足高被下之、御役料は、只今迄之通り被下之候、以上、

元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人并御足高御役料定

御役料五百俵　　浦賀奉行

〔諸御役代々記十六〕浦賀奉行

文政三辰十二月、御役知千石被下之、御預り地五千石預、

〔嘉永明治年間錄二下〕嘉永六年十一月十四日、浦賀奉行職ノ俸祿ヲ加フ、

戸田伊豆守、井戸石見守へ達、　浦賀奉行の儀、前々より小高にては、勤向手張候哉の趣も候處、近來異國船度々渡來、防禦筋、追々嚴重仰出され候に付ては、御用向多端相成候間、向後場所高二千石に被直下、御役料の儀も是迄通下さる、

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

一金千五百兩　　浦賀奉行

但高ニ不拘被下

〔吏徵御目見以上〕浦賀奉行支配組頭。　高百五十俵　御役料貳百俵　御役金百兩　引越料五十兩

〔文久二年武鑑〕浦賀御奉行支配組頭　二百俵高　御役金百兩

〔慶應三年武鑑〕浦賀御奉行支配組頭　三百俵高

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一相州浦賀奉行壹人與力十二騎、同心五十人、

〔吏徵附錄部職〕浦賀奉行組、與力二十人、同心七十五人、

〔慶應三年武鑑〕浦賀御奉行　與力二十騎　同心百人

〔吏徵別錄上布衣以上〕浦賀奉行〇中略、　天保十四年辛卯五月、與力現米八十石、同心十石三人扶持高になる、

〔新編相模國風土記百十三三浦郡〕西浦賀

與力同心屋鋪　奉行役所ノ東ニアリ、享保中、奉行ヲ置レシ後、與力十人同心五十人預ケラル、文政四年ニ、又與力四人同心三十三人ヲ增加セラル、

〔三崎志府治〕御役所　寶藏山下ニアリ、享保六年是ヲ置、騎士一口、步卒二口、浦賀御番所ヨリ來ヽ官船ヲ監シ、且三崎港〇相模出入ノ船ヲ撿按ス、是三十日ヲ以派期トス、

〇按ズルニ、元祿九年ニ三崎奉行ヲ廢セシニヨリテ、浦賀奉行ヨリ三崎ヲ管シ、與力同心ヲ三崎ニ遣シタルナリ、三崎奉行ノ條ヲ參看スベシ、

〔關譏規則首卷〕與力同心諸通船改勤書

覺

一御番所勤方、與力二人、朝五ッ時御番所へ罷出交代、翌朝五ッ時迄相勤、上下之船多參節ハ、非番之內にて罷出、加番相勤、殊に寄船數、格別多節は、與力總出仕之事、

附當番は白洲之方へ新古順に著坐致し、明番は白洲之方を跡にして、御番所別條無之旨當番へ相斷、諸書物引渡、一禮畢而引取可申事、

一下船改方與力一人、同心二人、又は與力御用繁多之節は、當番同心組頭一人、同心二人罷出、船々

相改申候、一色宮内殿御勤役之節、同心目付へ被㆓仰付㆒、當番與力幷同心組頭改㆓船數㆒、相記候而御役所へ申上候、右改之儀、船之口乘組候而、武具類鹽硝、其外御法度之荷物積不㆑申候哉、船頭へ相尋、武具鹽硝積候得ば、手形差出候ニ付、右品被㆑爲㆑出、手形に引合相改、總而板子を爲㆑取、表之方之荷物に掛置候筈を爲㆑取、荷物上並見分致し、押入水櫓爲㆑明、乘組之人數、上乘便船人等、同心に爲㆑算、則其船持參之御切手裏に日付いたし、積荷物幷手形乘組人數、上乘便船人等相認、改之與力同心組頭名前認、船頭へ相渡し、改濟之印紙爲㆑附、次之船へ乘移可㆑申候、船表之方にて相改候節は、同心一人、艫櫓之下へおろし爲㆑改、櫓下にて相改候節は、同心一人表之方へ遣し、上並荷物等爲㆑改候、下り船は、乘組人數増減、持參之御切手と相違候而も、船頭申口有人數之通書記可㆑申候、武士商人、雜荷物之内、如何樣之御法度之荷物隱積込候哉、船底迄之儀、改之節相知不㆑申事、

一下武具改濟候分は、書替相渡候御切手之裏に、其品箇數相記、當番與力一人印形致し、船頭へ相渡可㆑申事、

一下武具之儀、於㆓江戸御役所㆒、諸名〇名字恐衍家之留守居手形へ押切御印致し、當番之與力裏書相認、其手形在所へ遣し、右之武具に相添差下候節、遠國より書付差越候故、積船之名相知不㆑申候ニ付、廻船へ積下申武具之事を爲㆑認候儀も可㆑有之事、

一下り武士雜荷物之儀、手形無㆑之候而も、船頭申口を以相改、諸家之内、下雜荷物手形差出候儀も可㆑有之事、〇下略

〔温恭院實紀七〕安政元年八月十七日、浦賀奉行組同心、相應之者書出候樣、先達而相達置候處、猶又武術筆算等、格別に相撰、可㆑成丈御譜代に而高多之者、早々可㆑被㆓書出㆒候、尤御抱者に而も、格別ニ御用立可㆑申見込之者は、是又可㆑被㆓書出㆒候事、

〔吏徵附錄郡職〕同〇浦賀奉行足輕二十人

神奈川奉行職掌

四石貳斗二人扶持高　天保十四年癸卯五月日始置
同水主頭取十一人　同斷
同足留水主百九十人　一人扶持

〔昭德院實紀三〕安政六年九月十九日、創置神奈川奉行及支配向、

〔文久紀事六〕文久二年七月十三日

神奈川奉行
竹本圖書頭〇中略、正雅、

今度御改革被仰出候ニ付、以來在住被仰付候、諸事格別入念、可被相勤旨、被仰出候、

〔德川禁令考三十三地方官吏勤方〕慶應三卯年十月九日

外國人取扱之儀ニ付御書付

登岐守殿御渡

神奈川奉行江

覺

今般歐羅巴各國、支那、印度、其外共條約未濟之國々より渡來之外國人は、總其所奉行に而取扱候條、得其意、萬一不良之所業および候者は、召捕及吟味、罪狀之輕重により、相當之仕置可致、尤御國律を以推及し難き筋も可有之候間、神奈川表之儀は、御雇外國人江談判致し、重刑之分は、其都度相伺、且各港奉行打合、規則取調相伺候樣可被致候事、

待遇俸祿

〔昭德院實紀三〕安政六年九月十九日、創置神奈川奉行、〇中略

神奈川奉行

場所高貳千石、席之儀は、長崎奉行之上と可被心得候、

〔德川禁令考三十三地方官吏勤方〕安政六未年九月十九日

御勘定奉行江

覺

神奈川奉行之儀、只今迄神奈川表江相越候節々、日當を以御手當被下候得共、以後在府在勤に不拘、年々御手當金被下候儀に付、以來右日當之御手當は被下間敷、尤半年在勤之者は、外遠國奉行之振合を以、御暇拜領物被仰付に而可有之候、

一堀織部正、村垣淡路守儀は、箱館在勤之節は、神奈川奉行兼帶之廉に而被下候御手當金は不被下候、

一神奈川奉行支配向之內、江戸詰之ものは、御役金は被下間敷候、

一神奈川奉行兼帶に無之外國奉行之儀は、神奈川表江相越候節々、是迄之通り日當を以、其時時御手當可被下候、

右之通外國奉行神奈川奉行江相達候間、可被得其意候事、

外國神奈川兩奉行場所高令〇中略

外國奉行神奈川奉行兼帶

松平石見守〇康直

名代鳥居越前守

〔昭德院實紀八〕萬延元年九月十五日、神奈川奉行給官料〇中略

外國奉行御免被成、神奈川奉行主役と相心得可相勤候、御役料千俵被下之、

〔慶應三年武鑑〕神奈川御奉行　老　芙蓉間　二千石高　御役料千石

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金三千兩　神奈川奉行

但高に不拘被下　在府之者江は金千五百兩、高三千石以上にて在府之者江は金七百五拾兩、御切米高二千俵以上同斷之者へは不被下、同七百俵以上同斷之者江は金七百五

拾兩、

〔德川禁令考地方官吏勤方三十三〕神奈川奉行

累代武鑑、安政六未年二月十五日、寄合肝煎松平石見守之ニ任ズ、

〔文久二年武鑑〕神奈川御奉行當御役安政六ヨリ新規

五千石、萬延元申九月ヨリ、松平石見守康直、外國御奉行兼帶、　二千石、文久二戌十月ヨリ、淺野伊賀守氏祐、

〔元治元年武鑑〕神奈川御奉行

六千石、文久三亥十月ヨリ、大久保紀伊守忠寛、　二千七十五石、文久三亥七月ヨリ、駒井大學信興、　二千八百石、文久三亥九月ヨリ、堀伊賀守、

〔慶應二年武鑑〕神奈川御奉行

百俵、元治元子九月ヨリ、早川能登守、　慶應元丑□月ヨリ、小笠原筑後守、

〔慶應三年武鑑〕神奈川御奉行

百俵、慶應二寅六月、水野若狹守、　百俵、慶應元丑五月、早川能登守久丈、

〔泰平年表六編三〕文久三年七月廿一日、神奈川奉行並御書院番小笠原志摩守組駒井大學　右被仰付

〔懷中便覽〕布衣以上大概順

千石高　芙蓉間　文久三亥七月廿一日新規　神奈川奉行並

〔吹塵錄德川氏三十一〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金千五百兩　神奈川奉行並

但高に不拘被下　在府之者江は金千兩、高貳千石以上ニ而在府之者へは五百兩、　御切米

頭書：

高千俵以上同斷之者江は不被下、五百俵以上同斷之者江は金五百兩、

〔昭德院實紀三〕安政六年九月十九日、創置神奈川奉行支配向、○中略　神奈川奉行○中略

一神奈川奉行支配向御宛行之儀、場所高、御役料、御役扶持ハ、是迄下田奉行支配向之節之通被下、御役金之儀ハ、支配組頭江金七拾兩、調役江同五拾兩同並江同三拾五兩、同出役江同貳拾五兩、定役元〆江同貳拾三兩、定役江同貳拾兩、出役江同拾五兩、同見習江同八兩被下候、役々席順之儀ハ、長崎奉行支配向役々之上と可被心得候、

〔文久二年武鑑〕神奈川御奉行支配組頭。百五十俵高　御役料二百俵　御役金七十兩　若栞三男三郎、松村忠四郎、脇屋卯三郎、

〔昭德院實紀十〕文久元年正月廿九日　御勘定頭大席神奈川奉行支配組頭　若栞三男三郎○中略

近來御用多、格別出精骨折相勤候ニ付、別段之譯を以、布衣被仰付、何れも本高百俵に被成下候、右於御右筆部屋緣頰、老中列座、對馬守申渡之、

〔懷中便要〕布衣以下大概順

百五十俵高　御役料百俵、御役金七十兩、　燒火間　頭　神奈川奉行支配組頭勤方

〔海警年表〕安政六年六月八日、小十人宮權右衛門組山本庄右衛門、神奈川奉行支配調役右被仰付旨、於躑躅間備後守○太田資始申渡之、○下略

〔黃金之花〕神奈川奉行支配調役、百五十俵高、御役扶持十人扶持、　同調役並、百俵高、御役扶持七人扶持、　同出役、持高、役扶持七人扶持、

〔文久二年武鑑〕同○神奈川奉行支配調役　百五十俵高、御役扶持十人扶持、御役金、

相原次郎太郎　合原猪三郎　杉浦武三郎　刑部鐵太郎　伊藤岩一郎　佐久間留八　三坂登輔　小笠原甫三郎

同調役並　百俵高、御役扶持十人扶持、

山田甚之丞　鈴木愼一郎　宮本小一郎　窪田泉太郎　高木喜久左衛門　前田忠三郎　河野榮次郎　松田金十郎　吉田重次郎　志村左一郎

〔懷中便覽〕御目見以下大概順

八拾俵三人扶持　御役扶持五人扶持、御役金貳拾三兩、　御抱入場、御役上下、　頭　神奈川奉行

定。役。元。〆。

〔黃金之花〕支配勘定格元〆。〇神奈川奉行支配　百俵二人扶持、役扶持、五人扶持、役金三拾兩、　同格手附、役扶持三人扶持、役金七兩、　同定役元〆、八拾俵三人扶持、役扶持五人扶持、役金二十三兩　元。〆。介。

三拾俵三人扶持、御役扶持、三人扶持、御役金貳拾五兩、勤金十兩、

〔懷中便覽〕御目見以下大概順

三拾俵三人扶持　御役扶持三人扶持、御役金貳拾兩、　御抱入場、御役上下、　頭　神奈川奉行定。

役。

〔黃金之花〕定役、〇神奈川奉行支配　高三十俵三人扶持、御役扶持三人扶持、御役金二十五兩　同。見。習。役金八兩、役扶持三人扶持、　同。並。二十五俵二人扶持、御役扶持三人扶持、御役金十五兩、

〔黃金之花〕同。心。肝。煎。　同。心。　手。附。出。役。　同。心。御。雇　同。心。出。役。〇神奈川奉行支配

〔懷中便覽〕御目見以下大概順

二十俵二人扶持　御役金五兩二分、肝煎ハ六兩二分、　神奈川奉行同心

〔懷中便覽〕布衣以下大概順

百五拾俵高　御役扶持十人扶持、御役金十兩、　神奈川奉行支配定番役頭取

百俵持扶持　御役扶持七人扶持、御役金三十五兩、　神奈川奉行支配定番役頭取勤方

〔懷中便覽〕御目見以下大概順

〔黃金之花〕御役所付上番　貳拾俵二人扶持　御手當金三兩、同上番出役、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年五月三日、神奈川奉行支配定番幷ニ下番ヲ廢ス、

定番役頭取、同取締、諸場所詰役被仰付、定番役五百三十八人、別手組仰付られ、下番のものは帶刀御免、步兵上席に凡千人以上、勤方步兵同樣、

〔黃金之花〕下番世話役、四石二斗二人扶持　同重立役下番、四石二斗二人扶持、　川崎詰下番

箱館奉行名稱

〔諸御役代々記十六〕蝦夷奉行　御役名箱館奉行、幷松前奉行と替る、

〔天保集成絲綸錄七十七〕享和二戌年五月

戶川筑前守　羽太庄左衛門〇二人共蝦夷奉行

右向後箱館奉行と相唱候間、可被得其意候、〇中略

文化四卯年十月

箱館奉行之儀、向後松前奉行と相唱候間、可被得其意候、

〔續泰平年表〕安政元年六月廿九日、御勘定吟味役竹内淸太郎、箱館奉行被仰付、

職員

〔吏徵附錄廢職〕松前奉行二人〇中略　享和二年壬戌二月廿三日、始置蝦夷地奉行二人、〇中略同年五月十日、改御役名箱館奉行、　文化四年丁卯十月廿四日、箱館御役所を松前に移す、改稱松前奉行、員を增し四人となる、　文政四年辛巳十二月七日、廢當職、

待遇

〔吏徵附錄廢職〕松前奉行二人　貳千石高　御役料千五百俵　在勤中御手當金七百兩　老中支配　長崎奉行次席、芙蓉間、　御暇金拾枚、時服二、羽織、

役屋敷

〔慶應三年武鑑〕箱館御奉行
芙蓉　御役料千五百石　二千石高

〔德川禁令考十八稍規〕慶應三丁卯年九月廿六日
足高役料等ヲ廢シ、役金給與ノ定、〇中略
別紙
御役金被下高之覺
金四千兩、箱館奉行、但高ニ不拘被下、在府之者江ハ金千五百兩、高三千石以上ニ而在府之者江ハ金七百五十兩、御切米高貳千俵以上同斷之者江ハ不被下、同七百俵以上同斷之者江ハ金七百五十兩、〇中略
金貳千兩宛〇中略箱館奉行並、但高ニ不拘被下、在府之者江ハ金千兩、高貳千石以上ニ而在府之者江ハ金五百兩、御切米高千俵以上同斷之者江ハ不被下、同五百俵以上同斷之者江ハ金五百兩、

〔北海道志三地理衙署〕渡島國　函館支廳
享和二年、幕府箱館奉行ヲ置キ、東蝦夷ヲ措置ス、三年春、官廳成ル、文化元年春、龜田官衙ヲ移シテ奉行交代邸ヲ設ク、四年廳ヲ松前ニ移シテ松前奉行ト爲シ、安政二年、再ビ箱館奉行ヲ置キ、又廳ヲ此ニ開キ、元治元年、廳ヲ五稜郭中ニ移シ、明治元年、改テ裁判所ト爲シ、十月、賊陷テ之ニ據ル、二年五月事平ギ、又函館舊廳ニ移ル、

〔蝦夷地取扱留〕箱館御役宅其外坪數度數
一享和三亥年、箱館御役宅出來、總構地坪三千百四拾四坪餘、建坪六百三十七坪半
一文化元子年交代屋鋪出來、總構地坪七百七十坪餘、建坪二百十八坪、〇中略
一文化二丑年出來會所地面、總構地面八百八十一坪餘、外ニ旅宿所一棟、物置一棟、
南部陣屋、坪數壹萬八百九十坪餘、
内六千坪　文化三寅年増坪渡
津輕陣屋、坪數五千貳百九坪餘、

任免

一箱館北極四十一度五十餘分、一度爲二六十分、

右寛政十二申年五月、伊能勘解由書付差出ス、

〔文恭院殿御實紀 三十二〕享和二年二月廿三日、小納戸戸川筑前守安倫、目付羽太庄左衛門正養、ともに蝦夷奉行命せられ、長崎奉行次たるべしとなり、

〔模務覽要 二〕蝦夷之奉行初而被仰付

一享和二戌年二月廿三日、始而蝦夷地奉行兩人被仰付、御小納戸頭取より戸川筑前守、御目付より羽太庄左衛門被仰付、左之通兩人江御書付御渡、被仰含ハ御座之間、

但筑前守ハ百石御加増、五百石高ニ被成下、

戸川筑前守　羽太庄左衛門江

戸川筑前守　羽太庄左衛門

勤候內、貳千俵之高ニ御足高被下、座順之儀、長崎奉行之次ニ可罷在候、

右之通被仰渡候、且又筑前守御用之節ハ、奧江も罷通候之樣被仰渡候、

〔泰平年表 大御所〕享和二年二月廿三日、羽太庄左衛門、安藝守と改戸川筑前守安倫、蝦夷地奉行始而被仰付、同奉行支配吟味役二人被仰付、是より先に寛政十年五月、御目付渡邊久藏胤、大河內善兵衛政壽、御勘定吟味役三橋藤右衛門成方、御勘定組頭松山惣右衛門直成、御勘定太田十右衛門政興等、已下八十七人を松前へ被遣、其地及蝦夷を巡察せしめらる、是蝦夷の邊境を開るゝの始也、同十一年の春、松前領分東蝦夷地、箱館より以東の地、御用地に被二召上一、若狭守(松前資廣)へは替地として武州久喜領五千石を賜る、此時御書院番頭松平信濃守忠明總奉行と成、御勘定奉行石川左近將監忠房、御目付羽太庄左衛門正養、御使番大河內善兵衛正壽、御勘定吟味役三橋藤右衛門成方等、仰を受て松前に至、東蝦夷地の邊境を開き、夷人撫育、魚獵交易等の事を沙汰す、布衣以下にては、御勘定組頭、御勘定吟味方改役、支配勘定等出役にて是を勤、此時南部大膳大夫利敬、津輕越中守寧親に被二仰付一、人數を出して箱館を守衛す、同十二年より人數を配て、東蝦夷地エトロフ等の嶋々を守る、此頃松前より西蝦夷地は、松前の領分なれば、御構なし、享和元年までは、右の人々相持にて、東蝦夷地の事を執れり、同二年冬、蝦夷地奉行を箱館奉行と被改、

〔明良帶錄 後編〕松前奉行

松前の國司を所替させ公領とす、松前の先祖は安藝守武田の正統にして、武勇を以て東夷を押鎭る功有るによりて、世々松前に住る處、神君革命に當りて、其儘松前若狹守へ御朱印成下さる、

〔諸御役代々記　十六〕蝦夷奉行

戸川筑前守安倫　享和二戌二月廿三日、御小納戸頭取ゟ新規、百俵御加增、都合持高五百石被ニ成下一、文化五辰四月五日、去年魯西亞人騷擾之節、取締不ㇾ宜一件ニ付、御役被ニ召放一之旨、堀田攝津守於ㇾ宅被ニ仰渡一、

同　羽太庄左衛門正養（改ニ安藝守一）　享和二戌二月廿三日、御目付ゟ新規、同年十二月十四日、御役料千五百俵宛被ㇾ下ㇾ之、文化四卯年十一月十八日、當夏中魯西亞人エトロフ嶋騷擾、及ニ亂妨一候節、詰合之者共平日之心掛不ㇾ宜、騷動之儀に度を失ひ立退候、其砌覺常々申付方不行屆故に候處、兼々取締相整候由申聞候段、不都合之儀、且又右之節、其方箱館ゟ申上方、其外取計も麁忽之仕形、不調法之儀、依ㇾ之御役御免、小普請入逼塞被ニ仰付一、右於ニ水野出羽守殿宅一被ニ仰渡一之、

荒尾但馬守成章　文化四卯十二月廿二日、御先手鐵炮頭より、三百俵高被ニ成下一、同十酉正月廿五日、御普請奉行江、

安藤彈正少弼雅久　文化十酉四月七日、御目付より、同十二亥八月十二日、西丸御先手鐵炮頭江、

本多淡路守繁久（改ニ大和守一）　文化十二亥十一月十二日、小普請奉行ゟ、文政三辰二月廿六日、小普請組支配江、

高橋三平重賢（改ニ越前守一）　文政三辰三月八日、百俵御加增、佐渡奉行ゟ、同五午六月十四日、長崎奉行江、

同

村垣左大夫定行（改ニ淡路守一）　文化四卯十月廿四日、御勘定吟味役ゟ、新規三百俵高被ニ成下一、同九申二月十三日、病氣依ㇾ願御免、

小笠原伊勢守長幸　文化九申二月十七日、御勘定奉行ゟ、兼帶、同年九月廿九日病死、

服部久右衛門貞勝（改ニ備後守一又伊賀守）　文化九申十一月朔日、駿河町奉行より、同十三子五月四日、御勘定奉行、兼帶、只今迄之通御役料被ㇾ下ㇾ之、同年十二月廿三日、松前奉行御免、

夏目次郎左衛門信平（改ニ左近將監一）　文化十四丑二月二日、御目付より、文政五午七月廿四日、西丸御留守居へ、

屬僚

右夏目左近將監、高橋駿河守、御役替被仰付、跡役不被仰付、

〔續泰平年表〕安政元年六月廿九日、御勘定吟味役竹内清太郎、箱館奉行被仰付、二百石高御加增、席之儀ハ、下田奉行之次、諸大夫場と可相心得候、

〔德川禁令考三十三地方官吏勤方〕文久二戌七月六日

遠國奉行在住被仰付候ニ付當地取扱方之事

周防守殿御渡

覺〇中略

今度御改革被仰出候ニ付、箱館奉行在住被仰付候間得其意、彼地御用筋之儀、是迄之通可被心得候、

村垣淡路守〇箱館奉行

右之通相達候事

〔文久紀事六〕文久二年七月十三日

御勘定奉行格箱館奉行

水野筑後守下總守改名

今度御改革被仰出候ニ付、以來箱館奉行兩人役、在住被仰付候、諸事格別入念可相勤候旨、被仰出之、

〔泰平年表五編三〕文久二年七月十七日、外國奉行箱館奉行兼帶村垣淡路守、右今度箱館表へ在住被仰付候間、行國奉行御免被成候、

〔明良帶錄後篇〕松前奉行〇中略　吟。味。役、改。役。の屬役有り、

〔明良帶錄外篇〕箱館御勘定吟味方改役百五十俵高、御役扶持十人扶持、箱支

諸事御勘定か支配勘定など勤、又は下勘定所、都て其場所出役の者本一方出役、また御代官所向、或ひは奉行所抑方留役かなるべし、百俵以上の人多かるべし、此場御番替交代勤にて、取調向御入用節御取締場也、

〔吏徵附錄慶應〕松前奉行支配吟味六人　小十人組頭次席　百五十俵高　御役料三百俵　在勤中御合力米三百俵、四ッ物成、御手當金九十兩、別段六十兩、　享和二年壬戌十月十八日、始置、二人、御暇、金貳枚、時服二、

松前奉行支配吟味役格三人　百五十俵高　御役扶持十人扶持　御役金五十兩　在勤中御合力米百五十俵、四ッ物成、御手當金九十兩、別段六十兩、　御暇、金貳枚、時服貳、　文化四年丁卯四月十三日始置

〔蝦夷地御用留〕覺

箱館奉行支配向定人數之事　但當時過人何人有之故之事

御書面之趣承知いたし、別紙取調書差進候事、

申○萬延元年五月　　箱館奉行

一箱館奉行支配組頭　伺濟三人　當時三人
一同　勤方　同三人　當時三人
一同　調役、同並、同出役ニ而、　同廿九人　當時廿六人
一同　定役、元〆、定役、同出役ニ而、　同百一人　當時九十六人
一同　心組頭、同格同心ニ而、　同百廿四人　當時百廿七人
一支配勘定格手附　但定役人數無之　當時二人
一同　出役　伺濟七人　當時七人

御目見以上以下とも

一書物御用出役 但定人數無之　當時廿七人
一諸術調所敎授方 但定人數無之　當時壹人
一定役格通辨御用 但右同斷　當時壹人
一通辨御用出役 但同斷　當時三人
一組與力 但定人數無之　當時四人
一定役無足見習 但同斷　當時拾人
一假抱入同心 但同斷　當時八人
一同心無足見習 但同斷　當時八人
右之通御座候以上
申五月

〔德川禁令考三十三地方官吏勤方〕文化六巳年二月
松前奉行江　御書付
御勘定奉行江

何も幷支配向之者共、在勤御手當之儀、以來往返之月數を加、十五ヶ月以下に候はゞ、一年分之御手當計被下之、十六ヶ月以上に相成候はゞ、月割を以增御手當可被下候、
但在勤一年未滿候共、請取過之分、不及返納候、若六ヶ月內に而歸府候はゞ、半分は可爲返納候、
一何も在勤中、蝦夷地江相越候節、詰合之場所より六十里以上は、旅行月數に應、月割半減之御手當、別段可被下候、肥後守儀は、去年奧地江罷越候得共、一年未滿之在勤ニ付、別段御手當は被下間敷候、ヶ樣之類は、以來共同樣可被心得候、支配向之儀は、是迄之通可被取計候、

右之通松前奉行江相達候間、可被得其意候、

〔溫恭院實紀七〕安政元年閏七月十三日、新置箱館奉行支配組頭、○中略

箱館奉行支配組頭

席之儀、下田奉行支配組頭次たるべく候、

〔溫恭院實紀七〕安政元年八月三日、箱館奉行支配組頭等御暇、○中略但屬吏賜物有差、

箱館奉行支配組頭　新藤鉊藏

一　金貳枚　時服二

〔懷中便覽〕布衣以下大概順

百五十俵高　御役料百五十俵　御役金百二十兩　燒火間　頭　箱館奉行支配組頭勤方

〔安政六年武鑑〕箱館御奉行支配組頭　御役料三百俵　御役金百廿兩ヅヽ

〔慶應三年武鑑〕箱館御奉行支配組頭　百五十俵高　御役料三百俵　御役金百廿兩ヅヽ

荒木濟三郎　平山鎌二郎　三田喜六　山村總三郎　橋本悌藏　鈴木尙太郎

同組頭勤方　百五十俵高　御役料百五十俵

平岡庄七

〔慶應三年武鑑〕箱館御奉行支配組頭　三百俵高　御役料二百俵　御役金百廿兩

三田喜六　平岡庄七　荒木濟三郎　山村總三郎　橋本悌藏

〔溫恭院實紀七〕安政元年閏七月十九日、新置箱館奉行支配調役、○中略

箱館奉行支配調役

右席之儀は、御勘定吟味方改役之上可被相心得候、

〔蝦夷地取扱留〕箱館會所勤方伺濟

當御役所向、以來取計方之儀ニ付取調候趣左之通相伺申候

一調役同並共、右之內壹人宛、當番相立、例刻ゟ少々早メに出宅、御役所江罷出、吟味役出勤前に
而も、日々用部屋明次第、罷出申上候樣可仕候、
但一統出刻限之義は、是迄之通罷出、八時退散可仕、下役之中に而も當番相立、是又例刻ゟ
少々早メに罷出可申候、〇中略
一壹ヶ月之內、兩度宛調役寄合候而、御用向之儀評議仕、萬端御取締筋、區々無之樣可仕奉存候、
右之趣、私共一統評議仕候趣相伺申候、
丑〇文化二年十二月　高橋三平〇以下五人名略

〔吏徵附錄殿職〕松前奉行支配調役十四人　百五十俵高　御役扶持十人扶持　在勤中御合力米百五十俵、四ッ物成、御手當金九十兩、　御暇金壹枚、時服貳、　享和三年癸亥閏正月十八日、始置、六人、
松前奉行支配調役七人　百俵高　役扶持七人扶持　在勤中御手當金七十兩、雜用金六十兩、月割、御暇金十兩、　享和三年癸亥閏正月十八日、始置、五人、

〔懷中便覽〕布衣以下大概順
百五十俵高　御役扶持十人扶持　御役金九十兩　燒火間　頭　箱館奉行支配調役

〔安政六年武鑑〕箱館御奉行支配調役　百五十俵高　御役金九十兩ヅヽ、十人扶持ヅヽ、

〔温恭院實紀七〕安政元年八月三日、箱館奉行支配組頭等御暇、〇中略但屬吏賜物有差、〇中略
　箱館奉行支配調役　力石勝之助
一　金一枚　時服二
　同並　富田類右衛門
一　金拾兩

〔慶應三年武鑑〕箱館御奉行支配調役　百五十俵高　御役扶持十人扶持　御役金九十兩ヅヽ、
小嶋源兵衞、喜多野省吾、金子半之進、間宮鐵次郎、山崎衛三郎、富田類右衛門、山本文之助、荒井金助、

同並　百俵高　御役扶持七人扶持　▲印出役　御役扶持七人扶持　御役金五十兩

清水啓作、小柴喜左衛門、石賀七左衛門、山口新次郎、樋野惠助、城六郎、海老原武次、村上次郎太郎、山口敬藏、長谷川儀三郎、古橋賢次郎、山内舍人、▲高木與總左衛門、

〔吏徵附錄 蝦夷〕松前奉行支配調役下役元〆四人　御普請役元〆上席　八十俵三人扶持　役金十兩　在勤中御手當金貳十兩、雜用金五十五兩、月割、　文化四年丁卯四月十三日、始置四人、

松前奉行支配調役下役二十人　吟味方下役上席　三拾俵三人扶持高　役扶持三人扶持　在勤中御手當金貳拾兩、雜用金四拾貳兩、月割、　享和三年癸亥閏正月十八日、始置十人、　文化元年甲子九月十六日增置五人、合十五人、

〔蝦夷地御用留〕下役取扱之義ニ付奉伺候書付

山口顯之進　橋本悌藏　梨本彌五郎　松岡德次郎

今般御支配向調役下役元〆被仰付候間、以來御用向其外とも、萬端差圖を以可相勤旨、下役一同江被仰渡候間、可奉得其意被仰渡候ニ付、下役取扱向之儀、左ニ奉伺候、

一下役身分ニ付候儀は、都而私共進退仕、諸願諸屆とも、差出候はゞ、奥書致差上候樣可仕哉、

但私共之內、月番相立、取扱候樣可仕奉存候、

一下役御切米御扶持方、其餘臨時請取物とも、私共手形を以、請取候樣可仕候哉、

一撿使其外諸出役等有之候節は、其時々私ども詮判之上、人物相撰可申上候間、名前之者江、御用被仰付候樣仕度奉存候、

一誓詞其外御用懸御達事等之節は、私共之內、差添罷出候樣可仕奉存候、尤奉行被仰渡之節は、組頭衆御差添之儀と相心得可申奉存候、

但不廉立一ト通之達向者、私ども々申達候樣可仕奉存候、

一下役在勤之節、出立御屆之儀、朝五時迄出立之者は、御屆書銘々持參、月番私共江差出、五時前出立之ものは、御屆書江文通添、月番宅江罷越候樣仕、歸著之節、御役所引ヶ後に候はゞ、是又月番宅江相屆候樣仕度奉存候、〇中略
一宗門手形は、組頭氶宛にて爲差出、私共ゟ差上候樣可仕候、
一病氣差合等之節、日數十日程は、同役助合之儀、私共限り承置、十日以上に相成候はゞ、組頭氶宛之神文狀爲差出候樣可仕候哉、〇中略
右之通奉伺候、相洩候儀は、尙追々相伺候樣可仕奉存候、以上、

卯〇安政二年七月

書面伺之通たるべく候〇中略

山口顯之進　橋本悌藏　梨本彌五郎　松岡德次郎〇中略

取計方儀奉伺候書付

一下役其外新規被仰付候もの、傳達番無之候而は差支候間、以來古參之內、壹人づゝ取極候樣可仕奉存候、
一同心之儀、御用向におゐては、私共幷下役中可致差配儀に可有之、身分之儀は、調役支配ニ付、諸願諸屆之類、差縺ひ申間敷譯に候得ども、左候而は、身分隔意も有之、一事兩樣之儀出來、平常御用向も、自然不都合之儀有之間敷と難申候間、同心組頭差出候諸願諸手形等、私共取次、其餘は下役取扱向々伺濟之通、取計候樣仕度奉存候、
一足輕之儀、是迄下役進退罷在候處、今般元〆被仰付候上は、私共支配可仕哉、尤一躰足輕共之儀、都而同心江組入相勤候儀ニ付、御奉公筋に於て、差配爲請候は勿論に候得共、身分之儀に付而も、諸願諸屆其外とも、右組頭爲取次候譯に相成候得ば、同心足輕之場合一致相成、自然御取締

も可宜哉ニ付、右樣爲取扱度奉存候、

一足輕小頭樣之もの無之候而は、取締不宜候間、兩三人も被仰付候樣仕度、御沙汰次第、人物相撰申上候樣可仕候、

一私共儀、諸懸之儀追而可被仰付、夫迄は是迄之掛役、先取扱候樣御達有之、願之進彌五郎義は、直に應接懸被仰付、一躰掛り御用勤方之儀元〆下役之場合、規則取立、取計方相伺候積に候得共、差向先下役打込相勤可申、尤月番之節、御役所を明け出張致候樣に而は差支候間、成丈ヶ除切に仕、非番之者懸り之方重に相勤候樣可仕候、

一掛々廻しもの丶儀は、其懸り之元〆、其餘は月番元〆名前相加、小印致し可申奉存候、

右差向取計方奉伺候、猶相洩候儀は、追々相伺候樣可仕奉存候、

卯（安政二年）六月

書面（中略）伺之通たるべく候

〔懷中便要〕御目見以下大概順

八十俵五人扶持　御役扶持五人扶持　御役金四十五兩　御抱入場　御役上下　箱館奉行定役元〆（中略）

三拾俵三人扶持　御役扶持三人扶持　御役金三拾五兩　御抱入場　御役上下　箱館奉行定役

〔吏徴附錄（寄説）〕松前奉行手附出役十人（庵原久作、戸田久大夫、中村小市郎、長島新左衛門、關岡右衛門、高橋次太郎、深山宇平太、松田仁三郎、田口久次郎、村上治郎右衛門、）蝦夷地在住出役廿五人

〔蝦夷地御用留〕支配定役出役拜借金奉願書付（中略）

一金三拾兩

箱館奉行支配定役出役　藪內於菟太郎

奈良奉行名稱
職員
職掌

右は近々箱館表へ引越候ニ付、書面之通拜借金被仰付、來戌年ゟ未年迄、拾ヶ年賦返納之積爲仕度奉存候、依之此段奉願候、以上、

酉（○文久元年）九月

〔吏徴附錄 蝦夷〕松前奉行同心六十人　文化四卯年五月朔日、二十俵二人扶持、

〔温恭院實紀 七〕安政元年閏七月二十二日、箱館同心新置之令、（○中略）

覺

箱館奉行組同心、相應之者、早々可被書出候、御宛行之儀は、貳拾俵貳人扶持、御手當金六兩被下候間、爲心得相達候事、

右之通、向々江可被相達候事、

〔慶應三年武鑑〕箱館御奉行　同心百人

〔政要錄 二〕奈良奉行（南都町奉行と俗にいふ）

〔柳營秘鑑 四〕遠國御役人之員數并役高組支配大概

一奈良奉行壹人（役料千五百石、與力六人、同心三十人、）

〔吏徴別錄 上布衣以上〕奈良奉行　慶長十八年癸丑六月十一日、始置一員、（○中略）元祿九年丙子四月十四日、二人、（○中略）同十五年壬午十一月廿八日、横山左門病免後、一人役、

〔東職記聞 一〕奈良奉行一人　住奈良掌彼地一切事之職也、領與力六人、同心三十人也、

〔柳營秘鑑 二〕遠國御役人常詰并交代之場所

一奈良奉行　右同斷（○妻子引越之常役、五六年一度爲御目見出府、暫時在江戸、）

〔日本輿地通志 大和 十一〕府治　布政司

在南都坊屋敷町

〔明良帶錄後篇〕奈良奉行老支千石高御役料現米六百石芙、與力七騎同心三十人

隊卒を率ゐて非常の備をなす、奈良地は攝津の地續、尤要地也、

〔京兆府尹記二〕奈良町奉行職掌南都町奉行と俗ニ云

壹人役也、諸事京都町奉行と示し合せ、所司代の御下知を請、政務を取扱ふ、

一春日四社大明神の警衛して、御造營の節、御役の頭とし、例年春日御神事には奉行す、此警衛第一の御役也、

一南都町奉行は、大和一國の政務を勤む、尤大和は京都町奉行支配の國たれ共、少事は奈良奉行相計ひ、其事入込時は、京都町奉行江引渡す、下方のもの、遠路往來雜費をいとひ、可成丈けは京都へ相達せず、奈良において取扱ふ、御役の第二也、

〔武家嚴制錄二十一〕南都町奉行衆御條目

覺

一南都支配之所々仕置之儀、諸事入念、正路ニ可被及沙汰、若御法度違背之輩於有之ハ、隨科之輕重可被申付事、

一兩御門主、并院家、五師役者、其外社家之輩、自然不義之子細於有之ハ、無遠慮可被言上事、

一萬一不慮之儀令出來ハ、戸田越前守〇忠昌京都所司代相談之上、可有註進事、

一於和州御領私領、自然之儀、雖爲有來法式、改替可然儀ハ、被伺之可被差圖事、

一於殺生禁斷之地違背之輩、其外不作法之族於有之者、可被致言上事、

附猶南都猿樂等、不行儀之事業有之者、急度可被申付事、

右條々、可被相守之者也、

延寶四年十一月日　但馬〇土屋數直　大和〇久世廣之　美濃〇稻葉正則　雅樂〇酒井忠清

〔常憲院殿御實紀四十六〕元祿十五年十一月二十九日、驛使もて令せらるゝは、〇中略奈良奉行は、先規のごとく今より後一員にて其地に住し、三四年へば參府し、四五月在府すべしとなり、

〔法曹後鑑二〕寛政十午年奈良奉行江懸合之留

溝口豐前守〇信勝殿

御切紙致拜見候、然ば奈良町、幷大和國御朱印有之寺社之分は、奈良奉行支配に而、大和國中之儀は、京都町奉行支配と心得被成候、右之通相違之儀も無之哉、御承知被成度旨、御紙面之趣致承知候、右は前々より支配仕來候儀にて、延享元子年八月、石黑但馬守奈良奉行勤役中、南都御役所に於て、前々より取扱之品々、書付差上可申旨御老中方より被仰越候段、所司代牧野備後守殿より被仰渡候ニ付、取扱候品々書上候處、同年九月、向後も右之通取計候樣、御老中方より被仰越候段、備後守殿被仰渡候、且又寶曆十辰年、山口豐前守奈良奉行勤役中、所司代井上河內守殿よりも、南都御役所支配之儀御尋に付、別紙之通申上候儀に御座候、則兩度之書付寫二通致進達候、右にて御承知可被下候、右御報旁可得御意、如此御座候、以上、

十二月廿八日　　加藤伯耆守印

菅沼下野守樣

猶以大和國中にても、其仕義に寄、奈良奉行江願出、取扱之儀も有之候得共、金銀出入等取扱之儀は、京都町奉行振合を以、取扱候儀と被思召候旨、御端書之趣致承知候、右御取扱之儀は、前々より當御役所振合を以て取扱候儀に而、出入之品に寄、見競等無之筋は、京都町奉行振合等、承合候儀は御座候得共、京都振合を以取扱候儀には無御座候、以上、

南都奉行支配場所之儀書付寫

一南都奉行所ニ而支配場所之儀、奈良町幷和州十五郡、並支配仕來候、尤他國に支配之場所無御

位階俸祿

座候、且又和州一國之水論地論は、南都奉行所にて取扱不申、京都兩町奉行にて取扱來候、
右書面之通御座候、以上、

寶暦十辰年九月　　山口豐前守

〔慶應三年武鑑〕奈良御奉行

御用日　公事　四日　十一日　廿五日　訴訟　六日　十八日　廿七日

〔京兆府尹記 二〕奈良町奉行職掌

山田奉行に等しく、從五位下朝散大夫にて、芙蓉の間詰御役也、〇中略此任を蒙るは山田奉行に等し、轉役は京都町奉行、或は新御番頭、御持弓頭、御持筒頭等也、首尾宜敷は、大抵京都町奉行也、

〔文昭院殿御實紀 十二〕正德二年三月十五日、奈良奉行中坊長左衛門秀廣も叙爵して美濃守と稱す、例は春日の遷宮あらざれば叙爵せざれど、こたびよりかならず諸大夫仰付らるゝ事とさだめられき、

〔吏徴 上 布衣以上〕奈良奉行一人　老中支配　芙蓉間　諸大夫　奈良在住　千石高　御役料千五百俵　御暇、時服四、羽織、　引越拜借金三百兩

〔厳有院殿御實紀 二十八〕寛文四年四月四日、荒井奉行土屋忠次郎利次、五百石加恩ありて奈良奉行となり、官料二千石給ふ、その近邊公料の地は、代官四人を置るべしと仰出さる、

〔吏徴別錄 上 布衣以上〕奈良奉行〇中略　元祿九年丙子四月十四日、二人、妻木彦右衛門賴保、内田傳左衛門守政、御役料千俵、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕元文三戊午年三月十五日

奈良奉行〇中略

千石より以下之者は、向後千石高御足高被下之、御役料は、只今迄之通り被下之候、以上、

任覺

元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人井御足高御役料定

御役料千五百俵　奈良奉行

〔天明七年武鑑〕奈良御奉行

千石高　御役料千七百俵　與力七騎同心三十人

〔吹塵錄德川氏三十一〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不レ被レ下、是迄之場所高ニ不レ拘、

今度御改正、別紙之通御役金被レ下候旨、被二仰出一之、

御役金被レ下高之覺

一金千五百兩　奈良奉行

但高ニ不レ拘被レ下。

〔諸御役代々記十六〕奈良奉行

天正十午年より慶長五年迄　井上源吾

鈴木左馬

此隔人大久保石見守(長安奈良奉行)家來石見守江訴、南都諸事執行、　鈴木長左衛門

慶長十八丑二月五日、寬永十五寅十一月十日、於二役所一病死、　中坊左近秀政(改二飛驒守一)

寬永十五寅十一月十日、父之跡役、寬文四辰五月廿七日、病氣依レ願御免、　中坊長兵衛時祐(改二美作守一)

寬文四辰六月四日(中略)荒井奉行より、同九酉十一月十四日、御役被二召放一、○中略　土屋忠次郎利次○下略

〔京都御役所向大概覺書七〕奈良町奉行次第

權現樣御代　六萬石　大久保石見守○長安

屬僚

慶長七寅年被仰付候由、石見守儀は、常に駿河に有之候而、折々南都江罷越、鈴木左馬之介と申方、南都居住にて諸事掛、石見守より被得差圖候由、左馬之介知行二千五百石、慶長十六戌年迄、左馬之介被勤、此後南都奉行中絶仕に付、奈良町總年寄六人として、奈良中之儀取捌仕候由、

〔東職紀聞　一〕奈良奉行一人

抑此職始豐臣氏之代也、代々記曰、自天正十年至慶長五年、井上源五奉之也、集成曰、慶長十八年五月、中坊宗右衞門補之、是飛驒守秀祐之子、後改名左近也、政事錄曰、慶長十九年十一月、神祖發二條云々、渡御于奈良、奉行中坊左近獻御膳也、○中略案集成曰、慶長中有人夜殺中坊飛驒守秀祐於駿府之宅也、依是則秀祐已奉之、横死之後、神祖以其子直代之歟、慶延略記、作飛驒守秀政者可左近以受領之稱記之也、又曰、寛永十五年十一月、中坊美作守時祐、襲父宗空之職而補之也、依是則父子三世奉之乎、○中略又曰、寛文四年三月、代々記作四月土屋忠次郎利次代時祐之時、給職料二千苞也、爾來他人代進之也、代々記曰、元祿九年、神尾飛驒守辭職、同年四月、内田傳左衞門代之之時增一人、以妻木彥右衞門被補之、爾來二人、同十四年二月内田氏辭職、同年同月横山左門代之、同十五年十一月、將復舊而免横山氏、爾來一人也、

〔常憲院殿御實紀　三十三〕元祿九年四月十四日、書院番組頭内田傳左衞門守政、使番妻木彥右衞門賴方、共に奈良奉行になる、これより奈良奉行兩員に定めらる、○又見憲廟實錄

〔常憲院殿御實紀　四十六〕元祿十五年十一月二十八日、奈良奉行横山左門元知、下田奉行陰山數馬親廣、ともに病免す、これより奈良下田おの〳〵一員に定めらる、

〔吏徵附錄　郡職〕奈良奉行組、與力七人、同心三十人、牢番一人、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

奈良奉行與力　現米六十石

同　同心　現米七石三人扶持

牢番　二人扶持

〔翁草六十六〕神尾備前守并石河土佐守事

寶暦ノ比、神尾備前守(俗名市左衛門、秩千七百石、)元ハ、御目附ヨリ奈良奉行仰付ラレ、役地ヘ立越ルノ前ニ、備州潛ニ彼地ノ風俗ヲ立聞セラレケルニ、南都ハ分内狹クシテ、奉行ノ外ニ權職ノ人無ク、萬ヅ奉行ノ指揮ニ洩ル事ナケレバ、組與力等公權ヲ借テ、猥リ成事多キ由ヲ疾ト聞糺シ、程無ク南都ヘ到著シテ、與力ヘ密カニ語ラレケルハ、某事當所春日ノ祠ヘ宿願有故ニ、公務ノ間ニハ怠ラズ參詣セント存ル也、是全ク私ノ事ナレバ、奉行格式ノ供ヲモ具セズ、頭巾笠等ヲ被リ、忍テ可詣、途中各ヘ行違フ事アリトモ、相構テ默禮容赦ニ預ルベシ、勿論某モ無禮ニ打過ナントノ事也、是故ニ與力以下ヲ始、南都中、段々ニ是ヲ傳ヘ聞テ、物毎愼ミケルニヨリ、備前守在役ノ内ハ、諸事穩便ニ、風俗モヨカリシト也、是其小地ニ應ジタル懲誡ナルベシ、京、大坂抔ハ、此格ニハ成難カラン、

山田奉行名稱

〔延寶六年江戸鑑〕伊勢町奉行

〔貞享三年武鑑〕伊勢郡代

〔正德六年武鑑〕伊勢山田町御奉行

〔文政三年武鑑〕伊勢山田奉行

職員

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數

一勢州山田奉行二人(與力六騎、同心二十人、水主四十人、)

〔吏徴別錄上〕(布衣以上、)山田奉行

慶長五年庚子月日、始置、一員、(○中略)　同九年甲辰月日二人(寛永元年甲子月日一人)　元祿九年丙子二月十四

日二人略○中　享保十一年丙午二月廿六日一人

〔東職記問二〕山田奉行一人

住山田、掌彼地一切事之職也、領水主七十五人也、

〔柳營秘鑑二〕遠國御役人常詰并交代之場所

一勢州山田奉行　隔年交代

〔明良帶錄後篇〕山田奉行千石高御役料千五百俵　芙　水主七十五人老支

伊勢宗廟の事、正遷座の式等、御社御普請の事、土地の公事訴、都て伊勢にか丶りたる事は、皆關り聞く事也、

〔京兆府尹記二〕山田奉行職掌

一人役にて詰切

一內宮外宮兩大神宮の警衞にして、貳拾壹年目每に、御遷宮の節御造營奉行、例年九月十六日神事の節御神事奉行たり、是御役の第一たり、

一伊勢志摩兩國および山田御神領の分は、皆當所奉行支配す、尤公事裁判取行ふ、是第二也、

一向寄の諸侯、變有時は、御教書を達し、其急を防ぐ、南海道之主將紀伊大納言殿江申て俱に防、內外兩宮を守護す、是第三也、

一志摩國鳥羽の湊は、西國船廻送の分、風待する所也、武具或は怪敷荷物あれば是を點見し、兼而は南海漂流の異國船あれば其筋を尋問し、江府江言上し、長崎江送る、且は御防の一所也、是御役の四也、

〔吏徵別錄上布衣以上〕山田奉行略○中　寬永六年己巳正月十一日、白子御船手兼帶、御役料三千石、與力十騎、同心七十人、

職掌

〔大猷院殿御實紀十四〕寛永六年九月十三日、山田奉行兼美濃國奉行岡田將監善同、爵ゆりて伊勢守と改む、このたび伊勢內外宮造替遷宮の事つかさどるがゆゑなり、

〔常憲院殿御實紀十八〕元祿元年十月十五日、山田奉行大島出羽守義近、伊勢兩宮の修理奉行命せられ、いとまたまふ、

〔京兆府尹記二〕山田奉行職掌

諸事日光奉行にひとし、從五位下朝散大夫にて、芙蓉の間御役人たり、〇中略此任を蒙るは、日光奉行にひとし、轉役も江戶町奉行、御勘定奉行、御作事奉行、御普請奉行等也、大御目付被仰付は稀也、近世山田肥後守は、山田奉行ゟ大御目付の鈞命を蒙る、尤規模なり、

〔吏徵上〕布衣以上山田奉行一人　老中支配　芙蓉間　諸大夫　山田在住　千石高　御役料千五百俵　御暇、時服四、羽織、　引越拜借金三百兩

〔嚴有院殿御實紀十七〕萬治二年五月十五日、作事奉行八木但馬守守直、山田奉行になり、役料三千俵給ふ、

〔常憲院殿御實紀三十三〕元祿九年二月十六日、山田奉行に役料千五百俵荒井奉行に五百俵給はる、

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月十五日

山田奉行〇中略

千石ゟ以下之者は、向後千石高御足高被下之、御役料は、只今迄之通被下之候、以上、

元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人幷御足高御役料

　　　　　　　　　　　　　　　　山田奉行

御役料千五百俵

〔吹塵錄 徳川氏三十一〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高ニ不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨、被仰出之、

御役金被下高之覺

一金千五百兩　　山田奉行

但高に不拘被下

〔文昭院殿御實紀 十三〕正徳二年正月廿一日、山田奉行大岡忠右衞門忠相、任所に赴くをもて、費用金三百兩恩貸あり、

〔文昭院殿御實紀 二〕寶永六年四月十日、山田奉行に、官宅修復料金をたまふ、

〔東職記聞 一〕山田奉行一人

抑當職始豐臣氏之代也、代々記曰、秀吉以神宮仕職神部越中守〇貞永補之也、慶長八年、神祖〇徳川家康以長野内藏允〇友秀被補之、同九年增一人、以日向半兵衞〇正成被補之、爾來二人、元和三年、水谷九右衞門〇光勝補之、同四年山岡圖書〇景政補之、寛永元年中川半左衞門補之、爾來一人也、元祿九年四月又增一人、以長谷川五左衞門〇後周防守勝知被補之、正徳中黑川丹波守〇正增免職、爾來復一人、無增減也、元寛日記曰、元和三年正月、岡田伊勢守補之、而代中川半左衞門、且領同心七十人、而給職料三千石也、代々記、以岡田中川二氏遷補、爲寛永中、不知何是也、

〔柳營年表秘錄 上東照宮〕慶長五庚子、山田奉行一人、神部越中守貞永、

〔武徳編年集成 五十〕是年〇慶長八年冬、北畠ノ庶流長野内藏助〇友秀勢州山田奉行トナル、

〔常憲院殿御實紀 三十三〕元祿九年二月十四日、目付長谷川五左衞門勝知、使番久永源兵衞勝晴は、山田奉行になり、〇中略是より山田荒井ともに奉行二員に定めらる、

〔有德院殿御實紀二十二〕享保十一年二月廿六日、山田奉行黒川丹波守正増、病免して寄合となる、これより山田奉行一員を減せられて、其闕を補はれず、

屬僚

〔吏徵附錄郡縣〕山田奉行水主七十五人内組頭四人、現米七石一人扶持、　寶暦元年辛未二月廿五日、小頭四人江三人扶持充、平同心三十二人江二人扶持充被下之、

〔大猷院殿御實紀四十七〕寛永十八年八月廿八日、船手頭石川八左衛門政次、伊勢奉行仰付られ、水主七十人附屬せらる、

兵庫奉行

〔續泰平年表〕元治元年十一月十一日、兵庫奉行勤仕並寄合小笠原攝津守、右於御前被仰付之、

〔嘉永明治年間錄十四〕慶應元年乙丑十一月十四日、攝津兵庫開港ヲ止ム、

兵庫表御開港の處、御廢止ニ付、兵庫奉行池野山城守○好謙堺奉行へ轉役被仰付、その以下、役々の者夫々轉役被仰付、

○按ズルニ、慶應三年六月、兵庫開港ヲ許スニ至リ、再ビ此職ヲ設ク、

〔元治二年武鑑〕兵庫奉行

老中支配　堺奉行次席　芙蓉間　千石高　御役料現米六百石

〔慶應三年武鑑〕兵庫御奉行

老中支配　芙蓉之間　千石高　御役料現米六百石

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

一金三千兩　　兵庫奉行

但高ニ不拘被下

屬僚

〔續泰平年表〕元治元年十一月十一日、兵庫奉行組與頭、御小姓組井上書一郎組大久保原太郎、右於御前被仰付候、○節略

〔慶應三年武鑑〕同○兵庫奉行支配組頭

百五十俵高　御役料二百俵　御役金八十兩

堺奉行名稱

〔延寶六年江戸鑑〕堺町御奉行

〔貞享三年武鑑〕堺政所

〔武家職號〕所司代

堺政所は、天正五年、十河存保、一存男彌六郎堺の津に有て、泉河二州の成敗を司どりし、是を世に政所と云、

〔文政三年武鑑〕堺御奉行

職員

〔柳營秘鑑〕四遠國御役人之員數

一堺奉行一人役料千俵、與力十騎、同心五十人、

〔吏徵別錄〕上布衣以上堺奉行　慶長五年庚子月日、始置一員、中略元祿九年丙子二月二日、大坂町奉行より兼帶、同十五年壬午十一月廿八日、再置一員、中略大坂町奉行より兼帶止

〔東職記聞〕一堺奉行一人

職掌

仕堺津掌彼地一切事之職也、領與力十人同心五十人也、

〔明良帶錄〕後篇堺奉行千石老支高御役料現米六百石芙與力十騎同心五十人

此場は大坂町奉行より兼し所、元祿の度に堺奉行被仰付てより、土地の公事訟を聞て、尤要害の心得第一なり、

位階
俸祿

〔京兆府尹記 二〕堺奉行職掌

壹人役也、諸事大坂町奉行に示し合、御城代の御下知を請、政務を取扱ふ、

一當津入船の諸荷物點見に及び、萬一の儀有時は、海手を護るの儀、第一の御役也、

一堺町中和泉一國の政務を取行ふ、尤和泉は大坂町奉行支配の國たれども、少事は堺奉行取計らふ、入込時は大坂町奉行江引渡す、是御役の第二也、○中略

評曰、近世贄安藝守〇正壽といふ奉行あり、此人才智有て、しかも篤實の君子也、近年、○中略大和川筋川淩ひ出來たるより、土砂馳込、堺の沖埋まり入船成がたく、○中略天明の末、安藝守御役の始ゟ、○中略色々才を働かし、其工風終に成て、今入津自由を得て、以前の如く堺繁昌の時を得たり、是全く彼藝州の智ゟ出たる所也、江戸江聞え宜敷、江府江召さるゝの所、堺の町人共一同をしみかなしみ、再び在役を江府江願ふ、依之藝州江御加增の地を被下、御懇意の上意を以て、再び役被仰付ける、

〔青標紙 三編〕一堺奉行は、大坂町奉行の下役の如きものに而、たとへば江戸町奉行と火附盜賊改との如し、よき公事訴訟は、皆町奉行にひきたくられて捌かるゝなり、天明年中の贄安藝守は、堺奉行にて第一の人と稱美せられたり、

〔大坂武鑑〕堺御町奉行

御用日　二日　七日　十二日　十六日　廿一日　廿七日

〔慶應三年武鑑〕堺御奉行

御用日　二日　七日　十三日　十八日　廿一日　廿五日

〔京兆府尹記 二〕堺奉行職掌

奈良奉行に等し、從五位下朝散大夫にて、芙蓉の間詰御役人なり、○中略此任を崇るは奈良奉行に

任免

等し、轉役は大坂町奉行、或は新御番頭、御持筒頭、御持弓頭、亦は御作事奉行等也、大抵は大坂町奉行被仰付也、

〔吏徴別錄 上 布衣以上〕堺奉行〇中略　元祿十五年壬午十一月廿八日、再置一員、天野傳四郎富重、與力六騎、同心四十人、御役料七百俵、奈良奉行次席、

〔吏徴 上 布衣以上〕堺奉行一人
老中支配　芙蓉間　諸大夫　堺在住　千石高　御役料現米六百石　御暇、銀三十枚、時服二、羽織、　引越拜借金三百兩

〔憲敎類典 二ノ五 御役〕元文三戊午年三月十五日
堺奉行〇中略
千石ゟ以下之者は、向後千石高御足高被下之、御役料は只今迄之通被下之候、以上、
元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人并御足高御役料定
堺奉行
御役料千五百俵

〔官中秘策 二十五〕諸御役人增高等之分類
一御役料現米六百石　堺奉行一人

〔諸御役代々記 十六〕堺奉行
成瀨隼人正正成 慶長五子年御使番より、同十七子年迄、關原已後、
細井喜三郎勝久 慶長十八丑年十一月廿八日病死、
米津淸右衞門淸勝 御使番より
朝倉藤十郎宣正〇改ニ筑後守〇下略 慶長十八丑年より壹人勤、後御旗奉行ニ成、諸大夫被仰付、

〔東職紀聞〕一堺奉行一人

抑此職始足利氏之代也、室町日記曰、永祿三年云々、京都兩撿斷、投書堺奉行所也、又一書載堺津故事曰、三好存保、十河民部大輔一存之子也、嘗奉三好修理大夫長慶之命而住于堺、聽泉河二州之政、里人相稱云政所殿也、今世指堺廳稱政所、亦云其遺例也、依是當職始足利氏者必矣、又曰、信長使松井宗閑法印掌堺代官也、又曰、天正中、堺津賈人納屋助左衞門、艤賈舶至琉球、文祿三年七月、自呂宋歸也、據代官石田木工頭政澄而獻珍器若干於太閤也、依是則信長秀吉亦置之者明矣、政事錄曰、慶長十六年十二月云々、板倉伊賀守勝重、米津淸右衞門正勝等、終城州之御用而參向駿府、謁神祖也、嘗米津氏與成瀨隼人正、雖奉堺政所、成瀨氏常在駿府爲昵近、故米津氏耳奉行之也、又曰、同十八年五月、配米津氏之下代於阿州、正勝亦罹事故解職、細井喜三郎勝久補後職也、同年十二月細井氏卒也、又曰、同十九年十月、板倉伊賀守奉羽書曰云々、秀賴之兵、取兵器於堺津而收之大坂城中、政所柴山小兵衞、依爲無勢不堪防戰、退堺入岸和田也、集成曰、慶長十九年十二月、柴山小兵衞定好免職、神祖以長谷川左兵衞藤廣被補之也、元寛日記曰、元和三年正月、北見五郎右衞門重勝補之、代長谷川氏也、寛永五年五月、島田越中守代北見氏也、代々記曰、慶長五年關原役以來、成瀨隼人正、米津淸右衞門、細井喜三郎等奉之、同十八年朝倉藤十郎補之、同十九年柴山小兵衞補之、同年長谷川左兵衞自長崎奉行遷補之也、承應元年四月、石河土佐守勝政致仕、嫡子土佐守利政襲父之職、爾來領與力同心也、元祿九年二月、佐久間丹後守（一作主膳正）在職之時、罷之而被使大坂町奉行兼之、同十五年十一月再置之、以天野傳四郎被補之之時、給職料七百苞、爾來連綿至于今也、

〔台德院殿御實紀二十五〕慶長十九年三月五日、芝山小兵衞正親、堺政所命せらる、朝倉藤十郎宣正、去年かりに政所命せられ堺にありしが、正親にかはり歸府すべしとなり、

〔甘露叢五十八〕元祿九年二月二日、御役御免、堺町奉行佐久間丹後守伏見町奉行、右堺伏見兩奉行相止、京大坂ヨリ兼ル、

〔常憲院殿御實紀四十六〕元祿十五年十一月廿八日、駿府町奉行天野傳四郎富重は堺奉行になる、堺は元祿九年停廢ありしが、こたび再置かれ、役料七百俵賜ふ、

〔吏徴附錄郡職〕堺奉行組、與力十人、同心五十人、　元祿十五年壬午十一月廿八日、始置、與力六騎、同心四十人、正德元年辛卯三月十五日、增置與力四騎、同心十人、合與力十騎、同心五十人、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

現米六十石　堺奉行與力

現米十石三人扶持　同　同心

〔常憲院殿御實紀四十六〕元祿十五年十一月廿九日、驛使もて令せらるゝは、中略こたび天野傳四郎富重堺奉行とせられたり、よて彼與力同心は、先年堺より大坂に附せられし輩、こたび堺に附らるれば、與力六騎、同心四十人、堺奉行の所屬へかへすべし、もとも大坂より堺を所管の事は停廢たれば、其心すべしとなり、

〔文昭院殿御實紀九〕正德元年三月十五日、堺奉行桑山甲斐守一慶、任所のいとま下され、請ふまゝに與力四騎、同心五十人を增し屬せらる、

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數

一佐渡奉行二人役高五百石、與力二十騎、同心七十人、

〔吏徴別錄上布衣以上〕佐渡奉行　慶長六年辛丑月日、初置二員、中略　同九年甲辰至十八年癸丑一人、中略　同十八年癸丑月日二人、中略　寬永十二年乙亥四月廿一日至明曆二年丙申十一月四日、御勘定頭ヲ兼帶、中略　明曆二年丙申十一月五日、置定役一員、中略　正德二年壬辰十月三日

二人、○中略天保十四年癸卯六月十五日、中野又兵衞轉役後、一人役在住、

〔德川禁令考三十三地方官吏勤方〕天保十三寅年十二月廿六日

佐渡奉行江奉書

佐渡奉行之儀は、國中爲取締以來壹人役、其地在住に被仰付候間、萬事之儀、格別行屆候樣可致候、尤來夏御暇被下に而可有之旨、大屋圖書江申渡候間、得其意、其方儀は、來夏圖書著之上、交代可有參府候、且又右之通相成候ニ付而は、其地御役宅、手狹等ニ而差支も可有之哉、其段早々取調可被申越候、以上、

十一月廿六日　眞田信濃守　堀田備中守　土井大炊頭　水野越前守

中野又兵衞殿

〔吏徵別錄上布衣以上〕佐渡奉行○中略　弘化三年丙午三月廿四日、二人役となる、中島平四郎、今一人は中川飛驒守

〔東職記聞一〕佐渡奉行二人

交在勤佐州、掌金山以下一切事之職也、領與力三十人同心七十人也、

〔柳營秘鑑二〕遠國御役人常詰并交代之場所

一佐渡奉行　右同斷○隔年交代

〔德川禁令考三十三地方官吏勤方〕文久二戌七月六日

遠國奉行在住被仰付候ニ付當地取扱方之事

周防守殿御渡

覺

松平出雲守○浦賀奉行　小栗豐後守○日光奉行　川勝縫殿助○佐渡奉行

今度御改革被仰出候ニ付、浦賀奉行、日光奉行、佐渡奉行、在住被仰付候間、彼地御用筋之儀、何れも於當地引受取扱候樣可被致候事、

〔明良帶錄後篇〕佐渡奉行千石高御役料千五百俵百人扶持 老支 実 與力三十騎 同心七十人

佐渡一國在町近隣の安否を呈書を以て申上る、國中の公事訟の事に關る、又金山御用、御益筋の事にも關る、御藏奉行立合勘定人等、并隊卒を以て非常に備ふ、海上風波惡時は、御朱印懷中す、

〔京兆府尹記二〕布衣役 佐渡奉行職掌

萬事御勘定奉行の差圖を談じ、〇談じ二字恐有誤 自分のはからひを以て御老中江伺ひ政務を取行ふ、千石高也、

一越後の向ひ國なる島にて、通路を監見す、蝦夷并北狄あやしき船あらんかと、平日遠目鏡を以て是を見せしめ、專ら非常事を守る、是御役の第一也、

一當所金山を奉行して、堀出す所の箔石をばとろかし、砂金を吹、こがねとし、江府へ遣す、是第二の役也、

一當一ヶ國、并離島四ヶ所を支配す、公事裁許仕置向等取計ふ、これ第三也、

一當國并四島御年貢取立る儀を代官す、是御役の第四也、〇中略

許曰、御役仰付られ、彼地初入の節、先佐渡一ヶ國の四方を順見する事常例也、北海の習ひにて、波濤甚荒くして、中々船中に座し四方順見する事あたはず、彼船に丸さ差渡し五六寸、深さ八寸計りの桶ありて、是をへど桶といふ由、〇中略 有時宮崎忠右衛門なる人奉行の職を蒙り、彼順見の時、此桶を出し、云か〳〵の由いふ、大にいかつて云樣、泰山ゟ重く又滄海ゟ深き君命を蒙り、いかで其任國を順見するに吐を催すなどゝいふ事不可有、是迄の奉行は兎も角も我は左樣の事あるべからず〇中略 と敎喩す、船頭水主は、かたはらいたき申條かな、中々

資格俸祿

船中辛抱成べからすと私語しが、忠右衛門は體を動かさず、能々四方を順見せし由、〇下略

〔佐渡志官員二〕奉行

延享四年丁卯、奥州伊達郡銀山、及ビ桑折、藤田、貝田、内谷地、南半田、北半田、石母田、鳥取、山崎、小坂、泉田、總テ十二村、一萬二千石ノ地カヲ掌ルベキコトウケタマハリ、年ゴトニ下司十餘人ヲカシコニ遣ハセシガ、寛延二年己巳、其コトヲトヾメラレキ、其後コノ國ニ御代官ヲ置レテ、地方ヲ分タレシカド、幾程ナク古キニ復サレシ、

〔京兆府尹記二〕佐渡奉行職掌

此任を蒙るは、御勘定吟味役、評定所留役、又は元方御納戸頭、拂方御納戸頭、或は布衣御代官等ゟ被仰付也、轉役はいろ〳〵有之、一決ならずといへども、多分御勘定吟味役等ヘ暫く再役して、無程御勘定奉行被仰付、面々もある也、尤兩人にて壹人ヅヽ、隔年交代にて相勤るなり、

〔吏徴上布衣以上〕佐渡奉行一人　老中支配　芙蓉間　千石高　御役料千五百俵　御役扶持百人扶持　御暇金十枚、時服貳、羽織、

〔有章院殿御實紀二〕正德三年正月十五日、佐渡奉行河野勘右衛門通重、神保新五左衛門長治に、今より後は官料千五百俵づゝ給はり、今まで下されたる月俸口米は停らるべしと仰下さる、

〔佐渡志官員二〕奉行

河野勘右衛門通重、神保新五左衛門長治、其職ニ充ラレシヨリ、年俸各千五百苞ヲ賜ハレリ、コレヨリ先ハ、俸米貳百人扶持、或ハ五百人扶持ヲ賜ハリタルモアリテ均シカラズ、其始リモマタ詳ナラネバ、本文ニハシルサズ、

〔有德院殿御實紀四十四〕元文元年八月十九日、佐渡奉行に月俸百口増給せらる、これ任所に赴く時、めしぐする從者の數ましたるをもてなり、

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三戊午年三月十五日

佐渡奉行〇中略

千石ゟ以下之者は、向後千石高御足高被下之、御役料は只今迄之通り被下之候、以上、

元文三戊午年三月廿日

一遠國御役人井御足高御役料定

五百石高　御役料千五百俵　佐渡奉行

役所設

〔吹塵録三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高ニ不拘、今度御改正別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

一金三千兩　佐渡奉行

但高ニ不拘被下

〔佐渡志二官員〕奉行

慶長六年辛丑、關東ノ御料ニ併セラレシヨリ、〇中略河原田ノ古城ヲ修シテ官廳トナシ、又鶴子山ノ麓ニモ官舍ヲ作リテ、カハルガハル居レリ、〇中略九年甲辰ノ春、官廳ヲ相川ニ移シ、河原田ノ城鶴子ノ山ニモ、尙下司ヲ分チ居ラシム、後寛永廿年、河原田ノ城ヲ毀ツ、

〔佐渡年代記拔書三〕去々年〇慶長六年ゟ相川銀山始りて、〇中略其後當卯年〇慶長八年ゟ、中の臺野田千刈といふ田地を潰し、人家を建連ね、町割を定め、夫より相川を府中と定め、相川御陣屋の御修復始る、今の御役所の地也、

任免

〔佐渡志二官員〕奉行

慶長六年辛丑、關東ノ御料ニ併セラレシヨリ、河村彥左衞門吉久、田中清六、二人ヲシテ此國ヲ治

メシメラル、吉久ハ前ノ年庚子ノ九月、一國ノ撿地ヲセシ人ナリ、又清六ハ、此年始テ關東ヨリ下サレシトイヘリ、其後重ネテ吉田佐太郎、中川主税ヲ加ヘラレテ、總テ四人、〇中略同ジキ八年癸卯、此人々罪カウブル事アリ、大久保石見守長安、仰ヲ受テコレニ代ル、〇中略同ジキ十八年癸丑マデハ、長安一人ニテ國政ヲ總ベタリシガ、此年四月其身死シ家滅ビテ、田邊十郎左衛門宗政、間宮新左衛門直元其職ニ代リシヨリ、二十餘年ノ程ハ二員ニ定メラレタレド、此間一員闕テ、年ヲ越テ補ハレザリシ事モアリ、又御目付ヲ添ラレシ年モアリケリ、寛永十二年乙亥、伊丹播磨守康勝、御勘定頭ノ職ニアリテ此國ヲ兼掌リシヨリ、正德二年壬辰マデ七十八年ノホドハ、一員ニシテ國務ヲ行ヘリ、此年フタヽビ二員トナサレテ、河野勘右衛門道重、神保新五左衛門長治、其職ニ充ラレシヨリ、年俸各千五百俵ヲ賜ハレリ、

〔東職記聞 一〕佐渡奉行二人

代々記曰、上杉氏自越後州至移會津而并領佐州、使其臣河村彥右衛門與賈人田中清三郎掌之、慶長六年至減封沒收爲御領國、始置此職、以吉田佐太郎、小宮山民部兩人被令掌之也、寛永十二年五月、伊丹播磨守補之後、遷勘定奉行尙帶之、於是罷之、明曆二年十一月再置之、以御手洗(是訓美多耳井)五郎兵衛(一本作四(四ノ下恐脫郎字)兵衛)被補之也、元祿三年萩原彥次郎(後近江守)補之、同九年四月、萩原氏遷勘定奉行尙帶之、於是又罷之、正德二年九月、萩原氏解職、同年十月又置之、以河野勘右衛門、神保新五左衛門兩人被補之、爾來二人連綿至于今也、案代々記、當職之始頗髣髴、故記其略以待識者也、萬姓家譜曰、大坂役之後、中澤主税補之、又曰、夏目市右衛門惟明、慶長五年信州上田役、從台德院殿而奉行刈田之事、後年補之、寛永二年、給增地領二千五百石、同四年七月卒佐州也、集成曰、慶長九年八月、大久保石見守長安、至伏見而言佐州之山岳出金銀倍往昔之狀也、同十七年云々、下姦猾大鳥逸平於獄云云、初逸平在佐州、爲大久保長保之家奴也、恰悧俠勇、巧武伎也、其目代大久保信濃、擢之奴隸中、爲小

臣云也、同十八年四月大久保長安卒云々、慶長五年以來、長安奉台命掌石豆佐三州金山事也、依是則以大久保氏爲權輿乎、代々記載中澤氏脫年月、以鎭目氏元和三年補之云也、記大久保氏又不記年月、此餘亦多不記年月、是予(〇小林无逸)所以不求委記也、

〔吏徵(上御目見以上)〕佐渡奉行支配組頭二人　奉行支配　佐州在住　持高御役料三百俵　御役金百兩　御暇金一枚、時服二、　引越料七十兩

〔惇信院殿御實紀二十七〕寶曆八年三月二日、佐渡奉行の隷下に組頭二人をおかる、是あらたに設けらるゝ職なり、勘定青木逵九郎長貴、作事下奉行野村忠助有直を命せられ、各其職務奉はる間、三百俵の祿給はり、別に年ごとに金百兩を下され、座班は勘定組頭の下、代官の上に着べしとなり、

〔佐渡志(二官員)〕組頭

寶曆八年戊寅三月、初テ佐渡奉行支配組頭二人ヲ置レ、年ゴトニ俸米三百苞、俸金百兩ヲ賜リテ、府廳ノ東ニ各官舍アリ、後明和七年庚寅ヨリ、御藏ノ事ヲ兼司ラシメラル、

〔天保十一年武鑑〕佐渡御奉行

同組頭(御役料三百俵ヅヽ御役金百兩ヅヽ)　山本丈右衛門、河島才右衛門、

〔佐渡志(二官員)〕奉行

奉行ニ從事スルモノ、組頭ノ下ニ廣間役アリ、(與力格)次ヲ定役トイヒ、(與力格ニ準ズ)次ヲ並役トイフ、各職務ヲワカテリ、又次ヲ使役トイフ、其餘同心、牢守、水主アリ、スベテ貮百貮拾八人ノ外、其嗣子ヲモ仕ヘ從ヒテ三百人ニ餘リ、其祿ハ九拾五苞ヨリ下五石ニ至レリ、廣間役ノ中二人、江戸ヨリ進退スルコト、寶曆八年戊寅ニ始マリ、其餘ハ皆土著ニシテ、多クハ慶長元和ノコロヨリ家ヲ傳フルモノナリ、

〔明良帶錄外篇〕佐州廣間番持高持扶持、役金三十兩、外在方掛別段八兩、但地役人ニテ勤者ハ、役扶持二十人扶持、　頭支

昔は御金藏同心より昇る、當時は小普請より筆算藝術ある者、または六尺等より出る、多くは表六尺、湯呑所より至る、又格下り勤の者有ㇾ之、御役替にても出役多し、伊賀の者などより至る事あり、總て人數不ㇾ定、

〔東徼御目見以下〕佐州廣間役八人

持高　江戸より被ㇾ遣候兩人、役金三十五兩、引越料金五十兩、　地役人にて相勤候者、役扶持二十人扶持、　在方懸、役金八兩、　役上下、御抱場、　寶曆八年戊寅三月廿四日始置　佐州在住

〔東徼附錄郡職〕廣間役○佐渡七人、同助一人、役扶持五人扶持、金十兩、同當分助二人、役金十兩、

〔天明集成絲綸錄三十九〕明和九辰年九月

御勘定奉行江

御普請役　大河内庄右衞門

右佐渡奉行支配、與力格廣間役ニ可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候、勤候內、役金三拾五兩被ㇾ下候、且又此度爲ㇾ引越料ㇾ金五拾兩被ㇾ下候間、右之趣可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候、尤佐渡奉行可ㇾ被ㇾ談候、

〔東徼附錄郡職〕佐渡奉行組、與力三十騎、同心七十人、　定役八十七人、持高、　並役百七十五人、同斷、同心二十人、二十俵二人扶持、　水主三十人、一人扶持、一升扶持、

〔佐渡風土記中〕大久保石見守殿由緒之事

去年○慶長八年依ㇾ台命、大久保石見守○長安當國奉行職を蒙れり、夫迄は陣屋鶴子に有つる所、同年、先達而宗岡彌右衞門後佐渡を渡し、陣屋を相川江移す事になれり、石州は今年渡海有、山林を伐、田畑を埋平地とし、陣屋を始、それ〳〵に構を立たり、銀山猶々盛たれば、銀山の掟を定め、由緒有牢人を他國ゟ招き抱ㇾ之、其々の役人となしぬ、是當國役人之根元なり、又石州家來之內、地方銀山と分

け、兼役を被申付ける、

地方、大久保山城、　銀山、宗岡佐渡、

〔佐渡年代記拔書三〕今年〇慶長八年大久保石見守被仰付、支配之內、年々入國、其外は家老を以留守居として在國あらしめらるゝといふ、當年は入國なし、宗岡彌右衞門を被越といふ、則家老左之通り、

家老

大久保山城　早々代々在國、（中略）山城へ、慶長九辰、石見守殿同道トモ云、

小宮山式部

長谷川傳右衞門　長谷川も慶長十に來り、同十四迄五年在國と云ふ、

宗岡佐渡　宗岡は慶長八に來り、同十當國にて卒す、

吉田出雲　吉田は慶長十巳年に來、銀山支配と云、

右之外御直參御徒衆

本多又十郎

小川半左衞門

目付役

長谷川羽右衞門

鏡　孟左衞門

原　土佐

小木古城預ヶ被置候由

〔吏徵附錄廢職〕佐州御藏奉行一人　御勘定奉行支配　持高　御役料現米四十石　御役金七十兩　寶曆十年庚辰十一月廿四日、始置一人、江戸御金奉行次席、　引越料金七十兩　明和七年庚

新潟奉行

寅五月九日歿、

〔浚明院殿御實紀 二〕寶暦十年十一月廿四日、勘定中山源藏利及、佐渡國の藏奉行を命せらる、これ新にもうけられし職なり、

〔佐渡志 官員 二〕御藏奉行

寶暦十一年辛巳ヨリ明和七年庚寅迄、十年ノ間此職ヲ置レ、コトニ俸米四拾石、俸金七十兩ヲ賜ハリ、御勘定奉行ニ屬シテ、官廩府庫ノ出納ヲ掌レリ、辛巳中山源藏來リ、明和元年甲申八月朔日、佐渡ニ在テ死ス、淨土宗專光寺ニ葬ル、谷田又四郎代リテ、明和七年庚寅江戸ニ召歸サル、是ヨリ後佐渡奉行支配組頭ノ兼ル事ニナレリ、

初メ此職ヲ置レシ辛巳ノ年、御勘定野田彌一兵衛ヲ添ラレテ其職事ヲ監セシメラル、之ヲ立會勘定トイヘリ、翌壬午、谷田又四郎、癸未川合清右衛門、明和元年甲申松坂源左衛門、翌ル乙酉ニイタリ、總テ五年ニシテコレヲ停メラレキ、此國ノ官員ニアラザレバ本文ニ記サズ、

〔吏徵 上 布衣以上〕新潟奉行一人　老中支配　芙蓉間　新潟在住　千石高　御役料千俵　御暇金五枚、時服二、羽織、　引越拜借金三百兩

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕新潟奉行　天保十四年癸卯六月十七日、始置二一員一、川村清兵衛、芙蓉間、佐渡奉行次席、千石高、御役料千俵、

〔泰平年表 二編 六〕嘉永二年十二月廿七日、新潟奉行川村清兵衛、諸大夫被二仰付一、

〔吹塵錄 三十一 徳川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不レ被レ下、是迄之場所高に不レ拘、今度御改正、別紙之通御役金被レ下候旨被二仰出一之、

御役金被レ下高之覺

屬僚

一金貳千兩　新潟奉行

但高ニ不拘被下

〔吏徵御目見以上〕新潟奉行支配組頭。。二人　奉行支配　新潟在住　持高・御役料貳百俵　御役金七十兩　御暇金壹枚、時服貳、　引越料金五十兩　天保十四年癸卯九月五日始置

〔嘉永三年武鑑〕新潟御奉行　同組頭

百五十俵高、御役料二百俵、御役金八十兩ヅヽ、　今川要作、三橋貫之進、

〔吏徵附錄郡職〕新潟奉行支配廣。間。役。六人引越料三十兩　百俵高　役扶持十人扶持　御手當金七兩　天保十四年癸卯九月十九日始置同下

同定。役。十七人引越料二十兩　五十俵高　役扶持十人扶持　御手當金七兩　嘉永二酉年五月ヨリ追々ニ出來、定。役。見。習。六人、御扶持方五人扶持、御手當金三兩二分、

同並。役。二十七人引越料十五兩　貳拾俵貳人扶持高　役扶持三人扶持　御手當金拾壹兩　年月右同斷、並。役。見。習。六人、御。役。扶。持。方貳人扶持、御手當金三兩二分、

同足。輕。廿人引越料三兩　四石貳斗貳人扶持

同水。主。頭。取。十人　同斷

同足。留。水。主。三十人　壹人扶持

同手。附。出。役。江戸懸貳人　役扶持三人扶持、御手當金五兩、

日光奉行職員職掌

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數

一日光奉行二人役料六百俵

○按ズルニ、常憲院殿御實紀ニハ、當職ヲ日光山守護職トシ、延寶六年江戸鑑ニハ、日光御宮守トシ、貞享元祿等ノ武鑑ニハ、日光御宮番ト記シ、元祿十三年ニ新ニ日光奉行ヲ置キシ後モ、寶

永三年武鑑ノ如キハ、尙ホ舊稱ニ因リテ、日光御宮御番ト記セリ、下文補任ノ條ヲ併セ看ルベシ、

〔東職紀聞〕一日光奉行二人

交在勤日光山、掌神廟之祭祀以下一切事之職也、

〔柳營秘鑑〕二遠國御役人常詰并交代之場所

一日光奉行　半年代リ

〔文久紀事〕六文久二年七月五日

日光奉行　小倉但馬守

今度御改革被仰出候ニ付、以來在住被仰付候、萬事格別入念可相勤旨、被仰出候、

〔德川禁令考〕三十三地方官吏勤方文久二戌七月六日

遠國奉行在住被仰付候ニ付當地取扱方之事

周防守殿御渡

覺

松平出雲守〇浦賀奉行　小栗豐後守〇日光奉行　川勝縫殿助〇佐渡奉行

今度御改革被仰出候ニ付、浦賀奉行、日光奉行、佐渡奉行、在住被仰出候間、彼地御用筋之儀、何れも於當地引受取扱候樣可被致候事、

〔明良帶錄〕後篇日光奉行二千石高、御役料五百俵、芙老支　支配吟味役六人、同心三十六人

日光御宮向一山の事に關る、尤公事訟も土地の事は聞りきく、御宮御普請出來後、見分の節立合、其外御法會御祭禮等は固より、御社參之節、御出迎場にて御目見平伏、御名代の節も會釋有り、非常の手當あるべし、

位階俸祿

〔京兆府尹記　二〕日光奉行職掌

一東照宮樣御宮警衛第一の御役也、

一下野上野兩國を支配す、尤日光町中の政務を取行ふ、是第二の御役なり、

一最寄の諸侯變ある時は、先番所において、近邊の大名へ御教書を達し、其急を防ぐ、第三の御役也、

〔京兆府尹記　二〕日光奉行職掌

諸事大坂奉行にひとし、從五位下朝散大夫にて、芙蓉の間詰被仰付、〇中略此任を蒙るは、十人御目附、御使番、西丸御目付、小十人頭、御徒士頭、御先手衆々昇進す、轉役は御勘定奉行、御普請奉行、御作事奉行等也、稀には大御目附仰付らるゝも有之、

〔吏徵　上布衣以上〕日光奉行二人　老中支配　芙蓉間　諸大夫　貳千石高　御役料五百俵　御暇金五枚、時服貳、羽織、　引越拜借金貳百兩

〔教令類纂　二集六十五〕享保十九甲寅年正月

日光奉行

向後二千石以下之者は、二千石高に御足高被下、尤只今迄之通、御役料も五百俵被下之、

右之通相極候間、可被得其意候、

〔吏徵別錄　上布衣以上〕日光奉行〇中略　元文元年丙辰五月三日、御役料於當地被下、

〔吹塵錄　三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高ニ不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨、被仰出之、

御役金被下高之覺

任免

日光奉行

一金千五百兩

　但高ニ不レ拘被レ下

〔諸御役代々記十六〕日光奉行

　梶金平（改二左兵衛佐一、後督ト改、）

大猷院様（○徳川家光）御代、承應元辰七月廿一日、二百石御加增、御小納戸より始而日光定番被二仰付一、同二巳四月朔日、從五位下に任、左兵衛佐と改、其後四品被レ任、元祿之始、於二日光一卒す、右左兵衛督死去後、元祿十一丑六月四日、御目付ゟ兩人に而、三十日宛代相勤、其後兩人之内、御使番より壹人、同十三辰八月廿八日、新規日光奉行被二仰付一、半年代り、寛政六寅年より壹年代り、

〔常憲院殿御實紀七〕天和三年五月二日、日光山の守護職梶左兵衛定良、從四位下にのぼり、千石加秩せられ二千石給ふ、これは大猷院殿（○徳川家光）の近臣なりしが、御葬の時より山にのぼり他にうつらず、三十餘年の間、如在の禮おこたらず給仕し奉る勞を思召て、かく特恩を下し給ふとぞ聞えし、

○按ズルニ、延寶、貞享、元祿等ノ武鑑ニハ、梶左兵衛ヲ日光御宮番ト記セリ、

〔諸御役代々記十六〕日光奉行

　井上太左衛門正清（改二周防守一）

元祿十三辰八月廿八日、御目付より諸大夫、御役料五百俵被レ下、寶永二酉八月廿七日、病氣依レ願御免、

　彥坂九兵衛重久（改二壹岐守一、○以下三十六人略）

寶永二酉九月朔日、新番頭より、同六丑八月廿六日、病氣依レ願御免、

同

　稲葉大學正冬（改二河内守一、又下野守、○正冬、常憲院御實紀作二正能一、）

元祿十三辰八月廿八日、御使番より諸大夫、正德三巳二月廿九日、御小性番組頭江、

　長崎半左衛門元勝（改二伊豆守一、○以下三十六人略）

正德三巳二月廿九日、御目付より、同五未年十二月廿八日、仙洞附江、

補儀

〔常憲院殿御實紀四十二〕元祿十三年八月廿八日、けふ目付井上太左衛門正清、使番稻葉大學正能日光の奉行を命せられ、各爵ゆりて、太左衛門は周防守、大學は河内守とあらたむ、是新置の職なり、

〔寶永三年武鑑〕日光御宮御番
四千石　逢坂壹岐守　二千石　稻葉下野守

〔吏徴御目見以上〕日光奉行支配組頭二人　奉行支配　日光在住　三百俵高　御役扶持二十人扶持　御暇金壹枚、時服貳、　引越料金五十兩

〔吏徴別錄布衣以下御目見以上〕日光奉行支配組頭　寛政三年辛亥二月廿一日、始置、一員、三百俵高、御役扶持二十人扶持、　同四年壬子正月廿七日兩人役

〔文恭院殿御實紀十二〕寛政四年正月廿七日、小普請方改役木曾治部右衛門萬年、日光奉行支配與頭となる、

〔嘉永三年武鑑〕日光御奉行　同支配組頭、三百俵高、
日光住居　壽田又三郎
日光住居　中井太左衛門
御勘定格吟味役、日光住居、　野澤豊次郎

〔吏徴御目見以下〕日光奉行支配吟味役七人　奉行支配　百俵高　役扶持五人扶持、役金拾兩、御暇金拾五兩略○中　燒火間、上下役、

〔吏徴別錄御目見以下〕日光奉行支配吟味役　寛政三年辛亥二月廿一日始置　同七年乙卯四月□日百俵高　同十年戊午四月九日、小野善助、御勘定格、役扶持十人扶持、

〔吏徴附錄罷職〕日光御殿番四人

〔寳暦集成絲綸錄二十五〕寳暦五亥年四月

御勘定奉行江

日光御殿番

米拾俵宛　高木善九郞　野澤彥兵衞　小野善助　山口忠左衞門〇中略

右之者共、去年日光火事之節、居宅不ㇾ殘致二燒失一候ニ付、願之通御救米被ㇾ下候間、被ㇾ得二其意一日光奉行可ㇾ被ㇾ談候、

〔天明集成絲綸錄三十八〕明和四亥年四月

御勘定奉行江

日光御殿番

山口忠左衞門　野澤勘十郞　高木源右衞門　小野善助

右年來無二懈怠一相勤、去年ゟ臨時廻り場所等、別而骨折、小給に而困窮におよび候之由ニ付、以來役扶持五人扶持宛被ㇾ下候間、可ㇾ被ㇾ得二其意一候、

四月

〔大猷院殿御實紀七十一〕慶安元年七月廿九日、日光御殿番四人、同心を置かる、

〔吏徵附錄郡職〕日光奉行組、同心三十六人、

〔大概順〕御目見以下諸國地役之部

十五俵二人扶持　日光御普請方　同心

〔日光山志五〕御番所　御厩に相雙ぶ、銅葺總赤塗、日光組頭支配の同心勤番す、里人等此御番所を赤番所と唱ふ、二間に三間なり、

〔憲教類典二ノ五御役〕寛延四辛未二月

御勘定奉行江

日光御殿番組同心　小頭四人

三人扶持づゝ

二人扶持づゝ　　平同心三十二人

右之通、向後御扶持方被下之間、可被得其意候、尤日光奉行可被談候、

二月

〔寶曆集成絲綸錄二十五〕寶曆五亥年四月

御勘定奉行江　　同(日光御殿番)組同心

米貳俵宛　　小頭四人

同壹俵宛　　平同心三十壹人

右之者共、去年日光火事之節、居宅不殘致燒失候ニ付、願之通御救米被下候間、被得其意、日光奉行可被談候、

〔吏徵附錄廢職〕下田奉行一人○中略　元和二年丙辰五月八日、始置一員、今村彥兵衛重長　元祿九年丙子四月十一日二人役山口勘兵衛直之、陸山數馬賴廣、御役料各三百俵、數馬御免、此後一人役、　同十五年壬午十一月廿八日一人役○中略　同年○享保五年十二月廿五日廢當職、　天保十三年壬寅十二月廿四日再置一人小笠原加賀守　弘化元年甲辰五月廿四日再廢當職、　嘉永六年甲寅三月廿六日再置一人伊澤美作守

〔吏徵別錄上布衣以上〕浦賀奉行　享保五年庚子十二月廿一日、始置一員、堀隱岐守○中略　此時下田御役所浦賀へ引移さる、隱岐守は此迄の下田奉行也、

〔柳營年表秘錄上秀忠〕元和二丙辰五八、伊豆下田奉行一人、今村彥兵衛、

〔東職記聞一〕浦賀奉行一人

集成曰○中略　寬永四年五月、正長○今村傳四郞之父重長卒、正長遊(ヘヤズミ)倅中所給采地與父之遺領并領三千六百石、而守衛豆州下田之海口也、依是則重長既奉當職○下田奉行乎、先是當職之號無所見、則始今村氏乎、慶延略記曰、元和二年五月、今村彥兵衛補下田奉行、又曰、寬永九年十二月、今村傳四郞補

之也、承應二年六月、石野八兵衞正國補之、寛文四年二月、以柿崎外浦之御領地四十石餘〈千十疑誤〉與
與力五人被屬石野氏也、代々記曰、元祿三年八月、高林彌一郎代服部久右衞門、同九年、高林氏辭
職、同年四月、山口勘兵衞代之之時增一人、以蔭山數馬被補之、同十五年十一月、將復舊免蔭山氏、
爾來一人也、

○按ズルニ、本書ハ浦賀奉行ヲ以テ、下田奉行ノ後ヲ襲ヘルモノト爲セルヲ以テ、浦賀奉行ノ
條下ニ於テ、下田奉行ノ沿革ヲモ記シタルナリ、

〔常憲院殿御實紀 三十三〕元祿九年四月十一日、歩行頭山口勘兵衞直之、小十人頭蔭山數馬親廣は、
共に下田奉行になる、この役これより一員をまさる、

〔常憲院殿御實紀 四十六〕元祿十五年十一月廿八日、奈良奉行横山左門元知、下田奉行蔭山數馬親
廣、ともに病免す、これより奈良下田おの〳〵一員に定めらる、

〔常憲院殿御實紀 四十六〕元祿十五年十一月廿九日、驛使をもて令せらるゝは、〇中略下田奉行へは、
今よりのち一員にて勤め、常は任所に住し、三四年へて參府し、四五月在府すべしとなり、

〔諸御役代々記 十六〕下田奉行　千石高、御役料千俵、芙蓉之間、天保十三年寅十二月、初而被仰付、

天保十三寅十二月廿四日、浦賀奉行より、
同十四卯閏九月廿八日、御小性組番頭　小笠原加賀守

天保十四卯閏九月廿八日、御書院番頭より、同次席、同十五辰二月八日、浦賀奉行　土岐丹波守

右丹波守跡御役不被仰付相止

〔吏徵附錄 殿職〕下田奉行一人　老中支配　千石高　御役料千俵　浦賀奉行次席　芙蓉間　御
暇時服三、羽織、、引越拜借金三百兩　役所御備金五百兩

〔常憲院殿御實紀 四十八〕元祿十六年七月廿五日、下田奉行山口勘兵衞直之、官宅修理料銀三十貫
目給ふ、

〔有德院殿御實紀十〕享保五年二月廿一日、寄合堀隱岐守利雄、伊豆の國下田奉行を命せらる、さきざきより、この職の人は躑躅の間に候せしを、こたびあらためて芙蓉の間の椽に候せしめ、座班は佐渡奉行の次たるべしと命せらる、

〔嘉永明治年間錄三〕安政元年三月廿四日、下田奉行ノ等級ヲ進メ、幷歲俸ヲ增ス、
下田奉行へ、向後二千石高、御役料千俵下され、諸大夫場に仰付られ、席順の儀は、浦賀奉行次と可相心得事、

〔温恭院實紀九〕安政三年三月十六日御役替
下田奉行支配調役
小十人宮崎次郎大夫組　宮田文吾
同改役
御勘定吟味方改役並　入江新八郎
同並
同出役　菊間平五郎

〔吏徵御目見以上〕下田奉行支配組頭
同上　○高百五十俵、御役料貳百俵、御役金百兩、引越料五十兩、

〔安政五年武鑑〕下田御奉行
支配組頭　三百俵高　御役料二百俵　御役金百兩
三十俵三人フチ、若菜三男三郎、七十俵五人フチ、松村忠四郎、伊佐新次郞、

〔安政六年武鑑〕下田奉行調役
百五十俵高　御役扶持十人扶持、御役金七十兩、　脇屋卯三郎、宮田文吉、相原次郎太郎、　同並、百俵高、　御役扶持七人扶持、御役金五十兩、　渡邊重三郎○以下八人略

〔吏徵附錄慶應〕下田奉行組與力十人　現米八十石高　引越料金拾貳兩　拜借金廿五兩　吟味懸三人　御手當金三兩　同見習一人　御手當銀二枚　地方懸二人、御手當金三兩、　同見習一

人、御手當銀二枚、寛文四年甲辰三月朔日始置、（五騎、其後中絶、天保十四年癸卯月日再置、弘化元年甲辰月日再廢、）

下田奉行組。同。心。五十人　現米十石三人扶持　御手當金七兩　引越料金六兩、拜借金六兩、組。頭。五人、三人扶持、同。見。習。一人扶持　定。廻。役六人、御手當金五百疋、地。方。懸。三人、御手當金二兩、廣。間。役。書。役。兼帶六人、御手當金同斷、寛文四年甲辰三月朔日始置

下田奉行足。輕。十五人　四石貳斗二人扶持高　重立候者二人、御手當金三兩、天保十四年癸卯月日始置　弘化元年甲辰月日廢

下田奉行水。主。頭。取。二十人　四石二斗二人扶持高　置廢同斷

下田奉行足。留。水。主。四十人　一人扶持　置廢同斷

羽田奉行

〔吏徵附錄廢職〕羽田奉行一人　老中支配　千石高　御役料五百俵　下田奉行次席　芙蓉間　御暇時服三、羽織、引越拜借金貳百兩　役所御備金三百兩　天保十三壬寅十二月廿四日、始置、一人、（田中一郎右衞門）　弘化元年甲辰五月廿四日廢

〔諸御役代々記十六〕羽田奉行（千石高、御役料五百俵、芙蓉之間、）　天保十三寅十二月廿四日、始而被仰付、

（天保十三寅十二月廿四日、同十五辰弘化元年五月廿四日浦賀奉行ニ、）田中市郎右衞門

右市郎右衞門跡御役不被仰付相止

屬僚

〔吏徵附錄廢職〕羽田奉行支配組。頭。一人　百五十俵高　役扶持十五人扶持　御手當金拾兩　富士見御寶藏番次席　躑躅間、上下役、天保十四年癸卯月日、始置、一人、（窪田次郎右衞門）

〔泰平年表三編四〕天保十四年三月十五日、窪田治部右衞門、羽根田奉行組頭新規被仰付、（席之儀ハ御徒頭與）上之

〔吏徵附錄廢職〕羽田奉行組。與。力。三人　百俵十人扶持高　御手當金七兩

羽田奉行組。與。力。勤。方。六人　五十俵拾人扶持高　御手當金七兩

羽田奉行組與力（見習、勤方見習）四人　拾人扶持高

羽田奉行組同心與頭十人　貳拾俵貳人扶持高　役扶持三人扶持　勤金拾壹兩

羽田奉行組同心四十八人　貳拾俵二人扶持高　勤金八兩　外假抱入貳人、二人扶持、勤金七兩、

羽田奉行足輕十五人　四石二斗二人扶持高

羽田奉行水主頭取廿人　四石二斗二人扶持高

羽田奉行足留水主四十人　一人扶持

大津町奉行

〔吏徵附錄（廢職）〕大津町奉行（後一人）　芙蓉間　兩人交代　同心三十人（與力十キ同心五十人）

〔柳營秘鑑　四〕遠國御役人員數

一大津町奉行（近來京都町奉行より兼帶、同心三十人、）

〔東職記聞　二〕闕職

大津町奉行（相傳云、往古有二此職一、後罷レ之、被レ令レ帶二京都町奉行一也、然正史不レ載二當職一、則似レ難レ信也、）

〔柳營秘鑑　二〕遠國御役人常詰幷交代之場所

一大津町奉行　右同斷（○妻子引越之常役、五六年一度爲二御目見一出府、暫時在二江戸一、）

〔寶永三年武鑑〕大津町御奉行（同心卅人）

千百石　雨宮庄九郎

〇按ズルニ、大津ハ享保七年ヨリ京都町奉行ノ支配トナレリ、

大津藏奉行

〔吏徵附錄（廢職）〕大津御藏衆二人

〔延寶六年江戸鑑〕大津御藏衆

百五十石　貴志九右衞門

百石　福島八右衞門

清水奉行

〔常憲院殿御實紀 三十九〕元祿十二年四月廿二日、けふ令せらるゝは、大津官廩、今より後米貯蓄せらるゝのみなれば、廩數を減じ、代官の所管たらしめ、二條の廩數を益るれば、大津藏奉行三人ともに停廢せられ、其三人の中にて、長坂新右衞門基隆は二條の藏奉行に加へられ、之ばらく四人にてつとむべし、布施庄左衞門某、藤沼猪之助勝由は、其職をゆるさるべし、○中略となり、

〔常憲院殿御實紀 四十〕元祿十二年九月十六日、大津藏奉行二人小普請に入らる、これより欠職となる、

○按ズルニ、此後寶永二年ノ武鑑ニ、大津御藏奉布施庄左衞門、藤沼猪之介ノ名見エタレバ、再ビ置キシナリ、然ルニ享保ノ比、復タ此職ヲ廢セシニヤ、正德以後ノ武鑑ニハ其名見エズ、

〔吏徵附錄 郡職〕大津御藏手代一人　三人扶持

大津御藏番三人　現米三石五斗一人扶持高

〔吏徵附錄 廢職〕清水奉行 又清水御藏奉行、又清水御船手、 元和七年辛酉三月廿日、始置二一人一、 元祿九年丙子二月廿一日廢、駿府町奉行支配、

〔東職記聞 二〕闕職

清水船手 元和七年、細井金兵衞補レ之、元祿九年罷レ之、爾來被レ令二駿府町奉行帶一レ之也、

〔東武實錄 八〕元和七年、是年○中略 細井金兵衞勝吉、駿州清水御船手ノ頭トナリ、水主五十人ヲ預ケラル、○又見二台德院殿御實紀一

〔貞享三年武鑑〕清水御船手

千五百石　渡邊孫介

〔常憲院殿御實紀 三十三〕元祿九年二月二十二日、清水、三崎、走水三奉行を停廢あり、清水は其府の町奉行の所屬とし、○下略

〔吏徵附錄 廢職〕荒井奉行二人　元和五年〇五年、元寛日記、諸御役代々記、並作二七年一、己未三月九日、始置二一人一、服部權大夫、〇中略
寛永十九年壬午月日、一人役、　明曆三年丁酉十月廿三日より兩人、佐橋甚兵衛、土屋忠次郎、〇中略
寛文六年丙午五月十一日、一人役、本多彥八郞、　元祿九年丙子二月十四日二人、佐野與八郞、成瀨瀧右衛門、〇中略
同十五年壬午閏八月十九日廢、

〔元寛日記 二〕元和七年三月九日、服部權大夫ニ、遠州荒井關所御番被二仰付一、與力十騎、同心四十人被レ附レ之、

〔遠江風土記傳 濱名郡 一〕新井關
古老曰、慶長五庚子年、始置二新井關一、令下江間與左衛門爲二戌役一、〇中略　元祿九年、成瀨瀧右衛門、佐野與八、移二居於新井中町一、移二關於藤十郞山一、移二町家於金山一、舊藤十郞山者、今之關所也、　同十年新關造營、

〔東職記聞 二〕闕職
荒井奉行 集成曰、永祿十一年、引間之家士江馬安藝、怨二其弟加賀之不一レ謀、已而通二神祖一而殺レ之、後年加賀之子與惣右衛門訴二之神祖一、且請レ仕、於レ是給二采地千石一、而被レ命二荒井勤番一也、代々記曰、往古江馬氏奉レ之、元和七年、服部權大夫補レ之、領二與力十人同心三十人一也、元祿九年增二一人一、同十年久世大和守廣之自二龜山一移二吉田一、(三河)同十五年、罷二當職一而被レ令三久世廣之守二衛之一、爾來吉田城主掌レ之也、

〔常憲院殿御實紀 三十三〕元祿九年二月十四日、使番成瀨瀧右衛門重章、船手頭佐野與八郎政信は、ともに荒井奉行になる、これより山田荒井ともに奉行二員に定らる、

〔常憲院殿御實紀 四十六〕元祿十五年閏八月十九日、こたび荒井關番を久世出雲守重之に命せらるゝにより、今までの奉行を停廢あり、所屬の與力同心は、府の町奉行に屬せしめらる、

〔大猷院殿御實紀 五十三〕寛永廿年六月六日、荒井關奉行服部中保俊、千石加恩ありて三千石になさる、

〔嚴有院殿御實紀 二十七〕寛文三年十二月十五日、本多內膳助久、荒井關番奉はるによて、千石の采

邑を附らる、

〔常憲院殿御實紀三十三〕元祿九年二月十六日、荒井奉行に五百俵給はる、

屬僚

〔吏徴附錄廢職〕荒井奉行二人、與力各百五十石、同心各七石二人扶持、

〔大猷院殿御實紀五十一〕寛永十九年九月朔日、服部仲保俊、荒井關番命せられ、與力六騎、同心二十人新に附らる、

本阪奉行

〔柳營秘鑑四〕遠國御役人之員數

一遠州本坂奉行壹人　與力六騎 同心三十人

〔寛永三年武鑑〕遠州本坂御奉行

三千九百石　近藤縫殿助　與力六騎 同心廿人

走水奉行

〔吏徴附錄廢職〕走水奉行　寛永元年甲子正月十一日、向井將監御船手より三崎走水兼帶、　正保元年甲申七月七日、始置二一人一、　元祿九年丙子二月廿一日廢　此跡御勘定奉行支配

〔營中御日記九〕寛永九年七月七日、向井將監、相州走水御番被二仰付一、與力六騎、同心御預被レ成、○又見二大猷院殿御實紀一

〔新編相模國風土記百十五 三浦郡九〕走水村

走水番所跡　字御所ケ崎ニアリ、海岸非常警衛ノタメ、寛永十八年、始テ建ラレ、向井將監忠勝ヲ奉行トシ、與力同心ヲ預ケラル、○中略 元祿九年、此職ヲ罷ラレ、明年番所ヲ始、陣屋代官屋敷、船藏、與力同心ノ居宅等悉ク廢セラレ、概シテ田園トナレリ、

〔貞享三年武鑑〕相州走水奉行

千石　布衣　大岡次郎兵衛

〔常憲院殿御實紀三十三〕元祿九年二月廿二日、清水、三崎、走水三奉行を停廢あり、○中略 三崎、走水兩

所は勘定頭所屬たらしめらる、

屬僚

〔吏徵附錄 殿職〕走水奉行　寛永九年壬申七月七日、與力六騎、同心三十人を附す、

〔諸御役代々記 十六〕相州走水御番 與力五騎、同心三十人、○中略

元祿九子二月廿一日、當御役御免、與力二騎、同心五人、荒井江加ル、殘リ御暇被下、

三崎奉行

〔吏徵附錄 殿職〕三崎奉行 ○中略　寛永元年甲子正月十一日、御船手より向井將監兼帶、　同九年壬申七月七日、始置一人、　元祿九年丙子二月廿一日廢 此時御勘定奉行支配

〔東職記聞 二〕闕職

三崎奉行 元和四年、向井將監補之、元祿七年、根來五左衞門免職、爾來罷之也、

〔舊中御日記 九〕寛永九年七月七日、安部次郎兵衞、相州三崎關所御番被仰付、是向井將監ニ替、

〔三崎志 府治〕御番所　慶安元年置、元祿九年同郡浦賀ニ移、

〔貞享三年武鑑〕相州三崎御奉行

七百石　布衣　山岡傳五郎

〔常憲院殿御實紀 三十三〕元祿九年二月廿二日、清水、三崎、走水三奉行を停廢あり、○中略　三崎、走水兩所は、勘定頭所屬たらしめらる、

屬僚

〔吏徵附錄 殿職〕三崎奉行　與力六騎、同心三十人、

〔嚴有院殿御實紀 二十四〕寛文二年十月十六日、三崎奉行所屬の與力、同心等、加給米月俸、府にて下されしかど、今年より住所にて給はるべしと定めらる、奉行の請によてなり、

古事類苑

官位部七十五

徳川氏職員二十四

郡代 郡奉行 地方奉行 附

郡代ハ又奉行トモ稱シ、幕府ノ領地ヲ支配スル職ニテ、勘定奉行ニ隷屬シ、所々ニ陣屋及ビ出張所ヲ置キテ、租税ヲ徴集シ、農桑ヲ勸メ、領民ノ紛爭ヲ和解シ、訴訟ヲ聽斷シ、子弟ヲ敎育スル等、凡テ地方ノ政治ヲ行フ、

關東郡代ハ、初ハ代官頭トモ云ヒ、慶應二年ニ、關東在方掛ト改稱セリ、原來伊奈氏ノ世職ナリシガ、寬政四年ニ、右近將監忠尊罪アリテ蟄居ヲ命ゼラレ、勘定奉行ヨリ兼職スルコトヽナレリ、其後又勘定奉行ノ兼職ヲ罷メ、代官五人ヲ置キテ、其職ヲ行ハシメシガ、元治元年ニ至リ、再ビ郡代三人ヲ置ケリ、支配ノ區域ハ、時ニ由リ一定セザレドモ、初ハ武藏、相模、安房、上總、下總、上野ノ諸國ヲ領シ、元治元年ニハ、下野ヲ除キテ常陸ヲ加ヘタリ、江戸馬喰町ニ役宅アリ、他ノ郡代ノ上座ニ位シ、評定所ニ出ル時ハ、勘定吟味役ノ下ニ列セシガ、後ニハ勘定奉行ノ席末、吟味役ノ上座ニ列スルコトヽナリ、天明四年ニ至リ、勘定奉行ノ支配ヲ解キテ、老中ニ直隷スルコトヽナレリ、勘定奉行ヨリ兼務ノ時ハ、役料千俵ヲ給シテ、役宅ノ用途、組附屬僚ノ手當等、一切ノ費用ヲ支辨セシメ、慶應年中專職ヲ置クニ及ビテ、二千石高ト爲セリ、屬僚ニ奉行、手代、下代等アリ、慶應ノ頃ノ屬僚ニハ、組頭、留役等ノ職名アリ、又寬政四年ニ、關東郡代組附ト云フヲ設ケ、組頭ヲ置キテ、將軍ノ放鷹ノ事ヲ掌ラシメシガ、文化三年以後ハ、

之ヲ勘定奉行ノ支配ト爲シ、職名ヲモ廢野方ト改メタリ、

美濃郡代ハ、美濃國奉行トモ稱シ、美濃、伊勢兩國ヲ支配ス、席順ハ關東郡代ノ次ニテ、役料四百俵、手當金八百兩、米百二十人扶持ヲ給ス、屬僚ニ堤方役アリ、

西國郡代ハ、初ハ豐後代官ト云ヒ、豐後一國ヲ支配セシガ、後豐前ヲ併セ又筑前、日向等ヲモ管シ、寶暦ノ頃ニ至リテ、西國筋郡代ト改稱シ、後又肥前、肥後ヲモ加ヘテ、六箇國ヲ支配セリ、席順ハ美濃郡代ノ次ニテ、役料四百俵、手當金九百五十兩、米百二十人扶持ヲ給ス、

飛驒郡代ハ、安永六年始テ之ヲ置キ、飛驒、加賀、越前、美濃ノ四國ヲ領ス、席順ハ西國郡代ノ次ニテ、役料四百俵、手當金八百兩、米百二十人扶持ヲ給ス、屬僚ニ頭取、地役人等アリ、

其他攝津河内郡代、尼崎郡代、參河郡代、丹波郡代等アリシガ、何レモ久シカラズシテ廢止セリ、

關東郡代

〔延寶八年江戸鑑〕御代官之頭　四千石、伊奈半十郎殿、

〔貞享五年武鑑〕關東御郡代　四千石　布衣　伊奈半十郎

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十二月、此月關東郡代ヲ改テ關東在方掛ト唱フ、

〔有司勤仕錄〕關東御郡代

一代々伊奈半左衛門司之、先祖伊奈熊藏忠次は、大神君〇德川家康關八州御治之時、伏見に御在城、此時は關東之事は萬事引受、諸代官を支配す、其後江府へ御引移以後は、不相替此役を勤、夫より連綿として代々之役也、昔は自分支配所、凡百万石之餘も有之、今は其數減す、

沿革

〔泰平年表大御所〕寛政四年閏二月十日、關東御郡代、御勘定奉行より兼帶と成、伊奈家、代々御郡代たりし處、今年右近將監勤役中、不埒、且家事不取締に因て、所領三千九百六十六石餘沒收、實方板倉周防守へ御預、蟄居、同年南部家へ御預ケ替、彼宅にて病死、總領半左衛門、松平甲斐守へ御預ケ、末家伊奈半十郎、總領小三郎へ、新規千石賜、家名相續被仰付、因て久世丹後守、御勘定奉行より始て兼帶被仰付、伊奈の馬喰町屋敷へ兼帶中移り住す、其後中川飛驒守兼帶之時、御仕法替り、飛驒守兼役御免、御代官

より五人被二仰付一、右屋敷へ住居、右御郡代の事を勤む、是より馬喰町御用屋敷と稱す、後減じて三人と成、

〔文恭院殿御實紀十二〕寬政四年三月九日、この日小姓組番頭格關東郡代伊奈右近將監忠尊、采地ことぐゝく收公せられ、末家伊奈半十郎忠利が子小三郎忠盈へ、新番に千石を給ひ、家相續を命せられ、○中略　十日、勘定奉行久世丹後守廣民、關東郡代を兼しめらる、

〔德川禁令考十五勘定奉行〕文化三丙寅年正月闕日

關東郡代職務兼勤ノ儀ニ付達書○按文略

御勘定奉行江

關東郡代役所御用向之儀、當分御勝手方月番ニ而相心得、無二差支一樣可レ被二致候、

〔天保集成絲綸錄七十七〕文化三寅年三月

御勘定奉行江

關東郡代中川飛驒守忠英○跡役は不レ被二仰付一候、郡代支配御代官どもは、向後何茂支配いたし、御鷹野方其外御用向、無二差支一樣取計可レ被二申候、

〔續泰平年表〕元治元年十一月二十二日、於二御座間一關東郡代兼帶御留守居格御勘定奉行松平對馬守、○中略　關東郡代火消役花房銑之丞、寄合杉浦牧豕郎、右於二御前一被レ仰二付之一、

〔德川禁令考三十三郡代〕元治元子年十一月廿二日

關東郡代被二仰付一候御書付

豐後守殿御渡

御勘定奉行江○中略

覺

松平對馬守　花房銑之丞　杉浦牧豕郎

關東御取締之ため、今度何レも郡代ニ被二仰付一候事ニ候間、御趣意厚く相心得、勤方其外、諸事取調

支配職掌

可ㇾ被ㇾ相伺ㇾ候、尤銘々支配所可ㇾ然場所江、陣屋御取建可ㇾ被ㇾ成下ㇾ候間、在陣之積り可ㇾ被ㇾ相心得ㇾ候、對馬守儀ハ、在府ニ而可ㇾ被ㇾ相勤ㇾ候、且又是迄之御代官之內、當分郡代附ニ被ㇾ仰付ㇾ其餘夫々支配向も可ㇾ被ㇾ仰付ㇾ候間、御勘定奉行打合、人數等取調可ㇾ被ㇾ申聞ㇾ候、

右之通關東郡代江相達候間得ㇾ其意ㇾ諸事申談候樣可ㇾ被ㇾ致候事、

〔寶永二年武鑑〕關東御郡代　布衣　武州、下總、上總、房州、飛州、支配、

○按ズルニ、此後享保十八年ノ武鑑ニハ、武州、總州、駿州ノ三箇國、寶曆、明和、安永ノ武鑑ニハ、武藏、相模、上野ノ三箇國、寬政四年ノ武鑑ニハ、武藏、下總、上野、上總、安房ノ五箇國アリ、

〔敎令類纂二集百八〕明和三丙戌年六月

町奉行江

武州西葛西領石小田新田、砂村新田地續、町奉行支配久右衛門町、石川町之內、百姓居所璽留ニ相成候分、向後伊奈備前守支配所ニ相成候間、得ㇾ其意ㇾ可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候、尤御勘定奉行可ㇾ被ㇾ談候、

〔德川禁令考三十三郡代〕元治元子年十一月廿二日

關東郡代被ㇾ仰付ㇾ候御書付

豐後守殿御渡

御勘定奉行江

武藏相模國　御留守居格、御勘定奉行、關東郡代兼帶、松平對馬守

安房上總國　關東郡代　花房釚之丞

下總常陸國　杉浦牧豕郎

右之通支配被ㇾ仰付ㇾ候間、可ㇾ被ㇾ得ㇾ其意ㇾ候事、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十月朔日、郡代宿村ニ達スル條々、

河內守殿渡書付　此度關東御郡代河野河內守〇河野恐河津誤伊豆守儀、安房、上總、下總、常陸、支配國々廻村

仰付られ候に付、土地爲見置、支配向召連れ、右國々御領私領寺社領の內致巡村、於場所關東取締組合大小總代、幷に村役人共等へ相尋候義も可有之候、尤も村々難儀に不相成樣、手輕に巡村の筈に有之候、

右之通、安房、上總、下總、常陸國御料、並に私領知行所有之面々、寺社領共、可被相觸候、

〔德川禁令考郡代三十三〕享和元酉年七月

郡代支配所公事出入吟味物取計方之儀ニ付相伺候書付

書面之趣、御勘定奉行より兼帶之內は、伺之通可取計旨被仰渡奉畏候、

酉十一月七日　中川飛驒守〇勘定奉行關東郡代

郡代支配所公事出入吟味物取計方之儀は、〇中略伊奈右近勤役中と違ひ、當時は火附盜賊、其外惡黨もの、郡代御役所に而吟味仕、右引合之內には、御領私領町方之無差別呼出吟味仕候儀に付、支配所之出入、其外吟味もの等、郡代御役所に而取扱候而も、聊差支候筋も無御座候處、支配內之吟味ものは他江差出、火附盜賊其外惡黨もの之類に限り、郡代御役所に而吟味仕候儀も、其筋不相立、不相當之儀に奉存候間、別紙ニ申上候趣を以、以來取計方主法相改、支配所公事出入もの等、道中方幷寺法社法ニ拘り候類之外は、郡代御役所に而吟味詰取捌候方、却而混雜不仕、取計方之規矩も相立、都而公事合、吟味物等も捗取可申、御代官に而も、一件差出方之手數相減、旁可然哉ニ奉存候、〇中略

別紙

郡代御役所公事方取計方規定書

中川飛驒守

公事方同役〇勘定奉行共幷道中奉行江可差出分

一郡代支配御代官所より、私領寺社領江掛り候出入、○中略

一同御府內町內江掛り候出入○中略

一同他之御代官所江掛り候出入、○中略

一同五海道宿方ニ拘り候出入、幷病人繼送飯賣女、其外宿方ニ拘り候吟味物、○中略

一國境、郡境、村境ニ拘り候出入、○中略

一郡代支配御代官一支配所ニ而も、寺法社法ニ拘り候出入、幷吟味もの、○中略

一捨馬放馬取計方伺○中略

一札掛場內、變死行倒人取計方伺、○中略

郡代御役所ニ而吟味可ㇾ仕分

一郡代支配御代官所達之出入

是は、御代官立會吟味詰、伺書差出來候得共、以來は、訴訟方御代官之添書を以、目安爲ㇾ差出、目安之趣一通相糺候上裏書いたし、郡代本判幷御役所押切仕、差日に可ㇾ罷出ㇾ旨申渡、目安願人江相渡、郡代御役所に而吟味仕候積、

但目安裏書は、公事方內寄合公事裏書之振合に認候積、

一同御代官一支配所限之出入

是は、仕來之通、御代官役所に而吟味詰裁許幷御仕置之儀は、郡代御役所江爲ㇾ相伺ㇾ候積、尤出入之內に口書難澀いたし候歟、又は裁許不ㇾ請もの、或は格別入組、吟味難ㇾ決品は、御役所江爲ㇾ差出ㇾ吟味仕候積、

一同御代官彼所に而取扱候六ヶ月以上不ㇾ相濟ㇾ出入、幷吟味もの、

是は、六ヶ月之屆書、公事方同役共江差出候故、裁許幷御仕置伺、願下ゲ內濟いたし候分共、是

迄公事方同役共江伺、取計來候得共、以來は六ヶ月之屆書も、郡代御役所江爲差出、裁許幷御仕置、其外願下內濟之分共、郡代手限に而差圖いたし、尤六ヶ月幷落着御屆返とも、郡代より申上候積、

一同御代官御役所に而取扱候吟味もの、又は變死疵附、其外檢使差遣候類、都而他之引合有之候吟味物、

是は、他之引合有之譯を以、公事方同役共江伺、取計來候得共、以來は、右之類をも、郡代御役所に而吟味幷差圖も仕候積、

一同御代官役所に而取扱候重科之もの有之候吟味もの

是は、吟味差出之儀相伺候節、重追放、遠嶋、死罪以上に可相成分は、公事方同役共江爲差出來候得共、右之類も、郡代御役所に而吟味仕候積、

一郡代支配御代官所達に而引合有之吟味もの、

是は、御代官立會吟味詰、伺書差出來候得共、以來は、最初より郡代御役所江一件爲差出、吟味仕候積、

右之趣に以來取計、改正仕候はゞ、規定も相立、可然哉ニ奉存候、勿論前書箇條之外、相洩候儀も御座候はゞ、公事方同役共江相談之上、取極候樣仕、若又難相決儀も御座候はゞ、其節に臨相伺候樣可仕候、以上、

〔德川禁令考三十三郡代〕慶應元丑年十二月朔日

關東郡代被仰付候ニ付御書付

和泉守殿御渡　　三奉行江

關內之儀は、多くは小給所入會ニ而、自然取締不宜候間、向後御仕置行屆、取締も相立、萬民難儀

不致樣ニとの御趣意を以、先般新規關東郡代被仰付候、就而は領主地頭ニおゐても、取締筋彌嚴重ニ可申付候、勿論村々役人共ニおゐても難有相心得、取締筋、精々世話可致候、

一公事出入之儀も、雙方支配國之分は、其所郡代陣屋おゐて取捌候筈候間、一支配國内出入立候儀有之候はゞ、雙方組合村役人等取扱、其上にも難相濟分は、領主地頭添簡を以、目安懸を以、其所郡代陣屋江可訴出候、

一小給所、或は領分飛地等ニ家來詰合も無之、取締難行屆存候分は、其所郡代陣屋おゐて、御料所に准じ、公事出入之吟味を始め、變死檢使等之儀迄も、都而取計可遣間、領主地頭存寄次第、郡代申談候樣可被致候、〇中略

右之通、關八州御料、幷領分知行有之面々江可被相觸候、

十二月

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十月朔日、關東郡代宿村ニ達スル條々、

關東郡代仰付られ、國分にて致支配、諸方便利の地へ郡代陣屋御取建に相成候御趣意は、近來諸國とも不穩、在々へ無賴のもの立廻り、良民を辛苦め候者どもも有之候に付、右御取締向は勿論、教育筋、専ら御世話有之、何れも其職業を勉め、安穩に生活相成候樣との厚き御趣意に付き、上の御仁惠、親敷下々へ申聞せ、又下々の曲直邪正、明かに上へ申立、上下の情無隔樣、取扱候御役儀に付、其邊等も相辨へ、左の件々、小前末々迄も申聞置候樣致すべし、

一公事訴訟等、江戸表へ罷出相願候節は、諸雜費も掛り、小前末々に至り候ては、其事柄理分有之候とも、入用行屆き兼候處より、空敷過去候者も可有之候間、郡代在陣にて、御料私領とも致取捌遣し候事、若し又在陣場所等相隔り候者は、廻村等の節、訴訟候とも苦からず、

一孝子、順孫、義夫、貞女等、都て奇特のもの有之候はゞ、村役人等不打捨置申出候樣致すべし、取

調の上、其品に寄り御褒賞有レ之べし、〇中略

一他方より入込候惡黨は申迄も無レ之、其地の人別の者にても、其所の害に相成候儀は、速に訴出候樣可レ致候、其外放蕩致し、職業を不二相勵一者は、精々村役人共實意に意見を加へ、其上にも不二取用一候はゞ、申出候樣可レ致候、尤も別て御咎等被二仰付一候儀には無レ之、郡代と百姓とは父子の如きもの故、教諭を加へ改心させ、父母は勿論、親類共に至る迄安心致し、家名相續相成候樣に致遣し度、尤も度々教諭等相加へ候ても不二取用一者は、多くの者の戒に相成候間、不レ得レ止事、嚴重に相罰候儀も可レ有レ之候、

一新田畑開發、荒地起返し、其外水行の利害、諸物產開き方等、御爲筋は勿論、一國一村の爲にも相成候儀、心附き候はゞ申出べし、〇中略

一支配向の者幷に家來末々に至る迄、非分の儀有レ之候か、又は他向のもの通行等の節、如何敷儀有レ之候はゞ、封狀に致し差出候樣可レ致候、〇中略

右之通の趣、相心得候樣致すべし、

〔大猷院殿御實紀三十九〕寬永十五年九月六日、崇源院殿十三年周忌の御法會、三緣山にて萬部執行あり、〇中略總奉行酒井讚岐守忠勝はじめ、〇中略地方奉行大河內金兵衛久綱、代官伊奈半十郎忠治等まかる、

〇按ズルニ、當時ハ關東郡代ヲ代官ト云ヘリ、

〔大猷院殿御實紀五十一〕寬永十九年八月十六日、伊奈半十郎忠治、今まで國用の事にあづかりしをゆるされ、今より後、關東諸代官の得失を糺し、堤防修築の事勾當すべしと仰付らる、

〔嚴有院殿御實紀五〕承應二年二月十一日、關東郡代伊奈半十郎忠治は、玉川水道奉行を命せらる、

〔常憲院殿御實紀五十一〕寶永二年五月廿一日、この日關東郡代伊奈半左衛門忠順は、深川修治の

陣屋屋敷

奉行にあてらる、

〔慶應三年縣令集覽〕關東御郡代　木村甲斐守

陣屋、上州岩鼻、野州足尾銅山、

〔德川禁令考郡代三十三〕慶應元丑年十二月朔日

關東郡代被仰付候ニ付御書付

和泉守殿御渡　三奉行江〇中略

關東郡代之儀、追々在陣可被仰付候得共、先此度上州岩鼻陣屋江、郡代木村甲斐守在陣被仰付、同國幷武藏國賀美郡外五郡御仕置筋之儀、取計候筈ニ候間、領分知行有之面々、萬事差圖可被請候、萬一非常之節は勿論、平常とも、人數入用之節は、最寄居城、幷陣屋有之面々江相達候筈ニ候間、兼而心得、無差支樣可被取計候、

右之通、上野國幷武藏國賀美郡、秩父郡、兒玉郡、那賀郡、榛澤郡、男衾郡、領分地行有之面々江可被相觸候、

十二月

〔天保集成絲綸錄八十三〕寛政四子年四月　柳生主膳正

佐橋長門守江

伊奈小三郎〇關東郡代馬喰町之屋敷、向後郡代屋敷と唱、久世丹後守始、支配御代官、其外住居、役所向取建之儀相調候而、可被申聞候、尤小三郞家作長屋等も上り候に付、右をも相用候而、御入用積り等取之らべ可被申候、委細之儀は丹後守可被談候、

〇按ズルニ、此後代官ヲシテ郡代ノ事務ヲ執ラシムルニ及ビテ、郡代屋敷ヲ御用屋敷ト稱ス、沿革ノ條ニ引ケル泰平年表ヲ參看スベシ、

待遇 條錄

〔有司勤仕錄〕關東御郡代

一代々布衣御役也、評定所出役には吟味役の下たりしに、近來格式改りて、御勘定奉行之末席、吟味役之上座に被仰付、

〔天明集成絲綸錄 一〕明和六丑年十二月

御勘定奉行江

伊奈半左衛門

前々之通御代官被仰付、御勘定奉行支配被仰付、座順之儀は、奥御右筆組頭之次、美濃郡代之上たるべく候、

右之通申渡候間、可被得其意候、

〔浚明院殿御實紀 五十〕天明四年四月廿九日、代官伊奈半左衛門忠高、是まで勘定奉行に隷せしが、宿老に隷することゝなりぬ、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕元文三戊午年七月四日

御代官 伊奈半左衛門

其方小菅屋敷江御殿立候付、番人等可差出候、御殿立有之候内、五十人扶持被下候旨、御右筆部屋於縁頬、御老中御列座、左近將監〔○老中松平乘邑〕被仰渡之、

〔天保集成絲綸錄 八十六〕寛政六寅年五月

久世丹後守〔○勘定奉行兼關東郡代〕江

關東御郡代爲御役料千俵被下候間、當寅年より役所諸入用、其外組附之もの手當、臨時入用、且檢見入用共、被賄候樣可被致候、

〔天明集成絲綸錄 四十〕安永三午年十一月

御勘定奉行江　　御代官　伊奈半左衛門

右前々勝手向不如意之上、近來打續知行損毛、類燒等ニ而差支、御用向茂難二相勤一趣ニ候、先年格別之譯を以、御手當も被二成下一候上は、難二相成一事ニ候得共、品々御用も多、勝手向差支候儀も無レ據趣ニ付、猶又別段之譯を以、金一萬五千兩、十五ヶ年御預被二仰付一候、冥加金等之御沙汰ニ不レ及候間、右御手當を以、如何樣ニ茂取續、以後願ヶ間敷儀等申立間敷旨可レ被二申渡一候、

十一月

屬僚

〔慶應元年武鑑〕關東御郡代　中之間　二千石高

〔有司勤仕錄〕關東御郡代

一家來之內に四人之奉。行。支配之內を四に分て司る也、壹人にて拾萬石之餘支配す、被官たりと云とも、其司る所御代官の如し、尤評定所江出座す、其下に手。代。有り、五十石程ツヽの身上也、其外に又下。代。と云者有レ之、此者ども年貢取集等之事司レ之、勿論手代も其節支配所江來ル、近習之時之內目付として、壹人ツヽ附添事なり、

一江戶橋々、幷近鄉海道筋、悉く支配なり、宅に役所在レ之、是を引請捌之事也、其司る所町奉行所の如し、尤四奉行列座ニ而聞レ之事あり、

〔慶應三年縣令集覽〕關東御郡代御。組。頭。　甘利八右衛門　木村董平

關東御郡代御。留。役。　吉田次郎吉　吉岡靜助　櫻井健藏　望月翁助

鷹野方

〔大概順〕御目見以下大概順

五十俵三人扶持、役扶持三人扶持、御手當金八兩、　抱入、役上下、　御普請元〆格　御鷹野方組頭。

〔吏徵御目見以下〕御鷹野方組頭二人　書關東郡代附組頭　五拾俵三人扶持高　役扶持三人扶持　御手

當金八兩、役上下、御抱場、年月日始置〇中略

御鷹野方拾五人〔舊關東郡代組付〕

持高　役扶持三人扶持　御手當金五兩　見習四人、御手當金同斷、役上下、御抱場、寛政四年壬子月日始置

同並七人　持高　御手當金五兩　役上下、御抱場、御鷹野方、同並之内より、御鳥見手附出役七人、文化二年乙丑月日始置

〔吏徵別錄御目見以下〕御鷹野方　寛政四年壬子四月日、始置、關東郡代組附三十員、文化二年乙丑月日、增、十員、〔合四十員〕同三年丙寅三月三日、役名を改て御鷹野方、同並とす、十六員に定む、同七年庚午月日、二十三員とす、文政九年丙戌月日、始置、見習四員、手當金五兩、

御鷹野方並　文化二年乙丑月日、始置、關東郡代組附並十員、同三年丙寅三月三日、役名を改む、

〔天保集成絲綸錄七十七〕文化三寅年三月

御勘定奉行江

關東郡代中川飛驒守〇忠英跡役ハ不被仰付候、郡代支配御代官どもは、向後何茂支配いたし、御鷹野方其外御用向、無差支樣取計可被申候、

〔東職記聞二〕美濃郡代一人　布衣

〇按ズルニ、下文支配ノ條ニ引ル嚴有院殿御實紀ニハ、美濃國奉行トアリ、又寶永、正德、享保ヨリ以下、元治、慶應等ノ武鑑ニハ、上方御郡代トアリ、貞享、元祿ノ武鑑、及ビ天保、慶應等ノ縣令集覽ニハ、何レモ美濃郡代ト見エタレバ、上方郡代トモ、美濃郡代トモ唱ヘシナラン、

〔吏徵別錄上布衣以上〕美濃郡代　元和三年丁巳月日、始置、一員、岡田將監、元文二年丁巳十一月十一日廢、延享三年丙寅七月十八日、再置、一員、青木次郎九郎、

支配職掌

〔惇信院殿御實紀四〕延享三年七月十八日、京都代官青木次郎九郎安清、美濃國の郡代となる、

〔享保十八年武鑑〕上方御郡代布衣　濃州勢州

〔大猷院殿御實紀四十〕寛永十六年三月八日、美濃國郡代岡田將監義政は、美濃の加納、〇中略の郷村引渡の事命せられ、いとま給ふ、

〔嚴有院殿御實紀十六〕萬治元年閏十二月五日、伊勢國奉行石川大隅守正次にいとま下され、美濃國奉行岡田將監善政に内宮造營奉行命せられ、大隅守正次と相議してはからふべきむね、奉書もて傳へらる、

〔教令類纂二集百八〕寶暦三癸酉年十一月　御勘定奉行江

美濃郡代　青木次郎太〇太下文作レ九、恐有二誤一、郎

右次郎太郎儀、御代官所、去々未年御年貢不納之儀、先達而被二申聞一候書面之趣ニ而は、譯も相立候、事ニ候間、不納金千三百兩餘、拾ヶ年賦ニ上納仕候樣申渡、只今迄之通、御役相勤させ候樣可レ被レ致候、

陣屋

〔吏徵上布衣以上〕美濃郡代〇中略　美濃笠松在陣

〔慶應三年縣令集覽〕美濃御郡代　岩田鍬三郎

陣屋美濃笠松　出張同下川邊

待遇俸祿

〔吏徵上布衣以上〕美濃郡代　御勘定奉行支配　燒火間　四百俵高　諸入用金八百兩、米百貳拾人扶持、支配所ニ而十万石ニ　御暇、時服三、羽織、　引越拜借金百兩

〔憲教類典五ノ四地方下〕明和四丁亥年十月

御勘定奉行江　美濃郡代　千種六郎右衞門

西國郡代　揖斐十大夫

右兩人、布衣被仰付候ニ付、直ニ申聞度御用筋も有之候はゞ、六郎右衞門は京都所司代、十大夫は大坂御城代迄、書付差出候之樣申渡候間、可被得其意候、

十月

〔惇信院殿御實紀二十九〕寶曆九年二月廿七日、美濃郡代千種濟右衞門某、勤仕のうち四百俵を賜ふ、

〔吹塵錄德川氏三十一〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、今度御改正、別紙之通御役金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

一金三百兩宛　但高ニ不拘被下　　美濃郡代

〔吏徵附錄郡職〕美濃郡代支配堤方役十人、見習四人、　三拾俵三人扶持高　見習役金五兩

西國郡代

〔吏徵上布衣以上〕西國筋郡代一人○中略　寶曆九年己卯二月日始置

〔貞享五年武鑑〕豐後御代官　布施谷彥助

○按ズルニ、豐後代官ハ、正德六年ノ武鑑ニ、豐前、豐後、南條金左衞門、岡田庄大夫ト見エ、享保二十一年元文元年ノ武鑑ニ、豐前、豐後、筑前、日向、岡田庄大夫ト見エテ、其支配所、全ク西國郡代ト同ジケレバ、初メハ豐後代官ト稱シテ一國ヲ支配シタリシガ、後豐前、又ハ筑前、日向ヲモ支配シテ、寶曆九年ニ、西國郡代ト改メシナルベシ、又豐後代官ハ、延寶武鑑ニハ未ダ見エザレバ、天和貞享ノ間ニ置キシ職ナルベシ、

支配職掌

〔安政六年武鑑〕西國御郡代　豐前、豐後、日向、肥前、肥後、筑前、　躑躅間　布衣　本陣屋豐後日田

出張豐前四日市、日向富高、肥前天草、　池田岩之丞

○按ズルニ、明和以後天保頃マデノ武鑑ニハ、唯豐前、豐後、筑前、日向四ケ國ノ領所ナリシガ、後肥前、肥後ヲ加ヘテ六ケ國ノ領所ヲ支配シタルナリ、

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年正月、是月西國郡代窪田治郎右衛門建白、

西國御料所の儀に付、見込の趣申上候、

一去寅〇慶應二年九月一日、御休兵被仰出候へども、此上長防御征伐被仰出候はゞ、御成功迄の間、武器類は勿論、右御軍事ニ拘リ候儀は、都て御物成の内を、其時々不伺遣拂ひ仕候樣仕度、〇中略御軍事の儀は、臨機の取計ひ不仕候ては、勝敗に拘り候儀に付、都て御委任被仰付候はゞ、萬一の節、御國辱に不相成樣取計ひ可仕奉存候、〇第二條略

一戰爭中、長崎米の儀、御廻米不仕候ては、同所役々御扶持、御供米等差支候間、米高二万石程も相廻し、其餘は不殘置米に致し、御軍事の方へ遣拂候樣仕度奉存候、〇第四條第五條略、

一私支配村々農兵の儀、去夏中、於小倉表御下知御座候ニ付、十分に仕立候心得にて、先般中より千二三百人餘も農兵仕立候、役人共の内、當節迄調練熟達致し候者は、隊士等申付、引立方周旋爲致置候儀にて、右指揮として手付手代の者差出、諸家人數の外に防禦筋爲心得候間、右農兵戰爭の砌り武功も有之者は、淺深に寄り給田五石、或は十石ツヽ被下置、士分の內へ加へ候樣仕度奉存候、

一私支配所內へ御預被置、御林の儀、何れも嶮岨の岩山にて、雜木惡木多く御座候間、不殘御拂に被仰付、右代金を以て、大砲小銃玉藥等御買入仕候樣被仰付度、〇中略尤御林跡地の儀は、〇中略迚も十分の取締屆兼候折柄、方今の時勢、迚も防禦筋相立兼候儀見込候間、右場所幷に出張、四日市陣屋附國東郡高四万八千百五十石餘、同國直入郡高二千九百八十五石餘、合高二

千三百〇二千三百疑有誤脱石餘、細川越中守へ御預替被仰付度、同人御預り所に相成候はゞ、豐後鶴崎邊に領分も有之、平常多人數出張致居候間、防禦も相立、戰爭に相成候ても、人數繰出し方の都合も宜敷候間、右之通被仰付度、且主殿頭〇肥前島原城主松平氏へは、私支配所の內、肥前國松浦郡高一万五千八百廿石餘を御預所に被仰付候はゞ、同國の內にも有之、手近の場所に付、取締筋も行屆き可申と奉存候間、御預所替被仰付候樣仕度奉存候、

一私出張豐前國四日市陣屋附、同國宇佐郡高二万二千九十石餘の儀は、支配所海岸場所多く、防禦筋も屆兼候間、同所は有馬中務大輔へ御預け所に被仰付度、自國共格別阻りも無之、殊に陸地續きの場所にて、取締は勿論、海岸筋防禦も行屆可申見込に御座候間、同人へ被仰付候樣仕度奉存候、

一私出張日向國富高陣屋附高二千七十石餘の義は、內藤備前守御預所に被仰付度、同人領分とも間近き場所に付、右之通被仰付候樣仕度奉存候、

一私出張肥後國富岡陣屋の儀は、是迄の通り御差置、警衞の儀は、細川越中守へ永世被仰付候樣仕度、左候へば海岸防禦も行屆候間、右之通被仰付候樣仕度奉存候、〇第十一條略

一諸大名へ是迄の御貸附に相成居候、諸御貸附金の儀、近來引續、領分米穀不熟等にて、其時々歎願申立、就中西國大名には、近年軍事の物入のみ多く、〇中略天保度の御振合を以、御貸附高の內、半高棄捐、殘金無利息永年賦等に被仰付候樣仕度、左も無之候ては、年々夫のみに苦心致し、十分の武備手當等、自然難出來儀と奉存候、

右は私見込の趣申立候間、何卒夫々御差圖被下候樣奉願候、以上、

窪田治郎右衞門

指令書ヲ窪田治郎右衞門ニ下ス

待遇俸祿

一初ヶ條、今般諸家へ御預所相成候殘高、其方支配所村々御物成を以、軍事用途に遣拂の儀、御委任被仰付候條、臨機の取計致し、出納筋の儀は、立會として御勘定被遣候、尤右遣拂之儀は、年々仕譯書を以、相屆可申事、〇中略

一三ヶ條目、戰爭中、長崎御詰米二万石程相廻し、其餘軍粮に遣拂、殘石有之候はゞ、大坂御廻米の積り、相心得可申候、〇中略

一五〇五恐誤ヶ條目、農兵のもの共給田の儀、武功拔群のものへは可被下候間、其節取調可相伺事、

一六〇六恐誤七ヶ條目、御林御拂の上、大砲小銃玉藥等買入、跡地は土地相應苗木植付の節、不取締の儀無之樣、嚴重に可申付候事、

一七〇七恐誤八ヶ條目より十ヶ條迄の趣は、被仰出候事、〇中略

一十二ヶ條目、諸家御貸付金の儀は、長州事件相濟候迄、元利御差延被仰付候間、借受有之候諸家へ、其段可被相達候事、

右は板倉伊賀守殿御差圖に付、可被得其意候、

〔吏徵上布衣以上〕西國筋郡代一人　御勘定奉行支配　燒火間　四百俵高　諸入用金九百五十兩、米百廿人扶持、支配所ニ而十万石〇中略　御暇、時服三、羽織、　引越拜借金百兩

〔吏徵別錄上布衣以上〕西國筋郡代　明和四年丁亥十月廿六日、揖斐十大夫、布衣も被仰付候付、直に申聞度御用筋も候はゞ、大坂御城代迄書付差出候樣申渡、

〔天明集成絲綸錄二十三〕明和九辰年十一月

御勘定奉行江

揖斐富次郎

任免

西國筋郡代、布衣被仰付、御勘定奉行支配被仰付、座順之儀者、美濃郡代之次たるべく候、

右之通申渡候間、可被得其意候、〇又見浚明院殿御實紀

〔吹塵錄 三十一 德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不被下、是迄之場所高に不拘、

今度御改正、別紙之通御金被下候旨被仰出之、

御役金被下高之覺

一金三百兩宛　但高ニ不拘被下　西國郡代

〔教令類纂 二集 百八〕明和四丁亥年七月　御勘定奉行江

揖斐十大夫

其方御代官所、前々岡田庄大夫相勤候以來取〆宜、御取箇年々相增之儀、庄大夫は勿論、手附之者共、取計も行屆、末々迄も歸服いたし候故と相聞、引續忰九郎左衛門、幷當時其方乍別家、庄大夫實子之事故、庄大夫家筋同樣ニ末々迄も存附、不相替出精相勤候ニ付、此度西國筋郡代被仰付候、向後庄大夫家來之者共と、其方家筋之者之內ニ而、其筋ニ出役可相勤、相應之者可被仰付候間、兼而其趣相心得、以來猶以出精可相勤候、

右之通、十大夫へ申渡、庄大夫家筋、當時西丸御小性組松平賴母組岡田權兵衛江も、右之趣申聞候間、可被得其意候、〇又見浚明院殿御實紀

屬係

〔浚明院殿御實紀 二十六〕安永元年十一月七日、西國郡代揖斐十大夫政俊が子富次郎繼俊〇繼俊、一本作繼俊、恐誤字、中略、父の原職を命ぜられ、布衣の侍に加へられ、座班は美濃郡代の次につらなり、勘定奉行の隷下に屬すべしと命ぜらる、

〔憲教類典 五ノ四下 地方〕明和六己丑年八月

揖斐十大夫元〆手代貳人

御勘定奉行江

御切米七拾俵三人扶持宛、外役金拾両宛、

右之もの共、常々實體ニ相勤、別而先年逃散百姓有之節、出精相勤候ニ付、向後右之通御宛行被下之、直御抱被仰付候、其方手江附相勤候樣可被致候、尤只今迄其方江被下候、諸入用米金之內を以召抱候得共、右之通被下候上は、其分引落可相渡候、且又右之者共、此以後勤致等宜からざる義も有之候はゞ、其方致吟味、御勘定奉行江申達、暇出候樣可被致候、

八月

右之通揖斐十大夫江申渡候間、被得其意、上下勤之儀は、何もより可被申渡候、

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年正月、是月西國郡代窪田治郎右衞門建白、

西國御料所の儀に付、見込の趣申上候、○原十二條、今錄ニ第十一條、

一私手附手代の儀、當節柄、外御料所共事柄も違ひ、既に昨年來小倉表戰争の砌、戰地へ差出し、兵粮御賄、其外御用相勤、同所兎解後、引續苦心骨折、此上模樣に寄候ては諸家重役と應對、且平常とも折々引合の儀も有之、旁格式無之候ては、甚不都合の儀も有之、御體裁にも拘り候間、元〆、手附、手代共、三四人は支配勘定格、其餘元〆差續きのもの開平手附、手代共迄、御普請役格に被仰付候樣仕度、既に關東地廻り御代官方の內にも、手附、手代、元〆より以下四五人迄、勤役中、御普請役格、上下勤被仰付候的例も有之候間、右に見競べ候ても當然の儀に御座候へども、右に不拘、此度の儀は、外御料所御見競以下本書不詳

指令書ヲ窪田治郎右衞門ニ下ス、○中略

一十一ヶ條目、其方手附、手代格式の儀は、名前取調可申立候事、

飛驒郡代

〔吏徵別錄 布衣以上〕飛驒郡代　安永六年丁酉五月廿四日、始置二一員一、同年八月日、座順定、

〔天保六年武鑑〕飛驒國御郡代　飛驒、加賀、越前、美濃、預所　布衣　本陣屋飛驒高山　出張越前本保、同美濃下河邊、　豊田藤之進

〔吏徵 布衣以上〕飛驒郡代一人　御勘定奉行支配　燒火間　四百俵高　諸入用金八百兩、米百貳拾人扶持、支配所ニ而十万石　飛驒高山在陣　御暇、時服三、羽織、　引越拜借金百兩

〔浚明院殿御實紀 三十九〕安永七年十二月二十五日、飛驒國郡代大原彥四郎紹正、在職のうち廩祿四百俵たまふ、

〔吹塵錄 德川氏 三十一〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不レ被レ下、是迄之場所高に不レ拘、今度御改正、別紙之通御役金被レ下候旨被二仰出一之、

御役金被レ下高之覺

一金三百兩宛　但高に不レ拘被レ下　飛驒郡代

〔吏徵附錄 郡職〕飛州地役人　頭取六人　同格一人　地役人三十人　見習六人

攝津河內郡代

〔大猷院殿御實紀 二十二〕寬永十年四月十五日、攝津河內郡代須田次郎大夫廣莊二子、次郎太郎祗寬初見し奉る、

尼崎郡代

〔台德院殿御實紀 六〕慶長十二年九月廿日、建部內匠頭高光入道壽德卒す、その子內匠頭光重、父と同じく攝州尼崎の郡代たり、この入道は近江國の住人にて、宇多源氏の流なり、織田豊臣の兩家に歷事して、若州または尼崎の事を奉行せり、

參河郡代

〔貞享五年武鑑〕參州御郡代　七百石　布衣　中嶋與五郎

○按ズルニ、延寶ノ江戶鑑ニハ、之ヲ三州御奉行トシタリ、元祿ノ武鑑ニモ此職ノ名見エタレ

ド、其後廢セラレシニヤ、寶永正德以下ノ武鑑ニハ見エズ、

〔東照宮御實紀九〕慶長九年、是年丹波郡代山口勘兵衞直友、駿河守に改め、〇下略

〔台德院殿御實紀五十八〕元和八年、是年郡代五味金次郞豐直は、丹波國の奉行となり、〇下略

〇按ズルニ、丹波郡代ハ後に京都代官ト稱セリ、事ハ代官篇京都代官篇ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

附郡奉行　地方奉行

郡奉行地方奉行ハ、共ニ數箇國ニ亘ル幕府ノ領地ヲ併セ支配ス、蓋シ郡代ノ如キ職ナルベシ、地方奉行ノ名ハ、慶長、寬永ノ頃ニ見エタルノミニテ、其後ニ見エズ、郡奉行ノ名ハ、寬永、寬文、延寶ノ頃ニ見エテ、貞享以後ニハ見エザレバ、何レモ早ク廢セシモノナルベシ、

〔大猷院殿御實紀二十九〕寬永十二年十一月廿七日、この日小出大隅守三尹、市橋下總守長政、國郡奉行命せらる、これ三河より西は市橋、東は小出と分ち、御料所のこと司りしなり、此後長政死して其子伊勢守吉親つぎ、三尹死して片桐石見守貞昌、この役を奉せしとなり、

〔大猷院殿御實紀五十二〕寬永十九年十月朔日、小出對馬守吉親、片桐石見守貞昌、東西郡奉行仰付らる、

〔嚴有院殿御實紀三十七〕寬文八年七月十八日、片桐石見守貞昌、願により郡奉行の職をゆるさる、

〔延寶八年江戶鑑〕御郡奉行　三千石、久永德兵衞殿、

〇按ズルニ、此職貞享三年ノ武鑑ニ見エズ、恐ラクハ廢職トナリシナラン、

〔憲敎類典三ノ二十六〕萬治二己亥年九月

新御殿付而、諸士著座之席、以壁書被仰出之所謂、〇中略

芙蓉之間〇中略　郡奉行

〔台德院殿御實紀十四〕慶長十五年、此年大河内孫太郎久綱、地方奉行、關東四十八万石の地を支配せしめらる、

〔大猷院殿御實紀三十九〕寛永十五年九月六日、崇源院殿十三年周忌の御法會、三緣山にて万部執行あり、〇中略地方奉行大河内金兵衞久綱、代官伊奈半十郎忠治等まかる、

〔大猷院殿御實紀三十九〕寛永十五年十二月五日、大河内金兵衞久綱、地方奉行をゆるさる、

〇按ズルニ、地方奉行ノ職、此外所見ナシ、

代官 村役人附

代官モ亦郡代ト同ジク幕府ノ領地ヲ支配スル職ニテ、勘定奉行ニ隷屬シ、陣屋ヲ置キテ、租稅ヲ徵集シ、爭訟ヲ解キ、農桑ヲ勸ムル等、其職郡代ニ異ナルコトナシ、要スルニ郡代ノ小ナルモノナリ、而シテ代官ハ、多クハ世襲ニシテ、久シク其地ニ居住シテ、常ニ領民ニ接スルヲ以テ、動モスレバ威權ヲ弄シテ領民ヲ困シメ、或ハ同僚、又ハ勘定所ノ勘定衆ト結託シテ、私ヲ營ム等ノ弊アリ、故ニ屢〻令ヲ下シテ之ヲ戒飭シ、其同僚及ビ勘定衆トノ緣組ヲ禁ジ、領內ニ於テ親ラ商賈手作等ヲ爲スコトヲ停止シ、凡テ町人百姓ヨリ賄賂ヲ貪リ、饗應ヲ受クルコトヲ得ザラシム、人員ハ、其領所ノ廢置分合等ニ由リテ一定セザレドモ、全國ヲ通ジテ、凡ソ四十人ヨリ五十人ニ至ルヲ定員トス、大抵食祿百五十俵高ニシテ、別ニ役料ヲ給セズ、但シ他ノ職務ヲ兼ヌルモノニハ、特ニ役料、役金、役扶持等ヲ給スルコトアリ、又別ニ口米ヲ與ヘテ、屬僚ノ手當、及ビ代官所一切ノ用途ニ充テシム、享保十年ニ至リ、口米ヲ給スル事ヲ廢シ、別ニ手當トシテ、其支配高ニ應ジ米金ヲ給スルコトヽナレリ、其他始テ此職ニ補セラル

職員
職掌

ル時、又ハ陣屋類燒ノ時ニ、拜借金ヲ爲シ、年賦ニテ返納スルコトヲ得ル恩典アリ、屬僚ニ手附、手代、書役等アリ、手代ハ、往々賄賂ヲ納ル丶モノアルヲ以テ、痛ク戒飭ヲ加ヘ、之ガ誓書ヲ徵セリ、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御代官　從前々在之　慶長九年甲辰五月朔日、置一員、今井九右衞門、　天和三年癸亥十一月廿五日、西國御代官野田三郞左衞門外八人、當分無役ニ入、○中略　享保六年辛丑閏七月三日、關東御代官三人、○中略　文化二年乙丑八月、定員五十人、

〔武家嚴制錄二十〕一上方關東御代官御條目

覺

一此已前より度々被仰出御法度之趣、彌無油斷可被申付、若疎略におゐては、可爲越度事、○中略

一御代官衆中、仕置念を入、率爲大切に存知、御役くらき儀不仕、每度苗木之種をふせさせ、山林竹木を植立、鄕村も次第よくなり候樣に可被申付事、

一每物正路にいたし、奢りもなく、心の及所、才覺を出し、御用無滯調之、御勘定引負不仕候樣に、常づね可被相嗜事、○中略

一御代官所之內は、私之借物幷諸商賣停止之事、

一御代官所にて、手作無用之事、

附開新田候場は、御勘定所江斷り其上可申付之事、

一御年貢米、下知なくして、其所にて拂之間敷事、

一關東方は、口米御納三斗七升入一俵ニ付一升宛、口錢は永百文ニ付而三文宛、上方之分は御納壹石ニ付三升宛也、御勘定之外不可取之事、

一每年納方割付、總百姓不殘見せ、加判致させ、以來迄無出入樣に可申付之事、

一御年貢米入念、升目高下無之樣ニ可申付之事、○中略

一御代官所中、公事有之時は、能々致穿鑿、濟候儀は勿論可被申付之、若落著難成儀は、證據取集、奉行所江指越可申事、○中略

右之條々、已前より度々雖相觸候、彌無油斷入念、仕置かたく可被申付候、若於油斷は、可爲越度者也、

寛永廿一年申正月日

上方御代官衆中

關東御代官衆中

〔憲敎類典五ノ四上地方〕享保十乙巳年十月

一各御代官所口米之儀、當巳年ゟ被相納筈ニ候間、被得其意、小物成之口米共ニ、只今迄取來候分は、不殘御物成同前ニ可有御藏納候、尤口米之分、只今迄之通、鄉帳ニは除之、御勘定ニは別格ニ可被相立候、

一口米之儀、本途小物成之分、米金銀書譯は、年々十一月中、可被差出候、

一口米金銀ニ而取立候分は、御金藏江上納米ニ而取立候分は、金納之積り、直段遂吟味、年々十一月中、可被相伺候、其上ニ而金納米納之儀、可及差圖候、

一但州生野銅山口銅

一野州足尾銅持籠代

一上州甘樂郡砥山口砥

一八丈島口紬

右四ヶ條は不及御藏納、有來通請取可被申候、

○按ズルニ、是ヨリ前ハ、口米ヲ以テ代官所一切ノ用途ヲ支辨セシメシガ、享保十年以後ハ、代官所ノ用途ハ別ニ之ヲ給シ、口米ハ悉ク上納セシムルコトヽナレリ、故ニ此令アルナリ、猶用途ノ條ヲモ併セ看ルベシ、

〔憲教類典五ノ三下地方〕條々

一民は國之本也、御代官之面々、常に民之辛苦を能さつし、飢寒等之愁無之樣可被申付事、〇中略

一御代官之面々、常ニ其身を愼み無奢、民之農業細かに存之、御取ケ等入念、宜樣に可被申付之、總而諸事手代に任せず、自身被勤儀肝要候、然時は其手代末々迄、私有之間敷事、

一面々之儀は不及申、手代等ニ至迄、支配所之民、私用ニつかはず、并金銀米錢民より借用、又は民江かし不申樣に堅可被申付事、

一堤川除道橋等、其外諸事常々心に掛ケ、物毎不及大破時、支配所江達し可被加修理、并百姓爭論ケ間敷儀有之節は、かろき内に聞屆、内證にて可相濟儀は、依怙贔屓なく、不及難儀樣に可被申付事、〇中略

右條々、堅可被相守者也、

延寶八申年閏八月三日　堀田備中守〇正俊在判

御代官中

〔御當家令條三十二〕覺

一年々御代官之面々、仕置不宜付而、御藏入之諸民、令困究之段、被及聞召之條、万事入精可相勤事、〇中略

一自今以後、諸事御仕置等疎略之輩は、御僉議之上、急度被仰付ニ而可有之候間、油斷仕間敷事、〇中略

延寶八申八月十六日〇又見憲教類典

〔教令類纂二集百七〕延享四丁卯年四月　御勘定奉行江

今度朝鮮人御賄之御用相勤候御代官、御馳走人は勿論、總而其向より之音物、一切受納致ましく候、且又御馳走人之方ゟ、何ニよらす馳走がましき儀、堅く受申間敷候、右之段、手代等江も急度申付置、疎略無之樣可相勤候、

右之通堅相守候樣、御賄之御代官へ可被申渡候、

〔吹塵錄德川氏二十六〕戊午安政五年三月、勘定奉行より代官江申渡書、

午三月廿三日、於御殿攝津守土岐朝昌勘定奉行申渡、

御代官は、大切之御役と申儀、天明八申年、越中守殿被申渡候趣に而も、兼々心得可罷在事には候得共、第一檢見御取箇附之緩急、新田石盛附之勘辨、荒地起し返し、水利川除之利害、原野不毛之地江は、三草四木之植養、竹木之手入、村柄之盛衰、課役入費之多少、且は凶年飢歲之節、救方之覺悟、公事出入之取捌、常々厚心掛不申候而は、御國政難相立次第にも至り候、初發より其圖に當候樣には不行屆候とも、心掛次第に而、功者にも可相成、たとへ材能有之とも、心之用方等閑候得ば、終身不功者に可有之候、正德享保寬政度被仰出候御書付を熟慮いたし、家來召仕を始、手附、手代共に至迄心を配り、萬事慈悲を元にいたし、賞罰正敷、物好を禁じ、質素儉約を守り、其身之行跡正敷相勤候得ば、おのづから手附手代之邪正も明白に相分、其威權郡中江及し、國郡治らざると申義は有之間敷、素より一朝夕之修業にて、萬事功者に可相成筋には無之候得共、二三ヶ年も相勤候はゞ、事柄も相分り、諸般了簡出可申處、數年相勤候而も、矢張不案内に而、兎角御用向を手附手代に任せ、其者共之あなどりを請、不正之取計も出來いたし、彼等之邪正、民間之盛衰に不心附、自己之都合を謀り候面々も有之哉に相聞、以之外之事に候間、先年越中守殿被申渡候趣、無違失厚く相心得可申候、

一御年貢其外御用金納拂は、御代官勤向肝要之義、聊も油斷有之間敷筋に而、町人共に預置候樣之義、決而致間敷候處、近來右樣之義に而、度々吟味願いたし候面々も有之、不束之事に候、以來右樣之子細出來候はゞ、屹度被仰付候品も可有之候、手附手代は、御代官之手足に候、手足僅に不叶に候へば、何事も心に任せざるものに候間、手附手代之召抱、聊私情にひかれず、人撰專要之事に候、

右松伊賀守殿〇老中松平忠優被仰渡候間、被得其意、聊無油斷、御役筋之義、格別差はまり、可被相勤候、尤以後町人共江預金不被致、御金藏納メ日限遠に而、不都合に候はゞ、手繰次第臨時納之義、何ヶ度も可被致候、

午三月

〔續地方落穗集〕所務之仕置之部

代官役、神文前書、大概可書載品之事、

起請文前書

一今度何方御代官役被仰付候上者、御爲を第一に奉存、併跡々被仰出候御法度之趣堅相守、自今以後、被仰渡候儀、違背仕間鋪之事、

附手代召仕、幷御代官中町人百姓等にも、右之通堅相守候樣、無油斷可申付事、

一雖誰人被賴之、對御爲後闇儀、聊以一味仕間鋪候、此旨手代等江も堅可申付事、

一御代官所村々、毎年念を入撿見仕、御取箇之儀及心之程遂詮議、萬事御爲ニ能、百姓も困窮不仕候樣、小撿見步行等念を入、御取箇中道ニ有之樣可申付候、幷堤川除御普請御作事等入用之儀、自分之御代官所不及申、同役支配所之內之御用被仰付候所共、御費無之樣、隨分入念可仕候、總而寺社人町人百姓方より、金銀米錢衣類諸道具以下、輕き物をも一切受用仕間鋪候、勿論妻子

召仕之者、幷手代等にも、此旨相守候樣可申付事、

附振舞酒肴等、馳走ニ逢申間敷事、

一御代官所御仕置之儀、被仰付候義は勿論、及心之程精々入念、私欲不仕、御爲罷成、土民其々成候樣、考可申付事、

附御年貢金銀米錢、何にても、納拂之儀、成程念を入、無贔屓偏頗、每物正路ニ可仕候、勿論納金銀取立次第上納、借方一圓仕間敷事、

一手代召抱候節、贔屓諸緣之儀ヲ離、成程遂吟味、御爲ニ能者を可召抱候、縱自分之苦勞ニ成候者有之候とも、無覺束者に地方預ケ申間敷事、

一御用之儀ニ付、村方巡見被遣候節、衆幷同役中寄合相談仕候節、不殘心底存寄申出、多分ニ付、御爲能樣、可令落著事、

一公事訴訟有之節は、雙方申分、念を入承知仕、及心之程遂詮議、早速於可相濟儀者、無移時日、依怙贔屓不仕、有體に可令裁許事、

一寺社人町人百姓等ゟ、金銀米錢借用仕間敷、幷不作法之好色、一切仕間敷事、

一以御威光私之奢不仕、對町人百姓非儀之儀申掛ケ、或者非分之買物仕間敷候、此旨手代之者召仕等にも、堅く可申付候事、

〔政談〕三一代官ト云役ハ重キ役也、其昔國郡ノ官ヲ在京ヨリ兼テ、其國郡ニハ名代ヲツカハシ置タルヨリ起テ、代官ト云名アリ、公家ノ召仕ニ受領ヲサセナガラ在京サセテ召仕ヒ、其國ノ所務計ヲサセタリ、又平家ノ公達モ越前ノ三位、能登守、薩摩守ナドノ類皆其國ヘハ行ザリシ也、郡司ヲ在京サスレバ郡代ヲ遣シ、丞ヲ在京サスレバ判官代ヲ遣シ、目ヲ在京サスレバ目代ヲ遣ス、サレバ文官ナル故、戰國ノ時分ニ、是ヲ輕シメテ腰拔役ト云タルヨリ、今ハ地方ノ支配

ト成、小身者ヲ申付、然レドモ其下司ハ手代ト稱シテ、殊外ニ賤キ者ヲ付置テ、年貢ノ取立ヨリ外ニ、肝心ナルコトハナキト心得ルコト、以ノ外ノコト也、其身立身ノ望モナク、下劣ナル役儀ト云コトニナリテ、シカモ少身ナル故、ヲノヅカラ奸曲ヲシテ、御仕置ニ逢人絶ヘヌ也、〇中略願ハクハ二三千石以上ノ人ヲ申付、役儀ノ名ヲカヘ、下役ニ今ノ代官位ノ人ヲ申付ヲキ、武備モヲノヅカラ備ハルヤウニシ、刑罰ヲモ、軽キコトハ其所ニテ執行ハセ、專民間ノ治ヲ第一トシ、農業ノ筋ヲモ、民ノシラヌコトアラバ是ヲ敎ヘ、川除堤普請ノ類ヲモ申付、盜賊博奕等、邪宗邪法ノ類ヲモ是ヲ押ヘサスベシ、

〔敎令類纂初集八十八〕寛文六丙午四月廿八日

覺〇中略

一御代官衆仲ケ間、幷御勘定衆共、新規ニ緣組養子等被仕間敷事、

〔大猷院殿御實紀二十〕寛永九年七月廿六日、諸國巡察の輩、暇たまふ、〇中略關東は、〇中略代官豐嶋作右衛門忠次、

〔常憲院殿御實紀五十一〕寶永二年五月二十一日、この日關東郡代伊奈半左衛門忠順は深川修治の奉行、代官二人は、淺草川修治の奉行にあてらる、

〔松屋筆記三十七〕御代官の碑を建て土民祭祀する事

近來有德の御代官、死して後土民その墓を作り、碑を建、或は叢祠を建て祭ること有、竹垣三右衛門といへる御代官の碑を建て、下總人祭れりといへり、〇中略因に云、近來の御代官に、早川八郎左衛門、大貫次右衛門、小野田三郎右衛門など、其仁德世に風聞す、此人々は、上に忠有て諛はず、下に惠有て猥ならず、早川小野田は、手附に山崎新次郎あり、竹垣は、手附に松岡啓右衛門あり、此二人、躬儉約にして、情謟に通じ、よく上につかへ、民を治たりき、大貫の手附にも、さる人ありけるにや、

寳格律錄

〔明良帶錄世職〕御代官（百五十俵高、駿河御藏江戸廻御役料三百俵、甲府御藏掛御役料二百俵、勘支燒馬喰町詰は二十人扶持）諸國御代官、何れも土地の事に明るく、地方井田の諸術を廣く學び、功者に働く仁は、御加增地、御預地、國郡を手廣に持切を手柄とせり、是より御郡代へ昇る、○中略以前は御目見以下、御郡代方調役とて勤たり、今は以上之御役人となる、是へは諸向より被仰付、御鳥見、同組頭、御勘定向より昇る、岡田新八郎は御鳥見より昇り、岡田清助は御儒者より昇り、安永の度原田清左衛門は御同朋頭より昇る、同時の力石蘇之進は駿河御城代與力なりしが、江戸に至り、御留守居與力より御代官に至るは賄賂をもつて吹擧せられ昇りたり、○中略御代官は世職なれ共、武島左膳が子息の代には、支配向行屆ず、小普請入被仰付、後放蕩の御咎によりて、寛政の度に改易となる、

御郡代―御代官
- 御鳥見
- 同組頭
- 御勘定
- 御同朋
- 御儒者
- 與力
- 同僚[illegible]役
- 出役類

世職なれ共、筆算其外業に堪へたる者は昇進す、右に記す同僚より經昇すれば、職業に明るし、

〔政林小書〕布衣御代官道中供立

一具足一荷　一建弓壹肩　一鐡貳筋　一挾箱貳ツ　一長柄傘一　一用達一人　一侍四人

一侍三人　一足輕中間六人　都合拾四人（此外雇人ニ而召連申候）

右之通、道中供人召連可申哉奉伺候、以上、

亥二月　　大貫次右衛門

御附紙　書面伺之通たるべく候

〔吏徵 御目見以上 上〕御代官五十人　御勘定奉行支配　燒火間　百五十俵高　關東十万石高貳人、御役料三百俵、　馬喰町御用屋敷詰貳人、御役扶持廿人扶持、　駿府御藏懸壹人、御役料三百俵、甲府御藏懸壹人、御役料貳百俵、

攝河州堤奉行、并廻船改兼帶貳人、御役金八十兩、御役扶持十五人扶持、　諸入用金五百五十兩至ニ七百兩、米七十人扶持、支配所高五万石　役所　御暇、時服貳、　遠國引越拜借金貳百五十兩

〔德川禁令考 三十五 代官諸入用〕享保十巳年

御代官不足金并品々存寄伺書 ○中略

一江戸廻り御代官は、地方之外臨時之入用有ㇾ之に付、只今迄御役料五百俵宛被ㇾ下來り申候、右臨時入用致ㇾ吟味ㇾ候處、百兩程之儀御座候間、自今御役料三百俵被ㇾ下候樣にと奉ㇾ存候、

〔憲教類典 二ノ五 御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上御役勤候內、御足高并御役料定、

百五拾俵高 取來御扶持方共 ○中略　　御代官 寛保三亥七月極ル ○中略

〔憲教類典 二ノ五 御役〕寛保三癸亥年二月

御代官所外御用相勤候節、入用被ㇾ下候定書、

御代官被ㇾ越候論訴撿使

一御代官は、分限高に而御扶持方被ㇾ下候、

關不ㇾ越時ハ五割增　關越候時は一倍增　關無ㇾ之所ハ貳拾五里迄ハ五割增、貳拾五里ゟ外一倍、

但右いづれも、出立之日ゟ歸著迄可ㇾ請ㇾ取之、

○按ズルニ、此外城引渡、新田見分、普請所見分等之入用モ此ニ同ジ、

〔憲教類典〕御役二ノ五 寛保三癸亥年二月

御代官所外御用相勤候節、入用被下候定書、○中略

堤方廻船方御用

一金八拾兩、拾五人扶持宛、　堤方御代官兩人、○中略

右米金、二月七月十一月三度ニ、御藏ゟ可請取事、

但右御用ニ付、被下候拾人扶持ハ、向後相止候、

〔政林小書〕御代官陣屋引越、道中御入用被下方之事、

一代官召連候人數八人　用達一人 足輕一人　侍二人 中間四人

但美濃郡代、西國郡代、飛驒郡代は、本文人數之外、侍一人、中間一人相增候に付、右之分、旅籠錢一人當を以御入用相立候、

外 手代一人 書役一人　但手代小もの一人

右之通人數ニテ、自分幷手代書役迄ハ、旅籠代一人ニ付、一泊錢百文、一晝錢四拾八文、用達、侍、足輕、中間、小ものは、一人ニ付、一泊錢八拾文、一晝錢四十文之積、

一人足七人　但駕籠人足幷歩持人足之積

一長持一棹　但持人足

一本馬五疋幷川越賃船賃共

右ハ御定之通賃錢被下候積

一家內一同引越候節ハ、親妻嫡子之分ハ、一人ニ付、侍一人、中間貳人宛之積、其身幷召連候もの、前書之割入を以御入用相立、次男厄介之分は、寛政四子年相極候通可被下候、○中略

拜借金

右之通相極候段、御代官へも申渡候、依之申上置候、以上、

天明元年丑閏五月　御勘定奉行　同吟味役　同勘定方

〔憲教類典五ノ四上地方〕享保十乙巳年十月

向後御代官役被仰付、又は居宅類燒有之度々、御用達場、公事場、勘定場、手代、書役、侍、足輕、中間、御役に付差置候小屋爲書請料、御代官所高五万石は金百兩、拾萬石は金百五拾兩、拾五萬石は、金百八拾兩之積りを以、拜借被仰付、五ヶ年に返納之積りに候間、拜借仕度面々は、御代官所之高に應じ、可被相伺候、尤右金高は、手代、書役、侍、足輕、中間、不殘御代官宅に差置候積り、右人數之内、陣屋に差置候面々は、書面之割合を以拜借高を減、可被相伺候、

但御代官役被仰付候節之御取替金は、向後相止候、

〔勘契備忘記上〕享保十巳年

御代官不足金并品々存寄伺書

一御代官御役之儀は、手代等も有之故、不相應に人數召抱候ニ付、御役被仰付候砌、又は類燒仕候節は、手代長屋、公事場、勘定場等、早速相立候ニ付、入用多相掛、自分物入ニ而は難成、自ら御年貢金も遣申候、依之右之節は、拜借被仰付候樣仕度奉存候、右拜借高、下ヶ札ニ認申候、

但今迄は御役被仰付候砌、上方御代官は貳百兩、關東御代官は百兩宛、御取替金拜借被仰付、自今下ヶ札之通、拜借被仰付候得ば、右御役被仰付候節之御取替金は相止申候、

下ヶ札

高五万石支配仕候者拜借高

一金百兩　當時ハ九拾兩

是ハ御代官御用達場公事場共七坪、勘定場拾坪、手代拾人、長屋九拾坪、書役足輕中間拾九人、

長屋拾七坪餘、合百貳拾四坪之入用、一坪ニ付金三分宛之積、

高拾五萬石支配仕候者拜借高

一金百八拾兩

是ハ手代其外人數相增候ニ付、右割合を以相積候、

高拾万石支配仕候者拜借高

一金百五拾兩　　當時ハ百四拾兩

右御代官宅ニ手代不殘差置候積、書面之通御座候、陣屋等有之分は、其前に手代書役等差置候分、右割合を以拜借高減シ可申候、但返納之儀、五ヶ年ニ上納候積可仕候、〇中略

金高左之通御座候

合金五千三百兩餘

但巳より戌迄、三拾ヶ年賦ニ仕候、〇中略

右之通奉伺候、以上、

巳八月

右之通伺之上相極ル

享保二十一辰年

御代官拜借之書付

御代官拜借之儀、上方御代官ハ金貳百兩、關東御代官ハ金百兩、御代官所高之無差別、御役被仰付候時拜借、翌年ゟ貳ヶ年之內、返納仕候處、享保十巳年、諸入用被下候時ゟ相止、左之通被仰付候、

一金九拾兩　　高五万石陣屋無之御代官　　拜借

一金六拾兩　　高同斷陣屋有之御代官　　同

陣屋役宅

一金百四拾兩　高拾万石陣屋無之御代官　同

一金七拾兩　高同斷陣屋有之御代官　同

一金百八拾兩　高拾五万石陣屋無之御代官　同

一金百兩　高同斷陣屋有之御代官　同

右者御用場手代家來等差置候爲家作料、關東上方之無差別、御代官被仰付候得ば、右之通拜借被仰付、五ヶ年ニ返納仕候、依之類燒仕候得ば、又右之高、〇以下文缺

辰三月〇中略

一右之通御座候間、唯今迄之通、御役被仰付候時、幷類燒之節、拜借被仰付候方可然奉存候、

一右家作拜借、唯今迄は被下候諸入用をはぶき、五ヶ年ニ返納仕候得共、此度伺之通、諸入用減候はゞ、はぶき候金子も少々御座候ニ付、拾ヶ年賦ニ返納被仰付、可然奉存候、

此ヶ條、只今迄之通ニ相極ル、

一右返納不相濟內相果候歟、又は御役退候者は、唯今迄之通年數を相延し、御切米の內ニ而可成程返納爲仕候得ば、差支之儀無御座候、

此ヶ條、當人相果候はゞ棄捐ニ成候積相極ル、

右之通伺之上相極ル

〔泰平年表大御所〕文化十四年十二月廿一日、御代官金御貸附御改正、江戸御代官取扱候所、此度馬喰町御用屋敷詰御代官にて、一纏に取扱相成候に付、此節より元利納方の義ニ付、右御用屋敷御貸付役所へ、上納有之候は勿論に候所、當時納時節ニ候へども、上納方否御貸附役所へ申立無之相見候間、各樣御知行所の內、御貸附借受有之面々未納之分、爲御心得御達申候趣、御勝手方御勘定奉行服部伊賀守、古川山城守懸り、吟味役勝相兵衛ゟ諸向へ達書有之、

〔政林小書〕陣屋建坪之事

一新規陣屋之建坪貳百三拾坪を限り、右之外相增候時は可伺事、

支配所へ引越候御代官、陣屋無之、新規ニ取立候節、吟味手間取引越延引候間、向後は貳百三拾坪程と極置、右坪數相減候分は不苦候間、繪圖仕樣帳、更ニ爲指出、吟味不手間取樣可被致候、

但右之外、坪數不相増候而者難叶譯有之候はゞ其時々吟味之上、譯立候義ニ候はゞ、可被相濟候、

右之通相心得、向後吟味可仕旨、志摩守殿總寄合ニ而、若狹守殿被仰渡候、以上、

丑五月十九日

右ハ御勘定所御張紙、安永九子年八月寫來ル、

申渡

御代官所御領所共、陣屋修復建直等之儀、伺之上取計候も有之又は御屆而已にて取計候義も有之、區々に付、以來建直は勿論修復にても、廉立候入用相掛候節は、御勘定所へ伺之上、取計可申旨被仰渡奉畏候、銘々御代官より可申聞候、右爲御受申上候、以上、

文政四年卯十二月

中ノ間改方河合內藏助殿被仰渡候

〔德川禁令考三十五代官諸入用〕享保十巳年

新規御代官、幷類燒之節、御用達場公事場手代長屋等、入用積り拜借書付、

支配高五萬石陣屋無之分

一御代官御用場公事場　七坪　　一手代御用達場　拾坪

一妻持手代五人　五拾坪但壹人ニ付、拾坪之積、　　一無妻手代五人　四拾坪但壹人ニ付、八坪之積、

一書役貳人　四坪但壹人ニ付、貳坪之積、　　一侍三人　四坪

一足輕壹人　貳坪　　一中間十三人　七坪

坪數合百貳拾四坪、此入用金九拾三兩、但壹坪ニ付、金三分之積り、是ハ拜借之積り、

右同斷陣屋有之分

一御代官御用場公事場　七坪　一手代御用達場　拾坪
一妻持手代三人　三拾坪但壹人ニ付、拾坪之積り、　外貳人ハ陣屋住宅之積リ
一無妻手代貳人　拾六坪但壹人ニ付、八坪之積り、　外三人ハ陣屋住居之積リ
一書役貳人　四坪但壹人ニ付、貳坪之積り、　一侍三人　四坪
一足輕壹人　貳坪　一中間拾三人　七坪

坪數合八拾坪、此入用金六拾兩、但壹坪ニ付、金三分之積り、是ハ拜借之積リ、○以下支配高拾萬石、拾五萬石坪數今略、

元文元辰年

御代官所陣屋修復等之儀書付

御代官中、支配所住宅之陣屋手代長屋共、普請御入用立候儀、先達而相極候場所之分は、有來通ニ可致候、其外願ニ而、支配所へ住宅之面々、陣屋、手代長屋修復共ニ、只今迄は自分入用を以致來候得共、江戸住宅之御代官手代計、支配所江遣置候時は、手代差置候陣屋普請修復入用、村役ニ致來候、然上は御代官願候而、支配所ニ住宅候とても、御代官住居之所は、自今入用ヲ以て仕立、手代差置候所之分は、村入用を以、可致筈ニ候、依之此度何も相談之上右之通相極候間、向後右之類御代官より申出候はゝ、江戸住宅ニ而、彼地陣屋ニ差置候手代人數幷普請修復等之譯、委細吟味之上、村入用可割懸事、

辰六月

元文元辰年

御代官支配所住宅之陣屋普請入用之儀ニ付書付

一京　一大坂　一奈良　一大津　一但馬　一美濃　一駿府　一甲府

右御代官所陣屋之儀、只今迄御入用を以仕立候も有之、自分ニ仕立候も有之候、向後は小破之分は、自分入用を以仕立、自分ニ而難成程之修復は、廣キ分縮メ、新規修復共、入用其度々御勘定所江相伺、入用金銀、郡中割ニ可致筈、尤高ニ應シ、壹ヶ年或二三ヶ年にも割合、取立可然旨、松平左近將監江窺之上相極候、

一肥後　一天草

外肥後國茂木村役人小屋

是ハ伺書ニ洩候ニ付、辰七月内寄合ニ而、何モ相談之上、郡中割之積リ相極ル、

一丹後　一美作　一備中　一石見　一豊後

右ハ引越被仰付候節相伺、不殘郡中割ニ相極ル、

一大和　一近江　一播磨　一隱岐　一伊豫　一三河　一遠江　一伊豆　一相模　一甲斐

一越後　一越前　一信濃　一飛驒　一下總　一陸奥　一出羽

右國々陣屋之分も、前々之通、郡中割之積リニ候、

辰七月

〔嘉永三年武鑑〕諸國御關所御番

大津御代官、河内、大和、丹波、近江、大津御役屋舗詰、同所町御蔵行兼帶、　御躑躅間布衣　石原清左衛門三百俵

武藏、相模、駿河、伊豆、并島々、屋敷伊豆田方郡韮山、屋敷三島、　御躑躅間布衣、　江川太郎左衛門百五十俵

武藏　御躑躅間布衣　大熊善太郎

陸奥陣屋奥州川俣、出張梁川、同州小名濱、　躑躅間布衣

武藏、相模、江戸廻支配、御役料三百俵、　布衣躑躅之間

武藏、下總、　布衣躑躅之間

諸國御代官燒火之間高百五十俵　□印本陣屋△印出張陣屋

近江、伊勢、美濃、大和、屋敷江州信樂△東海道四日市

出羽□柴橋△寒河口

信濃□中ノ條村△御影

但馬、美作、播磨、□但馬生野

武藏、下總、

駿河、遠江、信濃、□駿府△信州飯嶋

下總

甲斐□甲府

陸奥□桑折

陸奥△奥州田島

武藏、上野、下野、

甲斐□市川

武藏、上野、下野、

安房、上總、下總、

越後□出雲崎△脇野町

常陸

青山録平百俵五人フチ

多羅尾久右衛門千五百石

吉田條太郎二百五十俵

鈴木大太郎七十俵五人フチ

望月新八郎七十俵五人フチ

齋藤嘉兵衛七十俵五人フチ

大草太郎左衛門百俵

小林藤之助百五十俵

嶋田帶刀百五十俵

小笠原信助百俵七人フチ

竹垣三右衛門百五十俵

岩田鍬三郎二百俵

篠本彥次郎二百廿八俵二斗

小田又七郎七十俵五人扶持

支配所	氏名
石見、備後、△□石州大森備後上下	森八左衛門 二百俵
大和□大和五條村	內藤杢左衛門 二百廿六石二斗
駿河、遠江、信濃、□駿府紺屋町△駿州島田△信州飯嶋	寺西直次郎 百俵五人フチ
陸奥、常陸、△□奥州塙村奥州淺川	荒井清兵衛 百俵
備中、美作、△□備中倉敷同笠岡	藤方彥市郎 四百俵
甲斐△□石和谷村	佐々木道太郎 二百俵
武藏、上野、△上州岩鼻	林部善太左衛門 七十俵五人フチ
出羽△□尾花澤赤根	戸田嘉十郎 七十俵五人フチ
遠江、三河、△□遠州中泉村三州赤坂	岡崎兼三郎 百五十俵
陸奥□川俁△梁川△小名濱	勝田次郎 廿六俵三人フチ
甲斐□甲斐市川	福田八郎右衛門 百五十俵
信濃□信州中野	高木清左衛門 百俵五人フチ
攝津、河內、和泉、御役宅大坂鈴木町	設樂八三郎 百五十俵
肥前、肥後、筑前、△長崎住居肥前富岡	高木定四郎 百俵
山城、河內、丹波、京町御奉行支配御役宅京二條	小堀勝太郎 六百石
山城京町御奉行支配京都住居	角倉鍋次郎 二百俵
父清左衛門御用手傳	石原清一郎
越後□越後川浦	里見源左衛門 七十俵五人フチ
攝津、河內、播磨、御役宅大坂谷町	川上金吾助 七十俵三人フチ
但馬、丹後、□久美濱	增田作右衛門 七十俵

用途

○按ズルニ、代官ノ數ハ、其支配所ノ廢置分合ニヨリテ一定セズ、延寶六年ノ武鑑ニ載セタルモノ四十一人、寛政四年ノ武鑑ニ載セタルモノ四十七人、慶應三年縣令集覽ニ載セタルモノ三十八人アリ

〔德川禁令考三十五 代官諸入用〕享保十巳年

御代官不足金、幷品々存寄伺書、

御代官不足金有之、御勘定滯候得ば、御仕置にも成、其上去ル寅年、不足金年賦に被仰付、不足金無之樣に可仕旨、常々申渡候得共、御役御免、又は相果候得ば、不足金出來仕候に付、先達而申上候趣を以、向後之儀相改候覺、

一總而御代官之儀、凶年之節は御口米減、又は米直段下直之節は、御口米拂代金多ク、其上御口米は、暮に至取立候ニ付、春より之諸入用米金他借仕、或は御年貢金繰替遣候儀有之に付、御役御免、又は相果候節は、御勘定立兼、御損失出來仕候ニ付、先達而申上候通、當年より、御口米は不殘相納させ、御代官江、御入用米金に而被下候樣にと奉存候、依之御代官をも不殘吟味仕候處、右之通諸入用被下候得ば、向後決而御役に付不足成儀無之由、書付差出申候、

但右入用米金之儀、毎年三分一宛、二月、七月、十一月三度に相渡可申候、

五畿內、海道、北國、關東、東國筋御代官所江、道法百里程之場所、

一高壹万石ニ付 拾四人扶持金百貳拾兩宛被下候積り

中國筋御代官所江、道法貳百里程之場所、

一高壹万石ニ付 拾四人扶持金百三拾兩宛被下候積り

西國御代官所江、道程三百里程之場所、

一高壹万石ニ付 拾四人扶持金百五拾兩宛被下候積り

右三口共　高五萬石之御代官所は、右之割を以入用被下、五萬石より多少有之分は、書面之割合に相應を以增減仕候積り、

〔憲敎類典 五ノ四 地方 上〕享保十乙巳年十月

御代官役被相勤候ニ付、諸入用別紙書付之通、當巳年ゟ米金ニ而被下候、右入用米金高は、各ニも被書出、右之高被下候得共、向後決而諸入用不足無之由、書付被差出、右書付を以、員數相極被下候上は、向後決而諸入用不足之儀は無之事ニ候條、可被得其意候、

〔憲敎類典 五ノ四 地方 上〕享保十乙巳十月

覺

五畿內、海道、北國筋、關東、東國、

山城、大和、攝津、河內、和泉、播磨、近江、美濃、伊勢、三河、駿河、遠江、飛驒、信濃、越前、武藏、相摸、下總、安房、上總、常陸、上野、下野、伊豆、甲斐、陸奧、出羽國、御代官所、

一高五万石 金六百兩 米七十人扶持

但壹万石ニ付 金百貳拾兩 米拾四人扶持

中國筋　備後、但馬、備中、丹後、美作、石見國、御代官所、

一高五万石 金六百七拾兩 米七拾人扶持

但壹万石ニ付 金百三拾三兩 米拾四人扶持

西國　豐後、豐前、日向、筑前國、御代官所、

一高五万石 金七百五拾兩 米七拾人扶持

但壹万石ニ付 金百五拾兩 米拾四人扶持

右之割合を以

高三万石より內は、三万石分之入用可被下之、

高三万石餘は、四万石分之入用可被下之、

高四万石餘は、五万石分之入用可被下之、

一五万石之餘は、壹万石ニ付、金五拾兩、拾人扶持宛之割合ヲ以、支配高に應じ可被下之、

但五万石以上は、四千九百石餘迄は不被下之、五千石より右壹万石之入用米金可被下之、

一壹ヶ年入用米金、二月七月十一月三度ニ可相渡候、但銀遣之場所は、入用相渡候節之相場を以、銀ニ而可相渡候、

一御代官役御免、又は相果候節は、右入用米金、月割を以、相勤候月迄之分可被下之間、兼々其心得を以、諸入用手代給分等可被相渡候、

一諸御代官被仰付候はゞ、右入用月割を以、御役被仰付候月より可被下之、

但跡御代官被仰付候而も、先御代官其年之御勘定仕上候者江壹ヶ年分之入用被下、跡御代官江は、翌年より之入用可被下之、

一上知請取、又は知行渡候儀、縦五万四千石之御代官、上知千石請取、又は五万五千石之御代官、千石知行ニ渡候類ニ而、壹万石分之入用之儀、月割を以可令増減事、○又見ニ敎令類纂一

〔敎令類纂二集百七〕元文元丙申三月

覺

五畿內、海道、北國筋、關東、東國筋、○以下同ニ上文一憲敎類典、故略、

一高五万石　金五百五拾兩、米七拾人扶持、

但壹万石ニ付　金百拾兩、米拾四人扶持

中國筋、○以下同ニ上文一憲敎類典、故略、

一高五万石金六百貮拾兩米七拾人扶持

但壹万石ニ付金百貮拾兩米拾四人扶持

西國筋〇以下同二上文憲教類典一、故略、

一高五万石金七百兩米七拾人扶持

但壹万石ニ付金百四十兩米十四人扶持

右割合を以

高三万石より內は　三万石分之入用可ㇾ被ㇾ下候

高三万石より餘は　四万石分之入用可ㇾ被ㇾ下候

高四万石より餘は　五万石分之入用可ㇾ被ㇾ下候

高五万石之餘は、壹万石ニ付金五拾兩、拾人扶持宛之割増を以、支配高に應じ可ㇾ被ㇾ下候、

但五万石以上は、四千九百石餘迄不ㇾ被ㇾ下候、五千石より、右一万石入用米金可ㇾ被ㇾ下候、〇中略

右御代官諸入用、只今迄は高五万石、金六百兩、七拾人扶持ツヽ被ㇾ下候處、向後書面之通被ㇾ下候間、可ㇾ被ㇾ得二其意一候、以上、

〔憲教類典御役二ノ五〕寶暦九己卯年五月八日

堀田攝津守殿〇正亮　御直御渡、一色安藝守〇政統江、

御勘定奉行

御代官御役替、幷御免病死等之節、引渡之月迄、諸入用月割ヲ以、相渡來候得共、向後は御役替、幷御免病死共、翌月迄引渡候樣期月を定、夫迄之諸入用は可ㇾ被ㇾ下候、

右之通ニ候之上は、縱格別之譯も有ㇾ之延引候共、期月后諸入用は不ㇾ被ㇾ下候之間、可ㇾ被ㇾ得二其意一候、〇又見二教令類纂一

五月

〔憲教類典五ノ五地方〕天明六午年六月

御勘定奉行同吟味役江

都而御代官勤方出精之勤功を以て、支配高增地被仰付、又は其最寄ニ而當分御預り所被仰付候事、諸入用米金銀、支配所高ニ應被下置候、然ル處當時は增地被仰付候而も、增地不被仰付、以前之儘支配いたし、當分御預り所之義も、壹万石以下五千石以上之御預り所御代官壹人ニ而口々支配いたし、壹万石高之諸入用請取候而は、不益之諸入用被下候筋にも相當候間、以來增地等被申聞候之節は、前廣場所割取極候上申聞、御預り所之義も、子細も有之は格別、可成丈致勘辨、御代官所高と割込、不益之諸入用不相渡樣、向後可被相改候、御代官所割知行割之義は、格別御損益ニ拘り、重取扱ニ付、別而入念、吟味役打合、能々心を用ひ、評議をとげ、可被取計候、

但支配いたし來候御極高之內、追々私領渡等に相成、高減候分は、御極高之諸入用可被下候、

六月

〔教令類纂二集百六〕享保十八癸丑年二月

御代官江品々被仰渡

御代官所之儀、前方御口米ニ而、支配所諸入用不足ニ付、負金出來、御仕置にも成候故、御吟味之上、諸入用米金被下候、然ル上ハ、先達而も申渡候通、諸事質素ニ致し、遊興或は不相應之出會等、決而不致、負金も出來不致樣、同役相互ニ心を付相愼み、年賦上納金等有之面々は、彌以隨分儉約致、上納早々相濟候樣、可被心懸候、

〔教令類纂二集百六〕享保八癸卯十月

水野和泉守殿御渡〇中略

一御代官御役被召放、又は相果候跡ニ而引負有之節、其手代は不殘吟味は無之候得共、向後は懸詮議候樣、可被相心得候、此旨御代官江も可被申渡候、以上、

卯十月

〔德川禁令考三十四代官〕元文二巳年

諸國損亡ニ付、掛り切ニ御代官江申渡候書付、〇中略

一先年御勘定仕上之儀ニ付、大分之負金、貸方金、永年賦上納之積り被仰付、其上御口米ニ而不足之由ニ付、御吟味之上、諸入費金御扶持方被下候上は、諸事入用、手代其外召仕給分等、不足ニ付而之不埒は無之筈之處、段々不宜儀共相聞、各勤方吟味之儀、幷手代名主等不宜者、御仕置等之儀、此度別而被仰渡候儀共有之候、何も得心之上、右條々不相改場所、或は申渡被得其意候而も、申付方行屆兼、又は一向申渡得心無之、逐一遂吟味相伺候筈ニ候間、各ニも手代名主致方委細遂吟味、不屆成者於有之は、御仕置之儀可被相伺候、〇中略

巳七月

〔月堂見聞集十一〕一享保四年亥六月十三日申渡覺

御代官　能勢權兵衞

倅　追放

御代官相勤、大分引負仕候處、年々上納相滯、不屆至極ニ候、重き御仕置可被仰付候得共、以御宥免遠嶋被仰付者也、〇中略

鈴木小右衞門

亡父御代官相勤候內、引負在之候處、段々上納相滯候、急度可被仰付候得共、當時御役儀申付念入、其上自分御勘定無滯仕上候付、御用捨ヲ以テ其分被指置候、御代官可相勤候、尤負方之義、年々彌

無ㇾ滯上納可ㇾ仕候、○中略

立會　内藤日向守　大岡越前守　水野伯耆守　伊勢伊勢守

以上

〔天保十二年縣令集覽〕御代官　小堀主税

山城、河内、和泉、攝津、丹波、播磨、

禁裡御所方御用、幷山城大川筋御普請兼、

○按ズルニ、此職ノ事ヲ、貞享、元祿等ノ武鑑ニハ、上方御郡代トシ、又下ニ引ケル大猷院殿御實紀ニハ、五畿内奉行トモ云ヘリ、

〔京都御役所向大概覺書 一〕小堀仁右衞門○京都代官勤方之事

覺

一禁裏、法皇、女院御所、女御御里、一品宮共、諸御殿總御構、御門、所々番所、幷諸公家衆總築地門、御曲輪方々柵竹矢來、水道共、先役五味備前守時分ゟ御修復奉行相勤、右諸御殿以下破損之節、御所御附衆ゟ所司代江被ㇾ申上、吟味之上、ケ所付之書付を以所司代被ㇾ仰渡ㇾ候上、御附衆申合場所見分、所司代江相窺、御修復申付候事、○中略

一禁裏御米藏場ニ、五味備前守節者、筋目之家來幷與力同心附置、御物成納拂仕、御表向御拂之儀者不ㇾ及ㇾ申、御内證御入用、小帳取ㇾ之、聊之儀をも相改吟味仕候、是者御意味茂御座候旨、寬永年中、大猷院樣○德川家光御上洛之節、五味備前守江御直被ㇾ仰付ㇾ候由、先役ゟ申傳、今以仁右衞門、筋目之家來四人、幷下役附置、隨分入ㇾ念大切相勤申候事、

一法皇女院御所御米藏場ニ茂、家來兩人宛、幷下役人附置、右同前相勤させ申候事、

一禁裏院中宮方江被ㇾ爲ㇾ進、其外堂上方江被ㇾ下候御銀、御老中御證文、御納戸衆手形を以、相渡申候

事、○中略

一二條御城外御藏壹ヶ所、先規ゟ仁右衛門方江預り置候而、京土居之內村々、幷山城、河內、攝津、丹波御藏入之御物成米之內、三千百石餘納置、公家衆方領米、法皇女院御所、東山院樣、東福門院樣、明正院樣、深信解脫院樣被召仕候女中、其外禁裏院中之諸役人御切米御扶持方、所司代幷御所方御附衆裏判を以、定役人之者共附置、相渡させ申候事、

一一品宮樣、敬法門院樣、慈受院樣御合力米、幷新上西門院樣女中、照高院御門跡御家來、諸公家衆、二條御藏奉行山脇道立、禁裏法皇諸役人、幷所々御門番、辻番、上使屋敷番人江、御切米御扶持米高三千三百石程、山城、河內、攝津、丹波御藏入之村々御物成米之內、鄉藏ニ納置、年中割方役人附置、書替手形を以、相渡申候事、○中略

一二條御城內御修復、幷御具足、御弓矢、御鐵炮繕、諸色御入用金銀、每年渡り方、所司代幷御番頭裏判を以、相渡申候事、

一京都ニ御金藏無之候ニ付、每年金銀諸方定渡り御拂方、臨時渡共、前々ゟ仁右衛門御代官所納金銀を以相渡、自然臨時渡多、銀高不足有之候得ば、大坂御金藏ゟ、御老中御證文を以請取之、銘銘江相渡申候事、○中略

一山城木津川、宇治川、賀茂川、桂川、淀川筋、大川之分、兩側延長四拾壹里餘之處、御料私領共、往古者、所司代板倉伊賀守殿、其後板倉周防守殿支配、川除御普請被仰付、其次寬永年中、大猷院樣御上洛被遊候節、二條於御城五味備前守江、右川々支配之儀、御直被仰付候旨、其後仁右衛門迄相續、每春見分吟味仕候上、堤川除樋橋修理御入用、國役御普請等、御料私領共、仁右衛門方ゟ下奉行元〆、幷役人共所々ニ附置、先役ゟ之引付を以支配仕候、○中略

右御役儀者、先規所司代御勤、其後五味備前守江被仰付、只今者仁右衛門相勤申候、定御役儀如此

御座候、此外臨時ニ被仰付候御用共、品々相勤申候得共、定役之外ハ相除キ、并御代官所地方ニ附候御用之儀ハ除之候由、

但正德四午十二月指出候扣

〔大猷院殿御實紀 二十三〕寛永十年、此とし、〇中略京代官五味金右衞門豐直は、明年御上洛のとき、京にて御供の人々旅舍の事、幷比叡山堂塔構造の事もあづかるべしと仰付らる、

〔大猷院殿御實紀 五十五〕寛永二十年九月朔日、けふ禁裡附高木善七郎守久、天野豐前守長信に御黑印の條約を下さる、其文にいふ、〇中略万事の費、五畿內奉行五味金右衞門豐直より、先々の如く兩人の劵もて、其時に臨み受取べし、

〔勸契備忘記 上〕享保十九寅年

京都町奉行支配御代官御用向は御勘定奉行可取計覺

一京都町奉行支配御代官小堀仁右衞門儀、鈴木小右衞門儀、御代官所公事訴訟、幷自分へ懸候儀ハ、唯今迄之通京都町奉行、御取箇、在方御普請、夫食種貸、其外地方へ懸り候御用向ハ、向後町奉行へ不及相達、御勘定奉行へ兩人より直にも相達、御勘定奉行取計可申事、

〔營中御日記 十一〕寛永十一年八月、京都御代官五味備前守、〇豐直諸大夫被仰付、

〔吏徵別錄 上 布衣以上〕京都御代官〇中略天保五年乙巳五月廿六日、大坂御船手格、一代也

〔天保十二年縣令集覽〕御代官　小堀主稅

六百石　御役料千俵　京都所司代支配　京二條御役宅住居

躑躅間〇中略　御暇、時服貳、羽織、

〔吏徵附錄 世職〕小堀勝太郎 京都御代官　京都町奉行支配　高六百石　御役料千俵　在京　躑

〔京都御役所向大槪覺書 一〕京都諸役人御役屋鋪 并 組屋敷間數之事

御代官　小堀仁右衛門

右同人○中略

一役屋鋪東西四拾五間南北六拾四間

一手代屋鋪東西三拾壹間半南北五拾貳間

御代官御役屋鋪修復之事。○中略

各住宅御役屋敷、前方御入用を以屋作いたし置候處、段々引渡ニ成、破損有之節は、貳拾年餘以來、御代官所高掛村入用ニ而修復いたし來由ニ候、村懸之儀、御取箇ニ茂障候間、向後は連々建家をも減、少破之分は、手前入用を以繕之可被申候、總而京大坂住宅御代官衆御役屋鋪、新規修復共、村懸之儀、向後相止之候、各御役屋敷之儀は、各別之事ニ候間、修復自分ニ難成程之節は、相窺可被得指圖候、且又御代官所替抔有之節者、若自分建添候所も有之候ば、こぼち取候共、又は相對ニ而跡役江引渡候樣ニも可被心得候、尤建添抔被致候ば、其節可被相達候、

一在々ニ有之手代陣屋之儀、前々ゟ村掛之分者、有來通可被相心得候、不及申候得共、是又可成程者建家減少、修復入用多不懸樣ニ可被相心得候、且又新規幷修復等被致候者、其節可被申聞候、

以上、

右之通御勘定奉行中ゟ、辻六郎左衛門、小堀仁右衛門方江書狀ニ而申來候旨、享保二酉年五月二日、仁右衛門ゟ寫差出候、

覺

一拙者御役屋敷之儀、寛文年中鈴木伊兵衛相勤候節、公儀御入用を以、新規ニ出來仕候、

一延寶年中、五味藤九郎在役之節、公儀御入用を以、修復被仰付候、

一元祿三辰年、大破ニ付修復之儀、拙者方ゟ御勘定所江相窺候處、御代官所高掛りに申付候樣にと、御勘定奉行中ゟ證文到來、修復仕候、

一寶永七寅年、大風ニ而總屋根大破ニ付、是又御勘定所江相窺候處、御代官所高掛ニ申付候樣に

と、御勘定奉行中ゟ證文到來、修復仕候、

右御役屋敷建家、元來麤相ニ御座候ニ付、段々及二破損一候得共、小破之儀は、自分入用を以毎年修復仕、大破之節者相窺、右之通修復被二仰付一被レ下候、此外支配所ニ陣屋等無二御座一候、此度相願、江戸ゟ別紙之通申來候儀ニ者、無二御座一候、以上、

右之通、享保二酉年五月二日、小堀仁右衛門ゟ書付差出候、

〔吏徵別錄上上布衣以上〕京都御代官　寛永十一年甲戌八月五日、始置二一員、京都町奉行より兼帶、五味備前守、〇豐直　延寶八年庚申八月日、小堀仁右衛門、是五味藤九郎跡役也、已後代々役、

〔嚴有院殿御實紀二十〕万治三年十一月廿二日、小姓組番頭小出越中守尹貞、千四百石加恩ありて五千石になされ、京地の代官命せられ、伏見城代水野石見守忠貞ともに、大內の事とりはかるへしと仰付られ、今まで五味備前守豐直所屬の與力十騎同心卅人を屬せられ、別に同心二十人を增加せしめらる、

〔有德院殿御實紀五十四〕寛保元年十一月廿一日、京代官小堀左源太正誠うせければ、養子豐之助邦直、父の原職を襲といへども、幼稚の間は、一族西城小姓組十左衛門政良うしろみ沙汰すべしと仰付られ、布衣著する事をゆるされ、官糧千俵を賜ふ、

〔貞享三年武鑑〕五畿內御代官

四百石、豐島權之丞、　二百石、小川藤右衛門、　三百石、小堀源兵衛、　千七百石、今井七郎兵衛、　二百石、平野藤次郎、　五百石、上林峯順、　三百石、上林竹庵、　三百石、三田淸右衛門、　二百石、角倉與一郎、　二百石、木村總右衛門、　三百俵、末吉勘兵衛、　三百俵、万年傳兵衛、　万年幸助　六百石、森本忠兵衛、

〔天保十二年縣令集覽〕御代官竹垣三右衛門　百五十俵　攝津、河內、播磨、　大坂谷町御役宅

御代官上林六郎　燒火間　五百五十石　宇治御茶園支配　山城、河內、山城宇治住居

〔慶應三年縣令集覽〕御代官內海多次郎　八十俵五人扶持　堤奉行廻船役　御役料金八拾兩、十五人扶持、攝津、河內、和泉、御役宅大坂鈴木町

御代官中村勘兵衞　四十俵　大和　陣屋大和五條

御代官角倉與一　淀川過書船支配兼　躑躅之間　高知行代加茂川高瀨船拜領、二百俵、大和京都二條御役宅伏見、大坂、淀、

京都堤奉行御代官兼、角倉伊織、京都町奉行支配　躑躅間　高知行代嵯峨高瀨船拜領之、二百俵　山城

御代官過書船支配幷御入木山支配兼、木村宗右衞門、二百石、大和、河內、京都大佛前鞘町御役宅

〔翁草四十八〕角倉與一京都　高木作右衞門長崎等も、元は町人成を御取立有て、御代官被仰付、其外簑笠之助等、各御代官の末座たり、宇治御茶師上林又兵衞、上林門太郎抔も、先年は御代官を勤め、右之類たりしが、兩人共越度有て、御代官被召放、當時御茶師計故、御目見以下也、近江蘆浦觀音寺、是も先年は御代官を勤む、今は輪御門主の院室を預る而已、淀川過書船支配木村宗右衞門も、以前は聢と御目見以上の格にも無りしが、近世如何してか、格も宜敷成、○下略

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年八月十八日、和州一揆、火ヲ五條陣屋ニ放ツ、○中略代官鈴木源內ヲ誅スルノ建札、

大和國宇陀郡五條代官鈴木源內、元ジメ長谷川岱助、手附木村祐次郎、手代恒川正次郎、用人黑澤儀助、

此者共、近來違勅之幕府逆意を受、專ら有志のものを押付、朝廷と幕府と同樣に心得、僅三百年

以來の恩義を唱へ、開闢以來の天恩を令忘却、然も是が爲に皇國を辱め、夷狄の助と成事をも不辨、且收歛の罪も不少、罪科重大、依之加誅戮者也、

八月十八日

和泉代官

〔台德院殿御實紀十四〕慶長十五年、此年○中略小川甚右衞門正信、和泉の代官となり、○下略

〔延寶八年江戸鑑〕泉州御代官　三百石、松村彥右衞門殿、

○按ズルニ、和泉代官此外見ル所ナシ、

伊勢代官

〔延寶八年江戸鑑〕勢州御代官　百五十石、河合助右衞門殿、　二百石、佐野平十郎殿、

○按ズルニ、寬永以後ノ武鑑ニハ當職ノ名見エズ、

參河代官

〔東照宮御實紀九〕慶長九年、此年○中略松平淸藏親重は、父念誓親宅が原職を命せられ、入道して念誓と改め、三河の代官たり、

〔台德院殿御實紀二十〕慶長十七年、この年○中略松平淸藏親重は、三河國代官の職務を辭し、土呂鄕に住し、歲首每に江戸に出て拜謁すべしと命せらる、

〔大猷院殿御實紀二十九〕寬永十二年、此年○中略松平淸左衞門親正は三州代官となり、○下略

〔大猷院殿御實紀四十〕寬永十六年三月八日、代官松平淸左衞門親正は、遠江國掛川の鄕村引渡の事命せられ、いとま給ふ、

〔延寶八年江戸鑑〕三州御代官

二百俵、鳥山牛之助殿、　百石、平野三右衞門殿、　鈴木八右衞門殿

○按ズルニ、寬永二年以後ノ武鑑ニハ、參州遠州ノ代官トアリテ、兩國ヲ兼攝シタレバ、其比ヨリ當職ハ遠江代官ニ併セラレシモノナルベシ、

遠江代官

〔大猷院殿御實紀三十五〕寬永十四年七月十九日、代官万年七郎右衞門久賴死しければ、その子三

左衞門賴高とて、もと駿府につけられしを召かへし、家つぎて遠江國の代官たらしむ、

〔延寶八年江戸鑑〕遠州御代官

三百石、松平市右衞門殿、　百俵、万年三右衞門殿、　大草太郎右衞門殿、　百石、市野總大夫殿、

○按ズルニ、貞享五年、元祿五年ノ武鑑ニハ當職十八人トシ、元祿十一年ノ武鑑ニハ五人、寶永二年ノ武鑑ニハ、參州代官ヲ併セテ三人、享保十八年ノ武鑑ニハ信濃ヲ加ヘテ一人ナリシガ、後參遠二州ヲ領シタリ、

〔天保十二年縣令集覽〕御代官　小笠原信助

七十俵五人扶持　遠江、三河、　陣屋遠州中泉村　出張三州赤坂、駿州島田、

〔嚴有院殿御實紀二十三〕寛文二年正月十九日、駿河町奉行所隷の公田、こたび奉行の請により、代官に屬せしめらる、

〔延寶八年江戸鑑〕駿州御代官

二百石、石出半右衞門殿、　二百石、長谷川藤兵衞殿、　三百三十石、野村藤三郎殿、　百石、諸星總右衞門殿、

○按ズルニ、寶永ヨリ寛政ノ比マデハ、駿河代官ニテ參河遠江ヲモ支配シタリシガ、文化ノ比ヨリハ遠江、信濃ヲ支配シタル事、寶永二年、寛政四年、文化四年ノ武鑑ニ見ユ、

〔天保十二年縣令集覽〕御代官　池田岩之丞、百五十俵、　御藏掛ノ御役料三百俵　駿河、遠江、信濃、

陣屋駿府紺屋町　出張飯島島田

○按ズルニ慶應中、支配所ノ中、信濃ヲ除キシ事、慶應三年ノ縣令集覽ニ見エタリ、

〔憲教類典二ノ五御役〕寛保三癸亥年二月

御代官所外御用相勤候節入用被下候定書

甲斐代官

江戸廻リニ付御用

江戸駿府廻　御代官

一御役料三百俵ヅヽ

是ハ江戸廻リ駿府地方之外、臨時御用有ㇾ之ニ付、手代出役、其外品々入用之積リ、〇又見ニ教令類纂一

〔台德院殿御實紀十三〕慶長十五年七月五日、細田助右衞門吉時死して、其二子小兵衞重時つぎ、甲州代官たり、

〔台德院殿御實紀五十八〕元和八年、是年〇中略平岡次郎右衞門和由は、甲斐一國代官の長司となり、〇下略

〔有德院殿御實紀五十三〕寛保元年四月八日、甲府代官吉田久左衞門佳國、その府城内外の事つかふまつるをもて、官料二百俵賜はる、

〔天保十二年縣令集覽〕御代官松阪三郎左衞門

二百俵　甲府御藏掛役料二百俵　甲斐　陣屋甲府

御代官小林藤之助

百五十俵　甲斐　陣屋甲斐市川大門村

御代官篠本彥次郎

二百廿八俵貳斗　甲斐　出張甲州石和同谷村

〔憲教類典二ノ五御役〕寛保三癸亥年二月

御代官所外御用相勤候節入用被ㇾ下候定書

江戸廻リニ付御用

甲府御代官

一御役料貳百俵

是ハ江戸廻リ甲府地方之外、臨時御用有ㇾ之ニ附、手代出役其外品々入用之積リ、〇又見ニ教令類纂一

〔幕朝故事談〕高坂安左衛門は元町與力なり、大岡越前守樣相〇忠御目金を以て被仰立、御代官に被仰付、甲州にて十五萬石迄領す、今十五万石以上、御郡代と號す、御代官にては不相成事なり、

〔創業記考異六〕慶長十一年正月元日、伊豆國金山ニ銀子多可出ト云、大方自佐渡國出ル程モ可有之ト也、此以前代官彥坂小刑部也シヲ、向後大久保石見守安〇長可爲代官ト也、

〔台德院殿御實紀三〕慶長十一年六月、此月略〇中川井作兵衛政忠は、略〇中駿府に召出され、五百俵賜はり、伊豆銀山奉行仰付られ、同心五十人つけらる、

〔駿府政事錄二〕慶長十七年七月廿六日、召三島豆〇伊代官被仰曰、先年桑板自八丈島來、今有否、代官申云、六枚有之、厚四五寸云々、十餘年以前之事、無御忘却之由、各驚申云々、

〔大猷院殿御實紀五十一〕寬永十九年六月廿九日、伊豆の代官小森彥五郎重定、姦曲の事あらはれて、所治の地は伊奈兵藏忠公にかへ隷せしめらる、

〔延寶八年江戶鑑〕豆州御代官
伊奈兵右衛門、江川太郎左衛門、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御代官　元祿七年甲戌五月十一日、豆州御代官江川太郎左衛門、是迄被下候、御代官所御物成十分一之儀は相止、新規百五十俵被下、

〔天保十二年縣令集覽〕御代官　江川太郎左衛門
百五十俵　武藏、相模、駿河、伊豆島々、　屋敷伊豆韮山、同三島、

〔甲子夜話四十八〕又林〇述齋話ニ、豆州韮山ノ御代官江川太郎左衛門、出府シテ訪過セシカバ、面話ノ次手ニ、ソノ家世ノ事ニ及ビシニ、先祖ハ和州ニ在テ、ソノ地名ヲ族トシ宇野ト稱シタリ、保元ノ亂ヲ避テ豆州ニ下リ、又ソノ地名ヲ稱シテ江川ト改シトゾ、世ニ名高キ住居ハ保元ノ創建ナリト云、ソノ家ノ建方、大ナル欅ノ生タル儘ソノマヽ、柱トシテ、夫ヨリ建添タル者ノヨ

シ、年々修理セルトキ、棒柱ノ地ニ入タルヲ、掘立ナルベシトヲ穿ケレバ、下ヘ入ホド太シ、數尺穿テドモ、段々太クナリテ限知ラズ、始テソノ下ニ根アルコトヲ知リタリトナリ、（此家舊日蓮ノ棟札アルコト、世ノ能知ル所ナリ、）和州ニ在リシ時ヨリ數ヘテ、今ノ太郎マデ三十五世、豆州ニ至リテ二十七世ハ、墳墓モ備リテアリ、和州ノ舊墓ハ、有モ無モ交リタルトナン、代々他姓養子無ク、血統連綿ス、建久ノ暦本アリ、ソノ外古物多ケレドモ年代ヲ詳ニセズ、鎌倉ヨリ小田原北條家マデヲ經テ、其地ノ代官セシトゾ、珍ラシキ舊家ナリ、殊ニ數十世ノ墓ツヾキテ有ルト、血統ノ絕ザルハ貴ブベキコトナラズヤ、

八丈島代官

〔延寶八年江戶鑑〕伊豆八丈島御奉行

二百石　伊奈兵右衛門

○按ズルニ、貞享五年、元祿五年ノ武鑑ニハ、八丈島代官ト見エタリ、此島後ニ伊豆代官ノ支配トナリシ事、伊豆代官條ニ引ケル縣令集覽ニ見ユ、

〔地方落穗集八〕島手代相止候事

一前々は其島支配の代官にて島手代相極、一人に付、切米百俵被下、島々相廻る節は、七拾人扶持被下相勤候處、享保八卯年、代官河原清兵衛伺之上相止之、其以後は島手代無之、島地役人万事取行ひ、御法度を守り糺すなり、島々皆八丈より支配するなり、

相模代官

〔延寶九年江戶鑑〕相州御代官

二百石、坪井佐右衛門、　二百石、成瀨五右衛門、　二百石、曾根五郎右衛門、

○按ズルニ、此職ハ、後ニ武藏代官ニ併セラレシナリ、

武藏代官

〔延寶八年江戶鑑〕武州御代官

百五十石、岡登二郎兵衛、　百五十石、福村長十郎、　百石、伊奈左門、　五十石、近藤與右衛門、　二百

石、近山五郎右衞門、　百五十石、設樂權兵衞、　三百石、中川仲右衞門、

〇按ズルニ、此職、貞享三年、元祿五年等ノ武鑑ニハ十四人、元祿十年ノ武鑑ニハ十二人、寶永二年ノ武鑑ニハ六人、正德六年ノ武鑑ニハ、相州代官ヲ併セテ十三人アリ、

〔天保十三年縣令集覽〕御代官　中村八大夫
布衣　躑躅之間　御在府　御役料三百俵二十人扶持　武藏相摸　浦賀御藏　城ケ島篝屋
品川貫目改　千住貫目改

〔慶應三年縣令集覽〕御代官　松村忠四郎　御在府
七拾俵五人扶持　御役料三百俵　武藏　板橋貫目改

〔寶曆集成綿綸錄二十四〕延享元子年三月

上坂安左衞門〇武藏代官　元〆手代三人

御切米七拾俵三人扶持宛

外役金拾兩宛

右安左衞門元〆手代三人、常々實體ニ相勤、別而去亥年御取箇、其外精出シ相勤候ニ付、向後右之通御宛行被ㇾ下之、直御抱被ㇾ仰付、安左衞門手江附相勤候樣可ㇾ致候、尤只今迄ハ、安左衞門江被ㇾ下候諸入用米金之內を以召抱候得共、右之通被ㇾ下候上は、其分引落可ㇾ相渡候、且又右之者共、此以後勤方等不ㇾ宜儀も有ㇾ之候はゞ、安左衞門致ㇾ吟味、御勘定奉行江申達、暇差遣可ㇾ申候、

右之通可ㇾ被ㇾ申渡ㇾ候

〔駿府政事錄二〕慶長十七年七月廿六日、武藏忍代官、深津八九郎、大河內孫十郎來府之由、松平右衞門大夫〇正綱申之、依ㇾ之召之令ㇾ問、當年關東田畠之事云々、　廿七日、忍代官來御年貢米金數千兩、松平右衞門奉ㇾ之、

〔台德院殿御實紀二十四〕慶長十八年十一月十八日、この日大御所〇德川家康御狩の道にて、農民等訴狀さゝげて、代官深津八九郎某が姦曲を訴ふ、依て八九郎某を召れ、御前に於て對決せしめられしに、八九郎某、私曲あるにより職奪はる、高木九助正綱に、忍領十二万石の事を沙汰すべしと命せられ、代官小栗庄右衞門正勝、遠藤豐九郎某、天野彥右衞門忠重の三人、正綱に屬してその事つかふまつるべしと仰付らる、

安房代官

〔元祿十一年武鑑〕房州御代官

伊奈半十郎　瀧野十右衞門　平岡三右衞門

〇按ズルニ、正德以後ノ武鑑ニハ此職名見エザレバ、其後廢セシモノナルベシ、

上總代官

〔貞享五年武鑑〕上總御代官

二百俵、近山與右衞門、　同、坪井半右衞門、　同、池田新兵衞、　同、山田六右衞門、　同、松田又兵衞、同、間瀨善大夫、　同、天羽七右衞門、

下總代官

〔貞享五年武鑑〕下總御代官

伊奈半十郎　諸星傳右衞門　二百石、宍倉與兵衞、

〔有德院殿御實紀十五〕享保七年八月九日、この日代官小宮山杢之進昌世に命せられしは、佐倉、小金〇並在下總等の牧地新田林などのこと、聞えあげしごとく心にまかせ處置すべし、野牧の道途修理なども、牧士の長綿貫夏右衞門と指揮してはからふべしとなり、

常陸代官

〔貞享五年武鑑〕常州御代官

二百俵、熊澤武兵衞、　同、守屋助次郎、　坪井治右衞門　間瀨吉大夫　酒井次右衞門

〔營中御日記十九〕正保二年八月十日、宍戸領〇常陸五万石、内三万石、半十郎總領伊奈半左衞門、二万石、關口佐大夫、御代官被仰付旨、老中傳之、

近江代官

〔台德院殿御實紀四十四〕元和二年、是年〇中略喜多見五郞左衞門勝重は、江州一圓の奉行になり、〇下略

〔台德院殿御實紀五十八〕元和八年、是年〇中略小堀遠江守政一は、近江の奉行を命せられ、〇下略

〇按ズルニ、本書代官ノ明文ナシト雖モ、代官ヲ奉行トモ稱スルヲ以テ此ニ收ム、京都代官ノ條ヲ參看スベシ、

〔延寶八年江戶鑑〕江州御代官

二百石、市岡利右衞門、　二百石〔亘〕吉兵衞、　五百石、井狩十助、　六百石、小堀源右衞門、　二百石、雨宮勘兵衞、

〔天保十二年縣令集覽〕御代官　多羅尾久右衞門

代々　布衣次席　千五百石　近江、伊勢、美濃、　屋敷江州信樂　出張陣屋東海道四日市

〇按ズルニ、多羅尾氏ノ始テ見エタルハ、正德四年ノ武鑑ナレバ、近江ノ代官タリシハ其比ノ事ナルベシ、

大津代官

〔東照宮御實紀附錄二十一〕慶長六年六月、大津の代官末吉勘兵衞利方建言せしは、銀價定らざるよりして、諸の價もまたひとしからず、今よりは官府にてその制を定め玉へと申すにより、新に銀座を設られ、利方もてその頭役となし、〇下略

〔常憲院殿御實紀三十九〕元祿十二年四月廿二日、けふ令せらるゝは、大津官廩今より後米貯蓄せらるゝのみなれば、廩數を減じ、代官の所管たらしめ、〇下略

〔明和六年武鑑〕大津代官　布衣　美濃、近江、河內、

石原淸左衞門

〇按ズルニ、吏徵別錄ニハ、明和四年丁亥十一月日布衣トアリ、

〔文化四年武鑑〕大津御代官　同町御奉行兼帶　布衣　河内、攝津、和泉、近江、
二百俵、石原庄三郎、
〔天保十二年縣令集覽〕大津御代官　石原清左衛門
代々役　躑躅之間　大津御役屋敷詰　河内、和泉、攝津、近江、大和、播磨、大津町御奉行兼、
〔天保十三年縣令集覽〕大津御代官御用手傳　石原定太郎
〔吏徵附錄郡職〕大津御代官、組同心二十人、　現米十石三人扶持高
〔駿府政事錄七〕慶長二十年正月四日、辰剋被召御座船、○中略自矢橋御舉リ、申剋水口○近江御著御、御
代官長野内藏允、善壺美壺云々、

蘆浦代官

〔嚴有院殿御實紀二十一〕寛文元年四月五日、近江國蘆浦觀音寺退休し、弟子式部卿寺職をつがしめ、代官の事もこれまでの如く奉はるべしと命せらる、此觀音寺といふは、慶長のころより、浮屠にて代々勘定頭の所屬となり、その地の代官を勤めしが、元祿中に其職を奪はれて、全く浮屠になりて東叡山に屬せり、

美濃代官

〔延寶九年江戸鑑〕濃州御代官
板田九郎兵衛　石原清左衛門

飛驒代官

〔正德六年武鑑〕諸國御代官衆分
飛驒　守山又左衛門
○按ズルニ、此國ハ後ニ郡代ノ支配スル所トナレリ、
〔寶曆集成綿綸錄二十一〕延享元子年五月
御代官　岡田庄大夫
支配所定め之村々、年季之内、一ケ年も破免無之、六ケ敷出入等茂無之、總而御役筋、別而出精、數年

實體ニ相勤候ニ付、百五十俵御加增被下、都合三百俵ニ被成下、○又見有德院殿御實紀

○按ズルニ、當時ノ武鑑ニ據ルニ、岡田庄大夫ハ飛驒ノ代官タリ、

信濃代官

〔延寶八年江戶鑑〕信州御代官

二千五百石、小笠原釵負、　二百石、天羽七右衞門、　二百石、宮崎太郎右衞門、　二百石、設樂權兵衞、

〔天保十二年縣令集覽〕御代官　大原左近

百俵　信濃、上野、　陣屋信州中ノ條村、出張同御影、

御代官　北條雄之助

七拾俵五人扶持

在府　信濃　陣屋信州中野

伊奈代官

〔台德院殿御實紀十四〕慶長十五年、此年○中略中西太郎右衞門三淸、信州伊奈の代官となる、

〔大猷院殿御實紀二十四〕寬永十一年五月五日、中西太郎右衞門三淸死して、子太郎右衞門淸次つぎ、父の命ぜられし信州伊奈の代官たらしめらる、

上野代官

〔延寶九年江戶鑑〕上州御代官

二百俵、南條勘兵衞、　百五十石、久保田平九郎、　八木仁兵衞　二百石、竹村彌太郞、　二百五十石、市川孫右衞門、　二百石、小泉治大夫、　百俵、万年七郎右衞門、　百石、平野三郎右衞門、　二百石、成瀨五左衞門、　高室中右衞門

〔天保十二年縣令集覽〕御代官足尾銅山掛　山本大膳

布衣　躑躅之間　六百三石九斗　江戶廻御役料三百俵　武藏、上野、下野、　陣屋上州岩鼻、野州足尾、

代官日光今市御藏掛　森親之助　上野、下總、

下野代官

〔元祿八年武鑑〕下野御代官
市川孫右衛門　高室安右衛門○以下九人略
○按ズルニ、元祿五年以前ノ武鑑ニハ、當職ノ名見エザレバ、夫ヨリ後ニ置キシ職ナラン、
〔天保十二年縣令集覽〕御代官　川崎平右衛門
布衣　躑躅之間　百五十俵　下總、常陸、上野、下野、　陣屋野州眞岡　常州上郷
御代官　伊奈友之助
布衣　躑躅之間　二百五十石　下總、常陸、下野、　陣屋下野東郷　武州小菅
○按ズルニ、慶應ノ比ニハ、代官一人ニテ、眞岡ヲ陣屋トシ、東郷ヲ出張所トシテ、下野一國ヲ支配シタリシ事、縣令集覽ニ見ユ、

陸奥代官

〔貞享五年武鑑〕奥州御代官
百石、諸星庄兵衛、　五百三拾五俵、柘植傳兵衛、
〔天保十二年縣令集覽〕御代官　平岡文次郎
四拾俵　越後、陸奥、　陣屋奥州田島　出張越後水原村
御代官　野村彥右衛門
百俵五人扶持　陸奥　陣屋奥州川俣村
御代官　島田帶刀
百五十俵　陸奥　奥州半田銀山掛　陣屋奥州桑折村
〔慶應三年縣令集覽〕奥州御代官支配
半田銀山方役人組頭　同目付役　同平役　寄床屋番　銀見役　吹分師　灰吹師　山廻り足輕四人　下代横目付十八人

出羽代官

〔天保十二年縣令集覽〕御代官　篠田藤四郎
百五十俵　陸奥、常陸、下野、陣屋奥州塙村　出張同淺川富田村

〔延寶八年江戸鑑〕羽州御代官
五百石　松平淸左衞門

〔天保十二年縣令集覽〕御代官　大貫次右衞門
百俵　出羽　陣屋出羽尾花澤　出張東根大石田
御代官　添田一郎次
出羽　幸生銅山掛リ　陣屋出羽柴橋　出張同寒河江

越前代官

〔元祿十一年武鑑〕越前御代官
諸星内藏介　平岡吉右衞門　郡築長左衞門

○按ズルニ、當職ハ此以前ノ武鑑ニ見エズ、此以後明和八年ノ武鑑ニモ見エザレバ、其比ハ他ノ代官ニテ兼テシニヤ、安永中ニ至リテハ、飛驒ノ郡代ニテ越前ノ領所ヲ支配シタリ、

越後代官

〔貞享五年武鑑〕越後御代官
設樂權兵衞　馬場新右衞門　小野朝之丞　藤林長兵衞

〔天保十二年縣令集覽〕御代官　青山九八郎
百俵五人扶持　越後　陣屋越後出雲崎
御代官　平岡熊太郎
二百俵　越後、信濃、陣屋越後脇野町　出張同川浦

〔慶應三年縣令集覽〕御代官　大草太郎左衞門
百俵　越後　陣屋越後出雲崎　同川浦

佐渡代官

御代官　篠本信之助

百五十俵　越後　陣屋越後水原

〔惇信院殿御實紀十七〕寶暦三年四月廿七日、この日材木石奉行横尾六右衛門昭平、越前國の代官藤沼源左衛門時房、佐渡の代官となる、これあらたにおかるゝ職なり、

〔寶暦集成綿綸錄二十一〕寶暦四戌年四月

佐州御代官被仰付候處、新規之儀故、地役人等ニ至迄、心得違候ものも有之、御用向差支候儀茂有之由相聞候、右之通ニ而は、末々共ニ御用向差支可申事候、以來御代官所ニ拘り候御用等も差支無之候樣ニ可被致候、右之趣地役人等へも申含、心得違等無之樣可被致候、御勘定奉行へも申渡候間、とくと可被申談候、

四月

右之通佐渡奉行江申渡候間、可被申談候、尤御代官附地役人共に茂、心得違等無之樣、是又可被申付候、

〔寶暦集成綿綸錄十六〕寶暦八寅年三月

御代官　藤沼源左衛門
　　　　池田喜八郎

右ハ是迄之通相勤候積りニ候、但し池田喜八郎致支配候金銀山一件、幷相川○佐渡近郷千百石餘之場所、備後守、助九郎、支配ニ成候ニ付、當時藤沼源左衛門致支配候御藏之米金印銀銭諸紙材木鐵油等之品々納拂、向後兩人ニ而致支配、相改勤候樣ニ可被致候、○中略

右之趣被得其意、源左衛門喜八郎江も可被申渡、尤佐渡奉行可被談候、

〔佐渡志二官司〕御代官

寶暦三年癸酉、始テ御代官二員ヲ置レテ、一員ハ七萬九千三百三拾石餘ノ地、及ビ府庫倉廩ノ出納ノ事ヲ承ハリ（森沼源左衛門）一員ハ五萬千六百三拾石餘ノ地、及ビ金銀山ノ事ヲ承ハリテ（横尾六右衛門）官舍ヲ相川羽田町ニ建ツ、同ジキ八年戊寅、相川ニ近キ地千百石餘、金銀山ヲ併セテ奉行所ニ返サシメラレ、九年己卯、一員ヲ省レテ、其地五萬九百拾石餘ノ事共、又奉行所ノ預リ行フ事ニ成ヌ、十一年辛巳、倉庫ノ事掌リタルヲ停ラル、此時御藏奉行ノ職ヲ置レシガ故ナリ、其後明和五年庚子御代官ヲ止ラレテ、其地ヲ以テ奉行所ノ預リトシ、サキニ預リノ地、支配所トイフニナリテ、名ハ異レドモ同ク奉行ノ政トナレリ、（後寛政元年辛酉、悉ク奉行支配所ノ舊名ニ復セリ、）

○佐渡藏奉行ノ事ハ、遠國奉行篇、佐渡藏奉行條ニ在リ、

丹波代官

〔貞享五年武鑑〕丹波御代官

六百石、小野總左衛門、　角倉太郎次

○按ズルニ、此職享保以後ノ武鑑ニハ見エザレバ、其比ヨリ京都代官ニテ兼テシナルベシ、

丹後代官

〔享保十八年武鑑〕諸國御代官支配付井屋敷付

（本所ツメ）　二　丹後　海上彌兵衛

○按ズルニ、貞享、元祿ノ武鑑ニモ此職名ヲ載セテ缺職トシタレバ、當時ハ丹波ノ代官ニテ兼テシモノナルベシ、

〔慶應三年縣令集覽〕御代官　宮崎達次郎

四拾俵　丹後、但馬、　陣屋丹後久美濱

但馬代官

〔貞享五年武鑑〕但馬御代官

四百石　酒井七郎左衛門

○按ズルニ、延寶ノ武鑑ニハ但馬御奉行ト見エタリ、

〔天保十二年縣令集覽〕御代官　大草太郎左衞門
百俵　但馬、美作、　陣屋但馬生野

〔駿府政事錄　一〕慶長十六年九月廿六日、但馬國代官間宮新左衞門、獻朝倉山椒三箱云々、

〔大猷院殿御實紀二十三〕寛永十年七月廿六日、代官中野吉兵衞弘重、但馬銀山代官命せられ、暇下さる、

〔天保十二年縣令集覽〕但馬生野御代官支配
御運上藏役　口御米藏役　奧御藏役　直入役　見廻役　地方手傳　播磨口役　但馬口役　口白口役　小野口役　竹原野口役　作畑口役　内山口役　市川口役　銀山方見習　總門番役　朱封印役

〔吏徵附錄郡縣〕但州生野銀山附地役人五十人　運上藏役五人、五十俵、藏役六人、四十俵、直入役五人、三十俵二人扶持、見廻役十二人、三十俵、口役十六人、同斷、總門番役一人、同斷、朱封印役一人、同斷、銀山方見習四人、同斷、

伯耆代官

〔駿府政事錄五〕慶長十九年十月十四日、伯耆國代官伊丹山田出御前、伯州丑年物成銀百五十貫目持參云々、

〇按ズルニ、此職他ニ見ル所ナシ、

石見代官

〔石見國銀山要集〕銀山奉行
慶長五子年ヨリ同十八丑年迄　大久保石見守〇長安

〔銀山舊記〕銀山〇石見支配之儀、慶長五子年以前は、碇と相知れ不申候得共、慶長六丑年ゟ、大久保石見守銀山奉行被仰付、延寶三卯年、永田作大夫迄、七十五ヶ年の間奉行所にて、同年柘植傳兵衞ゟ御代官ニ相成、當時迄御代官所ニ御座候、

〔貞享五年武鑑〕石見御代官

四百五十石　由比長兵衞

〔天保十二年縣令集覽〕御代官　岩田鍬三郎

二百俵　石見、備後、　石見銀山掛り　陣屋石見大森町、出張備後上下、

〔吏徵附錄部一〕石州銀山附、役人組頭三人、三十俵三人扶持高、役料三十俵、　同役人廿七人、三十俵三人扶持高、內十二人、加扶持二人扶持、　同同心小屋頭貳人、十五俵貳人扶持高、加扶持一人扶持、同平同心廿九人、十五俵貳人扶持高、　同中間小頭貳人、八俵一人扶持高、　同中間廿一人、八俵一人扶持高、

〔憲敎類典五ノ四下地方〕明和四丁亥年十月

御勘定奉行江

川崎市之進御代官所、石州銀山役人同心中間等、父名跡相續之義、再應相願候、先達而も申渡候通、容易ニ難相成事ニ候、併家業有之者之義ニ付、願之通リ無餘儀事ニ相聞、願之通申付候ハヽ、家業相勵致出精、御益ニも可相成趣候、依之父名跡相續之儀ハ、難相成事ニ候之間、家業も有之故を以、父跡職相續申付候樣可被申渡候、尤以來紛敷無之樣可被心得候、

播磨代官

〔延寶八年江戶鑑〕播州御代官

千五百石、松波五郎右衞門、　二百石、藤林市兵衞、　二百石、猪飼二郎兵衞、　四百石、豐島權之丞、

二百石、末吉勘八、

○按ズルニ、此職名享保以後ノ武鑑ニ見エズ、

美作代官

〔寶永三年武鑑〕美作御代官

內山七兵衞　西與市右衞門

備中代官

○按ズルニ、天保十二年ノ縣令集覽ニ據レバ、美作ノ領所ハ、備中倉敷ノ代官ニテ支配セリ、
〔元祿五年武鑑〕備中御代官　後藤覺右衞門　西山六郎兵衞　森本惣兵衞
〔天保十二年縣令集覽〕御代官　高山又藏
三百三拾俵　備中、美作、　陣屋備中倉敷　出張同笠岡

備後代官

〔寶永三年武鑑〕備後御代官　曲淵市右衞門
○按ズルニ備後ノ領所ハ、後石見代官ニテ支配セシ事、天保ノ縣令集覽及ビ其後ノ武鑑ニ見ユ、

阿波代官

〔延寶九年江戶鑑〕阿州御代官　三百石、末吉勘兵衞、
○按ズルニ、此職元祿十年以後ノ武鑑ニ見エズ、

讃岐代官

〔貞享五年武鑑〕讃岐御代官　二百俵、守屋與三兵衞、
○按ズルニ、此職元祿十年以後ノ武鑑ニ見エズ、安政五年ノ縣令集覽ニ據レバ、讃岐ノ領所ハ、備中倉敷ノ代官ニテ支配セリ、

伊豫代官

〔元祿十一年武鑑〕伊豫御代官　平岡吉左衞門
○按ズルニ、此職享保以後ノ武鑑ニ見エズ、

肥前代官

〔元祿十一年武鑑〕肥前御代官　今井九右衞門
〔寶永三年武鑑〕筑前、筑後、日向、肥後、肥前、長崎御代官、　竹村彌兵衞
〔天保十二年縣令集覽〕御代官　高木作右衞門
代々御代官　長崎奉行支配　百俵　肥前、肥後、筑前、　御武具藏掛　寺社御米藏掛リ　御備場
唐物拔荷御取締　長崎住居　出張肥前富岡

天草代官

〔貞享五年武鑑〕肥前天草御代官　御役料五百俵　服部六左衞門　永田七郎右衞門

長崎代官

○按ズルニ、此職元祿十年以後ノ武鑑ニ見エズ、

〔吏徵附錄 世職〕高木作右衞門長崎御代官　長崎奉行支配　高百俵　燒火間　長崎在住　御暇時服二　受用銀六十貫五百目　元文四年己未四月八日以來、代々役、長崎附地方三千石之場所御代官被仰付、諸入用金五十兩、并十人扶持被下之、　忰健三郞、父役所見習、

元〆手代

〔吏徵 上 御目見以上〕御代官五十人略〇中　元〆手代二人

〔牧民金鑑 三〕天保七申年二月

御代官手代共之內ゟ、元〆江取立候節ハ、是迄伺之上申渡來、手附之內ゟ元〆江取立候ものハ、手限ニ而申渡來候處、元〆の儀ハ、役所御用向取扱候ものニ付、元〆江取立候ものハ、手附、手代之無差別、人物ヲ相撰ハ勿論之事ニ候、尤手附之儀ハ、手代と違ひ、御用向手堅く相勤候もの、元〆ニ取立候得バ、子細有間敷事ニ候得共、一體元〆之儀ハ、御用向引受爲取扱候得者、人物之撰方も肝要之事ニ付、手附ニ而も、元〆へ取立候ものハ、以來手限之取計ニ不致、伺之上申渡可被致候、右之趣、奉行衆被仰渡候間、以來手附ニ而も、人物篤と相撰、元〆取立之義、其時之取調相伺可有之候、

申二月十六日

〔牧民金鑑 三〕天保十一子年五月日申渡

各元〆、手附、手代等借請、或ハ兼帶相勤候ものも有之、右ハ御用筋、おのづから兩役所へ相洩候廉も相聞候間、以來ハ兼帶之儀ハ勿論、借受候儀も難相成候ニ付、其旨可被相心得候、

〔續地方落穗集 一〕諸手代神文之大概

起請文前書

一此度御手代中之元〆役被仰付候上ハ、御公儀御爲を第一奉存候而、毛頭御後闇儀不仕、每物精

を入、存寄於有之者、不殘心底を申出し、不立自分、他ニ無遠慮遂詮議、多分ニ付、末々迄猥ニ不罷成候樣相勤可申候、萬一御詮議之節、御爲ニ缺候歟、又ハ御不念ニ可罷成儀於有之者、何ヶ度も存寄可申上、幷御隱密之儀承り候共、一切他言仕間敷候、附御用之儀ニ付、同役中之中、惡敷仕間敷候事、

一御代官所公事訴訟之儀、不限晝夜早速取揚之、仲ヶ間之者立合、念を入承屆、其子細を不殘可申上候、親疎好惡ヲ不存、少も依怙贔屓仕間敷候、勿論公事訴訟之當人ハ不及申、其他親類緣者方より、金銀米錢衣類、此外少之物をも一切受用仕間敷候、妻子召仕之者江も堅申付べく候事、

一總手代中、常々御用大切ニ相勤、聊以私欲之儀無之、御代官所中、寺社人町人百姓より、諸道具受用不被仕候樣吟味可仕候、若不作法ヶ間敷儀及見聞候ハヽ、早速御內意可申上候、勿論贔屓偏頗之心底ニ而、僞又ハ少分之儀、取立大きに申成義仕間敷事、

一總手代衆より何ニ而も受用仕間敷事、

附不斷御用寄合、夜食等給候節、野菜幷豆腐香之物味噌鹽之外、美食被下間敷事、

一每年撿見之節、鄕村に而百姓書出帳面ニ載、步位違、諸引負高、起歸り新開之地、見取場有之歟、委細吟味仕、上中下坪刈念を入、自分ニ改之、升目等有體帳面記可申候、縱親子兄弟知音、又ハ中惡敷輩候共、少も贔屓偏頗なく明白ニ可仕事、

一御年貢納所、米ノ善惡、繩俵、御藏詰米之改、金銀諸色納拂、撿地等之御用被仰付候節、隨分無油斷入念可致吟味候、親子兄弟親類緣者知音、又者中惡敷雖爲輩、依怙贔屓不仕、對諸百姓無筋目儀、聊以申かけ間敷事、

一御威光を以、私之奢不仕、又ハ自分ニ意趣有之者方へ、就御用向難儀をかけ、或ハ法外之挨拶仕間敷事、

一御取毛御究之時分、爲仲ヶ間、內證を不申合、面々自分之存寄を書付、寄合場へ致持參、令相談候而、多分之道理ニ付、御取箇相究可申候、手代衆存寄も候もの、私の了簡タトヒ各別之過不及とも、腹立不仕候樣相嗜み、不殘心底可令相談事、

一撿見幷諸御用ニ而、鄕村へ罷越候節、扶持方米鹽味噌諸菜共、此方より致持參、薪野菜油共、百姓より爲出之、此外何に而も、一切百姓之馳走罷成間敷候、此旨召仕之者ニ而も堅可申附事、

一御代官所寺社人町人より、撿見前後は不及申、常々も金銀米錢衣類諸道具、其外何ニ而も受用仕間敷候、縱雖他領之者、御用ニ携候者、其者より少々の物成とも、禮物請申間敷候、妻子召仕之者どもへも、右之旨堅申付、相守候樣可申付事、

附於御代官所、金銀米錢衣類諸道具等之借貸押買押賣、又は商ヶ間敷儀、田畑手作等仕間敷候、幷山林芝間抔求メ申間敷候、然共鄕村ニ而、百姓之地ヲ借住居いたし候者、野菜地五畝歩迄ハ年季明に調候間、手作致遣可申候、勿論村中に作並ニ金子出之、地主損立候はぬ樣に可仕事、

堤川除樋杁枠等總而御普請之儀、入札直段、隨分吟味仕、御普請出來方改之、及心程念を入、相改可申候、左樣之儀ニ付、町人百姓より禮物受用仕間敷候、相改之節、親疎好惡ニ付依怙贔屓之品、毛頭仕間敷候事、

一御年貢米金精を入、御定之日限之通取立候樣可仕候、勿論御年貢米金を以借引商賣等一切仕間敷候、私用ニモ遣ひ不申、御定員數相集候とも、手代衆兩人宛、立合相封仕差置、何程ニ成候共、譲方へ相渡可申事、或ハ何方へ相納可申とも、

一諸傍輩町人百姓ニ不依、善惡之儀於有之ハ、不殘心底、無依怙贔屓有體ニ可申上、勿論惡事企ル者及見聞候上ハ、早速可申上候、一味同意仕間敷事、

附別紙御條目之趣、少も違背仕間敷候、總而召仕之者迄、御家風堅相守候樣可申付事、
一不行跡之好色幷博奕、總而賭之諸勝負、此外役目ニ不似業仕間敷候、召仕等ニも此旨堅く可申付候事、
○按ズルニ、手代ノ起請文モ、是ト大差ナケレバ略ス、

〔憲教類典五ノ四上地方〕享保十乙巳年十月
一御代官役被相勤ニ付、諸入用別紙書付之通、當巳年ゟ米金に而被下候、○中略
一右諸入用之內、手代給分之儀、妻子等も有之候に付、元〆手代壹人に付、給金三拾兩五人扶持、○中略之積りに候、總而手代書役等、給分不足にとらせ置、私曲等有之候ハヾ、各不念に可成候間、大概右之積りを以勘辨之上、身上相續候樣に、給分とらせ可被申候、

〔牧民金鑑三〕寬延二巳年六月廿一日申渡書附
元〆手代、平手代、書役等、扶持方給金御定有之、御代官江被下來候、然ル處、給金扶持方、手代暮方ニ引合不申樣、高不足ニ相渡候儀有之由ニ候、右之通ニ候得バ、其身一己も不相勤、妻子養育、猶以差支候砌、自分心得違之儀も出來可致候、此儀前方も申渡候通、御定通り可相渡事ニ候、乍然所作手薄キ手代、書役抔見習候內、少々相減、其分勤足シ候者共爲取候筋ハ、吟味之上有之間敷事にも無之候、全體給金扶持方渡不足之分、御代官手前江引上候儀者有之間敷事ニ候、御取箇吟味ニ付、第一手代人柄相糺し、且右宛行手支無之樣不被取計候而者、御爲口御仕置者も不絕樣ニ相成甚不宜候、手代之儀ハ、御代官御役勤方之大本を取計候者ニ候間、人柄宛行等之吟味專要ニ候、隨分遂吟味不束成儀無之樣可被相心得候、
但功者ニ而出精相勤積通りゟ餘慶ニ爲取、又ハ子細有之給金不足いたし爲取候も有之候ハバ、其譯兩人之內江申聞置候樣御勘定組頭庄次郞、權之助口達有之、

〔吏徴 上 御目見以上〕御代官五十人〇中略　並手代八人

〔明良帯録 世職篇〕御代官

属役ニ手代、手附、出役等有、是を働にせり、筆算等堪へたる人は、属役の中より御代官に經昇す、是を農給之人といふ、是も古は土著にして田地作り取也、

〔憲教類典 五ノ四上 地方〕元文二丁巳年九月十五日

一支配所住宅之面々ハ、伺被差出候節、書状差添伺之旨可被申聞候、

一支配所住宅之面々、留守居手代之儀、前方も申聞候通、御代官所之様子、曾而不存者被差置候而ハ、少々之御用に而も請答難成、各江可申遣由申之急御用差支候間、向後ハ支配所相勤候手代之内一人、一年ツヽ交代に江戸留守居可被申付候、尤交代之節、御勘定所江書付可相達旨候事、

右之通可被相心得候、以上、

〇按ズルニ、江戸留守居トハ、江戸詰ノ手代ヲ云フ、縣令集覽ニ據ルニ、手代ニ江戸詰ノ者ト陣屋ニ在ル者トアリ、又出張所アル者ハ、各其處ニ在ルナリ、

〔御張紙留〕申〇天明八年八月晦日、在府御代官江　十左衛門申渡ス、

申渡

近年御代官手代共、御取箇筋不正之取計いたし、百姓及難義、村柄衰候も無貪著、御年貢納方遲滞いたし候而も、取計方等等閑にいたし、又は百姓ゟ賄賂を受、依怙を以用捨いたし、未進年々重り候得バ、罪を御代官江讓り、以邪行金子を貯、御徒與力等出身之族も有之由、右體之儀ハ、堅く禁制之、總而衣食住不相應之奢を極、右體之行いたし候儀、不屆之至ニ候間、遂吟味早々可被申聞候、若等閑ニいたし置、外ゟ相聞候バ、其御代官之越度ニ候條、其段兼々相心得可申候、扨又手代之内、質素潔白ニ、御取箇筋等正道ニ出精いたし、百姓を引立、農業を勸、山林石橋堤川除等、

無油斷心を用、御爲專一ニ心懸候者有之候ハヾ、是亦早々可被申聞候、右之如きものハ、手代ゟ直に御取立も被仰付、當人心懸次第追々御取立も可被仰付候間、可被得其意候、

○按ズルニ、本書此下ニ、手代ノ掟書アレド略ス、

〔牧民金鑑三〕天保十四卯年二月申渡

手代書役風聞糺之義、入念糺方いたし候而も、中ニハ屆行方、不行屆、又ハ不宜風聞等ハ不申聞も有之趣ニ相聞、以之外之事ニ候、心を盡し候ても難相分ハ是非も無之處、先方被能越、彼是聞繕、其儘書出シ候も有之趣ニ相聞候、內密之義を相洩し、糺方申渡候詮も無之、不埒之至リニ候、以來糺方申渡候節ニ入念、麁略無之樣、急度可相心得候、

〔牧民金鑑三〕寛政十午年十二月

御代官手代共之儀、病氣等ニ而暇相願、二三ケ月も相立候得者、外御代官江抱入ニ相成來候處、右之內ニハ年來相勤候ものも有之候間、病氣ニ候はヾ、御代官之方ニ而、得と養生差加可相勤處、無其儀暇相願、無程外代官江抱入ニ相成候類も間々有之候、左候而ハ御代官之慈養も薄キ樣ニ相聞、手代共儀も心之外ニ榮利ニ走候樣、推察をも可請事ニ而、何れ村方之示ニも相成間敷候、一體手代共身分之儀ハ、重キ御用向をも取扱候處、右體身分自由ニ相成候而ハ、後々心得違之者も有之、自然と勤方も等閑ニ相成、一體取締ニも不宜候間、以來病氣ニ而、暇之儀申立候共、可成丈、得と爲致養生召仕可申、亦ハ無據譯を以相願、暇差出候上ハ、四五ケ年之間ハ、外御代官江抱入候儀ハ難相成候間、兼而其旨可被相聞候、

享和元酉年三月

御代官手代共之儀、病氣ニ而、〇此間恐脫暇字相願、又候相勤候儀、四五ケ年分も不相立候而ハ、再勤難相成段、去午年、申達置候處、暇取未年限不相立內、抱入被相伺候向も有之、如何ニ候、去ル午年、相達置

候通、向後共病氣其外ニ而、一旦暇取リ候はゞ、四五ヶ年不相立内ハ、歸參ハ勿論、外御代官ニ而も抱入難相成事ニ候、且又雇手代之儀も、病氣其外ニ而取候ものハ、是又年限不立内ハ、雇之儀無用可被致候、尤以來雇手代被致候節ハ、其度々御勘定所江可被相屆候、

嘉永六丑年五月

手代書役共改姓之儀、是迄願出候得バ被聞屆、其段御屆被差出來候處、向後改姓之儀願出候もの有之候はゞ、其度々御勘定所へ可被相伺候、

〔憲教類典御役二ノ五〕天明八戊申年八月

手代共江掟書

一常々綿服而已可致著用事　但五十以上病人ニハ、はだ附紬免すべし、

一夏袴多袴、木綿麻末之品可用候、　但上下も右ニ准じ可申事

一道具類、金銀品を不可用、腰物拵等之義ハ、利方專一に致し、花美致間敷事、

一立出候節、駕籠ニ乘申間敷事、　但病氣等之節ハ格別之事

一住居向、上木を不用、都而手輕にいたし、襖張付屛風等、上紛を不用、口疊も右に准じ可申事、

一客來祝義事有之節、珍味珍物等不用、菜數隨分減少致可申事、

一音物贈答之義ハ、隨分手輕ニ致申べく事、

一百姓町宿々、音物一切受用致間敷事、　但賴來候事ハ勿論、無心事等、決而致間敷事、

右之趣、手代共江急度可申渡候、

〔牧民金鑑三〕天明八申年八月五日申渡書付

一手代、書役等、其外とも、村々より音物等ハ、決而受納致間敷義ハ勿論之義ニ候得共、近年手代等、風儀不宜も有之趣相聞候間、万一村方より音物等、心得違ニ而受納いたし候ものも於有之ハ、

急度咎可申付候間、此旨手代、書役、幷家來迄も嚴重ニ申渡し、都而村々諸失却不相掛、人馬繼送り等迄も心附候樣可被致候、尤諸國とも風聞等相知候儀も可有之候間、精々相愼候樣可被申付候、若不愼之もの有之候はゞ、咎不念に可相成候間、此儀も相心得可被申候、右之段ハ支配所村方へ著次第村役人江委細申渡、若手代、書役、其外とも、音物等受用致候もの有之候はゞ、夫々咎之沙汰ニ可及候間、心得違無之樣可相心得旨申渡、聊ニ而も村入用不相掛樣可被取計候、

右之趣能々勘辨之上、御取箇增方ハ勿論、其外とも精々可被致吟味候、

〔憲敎類典五ノ四地方上〕享保十乙巳年十月

一御代官役被相勤に付、諸入用別紙書付之通、當巳年ゟ米金に而被下候、○中略

一右諸入用之內、手代給分之儀、妻子等も有之候に付、○中略手代ハ一人ニ付、給金貳拾兩五人扶持之積りに候、

〔憲敎類典二ノ五御役〕寛保三癸亥年二月

御代官所外、御用相勤候節、入用被下候定書、

手代罷越候論所檢使

一給米一人ニ付、壹ヶ年五十俵、月割を以可被下之、

檢見所々候はゞ、只今迄之通三人扶持、○中略

但出立之日ゟ歸著迄可請取、檢見後ニ候はゞ、書面之通月割を以可請取、

評定所江相詰候手代

一御扶持方二人扶持

是ハ前々筆墨紙蠟燭、雇小者等、年々入增、吟味もつゞ〳〵不行屆候ニ付、拾ヶ年場之內、大積り五割程相減、元文五申年、書面之通御入用相極、月割を以相渡候、

城引渡被越候手代入用

一手代一人ニ付三人扶持

○按ズルニ、此外新田見分、御代官所之外ヘ、御普請所之類見分ニ被越候入用、諸見分ニ手代罷候入用、二條、大坂、駿府、清水、納米手代入用、御廻米破船見分手代入用等、皆一人ニ付三人扶持トアリ、

〔牧民金鑑〕三寛政七卯年十二月五日、久世丹後守〇廣民、勘定奉行、達ス、

其方共役所書役之儀、是迄諸向ゟ手附取人之振合を以被申上候はゞ、書役より役所御用筋見習候事故、別而事馴可然候間、以來書役抱入候節も、矢張御譜代筋、諸向同心、其外小普請并部屋住之者ゟ可被申立候、尤右之趣兼而相心得、一同可被申合候、

〔憲教類典〕二ノ五御役寛保三癸亥年二月

御代官所外、御用相勤候節、入用被下候定書、

城引渡被越候手代入用

一書役一人ニ付、二人扶持、

○按ズルニ、本書ニ、御代官ハ分限高ニ而御扶持方被下之、關不越時ハ五割増、關越候時ハ一倍、關無之所ハ、二拾五里迄ハ五割増、貳拾五里外ハ一倍、但いづれも出立之日ゟ歸著迄被下之トアリテ、書役ノ條ニ右同斷トアリ、此外書役ニ關スル事ハ、手代ノ條ニモ併セ擧ゲタレバ、宜シク參看スベシ、

附 村役人

幕府領地ノ村役人ニハ、大庄屋、庄屋、組頭等アリ、大庄屋ハ、地方ニ由リテ割元總代、總庄屋、檢斷ナドノ名アリ、組下ノ庄屋ヲ支配シテ、數十箇村ヲ總轄ス、而シテ往々郡代、代官ノ手代等

ト結托シテ私ヲ營ムモノアルヲ以テ、正德ノ頃命ジテ之ヲ廢セシメタリ、庄屋ハ又名主トモ云ヒ、一村若シクハ數村ノ長トシテ其村內ヲ治ム、組頭ハ、庄屋ヲ輔助シテ其組內ノ取締ヲ爲ス、大庄屋以下村役人ノ役料ハ、何レモ其村民ノ負擔ナレドモ、或ハ幕府ヨリ一定ノ制限ヲ設ケシコトモアリ、

大庄屋

〔憲教類典五ノ三下 地方〕正德三癸巳四月廿三日

條々

一所により大庄屋割元總代など〻申す者有之、其外一村限りの名主庄屋等も有之、此輩の給米も多くして、村入用ニ懸り來り、大勢の中、宜しからざる者共有之、身の上高ぶり、私之事をいとなみ、御代官之手代役人等と申合、末々の百姓共之難儀ニ及ばせ候事共相聞え候、自今以後、大庄屋、割元總代之類、一切に停止せられ、一村限りの名主、庄屋、五人組共、其村の事を承るべく候間、其名主庄屋五人組等、おの〳〵諸事を相愼しみ、其役義を相勤むべく候、若大庄屋、割本總代の類なくして難叶所も有之ニおゐては、其子細を以、其御代官に訴申べき事、

〔地方凡例錄七上〕大庄屋停止之事

一私領には大庄屋と云て、領主地頭より帶刀を赦し、格式申付け、過分の給米を組下村方ゟ差出し、一領一郡のことを取計ふ村役人あり、組を分け、何の某組何十箇村として、支配方七八千石ゟ壹万四五千石位迄ありて、組下の庄屋を支配いたす、〇中略又國に依り、割元、或ハ總庄屋、檢斷などゝ唱る所もあり、中古までは料所にもありしに、享保の頃、神尾若狹守勘定奉行の節、大庄屋有て、却て村の爲宜しからざる由にて、料所の分ハ御停止に被仰出、今ハ遠國たり共、料所には大庄屋なし、

〇按ズルニ、折焚柴の記ニ彼四万石領の地、もと大庄屋といふもの十人ありて、年比これらが

庄屋名主

ために苦む事共多かりしにト見エ、又今迄のごとくに候はんには、遂には大庄屋、小庄屋など申すもの丶ために父母凍餓し、兄弟妻子離散すべきにて候へば、本國のものども、いかにや思ひ候べきト見エテ、庄屋等ノ不法ヲ禁ズベキ事ヲ論ジタレバ、大庄屋ヲ廢シタルハ、蓋シ新井君美ノ建議ニ出デシモノナルベシ、

〔憲教類典五ノ四上 地方〕享保十九甲寅年七月

大庄屋之儀、古來ハ有之候處、正德年中、大庄屋相止候得共、當時差支候儀ハ無之候、然バ人柄宜物ハ大庄屋と〇とに誤疑申付候はゞ、百姓の爲にも可成候、然バ人柄宜もの有之所ハ、御代官一人ニ、大庄屋二三人ヅヽモ申付候而可然哉、左候ハヾ、右之分江村數割合、大庄屋申付、其外ハ相應之もの無之候はゞ、一ト御代官所之内にても、大庄屋無之候而も差支有之間敷哉、且又大庄屋申付候もの、假バ相果、其跡相應之もの無之候はゞ、又大庄屋なしに致候ても差支有之間敷哉、存寄書付、早早可被差出候、

一右之儀、人柄宜もの有之候ても、必大庄屋申付候譯には無之、先右存寄相尋事ニ候得共、我等共得心のため、大庄屋に可成、人柄宜働も有之、百姓のために可成もの當時有之候ハヾ、別紙國郡村并名書付、尤右宜樣子、一人別に書付可被差出候、指當て無之候はゞ、其譯別紙に書付可被差出候、尤宜もの多有之候はゞ、一ト御代官之內にて、何人成共可被書出候、以上、

〔武家嚴制錄三十一〕鄉中御條目

定〇中略

一鄉中より奉公に出候とも、又商賣に行候とも、先之落著所を庄屋、五人組にしらせ、罷出候樣に可申付事、〇中略

一在々所々堂宮并山林にかゝまり、不審なる者於見出者相搦、庄屋并所之者相談之上、其所之地

頭代官可渡之、捕候儀なりがたく候はゞ、其時之庄屋所へ可申屆、御ほうび可被下之、然上ハ其庄屋早速人を集、入精可搦捕之、自然捕候義難成候はゞ、相慕之落著之所へ断之、搦取候樣に可被致之、若聞のがし、見のがし於令欠落ハ、たとひ後日に相聞といふとも、可爲曲事事、〇中略

寛永十四年十月廿六日　〇又見憲教類典一

〔地方凡例錄 七上〕村役人唱之事

一村役人の唱之義、關東方にては名主、組頭と云ひ、五人組の筆頭を判頭といふ、上方遠國ハ庄屋、年寄と唱る所に依てハ庄屋壹人、年寄壹人ありて、組頭ハ其外に三四人ある處もあり、又庄屋、長百姓と云處もあり、甲州などは名主、長百姓と云ふ、西國筋にては庄屋を別當といふ處も有、尤在方には少し、在中にても町場には別當と云所多し、元來長百姓と云ハ、上方關東遠國とも、一村の內高持、又ハ其村開基の節々之百姓、當時零落して小高に成りたる者にても、頭立たる百姓を長百姓と唱へ、村役人にてはなし、〇中略右に所謂庄屋長百姓と唱る處ハ、凡て云長百姓とは違ひ、村役人の役名なり、

〔續地方落穗集 一〕村々名主年寄誓詞申付儀可有之文言大概

一拙者共、當村名主年寄役被仰付候上ハ、御公儀を重じ、從跡々被仰出候御條目御法度書之趣、又自今以後被仰附候御仕置堅相守、每物正直ニ、小百姓、水呑、遊民等迄致介抱、當村相續仕罷在、身體持崩不申候樣不斷心懸、若分限ニ不似合行跡、田畑反高ニ不應人數等ニ而、以來相續無覺束有之候はゞ、其惡逆を爲口子孫懸り人等之多き分ハ、田畑作德稼之品を考、夫食を積り、渡世可相成程を了簡仕、餘分ハ奉公ニ出し候樣可致差圖事、

一御年貢等、小撿見引、御傳馬人足、諸役之割賦候義、正路ニ可仕候、縱親子兄弟智音親類緣者之好ミ、又ハ中惡敷雖爲輩、毛頭無依怙贔屓、割元帳、總百姓ニ見セ、得心之上、割掛可申、或ハ過分ニ割

掛、諸入用引取、相殘所ヲ手前へ取込候樣成義、一紙半錢も仕間敷事、○中略

一年々宗門御改之通、不斷心掛、怪敷佛像佛咒等書たる經文、佛前之勤等、各別之義ども及見聞申候はゞ、早速可申上候事、幷此旨村中諸百姓江も申渡し、常々互ニ吟味仕候樣可申付事、○中略

一爲御撿地御手代衆當村へ御越候時分、田畑毛立御案内之儀、本田畑ハ勿論、新開起返、切添之見取場、幷ニ鄕村境、山堺、海川、一畝一歩とも、無隱有體ニ可申上候、立毛出來列之小撿見不申請候節御案內申候時分ハ、當立毛出來列之能き場をば隱し、廻り道抔仕、一段惡敷所を掛御目ニ候樣成義、毛頭仕間敷候、或ハ名主、組頭、田畑出來惡ク候節、小撿見を願候樣成義、一切仕間敷事、

一御年貢金銀、幷小物成金銀、御直納可仕由奉畏候、年々御定之通急度取立候、御陣屋本へ持參仕相渡し可申、不斷身持惡敷候而、身體不口成御年貢切々滯申百姓有之者、委細ニ書附、御手代江差上可申事、○中略

一奉推御威光、一分之奢、万事威高ニ仕、百姓之訴を中々滯らせ、諸人令退屈候樣成義、一圓仕間敷候、出入訴訟等於有之者、早速立合、組頭五人組中懸相談、黑白相分り候儀ハ、無理之方へ異見仕相濟、若半分之扱埒明候而可然義ハ、其通り申談、相濟可申候、夫ニ而も雙方堪忍不仕義ハ、不限晝夜御手代衆へ可申上候、勿論內證ニ而埒明之儀とも、其旨趣委細可申上候、及他領之衆、當村百姓と公事取結候義ハ、理非を考合、此方之百姓畢竟可負儀ハ、落着仕候者、前方ニ留可申、又理非不分明之義ハ、前方の御手代衆へ爲御知申、私共存寄をも可申上事、

〔地方凡例錄七上〕一庄屋名主濫觴之事

一上方筋遠國之庄屋ハ家極り、數代連綿し、若し庄屋役を勤むべき者幼若なれば、組頭の內か、又ハ親族の內にて後見を立、庄屋の名目ハ、其家の主幼年たりとも繼て一村を治め、假令大高持、豐饒なる百姓たりとも、其家筋にあらざれバ、名主役を勤ることとならず、之に因て庄屋の威嚴重に

て、村中能治り、庄屋の下知を背く事なし、尤も數代連綿し、威勢有に任せ我儘なることも多く、百姓の爲にならざる儀もあり、關東も昔ハ名主の家、定まりありし由なれども、前書の趣にて、百姓の爲に宜しからざること多きに依て享保の頃ゟ、一代勤め、又ハ年番名主とて、一村の內、名主役を勤むべき家柄を撰み、百姓の內より、一年宛順番に名主役を持つなり、此の如く百姓仲間ゆゑ、役威も昔てなく、下の示し不行屆にて、村中不取締の儀も多く、兩端の內、何れか是ならむ分ち難し、關東名主病死か又ハ退役して、跡役を極ることハ、前々其村々の鄉例に任せ、總百姓入札にて、高札の者に申付るもあり、或ハ總百姓連印を以て願出るもあり、勿論年番持の名主ハ、願入札等にも及ばず、順番の者之を勤む、年番にてなく、一代限の名主役の時、其子役儀を勤むべき年齡人品にて、村中存付も宜しければ、總百姓相談の上、直に先名主の悴を願ふもあり、又入札願出たる者にても、其者の持高、平日之行狀、算筆の儀を、役所に於て篤と穿鑿を遂げ、彌勤まるべき者ならば可申付、假令高札たりとも、勤る間敷者ならば、入札の者どもへ利害を申喩し、二番札に申付るとも、又ハ入札を仕直すとも致すべし、凡て名主は、百姓の心儘に立置くことの樣に心得違ひたる百姓も有ゆゑ、役威も薄く、名主の申付をも用ゐず、一村治り兼ることと多ければ、上の役人、巨細に糺明し、其任に叶へる者を申付べし、一村の長多ければ、隨分入念可糺事なり、

〔御代官御役成演說書〕一村々名主退役跡役等申付候儀ハ、後日に名主役の儀に付、小前より彼是不申出ため、退役跡役共に、小前一同連印を以相願候ニ付、小前共印形不相成哉之段承糺、願之通申渡、尤村方諸書もの逸々相改、先名主より請取可申、名主役申付候迚、小前へ對しがさつヶ間敷事不致、御年貢取立方ハ不及申、村方諸勘定万端入念、諸帳面爲見屆、小前銘々疑無之樣、諸事正路ニ可相勤、且公事出入有之候得者、自然と困究之基に相成候間、常々心掛、出入出來不致樣可取計旨申渡、其度々請書取置申候、

〔地方凡例錄七上〕名主給米引高幷に供人足遣ひ方の事

一名主給米、先年の定め左の如し、

村高百石ゟ百五十石まで 給米貳俵 同二百石ゟ三百石まで 給米四俵 同四百石ゟ六百石まで 給米五俵 同七百石ゟ千石まで 給米八俵 同千二百石ゟ千五百石まで 給米十俵

是ゟ大高の村方ハ、是に准じ相增すべき旨、先年命せられたり、尤も年貢の差引にはなさず、小前ゟ別段に取立て相渡す、名主役の引高は廿石に限り、其餘ハ外百姓並に高役を勤め、持高廿石ゟ以下の名主ハ、高の有合たるべき旨、是又命せられたり、然れども村々は色々の引付仕來りありて一樣ならず、給米計りにて勤る村もあり、又役引高計にて勤るもあり、或ハ持高廿石に滿ざる名主は、貢高とて總村高の內廿石を引高にして高代致し、村方より取り、自分持高ハ高役を勤る村もあり、給米も右の定法より多少もあり、先ハ鄕例引付の仕來りを用ゆることなり、併し定めハ前書の通りに付、万一給米引高等の儀に付出入など之ある節ハ、定法を用ひて取計ふべし、

〔地方凡例錄七上〕組頭百姓代之事

一組頭と云ハ、元來五人組の頭分を言しに、今ハ百姓の內、筆算致し、人品宜しく、高も相應に持ち、用立つべき者を村の大小に依て、五人三人充、入札か又ハ總百姓相談等にて極め置、名主の下役にして、領主地頭の用向、幷に村用をも勤む、又病氣か或ハ何ぞ子細ありて退役致さすれバ、又外の者を見立て勤めさする、組頭ハ給米なき村方多し、引高ハ拾石、又ハ五石八石位有れども、組頭引高の儀ハ公儀御定御觸等なし、又上方遠國等の年寄長百姓も組頭同然なり、尤も組頭役ハ願ひ出るに及ばずといへども、村方にて取極、役所へハ屆け計なり、

一百姓代と云ハ、名主組頭の外、其村にて大高持の百姓一人を極置き、尤も村により二人三人あるもあり、是ハ名主組頭へ百姓よりの目附なり、村入用、其外諸割賦物等の節ハ立合、大高を持た

る百姓承知の上ハ、小高の者申分なき爲なり、百姓代ハ高持の役にて勤るゆゑ、給米引高等なく右の極なれども、村によりては組頭同樣、高の多少にも强て拘はらず、其一人を撰み、總百姓より頼みて百姓代に致すもあれども、[illegible]當らざることなり、この名主、組頭、百姓代を村方三役と云なり、

〔武家嚴制錄 三十一〕鄕中御條目

定

一從此以前被仰出候五人組、彌入念可相改之事、

一在々所々惡黨無之樣、鄕切に申合、常々可改之、若不屆者有之バ、穿鑿之うへ、五人組ハ不及申、依其品一鄕之もの可爲曲事事、○中略

寛永十四年十月廿六日 ○又見憲敎類典

〔憲敎類典 五ノ三下 地方〕元祿七甲戌年正月

御領御代官所名主五人組御定書

差上申一札之事

一兼日被仰出候通、大小之百姓五人組を究置、不依何事五人組之内ニ而、御法度相背候儀ハ不及申上惡事仕候者有之候はヾ、其組ゟ早速可申上候、若隱置、脇より申出候はヾ、其者には品により御褒美被下、五人組之者、名主ともに曲事に被仰付旨奉畏候、○中略 諸事致吟味聞出し次第、御注進可申上候、并脇百姓家抱前地店之者ども五人組をいたし、判形仕上ゲ申候、若五人組にははづれ申者御座候はヾ、名主組頭曲事に可被仰付事、○中略

一盜人之屆ケ、又は被盜候贓物見出し、其屆ケ有之候はヾ、名主五人組立合、僉議仕可申候、縱如何樣之輕きもの申來候共、疎略に仕間敷候、若致油斷、其盜人欠落爲致候類斷之、贓物紛失いたし

候はゞ、其者ハ不及申、名主五人組、曲事ニ可被仰付候事、〇中略

一田地屋敷、年季を定、質物に入、金銀等預候はゞ、名主五人組加判之證文取之、所持可申候、〇中略

右之條々堅相守可申候、若違背仕もの有之候はゞ、如何樣之曲事にも可被仰付候、爲其名主年寄五人組連判、一札差上申候、仍如件、

〔續地方落穗集十五〕條々

一前々從公儀被仰出候御條目之趣ハ勿論、自今以後被仰出候御法度之趣、堅相守可申事、

一五人組之儀ハ、屋並最寄次第、五軒ヅヽ組合、借地店借、寺社門前、下人等ニ至迄諸吟味仕、惡事無之樣可仕事、

一切支丹宗門之儀ハ、御制禁之條、不審成もの有之候ハヾ、可申出、若隱居、後日顯候ハヾ、五人組ハ不及申、名主組頭共、急度可申付事、〇下略

古事類苑

官位部七十六

德川氏職員二十五

寄合小普請

寄合ト小普請トハ、幕府旗下無職ノ士ノ階級ニシテ、其區別ハ大略三千石以上ノモノヲ寄合ト爲シ、其以下ノモノヲ小普請ト爲ス、此兩階級ニ入レルモノハ、祿ノ多寡ニ從ヒ、毎年金ヲ課セラル、之ヲ小普請金ト云フ、原ト幕府小普請ノ費用ニ充テシヨリ起ルト云フ、寄合、小普請ハ、無職タリト雖モ、臨時ニ諸種ノ役ヲ命ゼラルヽ事アリ、而シテ此寄合、小普請ニハ、各ヽ監督者アリ、寄合肝煎ハ寄合ヲ支配シ、小普請支配ハ小普請ヲ支配シ、小普請組頭ハ小普請支配ニ屬シテ、其事務ヲ掌ル、尙ホ罪アリテ此班ニ黜降セラルヽモノヽ事ハ、法律部下編ノ役儀召放篇ニ在リ、參照スベシ、

〔德川禁令考十七寄合肝煎〕寄合肝煎往時新井白石謂、凡兵衆不レ足レ成レ軍者、合ニ其衆一以成ニ一軍一、俗呼曰ニ寄合一、又大坂之役、隊列有ニ寄合之名一、按ニ即今呼ブ所ハ軍行ノ舊稱ニ即チ沿習ノ不レ改者ナリ、幕府偃武以來、旗下ノ士衆ヲ格別シテ、祿高三千石以上ヲ一班トス、其老少多病ニテ不レ還者、又有レ過免レ職者ハ、概子朝請ヲ奉ジ、工役金ヲ納レ、家居ヲ允スト云フ、寄合是ナリ、

〔德川禁令考十七小普請支配〕小普請支配古記ニ、往時緇侶挾ニ朝旨一以募ニ建堂塔一、普請之名起ニ于此一、[illegible]後來通爲ニ工作之目一、[illegible]因テ俗是ヲ普請金ト云フ、蓋シ德川氏ノ制ハ、旗下交代寄合ヨリ、譜代世祿ノ士迄ハ、課シテ備丁ヲ出スニ代ヘ金ヲ納レ使ム、之ヲ小普請金ト唱フ、有職ノ臣家ハ之ヲ宥ス、其他或ハ幼年、或ハ多病、又ハ擯斥等ニテ、職班ニ赴ク不レ能者ハ、擧テ此課アリ、而シテ三千石以上祿アル者ヲ寄合ト爲ス、[illegible]其以下ヲ小普請ト云フ、此衆ヲ統理スルヲ小普請支配ト云フ、

〔仕官格義辨〕寄合小普請之事

問云、昔は四五千石取之衆ニ小普請有之、小身成衆ニ寄合有之候處、只今ハ三千石已下は小普請

ニ入被申候處、享保二十一辰年十一月四日、元御小性組被勤候遠藤源五郎ト申仁之嫡孫承祖文次郎跡目被仰付候而、寄合ニ入被申候、高は千石ニ而候、又其已後も、元文四未年十二月二日、元御使番柴田七左衛門養子新三郎跡目被仰付、是も高二千石ニ而、寄合ニ入被申候、如何之譯ニ而候哉、答云、小普請衆之儀、先規は御留守居衆之支配ニ候處、享保四亥年六月廿五日、永井宮内、安藤主膳、有馬内膳、石川兵庫、内藤采女、金田周防守、瀧川讃岐守、松平帶刀、伊丹覺左衛門、酒井大學、右十人小普請支配被仰付、二百石已上二千石有餘迄、五組之御留守居衆より小普請衆組割定、自今小普請組と可唱旨被仰渡候之由、三千石已上之分は、不殘若年寄衆御支配ニ入申候、乍去御留守居、三番頭之子息、代々寄合筋之衆は、三千石已下ニ而も寄合筋故、寄合ニ入被申ト存候、右小普請支配衆初而被仰付候節ゟ、六日、十九日、廿四日、一ヶ月ニ三之定日を立、右日限ニ支配衆之宅にて小普請衆ニ逢被申候、其始は、八日、十九日、廿四日ニ而有之候處、其以後八日之定日替り、唯今は六日ニ成候、其後元文五年之頃より、三番頭之子息筋之衆も、三千石より内之衆者、家督之節、小普請組ニ被仰付候由、福島日向守跡左門、酒井伯耆守跡小平次、是等皆番頭之跡、伯耆守は元大御番頭、日向守は御旗奉行、其前御小性組番頭ニ而候得共、二千石故歟、小普請ニ入被申候、延享三寅年六月二日、右小普請組支配、一組ニ組頭兩人充新規ニ被仰付、其支配中ゟ高の搆なく、三百俵ツヽ御役料被下、席者御留守居小普請組頭之上ニ定ル、二百石已下之小普請衆は、先規より今以御留守居衆之支配ニ而候、享保十九寅年六月朔日、御留守居一組ニ組頭兩人ツヽ被仰付、右之組頭組中之取扱被致、其已下ニ世話役とて、伊賀格之者一組五人充出來、逢對之定日、一ヶ月三日宛立、組頭之宅ニ而逢被申候由、輕キ小普請之取扱、茂こまりに成候而、自ら行儀能相守候樣ニ成候と被存候、總而武士之儀ニ於而は、御連枝方高家衆抔は格別、其外は祿ニ依る之格式が第一與被存候、城主已上は勿論、萬石已上は格別違ひ、五千石已上は御番等は不被仰付候、三千石已上は寄合ニ入、家督

御禮之節（茂）獨禮ニ而金馬代、千石已上は大刀馬代銀三枚、五百石已上は銀馬代、右之以下は繼目之御禮無之候、先祖又は其身に取て、御加増拜領（與）申は難有事ニ而、子々孫々迄（茂）御加増之御恩分而厚可存事ニ候、

〔翁草百二十五〕小普請組之事、病身或者老年の人など、願て此組へ入、此組は一向御番等も無之、年頭八朔之御禮にも不出、小普請金、百石に付貳兩も差出し、畢竟は祿有之浪人の如し、又役義に仕損し有て、小普請入仰付られし輩は、再勤の沙汰も無く、一生此組に潜居するなり、大身或は受領役等の人は寄合組へ入る、寄合と申も小普請同様ながら、支配替りて寄合は御老中支配、小普請は小普請組支配衆有て、組々を分て支配せらる、一組凡百有餘人宛なり、此度石河土佐守など寄合組より再勤の事、古今稀有の事なり、又御咎を不得、自分〻願ひて小普請入したる人は、御役望の志あれば、銘々の支配衆の方へ式日などに罷出、名前を常に知られ置候得ば、御入り人之節、諸組頭支配人名前書上ケ候樣仰付られ、其砌支配衆より右之類を書上るなり、左もなき面々は、年始とても支配の方へも不出、心の儘に惡等〇等恐事誤をなし、行狀一々擧るにおよばず、士〇士字上恐有脱字、は夢ほどもなく、人に語りても誠しからぬ身持なり、又右の面々の家祿を引受けて仕送り、借銀方へ引取小普請金取集之節は、彼町人より誰分々々と金子を包み分けて差出、本人より直納に不及濟來る事なり、浩る風俗故に、己がさま〴〵言語同斷の擧動多し、たとへば先年評定所に於て吟味掛り合に小普請何某が名前出たり、仍て右支配之方へ、來ル幾日、彼何某を出さるべき旨達せらる、支配衆則彼何某屋敷へ其段を申遣す處に、屋敷は荒はてゝ、住人はなく、何地へ行けん行方をしらず、其最寄にて尋れども知人なし、是をあからさまに表へ披露せば、忽家滅亡せん事を氣の毒に思ひ、樣々搜し求らるゝに、漸くにして有り所知れたるを聞けば、堺町の芝居の木戸を勤居る由なり、支配衆もあきれはてながら、早々呼出し、其身持を叱り、孰にも評定所日當有

寄合肝煎

事なれば、早々其用意可ㇾ然と申されしに、腰の物もなく、着の儘の體なる故、無二是非一支配の方にて、大小上下着用類一式仕立候て、其日評定所へ差出し、尤掛り合一通りの儀故、御咎めもなく、右內證の譯は知らずして相濟しと也、〇中略又勤嫌ひにて鄙恪なるものは、御役を勤れば物が入るとて、病氣を云ひ立て此組へ入祿千石にも及ぶ身が、一僕を遣ふか遣はぬ位にて、ひたすらに金を延して大に富るも有、それは百人に一人なり、多分家祿は名計にて、皆借銀方へ引取られ、今日を送り兼る人而已なり、

〔吏徵附錄內職〕寄合肝煎　若年寄支配　持高　寛政二年庚戌十二月十九日、始置二五員一、酒井紀伊守、武田河內守、戶田內藏助、仙石右近、水谷兵庫、寄合肝煎被仰付、以來同席之者共、藝術其外諸事取締之儀迄も、萬端世話可ㇾ致候、寄合上席被ㇾ仰二付之一、

〔德川禁令考十七寄合肝煎〕幕府偃武以來、旗下ノ士衆ヲ格別シテ、祿高三千石以上ヲ一班トス、其老少多病ニテ不レ選者、又有レ過免職者ハ、概ネ朝請ヲ奉ジ、工役金ヲ納レ、家居ヲ允スト云フ、寄合是ナリ、寛政二戌年之ヲ幹理スル職ヲ置テ肝煎ト名ズ、

〔德川禁令考十七寄合肝煎〕寛政二庚戌年十二月十九日

肝煎命職ノ達書

酒井紀伊守　武田河內守　戶田內藏助　仙石右近　水谷兵庫

以來同席之もの共、藝術其外取締萬端世話いたし候樣、寄合之もの上席被二仰付一候、

十二月

同年、同月同日

前件ニ付目付役ノ者同掛り申達書

平賀式部少輔　中川勘三郞　井上圖書江

寄合肝煎五人被仰付、以來同席之者共藝術其外諸事取締之儀迄も、萬端世話可致旨申渡、寄合上席ニ被仰付、勤候內役金御免相成候旨申渡候ニ付、其方共儀も、右之掛り被仰付候間可申談候、

十二月

〔官府要記〕寬政二庚戌年十二月十九日、寄合肝煎初而被仰付、翌廿日、堀田攝津守殿御宅へ、御退出後酒井紀伊守、武田河內守、戶田內藏助、仙石右近、水谷兵庫、五人一統被召呼、肝煎勤向之心得方被仰聞候趣書取、

今度寄合肝煎被仰付候御趣意ハ、御番方小普請等ハ、其頭支配組頭等も有之、仮口ニ取締等行屆候得共、寄合之儀ハ多人數之上、此方共手懸ニて、夫々迄ハ行屆兼候、三千石以上ハ格別之儀ニて、末々三番頭、其外迄も相勤候家柄之事ニ候、藝術行儀作法取締等萬端相嗜俊才之者出來候樣教育いたし、行々御用ニも相立候樣ニとの御趣意ニて、厚思召之處、末々迄も行屆候樣可被致候、勿論人數多之儀、早速ニて行屆申間敷候得共、一體之御趣意之處、得と相心得候而可被致世話候、家事不取締ニ而、家來之風儀も不宜候得バ、御役儀被仰付候上、組支配へも不宜風俗移り行ものに候間、一己之愼ハ不及申、家事取締等專要之事ニ候、人數多ニ候得バ、風聞等も有之衆も可有之哉ニ候へバ、心得候而、表立不申候樣取計可被致候、且又三千石以下迄ハ行屆兼候はゞ、組頭樣之者ニても被仰付候樣同役ども申談も可相成候得バ、申談候而、申上候樣ニ被仰付候、

〔明良帶錄前集〕寄合肝煎 布衣若支 柳之間

勤仕並、中川御番上座、登城の時、上下着用と被仰出、依之寄合衆向寄方角を以五側ニ分、諸屆異變何ニても同席之間合せ相談を聞て、掛り御目付も出來て、御觸事其外御用向之義、月番之肝煎へ達す、肝煎より同席へ通ずるなり、御禮日登城之名前調、當日御目付衆へ相渡す、弓馬稽古之義者、櫻田御用屋敷ニ於て稽古所被下、三八五十稽古日と定め、學問は聖堂にて出席の者取調、會日相

越す所、近頃聖堂世話役を寄合之內學問有る仁に申談、堀田攝津守殿に申上、出役申付る、櫻田之地引けに相成、三番町人參畑ニて代地被下、弓馬稽古有之、御支配方ニも御一覽に御越し有之、肝煎ニて早出遲出と番析を立て世話あり、

〔續泰平年表〕天保十三年四月十七日、寄合肝煎江御達書、中川御番所勤方、是迄諸事等閑之趣ニ而、御番所見廻り等も怠慢之趣相聞候、一統御改革之砌、殊此度新役も被仰付候義ニ付、向後家來共ニ至るまで、不取締之義無之樣相心得、其方共も精々申談候樣可被致候、

〔溫恭院實紀八〕安政元年十二月十九日

寄合肝煎江

寄合之面々、學問修業之儀ニ付、先達而相達候趣も有之候處、兎角修業未熟之樣相聞へ候、去年以來武備之儀格別ニ御世話有之、一同相勵候ニ付、自然文學之心掛疎ニ相成候哉ニ相聞候、文武之道、偏廢難相成ハ勿論之儀、精忠報國之志を立候も、學問切瑳之功、許多有之候事ニ候間、學問修業之儀彌怠慢無之、行々格別御用立候樣可被致候、就而ハ向後學問所稽古之定日にハ、肝煎之內壹人宛申合出席厚致世話、且又平生銘々修業致方等、林大學頭、林圖書助申談、行屆候樣可致、尤學問所稽古席江、御目付も時々見廻り、夫々勤惰をも相糺候筈候間、可被得其意候、

寄合衆職員

〔東武實錄十三〕寛永三年五月廿七日、是月、○中略今度御上洛ニ依テ、江戸ヨリ京都ニ至テ、供奉之面面宿割、○中略

寄合衆

三千石、神尾刑部少輔、　千五百石、大岡兵藏、　千五百石、同心廿人加藤伊織、　千五百石、岡部主水、　千五百石、朝比奈彌太郎、　千石、池田圖書、　千石、肥田主水、　四百五十石、大河內平十郎、　三千五百石、渡邊吉左衞門、　二千石、瀧川左門、　千石、內藤市正、　二千石、牧野傳藏、　千石、一尾淡路守、　千石、妻木彥右衞門、　千石、佐々權兵衞、　千石、下曾根三十郎、　千石、別所左近、　千石、眞田長兵衞、

千石、新庄內匠、　千五百石、遠山藤四郎、　八百石、日根野長五郎、　七百石、兼松又四郎、　五百石、佐佐三郎四郎、　千石、三浦權六郎、　五百石、池田權之助、　五百石、土方久兵衞、　三百石、佐久間八左衞門、　二百石、日根野外記、　二百石、溝口五郎左衞門、　二石石、木造七左衞門、

〔延寶三年江戸鑑〕御寄合

六千石、溝口修理亮殿、　五千石、松平采女殿、　七千石、竹中主殿頭殿、　五千石、藤掛監物殿、　五千石、溝口左近殿、　五千石、横山內記殿、　五千石、平野丹波守殿、　七千石、朽木監物殿、　五千石、太田式部殿、　五千石、戸田孫七郎殿、　五千石、戸田孫十郎殿、　七千石、本堂源七郎殿、　五千石木下縫之介殿、　三千石、金森左京殿、　二千三百石、多羅尾權兵衞殿、　三千石、松平久米之介殿、　五千石、山崎勘解由殿、　八千石、生駒主殿殿、　四千石、松平万之介殿、　六千石、松平民部正殿、

御寄合並

三千石、淺野長太郎殿、　三千石、知久伊左衞門殿、　五千石、本多主税殿、　六千石、岡田與三郎殿、　四千石、福原監物殿、　五千石、福原次郎七殿、　千八百石、大田原出雲守殿、　三千石、蘆野左近殿、　三千石、山內式部殿、　五千石、渡邊十郎右衞門殿、　千本犬之介殿、　三千石、伊藤主殿殿、　千石、松平太郎左衞門殿、　二千石、織田藤十郎殿、　三千石、池田庄左衞門殿、　千石、長島左兵衞殿、　八千石、本多伯耆守殿、　七千石、戸田右近大夫殿、　四千石、戸田相摸守殿、　三千石、植村五郎殿、

平御寄合

七千石、酒井兵部殿、　五千石、鍋島帶刀殿、　七千石、神保左京殿、　千俵、伊勢兵庫殿、　五千石、酒井藏人殿、　七千石、石川八郎左衞門殿、　六千石、牧野半左衞門殿、　三千石、松下加兵衞殿、　五千石大島雲八殿、　五千石、大久保主膳殿、　五千石、石河藏人殿、　三千石、菅沼越中守殿、　五千石、菅谷八郎兵衞殿、　五千石、皆川左京殿、　五千石、一柳權之丞殿、　四千五百石、西尾半介殿、　四千五百

石、伊藤采女殿、　三千石、永井甲斐守殿、　五千石、近藤織部殿、　三千石、松平求女殿、　三千石、服部仲殿、　五千石、鍋島數馬殿、　五千石、松平甚九郎殿、　六千石、內藤伊織殿、　三千石、池田治左衞門殿、　四千石、西尾八兵衞殿、　三千石、本多喜五郎殿、　六千石、稻垣若狹守殿、　三千石、酒井治右衞門殿、　三千石、神保五郎大夫殿、　五千石、坂部三十郎殿、　四千百石、安藤彥助殿、　五百俵、大友內藏介殿、　三千石、戶川內藏介殿、　四千石、高木九介殿、　三千石、織田對馬守殿、　三千三百石、長谷川三左衞門殿、　三千五百石、淺野內記殿、　三千石、奧澤三郎右衞門殿、　三千石、藤堂圖書殿、　二千俵、眞田勘解由殿、　三千石、六鄕賴母殿、　二千五百石、牧野半三郎殿、　三千石、堀三六郎殿、　二千石、松前民部殿、　三千石、多賀左近殿、　三千石、織田作十郎殿、　三千石、小出十左衞門殿、　三千百石、曾我又左衞門殿、　五千石、淺野權之佐殿、　三千石、根來小平次殿、　四千石餘、島田八郎左衞門殿、　二千俵、松平織部殿、　五千石、久世三郎右衞門殿、　右近取之內、前田宮內殿、　五千石、內藤出雲守殿、　五千石、津輕左京殿、　三千石、內藤三郎助殿、　四千二百六十石、本田作十郎殿、　三千石、堀孫太郎殿、　二千俵、酒井權兵衞殿、　五千石、五島民部殿、　二千石、松平傳左衞門殿、　五千石、本多豐前守殿、　五千石、岡部數馬殿、　五千石、片桐又七郎殿、　千俵、榊原伊織殿、　三千石、高力左京殿、　三千石、雀部新六殿、　四千石、久永飛驒守殿、　三千石、松平久之丞殿、　四千五百石、本多彌八郎殿、　小出百介殿、　二千石、松平二郎大夫殿、　二千石、松平伊織殿、　三千石、瀧川長門守殿、　五千石、本多土佐守殿、　五千石、町野壹岐守殿、　二千石、土屋兵部少殿、　三千石、本多大膳殿、　五千石、松平主水殿、　三千五百石、阿部長吉殿、　三千石、水野左兵衞殿、　二千石、大橋五左衞門殿、　五千石、內藤吉十郎殿、　三千石、北條長吉殿、　二千四百石、新庄長門守殿、　三千石、龜井傳七郎殿、　二千五百石、阿部鶴之介殿、　六千石、土屋主稅殿、

〔靑標紙三編〕一父御留守居相勤、其子無足部屋住ニ而、跡目相續する時は、本祿三千石以下ニても、

職掌

寄合席に入る事なり、前田又五郎、井戸大內藏の類是なり、又金森萬助、本多三津助は、名家之跡とありて、三千石未滿なれども、代々寄合席ニ入り、又御役をもつとむ、加藤虎之助、福島左衛門、平岩七之助、小堀大膳如きは、名家の子孫なれども、寄合席ニ入らず、

〔獻可錄下〕歷代選擧之事御尋ニ付、〇中略段々解釋を加へ差上申候、〇中略

一只今寄合組大勢打込、若年寄之支配に而御座候、若年寄は手重く、其上每日在城候故、何事も家來江まかせ置候、此通にては、中々人柄の吟味も不能成候、是も小普請組之通、人數を分候而、頭を可被仰付儀に奉存候、儒者、醫者、外に頭を被仰聞候歟、又は右寄合組頭江配分仕候而も不苦儀に奉存候、然ば寄合組、御書院番組、御小性組、新番組、小普請組、大番組、小十人組、凡御直參之諸士七組に而御座候、

〔明良帶錄前集〕寄合柳の間若支

寄合も天和の比迄は、御留守居組成りしが、三千石以上無役不勤之者、若年寄支配寄合と仰出さるゝは、常憲廟〇德川綱吉之頃之由申傳へたり、〇中略寄合の主役は、十二箇所御門番、駿府加番、御裏方御新葬、幷御法事勤番、日光御門主差添等也、當時は肝煎ニて被仰付、肝煎十箇年調とて、十箇年之內、知行之損毛、類燒等もなく、父の勤之年數、其身の勤、退役後、何年の休か、但家督後何年ニか、當時御役被仰付ても、勤之出來る仁を一々筆に認め、是を手明帳と云、御扣ともに二冊兼て、一冊は差上置、御用被仰付以前に、御支配方より御達し有之候ニ付、御扣之手明帳、御登城前へ持參、御勝手に附入、御直に進達、御引替にて以前之手明帳下る、又順に次の仁を虎口へ出し置、此一の筆の仁を御役當る御門番も同斷、日光御門主の御差添は、少々心得有り、當時は御門番准と云事は、御留守居方にて前廉に知れ難く、御支配方より御達有りて、寄合衆御門番當り之仁へ連書を差遣す計也、其外寄合衆撰擧之事も、對客の御登城前之節御咄有、此方より御用に可立仁は申立て吹擧

す、御役寄合、布衣、諸大夫、小高之衆は、相應之御場所見立て撰擧す、又願に依り、高持ニても兩番へ出るも有り、肝煎にて、其向寄方角近き方の仁を、同席五の割にして世話するなり、當時寄合衆學問集會といふて、輪順に經學歷史諸子百家經濟之書を會讀す、是も帳面にして御支配方へ差出す、

〔大猷院殿御實紀三十九〕寛永十五年十一月九日、これまで板倉內膳正重昌に屬せし寄合組之輩を、松平右衛門大夫正綱、秋元但馬守泰朝が所屬に分附せられ、○下略

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十月、是月○中略見附十四箇所ノ勤番ヲ改革ス、

見附十四ヶ所、是迄三千石以上寄合の持にて、十一日交代の處、今這御改革、三千石以上御軍役組合銃隊步卒、一晝夜の勤番、每朝交代と成る、

〔有司勤仕錄〕駿府加番、是は定御役に非ず候といへども、御書院番頭に爲見合爰に記す、

一駿府加番は、萬石以上壹人、是は世上大加番と云 其外五六千石之寄合兩人被仰付、御暇之節拜領物、萬石以上ハ、在所御暇之格を以被下置、寄合加番は、何も時服三、羽織被下之、是又每年九月交代也、

但加番は御城外に屋敷有之、町口大加番小屋場、四足、草深、平加番面々、萬石以上之減高壹万石ニ而勤仕之、御役扶持四百人扶持被下之、其以下之面々ハ右之割ニ而勤之、

〔職掌錄〕駿府加番

當職は定役にあらず、年々其人を撰みて被命こと也、萬石已上壹人、是を俗に大加番といふ 五六千石高の寄合兩人、都合三人也、御城代の指揮を受て護衛の事を勤む、御暇の時拜領物、萬石已上は、在所御暇の格を以賜ふ、寄合は何も時服三領、羽織を賜ふ、每年九月交代也、加番屋敷御城外にあり、町口は大加番小屋四足と草深は平加番の小屋也、萬石已上は減高一萬石にて、御役扶持四百人扶持被下、其他は右之割にて給ふこと也、然るに天保十四年癸卯八月晦日より、平加番は、高に拘はらず

貳百人扶持可被下旨被命、當職は寛永十年癸酉始て二員を置く、

〔吏徴附錄 權職〕駿府加番三人　萬石以上一人　五千石以上寄合貳人　寄合兩人、各御扶持方貳百人扶持　萬石以上御扶持方四百人扶持　五月朔日御暇 萬石以上拜領物、依家格不同、寄合時服三、羽織、 九月十六日發足前御渡物　九月十九日至廿一日發足　十月十五日歸府御目見　寛永十年癸酉月日、始置二人、

〔柳營諸舊例的 三〕文化二丑年六月十一日

二月切駕籠願　寄合 松平晴三郎

私儀今度駿府御加番被仰付候處、持病之痔疾有之候間、差發候節は、馬上計ニ而は難相勤御座候間、月切駕籠相用申度奉願候、以上、

六月十一日　松平晴三郎

月切駕籠斷可爲願之通候、誓詞判元御目付松平伊織宅ニ而見候事、

〔德川禁令考 十七 寄合肝煎〕天保十四癸卯年九月十四日

駿府城勤番中扶持方達

寄合衆

寄合之面々、駿府御番相勤候節御扶持方、是迄千石ニ付四十人扶持之割合を以、高ニ應じ被下來り候得共、向後高無差別、都而貳百人扶持被下候旨被仰渡

九月

〔大猷院殿御實紀 五〕寛永二年、此年小性大久保勘三郎忠良、大坂城番奉り、弓手を預られ、寄合妻木權左衞門賴利、同じ加番命せられ。略下

〔嚴有院殿御實紀 二十三〕寛文二年五月十五日、來月安宅丸御覽せらるべし、破損點檢して修理す

べき旨、船手頭向井兵部正方、寄合神保左京茂明に仰付らる、茂明は先年も修理奉行勤めしゆへとぞ、十六日、寄合關兵部少輔氏盛、安宅丸點撿命せらる、先年も修理に預かりしゆへなり、

〔嚴有院殿御實紀三十八〕寛文九年五月十五日、寄合大島雲八義近、村里盜賊考察の事仰付らる、

〔嚴有院殿御實紀五十〕延寶三年二月廿七日、普請奉行阿部四郎五郎政重、大久保甚右衛門長重、寄合岡田將監善次、芝金杉新堀船入堀疏鑿の奉行を命ぜらる、

〔有德院殿御實紀三〕享保元年九月五日、濱園の門番、これまで萬石の輩にあてられしかど、こののちは寄合の輩に充らるべしとなり、

〔有德院殿御實紀四十三〕元文元年二月廿五日、寄合大久保備前守忠義、濱の官邸をあづけられ、所屬二人を命ぜらる、

〔昭德院實紀二十五〕文久二年十二月二日

御目付江

寄合 火事場見廻　同 學問所二階世話心得取締

此度北二階世話心得取締、幷武藝稽古取締被仰付候ニ付、席順之義、右之通可被心得候、

右之通相達候間、可被得其意候事、

〔昭德院實紀二十五〕文久二年十二月二日

寄合 水野監物　小出順之助　高力庸之助

學問所二階世話役取締心得可相勤候、

寄合 中山筑後守　中根惠三郎　加藤縫之助

同席之面々、武藝稽古取締之儀可相勤候、

〔吏徴附錄權職〕火事場見廻十人　御使番貳人寄合八人出役　享保七年壬寅四月十一日、始置六

人、寄合小普請　同八年癸卯四月六日、御使番貳人兼役始、　元文四年未二月十二日、增置二人、廢御使番兼帶、

本所深川火事場見廻貳人　寄合出役　享保九年甲辰三月八日、始置二人、

〔仕官格義辨〕火消役之事

火事場見廻り之儀は、享保七寅年四月十一日始る、六人被仰付候、寄合村瀨伊左衞門、竹中主水、小普請瀧川讃岐守支配水谷彌之助、金田周防守支配大嶋因幡守、內藤采女支配三島淸左衞門、有馬內膳支配赤井圖書、右之面々假役被仰付候、同九辰年三月、寄合西尾主水、小普請能勢出雲守支配德山五兵衞兩人、本庄深川火事場見廻り被仰付候、御使番々も兩人ツヽ火事場見廻り兼帶被仰付、江戶廻り火事場見廻り八人に成、御使番衆共十人ニ而被勤候處、元文四未年二月十二日、寄合仙石兵庫、有馬宮內兩人增候而被仰付、火事場見廻り十人ニ成候、御使番々兼帶は御免ニ而相止ミ候、

〔明良帶錄前篇〕火事場見廻り持高若支

此場は若き人の初階にて、江戶中之繪圖を朱引分にして、持場を受取、相談之家來を召連、家來同道にて御府內を步行しが、今は止みたり、燒跡を見廻りて、書上進達有り、何町何所より出火、何風強く、橫何十間、竪何十間、何處迄燒亡之段、落合場にて認進達す、屋敷小路も同斷、御使番よりも兼帶あり、此場聖堂出役などより出る、中川御番、火事場廻りは四時石にて、若年寄衆御出座御月番被仰渡、御老中方御列座、故に御役にてはなし、御奉公といふ、

〔德川禁令考二十九火事場役人〕享保七寅年四月

出火之節屋敷々々見廻之儀被仰渡候

寄合　村瀨伊左衞門　　寄合　竹中主水

右者出火之節、風下萬石以上屋敷々々見廻り、防候儀可申付旨、於菊之間縁頬石川近江守殿被仰渡候、支配ハ只今迄之通之由、〇中略

瀧川讃岐守支配　水谷彌之助
金田周防守支配　大島因幡守
内藤采女支配　三島清左衛門
有馬内膳支配　赤井圖書

按ニ、本條ハ則火事場見廻ノ創置ナリ、(中略)又本條ト同時ニ、他ノ武士方ヘモ達アリ、此ニ附記ス、

享保七寅年四月十七日

覺

一火事有之時ハ身上相應に下人に申付、屋敷之火防がせ可申儀勿論に候、風脇よりは、下人少少成共差出、相互防がせ候様に、向寄に兼而可申合置候、自今以後、若火事之節ハ、風下屋敷屋敷見廻之役人被仰付候間、身上相應に人數を出し、能防がせ候へバ、其品見届書上仕筈に候、尤手配之儀をも、見廻り之面々差圖可有之候間、其旨可相心得事、

〔德川禁令考二十九火事場役人〕享保九辰年正月十八日

火事場見廻之面々防之儀差引之事

出火之節、風下之屋敷方、幷寺社町等迄、火事場見廻り之面々打廻り、防之儀差引いたし、人數不足之處ハ、其向寄之屋敷江相達、人をも出させ候筈ニ候間、可被得其意候、

右之趣向々江可被相達候、

〔有徳院殿御實紀四十九〕元文四年二月十二日、寄合仙石兵庫久住、有馬宮内則武に、火事場巡察命せらる、使番永井監物尚方これまで其事をかねしが、寄合のともがら巡察に熟慣せしをもて、今より後使番よりかぬる事をとゞめらる、

待遇

〔文恭院殿御實紀二十〕寛政八年四月二日、寄合土屋隼人光直、本所深川の火災巡視命せられ、○下略

〔續泰平年表〕安政元年正月廿一日、火事場見廻り中江、異國船近海渡來之節、差圖次第、御府内爲取締、代る〳〵見廻候之樣被仰付、

〔德川禁令考二十九火事場役人〕文久二戌年

本所火事場見廻御差止之御書付

和泉守殿御渡　　町奉行江

覺

今度御改革、本所火事場見廻り御差止相成、本所深川邊共、火事場見廻之面々、持場内と相心得候樣相達候間、爲心得相達候事、

〔慶寛諸令條下〕萬治二己亥年八月六日

下乘之橋より内へ召連候人數覺

一三千石以下之寄合、召連候侍一人、草履取一人、挾箱持一人、但雨天之時ハ、笠持一人可相通事、

〔有章院殿御實紀十三〕正德五年十二月朔日、留守居に屬する寄合、歲首の拜賀、元日に出しをとゞめ、二日に出べしと命せらる、

〔有德院殿御實紀六〕享保三年四月十一日、この日從者の令制を仰出さる、○中略三千石以上の寄合は、侍二人、履持一人、挾箱持一人、○中略またがふべし、

〔吏徵附錄内職〕寄合正德五年乙未十二月朔日、例年寄合之分ヘ、正月朔日罷出候得共、御留守居支配之寄合ヘ、來申五月より、二日に罷出候樣被仰出之、

若年寄支配　享保四年己亥六月廿六日、御留守居支配之内四十一人、三千石以上、向後若年寄支配定、　元文五年庚申十二月、三千石以上ハ若年寄支配、寄合、貳千九百石餘迄ハ御由緖有之者、且大名分知幷寄合筋にても、向後小普請組支配江可入旨被仰出之、

〔德川禁令考十七寄合肝煎〕享保九甲辰年五月五日

寄合ノ面々番入願ニ付達 按ニ、故事ニ寄合ノ一班ハ選セラルレバ、一局ノ長一面ノ司ヲ辱フス、此條ニ番士ヘ誘スルノ令アレバ、定テ一時如此制ハ行ハレシナラン、然レドモ近世目撃スル所ハ傳說ノ如シ、未知何レノ時ニ復古セシ乎、

唯今迄ハ、寄合之内より兩御番江入候者無之候、自今ハ兩御番江御番入被仰付、其上ニ而勤之樣子次第、布衣以上之御役ニも可被仰付候、兩御番之内を勤不申候而ハ、布衣以上之御役人ニハ向後被仰付間敷候間、兼々其旨可被存由可被仰出候、以上、

五月

松平能登守殿、大久保佐渡守殿御立會、右御書付出仕寄合之面々江、御目付より可相達旨、能登守殿御渡、

〔天明集成絲綸錄二十四〕安永三午年十月

寄合衆之内、五節句月次御禮願相濟罷出候面々、病氣等ニ而出仕不致節、斷無之面々も有之、如何成義ニ候、已來者病氣等ニ而出仕不致節者、其度々可被相屆候、尤病氣ニ而御役御免之面々ハ、追而快氣之上、五節句月次御禮願不相濟內ハ斷ニ不及候、

一年頃ニ相成候得共、御目見も不相願面々有之、如何成儀ニ候、尤病氣等ニ而被見合候儀ニも可有之候得共、左候はゞ其段被申聞置可然候間、御目見可相濟處、病氣等ニ而被見合候儀も候ハゞ、其段可被申聞置候、

一御目見幷五節句月次御禮ニも罷出候以後、病氣等ニ而年來引込被居候面々も有之候、病氣之事ニ者候得共、程合も可有之儀候、年數ニも相成、迚も快氣致間敷病氣ニ候ハ、了簡も可有之事ニ候、

右之趣、寄々可被相達候、

〔德川禁令考十七寄合肝煎〕天明八戊申年六月十九日

寄合ノ士謝病辭禮謂者ノ儀ニ付達書

寄合衆之內、年頃相成候而も、病氣之由ニ而御目見不₂相願₁面々も有ㇾ之候、無ㇾ據儀とハ乍ㇾ申、見合候も程之有ㇾ之儀ニ候得者、少も快候ハヽ早々相願可ㇾ被ㇾ申候、且又病氣ニ而年來引込、月次等不ㇾ被ㇾ致面々も多分有ㇾ之如何之事ニ候、是以程合も有ㇾ之儀ニ付、若又難治之症ニ而も候ハヽ了簡も可ㇾ有ㇾ之事ニ候、

右之趣能々相心得、出精相勤候樣、心掛可ㇾ被ㇾ申候、

六月

〔蝦夷地御用留〕三千石以上之寄合御役出之儀ニ付御書付

亥〇文久三年八月三日松平對馬守ゟ差越

板倉周防守殿御渡御覺書寫

御作事奉行衆　外國奉行衆　遠國奉行衆　小普請支配衆

三千石以上寄合之面々、相當之場所江御役被ㇾ仰付候儀ハ、勿論之事ニ候得共、當御時勢柄之儀ニ付、文武之心掛ハ勿論人才御撰擧被ㇾ遊候義は、御專務之事にも有ㇾ之候間、事情等も不₂相心得₁候而は難₂相成₁候ニ付、向後勤訓之爲、三千石以上寄合之面々、布衣以下之場所江引下勤被ㇾ仰付、部屋住之者も御番入等被₂勤付₁候儀も可ㇾ有ㇾ之候、

〔續泰平年表〕天保十四年九月十四日、寄合肝煎江御達、寄合之面々、駿府加番相勤候節、御扶持方是迄千石ニ而、四十人扶持之割合を以、高に應じ被下來候得共、向後高無₂差別₁、都而二百人扶持可ㇾ被ㇾ下旨被₂仰渡₁、

〔德川禁令考十七寄合肝煎〕慶應三丁卯年九月廿六日

肝煎手當金之定

一今度軍役金上納被₂仰付₁候ニ付而者、以來肝煎勤中、爲₂御手當₁年々金四百兩ツヽ、高ニ不ㇾ拘自判

寄合入例

を以被下、渡方之儀者、三月、六月、九月、十二月、右四度ニ相渡ニ而可有之候、尤當卯年者、半ケ年分被下、高受取方等之儀者、御勘定奉行可被談候、

〔翁草百八〕田沼家ニ變

一同日〇天明四年四月七日　若年寄加納遠江守宅ニ於て、御目付山川下總守侍座、左之通申渡さる、

申渡之覺

御目付　跡部大膳　松平田宮

去月廿四日、若年寄退去之節、新御番佐野善左衞門致亂心、田沼山城守へ手疵爲負候節、其方共、中之間ニ相詰罷在候處、誰とハ不相知、桔梗之間へ拔身持參候ニ付キ、早速追駈候段申聞候得共、其方共より相離罷在候松平對馬守、遲くも抱き留め候へバ、其方共儀ハ、間近にも罷在候故、如何樣にも取鎭方可有之處、手間取候ゆへ、山城守鞘之儘ニ而會釋致候內、疵も數ケ所に相成、既に右疵而相果候、御役別して不心掛ニ被思召、依之御役御免寄合ニ被仰付候、

四月

小普請組支配職員職掌

〔享保集成絲綸錄一〕延享元子年六月

御老中支配

一小普請組支配

〔柳營秘鑑四〕諸役人員數幷組支配

一小普請支配十人内甲州詰貳人、組衆三千石以下、貳百石以上、但甲州詰ハ、五百石以下貳百人、

〔職掌錄〕小普請組支配

當職八員、老中支配、三千石高、布衣役、中之間に列す、古來小普請の輩、不殘御留守居の支配たり、其後御留守居支配止て、三千石以下の分ハ當役にて支配す、〇中略逢對定日、御目見以上ハ毎月六日

十九日、廿四日、但正月は廿三日を始とし、十二月は六日を終とす、御目見以下は、毎月十四日、廿七日、但正月は廿七日を始とし、十一月廿七日を終とす、寄合日、毎月十日、廿五日、春秋兩度、濱御構內新馬場にて乘馬見分あり、當職は享保四年己亥六月廿五日、始て十員を置かる、

〔憲教類典 御役二ノ五〕享保四乙亥年六月廿五日

今日新規ニ小普請支配と申拾人被仰付、御留守居支配之面々下組江相分、

寄合ゟ永井宮內　御使番ゟ有馬內膳　同斷安藤主膳　組頭ゟ酒井大膳　大島肥前守組ゟ內藤采女　同斷金田周防守　朽木周防守組ゟ石川兵庫　寄合ゟ伊木覺左衞門　寄合瀧川讃岐守

右之面々被爲召、向後小普請總支配被仰付候、席中之間西丸御留守居下、新番頭上ニ可罷出候、勤方之義は追而可被仰渡、讃岐守義は小高に付、御役料五百俵被下置旨、御老中列座若年寄衆出座に而被仰渡之、

〔東職記聞 二〕小普請組支配十二人　布衣

統領小普請衆之職也、古者留主居一切掌小普請衆事也、享保四年六月始置此職、以永井宮內、內藤采女、瀧川讃岐守、安藤主膳、伊丹覺左衞門、松平帶刀、有馬內膳、金田周防守、酒井大學、石川兵庫等十人被補之、而被令統領自二百石至二千九百石小普請衆也、二百石以下、留主居尙掌之、享保九年分當職二人置甲府勤番支配、爾來八人也、延享三年每組置組頭二人也、寶曆三年六月增當職四人、而以留主居組之小普請衆一切屬之、爾來十二組也、相傳云、御目見以上稱支配以下稱組也、

〔吏徵別錄 上布衣以上〕小普請組支配　享保四年己亥六月廿五日、始置十員、老中支配、中之間、新番頭之上、三千石以下、御役料五百俵、永井宮內直朝、安藤主膳重武、有馬內膳純珍、石川兵庫總能、內藤采女信明、金田周防守正明、瀧川讃岐守元長、松平帶刀信淸、伊丹覺左衞門勝友、酒井大學忠穩、　小普

請ハ、古來より御留守居組之處、此時より貳千九百石已下、貳百石已上之面々ハ、小普請組之支配、貳百石以下は、御留守居組と定めらる、同七年壬寅七月廿八日、酒井大學、御小性組番頭被仰付、跡役不被仰付、割組ニ成、合九組　同八年辛卯六月十八日、三千石高、同九年甲辰七月三日、奥津能登守、甲府勤番支配被仰付候、跡割組ニ成、合八組　寶暦三年癸酉六月十二日、增四員、合十二組　堀田主膳一仲、石川主税貞貴、太田美濃守資之、八木十三郎盈通、唯今迄御留守居組之小普請之分、貳百俵已下御目見已上已下末々迄、不殘支配ニ成、向後御目見已上ハ支配、御目見已下は組と唱可申旨、寛政元年己酉五月九日、菅沼主膳正病死、跡割組ニ成、合十一組　同三年辛亥十二月二日、阿部越前守病死、跡割組ニ成、合十組　文化十年癸酉二月廿七日、二組減、合八組

〔惇信院殿御實紀十七〕寶暦三年六月十二日、新番頭八木十三郎輔道、持弓頭堀田主膳一仲、火消役石河主税貞貴、中奥小姓大田美濃守資之、小普請組支配となる、これこの職はもと八隊なりしを、この時あらたに四隊をまして、留守居の隷下たりし、組頭及び小普請の士を屬せしめ、見參ゆりたるかぎりをば支配とよび其下は組とよばしめらる、

〔昭德院實紀二十三〕文久二年閏八月十五日

大目付
御目付江

小普請組支配二組減切相成候間、可被得其意候事、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年八月四日、小普請組支配役名ヲ廢ス、頭は勤仕並寄合支配組共、海軍陸軍兩奉行並支配、或は兩奉行並組へ割入、且組の分、五十俵以下の者は御持小筒組並、同勤方等仰付らる、

〔有司勤仕錄〕小普請組支配

一右組之內、騎射之改等有之、

一月に兩度づゝ逢對有之、組之面々對面す、毎月六日、十九日、廿四日、三度づゝ、對客、正月は除之、極月六日迄也、乘馬は春秋兩度、於濱御殿在之、支配見分、弓は於支配宅見分有之、

〔明良帶錄前篇〕小普請組支配 三千石高 老支 中の間

寄合より直に此場に昇るといへども、人材人を指揮する事功者なる人を選擧す、近頃南部主稅寄合より直に昇る、其後なし、當時は場數を經たる仁か、芙蓉間邊にて骨折たる仁か、又は高持之仁を擧ぐ、享保之度、新規小普請組支配十二組被仰付、御留守居組無役不勤之者、御目見迄御預け有、寬政之度、十組となる、文化之度、八組と成る、此場は奧向よりも出て、芙蓉之間よりも昇る、出入とも多き場にて、何れの場へも行候、遠國又は芙蓉邊へも昇る、當時此場五六千石之人至る、近頃西丸御留守居より、石川左近將監、坂部能登守は此場へ昇るは別に謂れあり、勤向は小普請之指揮、御用人之書上、跡目家督被仰付前之日、御支配方より御同朋頭を以て書拔被遣候時、支配之姓名有之候は承附致返却、支配判元見屆、違變取計、驅込訴訟隱居心腹紀し、十月廿五日寄合、此節墨引順看板持參、諸向達しは、支配組合へ除加減、改め入は墨引順、不座は即日割入、諸願は御帳二冊へ張立差上置、美濃紙半分認め、程村帳へ張入事、

〔甲子夜話二十二〕或人懷中ナル小記ヲ出シ、前朝ノ命令ナリトテ予ニ示ス、拜視スルニ、享保五年二月十一日、德廟〇德川吉宗ノ仰出サレシ新令ナリ、有ガタキ御旨ニゾ、

小普請組支配十人共、於御前被仰付候は、其前に小普請之者共、御留守居支配に候得共、諸事御用多、其上組數之事に候得ば、思召も屆兼候に付、十人之支配に被仰付候、依之不行跡之者共も有之樣兼て被爲聞召候、其段申上候樣にとの思召にては曾て無之候、支配たる者の事に候得ば、五度も十度も異見を加へ可申候、夫にても承引不申候はゞ、尙又異見を以、人柄を直し候樣にとの思召に候、

子二月十一日

〔寛政明典錄〕天明八申年八月廿二日、越中守殿〇老中松平定信御宅ニて、御渡被成候御書付寫、

小普請組支配へ

小普請支配、諸向江御入人御用人等出候義ニて、右御入人御用人は、器量人物相應なる者出候て、宜き人埋れ不申樣に有之、諸役人末々迄も、器量得手相應之者相備候儀は無此上御爲ニ候、右ニ付ては、常々支配頭たるべき者は、人物取立之義、簡要之事ニ候、左候得ば、手入宜敷致候ゟ、實生は忽に良材とも相成候道理ニて候、然處右體之儀等閑ニ相成、仕來之小事ニ而已念を入心を用ひ候樣に成行候ては如何ニ候、右體小事は、少々間違有之候ても、人物見違無之事第一之義ニ候、且唯今迄は、御目見以上以下とも、御足高之有之候者は、書付不申候樣に何となく成行候ても、左樣ニ存候者も有之、御取立之諸口至て、小高之者ニ候とても、御足高無之ては難出來事ニ付、出進之路塞り候心得ニ相成候間、おのづから文武之藝術、平日之愼等不行屆樣可相成哉ニ候、以來御足高出候ても、格外御用立可申者、文武の藝術を出精致し、身持人柄至て宜敷、所ニ相應器量得手等有之候はゞ、幾人ニても書上可被申候、此旨支配下江も申聞、隨分互ニ相勵み、出精いたし候樣可被致候、支配之者より、御用達之者多く見出し候はゞ、右頭支配勤功第一ニ可相成事ニ依、呉々も人才不相埋、幷人物宜敷もの多く出來候樣心掛世話可被致候、

八月

〔憲教類典二ノ十二小普請組〕元文三戊午年十月松平伊豆守殿御渡、小普請支配へ、

一此度朝夷主馬事、弟幷妹四人迄出奔致候上は、願をも申立、急度可相尋之處無其義、其上召仕等分限不相應ニ減少いたし罷在、親類共も義絶之段、畢竟主馬不行跡故と相聞、不埒ニ付而、改易被仰付候、就夫總而小普請組ニ而、當分御奉公不相勤候とても、分限不相應ニ人馬減少候義有

之間敷事ニ候、且又行儀作法尤相嗜可申事ニ候、右之趣不及申義ながら、支配中ニは幼少之面面も多候條爲念此趣折々支配江申聞候樣可心得候、

午十月

〔諸役起請文前書〕小普請組支配

一今度小普請組支配被仰付候、彌重公儀御爲第一奉存、御奉公油斷仕間敷候、相役中は不申及、御一門を始、諸大名諸傍輩與奉對御爲以惡心一味仕間敷事、

一支配之內ゟ役人等出し候時、雖爲他之支配存寄之通無遠慮申出之、依怙贔屓無之似合敷者吟味之上書出可申候、諸事相談之刻、私之申分を不立、多分ニ付御爲能樣可仕候、相極候儀を陰にて何角取沙汰仕間敷候、勿論支配下によりて輕き品に而も、賣物等堅受納仕間敷事、

附御奉公之儀候間、常々心之及程、他之支配之面々樣子をも存候樣心を附可申事、

待遇

〔職掌錄〕小普請組支配

享保四年己亥六月廿五日、始て十員を置かる、坐席は新番頭上さ定む、

〔憲教類典三ノ二十六殿中〕年號月日無之

御料理之席書○中略　御臺所一之間○中略　小普請組支配

〔憲教類典二ノ五御役〕享保四乙亥年六月廿五日

今日新規ニ、小普請支配と申拾人被仰付、御留守居支配之面々下組江相分、○中略讃岐守○寄合瀧川氏義ハ小高ニ付、御役料五百俵被下置旨、御老中列座、若年寄衆出座ニ而被仰渡之、

六月廿五日

俸祿

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

諸役人役柄に不應小身之面々、前々ゟ御役料被定置被下候處、知行之高下有之故、今迄被定置候

小普請組頭職員職掌

御役料にては、小身之者御奉公續兼可申候、依之今度御吟味有之、役柄により其場所不相應に小身ニて御役勤候者は、御役勤候内御足高被仰付、御役料増減有之、別紙之通相極候、此旨可申渡旨被仰出候、

但此度御定之外取來候御役料ハ、其儘被下置候、〇中略

三千石ゟ内は、三千石之高ニ可被成下候、　小普請組支配

〔德川禁令考 十八 補規〕慶應三丁卯年九月廿六日

足高役料等ヲ廢シ役金給與ノ定〇中略

別紙 御役金被下高之覺

金千五百兩、甲府小普請組支配、（但高ニ不拘被下〇中略）　金八百兩、清水小普請組支配、（但高千六百石以上之者ハ半減、御切米高千俵以上之者江ハ不被下、同五百俵以上之者江ハ半減、）

〔吏徴 上 御目見以上〕小普請組支配組頭八人　頭支配　燒火間　貮百俵高　御役料三百俵　三百俵以下御手當扶持二十人扶持、　延享三年丙寅六月十五日始置

〔吏徴別録 下 布衣以下御目見以上〕小普請組支配組頭　延享三年丙寅六月二日、始置十六員、（一組一人〇中略）

寛政三年辛亥十二月二日、毎組一員となる、

〔文恭院殿御實紀 十一〕寛政三年十二月二日、小普請組頭島左平次元判、山中市郎右衛門、柘植平五郎正榮、植村平右衛門泰賴、打越左大夫光仲、蜂屋左兵衛可議、本目權兵衛直記、山中新十郎、永井勘九郎佳孝、多田善八郎賴右、共に減少せられ、おの〳〵小普請に入らる、

〔東職記聞 二〕小普請組組頭二十四人　職席燒火間

毎組置二人、從小普請支配奉行組衆事之職也、且毎組有金錢役、而奉行小普請金上納之事也、

〔明良帶錄 續篇〕小普請組支配組頭（二百俵高　御役料三百俵　三百俵／以下御手當二十人扶持　頭支　燒）

此場は、以前は一組兩人づゝ有之所、寛政の度より、一組に一人となる、殊の外御用多の場也、登城は少なけれども取扱事多し、異變其外之事、小普請高低の仁、幷幼年などは、公邊に近きゆゑ、世話尤多し、聊の事は支配の耳に入れず、内々にて取扱濟事なり、尤世話取扱肝煎組には、世話役、金集手傳等あり、選擧の事は、見込書付封印にて差上る、隱居願の仁は、心腹氣とて有、其外諸願諸屆諸伺等は、取次て通帳にて支配へ差出す、諸願向は、先伺書を出し、後ニ願書を出す、取次は世話取扱、願書へ取次たる人の名を小札に付る、借金出入取扱等、藝術見分、組支配增減の事留帳ニ致し置、日々入除を記す、近來此場より中川勘三郎御目付へ昇る、其後類例なし、柳澤八郎右衛門は御切米手形改より爰に至る、是も類例なし、此場は此筋より出て、此場の事を明るく知らねばならぬ場なり、人品は多く人數を取扱ふゆへ、純柔第一とす、

〔幕朝故事談〕德廟〇德川吉宗以前は、小普請の面々、以上以下三千石以下、悉く御留守居の支配、任重不辨の事故、二百俵以上の者十八人、支配に被仰付、以下は如前御留守居の支配なり、然處以下の者不行跡多に付て、大岡出雲守〇忠光時分、是も小普請支配に屬候樣被仰付、組頭をこしらへ、組頭の支配同前になり、世話をやくなり、其後又世話役出來るなり、

〔螢の燒蠹の記上〕小普請組は、元御留守居支配成しを、有廟〇德川吉宗の御時、支配別に十組被定、御目見以下は、猶御留守居與頭と云もの有て支配したりしに、其後又組をも小普請支配の組に被入、御留守居與頭を小普請組與頭に被仰付、一支配二人宛に被定たりしに、後又事多くて行屆ざる由沙汰有て、十二支配には成たるなり、翁〇森山孝盛御目付に成て後、中川森山は小普請與頭たれば、能心得てこそあるらめとて、度々執政より尋もされて、終に十組に被定、又與頭二人宛をも、一人づゝにて御用可辨由申上たるによりて、則被減て一人づゝに成たるなり、尤小普請支配へもよくよく尋問れて事極りたることゝなりけり、

前に記すごとく、其頭の與頭は、只數に加れるのみにて、實に御用に立べき人一人もなし、支配も内々は邪魔に思ひて居たる人も有べし、只威をとりて事をむつかしく取扱ひ、下にたつ者を責るのみなりけり、

然るに與頭一人に成たるにつけて、御役祿をまし給るべきよし、支配より申出で、廿人扶持づゝ増行れたりけり、但五百石以下計なり是は左も有べし、世話取扱五人づゝを勤仕並に被定、御役金御免、年始御禮出ること前に記す如し、

古は五百石以上ならでは、小普請の面々、正月三日の御禮に出る事叶ひがたかりしに、先比世話取扱五人づゝを勤仕並に被仰付たる節、彼面々は、高の高下によらず、年始御禮に出る樣に成たるなり、

〔蜑の燒藻の記上〕寛政元年、小普請支配菅沼主膳正病死せられて、其跡御役は不被仰付、支配組の面々は十一支配へ割入になり、同役〇小普請組頭二人小栗又左衞門、山中市郎右衞門、は、外支配の中へ過人に成たり、小栗は因州支配、山中は坪内式部支配、是に付て、彼過人與頭の取扱は、かくすべきや、並々たるべきや、過人たるべきや、猶又翁〇森山孝盛が了簡を申べきよし、因州〇小普請支配酒井因幡守の被申聞、内々は小栗と云もの、よからぬものなり、又山中は劣りたる人物なり、かたがた押張て事を取扱ふに至りて、支配組の面々迷惑すべし、其うへ差掛書物等を臨時に納めさすること不益のことなり、殊に重て同役のうち明跡あらば、夫へ被仰付べき由被仰渡ある上は、夫迄の間の過人成べし、左あらば引渡なんど改めて有べきこと成べし、大勢の人の諸書付、面々臨時に認出すべきこと、是一同の費勞なり、かたがた過人にて可被差置方可然なり、明日にも欠役あらば、忽其跡へ可被仰付ことなり、然れば之ばしが間は、入用の時は本目か、我等が許に納めある諸書物を貸遣しても、御用は可辨ことなりと云ことを、愚存不殘記して呈したりければ、則其通りに小栗山中へ被申渡て、二人は浮人になり

居たり然る處、彼二人迷惑がりて、內々便りを以聞え上けるにや、備前守高久朝臣（京極、于時若年寄）酒井因州に被申は、小栗事浮人にて有ながら、御役料を頂戴仕候事恐入たることにて、迷惑に及ぶよし承りぬ、同じくは迷惑に不及樣取計可然旨、內意ありたる由因州へ被申て、此上は不及是非、並並の通り支配組引渡ありて、本勤たるべき旨相談なりて、則ち支配組引渡有けり、諸書物も、改て追々銘々より納る樣子なりしが、案の如く十日計の內に、小栗不埒の行ひある由、備前守高久朝臣、又因州に內意あり、

小栗七月になりて、吉原燈籠を見物に行たり此後次第に舊惡顯れたり、高久朝臣此事內意ありたるとき、源五郎なんどはいかゞ心得たるやと被申たりとて、因州はなされたり、よりて本目と翁（〇森山孝盛）とを招きて、小栗は先病と稱して引込居たる方可然よし可申達由內意あるにより、本目と申合て小栗が許に行て、因州內意の趣達したるに、小栗樣々に陳じて、全く風說譏口のよしを云間、本目は左もこそと思ふ面色にて、有無を云かねて居たる間、翁側にて見計居るに際限なき間、かい取て、御陳じの趣承り候、去ながら因州の內意に等閑ならぬ事なれば、容易には取成も聞入有間敷候歟、貴方の不埒成行ひ無之といふ證據あらば出し給へ、左あらば直樣今日歸り足にも因州に申開きて、明日よりも出勤有樣に某が取計可申、何ぞ不正はなかりしと云證據を出し給へと云れて、小栗も屈服して、其日より病氣と號して引込て、終にほどなく退役し侍りしなり、

〔蜑の燒藻の記上〕權家にたよりて往來する程に、俗にいふ燈心もて竹の根を堀如くにて、やうやうにして小普請與頭に成ぬ、其頃の同役のならはしは、世上にても知るごとく、筆紙に不堪事なりけり、初めて同役を振舞ふ入目四十八兩を費したり、夫も古への奢侈といふ物にて、風雅に流れ、又は風流の物數寄なんどに費すならば、心ゆきてゆるさるゝことも有ぬべし、只飲食の好惡、

酒薬魚物の大小に心を盡し、數多なるに入目を費すなりけり、去ながら下の情を汲知ことは露計もなくて、支配組ども、いさゝかの事に幾度も足を運ばせ、月日を費して事を濟す類の取扱のみなり、翁〈○森山孝盛〉は組内に小給の者なんどの捧る書付は、毎々に印を押て出すことなれども、十俵或は二三十俵の祿もて命をつなぐやから、一片の劵契とても、いかで思ふ樣になるべき、人に託して手習師匠などに頼みて、漸もて來て出すを、例文に違たり、書體分らずなんど云て、他の同役は返すを見るに、かへす〳〵有べき取扱とも思はず、にが〳〵敷思たる間、我組のやから持來る書付は、事分らざるに、ケ樣〳〵の次第なり、此書付は用ひがたし、然共足下の宅も近からず、認直す事も定て容易には出來がたかるべし、此方にて認直すべし、印判はもて來れりやと云て、持來れるやからは夫を押させて、書付は此方にて請取置ぬ、彼やからは又なく悦びて、ぬかづきて歸りぬ大小の分限によらず、皆此類の扱にしたり、又支配の中にも、百俵五十俵有餘の御目見以上の人は、僕一人つかふことも叶はで、宅にてはみづから米薪をあつかふやから多し、彼輩は、支配與頭の逢對にも、容易には出ることかたければ、病と號して朝夕をたすけ、不叶事ある時は、やとひ人して漸出來るを、同役なりし本目權兵衞なんどは、常に腹あしく云て、大方は對面もせで、返しぬ、

待遇

〔寶曆集成綿綸錄 一〕寶曆十辰年三月

當時殿中席書〈○中略〉　燒火之間〈○中略〉　小普請組支配組頭

〔憲敎類典 三ノ二十六〕年號月日無之

御料理之席書〈○中略〉　御臺所二之間〈○中略〉　小普請組頭

俸祿

〔吏徵別錄 下〕布衣以下御目見以上　小普請組支配組頭　延享三年丙寅六月二日、始置十六員、〈一組兩人〉御役料二百俵、席御留守居組頭之上、　寶曆三年癸酉六月十二日、貳百俵高、御役料三百俵、此時より

御目見以上は支配と稱し、同已下は組と唱ふ、寛政三年辛亥十二月二日、每組一員となる、同四年壬子閏二月十六日、三百俵以下御手當二十人扶持、

〔寶曆集成綵綸錄二十四〕延享三寅年六月

御勘定奉行江

小普請組支配組頭、一支配ニ兩人宛被仰付、高之無差別、御役料、貳百俵宛被下候間、可被得其意候、

〔寶曆集成綵綸錄二十五〕寶曆三酉年六月

御勘定奉行江

小普請組川勝左京支配組頭　朝比奈織部　坂部又三郎

同筒井内藏支配組頭　辻十次郎　赤井主計

同橫山内記支配組頭　蜂屋左兵衛　川井次郎兵衛

同三枝宗四郎支配組頭　戶田主税　神谷小作

同田中出羽守支配組頭　駒井右京　橫地縫殿助

同島田庄五郎支配組頭　寬彌左衛門

同金田主殿支配組頭　永田權右衛門　多田三四郎

同諏訪七左衛門支配組頭　設樂長右衛門　水原書次郎

唯今迄之御役料相增、三百俵宛被成下候間、其段可被申渡候、

一向後小普請組支配組頭、高之多少に無構、三百俵宛御役料被下之、貳百俵より以下之者ハ、勤候內、貳百俵之高ニ被成下、並之通御役料被下之、

右之通、小普請組支配江申渡候間、可被得其意候、

〔天保集成綵綸錄八十六〕寬政四子年閏二月

小普請組世話役

御勘定奉行江

小普請組支配組頭之儀、高三百俵ゟ以下之分ハ御手當御扶持方廿人扶持〇中略被ㇾ下旨申渡候間、可ㇾ被ㇾ得二其意一候、

〔明良帶錄外篇〕小普請世話役五十俵高頭支　役扶持三人扶持

此場は殊の外御用多し、組中の取扱、向寄人數持場分にして、世話相談、諸願諸屆の取次、宅見廻り、幼年の者心添、其外御用召の差添等、組中の事一切を括り取扱ふ、此場に馴たる者古老の仁至る、金集手傳等より昇る、

〔吏徵御目見以下〕小普請組世話役廿四人　五十俵高　役扶持三人扶持　一組三人　役上下、御抱場　享保十九年甲寅六月朔日始置、

〔蠖の燒藻の記上〕兼々思ひ寄たる事共、一帖に認て因州〇小普請支配酒井因幡守に達し侍りけり、其稿今も猶殘れり、元其大要は小普請組支配内にて、五六人づゝ相支配の世話を取次者あり、

世話役とも云、御用掛ともいひ、御目見以下の方にも、世話役とて三人、是は御役にて被二立置一なり、以上の御用掛の者は亡跡或は御取立者の跡、御番筋も無ㇾ之者、又は御足高入候者にて、御奉公出仕兼たる者、冥加の爲とて、支配中の世話をして、其上に自分當前の御役金をば出したり、尤中には御番筋の家の者も、自分の好にて此役をつとめ居るものも有たり、夫はいかなれば、彼御用掛の中より、間々古役又は與頭などへ、支配の働にて被二仰付一事ありたるゆへなり、然ども御用掛の内は支配切、陰の働にて、表向御役名御役場にてはなし、

御用掛と云、彼等は、亡跡又は御番筋のなくて、御奉公出の容易に成難き者共が、人もよく御用にも可ㇾ立なれども、上より御奉公不ㇾ被二仰付一より、冥加の爲とて、自分の御役金をば出して人をつかひ骨を折て御用つとむるなり、己れ〱我儘にて、小普請にて居ると云譯にてはなし、是には年

年の勞勤見るに忍びざる所なれば、勤仕並御役金を御免あるやうに有たき事なり、〇中略寬政元年六月、定信朝臣〇松平の仰渡されにて、彼面々御役金御免、一組五人ツヽニ被定、不殘勤仕並に被仰付たり、是翁〇森山孝盛が人知らざる大功なり、

〔有德院殿御實紀十五〕享保七年七月二十八日、小普請組支配酒井大學忠穩、小姓組番頭となる、其闕たるを補はれず、小普請組の支配九人となる、

〔明良帶錄續篇〕世話取扱御手當七人扶持頭支

此場も小高之人の勤には、世話敷多用の場也、勤仕並にて、御扶持方被下、召て御城にて御列座の上に被仰渡、相支配を向寄分にして、向寄何人と持分世話をなす、尤宅見廻り、他出多き役也、諸願の取次、異變の節、其人の內調、幼年の人の心付、其外一切の事に出合、逢對の節、繰出し差引等、知行出入、借金出入の扱は、皆此手に關る、小身の役にて手張たる役なり、

〔職掌錄〕小普請組支配

毎組五人世話取扱あり、御手當扶持十人扶持、近來は正月元日御禮に登城し、御流頂戴す、

〔吏徵附錄內職〕小普請組世話取扱四十人　一組五人　持高　三百俵以下、御手當扶持十人扶持、　寬政元年己酉六月□日始置、勤仕並、御役金御免、　寬政六年甲寅十一月廿二日、五人之內、以來兩人宛、他支配より可申渡候、　文化二年乙丑七月十六日、取扱、以來於御城老中申渡被成、

〔吏徵附錄內職〕甲府勝手小普請世話取扱　勤番支配　支配、持高御手當扶持十人扶持、　文政□年□始置、

〔天保集成絲綸錄八十六〕寬政四子年閏二月

御勘定奉行江

小普請組支配〇中略支配世話取扱之者も、三百俵ゟ以下之分ハ、十人扶持づヽ被下旨申渡候間、可

被得其意候、

〔小普請世話取扱書抜〕同月番ゟ進達、組頭衆へ扣差出す、

進達目錄　世話取扱

覺

一私共五人幷持頬總人數貳百五拾參人之內、貳百四拾壹人分、屋鋪繪圖面、都合貳百四拾六也、

但町屋鋪は除

右奉進達候

〔小普請世話取扱書抜〕嘉永七寅年九月十九日ゟ長氏進達

覺

私共同勤之者、老衰ニ而御免相成候節、御襃美被下等有之候哉、尤勤年數年齡等ニも寄候哉、取調中上候樣御達ニ付、御支配內、幷外御支配中取調候處、是亦老衰御襃美頂戴仕候者無御座候、依之此段申上候、以上、

寅九月　世話取扱

小普請金上納役

〔常憲院殿御實紀二十一〕元祿三年六月十七日、小普請菅谷八郎兵衛政照、服部主殿保房、松平甚九郎康寛、小堀三郎右衛門政利、小普請金納役仰付らる、

〔寶永五年武鑑〕小普請金御上納支配

四千石、安藤內記、　五千石、內藤圖書、

〔有司勤仕錄〕小普請組支配

一小普請金上納取集之役、右ハ組之內ゟ一人宛、都合八人有、是ハ小普請金を出さず、

〔寄合小普請無役御役金取立方〕一小普請組金集手傳之者、御勘定所江出役定日左之通、

正月晦日　二月廿八日　五月廿日　六月廿五日　九月二十日　十月廿五日

〔幕朝故事談〕小普請之名目、此儀者不ㇾ及二御沙汰一、其方儀相應ニ付、小普請入被二仰付一、不相應之小普請は、年始の御禮もならぬなり、家督小普請、病氣、小普請は、年始には出るなり、○中略凡諸大夫に成候者、隱居いたし候得ば、一代は寄合にて若年寄の支配なり、不相應の小普請と云て、不首尾にての小普請は唯小普請支配なり、

〔番衆狂歌〕小普請は不相應もの病氣もの幼年共に御役金出る　小普請は近所手寄の相支配兩人賴沼て公用　小普請の諸用半元服等も相支配にて申事也○中略　小普請は公儀おきてを知らずして自まゝ氣まゝの不行跡有

〔吏徴附錄内職〕小普請組　持高　寶暦三年癸酉六月十二日、御目見以上稱二支配一、同以下稱レ組、寛政三年辛亥十二月十六日、御目見以上小高之者、同以下上下役之內、幷御目見以下躑躅間にて家督被二下候者、役上下羽織格之內江引下勤之儀被二仰出一之、

〔明良帶錄後篇〕小普請

是より兩御番へ出る、享保以前、御留守居無役無勤の者、御城幷御番城二三の丸御門の高石垣破損繕、草取人足、高に應じて出したり、夫故小普請といふ名目あり、是を守役とす、貞享元祿の頃より金納となる、是を小普請金といふ、百石二兩の割合なり、享保の度新規小普請組支配被二仰付一、御留守居組三百石以下御目見以下迄御引渡有之時は、則十二組也、寛政の度十組となり、文化の度八組と成る、小普請の面々、選擧の科目を立て、六七十番付御用有り、是を番付御用人といふ、小普請金は、月番にて取集るゆへ、金集手傳を組の羽織格に申付たり、扨逢對日を定め、支配組の者に逢ひて、先祖の事、古の戰場にて手柄の義、藝術の事共、委細問ひ尋て、其人の才、幷伶利なるを觀察し、夫々の選擧をなせる、月に三日也、六日十九日二十四日は、支配の逢對、十四日晦日は、組の逢對

と定たり、また御目見以上を支配といひ、御目見以下を組といふ、組に上下格と羽織格あり、躑躅の間にて、家督跡目被仰付候分を上下格といふ、頭の宅にて申渡御書付を渡すを羽織格といふ、出場所大に違へり、小普請は高によりて、出場所よし、御用人も書上るに高低のものを高の場へは書出し難く、夫故一生無勤にて其志を遂る事無故、寛政御改正の度に、引下げの御奉公被仰付、御奉公修行の爲、何れの御場所にても被仰付、是は七十俵位の以上の仁、火の番を勤る類の如し、自然と勤にも馴て、昇途の路も心掛る故なり、選擧の事は、御支配方より、三の御用人書出し候樣、御書付御同朋頭を以て御渡し被成候者、詰番にて請取、本紙部屋簞笥に入置、寫廻章にて相廻す、銘々より書出す組頭見込み、書添、神田方は卷物、櫻田方は折本に認、月番の者進達、其糺方は風聞糺として、神田方櫻田方の金集手傳を招き、自身に申渡、誰々を糺し參とて姓名書を相渡す、是を世話に音密といふ、則其姓名の仁の家事取締、家來の樣子、勝手向の事、家内の和熟、藝術の善惡迄、巨細に認持參す、神田櫻田と引合、兩方共相違なければ、同役へ廻章に相廻す、是を順覽帳といふ、是を兩番筋へ書出す、兩番筋とは三代兩番續たるを、(三代續かず内三代兩番勤あり共系譜之兩番筋と云)兩番筋といふ、末々は布衣場へ出て芙蓉の邊に昇れば、選擧尤也、是唐土漢の金馬門に退還(〇退還一本作召還)と同じ事也、扨御用有之以前ニ、別條糺として、誰々事、當時名改等、故障の義も無之哉、差合等も無哉と糺有りて、間もなく御書拔出る、銘々其名有之支配へ達し、配下へ達す、爲御請早々頭宅へ罷越す、明朝爲差引兩月番登城、差出書御目付へ相渡す、御臺所斷差出す、配下の者登城遂面會の禮を敎ゆ、寄せになりて御目付差圖、菊の間御緣側に於て、御老中御列座、若年寄侍座、兩御番へ御番入被仰付旨、御用番の御老中方被仰渡、小普請組支配より兩番頭へ引渡す、未組割相濟ざる故、異變通達、月番心得の事、相支配異變の節、宅番心得之事、

〔明良帶錄續篇〕高低小普請昇途

御簾中樣御用人
淑姬君樣御用人
御三殿御用人
御用達
　└小十人組與頭
　　└小十人
　　　御腰物方
　　　御納戸方
　　　御三殿小十人頭
　　　御同殿御徒頭
　　　御書物奉行
　　　御幕奉行
　　　昇路前ニ同じ

〔明良帶錄續編〕經昇小普請

濱御殿奉行
吹上奉行
　└添奉行
　　└吟味役（御目見已下濱方）

植木奉行
　└火之番組頭

御裏御門番之頭
　└御天守
　　富士見
　　御寶藏
　　　└番之頭
　　　　└御用達
　　　　　御廣敷番之頭
　　　　　　└同　添番

〔有司勤仕錄〕小普請組支配

一代小普請と云は、老人又は病氣、或は故有之諸役人諸番衆ゟ小普請入被仰付事也、○下略

〔享保集成絲綸錄 十八〕寛文四甲辰年五月

一小普請役、御留守居衆組へ入候面々は、其頭々へ參候節、親類緣者之内壹兩人令同道可罷越候、若病氣重く、自身參候儀於難儀は、其頭之家來招之、病體爲見候樣、其親類方へ急度可被申渡事、

一自然亂氣成病人は、組へ入候時は、前廉之番頭、幷病人之親類中ゟ病體有樣に當頭へ可被相達之、勿論何方へも不罷出候樣ニ親類中ニ急度可被申渡事、

一只今迄御留守居中組へ入、小普請役勤之面々も、右之通被相心得、其親類中ゟ急度可被申達之事、

以上

〔御當家令條 三十〕覺

一小普請役相勤面々、五拾歲ゟ内に而乘物斷、向後は以誓詞可爲御免事、〇中略

右之外乘物之儀は不及申、駕籠たりといふとも御目付衆江申達、無據子細有之は、吟味之上可有差圖者也、

延寶九年五月廿五日

〔仕官格義辨〕小普請奉行之事

問云、〇中略天和貞享之比之小普請奉行は、大御番、新御番抔ゟ被仰付、布衣已下之御役に而候と承候、〇下略

〔教令類纂 初集 四十五〕寶永元甲申年六月十一日

御番不相應、又は病氣ニ而小普請へ入候面々、年始其外之御禮日、且又總出仕有之節、向後登城無用ニ候、唯今迄出付候輩ニ而も罷出間敷候、右之内諸大夫三千石以上之面々も、登城不仕候上は、年始八朔御太刀不及獻上候間、右之趣可被申渡候以上、

正德元辛卯年十月十九日

覺

千石　小普請大久保淡路守組　松平八十之丞十五

三百俵　同組　永井主殿頭五十三

三百俵　小普請松平主計頭組　沼間新五郎十五

小普請家督之者、只今迄御目見不被仰付候ニ付、一生御目見不仕候ものも可有之候、依之向後御番入をも仕候格式之もの、三百俵以上のもの共家督ニ成候はゝ、願次第御目見可被仰付旨今度被仰出候ニ付、右三人之者共奉願、今日御目見仕候、以上、

正德二壬辰年十月

覺

一小普請之面々、御目見願之儀、向後御番入をも仕候格之者、二百俵以上之分、家督ニ成相願候ハバ、其格吟味之上、御目見可被仰付候事、

一小身之面々、月次御禮罷出候儀、只今迄出來り候分は可罷出候、向後新規ニ相願候者、布衣以上幷五百石以上は罷出候樣可被仰付候、尤五百石以下にても、其人の品により、月次御禮罷出候樣被仰付儀も可有之事、

以上

〔憲教類典二ノ十二小普請組〕享保元丙申七月

覺

松前伊豆守組小普請人數合六百參拾壹人　大島肥前守組小普請人數合六百參拾參人

大久保淡路守組小普請人數合六百貳拾貳人　朽木周防守組小普請人數合六百四十四人

中川伊勢守組小普請人數合六百五拾四人

右五組總合三千百八拾四人

右組中午未兩年分小普請役金高書付、明日中可被差出候、以上、

申七月十一日

〔憲教類典二ノ十二小普請組〕享保元丙申年七月

一組中人數并知行高御扶持方書付被差出寫

總人數　七百四十一人

知行高　貳拾六萬七千四俵貳升貳合五勺

扶持方　九百五拾五人半扶持ト貳斗五升

享保元申年七月廿四日改之

〔享保通鑑三〕享保四年六月二十五日、二百俵ゟ二千九百石迄之小普請支配被仰付之、〇中略且又三千石已上之小普請ハ、若年寄之支配被仰付、二百俵已下ハ、只今迄之通、御留守居支配被仰付之、

〔有德院殿御實紀十三〕享保六年八月、この月小普請組支配に隸下の諸士、もとより普第にあらざる者新に出身して職掌命ぜられし家は、古き普代の家と混ずまじき事なりと命ぜらる、

〔德川禁令考十九褒美賜規〕元文四己未年九月五日

七十歲以上解職之輩褒美願方達

七十歲以上迄、年久敷御奉公相勤、隱居番代、又ハ小普請入、相願候者、右年數之内子細も無之、小普請入、又者御奉公罷出候者ニ、小普請入前後之勤年數を以御褒美願可申出候、

但病氣ニ而相願、小普請入候者之儀ニ而者無之候、

右之趣、組支配有之面々江、寄々可被達候、

九月

〔憲教類典二ノ十二小普請組〕寛政元己酉年六月、松平越中守殿御渡、小普請組支配へ、

組之內、何れも羽織格之者平日愼等、文武之道相嗜候、格別之心掛之者は、上下格相應之場所江書上度旨存候もの有之候ハヽ、右格別之趣書認メ候而可被差出候、尤此儀は不容易義ニ付、御用人例之通書出候義ハ難相成、乍然實ニ右體之者有之候ハヽ、御用人書上、其外ニ別段書付、格別之趣意委しく認可被差出候、右體之もの、書出通り格別之席も被仰付、一統相勵感服致候程之者無之候而ハ如何ニ付、書出候者は、幾重ニ茂可被掛吟味候、後ニ相流、格別と申程ニ無之者を出候樣ニ而ハ如何ニ候、此旨ハ同役一統申談、跡々江茂申送り、相流可申候樣可被心掛候、

〔螢の燒藻の記上〕追日御改正の御趣意の行はるゝに至りて、御旗本一般の內、小普請は殊更人を仕立て、御用に立べき筈の御場所なるに、左のみ聞えたることもなし、與頭共は何と心得たるやらむと、定信朝臣松平○老中の被申たる由にて、一統申合、公の御爲め存寄あらば可申由、因州小普請○支配酒井因幡守被申出により、此度は同役會合して、一帖の書付を捧げたり、

廿四人の內、存寄あるもあり、無もあり、漸六人所存を云出したるありけり、

此時も、翁○小普請組頭森山孝盛愚存二ケ條を加へたり、其稿今も猶あり、就中小給の者の中には、三兩に一人半扶持、十俵に一人扶持の者あり、玄かも御譜代にて、屋敷をも先祖より被下て御家人なり、是等はいかで人柄をもたしなみ、藝術をも心がけ侍るべきと申事に付て、愚存をも記したりしに、因州返す〳〵感心有けるが、此事は、ほどへて和泉守乘完朝臣の許に被召たる時にも、申出て感賞有けり、彼愚存を記したる稿こと〳〵く猶今もあり、

〔大猷院殿御實紀二十〕寛永九年四月十三日、日光山御參の御首途あり、○中略小普請菅谷紀八郎範重御參の間、鍛冶橋門番命せらる、

小普請入例

〔有德院殿御實紀十九〕享保九年八月十三日、小普請の士に甲斐國府中城の番を命ぜらるゝもの二百人、〇中略また小普請久保田武兵衛政隅、河邊武左衛門正信は、こたび同所の牧場の事つかふまつるべしとなり、

〔有德院殿御實紀五十四〕寛保元年十一月、此月小普請の御家人三十人、一橋邸勤番を命ぜらる、

〔柳營年表秘錄〇下御代〕寛政十一己未三廿六

小普請組瀧川長門守支配　高木善次郎〇中略

右系譜調御用被仰付

〔溫恭院實紀十〕安政三年八月二十三日

蝦夷地在住　小普請組小笠原順三郎支配　根本市大郎

右被仰付之

〔文昭院殿御實紀十五〕正德二年八月十三日、この日小普請奉行間宮播磨守信明、竹田丹波守政武ともに職奪はれ小普請に入らる、これはこたび新入の手代十一人、幷にもとよりつかふる伊賀手代百十餘人に、俸米を加給せられん事をこひ出たり、さしあたりいまだかゝる沙汰有べき時ならねど、新入の徒小祿ならば、やがて加俸あるべきゆへ、そはことはりなきにあらず、もとより勤來りし徒に於ては、小普請方の局開かれしより此かた、かれら微俸にてつとめ難きよしいまだ聞えざるを、にはかに窮乏に及よし申といへど、さるは歷世の間何としてつとめ、今にいたり何としてつとめがたきや、それらの檢點も加へず、聞えあげたる事不審少からず、すべて奉行はじめ手代にいたるまで、局中のふるまひ、家計の有さま、ともに世の流言する所なれば、御聞にふれし事なきにもあらず、先に諸局に嚴令下されし時、思召旨あれば、小普請方のみはいまだ沙汰も加へられず、然れば奉行始手代までも、前非をかへりみて、後來をあらためつゝしむべき時な

り、たとひ手代共の中申出るもの有とも、百十餘人の中を取捨せば、はじめより局務もひが事なく、家計も分にこえず、今となり艱困せざるものも有べければ、其他を嚴にいましむべきに、さる査檢も加えず、ひたふるに、忌憚なき申文さゝげしはいとひが事なり、嚴く鞠問せらるべけれど、宥恕の旨をもてかく仰付らるゝとなり、

寄合小普請上納金

〔明良帶錄前篇〕寄合

小普請金を上納す、百石二兩の割合なり、安永之頃迄ハ、寄合金上納支配といふ役有り、今は止む、

〔幕朝故事談〕三千石以上を寄合衆と云、若年寄支配なり、小普請金を若年寄に納るなり、御門番被致候内は不出事なり、小身にても重御役相勤候得ば、其子一代寄合被仰付事有之、又家柄にて寄合に成もあり、御目見以下は、其頭々の支配也、小普請金も其頭へ納る事也、御小性衆など、表へ出れば寄合なり、文廟〇德川家宣の時の某など、德廟〇德川吉宗の時まで寄合を勤め被居たるなり、

〔東藏記聞二〕小普請組支配十二人　布衣

無邊これを古老に聞けり、將軍家にて、いまだ勤なき人々を小普請と申事は、古へは老人あるひはようせうにてつとめたき人は、こぶしん方へ人夫をいだし、御奉公をつとめざるつぐのひにせられたることなりとぞ、故に御普請あるときは、其分限に應じて召仕の下部に徒侍をそへて、御ふしん方へ出し給ひける故、いつとなく小普請衆とよびならはしたるなり、去かれども、御ちくきんがたの下部なれば、度々御普請場にて口論に及びける故、元祿二年よりこのたか百石に人夫二人出しのつもりにて、百石に小判二兩を被召上、これをこぶしんきんと名づけ、人夫やとひの料にあてらるゝなり、元來こぶしん去ゆの號は、これよりおこれりとぞおしへき、さて今、寄合方にも、より合きんとて、百石二兩の金子をめしあぐる也、これもこぶしんきんの道理也、貞享の初の武鑑に寄合を、もよりあいこぶ去んとのせたり、

〔有司勤仕錄〕小普請組支配

一小普請金上納取集之役、右組之内ゟ壹人宛、都合八人有、是も小普請金を出さず、又組之内にて古老之者を撰て組の用事を達す、

一右組之内にて、右衞門督殿御屋敷勤番在之、其内は上納金除之なり、

○按ズルニ、此他寬政二年寄合肝煎奉職ノモノハ役金ヲ免除スル事アリ、同條下ニ德川禁令考ヲ引ケリ、

〔教令類纂初集四十五〕延寶三乙卯年十二月十九日

小普請人足御用、千石拾兩、百石ニ付壹兩、知行高下、其割を以請負ニ被仰付候、

延寶三卯十二月十九日

右書付寫

〔殿居囊三編〕小普請金之事

二十俵ゟ四十俵迄金貳分　五拾俵ゟ九十九俵迄金壹兩　百俵ゟ四百九十九俵迄、百俵ニ付金壹兩貳分、　五百石以上金貳兩　十五俵以下御役金御免

但十五俵一人ふちハ、御扶持方結込廿俵として、二十俵の御役金出る、

〔教令類纂初集四十五〕延寶八申年九月十六日ゟ小普請百石ニ付金子二分增りニ被成候、

右御書付寫

元祿二己巳年

一來午年ゟ、小普請人足金高上り候間、被得其意、御金奉行江上納可有候、縱御扶持方ニ而も貳拾俵ゟ上は小普請金出候間、是又可被得其意候、

一小普請金、貳拾俵以下金出し申間敷候、

一貳拾俵ゟ五拾俵迄之內は、金貳分宛、
一五拾俵ゟ百俵迄之內は、金壹兩貳分宛、
一百俵ゟ以上は、百俵ニ付金貳兩宛、
右之通何百石茂、何拾俵茂、同斷之旨御觸有之候、
元祿三庚午年六月

一小普請金出ス次第幷割金
貳拾俵ゟ五拾俵迄　金貳分宛　五拾俵ゟ百俵迄　金壹兩宛
五百俵以上千俵迄　金貳兩宛
右出し銀割合
百俵ゟ貳百俵迄百俵ニ付　金壹兩貳分宛　內八月三分ノ一　二月三分ノ二
五拾俵ゟ九拾九俵迄　金壹兩宛　內八月二分　二月二分
貳拾俵ゟ四拾九俵迄　金貳分宛　內八月壹分　二月壹分
但　壹兩貳分之割　壹ヶ月七匁五分宛ニ當ル　壹兩は　壹ヶ月五匁宛
貳分は　壹ヶ月貳匁五分宛　壹分は　壹ヶ月壹匁貳分宛
百俵以上　高三分壹　秋　高三分貳　冬
秋は八月三日十二日　御金納　案文は七月三日渡ス
冬ハ十一月十一日十二日　御金納　案文は十月三日渡ス
年中　納之金三百貳拾兩程、銀四百三拾匁程、
秋金百九兩程　冬金貳百拾八兩程
元祿三庚午年六月

定書

一小普請金、例年面々之方ニ而、金は後藤包、銀は常是包ニ致し、七月三分一、十一月三分二、兩度ニ可出之、金納之儀は、取立役人ゟ帳面相添、元方御金藏へ可納事、

但七拾歲以上ニ而、御役御免之面々は、以來小普請金不可出之、前々ゟ小普請金出シ來候方ハ、七拾歲有餘ニ而も可出候事、

一小普請之面々、或ハ隱居或ハ令死去、跡式子ニ被下候子共小普請之方ニ候ハヽ、直ニ小普請金可出之、分知配當も可為同前、

但子御奉公相勤來リ、家督相續以後も、御奉公相勤候面々は、跡式被仰付候月ゟ、小普請金不可出候事、

一父御奉公相勤候子、未御奉公不仕、父之跡式被仰付候、小普請ニ入候面々は、其月ゟ小普請金可出候事、以上、

元祿三庚午年六月

〔勘契備忘記中〕元祿二巳年

小普請人足金子ニ而可出旨御書付

一小普請金貳拾俵以下者、向後出申間敷候事、

一貳拾俵ゟ五拾俵內者、金貳分ヅヽ可出事、

一五拾俵ゟ五百俵內者、百俵ニ付金壹兩貳分可出事、

一五百俵ゟ以上者、百俵ニ付金貳兩ヅヽ可出事、

右之通、何百石何百俵も同斷、小普請人足、來午年ゟ金子ニ而可出之候、次ニ御切米ニ御扶持方添候御扶持方も、高之內江入組、御扶持方計取來候分、米貳拾俵之高ニ當リ候得者、金ニ而可出事、

巳十二月

〔勘契備忘記 中〕元祿三午年

小普請金取立割合御定書

一小普請金、例年面々之方ニ而、金者後藤包、銀者常是包致、七月三分一、十一月三分二可納之、金納之儀ハ、取立候役人ゟ、元方御金藏へ可相納候、但端銀之分ハ、三分一之方江付而可取立事、

一小普請之面々、或者隱居、或者死去ニ而、無足之子、跡式被下置、直ニ小普請入候ハヽ、小普請金可出之、分地配當も可爲同前、但分地配當之子、五百俵以下之高ニ而も、幾人替り候共、父隱居死去之月迄、父之分限ニ應じ、月割を以父之名ニ而役銀可出候、何月跡式被仰付候共、父隱居死去之翌月ゟ、分地高ニ應、分地之子之名ニ而役銀可出候、地方御切米共可爲同前事、

附、父何月死去、隱居跡式何月被仰付候共、其間之內共ニ役金之割ニ入候事、

一父小普請組、子者御奉公相勤候ハヽ、父隱居、又ハ死去、子ニ跡式被仰付候ハヽ、何月ニ而も隱居死去之月迄之分、月割を以小普請金可出之、地方取御切米取も可爲同前、但父御切米取ニ而、春借米も不請取前に相果候歟、隱居仕候ニおゐてハ、小普請金月割ニ不及出事、

一父子共小普請組ニ而、知行御切米銘々ニ取來、父隱居歟、死去ニ而、跡式子ニ被下候ハヽ、其年小普請金者、父子共ニ月割之積を以可出之、跡式子ニ被仰付候月ゟ、子之分限ニ而可出、父死去隱居之月迄、父之分限ニ積、其間之月ハ、父之小普請金割可除、跡式被仰付候前月迄之分ハ、子之分限ニ而役銀可出候事、

一父子共小普請組ニ而、知行御切米、銘々取來、七月十一月之兩度ニ、小普請金相納之以後、父相果、極月子ニ跡式被仰付候共、小普請金者、父相納候儀ニ而可差置候事、

一十一月小普請金取立仕廻候以後、十二月ニ而も小普請入候面々役金之儀、翌正月迄取立之、其

年限之帳面ニ可記之、總而十二月取立仕廻候而之後可取立分、翌年ニ至リ取立候共、翌年之帳面ニ者不可及事、

一實子養子共、跡式被仰付候迄ハ、小普請金差扣被仰付候迄ニ而、此書面之通可仕候事、

一父ゟ子分銀増候歟、又者同高ニ而、父死去後、跡式被仰付無之候ハヽ、其年分之父小普請金不及出候、且又小普請金出候上ニ而相果候ハヽ可爲其通、地方御切米共同前之事、

一知行高何石迄役金割懸可申候、御切米高も何俵迄可入割、其末之端石端俵ハ割ニ可除事、

一拾人扶持者、五拾俵之積可爲、總而御扶持方取、右可准事、

一小普請金之勘定ニ、端銀を何分迄者用之、何厘ゟ可捨之事、

一小普請組ゟ御奉公候も、又御奉公人ゟ小普請組江入候も、其年之小普請金、月割ヲ以可出候、但出候ものハ、其月ゟ役金除、入候者ハ其月ゟ可取之事、

附何月小普請入候共、其月ゟ其年中月數三分一、七月可出候殘三分二、十一月可納、但七月以後入候ハヽ、十一月壹度ニ可出之、役金出候上ニ而、御奉公出候者、七月三分一之役金出候後、御奉公ニ出候ハヽ、其上ニ而月割之積可取立之、且又十一月不殘役金出候上ニ而御奉公ニ出候ハヽ可爲其通事、

一新規被仰出知行、又は御切米被下置、小普請入候ハヽ、入候面々、假令何月入候とも、其年之物成不殘於被下候に者、小普請金不殘可出、半分被下候ハヽ、小普請金も半分可出候、七月前ニ物成請取候ハヽ、何も並七月十一月兩度ニ、小普請金半分可出候、七月以後物成受取候ハヽ、十一月壹度ニ可出事、

一在番被仰付候前月迄之積、小普請金可出候、在番ゟ歸府之面々、其翌月ゟ可出候事、

一前々御門番相勤候面々者、御免之翌月ゟ小普請金可出候、且又所々明地掃除爲致候輩者、是又

御免之翌月ゟ役金可出候事、
一閉門、逼塞之輩ハ、小普請金相除、御免之以後可爲同前、但逼塞ハ品ニ寄役金可出候間、支配方江
可被相伺候、遠慮ハ遠慮中共、小普請金可出之事、
附其年之御切米不請取者ハ、御免以後も役金不及出事、
一七拾歳以上ニハ、御役御免之面々ハ、如有來小普請金不及出之、但前々ゟ小普請金出來候者、七
拾歳有餘ニ成候共役金可出事、
此ヶ條、七拾歳有餘ニ成候共、致隱居候得者、前々ゟ隱居之內ゟ、其子役金出來り候處、享保九
辰年伺之上、隱居之翌月ゟ、役金取立候積相極ル、
一跡式潰候輩ハ、其年ニ役金出候ニ不及、但役金出候後、跡式潰候ハヾ、可爲其通事、
一知行御切米、幷御扶持方、閏月者不入勘定事、
一小普請金出來り候面々之內、何ニ而も當分御用被仰付相勤候ハヾ、其年ニ小普請金差扣、支配
方江相達、差圖之上可相納事、
一現米ニ而御切米取候面々者、三斗五升入之俵高ニ直し、小普請金可出之候事、
附銀者、金壹兩六拾目替之可爲勘定事、
此兩替之儀、只今者、御役金取立候時節之相場ニ而取立申候、
一面々ゟ相納候金銀、取立之役人ニ而包直し、御金藏上納可有之事、
右御書付之通、當午十一月ゟ可相定候、以上、
午十一月
〔憲教類典 二ノ十二 小普請組〕享保元丙申七月
覺 〇中略

右組中、午未兩年分小普請役金高書付、明日中可被差出候、以上、

申七月十一日

右之趣、享保元年申七月十八日被仰出候ニ付、御同役中被仰合、左之通書付差上候、

松前伊豆守組小普請御役金高

一（正德四午年）金四千四百九拾四兩壹分、銀壹貫五百五匁、

一（同五未年）金四千六百八拾四兩壹分、銀壹貫百九匁餘、

大島肥前守組同斷

一（同四午年）金三千八百四拾四兩、銀九百四拾九匁七分、

一（同五未年）金參千八百九拾兩、銀八百四拾九匁、

大久保淡路守組同斷

一（同四午年）金四千百六拾六兩貳分、銀壹貫貳拾壹匁壹分、

一（同五未年）金四千貳百六拾三兩、銀壹貫四拾三匁壹分、

朽木和泉守組同斷

一（同四午年）金四千三百五拾兩貳分、銀壹貫八拾五匁九分、

一（同五未年）金四千四百八拾九兩貳分、銀壹貫百貳拾三匁壹分、

都合　金高三萬四千百六拾兩
銀高八貫三百八拾六匁六分

申七月　御留守居

右は御留守居方書上候書面にて、被仰出候御書付とは不相見候得共、前々御書付ニ連續いたし候事故、認加置可然候、

〔天明集成絲綸錄四十〕安永五申年九月

御目付江

寄合御役金、向後御勘定奉行、同吟味役取扱、上納金之儀ハ、後藤庄三郎役所江直ニ請取候筈候、依之役金肝煎御免被成候間、以來上納方之儀、御勘定所江銘々家來呼出、納手形案文相渡、納日限等可相達候間、金貳朱判、幷端銀之分共ニ包ニ不及、直ニ銘々ゟ庄三郎役所江可被差出候、尤金銀上納之銘々宛所ニ御金役所と認差出筈ニ候、且寄合より御役出、幷所々御門番、其外加番等被仰付候節ハ勿論、隱居家督病死等之儀も、早速御勘定奉行、吟味役江可被相屆候、

右之趣、寄合之面々江可被相達候、

九月

〔寄合小普請無役御役金取立方〕寛政二戌年六月十四日、本多彈正大弼殿春阿彌を以御渡候御書付、

御勘定奉行　同吟味役江

一萬石以下菊之間緣頰詰交代寄合、其外寄合小普請、諸向無役之者御役金之儀、是迄後藤庄三郎方江相納候處、向後吟味役宅ニおゐて請取候樣可被致候、右之段、向々江も相達候、依之庄三郎儀ハ、以來取立方差免し候之間、其段可被申渡候、且金銀納方之儀、以前之通、後藤銀座常是包ニ而相納候積り、尤小給之者共ハ、銘々包分ケ候而は、手數相掛り可爲難儀間、小普請貳百俵以下、幷諸伺無役之分ハ、支配限り一纏ニいたし、小普請之分ハ手傳之者包方納方爲取扱、其外無役之分は、其場所々々頭支配、又は世話役之者共ゟ爲相納候樣申渡候間、其方共よりも向々江申談、何れニも小給之者共、包入用失費無之樣、精々相心得可被取計候、

六月

〔寄合小普請無役御役金取立方〕寄合小普請無役御役金取立方○中略

小普請之分秋納案文、小普請支配江差遣候後、六月晦日迄ニ申來候入之分は、何月入ニ而も、秋納後レ日ニ御役金取立可申候事、

但冬納之節も、案文差遣候後、十月晦日迄ニ申來候入之分ハ、冬納後レ日ニ御役金取立可申候、尤小普請居附之跡目濟之者も、右ニ准じ御役金取立可申候事、

一小普請支配ゟ、七月江入申來り候入之分ハ、假令何月小普請入之者ニ而も冬納ニ組入レ、御役金取立可申候事、

一小普請居附之跡目濟之者御役金も、右ニ准じ取立可申候事、

但冬納之節も、十一月江入申來候入之分ハ、翌春納ニ組入、御役金取立可申候、

一百俵以上之分、銘々秋納御役金、七月納定日ニ上納相濟候後、七月之中除キニ相成候者、殘月割御役金ハ、冬納ニ組入取立可申事、

〔寄合小普請無役御役金取立方〕御役金取立定日

七月　十一月

二日寄合　四日同斷　六日同斷　十日織田高木　十三日内藤松平　十八日前田石河　廿日坪内淺野　廿四日、南部八木

一御金奉行江右日限達置候、右之外臨時之納日有之節ハ、其度々前日ニ申達置可申候、

〔寄合小普請無役御役金取立方〕一小普請貳百俵以上御役金、御勘定吟味役懸りニ而取立候始は、明和四亥年十二月十日、松平右近將監殿御書付を以被仰渡、

但此節は、上納金銀本包ニいたし、銘々ゟ吟味役衆宅江相納ル、當日吟味役衆在宿被致、外壹人吟味役衆被相越、立合ニ而取立有之、尤懸り吟味方改役、同並、同下役、早朝ゟ右宅江罷越、請取方相勤、當日直ニ御金藏江上納、宰領ニは下役兩人差添、御金箱ハ吟味役衆手人ニ而持送り、且當

日は假納證文を以相納、但此書面吟味役衆兩人連印也、追日納相濟候節、本納證文ト引替ニ成、尤御勘定帳等も吟味役衆ゟ出ル、此節は案文も右宅ニて相渡ス、且案文渡、上納金請取日、幷納相濟候砌御屆ケ書上ル、

一寄合小普請、諸向無役御役金一統ニ取立方、御勘定奉行、同吟味役江被仰渡候は、安永五申年九月廿七日、松平右近將監殿御直、石谷豐前守上ル、遠野源太郎江御書付を以被仰渡候、

此節ゟ吟味方御勘定方貳人宛、吟味方下役兩人、尤組頭壹人懸り被仰付、筆墨紙等御勘定所ニ而請取、寄合案文は、御勘定所江家來呼出相渡、小普請之分は、一集ニ小普請支配詰番江相渡、尤無役之分も、夫々頭々へ差遣ス、

此節ゟ上納金銀無包ニ而、銘々ゟ後藤庄三郎役所江差出候而、庄三郎方ニ而金銀改、夫々ニ包致シ、御金藏江上納致シ候、右御用相勤候ニ付、庄三郎儀帶刀御免被成候旨、右近將監殿御書付を以被仰渡候、

一前年後レ之分、春取立ニ相成候は、右之節ゟ始ル、尤伺濟、

一後藤庄三郎ゟ、小普請金御金藏江上納及延引候間、向後日限相定、上納爲仕可申段、天明七未年八月伺濟、

〔勘契備忘記 中〕享保十四酉年

交代寄合、壹ケ年半も在所ニ罷在候內、御役金取立候書付、

一三月參府仕、九月御暇被下候面々者、其年中之御役金、參府仕候、春秋兩度ニ差出申候、四ケ月分翌年秋八月分合十二月分差出申候、

一九月參府仕、翌年二月御暇被下候面々、

福原刑部　芦野民部　大田原賴母

右之面々、前々者毎年極月參府仕、翌年五月御暇被下候ニ付、參府之月幷御暇被下候前月迄之御役金、一ヶ年五ヶ月分差出來候、只今者、壹ヶ年半在所ニ罷在候、參府不仕年も御役金前格を以、五ヶ月分差出申候、以上、

酉二月

古事類苑

官位部七十七

德川氏職員二十六

安政以後新置官

德川氏ノ末、安政以後ニ至リ、新ニ政事總裁、政事輔翼、海陸軍總裁、陸軍奉行、陸軍所役人、海軍奉行、海軍所役人、外國奉行、神奈川奉行、兵庫奉行、京都守護職、京都見廻役、山陵奉行、學問所奉行、開成所役人等ノ職ヲ增設セリ、

海陸軍總裁ハ、文久二年、松平齊裕ヲ以テ之ニ補ス、後慶應三年ニ至リ、老中ヲシテ兼任セシム、

陸軍奉行ハ、騎、步、砲、三兵ノ將帥ニシテ、文久二年置ク所ナリ、騎兵ハ、騎兵奉行之ヲ管ス、步兵ト共ニ頭、差圖役等アリ、砲兵頭ハ、モト大砲組ト稱ス、下ニ差圖役アリ、撒兵頭ハ、モト小筒組之頭ト稱ス、又銃隊奉行、遊擊隊頭アリ、其外浪士取締ニ新徵組アリ、外國人警固ニ別手組アリ、此職始メ外國御用出役ト稱ス、

陸軍所ハ、モト講武所ト云ヘリ、安政二年創設スル所ニシテ、劍、槍、弓、銃、砲、水泳等ヲ習練スル所ナリ、長官ヲ講武所奉行ト云フ、下ニ頭取、取締役、勤番組頭等アリ、各科ノ敎官ヲ師範役、敎授方ト云フ、

海軍奉行ハ、海軍ノ將帥ニシテ、下ニ軍艦奉行、軍艦頭、軍艦役、軍艦添役、蒸氣方等アリ、

海軍所ハ、始メ軍艦操練所ト稱ス、航海ノ術ヲ講ジ、軍艦ノ運轉ヲ練習スル所ナリ、安政四年、

始テ講武所ノ中ニ置ク、長官ヲ頭取ト云フ、下ニ支配組頭、世話役、取調役等アリ、
外國奉行ハ安政五年始テ置ク所ニシテ、專ラ外交ニ關スル事ヲ掌ル、職員ノ數ハ一定セズシテ、多キ時ハ十人ニ及ビ、少キ時モ五人ニ下ラズ、從五位下ニ敍シ、遠國奉行ノ上席ニ位シ、二千石高ノ職ナリ、屬僚ニ組頭、調役、飜譯方等アリ、
京都守護職ハ、大名ノ任ニシテ、班席所司代ノ上ニ在リ、文久二年ニ松平容保始テ之ニ補ス、
京都見廻役ハ、元治元年ニ始テ之ヲ置キ、五千石高ニシテ、役料三千俵ヲ給ス、屬僚ニ組頭アリ、山陵奉行ハ、山陵ノ調査、修精等ヲ掌ル職ニシテ、文久二年ニ始テ之ヲ置ケリ、
國益主法方ハ、万延元年、大目付、町奉行、勘定奉行等ニ命ジ、殖產擴張ノ方法ヲ講ゼシメシガ、文久二年ニ至リテ廢セラル、
此他政事總裁、政事輔翼ノ事ハ、大老篇ニ、神奈川奉行、兵庫奉行ハ、遠國奉行篇ニ、學問所奉行ハ文學部昌平坂學問所篇職員條ニ、開成所役人ハ同洋學篇開成所條ニ載セタレバ此ニ擧ゲズ、

海陸軍總裁

〔昭德院實紀　二十五〕文久二年十二月十八日、陸軍總裁新置、　御座間

松平阿波守〇裕實

右於御前被仰付之

同人

其方儀、陸軍惣裁、海軍方も淡路守儀、最早政事向委任致シ、其方儀ハ、御用筋可被相勤候、且當冬歸國、再願之次第、無餘儀事ニハ候得共、格別之御近親を以、當地より御先江上京被仰出候間、來春御暇可被下、就而ハ、御上洛御用相濟候はヾ、領內巡見、海防等被致所置、相片付致候心得ニ可罷在旨、被仰出之、

海陸軍總奉行

陸軍奉行

〔昭德院實紀二十五〕文久二年十二月二十一日、松平阿波守陸軍總裁被仰付ニ付、御用談之外、歡迎廻勤斷之令、

大目付
御目付江

松平阿波守、今般陸軍總裁被仰付候ニ付、御用談之外、歡迎廻勤幷贈物等、都而斷申度旨申聞候間、其段向々へ可被達置候事、

〔嘉永明治年間錄十四〕慶應元年九月九日、松前伊豆守〇崇廣ニ海陸兩軍總裁ヲ命ズ、

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年六月、庶總裁職ヲ閣老ニ命ズ、

陸軍總裁　松平縫殿頭〇乘謨

海軍總裁　稻葉兵部大輔〇正巳

〔續泰平年表〕元治元年七月七日、御座間海陸軍總奉行、老中格松前伊豆守〇崇廣右於御前被仰付之、

〔文久紀事六〕十二月朔日〇文久二年、新規御役〇中略

陸軍奉行　講武所奉行 大關肥後守〇增裕、中略、

右於御前被仰付之、

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

陸軍奉行　高五千石

右者、騎步砲三兵之總大將ニ有之候、

〔昭德院實紀二十六〕文久三年正月六日、場所高席之令、

御目付　陸軍奉行江

陸軍奉行

場所高五千石、席之儀ハ、駿府御城代之上、老中支配可レ爲レ致候、

陸軍奉行並

〔泰平年表六編三〕文久三年七月十日、御座間〇中略 陸軍奉行並寄合 小栗豊後守、右被二仰付一之、

〔元治元年武鑑〕陸軍奉行並、三千石高、

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高、御役知、御役料、御役扶持等不レ被レ下、是迄之場所高ニ不レ拘、今度御改正、別紙之通、御役金被レ下候旨、被二仰出一之、

御役金被レ下高之覺

一金貳千五百兩宛　陸軍奉行並

但高五千石以上之者江ハ半減　御切米高三千俵以上之者江ハ不レ被レ下　同千五百俵以上之者江ハ半減

騎兵奉行

〔泰平年表六編一〕文久三年三月十二日、騎兵奉行、講武所奉行並御目付 山口信濃守、右被二仰付一之

〔元治元年武鑑〕騎兵御奉行　芙蓉間　三千石高

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

騎兵奉行　高三千石　御老中支配

右者フリガーテ隊レジメント三四隊相合する者、之指揮致シ候

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被レ下高之覺

一金貳千兩宛　騎兵奉行

但高四千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千五百俵以上之者江ハ不レ被レ下　同千俵以上之者江ハ半減

〔懷中便要〕布衣以上大概順

二千石高　文久二戌年十二月二十八日新キ　　騎兵奉行並

〔吹塵錄三十一徳川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金千五百兩宛　　騎兵奉行並

但高三千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千俵以上之者江ハ不被下　同七百俵以上之者江ハ半減

〔文久紀事六〕十二月〇文久二年二十八日、新規御役、

騎兵頭　　御使番　山口織部

小笠原志摩守組　倉橋青之助

右於御前被仰付之

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

騎兵頭　高二千石　御老中支配

右者、一レジメント隊之指揮をいたし候、

〔昭德院實紀二十六〕文久三年正月六日、場所高席之令、

騎兵頭江

騎兵頭

場所高貳千石、諸大夫場所席之儀ハ、歩兵頭之上、老中支配可為致候、

〔吹塵錄三十一徳川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

騎兵頭並

一金千五百兩宛　騎兵頭

但高三千石以上之者江は半減　御切米高貳千俵以上之者江ハ不ㇾ被ㇾ下　同七百俵以上之者江ハ半減

騎兵頭並　織田伊賀守組　貴志彌三郎

〔文久紀事六〕十二月〇文久二年二十八日、新規御役、

〔元治元年武鑑〕騎兵御頭　中ノ間二千石高

〔海軍歴史十三〕海陸二軍將士階級序

騎兵頭並　高千石　御老中支配

右ハ、半レジメント隊之指揮を致シ候、

〔昭德院實紀二十六〕文久三年正月六日、場所高席之令、

騎兵頭並江

騎兵頭並

場所高千石、布衣場所席之儀ハ、歩兵頭並之上、老中支配可ㇾ爲ㇾ致候、

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被ㇾ下高之覺

一金八百兩宛　騎兵頭並

但高千六百石以上之者江ハ半減　御切米高千俵以上之者江ハ不ㇾ被ㇾ下　同五百俵以上之者江ハ半減

騎兵差圖役頭取

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月二十三日

御小性組明キ組　山角磯之助

騎兵差圖役頭取、御役料百俵被下之、

〔昭德院實紀 二十八〕文久三年二月二十七日、騎兵組場所高官料席之令、

騎兵差圖役頭取

場所高四百俵、御役料百俵、席之儀は、新御番組頭之上、當分陸軍奉行支配たるべく候、

〔海軍歷史 十三〕海陸二軍將士階級序

騎兵差圖役頭取　高四百俵　御役料百俵　騎兵奉行支配

右者、一エスカドロン隊之指揮を致候、

騎兵差圖役頭取勤方

〔昭德院實紀 二十八〕文久三年二月二十三日

大御番本庄宮內少輔組、講武所砲術教授方出役、加賀美金之丞

小十人稻生庄五郎組、洋書調所教授方出役、星戶兼吉郎

兩番格騎兵差圖役頭取勤方、兼吉郎儀は勤內二百俵之御足高被下之、

〔懷中便覽〕布衣以下大概順

二百俵高　御役扶持十人扶持　兩番格　騎兵差圖役頭取勤方

騎兵差圖役

〔泰平年表 六編一〕文久三年二月二十三日、騎兵差圖役御小性組平岡石見守組、講武所調方出役、鵜殿十郎左衛門、〇中略

右被仰付之、

〔海軍歷史 十三〕海陸二軍將士階級序

騎兵差圖役　高三百俵　御役料百俵　騎兵奉行支配

右、兩翼小隊之指揮致し候、

〔昭德院實紀 二十八〕文久三年二月二十七日、騎兵組場所高官料席之令、

騎兵差圖役

場所高三百俵、御役料百俵、席之儀、兩番之上、當分陸軍奉行支配可ㇾ爲候、

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月廿三日

御徒目付　富永一造

（騎兵差圖役勤方）

小十人格騎兵差圖役勤方、勤候內、百俵高ニ御足高被ㇾ下、御手當七人扶持被ㇾ下ㇾ之、

〔泰平年表六編一〕文久三年二月二十三日、小十人格騎兵差圖役並御徒目付吉川勘三郎、〇中略　右被ㇾ仰ㇾ付之、

（騎兵差圖役並）

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

騎兵差圖役並　高貳百五十俵　御役料百俵　騎兵奉行支配

右、一エスカドロン中等二隊之指揮いたし候、

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月廿七日、騎兵組場所高官料席之令、

騎兵差圖役並

場所高貳百五十俵、御役料百俵、席之儀は新御番之上、當分陸軍奉行支配たるべく候、

（騎兵差圖役勤方）

〔泰平年表六編一〕文久三年二月二十三日、騎兵差圖役勤方大御番本庄宮內少輔組、講武所炮術教授方出役、加賀美金之丞、

〇中略

右被ㇾ仰ㇾ付之

（騎兵差圖役下役）

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序　下等士官

騎兵差圖役下役　高八十俵持扶持　役金三十兩　當分御手當二十兩　騎兵頭支配

（騎兵差圖役下役並）

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序　下等士官

騎兵差圖役下役並　高七十俵持扶持　役金三十兩　當分御手當二十兩

（騎兵目付）

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

騎兵目付下役

騎兵

歩兵奉行

騎兵總目付　高七百石　御使番之上　若年寄支配　騎兵目付役　御役料百俵

右差圖役より相勤申候

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序　下等士官

騎兵目付下役　高百俵持扶持　役金三十兩　當分御手當二十兩　騎兵頭支配

〔懷中便要〕布衣以下大概順

百五十俵高　御役扶持十人扶持　騎兵

〔文久紀事六〕十二月〇文久二年朔日新規御役〇中略

歩兵奉行御勘定奉行兼帶　町奉行小栗豐後守〇中略

右於御前被仰付之、

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

歩兵奉行　高三千石　御老中支配

右者、フリガーデ隊レツメント三四隊相合する者之指揮致し候、

〔德川禁令考二十六幕府〕歩兵奉行〇中略此隊ハ、旗本士族采邑ヨリ出ス、兵賦ノ壯彊ヲ編制シテ、歩兵組ト唱フ、〇中略且此組慶應年間、銃隊攻戰ノ法ヲ、敎師佛人ニ傳習シテ、軍容嚴裝ヲ增ス、〇下略

〔昭德院實紀二十六〕文久三年正月六日場所高席

歩行奉行江

歩兵奉行

場所高三千石、諸大夫場所席之儀は、御勘定奉行之上、老中支配可爲致候、

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

歩兵頭

御役金被下高之覺

一金貳千兩宛　歩兵奉行

但高四千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千五百俵以上之者江ハ不被下　同千俵以上之者江ハ半減

〔泰平年表七編二〕元治元年六月二十一日、御座間御役替、歩兵奉行並歩兵頭藤澤志摩守、右於御前被仰付之、

〔懷中便要〕布衣以上大概順

二千石高　元治元子六月廿一日新キ　歩兵奉行並

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金千五百兩宛　歩兵奉行並

但高三千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千俵以上之者江ハ不被下　同七百俵以上之者江ハ半減

〔文久紀事六〕十二月〇文久二年朔日、新規御役、〇中略　講武所頭取松平仲〇中略

講武所奉行並歩兵頭

右於御前被仰付之、

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

歩兵頭　高二千石　御役金貳百兩　御老中支配

右者、一レジメント隊之指揮をいたし候、

〔昭德院實紀二十六〕文久三年正月六日、場所高席之令、

歩兵頭並

歩兵頭江
歩兵頭
場所高貳千石、諸大夫場所席之儀ハ、西丸御留守居之上、老中支配可レ爲レ致候、
〔吹塵錄三十一徳川氏〕慶應三卯年九月
御役金被レ下高之覺
一金千五百兩宛　歩兵頭
但高三千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千俵以上之者江ハ不レ被レ下　同七百俵以上之
者江ハ半減
〔文久紀事六〕十二月〇文久二年二十八日、新規御役、
歩兵頭　講武所頭取　藤澤主税
歩兵頭並　飯田庄藏〇中略
歩兵頭並　兩番上席講武所砲術師範役並　柳澤鐘次郎〇中略
歩兵頭並　赤松右衛門尉組講武所砲術教授方　平岡四郎兵衛
久永石見守組　城鶴次郎
歩兵頭並　横田五郎三郎
右於二御前一被二仰付一之、
〔海軍歴史十三〕海陸二軍將士階級序
歩兵頭並　高千石　御老中支配
右ハ、一バタロン隊之指揮を致し候、
〔昭德院實紀二十六〕文久三年正月六日、場所高席之令、

歩兵頭並江

歩兵頭並

場所高千石、布衣場所、席之儀ハ、御持筒組之頭並之上、老中支配可レ爲レ致候、

〔吹塵錄三十一徳川氏〕慶應三卯年九月

御役金被レ下高之覺

一金八百兩宛　歩兵頭並

但高千六百石以上之者江ハ半減　御切米高千俵以上之者江ハ不レ被レ下　同五百俵以上之者江ハ半減

歩兵差圖役頭取

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月九日、新規被二召出一歩兵方役々、〇中略 御書院番兩番上席講武所砲術教授方出役 日根野藤之助 〇以下九人略

歩兵差圖役頭取被二仰付一、四百俵より內之者ハ、何れも勤候內、四百俵之高に御足高被レ下之、

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

歩兵差圖役頭取　高四百俵　歩兵奉行支配

右ハ、中隊之指揮を致し候、

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月廿七日、歩兵組場所高官料席之令、

歩兵差圖役頭取

場所高四百俵、席之儀騎兵差圖役頭取之次、歩兵奉行支配たるべく候、

歩兵差圖役頭取勤方

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月九日、新規被二召出一歩兵方役々、〇中略 御使番彈正養子講武所世話心得 佐橋壽次郎 〇以下二人略

被二召出一兩番格歩兵差圖役頭取勤方被二仰付一、御切米貳百俵、御手當扶持十人扶持被レ下之、

歩兵差圖役

○按ズルニ、本書ニ此外兩番上席歩兵頭差圖役頭取勤方五人ヲ命ジ、三百俵足高トナシ、又小十人格同勤方二人ヲ命ジ、共ニ手當扶持七人扶持ヲ給ヒ、富士見御寶藏番格同勤方三人ヲ命ジ、八拾俵より内之者ハ、勤候内八十俵之高ニ御足高被下、何れも御手當十人扶持宛被下之、熊藏〇山田義ハ、新規御切米三十俵扶持被下、勤候內、並之通、御足高御手當も被下之ト見エタリ、

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月九日、新規被召出歩兵方役々、

御書院番齋藤攝津守組　筒井武左衞門

小普請組戸田中務支配　井上織之助

歩兵差圖役被仰付之

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

歩兵差圖役　高三百俵　歩兵奉行支配

右、小隊之指揮いたし候、

歩兵差圖役勤方

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月廿七日、歩兵組場所高官料席之令、

歩兵差圖役

場所高三百俵、席之儀騎兵差圖役之次、歩兵奉行支配たるべく候、

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月九日、新規被召出歩兵方役々、〇中略

御小納戸千村万太郎養子　千村隼之助〇以下五人略

被召出、兩番格歩兵差圖役勤方被仰付、御切米貳百俵、御手當七人扶持被下之、

○按ズルニ、本書ニ此外大番格同勤方一人ヲ命ジ、切米百五十俵、手當七人扶持ヲ給シ、又富士見寶藏番格、同勤方五人ヲ命ジ、足高八十俵ヲ給シタル事見エタリ、

歩兵差圖役並

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月九日、新規被召出歩兵方役々、〇中略

新御番村上肥後守組　外山忠兵衛

歩兵差圖役並被仰付、勤候內、只今迄之御足高、其儘被下之、

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

歩兵差圖役並　高貳百五拾俵　歩兵奉行支配

右、第一級半隊之指揮いたし候、

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月廿七日、歩兵組場所高官料席之令、

歩兵差圖役並

場所高貳百五十俵、席之儀騎兵差圖役並之次、歩兵奉行支配たるべく候、

歩兵差圖役並勤方

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月九日、新規被召出歩兵方役々、

御小納戸矢九郎忠領　大久保櫃太郎　三〇人以下略

被召出兩番格歩兵差圖役並勤方被仰付、御切米貳百俵、御手當五人扶持被下之、

○按ズルニ、本書ニ此外大番格同勤方二人ヲ命ジ、切米百五十俵手當五人扶持ヲ給シ、又小十人格同勤方二人ヲ命ジ、百俵ノ足高ニシタル事見エタリ、

歩兵差圖役下役

〔昭德院實紀二十六〕文久三年正月二十三日

表臺所人御代官里見源左衛門手附出役　小坂眞之助　七〇人以下略

右、歩兵差圖役下役被仰付之、

〔昭德院實紀二十六〕文久三年正月二十四日

歩兵頭江

歩兵差圖役下役

場所高八拾俵持扶持、役金拾五兩、席之儀ハ、表火之番之上、何れも支配たるべく候、

歩兵差圖役下役並

〔昭德院實紀二十六〕文久三年正月二十三日

講武所勤番　小林金藏○以下四人略

右、歩兵差圖役下役並被仰付之、

〔昭德院實紀二十六〕文久三年正月二十四日

歩兵頭江　歩兵差圖役下役並

場所高七十俵持扶持金拾兩、席之儀ハ、學問所勤番之上、何れも支配たるべく候、

歩兵目付

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

歩兵總目付　高七百石　若年寄支配

歩兵目付役　御役料百五十俵

歩兵目付役並　御役料百俵

此二役者、差圖役頭取、又差圖役より相勤申候、

歩兵目付下役

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序　下等士官

歩兵目付下役　高百俵扶持　役金廿兩　歩兵頭支配

歩兵

〔懷中便覽〕布衣以下大概順

百五十俵高　御役扶持十人扶持　歩兵

砲兵頭

〔文久紀事六〕十二月○文久二年二十八日、新規御役、○中略

大砲組之頭　兩番上席講武所砲術師範役並　中山旗郎○中略

右於御前被仰付之

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序
大砲組之頭　高千石　御老中支配
右ハ大砲一座バッテレイ、但八挺之指揮を致し候、
〔昭德院實紀二十六〕文久三年正月六日、場所高席之令、
大砲組之頭江

大砲組之頭

場所高千石、布衣場所、席之儀ハ、御留守居番之上、老中支配可ㇾ爲ㇾ致候、
〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年九月二十日、大砲組ノ頭ヲ改テ砲兵組ノ頭ト唱フ
〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月
御役金被ㇾ下高之覺
一金千五百兩宛　砲兵頭
但高三千石以上之者エハ半減　御切米高貳千俵以上之者エハ不ㇾ被ㇾ下　同七百俵以上之
者エハ半減
一金八百兩宛　砲兵頭並
但高千六百石以上之者エハ半減　御切米高千俵以上之者エハ不ㇾ被ㇾ下　同五百俵以上之
者エハ半減

大砲差圖役頭取

〔泰平年表文久編一〕文久三年二月二十三日、大砲組差圖役頭取、御小性組本多日向守組植村主税、同柴田能登守組大澤
仁十郎、御書院番高木伊勢守組高尾八十郎、○中略右被ㇾ仰ㇾ付之、
〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序
大砲組差圖役頭取　高四百俵　陸軍奉行支配

右ハ、大砲半座之指揮いたし候、

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月廿七日、大砲組場所高官料席之令、

大砲組差圖役頭取

場所高四百俵、歩兵差圖役頭取之次、陸軍奉行支配可爲候、

大砲差圖役頭取勤方

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月二十三日

御持小筒組之頭竝之進總領 夏目清一郎〇以下五人略

被召出、兩御番格大砲組差圖役頭取勤方、御切米貳百俵、御手當七人扶持被下之、

〇按ズルニ、此外大番格、同勤方命ゼラルヽ者一人アリテ、切米百五十俵、手當十人扶持給セラレ、又小十人格、同勤方、七人ヲ命ジテ、切米二百俵手當十人扶持ヲ給シタル事見エタリ、

〔懷中便要〕布衣以下大概順

二百俵高　御役扶持十人扶持　兩番格大砲差圖役頭取勤方

〔泰平年表六編一〕文久三年二月二十三日、兩番格大砲組差圖役頭取勤方

御持小筒組之頭竝之勤總領 夏目清太郎〇以下九人略

右被仰付之、

大砲差圖役

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

大砲組差圖役　高三百俵　陸軍奉行支配

右、半座之指揮いたし候、

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月廿七日、大砲組場所高官料席之令、

大砲組差圖役

場所高三百俵、席之儀騎兵差圖役之次、陸軍奉行支配可爲候、

大砲差圖役勤方

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月二十三日

御書院番松平織部正組熊三郎總領　京極民七　〇以下四人略

被召出、兩御番格、大砲差圖役勤方、御切米貳百俵、御手當七人扶持被下之、

大砲差圖役並

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

大砲組差圖役並　高貳百五十俵　陸軍奉行支配

右、二挺之指揮いたし候、

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月廿七日、大砲組場所高官料席之令、

大砲組差圖役並

場所高貳百五十俵、席之儀、歩兵差圖役並之次、陸軍奉行支配可爲候、

大砲差圖役下役
大砲差圖役下役並

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序　下等士官

大砲組差圖役下役　高八十俵持扶持　役金十五兩　大砲組之頭支配

大砲組差圖役下役並　高七十俵持扶持　役金十兩　大砲組之頭支配

大砲

〔懷中便要〕布衣以下大概順

百五拾俵高　御役扶持十人扶持　大砲

撒兵頭

〔懷中便要〕布衣以上大概順

二千石高　文久三亥七月九日新規　御持小筒組之頭

〔元治二年武鑑〕御持小筒組之頭　若年寄支配　菊之間南敷居之外

〔昭德院實紀三十〕元治元年正月二十九日　御持小筒組之頭江

紅葉山下御門勤番被仰付候、依之田安御門之方ハ被成御免候、尤場所請取渡、其外之儀ハ、御留守御用掛、大目付、御目付可被談候、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年九月二十日、御持小筒組ノ頭ヲ改テ撤兵頭ト唱フ、
御持小筒組起立の儀ハ、文久二戌十二月、小普請組より百人被仰付、元治元子六月、野州騷動の節、諸向より御入人六小隊則二百四十人餘に相成り、猶當寅七月八日元御賄方、同六尺同新組、御臺所小間使等、凡三百人餘、其外諸向より、追々御入人にて、神田橋外騎兵屯所構内、撤兵當番所へ相詰、夫より元御持御先手等の持場所、　西丸御玄關前御門　同中仕切御門　御裏門　坂下御門　蓮池御門　下梅林御門　平川口御門等、右八ヶ所へ撤兵四大隊を以て日々交代、此外一大隊京都詰、但一小隊四十人、一大隊四百人、右之外三小隊大坂詰、　二百人餘、橫濱傳習へ相越す、　西丸下生兵千二百人餘、　老幼病兵千人餘、右役々下役並に取締等までにて、凡六百人惣人數五千人と云、

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月
御役金被下高之覺
一金千五百兩宛　　撤兵頭
但高三千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千石以上之者江ハ不被下　同七百俵以上之者江ハ半減

〔文久紀事六〕十二月〇文久二年二十八日、新規御役、〇中略
御持小筒頭並　　勤仕並寄合　松平左門〇中略
右於御前被仰付之、

〔慶應三年武鑑〕撤兵頭並　千石高

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月
御役金被下高之覺

一金八百兩　　撤兵頭並

但高千六百石以上之者江ハ半減　御切米高千俵以上之者江ハ不被下　同五百俵以上之者江ハ半減

持小筒組差圖役頭取

〔昭德院實紀二十八〕文久三年二月九日、新規被召出、步兵方役々、小十人稻生庄五郎組外國御用出役　天野貫一

御持小筒組差圖役頭取被仰付、兩御番格、勤候內、二百俵之高ニ御足高被下之、御手當扶持七人扶持被下之、

持小筒組差圖役

〔懷中便覽〕布衣以下大概順

三百俵高　　御持小筒組差圖役

持小筒

〔懷中便覽〕布衣以上大概順

百五十俵高　役扶持十人扶持　御持小筒

〔武江年表十一〕慶應三年九月、儉盜の賊超過ニ付、十一月より、市中所々に假の屯所十餘ヶ所を設けて、別隊組撤兵組其他の兵隊、夜々こゝに屯して、坊間を巡視して、賊徒の防とせらる、○下略

〔武江年表十二〕慶應四年二月末、所々御門見付番を、撤兵隊に改らる、

銃隊奉行

〔慶應三年武鑑〕銃隊御奉行　老中支配三千石高

四千石、八木但馬守補職、慶應二寅八月　三千石、松平豐後守勝實、慶應二寅八月

奧詰銃隊頭

〔慶應三年武鑑〕奧詰銃隊頭　老中支配　五千石高

三千石、池田右近將監、　四千石、八木但馬守補職、慶應二寅十二月　三千五百石、久世下野守、慶應二寅十二月

〔德川禁令考幕府十六〕銃隊頭○中略

按ニ、○中略慶應三年ノ職班ニ奧詰銃隊頭ノ官アリ、蓋シ此隊ハ、將軍近側ノ衛士ナリ、○下略

銃隊頭

〔吹塵錄 三十一 德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金貳千兩宛　奥詰銃隊頭

但高四千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千五百俵以上之者江ハ不被下　同千俵以上之者江ハ半減

〔慶應三年武鑑〕組合銃隊頭　老中支配

三千六百四十二石、加藤平內、六千五百石、三枝勘解由、〇以下十九人略

〔吹塵錄 三十一 德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金千五百兩宛　銃隊頭

但高三千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千俵以上之者江ハ不被下　同七百俵以上之者江ハ半減

一金八百兩宛　銃隊頭並

但高千六百石以上之者江ハ半減　御切米高千俵以上之者江ハ不被下　同五百俵以上之者江ハ半減

銃隊改役

〔慶應三年武鑑〕組合銃隊改役　老中支配

五千五百石、柴田七九郎、四千三百石、近藤利三郎、〇以下十三人略

遊擊隊頭

〔慶應三年武鑑〕遊擊隊之頭　老中支配　五千石高

三千石、渡邊甲斐守、二百俵、今堀登代太郎、

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年十月二十三日、遊擊隊ヲ置ク、

槍術方與詰、同講武所詰遊擊隊仰付られ、此後講武所劒術師範役名御廢止、遊擊隊頭取被仰付、
其餘諸場所より御入人有之、
〔武江年表十一〕慶應二年十一月、常盤橋御門內に遊擊隊當番所を建らる、
〔吹塵錄 三十一 德川氏〕慶應三卯年九月
御役金被下高之覺
一金千五百兩宛　遊擊隊頭
但高三千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千俵以上之者江ハ不被下　同七百俵以上之
者江ハ半減
一金八百兩宛　遊擊隊頭並
但高千六百石以上之者江ハ半減、御切米高千俵以上之者江ハ不被下　同五百俵以上之
者江ハ半減

遊擊隊調方頭取

〔慶應三年武鑑〕遊擊隊調方頭取　若年寄支配　布衣　中之間　七百石高
百俵五人扶持、小山太郎左衛門、　二百俵、伴野七之助、
〔吹塵錄 三十一 德川氏〕慶應三卯年九月
御役金被下高之覺
一金五百兩宛　二丸御留守居格遊擊隊調方頭取　伴野七之助
但高千石以上之者江ハ半減　御切米高三百俵以上之者江ハ半減　開成所頭取格遊擊隊頭取　湊信八郎
一金四百兩
但高八百石以上之者江ハ半減　御切米高五百俵以上之者江ハ不被下　同貳百俵以上之
者江ハ半減

一金四百兩宛　　　　二丸御留守居格遊擊隊頭取 伊庭軍兵衛〇以下五人略

但御切米高貳百俵以上之者江ハ半減

遊擊隊取締役

〔慶應三年武鑑〕遊擊隊取締役　兩御番上席　五百石以下十人扶持

三百俵、小貫錆太郎、〇以下十人略

遊擊隊

〔慶應三年武鑑〕遊擊隊　百五十俵

關谷順之助　石川長左衛門　狩谷增藏

遊擊隊勤番

〔慶應三年武鑑〕遊擊隊勤番　五十俵三人扶持

近藤安次郎　兵藤榮藏〇以下九人略

新徵組支配

〔文久紀事 六〕十二月〇文久二年九日

講武所劔術教授方 松平主稅助

浪士之內有志之者取扱、寄合席、御手當三百俵被下之、勤向是迄之通リ、

右被仰付旨於御右筆部屋椽頰、老中圖書頭列座、周防守申渡之、若年寄中侍座、

〔文久紀事 六〕十二月〇文久二年二十日

田安殿奧詰 窪田治部右衛門

浪士取締役

右被仰付旨、於躑躅間周防守申渡之、

十二月廿四日

小普請鈴木四郎右衛門支配槇之助實父隱居 鵜殿鳩翁

浪士之內有志之者取扱

右被仰付旨、於右筆部屋椽頰豐前守申渡、

新徵組

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年四月、浪士取扱役名ヲ改テ新徵組支配ト爲ス、

〔武江年表十一〕文久三年四月、新徵組浪士、酒井繁之丞殿(庄内侯)の附屬に命せらる、

〔泰平年表六編四〕文久三年十一月二十三日、新徵組被廢止、(中略)同(新徵組支配)松平上總介、林伊太郎、右新徵組被廢止候ニ付、御役御免、勤仕並寄合只今迄出精相勤候ニ付被下之、

〔元治紀事二〕新徵組御手當之覺、一人ニ付、

一五人扶持　内二人扶持役扶持　肝煎

一金四拾三兩ヅヽ　内二十五兩御宛行、金十八兩役金、

一五人扶持　内二人扶持役扶持　小頭

一金四拾兩ヅヽ　内二十五兩御宛行、金拾五兩御役金、

一三人扶持　金廿五兩ヅヽ　平

右之通、五月(〇元治元年)十三日、酒井左衞門尉屋敷ニおいて家老始、役々列座申渡、

別手組

〔嘉永明治年間錄十一〕文久元年正月十八日、新ニ外國御用出役ヲ置ク、

外國御用出役新規役名を命せらる、但シ外國人警固附添役也、小普請、又ハ御番衆の惣領、厄介等ハ月々十人扶持、並御目見以下、御家人ハ御手當五人扶持宛被下、此節二百十人被召出、此後同三亥年九月十三日、別手組出役ぞ唱へ、替追々人數相增シ、慶應二寅年秋に相成り、凡千五百人に及ぶと云、

〔吹塵錄(德川氏三十一)〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金六百兩宛　小十人頭別手組出役頭取(取締)　澤井楨之助(三〇人以下略)

一金五百兩宛　二丸御留守居格別手組出役取締並　神保常八郎(二〇人以下略)

陸軍所役人沿革

但高千石以上之者へは半減　御切米高三百俵以上之者へは半減

〔武江年表十二〕慶應二年六月七日より、別隊組の輩日夜巡邏始る、市中に四ヶ所の詰場を設らる、

〔武江年表十二〕慶應三年九月、偸盗の賊超過ニ付、十一月より市中所々に假の屯所十餘ヶ所を設けて、別隊組撤兵組、其他の兵隊、夜々こゝに屯して、坊間を巡視して、賊徒の防とせらる、〇下略

〔嘉永明治年間錄四〕安政二年正月、講武所ヲ築地ニ建築ス、

築地小田原町紀州侯下屋敷へ、講武所御取建の御沙汰、翌辰の三月に至り御普請出來、四月より劒槍砲水泳等の習練あり、追て小川町へ轉所す、

〔昭德院實紀五〕万延元年正月十七日、講武所引移令、

大目付御目付江

此度小川町江講武所御引移、來ル二十七日より、槍劒砲三術之外弓術柔術も相始候ニ付、御旗本御家人幷悴厄介等ニ至迄、罷出眞實に修行致し可申候、尤頭支配ニ於ても、出精致し候樣世話可被致候、委細之儀は、講武所奉行江可被承合候、

右之趣、向々江可被相觸候、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十一月、小川町講武所ヲ陸軍所ト爲ス、

美濃守殿渡書付　小川町講武所の儀、今度陸軍所に被仰付候、御旗本御家人の面々同所へ罷出、砲術修行候樣可被致候、尤も御開場日限の儀ハ追て可被達候、

右之趣、向々へ可被達候事、

講武所御用向主役

〔溫恭院實紀九〕安政三年二月十四日

御留守居過人　久貝因幡守〇正典

同　池田甲斐守〇長顯

講武場御用向主役被仰付候

〔泰平年表 四編 四〕安政七年正月十七日、御書院番頭大岡豐後守清謙講武所奉行被仰付之、席之儀は御留守居次、

〔昭德院實紀 十三〕文久元年五月十一日〇中略

講武所奉行　大岡豐後守　酒井壹岐守〇中略

海陸御警衛向、并御軍艦取扱御用被仰付之、

右於羽目之間紀伊守〇内藤信親申渡之、右京亮侍座、

〔昭德院實紀 二十一〕文久二年三月十一日、支配替、小役人令、

御目付江

御鐵砲玉藥奉行　同御簞笥奉行　御弓矢鑓奉行　御具足奉行　御幕奉行

右向後講武所奉行支配ニ被仰付候間、可被得其意候、

〔泰平年表 五編 三〕文久二年閏八月廿八日、講武所奉行大關肥後守へ、御政事御改革之儀、追々被仰出候趣も有之候ニ付而ハ、講武所取扱向諸事簡易を主と致し、同所勤役ハ勿論、支配向之者共勤方其外共、舊弊令改革、總而無益之手數を省き、銘々質素節儉を守、稽古人共、教導方等行屆、一同士風立直し、取締向其外萬端御趣意行屆候、厚く世話可被致、依之右取扱被仰付候、

〔徳川禁令考 十五 講武所奉行〕文久三己亥年八月廿三日

武術引立委任申達書

講武所奉行江

御兵備之儀、方今之急務ニ付而ハ、武術御引立之儀、最肝要ニ付、右引立方、其方共江被成御委任、右ニ付而ハ、諸向等、向後細事ハ伺ニ不及、申談取計、其段書面を以、可被申聞、尤事柄ニ寄候而ハ、大目付等江申談、御入用筋ニ關係致候儀ハ、御勘定奉行、同吟味役等江申談取計、御趣意行屆候樣可被

講武所奉行並
講武所頭取

致候事、

〔昭德院實紀 七〕万延元年六月十二日、講武所奉行場所高席令、

講武所奉行

右場所高五千石、席之儀は、御留守居之次と可被心得候、

〔懷中便要〕布衣以上大概順

二千石高　講武所奉行並

〔安政四年武鑑〕講武所頭取

百五拾俵 先手ヨリ兼 男谷精一郎　千三百石 御使番ヨリ兼 鵜殿十郎左衛門 〇以下四人略

〔昭德院實紀 二十〕文久元年十二月十日

中奥御小姓講武所調物頭取 土岐大隅守
寄合同 織田衛守

講武所調物頭取、向後御役名ニ被成下、中奥御小姓次席、

御使番同 松平源大夫　松平仲

同斷、御使番次席、

御徒頭過人同 一色仁左衛門　澤勘七郎

同斷、御徒頭次席、御足高足迄之通、

二丸御留守居同 川村順一郎

同斷頭取並、御足高並之通被下之、席之儀ハ、二丸御留守居次席、

右被仰付旨、於芙蓉間老中列座紀伊守申渡之、若年寄中侍座、

〔懷中便要〕布衣以上大概順

七百俵高　若年寄支配　文久元酉十二月十日新キ　講武所頭取

〔懐中便覧〕布衣以下大概順

四百俵高　文久元酉十二月十日御達　講武所頭取並

講武所取締役

〔昭徳院實紀二十二〕文久二年五月七日、講武所取締役創置　講武所取締役席令

御書院番徳永伊豫守組講武所調方出役　久保鋼太郎

同久永石見守組講武所鎗術世話心得　倉田半五郎　〇以下三人略

講武所奉行支配取締役被仰付之

御目付江

講武所奉行支配取締役

席順之儀、兩番之上持高場所にて、五百石以下江は、爲御手當御扶持方十人扶持被下之、

右之通被仰聞、可被得其意候、

講武所調方出役

〔安政六年武鑑〕講武所調方出役

百俵拾人扶持、神谷保三郎、　千二百石、御軍制御用掛　鈴木源五右衛門、〇以下四十一人略

講武所組頭

〔元治元年武鑑〕講武所奉行支配組頭。二百俵高、御役料三百俵、三百石以下御手當廿人扶持、　五百俵、田中左膳、　三百俵、長谷川義助、

講武所勤番組頭

〔温恭院實紀九〕安政三年二月十七日、御役替、

講武所勤番組頭。　御廣敷添番　石川富太郎　御徒目付　大石資三郎

〔安政五年武鑑〕講武所番組頭百俵高五人扶持、外御手當七人扶持、

〔昭徳院實紀三〕安政六年七月十三日、創置講武所勤番組頭、

講武所勤番

講武所下番

陸軍附調役

陸軍附調役並

陸軍附調役並勤方

陸軍所教授方頭取

講武所勤番組頭〇中略

右席順之儀、組頭者學問所勤番組頭之次〇中略可被相心得候、且又、組頭場所高百五十俵、御手當七人扶持ツヽ〇中略被下候間、可被得其意候、

〔安政五年武鑑〕講武所番衆　三十俵高二人扶持御譜内　箕輪與左衛門　加藤正五郎〇以下八人略

〔昭德院實紀三〕安政六年七月十三日、創置講武所勤番組頭、

講武所勤番

右席順之儀〇中略學問所勤番之次と可被相心得候、且又〇中略場所高五十俵三人扶持、勤金一ケ年金三兩ツヽ、被下候間、可被得其意候、

〔懷中便覽〕御目見以下大概順

二十俵二人扶持　御役金貳兩　羽織袴役　御抱入場　講武所下番

〔懷中便覽〕御目見以下大概順

八十俵持扶持　御役金十五兩　陸軍附調役

〔懷中便覽〕御目見以下大概順

七拾俵持扶持　御役金十兩　陸軍附調役並

〔懷中便覽〕御目見以下大概順

五拾俵三人扶持　陸軍附調役並勤方

〔慶應三年武鑑〕陸軍所教授方頭取

九百石、下曾根甲斐守、　二千石、松平備後守、〇以下五人略

〔吹塵錄三十一徳川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金七百兩宛　西丸御留守格陸軍所修所人教授役頭取　下曾根甲斐守
　　　　　　　西丸御留守格陸軍所修行人教授役頭取　山口近江守
一金三百五十兩宛　新番頭格陸軍所修行人教授役頭取　松平石見守

槍術師範役

〔安政五年武鑑〕講武所師範役　槍術
二百五十俵　平岩次郎大夫
○按ズルニ、慶應武鑑ニハ講武所槍術師範役トアリ、又文久頃マデハ一人ナリシガ、元治ノ頃ヨリ數人トナレリ、劍術師範役モ亦同ジ、

槍術教授方

〔温恭院實紀九〕安政三年三月二十二日、講武所御創建ニ付、教授方之命、
　講武場御創建ニ付教授方
槍術　神保平九郎　飯室孫兵衞　以下八人略
○按ズルニ、慶應武鑑ニハ教授方出役ト見エタリ、劍術、砲術モ亦同ジ、

劍術師範役

〔温恭院實紀九〕安政三年五月六日、講武所劍術師範役之命、
　御先手　男谷精一郎
講武所劍術師範役被仰付、當番其外御先手勤向、都而御免被成下候、御先手過人と可相心得候、
〔昭德院實紀二十六〕文久三年正月十四日、講武所劍術教授方叙爵、
　浪士取扱講武所劍術教授方　松平主税助
○按ズルニ、此職慶應二年廢セラレタリ、事ハ遊擊隊ノ條ニ詳ナリ、
講武所師範役並被仰付之、取來三百俵、御扶持方ニ引直、八十人扶持被下之、別段之譯を以、諸大夫被仰付、

劍術教授方

〔温恭院實紀九〕安政三年三月二十九日、講武所御創建ニ付、教授方之命、

講武所御創建ニ付教授方

劍術　戸田八郎左衛門　本目鑓次郎〇以下九人略

砲術師範役

〔安政五年武鑑〕講武所師範役　砲術

九百石、井上左大夫、九百石、下曾根金三郎、八百石、田村四郎兵衛、二百俵、勝麟太郎、百五十俵、江川太郎左衛門、

砲術教授方

〔温恭院實紀九〕安政三年三月二十九日、講武所御創建ニ付、教授方之令、

講武場御創建ニ付教授方

砲術　植村帶刀　松平仲〇以下十二人略

弓術師範役

〔文久元年武鑑〕講武所師範役　弓術

七百石　小笠原鍾次郎

〔泰平年表五編四〕文久二年十月二十五日、二丸御留守居格講武所弓術師範役小笠原鍾次郎、時服三被下之、右此度、講武所弓術稽古御差止被成候ニ付、御役御免勤仕並寄合被仰付之、是迄出精相勤候ニ付、拜領之、

弓術教授方出役

〔文久元年武鑑〕講武所教授方出役　弓術

三百俵、津田雄五郎、四百石、川窪七郎右衛門、〇以下二人略

騎銃隊師範役

〔安政六年武鑑〕講武所師範役　騎銃隊

七百石　小笠原鍾次郎

騎銃隊教授方出役

〔安政六年武鑑〕講武所教授方出役　騎銃隊

二百五十俵　大橋勝治郎　三百俵　大久保原太郎〇以下六人略

大皷打方世話出役

〔安政六年武鑑〕大皷打方世話出役

關口鐵之助　金澤喬之助　白石金太郎

水泳體手世話役

〔安政五年武鑑〕水泳體手世話役
四百石、土井八太郎、　同出役三百表、依田新五郎、〇以下三十三人略

海軍奉行

〔懷中便覽〕布衣以上大概順
五千石高　慶應元丑七月八日、新規被仰付、　海軍奉行
〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序
海軍奉行　駿河御城代ノ上　高五千石　御役金三百兩
右者、海軍一隊卽一フロート十二艘之將官ニ有之候、
〔海軍歷史十五〕海軍奉行以下役々資級順序其外大概、
若年寄
一高　海軍奉行
外國航海御手當、一日金拾兩宛、御國地航海御手當、一日金五兩宛、相摸國城ケ島より內海ハ、航海御手當、一日金貳兩貳分ツヽ、諸掛り之義者、御手當筋無之候事、
一海軍奉行同並軍艦奉行ハ每週日曜日、海軍惣裁宅ニ而、會議之事、
但正月稽古始之日より、初而之日曜日を、會議始と相定候事、
一日曜日之外、一ヶ月一度初旬之內、品川沖御船々見廻之事、
一日曜日之外、一ヶ月一度、中下旬之中海軍學校見廻之事、
一壹ヶ年貳度、春秋諸學科吟味之節出席之事、

海軍奉行並

〔海軍歷史十五〕海軍奉行以下、役々資級順序其外大概、
老中支配諸大夫場
一高五千石　海軍奉行並
外國航海御手當、一日金八兩宛、御國地航海御手當、一日金四兩宛、相摸國城ケ島より內海ハ航海御手當、一日金貳兩宛、諸掛り之義者、御手當筋無之候事、

〔吹塵錄 三十一 徳川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

海軍奉行並

一金貳千五百兩宛

但高五千石以上之者江ハ半減　御切米高三千俵以上之者江ハ不被下　同千五百俵以上之者江ハ半減

〔昭德院實紀 一〕安政六年二月二十四日、始置軍艦奉行、

一　外國奉行　永井玄蕃頭

右於御前被仰付之、席之儀ハ外國奉行次、場所高貳千石高、諸大夫場、御足高其儘被下之、

〔昭德院實紀 十三〕文久元年五月十一日○中略

御軍艦奉行　井上信濃守

木村攝津守○中略

海陸御警衞向、御軍艦取扱御用被仰付之、

右於羽目之間、紀伊守申渡之、右京亮侍座、

〔海軍歷史 十三〕海陸二軍將士階級序

御軍艦奉行　御勘定奉行ノ上　御老中支配　高三千石　御役金貳百五十兩

右者、海軍分隊を指揮いたし候、

〔海軍歷史 十五〕海軍奉行以下、役々資級順序、其外大概○中略

一高三千石　軍艦奉行

外國航海御手當、一日金七兩宛、御國地航海御手當、一日金三兩貳分宛、相模國城ヶ島より内海ハ航海御手當、一日金壹兩三分宛、諸掛り之義者御手當筋無之候事、

一海軍奉行同並軍艦奉行ハ、每週日曜日海軍惣裁宅ニ而會議之事、○下略

軍艦奉行並

○按ズルニ、此他軍艦、及ビ海軍學校ノ巡見、諸學科ノ吟味等、凡テ海軍奉行ト同ジケレバ之ヲ省ク、

〔懷中便要〕布衣以上大概順

二千石高　芙蓉間　老中支配　安政七申正月十五日、新キ被仰付、　文久元酉七月八日、万石以上出來ル、　御軍艦奉行

〔元治元年武鑑〕御軍艦奉行

御番所、靈岸嶋御役屋敷同所、(水主八十四人)

御番所、永代橋御役屋敷新堀川口、(水主四十九人)

御役屋敷、永代橋向かき店、(水主四十九人)

御番所、濱大手內御役屋敷同所、(水主四十五人)

御役屋敷、深川萬年橋、(水主四十五人)

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金貳千兩宛　軍艦奉行

但高四千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千五百俵以上之者ヘハ不被下　同千俵以上之者江ハ半減

〔昭德院實紀三〕安政六年九月十日

御軍艦奉行並　御目附　木村圖書

右於御前被仰付之、

〔懷中便要〕布衣以上大概順

千石高　芙蓉間　老中支配　安政六未九月十日新キ　　御軍艦奉行並

〔吹塵錄三十一 徳川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金千五百兩宛　　軍艦奉行並

但高三千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千俵以上之者江ハ不被下　同七百俵以上之者江ハ半減

〔慶應三年武鑑〕御軍艦頭　老中支配

矢田堀讃岐守

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

御軍艦頭　西丸御留守居ノ上　御老中支配　高二千石　御役金貳百兩

右者、リニー船、フレガット船、コルヘット船、並一等蒸氣船等、一船之指揮いたし候、

〔海軍歷史十五〕海軍奉行以下、役々資級順序、其外大概、

一高貳千石　　老中支配諸大夫場　軍艦頭

外國航海御手當、一日金六兩宛、御國地航海御手當、一日金三兩宛、相摸國城ヶ島より内海者、航海御手當、一日金一兩貳分宛、品川沖御船當番之節、御手當、一日金三分宛、諸掛り之義者、御手當筋無之候事、

一軍艦頭、同並ハ、新參之者江、御船々之內、爲受持、中古之者江、敎授掛爲受持、古參之者江御場所御入用掛、或ハ諸掛リ爲受持候事、

但會議之上、新古ニ不拘義も可有之候事、

一乘組船將被仰付候はゞ、其日より三十日之間に、船中當番割、並諸ロル無相違取調置、會議之節、差出し、衆評之上、相定め可申事、

一御船出港幷入港之節ハ、船將自分號令可致事、

一軍艦頭同並ハ、毎週日曜日惣裁宅ニ而會議之節、不殘出席可致事、

一御船請持之軍艦頭同並ハ、毎週土曜日品川沖御船々乘組交代之節、船中一等士官と代り合、當番可致事、

但會議之節、可議事件有之時ハ、一等士官と交代之上、出席可致、或ハ名代として、一等士官差出し可申事、

一敎授掛り、軍艦頭同並ハ、稽古休日之外、海軍學校日勤之事、

一御船々請持幷敎授掛り之外、御場所御入用掛、其外諸掛り、請持之者ハ、御殿或ハ海軍所江日勤之事、

一御船請持軍艦頭同並ハ、上陸中ハ、御用之外出勤ニ不及候事、

一御船々請持之外、軍艦頭同並之内ニ而、一人海軍所詰、住居可被仰付候事、

一春秋吟味之節、敎授掛軍艦頭同並ハ、勿論、御船船請持幷御場所御入用掛、其外諸掛、軍艦頭同並とも可成丈ケ出席之事、

〔吹塵錄三十一 德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金千五百兩宛　　軍艦頭

但高三千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千俵以上之者江ハ不被下　同七百俵以上之者江ハ半減

軍艦頭並

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

御軍艦頭並　御留守居番之上　御老中支配　高千石　御役金百五十兩

右者、コルヘット船、一等ブリッキ船、一等二等蒸氣船等之一船指揮いたし候、

〔海軍歷史十五〕海軍奉行以下、役々資級順序、其外大概

一高千石　　軍艦頭並　老中支配布衣

外國航海御手當、一日金五兩宛、御國地航海御手當、一日金貳兩貳分宛、相模國城ヶ島より內海者、航海御手當、一日金壹兩壹分宛、品川沖御船當番之節御手當、一日、金貳分貳朱宛、御入用掛り並教授掛りハ、一ヶ年金百五十兩之積り、勤日數日割、外諸掛り之儀者、御手當筋無之候事、

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金八百兩宛　　軍艦頭並

但高千六百石以上之者江ハ半減　御切米高千俵以上之者江ハ不被下　同五百俵以上之者江ハ半減

〔海軍歷史十三〕海陸二軍將士階級序

御軍艦役　新御番組頭之上　御軍艦奉行支配　高四百俵　御役金百兩

右ハ、スクーチル船、ブリッキ船、三四等蒸氣船運送船等之一船之指揮を致、又リニー船、フレガット船等之一等士官ニ御座候、

御。軍。艦。役。並。　兩御番之上　御軍艦奉行支配　高三百俵　御役金七拾兩

右、各種船之二等士官にして、又小船之將をも相勤候、

御。軍。艦。役。並。見。習。　新御番之上　御軍艦奉行支配　高貳百五十俵　御役金五十兩

右士官見習ニ御座候

〔海軍歷史二十四〕海軍役々俸金調書

一御足高千百廿五俵　役扶持四十五人扶持　　軍艦役三人

一御足高貳百六十俵　役扶持十三人扶持　同並　一人

一御足高五百一俵一斗五升　役扶持百三十五人扶持　軍。艦。役。勤。方。九人

一御足高六百十三俵一斗五升　役扶持百四十八人扶持　同。並。勤。方。一。等。十四人

一御手當扶持七十人扶持　役扶持七十人扶持　同。並。勤。方。一。等。勤。方。七人

一出役扶持九十人扶持　御手當金九十兩　同。並。勤。方。出。役。一。等。九人

一御足高貳百十六俵　御足扶持八人扶持　役扶持百三十三人扶持　軍。艦。役。並。勤。方。二。等。十九人

一御手當扶持六十人扶持　役扶持四十二人扶扶　同。並。勤。方。二。等。勤。方。六人

一出役扶持九十一人扶持　御手當金百三十兩　同。並。勤。方。出。役。二。等。十三人

一御足高百七十七俵三斗　役扶持六十人扶持　同。並。勤。方。三。等。十二人

一御手當二十人扶持　役扶持十人扶持　同。並。勤。方。三。等。勤。方。二人

一出役扶持百貳十五人扶持　御手當金百九十兩　同。並。勤。方。三。等。二十五人

一出役扶持十四人扶持　御褒美銀百十三枚　御手當金七十五兩　同。並。勤。方。當。分。出。役。二十九人

〔海軍歷史　十五〕海軍奉行以下、役々資級順序、其外大概、

一高四百俵　軍艦頭支配　軍艦役

外御役扶持十五人扶持、外國航海、御手當、一日金貳兩宛、但船將代リ之節者、一日金三兩宛、船將次官之節者、一日金貳兩貳分宛、御國地航海御手當、一日金壹兩宛、但船將代リ之節者、一日金壹兩貳分宛、船將次官之節者、一日金壹兩壹分宛、相模國城ケ島より內海者、航海御手當、一日金貳分宛、但船將代リ之節者、一日金三分宛、船將次官之節者、一日金貳分貳朱宛、品川沖御船々碇泊中、御手當、一日金壹分宛、但船將代リ之節者、一日金壹分貳朱宛、船將次官之節者、一日金壹分壹朱宛、救援、并御入用掛リ之者ハ、一ケ月御手當金三兩三分、勤日數日割、御場所諸掛リ之者ハ、一ケ月御手當金壹兩貳分、勤日數日割、

一高三百俵　前同斷　軍艦役並

外御役扶持十三人扶持、前同斷、一日金壹兩貳分宛、但前同斷、一日金貳兩宛、前同斷、一日金壹兩三分宛、前同斷、一日金三分宛、但前同斷、一日金壹兩宛、前同斷、一日金三分貳朱宛、前同斷、一日金壹分貳朱宛、但前同斷、一日金貳分宛、前同斷、一日金壹分三朱宛、前同斷、一日銀十三匁宛、但前同斷、一日金壹分壹朱宛、前同斷、一日金壹分宛、前同斷、一ヶ月御手當、金三兩壹分、勤日數日割、前同斷、一ヶ月御手當、金壹兩、勤日數日割、

一高席不同　同　軍艦役並勤方一等

外御役扶持十人扶持、前同斷、一日金壹兩壹分宛、但船將次官之節者、一日金壹兩壹分貳朱宛、前同斷、一日金貳分宛、前同斷、金貳分貳朱宛、前同斷、一日金壹分壹朱宛、前同斷、壹分壹朱ト、銀壹匁五分宛、前同斷、一日銀拾一匁宛、前同斷、銀拾三匁宛、前同斷、一ヶ月御手當金貳兩三分、勤日數日割、前同斷、一ヶ月金三分、勤日數日割、

一一ヶ年御手當金拾兩　同　同出役

出役扶持拾人扶持、外國行御手當、其外惣而前同斷、

一高席不同　同　軍艦役並勤方二等

外御役扶持七人扶持、前同斷、一日金壹兩宛、但前同斷、一日金壹兩貳朱宛、前同斷、一日金壹分貳朱宛、但前同斷、一日金壹分三朱宛、前同斷、一日金壹分宛、但前同斷、一日金壹分ト銀壹匁五分宛、前同斷、一日銀九匁宛、但前同斷、一日銀拾壹匁宛、前同斷、一ヶ月金貳兩壹分、勤日數日割、前同斷、一ヶ月金貳分貳朱、勤日數日割、

一一ヶ年御手當金拾兩　同　同出役

外出役扶持七人扶持、外國行御手當金、其外惣而前同斷、

一高席不同　同　軍艦役並勤方三等

外御役扶持五人扶持、前同斷、一日金三分宛、但前同斷、一日金三分貳朱宛、前同斷、一日金壹分宛、但前同斷、一日金壹分壹朱宛、前同斷、一日金三朱宛、但前同斷、一日銀拾貳匁七分五厘宛、前同斷、一日銀七匁五分宛、但前同斷、一日銀九匁宛、前同斷、一ヶ月金壹兩三分、勤日數日割、前同斷、一ヶ月金貳分、勤日數日割、

一一ヶ年御手當金拾兩　同　同出役

外出役扶持五人扶持、外國行御手當、其外惣而前同斷、

一御場所、並船中規則之儀ハ、堅相守可ㇾ申事、

一戰死、並難船死之者ハ、身分相應之御取扱有之候事、

一軍艦役同並之者、船將代りに而、乘組候節、乘組士官之內、心得違之者有之候ハヽ、惣而軍艦頭之心得を以、所置いたし置、歸府之上、其段急度可申立、尤身分ニ拘り候程之義有之候ハヽ、歸府迄爲愼置、歸府後、委敷軍艦頭江可申立候事、○但書略

一御船々乘組之儀ハ、申上之上、申渡候間、會議之上ニ無之候而者、猥ニ乘組替幷御免共不相成候事、

一軍艦役、同並ハ、毎週日曜日、惣裁宅ニ而會議之節、不殘出席可致事、

一御船々、品川沖碇泊、當番ハ、乘組人員半側ツヽ、毎週土曜日交代可致事、

但諸忌之外、無據差支有之節ハ、先側之者之內、可成丈ケ、同等級之者相對ニ而、居殘賴合、其後返番可致事、

一軍艦役、同並ニ而、御船々、船將代リ重立之者、上陸中ハ、御用之外、日勤ニ不及事、

一同斷之者ハ、毎週土曜日、御船々乘船交代之節、船中一等士官と代り合當番可致事、

一軍艦役、同並、乘組船將被仰付候ハヽ、其日より三十日之間ニ、船中當番割諸ロル、無相違取調置、會議之節差出し、衆評之上相定メ可申事、

一御船出港入港之節ハ、船將自分號令可致事、

一軍艦役以下、同並、勤方三等迄、教授掛之者ハ、稽古休日之外、海軍學校江日勤之事、

但稽古始リ候刻限前、必出勤可致事、

一御船々乘組士官之內非番之者ハ、御用取扱として、日々一人ツヽ、海軍所江出勤可致、尤御用無之間ハ、其段當番江申屆置、學校江罷出衆學可致、其他之非番之者も、日々學校江罷出衆學可致事、

但、宅調之方、孟有之節者、學校江不罷出とも、不苦候得共、宅調之廉々、合帳ニ認置、出局之節々、敎師江差出し可申、尤假令學術稽古之爲、宅調いたし候共、海軍學校江出學候丈ケ之刻限者、海軍術を取調可申事、

一御船々乘組、幷敎授掛り、御入用掛り之外ハ、申合、兩人ツヽ、當番幷泊番いたし、其他非番之者ハ、日々學校江罷出、兼學可致事、

但前同斷

一航海幷品川沖碇泊とも、船中御賄之義者、朝汁香物、晝夕香之物被下、其餘菜代として、一日銀七匁五分ツヽ、尤外國行之節ハ、右菜代三倍被下候事、

但菜代之儀ハ、海軍奉行より、軍艦役並勤方三等迄、同樣之事、

一食器者、惣而自分入用たるべき事、

一御場所へ出勤之者江ハ、辨當料として、一度銀貳匁五分ツヽ被下候事、

但泊番之者江ハ、夕翌朝二度分被下候間、何れも當番之者、月々取調可申事

一御船々詰持之外、軍艦役同並之内に而、一人海軍所詰、住居可致事、

一總裁及海軍奉行被仰付候節而已、爲怡罷越候義者、軍艦役一人、同並人、惣代として罷越可申事、

但、海軍奉行並以下役々被仰付候共、爲怡罷越ニ不及候事、

〔海軍歷史十五〕慶應三年丁卯六月、海軍總裁稻葉兵部大輔〇正巳、同副總裁大關肥後守〇增裕、大ニ海軍ノ事ヲ擴張セント謀リ、毎月諸艦士ヲ會シ、其意見ヲ問ヒ、衆議ニ附シテ、諸件ヲ決定ス、今該時定ムル所ノ規則、數條ヲ抄載シテ下ニ掲グ、〇中略

海軍學校敎授書目錄

初級、船具運用書、　二級、砲術書、　三級、測量書、　四級、船具運用書後編　砲術書後編　測量書後編　五級、

海上兵法、海軍規則書、海軍歷史、
一初級之吟味相濟候者ハ、軍艦役並勤方三等、被仰付候事、
一前同斷之者二級之吟味相濟候得バ、前同斷二等被仰付候事、
一前同斷之者三級之吟味相濟候得バ、前同斷一等被仰付候事、
一前同斷之者四級之吟味相濟候得バ、軍艦役並被仰付候事、
一前同斷之者五級之諸部吟味相濟候得バ、軍艦役被仰付候事、○中略

機械學校敎授書目錄

初級、機械書初編、　二級、同二編、　三級、同三編、　四級、同四編、　五級、同五編、
一初級之吟味相濟候者ハ、軍艦役並勤方三等被仰付候事、
一前同斷之者二級之吟味相濟候得バ、二等被仰付候事、
一前同斷之者三級之吟味相濟候得バ、一等被仰付候事、
一前同斷之者四級之吟味相濟候得バ、軍艦役並被仰付候事、
一前同斷之者五級之吟味相濟候得バ、軍艦役被仰付候上、海軍機械製造所掛、又ハ學校敎授、掛被仰付候事、○中略

造船學敎授書目錄

初級、造船書初編、　二級、同二編、　三級、同三編、　四級、同四編、　五級、同五編、
一初級之吟味相濟候者ハ、軍艦役並勤方三等被仰付候事、
一前同斷之者二級之吟味相濟候得バ、二等被仰付候事、
一前同斷之者三級之吟味相濟候得バ、一等被仰付候事、
一前同斷之者四級之吟味相濟候得バ、軍艦役並被仰付候事、

一前同斷之者五級之吟味相濟候得バ、軍艦役被仰付候上、軍艦製造掛り、又ハ學校教授掛り被仰付候事、〇下略

軍艦添役取締

〔海軍歷史 十三〕海陸二軍將士階級序

御軍艦添役取締　御天守番之上　御軍艦頭支配　高百俵持扶持　役金二十五兩

〔海軍歷史 十三〕海陸二軍將士階級序

御軍艦添役　表火之番之上　御軍艦頭支配　高八十俵持扶持　役金二十兩

御軍艦添役並　學問所勤番之上　御軍艦頭支配　高七十俵持扶持　役金十五兩

〔海軍歷史 十三〕海陸二軍將士階級序　下等士官

御軍艦蒸氣方　御鳥見之上　御軍艦頭支配　高百五十俵　御役金八十兩

御軍艦蒸氣方並　御徒目付之上　御軍艦頭支配　高百俵持扶持　役金七十兩

御軍艦蒸氣方並見習　表火之番之上　御軍艦頭支配　高八十俵持扶持　役金五十兩

海軍所役人沿革

〔嘉永明治年間錄 六上〕安政四年四月十一日、御軍艦敎授所ヲ築地講武所中ニ置ク、

海軍御取建に付、今般築地講武所御構内に於て、御軍艦敎授所御開き、阿蘭陀より獻上の蒸氣船にて、操練相始候間、御旗本御家人、幷伜厄介等迄、有志の輩罷出、眞實に修行可致候、委細の儀ハ、御目付永井玄蕃頭へ可被承合候、且又万石以上以下、陪臣の儀も、其主人々々各別見込の者ハ、稽古御差許相成候間、是又玄蕃頭へ申立候樣可致候、

〔昭德院實紀 三十〕元治元年二月廿五日　覺

今般御軍艦操練所燒失ニ付、當分之內、同所南隣增地元松平安藝守屋敷內、仮稽古所ニ相成候間、算術學測量學、造船學ハ、一六三八、船具運用學、蒸氣機械學ハ、二七五十、海上砲術學ハ、四九、大小砲打調練一六、右日割之通、相心得稽古罷出候者ハ、當月廿七日より同所江罷出候樣可致候、

海軍所頭取

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年七月、御軍艦操練所ヲ改テ海軍所ト唱フ、

〔懷中便覽〕布衣以下大概順　　兩番格　御軍艦頭取

二百俵高　御役扶持十五人扶持

〔慎度沿革略史 七〕安政五年三月、目付鵜殿民部少輔ヲシテ、軍艦操練、及ビ大小船製造ノ事ヲ掌ラシメ、外警ニ備フ、頭取一人、教授方出役二十四人、取調方十七人コレニ隷ス、

〔昭德院實紀 二十三〕文久二年七月四日、支配入井御役名之令、

御船手　向井將監

小十人頭格御軍艦操練所頭取被仰付之、

二丸御留守居御軍艦操練所頭取被仰付

御天守番頭格講武所砲術師範役　勝麟太郎

百俵高ニ御加增、勤候內、五百俵高ニ御足高被下之、〇中略

二丸御留守居御軍艦操練所頭取　勝麟太郎

御目付江

右御軍艦奉行支配たるべく候

一御軍艦操練所頭取之儀、御役名と可被心得候、

一向井將監儀ハ、若年寄支配に候事、

右之通、御軍艦奉行江相達候間、可被得其意事、

海軍所支配組頭

〔慶應三年武鑑〕海軍所頭取　肥田濱五郎 〇以下三人略

〔昭德院實紀 二十四〕文久二年十月二十六日、御軍艦奉行支配向、場所高班席之令、

御目付江　　御軍艦奉行支配組頭

場所高貳百俵、御役料三百俵、席之儀ハ、講武所奉行支配組頭之次たるべく候、

右之通ニ候間、可被得其意候事、

御目付江

〔慶應三年武鑑〕海軍所支配組頭

四百俵、庄田主水、　三十俵、石川壯次郎、

〔昭德院實紀二十四〕文久二年十月二十六日、御軍艦奉行支配向、場所高班席之令、

御軍艦奉行支配組頭勤方

場所高百五拾俵、御役料百五拾俵、席之儀ハ、組頭之次たるべく候、

右之通ニ候間、可被得其意候事、

海軍所支配世話取扱

〔慶應三年武鑑〕海軍所支配世話取扱　三百俵以下、御手當持扶持十人扶持、

岩田吉左衛門〇以下三人略

海軍所支配世話役

〔慶應三年武鑑〕海軍所世話役　五十俵高　御役扶持三人扶持

御崎愛作　中村內藏助

海軍所取調役組頭

〔昭德院實紀一〕安政六年三月廿日、始置軍艦奉行屬吏、

御軍艦操練所勤番組頭　支配勘定　柴田隼太郎〇中略

右被仰付、

一 御軍艦操練所勤番組頭〇中略

右席順之儀、組頭ハ蕃書調所勤番組頭之上〇中略と可被相心得候、且又、組頭場所高百五十俵、御手當七人扶持、〇中略勤金、一ヶ年金三兩宛被下候間、可被得其意候、

〇按ズルニ、元治元年武鑑ニ、當職ノ事ヲ御軍艦操練所取調役組頭トシタリ、則チ後ノ海軍所

取調組頭ノ事ナリ、

〔海軍歷史 二十四〕海軍役々俸金調書

一御足高二百四十九俵一斗七升五合　　海軍所調役組頭貳人

御手當扶持十四人扶持

〔慶應三年武鑑〕海軍所取調役組頭　百五十俵高御手當七人扶持、勤方百俵持扶持、御手當七人扶持、

海軍所取調役

〔昭德院實紀 一〕安政六年三月廿日、始置軍艦奉行屬吏、

一 御軍艦操練所勤番　小普請組小笠原順三郎組　大谷啓之助

野口米次郎

右被仰付之、○中略

一　御軍艦操練所勤番

右席順之儀、○中略勤番ハ、蕃書調所勤番之上と可被相心得候、且又、○中略勤番は場所高五十俵三人扶持、勤金一ヶ年金三両ツヽ被下候間、可被得其意候、

〔海軍歷史 二十四〕海軍役々俸金調書

一御足高百十七俵　御役金四十五両　海軍附調役三人

一御足高百四十五俵　御役金三十両　同並三人

一御足高百十五俵　御足扶持五人扶持　同並勤方三人

〔慶應三年武鑑〕海軍所取調役　五十俵三人扶持、勤金三両、支配勘定格改方、御手當三人扶持、出役ハ持高、勤金右同斷、

軍艦所取調組頭

〔懷中便要〕布衣以下大概順

百五十俵高　御役扶持七人扶持　御軍艦所取調組頭

〔懷中便覽〕御目見以下大概順

百俵持扶持　御役扶持七人扶持　御譜代之者　上下役　御軍艦組頭勤方

〔海軍歷史二十四〕海軍役々俸金調書

一御足高百十俵　御手當七人扶持　軍艦取調役組頭一人

一御足高百五十五俵　御手當十四人扶持　同。勤。方。二人

軍艦取調役

〔懷中便覽〕御目見以下大概順

五十俵高、御役金三兩、御役扶持二人フチ　譜代之者　上下役　御軍艦取調役

〔安政六年武鑑〕御軍艦取調方出役

小林甚六郎　中泉宇八郎　十〇人以下略

〔海軍歷史二十四〕海軍役々俸金調書

一御足高三百十七俵　御足扶持十五人半扶持　勤金四十二兩　軍艦取調役十四人

一御手當十八人扶持　勤金三兩　同。勤。方。一人

一御足高四十俵　御足扶持一人半扶持　勤金三兩　同。過。人。

一出役扶持五人扶持　勤金四十五兩　同。出。役。十五人

一御足高百五十俵六石五斗　御足扶持二十人半扶持　勤金六十四兩　同。下。役。二十人

一御足高二十九俵　御足扶持一人扶持　勤金四十兩　同。並。二十人

軍艦取調下役

〔昭德院實紀三〕安政六年九月十日、始置御軍艦操練所下役、　御軍艦操練所下役

右場所高貳拾俵貳人扶持、座順學問所下番之次、御抱場と可ㇾ被ㇾ心得ㇾ候、

〔懐中便覽〕御目見以下大概順

二十俵二人扶持　御役金二兩　御抱入場　羽織袴　御軍艦取調下役

軍艦教授方出役

〔安政六年武鑑〕御軍艦教授方出役

佐々倉桐太郎　鈴藤勇次郎〈十〇一以下二人略〉

飜譯方　繪圖認方　大鼓方　機械製作方

〔海軍歷史二十四〕海軍役々俸金調書

一出役扶持十人扶持　御手當金十八兩　海軍所飜譯方出役二人

一出役扶持二十一人扶持　御手當金三十一兩二分　同繪圖認方出役七人

一御褒美銀十一枚　御手當金五兩　軍艦砲術太鼓方出役三人

一出役扶持三人扶持　御手當金五兩　機械製作方出役一人

海軍所番

〔海軍歷史二十四〕海軍役々俸金調書

一御手當扶持加扶持共　七人扶持　海軍所番二十七人

掃除者

〔海軍歷史二十四〕海軍役々俸金調書

一加扶持十四人扶持　御手當金十兩二分　御掃除之者十四人

湯呑所同心

〔慶應三年武鑑〕海軍所取調下役　湯呑所同心廿八人內十一人御門番

〔海軍歷史二十四〕海軍役々俸金調書

一出役扶持二十八人扶持　御手當金三十六兩二分　湯呑所御門番共二十八人

外國奉行職掌

〔泰平年表四編一〕安政五年七月八日、新規御役外國奉行出來、

〔德川禁令考十五外國奉行〕按ニ、外國奉行、其職制專ラ海外各國ト應接交待スルヲ掌ル、乃チ殿中ニ於テ一局ヲ設ケ、奉行已下屬官出仕シテ、事務ヲ執ル、勘定奉行等ノ如ク、別ニ官邸官廨アリテ、

支配向ノ所轄、自ラ別アル者ニアラズ、

〔德川禁令考十五外國奉行〕安政六己未年四月八日

外國奉行兼勤ノ儀ニ付達

水野筑後守　村垣淡路守

外國御所置者、多分ハ御入用筋拘リ候事ニ候得者、萬端御勘定奉行不遂對談候而者、御不都合にも候間、今般御勘定奉行當分兼帶被仰付候條、可被得其意候、

〔海警年表〕安政六巳年七月、是月ヨリ初テ外國奉行月番ヲ被立、當月村垣淡路守勤之、以後交勤之、

〔昭德院實紀十五〕文久元年七月十一日

御留守居次席御勘定奉行　松平出雲守

外國奉行　水野筑後守〇忠德

野々山丹後守〇兼寛

御目付　松平備後守

品川御殿山地之内、外國ミイストル被差置候屋敷御取建相成候ニ付、右御普請御用取扱候樣被仰付之、

右於新番所前溜對馬守申渡之、出雲守侍座、

〔昭德院實紀十六〕文久元年八月廿一日

外國奉行神奈川奉行兼帶　松平石見守〇康直

爲御使佛蘭西、英吉利國、其外外國ヘ被差遣候間、可致用意候、

右於芙蓉間老中列座、豐前守〇松平信義申渡之、

〔昭德院實紀十九〕文久元年十一月十一日

待遇 俸祿

外國奉行 大久保越中守

伊豆國附島々、小笠原島御開拓御用、於當地取扱被仰付之、

右於新番所溜、對馬守申渡之、右京亮侍座、

〔泰平年表 五編 二〕文久二年六月四日、三奉行、大目付、外國奉行、御目付へ御達書付、自分共へ被申聞候御用向之儀、向後重き事柄之義は、御用部屋にて可承候間、右之心得を以、其時分申聞候樣可被致候事、

〔德川禁令考 十五 外國奉行〕安政五戊午年七月八日

新規外國奉行ヲ命ズル達書

外國奉行、場所高貳千石、諸大夫可被仰付候、席之儀は、遠國奉行之上と相心得べく候、

七月　外國奉行

〔昭德院實紀 八〕萬延元年九月十五日

大目付 御目付 江

場所高貳千石、一ヶ年御手當金三百兩、

右之通ニ候事

〔慶應三年武鑑〕外國御奉行　芙蓉間　二千石高　老中支配

〔吹塵錄 三十一 德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金貳千兩　外國奉行

但高四千石以上之者江ハ半減　御切米高貳千五百俵以上之者江ハ不被下　同千俵以上之者江ハ半減

〔泰平年表 四編 一〕安政五年七月八日、新規御役外國奉行出來、遠國奉行上席、貳千石高、（田安殿附）水野筑後守（御勘定奉行）永井玄蕃頭（御目付）岩瀨肥後守（下田奉行ニ而兼帶）井上信濃守（箱館奉行ニ而兼帶）堀織部正、（右之面々被仰付之、水野筑後守○勘定奉行永井玄蕃頭ハ、是迄之通御足高共に被下之、）

〔安政六年武鑑〕外國御奉行（當御役安政五ヨリ新規）

五千石、安政六未八月ヨリ、御書院御番頭次席、　溝口讃岐守直清

三千四百石、安政六未九月ヨリ、　渡邊肥後守孝綱

二千石、安政六未、二月ヨリ、御小姓組御番頭席、　酒井隱岐守忠行

二百俵、安政五午十月ヨリ、御勘定奉行箱館奉行兼帶、　村垣淡路守範正

二千石、安政六未七月ヨリ、御小姓組御番頭席、　新見豐前守正興

三千十五石ヨ、安政六未八月ヨリ、御書院御番頭席、　赤松左衞門尉範忠

三百俵、安政五午七月ヨリ、箱館奉行ヨリ兼役、　堀織部正利熙

○按ズルニ、外國奉行ノ人員ハ一定セズ、萬延元年武鑑ニハ八人アリ、文久二年及ビ元治元年武鑑ニハ、各〻九人アリ、慶應二年武鑑ニハ六人アリ、

〔慶應三年武鑑〕外國御奉行

千百石、慶應二寅正月、　石野筑前守　口千五百石、慶應二寅八月、　小出大和守

七百石、慶應二寅八月、　川勝近江守廣道　三百俵、慶應二寅十月、　塚原但馬守

二百俵、文久三亥十一月、　柴田日向守剛中　百俵、慶應二寅九月、　平山圖書頭敬忠

百俵、慶應二寅十二月、　井上備後守義斐　百俵、元治元子九月、　江連加賀守

百俵、慶應二寅十月、　向山隼人正一履　三百石、慶應二寅十月、　栗本安藝守

〔泰平年表 五編 四〕文久二年十二月廿八日、（外國奉行支配組頭）柴田貞太郎、（右外國奉行並被仰付候）

屬僚

〔懷中便要〕布衣以上大概順

千石高、芙蓉間、文久二戌十二月廿八日新規　外國奉行並

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺

一金千兩　外國奉行並

但高貳千石以上之者ヱハ半減　御切米高千俵以上之者ヱハ不被下　同五百俵以上之者ヱハ半減

〔安政六年武鑑〕同〇外國奉行支配組頭

三百俵高　御役料二百俵　柴田貞太郎、奥村季五郎、

〔昭德院實紀十〕文久元年正月廿九日

外國奉行支配組頭　柴田貞太郎　白石忠大夫

近來御用多、格別出精骨折相勤候ニ付、別段之譯を以、布衣被仰付、何れも本高百俵に被成下候、

右於御右筆部屋縁頬、老中列座、對馬守申渡之、

〔海警年表〕安政六巳年六月八日、外國奉行支配書物御用出役塚原重五郎、外國奉行支配調役、右被仰付旨、於御躑躅間、備後守申渡之、

〔安政六年武鑑〕同〇外國奉行支配調役　百五十俵高　御役扶持二十人扶持

〔懷中便要〕御目見以下大概順

百俵持扶持　御役扶持七人扶持　御譜代之者　上下役　外國奉行支配調役並

出役ハ七人フチ、三十表以下ハ別ダン五人扶持、

〔昭德院實紀十九〕文久元年十一月十一日

外國奉行支配調役並出役　田邊太一

金貳拾兩

伊豆國附島々、并小笠原島ヘ、爲御用罷越候ニ付被下之、

右於躑躅間、對馬守申渡之、

〔昭德院實紀　一〕安政六年正月廿三日、藩士被徵、

松平大膳大夫家來御軍艦操練所出役　東條英庵

被召出外國奉行支配被仰付、新規二人扶持被下之、

〔懷中便要〕御目見以下大概順

外國奉行支配通譯方○中略

二十人扶持、御役金十五兩、

外國奉行定役元〆○中略

八十俵五人扶持、御役金二十兩、御抱入場、御役上下、

外國奉行定役

五十俵三人扶持、御役金十五兩、御抱入場、御役上下、

〔昭德院實紀　二十三〕文久二年閏八月朔日、京都守護職位階、

京都守護職、被叙正四位上、　松平肥後守○容保

右於御前被仰付之、

大目付江

松平肥後守、京都守護職被仰付候間、登城之節、御城内人留御門ニ下座致候樣、被達候事、

〔泰平年表　五編　三〕文久二年閏八月八日、松平肥後守(容保)今度京都守護職在京被仰付候ニ付、守護中御役知五萬石被下候、場所之儀ハ、追而可相達事、右同人江、右同断ニ付而ハ、彼是入費も不少義思召を以、金三萬兩拜借被仰付候、

〔元治元年武鑑〕京都御守護職

五萬石、越前福井、ときはばし内、　松平大藏大輔○春嶽

〔德川禁令考京都三十二〕元治元子年二月廿四日

備前守殿御渡　大目付江

去ル十五日、於二條御城、松平肥後守事、軍事總裁職被仰付、京都守護職御免、松平春嶽事、京都守護職被仰付候ニ付、同人儀、翌十六日御懇之以上意、大藏大輔と改名被仰付候間、此段向々江可被達候、

二月

〔德川禁令考京都三十二〕元治元子年四月十四日

備前守殿御渡　大目付江

松平大藏大輔事、願之通御役御免、松平肥後守〇容保事、京都守護職被仰付候、如前々格別精入可相勤、軍事總裁被成御免候段、去ル七日於二條御城被仰出候、此段向々江可被達候、

四月

〔慶應三年武鑑〕京都守護職　溜之間　御役知五萬石

二十八萬石、正四位中將、松平肥後守容保、

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年十二月、京都守護職所司代幷ニ諸役ヲ廢ス、

京都守護職、所司代、幷に諸役人御役御免、御所内關東の者一人も立入申間敷事、

京都見廻役

〔昭德院實紀三十一〕元治元年四月廿六日、創置京都見廻役、

京都見廻役　蒔田相模守
交代寄合　松平出雲守

屬僚

京都見廻役

右被仰付候旨、於芙蓉間替席、○中略

席之儀は、大御番頭之次と可被心得候、

〔懷中便覽〕布衣以上大概順

菊之間　元治元子四月廿六日、新規被仰付、　京都見廻役

〔元治二年武鑑〕京都見廻り役　老中支配　大御番頭次席　五千石高　御役料三千俵

〔吹塵錄 徳川氏三十一〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺○中略

一金貳千五百兩　但高ニ不拘被下　京都見廻役○中略

一金貳千兩　但高ニ不拘被下　京都見廻役並

〔慶應三年武鑑〕京都見廻御役　菊之間

壹萬石、蒔田相模守廣孝　壹萬五千石、堀石見守親義、

〔昭德院實紀 三十一〕元治元年五月十六日、創置京都見廻役與頭、同勤方、

開成所取締役 小林彌兵衞 三○以下人略

京都見廻役組頭

右被仰付旨、於御右筆部屋緣頰替席、老中列座、河内守申渡之、若年寄侍座、

御天守番 大澤源次郎 二○以下人略

同組頭勤方

右被仰付候旨、於同席列座同前、同人申渡之、

覺

場所高三百俵、席御書院番之次、　京都見廻組與頭

同　二百俵、席大御番之次、　同　勤方

山陵奉行

右之通ニ候間、可ㇾ被ㇾ得二其意一候事、

〔昭德院實紀三十一〕元治元年四月廿六日、創二置京都見廻組一、

場所高七十俵　席御普請役元〆之次御譜代場　京都見廻組

右之役、今度新規多人數被二仰付一候に付、相應之者可ㇾ成丈、御譜代之者之內にても相撰、早々書出候樣可ㇾ被ㇾ致候、尤御抱之者にても、格別見込候者は、其趣認加可ㇾ被二差出一候、且又相應之者無ㇾ之向は、其段書付を以可ㇾ被二申聞一候事、

但書付貳名前書高職附は勿論、御譜代御抱之譯、夫々認加可ㇾ被二差出一候、

右之趣、御留守居以下、老中若年寄支配とも、向々江不ㇾ洩樣、早々可ㇾ被二達一候、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年閏八月

書付　戸田越前守家老　間瀬和三郎

今度山陵御締向御普請等の御用被二仰付一候處、是迄御普請、其外御手傳の御用被二仰付一候振合と違ひ、御普請等仕方、見込に御任せ相成り、國々へ家來差遣し、爲二仕立一候事にも候間、重役の內、重立引受取扱候者無ㇾ之候ては、御用辨も立間敷儀に付、右和三郎へ取扱申付、萬端麁略の儀無ㇾ之樣、大切に爲二取計一被ㇾ申候樣被ㇾ存候事、

間瀬和三郎義、諸大夫仰付られ、戸田家一門の事故、戸田大和守と受領有ㇾ之、

戸田越前守へ內願の趣、達二御聽一、御機嫌に被二思召一、今度出張、御締向、御普請御用被二仰付一候、右芙蓉間老中列座、周防守申渡シ、

前書間瀬和三郎、戸田大和守と改め、追て山陵奉行を命せらる、歳俸米二百人扶持、萬石以上格、慶應二丙寅に至り、二百人扶持返上、宇都宮侯高の內七千石、新田三千石、都合壹萬石の分地、諸侯の列に入る、

〔懷中便覽〕元治元子七月十二日、諸侯ノ列ニ御取立、万石以上末席此所、　山陵奉行

〔吹塵錄三十一 徳川氏〕慶應三卯年九月

御役金被下高之覺○中略

若年寄山陵奉行

一金八百兩　戸田大和守

○戸田大和守ノコトハ帝王部山陵下篇修築條ニ詳ナリ、

〔泰平年表四編五〕万延元年四月二十八日、大目付久貝因幡守、平賀駿河守、町奉行池田播磨守、石谷因幡守、御勘定奉行松平式部少輔、松平出雲守、同上格塚越大藏少輔、御目付駒井山城守、松平彈正、御勘定吟味役勝田次郎、設樂八三郎、福田八郎左衛門、右御國益御主法筋、御用取扱可申候、

〔武江年表十一〕文久二年五月、海賊橋牧野屋敷御國益會所に改めらる、七月に至りて御沙汰止たり、

〔昭德院實紀二十三〕文久二年八月四日、御國益御主法被廢止之令、

御目付江

御國益御主法方頭取　同調役　同勘定役元〆　同勘定役　同書物御用出役　同御門番人出役

御國益御主法方被廢止候ニ付、右役々何も被差止候間、可被得其意候、

〔泰平年表五編三〕文久二年八月十一日、本多侯より之屆書、御國益御主法方被廢止候ニ付、北八町堀、右御役所地、家作共、御預ケ被置候旨、被仰渡候段、去月廿七日、有馬帶刀、御普請方御役所に於て、家來之もの江申渡、奉得其意、同廿九日、右御役所地、六千五百九坪餘、家作共、家來之者へ引渡し、有之請取申候、此段御屆申上候、以上、

古事類苑

官位部七十八

徳川氏職員二十七

大名 交替寄合併入

大名ハ、古ハ名田ヲ多ク有セルモノヽ稱ナリシガ、後轉ジテ守護地頭ノ稱トナリ、徳川氏ニ及ビテハ、家祿萬石以上ノモノヲ稱ス、而シテ大名ヲ分チテ、家門、外樣、譜代ノ三種ト爲ス、家門ニハ、三家、三卿、越前家等ノ別アリ、三家ハ家康ノ三子義直、頼宣、頼房ノ後ニシテ、尾張、紀伊、水戸ノ三家ヲ云フ、大政ニ參與シ、大名ノ上首タリ、三卿ハ八代將軍吉宗ノ二子宗武、宗尹、九代將軍家重ノ子重好ノ三家ニシテ、之ヲ田安、一橋、清水ト稱ス、規式總テ三家ニ准ジ、各〻十萬石ノ封ヲ賜ヒ、以テ賄料ト爲ス、家老以下ノ臣僚皆幕府ニ隷屬ス、要スルニ三卿ハ大名ノ列ニアラズト雖モ、今姑ク之ヲ三家ノ下ニ掲ゲタリ、越前家ハ義直ノ兄秀康ノ子孫ニシテ數家アリ、美作津山城主松平三河守、越前國主松平越前守ハ、其宗統タルヲ以テ、格式等他ニ異ナリ、其他會津ノ保科氏ハ、其先正之、保科氏ノ養子ト爲リシカドモ、二代將軍秀忠ノ子ナルヲ以テ、特ニ家門ニ列セリ、譜代ハ累世徳川氏ノ臣僚タルモノヲ云フ、彦根城主井伊氏ハ官祿並ニ高クシテ譜代ノ棟梁ト云ヘリ、外樣ハ又表大名ト云ヒ、上方衆、國衆トモ稱ス、豐臣氏以前ノ大名ナリ、加賀ノ前田氏ハ、特ニ三家ニ准ジ外藩ノ上首タリ、下野ノ喜連川氏ハ、家祿五千石ナレドモ、特ニ十萬石以上ノ格ニ列ス、凡ソ大名ハ領地ノ大小ニヨリテ、家祿ヲ區別シ、國持、國持並、城主、無城ト云フ、國持ハ、又國主、國家トモ云フ、室町ノ時、國持衆、准國持主アリ、

蓋シ其稱ヲ襲ヒシナリ、國持ノ中ニハ三ヶ國ヲ領スルアリ、一國ヲモ領セザルアリ、又一國ヲ領スト雖モ、國持、國持並ノ列ニ加ハラザルアリ、其數時ニヨリテ異同アレド、元文ノ頃、國持二十家、國持並三家アリト云フ、城主ハ城郭ヲ有スルヲ云ヒ、城郭ナキヲ無城ト云フ、又家祿ノ定額ナキモノアリ、之ヲ無高ト云フ、松前ノ松前氏ノ如キ、蝦夷ヲ併有スレドモ猶無高ト稱ス、後ニ三萬石トナル慶應ノ末ニハ國持二十家、城主百二十八家、城主格十六家、無城八十五家ニシテ、三家ヲ合セテ大名ノ數二百五十一アリ、

大名ハ必ズ其邸ヲ江戸ニ置キ、在留一年ニシテ封地ニ歸リ、藩政ヲ執ル事一年ニシテ、復タ江戸ニ往ク、之ヲ參勤交替ト云ヒ、以テ常務ト爲ス、三代將軍家光ノ時、交替ノ期ヲ定メテ、外樣ハ四月、譜代ハ六月ト爲ス、八代將軍吉宗ノ時、大名ニ課シテ米穀ヲ獻ラシメ、爲ニ江戸在留ヲ減ジテ半年ト爲シ、三月九月ノ兩期ニ交替セシメシガ、尋テ舊ニ復ス、後十四代將軍家茂ニ至リ、國家多事ナルヲ以テ、復タ參勤ノ制ヲ弛ベ、三年ノ中百日ノ在府ト爲ス、其江戸ニ在留スルヤ、毎月朔望、二十八日、及ビ大禮ノ日ニハ、必ズ將軍ニ謁ス、之ヲ御禮ト云ヒ、柳營ニ詣ルヲ登城ト云ヒ、平日ハ諸門ノ守衞、防火、辻番ノ事ヲ掌ル、將軍、寬永寺、增上寺ニ參拜スル時ハ、行列ニ加ハリ、街衢ヲ警衞シ、勅使江戸ニ參向スル時ハ、接待饗應ノ事ヲ掌ル、又溜詰ノ輩ハ京都大禮、日光法會等ノ時ハ、將軍ノ名代ヲ勤ム、

凡ソ大名ノ任務最モ重キハ軍役ニシテ、大阪、島原ノ役ノ如ク、征討ニ從事ス、其他京都ノ警備、皇居ノ守衞、沿海防禦ノ事アリ、又大阪、駿府ニ毎年交替シテ勤ムルヲ加番ト云ヒ、幕府ノ命ニヨリテ、他ノ城地ヲ守ルヲ在番ト云フ、又長崎其他ノ要地ヲ交替シテ守ルアリ、幕府ノ領邑ヲ預ルアリ、薩摩ノ島津氏ハ琉球ノ事ヲ掌リ、陸奧ノ南部津輕二氏ハ蝦夷ヲ管シ、對馬ノ宗氏ハ朝鮮ノ通交ヲ掌ル、又皇居造營、江戸城修築、河渠ノ浚渫アル時ハ、工事ヲ助ケ、或ハ

家祿ニ應ジテ課金ヲ獻ズル事アリ、

大名ノ官位ハ、朝臣ト列ヲ同ジウセズ、各、家格ニヨリテ任途定マレリ、卽チ大納言、中納言、參議、中將、少將、侍從、從四位下、從五位下ナリ、參議ハ又宰相ト稱シ、從四位下ハ四品、從五位下ハ朝散大夫、若シクハ諸大夫トモ云ヘリ、尾張紀伊二家ハ、從二位大納言ヲ先途トシ、水戶ハ從三位中納言ヲ先途トス、加賀前田氏ハ、特ニ宰相ニ進ミ、彥根ノ井伊、會津ノ松平、越前家ノ越前守、三河守、家門ノ讃岐守、及ビ島津、伊達ハ、中將ニ進ミ、國主ハ少將ニ至ルヲ得、准國主及ビ越前家、家門、老中、所司代、其他國主ノ嫡子等ハ侍從ニ任ジ、外樣譜代モ家格ニヨリテ之ニ任ズルモノアリ、四品ハ大阪城代之ニ敍シ、外樣、譜代モ家格ヲ以テ敍スルアリ、譜代ノ老年ニ及ビテ敍スルアリ、其他ノ大名ハ、悉ク從五位下ニ敍ス、松平和泉守、松平遠江守、累世諸大夫ノ上首タリ、國主ニ領地ノ名ヲ官名ニ稱スルアリ、前田氏ノ加賀守ト稱シ、又領國ヲ稱セザルモアリ、肥後細川氏ノ越中守ト稱スル類ナリ、又大名ノ位次ヲ班ツニ營中ノ直所ヲ以テシ、大廊下、溜間、大廣間、帝鑑間、柳間、雁間、菊間ト云フ、大廊下ハ三家、溜間ハ溜詰大名、大廣間ハ國主、准國主、家門、及ビ四品ノ外樣大名、帝鑑間ハ譜代大名、柳間ハ五位ノ外樣大名、雁間ハ詰衆、菊間ハ無城ノ輩ノ候ズル所ニシテ、柳間詰ヲ中大名ト稱ス、

將軍ヨリ內書ヲ大名ニ賜ヒ、又上使者ヲ遣スコトアリ、其規式家格ニヨリテ同ジカラズ、又將軍ヨリ物ヲ賜ハルヲ拜領ト云ヒ、三家以下其數各、差アリ、三家國主ハ、特ニ其病ヲ訪ヒ、死ヲ弔シ、香銀ヲ賜ヒ、三家、三卿、及ビ老中卒去ニハ、爲ニ音樂土木ヲ停止セシム、又幕府ノ大禮年中ノ節日、及ビ參府、歸國、襲封初謁婚姻ノ際ハ、各、其家祿ニ應ジテ物ヲ獻ズ、之ヲ獻上ト云フ、其他宅地ノ制、從者ノ數、乘物行裝等ノ制、家祿等ニヨリテ等差アリ、

大名ノ中ニモ喜連川ハ御所號ヲ稱シ、三家及ビ越前ノ松平、出雲松江ノ松平、島津、伊達、細川

名稱

等ノ諸氏ハ、屋形號ヲ稱シ、前田、島津、伊達等十八氏ハ、特ニ松平ノ稱號ヲ賜ハリ、三家越前家國持大名等ハ、世々將軍ノ偏諱ヲ賜ハル、又三家越前家、三家ノ庶流以下、葵章ヲ用ヰルコトヲ許サレ、外様大名ハ、因幡ノ池田、阿波ノ蜂須賀ノミ之ヲ許サル、凡ソ大名ノ待遇格式ハ、概ネ國主城主等ノ別、營中ノ直所ヲ以テ之ヲ定ムト雖モ、家ニヨリテ、特例アレバ、必ズシモ一定セザリシナリ、

幕府大名ノ勤勞ヲ褒シテ、金穀ヲ賜フ事アリ、之ヲ合力米、手當金ト云フ、又大名ノ封地凶荒ニ遭ヒ、或ハ江戸邸ノ火災ニ罹ルモノハ、特ニ金ヲ貸ス、之ヲ拜借金ト云フ、

大名ノ襲封ヲ家督ト云ヒ、轉封ヲ國替、所替ト云フ、十七歳以下ニシテ死スル時ハ、嗣子ヲ立テヽ封ヲ襲フヲ聽サズ、但シ三家及ビ伊達氏、宗氏ハ幼少ト雖モ封ヲ繼ガシム、其封邑ヲ除クニハ罪科ヲ以テスルアリ、繼嗣ナキヲ以テスルアリ、

秀忠、家光ノ時、大名ヲシテ人質ヲ出サシメ、稱シテ證人ト云フ、四代家綱ノ時ニ至リ、之ヲ止ム、

大名其家臣ヲ江戸ノ邸ニ置キ、公務ヲ掌ラシム、之ヲ留守居役ト云ヒ、又聞番役、御城役トモ稱ス、各家ノ留守居集會相談スル事アリ、之ヲ仲間寄合ト稱ス、將軍秀忠ノ時始テ之ヲ置ク、後留守居ノ輩、事ヲ仲間寄合ニ託シ、飲宴ヲ催シ、其弊少カラザルヲ以テ、幕府屢、之ヲ禁誡シ、寛政中ニ至リ、遂ニ命ジテ仲間寄合ヲ廢ス、

交替寄合ハ、一萬石以下ナレドモ、參勤交替其他ノ規式皆大名ニ准ジ、又留守居ヲ置キテ、江戸邸ノ庶務ヲ掌ラシム、

〔書言字考節用集 四人倫〕大名（ダイミヤウ）（タイメイ）

〔正名緒言 上〕今代提封之制、以石數之、一万至百万、總曰大名、

〔後編柳營秘鑑五〕日本國大名數惣知行高并獻上時服惣數積

享保十二丁未年八月改

一御譜代、外様大名百六十五人、

一御詰衆　三十一人　一御詰並　二十五人

一溜詰　四人

一諸役人　三十七人（御老中、若年寄、御奏者番、寺社奉行、御側衆、大番頭、）

右貳百六十三人、一万石以上大名不殘此知行高千六百二拾三万八千百五拾九石、

外ニ百五拾二万四千石　御三家

惣合千七百七拾七万二千百六十九石也

○按ズルニ、本書載スル所ヲ以テ統計スルニ、大名ノ數二百六十二人、知行高千七百七十六萬二千百五十九石ニシテ、玆ニ擧グルモノト合ハズ、

〔官中秘策〕七拾ヶ國大名數都合貳百六拾貳人　石高部類を分

内

一壹万石（餘派ノ數ハ除之）　八十一人　　一二万石　四十三人

一三万石　三十一人　　一四万石　六人

一五万石　貳拾四人　　一六万石　拾四人

一七万石　拾壹人　　一八万石　壹人

一九万石　壹人　　一拾万石　貳拾六人

一貳拾万石　五人　　一三拾万石　八人

一四拾万石　壹人　一五拾万石　三人
一六拾万石　貳人　一七拾万石　壹人
一百万石　壹人
右之内無高之人三人相除、貳百五拾九人、
○按ズルニ、本書ハ安永四年ノ編輯ニシテ、茲ニ記スル所、當時大名ノ數ナリ、此外時々異同アリト雖モ、蓋シ大差ナカルベシ、故ニ今之ヲ錄シテ其一例ヲ示ス、

家門

〔大猷院殿御實紀五十一〕寛永十九年七月八日、家門幷に諸大名登營し御けしきを伺ふ、　十日、家門幷諸大名まうのぼり御けしき伺ふ、

〔正名緒言上〕今代宗室、尾張、紀伊、水戸曰三家、至乎近世、田安、一橋、清水曰三卿、自餘總曰家門、卽室町所謂公族也、歸命大名曰外樣、功臣受封者曰譜第、蓋別于新附也、譜第本謂譜系、轉爲累世之義、

〔柳營秘鑑一〕御三家
一尾州高六拾一万九千五百石　從三位尾張中納言宗春卿○中略
一紀州高五十五万五千石　從三位紀伊中納言宗直卿○中略
一水戸城主高三拾五万石　正四位下水戸少將宗翰卿
右稱御三家長子たる人ハ被稱德川、次男曁庶子に至りてハ松平と稱す、○下略

〔寛永小說〕一大き成御用の節ハ、御三家○中略に被仰聞候よし、

〔殘集柳營秘鑑一〕御三家方御規式節御格
一上野增上寺江被爲遊御成候節、古來ハ御三家方御供之由ニ而御一所被遊御參詣候、其以後者御先江御參詣、御宿坊ニ御扣被成御坐候、御成之時分、御靈家江御越、御脇御路次より被爲入候、○下略

〔殘集柳營秘鑑〕御三家方御格

一御三家方江、途中ニ而、万石以上之諸大名御時宜被致候節者、御輿より御出被成、其家々之位によつて、御時宜有之事也、且又御旗本之面々江ハ御乘輿之內より、御時宜合有之、又諸大夫御役人之格により、御輿より御出被成候事も有之歟、尤御三家計者、御供先御走二人宛被有之、諸大名御旗本方御時宜被致候節ハ、右御走り御時宜被致候面々之名を承、早速殿付候而申上候事也、

一元文三年ゟ、大御番頭以上之方江ハ御輿ゟ御出被成御時宜合有之候、

一諸御番所向御道之節ハ、暫之內人留有之事也、

〔要筐辨志下〕一御三家樣方御屋形內出火之節ハ、諸大名方爲伺御機嫌使者月番御老中江差出候、

〔要筐辨志上〕一大手御門內櫻田御門內下乘橋ゟ中之口迄下坐之次第、

一御三家樣方、御嫡子樣方、日光御門主樣、御三卿樣方、御嫡子樣方、〇中略

一御三家樣方、御嫡子樣方、御三卿樣方、御嫡子樣方江ハ橋御門幷木戶潜り等〆切、當番所入口等も同斷人留下坐、

〔武家擧要〕御三卿〇〇〇

田安中納言　德川兵部卿稱二一橋一　德川式部卿稱二清水一

從三位中將　德川右衞門督宗武卿

〔殘集柳營秘鑑〕德川右衞門督殿、同刑部卿殿御格、

御簾中樣者、近衞殿御姬君、森姬君樣と申候、御婚禮以後御簾中と唱、

一三万俵

外ニ七千五百兩、御臺所向共御賄有之、御普請別段也、右之內、御簾中樣江三千兩被進之、右表向

ハ、御格式等未定、大概御三家被准之、御居所ハ竹橋御門之內代官町御屋敷ニ被成御坐候、折々平川口ゟ御登城被成候、

従三位中將　　德川刑部卿宗尹卿

一三万俵

右御格式等右同斷、但御臺所向一色、御表ゟ御賄有之、御普請ハ別段也、御居所ハ一ツ橋之內ニ被成御坐候、

右御兩所樣共ニ、御附人ハ御本丸ゟ被附之、右御供行列之節ニ被持候品々者、金紋先挾箱、長刀袋折立傘、御乘輿ハ腰黑打揚、或ハ引戸被爲召候、御道具ハ二本跡ニ双方江令持之、御牽馬者虎皮鞍覆被懸之、御手廻等ハ御小人勤之、

〔惇信院殿御實紀四〕延享三年九月十五日、御坐所にて右衞門督宗武卿〇田安、刑部卿宗尹卿〇一橋に封地各十万石つかはさるゝ旨面命ありけふ出仕の群臣、兩卿に封地賜はりしを祝申す、西城にも同じ病に籠りしが、いとけなきは、宿老の邸に使出し、在封の輩飛札を呈す、

〔續三王外記德王〕王〇八代吉宗嘗謂、昔者莊王〇四代家綱封二弟於大國、淸揚王〇綱吉封甲、〇甲斐憲王〇五代綱吉封館林、若世々倣之封王子、是以有窮之地封無窮王子、則爲國家衰耗之基、不如給之廩米、若無子則還諸御廩也、因問室直淸、直淸乃以秦漢以來列侯關內侯等虛封之事告之、王遂決意行之、及傳位於太子、使賜二王子〇宗武宗尹各廩米十万石、以爲歲費、旣而以王子宗尹之長子爲福井侯宗矩養子、賜名重昌、皆行其素志也、

〔浚明院殿御實紀五〕寶曆十二年五月十五日、宮內卿重好卿〇淸水あらたに領地十万石つかはさる、

〔教令類纂二集六十一〕元文二丁巳年閏十一月

右衞門督殿〇田安　刑部卿殿〇一橋

御城內外御通之節、諸事御三家方之通り可₂相心得₁旨、被₂仰出₁候處、近來ハ人留いたし、參懸候ものも扣候樣に相成候、向後ハ前々被₂仰出₁候通り、御三家方之通可₂相心得₁候、○下略

〔惇信院殿御實紀三十〕寶曆九年十月五日、令せられしは群臣道途にて宮內卿の方にいであふとき、拜伏のさまなど、田安一橋兩卿に同じかるべしとなり、

〔憂菴雜志下〕一御三卿樣方、平川口御登城之節、御持鑓一本御持込ニ相成候事、

〔甲斐國志人物百〕天正壬午以後國守令吏

一田安殿治所　一町田中村　高三万四拾一石六斗二升八合五夕六十三村
當陣屋ハ延享三年九月十五日、德川右衞門督殿御賄料十万石ノ內、

一一ツ橋殿　延享三年九月十五日、前同斷ノ內、高三万四拾四石六斗九升二合、於₂逸見筋河原部村、御韮崎宿也、初治ニ字津谷ニ₁建₂治所₁、寛政十三寅年、遠州相良ニ場所替、

一清水殿　寶曆十二午年五月十五日、前同斷十万石ノ內二万五百六拾石四斗三升九合、於₂万力筋岩下村₁建₂治所₁、寛政七卯年十月收公、右二所共治所取拂ナリ、

〔公儀向聞書〕越前家○中略

右越前家三河中納言秀康公末裔也、○中略　各松平氏被₂稱之₁、○下略

〔柳營秘鑑一〕越前家○中略

一越前國主高三拾万石　乘輿打上腰黑　從四位下少將　松平兵部大輔宗矩
一出雲國主高拾八万六千石　右同斷腰紋圍　支配　松平幸千代
一白川城主高十五万石　右同斷　從四位下侍從　松平大和守義知
一明石城主高六万石　右同斷　從四位下侍從　松平左兵衞督直常
一津山城主高五万石　右同斷　越前家之嫡流　松平庄次郎

譜代

一高三万石雲州新田内廣瀬　右同断　従五位下　松平式部少輔進房

一高壹万石　右同断　従五位下　松平志摩守直員

一糸魚川領主一万石　右同断　従五位下　松平河内守直好

右號越前家○下略

〔續日本王代一覽後記 二〕文化十四年十月七日、松平越後守康孝○津山美作家柄ニ依テ五万石御加増ヲ賜ル旨、御前ニ於テ仰付ラル、

〔柳營秘鑑 一〕御。門。葉。之。列。

一會津城主高廿三万石　衆奥打上腰黒　従四位下行侍従　松平肥後守容貞

一西條城主高三万石　右同断　従四位下行左近衛少將　松平左京大夫頼安

一高一万石上州日野　右同断　従四位下行侍従　松平中務大輔信友

一高松城主高拾二万石　衆奥打上腰黒止ム　従四位下行侍従　松平讃岐守頼恒

一高三万石野州高須　衆奥打上腰黒　従四位下少將　松平但馬守義淳

一高二万石奥州森山　衆奥打上腰黒　従四位下行侍従　松平大學頭頼貞

一嫡子　衆奥打上腰黒　従四位下　松平若狹守頼廣

一高二万石常州府中　右同断　従四位下行侍従　松平播磨守頼時

一高一万石常州宍戸　従五位下　松平靫負佐頼則

一嫡子　松平喜八郎

右之内、肥後守、讃岐守を溜詰と稱、其餘、御三家之庶流、何も御連枝と唱ふ、加賀○前田越前○越前家松平相摸守○因幡伯耆國主池田を御家門と稱る事有り、

〔柳營秘鑑 二〕御譜代之列

一三河安祥之七御譜代

酒井左衞門尉ハ元來御譜代之上坐　大久保　本田元來田ニ作、中興に至而美濃守故有レ之多ニ改、

阿部　石川　青山

植村　右七家を云

又或

酒井　大久保　本多　大須賀家筋無

榊原　平岩　植村　とも云へり

一三河岡崎御譜代

井伊　榊原　鳥居　戶田　永井　水野　內藤　安藤　久世元來大須賀之家出　井上同上　安倍

秋元　渡邊　伊丹家筋殘ル　屋代同上

此十六家を云

一駿河御領國以後之御譜代

板倉　太田　松平伊豆、備中等之家也、　西尾　土屋　森川　稻葉能登守ハ外樣　藤堂　高木　堀田先祖勘左衞門

三河來故、御譜代之譯不ニ分明一、　牧野　奧平　岡部　小笠原　朽木　諏訪　保科　土岐　稻垣　丹羽左京外樣

三浦　遠山兩樣有レ之　加賀桒家筋殘ル　內田　小堀　西鄕家筋殘ル　奧田　脇坂　京極備後守家筋　毛利

內膳家今無シ　山口　柳生　堀遠江守家筋　那須家筋殘ル　蜂須賀飛驒守（至照）嚴有院樣（家綱）御幼少之時分御小性被ニ召出一、御譜代之席離レ被ニ御付一、

後之隱岐守事、（正員）松平淡路守（綱矩）次男故、此年本家を相續する故、此家筋無レ之、　增山　秋田　有馬　相馬　水谷

一秋田　有馬　相馬　水谷　片桐

常憲院樣〇綱吉御代、貞享元年子十二月晦日、御譜代之席被ニ仰付一、此內片桐者外樣、

一本庄　常憲院樣御治世以後、元ハ京家之人ニて桂昌院樣〇綱吉母御連枝、

外樣

一加納　享保以後、從紀州御供、右御譜代家也、此外ニ松平但馬守、〇美濃高須領主松平紋負佐、〇常陸宍戸領主等御三家之庶流も御譜代席被仰付之、

〔藩翰譜 二〕松平形原 松平深溝 松平能見 松平荻生 松平荻生 松平櫻井 松平藤井 松平長澤〇節略

〇按ズルニ、此形原、深溝、能見、兩荻生、櫻井、藤井、長澤ノ七氏ヲ世ニ七松平ト稱ス、何レモ譜代大名ナリ、

〔武家擎要〕願御普代家トハ　相馬長門　脇坂中務　加藤能登　秋田山城　諏訪伊勢　戸澤大和

〔大猷院殿御實紀 二十二〕寛永十年二月十一日、譜第衆二十六人に鶴の饗膳下され、各御盃賜ふとて、譜第のやからはことさら頼もしき者に思召よし面諭あり、各感涙を流し謝し奉る、

〔泰平年表 四編 七〕文久元年九月二十四日、小笠原信濃守へ、御政事向御改革之御趣意ニ付而ハ、御譜代衆取締之義、先達而酒井左衛門尉、榊原式部大輔、奥平大膳大夫、松平丹波守へ相達置候處、左衛門尉ハ隱居、式部大輔ハ卒去候ニ付、右代リ其方相心得可申旨、御沙汰ニ候、委細大膳大夫ハ丹波守へ相談致シ可被取計候、

〔泰平年表 五編 三〕文久二年七月六日、松平和泉守、諏訪因幡守へ、右御政事向御改革之御趣意ニ付而ハ、御譜代衆取締之儀、小笠原大膳大夫、奥平大膳大夫、松平丹後守江相達置候處、尚又其方共相心得可申旨御沙汰ニ候、委細達ニ相談可被取計候事、

〔官中秘策 五〕慶長五年以後、江戸駿河へ相詰、御奉公仕候ニ付、御譜代並に相列候家之事、

一堀市正　堀式部少輔　小出　京極右京　小堀備中守　淺野内匠頭

〔嚴命式 一〕御譜代並御譜代之子、他門之養子ニ成、其跡ヲ雖繼、實父之以統々、　脇坂中務少輔　相馬長門守　大村因幡守

〔政化間記續筆〕天保七年九月廿七日、脇坂中務大輔安董〇今度加判之列被仰付候ニ付而ハ、以來御譜代席之勤向可被仰付候、依之向後六月御暇參勤被仰付候、

〔要筐辨志 上〕正月元日

一外樣出府之分、子寅辰午申戌出府、〇下略

國持

〔柳營秘鑑三〕所々火之番次第

一櫻田組防場　表大名御譜代　壹人　但御使番右同斷

〔官中秘策六〕上方衆、慶長五年、野州小山御供、同年關ヶ原御合戰ニ相列家之事、

一細川越中守○下略

〔官中秘策六〕國衆、慶長五年、御味方參、忠節仕候家々、小山供奉、關ヶ原御合戰之剋、國々にて合戰仕候家々、

一伊達松平陸奥守田村○下略

○按ズルニ、本書記スル所、上方衆ニハ細川ノ外、池田、淺野、黑田、藤堂、山內、加藤、有馬、京極、蜂須賀、龜井、一柳、戶川、佐久間、遠山、市橋、森、仙石、眞田、土方、前田、金森、溝口、堀、稻葉、中川、小出、木下、加藤、丹羽谷、新庄、細川、織田、青木、伊藤、片桐等ノ諸家アリ、國衆ニハ、伊達ノ外、戶澤、六鄕、津輕、遠藤、北條、水谷、大關、大田原、南部、松浦、秋田、松前、五島、宗、島津、毛利、上杉、立花、佐竹、岩城、久留島、鍋島、秋月、相良、伊東等ノ諸家アリ、上方衆、國衆、及ビ表大名モ亦外樣大名ノ事ナリ、

〔駿府政事錄三〕慶長十八年正月三日、於御坐間三獻之御祝、○中略國持衆名代獻御太刀御馬、

〔殘集柳營秘鑑二〕本國持と唱家々之事

一本國持と唱面々者拾家有之、是者三ヶ國、二ヶ國、或は一國一城領之、○中略

三ヶ國二ヶ國一ヶ國領する列

一加賀能登越中三ヶ國主居城加州金澤、高百二万二千七百石、外飛驒國預リ、○以下居城及知行高略之　松平加賀○前田

一薩摩大隅二ヶ國主　松平大隅守○島津　一周防長門二ヶ國主　松平大膳大夫○毛利

一因幡伯耆二ヶ國主　松平相模守○池田　一阿波淡路二ヶ國主　松平阿波守○蜂須賀

一筑前一ヶ國主　松平筑前守○黑田　一安藝一ヶ國主　松平安藝守○淺野

一備前一ヶ國主　松平大炊頭〇池田　一土佐一ヶ國主　松平土佐守〇山内

一對馬一ヶ國主居城同府中十万石以上之格、實之高二万石、　宗對馬守

國一圓不被領大身國持と唱列

一陸奥國仙臺城主高六十二万五千石餘〇以下居城及知行高略之　松平陸奥守〇伊達

一肥後國　細川越中守　一肥前國　松平信濃守〇鍋島

一伊勢國　藤堂和泉守　一筑後國　有馬中務大輔

一出羽國　佐竹右京大夫　一出羽國　上杉民部大輔

一大和國　松平甲斐守〇柳澤　一越前國　松平兵部大輔

一出雲國　松平幸千代

右松平兵部大輔、松平幸千代相加て都合二十家、當時國持と稱する也、然とも山内家者此列たりといへ共暫意味あり、柳澤は新家、有馬は元准國主、古々の國持と唱る家に非す、越後家昔此列たりといへとも、知行減領已後、當時格式未知也、

〔武家格例式〕國持十四家

細川越中守　松平美濃守　松平安藝守　松平大膳大夫　松平肥前守　藤堂和泉守　松平因幡守　松平伊豫守　松平阿波守　有馬玄番頭　佐竹右京大夫　松平土佐守　松平出羽守　上杉彈正大弼

右ニ松平加賀守　松平薩摩守　松平陸奥守　松平越前守、四家を加へ、國家十八家と云、

〔柳營秘鑑〕一上使之次第

一國家〇國家一本作國持一は四品といへとも、上使老中被遣之、

〔青標紙〕屋敷向諸的例

准國主

表門ニ家々之紋附る事、國家、幷帝鑑間、柳間、交代寄合抔ニ限、○中略

右之趣ハ貞享年中被相定候事、

〔殘集柳營秘鑑 二〕代々准國主と唱家者

一伊豫國 宇和島城主 高拾万石　伊達大膳大夫

四品被叙候而准國主と唱家者、

一筑後國 柳川城主 高十一万九千六百四十七石餘　立花飛騨守

一陸奥國 二本松城主 高拾万七千石　丹羽左京大夫

右三人を國持並と唱ふ、前々ハ毛利甲斐守綱元之家此列ニて、元服之時御一字等被下之といへども、綱元之繼嗣幼年ニて死去、仍同名讃岐守匡廣を以令繼名跡、依之准國主之格被除之、先條之通、古ハ有馬も相加へて都合五家になり、又今三人之內、立花丹羽兩家ハ家督以後諸大夫之內ハ、柳之間詰ニて准國主之列にあらず、四品に被仰付候以後、大廣間之列ニ出准國主と唱る也、

一國雖領准國主之列も無之列

一壹岐國一圓之主 居城肥前平戸 高六万三千石　松浦肥前守

一若狹國一圓之主 居城同小濱 高十二万三千石　酒井備後守

一志摩國一圓之主 居城鳥羽 高三万石　稻垣攝津守

右三人之面々、准國主ニ而ハ無之一國一城之列也、○下略

城主 城主格

〔公儀向聞書〕御譜代衆

保科肥後守　井伊掃部頭 ○以下三十八人略ス

右城主、

無城

〔武家擧要〕一万石ニテ城主之面々 水野日向、本多伊豫、三宅備前、阿部駿河、牧野周防、大田原飛驒、遠山美濃、

城主格之面々 毛利甲斐、井伊右京、本多彈正、藤堂佐渡、黒田甲斐、堀田攝津、水野壹岐、

〔公儀向聞書〕御譜代衆

小笠原土佐守 酒井石見守〇以下八人略ス

右無城

〔教令類纂〕二集六十二 寶曆十二壬午年五月

一無城之面々、居所有來之分、修復申付候儀者、相届ニ不及、新規ニ堀を堀、或石垣、土居等築立候類之儀、其外不依何事新規之儀ハ、伺之上普請可被申候、

右之趣、無急度寄々可被相達置候、

制度

〔憲教類典〕四ノ一武家諸法度 元和元乙卯年七月七日

權現樣〇家康御時代 武家諸法度

一文武弓馬之道、專可相嗜事、〇中略

一背法度之輩、不可隱置於國々事、〇中略

一國々大名小名幷諸給人各相抱之士卒、有爲叛逆殺害人之告者、速可追出事、〇中略

一自今以後、國人之外、不可交置他國之者事、〇中略

一於隣國企新儀結徒黨者有之者、早速可致言上事、〇中略

一諸大名參勤作法事、〇中略

一國主可撰政務之器用事、〇中略

右可相守此旨者也、〇中略

寛永十二乙亥年六月廿一日

大猷院樣〈光家〉御代　武家諸法度〈○中略〉

一於江戸幷何國、假令何等之儀雖有之、在國之輩者守其所、可相待下知事、〈○中略〉

一知行所務清廉沙汰之、不致非法、國郡不可令衰弊事、

一道路驛馬舟梁等、無斷絕、不可令致往還之停滯事、

一私之關所、新法之津留、制禁之事、〈○中略〉

一諸國散在之寺社領、自古至今所附來者、向後不可取放事、

一萬事如江戸之法度、於國々所々可遵行之事、

右之條々、准當家先制之旨、今度潤色而定之畢、堅可相守者也、〈○中略〉

寶永七庚寅年四月十五日

文昭院樣〈家宣〉御代　武家諸法度〈○中略〉

一國郡家中の政務、各其心力を盡し、士民の怨苦を致すべからざる事、

一軍役の兵馬を整備へ、公役の支料を儲蓄ふべき事、〈○中略〉

一大小の諸役、諸番の頭人等、權勢に依て人を凌ぎ、公儀を假りて私を營むべからず、同列相和ぎて衆議を會し、上聞を塞がずして下情を通じ、偏頗なく贔屓なく、各其職事に練習して、公務を精勤すべき事、〈○下略〉

〔大猷院殿御實紀〕四十　寛永十六年四月廿二日、こたび參覲の輩幷に近日就封の人々をめして饗せられ、〈○中略〉畢て白木書院に出まし、三家をはじめ、万石以上の輩悉く御前に召て面命ありしは、世上年を追て奢侈の風行はる、よて去ば〳〵制禁を加へらるれども、猶華麗の事多し、今より後各國において、いよ〳〵儉約を守り沙汰すべし、幷天主教の禁いよ〳〵油斷なく査撿すべしと

課役
參勤交代

なり、また祖宗より今にいたり、諸大名奉公忠勤のふるまひ御感ある處なり、尾、紀、水三卿は、別て年齢も耆宿に及ばれしかば、彌國家の大政、常に心へだてず、議せしめらるべしとの御旨なり、

〔後王制略〕諸侯之於王○將軍也、一年淹於東都之邸、而朔望及大禮則必朝、一年在其國而聽其政也、○中略若淹東都、則聽政於其邸中、

〔寛永小說〕一御代替之砌、御三家何れも十年宛江戸詰被仰付候由、

一水戸殿計は一年替りに不被仰付候、此儀は權現樣○家康御遺言之由、

〔柳營秘鑑二〕一喜連川右兵衛督、毎年至暮參府、年頭之御禮相濟歸邑、尤内室在所住居也、

〔憲教類典四ノ一武家諸法度〕寛永十二乙亥年六月廿一日○中略

一大名小名在江戸交替所相定也、毎年夏四月中可致參勤、從者之員數近來甚多、且國郡之費、且人民之勞也、向後以其相應可減少之、但上洛之節者、任教令、公役者可隨分限事、

〔大猷院殿御實紀二十八〕寛永十二年六月晦日、先に在府の諸大名交替のこと仰出されしにより、けふ加賀中納言はじめ、廿六人を召て就封すべき旨つたへらる、これ大名四月交替の始なり、

〔大猷院殿御實紀二十八〕寛永十二年七月朔日、奧にて見參する譜第衆をめして、今度諸大名悉交替命せらるゝといへども、此輩は別儀もて滯府せしむれば召させ給ふ時、速に參殿すべき旨面命し給ふ、

〔大猷院殿御實紀五十〕寛永十九年五月十四日、先に交替命せられし譜第のともがら、今日鬮をとりて番をさだむ、

〔大猷院殿御實紀五十一〕寛永十九年九月朔日、この日又譜第大名の中、交替の制を仰出さる、青山大藏少輔幸成○中略毎歲八月交代と定め、今年在府永井信濃守尚政○中略同じく八月交替と定め、明年在府すべし、奧平美作守忠昌○以下六人略毎歲府にて越年し、今年は在府半年にて交替すべし、松

平式部大輔忠次〇以下六人略は明年在府たるべしとなり、

〔寛永小説〕一大猷院樣〇家光御代迄は御譜第衆は常江戶にて、國持衆も參勤之時節ゑかと不二相定一候處に、國持衆は四月交代と被二仰出一、其後御譜代衆は二月か六月か勝手次第ニ可レ被二仰付一候間、願ひ候へと被二仰出一候、其時いづれも相談の上にて相願ひ、六月に相定り候由、

〔喜連川判鑑〕右兵衞督尊信

承應元壬辰十二月、嚴寒ノ間參勤御免、名代ヲ以、年頭ノ御禮御太刀目錄進上、

〔常憲院殿御實紀附錄〕中雁間の大名、もとは就封する事なかりしが、當代〇五代綱吉貞享三年二月よりこの輩にはじめて半年更替の暇を賜はりしなり、

〔享保通鑑〕四享保六年三月十二日

一此度屋敷類燒之諸大名、爲二御用捨一在所江御暇被レ下、並在國在邑之面々ハ、八月迄參府御免被二仰出一之、

〔憲敎類典〕二ノ二參勤享保七壬寅年七月三日

一參勤御暇之義、只今迄外樣四月、御譜代六月交替被二仰付一候得ども、向後ハ一同ニ、三月中、九月中可レ被二仰付一事、

一嫡子御暇被レ下候者ハ、其父在所到著以後、六十日過候而可レ致二參府一候、

一在所又ハ居所有レ之面々ニても、幼少若年之者江ハ、御暇被レ下間敷候、併一年半ハ御暇之格ニ准じ、御門番火之番等被二仰付一間敷候、尤半年ヅヽハ在府之格ニて右御用等被二仰付一候事、

〇按ズルニ、此時大名ニ上米ヲ課シ、江戶在勤半年ヅヽヲ免ジタルヲ以テ、交替ノ期モ亦變更シタルナリ、

〔憲敎類典〕二ノ二參勤享保十五戊年四月十五日

來年より上ヶ米被ㇾ遊ㇾ御用捨ㇾ候、依ㇾ之來年ゟ參勤交替之儀、可ㇾ爲ㇾ前々之通ㇾ候、來年參府之面々ハ當秋參府之時節可ㇾ被ㇾ相伺ㇾ候、其節可ㇾ相達ㇾ候、〇中略

但半年代之面々も、來年ゟ可ㇾ爲ㇾ前々之通ㇾ候、以上、〇中略

享保十五戌年四月十五日　覺

一當三月被ㇾ下ㇾ御暇ㇾ候面々、當秋九月中、參勤之節可ㇾ被ㇾ相伺ㇾ候、

一當三月參勤之面々、當九月可ㇾ被ㇾ下ㇾ御暇ㇾ候間、參勤之時節之事ハ、來年九月中可ㇾ被ㇾ相伺ㇾ候、〇中略

一來春參勤之輩ハ、當九月中參勤可ㇾ被ㇾ相伺ㇾ候、〇中略

享保十七子年二月五日

松平左近將監〇乘邑大目付江左之書渡ㇾ之、

覺

一參勤伺之儀、四月御暇被ㇾ下候面々ハ、其年之十一月中、六月御暇被ㇾ下候面々ハ、翌年二月中、先格之通被ㇾ相伺ㇾ候樣に可ㇾ被ㇾ相心得ㇾ候、

但右兩月之外、被ㇾ下ㇾ御暇ㇾ候面々、其外も被ㇾ相伺ㇾ候時節に可ㇾ被ㇾ伺候、

右之通万石以上、幷交代致候寄合江可ㇾ被ㇾ觸ㇾ候、〇中略

享保二十卯年七月廿八日

一四月六月其外在所江御暇被ㇾ下候面々、御暇被ㇾ下候當日より三十日程滯府候分ハ斷ニ不ㇾ及候、三十日を越候はゞ、滯府之譯斷可ㇾ有ㇾ之候、

一半年代り御暇之面々、秋參勤ハ八月三日、冬參勤ハ十二月三日ニ相揃候樣ニ罷成候、向後ハ定日無ㇾ構、前月之中旬過ゟ、八月十二月共に、十日頃迄之內、勝手次第參ㇾ府候樣可ㇾ被ㇾ致候、〇又見ニ殘集撰警秘鑑ㇾ

〔教令類纂二集六十二〕寶暦八戊寅年四月

一大坂駿府加番歸之面々、歸府之御目見相濟候上、御暇年ニ候はゞ在所江之御暇願可有之候、御暇年ニ候得共、直ニ在府有之度面々ハ、是又其段願可有之候、右兩樣之内、何れニも月番迄願出候樣可被致候、

〔天明集成絲綸錄二十一〕安永四年閏十二月

中國、四國、九州より參勤交替之面々、前々ハ伏見、淀、牧方、守口、大坂、尼ヶ崎、西宮、兵庫と通行有之候處、淀より山崎道江懸、尼ヶ崎江出、旅行被致候面々多有之候由、然處山崎通之儀ハ、脇道之繼場故、人馬も少く、屆人馬等致繼合候故、自耕作も怠候樣相成、及困窮候趣、度々申立候、脇道通行多相成候而ハ、本海道之詮も無之事ニ候間、向後可成丈、本海道旅行可有之候、若勝手を以、山崎道旅行候共、右ハ脇道之事ニ候條、人馬繼合差支之儀可有之候間、可被得其意候、

右之趣、可被相觸候、

〔德川禁令考四十七〕文久二壬戌年閏八月十五日

參勤及在府之期限改正ニ付諸藩へ達

方今宇内之形勢一變致候ニ付、外國之交通も御差免ニ相成候ニ付而ハ、全國之御政事一致之上ならでハ、難相立筋ニ候處、御大禮等打續、一新之機會を失ひ、天下之人心居合兼、終に時勢如是及切迫候次第、深く御痛心被遊候ニ付、上下擧而心力を盡し、御國威御更張被遊度思召ニ候、尤環海之御國、海軍を不被爲具候而ハ、御國力不相震候ニ付、追々御施行可被成候得共、此儀ハ追而被仰出ニ而可有之候、右ニ付而ハ、參勤之年割、在府之日數御緩メ之儀、追而可被仰出候、仍而ハ常々在國在邑、致領民之撫育ハ申迄も無之、文を興し武を振ひ、富強之術計、厚相心懸ケ、銘々見込之趣も有之候はゞ、無腹藏申立候心得ニ可罷在旨被仰出候、

右万石以上之面々江被仰出候事、

〔德川禁令考四十事〕文久二壬戌年閏八月廿三日

參勤在府割改制并政務協議達書

大目付江
御目付江

今度被仰出候趣も有之候ニ付、參勤御暇之割、別紙之通可被成下旨、被仰出候、就而者、在府中、時々、登城致し、御政務之理非得失を始存付候儀も有之候はゞ十分ニ申立、且國郡政治之可否、海陸防禦之籌策相伺、或ハ可申達、又ハ諸大名互ニ談合候樣可被致候、尤右件々、御直ニ御尋も可有之事、

別紙

一在府人數別紙割合之通被仰出候得共、御暇中たり共、前條之事件或ハ不得止事所用有之出府之儀ハ不苦候事、

一嫡子之分ハ、參府在國在邑共、勝手次第之事、

一定府之面々、在所江罷越候儀、願次第御暇可被下候、尤諸役當之儀ハ、別紙在府之割合を以可被仰付事、

一此表ニ差置候妻子之儀も、國邑江引取候共、勝手次第可被致候、子弟輩形勢見分之爲在府爲致候儀、是又可爲勝手次第事、

一此表屋敷之儀、留守中家來共多人數不及差置、參府共、旅宿陣屋等之心得ニ而可成丈手輕ニ可被致、且軍役之外、總而無用之調度相省、家來共之儀ハ、供先使者勤共、旅裝之儘罷在不苦事、國許在所より懸隔候場所、御警衛之儀ニ付而ハ、追而被仰出品も可有之事、

〔泰平年表五編三〕文久二年閏八月廿二日、御變革被仰出、○中略割合名前大廣間席、當戌年春在府松平兵部大輔、佐竹右京大夫、島津淡路守、(中略)右之割を以、在府之儀ハ、三年目毎ニ大約百日を限り可申事、春中在府之面々ハ、前年十二月中參府、四月朔日御暇被下候、夏中在府之面々ハ、三月中參

府、七月朔日御暇被レ下候、秋中在府之面々ハ六月中參府、十月朔日御暇被レ下候、冬中在府之面々ハ、九月中參府、十二月廿八日御暇被レ下候儀と可ニ相心得ー事、當年之儀ハ、冬在府之者、其儘十二月中迄在府たるべく候、其外當時在府之面々ハ、追々御暇被ニ仰出ー候て可レ有レ之候事、(中略) 同日、御三家方江、今度被ニ仰出ー候御趣意も有レ之候ニ付、御三家方御參府御滯在之儀、三年目毎に一年ツヽ御在府被レ成候樣被ニ仰出ー候、水戸殿も御同樣、御暇可レ被ニ仰出ー候間、別紙之通御心得、當年ハ水戸殿其儘御在府、尾張殿紀伊殿にハ、近々御暇可レ被ニ仰出ー旨、御沙汰ニ候、明年よりハ、御參府御暇之時月、是迄之振合を以、三月と御心得可レ被レ成候、且又諸大名ニも參勤割、并御心得方、別紙之通被ニ仰出ー候間、此段可ニ申上ー候、右之趣家老共へ被ニ仰渡ー候、 別紙御在府割、戌年水戸中納言殿、亥年尾張大納言殿、來々子年紀伊中納言殿、別紙諸大名參勤割合、大廣間席之面面、三年目大約百日を限り在府、但松平美濃守、宗對馬守、松平肥前守ハ大約一ヶ月を限り在府、溜詰同格右三ヶ年目毎ニ一ヶ年ツヽ在府可レ仕候 御譜代大名、外樣大名、雁之間詰、御奏者番、菊之間緣頰詰、右三ヶ年目毎に百日を限り在府(中略) 宗對馬守へ今度參勤割合、御改革被ニ仰出ー候得共、其方儀ハ朝鮮人來聘御用ニ付、來る寅年まで參府不レ及と兼て被ニ仰出ー有レ之候儀ニ付、來々子年、并寅年共、參府ニ不レ及、來る卯年より被ニ仰出ー候之割合ニ、參府候樣可レ被レ致旨、被ニ仰出ー候、

〔武家嚴制錄二〕家康公御代御軍役○中略

一壹万石　鐵炮二十挺　弓六張　鑓五拾本持鑓共ニ馬上十四騎旗三本　以上

後年御改御軍役付御扶持方覺○中略

一壹万石　騎馬十騎　鑓三十本　弓十挺　鐵炮二十挺　旗三　但從是以上者長柄對之、持鑓共ニ、

一二万石　騎馬廿騎　鑓五十本　弓廿挺　鐵炮五十挺　旗二

一三万石　同廿五騎　同七十本　同　同八拾挺　旗二

一四万石　同四十五騎　同七十本　同　同百二十挺　旗八

一五万石　同七十五騎　同八十本　同三十張　同百五十挺　旗十

一六万石　同九十騎　同九十本　同　同百七十挺　旗十

一七万石　同百騎　同百本　同五十張　同二百挺　旗十五

一八万石　同百三十騎　同百十本　同　同二百五十挺　旗十五

一九万石　同百五十騎　同百三十本　同六十張　同三百挺　旗二十

一十万石　同百七十騎　同百五十本　同　同三百五十挺　旗二十

御扶持方之覺〇中略

一一万石　百五十人　一二万石　三百人　一三万石　四百五十人　一四万石　六百人

一五万石　七百五十人　一六万石　九百人　一七万石　千五十人　一八万石　千二百人

一九万石　千三百五十人　一十万石　千五百人

右者御上洛日光御成之時定也、御陣之時者、一倍扶持也、

〔大猷院殿御實紀三十六〕寛永十四年十一月十四日、細川越中守忠利、松平右衛門佐忠之、木下右衛門大夫延俊、稻葉民部少輔一通、中川内膳正久盛、有馬左衛門佐直純、立花飛驒守宗茂、鍋島信濃守勝茂、有馬玄蕃頭豐氏、五島淡路守盛利を召て、近日鎭西邪蘇宗の徒蜂起すれば、各子弟のうちを所領につかはし封内を嚴に成敗せしむべきむね仰出さる、又相良壹岐守頼寛、伊東大和守祐久、松浦肥前守鎭信、寺澤兵庫頭堅高、久留島丹波守通清、秋月長門守種春も所領の地にまかり、機に應じ處に沙汰すべしとて暇給ふ、

〔大猷院殿御實紀四十三〕寛永十七年正月十五日、譜第大名〇中略等儉約の令を守り、軍役の備を專とし、私の奢侈をなすべからず、こたび目付に命ぜられしむねあれば、もし驕奢により、家計究迫する聞えあらば、曲事たるべき旨、諸老臣仰を傳ふ、

〔憲教類典四ノ十六切支丹〕慶安元戊子年二月廿六日

一筆令啓候、度々如被仰出切支丹宗門之儀、領内入念可遂穿鑿旨上意候得共、異國船領分之浦於

令到來者、可被相守、去酉年（〇正保二年）二月十二日之奉書之趣候、万一不儀之子細有之刻、長崎奉行人江注進之儀、移時剋於難儀者、見計可被申付候、雖然湊に舟を不入、沖ニ有之刻、卒爾取掛ル事ハ無用ニ候、自然人數不足候はゞ、是又此以前如被仰出、隣國之面々江、早速人數出候樣ニ相談、無越度可被計之候、今度中國四國衆、御暇之節、右之通被仰含候間、爲御心得如此候、恐惶謹言、

阿部對馬守（〇重次）　阿部豐後守（〇忠秋）　松平伊豆守（〇信綱）

右中國西國在國之大名ニ被仰遣候

〔大猷院殿御實紀附錄三〕山城の淀は元より帝都に接近して、樞要の地なればとて、元和九年閏八月、松平越中守定綱をめされ、伏見の城は先年既に廢すべく定められぬ、伏見を除きては、帝都を守護せん地、淀にまされるはなし、汝今より淀の地に城築くべしと仰有、（〇下略）

〔天明大政錄三〕二月中（〇天明八年）は禁裏の警衛、聖護院の近邊六ヶ所御門假番所設られて、龜山侯、淀侯、水口侯、青山侯交代にて、火事裝束にて勤番有しが、所司代著後、右之諸侯は御暇にて所司代の御固メになりし、（〇下略）

〇按ズルニ、是ヨリ先、正月晦日皇居火災アリシヲ以テ、暫ラク聖護院ヲ行宮トセラレシナリ、

〔德川禁令考十事〕文久三癸亥年三月廿九日

禁裏御守衞課諸藩士達書

禁裏御所爲御守衞拾万石以上之面々より壹万石ニ付、家來一人宛之割合を以、身體强壯、行狀宜勇幹之者相撰、京地江差出、御警衞爲相勤可申候、尤取締向者、主人ニ而厚世話いたし、一ヶ年宛ニて交替爲致可申、右之趣御所より御沙汰之趣も有之候間被得其意、早々人撰差出候樣可被致候、委細之儀者、牧野備前守（〇忠恭）江可被承合候、（〇又見二大坂平年表六編一）

〔德川禁令考十事〕御守衞廢止之令（文久三年九月十五日）爲御守衞諸藩應石高、强幹忠勇選士貢獻之儀、御沙

幕府警衛

汰ニ付、先頃已來、追々貢獻深御滿足思召候、然ル處當節富國武備充實專要之折柄、各藩選士貢獻候而者、自然費用相嵩、疲弊之一端ニも相成候而者、御不本意ニ思召候間、御殘念ニ者思召候得共、各江差返候旨被仰出候事、

但人數屋敷ニ差置、非常御警衛可有之、尤御守衛名目ニ者無之候事、

右之通於京都被仰出候間、拾万石以上之面々江可被相達候事、

〔東武實錄 十四〕寛永三年九月六日、行幸ノ日、諸大名辻固メ、兼日ヨリ仰出サル丶輩、

駿河大納言〇忠長、以下五十八人略、

警固者二千六百十二人一万石ニ而二人宛ナリ

井伊掃部頭〇直孝、以下十三人略、

烏帽子著百五十七人一万石ニ而一人宛ナリ

脇坂淡路守〇以下五十二人略

人數千六百五十三人一万石ニテ一人宛ナリ

本多飛驒守〇以下二十三人略

禁裏四足御門ヨリ、二條ノ御城東御門限ニ至テ、二十四町九間、此間數千四百四十九間、人數三千三百廿七人、一万石ニ付二人宛

行幸ノ役者、千六百六十三人、一万石ニ付一人宛 小路當番ノ人數十万石ニ付十人宛 小路四十一箇所十万石ヨリ上三十人宛、〇下略

〔要筐弁志 上〕大手御門ゟ外曲輪諸番所勤仕之次第

一大手御門　鐵炮三十挺 持筒貳挺　弓二拾張 持弓一組　長柄廿筋

右拾万石以上之衆、御譜代家番侍十人之内番頭一人 物頭一人 常肩衣著、平士羽織袴著、

五節句、月次式日御規式御成之節、熨斗目半袴、御鷹野、御成之節常服、

一同所ハ、元來眞田伊豆守勤初、外曲輪之諸番所之規矩被定之事、

一夜五半時御夜詰引之儀承之、面番所前幕張垂之、若出入等有之時ハ、御目付方ゟ差圖之上ニて取計候事、夕八時已後ハ、朝入込有之候、御役人御用箱、其外とも無斷一切出し不申候、御老中被居殘候節抔、毎度御目付中ゟ、箱斷有之差圖之上相通候事、

一御成之節、都而諸番所、並當所ニ不限万石以上之分ハ、出御之節計、上意有之候事、○中略

一御規式御成之節ハ、番所ハ勿論諸番所詰番之大名衣服、熨斗目長袴、家來給人已上、熨斗目半袴著、通御之節ハ不殘人拂、當主面番所中程土間之砂臺いたし、右之場所ニて平伏、升形江家來一人、御門扉際ニ留守居役一人蹲踞仕罷在候事、

一當所、內櫻田、幷西丸大手御門は三番所と唱、交代之儀ハ、十日目、內代り五日目(內代りと申は十日之內相番一人、)諸番之內家來之者私ニ代合申候事、○中略

一當所幷內櫻田御門內外ニ而、正月三日、十月玄猪、其外御慶事等ニて御能被仰付、諸大名登城退出夜ニ入候程之節ハ、御篝火燒之、

一大名衆持之御門番ハ御老中方支配、万石以下三千石迄之衆御門番ハ御留居支配、御法令之儀ハ万端御目付方、十万石以上之參勤交代之衆ハ一ケ年宛勤仕、病氣ニ而滯府之節ハ三ケ年ツツ勤仕、或ハ御門之高ニ應じ、一二万石定府之衆ハ勿論三ケ年宛、雖然御門番勤ハ一人役ニ不立、半役之勤也、○中略

一西丸大手御門　鐵炮貳拾挺持筒貳挺　弓拾五張持弓一組　長柄廿筋

右十万石以下、六万石以上、御譜代家番持、幷勤方大手幷內櫻田番士之通前ニ委シ、

一內櫻田御門　鐵炮十五挺持筒貳挺　弓十張持弓一組　長柄十五筋

右御譜代大名六七万石勤仕、衣服幷勤方ハ、万端大手御門番之通り前ニ委し、

右三ヶ所、御門番之頭取を番頭役と書上、又ハ唱候、右之外御門番所之頭取ハ伴頭と認申候事、

陪臣御城內ニて平生肩衣著用之儀ハ、三ヶ所番頭之外無之事、○中略

一外櫻田御門　鐵炮十挺　持筒貳挺　弓九張　持弓一組　長柄拾筋

右御譜代大名ニて五六万石ゟ三万石迄、病氣滯府之面々ハ、三ヶ年勤仕、出火等之節ハ万端三番所之通勤之、年始、八朔、五節句、月次御禮之節、升形ニ侍一人、御門下に徒士一人固之、諸御門万石以上之分江之觸元ニて、當所ハ御入國之砌ハ、小田原口と唱候事、

一侍五人、羽織袴、御成御禮日、都而勤方大手被准、熨斗目半袴著番頭も同服、肩衣著用ハ不相成候事、夜六時ゟ御太鼓ニて大扉〆、明六時ゟ開之、夜九時ゟハ潜扉〆、七半時ゟ小扉開ク、夜九時ゟ小扉〆り中ハ武士方之外出入一切通不申候、御納屋之儀ハ相通候事、

一夜六時ゟ、女切手を以改之通候、女子ハ產子ニ而も切手ニ認、駕籠ニ乘添候筋も其人數を認、

一材木、竹石、幷植木類、車駕籠無斷ニてハ不相通候事、○中略

一御成御通行有之御門、前日龍吐水ニて淸之、已來ハ小荷駄類不淨之品一切禁之、

一諸家中輕尻乘通不相成、縱乘懸馬ニても跡付刀箱無之候得バ、下馬爲致候事、

一手鎖繩懸候者、其頭之無斷不相通候事、○中略

一當所ゟ諸御門下座定之次第之事、

御三家樣方、御嫡子樣方、御簾中樣方、御三卿樣方、同御嫡子樣方、御簾中樣方、日光御門主樣、公家衆、幷御門跡方、御老中、所司代、御側御用人、大坂御城代若年寄、

右總下座

御側衆、御留守居、大目付、御目付、

右不ㇾ及ㇾ下座ㇾ行儀膝直シ拍子木一ッ打申候事、

一御三家樣、御三卿樣方、日光御門主樣ニハ番士一同薄縁下座臺を放れ平伏、三ッ拍ヲ木總下座、二ッ拍子木半下座、御張出下座書ニ半下座と申筋無ㇾ之、總下座膝直計也、半下座ハ、御門番私之懇意を以下座也、縁頬、或ハ老若之嫡子抔ニ致ㇾ下座ㇾ候事、

一御三家樣方ハ、夜中も無ㇾ差別ㇾ及ㇾ下座ㇾ、其外ハ行燈出候得バ、下座ニ不ㇾ及、御老中御名代之節ハ、可ㇾ爲ㇾ格別ㇾ之事、○中略

一御三家樣方、御嫡子樣、御簾中樣、御三卿樣方日光御門主樣之外ハ、夜中大扉開き不ㇾ申候事、

一出火之節ハ、何方ニ而も開門火消役相通可ㇾ申候、尤諸御門面番所邊并升形外張番所江高挑灯配り候事、○下略

○按ズルニ、此外和田倉、馬場先、神田橋、一橋、竹橋、田安、半藏、日比谷、鍛冶橋、呉服橋、常盤橋、幸橋等ノ諸門モ亦、大名ニ警衛セシメタル由見エタレド、概子茲ニ掲グルモノト同ジケレバ、今悉ク載セズ、

〔憲敎類典〕二ノ二參勤 正德二辰年六月十五日

所々御門番人數之覺

大手御門　給人貳拾人　侍五人　足輕百人　中間五拾人

平日ハ右之人數ニ過べからず、御禮其外ニも出仕多有ㇾ之時ハ、徒侍三四人も相增、足輕相增候とも、百五六十人ニ不ㇾ可ㇾ過、但相增候足輕之內三四十人は、非番之方より差加へ、頭を差添、當番之方と申合可ㇾ相勤ㇾ候、

內櫻田御門　給人拾人　侍五人　足輕五十人　中門三十人　都合九十五人

平日ハ右之人數に過べからず、御禮日其外ニも出仕多有ㇾ之時ハ、徒侍三四人も相增、足輕相增

候とも、百人ニ過べからず、

但相增候足輕之內三四十人ハ、非番之方ゟ差加へ、頭を差添、當番之方と申合可ニ相勤一候、

西丸大手御門　人數內櫻田と同斷

外櫻田御門　給人五人　侍三人　足輕三十五人　中間二十七人　都合七拾人

神田橋御門　人數外櫻田と同斷

和田倉御門　半藏口御門　給人四人　侍三人　足輕二十七人　中間二十三人　都合五十七人

常磐橋御門　人數和田倉半藏口御門と同斷

馬場先御門　竹橋御門　田安御門　一橋御門　給人四人　侍二人　足輕二十五人　中間二十人　都合五十一人

吳服橋御門　鍛冶橋御門　數寄屋橋御門　日比谷御門　幸橋御門　人數馬場先竹橋田安一橋と同斷

右之通ニ而可ニ被二相勤一候、自然場廣所ニて足輕數入候事も有レ之候はゞ、所により二三人も增候儀ハ可レ有レ之候、以上、

〔殿居囊後編〕諸御門番所御法令書

大名持之御門番ハ、御老中方支配、万石以上、〇中略御法令之儀ハ、万端御目付方持、万石以上之參勤交代之衆ハ、一ヶ年宛勤仕、病氣ニて滯府之節ハ、三ヶ年宛勤仕、或ハ御門之高ニ應、一二万石、定府之節ハ勿論三ヶ年宛、雖レ然御門番勤者一人役ニ不レ立、半役之勤也、

〔機務覽要一〕領分損毛ニ付御門番御免之事

安永四未年十二月十日

一西丸大手御門番、本多紀伊守領分、駿州田中領、半高之損毛ニ付、御門番御免被仰付、

〔柳營秘鑑 三〕上野増上寺御成先固之覺

一上野増上寺御成之節、御跡固之事、御譜代七八萬石以上之大名被仰付、御成還御之間、池之端町屋敷前、或ハ上野宿坊江人數遣置、還御相濟候も、卽刻二天門前、黒門二ヶ所江惣頭留守居人數召連罷越、御持組百人組と入替る、古來は石橋先迄人數張出候之處、近年無其義、黒門左右、二天門左右、足輕立候計ニ而相濟、○中略増上寺御跡固者、勤方同斷、主人不及罷出、

〔柳營秘鑑 五〕三月上旬公家衆參向ニ付御對顏御返答御馳走御能之次第○中略

一公家衆上野増上寺參詣之節、御馳走之大名、何も官位に隨て、裝束著之、先達而宿坊江相越、御佛殿警固之大名同斷、

一上野固之場所

仁王門黒門　拾萬石格合　惣門文殊樓車坂　七八万石格合　中堂五六万石格合

大猷院樣二天門　屛風坂　嚴有院樣二天門　淸水口　常憲院樣二天門　高嚴院樣二天門　右一二万石格合○中略

一増上寺固之場所

山門石橋表門　七八万石位　裏門庫裏門　一二万石位

文昭院樣二天門　有章院樣二天門　一二万石位○下略

〔嘉永明治年間錄 十二〕文久三年四月四日、江戸市中取締ヲ五諸侯ニ命ズ、

佐竹右京大夫　酒井繁之丞　大久保加賀守　相馬大膳亮

松平右京亮

兼而被仰出候通り、英國軍艦渡來、不容易折柄に付、市中其外の動搖に乘じ、惡徒共徘徊可致亂

妨も難計、依之其方共へ御取締被仰付候間、銘々人數差出し、晝夜に不限、御府內見廻り、狼藉もの見懸次第、無用捨召捕、時宜に寄り討果候ても不苦、委細の儀ハ町奉行へ可被談候、

右之通、銘々へ相達候間、可被得其意候事、

町奉行より諸侯五家へ相談書

但著服ハ裁附袴ニて可然、足輕ハ股引ニても可然か、御銘々最寄持場、御分御廻り被成候方か、被仰合次第の事、　御人數ハ廿五人を一隊と御定め、幾組ニても御差出、刻限取極無之、御廻り被成候方か、得物ハ刀鎗捧勝手次第か、鐵炮ニハ及び申間敷事、　町奉行兩組之者、御案內旁御人數へ附添差出し可申、組合せ等の儀ハ御打合可申候、　市中とハ御座候へ共、御曲輪內をも御廻り被成候事に御座候、

〔德川禁令考 三十一 不虞警衛〕文久三亥年八月晦日

非常御警衛之事　覺

非常爲御警衛

神奈川宿　松平阿波守　間部安房守　內藤長壽麿〇中略

右之通、口々御警衛被仰付候間、可被得其意候事、

〇按ズルニ、此外、羽田、川崎、品川、赤羽根、新宿、永代橋、佃島、新大橋、兩國橋、東橋、中川口、市川口、下板橋、飛鳥山、千住等ノ警衛ヲ大名ニ命ジタル事見エタリ、

〔德川禁令考 三十一 不虞警衛〕文久三亥年八月晦日

覺

非常爲御警衛〇中略

古川邊　松平與次郎　平野內藏助　山崎主稅助　戶田隼人正　久世內藏助　鍋島穎之助

○中略

右之通、口々御固被仰付候間、可被得其意候事、

〔德川禁令考二十八追衛使〕文久三亥年五月十八日

大名晝夜廻ニ付、御書付、幷番衆巡邏之配置、

河内守殿御渡　大目付、町奉行、御目付江、

覺

御府内晝夜廻り被仰付候間、酒井若狭守、大久保加賀守、阿部播磨守、相馬大膳亮、加藤出羽守申談、

隔日ニ人數差出、相廻候樣可被致候、

稲葉右京亮

〔柳營秘鑑一〕諸番頭之次第

一大坂加番は万石以上四人、毎歳八月交代被仰付、

但三四万石壹人、一二万石三人、尤本高減高有差別、古者大身も勤之、

一發足彼地交代之日限、且又御暇之節、拜領物左之通、

先規在所江御暇之節、被下候員數、時服御羽織被下之、

附り、役高は一万石迄本高、夫ゟ以上は、大方十分一之引高ニて勤之、尤於彼地高一倍御米被下之、

一一番立　七月十五日　　一二番立　同　十六日

一三番立　同　十七日　　一四番立　同　十八日

一大坂加番

一一番代り　八月三日　　一二番代り　同　四日

一三番代り　同　五日　　一四番代り　同　六日

右交代之様子

一大坂御城内加番小屋割

山里大身之小屋場　中小屋　青屋口　雁木坂

〔武家要法留書〕一大坂加番被仰付候節勤方の事〇中略

御役所江御暇被仰出候翌日、於評定所起請、熊野牛王ニ認之、大目付衆出座、別書神文月番ニてこれを認む、但し誓紙居判血判也、

〔類例略要集〕柳之間席ニ而、大坂御加番被仰付之家之分、

堀大和守〇信濃飯田　堀丹波守〇越後村松　新庄主殿頭〇常陸麻生　土方主殿頭〇伊勢薦野

〔大猷院殿御實紀八〕寛永三年、是年松平主殿頭忠利、小笠原若狭守政信、新庄越前守直好は、大坂加番〇中略命せらる、

〇按ズルニ、是時三人アリシガ後四人トナレリ、

〔玉露叢二十二〕寛文十一年三月二十三日、大坂加番代リノ事、自今以後ハ、七月相替リ申スベキ旨、例年ハ八月始メニ代リ候ヘ共、其節ハ洪水ノ時分故難儀ニ及ブニ付テ也、

〔吏徴附錄職掌〕大坂加番四人〇中略寶永二年乙酉四月廿一日三。人。ニ成、後再四。人。

〔寶曆集成絲綸錄二十四〕延享三寅年七月

覺

山里　役高貳万七千石　中小屋役高一万八千石　表屋口役高一万石　雁木坂役高一万石

右之通、向後大坂加番役高相極り候間、加番之儀相願候面々江相達可被置候、

〔憲教類典二ノ一大名〕寶曆八戊寅年四月

一大坂駿府加番歸之面々、歸府之御目見相濟候上、御暇年ニ候はゞ、在所江の御暇願可有之候、御暇年ニハ候得ども、直に在府有之度面々ハ、是又其段願可有之、右兩樣之内、何れにも月番まで願書出候樣可被致候、

右之趣、寄々可被達置候、

〔吏徵附錄 〇職掌〕駿府加番三人

萬石以上一人〇中略 五月朔日御暇（万石以上拜領物依家格不同、寄合時服三、羽織、） 九月十六日發足前御渡物、九月十九日至廿一日發足、 十月十五日、歸府御目見、 寬永十年癸酉月日、始置二人、

〔柳營秘鑑 一〕諸番頭之次第

一駿河加番は万石以上一人、（是を世上に而大加番と云〇中略） 御暇之節拜領物（万石以上ハ在所御暇之格を以被下置〇中略） 是又每歲九月之交代也、但加番は御城外ニ役屋敷有之、所謂町口（大加番小屋場） 四足（小平加番小屋） 草深（同上） 但（加番之面々ハ万石以上、減高一万石ニて勤仕之、御役扶持一万石ニ四百人扶持被下之、〇下略）

〔家忠日記追加 十八〕慶長七年五月八日、佐竹右京大夫義宣が領地常州八十万石を減じて、秋田砥澤廿万石を賜る、〇中略 松平周防守康重、松平五左衛門尉一生、由良信濃守菅沼與五郎、藤田能登守に命じて、常州水戸の城を守らしむ、

〔東武實錄 一〕元和二年七月五日、越後少將〇忠輝 上總介越後國及信州河中島ヲ沒收セラレ、勢州淺間ニ配セラル、〇中略 越後信濃二州在番ノ面々ニ被仰出趣、

在番之次第

一高田之城本丸　酒井左衛門尉〇家次

一同二之丸　牧野駿河守〇忠成　堀丹後守〇直寄

一同三之丸　眞田伊豆守〇信幸　仙石兵部少輔〇忠政

一河中島之城　小笠原右近大夫〈○忠眞〉

一松平大隅守〈○重勝〉城　保科肥後守〈○正光〉

一山田隼人正城　諏訪因幡守〈○頼水〉

一松平筑後守〈○信直〉城　溝口伯耆守〈○宣勝〉

關所支配

〔柳營秘鑑　四〕諸國關所支配〈幷〉御條目

一相州箱根〈根府川〉　〈足柄上方道熱海道〉　小田原城主大久保出羽守

一上州碓氷〈横川〉　〈北國越後信濃等江之道筋〉　安中城主內藤山城守

一上州川俣　〈上野下野館林足利佐野江之道筋〉　忍城主阿部豐後守

一上州五料〈大渡關改〉　上州道　厩橋城主酒井雅樂頭

一上州松ヶ橋　〈越後信濃〉道　高崎城主松平右京大夫

一總州關宿　〈常陸下總下野筋ゟ通船改〉　關宿城主久世隱岐守〈○略中〉

一遠州荒井　〈上方海道鐵炮改之〉　吉田城主松平豐後守〈○略中〉

一江州柳ヶ瀬　彦根城主井伊掃部頭〈○略下〉

險要地警衛

〔柳營秘鑑　二〕諸領主交代之場所

一筑前國福岡　肥前國佐賀

右此領主在國之時、長崎表〈江〉隔年家來差遣之令勤番、交代之時節ハ、每年九月末、長崎表異國船歸帆以後參府、翌年二月廿八日御暇被下置、

一｛肥前國唐津／同國島原｝　一｛和泉國岸和田／攝津國尼ヶ崎｝　一｛石見國濱田／同國津和野｝　一｛山城國淀／近江國膳所｝　一｛三河國吉田／同國刈屋｝

一｛遠江國掛川｝但當時構無之　一｛伊勢國桑名｝　一｛攝津國高槻｝

同國濵松　　同國長島　　丹波國龜山
前ハ龜山享保十六年ゟ

一 肥前國大村　此二領主交代之地ニハ雖無之、　豐後國府內
同國五島　相互ニ隔年ニ參府歸城在之、　一 同國臼杵

○按ズルニ、本書當時トアルハ、元文ノ比ヲ云フ、官中秘策ニ當時ハ高槻を除、大和郡山と交代トアレバ、此後改メシナリ、

內海警衛

〔溫恭院實紀 三〕嘉永六年十一月十四日、被命海防件々于諸家、

一　井伊掃部頭〇直弼

異國船渡來之節、內海御警衛被仰付候間、羽田大森邊江人數差出、防禦可被致候、依之相模國御備場御用御免被成候、

一　松平肥後守〇容保

異國船爲防禦内海御臺場御取建に付、內海御警衛被仰付、二之御臺場御預け被遊候、依之安房、上總國御備場御用御免被成候、彼是用途も嵩み候に付金一万両被下、芝金杉松平相模守〇池田慶德上ケ地、御臺場附爲陣屋被下之、〇中略

右於御白書院緣頰、老中列座、和泉守申渡之、

○按ズルニ、此外毛利、細川等ノ大名モ海防ヲ命ゼラレタル事見エダレド、槪ネ之ニ同ジケレバ略ス、

蝦夷地警固

〔泰平年表 大御所〕文化四年十二月五日、松平政千代仙臺侯 松平金之助會津侯 蝦夷地警固被命、　文化五年正月九日ゟ十三日至、會津勢千三百餘人、城下爲出陣、蝦夷地に發向、同十五日ゟ、仙臺勢四千八百餘人、城下出陣、蝦夷地へ進發、同二月五日、會津勢二百五十人、又蝦夷地に發向、同十二月十八

火消役

日、南部大膳大夫敬○利事ハ、西蝦夷地一圓の警固、其方幷津輕越中守○親事相手へ永被仰付、領地廿万石に直し被下、且又侍從被仰付之、津輕越中守事ハ東蝦夷地一圓の警固、其方幷南部大膳大夫相手へ永被仰付、領知拾万石ニ直し被下、四品被仰付候旨、被仰渡之、

〔柳營秘鑑一〕御番頭之次第

一禁裏御所方火之番ハ、淀、高槻、○中略膳所、龜山、此四ヶ所領主、貳人宛組合、參府歸城被仰付、右歸城之二人ゟ、隔月ニ京都之屋敷江家來計差出置、尤大火之時ハ、自身も令出馬、是ハ火消一通リ之事にあらず、禁裏守護のためのよし、依之末々迄の武器、蟇弓、鐵炮、長柄等之類、悉用意ス、人數高ハ、拾万石以上十騎、足輕六十人餘、七八万ハ八騎、足輕五十人、何も中間ハ准之差出ス、騎馬役人ハ、家老、番頭、物頭、留守居、目付、平侍、都合十騎、其外諸役人數輩相詰、右四領主ゟハ、火之番の外纏番とて、京都大火之節ハ、人數差遣、自身も令出馬事、古來ゟ有之、京都火事の外ニ、近年ハ、八幡、伏見、宇治江も樣子ニより、人數計出ス事有之、

一京都火消ハ、京近邊ニ在所有之、一二万石之大名一人宛、毎歲三月朔日、九月朔日、半年代リニ而、自身家來共ニ、彼地之役屋敷ニ相詰及右屋敷土手町ニ有之、

〔柳營秘鑑三〕所々火之番次第

一紅葉山惣御佛殿　御譜代衆一人十万石以上
一二丸　御譜代衆一人七八万石以上十万石迄
一三丸　御譜代衆一人七八万石ゟ十万石迄
御本丸　御譜代衆一人十万石以上
一西丸　御譜代衆一人十万石以上
一御物見御櫓部屋　御譜代衆一人中大名
一吹上　御譜代衆一人小身大名
一聖像遷座　御譜代衆一人小身大名
一本所御材木藏　御譜代衆一人中大名
一大手組防場　其大名御譜代一人宛但大手組御使番四人於場所指圖有之

一櫻田組防場 表大名御譜代 五六人但御使番右同斷

防大名、大手、櫻田之名目雖有之、畢竟當番非番、隔日相分之名而已歟、

〔武家用法留書 一〕火之番被仰付候節之事

一火之御番被仰付候節、何方之火消被仰付候雖、相談可有勤番旨、御老中御連名之御切紙被遣、即廻御請、使者を以遣す、爲御禮御老中江參上、且又相役衆、御目付衆、御使番衆、其所役人衆、定火消衆江爲案内使者差遣す、又其方角御門番衆へ、人數不限晝夜、御門御通し被下候樣にと、使者を以相斷る、大手、平川、櫻田、西之丸大手、吹上、其方角に依て、判鑑札遣之、尤人數腰札付させ可申候、是ハ御城内火之御番之時也 御城外火之御番不及是也、

〔幕朝故事談〕雁の間大名、方角火消相勤候日、御成有之其日雁被下に御用召有之候得バ、御方角相勤候、御成ニ付在宿仕候と申て、御用召の方へハ、名代出し候事也、

〔營中御日記 六〕寛永六年五月十五日、今度諸大名御暇ニ付、火之番代り被仰付候、大名十餘輩、一万石三十人之積リヲ以、火消之者召連、火事場可出旨、上意之趣信濃守〇永井尚政傳之、

〔大猷院殿御實紀 五十五〕寛永廿年九月廿七日、府内火災消防を四隊にわかち仰付らる、〇中略 一万石三十人とさだめ、一隊十日づゝにてかはりつとむべしとなり、

〔文昭院殿御實紀 十三〕正德二年二月二日、萬石以上のともがらに地方を定めて防火を命せらる、銀町より芝口門まては牧野大學成央、加藤遠江守泰恒、牧野讃岐守英成、芝口より赤坂門までは中川内膳正久忠、板倉近江守重治、金森出雲守頼旹、赤坂より市谷門までは土井甲斐守利知、内藤駿河守清枚、稻垣大藏昭賢、市谷より昌平橋までは石川石之助總慶、堀叡負直爲、織田山城守信休、昌平橋より銀町までは西尾隱岐守忠成、岩城伊豫守秀隆、佐竹壹岐守義長なり、よて仰いだされしは、出火あらば指揮をまたず、とみに出て、こゝろいれ消防し、大火におよばしむべからず、居宅

に風あしきか、また近き所ならば、出るにをよばず、家にありて防ぐべし、もし風あしくば、はじめいづるとも立歸るべし、幼稚臥病、喪制他出の時は、家人ばかりいだすべし、たゞし烈風のときは、他にいでず在宅すべしとなり、

〔機務寛要 一〕領分損毛ニ而火之番御免之事

文化四卯年十二月廿八日

一毛利大和守〇輕齋 櫻田組防火番、當八月十五日被仰付候處、領分高一万五千九百七十石餘、損毛之儀御屆申候處、御用番江家來之者被召呼、領內損毛有之候ニ付、櫻田組被差免候段、被仰渡候旨案內有之、

辻番役

〔嘉永明治年間錄 十一〕文久二年六月十日、大手組櫻田組火之番ヲ廢ス、

板倉周防守殿〇勝靜渡之、向後大手櫻田方、並二丸吹上、上覽所前火之番、大手組櫻田組、御差止に相成候、尤も出火之節は、摸樣次第差掛り、万石以上向々の內へ達書を以て、火消可被仰付候、且又兩山御參詣御跡固も以來相止候、右之趣、可被得其意候、尤も万石以上の面々へも爲心得寄寄可被達置候事、

〔泰平年表 五編 四〕文久二年九月二十八日、寺社奉行江、今度厚御趣意を以、諸大名參勤之期限御緩メ被成下候ニ付てハ、在府之人數格外相減、諸御用向、只今迄之通ニてハ難被仰付候ニ付、諸大名之勤向等追々御改革被仰出候ニ付而ハ、兩山火之御番之儀、以來御差止、火事之節、消防之儀ハ、兩山共火消役ニて、厚相心得候樣被仰出候、〇中略依之卽日上杉彈正大弼上野火之番御免、有馬中務大輔增上寺火之番御免、

〔拾遺柳營秘鑑 二〕御條目之寫　万石以上

條々

從土木役

一辻番之儀、晝夜無懈怠可相勤、雖爲夜中番所之戸を明置、不寐番を致し、請取之場所、切々見廻之、若狼藉者、又は手負たる輩、惣而不審成者於來者、出向留置之、早速支配之役人江申届、其屋敷屋敷ゟ御目付衆へ申達、可得差圖候、縱令廻り場ニ而無之候共、近所ニ候はゞ早速罷出取計らひ其上ニ而廻り場之番人江可相渡事、

一喧嘩辻切等有之節も、右同前可相心得事、

一辻番人數一万石ゟ一万九千石迄之高ニ而相勤候番人、晝三人、夜五人ニ而可相勤事、

附一万石以上、組合無之辻番相勤候面々ハ、請負之者ニ渡番ニ仕間敷事、

一貳万石ゟ以上之高ニて相勤候番人、晝四人、夜六人ニ而可相勤事、

附雖爲組合、相定人數之通可相勤事、〇中略

正德五未年四月　　奉行

〔台德院殿御實紀 三〕慶長十一年二月、この月江戸城修築の事により、兼て仰を承りたる西國大名參府して、その〳〵家士に命じ、人數若干伊豆の國につかはし、石材をとらしめ、三千餘艘にのせて江戸に運送す、〇中略關東の諸大名は去年御上洛の供奉したるにより、この課役をゆるされ、供奉せざりしともがらは、千石一人の定制をもて人夫を出さしめらる、

〔慶長日記 三〕慶長十二年閏卯月二日甲子、昨朔日ヨリ、江戸普請關八州幷安房、信濃、越後、奥州、出羽衆行之、關東衆百万石を廿万石宛五手に分、八十万石ニて石をよせ廿万石ニて天守の石垣被築、奥州衆伊達政宗、〇以下七人略右ノ衆ハ、百万石ノ外、何も堀普請務之、

〔台德院殿御實紀 三〕慶長十一年三月、此春大内仙洞狹隘にして、朝儀とゝのひがたきよし聞召、諸大名に課せて、月卿雲客の邸宅を外へ引うつし、禁裏仙洞の地境を恢弘せしむる事、東北各一町餘とぞ聞えし、

〔東照宮御實紀附錄十二〕慶長十五年、諸大名に命じて、尾州名古屋の城を改築せしむ、その頃、福島左衛門大夫正則、池田三左衛門輝政にむかひ、いひけるは、近年江戸駿府兩城の經營ありて、諸大名みなこれがために疲弊せり、されどいづれも天下府城の事なれば、誰も勞せりともおぼえざるなり、この名古屋は、末々の公達の居城なるを、此まで我等に營築せしめらるゝはあまりの事なり、御邊は幸大御所〇家康の御ちなみもあれば、諸人のために、この旨言上せられよといふ、〇中略後にこの事聞せ玉ひ、輝政をめして、諸大名度々の經營に難儀すときゝぬ、さらばいづれも本國に馳かへり、城地を固くし、人衆をあつめて、わが討手のいたるをまつべしと仰ければ、いづれも大に恐怖し、すみやかに人夫をかりあつめ、夜を日に繼て經營をはじめ、土地をならし、二十万の人夫もて西海南海の大石を伊勢三河の大船もて運致し、石壘をきづき、城濠をほり、いくばくもなくして竣功せしとぞ、

〔寛永小說〕寛永十三年の春、江戸惣構、升形、幷石垣、西國、四國、中國の諸大名に被仰付之、

〔嚴有院殿御實紀三十八〕寛文九年二月十三日、西國中國四國邊、一万石以上の輩に、淀川浚利の課銀をあてらる、これこの輩參覲就封の船路たるがゆへなり、

〔嚴有院殿御實紀七〕承應三年四月十七日、この日松平伊豆守信綱の邸より、奉書もて諸大名へ令せしは、禁裏御造營の事は、官費をもてなしまゐらせらるゝといへども、築地は神祖〇家康の御時も諸大名へ課役命せられし故、こたびも五万石以上の輩より、京職板倉周防守重宗のもとへ課金を納むべしとなり、　廿三日、此日大內築地搆造に五万石以上の輩、一万石ニ銀一貫目ヅヽの課役をあてらる、

〔常憲院殿御實紀三十二〕元祿八年十月十四日、中野村犬小屋營築人夫を出す事を、森美作守長成、京極縫殿高或に命せらる、

〔有德院殿御實紀五十六〕寛保二年十月六日、松平大炊頭繼政、藤堂和泉守高豐、伊東熊太郎祐之、稻葉万次郎泰通、仙石越前守政辰、間部若狹守詮方をめされ、關東水害の地、河渠堤防の修築に人夫出すべしと命せらる、

被預罪人

〔憲教類典三ノ八上納〕天明八戊申年九月　及承

上納金萬兩〇萬字上疑有脫字　さつま殿〇島津重豪

三拾萬兩　細川殿〇齊茲

右之通被仰付候處、さつま殿は五十萬兩までは、上納可仕由被申上候也、〇又見天明大政錄

〇按ズルニ、是ハ皇居造營ノ際、助役ヲ免ジテ納金セシメタル由、本書ニ見エタリ、

〔駿府政事錄三〕慶長十八年十月廿四日、富田信濃守〇知信知行被沒收、其身奥州岩城鳥井左京亮〇忠政被召預、又高橋右近〇元種被召預立花左近、〇宗茂高橋富田依爲一味也、

〔東武實錄四〕元和四年四月、是月村上周防守義明、越後國村上ノ城領地九万石ヲ沒收セラレ、丹州篠山松平周防守康重ニ預ケラル、

〇按ズルニ、大名ニ罪人ヲ預ケシ事多ク見エタレド、今一例ヲ擧グ、

〔憲教類典大名二ノ一〕元祿二己巳年八月

一御預け人在之衆、御預け人を結搆に會釋之由相聞え候、御科有之ニ付、御預之所、却而馳走がましき儀は、其身のためにも不能成候、飢寒さへ凌候へば能候條、向後輕會釋可被申事、〇中略

右は於高木伊勢守宅、諸留守居招之傳達之、

將軍名代

〔翁草三十八〕御名代使上洛前錄

一寛政七午年　明正院御卽位之時　秀忠公御使 酒井雅樂頭〇忠世　家光公御使 土井大炊頭〇利勝

一同廿未年　後光明院御卽位　酒井讃岐守〇忠勝　兩上使 松平伊豆守〇信綱

一明暦二申年　後西院御卽位　松平讃岐守〇賴重

一寛文三卯年　靈元院御卽位　松平出羽守

一貞享四卯年　東山院御卽位　保科肥後守

一天和三亥年　春宮式　松平讃岐守

一寶永七寅年　中御門院御卽位　榊原式部大輔

一慶安四卯年　家綱公將軍宣下　酒井雅樂頭〇忠淸

一承應二巳年　家綱公右大臣轉任　保科肥後守

一寛文九酉年　御入内鷹司殿　松平美作守

一元祿十五午年　桂昌院殿從一位昇進　本多安藝守

一延寶八申年　綱吉公將軍宣下　井伊掃部頭

一正德六申年　八十姬君御結納　阿部豐後守

一延享四卯九月　桃園院御卽位　藤堂和泉守〇節略

〔有章院殿御實紀十一〕正德五年四月十一日、井伊備中守直惟少將ニ任じ掃部頭と改め稱し、日光山へ暇下され御馬を給ふ、これは御法會により、代參の御使にさゝれ、朽木民部少輔植元も、靈廟の代參使にさゝれ暇給ふ、

〔武家格例式〕三拾万石　正四位上左中將　井伊掃部頭直亮　京都御大禮勤ルノ時被命御名代、勅許ニ仍、官位昇進アリ、又日光御法會代官ヲ勤、〇節略

日光祭禮奉行

〔憲教類典大名二ノ一〕元文四己未年九月九日

左近將監殿〇松平乘邑御渡

御譜代衆詰衆菊之間緣頰詰之衆江

一日光御祭禮奉行、可被仰付面々、前以服穢等之儀相尋申剋、煩痛所之斷數多候、向後は押立候煩、又は長病は格別、一通り之分ニては、可被仰付候間、彼地江相越難相勤候はゞ、家來計差遣候樣可被相心得候、

〔柳營秘鑑二〕御名代旅役

一正月日光廿日御佛殿江、御譜代大名被遣之、此節、御門主樣御立山ニ付、御樽肴被遣之、

右御暇幷歸府之御禮、御坐之間ニて被仰付、

一四月十七日、日光御祭禮ニ付、高家同御祭禮奉行、御譜代大名二人、但小身なり右は御本祭ニ付て、鎧武者百人、御長柄百本、其外品々之物渡る、此節爲奉幣使之儀、公卿一人參向也、木曾路往來故、江戶表ニて御沙汰無之、

但元和三年より如斯

〔官中秘策二十一〕日光御名代之事、幷祭禮奉行被仰付事、

一御用之儀有之候間、明後日何時登城可仕旨、御老中御連名之御切紙來ル、御請使者を以遣ス、其明剋限ゟ以前、常服半袴登城、留守居出る同前、日光江可遣旨、老中被仰付、退去之節、爲御禮參上、如先例、服有之御方ハ除之先達而日光江御暇之節淸め候て、登城可仕旨御觸有之、前晚ゟ潔齋、常服半袴剋限ゟ以前登城於御座之間御暇被仰出、退去之節御禮、右同歸府之時、直ニ御用番御老中江參上、對面以後、以使者案內、歸府之御目見相濟、退去之時如例不殘爲御禮參上、

從將軍行列

〔家忠日記追加十八〕慶長八年二月廿五日、大神君〇家康將軍宣下の拜賀、行列〇中略

八番、騎馬諸大夫右、里見讚岐守義高、左、井伊右近大夫直勝、　松平甲斐守忠良　松平出羽守忠政　松平飛驒守忠政　松平玄番頭家淸　石川長門守康通、本多上野介正純、

本多中務大輔忠勝　九番、越前宰相秀康、　豐前宰相細川越中守忠興　若狹宰相京極高次　播磨少將池田三左衛門輝政　安藝少將福島左衛門大夫正則

公家衆參向馳走役

〔柳營秘鑑〕二年中御社參之覺幷供奉御名代

一正月、紅葉山御社參、上野增上寺御佛參之節、雁之間詰嫡子、菊之間緣側詰、同嫡子大紋行列勤之、

一四月十七日、紅葉山御社參、且御法會之節、上野增上寺御參詣、何も大紋行列勤之、○中略惣而行列有之時は四品以上令豫參也、

古來は紅葉山御社參之節、御宮前辻固有之、御譜代大名被仰付、家來七人差出之、素袍著、右之手ニ作り太刀を捧、御目通ニ平伏す、常憲院様○綱吉御代の初より相止、

一御法事之節、五位之表大名右同斷、豫參は四品以上勤之、

一御代替、初而紅葉山御成之節は、大紋行列、表大名御譜代大名共ニ供奉豫參也、

〔柳營秘鑑〕五三月上旬、公家衆參向ニ付、御對顏御返答、御馳走御能之次第、

一參向之公家衆、御馳走御大名左之通、

勅使表大名且御譜代衆も有之四五万石位　法皇使同上ニ二三萬石位

右扣代被仰付、五攝家親王方、參向之時御馳走五万石位、○下略

〔武家要法留書〕一公家衆御馳走被仰付候節勤方事

一公家衆御馳走被仰付候節前のごとく、御老中御連名之切紙之御奉書到來、御請前の如く也、其明刻限より、前のごとく常服半袴ニ而登城、留守居出同斷なり來月參向之公家衆、御馳走被仰付候旨、御老中被仰渡、退去之節、例の如く、御禮等參上、其明、同役中申合、御用番御老中江懸御目候様に伺公候、同日高家衆之内、少將江使者を遣す、其明、同役中留守居へ申合、傳奏屋敷江出會、諸事申合、馳走所小屋場請取之、其明御賄頭江書狀遣す、又貳日登城退出之節、同役中申合、傳奏御屋敷江相越、預りへ對面、其節留守居被召連也、則公家衆品川迄到著注進有之刻、則御老中御出頭、月番之高家衆御馳走所江引越候旨相屆、候、此節武具に物頭相添行列、侍服半袴也、只今御馳走所江

引越候旨、御用番御老中江參上し申入る、公家衆到著之節ハ、下座莚まで迎ひに出る、熨斗目半ばかま舉て以二大刀目錄一掛二御目一、召劍御老中御出頭、高家衆江使者を以案内を申入る、上使之節長袴著す、御對顏之日、御進物に留守居附レ之、熨斗目半ばかま先達而御城江持參、御馳走人、烏帽子、大紋、無官はのしめはんばかま、公家衆に少先達而登城、御玄關薄緣迄御迎ニ出る、勅答之日、當御代は御返答と云烏帽子大紋なり、無官はのしめはんばかま登城、前日留守居拜領物入長持爲レ持、先達而御城江出る、宰領徒士也、上野增上寺參詣之日、烏帽子大紋、先達而宿坊迄罷越、勅額門石垣の上迄迎ニ出る、歸京之節、御老中初め例の通使者を以て案内、同日同役申合登城、老中に謁し退去也、

〔幕朝故事談〕傳奏衆御馳走の大名ハ、著の日より詰切なり、

〔嚴有院殿御實紀七〕承應三年四月十三日、淺野因幡守長治、參向公卿の饗應使にさゝる、

〔野木瓜亭隨筆抄〕一公家衆御馳走の大名衆に扣といふ事、寛永六年二月より初る、

〔德川禁令考〕三十公家衆參向寛政三亥年正月

公家衆參向御馳走御賄向仕法御改正　町奉行江

今度公家衆參向ニ付、御馳走御賄向仕法御改正被二仰出一、御馳走大名ハ、前々之通被二仰付一候得共、右ハ公家衆登城外出之節、警固、於二殿中一之掛引、御三家方、或ハ上使等有レ之節、取計方迄ニ而、公家衆江戶逗留中御賄向一式ハ、御代官江被二仰付一、雜掌用人等江之應對ハ、御勘定組頭御勘定方引受、御目付方爲二立合一、取扱候樣相達候、〇下略

〔德川禁令考〕三十公家衆參向同年〇寛政三年三月十五日

參向之公家衆以來公儀御賄被二仰付一候儀ニ付御書付

伊豆守殿〇老中松平信明御渡　御勘定奉行江

參向之公家衆、以來公儀御賄被仰付候儀、必竟是迄、御馳走之大名衆、年々不案内之面々而已相勤、万端不事馴處より、彼是危蹈諸事手重ニ相成、自不益之失費不少、難儀之事たるを以、御改正有之事ニ候、〇下略

掌朝鮮來聘事

〔藩翰譜十上宗〕慶長九年、朝鮮の使僧松雲、對馬の國に來て、義智に就て、德川殿〇家康と長く兩國の好み修めん由を議す、是室町殿の御時の例なり〇中略十二年の夏、兩御所〇家康秀忠へ信使參らせて、隣國の好みを結ぶ、是等の事、義智、德川殿の御德を彼國へ傳へ播しけるに因て、斯く慕ひ參らせしかば、兩御所の御感斜ならず、彼の家直に大名の列に加へられ、十万石の列に加へる位必四品に上り、官必侍從に至ること、其功を賞せられし故とぞ承る、

〇按ズルニ、此後宗氏世々朝鮮通交ノ事ニ關レリ、

〔折たく柴の記中〕また外使〇朝鮮來聘使京よりこゝに來り歸らん道のほど、かの一行の人の乘るべき鞍馬ども、諸大名の役に課せらる、これ例なり、其役を充らるべき事例をしるして、まゐらせしに、たとへば西國大名の中、遠江國より東の役を課せ、東國の大名の中、三河國より西の役に充らるるありて、凡役にしたがふ事、一日程を限とし、來らん時に一日、歸らん時に一日、すべて兩日に過べからずと見えたり、

掌琉球來聘事

〔神祖年譜下〕慶長十五年八月六日、島津家久引琉球王來駿府、〇中略二十五日、家久引琉球王來于江府、

〇按ズルニ、島津氏世々琉球王來聘ノ事ヲ掌リシナリ、

官位

〔禁中諸法度〕一武家之官位者、可爲公家當官之外事、〇中略

慶長二十乙卯年七月

〔公武御席順〕武家參内之節は、公家當官之可爲次候、

〔要覽辨志下〕諸家官位昇進之次第

右大臣正二位左近衞大將、右府、　内大臣正二位羽林大將軍○中略

大納言從二位○中略　中納言從三位黃門○中略

宰相從三位○中略　中將從三位左近衞、又右、羽林中郎將(中略)正四位上(中略)正四位下(中略)從四位上○中略

少將正四位下左近衞、又右、羽林次將(中略)從四位上(中略)從四位下○中略

侍從從四位上拾遺補闕○中略　四品從四位下中大夫○中略

從五位下朝散大夫○下略

〔武家官位〕宰相　參議の事也、參議と云が本儀なれども、いかなる故にや、武家には唐名を言習して、おもたゞしき御書付にもみな宰相と書來れり、

〔文政三年武鑑〕内藤紀伊守信敦帝鑑間從五位下

御若年寄

○按ズルニ、本書及ビ其他武鑑ニ平大名ニ朝散大夫ト記シ、若年寄ノミヲ從五位下トシテ、區別シタリ、

〔幕朝故事談〕尾紀中納言に任じて後、二十年ニて大納言也、

〔武家擥要〕御三卿○中略　何レモ初官從三位、宰相中納言、或ハ大納言迄モ被任、中納言ニ任ゼラレ候ヘバ被稱地名、

〔武家官位〕

從二位○中略　紀州尾州の兩家、大納言之時被敍之、○中略

從三位　御三家御三卿、從三位中納言也、紀尾兩家御三卿は元服從三位中將立、○中略

正四位　水戸元服正四位少將立、

〔官位略記〕權中納言（水戸御三卿）　御極官

參議（尾州紀州）御家督（無程中納言）　同大納言ノ御嫡（何レモ三位ナリ）　加州家（○前田）極官（正四位下）

（正四位上中將）　井伊掃部頭（○近江彦根城主）極官

（正四位下中將）　加州家督　松平肥後守（○保科）極官　松平越前守　松平三河守

（從四位上中將）　松平大隅守（○島津）　松平陸奥守（○伊達）　松平讃岐守（○讃岐高松城主）極官

（從四位下少將）　尾紀御兩家ノ御次男初官極官　薩摩（○島津）陸奥（○伊達）家督　國家十四家極官（家柄ニヨツテ遲進不同アリ、○節略）

〔柳營秘鑑一〕官爵敍位次第

一准國主たる人は、初敍四品、其後年比を以侍從ニ被任也、部屋住之内敍五位、家督後、一參勤之上、四品ニ昇進被仰付、（○中略）

一國持たる人も、初官四品ニ被任事有り、（○中略）

一御譜代之歷々、侍從四品被仰付、五位之面々も、年老又は其仁によりて四品ニ昇進す、

〔御三卿御略譜（田安）〕齊匡卿（○從一位大納言中略）

文政十亥年閏六月朔日任大納言、天保八酉年十月廿八日被敍從一位、

〔御三卿御略譜一（一橋）〕治濟卿（從一位儀同三司）

寬政十一未年正月廿七日、齊敦卿へ御讓、五萬俵、御手當被下、被任從二位大納言、文政三辰年四月廿一日被敍從一位、同八酉年八月六日被任准大臣、同十亥年二月廿日薨去、同十二丑年二月十四日贈太政大臣、（○節略）

〔政化間記續筆〕天保八年十月廿八日、紀伊前大納言殿（○治寶）先達而被敍正二位候得共、當時御由緒柄、且當年は稀成恐悅之御時節柄、格別之譯を以、被敍從一位之旨、上使を以、大納言殿（江）被仰進之、

〔續日本王代一覽後記 五〕天保二年正月十九日、松平榮翁源重豪、從三位ニ敍セラル、松平豐後守齊興、在國タルニ依テ、兵庫頭齊彬ヲ營中ニ召レ、祖父榮翁事、近年迄モ國務ニ心付、殊ニ稀ナル高年ニ及ビ、且ハ御由緒格別ノ儀ヲ以テ、從三位ニ敍セラル旨、御白書院椽頰ニ於テ、老中列坐、松平和泉守演達セラル、時ニ榮翁八十七歲ト聞ユ、

〔續泰平年表 八〕天保十年十二月朔日、松平加賀守齊泰被敍從二位、當時御續柄、格別之思召を以、被仰出候、尤家格ニは不相成候、

〔元治二年武鑑〕加賀中納言齊泰卿正三位、元治元子十月被任、

〔武家官位〕井伊掃部頭　御譜代の棟梁として、官位格別たり、

〔要官辨志 下〕諸家官位昇進之次第

大名三万石以上、五十年來勤功四品被敍之、又御老中方嫡、三十年來ニテ四品ニ被敍事例數多アリ、

〔梅香軒叢書 十二〕諸大名官位

一少將たる人之嫡子は、元服之節被任侍從也、侍從之嫡子は、被任四品也、

一島津家嫡子、侍從ニても嫡孫も被任侍從也、先規として、四品ニ被任例無之、

一國持之面々、家督之節被任侍從、急養子等ニても、末家ニ而本家を相續する時は、其養子たる人御系遠き輩は、持來五位の當任より、直に侍從には不被仰付、先四品を經て、後侍從に昇進す、

一一萬石以上城主之嫡子、無城ニても寺社奉行奏者番若年寄之嫡子、國持之次男は五位ニ被仰付也、

一諸大夫之家老、尾州、紀州ニ而六七人、水戸は五六人、加州は四人也、

〔武家官位〕武家の官位は、三家大中納言といへども、將軍家より被仰付候、其後京都諸司代江位記口宣之儀頼、頂戴有事也、此故に位記口宣を不持、某御官位をなのる也、御三家官位之義は、上使老中を以被仰遣、諸家は御殿中江召、老中列坐申渡月番勤之○中略御三家官位は、上意ニ而被敍任、諸侯は御

次ニて、老中列坐、官位上意之趣演ニ達之、

〔官位御禮物品之覺〕宰相ニ成

禁裏御太刀折紙白銀五拾枚付臺　上臈御局へ同五枚　長橋御局へ同　大御乳人へ同

東宮御所御太刀折紙白銀三拾枚付臺　上臈御局へ同五枚　御乳人へ同

本院御所御太刀折紙白銀三拾枚付臺　上臈御局へ白銀五枚　勘解由小路御局へ同

中宮御所白銀三拾枚　上臈御局へ白銀五枚　兵部卿御局へ同

內侍所御太刀折紙白銀貳拾枚、

上卿銀六拾匁　職事同．宣旨白銀五枚　兩傳奏太刀折紙白銀拾枚ツヽ　副使銀二十匁　雜掌同四十匁

○按ズルニ、此外中將、少將、國取侍從、郡取侍從以下ノ奉ル禮物各〻差アリ、

〔武家官位〕一停任之事、五位以上之者、故有て尊慮ニ違事あれば、御役御免、或は隱居或半知、或御預等ニ被二仰付一事あり、然れども、官をとゞめ、位を召かへさるゝ御沙汰に及ばざるは、是官位は天子より下し給たるもの故、勅勘にあらざれば、私には解官停任せさせ給はずとかや、

〔公武御席順〕大名之順　宰相　中將　少將　侍從　四品

御家門方、國持、外樣、御譜代一同ニ先官之順也、

拾万石以上之面々たりとも、諸大夫之輩ハ高ニ無レ構、諸大夫之次第之座たるべき事、諸大夫頭之次に高順、尤無城之輩ハ、城主之次座たるべき事、

〔要筐辨志下〕諸家官位昇進之次第

從五位下ニテハ雖レ爲二十万石以上一、和泉守〇三河西尾城主松平遠江守〇攝津尼崎城主松平次順、夫ヨリハ高順、又領主ハ高順ニテモ、一万石ノ城主ノ次席ニ、無城ノ高順、同高之面々ハ家督順也、

待遇

〔要筐辨志下〕諸家官位昇進之次第

八省諸大夫以下、相當に拘はらず、家格を以て申さるゝ事なれども、大輔、大夫、大弼、督等は四品已上に至る家筋ならでは申事不叶事なるを、中川、田村、伊東等は、先例格別之事なるべし、中務大輔を諸大夫と申事、本多家に限る、同苗同官はならざる事也、加賀守〇前田嫡子筑前守なれば、黒田家重代之名たりとも、筑前守にはならずと云、御老中方官名は御譜代家并柳之間等にては遠慮し給ふ事也、家柄により遠慮なきもあり、

松平周防守、松平伊賀守、松平山城守等に可限歟、是官名拜領之家筋なれば也、

〔類例略要集〕關東諸大名方今被憚分

三河　御嫡流のみ被任、越後守他家不任之、　武藏　松平武藏守利隆以後相止

陸奥　慶長比迄ハ、島津に而も被任、　薩摩　元祿年中迄、諸士任之、土屋氏以後相止、

尾張　寛永以後任名不承之

〔殘集柳營秘鑑三〕本國持と唱家々之事

一本國持と唱面々者、拾家有之、是者三ヶ國、二ヶ國、或ハ一國一城領之故、其國の號を代々より付來る事有之也、尤松平陸奥守ハ雖為大身、奥州ハ大國故、一國一城ニ而ハ無之候得共代々より國主號を付來る也、國持之外國之號を付來る面々ハ、松平讃岐守也、是ハ格段也、其外松浦氏ハ代々より、其國之號、肥前壹岐右兩國之內、其國之號を付來る事也、

〔大猷院殿御實紀附錄二〕この御代〇家光には〇中略諸大名も官途みだりに進む事得がたく、大に弊風あらたまりしなり、

〔官中秘策二十四〕諸大名家々之由來

一壹万石上野矢田　　松平左兵衛督〇信充

著席次第

此先祖應司大閤房〇信之御子藤原信平公なるを御三家の嫡子ニ被レ爲レ准、紀州家より養子之事ありて、當主人ハ則紀伊公之御血統なり、〇中略

松平加賀守〇中略

一百貳万貳千七百石加賀金澤

御一統の後、御三家に被レ爲レ准、御規式御目見等水戸の次也、

〔武家格例式〕喜連川　足利　清和源氏義家流　本國下野　家紋　菊桐二匹龍　居所下野喜連川

五千石下野内　無位無官　喜連川左馬頭熙氏

正月二日年始御禮、於二大廣間御下段中央一申二上之一、四品拾万石以上ノ御取扱、〇中略

供立　打上乘物、打物、虎皮鞍覆、古代ヨリ打物爪折傘金紋先挾箱　憲廟〇五代綱吉御代ヨリ、先格之通二本道具御免、

〔公武御順席〕御役順

三万石以上老中　五万石以上所司代　同御城代　一万石以上御側御用人　同若年寄　同御奏者番

〔聽明答撰抄上〕一文政七申年二月八日、村垣淡路守外二人より問合、松浦伊勢守挨拶、

大目付衆　村垣淡路守〇定行　遠山左衛門尉〇景晋　服部伊織

万石以上之面々、十万石以上以下と唱候節ハ、拾万石高に候へバ、十万石以上之內へ入候積り相心得候而可レ然哉、致二承知一度、此段及二御問合一候、

附札御書面、拾万石高ニ候へバ拾万石以上之內へ入候、

〔梅香軒叢書十二〕堂上武家順。。。。

攝家衆　親王方　宮御門跡　御三家　清華衆　攝家御門跡　准御門跡　國持大名　平堂上

方　分國大名

〔公儀向聞書〕殿中座席

一御三人方　御白書院廊下ニ御部屋有之

〔柳營秘鑑三〕殿中座席之覺

一大廣間　國持大名、同嫡子、國持幷御連枝、御家門、暨四品以上之表大名、但家柄に依て無官ニ而も大廣間ニ列座す、年始五節句殿上之間江罷出る、且御譜代之面々も、初而御目見之節、先大廣間江罷出る、其後定席被仰付、尤家による事也、是ハ御譜代帝鑑之間に候得共、初而之面々、御勝手へ罷出候を憚たる氣味歟、

一柳之間　表大名五位之輩〇中略

一紅葉間　御譜代大名末席

〔官中秘策十八〕御城中座席之事

一大廊下上之御部屋　六十万石尾張殿　五十万石紀伊殿　三十万石水戸殿

一大廊下下之御部屋　尾州三男松平播部頭〇以下三家子弟略

百万石松平加賀守　四十万石松平越前守

〔公武御席順〕殿中席々

西湖之間御三家方　竹之間御三家方　上之御部屋御休息所御三家方　溜之間　溜之間　同格　帝鑑之間　古來御譜代大名　雁之間　御譜代大名　菊之間緣頰　無城之大名〇節略

〔憲教類典三殿中ノ二十六〕年號月日無之

年始御禮幷月次五節句、外御禮席、

元日

一御白書院御三家方、御連枝方、〇中略侍從御譜代衆、〇中略
一大廣間、諸大名、嫡子共、〇中略
二日
一御白書院　松平中務大輔
一大廣間、國持大名、表向大名、〇中略
三日
一御廊下櫻間より、無官之大名、〇中略
五節句
一御三家方、溜詰、御白書院ニ而御禮、其外國持四品以上之面々、大廣間ニ而壹人宛御禮、過而諸大夫三人宛板椽ニて御禮、右ハ表向共御譜代衆罷出、
八朔
一大廣間三之間御禮〇中略
嘉祥
一大廣間ニ而出付候四品以上之面々著座、其外ハ三人五人七人、御次之間より二之間三之間江掛、御菓子前江置有之を頂戴持之退去、〇中略
玄猪
一御白書院ニて、御譜代衆壹人宛罷出、玄猪之餅頂戴之、〇中略
月並
一御黒書院御三家方、溜詰衆、〇中略一同ニ御禮申上る、〇中略
一御白書院出御、國持衆、御連枝方、其外四品以上之面々、壹人宛罷出御禮、松平遠江守を初め、諸大

夫より三人宛、〇中略松平中務大輔にて御禮終る、〇中略

惣出仕之座席

一御白書院西之御椽頰、御三家方、〇中略

一大廊下諸大夫、〇中略

一帝鑑之間御譜代大名、〇下略

〔幕朝故事談〕帝鑑の間、大名はいつでも御玄關より退くなり、雁の間は中の口より下るなり、菊の間は雁の間の下ゆゑ、又中の口なり、

〔寛永小說〕一御譜代衆御機嫌伺ひとして登城有之節、時によりて雁之間へ相詰被申事も有之、其比は御詰衆もすくなく候故か、ケ樣之節に御菓子など被下候事も有之、必定りて御菓子被下候にては無之、時により候て被下候事、

〔惇信院殿御實紀六〕延享四年九月八日、けふ令せられしは、朝會の時をの〱其あるべき席に居て、他席に至るべからずとなり、

〔天明集成絲綸錄一〕明和五子年十二月

大目付江

万石以上座順之儀、諸席打込候節ハ、前々之通高順ニ致、同高之面々は、家督之前後次第之儀勿論之事ニ候處、御側御用人、詰衆、御奏者番之嫡子と、座席混雜之趣ニ相聞候、如前々、右嫡子之分は、菊之間緣頰詰之上席たるべく候、御譜代、外樣之內ニ菊之間緣頰詰ゟ高低之面々落合候節は、右嫡子之分は、席を替或は向江並候歟、又は脇席に並候とも可被致候、〇又見二牧令類纂一

〔聽明答撰抄上〕文政十年七月七日、水戸殿〇齊脩御城附間合、村上大和守挨拶、

大目付衆　　水戸殿御城附

屋敷

中大名と唱申候ハ、何万石より何万石迄ニ御座候哉承知いたし度候事、

附札、中大名と唱候ハ、柳之間衆之儀ニ而候、

〔柳營秘鑑七〕諸大名嫡子座席

一大廣間伺公之大名嫡子　父同席　但國持、御連枝方、嫡子、無官にても右之通、其外之嫡子、五位之面々、いづれも柳之間、

一柳之間伺公之大名嫡子　父同席　一溜詰大名嫡子　父同席〇中略

一雁之間大名嫡子　菊之間本同〇中略　一菊之間椽側詰大名嫡子　父同席

〔大猷院殿御實紀五十四〕寛永二十年八月朔、この日諸大名拜謁の次第を定めらる、第一國持大名、幷に侍從以上、〇中略　第二は四位の外様衆なり、〇中略　第三は四位の譜第衆、第四は譜第衆、並に外様の中大名、及び國持衆の庶子、万石以上の輩、〇中略　第五は譜第の中大名、幷一万石以上の長子、〇中略　かくの如く治定せらるゝ、上は、今より後、位次をみだるべからずと仰下さる、

〔落穗集追加四〕制外の家の事

慶長五年、御當家天下御一統の以後は、御當地に於て、諸大名衆の義は、何れも居屋敷を願ひ、拜領あられ、家作等をも被致る、中に、〇下略

〔幕朝故事談〕文廟御代、〇家宣　大名御城近所の屋敷を上屋敷と唱へ引移り可申と被仰渡候、

〔青標紙〕屋敷向諸的例

拜領屋敷格坪覺〇中略

一二千五百坪一万石二万石迄　一二千七百坪二万石三万石迄　一三千五百坪三万石四万石まで

一四千五百坪四万石五万石迄　一五千坪五万石六万石迄　一五千五百坪六万石七万石迄

一六千五百坪八万石九万石まで　一七千坪十万石十五万石迄

向後被下屋敷坪數、大方此通相極可申候、乍然人ニ寄樣子ニ寄、其時に至、増減可有之旨、元祿六

酉年八月六日、阿部豐後守殿被仰渡、

いづれも同朋を召倶、挾箱、鞍覆、葵金紋を用ひ、牽馬ハ跡に被立之、御規式之時、七本道具被爲持之、乘輿ハ打揚腰黑也、七本道具ハ常憲院〇綱吉御代より御免被仰出之、

〔柳營秘鑑〕一御三家

〔殘集柳營秘鑑〕一御三家方御規式節御格

上野増上寺江御參詣被爲遊候時者、七本御道具被爲持之候、御駕籠脇之侍、御先供五十人衆迄、麻上下爲著之、雨天之節ハ、侍御駕籠脇手傘指之事、

〔憲敎類典〕二ノ大名 一安永三甲午年十二月七日

松平右近將監殿〇武元御渡

諸大名乘物之儀、近頃は、打揚腰網代に紛敷乘物相用候面々も相見候、打揚腰網代之儀は、國持、溜詰、御三家之庶流、越前家古來より相用候分計、以來とも可被相用候、其外は國持たりとも、近來新規に相用候分は、勿論、古來相用候共、中絕いたし、近來相用候分は、向後可爲無用候、右之外は從前之用來候通、例之乘物相用、尤打揚網代に紛敷乘物は、猶以可爲無用候、

一虎皮鞍覆之儀は、古來より相用候分、幷近來にても願等も有之、相用候分は格別、其外は近來新規に相用候分は、向後可爲無用候、

一茶辨當之儀も、古來より爲持來候分、幷近來にても伺等も有之、爲持候分は格別、其外新規爲持候分は、是又向後無用たるべく候、尤途中藥用之ため、行列之外、茶辨當爲持度旨伺相濟分は、彌供立を離し、行列に不致樣可被召連候、

一供廻風俗之儀、異風に無之樣との儀は、先達而相達候所、近頃面々物好等有之、目立候供廻りも有之、如何に候、供之者著服を始、其外何事によらず、前々より仕來之通相心得、面々之物好、其外

目立候風俗、向後可ㇾ爲二無用一候、

一總而召連候供廻り、がさつに無ㇾ之、先挾箱并其外供廻り行列之間、大概五六尺程宛も間を置並候樣去年も相達候、猶又右之趣堅可ㇾ被二申付一候、

右之趣被二相心得一、此後とも、打揚腰網代之乘物、虎革鞍覆相用、茶辨當爲ㇾ持候分は、大目付江可ㇾ被二相屆一候

十二月

右之趣可ㇾ被二相觸一候

安永五丙申年二月二十九日

打揚腰網代乘物相用候分

松平薩摩守〇島津　松平陸奧守〇伊達　松平越前守〇越前國主　松平掃部頭〇三家庶流美濃高須、以下十七人略、

腰網代ニ而無ㇾ之、打揚乘物相用候分、

松平越後守〇越前家美作津山、以下八人略、

打揚腰網代之内、一方相用候分、

松平肥後守〇家門陸奧會津、以下三人略、

打揚ニ而無ㇾ之、腰網代乘物相用候分、

伊達遠江守〇伊豫宇和島

右之通向後相極候間、爲二心得一相達候、

〔敎令類纂二集六十二〕安永五丙申年

虎皮鞍覆相用候分

松平薩摩守〇島津　時宜ニ寄相用候、井伊掃部頭〇近江彦根、以下二十九人略、

右之通向後相極候間、爲心得相達候、

二月

〔殘集柳營秘鑑〕一御老中は、帝鑑之間御譜代、或は雁之間より御役被仰付候事也、右帝鑑之間は表御譜代と云故、袋入立傘令持之、右之席ニ而御役被仰付候得ば、傘袋を取令持之、諸事供廻り等こうとうに被致候也、是は御役故也、

〔要筐辨志下〕諸家規則

一帝鑑之間、柳之間之大名は、鞍覆、羅紗紋白ク附爲牽、或は蠟虎等相用候筋も有之、其家々之規摸也、雁之間筋には無之事、

〔武家擥要〕諸家格供立之事

束帶之節轅　御三家、越前、加州、〇中略

金紋前後箱之家　御三家、加州、越州、〇以下十六人略

同長革掛　長州黄　雲州黒〇以下十人略

同二重革　松平隱岐守、〇伊豫松山　備前、黄紋　毛利甲斐、朱紋〇長門府中城主

打物　御三家、幷御分家、但松平彈正〇上野多胡領主鷹司　松平大炊不爲持之、越前加州、〇以下十七人略

打上　御三家、幷御分家不殘、越前家不殘、薩州、仙臺〇中略　御三家、幷御分家六尺脇差帶之、

茶辨當　御三家、越前、薩州、〇以下三十一人略

跡乘供鎗供馬　御三家ハ、諸大夫幷醫師乘輿、越前、薩州、〇以下二十五人略

供鎗供馬計　加州、藝州、〇以下八人略

爪折立傘　御三家、幷御分家不殘、越前家不殘、大廊下大廣間不殘、松山、會津、〇保科　忍〇阿部　帝鑑間、柳之間、袋入立傘持之、〇中略　雁之間菊之間立傘不相成、〇中略

虎皮鞍覆　御三家、越前、薩州、仙臺、〇以下三十二人略、

三本道具之家　薩州、仙臺、

持鎗一本片先箱　井伊兩家、〇但袋入傘モ不用、　黒田甲斐守嫡子、

青貝道具之家　喜連川、長州、土州、〇以下八人略、

朱柄道具之家　土井大炊、〇下總古河、　松平伊賀、〇信濃上田、中略、

三万石以上一本鎗之家　松平佐渡、田村右京、〇以下七人略、

三万石ニ不足二本鎗之家　島津筑後、〇日向佐土原、以下八人略、

三万石ニ不足一本鎗之家ニテ、御老中相勤候ヘバ、二本鎗之爲家、〇中略、

大廣間無先箱家　久保田、〇佐竹、　柳川、〇立花、　但久保田ハ式立候節ハ金紋先箱爲持之、

帝鑑間無先箱家　松平越中、有馬左兵衛、〇以下十五人略、

柳之間無先箱家　細川采女、〇肥後新田、　細川中務、〇肥後宇土、以下二十二人略、

雁之間在先箱家　阿部備中、〇備後福山、　安藤對馬、〇陸奥磐城平、　久世大和、〇下總關宿、　土井淡路、〇三河刈谷、〇中略、

國持大名、准國主、陸尺十人、或ハ十二人、溜詰御譜代大名、柳之間、御三家之庶流タリトモ陸尺八人、

〔憲教類典〕三ノ三十七供廻　万治二己亥年九月五日

下馬より內下乘橋迄召連候人數覺

一紀伊殿、〇賴宣、　水戶殿、〇賴房、　尾張殿、〇光友、　左馬頭殿、　右馬頭殿　紀伊宰相殿、〇光貞、　水戶中將殿、〇光國、

尾張右兵衛督殿、〇綱誠、

右之御乘之外、腰掛江馬不入事、

亥九月五日

〔憲教類典〕三ノ三十七供廻　万治二己亥年九月五日

下乘橋より內江召連候人數覺

一國持大名、幷侍從以上之面々、出仕之時、侍三人ツヽたるべく事、

一國持大名之息、幷壹万石以上之面々、召連侍可レ爲二貳人ツヽ一事、

〔貞享令雜記〕元祿十二年卯閏九月十日

下馬より下乘橋迄召連人數之覺

一四品及十万石以上、幷國持嫡子侍六人、草履取一人、挾箱持二人、六尺四人、雨天之節ハ笠持一人、

一一万石以上侍或五人、或四人、應二分限一此內を以可レ被二召連一候、草履取一人、挾箱持一人、六尺四人、雨天之節ハ笠持一人、

下馬より召列れ人數之覺

一四品及十万石以上、幷國持之嫡子侍三人、

一一万石以上嫡子侍二人(幼少之面々ハ、外ニ介添一人可レ爲二勝手次第一候、)右草履取一人、挾箱持一人、但挾箱ハ中の御門之外に可レ被二殘置一候、雨天之節ハ笠持一人、

○按ズルニ、憲敎類典ニ載セタル寬延二年十二月廿四日、寶曆八年四月廿九日ノ制規、及ビ天明集成絲綸錄ニ載セタル、安永五年三月ノ定モ是ト同ジ、

〔泰平年表 五編三〕文久二年閏八月廿二日、御城內召連候供之者も、可レ成丈相減じ可レ申候、乘切ニ無レ之迚も無益之人數は、相省候樣可レ被レ致事、

右之趣萬石以上之面々へ、可レ被二相觸一候事、

〔憲敎類典 二ノ一 大名〕安永五丙申年三月十五日

酒井石見守御目付江左之書付渡之

諸大名往還之節、徒侍多召連候面々も有レ之、往來之妨にも相成候間、以來左之通可二相心得一事、

一壹万石以上(先供駕籠脇共)拾三四人限り

一五万石以上　右同斷　拾七八人限り

一拾万石以上　右同斷　貳拾人限り

右之内ニて、分限に應じて可被召連候、縦國持たりとも、先供駕籠脇とも貳拾四五人過べからず、尤去巳年(安永二年)相達候通、徒之者は勿論、挾箱并其外供廻り行列之間、大概五六人程宛、間を置并せ候樣堅可申付候、

一登城之節は勿論、御曲輪内往來之節は勿論、騎馬供無用候、國持、溜詰、御三家庶流、前々ゟ騎馬供召連供馬爲牽、供鑓爲持候分、御曲輪外同勢を離、騎馬とも召連候儀は、可爲勝手次第候、尤被仰出候通、騎馬一騎か、二騎にて過べからず、其外供馬爲牽候儀、可爲無用候、供鑓之義も、右騎馬之者、爲持候鑓共、御定之數たるべく候、

一國持、溜詰、御三家之庶流、前々より供馬爲牽、供鑓有之候分は格別、近來供馬爲牽、供鑓爲持候分は、以來可爲無用候、前々より供馬供鑓有之候面々も、四品被仰付、大廣間席に不相成以前ハ、向後可爲無用候、

一供馬無之面々之内、同勢之跡より供馬ひかせ候も相見え候、勿論堅可爲無用候、

一右之外供廻り同勢至まで、右に准じ、小勢召連、往來之障に不相成樣可被申付候、〇中略

右之趣急度可被相守候、以上、

三月

〔武家嚴制錄〕二一家康公御代武家諸法度

一諸大名參勤作法之事

續日本紀制曰、不預公事、恣不得集己族、京裡二十騎以上、不得集行云々、然則不可引率多勢、百万石以下二十万石以上、不可過二十騎、十万石以下、可爲其相應、蓋公役之時は可隨其分限矣、〇中略

右可相守此旨者也

慶長二十年卯七月日

〔教令類纂初集三十五〕承應二癸巳二月七日、松平伊豆守於宅、在國大名之家來江、左之書付相渡候、

一諸大名近年參勤之砌、從者數多在之旨具聞別而、人數入用之事も無之間、先御代之通可被召連候、若急御用之刻は、近國之面々可被仰付候、此旨國元江可申遣候、以上、

○按ズルニ、此後元祿十四年、及ビ正德二年ニモ、大名參勤ノ從者增加スルヲ禁戒セシ令達、享保集成絲綸錄、憲教類典ニ見エタリ、

〔憲教類典二ノ二參勤〕享保六年丑年十月

覺

一諸大名參勤之節、從者之員數不可及繁多之旨、御代々之御條目ニも被仰出候、然共江戸中御番所火之番等被仰付候ニ付而、人數多被差出候、依之自今以後、在江戸相應ニ、大概人數之御定被仰出候事、

一近年は江戸に而御用被仰付候節、下人之內江雇人を指加へ勤させ候樣に相聞候、向後右體之儀堅無用候、殊に今度人數之儀、被仰出候上は、御定之通、急度人數差置可申候、若又少々人數有之候とも、差出被申間敷候、尤不相應之場は、被仰付間敷候間、万一人數御用之時は、勿論領內より人數召寄、御軍役之通堅可被相勤事、

貳拾万石以上　馬上拾五騎ゟ二十騎迄、但自分被召連候共足輕百貳三十人、中間人足貳百五十人ゟ三百人迄、

拾万石、馬上拾騎、足輕八十人、中間人足百四五十人、

五万石、馬上七騎、足輕六十人、中間人足百人、

壹万石、馬上三四騎、足輕二十人、中間人足三十人、

一唯今迄小人數に而被相勤事濟候場所は、尤其通たるべき事、

一貳拾万石以下、此外之知行高は、右御定に准じ心得可被申事、

〔憲敎類典〕三ノ三十六乘物　年號月日不知

家老乘物

一万石ゟ壹人　二万石ゟ貳人　五万石ゟ三人　拾万石ゟ四人　拾六万石ゟ五人　廿万石ゟ六人　卅万石ゟ七人　四拾万石ゟ八人　五拾万石ゟ九人　六拾万石ゟ拾人　五万石以上ニ而も城主ニ而無之面々、家老は乘物御免無之、五万石以下ニ而も、城主之家老は其身誓詞ニ而御免、主人添狀、

〔舊考餘錄〕五 他姓に賜はりし十八松平の事

前田加賀守一統　島津薩摩守　伊達陸奥守　黒田備前守　淺野安藝守一統　毛利大膳大夫　池田備前因伯　鍋島肥前守　蜂須賀阿波守　山内土佐守　奥平下總守庶流　松井周防守　戸田丹波守　久松松山桑名一統　鷹司彈正大弼・本庄伯耆守　越智右近將監　柳澤甲斐守

謹按るに、右十八家の外、他氏之輩へ御家號賜はれる事を聞かず、依之是を他氏十八家と稱す、御家に御由緒ありて賜はり、又は其家祖の人々、文武の功あるによりて賜はれる事なれば、其家の庶流に至るまで松平を稱するもあり、本家の當主のみ稱し、又は當主嫡子元服の時に賜はるのくさぐ〵あれど、今あづからざれば爰に略す、

〔德川禁令考〕十三附錄毛利關係 元治元甲子年八月廿四日

松平大膳大夫官位幷御一字稱號被召放旨達書　大目付へ

松平大膳大夫家來共、追禁闕砲發候條不恐天朝次第、殊ニ父子之軍令狀、家來江遣候始末、重々不

屆ニ付、父子共、官位幷御一字御稱號被召放候旨、被仰出候、此段爲心得向々江可被達候、

八月

許御所號

〔慶應三年武鑑〕足利清和源氏 本國下總 御所號

喜連川左馬頭〇下略

許屋形號

〔慶應三年武鑑〕尾州德川 本國參河 御屋形號

德川元千代樣〇下略

〇按ズルニ、屋形號ヲ許サレシ家ハ、御三家、越前福井松平、出雲松江ノ松平、島津、伊達、細川、佐竹、上杉、宗等ノ諸家ナリ、

賜將軍偏諱

〔柳營秘鑑〕一御。一。字。頂。戴。之。家。々〔但至庶子は無其例〕

松平加賀守〇前田　松平兵部大輔〇越前家　松平幸千代〇越前家　松平大隅守〇島津　松平陸奥守〇伊達

松平安藝守〇淺野　松平大炊頭〇池田　松平相摸守〇池田　松平大膳大夫〇毛利　松平筑前守〇黑田

松平信濃守〇鍋島　松平阿波守〇蜂須賀　松平甲斐守〇柳澤　上杉民部大輔　松平庄次郎〇越前家

右元服加冠之節、於御前、御字官爵被下之、御盃之上、御腰物拜領被仰付、

一御一字被下之　細川越中守

一御稱號計被下置　松平土佐守〇山内

從先規御稱號御一字不被下家々

佐竹右京大夫　藤堂大學頭　宗對馬守

一御稱號被下之家々は、御一字被下置之節、其時々改而被下之也、又は不及其儀家も有之、

島津　鍋島　蜂須賀　黑田など、御免無之内は、自氏を用ゐる事有之、

〔文政三年武鑑〕植村清和源氏 本國三河

許用葵章

榮政（新六郎、後改二家春一）出羽守

依二台命一、家之御一字拜領、傳二子孫一用之、

〔文政三年武鑑〕松平（松井、本國三河）

六條判官爲義十四男、松井冠者維義十八代孫、松平左近將監忠次、依二台命一家名實名改、御一字拜領、

源康親（松平周防守）―康重（周防守、四品）―康映（テル淡路守、周防守）

○按ズルニ、是ハ將軍家康ノ下ノ一字ヲ子孫ニ傳ヘ用ヰシナリ、

〔舊考餘錄二〕御本家の外丸の內三葵被附家々の事

御家事記云、尾州家庶流は菊座之內葵、

紀州家庶流は石井筒之內葵、近代似隅切角、內證分者、陽石井筒之內葵、

水戸家庶流は隅切角之內葵、但讃岐守丸之內葵、內證分は雪輪內葵、

田安殿、一橋殿、清水殿、越前家（越後守、越前守、出羽守、）會津家、但、御三家方庶流、御家門之面々、御紋唐花附らる、

各家々におゐて少異あり、此外幕ばかり丸葵用ところ、左兵衛佐、佐渡守、志摩守、日向守（以上越前家）隱岐守（久松）挾箱二重革の內（金紋丸葵）右各馬柄杓同用、

此外、武器幕等に御紋被用は、松平下總守（○武藏忍）松平右近將監（○石見濱田）松平隱岐守（○伊豫）松平越中守等なり、

謹按るに、右の外近世武器に限らず、追々御紋附らるゝは、松平因幡守（○池田）松平大和守、松平左兵衛佐、松平右近將監なり、又文政年中、水野出羽守御紋附御鞍覆賜りてより、これを用らる、

賜內書

〔武家格例式〕蜂須賀（葵御紋）（賜二松平御稱號一（中略）家紋卍字、五三桐柏丸、○中略）

二拾五万七千石（阿波淡路）一圓　從四位下左少將　松平阿波守齊昌

〔柳營秘鑑二〕御內書之次第

賜上使

一御三家、幷松平讃岐守〔○讃岐高松城主〕使者は殿中江招之、於躑躅之間老中謁之、御内書被相渡、使者卷物二卷拜領、

但御三家江者御書判被成下、其餘者何も御黑印也、

一松平加賀守を初、國持衆、松平左京大夫、松平但馬守、伊達遠江守、南部修理大夫、兩本願寺、使者於柳之間老中出座、御内書被相渡之、使者卷物二卷宛被下之、〔○中略〕右之外御門葉之歷々、侍從以上國持、井伊掃部頭、松平肥後守、松平下總守、暨萬石以上之使者、老中宅江招之、御内書被相渡之、使者賜物無之、

一御内書者、諸大名幼年御目見無之内不被下之、諸獻上ニ付、奉書者十一歲以上被差出之、〔○又見官中秘策〕

〔柳營秘鑑〕〔一〕上使之次第

一御三家方御參府之節、上使老中被遣之、御暇之節も同斷、

但賜物無之、爲御禮登城之時分、於御前御鷹御馬被遣之、但御嫡子方右同斷、始而御暇被進時は、御腰物被進之、

一國持大名參府之時、上使右同斷、御暇被下節、同然白銀卷物被下置、〔○中略〕

一御三家御參府御暇之時、御。家。來。御。目。見。被。仰。付、尾張紀州御兩家は、御家老、同並、御用人、大番頭迄、水戶は御用人迄罷出る、尤獻上物有之、其品は家々ニて違有之、

一松平加賀守溜間衆歸國在著之使者遂御目見、奉書老中被渡之、國持及御家門方始而入部、或は故有之、從國許爲使者家老抔被指越時、御目見被仰付事有之、

一准國主之面々、參府御暇共に上使奏者番被遣之、

一宗對馬守は雖爲國持、參府之時分、上使御奏者番被遣、御暇之節は老中被相越、古來者兩上使ニ

訪病弔死

而有レ之を、中興家臣柳川豐前守訴論之事有レ之より、上使之品を被レ貶之、參府は御奏者番被レ遣レ之由、〇中略

一國持は四品といへども、上使老中被レ遣レ之、但家之格により未レ任二侍從一內ハ、上使御奏者番被二相越一事も有レ之歟、

一國持之隱居參府御暇之時、上使御奏者番被レ遣レ之歟、勿論家々之格例ニ而違有レ之、〇中略

一松平出雲守利隆〇越中富山城主　松平大和守〇陸奥白河城主　松平左兵衛督〇播磨明石城主、此二家ハ越前家ナリ、

此三家ハ、參府御暇之時、上使御使番被レ遣レ之、白銀卷物等被レ下レ之、御禮之時分於二御前一御馬拜二領之一、

一松平肥後守〇會津城主　松平讚岐守〇讃岐高松城主　松平下總守〇伊勢桑名城主　松平但馬守〇下野高須城主

松平左京大夫〇伊豫西條城主、下總守外四家ハ皆門葉也、

右參府之節、上使御使番被レ遣レ之、御暇之時は、其前日奉書を以召二之於殿中一被二仰渡一之、〇中略

一萬石以上諸大夫は不レ及レ申、御門葉之歷々も、右之外は各於二殿中一御暇被二仰渡一之、〇下略

〔柳營秘鑑〕二病氣御尋幷御悔之上使奉書御香奠之次第

一御三家、幷國持衆、病氣大切之節爲二御尋一上使被レ遣レ之、御三家江は老中、國持江は御奏者番被二相越一、老中病氣之節は、御小姓衆被レ遣レ之、何も品により賜物等有レ之、但國家之面々在國之時、病氣大切之節、御尋之奉書、宿次を以被レ下レ之、國持之外も、御三家之庶流抔も、品により被レ下レ之事も有レ之、

一御三家逝去之時、鳴物音曲七日、普請三日停止被二仰出一、爲レ伺二御機嫌一、總出仕有レ之、但西之丸江は御家門計登城、

御香奠被レ下候員數

一尾張殿　白銀百枚　紀伊殿　右同斷　古來ハ千枚　水戶殿　白銀五十枚　古來ハ五百枚

一國持卒去之時は、其息江上使被レ下レ之、在國にて卒去之時は、御悔之奉書被二成下一、御香奠拜二領之一、其

員數、

加賀　越後　越前　陸奥　薩摩

右白銀五拾枚　古來ハ五百枚

〔大猷院殿御實紀七十七〕慶安三年五月七日、尾張大納言義直卿今朝辰剋卒去せらる、よて尾紀水三邸へ酒井讃岐守忠勝、松平和泉守乘壽御使す、諸大名ハ登營して御けしき伺ふ、

殿上元服

〔武家擎要〕殿上元服之家（賜御諱字）

御三家、加州（前田）○越州（松平）○薩州（島津）○仙臺（伊達）○肥後（細川）○因州（池田）○筑前（黒田）○藝州（淺野）○備前（池田）○長州（毛利）○佐賀（鍋島）○阿州（蜂須賀）○米澤（上杉）○雲州（松平）○津山（松平）

拜謁

〔武家擎要〕月次登城無之日　二月朔日、三月朔日、御禮無之、　十五日御禮ナキ月、四、七、六、　廿八日御禮在之月、正、二、四、七、十二、

〔憲教類典三ノ二御禮〕元文二丁巳年十月廿六日

左近將監殿（松平乘邑）伊豫守殿（本多忠統）御渡

一朔望之外廿八日御禮可有之分　正月、二月、四月、七月、十二月、

一廿八日御禮無之分　三月、五月、六月、八月、九月、十月、十一月、

右之通、向後可被相心得候、若右之内廿八日、御禮被爲請候はゝ前以可相觸候、

〔泰平年表五編三〕文久二年閏八月廿二日、御變革被仰出、（中略）正月廿八日、四月廿八日、五月廿八日、七月廿八日、九月朔日、右日限以來、月次御禮不被爲請候、其外是迄之通ﾘニ候、

〔寛永小說〕一大猷院樣御治世の初、御譜代衆御黒書院ニて月次の御禮有之、若御不例の砌ハ、出御前に上使を以御頭痛氣ニ被成御坐候間、御譜代衆ハ御心安く候間、御通り掛に御目見致し候樣に、表向ハ御隔心の儀に候間、例の通に御禮御請可被遊の由被仰出、出御の節、御黒書院御廊下に

並居候て、致御目見候、其節又御立とゞまり被遊、御腰をすへられ、御手を御おろし被遊、右之通又又上意有之候、御他界まへ、御病氣に被為成候節より、御譜代衆も御表へ御出し、御白書院にて一同に御禮御請被遊候、今以て其例なり、

〔幕朝故事談〕寒暑御機嫌伺、雁の間登城、老中謁なり、帝鑑の間は月番老中へ留守居を以伺ふなり、

〔柳營秘鑑二〕西御丸江出仕之覺　享保十巳年五月廿五日被仰出、

一年始、御本丸江登城之面々、其當日西丸江も出仕謁奏者番、退出、但太刀馬代ハ御本丸御納戸江納之、

五節句、八朔、　御三家、万石以上幷嫡子、○中略　月次朔日　御三家、松平加賀守、溜詰、　十五日、万石以上幷嫡子、

惣出仕　御本丸江罷出候節ハ、西丸江も出仕候事、惣而御禮事、西丸江も出仕候事、

〔武家擥要〕登城之節刀番御玄關へ上ル分

加州○前田　越州○松平　薩州○島津　仙臺○伊達　長州○毛利　因州○池田　津山○松平　溜詰、庶子方、

〔德川禁令考三十八大名家格〕享保三戊年四月

登城之節刀持之儀ニ付達

一先規諸大名登城之節、御玄關御敷臺之上、刀持上リ候ハ、御三家方、御連枝、越前家など、又ハ品も有之面々刀持候事ニ候之處、近年其外之面々、刀持も猥に罷成候付、向後此書付之通、相定リ候間、可得其意候、

一切石之上ニ罷在候、刀持も有之候得共、場所もせばく、其上差別も難成候間、自今以後ハ、切石之上江廻リ候者も無用候、

右表向四品以上之面々、家來呼寄、口上ニ而可申聞旨、大目付江山城守○老中戸田忠眞渡之、但寫取ら

せ候事ハ可レ爲ニ無用ノ旨申渡之、

御玄關御式臺江刀持上り候分

松平加賀守　松平肥後守　松平讃岐守

松平若狹守　松平越後守　松平出雲守

松平伊豫守　松平右衞門督　松平日向守

松平大學頭　松平播磨守　松平大膳大夫

松平左京

右之面々家來大目付宅江呼寄寫取らせ可レ申旨、大目付江山城守書付渡レ之、

〔東武實錄七〕元和六年八月、是月〇中略公〇二代秀忠ノ姫君〇東福門院御入内ニ依テ一万石以上ノ諸大名樽肴ヲ獻ズ、領知ノ多少ニ依テ差アリ、

〔大猷院殿御實紀十六〕寛永七年九月十二日、京にて新帝〇明正御卽位あり、〇中略尾紀駿水の四卿及び十万石以上の輩よりも、使奉りものさゝぐること差あり、

〔享保集成絲綸錄三〕延寶六午年六月

一東福門院樣御香奠獻上之次第

一五万石ゟ九万九千石迄　白銀五枚　一拾万石ゟ拾九万石迄　白銀拾枚

一二拾万石ゟ三拾九万石迄　白銀二拾枚　一四拾万石以上は　白銀三拾枚

一拾万石以上之嫡子　白銀三枚　一三拾万石以上之嫡子　白銀五枚

白銀拾枚　甲府中將殿〇綱宣家　白銀拾枚　尾張中將殿〇綱誠　白銀拾枚　紀伊中將殿〇綱敎

白銀五枚　水戶少將殿〇綱條　白銀二拾枚　千代姬君御方

以上

一同御香奠獻上之次第

一白銀三枚　松平左京大夫〇頼純、以下十二人略、

以上

一隱居之面々獻上之次第

一白銀五枚　松平新太郎〇池田光政、以下四人略、

〇按ズルニ、松平頼純以下十二人ハ、五萬石以下ノ大名ニシテ、格式他ニ異ルモノナリ、

〔享保集成絲綸錄 三〕貞享四卯年三月

御即位御祝儀獻上之覺

禁裏(東山)江
一銀三拾枚　三拾万石以上

一同貳拾枚　二拾九万石ゟ拾万石迄

一同拾枚　九万石ゟ五万石迄 但五万石以下ニ而も、四品以上ハ獻上也、

本院(後西院)新院(靈元)江
一銀貳拾枚　三拾万石以上

一同拾枚　二拾九万石ゟ拾万石迄

一同五枚　九万石ゟ五万石迄 但五万石以下ニ而も、四品以上ハ獻上也、

〔享保集成絲綸錄 三〕寶永六丑年十月

禁裏江
一御太刀御馬代黄金三枚

一禁裏御移徙之御祝儀、以使者可被獻候、日限之無構、使者京著次第、獻上之筈ニ候、衣服等之義、松平紀伊守〇所司代松平信庸可被得差圖候、以上、

松平加賀守〇前田吉德、以下十一人略、

御太刀御馬代黄金貳枚

幕府獻上

松平肥後守（〇正容、以下二十三人略、）

御太刀御馬代黄金壹枚

松平左京大夫（〇頼邑、以下十七人略、）

元文二巳年四月

一仙洞（〇中御門）崩御ニ付而、四品拾万石以上ゟ、京都江以使者御香奠獻上之儀、享保十七子年、靈元院崩御之節之通可被差上候、（〇下略）

〔幕朝故事談〕諸大名御内所獻上ハ、元方御納戸へ願候、表向獻上ハ拂方へ、

〔柳營秘鑑二〕三季御時服若菜御祝儀御歸代獻上

一御三家江、松平加賀守初、万石以上之面々、重陽歳暮御熨斗目、染御小袖二、端午御帷子御單物二、使者を以差上之、上杉彈正大弼ハ、前々より三季共に黄金壹枚宛獻上之、總而三季之獻上ハ何方より御觸も無之、尤諸家より窺ニも不及、御三家之御窺相濟候を承合差上之、例年五月三日（享保十九甲寅年五月より二日ニ改）九月三日十二月廿一日、近來大方此日限に獻上之、然共極月は節分早き年はいつも節分前に獻上之、

七夕御祝儀獻上之列（是ヲ歸代ト云、則御生靈之事也、〇中略）

一金一枚　尾張殿　一同　紀伊殿

一同　水戸殿　一金一枚 鯖二百刺　松平加賀守

一同　松平讚岐守（〇以下十六家略）

右於柳之間進納之（但御三家は、御部屋住にても、黄金被指上之、）

大納言様江諸獻上之覺

一端午重陽歳暮之御祝儀物、公方様江當時差上候通、時服二宛可被差上之、

一年頭八朔之御太刀馬代、公方様江献上之員數之通、可被差上候、
一參勤御禮獻上物、公方様江當時差上候通、
白銀員數　外之品被差添不及
拾万石以上　金壹枚　外之品被差添不及
（五万石より九万九千石迄）銀三枚　右同断
（一万石より四万九千石迄）同三枚　右同断
右御太刀差添候事
一歸國歸城御禮獻上物、公方様江御樽肴、幷外之品相添被差上候面々、御樽肴計、
三種二荷被差添面々は、二種一荷、　二種一荷被差添面々は、一種一荷、　一種一荷被差添面々は、箱肴一種、
○按ズルニ、此外若菜祝儀、七夕祝儀ノ鯖代、口切之御茶、及ビ諸大名年中御機嫌伺等、西丸ニ獻納スル所ノ數、本丸ニ同ジキヨシ見エタリ、
〔殿命式六〕御臺様江被御服代五万石以上、白銀獻上之、其品端午（五万石より九万石迄）白銀二枚、重陽歳暮同五枚、拾万石より十九万石迄、端午同三枚、重陽歳暮同五枚、二拾万石より端午五枚、重陽歳暮同十枚、
〔文政三年武鑑〕尾張中納言齊朝卿○中略
時獻上（正月三日）御盃臺（七日）長鮑御樽（上巳）同断（歸國御禮）三種二荷（歸國上使）二種一荷（四月八日）十しつき鮓（四月）小鮎鮓（四五月内）鮎鮓（五月ヨリ八月マテ）宿次同十度（六月朔日）氷餅（六七月内）上條瓜（暑中）品不定（七月六日）御鯖代黄金（九十月二三度）甘干柿美濃柿（十一月御在府之御時計）御茶御水菓子類、生御肴、御樽宮重大根、（十二月）干細魚鯛腸鹽辛うるか、粕漬鮎枝柿、（一箱）雁、鶴、
○按ズルニ、此外紀伊水戸以下獻ズル所ノ産物各差アリ、今一例ヲ掲載ス、

〔殘集柳營秘鑑〕八御三家方御參府之次第

尾張中納言殿

一白銀五十枚
卷物二

一卷物二ツ、
銀馬代

御家老成瀨大和守
成瀨豐前守

一銀馬代ツ、

瀧川彥右衞門
定右衞門
富永大膳
遠山

紀伊中納言殿

一白銀五十枚
卷物二

一卷物二ツ、
銀馬代

岡野石見守
木下次郎四郎

一銀馬代

廣田八郎左衞門
儀右衞門
宮田兵衞
菅沼半兵衞

右之通、尾州殿、紀伊殿、御參府之節は、右之品に而獻上物有ㇾ之、且亦御家老同並之面々まで、獻上物等有ㇾ之事也、

〔獻禮式上〕凡諸御禮ニ付獻上物高並之例

家督之御禮

三拾万石以上 卷物廿、或ハ綿五十把、又金五枚、馬二疋、銀百枚、御刀

二拾万石より 卷物十、或ハ綿三十把、又金五枚、御馬一疋、銀五拾枚、御刀

十万石より 卷物廿、或綿三十把、三十五御馬一疋、家ニより三十枚又金、銀三御刀差上

五万石より 卷物五、或綿廿把、金三枚、御馬一疋

万石より四万石迄 二万石以上ハ卷物二、五万石以上何も卷物五、金二枚

隱居之御禮

三拾万石以上 綿廿把、或五ハ金馬代、卷物十

五万石より惣而 卷物五、万石ハ金馬代、金馬代計

初而御目見

三十万石以上 卷物十、御馬、次男ハ銀卅枚、或ハ金二、卷物、金馬代、卷物五、馬代五

右ニ付父御禮 綿五十把、又ハ卷物計リノ家格モアリ、或ハ金馬代、綿廿把、銀馬代、卷物五、馬代五、綿廿把、家モアリ、

十万石以上 卷物五

右ニ付父御禮 綿廿把、繻子ハ卷物五、銀馬代

五万石以上 卷物五、銀馬代、但家督金馬代

右ニ付父御禮申上之、獻上物無之、

万石(卷物二、銀馬代、但父御禮三万石以上以下城主ニても御禮申上す、)

一万石以上、家督ニ而諸大夫官位之御禮、

五万石以上(金馬代、但五万石以上ニても部屋住ハ銀馬代)

五万石以下(銀馬代、〇中略)

御三家方之外(加賀卷物二十、薩摩、陸奥、兩家卷物十、)

婚姻之御禮

拾萬石迄(卷物十)　　拾万石以下五万石迄(卷物三)

五万石以下一万石迄(卷物二、但家ニより三卷も有之)

〔駿府政事錄 一〕慶長十六年九月五日、國々諸大名、上重陽之御服云々、

〔台德院殿御實紀 一〕慶長十年五月朔日、將軍宣下の賀儀として、諸大名二條城へまうのぼる、(烈祖成績、伏見城につくる、)外樣のともがら、銀、時服を獻じ、譜第の衆よりは太刀並に馬代靑銅三百疋を獻ず、

〔憲敎類典 三ノ三 獻上〕明曆三丁酉年十二月十一日

覺

一拾万石以上、國持大名迄先從當年三ヶ年之內、參勤之進物時服十、御太刀馬代金壹枚、時服三重二重、分限に應じ、以此等之內可上之、

九万石より五万石迄　太刀馬代金壹枚

四万九千石より以下　同　銀壹枚

一五万石以上國持大名、歲暮之御祝儀進上、呉服五重三重一重、此內を以、可差上之、右分限に應じ、端午重陽には猶以爲減少、音信贈答も、參勤端午重陽歲暮無用たるべく事、(〇中略)

寛文二壬寅年十一月廿一日

覺

一壹万石以上四万九千石迄之面々、歳暮之御小袖一重宛差上可申旨被仰出候、

一五万石以上之面々は、火事以後之通、差上可申之旨被仰出候、

〔常憲院殿御實紀十六〕貞享四年七月廿九日、けふ万石以上に、八朔太刀奉るの日、病臥又は喪制にてまうのぼらざる輩、病者は當日使もて獻ずべし、喪制は忌はてゝ獻ずべしと令せらる、

〔有德院殿御實紀十四〕享保七年三月十五日、けふ御法會の式減省の事を令せられ、又贈遺禮物奢侈を極め、外をかざるのみにて、實儀を失ふ風をなせば、これ又今より減省をむねとすべし、〇中略獻物禮物省減のさまは、是まで金百枚以上さゝげしは、今より後、十枚五十枚は五枚、三十枚二十枚は三枚、十枚五枚は二枚、五枚より下は一枚たるべし、〇中略このほか領地に產するもの奉るも數をはぶくべし、酒肴の外、封地の產にあらざるは、さゝげ奉ることをとゞめらる、すべて數多く獻じ來れるは、其の品のうちを減せらるべし、端午重陽歳暮の佳儀に時服さゝげ奉るも、封地の大小にかゝはらず、すべて一襲に定めらる、得物遺物等にものさゝぐることも、これまたとゞめらる、よりてたまはる所の賻銀の數も、これに准じて省かるべし、たゞ褒賜并ニ臨時の賜は、もとのごとくたるべし、

〔憲敎類典三ノ三獻上〕天明八戊申年七月十五日

松平越中守殿信〇定御渡

只今迄領中之產物獻上は、先々より相定候通に候得共、格別御用にも無之譯柄等も無之品、無益之雜費相懸り候處、仕來りを以、獻上有之候も如何に候之間、右等之品有之候はゞ追々取調候て、品替等之儀可相伺候、

上ケ米

右之通、万石以上之面々江可被相觸候、万石以下に而も可然向江は可被達候、

〔泰平年表五編三〕文久二年閏八月廿二日、年始、八朔、御太刀馬代、參勤家督、其外御禮事ニ付而之獻上物は、是迄之通可爲候事、乍去手數相懸候品は、品替相願不苦候事、右之外獻上物は、都而御免被成候、尤格別御由緒有之候獻上仕來候分は、相伺候樣ニ可被致候事、○中略今度獻上物御免被仰出候得共、初鶴、初菱喰、初鮭之儀は、是迄禁裏へ御進獻ニも相成候儀ニ付、右品獻上仕來候面々、○中略只今迄之通、獻上候樣可被致候事、

〔憲教類典二ノ二參勤〕享保七壬寅年七月三日

享保七寅年七月三日、在府万石以上之面々被爲召、○中略上意水野和泉守之○忠申渡、左之書付御右筆讀之、

一御旗本ニ被召置候御家人、御代々段々相增、御藏入高も先規よりは多く候得共、御切米御扶持方、其外表立候御用筋、渡方に引合候而は、畢竟年々不足之事に候、○中略夫ニ付御代々御沙汰も無之事に候得共、萬石以上之面々より、米差上候樣に可被仰付と思召候、左候はねば、御家人之內、數百人も御扶持可被召放より外ハ無之候故、御耻辱をも不被顧被仰出候、高壹万石に付、米百石之積り可被差上候、○中略其內年々上ケ米被仰付に而可有之候、依之在江戸半年宛被成御免候間、緩々致休息候樣にと被仰出候、○中略

一今度萬石以上より米差上候儀、幷參勤之時節被遊御用捨被差延候趣、委細別紙被仰出候、夫ニ付、參勤御用捨無之面々、又は御暇等不被下、或當地在役之輩は、米差上候儀被仰出間敷思召候、然るに、御勝手御不如意故を以、米等差上、御用に立候儀は、何も可爲本意勿論に候、然上は、縱雖在役之者、一統に被仰出候樣にと、年寄共達而相願候付而、難默止被思召、左候はゞ米にて可差上旨被仰出候條、參勤御用捨無之面々も、御暇等不被下輩、一万石ニ付、百石之割合、三分一之積り

を以て可差上候、右之趣可申聞旨被仰出候、○中略

一上ヶ米之儀、大坂御城江成共、當地御藏江成共、面々勝手次第、上ヶ米高半分宛春秋兩度可被相納候事、○但書略

一當年は上ヶ米高半分之積り、秋中可被相納候事、

〔有德院殿御實紀十五〕享保七年七月廿日、尾紀水の家老をめされ、さきに三家より米さゝげらるべき旨聞え上られしこと、御感におぼしめさるゝむね仰出さる、よりて尾紀よりは二千石、水邸よりは、千石さゝげらるべしとの御事なり、

〔憲敎類典二ノ二參勤〕享保十五戌年四月十五日

一御勝手向不調ニ付、近年上ヶ米被仰付、御用も被辨、御機嫌被思召候、右上ヶ米之儀、今年ニも御用捨被遊度被思召候得共、未御勝手向難相調候旨、役人共申ニ付、來年より上ヶ米被遊御用捨候、○下略

〔公儀向聞書〕鶴拜領

一御兩殿御三人方、國持衆、少將以上、在府勿論、雖在國、宿繼を以被遣之、天和二年より、宿繼にて被遣事止之、但御三家江ハ被遣之、

一國持衆爲侍從人、在府之時計鶴拜領之、

一國持侍從之人も、家督相續以後、五七年之内は雁拜領之、

一國持之外、鶴拜領松平讚岐守賴重、保科筑前守、○中略

一國持之總領、四品以上拜領、尤父在江戶之時も被下之、右之外御門葉雖侍從以上、雁拜領、○中略國持並之衆、四品衆、御譜代之城主拜領之、○中略外樣大名に而、南部大膳大夫隱居、立花紅雪雁拜領也、天和元年より、四品以上計拜領、南部大膳大夫ハ如先規五位に而被下之、

雲雀拜領

一御兩殿御三人方、國持衆、御連枝方、御譜代衆、城主之分〇中略江被遣之、但天和二年より、御三家并甲府殿千代姫君樣計被遣之、其外相止、〇中略

一御狩之節、御拳之鳥、御兩殿御三人方被遣之、又御料理被仰付、於殿中御譜代衆江被下之、〇下略

〔柳營秘鑑二〕御鷹之鳥巣鷹等拜領之次第

一巣鷹は、御在府之御三家江計被進之、

一御鷹之鶴拜領は、御三家、松平加賀守被下之、御三家江上使者兩御番頭、加賀守江者御使番被遣、松平陸奥守、松平大隅守、在府之節、享保十四年初而拜領被仰付、其外在國之國持衆江壹年に二三人程宛有、次第以宿次被下之、

一御鷹之雁雲雀、御家門、國持之面々、准國主、四品以上、在府之時節により、右兩品之內、壹通り被下之、四品以下之外樣之大名も、家に寄拜領之、南部修理大夫江被下之、御譜代衆は雖小身、城主以上被下之、何も上使御使番勤之、〇中略

一御三家御在國之時者、招家來於殿中鶴被遣之、

〔要筐辨志下〕紀尾御國許初而御暇被遣候節、御拜領物左之通、

銀百枚　卷物五拾卷　御鷹三　御馬三疋　於竹之間御饗應　御座之間ニ而御對顏

御盃事有之、御刀代金五拾枚被進之、

一水戸樣初而御在所江之御暇被進候節、御拜領物左之通、

銀百枚　卷物貳拾　御刀備前清光代金貳拾枚　御鷹三　御馬貳疋被進之、御饗應之式前ニ同じ、聊相違有之、

〔柳營秘鑑一〕上使之次第

一國持大名參府之時、上使右同斷、被遣、○老中、御暇被下節同然白銀卷物被下置、爲御禮登城之節、於御前御馬拜領、但陸奥佐竹は、馬所ニ而御馬獻上候故、拜領無之、歸國之上爲御禮使者を以御肴等獻上之、右使者登城之節、謁老中退出する也、同御暇被下之節も、於殿中奉書被相渡之、使者江卷物被下置之、准國主之面々の使者も同然也、○中略

一御三家之外ニ、御暇之節御鷹拜領は松平加賀守○前田溜間之面々也、

〔要筐辨志下〕一拾万石以下御馬拜領之家、石川主殿頭、本多中務大輔、

〔續泰平年表十〕弘化元年五月十三日、南部信濃守利濟、思召を以て、代々不拘官位、御鷹之鶴可被下旨被仰出、

合力米

〔大猷院殿御實紀七十五〕慶安二年八月十日、合力米を賜ふ、小松中納言利常卿、松平長門守秀就、松平薩摩守光久は二千苞づゝ、松平新太郎光政、松平阿波守忠英、○中略は千苞づゝ、立花左近將監忠茂、京極丹後守高國、伊達遠江守秀宗五百苞づゝ、宗對馬守義成は三百苞給ふ、尾紀兩卿は請はるまゝに賜はるべしと仰下さる、

拜借金

〔駿河土產〕權現様○家康江戸御新城ゟ駿府江御引移之節御讓金之事

其後尾張殿○義直江戸上屋敷自火ニて燒失に付、普請料として拾萬兩、紀州殿○頼宣江和歌山普請之時拾萬兩、水戸殿○頼房江三萬兩、右之通拜借被仰付候處、少々宛も御返濟あられ可然旨、御勘定頭衆より被申越候所、尾張殿御返答被成候は、我等江御借被成たる御金之義は、元來權現様御隱居料之内を以、御貯置被遊、御他界之節、御遺物として我兄弟三人江御讓金之殘りの儀なれば、我等拜借致候、返納するには及間敷と被仰候に付、紀伊殿、水戸殿御拜借金之儀も、御沙汰なしに罷成候と也、其節外々の御大名衆江も拜借金被仰付候得共、いづれも共ニ御定之通、急度返上あられ候處、伊達正宗江之御借金返上相滯り有之候を以て、御勘定方ゟ催促有之候へば、陸奥守忠宗

返答被申候者、我等代になりて、拝借と申儀は不仕候、〇中略親代に御借被成候御金之義に候間、親存生之内に、返上可被仰付義に候處、其通りに被成置、私に返上致候様にとの儀は、迷惑仕候と有様成被申様に付、埒明不申、御譜代大名之内にて、松平越中守方ニも、拝借金相滯有之候に付、是又御勘定頭衆ゟ返上あられ可然と有之處、〇中略是も埒明き不申、兎角向後之義は、諸大名江御借金被仰付間敷との譯に被仰出候と也、

〔憲教類典三ノ七拝借〕明暦三丁酉年二月

屋敷焼失之面々御金拝借幷被下覺

銀百貫目	壹万石ゟ壹万五千石迄
同百三拾貫目	壹万六千石ゟ貮万五千石迄
同百五拾貫目	貮万六千石ゟ三万五千石迄
同百七拾貫目	三万六千石ゟ四万五千石迄
同貮百貫目	四万六千石ゟ五万五千石迄
同貮百三拾貫目	五万六千石ゟ六万五千石迄
同貮百五拾貫目	六万六千石ゟ七万五千石迄
同貮百七拾貫目	七万六千石ゟ八万五千石迄
同三百貫目	八万六千石ゟ九万九千石迄

右之通り被爲借候、來戌年ゟ十ヶ年上納あるべき事、〇中略

享保十七壬子年九月廿八日

一西國、四國、中國、領地、稻ニ虫附候場所之大名江於帝鑑之間、雁之間、大廊下、拝借金被仰候旨、以御書付松平左近將監殿〇乘邑被仰渡候趣、〇中略

壹万石ゟ壹万九千石迄　金貳千兩
二万石ゟ三万九千石迄　同三千兩
四万石ゟ四石九千石迄　同四千兩
五万石ゟ六万九千石迄　同五千兩
七万石ゟ九万九千石迄　同七千兩
拾万石ゟ拾四万九千石迄　同壹万兩
拾五万石ゟ拾九万九千石迄　同壹万貳千兩
貳拾万石ゟ貳拾九万九千石迄　同壹万五千兩
三拾万石以上　同貳万兩

右之通拜借被仰付候、金子之儀は、於大坂可相渡候、上納之儀は來丑年は被成御用捨、來々寅年ゟ五ヶ年賦可有上納候、以上、

〔天明集成絲綸錄四十三〕天明六午年九月

御勘定奉行江

岩城伊豫守

駿府加番被仰付、急ニ罷越付而、金千兩拜借被仰付候間、相談可被致候、

〔政化間記續筆〕天保五年十二月廿七日、宗對馬守義質、朝鮮國連年不作、其上去歳王城燒亡ニ依て、貿易斷に及び、對馬守勝手向難澁之旨、願に依て、金一万兩拜借被仰付、

〔柳營秘鑑二〕病氣御尋并御悔之上使奉書御香奠之次第

一諸大名十七より內に而卒去之時、御大法之通跡目不仰付、然共御三家は、御幼年に而茂御相續相違無之、其餘も、弟或は一類を以、思召次第新知被仰付、只左之三家而已、縱幼年に而も、跡式無

相違被仰付、勿論幼年之輩は、順次第看坊をも被仰付、

松平陸奥守　大國を御預ヶ被為置故之由

宗對馬守　代々朝鮮國御用被仰付置故之由〇中略

一自幼少家督、其身病氣に而、御目見未相濟、同十七歳以上ニ而も養子之願不罷成御法也、併願之品により思召を以、養子被仰付候筋も有之、

〔要筐辨志下〕一國持家幼少ニ而家督候得ば、國目付被遣候事、但其家近き御續柄等有之候得ば不被遣候との儀、御書付に而被仰出候事、

〔梅香軒叢書十二〕家督之席

御白書院椽頬　國持大名

帝鑑之間　准國守

芙蓉之間　御譜代衆　雁之間詰　菊之間椽頬詰

波之間　外様大名

但御三家、幷松平加賀守ハ上使を以被仰出、

〔要筐辨志下〕一國持家幷御連枝方家督ニ而、忌中之内、三十五日限、御老中宅に於て被仰付候、其外諸大名は、忌明之上登城、於波之間被仰付候事、

〔幕朝故事談〕大名の家の後見は、憲廟〇綱吉の御代より御法度被仰付候、是は後見自分の子に讓たがりて、亂を起し候故なり、

〔德川禁令考三十八封土朱章〕御朱印書式

寛文四年、家綱公御時、壹万石以上之面々、被成下領知之御朱印、小笠原山城守長頼、永井伊賀守尙庸奉行之、同領知目錄、判形長頼尙庸書之、

一拾万石以上は、無官ニ而も御書判、

一拾万石以下之四品は、御朱印、但書留之詞可ㇾ令ㇾ領知ㇾと有ㇾ之而、令ノ字加ㇾ之、

一國主へは、何國一圓と書ㇾ之、

一至ㇾ叙爵無官ㇾ迄拾万石以下壹万石迄は御朱印、但可ㇾ領知ㇾと有ㇾ之而、令字除ㇾ之、

一御朱印は圓郡之時、内ノ字なし、目錄何國何郡一圓と計也、○下略

〔憲教類典 大名二ノ一〕寛文四丙辰年四月五日

加賀能登越中三ヶ國、百貳拾万貳千七百六拾石内、加州江沼郡能美郡之内七万石、越中婦員郡新川郡之内拾万石、能州四郡之内壹万石、以上拾八万石餘之殘、百貳万貳千七百六拾石、并近江國高島郡之内兩村貳千貳百六拾石餘、都合百貳万五千石餘、目錄別紙在ㇾ之事、如ㇾ前々ㇾ宛ㇾ行之ㇾ訖、全可ㇾ致ㇾ領知ㇾ之狀如ㇾ件、

寛文四年四月五日　御判

加賀中將殿

〔享保通鑑 二〕享保二年九月十一日、御黑書院出御、

御判物	御廣蓋	一	侍從國持已上四品十万石已上	同	同	十万石已上
御朱印	御廣蓋	一	十万石已下之四品御譜代衆	同	同	外樣万石已上
同	同		詰衆	同	同	詰衆並

右侍從以上十万石以下は、順々出座、上意有ㇾ之頂戴退去、但阿部豐後守○正喬相渡ㇾ之、十万石以下よりは、御次ニ而頂戴被ㇾ仰付ㇾ候段、老中申渡順々出座也、御廣蓋都合六ッニ而六度ニ中奥御小性衆持出、御判物頂戴之面々計、御直之上意有ㇾ之候、○下略

〔憲教類典 大名二ノ一〕承應二癸巳年二月十三日

上杉喜平次代替之時御條目

條々

一家中之輩、并領中仕置之儀、可レ爲レ如ニ彈正少弼時一事、

附、町人百姓等不ニ困究一之樣、仕置可ニ申付一事、

一萬事家老之輩遂ニ相談一仕置可ニ申付一也、雖ニ相究一義於レ有レ之は、依ニ事之品一可レ致ニ言上一事、

一於ニ隣國一何篇雖レ令ニ出來一、無ニ下知一而不レ可ニ出合一爲に、身依其仁體申ニ上之一可ニ相結一事、

一切支丹宗門之儀、最前度々如レ令ニ禁制一彌堅可ニ申付一事、

右條々、可レ相ニ守此旨一者也、

承應二年二月十三日　御黒印

上杉喜平次どのへ

○按ズルニ、此他大名襲封之例、諸書ニ記スル者多シ、今玆ニ一例ヲ示ス、次條轉封、除封モ亦同ジ、

分封

〔恩榮錄中〕元和八年

分知三万五千石 丹後守高知二男　丹後田邊　京極修理亮高三

分知一万石 丹後守高知養子、元高三千石、合一万二千石、　丹後峯山　京極主膳正高通

增封

〔東武實錄二〕元和二年、是年、○中略 松平甲斐守忠良下總國關宿城采地四万石ヲ轉ジ、濃州大垣城食邑五万石ヲ賜フ、一万石加賜、

打出シ高

〔恩榮錄下〕天和三年　二万石高直 五月七日合十萬石　南部大膳大夫重信

元祿九年　新田三万石高直 七月四日合十萬石　伊達遠江守宗贇

元祿十四年　七万石高直 五月廿五日合三十五萬石、先ニ嫡良賴隆が內分四萬石を進し賜り、井新墾田三萬石を加られ、祿數となる、

水戸宰相綱條

文化二年　二万四千石高直（四月十五日合七萬石）　津輕越中守寧親

文化五年　十万石高直（十二月十八日合廿萬石）　南部大膳大夫信敬

五（〇五恐三誤）万石高直（合十萬石）　津輕越中守寧親

〔續日本王代一覽後記〕文化二年五月十五日、津輕越中守寧親（奥州津輕四万六千石）蝦夷地御用連年出精ニ依テ、格別ノ思召ヲ以テ、七。万。石。高。ニ。仰。付。ラ。ル。、旨、波間ニ於テ老中列座、土井大炊頭（利和）傳達ス、

五年十二月十八日、南部大膳大夫利敬（本高十万石）二拾万石ニ仰付ラレ、侍從ニ任ゼラレ、津輕越中守寧親（本高七万石）十万石ニ仰付ラレ、四品ニ叙セラレ、東西蝦夷地一圓ノ警固、永代右兩家ヘ命ゼラルル旨、御白書院緣頰ニ於テ老中列座、青山下野守（忠裕）傳達ス、

〔支配所預所石高之記〕御預リ所之分

一高壹萬四千石餘　松平加賀守

能登國、羽咋、鹿島、鳳至、珠洲、　期月七月

一高拾貳萬三千石餘　松平肥後守

陸奥國會津大沼　野州鹽谷　越後國魚沼　期月正月、四月、七月、

〇按ズルニ、此他松平越前守、松平出羽守、松平隱岐守以下ノ諸大名ニモ公料ノ地ヲ預ケシ事ヲ載セタリ、今一例ヲ示ス、

〔要倉辨志下〕一於國々御領之內御預之分、當時左之通高増減あり、來る何年迄五ヶ年御預之御書附出、又五ヶ年目伺之上、又何ヶ年と被仰出候事、雖然代々右之通ニ而御預有之候事、不束成儀共有之候得バ被召上候事、

轉封

松平越前守　松平加賀守〇以下十八人略

一松平越後守、秋元但馬守兩家には、無年貢と申、御預領有之候事、

〔有德院殿御實紀十三〕享保六年閏七月廿九日、けふ松平讃岐守賴豐、松平隱岐守定英に公料の地をあづけらる、

〔續泰平年表八〕天保十年十月廿九日、御書付、万石以上之面々江、御預所被仰付候儀、以來國持大名ハ新規之御預所ハ被仰付間敷候間、可被得其意候、是迄御預所有之分も、其者家督之節ハ、伺書差出可申儀ニ付、其時々評議も可有之候間、三年歟、五七年迄之年數ニ相定、來ル何ヶ年之間御預所、是迄之通可被仰付候間、右年數ニ至リ、評議之節、兼來取扱候善惡、且馴染過候樣申類、吟味書差出候節ハ、申聞候樣可被相心得候、其節時宜ニ寄、猶又預所年限被仰付候儀に可有之候間、此旨兼而相心得、其時々右之趣を以、評議も致し申聞候樣可被致候、且又前々ゟ御預所ニ相成來候間、格別之譯合も有之、迚も外御預所、并御代官所にも難相成分ハ、不及年數是迄之趣ニ而、評議致し可被申聞候、右者寛政元年相達候得共、年歷候ニ付再達、

〔東武實錄八〕元和七年七月十九日、本多下總守俊次、江州膳所ノ城采地三万石ヲ轉ジテ、三州西尾城采地元ノ如クニテ賜フ、堀三右衞門、德山五兵衞引渡ノ撿使トシテ西尾ニ趣ク、時ニ仰出サル趣、

覺

一今度御國替之乘、百石ニ付一人一疋にて二日路可相送之、并奉公人之儀、不依上下國替之所迄令供主人相談之上、可令歸國、主人は無相違可返遣事、〇中略

一去年未進事、正月より四月中は、先地頭可爲所務、五月以後は弃破之事、

元和七年七月廿八日　土大〇土井大炊頭利勝、以下二人略、

〔寬曆集成絲綸錄二十二〕寬延二巳年十二月　牧野越中守〇貞長

其方領分之內、亡父備後守〇貞通所司代相勤候節村替被仰付候、上方三万石、此度外場所に而御引替被下候間、被得其意御勘定奉行〇江可被談候、

減封

十二月

〔藩翰譜八下佐竹〕大御所〇家康も老たる父〇義重が歎き申所哀なりと思召されけん、させる御咎めもなし、同き七年〇慶長五月八日、義宣伏見に侍ひしを召され、常陸國をば收公せられ、八十万石出羽の國秋田の地を賜て移さる、廿万五千石餘此日常陸國に御使を下され、父義重を始とし、宗徒の家人等にも此由を仰せ下されたり、

〔三王外記憲王〕王〇五代綱吉於諸侯能用其威、〇中略諸侯有罪、削地徙封、若貶爵秩者、宗室則越前侯光通、五十万石削其半、姫路侯直知十五万石削其半、收姫路城而徙封日田、其他本多忠尙万石削三千石、而除侯籍、白川侯忠弘、十五万石削五万石、徙封山形、西郷治員万石貶其半秩、而除侯籍、宇多侯信武〇織田三万石削万石、而徙封柏原、中津侯長胤、〇小笠原八万石削其半、長島侯忠充〇松平万石貶其半秩、收長島城而除侯籍、盤郁侯氏音〇丹羽二万石削其半秩、收盤郁城而徙封頸城、駿河侯直朝〇井伊三万石削万石、收駿河城而徙封與板、此其大略也、

除封

〔武家除邑錄〕秀忠公御代

一五万石一説二三万石　丹後龜山城主(一本作丹後國八城城主)　前田主膳正利宗

慶長十三年、狂亂邑除斷絕、

一八万石　伊賀國主　筒井伊賀守定次

同時、家臣中坊氏訟に依而邑除斷絕、〇中略

一三万九千石　下野國佐野領　佐野修理大夫信吉

同十九年正月廿九日、坐不敬邑除、

一七万石　攝州高槻城主　高山右近大夫長房

同十七年三月七日、坐耶蘇之事邑除、流于加賀國金澤邑、〇中略

一一万五千石　山口但馬守重雅

誓詞

慶長十九年、坐下于私與二大久保相摸守忠隣一婚嫁之事上除邑、後子修理江壹万石賜、〇中略

一九万石　越後村上城主　村上周防守義明

元和四年三月、領。分。不。治。に付邑除斷絶、

一四十九万五千石　安藝備後兩國之主　福島左衛門大夫正則

元和五年國除、信州川中島四万五千石賜所、御請不敬ニ付終ニ斷絶ス、後年孫左兵衛江貳拾万石賜之、

一五万四千石　石見濱田之城主　古田兵部少輔重恒

同時卒ス、子無シテ終ニ斷絶、或說寛永年中〇中略

一一万石　美濃國領　平岡石見守重定

承應二年七月四日卒、廢。嫡。子。次男ヲ立、依之邑除、千石ヲ嫡市十郎へ賜〇中略

一三万石　伊豫川上城主　一柳大監物直興

寛文五年八月二日、禁裏修復役愆期、及家中不正、其上參府失期、加賀金澤配流斷絶、

〔三王外記憲王〕王〇五代綱吉於諸侯能用其威、終王之世、大小諸侯、或有罪、無嗣、或失心、亡國絶世者甚多、宗室則越後侯光長〇松平二十五萬石、其他宮津侯尙長〇永井七萬石、鳥羽侯忠勝〇內藤三萬石、田中侯忠能〇酒井四萬石沼田侯信利〇眞田三万石、參政稻葉通秀二万石、烏山侯資祇〇那須三万石、侍中北見重政二万石、高遠侯忠常〇鳥居三万石、石河侯忠之〇松平八万石、北松山侯勝賢〇水谷五万石、圓丘侯重益〇本多四万石、出石侯吉英〇小出五萬石、福山侯勝峯〇水野十万石、美作侯長成〇森十八万石、伊丹侯勝乘万石、赤穗侯長矩〇淺野五万石、此皆國除、

〔要筐辨志下〕一御代替リ之節、諸大名誓詞之儀、御老中御役宅、萬石以下評定所、

大名誓詞之節、右以前ニ公用人塗盥に泔抔持出之、手水を遣ひ候様申候、夫ゟ直に誓詞之事、是

取込候節、血判不成衆抔多くある事也、依而湯にて血出易きを以、如斯せらるゝ事也、

〔家忠日記追加 二十〕慶長十六年四月十二日、天皇〇後水尾即位、此日在京の諸大名大神君〇家康の鈞命を奉て書を以て盟條々、

一如右大將家〇源頼朝以後代々公方之法式可奉仰之、被考損益而自江戸於被出御目錄者、彌堅可相守其旨事、

一或背御法度或違上意之輩、各國々不可隱置事、

一各抱置之諸侍以下、若爲謀叛殺害人之由、於在其屆者、互可停止相抱事、

右條々、若於相背者、被遂御糺明速可被處嚴重之法度者也、

慶長十六年四月十二日　在京 諸大名連判

〔家忠日記追加 二十一〕慶長十七年正月五日、東國及北國の諸大名、書を獻じて盟條々、

一去年四月十二日、前右府様〇家康如被仰出、右大將家已來代々將軍家法式可奉仰之、被考損益而於被出御目錄ハ、彌堅可守其旨事、

〔柳營秘鑑脱漏 十二〕一正德六丙申年五月廿一日、御譜代之面々登城、於二之丸御目見、

一六月十一日、今度御代替ニ付テ、於御老中宅、各起請文血判被仰付、其趣左之通、

起請文前書

一御代替ニ付、彌奉重公儀、御奉公専一ニ相勤可申候事、

一御法度之趣、堅相守、自今以後、被仰出候御條目壁書等、是又違背仕間敷候事、

一御一門ヲ始、諸大名諸傍輩、奉對御爲、以惡心一味仕間敷候事、

右之條々、雖爲一事於違犯者、　神文

正德六丙申年六月十一日　誰氏名 名乘居判

證人

土屋相摸守殿〇正直、以下四人略、

〔大猷院殿御實紀附錄三〕諸大名の妻子を證人として、府にめさるゝ事は、關原のはじめ加賀黄門利長、その母芳春院を江戸に進らせしを權輿とすといへども、なべて定れることにはなかりき、當代〇家光のはじめ、薩摩中將家久、土井大炊頭利勝に就て、國家の昇平、すでに三朝を經て、洪恩に浴せざるものなし、諸大名の妻子を府にめされ、各邸に住居せしめば、彼等江戸に在ること封邑にあるよりも安堵すべしと聞えあげしかば、その議する所ことわりなりと聞召しいれられぬ、家久まづおのが妻子を引連て、府邸にうつりしかば、その他の大小名も、おのづからこれに倣ふこととなり、殊に普第大名へは、寛永十一年八月、妻子を所領に置もの、今年より皆江戸にうつすべしと仰下されしより、悉く家眷を府に置事と定りしが、今に至りては、國持はじめ、大小名ともに、領地にかへらんよりも、府に在勤するを安むずる風尙にうつりしなり、

〇按ズルニ、土井利勝年譜ニハ、利勝、島津氏ノ臣伊勢兵庫ニ說テ、妻孥ヲ江戸ニ移サシメタル由ニ記セリ、

〔聿修錄〕慶長十年乙巳十月、夫人長氏、遷於江戸之邸、初諸侯設邸於江戸、公〇藤堂高虎爲稱首、仙臺侯伊達政宗次之、至是遂使夫人氏東下、大神君深嘉其意、特延見賞賚甚厚、〇中略十一年丙午正月、世子〇高次亦東遷、蓋公爲大神君謀欲誘諸侯致家室爲質、乃先從我始、爲天下倡而諸侯漠然、無有應者、時列國始賓服、然巨藩雄鎭、率故等夷、雖會同于江戸、未必委心歸戴、大神君謙恭優禮、亦未易下令也、越二年公爲讃岐侯生駒一正述其志意、以世子正俊爲婿、故慫慂繼之、讃岐侯蒙賞焉、因又有所風諭、往々起而從之、於是事遂行、

〇按ズルニ、大猷院殿御實紀、聿修錄記スル所各同ジカラズ、今兩說ヲ掲ク、

〔千歲之松三〕寛文五年乙巳、諸大名より江戸表へ家來爲質人被召置候處、御代も重り、加樣可有之

儀とは不被思召候、殊に當年は、權現樣○家康五十年御忌も過候へば、時分も能、何れも御心易思召候に付、向後御免被成之旨上意有之候、是中將樣○保科正之被思召寄、言上被成候事之由に候、

〔落穗集追加五〕留守居役始事

一問曰、今時諸大名方の家々に於て、留守居役と申て有之は、いつの比より初りたる義や、答曰、我等承り及候は、台德院樣○秀忠御代、薩摩中納言殿○島津家久被申上るゝは、私領地大隅薩摩の義は遠國故、御當地の義の相聞候と有るは、時によりあまた日數もかゝり候に付、差當りたる御奉公向の義、間に逢ひ兼申候、夫に付、私在國の內は、家老共の內二人づゝ、留守居として、御當地に差置、万一何へんの急御用成る義有之節は、右留守居の者罷出、私名代として御用等をも被仰付るゝ、上にて、相勤候樣に仕度と有之段、則尊聞に達し御滿悅被遊るゝ由にて、願通被仰付候、然るに於ては、右留守居役の者の義は、御城內の御樣子をも見及び、罷在る樣に仕度と有之に付、御目見等をも被仰付るゝ由、去るによつて、只今に於ても、留守居家老の御目見は有之なり、薩州家にかぎりたる義に有之となり、然れ共、平生國元の土產を獻上被致、或は御內書、御奉書等御渡の節の義は、留守居家老共の罷上り候には及び不申候間、誰にても外の侍にても被差出るゝ樣にと有之、初めの程は家中の侍共の中より順番に相勤る處に、あまたの侍づれの中には、すぐれたる不屆者抔も有之に付、後々は、其人を極て差出す如くにて、夫を名付て御。城。役。とも申、聞。番。役共申、初め小身なる大名方にては、其者共を留守居役と申と也、

〔武營政緖錄〕慶長十八年、台德院樣○秀忠御代藤堂故佐渡守高虎公の御代、箕浦藤兵衞被仰付、御留守居役相勤候事、松平加賀守樣○前田綱紀御父筑前守樣○光高へ右之段御達被成候處、一段宜敷事に付、被仰付可然之由にて、右之役儀被仰付、

加州侯御父筑前守樣にて　　　　遠藤數馬

長州侯御祖父松平淡路守樣にて　　林彌左衞門
備後守樣御曾父松平飛驒守樣にて　　野尻與左衞門
右之通被仰付、諸事箕浦藤兵衞へ罷越、承合相勤可申旨被仰付と云々、

○按ズルニ、諸家留守居役ノ起原、右二書ノ記スル所各異ナリ、何レカ是ナルヲ知ラズ、但シ憲教類典ニ載セタル、寬政元年帝鑑間大名ノ書上ニモ、慶長十八年之頃ヨリ相始ト見エタレバ、秀忠ノ時ヨリアリシモノナリ、

〔武營政緒錄〕仲間組合之儀は、嚴有院樣〇家綱御代朝鮮來朝之節、御用掛故、阿部豐後守樣〇忠秋御奉行之處、記錄悉燒失に付て御手掛り無之、諸家之留主居役被召呼、御家之留書少にても有之候はば、書出候樣にと被仰付、則諸家より段々記錄留書共差出候由、其頃朝鮮人御用水野右衞門大夫樣〇忠春御達被成候に、番頭石原勘左衞門事、御用掛被仰付相勤、勘左衞門儀、森美作守樣〇忠継御留守居山田彌左衞門と申仁の相聟にて、諸事聞合書添候由、右左衞門方にて、諸家の留守居相招寄合候事、美作守樣より被仰付候者、留守居寄合之時、門前に人馬夥敷群居候へば、下々口論等可有之難計候間、人數を分け、寄合候樣に致し、可然旨被仰付候故、彌左衞門申上候は、面々として分申候事難仕候旨申上候、美作守樣より被仰付候は、組合分け可致候旨被仰付候由、

松平土佐守樣〇山內忠義、以下九人略、

合十人之御留守居共、美作守樣御書院へ被召呼、以御使者御菓子被下置、向後組合仲間、別て入魂出會、諸事公邊之勤方、間違無之樣、外之輩も相催、相招寄合可申候、然者膳部隨分輕く仕候て、相互に出會可申候、〇下略、

〔落穗集追加五〕留守居役始事

一問曰、其頃御城役、聞役抔と申たる面々の勤方、又は仲ヶ間寄合抔と申義、其節も只今時の通りに

有之たる事や、答曰、留守居役人の組合寄合等の義は、なる程、其筋より有り來ることには候へ共、少しは替りたる様にも有之也、子細は、其時代の留守居共の組合と申は、其屋敷最寄に於て、主人と主人との間がらむつましき人、常に出合等も有之衆中の家來共計り申合て、組合を定め候に、大かたは、其仲ヶ間七八人、十人計りより多き組合と申ては無之如く有之也、其子細は、其家々に於て、聞役をも相勤る者共の義は、上屋敷長屋住居の義なれば、座敷抔もせばきに付、人數多はなり不申、右寄合の節の振廻等の義も、互に申合、一汁三菜のうち、汁は精進に仕り、三菜のうち一菜は、是も精進物に仕るは、互に主人の用事にて、寄合申義なれば、たとへ手前の叶はざる精進日と有之ても、寄合を缺ずと有之義に於ては、不仕との申合についての義也、扨主人々々よりは右の寄合日に至りければ、料理にも成り候様成る、魚鳥の類一色、其外には、茶酒菓子抔を給り、料理人、茶坊主抔は、入用次第召呼て、使候様成る義共に、何れも留守居仲ヶ間申合にて有之よし也、去に依て、廻狀等の義も、右組合仲ヶ間の外へは、決て廻し不申、主人々々の聞え達し、心得にも可能成かと有之儀は格別、其外虚實の知れざる、世間沙汰の無益なる事をば、廻狀に書のせ申間敷旨、申合に有之と也、ケ様の義は、尤輕き事ながらも、時代もへだゝりし事を能も覺えずして、何事を申やらんとの御うたがひも可有間、我等若年の時の義ながら、慥に能く存じたる義を申也、其家々へ相尋らるれば、能く知れ可申也、其節櫻田邊に於て、留守居組合八人有之、丹羽左京大夫殿〇元重留守居桂木次郎右衛門、内藤豊前守殿〇信真内鈴木與右衛門、小出大和守殿〇吉英内陰山文右衛門、金森長門守殿〇頼直内水野嘉右衛門、松平周防守殿〇康映内南彌五兵衛、仙石越前守殿〇政俊内井上市兵衛、淺野内匠頭殿〇長直内井口與兵衛、淺野因幡守殿〇長治内德永四郎右衛門、以上八人の組合に有之也、〇中略其頃留守居仲ヶ間兼ての申合にて極月の義は互に用事多く有之間、定式の寄合の義は、仕る間敷との事に御座候、〇下略

〔拾遺柳營秘鑑 一〕覺

一四品、及十万石以上面々、國持之嫡子出仕之時分、留守居之者召連候儀、勝手次第之事、

但幼少、老人、介添壹人召連候儀、勝手次第之事、

一十万石以下ニ而も、參勤御暇、其外獻上物等之節は、只今迄之通、留守居可被差出候、尤用事仕廻次第、早々可罷歸事、〇中略

卯〇享保八年九月朔日

〔憲教類典 二ノ一大名〕寬保三癸亥年六月朔日

中務大輔殿御渡

大目付江
御目付江

近來諸大名之留守居共、所々茶屋等に而出會、猥成遊興仕候由風聞候、向後茶屋等にて出合は、相止めさせ可被申候、寄合候儀は、主人座敷長屋等にて出會候樣に有之可然候、且虛說ヶ間敷儀を申觸候沙汰も有之候、此段別而如何成儀候條、左樣無之樣に堅可申付候、且又組合仲ヶ間一統之樣に相成、主人も取扱にくき樣にも有之由、ヶ樣之儀は、猶亦致させ被申間敷事に候間、前條之趣とも、向後無之樣に入念、急度可被申付候、以來如何之儀有之候ば、主人可爲不念候、

右之通、西丸御目付江も可有通達候、〇中略

寬政元己酉年七月廿五日廿六日

松平越中守樣〇定信江　大廣間松平雅之助樣〇黑田齊隆　御留守居　永田藤右衛門

牧野備後守樣〇貞長江　帝鑑間奧平富之進樣〇昌高　御留守居　福知新助

鳥井丹波守樣〇忠意江　雁之間黑田鶴松樣〇直温　御留守居　宇佐美治郎右衛門

松井伊豆守樣〈○信明〉　柳之間京極甲斐守樣〈○高品〉御留守居　並河彌角

松平和泉守樣〈○乘完〉　菊之間酒井越前守樣〈○忠貫〉御留守居　田中左次右衞門

右之通被召呼、左之通、御勝手ニて、公用人中を以御達、

諸家留守居組合等は、いつ比より有之事に候哉、右組合無之候而は、何等の差支に相成候哉、此旨御聞申候樣に被申付候、依之八月四日五日之內、御請書左之通差出す、

大廣間之御方ゟ御書付之寫

諸家留守居組合之儀、いづれの比より有之儀ニ候哉、可申上候旨、此儀慥成書留相見え不申候得共、嚴有院樣〈○家綱〉御代ゟ相始候儀と相聞え候、少々書留等も御座候得共、年號等も相知不申、誠に自分之書留に仕置候儀故、慥と難申上候、

一右組合寄合等無之候而は、何等之差支候哉、可申上旨、此段は、差向て閊に相成候と申程之儀は無之候得共、御同席組合之儀は、公邊勤向御一統有之節は、一統承合候儀に付、文通等にて行屆不申、寄合之節直談にて承合申儀御座候、其外御家々心得に相成候筋等、內分之儀に而も、御同席方之御摸樣承諾、又は先例等承合候儀も、文通にて相分兼候儀も、寄合之節直談仕候儀に御座候間、右寄合無御座候而は、彼是不辨理に有之、內分差支申儀も御座候事、

一右御同席組合之外、御國家にては小組と號、御他席之御留守居中、組合相定、定式寄合有之候、是は御國家一兩家相加り、其外は、外御席之至て御小家之御留守居中も差加り居申候、是又いづれの頃より、如何樣之譯に而、右之通組合相定候哉、相知不申候得共、前々右之振合に御座候、此組合之儀は、寄合無御座候而も、差支申儀は無御座候、外御席、御留守居中とは、何か申談之筋も可有之候得共、御國家之儀は、敢而申談承合等仕候筋も無御座候間、此組合は、御國家之面々、寄合不仕候而、差支候儀は無御座候事、

一右之外主人屋敷近邊之御方樣、又は主人間柄之御方樣之御留守居中、組合にて無御座分、寄合相催、被相招罷越候儀も御座候、右ニ付而は、右爲返禮、此方江も相招申候、此儀は組合に而無御座、親類役常々心易申談、ちなみのため、相互ニ會釋にて相招き候儀に御座候間、是又右寄合無御座候而も差支は無御座候事、

右之通に御座候得ども、都而留守居役之儀は、御同席に不限、一統常々心易、出合も仕候へば、何ぞ差懸り類例等承合候儀も有之候節は、都而宜御座候に付、一統常々、折々出合仕候方宜御座候得共、差支之有無御尋に付、前條之趣申上候儀御座候、以上、

松平雅之助家來
永田藤右衞門

七月

○按ズルニ、帝鑑之間席ヨリノ書上ニハ、諸家留守居役相始申候儀ハ、慶長十八年頃より相始、組合分リ、寄合等之儀ハ、寛永年中之頃より相始候趣ニ御座候、其後慶安之頃、一旦寄合中絶仕由ニ御座候處、公邊向、差支多有之候ニ付、又候承應之頃ヨリ相始候由ニ御座候ト見エ、柳之間席書上ニハ、明暦元年之頃より有之候樣承傳罷在ト見エ、其外雁之間、菊之間書上モ略、是ト同ジケレバ省略セリ、

〔憲教類典大名二ノ一〕寛政元己酉年九月九日

牧野備前守殿御渡

諸家留守居組合寄合等有之、彼是物入多キ趣相聞え候、右畢竟主人勤向之趣申合候事有之候所、振廻同樣之姿に相聞、不束之次第に候、當時何方にも儉約相用既に不如意之趣に付、省略又は被申聞候品等も有之、主人主人之出會には、事輕き趣にも相聞候所、右家來之寄合之節、手重及候儀、一體不相濟事に候、殊に組合一統申合、新役組入等、物入多にも至り、又は主人之家政にも差障候

哉にも相聞、如何敷事に候、〇中略已來組合寄合之儀、勝手次第相止可被申候、右寄合相止め候而、外留守居役江之間合有之候節、差支之儀も候はゞ其趣先方主人江も屆之品により、老中江も其旨內意可被申聞候、尤此旨留守居之者江も被申付置、組合等致不申候ては、此書面之外に、差支候儀も候はゞ、其旨內意被申聞次第、猶又可爲差圖候、

酉九月

〔教令類纂初集三十五〕寶永二乙酉年八月

大目付江

御城江留守居之者被召連候儀、無用之旨最前申達候得共、差支候事有之候間、前々之通可被召連候、〇又見憲教類典

〔憲教類典二ノ一大名〕寶永七寅年六月

諸大名留守居之者ども、公儀向之勤に付而は、間違無之樣に可申合儀に候得共、無益之雜說を廻狀認候と申觸候樣に相聞え候、向後左樣之儀不仕樣、入念堅可被申付候、以上、

六月

〔殘集柳營秘鑑一〕諸大名年中老中廻り之覺

一年始ハ、國持方、御連枝方、表大名、御譜代衆、御役人方、被相廻候、〇中略五節句等ハ、御譜代衆被相廻候、尤月並之節は、殿中ニ而御老中方江、當日之御祝儀之御挨拶有之故歟、不被相廻候、〇中略

一參勤御暇之節、月番之老中江、爲伺御機嫌對客有之事也、且又發足之節も、前日ニ老中方江被相廻候、參府之節、江戶江著之當日、直ニ老中方被相廻候、尤供廻り等ハ、旅支度ニ而有之事也、

一平月も月番之老中江對客有之事也、

〔要筐辨志上〕一御。老。中。招。請之極之品

將軍宣下　右十万石以上　但御老中方も同席招請

御轉任、御兼任、御元服御官位、　右廿万石以上

家督　右十万石以上

十万石以上ニ而も、家督招請之家筋、松平左兵衛督、〇以下三十二人略

右三代目壹度招請、雖ㇾ爲二家柄一右代數之內、旱損水損、或は火難等之災ニ依而、於ㇾ無ㇾ之者、以後之例ニ不ㇾ相成、十万石以下招請三十三軒也、

〔幕朝故事談〕五萬石以下は、自分家督にては招請はならぬなり、此時二汁五菜なり、五萬石以上自分の家督は招請す、上の御代〇宣家に招請するは、十五万石以上なり、國持衆は、招請ニ二汁七菜なり、加賀薩摩仙臺は、招請に三汁十菜なり、

〔教令類纂二集六十二〕延享四丁卯年十月

大目付江

家督被二仰出一候老中招請之儀、故無ㇾ之及二延引一候面々も、向後左樣無ㇾ之樣可ㇾ被ㇾ致候、

〔殘集柳營秘鑑一〕一老中役被二仰付一候て、名差合候得バ、名替有ㇾ之面々ハ、御譜代衆、外樣衆、御役人方御寄合ニ至迄、名差合有ㇾ之面々ハ名替有ㇾ之候事也、右ハ御役故遠慮也、尤國持、御連枝方ハ、名差合候而も無二其構一、是ハ格段也、

〔吏徵別錄萬石以上〕老中〇中略　享保十一年丙午十二月朔日、國持大名御連枝中ハ格別、其外之大名老中同名附候義可ㇾ致二遠慮一旨、

〇

〔當用一覽二〕交替之寄合是ハ每年參府御暇、如二諸大名一、仍云ㇾ爾、

〔公武御順席〕交代寄合　　但貳拾人

高拾万二百二十九石　　但十三人

奈須衆、美濃衆、信濃衆、三河衆、

高一万七千九百八十二石

○按ズルニ、奈須衆、美濃衆等モ交替寄合ノ中ナリ、

〔文政三年武鑑〕交代御寄合表御禮衆

菅沼新八郎定邦（帝鑑同　代々御譜代大名並、嫡子御出禮、（中略）丑卯巳未酉亥六月參府、子寅辰午申戌六月御暇、○中略）

獻上（和紙三十束、銀馬代、）　拜領卷物三

七千石　在所、參州設樂郡新城、

○按ズルニ、此外松平、榊原、本堂、生駒、山名、平野、木下、山崎、最上、戸川、竹中、溝口、朽木、近藤、金森、五島、伊藤等アリ、格式、家ニヨリテ各、異同アリ、今一例ヲ示ス、

〔文政三年武鑑〕上州新田住居　柳之間　白無垢着

一百二十石、岩松萬次郎源德純、　毎年年始御禮○中略

交代御寄合　柳之間　那須衆　美濃衆　信濃衆　參河衆

那須與市（千石野州那須福原）　福原刑部（三千五百石、野州那須郡佐久山、○以下十一人略）

〔柳營秘鑑二〕御譜代之列、松平御先祖御連枝之家々、那須家、美濃、信濃、三河衆、

一那須七家　大關　太田原　蘆野　千木　福原　伊王野　岡本　但太田原、大關者万石以上、殊に太田原は城主、其外蘆野、福原等、毎暮參上、三月中頃御暇被下之、月次之御禮、御白書院御勝手に罷出御目見仕、伊王野、岡本は斷絶、

一美濃衆　高木派　春中三十日計出府、御暇被下之、兩年參上、一年休息、

一信濃衆　知久　小笠原　座光寺　四月初參上、五月中比、御暇參上休息同前、

一三河衆　松平太郎左衛門　中島與五郎

右之外、岩松万次郎等、何も老中支配之、御禮席御白書院御勝手也、

一交代寄合者、雖小身、何も留守居召仕之、大概之格、萬石以上ニ准ジ、勿論老中支配也、

〔大猷院殿御實紀十三〕寛永六年四月、是月〇中略交代寄合平野權平長勝、初ていとま給はり采邑に赴く、

〇按ズルニ、交替寄合ノ起原詳ナラズ、是書ニ據レバ、將軍家光ノ比ヨリアリシモノナリ、

〔享保通鑑七〕享保七年十月十五日、交代寄合之面々被為召、御禮已後、御白書院於御縁頰、戸田山城守〇忠眞水野和泉守〇忠之安藤對馬守〇信友列座、在江戸御人多ニ付、半年宛在府被仰付候、在府之間も少儀ニ候間、可成程は、人數可相減候、交代割合之儀は、御書付之通、可相心得旨、山城守被申渡、御書付之通、菅沼新八郎江被相渡候、則左ニ記す、

但、交代寄合之內、定在府、又ハ幼少之面々者不罷出、

在所ニ有之名代悴新八郎罷出　菅沼織部

在所ニ罷在名代御使番川勝刑部罷出　最上刑部

在所ニ罷在名代悴左京罷出　竹中主膳

在所ニ罷在名代御先手平野九右衛門罷出　山崎兵庫　平野權平　木下縫殿助

松平主水

金森左京

右之面々、在江戸御人多ニ付、半年宛被成御免旨、被仰出之、役金之儀は、只今迄之通、在府一年分之積、可被指出候、交代割合之義、別紙書付之通可被心得候、

辰三月參勤、同九月御暇、　平野權平　木下縫殿助

辰九月參勤、巳三月御暇、　山崎兵庫　金森左京

卯三月參勤、同九月御暇、　菅沼織部　竹中主膳

卯九月參勤、辰三月御暇、　最上監物　松平主水

右之通可被相心得候、參勤之儀、三月參府之面々は十一月中可被伺候、九月參府之面々は、二月中可被相伺候、

〔天保集成絲綸錄七十三〕寛政三亥年五月

大目付江

交代寄合、是迄早參府、或參府延引、滯府等之節々、御勘定所江屆之儀、區々有之、在府之節役金調方差支も有之趣ニ付、以來左之通、御勘定所江相屆候樣可致候、尤此外屆來り候分は、只今迄之通たるべく候、

一御用ニ付、早參府、或依願早參府之節々、

一參府時節、病氣等ニ付延引は勿論、御用ニ而參府不致節々、

一御暇被下候節々、幷御暇後病氣に付滯府等、或御暇時節には候得共、病氣に而出勤無之節々、

右之趣、交代寄合之面々江可被相達置候、

五月

〔柳營秘鑑二〕西御丸江出仕之覺享保十巳年五月廿五日被仰出

五節句八朔〇中略　交代寄合之內、表向ゟ御禮罷出分、〇中略

十五日〇中略　交代寄合之內、表向ゟ御禮罷出分、〇中略

廿八日〇中略　交代寄合〇中略

總出仕　御本丸江罷出候節者、西丸江も出仕候事、　總而御禮事、西丸江も出仕候事、

〔享保集成絲綸錄　一〕延享元子年六月
當時殿中席書〈○中略〉　帝鑑之間〈○中略〉　交代寄合　柳之間〈○中略〉　交代寄合
〔天保集成絲綸錄　一〕寛政四子年十二月
一交替寄合、表向出仕之分、帝鑑之間、柳之間席之面々共ニ出禮之儀、席限ニ相分候節は、其持席万石以上、幷嫡子之次、高順ニ而、古格之通可ㇾ被ㇾ心得ㇾ候、諸席打込之時は、都而高順、同高家督順之儀可ㇾ爲ㇾ勿論ㇾ候、
一帝鑑間席之交替寄合、玄猪等之節、柳之間席より出附候万石以上之次〈江〉罷出候儀ニ候間、御諸始之節も、右順之通、向後可ㇾ被ㇾ罷ㇾ出候、
右之通、交替寄合〈江〉可ㇾ被ㇾ相達ㇾ候、尤帝鑑間、柳之間万石以上〈江〉も爲ㇾ心得ㇾ相達置候樣可ㇾ被ㇾ致候、
〔聽明咨撰抄　下〕文政二年九月、水野出羽守殿〈○忠成〉青木忠左衞門を以、帝鑑之間交替寄合、柳之間交替寄合、何れを重く取扱候儀有ㇾ之候哉、大目付、御目付心得方、御承知被ㇾ成下ㇾ度旨被ㇾ仰聞、周防守〈○大目付石谷清豐〉御目付須田與右衞門へ申談、別紙書付、御同人を以同人上ル、
〈大目付　御目付〉
交替寄合表向出禮之分、帝鑑之間、柳之間席之面々共ニ、出禮之儀、席限り相分り候節ハ、其持席、万石以上、幷嫡子之順ニ而罷出、帝鑑之間交替寄合、柳之間交替寄合と、打込之順ハ都而高順、同高ハ家督順ニ御座候間、平常取扱方、何れも差別無ㇾ御座ㇾ候、以上、
〔元治二年武鑑〕交代御寄合表御禮衆
屋。形。號。　本國但馬　山名主水助義濟〈○中略〉
屋。形。號。　本國出羽　最上出羽守義連
〔殘集柳營秘鑑　四〕交代寄合留守居有ㇾ之分

菅沼織部正　朽木監物　竹中左京　生駒主殿　松平主水　戸川內膳　松平三治　榊原仲
平野權平　本堂主計　五島修理　最上監物　金森左京
右十三人、交代寄合留守居有之也、
〔柳營秘鑑　三〕交代寄合幼年介添之事
一享和二戌年二月十二日、御目付松平田宮申聞候は、交代寄合平野中務嫡子、御目見願候ニ付、幼年に付、介添召連候儀相伺候處、伺之通召連候樣、井伊兵部少輔殿〇直朗被仰渡候旨、是は万石格之御取扱故也、

古事類苑

官位部七十九

位階上

位ハ座次ノ義ニシテ、班列ノ事ナリ、階ハ品等ノ義ニシテ、正從上下ノ等級ナリ、位階ニハ、文位アリ、勳位アリ、内位アリ、外位アリ、文位ハ勳位ニ對スル名ニテ、古來汎ク位階ノ事ニ云ヘリ、推古天皇十一年、始テ冠位ヲ制シ、大德、小德、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智ノ十二階トナス、冠位ノ制此ニ始マル、賜フニ冠ヲ以テシ、縫ヘル所ノ絁ノ色ヲ以テ、高卑ノ差ト爲シタリ、孝德天皇大化三年、冠位ヲ改制シテ、大織、小織、大繡、小繡、大紫、小紫、大錦、小錦、大青、小青、大黑、小黑、建武ノ十三階トナス、建武ハ卽チ初位ニシテ、又立身ト云フ、五年ニ、又冠位ヲ增シテ十九階ト爲シ、天智天皇三年ニ、又增シテ二十六階ト爲ス、尋デ十年又之ヲ改革シタリ、天武天皇十四年ニ、更ニ爵位ヲ改メ、階級ヲ增加シ、諸王以上ノ位ヲ明位二階、淨位四階ト爲ス、毎階各〻大廣アリ、合セテ十二階ト爲セリ、又諸臣ノ位ヲ正、直、勤、務、追、進ノ六階ト爲シテ、一階毎ニ四階ニ分チ、四階ニ亦各〻大廣アリ、合セテ四十八階ト爲セリ、是ニ於テ始テ諸王以上ト諸臣トノ位ヲ分チタリ、文武天皇ノ大寶元年三月ニ、始テ新令ニ依リテ、官名位號ヲ定メ、親王ノ位ヲ明冠四階トシ、諸王ノ位ヲ淨冠十四階トシ、合セテ十八階トス、諸臣ノ位ヲ正、直、勤、務、追、進ノ六階トシ、正冠ハ六階、直冠ハ八階、勤冠以下ハ各〻四階トシ、合セテ三十階トス、此時ニ冠ヲ賜フコトヲ停メテ、易フルニ位記ヲ以テス、且ツ諸臣ノ位ハ内外ノ差ヲ立テ、始テ勳位ヲ設ケタリ、其明冠、淨冠、正冠等ハ、明一品、淨正一位、正正一位等ト云ヒ、始テ親王

ノ階ニハ品ト云ヒ、諸王諸臣ノ階ニハ、共ニ位ト云ヒシガ、尋テ明淨正等ノ字ヲ省キ、直ニ一品正一位從二位トシタリ、其正從ノ稱ハ全ク隋唐ノ制ニ依リシガ、正ヲオホキト云ヒ、從ヲヒロキト云フハ、天武天皇ノ時ノ大廣ノ訓ヲ借リシナリ、

文位ニハ、勅授、奏授、判授ノ別アリ、五位以上ヲ勅授トシ、內八位以上外七位以上ヲ奏授トシ、內初位、及ビ外八位以下ヲ判授トス、勅授ノ內ニテ三位以上ヲ殊ニ貴シトシ、五位ヲ通貴トス、正一位ハ最モ貴クシテ、生前之ニ居ル者、古來藤原宮子娘、藤原武智麻呂、橘諸兄、藤原押勝、藤原永手等五人ニ過ギズ、其餘ハ是ヲ贈位ニ用ヰルノミ、六位ヨリ五位ニ進ムトキハ、位田位祿ヲ賜ハルベキニ由リテ、六位以下ニ、普ク爵一級ヲ賜フトキハ、正六位上ノ人ハ、或ハ位ヲ一子ニ廻授シ、或ハ當年ノ租ヲ免ゼシガ、稱德天皇ノ神護景雲年間ノ紀ニ、上正六位上ノ位アリ、是五位ニ昇ラシメザルガ爲ニ設ケタル制ナリ、

文位ニ內位外位アリ、內位ハ員內位ニテ正位ナリ、外位ハ員外位ニテ、唐ノ制ノ視品官ナリ、日本書紀天武天皇二年閏六月紀ニ、大錦下百濟沙宅昭明ノ卒セシ時ニ、外小紫位ヲ贈ルコトノ見エタルヲ以テ、外位ノ始見トス、而シテ內大紫、外大紫ノ文アレド、何ノ位階ヨリ以上內外ヲ分チシニカ詳ナラズ、大寶ノ初メニ律令ヲ設クルニ至リ、諸臣ノ爲ニ、五位ヨリ初位ニ至ル、二十階ノ外位ヲ設ケタリ、而シテ諸王以上ハ與ラズ、令ニ依ルニ、外位ノ五位以上ハ、內位ト同ジク勅授ナレド、七位ニ至リテ始テ奏授ニシテ、八位初位ハ判授ナリ、內位ノ八位以上奏授タルニ比スルニ、少シク差アレド、其初メハ大異ハナカリシヲ、聖武天皇ノ神龜五年ニ、更ニ內外五位ヲ以テ、高門卑姓ヲ分チ、卑姓ノ者ハ、明經秀才等ノ外ハ、先ヅ外位ニ敍シテ、後ニ功効ヲ積ミテ、內位ニ敍スル事トシ、驛馬、致敬、與販、行刑、位祿、位田、資人、資蔭等ノ制ヲ定メ、大ニ貶抑ヲ加ヘ、桓武天皇ノ延曆十二年ニ、差釐革ヲ加ヘタリ、是ヨリ後ニハ又朝內、異

外等ノ稱アリ、朝内、異外トハ、朝臣ノ姓ハ内位ニ敍スベキニ、車持ノ如キハ、外位ニ敍シ、朝臣ノ外ハ外位ニ敍スベキニ、清原眞人ノ如キハ内位ニ敍スルヲ云フ、因リテ郡司ノ如キハ外位ニ敍スルナリ、又内職事ハ、内位ノ人敍スベク、外職事ハ外位ノ人敍スベケレバ、内位ニシテ外職事ニ任ズレバ、改メテ外位ニ敍シ、外位ニシテ内職事ニ任ズレバ、改メテ内位ニ敍ス、因リテ其考課ニ内考、外考ノ稱アリ、即チ内位、外位ノ考ナリ、

散位ハ即チ唐ニ云フ所ノ散官ニテ、職事官ニ對スルノ名ナリ、然レドモ唐ノ散官トハ大ニ異ナル所アリテ、唐ノ散官ハ、吾邦ノ位階ノ事ニテ、職事官ト共ニ帶スルヲ、吾邦ニテハ執掌ナクシテ位階ノミヲ有セルヲ云ヒ、又ハ居ル所ノ職ニ位階ノ相當ナクシテ、有位ナルヲモ云フ、因リテ位署ニハ、散位從五位下等ト署スルナリ、又後ニハ散位トノミ署シテ、位階ヲ載セザル者アリ、又蔭子孫ハ、散位ナリトモ散位ト書セズシテ、蔭子正六位上等ト署スルナリ、散位ニハ内外文武ノ別アリテ、内外ハ即チ内位外位ナリ、文武ハ文官武官ナリ、而シテ之ヲ位署ニ用ヰルハ武散位ノミナリ、武散位ニハ曾テ武官ニ爲リシ者ト、現ニ武職ニ居ルト雖モ、其職ニ相當ノ位階ナキ者トアリ、散位ハ散位寮ノ掌ル所タリ、因リテ散位ノ人ハ、其位ニ相當セル官ノ闕ナキト、闕アリト雖モ、才職ノ其官ニ當ラザルトハ、在京ノ六位以下ハ、分番シテ散位寮ニ上リ、在外ハ國衙ニ上ル、但シ五位以上ハ執掌ナシト雖モ長上シ、國忌ノ齋會ニ會シ、廣瀨龍田祭等ノ使ヲ奉ズ、又六位以下ノ子ノ散位タル者、身才劣弱ニシテ理務ニ堪ヘザレバ、式部ニテ判補シテ、諸司ノ使部伴部トス、而シテ外散位ノ六位以下ハ情願ヲ待チテ帳内資人ニ充ツ、

散事トハ、職事ナラザル婦人ニシテ位階ヲ帶スルヲ云フ、

借位トハ、假ニ位階ヲ授クルコトニテ、眞位ニ對シテ云フ、淳和天皇ノ天長二年ニ借五位ノ

郡領ニ外從五位ノ位祿ノミヲ賜ヒテ、位田資人ヲ給セズ、子ヲ蔭スルコトヲ聽サヾリシコトアリ、仁明天皇ノ承和二年ニ、遣唐使ニ位ヲ借シテ位記ヲ授ケザリシコトアリ、然レドモ其餘モ皆此ノ如キカ、此ノ如クナラザル者アルカ、今之ヲ詳ニスルニ由ナキナリ、

勳位ハ、文武天皇ノ大寶元年ニ、功績ヲ褒スル爲メニ、始テ設クル所ノ位階ニシテ、多クハ武勳ニ係リ、一等ニ始マリ十二等ニ訖ル、一等ハ正三位ニ比シ、十二等ハ從八位ニ比ス、因リテ勳位ニハ判授ナク、一等ヨリ六等マデヲ勅授トシ、七等ヨリ十二等マデヲ奏授トス、而シテ其朝參ニ列立スルニハ、其人ノ勳位ニ相當セル文位ノ當色ノ服ヲ著シ、文位ノ人ノ下ニ立ツ、又其人ノ文位ヨリ勳位ノ方高キトキハ、高キ當階ノ服ヲ著シテ、其文位ノ人ノ下ニ立ツ、若シ勳位ノミニテ、文位ヲ帶セザル者ハ、勳一等ナリトモ無位ノ袍ヲ著スルナリ、勳位ノ人ノ武功ヲ以テ轉昇スルニハ、七等以下奏授ハ、一轉ゴトニ一等ヲ加ヘ、六等以上三等以下勅授ナリ、四位五位ニ當ル、ハ、三轉ゴトニ一等ヲ加フ、轉トハ不定ノ意ニシテ、元年ノ行軍ニハ、斬首十級ヲ一轉トシ、二年ノ行軍ニハ、五級ヲ一轉トスルガ如キヲ云ヒテ、時ニ隨ヒ制ヲ立テヽ、究ニ定例ナケレバ轉ト云フナリ、而シテ初メニ勳位ナキ者ハ、一轉ニ先ヅ十二等ヲ授ク、若シ五位以上ノ人、勳位ヲ加ヘ盡シ、既ニ一等ト爲リテ、仍ホ餘勳アルトキハ、父アレバ父ニ廻授シ、父ナケレバ子ニ廻授シ、兩轉アレバ父子ニ分授ス、若シ父子共ニ亡セルトキハ、一轉ゴトニ本人ニ田二町ヲ賜フ、又父子、先キニ勳六等アリテ、本人ノ餘勳二轉ナレバ、廻授シテ一等ヲ加フベキヲ、若シ一轉ナルトキハ、亦田兩町ヲ賜フ、但シ六位以下ハ、勳一等ニ至リ、餘勳アルトキハ廻授スルコトヲ得レドモ、田ヲ賜フコトヲ得ザルナリ、サテ此田ハ功田ニ似タレドモ、賜田ナリ、而シテ勳位ハ總テ式部省ノ按スル所タリ、故ニ在京ノ勳位ニシテ無官ナル者ハ、式部省ニ上下シ、考選ニ預リ昇等ス、又在外ノ勳位ハ、交番シテ軍團ニ直シ、考滿選敍シ、或ハ勳

七等以下ニ績勞ヲ聽シ、或ハ勳位ノ人ヲ、烽長、兵士、鎭兵、健兒ト爲シ、府庫ヲ守ラシメシ事アリ、勳位ハ大ニ文位ニ異ナル者ニテ、勳位ヲ得ベクシテ、未ダ受ケズシテ身死セリトモ、猶其位ヲ授カル、是ハ勳位ニ局レル事ニテ、文位ニハ追敍ノ事ナシ、是ノミハ文位ニ勝レルガ如クナレドモ、其餘ハ皆文位ヨリ降レリ、要スルニ勳位ハ、初メヨリ諸臣ノ爲メニ設ケタル者ニテ、諸王以上ニハ及バザルヲ、後ニハ諸王ニモ勳位ヲ得ル者アリ、且ツ功勳アリテ後ニ敍スベキヲ、内外文武職事官、及ビ散五位以上ノ父ノ後タル者ニ、普ク勳一級ヲ授ケシ事アリ、又其後ニハ神社ニモ勳位ヲ上ル事アリ、

位階ノコトハ、其關聯スル所、甚ダ廣クシテ、封祿ニ沾フコトハ、封祿部ニ、位階ニ依リテ、刑罰ヲ寛宥セラルヽコトハ、法律部ニ、考選、敍位、資蔭等ノコトハ、政治部ニ、位階ニ依リテ喚辭署名ヲ異ニスルコトハ、姓名部姓氏上篇ニ載セタレバ參看スベシ、又神ニ位階ヲ上ルコトハ、神祇部神階篇ニ載セタリ、

〔伊呂波字類抄 久人事〕位 クラヰ 左右謂之位

〔説文解字 八篇上〕位列中庭之左右當作又謂之位、庭當作廷、字之誤也、反部曰、廷朝中也、釋宮曰、中庭之左右謂之位、鄭云、群臣之列位也、周語注亦曰、中廷之左右曰位、按中廷猶言廷中、古者朝不屋、無堂階、故謂之朝廷、朝士掌外朝之位、左九棘、孤卿大夫位焉、右九棘、公侯伯子男位焉、面三槐、三公位焉、司士掌治朝之位、王南鄕、三公北面東上、孤東面北上、卿大夫西面北上、王族故虎士在路門之右、南面東上、大僕大右大僕從者在路門之左、南面西上、雖有北面南面之臣、皆以左右約舉之、左傳云、有位于朝是也、引伸之、凡人所處皆曰位、从人立、會意、于備切、十五部、按小宗伯掌神位、故書位作立、古文春秋公卽位爲公卽立、古者立位同字、著古音十五部與八部多合韵、

〔類聚名義抄 一人〕位 胡愧反 和井 クラヰ 〔同 六阜〕階 音皆 今増 ハシ シナ

〔倭訓栞 前編八久〕くらゐ 位をよめり、續日本紀ニ、座坐と書せり、位に四分あり、一位より三位までは正從のみ、四位已下は皆上下ある也、

〔貞丈雜記 四官位〕一位クラヰと云は、禁中にて列座する時、座なみの高下を立る爲の法也、一位は一番めに

座し、二位は二番め、三位は三番に座する爲に定られたる事也、位階と云も位の事也、

頭書、位クラヰト云ハ座居ト云事也、座ノ字クラトヨム、座ニ居ル次第ノ法也、

〔八雲御抄三下〕三位　みつのくらゐ、まつの位、　四位　しゐしば、むらさきの袖、四位已上至大臣、　五位　あけのころも あけころもとも　六位　みどりのそで、あをきころも、

〔拾芥抄中本官位唐名〕朝官當唐官略抄、右大辨橘廣相撰也、百官唐名抄、島田忠臣撰也、以件兩本合已了、長錄元年七月廿日宣旨、大外記中原致時、奉諸司諸衛官人任、天暦六年補任帳、員宜注進之、雖闕出來不可勘申件員外、已上本押紙云々

正一位 文散階、武官階、　從一位 武德驃騎將軍、開府儀同三司、已上王臣、後漢殤帝置之、　正二位 武輔國大將軍、特進、階時進爲正二位、　從二位 光祿大夫、漢武帝更名光祿大夫、武鎭東大將軍、已上王臣、　正三位 勳一等、金紫光祿大夫、或云、魏晉稱之、武冠軍大將軍、王臣、　從三位 銀青光祿大夫、或云、隋煬帝爲三品、武雲麾大將軍、王臣、勳二等、　正四位上 正議大夫、武忠武大將軍、　正四位下 通議大夫、勳三等、武壯武大將軍、　從四位上 大中大夫、武宣威大將軍、　從四位下 中大夫、勳四等、武明威將軍、　正五位上 中散大夫、武定遠將軍、　正五位下 朝議大夫、勳五等、武寧遠將軍、　從五位上 朝請大夫、武游騎將軍、　從五位下 朝散大夫、武游擊將軍、　正六位上 朝議郎、武昭上武挍尉、　正六位下 承議郎　從六位上 奉議郎　從六位下 通直郎　正七位上 朝請郎　正七位下 宣德郎　從七位上 朝散郎　從七位下 宣議郎　正八位上 給事郎　正八位下 徵事郎　從八位上 承奉郎　從八位下 承務郎　大初位上 儒林郎　大初位下 登仕郎　少初位上 文林郎　少初位下 將仕郎

〔唐六典二吏部〕郎中一人、掌考天下文吏之班秩品命、凡叙階二十九、從一品曰開府儀同三司、〇註略、以下准之、正二品曰特進、從二品曰光祿大夫、正三品曰金紫光祿大夫、從三品曰銀青光祿大夫、正四品上曰正議大夫、正四品下曰通議大夫、從四品上曰太中大夫、從四品下曰中大夫、正五品上曰中散大夫、正五品下曰朝議大夫、從五品上曰朝請大夫、從五品下曰朝散大夫、正六品上曰朝議郎、正六品下曰承議郎、從六品上曰奉議郎、從六品下曰通直郎、正七品上曰朝請郎、正七品下曰宣德郎、從七品上曰朝散郎、從七品下曰宣議郎、正八品上曰給事郎、正八品下曰徵事郎、從八品上曰承奉郎、從

八品下曰承務郎、正九品上曰儒林郎、正九品下曰登仕郎、從九品上曰文林郎、從九品下曰將仕郎、

〈唐六典五兵部〉郎中一人、掌考武官之勳祿品命、以二十有九階、承而敍焉、〇註略、從一品曰驃騎大將軍、〇註略、以下准之、　正二品曰輔國大將軍、從二品曰鎭軍大將軍、正三品曰冠軍大將軍、懷化大將軍、從三品曰雲麾將軍、歸德將軍、正四品上曰忠武將軍、正四品下曰壯武將軍、從四品上曰宣威將軍、從四品下曰明威將軍、正五品上曰定遠將軍、正五品下曰寧遠將軍、從五品上曰游騎將軍、從五品下曰游擊將軍、正六品上曰昭武校尉、下曰昭武副尉、從六品上曰振威校尉、下曰振威副尉、正七品上曰致果校尉、下曰致果副尉、從七品上曰翊麾校尉、下曰翊麾副尉、正八品上曰宣節校尉、下曰宣節副尉、從八品上曰禦武校尉、下曰禦武副尉、正九品上曰仁勇校尉、下曰仁勇副尉、從九品上曰陪戎校尉、下曰陪戎副尉、

〈日本書紀二十敏達〉十二年十月、恩率參官、臨罷國時、竊語德爾等言、計吾過筑紫許、汝等偸殺日羅者、吾具白王當賜高爵、

〈日本書紀二十八天武〉元年十二月辛酉、選諸有功勳者、增加冠位、

〈續日本紀四元明〉和銅元年正月乙巳、詔曰、〇中略、冠位上可賜人々治賜、

〈歷朝詔詞解一〉冠位、冠は加賀布理と訓べし、賀、濁音、布、清音也、〇中略、さて位階のことを冠位といふ故は、推古天皇の御世に、始行冠位、また始賜冠位於諸臣と有て、此御時に、始めて十二階の冠を制給ひて、其冠のさまによりて、尊卑き級をわかたる、〇中略、かくのごとく位階はもとは冠を以て、その尊卑きをなとせられし故に、冠位とはいふなり、さて文武天皇大寶元年に、又官名位號を制られて、これより停賜冠、易以位記と有て、此時より冠を賜ふことは、止ぬれども、其後も猶宣命などには、もとの名目のまゝに、かく冠位と詔給ふ也、

〈續日本紀十七聖武〉天平勝寶元年四月甲午朔、從三位中務卿石上朝臣乙麻呂宣、〇中略、六位已下冠一

階上給比、○中略正六位上爾波子一人治賜夫、

〔萬葉集十六〕比來之、吾戀力、記集功爾申者、五位乃冠、

〔源氏物語若菜五〕かくいふはゝりまのかみのこのくら人よりことしかうぶりえたるなりけり、

〔河海抄若菜三〕かうぶり給とは、爵を賜也、○中略初て五位に叙するを、叙爵とも冠給とも云也、

〔古京遺文〕船首王後墓版

惟船氏故王後首者、○中略至於阿須迦宮○舒明治天下天皇之朝、天皇照見知其才異、仕有功勳、勅賜官位大仁、品爲第三、○下略

〔日本書紀孝德二十五〕大化二年八月癸酉、詔曰、○中略今以汝等使仕狀者、改去舊職、新設百官、及著位階、以官位敍、

〔律疏名例〕凡犯私罪、○中略若犯公罪者、○中略其有二官、謂官位爲一官、勳位爲一官、官位每階各爲一官、勳位卽正從各爲一官、先以官位當、次以勳位當、謂位記雖多、先取最高者當、次以勳位高者當、行守者、各以本位當、仍各解見任、

〔續日本紀文武三〕慶雲元年六月己未、令諸國勳七等以下、身無官位者、聽直軍團續勞、

〔續日本紀聖武十〕天平元年九月辛丑、陸奧鎭守將軍從四位下大野朝臣東人等言、在鎭兵人勤功可錄、請授官位勸其後人、勅宜一列三十人各進二級、二列七十四人各一級、三列九十六人各給常布、

〔令義解官位一〕正三位

勳一等謂此條擧勳一等者、以顯相當正三位故也、下皆准之、依公式令、文武職事散官朝參行立、各依位次爲序、故知一等以下、皆著當色之服、立文官之列、(中略)然案衣服令、勳位服色、其制不顯、卽知一等以下、不著文位者、皆著黃袍也、

〔延喜式式部十八〕凡勳位朝參者、服文位服、列當位次第、若无文位、著黃袍、

〔類聚國史風俗百九十〕天長六年七月丙申、越中國俘囚勳八等吉彌侯部江岐麻呂叙從八位上、江岐麻呂口染皇化、志同良民、敎喩等倫、與行禮義、仍叙文位、俾申勸勵、

〔名目抄 諸公事言説篇〕一品（○親王最結句ニ叙スル位也、王臣ノ位ニ一位ヲ又一品ト云也、○中略）　二品（○親王叙之、臣ノ位ニ二位ヲ二品ト云、○中略）　三品（王臣位、同ニ二品一、○中略）　四品（王臣位、同ニ二品等一、○中略）　五品（王臣位、或五位也、）

〔續日本紀 聖武 十一〕天平六年二月癸巳朔、天皇御朱雀門覽歌垣、男女二百四十餘人、五品已上有風流者、皆交雜其中、

〔續日本紀考證 五〕五品卽五位、蓋摸倣唐制假稱之耳、寶龜十一年正月紀云、授新羅使薩飡金蘭孫正五品上、續後紀云、承和三年五月、詔、故入唐大使贈正二位藤原朝臣清河可贈從一品云々、皆此、

〔日本後紀 桓武 八〕延曆十八年正月丙午朔、皇帝御大極殿受朝、文武官九品以上、蕃客等各陪位、

〔日本後紀 桓武 十三〕大同元年二月甲寅、從三位行皇太子傅大伴宿禰弟麻呂上表言、臣幸遇昌運、見列貴班、如狗伏砌、于今卅有餘年、遂位昇三品、職參八卿、（○下略）

〔本朝世紀〕久安五年八月一日庚戌、是日從四位下行丹波守藤原朝臣通重卒、（○中略）初任能登守、尋遷丹波守、不歷京官至四品者也、

〔袋草子 三〕予（○藤原清輔）追先蹤叙位之時、故鳥羽院申文ニ副歌、

やへ〳〵の人だにのぼるくらゐ山おひぬるみにはくるしかりけり、是有募申事、四位ニ度々漏云々、昆弟等ハ至四品、無聽事ヲ思テ所詠之、賢有御感、其後叙四品、

〔本朝文粹 六 奏狀〕請殊蒙天恩被遷山城守兼任近江權介狀

小野道風（菅三品作）

右道風謹檢近代拜除之例、自當寮頭登四品之榮爵者、不改年曆、預一國之烹鮮焉、（○中略）

天德二年正月十一日　　木工頭正五位下小野朝臣道風

〔親長卿記〕文明九年五月廿四日、宗賢卿注進、

宗賢（康正元年十月一日、叙從四位下、元正五位上、）　有長（泰清本名、康正元年十月十二日、叙從四位下、元正五位下、）　爲此分者、四品五位時、共以宗賢上首也、（○下略）

令前之制
推古十一年制

〔光臺一覽三〕扨五家〇近衞、九條、二條、一條、鷹司、ともに、官位御昇進の次第は、先生れ何君樣と號け有、若君なれば、童形其儘に四品の少將の位、產屋より備りたまふ事ぞかし、

〔明良帶錄前篇〕大坂御城代四品溜間次〇中略　御側御用人諸大夫四品、或ハ侍從、

〔武家擊要〕御譜代家四品之家
松平越中〇桑名　松平甲斐〇郡山　大久保加賀〇小田原　奥平大膳〇中津

〔令義解七公式〕凡應敍親王四品、諸王五位、諸臣初位以上、謂、此顯初授之法也、稱以上者、承上三色也、其令條內稱階位者、正從、上下、各爲一階、擧二階爲一位、謂、擧計也、假令令條內、云從四位、正五位之類者、皆是混上下階之文、

〔續日本紀七元正〕養老元年十一月癸丑、天皇臨軒詔曰、〇中略　天下老人年八十已上授位一階、若至五位不在授限、

〔令義解四祿令〕凡在京文武職事、及大宰、壹岐、對馬、皆依官位給祿、〇中略　家令降一級、謂、書吏以上、通稱家令、假令從七位官、降爲正八位官之類、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年三月己未、勅曰、〇中略　宜天下六位以下皆加一級、孝子、順孫、義夫、節婦、及力田者二級、唯正六位上免當戶今年租、

〔日本書紀二十二推古〕十一年十二月壬申、始行冠位、大德、小德、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智、並十二階、並以當色絁縫之、頂撮總如囊而著緣焉、唯元日著髻華、髻華、此云于孺、　十二年正月戊戌朔、始賜冠位於諸臣各有差、

〔書紀集解二十二推古〕按、德色即紫、蓋此時據隋制也、隋書禮儀志曰、衣袴褶五品以上以紫、是也、其仁青、禮赤、信黃、義白、智黑、是當色也、

〔職官志一〕史但書並以當色之絹縫之、而不言其指何物為當色、蓋紫錦青黑之類、

〔冠位通考〕此時〇推古十一年群臣諸氏を十二等にわかちて、云々の氏は大德、云々の氏は小德、云々は

大仁、云々は小仁など定めて、其冠を給ひし事也、此冠はおほやけより給りて尊卑の驗とす、後世位記を給りて驗とするに同じ、冠がすなはちくらゐなる故、冠位とはいふ也、尊卑は家につきたる尊卑にて、身を終るまで同階也、次第轉昇の位にあらず、小德は、中臣連、阿邊臣、物部依網連、波多臣、近江脚身臣、平群臣、大伴連、大宅臣、巨勢臣、大仁は、犬上君、上毛野君、阿曇連、土師連、大禮は、小野臣とみゆ、又大德境部臣雄麻呂といふ有、此氏とりわきたる貴族ともみえず、舊記に誤注したるを、撰史の日取捨にくはしからざりしにこそ、今おもふに蘇我臣などや大德なりけむ、されば此十一年より大化三年までの間に、加階の事所見なし、もし叙位除目などは常の事なれば、書きて注さずといはんか、こは此時の新制なり、常の事とはいひがたし、事さだまりたる後にも、五位以上の加階は史にのれる物をや、但同帝〇推古十四年に、丈六の銅像、堂の戸より高くて、工匠どもいれ煩しを、鞍作鳥といふ人、堂の戸を壞たずして入たる賞に大仁を給ひし事あり、此人はもと无冠歟、冠位ありとも大智小智などいとかろかりけむ、これは加階せし事なれど、別功を賞するあまりの臨時の權制にて、既に階級を立られたるうへは、かやうの事いでくるもその勢也、堅固の別儀と去るべし、これに據て昇進の位階と心うべからず、

〔北史九十四列傳〕倭國、〇中略至開皇二十年、倭王姓阿每、字多利思比孤、號阿輩雞彌、遣使詣闕、上令所司訪其風俗、使者言、〇中略內官有十二等、一曰大德、次小德、次大仁、次小仁、次大義、次小義、次大禮、次小禮、次大智、次小智、次大信、次小信、員無定數、

〔五行大義三論五常〕五常者、仁義禮智信也、〇中略鄭玄注禮記中庸篇云、木神則仁、金神則義、火神則禮、水神則信、土神則智、詩緯等說亦同、毛公傳說及京房等說、皆以土爲信、水爲智、

〇按ズルニ、推古天皇ノ冠位ノ制ハ、毛公傳說及ビ京房等ノ說ニ依リテ、其色ヲ定メシナラン、即チ青ヲ仁ト爲シ、赤ヲ禮ト爲シ、黃ヲ信ト爲シ、白ヲ義ト爲シ、黑ヲ智ト爲シ、而シテ紫ヲ德ト爲シヽナラン、當時殊ニ紫ヲ貴ビシコトハ下ニ見エタリ、

〔釋日本紀十四述義〕冠位

私記曰、大德、（師說今之四位也）小德、（五位也）大仁、小仁、大禮、（六位也）小禮、大信、（七位也）小信、大義、小義、（八位也）大智、小智、（初位也）

〔冠位通考〕釋日本紀に引る私記に、大德、（今之四位也）小德、（五位也）大仁、小仁、大禮、（六位也）小禮、大信、（七位也）小信、大義、小義、（八位也）大智、小智、（初位也）とあるは、當たるさまこゝろにてすべて論なし、印本の日本紀に德は四位、仁は五位、禮を六位、信を七位、義を八位、智を初位にあてゝ傍注したり、（古本どもにはすべてみえず）大かた世上には、かやうの事を何ともおもはで看過す事なり、志ある人なん、時々講ずるもあれど、それはたゞひたすらに此說によりて、此度は公卿の階は置れざる也とおもふめるは少し口をし、凡物の序に、一二三はなくて、四よりふとあるやうやは有べき、これは此十二階を、今の三十階にあながちにあてんとする故なれど、十二階は十二にて具し、三十階は三十にて具したれば、こまかにあたらんやうはなし、もとよりことなる制度也、（今の位階に准據して、大かたの尊卑をみるやうやは）ある、（そは大德小德は一位に、大仁小仁は二位に、大禮小禮は三位に、大信小信は四位五位に、大義小義大智小智は六位七位八位にあたりて、初位はあつべき階なし、（中略））先達の說のごとくならば、四位以下の者は冠して、大臣、大連、公卿とある人の露頂なるはいかに、露頂なるがよろしくば、冠の制はなくてあるべきなり、公卿と无位の白丁とは露頂、中等の人は冠きるといふ事あるべきかは、皇極紀に、元年十二月甲午、發息長足日廣額天皇（○舒明）喪、是日小德巨勢臣德太、代大派皇子而誄、次小德粟田臣細目、代輕皇子而誄、次大伴連馬飼、代大臣而誄とあり、德太と馬飼とは大臣に昇し人、細目は菟田野の藥獵に前部領せし人なれば、從四位の人品とはみえず、此說すべて無稽なり、

〔日本書紀二十二推古〕十四年五月戊午、勅鞍作鳥曰、（○中略）卽賜大仁位、　十五年七月庚戌、大禮小野臣妹子遣於大唐、　十六年八月壬子、召唐客於朝廷、令奏使旨、（○中略）是時皇子諸王諸臣、悉以金髻華著頭、亦衣服皆用錦紫繡織及五色綾羅、（一云、服色皆用冠色、）　十九年五月五日、藥獵於菟田野、（○中略）是日諸臣服色、

皆隨冠色、各著髻華、則大德小德並用金、大仁小仁用豹尾、大禮以下用鳥尾、

○按ズルニ、此文ニ據レバ、此時ノ制ハ、德ヲ上トシ、仁ヲ中トシ、禮以下ヲ總テ下トセシナリ、

〔日本書紀推古二十二〕三十年〈○三十年原作三十一年、據書紀集解說改、〉以大德境部臣雄摩侶、小德中臣連國爲大將軍、〈○中略〉率數萬衆以征討新羅、

〔日本書紀皇極二十四〕二年十月壬子、蘇我大臣蝦夷、緣病不朝、私授紫冠於子入鹿、擬大臣位、

〔職官志一〕皇極帝二年十月、大臣蝦夷、私授其子入鹿紫冠、擬大臣之位、可見當時以冠色爲位階級、而紫是貴矣、大德小德、特稱上臣下臣、在諸位之上、然蝦夷入鹿、曾無此爵、而爲大臣、則其尊過天位、惟紫專服、而紫非上臣下臣有爵之所得歟、然則其制雖以冠色爲等、不必同於大化也、

〔文獻通考王禮考百十二〕煬帝〈○隋〉主時、師旅務殷、車駕多行幸、百官行從、唯服袴褶、而軍旅間不便、至大業六年後、詔從駕涉遠者、文武官等皆戎衣、貴賤異等、襯用五色、五品以上通著紫袍、六品以下兼用緋綠、吏胥以青、庶人以白、屠商以皂、士卒以黃、〈○中略〉

按此紫緋綠青爲命服、倣於隋煬帝巡游之時、而其制遂定於唐、此史傳所紀也、然夏侯勝、謂士若明經取青紫、如拾地芥、楊子雲亦言、紆青拖紫、丹朱其轂、則漢時青紫、亦貴官之服、西漢服章之制、無所考見、史言郊社祭服、承秦制、用袀玄、〈袀紺色也〉東漢則百官之服、皆袀玄、不聞以青紫、如淳注、雖有五時服、至朝皆皂服皂衣、皂衣卽玄服也、豈服章雖用袀玄、而青紫乃其時貴官燕居之服、非微賤者所可服歟、

〔通典禮六十一〕大唐制、天子衣服、有大裘、袞冕、鷩冕、毳冕、絺冕、元冕、通天冠、武弁、黑介幘、白紗帽、平巾幘、白帢、凡十二等、貞觀四年制、三品以上服紫、四品五品以上服緋、六品七品以上綠、八品九品以上青、婦人從夫之色、仍通服黃、

〔日本書紀皇極二十四〕二年十月己酉、饗賜群臣伴造於朝堂庭、而議授位之事、

大化三年制

〔日本書紀孝德二十五〕天豐財重日足姫天皇（皇極）四年六月庚戌、○中略輕皇子（孝德）○不得固辭、升壇卽祚、○中略以大錦冠授中臣鎌子連、爲内臣、

〔書紀集解孝德二十五〕按大化三年、制七色冠、大錦冠在第四品、曰以大伯仙錦爲之、以織裁冠之緣是也、此時未建第品、以此冠賜爲内臣而已、

〔日本書紀孝德二十五〕大化二年三月甲申、詔曰、○中略大仁小仁之墓者、其外長九尺、高濶各四尺、不封使平、役一百人、一日使訖、大禮以下小智以上之墓者、皆准大仁、役五十人、一日使訖、凡王以下小智以上之墓者、宜用小石、其帷帳等宜用白布、

○按ズルニ、此墓制ハ仁ヲ重シトシ、禮以下智以上之ニ次ゲリ、而シテ德ヲ擧ゲズ、未ダ詳ナラズ、

〔日本書紀孝德二十五〕大化三年、是歲制七色一十三階之冠、一曰織冠、有大小二階、以織爲之、以繡裁冠之緣、服色並用深紫、二曰繡冠、有大小二階、以繡爲之、其冠之緣、服色並同織冠、三曰紫冠、有大小二階、以紫爲之、以織裁冠之緣、服色用淺紫、四曰錦冠、有大小二階、其大錦冠、以大伯仙錦爲之、以織裁冠之緣、其小錦冠、以小伯仙錦爲之、以大伯仙錦裁冠之緣、服色並用眞緋、五曰青冠、以青絹爲之、有大小二階、其大青冠、以大伯仙錦裁冠之緣、其小青冠、以小伯仙錦裁冠之緣、服色並用紺、六曰黑冠、有大小二階、其大黑冠、以車形錦裁冠之緣、其小黑冠、以菱形錦裁冠之緣、服色並用綠、七曰建武、（初位、又名立身、）黑絹爲之、以紺裁冠之緣、別有鐙冠、以黑絹爲之、其冠之背張漆羅、以緣與鈿異其高下、形似蟬、小錦冠以上之鈿、雜金銀爲之、大小青冠之鈿、以銀爲之、大小黑冠之鈿、以銅爲之、建武之冠無鈿也、此冠者、大會饗客、四月七月齋時所著焉、

〔冠位通考〕十三階と定られたるは、推古の御時の十二階によりて、建武の一階を増れたる也、初位又名立身とある子注も、新加の階なる故、ことさらに注したる也、○中略此時よりは、後々のご

大化五年制

とく次第轉昇する冠位なり、さる故に立身の階を置れたる也、立身とは、無位の人、はじめて身をたてゝ入色する意の名なり、左右大臣、八省、百官を置れて、よろづから國の郡縣の制度に改られたる御代にて、冠位轉昇なども其の定なり、かくて推古の御時、大德、小德一位など、位尊き家がらの人も、此たびは謙退して、大紫小紫三位など卑き冠位を給りたり、しかする故は、推古の御時のは、家につきたる品秩にて、轉昇する事なき故、極位の冠を給しを、今般は功勞によりて轉昇する位なる故、上に所を置しなり、大化五年夏四月乙卯朔甲午、於小紫巨勢德陀古臣授大紫爲左大臣、於小紫大伴長德連一名馬飼也授大紫爲右大臣とあり、此二人はやく小德とみえたり、小德は第二の階小織にあたれるを、此ほどは小紫第六の階なりしをみて、謙退せし事をおもひ定むべし、ゆへなくして冠位を降されん事、いかゞなるやうなれど、これは制度改革の初にて、我も人もみな降る事なれば、恥もなく恨もなし、

〔日本書紀二十五孝德〕大化三年、是歲新羅遣上臣大阿飡金春秋等、送博士小德高向黑麻呂、小山中中臣連押熊、來、　四年四月辛亥朔、罷古冠、左右大臣、猶著古冠、

〔日本書紀二十五孝德〕大化五年二月、制冠十九階、一曰大織、二曰小織、三曰大繡、四曰小繡、五曰大紫、六曰小紫、七曰大華上、八曰大華下、九曰小華上、十曰小華下、十一曰大山上、十二曰大山下、十三曰小山上、十四曰小山下、十五曰大乙上、十六曰大乙下、十七曰小乙上、十八曰小乙下、十九曰立身、　四月甲午、於小紫巨勢德陀古臣授大紫、爲左大臣、於小紫大伴長德連字馬飼授大紫、爲右大臣、　五月癸卯朔、遣小華下三輪君色夫、大山上掃部連角麻呂等於新羅、

〔日本書紀二十五孝德〕大化三年四月壬午、工人大山位倭漢直荒田井比羅夫、誤穿溝瀆、控引難波而改穿、疲勞百姓、

○按ズルニ、大山位ハ大化五年ニ建ツル所ナルヲ、此ニ既ニ此名アルハ、恐ラクハ追記ナラン、

天智三年制

〔日本書紀孝德二十五〕白雉元年二月戊寅、穴戸國司草壁連醜經獻白雉、(○中略)於是褒美國司草壁連醜經、授大山、　五年二月、遣唐押使大錦上高向史玄理、(或本云、夏五月、遣唐押使大華下高向玄理、)大使小錦下河邊臣麻呂、副使大山下藥師惠日、判官大乙上書直麻呂、宮道阿彌陀、(或本云、判官小山下書直麻呂、)小乙上岡君宜、置始連大伯、小乙下中臣間人連老、(老此云於喩、)田邊史鳥等、分乘二船、留連數月、取新羅道、泊于萊州、

○按ズルニ、大錦上小錦下ノ二冠、大化五年ノ制ニアラズ、今天智天皇紀首ニ、齊明天皇七年八月、前將軍大華下阿曇比邏夫連ト云ヒ、又天智天皇元年五月紀ニ大將軍大錦中(○中恐下誤)阿曇比邏夫連トアルト、三年二月ニ、改前華曰錦ノ文ニ據リテ考フルニ、大錦上ハ卽チ大華上、小錦下ハ小華下ナリ、

〔續日本紀元明四〕和銅元年八月丁酉、攝津大夫從三位高向朝臣麻呂薨、難波朝廷(○孝德)刑部尙書大花上國忍之子也、

〔續日本紀元正九〕神龜元年六月庚巳、中納言正三位巨勢朝臣邑治薨、難波(○孝德)朝臣(○臣恐左字誤)大臣大繡德多之孫、中納言小錦中黑麻呂之子也、

○按ズルニ、巨勢德陀古大紫ヲ以テ薨ゼリ、大繡ハ恐ラクハ贈爵ナラン、

〔日本書紀天智二十七〕七年九月、(○齊明)皇太子(○天智)御長津宮、以織冠授於百濟王子豐璋、

〔日本書紀天智二十七〕三年二月丁亥、天皇命大皇弟、(○天武)宣增換冠位階名、及氏上、民部、家部等事、其冠有二十六階、大織、小織、(○小織原脫、以一本補、)大繡、小繡、(○繡二字原作縫、據一本改、)大紫、小紫、大錦上、大錦中、大錦下、小錦上、小錦中、小錦下、大山上、大山中、大山下、小山上、小山中、小山下、大乙上、大乙中、大乙下、小乙上、小乙中、小乙下、大建、小建、是爲二十六階焉、改前華曰錦、從錦至乙加六階、又加換前初位一階、爲大建小建二階、以此爲異、餘並依前、　四年二月、是月勘按百濟國官位階級、仍以佐平福信之功、授鬼室集斯小錦下、　是歲遣小錦守君大石等於大唐云々、(等謂小山坂合部連石積、大乙吉士岐彌、吉士針間、蓋送唐使人乎、)　六年十一月乙丑、百濟鎭將

天智十年制

劉仁願、遣熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等、送大山下境部連石積等筑紫都督府、　己巳、司馬法聰等罷歸、以小山下伊吉連博德、大乙下笠臣諸石、爲送使、　八年十月庚申、天皇遣東宮大皇弟於藤原內大臣〇鎌足家、授大織冠與大臣位、仍賜姓爲藤原氏、　是歲遣小錦中河內直鯨等、使於大唐、

十年正月庚子、大錦上蘇我赤兄臣、與大錦下巨勢人臣、進於殿前、奏賀正事、

〔日本書紀二十七天智〕十年正月甲辰、東宮太皇弟奉宣或本云、大友皇子宣也、施行冠位法度之事、大赦天下、法度冠位之名、具載於新律令、

〔冠位通考〕同帝〇天智十年の紀に、正月甲辰、東宮大皇弟施行冠位法度之事、大赦天下法度冠位之名、具載於新律令、とみえたり、新令とは所謂近江令也、近江令は、はやう世に亡て、今つたはらざれば、いかゞ定られけむしりがたけれど、日本紀のうへを考わたすに、諸臣の位は三年に定られたる廿六階のまゝにて、天武元年の紀に、内小七位阿曇連稻敷といふあり、かゝる位階の名、前後にみえず、此所ばかりなれば、これ此令の制度とはおもはれず、舊記の誤にぞあるべき、されどあまりおもひの外なる名目なれば、中々ゆへある事かもしり難し、又同二年よりつぎ〳〵、内大紫位、外小紫位、内大錦下、外小錦上などいふ階みえたり、内外の差別、大寶以下の内外の制とはたがひあるがごとし、いかなる等級ともいまだ考へず、これ天智の令條の制にはあらで、臨時の格制より出たるべし、親王諸王の位を置れたるなり、推古天皇の御時より、諸臣すら冠きるを、天皇皇親の露頂なるべきゆへなければ、有しには疑なきを、その制作の物にみえたる事なきは心殘るわざ也、法隆寺の聖德太子の像、やがて推古の御時の物といひつたへたれど、かの寺の古物は、多くは寧樂の朝の物なれば、これもその一具ならんもしりがたし、これを證據とはなしがたし、このたびも位階はみゆれど、冠の製作はみえず、近江令に、衣服令有しもしり難し、親王諸王と分られたるは、此令よりの事にて、これより前は、をのづからの尊卑はあれども、色を隔てず混一なりしかば、冠は一様なりしなるべし、このたびはいかゞありけむ、位階の名、一位、二位、三位、四位、五位、五位に限れるなるべし、三位より五位にいたるまで、物にみえたるはみな諸王なり、天武四年の紀に、小紫美濃王といふあり、十一年の紀にもみゆ、これは史の紕繆なり、諸王も諸臣の位に叙する事ありとおもふべからず、持統八年紀に、淨廣肆美濃王とある人なるに、淨位は諸王の位階なり、もし此時は、諸王ばかりの位を置れて、親王の位階は置れ

ざりしかどもおもへど、天武紀によるに、親王淨位に叙したれば、(かやうの制度は、漸こまやかになり行物なるに、天智の御時、既に親王諸王と別れたるを、天武の御時、更に親王諸王を混じて叙すべきにあらねばかく云、)こゝもしばらく其例にしたがひて、親王諸王混じて叙して、親王には一位二位など高き級給はりたる物と定むべし、(天武八年の紀に、二月己丑、吉備大宰石川王病之薨於吉備、天皇聞之大哀、則降大恩云々、贈諸王二位とあり、たゞに贈二位とはいはで、諸王二位としもいへるは、二位に叙するは親王の事にて、諸王にはなき事ゆへ、親王にはせられたるにまがはむかとて、諸王の二位とことはりたるなるべし、さては必親王二位の次にて、席次にはゞからで、必下に立事なるべし、降大恩とあるも、諸王にて親王の位に叙したれば也、)

〔日本書紀 二十七天智〕十年正月、是月、以大錦下授佐平余自信、沙宅紹明、(法官大輔)以小錦下授鬼室集斯、(學職頭○集斯、四年既授小錦下、下恐上誤、)以大山下授達率谷那晉首、(閑兵法○中略)以上、(○上恐衍)小山上授達率德頂上、(解薬中略)○以小山下授餘達率等五十餘人也、

〔日本書紀 二十九天武〕四年七月己酉、小錦上大伴連國麻呂爲大使、小錦下三宅吉士入石爲副使、遣于新羅、　五年七月、是月村國連雄依卒、以壬申年之功、贈外小紫位、

〔日本書紀 二十九天武〕五年正月甲子、詔曰、凡任國司者、除畿内及陸奥長門國以外、皆任大山位以下人、　八月、是月大三輪眞上田子人君卒、天皇聞之大哀、以壬申年之功、贈内小紫位、

〔日本書紀 二十九天武〕四年四月癸未、遣小紫美濃王、小錦下佐伯連廣足、祠風神于龍田立野、　五年十月甲辰、以大乙上物部連麻呂爲大使、大乙中山背直百足爲少使、遣新羅、　九年五月辛丑、小錦中星川臣麻呂卒、以壬申之年功、贈大紫位、　十年正月丁亥、親王以下、小建以上、射于朝廷、　三月丙戌、天皇御于大極殿、以詔川島皇子、忍壁皇子、廣瀬王、竹田王、桑田王、三野王、大錦下上毛野君三千、小錦中忌部連首、小錦下阿曇連稻敷、難波連大形、大山上中臣連大嶋、大山下平群臣子首、令記定帝紀及上古諸事、大島子首、親執筆以錄焉、　十月庚寅、詔曰、大山位以下、小建以上人等、各述意見、是月天皇將蒐於廣瀬野、而行宮構訖、裝束既備、然車駕遂不幸矣、唯親王以下及群卿、皆居于輕市、而檢校裝束鞍馬、小錦以上大夫、皆列坐於樹下、大山位以下者、皆親乘之、共隨大路、自南行北、　十一年正月癸卯、大山

天武十四年制

舍人連糠虫、授小錦下位、　十三年閏四月丙戌、詔曰、凡政要者、軍事也、是以文武官諸人、務習用兵及乘馬、則馬兵幷當身裝束之物、務具儲足、其有馬者爲騎士、無馬者爲步卒、並當試練以勿障於聚會、若忤詔旨、有不便馬兵、亦裝束有闕者、親王以下逮于諸臣、並罰之、大山位以下者、可罰罰之、可杖杖之、其務習以能得業者、若雖死罪、則減二等、唯恃己才、以故犯者、不在赦例、

〔續日本紀七元正〕靈龜二年四月癸丑、詔壬申年功臣、〇中略贈大雲星川臣麻呂息、從七位上黑麻呂、〇中略賜田各有差、

〔續日本紀考證三〕天武紀云、九年五月、小錦中星川臣麻呂卒、以壬申年功、贈大紫位、此及天平寶字元年十二月紀、並書贈大雲、未詳、或曰大雲卽大紫、又見勝寶五年三月紀、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年十二月壬子、太政官奏曰、〇中略贈大雲星川臣麻呂、壬申年功田四町、〇中略依令中功、合傳二世、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶五年三月辛未、大納言從二位兼神祇伯造宮卿巨勢朝臣奈氐麻呂薨、小治田朝〇孝德小德大海之孫、淡海朝〇天智中納言〇中納言、當作大納言、大雲比登之子也、

〔日本書紀二十九天武〕十四年正月丁卯、更改爵位之號、仍增加階級、明位二階、淨位四階、每階有大廣、並十二階、以前諸王已上之位、正位四階、直位四階、勤位四階、務位四階、追位四階、進位四階、每階有大廣、並四十八階、以前諸臣之位、

〇按ズルニ、親王諸王ト諸臣トノ位號ヲ、正シク定メラレタルハ、此時ヲ以テ始トス、

〔冠位通考〕天武紀に、十四年春正月丁卯、更改爵位之號、〇中略とあり、これまでは冠位のすゝむごとに、公よりその色の冠を給りてそれを驗としたりしを、〇註略此度よりは、その事を停止せられて、位記を給はりて驗として、冠はみな漆紗冠なり、〇註略尊卑の差別はなく通用したり、いで其徵は、これまでの沿革の度々の文、制一十三階之冠、其冠有廿六階などやうに、冠にかけてか

けるを、こゝは爵位之號、明位正位といひ、諸王以上之位、諸臣之位〻どいひて、冠といふもじ一ツもなく、次々の文にも、爵位、官位、直位、勤位、有位者、無位者、初位以上、賜位及祿、進位一階、降位二階、贈直大參位、加勤大壹位などのみありて、冠とはをさ〳〵いはず、持統三年の紀に、九月庚辰朔己丑、遣直廣參石上朝臣麻呂、直廣肆石川朝臣虫名等於筑紫、給送位記、五年の紀に、二月壬寅、是日授官人位記とあるは明文なり、たゞし冠位と熟したる文字、三所ばかりもみえたるうへに、おなじ帝七年の紀に、冬十月丁巳朔戊午、詔自今年始於親王下至進位、觀所儲兵、淨冠至直冠、人甲一領、太刀一口、弓一張、矢一具、鞆一枚、鞍馬、勤冠至進冠人太刀一口、弓一張、矢一具、鞆一枚、如此預備とあり、又下に引る續日本紀の文などをあはせて、なほ冠給しにやとおもふ人もあるべければ、かの給送位記、授位記などある明證に確執して、此疑をとかんとす、さるは推古天皇の御時より、年久しく冠給はる制度にて、くらゐの事を冠といひなれて、世々の宣命に、冠位上給ひとあるも、中古のかな文に、叙爵する事を、かうふり給るといへるも、なを此詞の遺れる也、此時も打とけ事には、淨のかうふり、直のかうふりといひたりけんを、そのまゝに書る物ありて、それを史料としてかゝれたる文也とことはるべし、いかさまにも位記を給し物とぞみゆる、

〔職原抄 後附〕十二階 並四十八階

天武天皇十四年正月丁未朔丁卯、更改爵位之號、

明大一位　明廣一位　明大二位　明廣二位

淨大一位　淨廣一位　淨大二位　淨廣二位　淨大三位　淨廣三位　淨大四位　淨廣四位

正大一位　正廣一位　正大二位　正廣二位　正大三位　正廣三位　正大四位　正廣四位

直大一位　直廣一位　直大二位　直廣二位　直大三位　直廣三位　直大四位　直廣四位

勤大一位　勤廣一位　勤大二位　勤廣二位　勤大三位　勤廣三位　勤大四位　勤廣四位

務大一位　務廣一位　務大二位　務廣二位　務大三位　務廣三位　務大四位　務廣四位

追大一位　追廣一位　追大二位　追廣二位　追大三位　追廣三位　追大四位　追廣四位

進大一位　進廣一位　進大二位　進廣二位　進大三位　進廣三位　進大四位　進廣四位

〔日本書紀二十九天武〕十三年二月庚辰、遣淨廣肆廣瀨王、小錦中大伴連安麻呂、及判官、錄事、陰陽師、工匠等於畿内、令視占應都之地、

○按ズルニ、淨廣肆ハ天武天皇十四年ニ、始テ建ツル所ノ位號ナリ、而ルニ本書ニ之ヲ其前年ニ記セルハ、恐ラクハ追記ナラン、

〔日本書紀二十九天武〕十四年正月丁卯、草壁皇子尊授淨廣壹位、大津皇子授淨大貳位、高市皇子授淨廣貳位、川島皇子忍壁皇子授淨大參位、自此以下諸王諸臣等、增加爵位、各有差、　二月庚辰、大唐人、百濟人、高麗人、並百四十七人賜爵位、　三月辛酉、京職大夫直大參巨勢朝臣辛檀努卒、　五月甲子、直大肆栗田朝臣眞人讓位于父、然勅不聽矣、是日直大參當麻眞人廣麻呂卒、以壬申年之功、贈直大壹位、　九月戊午、直廣肆都努朝臣牛飼為東海使者、○中略直廣參路眞人迹見、為南海使者、

〔古京遺文〕采女氏塋域碑

飛鳥淨原大朝庭○天武大辨官直大貳采女竹良卿、所請造墓所、形浦山地四千代、他人莫上毀木犯穢傍地也、

己丑年○持統三年十二月廿五日

〔日本書紀三十持統〕元年正月甲申、使直廣肆田中朝臣法麻呂、與追大貳守君苅田等、使於新羅、　三年二月己酉、以淨廣肆竹田王、直廣肆土師宿禰根麻呂、大宅朝臣麻呂、藤原朝臣史、務大肆當麻眞人櫻井、○中略為判事、　五年正月乙酉、增封、皇子高市二千戸、通前三千戸、淨廣貳皇子穗積五百戸、淨大參川嶋百戸、通前五百戸、正廣參右大臣丹比嶋眞人三百戸、通前五百戸、正廣肆百濟王禪廣百戸、通前二

百戶、直大壹布勢御主人朝臣與大伴御行宿禰八十戶、通前三百戶、　十一月戊申、以直大肆授直廣肆引田朝臣少麻呂、

〔續日本紀 文武一〕元年十一月癸卯、遣務廣肆坂本朝臣鹿田、進大壹大倭忌寸五百足於陸路、務廣肆土師宿禰大麻呂、進廣參習宜連諸國於海路、以迎新羅使于筑紫、　四年五月辛酉、以直廣肆佐伯宿禰麻呂、爲遣新羅大使、勤大肆佐味朝臣賀佐麻呂爲少使、

〔古京遺文〕威奈眞人大村墓志

小納言正五位下威奈卿墓誌銘并序

卿諱大村、檜前五百野宮御宇天皇（〇宣化）之四世、後岡本聖朝（〇齊明）紫冠威奈鏡公之第三子也、（〇中略）後清原聖朝（〇持統）初授務廣肆、藤原聖朝小納言闕、於是高門貴冑、各望備員、天皇特擢卿、除小納言授勤廣肆、居無幾進位直廣肆、以大寶元年律令初定、更授從五位下、仍兼侍從、（〇下略）

〔日本書紀 天武二十八〕元年三月己酉、遣内小七位阿曇連稻敷於筑紫、告天皇喪於郭務悰等、

〇按ズルニ、位階ニ幾位ト稱セシコトハ、大寶制令以前ニ、既ニアリシナリ、

〔日本書紀 天武二十九〕四年正月戊申、百寮諸人、初位以上進薪、　壬戌、公卿大夫及百寮諸人、初位以上射于西門庭、

〇按ズルニ、此ヨリ先キ孝德天皇大化三年ノ條ノ建武ノ注ニ初位ト云ヒ、天智天皇三年ノ條ニ加換前初位（立身）一階、爲大建小建二階トアレド、直ニ初位ト擧ゲタルハ是ヲ始トス、

〔日本書紀 天武二十九〕四年三月庚申、諸王四位栗隈王、爲兵政官長、

〇按ズルニ、諸王四位トハ、諸臣ニ分タンガ爲メニ言フ所ナリ、

〔日本書紀 天武二十九〕四年四月辛卯、三位麻續王有罪、流于因幡、　五年九月丁丑、筑紫大宰三位屋恒王有罪、流于土左、　七年九月、三位稚狹王薨之、　八年三月己丑、吉備大宰石川王、病之薨於吉備、天皇

令制

開之大哀、則降大恩云々、贈諸王二位、　七月乙未、四位葛城王卒、　九年七月戊戌、納言兼宮內卿五位舍人王病之臨死、則遣高市皇子而訊之、明日卒、　十一年六月癸酉、五位殖栗王卒、　十二年六月壬戌、三位高坂王薨、　十二月丙寅、遣諸王五位伊勢王、大錦下羽田公八國、小錦下多臣品治、小錦下中臣連大島、幷判官錄史工匠者等、巡行天下、而限分諸國之境堺、

〔日本書紀三十持統〕八年正月辛丑、五位以上射、壬寅、六位以下射、四日而畢、　十一年六月辛巳、遣五位以上、掃灑京寺、

〔續日本紀一文武〕八月○元年壬辰、賜皇親及五位已上食封、各有差、

〔續日本紀二文武〕大寶元年三月甲午、始依新令、改制官名位號、親王明冠四階、諸王淨冠十四階、合十八階、諸臣正冠六階、直冠八階、勤冠四階、務冠四階、追冠四階、進冠四階、合三十階、外位始直冠正五位上階、終進冠少初位下階、合二十階、勳位始正冠正三位、終追冠從八位下階、合十二等、始停賜冠、易以位記、語在年代曆、又服制、親王四品已上、諸王諸臣一位者、皆黑紫、諸王二位以下、諸臣三位以上者、皆赤紫、直冠上四階深緋、下四階淺緋、勤冠四階深綠、務冠四階淺綠、追冠四階深縹、進冠四階淺縹、皆漆冠、綺帶、白襪、黑革舃、其袴者、直冠以上者、皆白縛口袴、勤冠以下者、白脛裳、授左大臣正廣貳多治比眞人島正○正正二位、原作正二位、今補正二位、大納言正廣參阿倍朝臣御主人正從二位、中納言直大壹石上朝臣麻呂、直廣壹藤原朝臣不比等正正三位、直大壹大伴宿禰安麻呂、直廣貳紀朝臣麻呂正從三位、又諸王十四人、諸臣百五人、改位號、進爵各有差、　五月己亥、始改勳位已下之號、內外有位六位已下者、進階一級、

〔續日本紀考證二〕按上正、正冠之正、下正、正從之正、是日改官名位號之始、故於所授位階上冠以此字、明其相當承前之正冠也、下皆倣此、

〔冠位通考〕續日本紀に、大寶元年三月甲午、始依新令、改制官名位號、中略○とあるは、事のさまたが

ひたり、大寶よりこなたは、正一位從一位などこそいへ、〇註略正冠直冠などいひし事は、髙の書にみえざなるを、たゞこゝにのみかくあるはいかに、此文の書ざまは、正冠直冠といふ事表にたちて、一位二位はうらになれり、又此下に の文に、正正三位、正從三位、神龜五年の紀に、明一品などいふ事のみゆる、明正は冠の名也、外位始二直冠正五位上階一、終二進冠少初位下階一ともある、これらは冠と位とをあはせてよぶべきがごとし、されど此史にも、たゞ此一二こそあれ、異所にはなく、よろづの書にすべてみえざる事なり、依二新令一とある令には、冠の名一所もみえず、今の令は、養老に刊修せられたる物なれば、大寶にはありけんを、養老に改削せられしかと、うたがひの生ずべき事なれど、官位令職員令は、大寶のまゝにて、其證たゞ一二のみならず、又某冠といふは、さる冠を給りて著たる故なるに、此時のは、此下文に、やがて皆諡冠〇註略とありて、冠の色はなし、色なくば何の料にか某冠といはむ、こは撰史の博士たち、天武の御時よりは、正位直位一位二位といふ稱にて、冠とはいはざるをおもひたがへて、〇註略大寶にさへ此稱ありと心えたる誤にぞあるべき、令も史も正典なるなかに、令は大寶の當時の物、史は後世より溯りてかけるものなれば、令によりて史を弃るより外なし、

〔令義解一官位〕親王

一品謂品、位也、親王稱レ品者、別二於諸王一、公式令云、應レ叙者、親王四品、諸王五位、諸臣初位以上是也、　二品　三品　四品

諸王　諸臣

正一位（オホイヒトツノクラヰ）　從一位（スナイヒトツノクラヰ）　正二位　從二位　正三位　從三位

正四位〇有二上下二階一　從四位〇有二上下二階一

正五位〇有二上下二階一　從五位〇有二上下二階一　正六位〇有二上下二階一　從六位〇有二上下二階一　正七位〇有二上下二階一　從七位〇有二上下二階一

正八位〇有二上下二階一　從八位〇有二上下二階一　大初位〇有二上下二階一　少初位〇有二上下二階一

〔冠位通考〕三十階の等差は、一位はことに尊し、正一位は奈良の朝にはまれに授し事もあれど、今の京となりては存在の人に授はる事はなし、神位贈位などに限れり、從一位も、そのかみはいとたやすからず、大臣とても二位なるが多かり、〇註略儀制令に、右大臣以上、若散一位喪、皇帝

不視事三日、三位以上喪、皇帝不視事一日、（三位以上とは、二位三位なり、）喪葬令、百官在職薨卒、當司分番會喪、親王及太政大臣、散一位、（こゝは左右大臣よりも重し、）治部大輔監護とあり、（儀制令の蓋の條、衣服令の禮服條、喪葬令の葬儀贈物の條など、すべて何事も一位はよせことなる趣、事にふれて多かり、）これらにてもこよなき事しるべきなり、（今にいたるまで、攝關大臣の外に、一位を給はることなるなり、）朝議二位三位は大かたの差降なり、以上六階、上階といふ、公卿の階なり、（公卿とは大臣納言參議など也、非參議なるも、散位なるも、古よりある事なれど、それは公卿に准ぜらるゝ心ばへにて、かりに叙せらるゝ也、）律目録の六議の中に、議貴、謂三位以上とありて、打まかせたる貴人といふは上階の人の事なり、（上階とは上中下の上にはあらず、參議以上なる上卿にて、上卿の階といふ事、公卿の階といふに同じ、）三位と四位とは、こよなききざみ也、四位五位は大夫の階にて、大かたの差降なり、令義解に、五位以上、謂之通貴とあり、（通とは普通の意、）以上みな勅授にていとおもく、律には請章に入れり、しかるに應永の頃より、故實やう〱うせて、諸司の官人、藏人所の出納、小舍人まで、四位五位ならぬはなし、尤本意なき事なり、五位と六位とはいと〱こよなし、（[illegible][illegible]別、武家さまの[illegible]目見以上と以下との如し、）六位七位八位は、大かたの差降なり、（六位七位は上士、八位は下士などにや、いさゝか差別なきにあらず、律には六位七位は減章に、八位は贖章にて異なり、又外八位は初位と一色なるも、異なる所みゆる也、）初位はいとかろし、（出身の階なる故なり、又外八位もこれに准ずる也、）

〔倭名類聚抄職官五〕位階　官位令云、（今案唐令有官品、今本朝以位代品、）一品、二品、三品、四品、（品讀之奈、）已上爲親王位階、一位二位、三位、（已上有正從、無上下階、[illegible]參議、）已上位階、若非參議以上登此位者、世謂之散三位、四位、五位、（已上爲大夫位階、）六位、七位、八位、（四位以下八位以上、皆毎位有上下四階、正四位上、於保伊與豆乃久良井乃加美豆之奈、從八位下、比呂伊夜豆乃久良比乃之毛豆之奈、擧上下則其餘可知、）大初位、少初位、（各有上下、初讀如字、）

〔玉勝間一〕位階の正從の訓の事

位階の正從の訓、正を於保伊（オホイ）といひ、從を比呂伊（ヒロイ）といふ、こは天武紀十四年に、更改爵位之號云云、毎階有大廣、云々とある、此大と廣との訓をうつし用ひられたる也、これらももとは、於保伎（オホキ）比呂伎（ヒロキ）とぞ唱へけむを、ともに伎（キ）を伊（イ）といふは、後の音便なり、古今集序に、柿本人まろを、おほ

きみつのくらゐとあるは、心得ぬことながら、おほいとか、ずして、おほきと書るはふるきにかなへり、

〔光臺一覽 三〕正一位　本朝此位を置れてより以下、兩三人之外、存生の例無之、近は一向神之位とて、此位に叙する人無之なり、神位又は有德いさほし多き人の贈位なり、正の字淸てよむべし、神位なればなり、〇中略

正二位　此位より以下は、正之字濁り讀ならひなり、

〔令義解 四選敍〕凡内外五位以上勅授、内八位、外七位以上奏授、外八位、及内外初位、皆官判授、(謂勅授奏授判授者、宮人授法亦同、其勳位亦依相當法、准文位式、假令六等以上爲勅授、十二等以上爲奏授之類也、)

〔令義解 七公式〕凡應叙、親王四品、諸王五位、諸臣初位以上、(謂此顯初授之法也、稱以上者、承上三色也、)稱其令條内稱階位者、正從上下、各爲一階、率二階爲一位、(謂率、計也、假令令條內、云從四位正五位之類者、皆是混上下階之文、即給資人位田位祿等、上下同差、故立此法也、)其三位以上、及勳位、正從各爲一位、餘條稱等者、亦與階同、(謂選叙令云、三位以上蔭及孫、降子一等之類、)

〔續日本紀 二文武〕大寶元年三月壬寅、賜右大臣從二位阿倍朝臣御主人絁五百疋、〇下略

〔續日本紀 十聖武〕神龜五年七月乙卯、勅三品大將軍新田部親王授明一品、

〇按ズルニ、續日本紀此條ノ下ニ、八月甲午ノ鷹ヲ養フコトヲ禁ズルノ詔、及同日内匠寮中衞府ヲ置クノ詔アリ、之ヲ享祿本類聚三代格、帝王編年記等ノ諸書ニ徵スルニ、内匠寮、中衞府ハ、七月乙卯(二十一日)ノ事ナレバ、八月甲午ノ四字ノ誤衍ナルヲ知ル、次ニ甲申、壬午、丙戌、丁卯アリ、支干ヲ推スニ、並ニ八月ノ事ニシテ、丁卯ハ壬申ノ上ニ在ルベク、甲申ハ壬申ノ下ニ在ルベシ、其錯亂セル此ノ如シ、故ニ明一品ノ誤タルヲ知ル、且ツ新田部親王ハ、嚮ニ既ニ一品ニ陞レバ、三品ト云フノ理ナキヲヤ、

〔續日本紀考證 四〕案天武朝、明位淨位爲諸王已上之位、迨大寶定制、改官名位號、無復此稱、且新田

部親王、元年既叙二一品一、此云レ授二明一品一者未詳、蒲生氏謂、授二明一品一者、謂二一品之人可レ授二明冠一也、引二天平十三年勅、禮服之冠、元是官賜之文一以證之、乃言大寶之初、已停二賜冠一、而自二神龜一授例復作、恐屬二牽强一、不レ若二闕レ疑之爲一レ愈也、

〔東大寺正倉院文書二十二〕御野國味蜂間郡春部里、大寶貳年戸籍

伍保上政戸、國造族坂麻呂戸口廿六、○中略　戸主伯務従七位下雲方、○中略

中政戸、務従七位下國造族馬手、戸口十九、○中略

太寶二年二月

守直従五位上少治田當麻朝臣

介勤従六位上許勢朝臣眞弓

目追正八位下五百井造豐國

大掾務従七位上津嶋連堅石

少掾追正八位上紀朝臣宮麿

少目追従八位上矢集宿彌宿奈麿

主政進大初位下伊福部君福善

主帳進大初位下春日坌

〔東大寺正倉院文書二十四〕御野國加毛郡半布里、大寶貳年戸籍、

中政戸、務従七位下不破勝族吉麻呂、戸口十七、○中略

太寶二年十一月

守直従五位上少治田當麻朝臣

介勤従六位上許勢朝臣眞弓

目追正八位下五百井造豐國

大掾務従七位上津嶋連堅石

少掾追正八位上紀朝臣宮麻呂

少目追従八位上矢集宿禰宿奈麿

主帳進大初位下縣主弟麻呂

〔續日本後紀仁明一〕天長十年三月丙申、肥後國葦北郡少領外従八位上他田繼道叙二三階一、同郡白丁眞

髮部福益賜出身焉、以各輸私物濟飢民也、

〔職原抄後附〕正一位唐名文散位　天平勝寶二年、○二年、公卿補任繫元年、以從一位左大臣諸兄、始叙正一位、其後藤原押勝、同永手等公叙之、此外無存生例、皆以贈位也、

從一位唐名開府儀同三司　天平十五年、右大臣諸兄始叙之、大臣以十年勞必叙一位、或又依時議叙之、前大納言叙例、弘安六年基具公始叙之、其後皆以可然人人叙之、現任大納言叙例、嘉元三年○嘉元三年、公卿補任繫永仁七年、具守公也、近代宣房卿叙之、已來名家輩、多以叙之、可謂無念、

正二位唐名特進或上柱國　大寶元年、以左大臣正廣二○二原作三、據續日本紀改、多治比嶋眞人、改正廣三始叙之、

從二位唐名光祿大夫　文武五年、以大納言正廣三阿倍御主人始叙之、攝政關白大臣納言參議叙之、散正二位、始延久師成卿、同從二位、正曆成忠初也、二位中將始賴宗公也、攝關子及孫得之、只人俊房通光公等也、又少將、永久教實始之、或又侍從叙之、祐家　儒道宿老公卿以下、皆叙之者也、

正三位唐名金紫光祿大夫　文武五年、以中納言直大一石上麻呂叙之、

從三位唐名銀青光祿大夫　和銅二年、以長屋王始叙之、文武四年、中納言大神高市丸叙之、近衞中將者、承和二年源信公正三位任左中將、始叙之、依彼例東三條關白兼家公始爲三位中將、其後執柄凡人息皆叙之、少將者、宇治關白始之、或御堂　其以後執柄息時々叙之、孫忠家卿　規模事也、抑散三位者、儒道神祇者尤得之、順德院御記曰、近年諸大夫、生公達、或上或下、一面趣此境、如雲霞、所謂離二道、中將辨　信輔敦兼通基等濁流捨文、南家捨武、平家及事潤屋、清隆邦綱等輩、去辨去中將、山中昨木之類也、何況塵土出身始、清華零落終、萬人以此境爲道、仍近年世人號三位淵云々、

正四位上唐名正議大夫　藏人頭、及賀安兩家、陰陽道神祇輩、外記史等宿老叙之、

正四位下唐名通議大夫

從四位上下唐名上、大中大夫、下、中大夫、　貴賤任次第叙之、無殊子細、法曹輩及侍叙四位、隨分抽賞之儀也、

正五位上〈唐名中散大夫〉　五位職事、及外記史、明法道等叙之、如正四位上、
正五位下〈唐名朝議大夫〉
從五位上下〈唐名上、朝請大夫、下、朝散大夫、〉　是又無別儀、外從五位下叙内階、載入内勘文、
正六位上〈唐名朝議郎〉　藏人及少外記少史侍等叙之、外記史等以六位十年勞叙爵、其餘相當見右、
正六位下〈唐名承議郎〉
從六位上下〈唐名上、奉議郎、下、通直郎、〉　子細大略同右
以上十八階訖
正七位上下〈唐名上、朝請郎、下、宣德郎、〉
從七位上下〈唐名上、朝散郎、下、宣議郎、〉　左右少史、少内記、陰陽漏剋博士助教、明法博士、大上國掾等、七位相當也、
正八位上下〈唐名上、給事郎、下、徵事郎、〉
從八位上下〈唐名上、承奉郎、下、承務郎、〉　采女主水佑、中下國掾、八位相當也、
大初位上下〈唐名上、儒林郎、下、登仕郎、相當同之、〉
少初位上下〈唐名上、文林郎、下、將仕郎、〉　下國目等相當也
已上三十階訖

〔冠位通考〕中古以來は、六位以下は、たゞ正六位上のみありて、それより下の位階に叙せらるゝ事は絶にたり、職源抄に、近代六位中不分正從、皆正六位上也とあり、これいつよりの事ならん、延喜などの頃には、うるはしかりし事勿論なり、考選の政廢弛して、功勞をかぞへて叙授せらるゝ事、やう〳〵たえ行ける故、下々の階級はさしも用なく、六位以下を一口にたゞいやしきものと定めて、こまかなるきざみに心をもとゞめられぬ也、萬の政、冷泉院の御時よりこなた、いたうゆる

びて、寛弘長和三四の御代のほどに、すたれつきたりとおぼゆれば、此事もそのほどの事なるべきにや、朝野群載にみえたる數の文書を見渡すに、長保四年、官掌從七位上日下部宿禰保隆、治暦三年、將曹從七位上玉手朝臣輔頼、元永三年、從六位上秦宿禰氏吉など、たゞ二三人みえて、(闕ありて停られしにあられば、申にまかせて給はりし也、また申人は、先蹤の例など、かたくまもりて申請しにやあらん、いぶかし、)その餘はいかにかろき一分二分も、ことごとく正六位上とあるにて、此説の虚ならぬ事をしるべし、成功をむねと任せられし比は、別に叙位のさたはなけれども、衞府の尉、諸司の三分などは、任せらるれば、やがて六位なりしにこそ、國々の在廳、散位正六位上となのる輩も、在廳とだにいへば、六位はそひたるもの、やうに心えて、押てなのりし物ならんとおぼゆるは、いかゞあらん、もししからば、いともいとも猥なる事也、近きころの御法にて、六位七位の正從上下の階級を再興せられて授はる事也ときく、八百年外にきらめく美政なり、

〔草茅危言　二〕武門叙任ノ事

一何ノ比ヨリカ、武門ノ叙爵ハ五位ニ止マリ、京室ニ六位バカリハ、僅ニ存スレドモ、七位以下ハ全ク廢レタリ、惜ムベキコト也、又江都ノ諸士ハ、薄祿微職ニテモ直參ト稱シテ、侯國ヨリ格別ノ崇敬アルニ、五位諸大夫以下ハ、皆無位ニテ平人ト同ジキモ、アマリ質ニ過タルコト也、又侯家ノ家老、番頭ナドハ、陪臣ナガラ仕ニ大祿アリ、其國邑ニテハ重キ身ナル故、此類モ位階アリタキモノ也、故ニ何トゾ六位以下ノ位階ヲ上代ノ如ク復シ、大初位ヨリ年限勤勞ヲ以テ次第ニ進叙シ、六位ニ止ルヤウニ有タキモノ也、迚モノコトニ官モ廢官ヲ再興シ、諸人官稱ノ少シニテモ、ツカヘ少ナキヤウニスルモ良法ナルベシ、

〔明和新增京羽二重　一〕外記方

權少外記　正六位上山口治部大丞中原康俊　同　正六位下平田式部少丞中原弘之〇中略

召使　正七位下靑木玄蕃少允宗岡行充

〔都仁志喜二下〕外記方

少内記　正六位上平田中務大錄職明〇中略　史生　正六位下靑木民部少丞行恒

藏人方

戸屋主　從七位下弓削右馬少屬伴正繼

〔憲法類編二〕官位御改正ニ付、從來ノ百官受領被廢、位階ヲ以可稱等ノ事、

己巳〇明治二年七月八日御達

今般官位御改正ニ付、從來之百官並受領被廢候事、

但位階四位ヨリ初位ニ至ル迄、上下之稱被廢候事、

一是迄拜叙之位階ハ可爲其儘、尤無官之輩、華族ヨリ諸官人末々ニ至ル迄、位階ヲ以可稱事、

但正從ヲ以可稱事

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年八月癸巳、改元神護景雲、詔曰、〇中略六位以下、及左右京男女年六十以上賜一級、但正六位上重三選以上者、賜上正六位上、

〔冠位通考〕上正六位上といふ位、此外には見えず、こは權時の政にて、かゝる位階を置れたる、常規にはあらぬなるべし、

〇按ズルニ、祥瑞等アリテ位一級ヲ加フベキ詔アル時、正六位上ハ進ミテ從五位下トナレバ勅授タルヲ以テ陞敍セズ、爲ニ租ヲ免シ、又ハ其子ニ位階ヲ廻授スルコトアリ、尙ホ政治部敍位篇正六位上不在進限ノ條參看スベシ、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年九月己未、隼人司隼人百十六人、不論有位無位、賜爵一級、其正六位上者、叙上正六位上、

生前授正一位

〔續日本紀 稱德 三十〕神護景雲三年十一月庚寅、天皇臨レ軒、大隅薩摩隼人奏二俗伎一、○中略上正六位上大住忌寸三行授二外從五位下一、

〔續日本紀 聖武 九〕神龜元年二月丙申、勅尊二正一位藤原夫人一○宮子稱二大夫人一、

〔續日本紀 聖武 十二〕天平九年七月丁酉、勅遣二左大辨從三位橘宿禰諸兄、右大辨正四位下紀朝臣男人、就二右大臣○藤原武智麻呂第一授二正一位一拜二左大臣一、卽日薨、

〔藤原家傳 武智麻呂〕至二九年○天平七月一遘疾彌留、朝廷惜之、其廿四日皇后親臨、稱二勅問一患、叙二正一位一、徙爲二左大臣一、其翌日薨二于左京私第一、

〔續日本紀 聖武 十七〕天平勝寶元年四月丁未、天皇幸二東大寺一、御二大盧舍那佛前殿一、大臣以下百官、及士庶皆以レ次行列、詔授二左大臣從一位橘宿禰諸兄正一位一、

〔續日本紀 淳仁 二十四〕天平寶字六年二月辛亥、授二從一位藤原惠美朝臣押勝正一位一、

〔續日本紀 光仁 三十一〕寶龜元年十月己丑朔、詔曰、○中略授二從一位藤原永手朝臣正一位一、

〔官報 二千二百九十號〕明治二十四年二月二十日

故三條內大臣○實美履歷○中略

二十四年二月十八日　朕踐祚ノ初、幼冲ニシテ一ニ輔弼ニ賴ル、卿躬重任ニ膺リ、彝順匡救、誼師父ニ同ジ、草竭懈ナク終始渝ラズ、洵ニ是中興ノ元勳、實ニ臣庶ノ龜鑑タリ、茲ニ特ニ正一位ニ敍シ、純忠ヲ表彰ス、　敍二正一位一　奉勅　宮內大臣

外位

〔續日本紀 文武 二〕大寶元年三月甲午、始依二新令一、改二制官名位號一、○中略諸臣正冠六階、直冠八階、勤冠四階、務冠四階、追冠四階、進冠四階、合三十階、外位始二直冠正五位上階一、終二進冠少初位下階一、合二十階、

〔冠位通考〕外位は、正五位上より少初位下まで廿階ありて、內位(內位とは、よのつねの位階の事なるを、外位に分たんとて、かりに內位といふ例なり、)よりは、やゝかろきものなり、李唐の制に視品官といふよし、類聚國史にみえたり、

視はなぞらふといふ義なれば、外五位は准五位なり、外六位は准六位なり、かろき事むべならずや、外位といふ義は、法令の主意は、外官に給はるべき料の位なる故、外といふ、外官とは、郡司軍毅博士醫師などをいふ、大宰攝津諸國の主典以上は、外官なれども內位に敍する事なり、これ法によれば京にて加階する故也、法令の主意は、一任終て上京して、任中の功過によりて、加階すべきはする法なれば、外國にありながら、加階するゆへなし、事迹につきてみれば、國にゐて加階するもあれど、そは時の權機にて、もとよりの法意にあらず、又帳內資人は京にをる物なれども、親王王臣の家につかへて、朝廷に出頭する者にあらざれば外位に敍する也、外國にはあらねど、朝廷內裏を內として、それにむかへて里第を外としたる也、上件の色の人、必外位に敍する事、選敍令に散見したり、披きみるべし、かならず、外位に敍すといふは、同令に、凡帳內資人、若任二職事一者、改入二內位一とありて、義解に、其內位任二外職事一者、亦即改敍二外位一也とあるにてしるし、又內外位は、內外官にてわかるといふ事もしるし、此外にも國造、慶雲三年二月の史に、山背國造外從八位上品遲といふ人あり、すべて國造も、下に擧たる色の人も、國史に所見多かるを、悉書つらねんもうるさし、たゞ一ッ、引いでゝ證據とすべし、禰宜祝天平廿年八月乙卯、八幡祝部從八位上大神社女授二外從五位下一、隼人、天平十五年七月甲子、外從五位下曾乃君多利志佐授二正五位上一、俘囚の會長、寶龜十一年三月丁亥、陸奧國上治郡大領外從五位下伊治公呰麻呂反、云々、伊治呰麻呂、本是夷俘之種也、別功の賞天平十九年九月乙亥、河內國人大初位下阿保連人麻呂錢一千貫、越中國人礪波臣志留志米三千碩、奉二盧舍那佛知識一、並授二外從五位下一、三好學篤道の類、天平十九年五月辛卯、力田外從五位下前部寶公授二外從五位下一、其妻久米舍人妹女外少初位上一、事にふれて其類おほかる、みな外國にて外位に敍する也、かくて和銅養老の頃までは、外官の人のみ外位に敍したるを、天平の頃よりは、內官にもおほくみゆ、天平五〇五四誤年十月丁亥、以二外從五位下簡集宿禰虫麻呂一爲二大學頭一、外從五位下大神朝臣虫麻呂爲二散位頭一とありて、此つぎ〳〵かくのごとき事常なり、後世には內外官の論はなくて、姓氏の凡卑なるを外位に敍する事となりたり、江家次第敍位の條に、若有二下姓一者、經二奏聞一可レ敍二外階一、有レ愁時、後日改敍二內位一とあるにてもしるし、江家の頃に、外階に敍する事はなし、これはたゞ敍位の故實をつたへたるのみなり、これいつの頃よりしかする事にはなりけむ、天平の頃のは、必しも下姓を敍する事ともみえず、天平三年五月丙子の敍位に、巨勢朝臣奈氐麻呂、巨勢朝臣又兄、大伴宿禰御助、佐伯宿禰人足、これらは公卿にものぼり、さらぬも顯職になる家也、息

長眞人名代、當麻眞人廣人（眞人は尸の第一、ちかき王孫なる人のかばねにせらるゝ事也、）これら下姓とはいひがたし、されど外官は下姓の人を任ずる事なれば、をのづからしかうつりもて行物の勢にはあるなり、神龜五年五月丙辰云々、（叙位あり、外位に叙せられたる人もあり、）是日始授外五位、（これより前にも、外五位に叙したる事たび〳〵みゆ、しかるをこゝに始るとあるはいぶかしき事なり、今おもふに、内官に外五位を給はりたるが、此時はじめてにはあらぬか、是よりさきに内官の外位なるはみえず、）仍勅曰、今授外五位人等、不可滯此階、隨其供奉、將叙內位、宜茲努力莫怠とあり、此後內官の外位連綿としてみえ、外官の內位に叙したるも、時々はみえたれば、（天平十六年八月、授蒲生郡大領正八位下佐々貴山公親人從五位下、）これぞ內外位混雜したる源初なれば、かの叙位の故實も、しばらく此時よりの事とすべし、外位の內位よりおとれるけぢめは、令にもこゝかしこにみえたれど、なを神龜五年三月の史に、甲子、勅定外五位位祿蔭階等科、（三月此さだめありて、五月施行せられし事とみゆれば、內外位を混雜して叙するも此時のさだめなるべし、）とありて、格文、類聚三代格にみえたり、

〔令義解四選敍〕凡內外五位以上勅授、內八位外七位以上奏授、外八位及內外初位、皆官判授、〇義解略

〔令集解一官位〕或云、問前令有外位之字、然選叙令合有外位、今除如何、答凡得外位人者、郡司並帳內資人等、然其選年甚遠、久年不久、故除耳、然有所賜者、雖三位、而猶得外位耳、

〔律疏名例〕凡贈位及外位、與正位同、職事初位、與八位同、（外六位以下、不在蔭親之例、外位稍異正位、故不許其蔭親屬、）用蔭者存亡同、（准蔭應議請減贖者、親雖亡亦同存日、故云存亡同、）

〔令義解四選敍〕凡五位以上子出身者、〇中略正五位嫡子正八位下、庶子及從五位嫡子從八位上、庶子從八位下、〇中略外位蔭准內位、

〔唐律疏議二名例〕諸以理去官、同見任、同〇中略贈官及視品官、與正官同、（視六品以下、不在蔭親之例、）
疏議曰、〇中略視品官、依官品令、薩寶府、薩寶祆正等、皆視流內品、若以視品官當罪減贖、皆與正官同、

○按ズルニ、吾邦ノ律、此文ニ依リテ視品官ヲ改メテ外位トセリ、

〔通典職官四十〕大唐官品　視流内

視正五品　薩寶　視從七品　薩寶府祆正

〔延喜式式部十八〕凡元正行列次第、〇中略外位不得列内位上、

〔延喜式民部二十二〕凡外五位位田者、減内位半、

〔令義解考課四〕考外位

凡國司、毎年量郡司行能功過、立四等考第、〇中略

凡國博士、立三等考第、〇中略

凡帳内及資人、毎年本主、量其行能功過、立三等考第、〇下略

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

內外五位不合同等事

右謹案官位令、外各之與者、自正五位上階訖從五位下階、於内相當、總是四階、又據選叙令云、凡内外五位以上勅授者、准祿令云、五位以上不在食封之例、直稱疋屯之數、則知内外之目、舊來殊號、祿料之色、未有處分、禮數等級、豈合同科、自今以後、隨名異秩、以外則別姓高下、以内則擇家門地、其五位以上子孫、歷代相襲、冠蓋相望、並明經秀才堪國家大儒、後生袖領者、卽選内位、除選外位、但得外位後、積其功効、應入内位者、便叙當位當階、不須連延日時、其別勅特授、不拘此式、

外五位

右考限選叙、一依令條、其緣神祇官事、雖有卜食者、不合差充伊勢神宮奉幣帛使、中臣忌部不在此限、若因公使應給驛傳者、驛馬四匹、傳馬六匹、如非元日有應致敬者、内八位外七位、並拜外五位、若有步行僧尼忽逢道路者、下馬過去、其毎年進薪、以三荷爲限、欲令家人奴婢居住市廛興販、卽聽、其有斷罪行

刑之日、不得乘馬辭訣及自盡私家、自餘依令、

位祿位田賻物

右內位祿料減半給之、如无故不上經一年者停給、(女減三分之一)

位分資人

右外正五位五人、外從五位四人、(女亦同)

蔭其子事

右外正五位嫡子從八位上、庶子大初位上、外從五位嫡子從八位下、庶子大初位下、並嫡子補大舍人並大學生、不得任內舍人、其庶子補二宮舍人及諸司史生帳內職分資人等之色、卽有犯罪者、准犯配決、不須蔭贖、

父妻

右其父從免課役之例、妻者得外命婦之號、不入朝參之例、

以前奉勅刪定內外五位貴賤差別、臣等商量、具件如前、謹以申聞謹奏、奉勅宜依前件永爲恒式、

神龜五年三月廿八日

○按ズルニ、此格又官位令集解ニ載セテ、初ノ內外五位不合同等事ノ下ニ引ケル官位令ヲ、官員令ニ作リ、選敍令ヲ敍位令ニ作レリ、意フニ類聚三代格ノ文ハ、弘仁格ヲ撰スル時ノ追改ニ係レルナラン、蓋シ今世ニ傳ハレル所ノ令ハ、養老ニ刊修スル所ニシテ、古令ニハ官位令ヲ官員令ト云ヒ、選敍令ヲ敍位令ト云ヒシナリ、今ノ官位令ニ外位ノ事ナキニテモ知ルベシ、此文ニ依リテ考フルニ、大寶ノ官員令ニハ、內位ヲモ外位ヲモ擧ゲシナリ、外位ヲ擧ゲタルハ、卽チ唐ノ官品令(通典ニ在リ)ニ、視品官ヲ載セタルニ倣ヒタルナリ、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年四月辛巳、太政官奏曰、(中略)○諸國司言、運調行程遙遠、百姓勞弊極多、望請外

位位祿制留入京之物、便給當土者、臣等商量、並依所請、伏聽天裁、奏可之、是時諸國郡司及隼人等、授外五位、並以位祿便給當土也、

〔類聚三代格五〕勅、惟王建國、制軒冕而旌賢、惟帝念功、設爵賞以御衆、用能翼亮洪基、弼諧興業、詳觀列代、咸皆由之、省去神龜五年奏、五位已上子孫、累世冠蓋、及明經秀才堪爲儒者、即叙內位、自餘先叙外位、積勞入內、其外位位祿位田賻物者、給內位之半、女減三分之一、蔭子之階、正五位嫡子從八位上、庶子大初位上、從五位嫡子從八位下、庶子大初位下、並補大舍人、不任內舍人、位分資人、正五位五人、從五位四人、女亦同、是所以別內外差降品秩也、其自外入內、叙當位之階、則優昇超次、僉議未允、至於行刑之日、不聽辭訣、論子之科、不須蔭贖、則貶抑過甚、有乖條例、如此事類、往々不穩、夫五位者、班列大夫、蔭及子孫、朝廷攸重、人望斯在、而勞級雖貴、禮數猶卑、褒德勸人、豈合如此、古人有言、爵不尊、祿不重者、不可與圖難犯危、以其道未可求之也、宜不穩言條、並從除去、但位田位祿賻物之數、蔭階資人、因循前例、主者施行、

延曆十二年正月六日

〔續日本後紀八仁明〕承和六年九月癸卯、制選叙令、帳內資人者、並以八年爲限、神龜五年格、外五位資人、十年成選、自今而後、外五位資人選限者、宜依令行之、

〔續日本後紀十五仁明〕承和十二年六月壬午、大宰府言、檢案內、去弘仁六年七月廿五日格云、博士醫師、敍授之勞、良有殊別、遷代成選、幷以六考爲期、今前壹岐嶋醫師外大初位下麻野勝眞吉辭狀云、謹案格式、內番上者、以六考爲選限、外番上者、以八考爲選限、眞吉在任之日、全得六考、至于叙位被賜階、准據格式、恐有訛舛者、府加覆審、非唯眞吉、以往之人、亦倘然也、望請眞吉位記換賜內位、自今以後、大隅、薩摩、日向、壹岐、對馬等國嶋博士醫師、同准此例者、聽之、

〔令義解四選敍〕凡郡司、取性識清廉、堪時務者、爲大領少領、强幹聰敏、工書計者、爲主政主帳、其大領、外從

八位上、少領外從八位下叙之、

〔續日本紀十一聖武〕天平三年六月庚寅、外從五位下土師宿禰千村爲諸陵頭、外從五位下許曾部朝臣足人爲大藏少輔、外從五位下引田朝臣虫麻呂爲主殿頭、外從五位下佐味朝臣足人爲中衞少將、　四年九年乙巳、外從五位下箭集宿禰虫麻呂爲大判事、○中略　外從五位下佐伯宿禰伊益爲三河守、外從五位下田口朝臣年足爲越中守、從五位上石上朝臣乙麻呂爲丹波守、外從五位下土師宿禰千村爲備前守、　十月丁亥、以外從五位下箭集宿禰虫麻呂爲大學頭、外從五位下大神朝臣乙麻呂爲散位頭、○中略　外從五位下當麻眞人廣人爲大藏少輔、外從五位上多治比眞人占部爲宮內少輔、外從五位下物部韓國連廣足爲典藥頭、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年十二月癸丑、制春宮坊舍人六百人、就中入色五百人、白丁一百人也、而入色者、無心仕宦、白丁者、唯在一身、是以數年之後、駈使乏人、宜五百內取外位一百人、隨闕補之、

〔日本書紀二十九天武〕二年閏六月庚寅、大錦下百濟沙宅昭明卒、爲人聰明叡智、時稱秀才、於是天皇驚之、降恩以贈外小紫位、重賜本國大佐平位、　四年六月乙未、大分君惠尺病將死、天皇大驚、詔曰、汝惠尺也、背私向公、不惜身命、以遂雄之心、勞于大役、恒欲慈愛、故爾雖既死、子孫厚賞、仍騰外小紫位、未及數日、薨于私家、

〔日本書紀二十九天武〕五年六月、物部雄君連、忽發病而卒、天皇聞之大驚、其壬申年、從車駕入東國、以有大功、降恩贈內大紫位、因賜氏上、

○按ズルニ、內位ハ、外位ニ對スル稱ナリ、既ニ內位アレバ隨テ外位アル知ルベシ、

〔續日本紀三十七桓武〕延曆元年二月丙辰、參議從三位中宮大夫兼衞門督大伴宿禰伯麻呂薨、祖馬來田、贈內大紫、

〔日本書紀二十九天武〕五年七月、村國連雄依卒、以壬申年之功、贈外小紫位、

〔日本書紀 天武二十九〕五年八月、大三輪眞上田子人君卒、天皇聞之大哀、以壬申年之功、贈内小紫位、仍諡曰大三輪眞上田迎君、

〔日本書紀 天武二十九〕六年十月癸卯、内小錦上河邊臣百枝爲民部卿、内大錦下丹比公麻呂爲攝津職大夫、

〔日本書紀 天武二十九〕八年三月丙戌、兵衛大分君稚見死、當壬申年大役、爲先鋒之、破瀬田營、由是功、贈外小錦上位、

〔續日本紀 文武一〕三年五月丁丑、役君小角流于伊豆島、初小角住於葛木山、以呪術稱、外從五位下韓國連廣足師焉、後害其能、讒以妖惑、故配遠處、

〔續日本紀 文武二〕大寶二年十月甲辰、太上天皇〈持統〉幸參河國、〈○中略〉十一月庚辰、行至美濃國、授不破郡大領宮勝木實外從五位下、

○按ズルニ、續日本紀中、大寶以後、外位ヲ授クル事、始テ此ニ見ユ、

〔續日本紀 文武三〕慶雲三年九月丙寅、行幸難波、　十月壬午、還宮、攝津國造從七位上凡河内忌寸石麻呂、山背國造外從八位上山背忌寸品遲、〈○中略〉各進位一階、

〔續日本紀 元明四〕和銅二年五月庚申、筑前國宗形郡大領外從五位下宗形朝臣等杼、授外從五位上、尾張國愛知郡大領外從六位上尾張宿禰乎己志外從五位下、

〔續日本紀 元明五〕和銅三年正月庚辰、日向隼人曾君細麻呂、教喩荒俗、馴服聖化、詔授外從五位下、

〔續日本紀 元正九〕養老六年閏四月乙丑、太政官奏曰、〈○中略〉望請陸奥按察使管内百姓、庸調浸免、勸課農桑、教習射騎、更税助邊之資、使擬賜夷之祿、〈○中略〉又言用兵之要、衣食爲本、鎭無儲糧、何堪固守、募民出穀、運輸鎭所、可程道遠近爲差、委輸以遠二千斛、次三千斛、近四千斛、授外從五位下、奏可之、　七年二月戊申、常陸國那賀郡大領外正七位上治部直荒山、以私穀三千斛、獻陸奥國鎭所、授外從五位下、

神龜元年二月壬子、從七位下大伴直南淵麻呂、從八位下錦部安麻呂、无位烏安麻呂、外從七位上角山君內麻呂、外從八位下大伴直國持、外正八位上壬生直國依、外正八位下日下部使主荒熊、外從七位上香取連五百嶋、正八位下大生部直三穗麻呂、外從八位上君子部立花、外正八位上史部虫麻呂、外從八位上大伴直宮足等、獻私穀於陸奧國鎭所、並授外從五位下、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年五月丙辰、授正七位上阿倍朝臣帶麻呂、〈○中略〉正六位上若湯坐宿禰小月、葛野臣廣麻呂、丸部臣大石、葛井連大成、並外從五位下、是日始授外五位、仍勅曰、今授外五位人等、不可滯此階、隨其供奉、將叙內位、宜悉茲〈○按、下脫二字〉努力莫怠、

○按ズルニ、始授外五位トハ、此年三月ニ制ヲ立テヽ、後ニ始テ其法ニ依リテ敍スルヲ云フ、

〔續日本紀十聖武〕天平元年二月壬午、曲赦左右大辟罪已下、幷免緣長屋王事徵發百姓雜徭、又告人漆部造君足、中臣宮處連東人、並授外從五位下、賜封三十戶、田十町、　四月乙丑、筑前國宗形郡大領外從七位上宗形朝臣烏麻呂、奏可供奉神齋之狀、授外從五位下、賜物有數、　七月辛亥、大隅隼人姶孋郡少領外從七位下勳七等加志君多利、外從七位上佐須岐君夜麻等久々賣、並授外從五位下、自餘叙位賜祿、亦各有差、

〔出雲風土記〕天平五年二月卅日、勘造、

秋鹿郡人神宅臣金太理

國造帶意宇郡大領外正六位上勳業出雲臣廣嶋

〔續日本紀十二聖武〕天平七年四月戊申、授〈○中略〉外從五位下秦忌寸朝元外從五位上、外正六位上上毛野朝臣今具麻呂、正六位上土師宿禰五百村、城上連眞立、陽侯史眞身、並外從五位下、

〔續日本紀十三聖武〕天平十年二月丁巳、筑紫宗形神主外從五位下宗形朝臣烏麻呂授外從五位上、出雲國造外正六位上出雲臣廣嶋外從五位下、　三月辛未、從六位上背奈公福信授外從五位下、　十一年七月乙未、授外從五位下背奈公福信從五位下、正六位上新城連吉足外從五位下、　十月丙戌、入

唐使判官外從五位下平群朝臣廣成授正五位上、自餘水手已上亦各有級、正六位上傑授外從五位下、 十二月己卯、外從五位下平群朝臣廣成授正五位上、自餘水手已上亦各有級、正六位上傑授外從五位下、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年十月乙未、左大臣家令正六位上余義仁授外從五位下、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年六月庚子、筑前國宗形郡人領外從八位上宗形朝臣與呂志授外從五位下、

〔續日本紀十七聖武〕天平十九年五月辛卯、力田正六位下前部寶公授外從五位下、其妻久米舍人妹女外少初位上、 九月乙亥、河内國人大初位下阿保連人麻呂錢一千貫、越中國人无位礪波臣志留志米三千碩、奉盧舍那佛智識、並授外從五位下、 二十年二月壬戌、進知識物人等外大初位下物部連族子嶋、外從六位下田可臣眞束、外少初位上大友國麻呂、從七位上漆部伊波、並授外從五位下、 八月乙卯、八幡大神祝部從八位上大神宅女、從八位上大神杜女、並授外從五位下、 天平勝寶元年五月戊辰、從七位上陽侯史令珍、正八位下陽侯史令珪、從八位上陽侯史令璆、(○原作珍、據一本改、)從八位下陽侯史人麻呂、並授外從五位下、四人並是眞身之男、各貢錢千貫也、 戊寅、上野國碓氷郡人外從七位上石上部君諸弟、尾張國山田郡人外從七位下生江臣安人、(○人、一本作久、)多、伊豫國宇和郡人外大初位下凡直鎌足等、各獻當國國分寺知識物、並授外從五位下、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶二年二月乙亥、唐人正六位上李元環授外從五位下、 三年正月戊戌、天皇幸東大寺、授木工寮長上正六位上神礒部國麻呂外從五位下、 庚子、天皇御大極殿南院、宴百官主典已上、賜祿有差、踏歌歌頭女孀忍海伊左須、錦部河内、並授外從五位下、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶五年九月戊戌朔、无位板持連眞鉤獻錢百万、授外從五位下、 八歲十二月庚子、太上天皇(○聖武)御輿丁一人叙四階、(○四階、一本作四位階、)一人二階、五十七人外二階、一百二十六人外一階、

〔續日本紀 二十六稱德〕天平神護元年五月丁酉、授外從八位上敦賀直嶋麻呂外從五位下、以助官軍也、

〔續日本紀 二十七稱德〕天平神護二年六月丙申、勅、去二月二十日、令募運近江國近郡稻穀五萬斛、貯納於松原倉、其酬敍法者、下勅既畢、而經旬月、未見一人運送、誠是階級有卑、人情不勸、宜運滿一萬斛者、超授外從五位下、

〔續日本紀 二十八稱德〕神護景雲元年二月庚子、伊豫國越智郡大領外正七位下越智直飛鳥麻呂、獻絁二百三十疋、錢一千二百貫、授外從五位下、　五月戊辰、先是左京人從八位上荒木臣道麻呂及其男無位忍國、墾田一百町、稻一万二千五百束、庄三區、近江國人外正七位上大友村主人主、稻一万束、墾田十町、獻於西大寺、至是道麻呂身死、贈外從五位下、忍國人主、並授外從五位下、尾張國海部郡主政外正八位下刑部岡足、獻當國國分寺米一千斛、授外從五位下、　七月丁巳、初近衞從八位下物部礒浪、寶字八年、仲滿奪鈴印時、疾走告急、至是授外從五位下、　十月辛卯、外從五位下吉彌侯部眞麻呂徇國爭先、遂令馴服狄徒、如歸、進賜外正五位下、

〔續日本紀 三十稱德〕神護景雲三年十一月庚寅、天皇臨軒、大隅薩摩隼人奏俗伎、外從五位下薩摩公鷹白、加志公嶋麻呂、並授外從五位上、正六位上甑隼人麻比古、外正六位上薩摩公久奈都、曾公足麻呂、大住直倭上、正六位上大住忌寸三行、並外從五位下、自餘隼人等、賜物有差、

寶龜元年三月壬午、內掃部司員外令史正六位上秦刀良、本是備前國仕丁、巧造狹疊、直司卅餘年、以勞授外從五位下、

〔續日本紀 三十二光仁〕寶龜四年正月辛卯、授出羽國人正六位上吉彌侯部大町外從五位下、以助軍糧也、

〔續日本紀 三十六光仁〕天應元年正月庚辰、授播磨國人大初位下佐伯直諸成外從五位下、以進於造船瀨所也、

〔續日本紀 三十七桓武〕延曆元年五月乙酉、授從五位下海上眞人三狩從五位上、又下野國安蘇郡主帳外

正六位下若麻續部牛養、陸奥國人外大初位下安倍信夫臣東麻呂等獻軍粮、並授外從五位下、八月己巳、詔曰、○中略宜故天應二年、曰延暦元年、其天下有位、及伊勢大神宮禰宜大物忌內人、諸社禰宜祝并內外文武官把笏者、賜爵一級、但正六位上者、廻授一子、其外正六位者、不在此限、

〔續日本紀三十八桓武〕延暦四年正月癸亥、攝津國能勢郡領外正六位上神人爲奈麻呂、近江國蒲生郡大領外從六位上佐々貴山公由氣比、丹波國天田郡大領外從六位下丹波直廣麻呂、豐後國海部郡大領外正六位上海部公常山等、居職匪懈、撫民有方、於是詔並授外從五位下、

〔續日本紀三十九桓武〕延暦五年十月丁丑、常陸國信太郡大領外正六位上物部志太連大成、以私物周百姓急、授外從五位下、

〔續日本紀四十桓武〕延暦九年十二月庚戌、授常陸國信太郡大領外從五位下物部志太連大成外從五位上、新治郡大領外正六位上新治直大直外從五位下、播磨國明石郡大領外正八位上葛江我孫馬養、下總國猨嶋郡主帳正八位上孔王部山麻呂、並外正六位上、是四人、或居官不怠、頗著効績、或以私物賑恤所部貧乏之徒、因而得濟、故有此授焉、

〔日本後紀五桓武〕延暦十五年十一月壬辰、外正六位上上毛野朝臣益成、吉彌侯部弓取、巨勢部楯分、大伴部廣椅、尾張連大食、授外從五位下、以戰功也、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年四月丁卯、陸奥國人外正六位下志太連宮持、俘吉彌侯部小金授外從五位下、褒勇敢也、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁四年二月丁酉、上野國甘樂郡大領外從七位下勳六等壬生公郡守、特授外從六位下、以戸口增益爲民所懷也、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年正月辛未、主上內宴於仁壽殿、敎坊奏態、○中略是夕勅授正六位上大戸首淸上外從五位下、淸上能吹橫笛、故鍾此恩獎、

〔續日本後紀 四仁明〕承和二年四月己亥、授〇中略外從五位下賀茂縣主廣友外從五位上、正六位上賀茂縣主廣雄外從五位下、

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年五月壬申、大和國正六位上縵連道繼授外從五位下、以輸私稻四萬束助國用也、

〔三代實錄 七清和〕貞觀五年正月七日庚午、授〇中略直講從七位上刈田首安雄、施藥院使正六位上下毛野朝臣殿永、左大史大神朝臣全雄、主稅助山邊公眞雄、左京少進御輔朝臣直野、侍醫家原宿禰善宗、宮主卜部是雄等、並外從五位下、

〔本朝文粹 二〕太政官符東海、東山道、諸國司、

應拔有殊功輩加不次賞事〇文略

天慶三年正月十一日　員外從五位下左大史尾張宿禰言鑑

〔本朝世紀〕治曆四年十一月廿一日庚寅、叙位議也、右大臣內大臣以下參入、

十一月廿一日、大嘗會叙位〇右大臣中略

外從五位下伊岐泰政宮主　坂上千襲　各務明盛　石野則任　凡海貞通　小槻重任以上近江掾

栗秀賴　丹波致成　山永輔　石野範季　石野範行以上備中掾

〔本朝世紀〕康治元年十一月廿六日甲寅、有女叙位事、〇中略

外從五位下山清子主殿女史〇下略

〔玉海〕治承四年正月五日戊午、此日叙位議也、〇中略叙位書樣、〇中略

外從五位下

坂上宿禰忠成諸司

治承四年正月五日

〔薩戒記部類〕應永卅四年正月五日甲午、今日被行叙位議、○中略聞書後日從外記送之、○中略

外從五位下高篠春兼外衞

〔江家次第二正月〕叙位

若有下姓者、經奏聞可叙外階、有愁時、後日改叙內位、○中略

攝政時叙位事

諸宮給、雖下姓、叙內階、自餘依姓叙內外階、若有疑姓者、先叙外階、後日依愁叙內階、朝外、是朝臣姓、叙外階也、車持類也、異內、是非朝臣姓、叙內階也、如清原眞人、眞人、宿禰、連、直、公、縣主、忌寸、首、王、平、源、藤原、橘、菅原、大中臣、高階、在原、宮道、已上不叙外階、必叙內階、

〔朝野群載二十內記〕下姓者叙內階例

勘申

宇佐宮御馬所撿校外從五位下酒井宿禰友宗申請改叙內階事

右引勘文簿、下姓之輩、除諸宮給之外、叙外階者例也、而件友宗、去長治三年正月卅日、依臨時內給被賜榮爵了、且任宣旨、且尋傍例、所令須外階位記也、今如申狀者、宇佐宮神人下姓之輩、多叙內階者、所申之旨、非無先蹤、既去康和二年十一月七日、淡路島淸貞依木工寮申叙從五位下、嘉承元年十二月廿五日、宇佐公宗依內給叙從五位下、同年十二月一日、酒井爲季依內給叙從五位下、皆是彼宮神人云々、許否之間可在時議歟、仍所勘申如件、

嘉承二年二月十七日　　文章博士兼大內記越中介藤原朝臣敦光勘申

〔文德實錄五〕仁壽三年五月辛亥、授外從五位下宍人朝臣繼成從五位下、繼成有不可叙外位之愁、故改授、

〔三代實錄六淸和〕貞觀四年三月二日庚午、毀外從五位下大春日朝臣氏子告身、改授從五位下、

〔三代實錄光孝五十〕仁和三年三月乙亥朔、授豐後介外從五位下大神朝臣良臣從五位下、先是良臣向官披訴、淨御原天皇○天武壬申年、入伊勢之時、良臣高祖父三輪君子首爲伊勢介、從軍有功、卒後贈內小紫位、古之小紫位准從三位、然則子首子孫、不可叙外位、於是下外記而考實之、外記申明云、贈從三位大神朝臣高市麻呂、從四位上安麻呂、正五位上狛麻呂、兄弟三人之後、皆叙內位、大神引田朝臣、大神楉田朝臣、大神掃石朝臣、大神眞神田朝臣等、遠祖雖同、派別各異、不見應叙內位之由、加之神龜五年以降、有格諸氏先叙外位、後預內叙、良臣本姓、大神眞神田朝臣也、子首之後、至于全雄、无預五位者、今請叙內品、事乖格旨、勅毀良臣及故兄全雄外位告身、特賜內階、

〔本朝世紀〕天慶四年九月廿日丁丑、淡路守外從五位下內藏朝臣惟範、毀彼承平二年十二月外階位記、賜內階位記、是依氏族愁申、可給內階之由也、今年正月七日、下名注付已了、而公事志劇、于今延引、仍今日被行也、但位記日者、注於彼承平二年十一月也、　五年四月十三日丙寅、有叙位事、○中略豐受宮禰宜外從五位下神主晨晴、叙從五位下、宍人豐冬子、叙從五位下、件豐冬子、去天慶二年正月八日、被叙外位也、而自彼時、愁申件氏預內位之由、仍被改叙也、其位記在叙外位之年月、

〔權記〕長德元年十月十九日、右大臣命云、先日東大寺申御者、茨田宿禰、是外階氏族也、而注內、內記誤也、早可令付外字之由仰內記者、中書不候內記所云々、仍遣仰了、

〔中右記〕天永二年七月五日、今日藏人辨宣旨、雀部口貞可叙從五位下者、是正覺院修理功二人、下知大內記之處、申云、件姓先例所叙外階、可隨仰者、內外之條、又尋藏人辨、尋例可叙也、但國用位記、多叙內階、先又以此間仰大內記敦光之處、返書云、先例於諸宮給者、不論姓之高下、賜內階位記也、至國用者、偏所隨臨時處分也、但於今度者、可給外階位記者、此事慥不知、仍所記置也、下姓國用位記ハ、有別叙、仰時叙內階、不然者叙外階歟、

〔古今著聞集六管絃歌舞〕保延元年正月四日、朝覲行幸に、多忠方胡飮酒をつかうまつりけるに、此曲

たび〳〵御覽せられつるに、今度ことにすぐれたるよし、おほやけわたくしさたありけり、左大臣勅を承りて、一階をたぶよし仰下されければ、忠方再拜して舞て入けり、か丶る程に忠方右舞人たりといへ共、左舞を奏して勸賞をかうふる、左かならず賞を行はれずとも何事かあらんや、又狛光則、多忠方いづれ上臈たるぞやのよし、議定ありければ、左衞門督雅定卿申されけるは、光則忠方、同日に勸賞かうふりて敍爵す、多は朝臣なるによりて內位に敍す、狛は下姓によりて外位に敍す、忠方上臈たるべしとぞ申されける、

〔令義解四選敍〕凡帳內資人等、本主亡者、朞年之後、皆送式部、略○註若任職事者、即改入內位、謂隨任職事、即入內位、若任才伎長上者亦同、故上條云、伎術長上、並同職事、其內位任外職事者、亦即改敍外位也、文云改入內位、即須毀先位、猶當免之人、後敍之位、與先位同階者、仍毀先位也、其雜色任用者、考滿之日、聽於內位敍、

〔令集解十七選敍〕釋云、若任職事者、即改入內位、入謂授也、改位記入內位、本位記不毀者非也、案外位記不可更還、或說、資人本階外少初位、任於鷹司令史之類者非也、何者乖下文故、又稱職事、即知才伎長上等待考滿日、敍內位耳、但內位出郡司者不改者非、案內位出郡司者、亦即改可授外位、古記云、即入內當位、謂改外位位記、授內位位記也、朱云、若任職事者、即改入內位、謂高位位記、一授改也、皆悉不改也、然則六位犯罪被官當、其間其妻子犯罪者不得贖也、爲七位位記外位不改故也、未明大難此說後度反了云、良雖持外位位記、尙如內位可贖也、內位出外位者、亦可放此義、何者一人身、內外位共不可有故者、任職事、謂才伎長上等亦同者、未明後反云、同雜色者如令釋也、

〔延喜式十八式部〕凡外考之人、未敍內位者、自非才藝殊擢、不得輙任把笏、唯任郡司軍毅者聽之、若有殊擢之輩、依令待本主擧、試業先敍內位、後乃任之、

凡外位任內職事者、即改入內位、若內位任外職事者、亦改外位、若內番上附外考帳者、雖帶八位以上、不聽貢位子、

〔江家次第 正月〕叙位

大臣召二男共一、頭藏人參入、被レ仰レ可二一加階入内一者候不、〇中略入内書レ王次、式部者藏人上、或書二於最末一云云、

〔官職難儀〕叙位入内とは

外階より内階に入るを申也、外階とは五位に外從五位下と申て、姓のいやしき者は、直に從五位下には叙し侍らで、先外階に叙して、さて從五位下に叙する也、叙位の時、入内の勘文とて、外記内階に入べきものを記してまいらするを、執筆叙する也、中家の外記は、外階勢中、一年以後記し申候、清家外記の外階に成たる翌年より勘文に載る也、從五位下にばかり外階有やうに當時は皆思侍る、上古は五位には何も侍り、外正五位上、外正五位下など申て侍し也、又入内(ニウナイ)と讀也、同字にても入内(ジユダイ)と讀は、后宮などの參内あるを申也、同字ながら讀かへて心各別也、

〔續日本紀 聖武十〕天平元年八月癸亥、授二〇中略外從五位下高橋朝臣首名從五位下一、

〔續修東大寺正倉院文書 一〕天平寶字二年八月一日詔書草〇中略

二日山口伊美吉佐美万呂入内〇下略

〔續日本紀 淳仁二十一〕天平寶字二年八月辛丑、〇二日授二外從五位下山口忌寸佐美麻呂從五位下一、

〔續日本後紀 仁明三〕承和元年正月戊午、天皇御二豐樂殿一、觀二靑馬一、宴二群臣一、詔授二〇中略外從五位下御船宿禰氏主〇中略從五位下一、

〔薩戒記〕永享十一年正月五日乙酉、今夜叙位議也、〇中略

從五位下高篠友淳入内

〔新儀式 四臨時〕伊勢大神遷宮事〇中略

遷宮之間、可レ奉レ載二正體一禰宜一人、若帶二六位一叙二五位一、令二供奉一、上代無二此事一、近代例也、又内宮禰宜叙二内階一、豐受宮叙二外階一例也、

〔伊呂波字類抄 佐疊字〕散位

〔職原鈔辨疑私考　下〕按異邦文散階ノ名有テ、文散位ノ號ナシ、唐ノ高祖、文武散階ヲ制ス、其文散階トハ、開府儀同三司以下、將仕郎以上是也、武散階略之其配列從一品ヨリ從九品下ニ至テ廿九官アリ、總テ是ヲ文散階ト謂、蓋正一品ニ配スル文散階ナシ、中略○抑本朝散位ト稱スル者二ツアリ、一ツハ文官其官ヲ辭スルヲ文散位ト云フ、一ツハ武官其官ヲ辭スルヲ武散位トイフ、各一位ヨリ初位ニ至テ、無官ノ人ヲ稱スル號ナリ、職員令ニ散位寮ト言フ官有テ、文武ノ散位總テ掌ル、下略○

〔令集解　官位一〕或云、問前令有散品散位、此令除意、答雖無散品之字、而無職掌之人、自然應在散品、故除耳、

〔舊唐書　職官四十二〕凡九品已上職事、皆帶散位、謂之本品、職事則隨才錄用、或從閑入劇、或去高就卑、遷徙出入、參差不定、散位則一切以門蔭結品、然後勞考進叙、

〔令義解　公式七〕凡内外諸司、有執掌者爲職事官、无執掌者爲散官、

○按ズルニ、此文唐令ヲ取リシコトハ、唐律疏議八議ノ下ニ令ヲ引キテ、此文ヲ擧ゲシニテ知ルベシ、而シテ唐六典吏部ノ條、從一品曰開府儀同三司ノ注ニ、皇朝初惟置開府儀同三司、爲散官品トアリ、又正二品曰特進ノ注ニ、隋特進爲正二品散官、皇朝因之トアリ、開府儀同三司ハ我國ノ從一位ニシテ特進ハ、我國ノ正二位ナリ、而シテ謂ヒテ散官トス、散官ハ即チ散位ナルヲ知ルベシ、

〔古文零聚　六〕世俗諺文上

散班朝散大夫源爲憲撰

序末ニ　于時寛治四年丁未歳秋八月十七日散班――――――序

〔新野問答〕一散三位と申す事はいかゞ

答、家がらよき人の上ばかりの事にて候、位を儲る心にて、官のあきを待申候、三位の中納言に

も可成人、中納言の官あき無之故、先三位になし給ひて、官のあくまで待つうち、其人を慰るため、位を儲て官を待つと心得候へば、すみ申候、

〔令義解 一 職員〕散位寮
頭一人（掌散位（謂文武散位、皆繫之也、）名帳朝集（謂諸國朝集使、皆於此寮列其上日也、）事、）

〔令集解 三 職員〕穴云、文武散位、皆可在此司、但時行事武散位在兵部也、朱云、名帳、謂文武官人解官之後、皆岡仕此司耳、

〔續日本紀 三 文武〕大寶三年八月甲子、太宰府請有勳位者、作番直軍團、考滿之日、送於式部、一同散位、永預選叙、許之、

〔續日本紀 八 元正〕養老二年四月癸酉、太政官處分、凡主政主帳者、官之判補、出身灼然、而以理解任、更從白丁、前勞徒廢、後苦實多、於義商量、其違道理、宜依出身之法、雖解見任、猶上國府、令續其勞、內外散位、仍免雜徭、

〔續日本紀 十八 孝謙〕天平勝寶四年十一月壬子、制諸司無故不上者、令放還本貫、其有位者爲外散位、无位者還從本色、

〔延喜式 十八 式部〕凡散五位已上卒者、申送辨官、

〔延喜式 十八 式部〕凡諸司五位已上、朝堂無座者、皆每朔日就省受點、（散五位已上亦准此、）

〔延喜式 十八 式部〕凡點散位五位已上十人、補荷前使侍從不參之闕、其名簿預前進太政官、
凡散位五位以上、闕四月七月朔參者、勿預新嘗會、
凡國忌齋會者、諸司五位已上一人、六位已下一人、（但東西二寺、六位已下三分之二參、春宮坊、三月十七日廿一日、八月二度參、）諸寮已上史生一人、向寺供事、但中務縫殿民部主計隼人大藏宮內左右京等、並五位若六位一人參、其散位五位已上、无故不向者、勿預節會、（謂東西二寺闕二度已上、興福寺闕一度之類、七十已上者不在此限、）

凡諸司五位已上、十二月國忌不參者、停預節會、散位五位已上亦同、

凡參與福寺國忌官人已下、並散位五位已上、給上日五箇日、廣瀨龍田祭使亦同、參春日祭並維摩最勝會散位五位已上准此、但待太政官所下名簿乃給之、

凡散位及雜色人、奉使內外、事了之日、各錄上日申官、官即下省、

〔令義解選敍四〕凡散位、若見官無闕、雖有闕而才識不相當者、六位以下分番上下、謂文武六位以下、即知五位以上、雖無執掌、仍令長上、即可與公勤、不怠、職掌無闕之最也、毎有闕、各依本位量才任用、其分番經二考以上、入長上者、雖以七考爲限、謂凡考遷之限、都有四科、內長上六考、內分番八考、外長上十考、外散位十二考、假令內分番經一考入內長上者、同六考例、經二考以上者、以七考爲限、外散位經二考入外長上者、同十考例、經三考以上者、以十一考爲限、外長上經一考入內分番者、同八考例、經二考以上者、以九考爲限、外長上經一考入內長上者、同六考例、經二考以上者、以七考爲限、外散位經二考入內分番者、同八考例、經三考以上者、以九考爲限、觸類而長、餘推須知也、

凡敍郡司軍團、皆以十考爲限、十考中、進一階、五考上、五考中、進二階、十考上、進三階敍、兼有上考下考者、准折並同八考例、其外散位者、分番上下、皆以十二考爲限、十二考中、進一階、六考上、六考中、進二階、十二考上、進三階敍之、相折同郡司、

〔延喜式式部十八〕凡外散位六位動七等以下、情願者聽充帳內及職分資人、七位以下者、聽充位分資人、

〔令義解選敍四〕凡散位、身才劣弱、不堪理務者、式部判補諸司使部、謂其出仕之道、進漸爲榮、若先任職事者、不可復更補使部伴部也、

〔令集解選敍十七〕釋云、師說云、六位以下子等、在散位者爲使部、五位以上子孫亦不合充散位、

〔類聚三代格五〕太政官符

應選白丁補大宰府使部事

右撿案內、太政官實龜四年八月十六日符偁、大宰府使部、自今以後、宜取外散位補之、若有不堪、擇使者、選用白丁、不得過廿人者、今被大納言從三位神王宣偁、奉勅、改前員定卅人、

延曆十六年四月十三日

〔令義解(五軍防)〕凡烽置長二人、(○義解略)撿校三烽以下、唯不得越境、國司簡所部人家口重大、堪撿挍者充、若無者通用散位勳位、(謂外六位勳七等以下也)分番上下、三年一替、交替之日、令教新人通解、然後相代、

〔日本後紀(二十一嵯峨)〕弘仁二年四月甲戌、勅、河內國、(○中略)彼國課丁少數、無人差役、其散位位子、留省之徒、不直本司、常在鄕里者、宜限三年、補國中雜任、計其上日行事與考言上、

〔延喜式(十八式部)〕凡太政官召使者、省取散位年卅九已下有容儀者、每月爲二番、番別五人、計召正身、以令供承、其上日每番外記送省、

〔續日本紀(八元正)〕養老五年六月乙酉、詔曰、(○中略)除定額外、內外文武散位六位以下、及勳位、幷五位以上子孫、並令納資便成番考、此則雖積考年、遠之衣食、宜始今年、不須發資、人々歸田、家々貯穀、若有豐稔、納資成考者、恣聽之、

〔續日本紀(十聖武)〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、(○中略)改神龜六年、爲天平元年、(○中略)其賜物(○中略)定額散位(○中略)各布二端、

〔續日本紀(十一聖武)〕天平三年十二月庚寅、定武散位定額員二百人、

〔續日本紀(十二聖武)〕天平七年五月乙亥、畿內及七道諸國、外散位及勳位、始作定額、國別有差、自餘聽准格納資續勞、　九年十月丁未、停額外散位輸續勞錢、

〔續日本紀(二十一淳仁)〕天平寶字二年十二月丙寅、以式部散位四百人、蔭子位子、留省資人、共二百人、兵部散位二百人、爲定額、與考、自餘額外、情願輸錢續勞者、一依前格處分、

○按ズルニ、式部散位ハ所謂文散位ニシテ、兵部散位ハ武散位ナリ、

〔續日本紀(二十五廢帝)〕天平寶字八年十月癸巳、勅曰、定額及額外散位等、輸續勞錢宜停、自今以後、一依令文、

〔享祿本類聚三代格(十八)〕太政官符

應勳位人差使兒事（除太宰陸奧出羽佐渡等府國也）

右得美濃國解偁、被太政官去六月十一日符偁、外散位者、便令直國、駈使雜事、量事閑繁、令申其數、除令續勞物送京庫者、而有勳位人、身雖强壯、或乏家資、無由續勞、望請停差白丁、差勳位人、結番上下、以預考帳、謹請官裁者、被大納言從三位神王宣偁、奉勅依請、諸國亦准此行之、

延暦十六年十一月廿九日

〔朝野群載 內記 十二〕位記狀

散三位

靖恭在位、念望惟諧、慶賞攸領、抑惟令典、宜增榮光、以穆朝奬、

〔職原抄 後附〕位署書式

散位

四位五位無官之人用之、歷受領之人者、經數官雖去之、猶以本所歷之國守用之、不用散位字、是未公文之受領也、勘公文之前可用散位字、六位用散位字者、文章生外國之後、任限過畢散位用之、雖非文章生、任諸國介掾之者、任限過之後可用散位、

攝關書散位字事

堀河院和歌宴、京極前關白被書散位從一位、近則後光明照院前關白、同被用散位字、（後照關院御時）

〔二判問答〕一散位書之時者、不書加位階之由示申輩、尤不審、書加位例注申左、可爲如何哉、

堀川院　嘉保三二十一中殿御會

京極大殿　散位從一位臣藤原朝臣師—上

順德院　建保六八十三同

散位正五位下臣藤原朝臣行能上

後醍醐院　元德二三廿三同

散位從一位臣藤原朝臣道―上

後光嚴院　貞治六三同

散位從五位上臣藤原朝臣爲敦上

散位下、書位階之條勿論也、

〔位署難義私考〕或問、加散位字於位階之上者何也、曰、〇壷井義知 公式令曰、凡內外諸司、有執掌者爲職事、無執掌者爲散官、竊謂、散蓋莊子所謂散木之散、而無用散棄之意也、本朝文粹藤原倫寧奏狀、謂何春再期散木之榮、亦是因之也乎、蓋無官而惟有位者、自無職事之可務、故以書散位二字於位階之上、雖前關白猶然矣、

〔續日本紀元明四〕和銅二年六月癸丑、散位正四位下犬上王卒、

〔續日本紀元明五〕和銅三年正月壬戌、散位從四位下高橋朝臣笠間卒、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字四年正月癸未、散位從三位多治比眞人廣足薨、〇中略 平城朝時、歷任內外至中納言、勝寶九歲、坐子姪黨逆而免職歸第、以散位終焉、

〔續日本後紀仁明九〕承和七年六月丙寅、丹後國人武散位從八位上時統宿禰全氏男諸兄等廿人、改本居貫、附右京二條二坊、

〔續日本後紀仁明五〕承和三年五月丁巳、河內國人散位鴨部船主、武散位同姓氏成等、賜姓賀茂朝臣、

〔古文零聚四〕高田鄉長解申賣買佰姓家地立券文事〇中略

證人

中務大錄正六位上秦忌寸廣氏

散位正六位上秦忌寸古仁
太政官史生正七位上秦忌寸春成
散位正七位上秦忌寸貞成
位子正八位下秦忌寸瀧雄
正八位上秦忌寸豐根
散位從八位上秦忌寸彌人
武散位從八位上秦忌寸
鄕長六人部大酒麿

嘉祥二年七月廿九日

〔三代實錄清和四〕貞觀二年二月十四日乙未、防葛野河使散位從五位下佐伯宿禰眞持爲玄蕃頭、散位從五位下藤原朝臣緒數爲諸陵頭、

〔三代實錄清和九〕貞觀六年八月八日壬戌、播磨國飾磨郡人陰陽大屬正六位上日下部利貞、文武散位正六位下日下部歲直等、賜姓日下部連、貫附攝津國島上郡、

〔東寺文書一〕九佐田貳段〇前缺中略

延喜十七年四月廿七日　鄕長丹波直永古
賣人　蔭孫安倍忠材
相賣從五位下惟吉宿禰淑子
買人陽成院判官散位正六位上國覔伊美吉吉宗

件庄施入我各〇我各、疑長谷誤、寺僧信遠大德讀經料、

延長五年十月十五日　本主僧尊寂
保證人

散位正六位下佐伯宿禰氏雄
從八位下丹波直
從八位上佐伯宿禰氏直
廉氣神祝部大尼

〔古文零聚五〕大國御庄田堵等解申請本家政所職事〇中略

保安三年正月廿八日

堰長外宮内人大和武次
藤井行永
藤井枝垣
大和眞元
田口支次
藤井守岡
大神宮御薗別當大中臣吉末
大神宮占部卜部正元
大神宮大内人荒木田豊允
同宮松本御薗司散位伊岐奉緹
豐受大神宮權禰宜度會彥平

〔朝野群載七公卿家〕民部卿家政所下　阿輪田庄

可ㇾ早任ㇾ廳宣ㇾ打ㇾ定四至牓示庄領ㇾ事〇文略

永久五年十月十三日

案主民部史生藤井

令主計少允中原

知家事主殿属藤井

別當前阿波守藤原朝臣　主稅屬藤井
內匠頭兼左大史算博士越後介小槻宿禰在判　太政官史生紀
文章博士兼大內記越中介藤原朝臣在判
散位藤原朝臣在判
散位藤原朝臣
散位藤原朝臣
散位藤原朝臣在判

〔東大寺小櫃文書上〕東大寺美濃國茜部庄券第四

撿注

言上東大寺領美濃國管厚見郡茜部庄西堺子細事○中略

天治元年八月廿日

庄司散位中原成季
國使□判官代藤原盛通
官使左史生安部重貞

〔本朝世紀〕仁平三年四月廿三日壬午、右大史俊重被解官、藏人左少辨範家仰民部卿云々、

正二位行大納言兼民部卿藤原朝臣宗輔宣、奉勅、件俊重、勘問散位中原兼貞與大炊寮供御人之間、不存公平、旁有私曲、謂其所爲、既乖憲章、宜令解却見任者、

右大史中原俊重

仁平三年四月廿三日　大炊頭兼大外記中原朝臣師業奉

〔古今著聞集五和歌〕堀河院御時和歌御會に、京極大殿師實○藤原御位署に、散位從一位藤原朝臣某とかかせ給たりける、希代の位署なりかし、人目をおどろかしけり、

散事

〔續日本紀（四十桓武）〕延暦八年十月乙酉、散位從三位高倉朝臣福信薨、（○中略）天應元年、遷彈正尹兼武藏守、延暦四年、上表乞身、以散位歸第焉、

〔大禪記〕久安五年十月二日庚戌、今日美福門院（于時御白川北殿、一院御同居、）有殿上始事、（○中略）其後召光頼朝臣於御前、被定別當以下、一紙書之、殿上人又被書一紙、（○中略）藏人二人、平信國（散位信範男）六位進也、今日補藏人、付御簡之時、蔭子蔭孫散位之間、以何字可書哉、是諸宮六位進者官也、經一官者、避其官之後、可書散位字歟、自玆待賢門院御時、通宜六位進也、院號之日補藏人、付御簡之時、此沙汰出來、仍件日參仕公卿等、依御定各被計申云々、但遂被書蔭孫字云々、而今日一切無音無其沙汰、予不堪不審、相尋顯遠、尤可然之由答、此時忽令覺悟歟、然而件事不申事由、無音、本正六位上字許、是今案歟、可謂勿論、御簡式部大夫盛經、（著衣冠參仕、兼被召儲之、）依天治例書之、判官代顯遠撿知之、

〔吾妻鏡一〕治承四年八月四日甲申、散位平兼隆（前延尉、號山木判官、）者、伊豆國流人也、（○下略）

〔吾妻鏡七〕文治三年四月廿三日甲午

周防國在廳官人等言上二箇條（○中略）

文治三年二月日　　散位賀陽宿禰弘方　散位土師宿禰安利　散位土師宿禰弘安　散位菅乃朝臣成房　散位土師宿禰助遠　散位土師宿禰國方　散位賀陽宿禰重俊　散位土師宿禰弘正　散位大原宿禰清廉　散位中原朝臣　在京　散位日置宿禰高元

權介大江朝臣　權介多々良宿禰　在京

〔令義解一後宮職員〕宮人（謂婦人仕官者之總號也）職員

內侍司　尙侍二人（○中略、以下本註及義解竝同、）典侍四人、掌侍四人、女孺一百人、

藏司　尙藏一人、典藏二人、掌藏四人、女孺十人、

書司　尙書一人、典書二人、女孺六人、

藥司 尙藥一人、典藥二人、女孺四人、
兵司 尙兵一人、典兵二人、女孺六人、
闈司 尙闈四人、典闈四人、女孺十人、
殿司 尙殿一人、典殿二人、女孺六人、
掃司 尙掃一人、典掃二人、女孺十人、
水司 尙水一人、典水二人、采女六人、
膳司 尙膳一人、典膳二人、掌膳四人、采女六十人、
酒司 尙酒一人、典酒二人、
縫司 尙縫一人、典縫二人、掌縫四人、

右諸司掌以上、皆爲職事、自餘爲散事、〇中略 東宮宮人、及嬪以上女豎准此、

〔令義解 四後宮職員〕凡宮人給祿者、〇中略 自餘散事謂氏女、女孺之類也、有位准少初位、無位減布壹端、

〔續日本紀 六元明〕和銅七年八月乙丑、制散事五位、應加賜祿、自今以後、准職事正六位焉、

〔續日本紀 三十二光仁〕寶龜四年三月庚辰、勅宮人職事季祿者、高官卑位依官、高位卑官依位、但散事五位已上者、給正六位官祿、

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年三月丙申、散事從三位大原眞人淨子薨、

〔三代實錄 四淸和〕貞觀二年十一月廿日丙申、詔改散事從四位下源朝臣盈姬告身、爲從四位上、盈姬、嵯峨太上天皇之女也、

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字六年十一月乙亥朔、以正六位上借緋多治比眞人小耳、爲送高麗人使、

〇按ズルニ、借緋ハ即チ借五位ナリ、

〔事物紀原 一〕借緋 通典曰、開元八年二月、勅都督刺史卑品者、借緋及魚袋、唐會要曰、二月二十日

也、又曰、舊制凡授都督刺史、階未及五品、並聽著緋佩魚、離任則停、則借緋之制、自唐明皇始也、宋朝賜緋者亦借紫、而相承不佩魚、

借紫　又通典曰、唐武后天授二年八月、右羽林大將軍建昌王攸寧借紫衫金帶、九月廿六日除納言、依舊著紫帶金龜、則借紫之制、自則天時武攸寧始也、

〔政事要略二十七年中行事〕貞式格云、應賜借五位郡領位祿事、

　　絹三疋　綿三屯　調布廿端　庸布卅段

右太政官去年八月廿日下式部省符偁、撿正三位行中納言兼右近衞大將陸奥出羽按察使良峰朝臣安世奏狀偁、郡領者、今之縣令也、親民行化、實在斯人、時澆俗薄、稱格者希、伏望善政爲國司所舉申者、借榮級令足自展、然後考績依實與奪者、依奏者、左大臣宣、奉勅宜且賜件祿、使自勸勵、但位田資人并蔭、不立此限、

　　天長二年七月八日

〔類聚國史三十二帝王〕天長八年二月丁亥、皇帝幸水成野、申時澍雨俄頃而晴、多獲鶉鴙、酉時御河陽宮、山城攝津兩國獻土宜、親王已下、狩長大夫、瞎野六位、山城攝津兩國掾已上、賜祿有差、夜深還宮、借外從六位下勳六等伴刈田臣繼立、外正七位下勳六等他田舍人足主二人、外從五位下、

〔續日本後紀四仁明〕承和二年十二月壬申、借〇借原作授、據一本改、遣唐使位、大使從四位上藤原朝臣常嗣正二位、副使從五位上小野朝臣篁正四位上、並大臣口宣、不授告身、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年二月壬申、相模國大住郡大領外從七位上壬生直廣主、代窮民輸私稻一万六千束、戶口增益五千三百五十人、褒此善狀、假外從五位下、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年三月壬子、相模國大住郡大領借外從五位下壬生直廣主授外從五位下、以去承和七年國司褒擧、今依格所授也、

〔續日本後紀 九仁明〕承和七年三月戊子、陸奥國磐城郡大領外正六位上勳八等磐城臣雄公、遄卽戎途、忘身決勝、居職以來、勤修大橋廿四處、溝池堰廿六處、官舍正倉一百九十宇、宮城郡權大領外從六位上勳七等物部已波美造、私池漑公田八十餘町、輸私稻一萬一千束、賑公民、依此公平、並假外從五位下、

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年三月癸酉、陸奥國柴田郡權大領外從六位下勳七等阿倍陸奥臣豐主、黑川郡領外從六位下勳八等叙伴連黑成、江刺郡擬大領外從八位下勳八等上毛野膽澤公毛人等、並借授外從五位下、皆由國司褒擧也、　八月辛丑、假河內國讃良郡大領從七位下奕田勝男泉外從五位下、以國司褒擧也、復假相模國高座郡大領外從六位下勳八等壬生直里成外從五位下、代貧民塡進調布三百六十端二丈八尺、庸布三百四十五端二丈八尺、正稅一万一千一百七十二束二把、給飢民稻五千五百四束、戶口增益三千一百八十六人、就中不課二千九百四十七人、課二百三十九人、仍襃其身也、

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年十一月己亥、陸奥國磐城郡大領借外從五位下勳八等磐城臣雄公、〇中略授從五位下、襃公勤也、　十二月乙卯朔、下野國那須郡大領外從六位下勳七等大部益野、勸課農田、一千五百七十一町、增益戶口二千四十一人、國司襃擧、借外從五位下、

〔續日本後紀 十八仁明〕嘉祥元年十一月辛未、大和國吉野郡大領吉野連豐益、依政績有聞、借授外從五位下、

〔文德實錄 七〕齊衡二年十一月癸丑、筑前國奏言、上座郡大領外從七位上前田臣市成、理郡年久、善政日聞、百姓同聲、謂之不煩、請假外從五位下、積効爲眞、從之、

〔三代實錄 二淸和〕貞觀元年二月廿五日辛亥、以長門國醫師從八位下海部男種麿臣爲採銅使、詔三箇年內所進銅鉛、年別各足三千斤者、須借授五位、其後三年內、不減此數者、隨爲眞、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年八月廿一日壬戌、肥後國飽田郡大領外從七位上建部公貞雄、借外從五位下、十月十六日丙辰、陸奧國石瀨郡大領外從五位下石瀨朝臣富主、授借外從五位上、

〔三代實錄六清和〕貞觀四年三月廿日戊子、河內國河內郡大領正六位上河內連田村麻呂、信濃國埴科郡大領外從七位上金刺舍人正長、小縣郡權少領外正八位下他田舍人藤雄等、並授借外從五位下、

〔三代實錄九清和〕貞觀六年七月十五日己亥、陸奧國磐瀨郡權大領外正六位上磐瀨朝臣長宗、借叙外從五位下、八月十七日辛未、播磨國赤穗郡大領外正七位下秦造內麻呂、借叙外從五位下、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年八月七日己卯、越前國今立郡大領外正六位上生江臣氏緒、授借外從五位下、以獻稻十萬束、充公用也、

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年閏三月十九日甲辰、下總國海上郡大領外正六位上海上國造他田日奉直春岳借外從五位下、以代百姓濟調庸也、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年十二月十八日壬戌、越中國新川郡擬大領正七位上伊爾頭〇一作伊蘇志又和爾部臣眞益、以私物助官用、代濟民濟公、仍授借外從五位下、

〔筑後國神名帳〕借從五位下　大多良男神　借從五位下　大多良咩神

已上二前、前司守和朝臣利親在任之時、以去延喜廿三年三月□日、奉授件位、〇中略

借從四位上斯禮賀志命神正一位高真玉靈命神第一王子

右神ハ元慶八年四月四日、奉授借正六位上、時吏依其神驗顯然、延喜十五年五月十三日、奉授借從五位下、以同廿年十二月十一日、奉授借從四位下、當時守吉志宿禰公忠、又感其神驗之明、以去天慶六年五月十九日、奉授借從四位上、〇中略

天慶七年四月廿二日　守從五位下吉志宿禰

正六位上行掾秦宿禰

〔續日本紀二文武〕大寶元年三月甲午、始依新令改制官名位號、〇中略諸臣正冠六階、直冠八階、勤冠四階、務冠四階、追冠四階、進冠四階、合三十階、〇中略勳位始正冠正三位、終追冠從八位下階、合十二等、

〇按ズルニ、始正冠正三位、終追冠從八位下階トハ、正冠追冠ハ諸臣ノ位ニテ、親王諸王ニ渉ラザル事ナレバ、勳位ノ諸臣ニ限レルコトヲ示シテ、故ラニ擧ゲタルナリ、

〔冠位通考〕勳位は一等より十二等まで十二階なり、〇中略こはもと軍功の賞のために備たる位階故勳位とはいふなり、軍防令に、凡敍勳應加轉者、謂轉是不定之意也、假令元年行軍十級爲一轉、二年行軍五級爲一轉之類、依其無定例、故謂之爲轉也、皆於勳位上加、〇中略とあり、和銅六年七月詔史にみゆに云、授以勳級、本據有功云々、又唐書百官志に、凡以功授者、鎭撫して邊境靜謐、撫養して戎狄歸化するたぐひを云、覆實然後奏擬、戰功則計殺獲之數、以功授者とは、將帥のうへにかゝり、殺獲を計るは、戰士の上に係れり、とありて、此下に上陣、中陣、下陣、跳盪と、上獲、中獲、下獲と、上賓中賓下賓といふ名目を立て、かれこれを引合せて敍法を立たり、これらみな軍功の賞ときこえたり、〇中略さかはあれども、猶古書どもに散見したる勳位の人、かならずしも軍功を立たる人ともおぼえぬが多かるは、いかなる事ならん、多賀城碑に、大野朝臣東人を勳四等とあるは、もしはよく鎭撫したる賞、いはゆる以功授者にやあらん、古事記の序に、太朝臣安麻呂を勳四等とあると、出雲風土記の郡司の連署、みな勳位を帶したるなどは、必しも軍功の賞ともみえず、天平神護元年正月七日の敍位に、正三位諱光仁天皇なり云々、並授勳二等、おとこの勳六等以上廿八人をのせたり、上云々、また授從三位池上女王勳二等、女の勳六等以上十五人をのせたりとみえたる、その日の宣命に、仕奉人等乃中爾、其仕奉狀隨爾治賜人毛在、此日の敍位に、文位をも數多給ひしかば、此句はたゞ其かたにのみかゝれるかともおもはるれど、さからず、猶勳位にもかけて心うべし、又御軍爾仕奉禮留毛在、依天治賜人毛在とある、御軍とは淡路の帝〇淳仁廢立の事と、惠美仲麻呂伏誅の事也、さてその敍人の中に、男官には、和氣王、山村王、藤原藏下麻呂など、勳功いちじるきもみえたれど、光仁天皇、藤原眞楯、吉備眞備など、これらの人、もし軍功の賞ならば、必大將軍とあるべき也、事迹の國史にみえざるよしなし、必しもそ

の事にあらじとみゆるも多く、まして女官は追捕殺獲の功あるべきにもあらず、もし仲麻呂が謀反發覺したりしほど、事の便になりし人はありもやせん、もしあらば、賀陽臣小玉女、桑原連嶋主、田邊八吉女などぞ、厩立反逆によりたるべき、それもたゞ一二人こそあらめ、貴賤親疎にわたりて、十五人まであるべしともおぼえず、女王よりはじめて何となく授はりたるぞ多かるべき、猶いぶかしきにつきて、から國の制度を尋ぬるに、大唐六典司勳郎中の條に、凡征鎭勳、征は征伐、鎭は鎭戍にて、皆軍功なり、未授身亡者、其勳依例加授、其餘汎勳、未授身亡者、不在敍限とある、汎勳といふは、何となき人にも、汎く勳位を給はるをいふなるべし、しからば皇朝も其制にならひて、汎勳も有しにやあらん、そもそも官位ある人の勳位は、何の料に給るならん、それも勳位の高からんには、猶いはれあるを、四位の人の勳五等六等を帶したらんには、座次行立のためにもならず、服飾威儀のためにもならねば、無用の長物なるがごとし、○略註もし位田を官位勳位と累ねて給はりしにや、○略註諸法度の書に所見なし、もし給はりし事ならば、令條に准據するに、一等は正三位に同じて四十町、二等は從三位に同じて卅四町給はりしにや、令條にみえずとも、必位田はあるべきことはり也、官位なくして、勳位ばかりある人、かならず位田を給はるべき故なり、食封位祿もいかゞありけむ、食封位祿は、令條に、無故不上二年者則停給とあり、勳位は勳功の上にて加轉する法にて、上日の勞をつむ事、物にみえず、さてはこれはなかりしにや、唐國の制度は、永業田とて、上柱國に十二轉といふ、かしこにては下より一二とかぞふる故、十二轉は皇朝の勳一等にあたれり、三十頃、柱國十一轉といふ、この勳二等なり、廿五頃、つぎつぎ減じて、雲騎尉、武騎尉、二轉一轉、十一等十二等、六十畝にいたる、さて上柱國は正二品、皇國は正三位也、かれとこと也、柱國は從二品にあたれるに、正二品の永業田は四十頃、從二品は卅五頃なれば、勳位の位田は、やゝ減じたり、皇國にてはいかゞありけむ、返々いぶかしき事也、

〔神皇正統記六後醍醐〕上古には勳功あればとて、官位をすゝむ事はなかりき、つねの官位の外に、勳位といふ事をおきて、一等より十二等まであり、無位の人なれど、勳功たかくて一等にあ

がれば、正三位の下、從三位の上につらなるべしとぞ見えたる、又本位ある人の、これを兼たるもあるべし、

〔令義解一官位〕正三位勳一等　從三位勳二等　正四位勳三等　從四位勳四等　正五位勳五等　從五位勳六等　正六位勳七等　從六位勳八等　正七位勳九等　從七位勳十等　正八位勳十一等　從八位勳十二等

〔令集解一官位〕親王一品
問案下文、勳一等相當正三位、至于親王、未見相當、若親王有勳功者、叙勳位之法何、所以發問者、義云、品、謂位也、親王稱品者、異諸王者、既可異諸王、然則不可准諸臣稱等故也、師說不見正文、可有臨時處分、

〔唐六典二吏部〕司勳郎中員外郎、掌邦國官人之勳級、凡勳十有二等、十二轉爲上柱國、比正二品、〇註略下同十一轉爲柱國、比從二品、十轉爲上護軍、比正三品、九轉爲護軍、比從三品、八轉爲上輕車都尉、比正四品、七轉爲輕車都尉、比從四品、六轉爲上騎都尉、比正五品、五轉爲騎都尉、比從五品、四轉爲驍騎尉、比正六品、三轉爲飛騎尉、比從六品、二轉爲雲騎尉、比正七品、一轉爲武騎尉、比從七品、

〔事物紀原四〕勳品　沿革曰、勳品自齊梁有之、今柱國而下是也、周禮王功曰勳、蓋取諸此、舊唐書百官志曰、勳官出於周齊交戰之際、本以酬戰士、其後漸及朝流也、

〔出雲風土記意宇郡〕少領從七位上勳業出雲臣　主政外小初位上勳業林臣〇以下諸郡署名多勳業皆略、

〔出雲風土記〕天平五年二月卅日、〇中略國造帶意宇郡大領外正六位上勳業出雲臣廣島、〇卷尾署名

〇按ズルニ、勳業ハ勳十二等ヲ云ヘルナラン、出雲國天平六年ノ計會帳ニ、此廣島ガ此年ノ勳位ヲ擧グテ十二等トセレバナリ、勳業ノ業ハ、基業ノ義ニテ、勳十二等ヲ勳業ト云フハ、第九位ヲ初位ト云ヘルガ如クナラン、

〔東大寺正倉院文書三十〕出雲國天平六年計會帳
天平五年八月廿日符壹道、國造帶意宇郡大領外正六位上勳十二等出雲臣廣嶋進狀以八月廿五日到國、

〔令義解四選敍〕凡內外五位以上勅授、內八位外七位以上奏授、外八位及內外初位、皆官判授、謂勅授、奏授、判授者、宮人授法亦同、其勳位亦依相當法、准文位式、假令六等以上爲勅授、十二等以上爲奏授之類也、

〔令義解一職員〕式部省
卿一人、掌（中略）校定勳績、謂勳績皆功也、不限事、文功武功也、（中略）

〔令集解三職員〕古私記云、校勳績之大少、定等第高下也、問勳事、兵部所掌、而式部下注由何、答、隨文習耳、唐令亦同、凡勳位、皆式部可校也、

〔令義解七公式〕凡授位校勳之類、應須總奏、而有勘當未盡者、隨見盡者奏之、謂未盡、猶未勘畢、此爲臨時立制、其遷滿須敍者、令條既有期限、不可且勘且奏、不得停待致令擁滯、

〔令義解七公式〕凡應敍、親王四品、諸王五位、諸臣初位以上、〈中略〉其三位以上、及勳位、正從各爲一位、

〔延喜式十八式部〕凡軍士以上、重敍文位勳位者、除當年考、

〔令義解五軍防〕凡行軍、謂行軍之所、錄事以上也、敍勳定簿、每隊以先鋒者爲第一、〈註略〉其次爲第二、〈註略〉不得第一等、勳多於第二、謂第一第二者、猶云先鋒次鋒也、（中略）即勳色雖同、而優劣少異者、皆以次歷名、〈註略〉若不合全敍、則從後減退、〈註略〉

〔令義解一官位〕正三位大納言勳一等、謂此條擧勳一等者、以顯相當正三位故也、下皆准之、依公式令、文武職事散官、朝參行立、各依位次爲序、故知一等以下、皆著當色之服、立文官之列、假知一等行列者、立正三位之下、從三位之上類也、然案衣服令、勳位服色、其制不顯、即知一等以下、不帶文位者、皆著黃袍也、

〔延喜式十八式部〕凡勳位朝參者、服文位服、列當位次第、若无文位、著黃袍、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年正月壬辰、定大射祿法、〈中略〉但勳位者、不著朝服、立其當位次、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年三月丙寅、勅近衛將曹從六位下勳六等間人直足人等十九人、咸合

風雲、奮激忠勇、超群拔衆、斬寇滅凶、朕以嘉其武節、賞此高勳、宜令美服光榮容儀標異、自今以後、諸勳六等已上、身有七位而帶職事者、許執牙笏並用銀裝刀帶等、及元日等節著當階色、

〔續日本紀 稱德二十九〕神護景雲三年正月辛未、御大極殿受朝、文武百官、及陸奥蝦夷各依儀拜賀、是日勳六等已上、身有七位而帶職事者、始著當階之色、列於六位之上、六位諸王著纁者次之、

〔令義解 五軍防〕凡敍勳應加轉者、(謂轉是不定之意也、假令元年行軍、十級爲一轉、二年行軍、五級爲一轉之類、依其無定例、故云之爲轉也、)皆於勳位上加、若無勳位、一轉授十二等、每一轉加一等、六等以上、兩轉加一等、二等以上、三轉加一等、其五位以上、加盡勳位外、仍有餘勳者、聽授父子、(謂若父子共在者、理合授父、其有兩轉者、須分授父子也、)如父子身亡、每一轉賜田兩町、(謂如父子先有勳六等、而餘勳止有一轉者、此則勳少不及加授、仍須賜田兩町、卽此名爲賜田、不爲功田也、)其六位以下及勳位、加至一等外、有餘勳者、聽廻授、(謂廻授父子也、)不在賜田之限、

凡勳人、得勳後身亡者、其勳依例加授、(謂例者、一轉授十二等之類也、依此條案、除勳人之外、諸還人位記、未授身亡者、不可追敍也、)若戶絕無人承貫者停、(謂不問親疏、絕而无人、其戶雖非當戶、別戶有應蔭者、卽亦合授、)

〔唐六典 二吏部〕凡有功効之人、合授勳官者、皆委之覆定、然後奏擬、

凡征鎭勳未授身亡者、其勳依例加授、其餘汎勳未授身亡者、不在敍限、

〔令義解 三賦役〕凡(○中略)勳位八等以上、(○中略)免課役、(○中略)勳位九等以下初位、(○中略)並免雜徭、

〔令義解 三賦役〕凡三位以上父祖兄弟子孫、及五位以上父子、並免課役、(謂爲男五位以上生文、其婦女不同此例、其勳位者、一准還敍令降法、但不帶五位以上者、不在此限也、)

〔續日本紀 九聖武〕神龜三年十一月己丑、勳九等以下、任長上官者免課役、

〔令集解 十三賦役〕神龜四年正月廿六日格云、勳位九等以下任長上官應免課役事、右被太政官去神龜三年十一月十五日符云、得令師正五位下鍛冶造大隅、從五位下越知直廣江、正七位下鹽屋連吉麻呂等申狀偁、謹檢賦役令云、內外初位長上、勳位八等以上、並免課役、其主政主帳勳位九等以下、並免徭

役者、謹案令文、勳位九等以下、未任用之前、得免徭役、即知已被任之後、合免課役者、省宜知狀、自今以後、永爲常例、

〔延喜式 二十二 民部〕凡勳九等以下任長上者、皆免課役、

〔令義解 五 軍防〕凡勳位犯除名、限滿應敍者、一等於九等敍、二等於十等敍、三等於十一等敍、四等以下於十二等敍、其官當及免官、免所居官、計降卑於此法者、聽從高敍、(謂假知勳十二等犯罪免官、准法三載以後、聽降先位二等敍、而所降既盡、故猶叙十二等、是爲從高敍也、)

〔令義解 四 選敍〕凡五位以上子出身者、一位嫡子從五位下、庶子正六位上、二位嫡子正六位下、庶子及三位嫡子從六位上、庶子從六位下、正四位嫡子正七位下、庶子及從四位嫡子從七位上、庶子從七位下、正五位嫡子正八位下、庶子及從五位嫡子從八位上、庶子從八位下、三位以上蔭及孫、降子一等、(謂嫡孫降嫡子、庶孫降庶子也、)外位蔭准内位、其五位以上、帶勳位高者、即依當勳階同官位蔭、四位降一等、五位降二等、(謂亦降其子蔭位也、)

〔令集解 十七 選敍〕古記云、其五位以上、帶勳位高、謂正五位帶勳一等、降二等、准正四位蔭、帶勳二等、降二等、准從四位蔭、若從五位帶勳一等二等、降法與正五位同也、唯帶勳三等、降二等、准正五位蔭也、其八位以上、帶勳二等以上、降四等、謂帶勳一等、降四等、准正五位蔭、帶勳二等、降四等、准從五位蔭也、以外不得蒙蔭也、

○按ズルニ、此ニ依レバ、八位以上帶勳ノ蔭ノ事モ、古令ニハアリシナリ、

〔延喜式 十八 式部〕凡在京勳位者、上下於省、考選敍法並同散位之例、

〔續日本紀 三 文武〕大寶三年八月甲子、大宰府請有勳位者、作番直軍團、考滿之日、送於式部、一同散位、永預選敍、許之、

慶雲元年六月己未、令諸國勳七等以下、身無官位者、聽直軍團、續勞上經三年、折當兩考、考滿之年、送

式部、選同散位之例、其身材强幹、須堪時務者、國司商量充使之、年限考第、一准所任之例、

〔令義解五軍防〕凡烽置長二人、略○註撿按三烽以下、唯不得越境、國司簡所部人家口重大堪撿按者充、若無者通用散位勳位、謂外六位勳七等以下也分番上下、三年一替、交替之日、令教新人通解、然後相代、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應勳位人差健兒事除太宰、陸奧、出羽、佐渡等府國也、

右得美濃國解偁、被太政官去六月十一日符偁、外散位者、便令直國、驅使雜事、量事閑繁、令申其數、餘令續勞物送京庫者、而有勳位人、身雖强壯、或乏家資、無由續勞、望請停差白丁、差勳位人、結番上下、以預考帳、請官裁者、被大納言從三位神王宣偁、奉勅依請、諸國亦准此行之、

延曆十六年十一月廿九日

太政官符

應預考勳位健兒事

右撿案內、太政官去延曆十六年十一月十七日下諸國符偁、得美濃國解偁、太政官同年六月十一日符偁、外散位者、便令直國、驅使雜事、量事閑繁、令申其數、餘令續勞物送京庫者、而有勳位人、身雖强壯、或乏家資、無由續勞、望請停差白丁、差勳位人、結番上下、以預考帳者、大納言從三位神王宣、奉勅依請、諸國亦宜准此、式部兵部等省、相共通計、滿前件數、

延曆十九年二月廿三日

〔日本後紀十二桓武〕延曆廿三年九月癸巳、丹波國言、依格差勳位衞護府庫、而白丁之徭、唯卅日、勳位所直百卅日、有位白丁、勞逸不均者、制宜以白丁爲健兒、　廿四年二月乙巳、相模國言、頃年差鎭兵三百五十人、戍陸奧出羽兩國、而今徭丁乏少、勳位多數、伏請中分鎭兵、一分差勳位、一分差白丁、許之、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁元年九月甲辰、播磨國言、據格可以勳位人差點□疑健○空格、字、兒、而國內勳位、或死或

逃、見在之徒、□□老疾、不勘防守、伏望差白丁補其闕、□之、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

一分番令守城塞事

兵士六千人（並勳九等已上白丁已上）

舊數二千人（名取團一千人 玉造團一千人）

今請加四千人（白川團一千人、安積團一千人、行方團一千人、小田團一千人、）

右此國鎭兵之外更點兵士、多則一万、少則二千、應機隨變、無有定例、伏請更加四千人、通前六千人、分結六番、以旬相代、因循前例、可食私粮、唯勳位者、免夫妻口分租、示別白丁、

健士二千人（勳八等已上千五百人 勳九等已上五百人）

右分結四番、一月爲番、唯屢經戰場、被需勳叙、若同白丁、何以勵後、伏請在戍之間、特免□□□□□□□

□□□誘士心、

一停止鎭兵事

合壹仟人（膽澤城五百人 德丹城五百人）

右得管諸郡司解偁、百姓苦役、無過鎭兵、當戍之年、妻子共赴、絶隣在遠、無所乞貸、身迫公役、不遑耕作、盡賣衣物、僅資妻子、歸郷之日、裸身露頂、道程僻遠、復無路粮、望其舊居、應无所處、因斯規留奥地、長絶歸情、山川迂遠、無由撿括、奥地米宛、鵜郡先竭、（○奥地以下八字、疑有誤脱、）職此之由、若停鎭兵加兵士、民無弊苦、兵得強練者、臣等議量、良有道理、何者番上之役、兵士六十日、調庸半輸、以旬相替、無妨家業、健士九十日、各食公粮、夫婦免租、課役全脱、兼預考例、一日爲番、無長戍之憂、此民之安也、今見定課丁、三万三千二百九十人、勳七等以下五千六十四人、就中簡點丁壯家業稍可者、令馬兵倶備、□□□□□□□□

□□□兵士、勘彼鎭兵、論其強弱、猶婦女與丈夫、此兵之強也、前番後更、往來相代之間、兵常一倍、隊伍

既定、戎具復備、縱有機急、應聲可致、此兵之威也、今停鎭兵徵兵士、相折用度、年中所剩、四千一百餘束、此用之足也、安民足用、强兵威敵、臣等管見、不敢不奏、

一分配番上兵士一千五百人健士一千五百人、

膽澤城七百人兵士四百人健士三百人

玉造塞三百人兵士一百人健士二百人

多賀城五百人並兵士

右城塞等、四道集衢、制敵唯○唯恐疑誤領、儻允臣等所議、伏望依件分配、以前奉勅、陸奧國司奏狀如前、具任所請、遂勸兵權、不可簡略、

弘仁六年八月廿三日

〔延喜式十八式部〕凡外散位六位勳七等以下、情願者、聽充帳內及職分資人、七位以下者、聽充位分資人、

〔續日本紀八元正〕養老五年六月乙酉、詔曰、○中略除定額外、內外文武散位、六位以下及勳位、並五位以上子孫、並令納資便成番考、此則雖積考年、還乏衣食、宜始今年、不須發資人々歸田、家々貯穀、若有豐稔、納資成考者、恣聽之、

〔續日本紀十二聖武〕天平七年五月乙亥、畿內及七道諸國外散位及勳位、始作定額、國別有差、自餘聽准格納資續勞、

〔續修東大寺正倉院文書六〕筑前國島郡川邊里大寶二年戶籍

戶主追正八位上勳十等肥君猪手、年伍拾參歲、　正丁大領　課戶

〔續日本紀二文武〕大寶二年九月戊寅、討薩摩隼人軍士、授勳各有差、

〔古事記序〕○文略

和銅五年正月二十八日　　正五位上勳五等太朝臣安萬侶謹上

〔續日本紀元明六〕和銅六年七月丙寅、詔曰、授以勳級、本據有功、若不優異、何以勸奬、今討隼賊將軍、並士卒等、戰陣有功者、一千二百八十餘人、並宜隨勞授勳焉、

〔續日本紀元正九〕養老六年四月丙戌、征討陸奥蝦夷大隅薩摩隼人等將軍已下、及有功蝦夷、並譯語人、授勳位各有差、　閏四月乙丑、太政官奏曰、○中略望請陸奥按察使管內百姓、庸調侵免、○中略如部內百姓、荒野閑地、能加功力、收穫雜穀三千石已上、賜勳六等、一千石以上、終身勿事、見帶八位已上、加勳一轉、即酬賞之後、稽遲不營、追奪位記、各還本色、

〔續日本紀聖武九〕神龜元年二月甲午、受禪即位於大極殿、大赦天下、詔曰、○中略改養老八年、爲神龜元年、○中略內外文武職事、及五位已上、爲父後者、授勳一級、　二年閏正月丁未、天皇臨朝、詔叙征夷將軍已下一千六百九十六人勳位各有差、授正四位上藤原朝臣宇合從三位勳二等、從五位上大野朝臣東人從四位下勳四等、從五位上高橋朝臣安麻呂正五位下勳五等、從五位下中臣朝臣廣見從五位上勳五等、○中略外從八位上國覔忌寸勝麻呂等一十人、並勳六等、賜田二町、

〔東大寺正倉院文書十一〕

戸主從八位下勳十二等出雲臣眞足、年伍拾壹歲、　正丁○中略

弟從八位下勳十二等出雲臣豐足、年肆拾捌歲、　正丁○中略

戸主出雲臣川內、年伍拾柒歲、　正丁○中略

戸勳十等出雲臣隱加、年肆拾伍歲、　正丁○中略

戸主大初位上出雲臣千依、年陸拾玖歲、　耆老○中略

男勳十二等出雲臣嶋麻呂、年參拾歲、　正丁○中略

山背國愛宕郡出雲鄉雲上里神龜三年史生從八位下間人宿禰男君

〔續日本紀光仁三十三〕寶龜六年七月壬辰朔、參議大宰帥從三位勳二等藤原朝臣藏下麻呂薨、○中略八年

○天平寶字之亂、賊走近江、官軍追討、藏下麻呂將兵奄至、力戰敗之、以功授從三位勳二等、十月壬戌、前右大臣正二位勳二等吉備朝臣眞備薨、○中略八年○天平寶字仲滿謀反、大臣計其必走、分兵遮之、指麾部分、甚有籌略、賊遂陷謀中、旬日悉平、以功授從三位勳二等、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年九月丙寅、內大臣從二位勳四等藤原朝臣良繼薨、○中略仲滿謀反、走於近江、即日奉詔、將兵數百、追而討之、授從四位下勳四等、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆四年七月庚戌、刑部卿從四位下兼因幡守淡海眞人三船卒、○中略八年、○天平寶字被充造池使、往近江國修造坡池、時惠美仲麻呂、適自宇治走據近江、先遣使者調發兵馬、三船在勢多、與使判官佐伯宿禰三野、共捉縛賊使及同惡之徒、尋將軍日下部宿禰子麻呂、佐伯宿禰伊達等、卒數百騎而至、燒斷勢多橋、以故賊不得渡江、奔高嶋郡、以功授正五位上勳三等、

〔續日本紀三十九桓武〕延曆五年正月戊戌、左京大夫從三位兼右衞士督下總守坂上大宿禰苅田麻呂薨、○中略八年、○天平寶字惠美仲麻呂作逆、先遣其息訓儒麻呂邀奪鈴印、苅田麻呂與將曹牡鹿嶋足共奉詔、載馳射訓儒麻呂而殺之、以功授從四位下勳二等、賜姓大忌寸、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年正月己亥、改元天平神護、○中略又詔曰、天皇何大御命良麻止勅大御命乎衆聞食止勅、仕奉人等中爾、其仕奉隨狀治給人毛在、又御軍爾仕奉禮留爾依氏治給人毛在、然此多比賜位冠方常與利方異仁在、可久賜故方、平伎時仁奉侍己止方誰人可不奉侍在牟、如此久宇治方夜伎時仁身命乎不惜之天、貞久明久淨心乎以天、朝庭乎護奉侍流人等乎皆己治賜比哀賜倍伎物爾在止奈毛念、故是以、今由久前仁毛緩怠事無之天、諸能劣家牟人等乎毛敎伊佐奈比進、常與利毛益須益須勤結理奉侍止之天奈毛、冠位上給治給久止宣御命乎諸聞食止宣、正四位上文室眞人大市、正四位下高麗朝臣福信並授從三位、○中略正三位諱、○光仁從三位和氣王、山村王、正三位藤原朝臣永手、藤原朝臣眞楯、從三位吉備朝臣眞備、藤原朝臣藏下麻呂、從四位上日下部宿禰子麻呂、從四位下佐伯宿禰伊多智、坂上大忌寸苅田麻

呂、牡鹿宿禰嶋足、並授勳二等、從四位下藤原朝臣繩麻呂、粟田朝臣道麻呂、弓削御淸朝臣淨人、並勳三等、正四位下中臣朝臣淸麻呂、從四位下藤原朝臣濱足、藤原朝臣楓麻呂、高丘連比良麻呂、正五位下小野朝臣竹良、從五位下石村村主石楯、並勳四等、從四位下安倍朝臣彌夫人勳五等、從五位下坂上王、正五位上阿倍朝臣息道、正五位下津連秋主、從五位上石川朝臣垣守、從五位下漆部直伊波、外從五位下金刺舍人八麻呂、從六位上藤野(○野下、疑脫別字、)眞人淸麻呂、並勳六等、(○中略)授從三位池上女王勳二等、從五位上紀朝臣益女勳三等、從四位下竹宿禰乙女、正五位上吉備朝臣由利、稻蜂間宿禰仲村女、大野朝臣仲智、安倍朝臣都與利、從五位下藤原朝臣玄信、並勳四等、從五位下壬生直小家主女勳五等、從五位下藤野別眞人虫(○虫上、恐脫廣字、)女、巨勢朝臣魚女、外從五位下賀陽臣小玉女、桑原連嶋主、草鹿酒人宿禰水女、田邊公吉女勳六等、

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲二年六月戊寅、以從四位上外衞中將兼造西隆寺長官參河守勳四等伊勢朝臣老人、掌膳常陸國筑波采女從五位下勳五等壬生宿禰小家主、(○中略)並爲本國國造、

〔續日本紀 三十稱德〕神護景雲三年十一月己丑、陸奥國牡鹿郡俘囚外少初位上勳七等大伴部押人言、(○下略)

〔續日本紀 三十一光仁〕寶龜二年五月戊申、近衞勳六等藥師寺奴百足、賜姓三島部、

〔續日本紀 三十三光仁〕寶龜六年十一月乙巳、遣使於陸奥國、宣詔、夷俘等忽發逆心、侵桃生城、鎭守將軍大伴宿禰駿河麻呂等、奉承朝委、不顧身命、討治叛賊、懷柔歸服、勤勞之重、實合嘉尙、駿河麻呂已下一千七百九十餘人、從其功勳、加賜位階、授正四位下大伴宿禰駿河麻呂正四位上勳三等、從五位上紀朝臣廣純正五位下勳五等、從六位上百濟王俊哲勳六等、餘各有差、其功卑不及叙勳者、賜物有差、

〔續日本紀 三十四光仁〕寶龜八年十二月辛卯、初陸奥鎭守將軍紀朝臣廣純言、志波村賊、蟻結肆毒、出羽國軍、與之相戰敗退、於是以近江介從五位上佐伯宿禰久良麻呂爲鎭守權副將軍、令鎭出羽國、至是授、

正五位下勳五等紀朝臣廣純從四位下勳四等、從五位上勳七等佐伯宿禰久良麻呂正五位下勳五等、外正六位上吉彌侯伊佐西古、第二等伊治公呰麻呂、並外從五位下、勳六等百濟王俊哲勳五等、自餘各有ㇾ差、

〔續日本紀 光仁三十六〕天應元年九月丁丑、詔授從五位上紀朝臣古佐美從四位下勳四等、從五位上百濟王俊哲正五位上勳四等、正五位下內藏忌寸全成正五位上勳五等、從五位下紀朝臣犬養從五位上勳五等、○中略正六位上阿倍朝臣黑繩外從五位下勳五等、入間宿禰廣成外從五位下、並賞征夷之勞也、

〔續日本紀 桓武三十六〕天應元年十月辛丑、軍功殊人等授勳六等一等、勳八等二等、勳九等三等、勳十等四等、

〔續日本紀 桓武四十〕延曆九年十月辛亥、征蝦夷有ㇾ功者四千八百四十餘人、隨勞輕重授勳進階、並依天應元年例行之、

〔日本紀略 桓武〕延曆二十一年正月乙丑、加征夷軍監已下軍士已上勳位、各有等級也、

〔日本後紀 嵯峨二十二〕弘仁三年九月戊午、陸奧國遠田郡人勳七等竹城公金弓等三百九十六人言、己等未ㇾ脫田夷之姓、永貽子孫之恥、伏請改本姓爲公民、被ㇾ停給祿、永奉課役者、勅可、唯卒從課役、難勳還類、宜ㇾ免一身之役、仍賜勳七等竹城公金弓、勳八等黑田竹城公繼足、勳九等白石公眞山等、男女一百廿二人陸奧磐井臣、勳八等竹城公多知麻呂、勳八等荒山花麻呂等八十八人、陸奧高城連、勳九等小倉公眞禰麻呂等十七人、陸奧小倉連、勳八等石原公多氣志等十五人、陸奧石原連、勳八等柏原公廣足等十三人、椋椅連、遠田公五月等六十九人、遠田連、勳八等意薩公持麻呂等六人、意薩連、小田郡人意薩公繼麻呂、遠田公淨繼等六十六人、陸奧意薩連、

〔白石小品〕按武家ノ始、鎌倉殿○源賴朝アナガチニ朝官ノ高下ヲ論ジ玉ハズ、武職ヲノミ專ラニセラレシハ、オモフニコレ一時ノ權宜ナリ、京都○足利氏ノ代ニ、御家人ノ官位等、鎌倉ノ例ニヨラレシコ

トモ、ソノ據ナキニアラズ、其職スデニオモクシテ、其品貴カラザランコト、其理ヲ得タリトハ申スベカラズ、モシフタツナガラ、其宜シキヲ得ベキニハ、古我朝家ニシテ勳階ヲオカレシ例ニ依リテ、武家ニハ公武各相分ル丶所アリテ、武家ノ職掌品階モ同ジク、其ニ貴カラザルコトヲ得ベカラズ、マシテヤ當家〈〇德川氏〉ニ至リテハ武家ノ官位ハ、堂上ノ外ニ定メオカレシハ、只自ラ古勳階ノ事ニ相同ジ、サラバ老中ヨリ以下ノ御家人、勳一等二等ヨリ、次第ニ勳十二等ニ至リテ、公家ニハ官位ヲ以テ、其貴賤ヲ論ジ玉ヒ、武家ニハソノ勳階ト職掌トヲ以テ其高下ヲ論ゼンニハ、彼是相妨ル所モナクテ、武家ノ職掌モ自カラ貴キ所ヲ得テ、異朝ノ人ノキカン所モ、尤モ國體ヲ得ル所ニモアルベキナリ、サレド此議鎌倉京ノ代ニ、イマダ其例ヲキカザル所ナレバ、タヤスクハ申ガタキカ、サレド又我神祖ノ武家ノ官位ヲ、堂上ノ外ニ定メオカレシ神慮ニハタガフベカラズ、當家ノ老中ハ、朝家大臣ノ職任ニ相同ジ、然ルニ其官ハ從五位下相當ノ侍從ナリ、其位ハワヅカニ從四ノ下ナレバ、堂上ノ人々モ、イカデカ其職ヲアハセテ輕ンジオモヒタマハズト云フコトアルベカラズ、マシテ異朝並ニ朝鮮琉球ノ國々、我國執政ノ大臣、其位其官カクノ如クナリト聞人、アザケリ笑ハズト云フコトナカルベシ、古ノ勳位トイヒシハ、秦ノ武功ノ爵ニヤ事起リケム、唐代ノ制ニテ、武人勳功アル者ニ賜ヒシ所ナリ、我朝ニモ其例ニヨラレテ勳階ヲ定メオカル、中世ヨリ後ハ、其事聞ヘズ、タヾ今モ諸社ノ神位ニハ勳階ノアル多シ、勳一等ト云フハ、正三位ニ相當ナリ、コレヨリ次第ニクダリテ、勳十一等ハ正八位ニ相當リ、勳十二等ハ從八位ニ相當レリ、其位高シトイヘドモ、勳功小キナレバ勳位ハヒクシ、其位卑シケレドモ、勳功大キナレバ勳位ハタカ丶リキ、其事令式、並ニ國史等ニ詳カナリ、譬ヘバ武家老中、其位ハ正四ノ上ヲ極トセンニ、天下機密ノ大臣ノ位ニハ猶卑シト云フベシ、カ丶ルニ勳一等ヲ賜ハランニハ、勳位ハ公家ノ正三位ニ相當レバ、サラバ老中ノ職、公家大納言ノ官ニ相當ルベシ、尤國體ヲ

得タリト申スベキ歟、殊ニ勳位トイフコト、昔ヨリ武人ノ爲ニ設ケオカレシ所ナレバ、武家ヨリ申請レンコト、尤御理運ノ御望ミナリ、其上又勳位望申サセ玉ヘバトテ、公家ノ人々ニ、サラニ相妨ルコトアラザレバ、スコシモカタブケ申ス人アルベカラズ、但又鎌倉京ノ代ニナキ例ナリ、イカヾト申スモノモアランカ、鎌倉ノ代ノ如キ、武家トイフモノ出來シモ、鹿苑院殿〇足利義滿ノ代ニ、武家ノ儀式トイフモノイデキシモ、皆々先例アルニモアラズ、サレド申請レテ其式ヲバ立ラレタリ、此勳位ノコトハ、本朝ノ昔、朝家ノ例アリテ、シカモ武人ノ爲ノ事ニハ、神祖武家ノ官位ハ、堂上ノ外ト定メオカレシ所ニ、ヒシトアヒタルコトナレバ、ナニゴトモシカルベキ御事共ナリ、タヾ今ノ世ノ人ノ心ノツカヌト申スモノニヤ、

官位部八十

位階下 位記 位署附

座次

〔令義解七 公式〕凡文武職事散官、朝參行立、各依位次爲序、位同者、五位以上、卽用授位先後、六位以下以齒、謂齒齡也、親王立前、謂夾馳道而分立東西也、諸王諸臣、依位次不雜分列、謂自親王行降一等、諸王立西、諸臣列東、

〔唐六典二 吏部〕凡文武百僚之班序、官同者先爵、爵同者先齒、謂文武朝參行立、二王後位在諸王侯上、餘各依官品爲序、致仕官各居本色之上、若職事與散官、勳官合班、則文散官在當階職事者之下、武散次之、勳官又次之、官同者異姓爲後、若以爵爲班者、亦準此、其男已上任文武官者、從文武班、若親王嗣王任卑官職事者、仍依王品、郡王任三品已下職事者、在同階品上、自外無文武官者、嗣王在太子太保下、郡王次之、國公在正三品下、郡公在從三品下、縣公在正四品下、侯在從四品下、伯在正五品下、子在從五品下、男在正六品下、若前官致召見、及預朝參者、在本品見任上、不朝參者、在同品下、其在本司參集者、各依職事、其散官三品職事在京者、正多朝會依百官□

〔令義解一 後宮職員〕凡內親王、女王、及內命婦、朝參行立次第者、各從本位、其外命婦、謂其勳位妻者、不預此色、凡令內稱五位以上者、勳位者非也、准夫位次、若諸王以上娶臣家爲妻者、不在此例、謂不在於外命婦之例、其內外命婦、各須不雜而分別之、

〔續日本紀六 元明〕和銅六年四月乙卯、始制、五位以上同位階者、因年長幼以爲列次、

〔延喜式十八 式部〕凡元正行列次第、參議以上在左、太政大臣就列之時、右大臣在西、親王諸王、及餘官三位已上在右、自外五位以上隨便左右、其四位參議、雖是下階列同色上、孫王諸王同色、先列孫王、六位已下、次以位階、不

依官秩、外位不得列內位上、

凡諸節會行列次第、親王及參議已上、并諸官三位已上在左、諸王左右行列在諸臣上、其申政之時、以官秩次、但五位已上位色不同、雖是下官猶先高色、

凡非執政二位者、列中納言之下、三位參議之上、三位者列四位參議上、

凡前參議以上、被召見參及預朝參者、致仕者在本位見任上、以理解者在同位下、

凡應引諸司申太政官者、〈○中略〉五位以上依色就座、六位以下依官次進就庶案下、

〔法曹類林〈二百公務〉〕京職進內膳奉膳、同被寄大嘗會所、其座次以誰爲上事、

公式令云、文武職事散官、朝參行立次第、各依位次爲序、五位已上即用授位先後、六位以下以齒、式云、立〈○立字、延喜式作元正二字、〉行列次第、六位以下、次以位階、不依官秩、其申政之時、以官秩次、但五位以上位色不同、雖是下官、猶先高色、又云、應引諸司申政太政官者、五位以上依色就座、六位以下依官次、進就庶案下者、五位以上、同依位階爲序、於六位以下、或依位階、或隨官秩、朝參申政以外、不見相列之法、方今會事緣公事、以諸司官人等令行同職掌、序座列署之日、何得不定上下、今欲准朝參之法、六位令史可居八省七位判官之上、將據申政之式、神祇之史可著中務判官之上、並事道人、意理豈可然哉、今檢官位令相列官令方、未必依員之次、一端大內記、彈正大忠、左右辨、大史、正親正、內膳奉膳、造酒正、兵馬正、以上正六位上者、案之於同位同階者、須依職員次第、而以大忠居大史上、以兵馬正次酒正之下、尋其倒錯、似顚貴賤、然則同色之內、猶有此意、何況於位階不同者乎、今奉膳此正六位上、大進從六位上官也、依官爲序、事甚爲穩便、

〔吾妻鏡〈六〉〕文治二年正月三日壬午、詣鶴岡八幡宮給、〈○中略〉抑今日御神拜之間、供奉人等相分于廟庭左右著座、而胤頼相對于父常胤著、〈敢寄座下方云云、〉人不甘心、是依仰如此云云、常胤者、雖爲父六位也、胤頼者、雖爲子五品也、官位者、君之所授也、何不賞哉之由被仰下云云、此胤頼者、平家執天下權之時遊候

服色

京都、更不諛其榮貴、依遠藤左近將監持遠擧仕上西門院、被御給叙從五位下、〇下略

〔薩戒記〕永享五年八月十六日、右少將資益來、問駒牽雨儀、答於中門下有大庭儀式、如弓場儲座、或上卿參議在東、（北上西面）辨少納言次將等座在南方（東上北面）列拜、申次時、次將經軒廊下庭中、取笠可參御前也、資益談云、今夜辨、右中辨幸房也、少納言繼長也、（幸房位階上首、（首一本作臈）繼長位階下臈也、）仍幸房稱不著座由者、此事甚不審、不辨先例歟、抑近代辨官相對次將立、不可依位階、可依官次之由稱之、相對少納言者、猶可依位階之由存候歟、所存在兩傳如何、資益之於我者、與繼長（位階在資益下）座次如何、予（〇中山定親）云、不可及子細、繼長在上、資益可在下也、但可著列床子也、其故上代左右近次將拜參、其時左近床子在上、右近床子在下、次第著座、其時少納言辨依位階交著、次將中之事未見之、以之謂之於次將座者、各別儀也、仍不可及上下相論之事也者、

〔武家厳制錄〕（一）禁中幷公家衆諸法度〇中略

一三公之下親王、其故者、右大臣不比等、著舍人親王之上、殊舍人親王、仲野親王贈太政大臣、穗積親王准右大臣、是皆一品親王以後、被贈大臣時者、三公之下可爲勿論歟、親王之次、前官之大臣三公在官之內者、雖爲親王之上、辭表之後者、可爲次座、其次者諸親王、但儲君者格別、前官大臣、關白職再任之時者、攝家之內可爲位次事、

一清花之大臣、辭表之後、座次可爲諸親王之次座事、〇中略

右可被相守此旨者也

慶長廿乙卯年七月日

二條關白殿
昭實公在判　秀忠公御判　家康公御判

〔日本書紀〕（二十九天武）十四年四月庚午、初定明位已下、進位已上之朝服色、淨位已上、並著朱華（朱華、此云波泥孺）、正位深紫、直位淺紫、勤位深綠、務位淺綠、追位深蒲萄、進位淺蒲萄

〇按ズルニ、服色ハ既ニ推古天皇紀ニ見エタレド、每位ノ當色ヲ明ニ擧ゲタル者ハ、此ヲ以テ

始トス、

〔日本書紀三十持統〕四年四月庚申、詔曰、百官人、及畿内人、有位者限二六年一、無位者限二七年一、以二其上日一、選二定九等一、四等以上者、依二考仕令一、以二其善最功能、氏姓大小一、量二授官位一、其朝服者、淨大壹已下廣貳已上黑紫、淨大參已下廣肆已上赤紫、正八級赤紫、直八級緋、勤八級深緑、務八級淺緑、追八級深縹、進八級淺縹、別淨廣貳已上、一富一部之綾羅等、種々聽レ用、淨大參已下直廣肆已上、一富二部之綾羅等、種々聽レ用、上下通二用綺帶白袴一、其餘者如レ常、

○按ズルニ、此時淨大壹ヨリ淨廣貳マデノ四階親王諸王位階ヲ貴トシ、淨大參ヨリ淨廣肆マデノ四階親王諸王位階及ビ正大壹ヨリ直廣肆マデノ十六階諸臣位階之ニ次ギ、勤大壹ヨリ進廣肆マデノ三十二階諸臣位階又之ニ次グ、而シテ明位ノ服制ヲ擧ゲズ、蓋シ是時此位ニ昇レル者ナキヲ以テ、之ヲ省キシナランカ、

〔續日本紀二文武〕大寶元年三月甲午、始依二新令一、改二制官名位號一、○中略服制、親王四品已上、諸王諸臣一位者、皆黑紫、諸王二位以下、諸臣三位以上者、皆赤紫、直冠上四階深緋、下四階淺緋、勤冠四階深緑、務冠四階淺緑、追冠四階深縹、進冠四階淺縹、皆漆冠、綺帶、白襪、黑革舃、其袴者、直冠以上者、皆白縛口袴、勤冠以下者、白脛裳、

〔令義解六衣服〕親王禮服

一品、禮服冠、四品以上、毎レ品各有二別制一、深紫衣、牙笏、白袴、絛帶、謂絛帶者、雜糸也、深緑紗褶、錦襪、烏皮舃、佩二綬玉珮一、謂綬者、紱也、珮者、帶レ玉、天子珮二白玉一、公侯珮二玄玉一是也、

諸王禮服謂五世王不レ入二此限一、令内通例也、即須レ著二諸臣之服一也、

一位、禮服冠、五位以上、毎二位及階一各有二別制一、諸臣准レ此、深紫衣、牙笏、白袴、絛帶、深緑紗褶、錦襪、烏皮舃、二位以下、五位以上、並淺紫衣、以外皆同二一位服一、五位以上佩レ綬、三位以上加二玉珮一、諸臣准レ此、

諸臣禮服

一位、禮服冠、深紫衣、牙笏、白袴、條帶、深縹紗褶、錦襪、烏皮舃、三位以上淺紫衣、四位深緋衣、五位淺緋衣、以外並同二一位服一、大祀大嘗元日則服之、謂、此文承二上三條一也、大祀者、踐祚之大祀、假如、祀二天地一之類也、大嘗者、神祇令、每レ世一年、國司行事、是也、

朝服

一品以下、五位以上、並皁羅頭巾、衣色同二禮服一、牙笏、白袴、金銀裝腰帶、白襪、烏皮履、六位深綠衣、七位淺綠衣、八位深縹衣、初位淺縹衣、並皁縵頭巾、謂、縵無二文繒一也、木笏、謂二職事一、烏油腰帶、白袴、白襪、烏皮履、袋從二服色一、親王、綠緋緒、謂、以二綠緋二色一、相雜而爲レ緒也、一品四結、二品三結、三品二結、四品一結、諸王三位以上同二諸臣一、謂、三位以上者、一位以下也、同二諸臣一者、下文、正位紫緒、一位三結等、是也、正四位深緋、從四位深綠、正五位淺緋、從五位深縹、結同二諸臣一、謂、下文、上階二結、下階一結、是也、其初位者、以二大少一爲二正從一、即大初位上、少初位上、二結之類也、諸臣、正位紫緒、從位綠緒、上階二結、下階一結、唯一位三結、二位二結、三位一結、以レ緒別二正從一、以レ結明二上下一、朝廷公事則服之、

制服

无位、謂、庶人服制亦同也、皆皁縵頭巾、黃袍、謂、淺黃、體制一如二朝服一也、烏油腰帶、白襪、皮履、朝廷公事則服之、尋常通得レ著二草鞋一、家人奴婢、橡墨衣、謂、橡櫟木實也、以レ橡染レ繒、俗云二橡衣一也、此條無二白袴一者、文之省略也、

〔大和物語 上〕野大貳、〔○小野好古〕純友がさわぎの時、うてのつかひにさゝれて、少將にてくだりける、おほやけにもつかうまつり、四位にもなるべきとしにあたりければ、むつきの加階たうばりのこと、いとゆかしうおぼえけれど、京よりくだる人も、おさ〳〵きこえず、ある人にとへば、四位に成たりともいふ、あるひとはさもあらずともいふ、さだかなることいかできかんとおもふほどに、京のたよりあるに近江守公忠のきみの文をなむもてきたる、いとゆかしうれしうてあけてみれば、よろづのことゞもかきもていきて、月日などかきておくのかたにかくなむ、

玉くしげふたとせあはぬきみがみをあけ。〔○五位〕ながらやはあらんとおもひし、是を見てかぎ

推敍
直敍

りなくかなしくてなんなきける、四位にならぬよし、ふみのことばにはなくて、たゞかくなむ有ける、

〔拾遺和歌集雜春十六〕正月叙位のころ、ある所に人々まかりあひて、子日の歌よまむといひて侍けるに、六位に侍ける時、　大中臣能宣

松ならばひく人けふはありなまし袖のみどりぞかひなかりける

〔後拾遺和歌集春一〕入道前太政大臣〇藤原道長大饗し侍ける屏風に、臨時客のかたかきたる所をよめる、　藤原輔尹朝臣

むらさきもあけもみどりもうれしきは春のはじめにきたるなりけり

〔梅村載筆〕推任推叙とは、上より思召によりて官に任じ、位を授らるゝ事なり、

〔官職知要中〕推叙　直叙

推叙、是も推任の推と同じ　直叙、假令可レ叙二五位一之人、直に四位に叙せらるゝ也、又僧位にては、可レ叙二法橋一之人、直に被レ叙二法眼法印一いふ也、

〔初例抄上〕散位僧綱始〇中略

法眼遍昭　貞觀十一二月廿六日叙直叙

〔公卿補任淳和〕天長九年壬子

非參議従三位源定正月七日叙、元無位、

弘仁七生、天長五、賜二源朝臣姓一、十四

〔台記〕久安三年二月三日丁酉、左大臣源有仁公者、延久聖主之孫、輔仁親王之子、中宮大夫師忠卿之外孫、白川法皇迎以爲レ子、〇中略後賜二姓源一、即日叙二従三位一、任二右近衛權中將一、諸臣不レ叙二四位五位一、直叙二三位一之例、未レ嘗有者也、法皇傷三時無二英雄之臣一、爲二此異政一耳、

越階

〔公卿補任 仁孝〕文政二年己卯

散位前權大納言正二位藤胤定本座、十二月廿二日、叙二從一位一、推叙

文政三年庚辰

散位非參議從三位藤忠香正月十七日叙、左權中將如レ故、

文政二年八廿八正五下、同日拜賀、九一左權少將、推任剰闕同月十五從四上、越階推叙同年十二十權中將、推任剰闕

〔塙忠寶雜抄〕越階

享和三年閏正月、越階ノ事ヲ堀田正敦朝臣ヨリ尋下サレシ時、先考〇保己一ノ答ヘサセ給ヘルニ、

越階之事、正六位下より正六位上を經ずして從五位下に叙し、正五位下より從四位下に叙し、正四位下より從三位に叙し候事、ふるくより流例に相成候て、道理は越階に御座候得ども、是等は越階と稱し不レ申候、藏人頭の類正四位上に叙し、五位藏人など正五位上に叙し候へども、是は別段の事ニ而、普通は皆正下より從下に昇進致し候事、堂上、地下、社家、通例之由に御座候、越階と稱し候は定例にたがひ、從四位下より從上を越て正四位下に成候たぐひ規模なる事ニ而、家傳にも補任にも越階とゑるし申候、當時は御攝家方之外無レ之事に御座候、是により候へば、關東にて諸大夫より四品に叙せられ候は、一統定例之事故、必しも越階とは稱しがたく哉と奉レ存候、

公卿補任云、藤內實弘安十年正月十一日正五位下、同年八月十五日從四位下、同十一年正月五日正四位下、越階藤道平永仁元年十二月九日正五位下、同三年六月廿三日從四位下、同年八月廿三日正四位下、越階公卿家傳云、房實公正安元年十二月十九日叙二從五位上一、同二年正月五日叙二從四位下一、越階同年五月廿九日叙二正四位下一、越階基熙公承應四年正月五日叙二從四位上一、同年六月廿五日叙二從三位一、越階

〔吾妻鏡 三〕壽永三年〇元暦元年四月十日戊寅、源九郎〇義經使者自二京都一參著、去月廿七日有二除目一、武衞〇源

大夫

(頼朝)叙正四位下給之由申之、是義仲追罰賞也、持参彼聞書、此事藤原秀郷朝臣、天慶三年三月九日、自六位昇従下四位也、武衛御本位者、従下五位也、被准彼例、

〔公卿補任 後円融〕応安八年乙卯

參議従四位下源義満 左中將、征夷大將軍、十一月廿日叙従三位、越階、

〔花營三代記〕応安八年十一月廿六日、將軍家(足利義満)御上階、

〔公卿補任 後陽成〕慶長十年乙巳

内大臣正二位源秀忠 四月十六日任、(中略)同日叙正二位、越階、元従三位

〔倭訓栞 中編十三〕たいふ　大夫は五位の通稱なり、凡て公卿の息は童形より五位なれば、無官大夫などいへり、(中略)諸職の大夫(大膳大夫之類)に限り、だいぶと濁り呼を故實とす、

〔枕草子 八〕大夫は　式部大夫、左衛門大夫、史大夫、六位藏人、おもひかくべき事にもあらず、かうふりえて、何のたゆふ、權の守などいふ人の、(下略)

〔枕草子春曙抄 八〕大夫　侍の叙爵せしを大夫といふ也、環翠云、八省の丞、左右衛門尉など五位に成たる時、中務大夫、式部大夫など云也、侍の面目也云々、

〔有職問答 四〕一叙爵以後は、大夫將監、大夫進、大夫屬と稱候哉、(常如此申候ナドヘイタク無聞馴候、)然者いづれの官のすけ、せう、さくはんも、爵をし候はゞ大夫と可書候哉、

左衛門大夫、兵衛大夫ナドヘ、常又喚之候、サシタル顯職ニテモナキ官ナベ、呼付候ヘヌカト覺申候、但近代武家奉行衆ヘ、皆何ノ官ニモ、何ノ大夫ト稱之候、サモコソ候ラメ、古儀不聞馴之候樣ニ覺申候、如何、

〔有職問答 二〕一大夫事 古ハ六位相當也、五位ニナリテ大夫ト不喚、近來相當五位故、大夫ト呼ナリ、

大夫は叙爵したる義勢に他人是を書、又は稱候歟(此分候)、武家奉行など何の大夫と申事、賞翫之儀候(近日殊外多候、聞モツケヌ)

大夫ドモ候、不審候、是ハ六位ニテ將監ナリシ人ノ叙爵シテ、モトノゴトク將監ニテアル人ノチ呼候、スコシ規摸ノ事候、當家奉行左近大夫ト申
哉、大夫將監などうへに付て書事も候、或何の大夫と下に付て稱事も候、兩條善惡、巨細被仰出
候、則將監ノ大夫ニテソト推量申候、侍ニハ衞門大夫、兵衞大夫ナド、往古稱シツケタル事候、其外近代何ニモ大夫ヲ付テ喚候、聊不心得候條
度候、
ニ候、但如何候哉、短才不分別候、

〔貞丈雜記官位四〕一大夫をすみて云と、にごりて云に差別あり、左京大夫、修理大夫、大膳大夫、皇太后宮大夫などの時は、だいぶと濁りて云也、たいふとすみて云時は、五位の事也、弘安禮節などにも、五位の事を大夫と書れたり、たとへば左衞門尉は六位の官也、左衞門尉になりたる人、五位に叙すれば左衞門大夫と云也、源義經は左衞門尉にて、撿非違使の判官を兼ねて、五位に叙しける故、大夫判官と云ひし也、左近將監、掃部助も從六位の官也、五位に叙すれば、左近大夫、掃部大夫と云、其外にも何々大夫と云は、五位と知べし、

〔職原抄後附〕諸大夫者

六條修理大夫顯季餘流、此號四條、隆房大納言初任近衞將以來、昇進多如公達之家、又稱名家者、大藏卿爲房餘胤、兩流號勸修寺、葉室參議有國子孫、又有兩流、號大福寺日野、（但此流儒門也）中納言親宗子孫、平氏等是也、經歷侍中辨官、昇大中納言、多執院中權、故振威勢、頻有鷹揚之思歟、然而累代爲執柄家家司職事、不遁名家之號、此外南家、式家、菅、江之儒、或昇進、或沈淪、然而登用之時、准名家被召仕流例也、又源平兩家武士中、源氏者、賴義義家後胤、平家者、正盛忠盛等餘流、（於今者斷絶）自古諸大夫一列也、或又候執柄及諸大臣家輩、六位時補侍中、五位已後參院上北面、剩聽院內昇殿家々、不可勝計、加之官外記醫陰伊勢齋主等、諸大夫一列也、且正本系、且隨行狀、有其沙汰事也、凡公達諸大夫之號、起於執柄事也云々、執柄一門、及可然人々子孫、謂之公達、縱雖累代家禮之人、不失其名號歟、諸大夫者、正補彼家司職事列、家僕之輩之後胤也云々、

〔令義解七公式〕凡授位任官之日喚辭、（謂在御所而授任之辭、其在官省、亦准此例也、）三位以上、先名後姓、（○中略）唯於太政官、三位

以上稱大夫、四位稱姓、五位先名後姓、其於寮以上、謂辨官以下也、四位稱大夫、五位稱姓、六位以下稱姓名、司及中國以下、五位稱大夫、謂一位以下、通用此稱、

○按ズルニ、大夫ノ名ハ三位以上ニ係クルト、四位以上ニ係クルト、五位以上ニ係クルトノ別アレド、多クハ五位以上ヲ云フナリ、

〔古京遺文〕觀世音菩薩造像記

歲次丙寅年正月生十八日記、高屋大夫爲分韓婦夫人名阿麻古願南无頂禮作奏也、

右金銅二臂如意輪觀音像、藏在大和國法隆寺綱封庫、記在其座下、按丙寅推古天皇十四年也、

○按ズルニ、此文ニ云フ所ノ大夫ハ、其某冠ニ當ルヲ詳ニセズ、

〔北史九十四列傳〕倭國、在百濟新羅東南、水陸三千里、於大海中依山島而居、○中略漢光武時、遣使入朝、自稱大夫、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔曰、○中略仍賜食封大夫以上、各有差降、○中略又曰大夫、所使治民也、

○按ズルニ、大夫以上ハ、卽チ五位以上ナリ、食封ヲ賜フヲ以テ知ルベシ、

〔常陸風土記行方郡〕古老曰、難波長柄豐前大宮馭宇天皇○孝德之世、癸丑年、○白雉四年茨城國造小乙下壬生連麿、那珂國造大建壬生直夫子等、請總領高向大夫、中臣幡織田大夫等、割茨城地八里合七百餘戶、別置郡家、

〔日本書紀二十九天武〕三年三月丙辰、對馬國司守忍海造大國言、銀始出于當國、卽貢上、由是大國授小錦下位、凡銀有倭國、初出于此時、故悉奉諸神祇、亦同賜小錦以上大夫等、　五年正月癸卯、高市皇子以下、小錦以上大夫等、賜衣袴褶腰帶脚帶、及机杖、唯小錦三階不賜机、　八月丁酉、親王以下、小錦以上大夫、及皇女姬王內命婦等、給食封各有差、

〔續世繼 九 祈るこゝろ〕一條院の御ときなどにや侍けん、六位の史をへて、かうふり給はれるが、あがためしに、心だかくはりまのくにのつかさのぞみければ、こと人をなされけるに、たび〳〵すみをすりてかきつけらるれども、おほかたもじのかゝれざりければ、いかゞすべきとさだめられけるに、はりまの國のぞむ申ぶみを、みなとりあつめて、かゝるべきさだめありて、えらびすてたる申ぶみどもをも、おほつかの中よりもとめいでゝ、みなかゝれけるに、かの史大夫相尹とかいふが名の、あざやかにかゝれたりけるとなむ、○下略

〔官職秘抄 上〕太政官

大夫史　近代以小槻氏必居此職、往年强不然、又五位相並例、多米國平、小槻奉親、已後多存、

〔今昔物語 二十四〕以陰陽術殺人語第十八

今昔、主計頭ニテ小槻ノ糸平ト云者有ケリ、其子ニ算ノ先生ナル者有ケリ、名ヲバ□□トナム云ケル、主計頭忠臣ガ父、淡路守大夫ノ史奉親ガ祖父也、

〔今昔物語 二十四〕大江匡衡和琴讀和歌語第五十二

今昔、式部大夫大江匡衡ト云人有キ、

〔中古歌仙三十六人傳〕大江匡衡○中略　長德元年正月七日叙正五位下、八月廿八日兼式部權少輔、○中略　四年正月七日叙從四位下、同廿五日轉式部權大輔、

〔今昔物語 二十八〕大藏大夫藤原清廉怖猫語第卅一

今昔、大藏ノ丞ヨリ冠リ給ハリテ、藤原ノ清廉ト云フ者有キ、大藏ノ大夫トナム云ヒシ、○中略　无下ノ田舍人ナドニモ非ズ、諸司勞ノ五位ニテ、○下略

〔十訓抄 二〕史大夫朝親といふもの有けり、學生なりければ、爰かしこに文師にてありきけり、

〔十訓抄 八〕信濃國は、きはめて風はやき所也、是によりて諏訪明神の社、風の祝と云ものを置て、ふ

かくこめすへていはひ置て、百日の間尊重する事也、かゝれば其年風靜にて、農業のためにめでたし、自らすき間も有、日の光も見せつれば、風おさまらずして、あしといふ事を、能登大夫資基と云人聞て、かくのごとく承る、是を歌によまむと思ふと、俊頼に語ければ、俊頼答て云、無下に俗に近し、かやうの事、更に思よるべからず、不便々々といひければ、其旨を存る所に、俊頼後に此事をよみける、

信濃なる木曾路の櫻咲にけり風のはふりにすきまあらすな、尤腹黑き事也、五品後悔しけり、

〔平治物語〕一源氏勢汰事

一門ニハ、先左馬頭義朝、嫡子鎌倉惡源太義平、次男中宮大夫進朝長、○下略

〔尊卑分脈〕四源氏 義朝――朝長左衛門尉、五位、中宮少進、

〔古今著聞集〕一神祇 大夫の史淳方、わかゝりける時、常に賀茂へ參りけり、ある夜、下のやしろに通夜したりけるに、人來て淳方に告けるは、汝かならず大夫史にいたるべきもの也、其時偏頗あるべからず、氏人祐繼といふものあり、それを師とすべしとてうせにけり、

〔玉海〕承安五年三月七日戊子、此日小童、○藤原兼實子良通 於女院御所、有加首服事、○中略 藏人右少辨親宗來、就余座下方仰云、從五位上良通者、余仰可宣下內記之由於親宗了、○中略 余暫起座、向曹子方、改著冠理髮著裝束、○中略 少時大夫○良通 出自曹子、降西廊南面土廂、進南庭、向北再拜、

〔吾妻鏡〕三 壽永三年○元曆元年 四月十四日壬午、源民部大夫光行、中宮大夫屬入道善信俗名康信 等、自京都參著、

〔源平盛衰記〕三十八 平家公達最後幷頸共掛一谷事

是ハ故太政入道○平清盛 ノ弟ニ、修理大夫經盛ト云人ノ末ノ子、イマダ無官ナレバ、無官大夫敦盛トテ、生年十六ニ成也ト宣ケリ、

〔平家物語十一〕大夫やうゑのさたの事

同き廿八日、〇元暦元年九月都には又ぢもくおこなはれて、九郎判官義經、五位のせうになされて、九郎大夫の判官とぞ申ける、

〔平家物語十一〕つぎのぶさいごの事

此邊にたつとき僧やあるとて、たづね出させ、手おひ〇佐藤繼信のたゞ今死候に、一日經書てとぶらひ給へとて、くろき馬のふとくたくましきに、よいくらおいて、かの僧にぞたびにける、此馬は判官〇源義經五位のせうになされしとき、是をも五位になして、大夫ぐろとよばれし馬也、

〔吾妻鏡十一〕建久二年五月十二日己未、大夫尉廣元、〇中原去月廿日賀茂祭供奉、賜院御厩御馬、則具御厩舍人、金武凡施眉目云云、

〔文久二年雲上明覽下〕閑院家

清水谷大夫公考ナル 正五位下〇中略 高松大夫實村スヱ 從五位下〇中略 藪大夫季榮シゲ 正五位上 同新大夫實方フサ 正五位下

〔續日本紀十聖武〕天平元年八月癸亥、勅唐僧道榮、身生本鄕、心向皇化、遠涉滄波、作我法師、加以訓導子虫、令獻大瑞、宜擬從五位下階、仍施緋色袈裟幷物、其位祿料一依令條、

〔續日本紀十七孝謙〕天平勝寶元年十二月丁亥、八幡大神禰宜尼大神朝臣杜女其輿紫色、一同乘輿、拜東大寺、天皇、太上天皇、太后、同亦行幸、〇中略尼杜女授從四位下、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶六年十一月辛未、大唐學問生无位船連夫子授外從五位下、辭而不受、以出家故也、

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年九月壬申、授〇中略修行進守大禪師基眞正五位上、十月壬寅、奉請脇侍毘沙門像所現舍利於法華寺、〇中略詔百官主典已上禮拜、詔曰、〇中略復勅〇中略久米次爾諸大法師可中仁毛、此二禪師等伊、同心乎以天相從道乎志天、世間乃位冠乎波不樂伊末佐倍奈毛止毛猶不得止天、圓

與禪師爾法臣位授（末流、都）基眞禪師爾法參議大律師（止之天、）冠（波）正四位上（乎）授（氣、）復物部淨之（乃）朝臣（止）云姓（乎）授（末流止、）勅天皇（我）御命（乎）諸聞食（止）宣、

〔續日本紀（稱德）二十九〕神護景雲二年十月庚午、大尼法戒准從三位、賜封戶、大尼法均准從四位下、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年四月廿九日庚午、申剋尼御臺所（〇源賴朝妻故子）御還向南山、御奉幣無爲、御在京之間有珍事等、（〇中略）同十四日可令敍從三位之由宣下、上卿三條中納言、（參陣）郎以淸範朝臣被下件位記於三品御亭、此事議定及細碎歟、　十月廿六日乙丑、京都使者參、去十三日、轉定三品令敍從二位給云云、

〔柳營譜略三〕桂昌院殿（稱於玉方、綱吉公母堂、）
元祿十五年（壬午）三月九日、敍從一位、

〔律疏（名例）〕六議（〇中略）　六曰、議貴、（謂三位以上、）

〔唐律疏議（一名例）〕八議（〇中略）　六曰、議貴、（謂職事官三品以上、散官二品以上、及爵一品者、）

〔律疏（名例）〕凡五位以上妾、犯非八虐者、流罪以下、聽以贖論、（五位以上者、是爲通貴、）

〔唐律疏議（二名例）〕諸五品以上妾、犯非十惡者、流罪以下、聽以贖論、

疏議曰、五品以上之官、是爲通貴、

〔唐六典（二吏部）〕凡應入三品五品者、皆待別制而進之、不然則否、

〔令集解（二十八儀制）〕闘訟律、官位同自相毆條云、六位以下八位以上、或五位以上、或三位以上、並爲官位同、

〔律疏（名例）〕凡七位勳六等以上、及官位勳位得請者之祖父母、父母、妻子孫、（此孫不及曾玄、）犯流罪以下、各從減一等之例、（此名減章、七位以上、謂六位七位、勳六等以上、謂五等六等、官位勳位得請者、謂五位及勳四等以上、蔭及祖父母父母妻子孫、犯流罪以下、各得減一等、若上章請人得減者、此章亦減、請人不得減者、此章亦不得減、故云從減一等之例、）

凡應議請減、及八位勳十二等以上、若官位勳位得減者之父母、妻子、犯流罪以下聽贖、

〔日本書紀持統三十〕七年十月戊午、詔、自今年始於親王下至進位、觀所儲兵、淨冠至直冠、人甲一領、太刀一口、弓一張、矢一具、鞆一枚、鞍馬、勤冠至進冠、人太刀一口、弓一張、矢一具、鞆一枚、如此預備、

○按ズルニ、淨冠ヨリ直官ニ至ルヲ貴シトシ、勤冠以下ヲ其次トス、直官ハ卽チ直冠ナリ、

〔日本書紀持統三十〕十一年四月己巳、授滿選者淨位至直位、各有差、

〔續日本紀三文武〕慶雲三年二月庚寅、詔曰、准令三位以上已在食封之例、四位以下定有位祿之物、又四位有飛蓋之貴、五位無冠蓋之重、不應有蓋无蓋同在位祿之例、故四位宜入食封之限、

〔續日本紀五元明〕和銅五年五月癸酉、禁六位已下以白銅及銀飾革帶、

〔續日本紀八元正〕養老三年二月壬戌、初令天下百姓右襟、職事主典已上把笏、其五位以上牙笏、散位亦聽把笏、六位已下木笏、

〔日本書紀持統三十〕四年六月庚午、盡召有位者、唱知位次與年齒、

〔延喜式十八式部〕凡五位已上歷名帳、每年正月待叙位官符、卽奉内裏、更寫一通進太政官、

凡郡司、幷禰宜祝及夷俘等五位歷名帳、別卷每年進之、

凡五位已上歷名、及補任除目、幷年中宣旨、並每色抄寫熟紙、以爲長案、但郡司及俘囚五位歷名作別卷、（郡司俘囚位記文亦准之）

〔令義解七公式〕凡授位任官之日喚辭、（謂在御所而授任之辭、其在官舍亦准此例也、）三位以上、先名後姓、（謂假令喚云秦萬呂之類、）四位以下、（謂五位以上也）先姓後名、以外三位以上、直稱姓、（謂直稱秦宿禰之類也、若右大臣以上稱官名、）四位先名後姓、五位先姓後名、（謂喚云秦宿禰萬呂之類也）六位以下、去姓稱名、（謂直言秦萬呂、不稱宿禰也、卽授任之日、及以外並皆通稱也、）唯於太政官、三位以上稱大夫、四位稱姓、五位先名後姓、其於寮以上、（謂辨官以下也）四位稱大夫、五位稱姓、六位以下稱姓名、司及中國以下、五位稱大夫、（謂一位以下通用此稱、）

〔令集解三十六公式〕古記云、問、五位以上總稱大夫、未知誰所稱、並以上限、答、一位以下五位以上、總稱大

夫、假令聚集之日、五位以上召勅之時、皆各稱大夫等、朱云、稱大夫、謂假稱其司長官大伴大夫耳、四位五位稱大夫處、三位以上亦同稱大夫也、擧其下故也、司及中國以下、謂大上國並職庫府等、皆約寮以上文也、未知自餘坊官等何、答凡此條爲稱他人也、不在稱正身也、若帶勳位、准文位稱何若、

〔職原抄下〕公卿

攝政關白及三公、是公也、散一位及三位已上、是卿也、參議者雖四位猶卿也、但召名猶稱四位也、

〔日知錄二十〕非三公不得稱公

公羊傳曰、天子三公稱公、王者之後稱公、天子三公稱公、周公、召公、畢公、毛公、蘇公是也、王者之後稱公、宋公是也、杜氏通典曰、周制、非二王之後、列國諸侯、其爵無至公者、春秋有虞公、州公、或因殷之舊爵、或嘗爲天子之官、子孫因其號耳、非周之典制也、東遷而後、列國諸侯皆僭稱公、夫子作春秋而筆之於書、則或公或否、生不公、薨則公之、列國不公、魯則公之、於是天子之事、與人臣之禮、並見於書、而天下之大法昭矣、漢之西都有七相五公、（西都賦李善注、公、御史大夫、將軍通稱也、按後漢書、獻帝謂御史大夫郗慮曰、郗公天下事有是邪、是御史大夫得稱公）也、而光武則置三公、（後漢百官志、太尉公一人、司徒公一人、司空公一人、）史家之文、如鄧公禹、吳公漢、伏公湛、宋公弘、第五倫牟公融、袁公安、李公固、陳公寵、橋公玄、劉公寵、崔公烈、胡公廣、王公龔、楊公彪、荀公爽、皇甫公嵩、董公卓、曹公操、非其在三公之位、則無有書公者、三國志若漢之諸葛公亮、魏之司馬公懿、吳之張公昭、顧公雍、陸公遜、晉書若衛公瓘、張公華、王公導、庾公亮、陶公侃、謝公安、桓公溫、劉公裕之類、非其在三公之位、則無有書公者、史至於唐、而書公不必皆尊官、洎乎今日誌狀之文、人人得稱之矣、吁何其濫與、何其僞與、（若鄭端簡名臣記、王無人不稱公、非史體矣）

〔職原抄上〕太政官

參議八人（中略）四位任之者、猶稱某朝臣、三位以上稱姓朝臣也、

〔光臺一覽三〕三位以上は卿と云、四品以下は朝臣といふ、儀同以上は公と云、たとへば位署には、

侍從從五位下藤原隆賀朝臣　參議從三位左近衛中將藤原朝臣隆賀卿　內大臣正二位藤原朝臣隆賀公

如斯なり、

〔續日本紀 文武一〕二年九月戊午朔、以二无冠麻績豐足一爲二氏上一、无冠大贄爲レ助、進廣肆服部連佐射爲二氏上一、无冠功子爲レ助、

○按ズルニ、无冠ハ卽チ无位ナリ、

〔續日本紀考證 一〕无冠 古因レ位賜レ冠、故冠位相通而言、或冠位連稱、見二歷代宣命文一、

〔續日本紀 光仁三十二〕寶龜四年正月丁丑朔、授二無位不破內親王本位四品、無位河內女王本位正三位一、

〔日本書紀 天武二十九〕五年八月丁酉、內命婦等給二食封一、各有レ差、

○按ズルニ、內命婦ハ五位以上ノ婦人ナリ、婦人ニ位階アル、始テ此ニ見ユ、帝王編年紀ニ、天武天皇十四年乙酉、婦女始授二位階一ト云ヘルハ、恐ラクハ誤ナラン、

〔日本書紀 天武二十九〕朱鳥元年五月丙辰、宮人等增二加爵位一、

〔令義解 職員一〕中務省

卿一人 掌略○ 中女王 略○註、內外命婦、謂婦人帶二五位以上一、曰二內命婦一也、五位以上妻、曰二外命婦一也、 宮人 略○註、謂二名帳、考叙、位記一、

〔枕草子 七〕ゑんゆうゐんの御はての年、みな人御服ぬぎなどして、あはれなる事を、おほやけよりはじめて院の人も、花の衣になどいひけむ世の御事など思ひ出るに、雨いたうふる日、藤三位のつぼねに、みのむしのやうなるわらはの、おほきなる木のしろきに、たて文をつけて、これ奉らんといひければ、いづこよりぞ、けふあす御物いみなれば、御しとみも參らぬぞとて、しもはたてたるしとみのかみよりとりいれて、さなんとはきかせたてまつらず、物いみなればえ見ずとて、かみについさしておきたるを、つとめて手あらひて、其卷數とこひて、ふしをがみてあけたれば、く

るみいろといふしきしのあつごえたるを、あやしと見てあけもてゆけば、老法師のいみしげなるが手にて、

　これをだにかたみとおもふに都には葉がへやしつるしゐしばの袖、とかきたり、

〔枕草子春曙抄七〕しゐしばの袖とは、八雲御抄に、四位の異名云々、服をだに故院の形見と思召すに、藤三位は服ぬぎ加階せしよと也、藤三位、四位より加階せしなるべし、

〇按ズルニ、椎ハシヒ、四位ハシヰニテ、其假字相異ナレド、此頃ハ椎ヲシヰト云ヘルヨリシテ之ヲ混用セリ、

〔源平盛衰記十六〕三位入道歌等附昇殿事

源三位入道〇賴政、〇中略四位ノ殿上人ニテ、久ク世ニ仕ヘ奉ケルニ、述懷仕テ、

　上ルベキタヨリナケレバ木ノ本ニ椎ヲ拾テ世ヲ渡ル哉、ト申タリケルニ依テ、七十五ニテ三位ヲ被免テ後、先途既ニ遂ヌトテ、出家シテ源三位入道トモイハレケリ、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寳字二年三月丁亥、舶名播磨速鳥、並叙從五位下、其冠者各以錦造、入唐使所乘者也、

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年十月辛亥、授雙丘東墳從五位下、此墳在雙丘東、天皇遊獵之時、駐蹕於墳上、以爲四望地、故有此恩、

〔平治物語一〕叡山物語事

卿相雲客、信西ガ宏才ヲ感ジ被申ケルニ付テ、四方山ノ御物語ゾ有ケル、サテモ雙六ノ籤ノ目ニ一ガ二ツオリタルヲバ畳一ト云、二ガ二ツオリタルヲバ重二(デウ)ト云、五六ヲモ畳五、畳六ト申ス、是皆重ル義ナルニ、三四計ヲ朱三、朱四ト云コソ心得子、是ヲ御尋候ヘカシト被申ケレバ、法皇ゲニモトテ、信西ヲ被召テ此由ヲ被仰下ケレバ、サン候、昔ハ同重三、重四ト申ケルヲ、唐ノ玄

宗皇帝ト楊貴妃ト雙六ヲアソバシケルニ、重三ノ目ガ御用ニテ、朕ガ思フ如クニ出タラバ、五位ニナスベシトテアソバシケレバ、重三オリキ、楊貴妃又重四ノ目ヲコフテ、我心ノ如クニオリタラバ、倶ニ五位ニナスベシトテ打給フニ、重四出タリキ、依テ天子ニ戯言ナシ、同五位ニナサムトテ被成ケルニ、何ヲカ験シニスベキト云ニ、五位ハ赤衣ヲ著レバトテ、重三、重四ノ目ニ朱ヲサヽレテヨリ以來、朱三朱四ト呼トコソ見ヘテ候ヘト奏シケレバ、諸卿皆理ニヤト感ジアハレケル、

〔平家物語 五〕朝てきそろへの事

延喜の帝、〇醍醐 神せんゑんへ行幸なつて、池の汀に鷺のゐたりけるを、六位を召て、あの鷺とつてまいれと仰せければ、いかんかとらるべきとは思へ共、りんげんなればあゆみむかふ、鷺はねづくろひして立んとす、せんじぞとおほすれば、ひらんでとびさらず、すなはち是を取てまいらせたりければ、なんぢがせんじにしたがひてまいりたるこそ神妙なれ、やがて五位になせとて、鷺を五位にぞなされける、今日より後、鷺の中の王たるべしといふ御札をみづからあそばひて、くびに付てぞはなたせ給ふ、まつたく是はさぎの御料にあらず、たゞ王威の程をしろしめさんがため也、

〔鹽尻 二十一〕一秦始皇、松を封じて大夫とし、漢武帝柏を大將軍に封じ、唐の武后もまた柏を五品大夫に封ず、五雜俎に見えたり吾朝延喜帝、鷺を五位になしたまふ、皆同日の談也、夫官爵は名分の大なるものにして、國家是より重きはなし、されば其德にあたる人なければ闕て可なり、況や無情の樹鳥に官をあたへ位を給ふ、何ぞ夫甚しき、後世の人君、己に從ふをよしとし高爵を與へ、遂に國をうばはれ、身を亡さるゝ例し少からず、

贈位記

名稱

位記ハ、授位ノ記驗ナリ、之ヲ新叙加階ニ用ヰル、卽チ西土ノ告身ナレバ、又告身トモ云ヘリ、然レドモ西土ノ告身ハ、職事官ニモ用ヰルヲ、吾邦ノ位記ハ文位勳位ニノミ有リテ、職事官ニハ別ニ告身ナシ、爰ニ前世ヲ遡觀スルニ、天武天皇ノ十一年ニ、位冠ヲ停メシ事アリ、意フニ、是時ニ始テ位記ヲ以テ之ニ易ヘシナラン、故ニ持統天皇三年及ビ五年ニ位記ノ事アリ、次デ文武天皇ノ大寶元年ニ、官名位號ヲ改ムルニ及ビ冠ヲ賜フコトヲ停メ、易フルニ位記ヲ以テセリ、蓋シ是ヨリ先キニ、又位記ヲ賜フコトヲ停メ冠ヲ賜ヒシナラン、是ヨリ後ニハ常ニ位記ヲ用ヰテ、復タ冠ヲ賜ハズ、而シテ勅授ノ位記ハ、內記黃紙ヲ以テ書シ、太政大臣、中務卿、式部卿等署名ス、若シ長官闕アレバ各次官署名ス、是皆令條ノ署法ニテ、延喜式ニ載スル署名ト大ニ異ナリ、蓋シ延喜ノ署式ハ、嵯峨天皇ノ弘仁九年、漢樣ニ依リテ定ムル所ニシテ、敍人ヲ褒揚スルノ文ヲ掲ゲタリ、而シテ署名訖テ、內印卽チ天皇御璽ト刻セル印ヲ捺ス、但シ武官女官ノ位記ハ、兵部中務ヲ以テ式部ニ代フ、而シテ勅授トハ、太政官ノ奏聞ヲ待タズ、勅旨ヲ以テ敍スルヲ云フ、次ニ奏授判授二色ノ位記ハ、令ニ制定シテヨリ後ニ改マルコトナシ、卽チ文官ハ式部省、武官ハ兵部省、女官ハ中務省ニ於テ白紙ニ書シ、各ゝ太政官ニ送ルナリ、中ニ就テ奏授位記ハ、太政官奏聞シテ授ケ、判授位記ハ、奏聞ヲ經ズシテ、太政官直ニ判授ス、此二色ノ位記ニハ、外印卽チ太政官印ト刻セル印ヲ捺ス例ナリ、猶ホ政治部ノ敍位擬階奏等ノ諸篇ヲ參看スベシ、又官當免官等ヲ犯シテ、位記ヲ毀タルヽ事ハ、法律部上編[illegible]解免官職篇ニ載セタリ、

〔伊呂波字類抄〕爲疊字 位記

〔書言字考節用集〕三官位 位記ヰキ

〔倭訓栞〕前編四十三爲 ゐき　位記の音也、持統天皇の御字より見えたり、武家の位記は、後光明院の

御宇よりの事也とぞ、〇中略位記を告身ともいふ、今時位記を拜受する者、其料を有司に奉る事西土にもあり、通鑑後唐明宗紀に見ゆ、又貧者但受二勅牒一多不レ取二告身一といふも、我邦も同じと度會光隆の說也、

〔新野問答〕一位記は如何樣なるものに候哉

答、位記は畢竟官位の證文のやうなるものにて候、關白、左右大臣、内大臣、大中納言、辨まで判をすへ、其官位昇進の人に給はる事にて候、〇中略

一位記は漢音の讀みに候哉

答、總別堂上の事は呉音に讀み候へども、位記は漢音に讀み申候、然共漢音にて語路あしき時は、呉音にも讀み申候、

位記始見

〔新野問答〕一位記の儀、古代は無レ之事候哉、

答、位記之儀、古は每度請け候事に候、貳百餘年以前、亂世の頃よりこれなき事之樣に成りたれど、稀には請け候衆中も有レ之候、百年以來は、彌々その沙汰無レ之候、近代武家の位記を請け候儀は、後光明院の御宇、五十年計此方の事にて候、其時の武家傳奏は、今出川前大納言、關東江被レ申上候より位記を請け候事に相成申候、禁中方は、今は上役人までも位記請け申候、

〔日本書紀持統三十〕三年九月己丑、遣二直廣參石上麻呂、直廣肆石川朝臣虫名等於筑紫一、給二送位記一、五年二月壬寅朔、是日授二官人位記一、

始賜位記

〔續日本紀文武二〕大寶元年三月甲午、始依二新令一改二制官名位號一、〇中略始停二賜冠一、易以二位記一、

位記式

〔令義解公式七〕勅授位記式

中務省

本位姓名年若干今授二其位一

年月日

中務卿位姓名

太政大臣位姓大納言加名

式部卿位姓名

右勅授、五位以上位記式、皆見在長官一人署、若長官無則大納言、及少輔以上、依式署、兵部亦同、以下准此、

〔令集解公式三十三〕釋云、女位記者准此式、而中務署名、式部不預也、中務職掌爲有宮人考叙位記、故、但授位之後申官、官轉下符式部知耳、爲給資人故、或云、女初位以上者、中務所給、然則應受勅處分、朱云、未知勳六等以上、約此式何、答然也、凡勳位式部可掌耳、見職掌、額云、不然也、猶中務式部共可署名、爲預勳故者何、問女六位以下如男約下奏授判何、答然但以中務代式部乎、額亦同、又勳七等以下可入奏授式者、私案凡勳位專爲不入判授式乎何、跡云、女五位以上、無式部之署、下兩條以中務名代式部耳、穴云、私思女五位已上位記者、式部不預也、六位已下初位已上位記者、只中務卿署之、式部卿不預也、跡同此說、但師屬意男女无別耳、後日從上記、問造勳位位記樣依誰式哉、選叙令內外五位以上勅授條、義解云、勅授奏授判授、謂宮人授法亦同、其勳位亦依相當法、准文官式、假令六等以上爲勅授、十二等以上爲奏授之類、跡云、謂右大臣以上一人之署也、穴云、見在長官一人署、爲右大臣已上生文、不及中式之省耳、師同、跡亦如之、署名不要正身署名、八十一例所云也、朱云、若中務式部卿等授位者、則己位記、注己名、若輔以下署名、答放无長官時、少輔以上、依式式一人可署者未明、額亦同也、古記云、問兵部准此、未知奏授判授式无此文何、答放此耳、

〔令義解七公式〕奏授位記式

太政官謹奏

本位姓名年若干、其國其郡人、今授其位

年月日

太政大臣位姓大納言加名

式部卿位姓名

右奏授、六位以下位記式、

〔令集解公式三十三〕朱云、六位以下、謂外七位、內八位以上也、問奏授位記式、未知持位記奏歟、若眞奏授位狀歟、答私依考課令可知也、額云、猶還文奏後授位耳、不可以位記奏、但作位記前後不見者何、

〔令義解公式七〕判授位記式

太政官

本位姓名年若干、其國其郡人、今授其位

年月日

大納言位姓

式部卿位姓少輔以上加名

右判授、外八位、及內外初位位記式、

〔令集解公式三十三〕朱云、未知授之後、遂不奏不何、先云、不申耳者、額亦同也、又不成選之外、官私雖初位不得授乎、若名勅授可依何式、先云、官成選位可給、但雖勅授、外八位以下、依此式可作位記者何、額云、然也、問判字情何、答猶可給判情歟何、

〔延喜式內記十二〕五位已上位記式

某位姓名

右可某位

中務云云、可﹅依﹅前件﹅主者施行、

年月甲日

中務卿位臣姓名宣

中務大輔位臣姓名奉

中務少輔位臣姓名行

大納言位臣名

大納言位臣名

中納言位臣名

中納言位臣名

中納言位臣名等言、

制書如﹅右、請﹅奉

﹅制付﹅外施行、謹言、

年月乙日

制可

月丙日辰時大内記姓名

左中辨名

左大臣位朝臣

右大臣位朝臣

式部卿位名

式部大輔位名

左大辨位名

告某位姓名奉ニ
僩書一如ㇾ右、符到奉行、

大錄名

式部少輔位名　少錄名

少錄名

年月丁日下

右文官位記式如ㇾ件、(命婦位記亦同)但武官位記、以ニ兵部一代ニ式部一、以ニ右辨一代ニ左辨一、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年十月丁丑、文章博士從三位菅原朝臣清公薨、〇中略九年〇弘仁有ニ詔書一、〇中略五位已上位記、改從ニ漢樣一、〇中略如ㇾ此朝儀、並得ニ關說一、

〔戯鴻堂法書七〕睦州錄事參軍朱巨川　徐浩書

右可試大理評事兼豪州鍾離縣令

勅、左衛兵曹參軍莊若訥等、氣質端和、藝理優暢、早階秀茂、倶列ニ士林一、或見ㇾ義爲ㇾ勇、或登ㇾ高能賦、擢居品仕、咸副ニ才名一、宜ㇾ𣘽ニ乃官一、允ニ玆良選一、可ㇾ依ニ前件一、

大曆三年八月四日

奉

勅如ㇾ右、牒到奉行、

大曆三年八月　日

遵慶　延昌

綰　渙

告試大理評事兼豪州鍾離縣令朱巨川奉

勅如右符到奉行

仙　　　　　　　　　　亞

袁琳

大曆三年八月日下

〔朝野群載 十二内記〕五位已上位記

從二位藤原朝臣公實

右可正二位

中務、靖恭在位、僉望惟諧、慶賞攸鍾、抑惟令典、宜增榮光、以穆朝獎、可依前件、主者施行、

寬治三年正月十一日

中務卿　闕

中務大輔　闕

中務少輔從五位上臣藤原朝臣基朝宣奉行

正二位行大納言臣忠家

正二位行大納言兼陸奥出羽按察使臣實季

正二位行權大納言兼民部卿皇后宮大夫臣經信

正二位行權大納言臣師忠

正二位行權大納言臣雅實

正二位行權中納言臣基長

正二位行權中納言臣宗俊

正二位行權中納言兼大宰權帥太皇太后宮大夫臣伊房

正二位行權中納言兼治部卿臣俊明

正二位行權中納言兼左衞門督臣家忠
從二位權中納言兼左兵衞督臣家實
從二位行權中納言兼皇后宮權大夫臣公實等言
制書如右、請奉
制付外施行、謹言、
寬治三年正月十一日
制可
月日辰時
正五位下行主殿頭兼大外記博士伊與權介中原朝臣師平
左中辨季仲
攝政太政大臣從一位朝臣
左大臣正二位朝臣
右大臣正二位兼行右近衞大將朝臣
內大臣正二位兼行左近衞大將朝臣
式部卿闕
參議正三位行左大辨兼勘解由長官式部大輔匡房
正四位下行式部權大輔兼若狹守正家
告正二位藤原朝臣公實奉
制書如右、符到奉行、
正五位下行式部少輔兼大內記在良
少錄忠任
少錄良貞

少錄義貞

寛治三年正月十一日下　從四位上左近將監源朝臣氏連

〔光臺一覽〕四位記

右以件人宜令叙正位下

關白從一位前左大臣　藤原朝臣綱平
左大臣正二位　藤原朝臣家久
右大臣正二位　藤原朝臣吉忠
內大臣正二位兼左近衞大將　藤原朝臣兼香
正二位守權大納言兼右近衞大將　藤原朝臣公全
正二位守權大納言　源朝臣惟通
正二位守權大納言　藤原朝臣昭尹
從二位守權大納言　藤原朝臣致季
從二位守權大納言　藤原朝臣輝光
權大納言正三位　藤原朝臣常雅
權大納言正三位　藤原朝臣公詮
權大納言正三位　藤原朝臣公福
權大納言行從三位　藤原朝臣俊清
權大納言行從三位　藤原朝臣尙房
從二位守權中納言　藤原朝臣隆典

從二位守權中納言　源朝臣具統
正三位守權中納言　藤原朝臣永福
正三位守權中納言　藤原朝臣隆長
正三位守權中納言　藤原朝臣行康
正三位守權中納言　藤原朝臣爲範
權中納言從三位　藤原朝臣爲信
權中納言從三位　藤原朝臣兼親
權中納言從三位　藤原朝臣基香
權中納言從三位兼左衞門督　藤原朝臣基顯
參議從二位　藤原朝臣定基
參議正三位兼民部卿　藤原朝臣基長
參議正三位左近衞中將　藤原朝臣公緒
參議正三位兼右近衞中將　藤原朝臣保光
參議正三位兼右衞門督　藤原朝臣資親
參議從三位兼左近衞中將　藤原朝臣有流
參議從三位左大辨　藤原朝臣兼康
參議從三位兼左兵衞督　藤原朝臣師香
二品中務卿邦永親王
從四位上中務大輔　安部朝臣泰貞
從四位下中務權大輔　藤原朝臣兼仍

中務少輔從五位下　藤原朝臣雅康
中務權少輔從五位下　卜部宿禰兼章
正四位下少納言大內記文章博士菅原朝臣總長
從五位上少納言侍從　平朝臣篤範
少納言侍從從五位下　藤原朝臣宣通
主者施行　◯是鈐印也、大サ差渡三寸計之由、
年號月日　大外記正六位上兼右大史掃部頭酒造正中原朝臣師英奉

右位記と申ものなり、右は陣之座に列なりし、當官計りなり、

〔內局柱礎抄　上〕書位記樣事（以近代儀爲樣也）
先端書二行書之、（叙人之位署也、雖位署非常儀、位階卜、姓卜、尸卜、名字卜書之、但於公卿者不書尸、限殿上人也、）端書之在所、上三字許置闕書始之、（位記狀之中務二字之下迴ヨリ書之也）其次行書右字與可字、（前之行ヨリ一字下ヲ書之）書新叙之位、譬猶如此、

公卿分
正二位藤原致秀
右可從一位
中務——（狀略之）

殿上人分
正五位上藤原朝臣守光
右可從四位下
中務——（狀略之）

又叙爵之人分（上古者、如女房位記加無位二字、近例不加之也、）

嘉吉二年正月五日叙位請印位記

藤原朝臣永繼

右可從五位下

中務――（狀略之）

抑此端書二行、叙位日入眼之時、書入之也、其謂者、於總位記者、兼日於大内記里亭、召寄少内記等、書儲位記數十通之間、（當日之儀爲早速、自上古如此、）於叙人者、兼不知其人、仍前二行、先除之、而入眼之時、可書入程餘置料紙端也、於奧亦有如此之所也、

次書位記之狀、先發端（仁）書載中務二字、（中務者司之故也）次書其詞、（以之號狀）最初句、大略四言也、如八字稱、但全篇猶四言書之、多分之儀也、或又五言六言相交有書之、又有逐韻聲有不逐也、舊草持兩端也、但於新作之文者、尤可逐之、於例文者、不及沙汰歟、毎年正月叙位位記、皆用例文、又雖臨時位記、叙人無殊事者可用例文、依一段朝奬賜階級之人、用新作也、雖然文段不多之間、以四言爲本、五言六言或交書之、全篇短對也、（短對者、如寡句書之也、）抑位記有式兵兩樣、假令文官人之位記者、式部省官司之、武官人之位記者、兵部省官司之、又式位記文者、書仁義之道德、兵位記文者、書武勇之威雄也、如此書終、又有例狀文之末書連之也、此狀迄ヲ云位記狀也、

例狀云

可依前件、主者施行、

位記例文云

文官（此狀號恪勤位記、叙爵人用之、又諸宮御給等同用此狀、）

中務、性理恪勤、功効克宜、慶賞攸鍾、抑惟令典、宜授榮爵、用光朝章、可依前件、主者施行、○（中略）

抑於宜授之二字者、叙爵之人可用之、於加級輩者、或宜加宜增宜申等之字可用也、又榮爵二字、或人云、於叙爵人者用之、於叙四位人者可改替云々、予思之、此儀一往有謂歟、强不可憚哉、官爵二字者、朝

廷官位之總名也、任五位之時云叙爵者、始爵之儀也、(始爵ノ字、和ニウイカウフリト讀ナリ、)何憚之哉、若猶存故實者、於叙四位之人者、可改之儀無子細歟、三位已上、猶可用之、尤有議乎、〇中略

次書年號月日、(前行ヨリ一字下テ書之)正月叙位之時者、書載某日、於臨時位記者、以叙人勅許之日載之、其樣無殊事、次書中務省三人位署、一人者卿、一人者大輔、一人者少輔也、位署如恒、皆書連之、名字下ニ書宜奉行之三字、(横ニ雙書之也)卿下ニ書宜字、大輔下ニ書奉字、少輔下ニ書行字、二人之時者、大輔下ニ書宜字、少輔下ニ書奉行二字也、一人之時者、三字皆一所ニ雙書也、又此位署ニ有加臣字、此事近代之內記無沙汰之間、予〇大内記菅原和長同前之處、當家代々舊草、皆加臣字畢、況延喜位記式、臣字有之、尤可載之也、抑卿爲闕者、中務卿闕、可爲如此、大輔少輔亦同上、若各爲闕者、叙位以前、大內記奏聞其由、而令任其人者、柱下古來之故實也、故仰外記被任之、但於卿者、爲親王兼官之間、他人不任之、然近代中務卿親王無之、每度加闕字也、其處年號月日ニ相副テ引下テ書之、(凡某月ノ通許ニ書之也)

明應五年六月五日

中務卿闕

中務大輔闕

從五位上行中務少輔藤原朝臣重種　宜行奉

加臣字之例(舊草皆請印位記)

嘉慶三年正月六日

中務卿闕

從五位上守中務大輔臣高階朝臣定經　宣

從五位下守中務少輔臣源朝臣義勝　行奉

永德二年正月六日

中務卿闕

從四位下行中務大輔兼大內記臣菅原朝臣言長宣

中務少輔從五位下臣卜部朝臣兼敦奉行

應永六年五月五日

中務卿闕

從五位上守中務大輔臣三善朝臣爲德宣奉行

中務少輔闕

抑位記一卷之中、載姓尸輩、不過三人也、第一叙人、但於公卿者不載尸也、第二中務輔、第三外記位署等也、此外者不載姓尸也、

次納言位署書之、亞相黃門任見任書載之、參議者不載之也、其樣當官兼官位階臣字名字等也、不載姓尸、凡書載位記輩、有服解人者、官位計書連之、不書名字二字也、尤爲內記故實、上古者、社司國造等位記專如此、近例猶通滿○通滿二字、疑誤字、不載之、仍尋先例、永德二年正月六日叙位、大內記菅原言長作進之位記〻、兩人有此例、記左、

從二位行權中納言兼大宰權帥臣

正三位行權中納言臣已上無名字

又嘉慶三年正月六日、叙位位記、於大辨又同前、

參議正四位上行右大辨

又尋近例、延德三年冬、式部卿宮喪母、翌年明應元年正月六日叙位、大內記菅原在數朝臣作進之位記、不載御名字、御當官載之、

式部卿

公卿位署之段、先大納言、

正二位行權大納言臣宣胤今度位記、亞相一之上首、自餘略之、

次中納言書連之、至最末之納言、名字下ニ、等言二字書之、

正三位行權中納言臣通世等言今度最末之納言也、已上略之、

次有例狀二行ニ書之、次年號月日載之如前、次制可二字書之、年號ヨリ上テ前行ト平頭書之、次書外記位署、先上ニ月日辰時ト此四字ヲ書也、前年號ト同通ニ書也、其下ニ位階當官兼官姓尸等書載畢、名字下ニ奉字ヲ書也、此奉字、敍位位記載之、於臨時位記者不書之也、又臣字不載之、次載中辨官ト名ト計也、外記位署ニ相雙テ、而モ引下テ書載之、

制書如右、請奉

制附外施行、謹言、此二行同通ニ下チモ書合也

明應五年六月五日

制可

月日辰時　正四位下行大外記中原朝臣師富

左中辨宣秀

此所之辨、於式部○式部位記者用左中辨、於兵部○兵部位記者用右中辨、必用中辨也、用右用左事、尚書右武左文之儀也、又外記奉字、依臨時位記不載之、○中略

次式部省官書載之、是依式位記也、先載卿位署、必爲親王兼官、故親王位署載之、又臣字不載之、若無當官親王者、式部卿闕ト可載之、次大輔位署載之、爲兼官者、本官兼國共可載之、若無大輔者、可用權大輔、正權共爲闕者、式部大輔闕ト可載之、已下皆又不可加臣字、又式部少輔爲兩人者、一人者此所載之、一人者奉行之處可載之、少輔爲一人者、必奉行處可載之、

又爲兵位記者、兵部省官書連之、先卿、（爲公卿兼官、本官以下同式部、）若爲闕者、兵部卿闕ト可載之、次大輔正權之間、任當官可載之、皆爲闕者可載少輔也、（但爲兩人之時如此、爲一人者、必可載奉行之處也、）又大輔爲闕之時者、即不載之、異于式部大輔、（式部大輔者、紀傳儒士之撰也、仍參議納言爲兼官、不可類兵部大輔、）又無少輔之時、奉行之處仁用大輔例有之、

二品式部卿邦高親王

式部大輔闕（已上今度之樣）

又舊草例（應永六年正月五日敍位位記）

式部卿闕

參議從二位行式部大輔秀長

又用權大輔例

又兵位記樣（嘉慶三年正月六日敍位位記）

從二位行兵部卿永季

從五位下守兵部少輔俊親

又（寶德四年正月六日敍位位記）

正三位行兵部卿定兼

從五位下守兵部大輔政時

次載大辨、若爲兼官者、本官兼國等書載之、（姓尸又不載）依式位記用左大辨、（兵位記用右大辨、如中辨、）若無見任人之時、左大辨闕ト可載之、

參議正四位上行左大辨俊名

次書載新敍之人、（於此所既可書新敍之位也、）先上仁告字書之、其下仁書敍人之位署、其名字下仁奉字書之、五位

人叙四位者、告従四位下藤原朝臣守光奉、但叙位之時者此叙人位署、當日入眼之時書入之、（如端書）故告字計兼書儲之也、

告従一位藤原教秀奉

次又有例状、一行ニ書之、

制書如右符到奉行

次奉行人之位署載之、必用式部少輔也、（兵位記用兵部少輔）爲兼官者、本官幷兼國等載之、（又不加姓尸）

正五位下行少納言兼侍従式部少輔文章博士章長

若作此人之位記、則可書新叙之位也、假令元正五位下、今度従四位下可書改之也、

兵位記様（寶徳四年正月六日叙位位記）

従五位下行兵部少輔成之

少輔爲闕之時、用大輔例、（永徳二年正月六日、叙位位記大内記菅原言長作進、）

制書如右符到奉行

従五位上守兵部大輔懐直

次載録三人、但近代依無其人官許載之也、三人相並テ書之、式部少輔之字ノ通程ニ引下テ書之、（兵位記同前）

大録

少録

少録

次年號月日載之、其下ニ加下字也、此處之日付、於臨時恒例有差別、先正月叙位位記者、用七日下之字也、其故者正月叙位之議、雖爲他日、（或五日、或六日、）於叙人者、七日節會日下下名賜位記之故、立新叙標拜

舞、仍七日下之字用之、於前之二箇所日付者、用叙位當日也、於臨時位記者、用宣下之日、間三箇所之
日付、皆用同日也、

臨時位記樣

明應五年六月五日下

又叙位位記樣（寶德四年正月五日叙位）

寶德四年正月七日下

右位記一卷作法大概如斯、和長茲歲任杜下、于時儀同（敦秀卿）極位宣下到來、便令下知之次抄之、延喜
位記式雖載大抵、猶爲巨細所記之也、

延喜式內記式云、五位已上位記式、〇中略

右文官位記式如件、命婦位記亦同、但武官位記以兵部代式部、以右辨代左辨、

位記狀

位記狀依其人書改事（以杜皮抄狀書載之）

上古者以人之品秩皆書替也、近代只文官武官之外不書替之也、其儀見前篇畢、於臨時之位記者尤
可守舊儀而書替之也、

〔朝野群載十二內記〕位記例狀

親王

中務、地居盤石、望重維城、敦序茂親、深有恒典、宜申朝奬、用照寵光、可依前件主者施行、

孫王

天枝遺芳常葉餘蔭、褒賞攸鍾、何混俗流、宜授榮爵、以穆朝章、

大臣

燮理陰陽、寅亮天地、總百僚而能輯、執風雨而不愆、宜加榮奬、以穆朝章、

參議已上

靖恭在位、參弼万機、僉望惟諧、政績允懋、宜加榮奬、以穆朝章、

散三位

靖恭在位、僉望惟諧、慶賞攸鍾、抑惟令典、宜增榮光、以穆朝獎、

致仕

久疲官途、已請懸車、敬老之道、抑可光榮、宜昇崇班、用慰衰暮、○中略

文官已下 造宮人、并常陸陸奥守下向等、用此狀、

性理恪勤、功効克宜、慶賞攸鍾、抑惟令典、宜授榮爵、用光朝章、

武官 雖臨時加級、猶用此狀、

表節兵欄、宜勤羽衞、精誠無懈、夙夜在公、宜授榮爵、用旌寵章、

秀才 六位新叙用此狀、加階之時、可用記傳狀、

記傳 加階用此狀、

孫弘勤業、仲舒垂帷、鷄距學優、麟角功竟、音樂之有琴笙、人倫之有周孔、宜授恩奬、使超常倫、

炙輠不竭、談天無究、貫穿六經、驅馳九流、宜增榮爵、用照儒門、

侍讀

談天不究、炙輠無竭、況侍帷幄、奉授詩書、宜增榮爵、用照儒門、

明經

業高重席、名顯瘦羊、爲孔堂之棟甍、涉儒津之舟檝、宜縻好爵、用勸明經、

明法

鋭意憲法、留心平文、鞫讞適宜、輕重得所、宜授榮爵、以勸名家、

竿

精心投竿、凝想立基、輕重斯分、忽微莫失、宜授榮爵、以光朝章、

音

通習漢音、克傳師法、辭調既協、淸濁分流、宜授榮爵、以穆朝章、

陰陽

仰天察地、探頤究精、倚伏既明、祥妖斯驗、宜授榮班、式勸日者、

天文

究精數象、推步天文、聲允觀堂、事照靈室、宜授榮班、以旌懸術、

曆

推策貪餞、究數盡精、分至不忒、端餘斯辨、宜授好爵、以旌殊能、

漏剋

勤心銅尺、守業全德、晷漏無忒、明宿可記、宜授好爵、以旌殊能、

爾宜（祭主、神主、諸社同用之、但讓他人、用圖用狀、）

修其祝嘏、致敬明神、言念精誠、抑可褒進、宜授榮爵、式光祠壇、

卜人

十朋分兆、万象極精、驗天地之災祥、明人靈之禍福、宜授榮爵、以旌藝能、

醫師（醫博士、侍醫、典藥允等、同用此狀、）

酌訓炎軒、陶風緩鵲、醫家深術、人命所懸、宜授榮班、式勸後學、

循吏

剖符爲宰、視民如子、仁以爲任、政績有聞、慶賞攸鍾、抑惟令典、宜授榮爵、用光朝章、

軍功

夙登戎秩、善旌武威、跋水草於喧寒、著勤誠於夷險、宜增榮爵、以申朝奬、

雜藝 樂藝用之

性理恪勤、功効先宜、頗解箏曲、筋力衰弊、宜授榮爵、式勸後進、

復叙 除名之後

先羅疎網、下于秋官、憲法攸中、理存不恐、今星暦已周、恩波須蕩、宜循舊典、使自新、

舞妓 內敎坊用此狀

伎妙柳樹、齡老梨園、飄薄羅而腰裊、赴急管而骨輕、宜授光榮、以耀敎坊、

鎮府

夙莅邊衛、頻經戰事、善誘戎落、矯舊安之、宜授榮班、式光朝奬、

國用 別功獻者、諸社諸寺等別申者用此狀、

肆勤南畝、盡力東陂、終傾家貲、以助國用、不有褒賞、何能勸人、宜降及世之榮、俾申務農之勞、

依子功授父母爵

某性理忠恪、夙夜在公、褒寵攸降、續被所生、宜行寵光、以弘愛敬、

授實慧律師父佐伯宿禰長人爵

無褒績 ○以上三字、疑有誤脫、 殊有可優、加以年齡已過耆暮、宜昇榮貴、用照恩輝、

內親王

懿德已悲、禮儀恒祇、天之仁姝、家之慈母、宜增榮爵、以遵彝典、

女御

德敎已備、芳徽久彰、婦人之所儀、彤管之所記、宜增榮爵、式昭恩輝、

乳母

閫風有肅、婦範可觀、包琬琰以爲心、望松筠而立節、惟朕在襁褓、乳養義深、推燥居濕、不敢告勞、宜授恩奬、用報其功、

命婦 新叙同之

四德克備、六行聿修、婦人之儀形、女史之所記、宜授榮爵、式穆朝章、

先朝女御

昔事先帝、宜禮後房、淑範夙彰、芳徽長厲、婦人之攸儀、彤管之所記、宜授榮爵、式照恩輝、

大臣室 攝籙同

夙標婦德、聿適宰臣、琴瑟克諧、松蘿交蔭、宜授榮爵、以穆閨風、

公卿室幷女

柔儀內照、淑問外彰、貞潔之標、晩節惟懋、宜加榮班、以光朝章、

工巧 [illegible]工番匠同之

思入神妙、術長機關、公輸重生、仲若再誕、宜授寵章、用勵工匠、

〔白氏長慶集四十八〕張徹宋申錫可並監察御史制

勅、舊制副丞相缺、中執憲得出入、御史缺、則於內外史中考覈其實、封奏其名以補之、今御史中丞僧孺奏、某官張徹、某官宋申錫、皆方直強毅、可監察御史、章下丞相府、丞相亦曰可、朕其從之、並可監察御史、

〔白氏長慶集五十〕王汝加朝散大夫授左贊善大夫致仕制

勅、王汝善修其身、爲時良士、善訓其子、爲國憲臣、況以時側之年、知終請老、不加優秩、何厚吾風、禮大夫七十而致仕、故我以朝散贊善二大夫之爵加乎爾身、惟秩與年、兩皆得禮、以茲退去、亦足爲榮、可

依二前件一、

〔本朝文粹位記二〕無位藤原朝臣時平　橘贈納言相廣

右可二正五位下一

中務、伯禽封レ魯、辟疆侍中、杏爾時平、名父之子、功臣之嫡、及二此良辰一、加二汝元服一、鳳毛酷似、爵命宜レ殊、可レ依二前件一、主者施行、

仁和二年正月二日

無位藤原朝臣忠平　紀納言

右可二正五位下一

中務、先功名臣、後胤遺種、非二唯悅二當時之器量一、亦感二曩日之附託一、宜レ授二爵命一、用異二寵榮一、可レ依二前件一、主者施行、

寬平七年八月二十一日

〔台記別記〕久安四年九月廿五日庚戌、是日賜二兩三位之位記一、〇中略

位記狀

無位藤原朝臣幸子〇左大臣藤原賴長妻

右可二從五位上一

中務、柔儀內照、淑聞外彰、貞潔之操、晚節惟照、宜レ加二榮班一、用光二朝章一、可レ依二前件一、主者施行、

久安四年七月廿日

從五位上藤原朝臣幸子

右可二從三位一

其狀同レ前

久安四年八月二日

無位藤原朝臣多子〇左大臣藤原頼長養女

右可從三位

中務、德秋已備、芳徽夙彰、黄閣露裏、專養婉順之姿、紅闈風前、克整婦範之道、宜授階級、式昭寵章、可依

前件、主者施行、

久安四年八月九日

〔宇槐記抄〕久安六年正月廿二日庚子、酉剋、大相府〇藤原忠通參入、爰余〇藤原頼長著陣、範家來仰、一位藤原朝臣〇藤原全子准三宮角振隼加階事云々、内大臣〇源雅定問余曰、一條殿已爲尼、勅書可載法名否、與諸卿竊可議定之由有大相命、余曰、尼爲皇后者、轉昇之時如何、大臣曰、宣命不載名、余曰、法成寺入道相國、〇藤原道長未遁世、蒙准后詔、出家後復有此詔、至其儀者、無載男時名、定知載法名、今亦載法名無其難、又位藤定時、見命婦歷名、雖尼皆載女名、以之思之、尼不失女名、倩案事情、男出家後失官位、女出家後不失也、然則不失女名、理實可然、雖載女名且可無難、内大臣曰、故仁和寺法親王除目尻付、入道師明親王入、書入道從一位藤原全子如何、余及左金吾左武衛、皆以稱善、〇中略

不書入道字事

永保二年二月廿日、入道師明親王叙二品、給件位記狀、然法名可被作歟、將又可付俗名歟、大内記敦基、申上卿權中納言伊房卿之處、件卿被示云、可被先例者、大内記申曰、入道法親王叙品、今度初有此事、准據例不可候歟、但惠子女王〇華山院外祖母准三宮之時勅書、保胤注外祖母王氏、是則出家以後有准后事、不書法名、書王氏、此例如何、上卿申事由、可依彼例之由被仰下也、

无品師明親王

右可二品、

中務、磐石基固、(○圓台記作圓)法林材高、雪山尋蹤、難辭榮望於釋宮之月、天潢分派、欲增寵光於帝子之星、宜昇榮級、式照禪扉、可依前件、主者施行、

永保二年二月廿日

依此例、一條殿准后之時、從一位藤原朝臣書之、以此旨可令申給候也、恐々謹言、

三月廿四日　　大內記長光

私言上、(○中略)惠子女王、准后勅可獻之處、此卷永範朝臣借取了、但保胤作、所入文粹也、件ニモ有出家之由作也、今度師明親王位記狀、所草進候也、

保胤不書入道王氏、故京兆不書入道無品師明親王、仍今度不書入道從一位候也、

位記料

〔延喜式內記十二〕凡書位記料麻紙者、上總國一百五十張、下野國一百張、每年進之、

〔延喜式內記十二〕凡裝束位記式

親王位記者、白紙表、白臭綾裡、紫羅褾、緣綾裡、雜綺帶、赤木軸、三位以上者、縹紙、綠褾、雜綺帶、黃楊軸、五位以上者、白紙、白褾、帛帶、厚朴軸、(女亦同、但僧綱已上准三位、律師准五位、)

凡五位以上位記料雜物、色紙羅綾綺帛帶軸等、量其可用之數、作奏進內侍、奏覽畢、羅綾綺帛帶者、即自內侍所行之、色紙者受藏人所、赤木黃楊厚朴等軸受內匠寮、

〔延喜式內匠十七〕凡內記局所請位記料、赤木軸七枚、黃楊軸廿枚、厚朴軸百枚、每年十二月充行之、

〔延喜式內記十二〕凡造位記料、板二枚、(長各八尺、廣二尺四寸、厚二寸、)鐵尺一隻、(長一尺二寸)刀子二柄、(長五寸、廣一寸、)机二脚、(已上受木工寮)砥一顆、(受大藏省)柳筥四合、(受內藏寮)隨損請換、

凡納位記料革筥八合、緣絹八尺、(結筥帶料)並隨損付內侍奏受內藏寮、

凡納贈位記料柳筥、臨時受內藏寮、

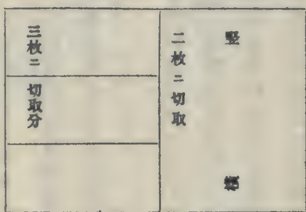
〔延喜式中務十二〕凡宮人成選位記者、准男官敘之、其料物、十月廿日申官請受、

〔內局柱礎抄上〕白紙位記書樣事

先紙一枚ヲ二ニ切テ、堅切也堅ヲ横ニ成テ續加ル也、紙數大方表紙ノ外、三枚ヲ用ル也、但四枚モ書次第也、次表紙同紙ヲ用ル也、前ニ二切タル、其一枚ノ紙ヲ横ニ三枚ニ切テ表紙ニ用ル也、長ハ幸ニ總ト同物ナレバ、重テ長ヲ調ルニ不ㇾ及、廣サヲ計フ程ニ三ニ又切テ用レバ宜キ程也、此表紙ヲバ本料紙ノ外ノ方ニ續也、何ノ物モ表紙ハ如ㇾ此也紐檀ハ小引合紙ヲ三分ニ切テ、間中程ニ付也、表紙ノ內ノ方ニ付ル也、軸ハ檜木ヲ削テ上下ニ一分計ヅヽ餘ス也、執シタル人ノ位記ニハ、白ク能檜木ヲ用ル也、少太ヲ删也、叙位等ノ雜々ノ位記ニハ杉木ナドヲモ用也、

紙切樣

紙一枚



〔延喜式十二內記〕凡應ㇾ授ㇾ位五位及勳六等以上者、內記執硯紙筥、昇殿上書位記、授訖卽以位案送中務省、神祇僧尼位案亦送但臨時位記、中納言以上奉勅、便於宜陽殿及陣邊令ㇾ書之、

〔延喜式十一太政官〕凡成選應ㇾ敍ㇾ位者、奏短册後、預書位記、式部四月十日、兵部十三日請印、○下略

〔類聚符宣抄十〕內記所

被左大臣宣偁、史生佐伯音行令書位記間、宣令直内記所者、

延長八年十一月十五日　大外記伴宿禰久永奉

史生丈部正茂

右大納言藤原朝臣師輔宣、件人宜差遣内記所、令書位記小書者、

天慶九年五月三日　權少外記出雲有時奉

〔朝野群載内記十二〕奉位記宣旨書樣

位行某納言兼某官姓朝臣名宣、奉勅宜令作件某叙某位之位記者、

年月日　從五位上行大内記兼某國介姓朝臣某奉

〔令義解四選敍〕凡位記錯誤須改授者、五位以上奏聞、六位以下判改、(謂奏授以下皆得判改)並注授案、

〔令集解十七選敍〕穴云、問若年號及人號等誤者、依官文書條哉、跡云、五位注六位、六位注五位之類、亦合奏、朱云、五位以上奏聞者、未知官奏歟不若、問勳六等准五位奏不若、釋云、奏授以下皆得判改也、勳位亦同、但位高下相當者、依官位令耳、或説勳位十二等以上、皆此勅授、軍防令勳賞高下聽勅故者非、古記云、六位判改、謂奏授以下皆得判改也、問勳位若爲、答一種无別、但位高下相當者、依官位令文耳、一云、勳十二等以上、皆此勅授、案軍防令勳賞高下臨時聽勅故、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年正月十三日戊子、宮内大丞正六位上大原眞人安雄、去年十一月十六日關賜爵之日、式部省引列於庭中、而内記漏脱、不書位記、遂以空還、然而勅賜著緋、是日追賜從五位下告身、

〔事物紀原一〕告身印

通典曰、唐明皇開元二十三年七月、吏部尚書李暠奏、告身印與曹印文同、請加告身兩字、即吏部告身之印、始自唐李暠也、

署位記

〔豐受大神宮禰宜補任次第〕禰宜正五位下度會神主連信（在任卅六年、執印八年、）

右神主、（○中略）長暦元年六月十一日正下、後朱雀代始賞、但越一階賜從四位下位記、而內記失錯之由被下宣下、雖召返位記、陳子細、雖然追被下正下位記也、

〔三代實錄（四清和）〕貞觀二年五月廿八日丁丑、從四位下董子女王復本名重子、授位告身、誤注董子、今有披訴、因而許之、

〔享祿本類聚三代格（十七）〕太政官符

卿（○式部）署位記事

右右大臣宣、奉勅、自今而後、親王任卿者、宜與大臣平頭、中務兵部准此、

延暦十八年四月十一日

〔延喜式（十八式部）〕凡位記署名、不必自爲、

印位記

〔令義解（七公式）〕內印、（方三寸、）五位以上位記、及下諸國公文則印、外印、（方二寸半、）六位以下位記、及太政官文案則印、

〔續日本紀（五元明）〕和銅五年五月丙申、太政官處分、凡位記印者、請於太政官、下諸國符印者、申於辨官、

〔延喜式（十二中務）〕凡捺印五位以上并勳六等以上位記者、書位記日、少納言預告省輔、（輔不在者、丞代之、若丞并少將）（侍從）（侍從）

〔延喜式（十二中務）〕凡捺印五位以上并勳六等以上位記者、書位記日、少納言預告省輔、（輔不在者、近衞少將代之、）若丞并主鈴（持印板、）令候、兼令掃部寮立案於版位邊、即少納言率輔一人進就版位奏請、（事見儀式、）其位案者、內記送省附位帳、即具注本位年紀并今授位階等、申送辨官、官申大臣下知所司、（授神位、及授僧尼位已上亦同、）

〔延喜式（十一太政官）〕凡式兵二省請印准蔭成選等位記、先令印廿枚已下、後更定日、參議於辨官結政所捺了、（所須丹膠等物、預先請受、）

〔延喜式（十一太政官）〕凡庶務申太政官、（○中略）其考選目錄、及請印六位以下位記者、中務式部兵部三省、不經辨官直申太政官、

〔延喜式十二中務〕凡叙内親王以下品位者、卿叙品及三位已上、輔叙五位已上、其授宮人位畢、下知縫殿寮、其六位已下位記者、申太政官請印、事見儀式、

〔日本紀略一十一條〕寛弘二年三月廿七日乙亥、脩子内親王於内裏有著裳事、〇中略即日脩子内親王叙三品、廿八日丙子、左大臣參入、請印脩子内親王三品位記、

〔日本紀略後一條十四〕長元四年五月四日庚戌、兵部省位記請印、

〔左經記〕長元四年九月十日乙卯、召使奉云、外記時資仰云、晩景可有位記請印、可參入者、令仰可參入之由、及晩參内、侍從中納言被候、而少納言遲參、仍入夜位記三卷請印、件位記伊勢内人等也、前日彼兩宮禰宜等、各被叙一階之次、禰宜等依申請、勤勞之内人等預叙列、而齋主輔親朝臣注進、漏前列之輩、仍所被叙也云、事了退出、

改位記

〔三代實錄四清和〕貞觀二年十一月廿日丙申、詔改散事從四位下源朝臣盈姬告身、爲從四位上、盈姬嵯峨太上天皇之女也、

〔三代實錄二十三清和〕貞觀十五年五月廿九日壬辰、散位外從五位下飯高朝臣貞宗披訴、貞宗不可賜外階、於是刊除外字、改賜從五位下告身、

失位記

〔令義解四選敍〕凡失位記者、於所在陳牒、本屬本司長官推其失由、具狀申省、勘授案申官更給、謂勘授奏授判授、亦各知初授時也、具注失落重給之狀、謂今授位記及授案、並皆注重給之狀也、

〔令集解十七選敍〕古記云、所在陳牒、謂申牒所在官司、假令行道之人、道路之間失落位記、申牒當所官司、卽當處知實具狀、使付失人、移送本屬本司也、穴云、問於宮城内道失者、以何稱所在、答以便近司稱耳、其於大學内道失者、以大學稱所在之類也、釋云、本屬者、所貫也、穴云、稱本屬者、外散位郡司等是、自餘皆牒本司、若本司與本屬二、隨便近陳牒聽耳、〇中略穴云、問重給之時以年號、答寫先位案重給狀處、注當時年月日耳、可注位記年故、朱云、重給日月注不、或云、日月可注者何、然若可注者、位記授

案并注附不、

奪位記

〔續日本紀九元正〕養老六年閏四月乙丑、太政官奏曰、〇中略食之爲本、是民所天、隨時設策、治國要政、望請勸農積穀、以備水旱、仍委所司差發人夫、開墾膏腴之地良田一百万町、其限役十日、便給糧食、所須調度、官物借之、秋收而後、卽令造備、若有國郡司詐作逗留、不肯開墾、並卽解却、雖經恩赦不在免限、如部內百姓、荒野閑地、能加功力、收穫雜穀三千石已上、賜勳六等、一千石以上終身勿事、見帶八位已上加勳一轉、卽酬賞之後、稽遲不營、追奪位記、各還本色、〇中略奏可之、

位記代

〔日本紀略一醍醐〕延喜十三年正月廿八日、前大宰大貳源悦朝臣、依不赴大宰府、召位記、不毀留官底、

〔西宮記臨時八〕恩賞事〇中略

御遊次、有勅恩賞者、叙位給官類〇中略有叙位者、上卿仰近衞將、以白紙於御前庭召唱、後日給位記〇中略

延喜二十一正二十五日、藤原敦忠於殿上加元服、右兵衞督兼義理髮、大納言藤加冠、右少將伊衡以紙唱、敦忠又拜舞、〇中略御記云、伊衡進跪御前、階上展紙叙之、倉卒不書位記、展紙爲位記代、此卽前例也、訖退出、敦忠授位服拜舞云々、

〇按ズルニ、先ヅ當色ヲ賜ヒテ後ニ敍位シ、或ハ敍位シテ後ニ位記ヲ付セシコトハ、政治部敍位篇ニアリ、

宸筆位記

〔西宮記臨時八〕恩賞事

宸筆位記事天皇以黄紙書之、其位某人可其位年月日、給上卿令成御位記、〇中略

延喜七年十一月廿二日御記云、敦實親王加元服參入、殊叙三品、自書給之親王拜舞云、〇中略

天慶三二十五日、主上〇朱雀御元服日殿上記云、降御筆可三品、太政大臣傳給授親王、〇村上親王改服舞踏云々、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年十二月廿日乙丑、先是從五位上行大學博士大春日朝臣雄繼以御注孝經奉授皇帝、今日有事竟宴、授博士雄繼正五位下、御筆書告身以寵之、

〔三代實錄 四十九 光孝〕仁和二年正月二日壬午、太政大臣〈○藤原基經〉第一之男時平、於仁壽殿加元服、于時年十六、帝自手取冠加其首、令藏人主殿助從五位下藤原朝臣末直理髮、即日授時平正五位下、其告身、天皇親筆書黃紙以賜之、勅參議左大辨從四位上兼行勘解由長官文章博士橘朝臣廣相作告身文、

〔扶桑略記 二十二 宇多〕寬平二年二月十三日己巳、大臣〈○藤原基經〉參入言曰、可加小童仲平元服、即簾前立倚子就之、大臣祗候、爰使散位定國先結髮、次朕〈○宇多〉著冠、此時左大臣融朝臣參入、太政大臣幷仲平相具舞蹈、賜仲平白褂一領、朕即手造位記曰、无位藤原仲平、今可正五位下、先帝〈○光孝〉御宇之日、兄時平加元服、皆率其流也、

婦女位記

〔令集解 三十三 公式〕勅授位記式

釋云、女位記者、准此式而中務署名、式部不預也、中務職掌、爲有宮人考敍位記故、但授位之後申官、官轉下符式部知耳、爲給資人故、或云、女初位以上者、中務所給、然則應受勅處分、

〔內局柱礎抄 上〕女房位記樣

此位記、一如男位記、但無式兵之兩樣、皆爲式位記、端書爲敍爵之人者、無位藤原朝臣某ト可載之、爲加級之人者、本位如常可書之、此外無殊事、於位記狀者、書貞女之德也、此狀依人之品造替也、

雜載

〔中右記〕天仁元年七月三日、參皇居六條殿、可行臨時位記請印也、〈○中略〉本案次第、內記持參位記、乍加本宣〈令持內記本宣旨、奏時可引、但後二條院具本宣旨、可奏由有仰云々、然而近代留本宣旨也、〉內覽、次付御所奏覽、〈○中略〉次請印、又內覽奏聞了後、返給內記也、有神位記時入別筥、女位記相具時、入別筥可奏也、〈○中略〉今日二箇度奏聞了、不籠御物忌之上、幼主〈○鳥羽、時六歲、〉時、只覽攝政許也、依御里亭以二箇度內覽准奏聞也、但殿下御于禁中者、猶以內覽二箇度、付藏人奏聞、二箇度可爲善也、正月五日請印之時、三箇度奏聞、返給之後下內記也、但至女位記者、雖臨時留御所、後日以女官分給云々、

〔北山抄 九〕賜內親王女御位記事

其位記置柳筥到彼第令持小舍人云々　先令達事由、進簾前奉之、或卽令家司奉、在禁中者、更不經案内進奉之、給祿時、勅使不必拜、但至于无止所隨狀可拜、或用有緣侍臣、

〔貞信公記〕天慶三年正月三十日、左丞相來、議奏可叙純友五位事、　三月二日、給純友位記使蛇淵有相將來申悅狀、

〔延喜式四伊勢大神宮〕凡禰宜内人神郡祝等、恩詔位記者、式部省依數送於神祇官、官則附四度祭使下之、使率神祇史一人、先申叙位之由、卽就直會院第一殿南面坐、以位記置案上、史喚名給、殿前東向、被喚名禰宜内人北上東面重行、訖則奉拜大神、拍手兩段、次北向朝拜、但度會宮西向行事、餘儀同大神宮、若禰宜給五位位記者、於中重給之、

〔附〕位署

位署ハ官銜ニテ、官位ノ相當不相當ヲ分ツ爲メニ設クル所ノ例規ヲ云フ、假令バ三位正階ノ人、正三位ノ官ニ任ズルハ相當ナリ、從二位ノ官ニ任ジ、及ビ從三位ノ官ヲ帶スルハ不相當ナリ、此ノ如キハ皆此例ニ據リテ署ス、卽チ官位令ノ相當ニテ云ハヾ、正三位ノ人、相當ノ官大納言ニ任ズレバ、大納言正三位ト署シ、從二位相當ノ右大臣ニ任ズレバ、正三位守右大臣ト署シ、從三位相當ノ大宰帥ニ任ズレバ、正三位行大宰帥ト署スルガ如キ是ナリ、又二官以上兼任スル者ハ、位階相當ノ官ヲ以テ正官トス、若シ皆不相當ナレバ、一ノ高官ヲ以テ正官トシ、自餘ヲ皆兼官トス、卽チ三位從階ノ人、正四位上相當ノ中務卿ニ任ジ、累子テ正三位相當ノ大納言、及ビ從四位上相當ノ彈正尹ヲ兼任スルハ、皆不相當ナリ、此ノ如キハ最高ノ大納言ヲ以テ正官トシ、餘ノ二官ヲ兼任トスル例ニテ、卽チ署名ニハ、從三位守大納言兼行中務卿彈正尹ト署ス、若シ正四位上階ノ人、上件ノ三官ニ任ズレバ、中務卿卽チ位階相當ノ官ナレバ、中務ヲ以テ正官トシ、自餘ヲ兼官トスル例ニテ、署名ニハ中務卿正四位上兼守大

位署式

納言行彈正尹ト署スルガ如シ、而シテ相當ナキ職、即チ攝政關白參議別當ノ如キハ、必ズ官位ノ最上ニ置キ、之ヲ捧物ト稱ス、又同位ノ官ハ、文官ヲ先キニシ、武官ヲ後ニシ、外官ノ名ハ諸官ノ下ニ置ク等ノ法アリ、又位署ハ必ズ一行ニ書スベキヲ以テ、字體ヲ破拆スルコトアリ、而シテ行守ハ、直ニ位署ニ施スベキガ爲メナラズシテ、刑律、祿法ニモ用アリ、

〔拾芥抄中本官位相當〕官位相當者、以官書上、不相當以位書上、位貴官賤書行字、官貴位賤書守字、官位相當又書行字、同判署、守行兩字之事、高官上書守字、下官上書行字、若有數兼官者、以相當之官書上、餘官皆雖高官爲兼官、若共不相當、書官次第、次第見職員令、相當官賤、不相當官貴、以相當賤官可書上之、有相當官無兼官、不書行守字、令云、凡位有貴賤、官有高下、階貴則職高、位賤則任下、官位相當、各有等級、選敍令云、凡任內外文武官、而本位有高下者、若職事卑爲行、高者爲守、謂若以無位人任長上官者、亦須注守也、近代不謂相當、以京官書上、京官之中、以文官爲先、以武官爲次、以外國爲下歟、隨時可斟酌也、或云、正五位下入內之時猶從五位下云々、法式無所見、前蹤可尋之、又參議從二位藤原有國、本官彈正大弼、爰長保五年兼任勘解由長官、或云、彈正大弼、雖令內官是次官也、勘解由長官彈正大弼、或云、諸衞將佐兼任外國守權守之時、不論長次官、分別內外官、然則不辨長次官、猶依令內外可注彈正勘解由者也、是同階、此說合宜歟云々、

中納言兼左近衞大將從三位行春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣弘仁格

案之中納言大將、共從三位官、皆依官位相當、文官之下、總注其位、

左近衞大將從三位兼大納言行民部卿淸原眞人夏野貞觀式

大將雖卑官、以官位相當爲正、大納言雖高職、依不相當爲兼、

大納言正三位兼行左近衞大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房貞觀格

大將從三位、民部卿正四位下、仍不依文官次官高卑也、自叶法令義、

從三位守大納言兼左近衛大將行春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣定國（延喜格）

件署可注左近衛大將從三位兼守大納言行春宮大夫也、

別當參議從三位行右衛門督兼中宮大夫伊豫權守藤原朝臣朝成（檢非違使類聚品注）

件署可注參議從三位行中宮大夫兼右衛門督也、而先衛門後中宮、已違左文右武之義、

別當權中納言從三位兼太皇太后宮大夫右衛門督藤原朝臣實資（長德二三廿八宣旨）

件署不違本條、而式云、衛府督勅任、餘官奏任也、勅任爲先、奏任可爲次、答云、稱官之高卑、依位之上下可列文武、就勅任奏任之文、定高官卑官之由、其義未詳、猶須効此體云々、

官位正兼行守事（見式抄）

選叙令云、凡任兩官以上者、一爲正、（謂官位相當者爲正、若皆不相當者、以一高者爲正、）餘皆爲兼、同令又云、凡任内外文武官者、（謂其部司軍毅者、雖是外文武官、既非官位相當之職、故不關此條、）而本位有高下者、若職事卑爲行、高爲守、（謂若以無位人任長上官者、亦須注守、漢書王莽傳云、縣宰缺者數年守兼、師古云、不拜正官權令人守兼之也、上兩條爲守、以之可知之、）

或人問、（延暦五年二月廿三日、件問可式部省問、）選叙令、或以官位相當爲正、或以爲正者、今有省大輔從五位上和氣朝臣、即是大學頭兼美作守造東大寺次官也、至辨正兼別行守說者、所論各有不同、仍顯二說著於左件、（從五位上守大輔兼大學頭行美作守造東大寺次官和氣朝臣、大學頭從五位上兼大輔行美作守造東大寺次官和氣朝臣、）答（左少史物部敏久答、）舊令問云、一相當、一守、一行、以何爲正、答以官位高爲正者、後學之徒、皆依此說、兼今見其署樣、直講兼大學頭、即似頭亦守官、是交建官位令、又官位相當之職、必須先官後位、而先位後官、自異常體、然則相當爲正、於義無難、○（中略）

假令

官位相當之時、先書官次書位、（左少辨正五位下之類是也）

官高位卑之時、先書位注守字、（正六位上守大膳亮之類是也）

位高官卑之時、先書位注行字、（正六位上行少丞之類是也、式部）

如參議造寺長官防鴨河使者、最初書之、後書位也、

今案關白別當藏人等、書諸官位之最初歟、遣守官、征夷將軍、藏人、參議等、先不論官位高下、最上必書之、今號排物也、○中略

或書云、國司官位相當事、

用行字之國、若爲平氏者、准相當之階可書上也、是依先王融○闕之御諱平○守也、

〔令義解四選敍〕凡任內外文武官、謂其郡司軍毅者、雖是外文武官、既非官位相當職、故不關此條也、而本位有高下者、若職事卑爲行、高爲守、謂若以無位人任長上官者、亦須注守、

〔令義解四祿〕凡行守者、並依行守處給、謂假令帶六位人、行七位官者、給七位祿、帶七位人、守六位官者、給六位祿之類也、若一人帶數官者、祿從多處給、謂若高官之日少、而卑官之日滿者、仍從高給也、

〔律疏名例〕凡犯私罪、以官當徒者、○中略若犯公罪者、○中略先以官位當、次以勳位當、○註略行守者、各以本位當、仍各解見任、

〔令義解四選敍〕凡任兩官以上者、一爲正、謂官位相當者爲正、若皆不相當者、以一高者爲正、餘皆爲兼、

〔事物紀原四〕守官

漢有守令守郡尉、以秩未當得而越授之故曰守、猶今權也、則官之有守自漢始也、宋朝神宗改官制、始正其名、故有行試守三等、通典曰、試未正命也、階高官卑稱行、階卑官高稱守、

〔職原抄後附〕位署體　先官次位

中納言從三位中納言者從三位官也

左大辨從四位上大辨者從四位上官也

左少辨正五位下少辨者正五位下官也

行字位高官卑者用之

正二位行大納言大納言者正三位官也

位署例

正四位下行左大辨大辨者從四位上官也

守字位卑官高者用之

從三位守大納言大納言者正三位官也

從四位上守治部卿治部卿者正四位下官也

行守字共用事

從三位守大納言兼行春宮大夫大納言者正三位官也、仍有守字、春宮大夫者從四位下官也、仍有行字、

相當官又有守行字事

左近衞大將從三位兼守大納言行民部卿大將者相當官也、仍在上、大納言者正三位也、仍有守字、民部卿者正四位下也、仍用行字、

同位官先文官事

權中納言從三位兼行中宮大夫右衞門督中宮大夫右衞門督、共從四位下官也、左文右武之故、以大夫置上也、

外國不依相當在諸官下事

從五位上行中宮大進兼近江守大進者六位官也、大國守從五位上官也、不依相當、以外國爲下、○中略

必在位上事

攝政　關白　參議　別當　藏人頭五位藏人　修理宮城使判官次官　造寺長官同上　鎭守府將軍　施藥院使　內舍人　外國前司未公文受領書之

攝政太政大臣從一位關白同之

參議民部卿正四位下兼行春宮大夫民部卿者正四位下官也、春宮大夫者從四位下官也、相當

〔續日本紀二文武〕大寶元年正月丁酉、以守民部尚書直大貳粟田朝臣眞人爲遣唐執節使、

○按ズルニ、守ノ字始テ此ニ見ユ、此時ノ制ハ詳ナラザレドモ、民部ノ長官ハ、令制ト同ジク正四位下ノ官ナリシナランニ、直大貳ハ從四位上ノ散位ナレバ、守ノ字ヲ官ノ上ニ加ヘシナリ、而

シテ官ヲ位階ノ上ニ加ヘ、之ニ冠スルニ守ノ字ヲ以テスルハ唐初ノ制ニ依リシナリ、

〔金石萃編四十二〕幽州昭仁寺碑〇注略 守諫議大夫騎都尉臣朱子奢奉勅撰、

〔金石萃編四十四〕裴鏡民碑〇注略

隋故絳州總管府司馬裴君碑銘〇中略

大唐貞觀十一年十月廿一日樹碑　□□賜墳塋功力並卽畢了

宗正卿安平縣開國子李百藥製

行尙書金部員外郞趙口縣開國男殷令名書

〔東大寺正倉院文書二十六〕御野國各牟郡中里鄕戸籍〇中略

大寶二年十一月

守直從五位上少治田當麻朝臣

介勤從六位上許勢朝臣眞弓

目追正八位下五百井造豐國

大掾務從七位上津嶋連堅石

少掾追正八位上紀朝臣宮麿

少目追從八位上矢集宿禰宿奈麻呂

少領務正七位上各牟勝小牧

主帳務正七位下勝牧夫

〔古文零聚一〕弘福寺領田畠流記

和銅二年歲次己酉十月廿五日

正七位下守民部大錄兼行陰陽暦博士山口伊美吉田主

從三位行中納言阿倍朝臣宿奈麻呂

正八位上守少史勳十等佐伯造足嶋

從三位行中納言兼行中務卿勳三等小野朝臣毛野

從六位下守大史佐伯直小龍

正四位下守中納言兼行神祇伯中臣朝臣臣萬呂

正八位下守大錄船連大魚

正五位下守右中辨阿倍朝臣使

從五位下守右少辨賀毛朝臣使

從五位上行治部少輔釆女朝臣比良夫

正五位下民部大輔佐伯宿禰石湯

〔東大寺正倉院文書十七〕駿河國天平九年正税帳○中略

謹件收納、天平九年正税、並雜充用之狀、具注如件、付守從五位下勳十二等下毛野朝臣帶足、申上以解、

天平十年二月十八日　正八位下行目川原田宿禰朝集使

從五位下行守勳十二等下毛野朝臣帶足　正七位上行掾久米朝臣湯守

○按ズルニ、下毛野帶足ノ位署ニ、從五位下行ト云ヒテ、而シテ文尾ニ守從五位下ト云ヘルハ、國司ノ職ヲ以テ正税使ニ充テラルヽナレバ、位署ノ式ニ依ラザルナリ、次ナル遠江國租帳夾名帳ニ照シテ知ルベシ、

〔東大寺正倉院文書十六〕遠江國天平十二年租帳夾名帳○中略

謹件天平十二年輸租夾名、具注如件、仍附貢調使介正六位上大伴宿禰名負、申上以解、

天平十二年十一月廿日　正六位下行大目奥原忌寸廣根

從五位下守守勳八等百濟王大御贄使　正六位上行大掾勳十二等播守宿禰朝集使

正六位上行介勳十二等大伴宿禰名負　從七位下行少目我孫君嶋道

〔東大寺獻物帳〕天平勝寶八歲六月廿一日

從二位行大納言兼紫微令中衞大將近江守藤原朝臣仲麻呂

從三位行左京大夫兼侍從大倭守藤原朝臣永手

從四位上行紫微少弼兼中衛少將山背守巨萬朝臣福信

紫微大忠正五位下兼行左兵衛率左右馬監賀茂朝臣角足

從五位上行紫微少忠葛木連戸主

〔東大寺小櫃文書上〕東大寺三綱牒　攝津職〇中略

攝津職判依牒

從四位下行大夫佐伯宿禰今毛人

正六位上行大進勳十二等國連

正六位上行少進勳十二等海犬養宿禰

正七位上行少屬土師宿禰道長

天平寶字五年正月　日

〔東大寺小櫃文書上〕東大寺三綱牒　攝津職〇中略

攝津職判

以前依三綱勘審得實、是以造券參通、送寺壹通、付郡壹通、送職壹通、

從四位下行大夫佐伯宿禰今毛人

正六位上行大進勳十二等村國連子老

正六位上少進勳十二等海犬養宿禰吾口

正八位下少屬阿部朝臣比等

天平寶字五年三月七日

〔古京遺文〕修造多賀城碑〇中略

此城、神龜元年歲次甲子、按察使兼鎭守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也、天平寶字六年歲次壬寅、參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎭守將軍藤原惠美朝臣朝獦修造也、

天平寶字六年十二月一日

主帳外少初位下大海連

〔東寺百合古文書八十八〕在田郡司解○中略

仁壽四年六月七日

副擬大領外正八位下紀朝臣□□

擬少領无位紀朝臣

國判參通　買人料

守從五位下紀朝臣眞高

正六位上行介紀朝臣

正六位上行掾當麻眞人

從六位上勳八等行權掾伴宿禰

從七位上行大目道守臣

從七位下行少目難波連

〔ならの落葉〕獻東大寺　書屛風貳帖○中略

天平寶字二年十月一日

太保從二位兼行鎭國大尉藤原惠美朝臣

參議從三位行武部卿兼坤宮大弼侍從下總守巨勢朝臣關麻呂

○按ズルニ、高官ノ人ハ、位署ニ名ヲ書セズシテ、尸ヲ自書ス、後世ニ在リテモ尚ホ然リ、

〔小右記〕治安三年閏九月廿九日庚申、府生兼行重孝文、加二字朝臣一返給、

〔令義解序〕

天長十年二月十五日　明法得業生大初位下臣漢部松長

從八位上守判事少屬臣川枯首勝成

從六位下行左少史兼明法博士勘解由判官臣讃岐公永直

大宰少貳從五位下臣小野朝臣篁
正五位下行阿波守臣善道宿禰眞貞
正五位上行大判事臣興原宿禰敏久
從四位下行刑部大輔兼伊豫守臣藤原朝臣衞
從四位下行勘解由長官臣藤原朝臣雄敏
正四位下行左京大夫兼文章博士臣菅原朝臣淸公
參議從四位下守右大辨兼行下野守臣藤原朝臣常嗣
參議從三位行刑部卿兼信濃守臣南淵朝臣弘貞
正三位守右大臣兼行左近衞大將臣淸原眞人夏野

〔位署雜義私考〕或問、官位令義解連署中、讚岐公永直位署曰、從六位下行左少史兼明法博士勘解由判官云々、夫左少史正七位上官也、明法博士正七位下官也、勘解由判官、未改相當之時、而是亦正七位下官也、（天安元年、改定從六位下、者不繫乎此、）其博士判官、共令外官而同階也、然其署列定先後者、據何格式也乎、若是依省使次第如斯歟、其可不如何、曰令外官二、共同階署列、未見格式定其署法者矣、借據官位令、諸文武官、諸博士醫師、各同階之中、至其博士及醫師、皆在文武官下之例也、是據之則須列從六位下行左少史兼勘解由判官明法博士乎、未決也、蓋顧義解博士、豈不辨明之哉、深考之、汎索之、可以類推而知焉也、

〔位署雜義私考〕或問、凡以無相當之官列位署者、爲捧物者、得而知之、蓋職原鈔後附位署式、必在位上之列、加參議及鎭守府將軍各有相當之官者何也、曰夫參議者非正官、而無相當之故也、然刊刻職原鈔、於參議載相當正四位下者、於舊本不見、且國史格式之所不定、而惟後人妄附會矣、按元參議之號、自在令條、而參議庶事之文耳、爰大寶二年五月、始置五人、詔曰、件等人宜參議朝政、以勅語

爲官名矣、今參議之名立焉、然以其非正官、未嘗定相當也、是以位署式、此官亦不論階級高卑、必在位上、不用守行字、且雖帶一官、不用兼字之法也、官位令義解連署中、列參議從四位下守右大辨兼行下野守臣藤原朝臣常嗣、參議從三位行刑部卿兼信濃守臣南淵朝臣弘貞、三代實錄曰、貞觀十七年三月廿五日、參議正四位下行勘解由長官兼式部大輔菅原朝臣是善之類也、○中略又鎭守府將軍者、弘仁三年四月以降、定相當從五位上、然則載必在位上之列者甚非也、建武二年記所見、建武三年二月日、源顯家卿、請被加大將軍號狀位署曰、參議從二位行左衞門督兼鎭守府將軍、管見記所見、永享二年正月六日、權大納言正三位藤原公名卿、敍從二位之位記、太政官擬奏連署中曰、征夷大將軍從二位行權大納言兼右近衞大將臣義教云々、如夫職原鈔後附者、以載拾芥鈔捧物之列征夷大將軍、誤摸鎭守府將軍者必矣、當改正征夷之號乎、泛問之博達之師、可以質其疑爾、

〔類聚國史百四十七文〕桓武天皇延曆十三年八月癸丑、右大臣從二位兼行皇太子傅中衞大將藤原朝臣繼繩等、奉勅修國史成、詣闕拜表曰、○中略爰命臣正五位上行民部大輔兼皇太子學士左兵衞佐伊豫守臣菅野朝臣眞道、少納言從五位下兼侍從守右兵衞佐行丹波介臣秋篠朝臣安人等、銓次其事、以繼先典、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年正月丁卯、先是大宰府上言、慶雲見於筑前國、至是太政官左大臣正二位臣藤原朝臣緖嗣、右大臣從二位兼行左近衞大將臣清原眞人夏野、從二位行大納言兼皇太子傅臣藤原朝臣三守、正三位行中納言兼兵部卿臣源朝臣常、正三位行權中納言臣藤原朝臣吉野、中納言從三位兼行民部卿臣藤原朝臣愛發、參議從三位行治部卿兼美作守臣源朝臣定、參議右近衞大將從三位臣橘朝臣氏公、參議正四位下兼行相摸守臣三原朝臣春上、參議從四位上行式部大輔勳六等臣朝野宿禰鹿取、參議左大辨從四位上兼行左近衞中將春宮大夫武藏守臣文室朝臣秋津、參議從四位上兼行下野守臣藤原朝臣常嗣等上表言、○下略

〔三代實錄序〕今上陛下、〈○醍醐〉承累聖之寶祚、順兆民之樂推、天縱雄才、嘆演武於大路、德尙恭己、法虞舜之無爲、思欲遵前冒之草創、從卽日之財成、勅正三位守左大臣兼行左近衛大將藤原朝臣時平、正三位守右大臣兼行右近衛大將臣菅原朝臣道眞、從五位上行勘解由次官兼大外記參河權介大藏朝臣善行、大外記正六位上三統宿禰理平等、責其參詳、丞有頭角、〈○下略〉

〔類聚三代格序〕延喜格序〈○中略〉

詔左大臣正二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平、故從三位守大納言兼右近衛大將行春宮大夫陸奧出羽按察使臣藤原朝臣定國、中納言從三位兼行民部卿春宮權大夫臣藤原朝臣有穗、參議正四位下行左兵衛督臣平朝臣惟範、參議左大辨從四位上兼行讃岐守臣紀朝臣長谷雄、從四位上行式部大輔兼侍從春宮亮備前守臣藤原朝臣菅根、左京大夫從四位下臣藤原朝臣興範、從四位下行文章博士兼備中權守臣三善朝臣淸行、從四位下行民部大輔臣大藏朝臣善行、正五位下守右中辨兼行勘解由次官臣藤原朝臣道明、從五位下行大內記兼周防權介臣三統宿禰理平、外從五位下守大判事兼行明法博士備後權介臣惟宗朝臣善經、正六位下守右大史臣善道朝臣有行、正六位上行兵部少錄臣弘世連諸統等、憲章前條、綜緝此典、〈○下略〉

〔本朝續文粹五表〕二條關白〈○藤原敎通〉辭內大臣左近衛大將皇太子傅表〈○中略〉

長久五年六月廿日　內大臣正二位行左近衛大將皇太子傅臣藤原朝臣某上表

〔中右記〕嘉保三年〈○永長元年〉三月十一日辛丑、今夕於御前初有和歌、〈○中略〉

春日侍宴詠花契千年應製和歌臣上、兩殿下、左大將、令書給樣如此、但殿下御判所、

關白內大臣從一位臣藤原朝臣上

後聞內大臣者、是令外之官也、仍無相當位之故、以內大臣可書上之由、大外記眞人先年進勘文、云々、

字體破拆

〔玉海〕承安二年閏十二月二日丙寅、賴業語云、〇中略宇治殿〇藤原賴通始爲攝政内大臣時、可列左右大臣之上之由被宣下了、後爲關白左大臣之時、可列太政大臣下之由被宣下了、下等云々、是始則依爲攝政重任也、自是關白攝政書位署事出來云々、昔不書之云々、是則以内大臣身列左右大臣上之條、頗無其謂、仍書載攝政字改云々、〇下略

〔内局柱礎抄上〕書位記樣事

攝政以下大臣位署等、次第書連之、當官位階等之下仁加朝臣二字、不載姓名字等、又不載臣字、以下同之、先攝政從一位朝臣、次關白從一位朝臣、太政大臣從一位朝臣、從一位行左大臣朝臣、右大臣正二位朝臣、内大臣正二位朝臣等也、但官位者可依時之間、以之不可爲一定、卽見今度樣又有兼官者、於其人同可書加之、或攝政太政大臣、或關白内大臣、或右大臣正二位行左近衞大將、或征夷大將軍從一位行左大臣兼右近衞大將朝臣等也、若又前關白爲太政大臣者、可書載關白之上、又關白雖爲内大臣、猶可書載左大臣之上、〇中略

冬良公 太政大臣從一位朝臣　尙通公 關白右大臣正二位朝臣　政長公 從一位行左大臣朝臣　尙經公 内大臣正二位朝臣

已上今度之樣、朝臣字皆同仁書連也、

〔嚴島文書〕高田郡司解、申注進先祖相傳所領畠立券事、〇中略

應德二年三月十六日　散位藤原賴方

件畠下知郷令、〇三田郷立券之次、已無相違者、早任相傳之理、可領掌也、

大介從四位下行源朝臣花押

〔類聚三代格序〕格式序

大納言正三位兼行左近衞大將陸奥出羽按察使藤朝臣冬嗣等奉勅撰〇文略

〔古文零聚六〕太政官符ノ署名

定違署前後

永久五年六月廿六日　　修理右宮城判官正六位上行左大史算博士越後介小槻宿禰〇花押牒

〔百練抄六崇德〕天承元年五月十三日、散三位上﨟與參議三位下﨟署所已下、可勘申先例之由被宣下、以散三位可爲上﨟之由、明法博士勘申之、猶以參議下﨟可爲上﨟之由、人々定申也、

〔法曹類林二百公務〕勘申散三位上﨟與參議三位下﨟署所上下事

右左大史小槻宿禰政重仰偁、右少辨藤原朝臣宗成傳宣、權大納言源朝臣能俊宣、奉勅散三位上﨟與參議三位下﨟署所上下事、宜令明法博士等勘申者、謹檢公式令云、文武職事散官朝參行立、各依位次爲序、位同者五位以上、卽用授位先後、說者云、依位者正從上下、是各以次列、同位者共上階、共下階之類是、式部式云、元正行列次第、參議以上在左、親王諸王及餘官三位已上在右、自外五位以上、隨便左右、其四位參議雖是下階、列同色上、又條云、諸節會行列次第、親王及參議已上、幷諸臣三位已上在左、諸王在右、行列在諸臣上、其申政之時、以官秩次、但五位已上、位色不同、雖是下官猶先高色、又條云、非執政二位者、列中納言之下、三位參議之上、三位者四位參議之上、名例律云、職事初任與八位同者、據檢此等文、如令條者、五位以上行列、唯言授位之先後、不言官秩之尊卑、式條者、又乖位階之次第、所貴見任之職事也、然而或令式共可謂貴位階也、依五位以上用授位先後、位色不同、雖是下官、尙先高色等之文也、或律式共可謂貴官秩也、依職事初位與八位同、四位參議、雖是下階列同色上等之文也、方今守式條而欲貴官職者、則可紊令文、守令條而欲貴階級者、亦似破式文、因斯言之、行列之日者、依貴官秩之式、署所之時、可隨用位階之令者歟、是則不可違令違式之故也、雖然非有別勅、不可背憲章之制、至于如斯之事、尙須依臨時之處分而已、仍勘申、

天承元年五月廿五日　　從五位下行明法博士兼安藝權介中原朝臣明忠

從五位下行明法博士小野朝臣有隣

官外記明法博士等勘申、散三位上﨟與參議三位下﨟署所上下事、

中宮大夫藤原朝臣○宗忠定申云、一條院初、寬和二年十月五日、有射場始時、參議從三位佐理與正三位時中有行列論、被沙汰後、殊依勅定、以佐理可爲上臈由所被仰下也、隨亦書料節了、仍行列署所、共以參議爲上臈由、已以顯然也、右衛門督○雅定源被定申、寬和之例、若是件年之事歟、聖代御時、事已切了、不可有異儀歟、

治部卿源朝臣○能俊權中納言源朝臣、權中納言藤原朝臣、皇后宮權大夫源朝臣○師時等定申云、行列可在上之由、法家所勘申也、何於署所可書下臈乎、任官外記勘文可被定行歟、民部卿藤原朝臣○忠教定申云、法家勘文、其趣兩端、難申左右、令則依授位之先後定行立、式亦隨見任之職事先官秩、然者唯依官秩可書署所歟、就中官外記所勘申、可先參議者、行立署所何以各別乎、

左衛門督藤原朝臣○實行定申云、式令之文、所立各異、偏依令文者、非違式條、偏就式條、非乖令文、事涉兩端、理難一決、然者共存令式、可分署立歟、定申之意、不可違法之故也、抑白河院廳下文、幷月奏等、顯季卿與爲房卿有署所論之時、猶以散三位被書上臈、是依授位前後之故也者、例不可外求、尤可爲勝躅、就中當院○鳥羽偏被移彼院廳、不被改其例、無殊難歟、但新制隨時、只可在勅定乎、

右衛門督源朝臣○雅定定申云、件署所事、行列署所、何有差別、就官外記勘申、以同位下臈參議、可令書同位上臈散三位上歟、就中寬和之比、議定已了、前規已詳、何有異論哉、

左兵衛督藤原朝臣○實能右近衛中將藤原朝臣等定申云、法家所勘申、行列者、依貴官之式、署所者、隨用位之令者、推其理致、非無不審、式者補闕之書也、非背令條之文、是補令條之闕、其故者、公式令、職事散官五位已上、卽用授位先後者、彼時唯有大納言、未置中納言參議、其後延喜式、追定中納言參議之行列歟、令文只指大概、式文已存明文、條貫雖別、旨趣惟同、所謂律令格式四者、相須足以垂範、然則依式文可被定行歟、加之官勘文、保安月奏、前驂在近、遵行無疑、但先々如此之事、蒙臨時處分、且亦可在勅定、

天承元年八月十九日

臨時之間不ㇾ能他事、

獻上

宣旨

諸卿定申、散三位上﨟與參議三位下﨟、署所上下事、副官外記明法勘文等、

仰依諸卿定申、以參議三位書散三位上、

右宣旨下知如ㇾ件

八月廿四日　　中宮大夫藤原宗忠

謹奉大外記殿

謹請

宣旨

諸卿定申散三位上﨟與參議三位下﨟署所上下事、副官外記明法勘文等、

仰依諸卿定申以參議三位書散三位上、

右宣旨可下知之狀、謹所ㇾ請如ㇾ件、信俊誠惶誠恐謹言、

天承元年八月廿六日　　大外記淸原信俊請文

正二位行權大納言兼中宮大夫藤原朝臣宗忠宣、奉ㇾ勅散三位上﨟與參議三位下﨟署所上下事、依諸卿定申、宜以參議三位令書散三位上者、

天承元年八月廿四日　　大外記兼博士主稅助周防權守淸原眞人奉

〔新野問答〕一姓朝臣、某朝臣と申事有之候、いかゞ、

答、姓朝臣、某朝臣は、參議にある事に候、四位の人、參議になりたるを某朝臣と申候、假令參議源

正忠朝臣と書き申候を某朝臣と申候て、四位の參議也、參議源朝臣正忠と書候へば、三位宰相と申事、位階を書ずして知れ申候、是は急度位署書にする程の式正の時は書ざる事に候、

〔江家次第 二 正月〕敍位入眼〇中略

上卿、〇中略令下參議書上可レ給二二省一下名、〇註略

書樣 四位五位書二姓尸名一、六位不レ書レ尸、依レ數書二其本位一、無レ編二一人一、公卿不レ入二下名一、

四位

源朝臣々々　橘朝臣々々　平朝臣々々

五位

藤原朝臣々々　高階朝臣々々　惟宗朝臣々々　清原眞人々々

三世無位

某々々 王氏敍多者、可レ注二二世某人、三世某人、四世某人一、皆可レ注レ世、　某々

六位

紀々々　長谷々々　中原々々

無位

源々々〇下略

〔薩戒記〕應永三十三年五月十二日乙巳、晩頭權右中辨忠長來臨、談云、伊勢大神宮造宮使宣旨到來、上卿吉田大納言神宮上卿也、職事右頭中將基世朝臣也、件宣旨曰、

應永卅三年月日　宣旨

正四位下行神祇權大副大中臣宣直朝臣

宜レ爲二伊勢大神宮造宮司一

藏人頭

件朝臣字、若可在名上歟、凡書載官若位階許之時、以戸書名字下、是依四位也、而今已官位共以書載注行字、然者戸可在姓下歟、如何々々、予〇藤原定親曰、尤姓戸相連書之可宜歟、辨曰、此事不審之由尋傳奏、傳奏曰、我可宣下之由下知頭中將之狀、大中臣朝臣宣直書之、而改下知之趣、如此書之、定有所存也云々、仍辨向頭中將許問此事、答曰、父大納言無才覺、又無一卷文書、仍尋問內府之處、注給舊案之旨如此、仍如此書了云々、權大納言(實秀)爲貫首之時宣下、祭主口宣同如此、是又洞院說歟、于時故中納言(清長卿、辨父也、)爲辨、下知之狀書改下之由記之、若今度同以可改歟、如何、予曰、雖不書改何事之有哉、雖不庶幾、又有先蹤之故也、

〔官位訓四〕官を名より上に書事

官より名をうへに書を、田舍の人は能とおぼへ、名より官のうへにあるをおとれりといふ、ちかごろおろかなる事なり、いづれも天子より下されし官なれば、いづれかまさりおとりの有べきやうなし、たとへば徒然草に、顯基の中納言といひし人と書たるは、兼好が崇て書たる也、かならず定りたる事はなけれ共、自書時は、官をうへにして名を下に書也、他よりは名をうへにして官を下に書事、自然の儀なり、何某法橋殿(江)法印何某々のたぐひなり、

〔有職問答二〕一位を書狀などに書事

位はたかくて、官はいやしきには、賞翫して他人書事有、我は不可書之、二位の中納言など常に書之、又呼也と被仰出候キ、其分候哉、

〔有職問答二〕一廷尉位署事

我と書には、左右衞門權佐と可調也、衞府佐は諸人任ずる事ながら、廷尉は別而宣旨也、さるによりて權佐に使宣旨の外には不任之、但正佐にて使宣旨もあるべし、(此分候)

〔駿尻二十四〕一或武家の位署書に

參議從三位兼左近衛權中將某朝臣名

かく有しを堂上方の人見て、兼の字あるべからずといへり、參議は除目に任之といへども、正官にはあらず、是顯官の分に、凡て官位の上に置也、攝政關白參議別當等のごとき類多し一條禪閤の位署體には、

參議民部卿正四位下兼行春宮大夫

と遊ばし置れたり、此兼の字は、民部卿顯官にして、春宮大夫を兼たる故也、參議の下、兼の字なきを以て、先のを誤りと云るべし、

編修總裁　從二位男爵　細川潤次郎
編修長　正七位文學博士　佐藤誠實
編修副長　文學博士　松本愛重
編修　廣池千九郎
編修兼校合員　加藤才次郎
編修　山本信哉
編修　村尾節三
編修　正七位　佐伯有義
編修兼校合員　三浦千畝
校合員　坂倉廣胖
校合員　坂本廣太郎

編修顧問　正四位文學博士　黑川眞賴

編修顧問　從四位　本居豐穎

編修顧問　從五位文學博士　木村正辭

編修顧問兼校勘　從六位　井上賴圀

明治三十四年七月二十一日印刷
明治三十四年七月二十五日發行

神宮司廳

昭和十年五月一日印刷
昭和十年五月五日發行

(普及版古事類苑　全六十冊)

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所　古事類苑刊行會
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
振替東京三一七〇〇番

發賣所　內外書籍株式會社
東京市小石川區竹早町三十二番地
振替口座東京　八九六〇番
一一〇五四番
電話小石川(85)　三二六九番

單式印刷株式會社印刷

(白石製本所　製本)